


AC Zokuzoku gunsho ruiju
145
G857
v. 8

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries

續六群書類從第八

AC
145
G857

v. 2



續々群書類從第八

例言

一地理の部門は正續の二輯に之を建てず、紀行の一門ありて物語日記と相並べり、而も風土記は之を雜部に收めたり。近世の事情を以て之を觀るに頗妥當ならず、今地理の一門を置き、地誌紀行及び其從屬の諸書を統べしむ。

一本編地理部は輯成して二卷とす、採る列は大約元祿以前の撰述に係る者とす。惟ふに近世の文運は、元祿享保以後に頓に面目を革む、典籍の増加も此際より劇甚なり。故に今は先其元祿以前に就き採擇し、以て此二卷を成したり。

一播磨風土記は、前二輯未だ之を見るに及ばざりしと雖、近時印行の流布本あるを以て、本輯又暫く之を措く。紀行に此種の事特に

多し。

一 鎌倉幕府の大田文は、數國今に傳本あり、大に地理に資くべし。而も或は續編目次に載せられ、或は叢書中に合刊せられ、或は印刷單行し、餘す所なきに似たり。天正前後の諸家分限帳の類に、猶二三の採るべきものあるごとし、後續に竣つといふのみ。

一本朝地理志略は羅山文集第六十一卷を以て校合し、日本略記は黒川氏所藏本、雍州府志、和州舊跡幽考、堺鑑、葦分船、江戸名所記及び兵庫名所記は刊本、黒川氏又は内閣所藏により、長崎縁起志略は内閣所藏本、大學史料編纂掛所藏本、及び同掛所藏長崎由來記により、會津風土記は内閣所藏本を底本として、早稻田大學所藏本其他數本により校合せり。内閣本は訓方なかりしも、便宜上異本によりて之を添附せり。前橋風土記は史料編纂掛及び黒川氏所藏本により、附録は黒川氏本を以て補へり。岩城風土記は村岡

良弼氏及び黒川氏所藏本によりて校合せり。

一 雍州府志は數郡の終りに補遺ありと雖も、頗る通覽に不便なれば、之を各郡便宜の條下に移記せり。

一 葦分船及び江戸名所記には各題目の下に一々挿畫ありと雖も、本集には唯その二三のみを採描せり。

一 各書目録の備はれるはみな之を卷首に輯めたり、蓋し索引に便にせんが爲なり。

一 本書は吉田東伍氏の監修に成り、親しく材料選擇の勞を執られたり。茲に附記して一言其勞を謝す。

續々群書類從第八地理部

目 錄

本朝地理志略……………一

日本略記……………一一

雍州府志……………一五

序……………一五

凡例……………一六

卷一

建置沿革……………一七

形勝門……………二〇

郡名門……………二二

城池門……………二三

風俗門……………二三

山川門……………二四

卷二

神社門上

四〇

卷三

神社門下

六二

卷四

寺院門上

八二

卷五

寺院門下

一二二

卷六

土産門上

一五九

藥品部

一五九

造釀部

一六六

菓木部

一七二

雜穀部

一七六

雜菜部

一七六

諸魚部

一八〇

諸鳥部附蟲並獸……………一八一

竹木部附炭並硫黃……………一八二

土石部……………一八四

金玉部……………一八六

卷七

土產門下……………一九〇

服器部……………一九〇

卷八

古蹟門上……………二一九

卷九

古蹟門下……………二五六

卷十

陵墓門……………二七九

和州舊跡幽考

序……………三二五

第一卷

添上郡

春日明神

大鳥居

春日野

馬出橋

二基塔

片岡

若宮御旅所

雪消澤

率川

二鳥居

神垣森

神垣山

著到殿

榎本宮

青龍橋

中間道

藤鳥居

御手洗川

小社

春日大宮四社明神

内院小社

直會殿

南門

布生橋

若宮外院小社

若宮

若宮外院小社

屋

水屋社

水屋川

天地院

三笠山

春日山

備香山

武藏塚

木宮嵩

香山

驚瀧

高圓山

高松山

白毫寺

燒春日

尾上宮

若草山

羽賀山

能登川

飯合川

第二卷

添上郡

東大寺

講堂

鐘樓

念佛堂

後藤墓所

後乘坊重源上人遺像堂

真辨杉

三昧堂

二月堂

法華堂

八幡宮

手向山

東塔

西塔

東坊

東南院

真言院

成壇院

惣持院の地藏

勅府倉

宜木川

野田

浮雲社

飛火野

野守池

第三卷

添上郡

興福寺

竊辨財天

一言主社

中院屋

一乘院

松室

八重櫻

花林院

勸修坊

菩提院

大乘院

猿澤池

柿木人丸

轟橋

雲井坂

大和國

倭路

奈良

著僧里

奈良大路

奈良坂般若路

般若寺

三間卒都婆

惡左府墓

奈良坂

奈良坂癩人

佐保川

佐保殿

梨子原

率川坂本陵

率川宮

率川社

率川阿波の神社

餅飯殿町

悲田院

誕生堂
飛鳥川

元興寺
十輪院

極樂坊

仙光院

少塔院

禪院寺

奈良飛鳥

第四卷

添上郡

三九二

紀寺

頭塔

新藥師寺

不空院

藤原

八島陵

八島寺

永井里

龍腹寺

山村

和爾

櫟本社

人丸墳

田原陵

光仁天皇陵

菩提山

石淵寺

中川寺

忍辱山

笠置山

佐保山

眉間寺

聖武天皇陵

佐保山東陵

佐保山西陵

淡海公墓

欲良能夜麻

元明天皇葬所

不退寺

法華滅罪之寺

橫笛堂

阿闍寺

淨土院

法華寺社

海龍王寺

楊梅宮

惠美押勝宅

楊梅陵

奈保山東陵

奈保山西陵

諸高墓

柏木杜

薦枕川

大安寺

陵

辰市社

辰市

寶間清水

帶解寺

眞野萩原

奈良墓

大念佛宗大和國之本寺

南都七大寺

十五大寺

延喜式神名帳三十七座

第五卷

添下郡

四一四

山城大和國境

平城宮

佐紀山

神功皇后陵

成務天皇陵

鷹塚

孝謙天皇陵

高野

日葉酢媛陵

狹城池

超昇寺

念佛堂

善淵朝臣寺

菅原

菅原天神

菅原寺

菅原伏見陵二墓

田道間守墓

伏見岡

興福尼院

靈山寺

新田部親王陵

唐招提寺

諸堂

藥師寺

諸堂

御在所

勝間田之池

勝間田形橋

羅城門

藥園宮

植槻道場

美濃山二基陵

大塚

赤檮基

松尾寺

矢田寺

東明寺

河上陵

西大寺

西隆尼寺

秋篠寺

秋篠

外山里

高山八幡

村國墓

延喜式神名帳添下郡十座

雨師夢達觀音堂	瀧櫻	雲井櫻	中院谷	世尊寺	千守社	御千守神
高算上人遺像堂	高城山	躑躅岡	逢谷	岩倉谷	金情大明神社	安禪寺
青根我峯	苦清水	龍嶽	海峯寺	堂原寺	蟻門渡	天川
卒都婆	山上	小篠	篠宿	小池宿	へいぢの宿	古屋宿
姨捨峰	千種嶽	東屋峰	屏風立	行者歸	兒留	三重瀧
轉法輪嶽	釋迦嶽	神仙	室宿	大峰	天川白飯寺	丹生山
丹生社	天野丹生神	國樺	賀名生	銀嵩	十津川	湯原
泉杣	龍門寺	弓絃葉三井	安騎野	東野	御垣原	大峰閉基
吉野郡神名帳十座						

第十二卷

葛上郡

葛城	葛城山	金剛山	一言主神	高天山	高天彦神	白鳥陵
琴彈山	高丘宮	高宮廟	葛城寺	室秋津島宮	掖上池	玉手丘上陵
茅原村	掖上池心宮	孝昭天皇陵	掖上磯間岳	雲櫛社	捨篠社	御年神社
巨勢山	巨勢川	菅原伏見	千葉屋城	葛上郡神名帳十七座		

第十三卷

城上郡

穴師社	山陵	崇神天皇陵	景行天皇陵	舒明天皇陵	田村皇女墓	大伴皇女墓
忍坂山	鏡女王墓	釜口寺	痛背川	痛足山	箸墓	緒張墓
纏向珠城宮	珠城山	纏向山	卷向川	檜原	纏向日代宮	豐受氣太神御鎮座地
三輪山	神岳山	神山	三垣山	神邊山	三輪川	

三輪神社	杉社	三輪岩宮	大御輪寺	天照太神御鎮座所	玄敏谷	海柘榴市
三輪崎	佐野渡	磯城島金刺宮	磯城瑞籬宮	磯城島	磯城島高圓	泊瀬山
泊瀬	木葉宮	紅葉里	泊瀬川	古河野邊	驚山	弓月蓋
石村山	長谷寺	護法善神	白山權現	山口神	與喜山天神	別院長勝寺
蓮華院	安養院	藤井坊	道明上人廟	泊瀬朝倉宮	泊瀬列城宮	泊瀬齋宮
迹鷺淵	泊瀬小野	伊豆加志本	狹井神社	笠山	竹林寺	
城上郡神名帳三十五座						

第十四卷

山邊郡

山邊里	磯上寺	石上	陵	穴穗宮	廣高宮	磯上布留社
神宮寺	真因寺	石上池	石上溝	布留瀧	龍福寺	布留山
布留野	古柄小野	忘水	布留川	布留高橋	長屋原	部介
田村	竹谿村堀越	木殿	山邊御井	二階堂	衾田墓	衾道
衾道引手山	引手山	千塚	大和大國魂社	永久寺	來迎寺	笠間山
山邊郡神名帳十三座						

第十五卷

高市郡

細川山	南淵山	稻淵山	淨御原宮	東西市	南淵坂田尼寺	小梨田宮
白日王子立埋跡	新漢橋本南丘墓	坂田橋	龍蓋寺	逆回房	飛鳥岡本宮	後飛鳥岡本宮
後園	橋寺	田中宮	厩坂	厩坂宮	厩坂池	極島宮
島宮	勾池	眞名池	川原寺	海石榴市	常林寺	山田寺
藤原宮	大原	藤原	埴安池	大織冠家地	藤原宮御井	藤井原

五四八

五三八

衣通媛家地 法光寺
 甘櫨岡谷宮門 越智
 冬野寺 滑谷岡陵
 身狹桃花鳥坂墓 桃花鳥坂上陵
 小市岡上陵 越天野
 菅系相山庄 小野橋原
 眞弓岡 眞神原
 鳥見白山 豐清宮
 鳥見山 神名火淵
 甘櫨丘須彌山 佐太岡

第十六卷

高市郡

五六五

禪原寺 石川精舍 大野丘塔 元興寺 眞神原 豐清宮 飛鳥寺
 石川百濟村 百濟大井宮 城上宮 飛鳥川 飛鳥井 神名火淵 七瀬淀
 飛鳥坂蓋新宮 飛鳥川邊行宮 飛鳥部 蘇我馬子家地 遠明日香宮 難波堀江 釵池
 清隅池 孝元天皇陵 榎葉井 櫻井 八木村 畝傍山 畝傍池 雷岡 八鈎宮
 矢鈎山 蘇我稻目家地 大官大寺 三山 益田池 益田池碑銘 國源寺 片饒淨孔宮
 神武天皇陵 神八井耳命陵 安寧天皇陵 益田池 輕島明宮 輕池 武田宿禰墓
 久米 久米川 久米寺 益田池 輕曲峽宮 輕島明宮 輕池 法輪寺
 鳥屋村 輕 輕境原宮 輕曲峽宮 輕島明宮 輕池 武田宿禰墓
 持統天皇陵 文武天皇陵 吉備姬王墓 堅鹽媛陵 榎隈野美原 子島寺 天武天皇陵
 竹取 靈坂寺 蘇我河原 勾金橋宮 太玉神社 岡本天皇陵 榎隈寺
 高市社 高市郡神名帳五十四座

第十七卷

宇陀郡

五九〇

宇陀野 宇太山 水室 高倉山 黑坂神 穿色 血原
 河天羅崩 八咫鳥社 秋宮 神戶 朝原 竹川 室生山

龍穴社

鵜山

大藏寺

宇陀郡神名帳十七座

第十八卷

城下郡

屏風里

黒田郡

鏡作社

鏡池

韓人池

法樂寺

宮古森

坂手

坂手池

大安寺村

法貴寺

齋宮

村屋神社

神山

三宅道

城下郡神名帳十七座

第十九卷

十市郡

磐余幸玉宮

池邊雙槻宮

磐余池

用明天皇陵

磐余省櫻宮

磐余甕栗宮

安倍島山

磐余野

磐余玉穗宮

磐余

土臺部

阿部崇敬寺

阿倍

香具山宮

膳部村

高屋安倍神

鏡池

扶田寺

二階堂

天香久山

香具山宮

香久山

啼澤女神

興善寺

埴安

上宮

淺古

陵

倉梯宮

椋橋川

倉橋離宮

倉梯齋宮

下居里

崇峻天皇陵

倉橋山

多武峯

談山妙樂寺

紅葉洞

語山

兩槻宮

淡海公墓

春井

柴蓋寺

音石寺

耳梨山

耳梨行宮

耳梨池

耳無川

日無川

村山

高山

十市里

多社

常磐里

穗積

竹田村

十市郡神名帳十九座

第二十卷

郡未考

滋岡

大島峯

大我野

御間坂池

日無山

吉志美我高嶺

樟葉宮

大野

假寐橋

上安池

打廻里

阿保山

安太師野

鷹野

飛羽山松

多奈久良能野

ながらの池

中山

鳥栖山

絶間池

玉井沼

赤膚山

跡見乃丘

弓削川原

見馴河

大和島

始見崎

歸市

鰺池

木瓶宮

鷺浦

多能茂池

宇治間山

獵路池

古歌未考

跋

六二二

堺鑑

六二二

序

六二二

上

六二三

神廟

神明宮

三村宮

天神宮

今池辨財天

方違大明神

戎宮

同所芝居

同水菜屋

宮室

甲明神

宿院

稻荷

荒神堂

乳守宮

六二七

陵墓

仁德天皇陵

田出井山

武内宿禰墓

當津在家四所之三昧

六二八

中

六三〇

古跡

九艘小路

鉾塚

飯匙堀

住吉御田植勤所

七堂

高野堂

勢玉塚

六三〇

朴津郷 玉横野 戸立野 日口町 占辻 釣狐寺 鹽風呂
市戎 向井領井 海會寺井 盤井 高須 首截地藏

古事并戰場.....六二五

細川清氏 細川氏春 赤松彈正氏範 大内義弘 三好海雲 三好宗三 將軍源義尹
三好實休 松永彈正久秀 信長公 東照大權現 秀吉公古今數奇沙汰ノ事 納屋助左衛門呂宋
ヨリ歸朝 矢喰屋 九鬼右馬允嘉隆

寺觀.....六三八

大經寺旭蓮社甘露山 向泉寺三國山 悲田院法護山 極樂寺清淨山 金光寺 南宗寺龍興山
禪通寺 大安寺布金山 海會寺宿松山 引接寺勅定山 經王寺 光明院
櫛笥寺 妙國寺 西本願寺信證院 東本願寺羅漢院 鹽穴寺 專修寺 少林寺
妙慶寺榮照山 了覺寺光明山 祥雲寺龍谷山 長谷寺 東光寺 西向寺 善長寺
本成寺遙寶山

下.....六五〇

人物門附仕官僧道隱逸伎藝.....六五〇

仕官.....六五〇

三好存保 松井友閑法印 松山新助 小西如清 同息攝津守行長並木戸作右衛門

僧道.....六五一

瑞溪 一休 岐翁

隱逸.....六五二

沉南江 一路居士 牡丹花

伎藝.....六五四

意雲

紹陽

道陳

千宗易

連歌師宗椿

宮尾道三

高三隆達

鼠樓栗新左衛門

車屋道說

喜多七大夫長能

惠藤源左衛門

畀舜慶

一節道清

甫竹

土佐久翌

裘具師西順

雜賀淨甫

加賀四郎

基利玄

中將基溫故

松井與次郎

名物

笠原宗念

萬代屋道安

茜屋吉松

小西道純

驪屋宗悅

油屋常祐

小島屋道察

梶粉屋宗陽

茜屋宗佐

淡路屋宗和

今井宗久

今井宗春

綱千屋道琳

伊勢屋道滴

太子屋宗宇

小島屋

藥師院

石橋良叱

松江隆仙

天王寺屋宗及

了無

石津屋宗嬰

錢屋宗納

宗本

重宗甫

武野宗瓦

正通

千宗易

土産

一休和尚烏輪扇子

湊壺鹽

湊紙

鐵炮

土居原鋸

出齒庖丁

甲鉢鍛冶

白粉

天神前櫛

塗木履

白炭

軸松瓜

鬼煎餅

紅葉豆腐

前魚

撰系絹

金紗

蘆分船

序

第一

難波京

堀江

今宮夷

逢坂清水

松蟲塚

一心寺

茶臼山

安居天神

眞清水

大江岸

勝鬘院

天王寺

庚申堂

舍利寺

第二

住吉

名所附

津守

霞松原

太刀造江

遠里小野

飛田

安倍野

小町塚

六七九

六六八

六六九

第三

六八五

田錢島
瓢箪町

新御靈
觀音堂

雞波御坊
三津寺

津村御坊
阿彌陀が池

座摩
道頓堀

稻荷

藥師堂

第四

六九五

玉造稻荷
生玉

森明神
高津

國分寺
本覺寺

遍明院
藤棚

大蓮寺
朝日宮

淨國寺
神明

專修院
籠岸

第五

七〇三

難波島
傳法

三軒屋
野里川

衛壤島
姬島

茨住吉

龍溪禪師庵

天神御旅所

野田

第六

七〇七

曾根崎
崇禪寺

堂島
大願寺

大融寺
三寶寺

北野天神
楊塚

女夫池
天満宮

鷺塚
東照宮現宮

釋迦堂

江戸名所記

序

七一五

第一

七一六

武藏國

江戸御城

日本橋

東叡山

不忍池

牛天神

稻荷

藥師
湯島天神
神田明神
清水稻荷
法恩寺
善光寺
慈應寺
七面明神

第二 七二六

吉祥寺
富士社
總持寺
淺草觀音
明王院
松泉寺
金龍山
三十三間堂
東本願寺
報恩寺
日輪寺
大雄山海禪寺
藥師
清水寺
誓願寺

第三 七二六

天澤寺
西福寺
大六天
熾摩堂
駒形堂
文珠院
角田川
淨光寺藥師
東照院
善導寺
業平塚
本所太神宮
太子堂
泉養寺

第四 七四九

迴回院
三俣
八幡宮
淨瑠璃
歌舞妓
西本願寺
増上寺

第五 七六二

瑠璃山遍照寺藥師
烏森稻荷
西應寺
八幡
大佛
熾寛堂
泉學寺
東海寺
水月觀音
本門寺

第六 七七二

目黒不動
氷河大明神
山王權現
右衛門橋
堀衆井
穴八幡宮
法明寺
金剛寺
目白不動
極樂之井

第七

七八一

傳通院

金玉櫻

天神

白山樅現

橋樹郡榮興寺

日比谷神明

金輪寺

愛宕山

吉原

兵庫名所記

序

凡例

卷之上

七九三

福原都の事

築島の來由

築島寺

經の島

佐比江

若狹守平經俊塚

湊川

小宰相の局石塔

湊山

雪見の御所

關鷗野

鶴越

天王谷

安徳天皇假皇居

差方塚

楠河内判官橘正成塔

菩提所

宇治川

再度山大龍寺

蛇谷

神戸村

花熊城跡

河原兄弟塚

生田森

同大明神

籠梅

梶原井

敦盛萩

城ヶ口印の石

北野天神

生田川

布引瀧

砂子山

小野坂

飯馬浦

生田ノ里

摩耶山

求女塚

船寺

弓弦羽嶽

御影の森

兎原住吉

灘田浦

山路城跡

本庄稻荷社

葦屋里

藤榮屋敷

鶴塚

湯元の薬師

蘆屋洋

金津山

打出宿

阿保親御廟

宿河原

御前沖

西宮

廣田社

武庫山

鷺林寺

感應寺

角松原

津戸村

鳴尾碕

小松崎

武庫川

琴浦明神

猪名

難波里

堀江

大物の浦

浦の初島

長洲村

神崎

卷之下

八二二

福殿寺

福海寺

二本松

眞福寺

和田の笠松

一遍上人の御廟

琵琶塚

清盛石塔

八棟寺の迹

渚沙の入江

萱の御所

魚の御堂

藥仙寺

千僧寺の跡

灯籠堂

和田の崎

大和田浦

和田明神

兵庫古城

本間遠矢

内裏屋敷

延喜山

眞野池

勾梅

通盛塚

源五郎

かるも川

長田大明神

開泉寺

蓮の池

西代村

盛俊塚

禪昌寺

沙法寺

二葉松

淀瀨橋

忠度塚

盗人松

飛松

勝福寺

月見の松

ひかる源氏古途

磯園松

行平配所の松

鏡の池

網敬天神

腰掛松

須磨寺

若木櫻

後の山

須磨の關屋

一の谷

敦盛塔

須磨の浦

境川

梅雨井

鷺尾舊跡

兵庫十景の題

須浦十景の題

福原二十三番觀音札所

兵庫より諸方へ道法

長崎縁起略記

八二六

前橋風土記

八五二

序

八五二

凡例

八五二

倣例

八五三

字例

八五四

圖例

八五四

前橋方域	八五五
處屬郡縣	八五五
形勝	八五七
風俗	八五七
府城封侯	八五七
府城	八五八
山川	八五八
瀑	八六二
堰	八六二
堡	八六二
驛路	八六三
渡港	八六三
坂	八六三
關	八六三
橋梁	八六四
市肆	八六五
土產	八六六
神社	八六六
佛寺	八六七
墳墓	八七二

古蹟.....八七二

人物.....八七四

釋.....八七五

前橋風土記附錄.....八七六

上.....八七六

下.....八八〇

會津風土記.....八八五

序.....八八五

封域.....八八八

風俗.....八八八

城.....八八八

郡村.....八八九

山川.....八九八

道路.....九〇〇

土產.....九〇二

神社.....九〇二

佛寺.....九〇三

墳墓	九〇五
人物	九〇五
古蹟	九〇六
跋	九〇七
端郡風土記	九〇九
磐城風土記	九一三
封疆	九一三
風俗	九一三
城	九一三
郡村	九一三
山川海石	九一五
道路關	九一八
徑路	九一九
間道	九一九
土產	九二〇
神社	九二〇
佛寺	九二一
墳墓	九二二

人物	九二三
古蹟	九二三

續々群書類從第八

地理部 一

本朝地理志略

五畿內五箇國

山城國 王都曰平安城 鴨河自北山流出與白河合共委于淀 大井河自丹波流出經葛野曰葛野河經桂里曰桂河遂達于淀鴨河在王城左大井河在右音羽山在城東有瀑布有寺曰清水將軍坂上田村丸建立之昔有隱者行睿結草庵於此一人不知其歲後不知所往浮屠推之爲觀音化現 神樂岡在音羽山北卜部氏崇諸神於此所其麓有吉田社 神樂岡東南有山科昔葬天智天皇處也有寺曰安祥山科東一里許曰相坂王城西二里許曰嵯峨野其西有愛宕山與高雄山相連昔榮術太郎所栖也高五十町六十步餘麓有河曰清瀧高雄山西北曰梶尾梶與梅字通用

地產茶後產于宇治者爲嘉品產于梶尾者爲龜茶 嵯峨邊有太秦寺一名廣隆寺昔秦徐福來日本其子孫皆稱秦氏秦河勝居此所故號曰太秦王城大內有神泉苑以爲靈沼天皇時々行幸遊慰若早祈雨有驗

大和國 自神武天皇至光仁天皇歷代以爲都號

曰平城一名寧樂一作奈良州有多武峯大織冠藤原

鎌足及子贈相國淡海公不比等墓有焉建祠安鎌足

像鎌足姓中臣居州之藤原故天智天皇詔改爲藤

原姓是藤氏之元祖也 葛城山有神曰一言主神

昔有役處士者住此山得道術使令鬼神探薪

汲水自葛城蹊金峯山路甚險修驗者患之處士

使一言主神夷其路神倦怠處士叱之神懼治之

往來有便金峯山與紀伊國相接 吉野山甚深廣

櫻華多盛爲扶桑第一見者以爲白雲 龍田河秋

風吹楓葉浮流滿川皆紅見者以爲濯錦 三輪

山一名三諸山大物主神之所栖也以杉木爲主

河內國 交野昔天皇遊獵之地也與禁野並稱金剛山

元弘年中判官楠正成構壘於此爲敵愾之舉東軍

十數萬圍之攻之遂不克敗走正成武名勇功大顯

俗號其壘曰千劔破城

和泉國 大鳥社昔神化為白鳳來集故立社祭之號

曰大鳥 國中多清泉故號和泉

攝津國 藤駒山鹿戸皇子之子山背大兄王爲蘇我人

鹿被攻逃入此山自殺神崎渡船之處也與江

口並稱傀儡子遊女在此地留旅客難波此即今

大坂也昔仁德天皇爲太子時百濟國王仁持論語

來教之然詠倭歌以勸即位世傳以爲盛事其

歌詠梅得比興之義難波者太子之所居也住吉

社祭表筒男中筒男底筒男三神共海童也後合天

照太神神功皇后崇之爲五社有松林兵庫一

名武庫或作務古武庫西有馬山有溫泉浴者

除疾病有瀑布其聲如鼓號鼓瀧福原平清

盛築別業於此地治承年中奉安德天皇遷都於

此不幾復歸平安城

東海道十五箇國

伊賀國 天照太神齋宮初建于此而後移於伊勢

伊勢國 度會郡有兩太神宮所謂內宮外宮是也有

川名五十鈴又曰御裳濯事跡甚多鈴鹿山昔

有賊出沒如鬼將軍坂上田村九奉勅討滅之以

其阻隘故置關坂下有小河八十一故號八十瀬

志摩國 有伊雜宮爲伊勢太神之遙宮

尾張國 那護屋城當時正二位大納言源義直卿之所

保也熱田社景行天皇皇子日本武尊自東征歸

至此留靈劔故崇之舊說曰秦徐福來于此求

樂故世號熱田曰小蓬萊

參河國 杜若澤有八橋在原中將業平來此處詠

倭歌矢矯河建武年中源義貞奉詔東征與源尊

氏兵戰于此吉田有河自鼓渡舟涉伊勢

遠江國 天龍河其支流曰小天龍河面廣而無橋土

人棹艇渡旅客宮家往還時架浮梁潮見坂或

曰三村峯也觀南海無山無島洪波百尺

駿河國 大堰川爲遠江駿河之境時々每逢風雨

淵瀨不定渡則石嚙足河東畔驛曰島田屢爲水

被漂而居亦不定然行旅逢水漲以錢買土人

以渡民得其利宇都山在原業平過此時楓葉甚

茂偶逢修行者詠倭歌阿部河去府地一里許

府中有神宮號曰淺間嘗曰富士山遷之

富士山 扶桑第一高山四時有雪絕頂有煙昔役處士登此峯詳見都良香記世傳秦徐福浮海來於日本遂留于此山以爲蓬萊山其名聞於中華義楚六帖載之又洪武年中宋景濂作日東曲以詠之且本朝詩人歌人題詠甚多淺間明神之所居也麓有穴號人穴不知其深幾許也其麓有河亦號曰富士河急流甚險清見關多湖浦與三穗松林相對阿部山中有物號曰山男非人非獸形似巨木斷有四肢以爲手足木皮有兩穴以爲兩眼甲圻處以爲鼻口左肢懸曲木與藤以爲弓弦右肢懸細枝以爲矢一旦獵師相逢射之倒之大恠牽之觸岩石流血又牽之甚重不動驚走歸家與衆共往尋之不見焉唯見血灑岩石耳黃瀬河治承年中源賴朝發自鎌倉觀兵于此時其弟義經自奥州來謁蘆鷹山足柄山共在富士之傍薩埵山下有海岸往來者窺潮之進退以往避其波也觀應年中源尊氏與其弟直義不善遂戰于此山直義敗走草薙社日本武尊東征時賊放火於廣野欲燒武尊武尊拔天叢雲劍一名十握劍艾薙之草偃燒賊故尊無恙因改名曰草薙劍

久能山甚險閣路羊腸九折盤四方孤絕南則海岸也源義經曾以笛奉此山神多胡浦聖武天皇時漁人於浦邊得沙金少許卽獻之三穗松林茂樾昔神女飛來懸羽衣於松枝漁人取之神女失衣不能飛屢求之不昇焉遂相約授衣神女悅而飛去其後又來於是土人立祠奉之

甲斐國 新羅三郎源義光子孫分居此國者號曰甲斐源氏州產馬每年八月貢之

伊豆國 三島有社祭大山祇神是山神也與伊豫三島同箱根山有駒形神祠山上有湖伊豆相摸以三此山爲界伊豆海有大島昔處士役小角遭讒謫此島後浮海入唐云々又保元年中流鎮西八郎源爲朝於此島熱海有溫泉有神曰走湯權現

相模國 伊豆相模海上有鯨魚長數丈每歲官船司使水手父之掛長繩從其所往籍之牽之到陸樹之以入魚肆腥油甚多酒匂川在小田原東五十町鎌倉源賴朝以來爲柳營居處鶴岡在鎌倉崇八幡大神是源氏所歸依也鎌倉事跡最多不暇枚舉也金澤越後守平貞顯集倭唐

群書儒書以黑印金澤文庫誌之佛書以朱印金澤文庫誌之本朝書籍亦貼黑印元弘兵燹之後纔存者二百數十部小田原近世有北條早雲者居此城兵威頗振於關東早雲姓平氏初號伊勢新九郎及到關東慕昔時北條氏執兵權以自號北條氏其曾孫氏政及子氏直天正十八年爲關白秀吉被滅當時築城以爲鎮

武藏國平原廣野不見山千村萬落鷄犬相聞朝日夕日出沒草際鶴鵠見雁充滿其中處處有沼產鯉魚嘉魚隅田川在武藏下總之界水深有船有鳥曰都鳥喙足皆赤形似鴈倭訓志義好食蛤昔在原業平來過詠倭歌

安房國有山傍海自武野望視此州之山

上總國平廣常爲此州司馬率兵二萬人迎源賴朝其後遂被害時治承年中也

下總國平將門居相馬郡承平年中謀反自稱平親皇構殿舍准禁中置百司與關東八州相約作亂詔使平貞盛藤原秀鄉討之遂族滅之

常陸國鹿島宮者武甕槌神社也古此神奉天照大神勅與下總香取神相共合力掃除邪神歷代以

其勳功故二神皆爲大社古來不殺鹿以神使故也水戶城黃門賴房卿之所治也筑波山有茂林麓有川有淵

東山道八箇國

近江國比叡山日吉神之所栖也當王城之東北謂

鬼門遂比天台山事跡繁多今略之州有湖甚

廣大船往來自北國達大津多產鮎魚有美味

湖中有島曰竹生神仙之所遊也湖形似琵琶故

曰琵琶湖湖西流最急處曰勢多架橋往還勢多

少西入山城國爲宇治川勢多少西南有山皆石

故曰石山琵琶湖外別有小湖曰餘五伊吹山

昔日本武尊歸自東征到此時山神化毒蛇吐氣

中武尊驚汲水洗之而覺因呼其水曰醒井

美濃國稻葉山今名曰岐阜南宮山有仲山彥社

岐嶺川自信濃岐嶺山流出故名又洲俣川黑瀬川皆

同流也不破關三關之一也青野原牛若東行時富賈

吉次同往賊首長範聚徒數十人謀于野夜入吉

次宿欲盜其裝牛若拔劍斬之死者既十餘人長

範異之自把_二炬火_一右手提_二長刀_一直入牛若相挑長範雖_レ竭_レ力牛若輕捷長範腕痿棄_二長刀_一遂殪吉次大喜俱赴_二奥州_一牛若源義經之童名也

飛驒國 昔此州出_二良匠_一故號_二飛驒匠_一

信濃國 地高而寒群川之長大者其源多自此州流出

岐嶺山材木甚多大者數圍長者數丈土民戶々木板扉屋四面皆板不_レ塗_レ壁裂_二大木_一爲_二薪伐_一木者轉_レ自

山浮_レ河以達_二諸國_一諏訪有_二建御方神社號_二諏訪

明神_一大已貴神子也此處有_二大湖_一冬冰厚然人恐_レ陷

焉一夜冰一道峨々然衆以爲神初渡然後人馬往還如

踏_二陸路_一戶藏山有_二手力雄神社_一此神天照太神

臣也 姨棄山詠_二倭歌_一者以此山之月爲_二吟料_一

上野國 碓日山昔日本武尊過_二此時向_二東曰_一吾孀_一依

是倭語呼_レ東曰_二阿都磨_一利根川長流而大_{俗號曰_二坂東太_一}

耶

下野國 河內郡二荒山一名日光山又曰_二黑髮山_一或曰

別山也深山上有_二大湖_一其奥有_二湯泉_一山中有_二栖鷹

巢_一又有_二銅穴_一多出_二鑛_一宇都宮神曰_二猿王_一卽日光

山神子也 室八島池中有_二八島_一祭_二八神_一世傳昔此

州富人有_レ故於_二庭池邊_一積_二薪燒_一魚故歌人執_レ之以

爲_二故事_一 足利鑊阿寺有_二源義兼墓_一 小野篁嘗

居_二足利_一其後就_二篁讀_一書處_二安_一先聖影_一教授者相

續居_レ之東州人來學五經正義孝經論語孟子註疏等

有_レ之欲_レ見者來求不_レ許_一外借_一俗推呼爲_二足利學

校_一源尊氏逃往_二筑紫_一與_二菊地_一戰_二于多々良濱_一時

默_二禱先聖像_一遂得_二勝依_一是造_二替屋宇_一以崇_二奉之_一

陸奥國 白河關有_二秋風楓落之倭歌_一 衣河源義經藤

原秀衡所_レ據也 熱借山逢隈川俱是源賴朝與_二藤原

泰衡合戰之處 松島此島之外有_二小島若干_一殆如_二

盆地_一月波之景境致之佳與_二丹後天橋立安藝嚴島_一

爲_二三處奇觀_一 鎮守府以_レ爲_二東國之邊徼_一故置_レ府

以備_二警衛_一 南部產_二名馬_一 津輕昔有_二靺鞨船_一來

漂 金華山產_二黃金_一 聖武天皇時貢_レ之文獻通考所

謂東奥州產_二黃金_一是也 蝦夷島船自_二松前_一渡行夷

人皆長鬚放_二毒矢_一得_二禽獸_一島多不_レ知_二其數_一 遠行

者見_二陽鳥之所_一居蓋與_二匈奴_一相接云

出羽國 出_二鷺鵬鷹羽_一故名昔每歲貢_レ之鍛以爲_二箭

括_一 最上川有_二稻舟上下之倭歌_一 按察使出羽陸

奥皆有_レ之 秋田城此州之都會也置_レ介以治_レ之

北陸道七箇國

若狹國 出羽越後之船達_ニ于小濱_一 昆布乾鮭等爲_レ市

後瀬山青葉山俱名所 遠敷大明神社祭_ニ彥火々出

見尊_ニ此神天照太神孫也

越前國 敦賀郡氣比大明神社者仲哀天皇廟也有_ニ大

宮司_一監_レ之 金崎城建武年中尊良親王及源義顯據

之足利高經等攻拔_レ之城_ニ糧盡尊良義顯自殺尊良

後醍醐天皇長子義顯義貞長男 足羽郡有_ニ黑丸城_一

源義貞攻_レ之城_ニ高經拒_レ之義貞中_ニ流矢_一而死 荒

血山木目山俱名所

加賀國 白山雪不_レ消故名昔修驗者泰澄入_レ山託_レ感_ニ

妙理權現出現_ニ曰伊弉諾神也遂立爲_ニ大社_一 清和

天皇時渤海使者來_ニ此州_一即赴_ニ平安城_一

能登國 在_ニ越前之西越後之東_一與_ニ越中_一相對接_ニ北

海_一有_ニ山號_ニ石動_一

越中國 礪波山有_ニ關壽永年中源義仲破_ニ平氏於此_一

越後國 夜比古山神有_ニ社_一 鳥坂城建仁元年城小太

郎資盛據_レ城謀反佐々木盛綱率_ニ衆攻_レ之互多_ニ死

傷_ニ資盛姨母號_ニ坂額御前_一善射假爲_ニ童形_一結_レ髮著

甲居_ニ櫓上_一放_レ矢中_レ之者皆斃藤澤四郎在其後高處_ニ善伺射_レ之洞_ニ坂額股_一即仆生_ニ捕之_一坂額被_レ創後資盛敗北創愈後將軍源賴家嫁_ニ坂額于淺利義遠_一佐渡國 越後海上島也有_ニ銀山_一 承久兵亂時平義時遷_ニ順德帝于此島_一

山陰道八箇國

丹波國 大井河之濫觴在_ニ此州_一自_ニ山谷間_一駕_ニ一葉_一

到_ニ嵯峨_一其間有_ニ觀瀾盤陀浪華隈島船灘氣象巖等

之號_一皆近歲惺齋藤欽夫之所_レ題也 大江山其麓路

曰_ニ生野_一通_ニ丹後_一昔山中有_ニ鬼曰_ニ酒顛童_一源賴光

渡邊綱等奉_ニ詔往斬_レ之 篠村有_ニ八幡宮_一元弘兵革

之時源尊氏獻_ニ鎬矢及願文_一曰大神聖代先烈之宗廟

源家中興之靈神云々

丹後國 天橋立一名成相一州之美景也嘗有_ニ浮屠_一

立_ニ文殊樓_一俗傳自_ニ海挑_一龍燈_一與_ニ謝郡水江浦島

子釣_ニ魚騎_一龜到_ニ水府_一與_ニ女相約歸時女界_ニ一筐_一

教曰慎勿_レ開浦島子歸_ニ故鄉_一既經_ニ數百歲_一時人無_ニ

知_レ之者_一浦島子怪_レ之開_レ篋有_ニ白雲_一出_レ自_ニ篋中_一

即老死

但馬國 有溫泉

因幡國 有山亦名因幡有松

伯耆國 大山是神靈仙人之窟宅也 船上山後醍醐天皇自隱岐逃來暫駐蹕於此 伯耆守名和長年奉

之

出雲國 大社^{作大}多祭大己貴神 此神者素盞島神娶

稻田姬所生也地神之魁也其魂飛遊入和州三諸

山有國造監之 簀川上素盞島神斬八咫大蛇

處也皆有八色雲氣故爲國名素盞島大己貴事

詳于日本紀 八重籬素盞島神之所棲也 日御

崎社者大社之離宮也

石見國 高角峯柿本人丸之所沒也 有銀山文獻

通考曰西別島出白銀是也

隱岐國 產鰻魚味美 承久兵革之時平義時遷後

鳥羽帝於此元弘騷動之時平高時遷後醍醐帝於此

隱岐海上有竹嶋多竹多鰻味甚美海獸曰葦鹿

山陽道八箇國

播磨國 須磨浦蟹夫煮鹽 明石浦有朝霧島舟之倭

歌 高砂有松有川曰賀古一名鷗川有野曰

印南 肉粟郡出鐵鍛作刀劍 苦繩山元弘年中赤松圓心搆壘處也 室津往來大小船之所泊也

美作國 久米山鹽垂山在此國

備前國 昔備前中後爲一國號吉備國今分爲三

備中國 吉備津宮神社有釜若有事則自鳴吼

備後國 鞆浦神功皇后繫船於此

安藝國 嚴島神社祭市杵島姬是素盞島神之女也潮

滿則華表廻廊皆在海中潮退則爲陸地朝暮之晴

天明月之夜真一方之佳景也俗號宮島平清盛爲

安藝守時尤崇信之終身不變

周防國 山多材木 山口者大內氏累世所居也以

勘合印通船于大明九十年前大內氏滅亡之時勘

合印爲兵火燒失

長門國 昔仲哀天皇西征之時居豐浦宮 赤間關一

曰赤目關赤目者鯛名也古有大鯛魚透過故名焉

周防長門之界也 壇浦文治元年安德帝爲源氏被

攻所沉溺處也平族同溺死

南海道六箇國

紀伊國 日前國懸宮是神鏡之別也紀氏爲國造監

之有川曰難賀^{ナカガハ}有浦曰^{ウラ}弱有濱曰吹上^{フキカミ}有蘆
葦有鶴玉津島明神宮在弱浦是允恭天皇妃衣通
姬也藤代松昔孝德天皇子有間皇子自縊死處也高
野山昔有明神與天野明神共守此山嵯峨天皇
時沙門空海住此山熊野山日本紀云葬伊弉冊
尊於紀州有間村故祭其靈其子速玉男事解男合
爲三社或曰秦徐福率童男少女尋蓬萊遂留
此沒後祭以爲神故大明太祖皇帝賦三山詩云熊
野峯高血食祠松根琥珀也應肥當時徐福求仙藥
直至如今遂不歸依是本邦稱蓬萊者三處曰富
士曰熊野曰熱田自浮屠入山以來呼本宮新宮那
智爲三處權現那智瀧者扶桑第一之瀑布也落
處有淵不知其穴之深華山上皇曾來浴此瀧水
二品亞相賴宣卿今爲此國主

淡路國 伊弉諾尊以矛探海其滴凝堅爲島卽此國也

阿波國 勝浦源義經追擊平氏時到此浦喜曰浦名可也我必勝國中有長河阿波海上有鳴戶潮波甚急齊汨回施船到此多沒溺

讃岐國 屋島其形似屋故名文治元年源義經襲平

氏屋島平氏敗北奔長州白鳥明神社祭日本武尊之靈崇德帝與後白河帝爭位時崇德失利遷于此國崩後立廟號曰白峯
伊豫國 有温泉三島神社與伊豆同
土佐國 山多材木元弘年中平高時遷尊良親王於此

西海道九箇國

筑前國 太宰府置帥大貳少貳等以治之設九州之警衛及異國襲來之備也延喜元年菅丞相依藤時平之讒左遷爲太宰帥作詩曰都府樓唯看瓦色觀音寺只聽鐘聲三年薨葬安樂寺後立天滿宮都府者都督府也觀音寺亦在筑前志賀島神是安曇明神也宗像社祭素盞尊之子宇瀨宮神功皇后生譽田天皇處也箱崎有松林有八幡宮祭譽田天皇也譽田卽應神也寶萬嶽菅丞相登此祈天處也

筑後國 有一夜河千年河等之勝水
豐前國 門司關卽赤間關之東岸也高處有舊壘跡

宇佐宮祭八幡大神稱德天皇欲讓位于弓削道

鏡_ニ使_ニ和氣清麻呂_ニ告_中宇佐神_上神託不_レ許清麻呂歸奏_レ之道鏡怒配_ニ流清麻呂_ニ採銅處在_ニ小倉山上_ニ

豐後國 有_ニ木綿山小竹島_ニ大友氏曾據_ニ此國_ニ

肥前國 松浦昔神功皇后西征時釣_レ魚處也 大伴狹

手彥入_レ唐時松浦佐用姬登_レ山振_ニ領巾_ニ惜_レ別以招

船見者悲_レ之因名_ニ其處_ニ曰_ニ領巾振山_ニ松浦明神即

神功皇后之靈也 一名鏡宮又曰聖武天皇時太宰大貳

藤原廣嗣謀反勅_ニ大野東人_ニ伐_レ之廣嗣出_レ自_ニ筑前

怡土城_ニ相_レ戰于板櫃_ニ敗走乘_レ船振_レ鐸欲_レ往_ニ異國_ニ

逢_ニ惡風_ニ不_レ能_レ進遂亡其靈爲_レ祟故祭_レ之松浦明神

鏡宮明神板櫃明神皆是也 平戸亦在_ニ松浦中_ニ遣唐

船之歸_レ朝者不_レ得_レ到_ニ筑前博多_ニ則著_ニ平戸_ニ河上

社祭_ニ八幡大神_ニ淀姬宮祭_ニ大帶姬_ニ是神功皇后妹也

長崎近年番船及唐船往來之港也 長崎外三里許有

湊曰_ニ福田_ニ

肥後國 阿蘇宮是阿蘇津彥之社也 昔八十梟帥不

順_ニ王命_ニ日本武尊西征誅_レ之平_レ之 菊池氏在_ニ此

州_ニ久矣建武以來菊池武重子武光通_ニ志于後醍醐後

村上兩帝_ニ奉_ニ皇子_ニ爲_ニ征西將軍宮_ニ連破_ニ少貳大友

等兵_ニ其威風振_ニ于九州_ニ大盡_ニ勤王之義_ニ

日向國 橘_ラ小戸_ト檣原在_ニ海上_ニ伊弉諾尊之所_ニ濯祓_ニ也 高千穗峯天瓊杵尊降臨之處也 其皇胤神武天皇自_ニ此處_ニ初東征

大隅國 州有_ニ八幡祠_ニ多禰島在_ニ海上_ニ爲_ニ大隅之

附庸_ニ

薩摩國 島津氏世々領_レ之大隅屬焉 海上島多皆屬_ニ

薩摩_ニ五島有_レ主不_レ屬_ニ薩摩_ニ

壹岐島 斑島海松浦伊波多野在_レ此

對馬島 昔置_ニ探題_ニ中葉以爲_ニ朝鮮接待之地_ニ

本朝六十餘州風土記及民部省圖帳諸國受領勘文等

書詳載_ニ山川之事跡_ニ然事多文繁雖_レ累_ニ歲月_ニ不_レ能

終_レ編況不日之間乎今依_ニ其求_ニ僅少槩見以抄呈焉

此一卷應_ニ朝鮮國信使由竹堂求_ニ而抄_ニ出之_ニ時寬

永二十年秋也此外又問_ニ人物草木鳥獸_ニ以_ニ繁多_ニ

故使_ニ男怨靖_ニ粗抄_ニ出名目_ニ以寄_レ之

本朝地理志略終

日本略記

夫日本は昔一島にて有つる人王十三代の帝成務天皇の御宇に三十箇國にわらせ給ふ也其後大唐より賢人來て言様は此國は纔に三十三箇國也是程小國と不_レ知寔に五十二位に不_レ足爭か佛法を廣ん哉といふて歸りけり其後人王卅四代の御門敏達天皇の御宇に聖德太子の御異見にて鏡常三年癸卯六十六箇國に被_レ割けり郡五百四十四郡也東西の間は九百十二里南北五百三十里なりさる程に國の始は大和也島の始は淡路也郡の始は宇多郡也寺の始は橋寺_{和州にあり}佛法の始は天王寺聖人の始は聖德太子_{用明天王の御子也}人の始は伊弉諾伊弉冊也神の始は伊勢の外宮京の始は難波の京市の始は三輪市_{大和にあり}橋の始は御幸が瀬の橋_{大和にあり}軍の始は異國退治也王位の始は神武天皇關の始は相坂の關年號の始は善紀元年

一日本之名之事第一日域第二日本第三豐葦原第四秋津島第五大和國第六和國第七吾朝第八東海川第九水穗國第十堪忍國第十一神國といふ

一三國之名目之事天竺をば月を像て月氏國と言唐土をば星を像て震旦國といふ日本をば日を像て日域といふ也

一四方名之事京より東を關東と言又は東ともいふ京より南を關南と言又は南方ともいふ京より西をば關西といひ又は鎮西ともいふ又は西國ともいふ京より北をば關北と言又は北陸とも又は北地ともいふ

一社之數並人數之事大神は三千七百二十餘社小神は二億二萬七千餘社也男子は十九億二萬四千八百廿八人あり女子は二十九億三萬六千八百三十一人あり

一五畿内七道之事五畿内五箇國は五天竺を表す東海道七箇國は過去の七佛を像る關東八箇國は臺藏界の八葉を移す南海道六箇國は補陀落の六觀音をまなぶ山陰道八箇國は金剛界の八葉を表す山陽道八箇國は大八王子を像る西海道九箇國は九曜の星を像る北陸道七箇國は天神七代を表す都合六十六箇國也

一道之長短之事京邊土南方は三十六町を一里とす坂

東は六町を一里とす中國は十八町を一里とす又わたなべより熊野迄は四十八町を一里とす伊勢道も四十八町也

一山之高下之事一には富士山坂東道百二十里上三箇國をふまゆる二には立山坂東道百里上三箇國をふむ三には釋迦が嶽卅六町道七里上大和四には山上卅六町道五里半上五には大山十八町道七里半上伯耆六には金剛山三十六町道二里上大和

一八箇津之事第一京九萬八千家二堺八千家三伊勢山田四千家四若狹小濱千家五山口二千家六筑前博多一萬二千家七宇津宮六千家八美濃福山一萬三千家是八箇津也

一武士司之事京より東の武士は降三世明王の化身として多門天の分身粟田口を守る京より南の武士は軍陀利夜叉明王の化身として持國天の分身東寺口を守る京より北の武士は金剛夜叉明王の化身として廣目天の分身鞍馬口を守る此四方の武士は國の鏡として惡人を退治して王城を敬ひ善人をそだて佛法を守護し下知を守り王法を崇申す

一内裏は忝も十善の御位なれば日本の主にて一天四

海にかしづかれ給ひ六十餘州より崇敬申は王土に住居する故也又公方様は帝王の御代官として天下の將軍として日本の政所と號し又御所と申す

一三管領は一武衛二畠山三細川也四職は山名赤松京極一色也この三管領四職を七頭の大名と申也是は公方の内のをとな頭なりこの外の大名をば諸大名といふ也武田六角土岐有馬大内島津是等也三國司は伊勢阿波飛騨也又大内殿は百濟國の司にてまします間其位高といへ共日本へ流され給間他國人によりて御前にて御座敷はなきなり

一七人の大名は公方様の御成被遊人也武衛の内甲斐畠山の内遊佐山名の内垣屋^{カキヤ}是三人へは御成御免也中比より赤松の内浦上えも御成御免有之候間又者若黨に四人也

一内裏之御領所之事何國にても國衛と申也六十六箇國の國衛より禁中へ參米已上五拾萬石納る也又比叡山の山嶺も六十六箇國より上る事以上合五十萬石也此内八萬石者江州より納る也

一遷都之事初京は難波也三十代欽明天皇御宇也次京は岡本也四十五代聖武天皇御宇也次京は長岡也四

十九代光仁天皇御宇也次京は奈良也五十代桓武天皇御宇也今京は平安城也同御宇傳教大師法華經九萬部を調て一條より東寺の南大門迄之間を九條にわらせ給ふに地を三尺返して九萬部の經を布て開き給ふ也洛中とは此内を申也京を九條にわる事は九帖の袈裟と九品の淨土を表する也延暦十三戌年十月に開き給ふ也

一四箇之本寺と申は東大寺興福寺延暦寺園城寺也此四箇之大寺は天下の御祈禱所にて内裏の御祈禱所也

一諸宗之本寺之事法相宗本寺者興福寺也三論宗本寺者元興寺律宗本寺者西大寺也俱舍宗本寺者園城寺成實宗本寺者大安寺也華嚴宗本寺者東大寺也天台宗本寺者延暦寺也眞言宗本寺者東寺也已上是を八宗と云此外四宗有之禪宗本寺者南禪寺也淨土宗本寺者知恩院也日蓮宗本寺者經王寺也時宗本寺者古寺也初の八宗と後の四宗と合せて十二宗也天竺にては五百三宗也唐土にては三十二宗也日本にては十二宗也

一日本七不思議之事伊勢に正直なし高野に道心なし

北野に歌讀なし鞍馬に福人なし八幡に弓取なし黒谷に念佛なし湯の山に無病の人なし是日本の不思議也

一九品之淨土之事上品上生は東寺上品中生は高野上品下生は天王寺中品上生は濃州岩屋中品中生は芳野中品下生は熊野下品上生は本高野下品中生は東大寺下品下生は大安寺也是を九品といふ也

一和州片岡にて太子達磨と贈答の和歌之事則太子の御歌に

しなてるや片岡山の飯にうへて

ふせる旅人あはれ親なし

達磨の返歌に

いかるかのとみのを川の絶はこそ

我大君の御名を忘れし

一五山之事京の五山は天龍寺相國寺建仁寺東福寺萬壽寺南禪寺は五山の上とて五箇寺の頭上也
一鎌倉五山之事建長寺圓覺寺淨智寺壽福寺大覺寺是也

一日本虎無之事日本は千里不足故虎不住也四國者百里不足故無狐東寺之南門より赤間迄百八十里

也又赤間關より薩摩防津迄百八十里也

一億劫之事十宛十者百也百宛百者千也千宛千は萬也萬宛萬は滿滿千滿千滿者無量萬と二度云を一億と云也劫といふは高さも四十里廣さも四十里横も四十里ある石の塔に芥子を一杯入て三年に一粒宛取りて盡たるを一劫といふ也

一天竺の伽藍者一萬三千七百十一間也大光寺なり小轉輪王の御願所也炎上の時七年の間焼也

一大唐の伽藍者一千一百七十七間也卽祇園精舍を移す也孝武帝の寺也炎上の時三年焼也

一日本伽藍は三十三間也後白川院御建立也

一天竺の初王は密多羅王と申也十九代の王を轉輪聖王と申此王の第二の御子阿彌陀に成り給ふ又西城國の彼斯之匹王第六の姫君阿閼夫と申を婦人にし給ふ是は千歳にて入滅して樂師と成り給ふさる程に彌陀の本願六十願なりしを十二願分て樂師に讓給ふ又彌陀羅王より拾七萬三千二百代之王を淨飯大王と言釋尊は此御子也

一日本より唐土へは海上三千八百七十里也此内に新羅國百濟國蒙古國異國龍宮此等の國あり又唐土よ

り天竺の東端へ海上一萬二千十一里也此中に流砂川と葱嶺と有也流砂川の堅は八千里横は八百里也水の深さは平等にて三尺也葱嶺山は麓より嶺迄五百里也又頂上より西へ下るも五百里也上下千里の間に水なし大海の中へへんくそびへ出る山也

一三皇は伏羲神農黃帝なり

一五帝は小昊顓頊高辛唐堯虞舜也

一十四代は夏殷周秦漢魏晉宋齊梁陳隋唐宋なり

右一札和州橘寺に在之正德太子の御本寺也文祿五年五月二十三日書之とある本を以て

慶長十三七月吉日

右一冊兼日懇望にまかせて乞求寫之之家僕増山廣之が藏本によつて所得なり是は足利將軍家の治世に著作する事と見ゆしかはあれど今按に此書全く佛家の所撰なるべし文義妄誕にして信用しがたき說多し猶重て可三考一もの歟

維時元文五庚申壬七月六日 盛誌之



雍州府志序

虞代幅員備存禹貢周家疆域悉著職方秦漢以降下至元明地理之誌方輿之記飛文染翰成卷作堆本朝之古列國各有風土記惜哉失其傳矣偶存者亦錄此闕彼舉畧遺全取異捨常循訛失實惑其所見汨其所聽老友黑川道祐問居洛陽委性山林娛心烟霞名勝之地無不尋問古蹟之幽無不搜求歸家乃錄經歲成編釐爲十卷名曰雍州府志山川城池寺社土產各分郡縣共建部類夫洛陽者所謂天府之國世々不易帝都也禮樂文物煥乎彬々郁々山川形勝佳哉鬱々葱々孟堅平子之才不能賦其佳狀不能述其典故然依此書考其事觀其跡則爲行遠升高一助乎余未入其境省其方然一開卷則千里之遠八郡之勝瞭然如指於掌乎欣然下筆以序卷端云時

貞享元年孟夏之日

林整宇主人識

雍州府志序

平安城者福地之最而縉紳之叢也嘗以雍州稱之有名山矣有勝水矣有禮樂矣有文雅矣有人物矣有遊觀矣有古蹟矣有奇工矣殷富寬舒爲風爲俗韻人逸士必隱其市必耕其野於是乎西都賓可矢口誇說焉吾老友靜菴黑川道祐雋才博文學優而仕仕優而有病解印辭祿隱于雍州朝市之間既已有季矣養痾之餘夫小奚荷簞瓢簞笠之具翺翔於東北之丘壑逍遙於西南之村野躡岩臨水尋寺問社或坐於桑下或坐於松陰或漱石泉或臥草茵老農老圃相話相咲過竹院於古僧伴苦踐於樵童遭清風明月卽爲之主嘯歌于彼醉吟于此乃其恒也杖屨所及無不行尋而探索焉隨見卽記之隨聞卽筆之或訊遺蹤或校舊錄旁披博採而記冊成堆勒爲十卷題曰雍州府志嗚呼吾國方輿之志久及闕文夫人嘆之今有斯篇而以足補千古之一闕可謂美事也余往歲遊於雍州遍歷勝境舊踪今閱此書如下再步其地而溫其故況夫未見之人新知其名勝則大有功於博物者乎余一讀

而三復喜而不措因爲之叙云

貞享元年甲子孟夏日

鶴山野節題

雍州府志序

予素多病以間步爲養生之一術且有訪山水古蹟之癖多年處々經歷所到尋其來由每飯家則記之爲一小冊積成數卷天和二年夏四月霖雨涉旬蓬窻岑寂偶出其所集凡山川城池寺社土產等各分郡縣別部類遂爲三十冊號雍州府志聊備他日之考索而已

黑川道祐涉筆於白雲村遠碧軒

雍州府志

凡例

一本朝以三城州比三雍州而以三中華論之則雍州有長安豫州有洛陽本朝古桓武帝定兩京西京無幾而廢東京洛陽至今繁榮然則以三豫州稱之則爲當者乎然雍州之稱於本朝所從來尙矣今從舊而號三雍州府志者也

一本朝古有三十六州之風土記今縱有出雲豐後之殘簡存然舉其大槩而已今所編集之雍州府志專倣大明一統志之例而標出各門

一凡山城州之八郡因時代而互有變遷今依臆見折衷而別之願後之見者又擇之

一各門各以郡別之一郡之中混淆而有難分次者擇之可也

一山城州者帝都之所也有也古今之間人物之可稱者不堪枚舉故人品門除之

雍州府志卷一

黑川道祐撰

建置沿革

夫本朝舊記多爲_二烏有_一故雖_レ欲_レ考_レ之文獻不足_レ徵矣纔殘者諸家秘而不_レ出_レ之今粗記_二管見之所_一及而備_二他日考索之便_一而已按國名風土記云山城舊號_二山背_一延喜十三年七月背改_二城字_一凡山城北至_二若狹_一南連_二大和河內_一其間相距十七八里餘東限_二近江伊賀界_一西隣_二丹波攝津_一其間或四五里或七八里異與_レ乾之間地形長而廣至_二良方_一則地勢窄迫自_レ古分爲_二八郡_一源唱朝臣爲_二山城重任之時奏_二河陽離宮_一爲_二國府_一按河陽今山崎乎繼體天皇五年冬十月遷_二都於山背筒城_一同十二年三月遷_二都於墮國_一云々筒今綴喜郡而墮國今乙訓郡也宣化天皇時雖_レ被_レ遷_二都於山城國中諸處_一今多不_レ知_二其地_一聖武天皇十二年冬十二月遷_二都山城國

相樂郡_一稱_二恭仁宮_一或號_二久邇_一恭仁與_二久邇_一倭音相同然則恭仁與_二久邇_一則同稱乎一說久邇都在_二宇治郡山科鄉_一也爾後聖武天皇又遷_二都於攝州難波_一桓武天皇延曆三年夏五月欲_レ遷_二都於山城國乙訓郡_一勅_二中納言藤小黑麻呂從二位藤種繼等_一相_二攸於乙訓_一夏六月己酉欲_レ遷_二都於長岡_一而既經_二營都城_一勅_二參議近衛中將紀船守_一奉_二幣於賀茂神社_一而告_二遷都之事_一十二年勅_二大納言藤小黑麻呂左大辨紀古佐美及賢璟_一再視_二新都之地_一十三年冬十一月二十一日辛酉從_二長岡宮_一遷_二都於葛野郡宇多村_一號_二平安城_一今京城是也自茲以降帝嗣_二六十四之日種_一年歷_二八百餘之星霜_一雖_二一有_一南遷之事不_レ踰_レ年而復_レ舊矣實是爲_二海縣之都會_一而萬世不易之鴻基也山川環拱鍾_二靈毓_一秀於_二玆東西設_二二京_一東爲_二洛陽_一西爲_二長安_一然以_二中華_一巧_レ之則西屬_二雍州_一爲_二洛陽_一東屬_二豫州_一爲_二長安_一然則於_二本朝_一互誤_レ之者乎西京無_レ幾而廢矣凡考_二舊記_一東京五百六十八町西京亦然左京七百五十八町右京亦同東西及皇城凡二千七百三十二町其內東西街衢分_二九條_一每_レ條置_レ坊一條曰_二桃花_一二條曰_二銅駝_一三條東曰_二教業_一西曰_二豐財_一四條東曰_二永昌_一西曰_二永寧_一五條東曰_二

宣風_{西曰宣義}六條東曰淳風_{西曰光德}七條東
曰安衆_{西曰統財}八條東曰崇仁_{西曰延喜}九條
東曰陶化_{西曰開建}又通_{堅橫街路}從一條至
九條凡三十八町東西亦然矣到_{今長安家稀多爲丘}
墟九坊亦荒廢矣凡東西街路一條北有武者小路_{一作}
無其北曰今小路今號今出川其北東有御靈辻
子西有五辻其北曰西大路俗曰上立賣_{古携布}
市其北西曰大猪熊東曰寺內_{古有寺觀處也}一條南曰正
親町今號中立賣其南曰土御門西有上東門一
號土御門因得是名其南曰鷹司古斯北有鷹司
故得名今曰新在家中町其南曰近衛五月暴雨時
平地必有湧泉故俗號出水_{チヅク}其南曰勘解由小路今
號下立賣舊有修理職勘解由使屬焉因得名也其
南曰中御門今號_サ榎木町又名魚屋町_{榎木并魚鳥在此東西}
西有待賢門號中御門因名其南曰春日今曰鍛
冶町_{此處有鍛冶也}其南曰大炊御門今曰竹屋町_{有寶竹者四名}
其南曰冷泉昔冷泉院在_{于此故名今夷顏也}夷川其
南乃二條也二條南曰_{一作押}煙小路_{小路}其南曰三條坊
門今曰御池_{始有三條驗池}又曰八幡町_{坊門有八幡宮因名}其南曰
姉小路其南乃三條也三條南曰六角西有三頂法寺六

角堂故名之其南曰四條坊門舊有永昌坊_{餘准}其
南曰錦小路當初織倭錦_{イデヒ}櫟氏_{本錦織氏}住此通東洞院
東故名錦小路其南乃四條也四條南曰綾小路其
南曰五條坊門其南曰高辻其南乃五條也今曰松
原其南曰樋口今曰萬壽寺_{舊有}其南曰六條坊
門今曰大佛_{東有大佛殿}一曰五條橋通其南曰楊梅
從此以南屬本願寺故曰寺內其南乃六條也六條
南曰左牝牛_{一作在日牛}其南曰七條坊門其南曰市町
舊有左右市一曰北小路其南乃七條也從此以南
於今人家稀而多爲田野其南曰鹽小路_{爲野人村居}其
南曰八條坊門_{今爲田野}其南曰梅小路_{又爲村名}其南曰針
小路其南曰九條坊門_{一曰信}其南曰唐橋其南九
條也凡南北街路東曰河原町_{或曰古}其西曰京極東
側皆寺院也故今曰寺町其西曰御幸町_{豐臣秀吉公從伏見每逢禁}
關_{之道路也准院}其西曰白山_{三條下有白山之社}今曰_{今曰}鉄屋町_{實有}
家場_{鉄者}其西曰富小路其西曰萬里小路今曰柳馬
場勘解由小路舊有巨柳故名其西曰堺町北有宮
門鐵泡頭製花樣而貼_厩其色黯黑俗曰黑門又
爲町名南曰魚屋突拔其西曰高倉舊斯南有高
倉院故名焉其西曰間町其西曰東洞院其西曰

車屋町之突拔^一其西曰^二烏丸^一其西曰^三兩替町^一有醫^二金^一替^二兩^一其西曰^二室町^一其西曰^三町土御門以北曰^二町口^一中御門以南曰^二町尻^一今日曰^三新町^一其西曰^二釜座突拔^一有三條^二鐵^一工^二故^一其西曰^二西洞院^一其西曰^三小川^一有^二川故名其西曰^一油小路^二大炊御門以北曰^三帶刀町^一其西曰^二堀川^一則有^二此川^一其西曰^二葎屋町^一其西曰^三猪熊^一一作^二猪隈^一中御門以南曰^二靱負^一二條以北曰^二藍園^一七條坊門以南曰^二市南門^一其西曰^二黑門^一其西曰^三大宮^一其西曰^二匣其西曰^三壬生^一其西曰^二坊城^一其西曰^三朱雀^一今日曰^二千本^一北有^二千本^一寺^二故名^一從^二此以西^一少人家^二朱雀以西乃長安也次曰^三坊城^一次曰^二壬生^一其西曰^二大宮^一其西曰^三猪隈^一其西曰^二堀河^一其西曰^二野寺町^一或曰^二油小路^一其西曰^三細井大路^一其西曰^二宇多小路^一其西曰^二馬代^一其西曰^三惠立小路^一其西曰^二木辻^一其西曰^二菖蒲小路^一其西曰^三山小路^一其西曰^二無武小路^一其西曰^二京極南北街路北曰^三一條^一其南曰^二音町^一其南曰^二西中御門^一其南曰^三筑紫町^一其南曰^二西近衛^一其南曰^二松井^一其南曰^三西中御門^一其南曰^二木蘭^一其南曰^二馬寮大路^一其南曰^二經師町^一從^二此以南與^三東京^一相同然今悉荒廢矣九條朱雀有^二羅城門^一其左右有^二鴻臚館^一玄番頭等在^二此饗^一番客^二或曰^三今之東西寺是也^一一說鴻臚館在^二七

條坊門南^一然則在^二東寺北^一乎不^二知^一是^二也昔日^一桓武帝建^二都於葛野^一今之西京也今悉荒廢而難^二尋^一封疆中古一條以南二條以北東西限^二於大宮^一周廻六里立^二門十二^一正南曰^二朱雀^一南之西曰^二皇嘉^一南之東曰^二美福^一北曰^二偉鑒^一北之西曰^二達智^一北之東曰^二安嘉^一西曰^二藻壁^一西之北曰^二談天^一西之南曰^二殷富^一東曰^二待賢^一東之北曰^二陽明^一東之南曰^二郁芳^一宮制略在^二拾芥抄^一今宮制今小路以南中御門以北東盡^二京極^一西暨^二烏丸^一周廻方四町殿宇森嚴宮闕宏規足以表^二夷洛之壯觀^一真紹^二述萬年大統^一而爲^二神嗣皇孫之基^一豐臣秀吉公一統日京城四方築^二封境^一種^二脩竹^一是號^二四方土手^一倭俗堤防曰^二土手^一如今大平日久諸民富庶故洛中人家日盛月增如今從^二公課^一之戶四萬七千軒口男女五十萬七千五百四十八人餘也是延寶九年九月之所^二定也^一禁裏院中及諸家非^二斯限^一矣公役之外新在家二十八町戶五百四十五軒大佛殿前二十八町戶七百三十軒三條橋以東六町戶二百三十八軒東西本願寺之所^二領六十四町戶^一千四百六十九軒凡除^二皇城及寺田封戶^一一千三百餘町戶三萬五千四百二十七軒此外東自^二河原町^一下粟田六町以東新町智恩院門前宮川町石垣町祇園町八坂鄉清

水坂西自聚樂至北野紙谷川南自建仁寺門前至東福寺前北今出川原土手西北柳原之外西倉口并安居院北殆足與洛内相比實四民之所安居而太平之餘標也

形勝門

凡山城州東北環近江若狹西南連丹波攝津河内大和伊賀而西北枕山嶽之險東南帶洪河之阻地勢廣闊風氣和暖田宅豐饒而四民安逸也平安城巍然立中土前朱雀後玄武左青龍右白虎四神相應萬世不易之地也東西有二川東號賀茂川北出自雲畑經水出上下賀茂其間有石川蟬小川等之名而於糺杜南與高野川合依之糺或稱河合而過一條三條橋下於大和橋西與白川合經第五橋下入伏見與宇治川合歷澱橋下出難波津入于海斯川水源至清自比中華渭水清京極中川其支流也西有川是號堀河上出自洛北一股川到一條反橋歷九條出竹田其間大小橋不可勝計其内中立賣橋與下立賣橋每破損所司令改造之中立賣

橋公方家入洛日自二條城入禁裏之通衢也凡洛中溝洫穢濁水多入斯河故水不清是又合涇水之濁者乎此外有引二條河原之支流而自河原町與樺木町之間通伏見者豐臣秀吉公修造方廣寺大佛殿之時嵯峨土人有吉田了意天性得行水之術鑿開斯川而浮舩艦自伏見捆載材木泝流以百丈犖之運漕甚得便至今每日所入京師之材木薪炭等物不可勝數歸舟乘流而下其速也如飛一時許而入伏見又京城西二里許嵯峨嵐山麓有一河源出自丹波山國東北歷同國關保津鳥羽而出斯處凡斯川於嵯峨謂大井川在梅津前稱梅津川經桂里謂桂川一說桂川誤葛野川者也末流入淀川與木津川相合處曰狐川其南謂山崎川到廣瀨謂水無瀨皆同一河也凡斯川出丹波龜山到嵯峨之際溪澗屈曲盤旋而或爲瀨或爲淵其間操舩者以棹安排之避岩傍岸千謀萬計歷幾許艱難而到嵯峨是皆出自了意之心匠者也凡自四方入京師有七道是謂七口是自古所定之也於今京師繁華日增月盛故七口之外入京師之道有數箇所人馬之往來不絕跡所謂七口者東三條口

伏見口鳥羽口七條丹波口長坂口鞍馬口大原口是也倭俗出入之道謂_レ口斯外東北有_二龍華越_一是自_二八瀬里_一北歷_二山路_一而出_二近江國大溝北_一之道也自_二東山_一有_二志賀山越之道_一又自_二北白川_一有_二山中越_一也或自_二一乘寺村_一有_二越_一叡山無動寺之路是謂_二唐櫃越_一也倭俗經_二坂路_一而行_二捷徑_一稱_二何越某越_一自_二洛東如意嶽_一有所_レ出_二近江國園城寺上_一之路是謂_二如意越_一也小關越自_二下粟田_一傍_二北山_一所_レ出_二園城寺麓_一之路也滑谷越古赴_二東國_一者自_二五條橋_一歷_二清水山南滑谷_一過_二山科_一出_二大津松本_一之路也如_レ今赴_二東國_一者專自_二三條橋_一過_二下粟田口_一出_二大津_一者是近世之事而是稱_二大津海道_一其南有_二汰石越_一是自_二東山連華王院南_一所_レ出_二山科西山村_一也又自_二藤杜南_一有_二出_一山科勸修寺村之路西南有_二山崎道_一自_二東寺南_一經_二唐櫃_一出_二攝州_一也唐櫃越自_二老坂之北_一出_二丹波保津村_一斯坂峠有_二古松_一其大過_二一圍_一土人稱_二山神_一而祭_レ之是則普廣院義教公潛逃_二京師_一所_レ赴_二丹波_一也又自_二松尾南_一有_二歷_一山間而出_二丹波_一之路其北有_二細路_一是又自_二丹波保津_一過_二水尾村南_一出_二嵯峨_一是元樵夫往來之間道也天正十年六月二日明智日向守光秀謀_レ反出_二自_一丹波

龜山城_一胸勢使_レ赴_二老坂_一光秀單騎而出_二自_一斯道_一於_二桂川邊_一與_二胸勢_一相逢倭俗大軍謂_二胸勢_一自_二是直襲_一京師本能寺旅館_一遂弑_二織田信長公_一自_レ茲是坂路稱_二明智新道_一西北廣澤池西北有_レ道山路之絕頂曰_二京見峠_一言見_二京師_一於目下_一之謂也斯處有_二大松_一是亦稱_二山神_一自_レ是出_二丹波_一其東北自_二高雄與_一橫尾之間有_二出_一丹波之路自_二鞍馬山_一出_二別會村并大悲山_一又有_二赴_一丹波山國之路北自_二大原_一有_レ出_二若狹小濱_一之路其東自_二八瀬北_一出_二近江_一之路是謂_二朽木越_一其道有_二山城峠_一是山城與_二近江_一之境也斯外間道捷徑不_レ遑_二枚舉_一凡一年中自_二攝津大坂_一舟車之所_二運漕_一自_二近江大津_一牛馬之所_二載來_一自_二若狹丹波河內處々_一擔夫之所_二齎來_一凡通計百五十萬石餘也且賀茂川大井川舟舩之所_二稻載_一以_二米鹽酒油并材木薪炭等之物_一京師之富庶可_レ推而知_レ之也凡京師之經營關_レ地時以_二紫宸殿_一爲_二中央_一自_レ茲開_二町小路_一紫宸殿元雖_レ向_二南小橫_一東凡設_二城樓殿舍_一時避_二正當方_一與_二避_一鬼門方_一本朝之流例而是爲_二故實_一東西街謂_二橫町_一南北衢謂_二縱町_一是亦准_二紫宸殿棟_一而小橫東武江城亦以_二天守_一爲_二標準_一列侯之第宅良賤之家屋亦准_レ之凡諸國之城樓街衢

亦皆然也

郡名門

家之所_レ領合十一萬九百三十五石零也八郡之中其村_ハ倭名_ハ聚鈔并拾芥抄之所_レ記載于茲今考之多違今之所_レ稱依_ニ時世_ニ而變易者乎

山城國八郡

乙訓郡

山崎夜末佐岐 鞆度毛賀 長井 大江於保江 物集毛豆女 訓

世勢郡 榎本 羽束賀波豆賀之 石作以久利郡

葛野郡

橋頭 大岡於保加 山田 川邊加波乃倭 葛野加度乃 川島加八之末 田邑

上林加無郡波也之 櫛原 高田 下林波也志毛郡 綿代

多無其

愛宕郡

蓼倉多天久良 栗野久留須乃 上粟田阿波多 大野 下粟田 小野

乃平平 錦部爾之古利 八坂也佐加 鳥戶止利倍 愛宕於多木 出雲以都

上下_ニ 賀茂

紀伊郡

岡田多加 大里 紀伊 鳥羽度波 石原 拜之波以 深

草不加久佐 石井

宇治郡

宇治 大國 賀美 岡屋乃加 餘戶 小野乃平 山科

自_レ古山城國爲_ニ八郡_ニ延喜式并源順倭名鈔所_レ記愛宕郡久世郡紀伊郡宇治郡綴喜郡葛野郡乙訓郡相樂郡是也凡愛宕郡有_ニ五十八村_ニ秋米通計二萬六百七十八石九斗七升零久世郡有_ニ二十二村_ニ秋米通計二萬二千三百九十四石零紀伊郡有_ニ二十三村_ニ秋米通計二萬四千七百石九斗零宇治郡有_ニ三十七村_ニ秋米通計一萬五千二百一十一石九斗零綴喜郡有_ニ四十三村_ニ秋米通計二萬八千七百三十二石一斗三升零葛野郡有_ニ六十八村_ニ秋米通計三萬四千九百六十八石九斗五升零乙訓郡有_ニ四十五村_ニ秋米通計二萬六千五百五十四石八斗零相樂郡有_ニ七十村_ニ秋米通計三萬五千五百一十石四斗九升零今考_レ之則山城八郡通計秋米二十一萬八千三百五十二石一斗四升零也比_レ古則其所_ニ收納_ニ者有_レ餘近年依_下新開_上地與_中縣吏入_中竿也倭俗墾田號_ニ新開_ニ以_ニ一間六尺三寸之竹竿_ニ爲_レ准量_ニ土地廣狹_ニ是謂_レ入_レ竿村號多異_ニ于古之所_レ記今之所_レ名悉載_ニ于茲_ニ此內今公

也末 小栗平久
之奈 留須

久世郡

竹淵^{多加} 奈美 那羅 水主 那紀 宇治 殖栗

栗隈^{久里} 富野^{止無} 拜志 久世 羽栗

綴喜郡

山本 多河 田原^{多八} 中村 志磨 綴喜^{豆々} 大住

有智 田作 餘戶

相樂郡

相良^{佐加} 水泉^{以豆} 賀茂 大狛 蟹幡^{加無} 祝園^{波布}

下狛^{古末}

城池門

禁闕 凡大内九重城廢後京畿所々有^二内裏^一或稱^二里

内裏^一今禁裏古所謂與^二正親町内裏^一地形粗相當然

定^二皇居於茲所^一未^レ詳^レ爲^二何時^一也 後圓融院後

小松院時既爲^二斯所^一也明矣文明十二年庚子十二月

世治後 後柏原院自^二室町殿^一歸^二土御門内裏^一云

今内裏當^二正親町土御門之間^一然則是與^二正親町

内裏^一相同者乎然應仁亂後宮殿纔存^二其名^一而已

織田信長公及豐臣秀吉公粗改^二營之^一至^二後水尾

院時^一東福門院入内之後殿閣門樓漸備至^レ今 後醍

醐天皇以後之繁榮也朝廷之式興^レ絕舉^レ廢每事頗准

古實堪^レ祝^二萬歲^一

二條城 慶長壬寅七年修^二造之^一誠萬世之洪基而諸人

之所^レ仰也寢内太平日久人民富庶是皆金城之庇蔭

也

伏見館 文祿甲午三年豐臣秀吉公山崎天王山城以^二

封疆狹小而水利不^レ便使^レ築^二城於伏見山上^一于^レ時

命^二佐久間河内守瀧川豐前守佐藤駿河守水野龜介

石尾貞右衛門^一爲^二監吏^一慶長庚子五年墮^二其城^一別

置^二館舍^一使^二麾下人^一守^レ之

淀城 在^二與等川南^一使^二城主^一守^レ之是則京師南方之

藩鎮也

風俗門

山城國中州而帝都之所^レ有也故古今之間材德技藝之人不^レ可^二勝數^一故人物措而不^レ論依^レ之不^レ置^二人品門^一

凡國中人情寬舒而無疎豪之氣是又中土地氣之所使然者乎

山川門

宕愛郡

比叡山 斯山王城之良岳也其山至高及春有殘雪自_レ古稱_二都富士_一故取_二斯山_一爲_二山城_一之有_二自_レ是愛宕郡西北爲_レ限本朝高山富士爲_二第一_一坂路至_二絕頂_一九里餘直立而算_レ之則其高二十五町也第二愛宕山也坂路至_二絕頂_一五十町是又直立而數_レ之則其高八町餘也第三比叡山也攀躋則五十町餘直立六町餘也凡登_二斯山_一有_二數道_一東坂本西坂本爲_二第一_一第二雲母坂不動坂唐櫃越八瀬道大原道龍華越此外間道捷徑有_二數所_一也

高野山 在_二叡山南_一麓有_二御蔭社_一賀茂之末社也高野村在_二此西_一

高野川 水源出_レ自_二若狹國_一歷_二大原八瀬_一過_二叡山麓_一出_二高野村_一依號_二高野川_一斯川於_二糺杜南_一合_二流

故糺杜謂_二河合_一

修學院山 在_二叡山南_一古山門之末寺修學寺在_二斯麓_一

近世 後水尾院之行宮在此所改號_二修學院_一兩院時々有_二臨幸_一

赤山 在_二同所_一赤山明神社在_レ茲山門鎮護之神也

一乘寺山 在_二同所_一一乘寺上東門院康平六年建_レ之則爲_二山門之末寺_一今亡

白川山 白川村東北山惣謂_二白川山_一其內瀑泉所々有

_レ之古所謂白川瀑不_レ知_レ爲_二何所_一也其內有_二鑑山情延山_一之名勝軍山亦一峯也勝軍地藏堂在_二山頂_一聖

護院門主一代一度入峯前必登_二斯堂_一修_二護摩_一山間

有_レ瀑是亦謂_二音羽瀑_一此山東南有_二超_一近江_一之路

是謂_二山中越_一又是謂_二今道_一也凡斯山之地中悉白石

也世所謂白川石是也村中石工以_二斧鑿_一斫_レ之石壁

石橋石碑柱礎磴石溝洫之限等悉以_二斯石_一造_レ之其

細碎者爲_二砂石_一被_レ敷_二是於禁庭_一又高貴之來過通

衢清_レ道時平地上必敷_二斯砂_一是謂_二撒_一砂大永年中

法住院義澄公築_二城於此山_一而居_レ之萬松院義晴公

亦住_レ之子時六角義賢入道承禎率_二兵士_一自_二江州_一

來攻_レ之城不能_レ支_レ之自燒_レ城奔_二于江州東坂_一

本「光源院義輝公亦暫住」斯城「

白川 源出「自」北白川「經」東山麓「過」下粟田白川橋
下「自」大和大路三條四條之間「入」賀茂川「其間有」
大和橋「

瓜生山 在「白川南淨土寺村上」相傳牛頭天王自「播
磨國廣峯」始現「此山」故俗以爲木瓜天王之所「好也
依」之畫「木瓜於板面」代「畫馬」而揭「祇園社頭」藤
經賴記云後一條院爲「玩」紅楓「經」瓜生山「被」赴「
志賀山越」云々惠慶法師和歌序曰月光清寺在「瓜生
下」云々此寺未「知」在「何處」也志賀山越在「山中越
南」

淨土寺山 在「白川山南」古淨土寺在「山上」山門門主
之一院也惠林院義植公始爲「淨土寺門主」號「義尋」
慈照院義政公始無「嗣子」令「義尋」而還俗暫續「家
督」義尙公誕生後互爭「家督」義植公憑「細川勝元」
義尙公賴「山名宗全」左右相別戰「洛中」鬪諍無「止
時」洛内外神社佛閣斯時各爲「焦土」又靈寶奇珍悉
爲「烏有」世所謂應仁亂是也今寺絕爲「山并村名」矣
慈照寺山 慈照院義政公中年讓「政務於義尙公」斯山
下建「慈照院」而閑居其中東求堂常所「居也銀閣在」

中庭「爾後爲」寺屬「相國寺」大永十八年五月七日法
住院義澄公搆「城於斯山」而移「之」萬松院義晴公亦
築「城於斯山之大嶽中尾」欲「移」之經營未「就半途
而薨」于近江國穴生「云々」每年七月六日慈照寺淨土
寺兩村民登「山伐」松木「長二三尺許歸」家細割「之
日乾至」同十六日晚「各携」此薪「登」山上「山西北面
有」大之字跡「是弘法大師之所」畫也所々以「小石」
爲「徵各合而視」之則字畫分明也凡大一字橫一畫其
長及「四十間」其間炬火十箇餘也左豎一畫八十間餘
其間炬火二十箇右一畫六十八間其際炬火二十九箇
餘也所「携來」之薪木積「置前所謂所」爲「徵之小石
上」同時點「火其光分明赫奕是謂」亡魂送火「洛人爭
觀」之凡兩村民家割「此木」爲「炬其數四百餘分」之
各主「或三四或五六」爭競而點「火始此薪日乾間誤
用」他事則其家必有「祟云是弘法餘威之所」及者乎
不「如」此則何至「今日」有「不易之理」乎此外北山
點「妙字法字」或有「作」船形「者」又所々山岳或原野
諸人以「枯麻條」爲「炬點」火拋「虛空」或燒「平地」俗
是亦謂「聖靈送火」又稱「施火燒」凡盂蘭盆會所「供
佛之餘物悉携出燒」之諸人群「集鴨川邊」觀「之

善氣山 在慈照寺山之南。善氣水在其麓。近年建

萬無寺於茲處。淨土尊念僧守之。

吉田山 在洛東賀茂川之東。如意嶽之西。所謂神樂岡

也。神祇館之齋場所。在斯處。故每年九月十一日伊勢

例幣使於茲處。領官幣并神馬等。發遣伊勢。山陰

中納言勸請之春日社在斯山北。

日降坂 在同處。

龍澤池 在吉田與春日社之間。

清水谷 在同所。

長刀坂 自吉田山越中山之路也。

中山 在吉田與黑谷之中間。斯所有行基所。定

置之葬場也。凡京師五三味場所。謂千本最勝河原中

山鳥部野延命寺是也。中山則此所也。最勝河原案誤。

三條河原者。乎延命寺在鳥部山邊。今絕舊記在御

坊家。倭俗崇僧多。謂御坊古僧徒臨其場。或火葬

或土葬。自修之。今嫌其事。雖出其場。引導諷經畢

後各歸其後令守場者。修之。自茲謂此人同稱。

御坊。至近世。偏地僻里無僧徒。故令守場者。

葬之。是稱毛坊主。倭俗坊主者。僧徒之通稱也。此人

有髮故謂毛坊主。

紫雲山 淨土宗四箇本寺之隨一金戒光明寺在此山。

世所謂新黑谷也。一說新黑谷山門黑谷之稱號而非。

此黑谷之謂也。

鹿谷 在東山麓紫雲山之東。古法勝寺執行俊寬僧都

丹波少將成經。平判官康賴等於斯溪間閑處。爲追

討平家之計畧。其事發覺。平清盛大怒。放三人於鬼

界島。倭俗相共謀。事謂談合。故此處謂談合谷。

如意嶽 東山頂謂如意嶽。瀑泉漲落是稱如意瀑。是

洛下之奇觀也。自此嶽直赴園城寺。是謂如意越。

按聖護院門主一代有如意寺之號。天文十九年細川

晴元六角定賴築城處斯地也。如意寺跡今在如意嶽

東邊。如意寺本尊觀音。今在三井寺中微妙寺。凡赴

三井寺。人自三井寺之道行。則三里餘行程也。登如意

嶽。到三井寺。則纔二里許也。

椿峯 在如意嶽南。古園城寺益信構菴於此峯。而居

之。

獨秀峯 在南禪寺上。則此寺之主山而爲南禪寺十

境之隨一也。

駒瀑 在獨秀峯南。相傳南禪寺地舊三井寺派下道智

僧正之所住也。至遷化後。痛惜此地爲南禪寺。親

乘_二白駒_一遊_二行此瀑邊_一下_二視南禪寺_一時或爲_レ祟依_レ之世號_二駒僧正_一是稱_二駒瀑_一至_レ今南禪寺法堂建_二道智之牌_一而祭_レ之

東岩倉山 在_二下粟田上_一古王城四方山納_レ經爲_二京城之鎮護_一此山則東岩倉山也山頭下_二視東西南北_一故豐臣秀吉公在_二聚樂_一時爲_二四方斥候_一被_レ設_二寨秀吉公一時登_二斯樓_一眺_二望四方_一于_レ時獨秀峯下竹林間炊烟起秀吉公以爲有_レ家則使_二人視_一之竹間有_二草菴_一老僧兀座問_二其名_一僧曰予_二三長老玄圃也斯所京師五山之_二上南禪寺之地也應仁年中_一之兵亂悉爲_二鳥有_一爾後無_二再造之資_一斯菴寺中村菴老師塔頭聽松院之跡也使者歸告_二秀吉公_一公則召_二三長老_一時維初冬_二三長老探_二庭前之黃橘少許_一携_レ之謁_二秀吉公_一公感_二其守_一寂寥則賜_二百石之寺產_一至_レ今聽松院百石南禪寺領之外也無_レ幾而被_レ再_二興南禪寺_一觀勝寺山 在_二岩倉山東_一古行基建_二觀勝寺於斯山_一今寺絕行基之座禪石殘近世安井門主再_二興觀勝寺於祇園南真性院中_一

下粟田山 在_二下粟田之上_一清和天皇時天照太神影向之地也倭俗神之降臨曰_二影向_一然中絕年舊近世山下

有_二伊勢國人野呂左衛門宗光者_一一時得_二神託_一再_二興內外宮_一依_レ之山稱_二日山_一山下日岡之號依_レ在_二斯麓_一也此山或稱_二神明山_一

花頂山 在_二粟田山西_一古每春櫻花爛熳之地也每年公方家來臨多有_二詩歌會_一

大和橋 在_二三條與_二四條_一之間長堤上_一是白川之入_二

賀茂川_一處也自_二此堤上_一歷_二伏見_一到_二大和國_一故此稱_二大和大路_一橋號_二大和橋_一

宮川 四條河原依_レ在_二祇園社之前_一號_二宮川_一每年五月晦日六月十八日少將井神興出_二斯河邊_一是謂_二神

輿洗_一

知恩院山 在_二下粟田山西南_一

圓山 在_二知恩院山南_一世所謂將軍塚在_二斯頂_一

長樂寺山 在_二圓山南_一

大谷 本願寺一向宗開祖親鸞上人塔在_二今大谷知恩

院地_一近世滿譽上人爲_二住職_一時受_二東武之命_一自_二山上_一移_二知恩院於今所_一于_レ時移_二親鸞塔於烏戶山_一元

此塔依_レ在_二大谷_一今烏戶山之墓地稱_二大谷_一近年東本願寺亦買_二東漸寺北山_一而建_二親鸞以下代々之塔_一

斯地隣_二大谷_一故此處亦號_二大谷_一

東漸寺山 在二大谷南一

雙林寺山 在二東漸寺山南一

鷲峰山 在二高臺寺上、則斯寺之主山也、山中有二十境、

菊潭水其一也、溪間多、菊潭水出、自其間、寺僧飲、

斯水、故古來寺僧有長壽人、門前人亦然也、傳言依

汲、此下流、也相傳雲居寺在斯所、一說雲居寺門

前青塚之地也未、知孰是、細川滿元入道道悅之所

建岩栖院始在此山云

下河原 河水出自鷲峯山、古桂橋寺在斯河邊云

八坂 八坂元一鄉名也、然專指法觀寺邊、稱八坂、

靈鷲山 在二正法寺之上、故正法寺稱靈山、元爲禪

刹、國阿上人自住、此寺爲時衆、山上有普廣院

義教公之城址、山下有山井中務之跡、

產寧坂 清水坂樓門之南有塔本尊觀音也因光明皇

后祈願而建之本尊有安產之誓、故稱于安塔、斯

坂在其麓、故號產寧坂云、一說田村丸創清水寺、

時大同三年開斯坂路、故號三年坂云、未、知孰

是也

清水山 清水寺在斯麓、山北有觀勝寺谷、古東岩倉

觀勝寺在斯山、乎或此寺所領之山乎

音羽山 在二清水山、瀑泉出、自斯山中、凡洛外稱音

羽瀑者有三所、所謂清水音羽、牛尾音羽、白川音羽

是也

清閑寺山 在二清水山南、斯山峻峻、瘴嵐常侵、淫岩石崎

嶇、而樹木蟠屈、故樹木柯條堪插瓶片石、亦堪安盆

且山下脩竹繁茂矣

歌、中山 清水寺與清閑寺之間、山徑左邊之山也

滑谷 清閑寺山與鳥部山之間、山徑常濕、故號滑谷、

是古自東關入京師之路、自山科、經滑谷、出

五條橋、若松谷、小松谷、在此道南、平重盛公所住之

小松殿在此所云

鳥部山 今豐國山而山頂曰阿彌陀峯、平重盛公所

造立之燈籠堂及本尊彌陀至近世儼然而存、近世

日蓮宗僧徒與親鸞門徒因法論、日蓮宗徒大起

自京都、歷此山、向山科、本願寺、于時爲出陣首

途之吉兆、以矢射彌陀像、終放火堂宇忽爲焦

土矣、然本尊土人奪取之、今在山科小堂

(自是愛宕郡北爲限)

堀川 北出自大德寺前、相傳源流自若狹國、故

在洛北謂若狹川入安居院歷船橋而於一條西與小川合

小川北自二股川入洛歷百々橋下流小川通西

人家下出_レ自一條經反橋與堀川合流

松崎山在同所南此山背北向東南故斯處春初

櫻花開早一說古氷室在此邊也

狐坂自松崎越岩倉之路也

御泥池在松崎西御泥池村東此所亦上賀茂神地也

此水多濁故謂御泥池又洛内外六地藏之隨一在此村

故或說御菩薩池訓美會呂池未_レ知然否池

東有魔滅塚此所洛陽之良隅而所謂鬼門也相傳古

除夜盛熬大豆於舂來此所修追儂則撒大豆

於良隅惡魔退散故埋其豆并舂處號魔滅塚或

謂豆塚又稱舂塚又此御泥池村禁裏牛飼仙納住

焉常養牽車之牛則有家領今一人稱彌市者在

洛中柳原

幡枝山在岩倉西南此山下人造土器御所屋敷在幡枝東未_レ知

爲何御所也

矛技山在同所今誤稱福枝造土器家又在山

下

花園在高野村北古洛西宇多河西有籍田荒廢後

夏野左大臣爲宅地疊水石置花園龜山法皇

愛其地則爲行宮則今妙心寺地是也時於洛北

別賜花園地於夏野此花園是也

八鹽岡在花園村北長谷山自古賞紅楓處也倭

俗每諸色一染爲一入二染爲二入三入字倭訓

志保故與鹽倭語相同故入或作鹽八鹽染紅之至

也紅楓色比八度染色故稱八入岡

長谷在八鹽岡西北有川稱長谷川

北岩倉山觀音堂在山下古爲王城鎮護納經於

平安城四方之山上是號岩倉於東北西今其處

分明也如南方則不詳其處一說王城南方山則

雄德山也然斯山八幡神地也依之難納佛經河內

國獅子窟山雖爲山城州之外於南方則近京

師故納經於斯山而爲南岩倉今經塚現存且

龜山法皇遺勅曰須納御骨於岩倉山然今是爲南

禪寺南下栗田之東岩倉然今考之斯處無經塚

又無法皇塔獅子窟山有經塚又有龜山法皇

塔依之則獅子窟山爲南方岩倉也可爲必者乎

北岩倉村民之中剃髮者有數十人是謂力者主上

崩御葬送時奉_レ昇_二棺槨_一及勅使登_二山門_一日亦昇_二腰輿_一龜山小倉山在_二岩倉鄉中_一其內小倉山有_二城趾_一

朗詠谷 在_二長谷_一四條大納言公任卿閑_二居斯谷_一撰_二倭漢朗詠集_一云

八瀬里 去_レ洛東北三里許在_二叡山麓_一斯邊惣小野庄內也一說 天武天皇被_レ襲_二大友皇子_一時逃_二此里_一流矢中_二天皇背後_一故號_二矢背_一云土俗男子亦椎髻傳言山鬼曾栖_二八瀬河西山中鬼洞_一一村男女悉山鬼之裔也故男子亦束_二髮於頭上_一處_二到_レ今每年自_二七月七日_一至_二同月十五日_一村中兒女聚_二斯洞_一鳴_二鉦大唱_二彌陀佛號_一是謂_二祭_一先祖_二予思斯處在_二叡山麓_一自_二傳教大師_一以後被_レ聽_二牛車_一之僧使_二此土人_一藏_二車飼牛_一其僧乘_二車入_レ洛日則使_二土人_一爲_二牛童_一倭俗牛童束_二長髮於頂上_一垂_二其末於背後_一今長髮則其遺風也何有_レ爲_二鬼神之裔_一乎一村百戶餘俗朴身著_二木綿衣_一又著_二蓑草袴_一登_レ山如_二猿狖_一耕_二田以_二牛馬_一農暇各腰_二斧鎌_一登_レ山伐_レ木尺許束_二之入_レ窖蒸_二之去_二濕氣_一則青色忽變_レ黑是謂_二黑木_一日々賣_二京師_一大原土俗亦然

冠石 在_二小野庄東河內村_一惟高親王遁_レ世時掛_二冠於斯石_一而薙_レ髮處也

棧敷嶽 在_二小野庄同處_一惟高親王既雖_レ遁_二世時々慕_一帝都之心未_レ忘斯處構_二小亭_一而遙望_二京師_一故土人號_二棧敷嶽_一

春日岩 在_二八瀬_一昔春日明神親來現而踞_二斯岩石_一迎_二管神_一世傳管神始登_二台嶠_一入_二僧尊意室_一時經_二過斯里_一爾後建_二社而祭_レ之

巫淵 在_二同處_一古老傳言上所_レ記之春日神岩爲_レ祟一巫禱_レ之不_レ止坐愧而沈_二身於斯淵_一云

住吉石 在_二同處_一傳言此神亦與_二春日明神_一現_二于此_一云石傍有_レ松

聖御前 在_二同處_一昔有_二一散聖_一居_二八瀬里_一慕_二役處士之風_一幽靜修鍊不_レ詳_二其姓字_一又或不_レ知_二其所_一遂立_二祠祭_レ之

鬼洞 在_二八瀬河西山中_一洞口狹中闊高二丈強深三丈有奇古鬼神棲_二斯洞_一故俗號曰_二鬼洞_一酒顛童子亦自_二斯洞_一移_二於丹波大山_一云

義朝石 在_二八瀬_一平治年中源義朝軍敗逃_二尾張國_一時

過_二八瀨_一踞_二斯石_一今所_レ在_二石面_一字後世好事者記_レ之
僧正_カ谷 在_二鞍馬山西北_一相傳斯山_二大天_一僧正房於_二斯處_一傳_二劍術_一於源牛弱_二故斯谷_一岩面多有_二劍擊之痕_一
云今見之石面條目自似_二刀劍之癩痕_一凡石有_二數品_一方解石以_二鐵槌_一破_レ之則大小各其形爲_レ方洛北鳴
瀑砥石破_レ之則悉爲_レ片斯谷石亦自然有_二條目_一是地
氣之所_レ使_レ然也何爲_二劍擊之痕_一乎

軸淵 在_二八瀨_一傳言源朝長歲十五六與_二父義朝_一共
過_二八瀨_一以_二其傷_一矢將_二自殺_一而免_二冑投_一河後人
號_二其處_一曰_二軸淵_一

辨慶石 八瀨里有_二一石_一傳言武藏坊辨慶登_二叡山_一時
經_二過斯里_一携_二此石_一來而置_二于茲_一其身長等_レ是云

大原山 凡斯山下有_二八鄉_一所謂東方井出_二戶寺_一上野尾
流勝林寺來迎寺西方野村草生是也寂光院在_二草生
村之中_一

呂律川 大原勝林院前澗水挾_レ路在_二南北_一其一水音
應_レ呂其一應_レ律故合_二二川_一號_二呂律川_一

音無瀑 在_二勝林院之東山_一瀑水傍_二岩腹_一而流故近聽
_レ之無_二水音_一

小野篁舊址 在_二大原中上野村_一傳言篁別莊在_二斯處_一

時々來棲云

良暹坊 在_二大原勝林寺中_一良暹以下所_二自詠_一之歌_上

書_二障子_一至_二近世_一歌未_レ消今與_レ坊絕其跡存耳

草生 大原八鄉之一箇所而草生中又有_二七鄉_一也草生

或作_二草尾_一斯處有_二寂光院_一是則建禮門院平德子之

所_レ遁_二世也_一

隴清水 在_二草生_一建禮門院於_二洛東長樂寺_一落飾爲

_レ尼入_二寂光院_一時臨_二斯池水_一始寫_二見形容_一云

山城峠 北去_二小弟子村_一半里許是則山城與_二近江_一之

境界也

鞍馬山 毘沙門天堂在_二此山_一或稱_二松尾山_一

大蟲嶽 在_二鞍馬山東北_一曾鞍馬山大蛇蟠屈而土人

厭_レ之峯延修_二護摩_一大蛇自斷々壞裂令_二人夫_一捨_中蛇

骨於斯處_上故號_二大蟲嶽_一

貴布禰山 在_二岩屋山東北_一自_レ茲出_二鞍馬山_一一說暗

部山則貴布禰山也或言鞍馬與_二暗部_一倭語相近異名

而同山也

大悲山 在_二鞍馬山北_一或號_二北大峯_一凡山城北以_二大

悲山_一爲_レ限觀音堂在_二斯山_一

補陀落山 在_二鞍馬與_二大原_一之間_上清原深養父所_二建

立之補陀落寺在此所今堂絕礎石所々殘

雲^カ畑山 此山下流水則是賀茂川之源也

車坂 在雲畑北一岩屋山金峯寺之行路也此溪間至

夏多鱒魚土人取之賣京師

岩屋山 金峯寺不動堂在此山一堂後澗水涌出是謂

不動香水俗傳有病者點此水於指頭塗痛所則

立愈故參詣人盛此水於竹筒而携歸又有瀑出

自不動堂東南一狂亂人浴此水則愈是謂被^レ打

瀑數日止宿是謂籠言參籠之義也

二瀨山 在補陀落山西北一

市原山 在二瀨南一

市原古蹟 惺齋藤欽夫晚年隱北山市原八處命名

所謂手月^{ツキ}磧^シ朽斧^{イノ}松巖^{イノ}塙^シ水北肉峯^{ニク}流六溪^{ムツ}洗密科枕^シ流

洞飛鳥潭是也今猶存

靜原 在大原草生西一上賀茂葵祭所用之葵今出

自此處

連理芝 在市原南野中村每年四月朔日上賀茂社司

詣貫布禰社歸路探虎杖則於斯野互爭競其

所探來之大小多少是爲戲此芝隔路在東西一

故稱連理芝

船岡山 在二本之東北一

七野 凡斯邊有七箇所野然其說有同異今舉其

一所謂紫野蓮臺野上野萩野北野平野内野是也

葛野郡

御室山 在仁和寺之北或稱大内山

處經妙心寺之東

雙^二丘^一 在仁和寺南有一岡二岡三岡依之號雙

岡一岡在北最高二三到南次第卑

内山 在法金剛院之内古所謂並岡東墳是也 仁明

天皇游獵日此山放鷹之地也依之承和十四年十月

勅授從五位下而封之今專謂内山

天授院山 在仁和寺東妙心寺西北古爲仁和寺之

境内一爾後有故屬妙心寺中天授院近世妙心寺

置延壽堂

龍安寺山 在仁和寺東北

永圓寺山 在龍安寺南本願寺連北

等持院山 在永圓寺東北

眞如寺山 在等持院之東

大北山 凡自鹿苑寺至石影惣謂大北山

小北山 在大北山之南

衣笠山 在鹿苑寺之西南

桐尾山 在平岡之北

眞尾山 在桐尾之西

高雄山 在京城西北三里許山形似鷹尾故或稱

鷹尾山紅楓之名區也傳言弘法大師住斯山時有

勅使書額字中使到河邊子時大雨洪水不

得揭涉中使隔河捧榜大師執毫一揮則墨汁

如細雨隔河文字忽現榜上云今磨墨硯石在

川北坂中世北山等持院寺中門前專種菊到秋與高雄楓霜葉爲二雙洛人賞之

砥取山 在鳴瀧山之北

長尾越 凡自北山梅畑超嵯峨有三道一云長尾

越是左愛宕山下丹波路自菖蒲谷出細谷路也

斯峠曰京見峠洛中在目下土人今號山神峠上

有大松是依稱山神也自京見峠下東坂則

到廣澤池之西又有長刀越是自梅畑歷西山

腹而下處至嶮路也三道共到嵯峨之行程十三四

町也其內路有險易

鳴瀑山 在仁和寺之西北此則砥石之所出也

五智山 在鳴瀑山之西南蓮華峯寺在斯山上

高花山 在鳴瀑之北三寶寺般若寺在此南山又

有一枚岡八幡宮高雄桐尾往來自此山下過斯山

突出臨西故元號高鼻倭俗山岳突出處謂鼻比

人身之鼻而言之也鼻與花倭語相同故今以音

呼之稱高花山者乎

清瀑川 在愛宕山之麓斯川出自丹波國歷桐尾

高雄前出此所與大井川合

愛宕山 山上有五嶽朝日峯大鷲峯高雄山龍上山賀

魔藏山此山始號手白山自移愛宕權現於斯山

改號愛宕山

月輪山 在愛宕山東山腹

鹿背山 在愛宕山腹

檜原 在愛宕山西山腹

水尾山 在愛宕山西清和天皇陵在斯處

龜山 在嵯峨天龍寺在斯山下故號靈龜山

大井川 在嵯峨源出自大悲山北歷丹波國關并

保津鳥羽龜山南入斯川凡一里餘也斯地接水尾

村相傳清和天皇時々有行幸觀遊魚以爲娛

嵐山 在大井川之西曾言龜山院摸和州嵐山

植千本櫻於山上今又處々殘

松ノ尾山 在_二嵐山南_一松尾明神社在_二山下_一

西芳寺山 在_二松尾山南_一

地藏寺山 谷地藏院在_二斯麓_一凡西芳寺山地藏寺山相

連惣號_二衣笠山_一

桂川 大井川之末流也河西有_二桂里_一故至_二嵯峨以南_一

今稱_二桂川_一元葛野川乎於_二上鳥羽小枝川南_一與_二淀

川_一合

木ノ島 在_二太秦東南_一傳言細川賴春於_二斯處_一自裁

十禪師山 在_二谷地藏院山南_一

下山田山 在_二松尾南_一古稱_二田邑山_一文德天皇陵

在_二此山_一故奉_レ稱_二田邑帝_一

地藏寺山 在_二下山田南_一斯麓有_二桓武天皇之陵_一前

村謂_二御陵村_一

乙訓郡

大原山 在_二大原野西_一

西岩倉山 在_二同處_一

良峯山 在_二大原野西南_一

三鈴寺山 在_二同所_一

小鹽山 在_二同所_一

乙訓山 在_二小鹽山東南_一國史曰 垂仁帝喚_二丹波五

女_一納_二掖庭_一日葉酸媛立爲_二皇后_一以_二其弟葉田瓊入

媛眞砥野媛筋瓊入媛_二女_一並爲_二皇后_一唯竹野媛因_二

形姿醜_一返_二於本土_一則耻_二其見_一返到_二葛野地_一自_レ與

墮死故謂_二墮國_一又稱_二弟國_一又呼_二乙訓_一

向日山 在_二小鹽山東_一

鷄冠井山 在_二向日明神社東南_一赴_二山崎_一之驛舍在_二

斯麓_一

勝龍寺山 在_二雞冠井西_一明智光秀之城址存矣

柳谷山 在_二勝龍寺西_一柳谷寺在_二山下_一

粟生山 在_二勝龍寺西南_一淨土宗西山派光明寺在_二斯

山下_一古長岡京在_二斯山西北_一

海印寺山 在_二粟生山南_一

圓明寺山 在_二海印寺山之西南_一

山崎山 在_二圓明寺山之南_一

山崎橋 桓武天皇延暦三年甲子七月造_二山崎橋_一同年

遷_二都於山城長岡郷_一今橋絕

紀伊郡

久我嶺 在_二久我_一

久我ノ里 在ニ久我ノ

箕里 同ノ上

鷺坂 同ノ上

惠日山 在ニ東福寺上ニ故斯寺號ニ慧日山

光明峯 在ニ東福寺山東泉涌寺山中之南ニ昔日九條道

家公葬ニ斯處ニ建ニ毘沙門堂於其上ニ然應仁之兵火堂

宇爲ニ鳥有ニ今其跡存而已本尊毘沙門天像今在ニ東

福寺常樂菴之閣上

仙遊岩 在ニ泉涌寺山上ニ依ノ之此寺始號ニ仙遊寺ニ爾

後山下清泉涌出自ニ茲改號ニ泉涌寺仙入水出自ニ仙

遊岩之下ニ此ニ水閣伽井佛水獨銚水是謂ニ五水也

音無川 出ノ自ニ滑石溪ニ歷ニ池田ニ過ニ新熊野社前ニ入ニ

落橋下ニ是川比ニ三熊野音無川ニ而稱ノ之云

落橋 泉涌寺門前音無川之橋也主上崩御時御車出

ノ自ニ禁門ニ歷ニ大和大路ニ過ニ斯橋ニ入ニ泉涌寺ニ故每ニ

葬送ニ必改ニ造之ニ依ノ是斯橋以ニ零落ニ爲ニ長久之兆ニ

遂祝ノ之稱ニ落橋ニ斯事見ニ于舊記ニ後京極殿詠ニ關路

秋風ニ之倭歌有ニ荒廢後只秋風之詞ニ斯歌載ニ新古今

和歌集雜部ニ然此歌自有ニ太平之象ニ偶與ニ落橋ニ同

日之談乎

新熊野山 在ニ泉涌寺山東北ニ觀音堂在ノ麓新熊野村

在ニ西北ニ熊野權現社
存ニ村西

稻荷山 在ニ慧日山之西南ニ山頂有ニ三壇ニ古稻荷三社

在ニ斯所ニ弘法大師移ニ今地ニ每年正月五日社家登ニ

山上ニ拜ニ三壇ニ始依ノ爲ニ鎮坐之處ニ也

深草山 在ニ稻荷山南ニ日蓮宗寶塔寺在ニ斯麓ニ日蓮法

孫日像所ノ記南無妙法蓮華經之石塔在ニ斯寺ニ因ノ之

爲ノ號日像會建ニ寶塔於洛陽七口ニ此塔七箇於之隨

一也昭宣公所ノ建之極樂寺則寶塔寺之地也今寺絕

爲ニ村名ニ釋道元之所ノ開德輝山興正寺亦古在ニ斯

所ニ近世永井信濃守尙政在ニ澱城ニ時再ニ興此寺於

宇治ニ霞谷在ニ此山東ニ深草土人造ニ土器并屋瓦ニ深

草里或稱ニ猿九里

七瀬川 在ニ深草西南

落合 在ニ上鳥羽小枝橋南ニ於ノ是鴨川與ニ桂川ニ合而

入ニ淀舩舟往來之川直入ニ伏見ニ凡大小四十八流入ニ

斯一河

古川 在ニ下鳥羽西ニ古赴ニ西國ニ入自ニ斯所ニ乘ノ船出ニ

難波ニ營神亦左遷日自ニ茲乘ノ船願ニ吉祥院杜ニ云草

津亦斯邊也

矢島峠 在伏見城山北自藤杜出木幡之坂路也

倭俗坂路最高所謂峠豐臣秀吉公在伏見城時矢島氏館舍在斯傍故號之近世中華黃藥派僧高泉所再興之佛國寺在斯山

狼谷 在藤杜東勸修寺村此所近宇治故多設茶店又盛抹茶於小壺或裏器而賣之旅行者買之止渴又充方物此處元狼谷也今誤爲大龜谷具見日本紀欽明紀

伏見川 源出自近江湖歷勢多出宇治流斯所自是過淀入攝州難波海凡鴨川桂川所々流水悉入伏見川

伏見城山 豐臣秀吉公築城於斯山今有基址土人謂城山此山茶磨石出思昔日宇治山茶磨石多出此地去宇治不遠故取之稱載舟車來築石壁今宇治石漸絕此山所殘之石性堅膚密宜磨茶然有制禁不能妄取之

指月 在豐後橋東城山上近世今所在相國禪寺之大光明寺在斯處于時指月庵在寺中月夜自是見月影之浮川則在指點之中故於今稱之說月影浮洲渚或成三或成四故稱四月

云

狹緒川 在伏見與宇治之間或作澤田

狐川 在與等之西南淀川與木津川相合所也

淀川 源出自宇治川經伏見自茲到攝州難波

津而入于海
美豆渡 在淀小橋邊

水垂 在同小橋西北舟舡之所聚也

相樂郡

薪里山 在木津川西酬恩菴在斯麓

賀茂 在同所竹林多

笠置山 凡離木津川而東西有笠置村西笠置有

笠置山始號鹿鷲山其山至巉峻也

平尾山 在木津川東南去南都二里許

當尾山 在下山城與大和之境

泉河 在木津西崇神天皇自率官軍於斯所

與武埴安彥戰互挑進出故號挑河今誤謂泉河

瓶原 在賀茂南

鹿背山 在瓶原西南

海住山 在瓶原東

綴喜郡

八幡山 或謂男山又稱雄德山八幡宮在斯山石

清水在山腹

放生川 在男山麓自此川行男山有二橋一

曰安居橋冬十二月安居頭人自此橋詣八幡社

故不淨人不_レ得渡八月十五日放生大會時放諸魚

此川一諸人之所往來也其橋反張水上故稱反

橋凡神社多有反橋是表一神代天浮橋之微意乎

洞峠 在男山南有大樟樹是所八幡宮遙拜之地

而山城與河內之境也此邊草繁茂倭俗細草周密地

謂芝冬十二月八幡山下安居頭屋門前剝起斯芝

築壇勸請八幡宮安居十五日間頭人朝夕拜之

是謂御壇

普賢寺谷 是自河內校方_{（ヒラカタ）}渡天川出城州天神森

之坂路也其間三里餘屈曲盤旋或上或下

飯岡山 倭俗山之平所稱臺此所亦謂飯岡臺行基

所置葬場在此麓今有寺號西方寺

井手山 在井手里之東井手左大臣橋諸兄公之宅地

跡在此麓

有王山 在井手山之東北相傳倭寬僧都童有王此所

人也山下有宅地之跡土人稱倭寬屋敷倭俗第宅

稱屋敷疑此地法勝寺之寺產而倭寬之別莊又在

茲乎

光明山 在井手之東南有明神社治承年中高倉宮

以仁王沒落而將赴南都於光明山鳥居下中流

矢而薨鳥居今現在

田原山 自宇治赴田原其間行程三里俗稱宇治

田原其山屹立形狀如屏風多赭石而無草木實

可謂峭壁攢峯者也左右溪深而下臨無地其間

失一步則落千丈溪故行之者須臾不_レ能見他

踏地而過登其頂則下視西南是謂國見峠

鷲峯山 在田原鄉東南其山砂石多而失步則不覺

下攀躋半里許而登絕頂古木森蔚所謂鷲峯山寺

在其間凡田原鄉比他所則地形至高此山又傑

出其地其高不可與他山比故和州紀州之間

在一望之中

石堂山 在田原鄉南凡斯邊山多赭石也

和東山 在田原西南禪刹正法寺在斯所

百丈山 在和東東南山間有岩壁百丈許大智寺自

斯過故稱二百丈山大智寺元眞言宗也今爲近江山
上永源寺末派之禪刹

久世郡

槇木ノ島 在宇治川西古土入下網或設網代漁魚
爲業編竹遮河代網而取魚是謂網代興正菩
薩散尊憐殺生之罪教土人曝布於河水是爲
作業止取魚遂使網代理宇治川中島建塔於
其上修供養其塔于今在宇治橋南河中島
三間ノ水 凡宇治川其流至清其中宇治橋自西方第三
柱間流過者爲特勝點茶人汲此水煮湯
白川 在平等院西南相去一里許山水幽邃之地而誠
可謂小桃源自古宇治土人避亂隱妻子之處
也到此處有坂一夫遮路則輒不能入之今民
家在所々多製茶

宇治郡

宇治川 源出自近江湖水歷勢多橋經鹿飛櫻
谷過米炊歷宇治橋下入伏見米炊急流之所而白
波漂起其色如覆
米泔水故
俗號米炊

朝日山 在宇治川東

旗ノ雄山 在宇治離宮東山倭歌詠宇治槇尾者多矣

御室戸山 在宇治東北

明星山 在御室戸山頂聖護院門主一代一度入大
峯時出京日先到斯所七箇日之間修護摩

窺仙嶽 在御室戸山北池尾之山上窺仙法師所隱
之岩窟于今存矣其道至峻峻而難攀躋

炭山 在御室戸山東北

河ノ尾山 在御室戸山東或稱高尾山

池ノ尾山 在河尾東北山頂謂喜撰嶽喜撰所棲之
岩窟在斯處

大鳳寺山 在御室戸之北古有寺今亡山下一村悉
製茶

高峯 在黃蘗山之東則萬福寺之主山也

木幡山 在高峯之北或稱關山古所謂木幡關在
斯山

小栗栖山 在木幡西北

勸修寺山 在小栗栖西北

西山 在勸修寺西北

滿坂 在西山西南自是出洛東蓮華王院南瓦町

俗謂^{スベリ}滑石越^一

日野山 在^ニ木幡東北^一法界寺在^ニ山下^一

醍醐山 在^ニ醍醐^一其山陰森而有^ニ靈氣^一伽藍魏^ニ然于

山上山下^一

笠取山 在^ニ醍醐山東^一

牛ノ尾山 在^ニ同山東北^一嚴法寺在^ニ山上^一真言宗僧守

小山^{コレ之} 在^ニ牛尾山北^一白石明神社并白石菴在^ニ斯山下^一

雍州府志卷一終

雍州府志卷二

神社門上

延善式九卷

宮中神三十六座

神祇官西院坐御巫等祭神二十三座並大月次新嘗中

御巫祭神八座並大月次新嘗中
宮東宮御巫亦同

神產日神 高御產日神

玉積產日神タマツル

生産日神 足産日神

大宮賣神

御食津神 事代主神

座サカ摩マ巫ヰ祭マツル神カミ五座並大月次新嘗

生井神 福井神社

綱長井神

波比祇神 阿須波神

御門巫祭神八座並大月次新嘗

櫛石意神各一座 豐石意神四面門各一座

生島巫祭神二座並大月次新嘗

生島神 足島神

宮内省坐神三座並名神大月次新嘗

園神社 韓神社二座

大膳職坐神三座並小

御食津神社 火雷神社 高倍神社

造酒司坐神六座大四座小二座

大宮賣神社四座並大月次新嘗

酒殿神社二座並小

酒彌豆男神 酒彌豆女神

主水司坐神一座小

鳴雷神社

京中坐神三座並大

左京二條坐神二座並大月次新嘗

太詔戸命神 久慈眞智命神

同京四條坐神一座

集神社

山城國一百二十二座

大五十三座並大月次新嘗就中十座預相嘗祭

小六十九座並官幣

乙訓郡十九座並大五座小十四座

羽束師坐高御産日神社大月次新嘗

與杼神社

大井神社

乙訓坐火雷神社名神大月次新嘗

石作神社

走田神社

御谷神社

國中神社

向神社

大歳神社大月次新嘗

茨田神社

石井神社

神川神社

久河神社

寶原神社

小倉神社大月次新嘗

入野神社

自三玉手祭來酒解神社名大神大月次新嘗元名山崎社

神足神社

葛野郡二十座大十四座小六座

葛野坐月讀神社名神大月次新嘗

木島坐天照御魂神社名神大月次新嘗

墮川神社

阿刀神社

松尾神社二座並名神大月次新嘗

深川神社

墮川御上神社

櫛谷神社

平野祭神四社並名神大月次新嘗

梅宮坐神四社並名神大月次新嘗

天津石門別稚姫神社名神大月次新嘗

伴氏神社大月次新嘗

大酒神社元名大辟神

愛宕郡二十一座大八座小十三座

賀茂別雷神社亦名雷名神大月次新嘗

出雲井於神社大月次新嘗

賀茂御祖神社二座並名神大月次新嘗

出雲高野神社

賀茂山口神社

賀茂波爾神社

小野神社二座並名神大月次新嘗

久我神社

末刀神社

須波神社

鴨川合坐小社宅神社名神大月次新嘗

貴布禰神社名神大月次新嘗

鴨岡本神社

伊多太神社

太田神社

三井神社名神大月次新嘗

大柴神社

高橋神社

片山御子神社大月次新嘗

紀伊郡八座大三座小五座

御諸神社

稻荷神社三座並名神大月次新嘗

大掠神社

飛鳥田神社一名柿本社

眞幡寸神社二座

宇治郡十座大五座小五座

宇治神社二座並名神大月次新嘗

日向神社

許波多神社三座並名神大月次新嘗

天穗日命神社

宇治彼方神社ヲネノテウ
大月次

山科神社二座
大月次

久世郡二十四座
大月次

石田神社
大月次

水主神社十座
大月次
水主坐山背大國魂命神二座預相嘗祭

荒見神社

雙栗神社三座

水度神社三座
大月次

旦棕神社

伊勢田神社三座
大月次

巨棕神社

室城神社

綴喜郡十四座
大月次

樺井月神社
大月次

朱智神社

月讀神社
大月次

咋岡神社
大月次

高神社

内神社二座

栗神社

棚倉孫神社
大月次

佐加乃神社

酒屋神社

甘南備神社

天神社

地祇神社

相樂郡六座
大月次

祝園神社
大月次

和伎坐天乃夫支賣神社
大月次

綺原坐健伊那大比賣神社

相樂神社

岡田國神社
大月次

延喜式二十六卷

凡賀茂祭使食料以山城國正稅五百二十束充之

凡大原野社神殿守二人糗米日各二升預從一人日八合

大和國春日社神殿守二人日各二升預從二人日各八合

並以當國官田地子充之

愛宕郡

按延喜式神名帳所載山城國神社古有而今無之又古無而今有之者多此神社部就今之所_レ有而舉_レ之

園井韓神兩社

舊在宮內省後移禁庭古每年春二月冬十一月丑日祭之參議一人就祭所而行事式詳西宮北山兩鈔相傳延曆年中遷都時將易處於他地神託曰唯斯地然當護皇基今無斯社惜哉

上賀茂社

山城州之一宮也白鳳年中大己貴命來現下賀茂其後四月酉日瓊杵尊自大和國賀茂社來現上賀茂別雷山麓御生所地號別雷神稱大賀茂故兩社世稱下上賀茂然則平安城遷都以前之神社也自是每年四月中酉日於御生所地以青葉構假宮擬來現之時傍有幄屋是存齋宮遙拜之儀一鳥居南以神枝構假宮是稱大宮則春日大宮也凡春日四所明神之中特尊崇第三御殿是天兒屋根命也中臣之祖神而事神之人專所尊信也社家氏人各懸葵桂於衣領先詣斯宮奉裂幣而拜之然後奉拜御生所宮故此神事稱葵祭凡自

天神七代傳地神五代天忍穗耳尊正受天照皇太神之御禪實爲第二位然凶惡神素盞鳥尊之御子也故天忍穗耳尊之御子瓊杵尊爲皇太神之正統稱十禪帝亦因受弟十位瓊杵尊之御禪也釋氏稱十善者牽強附會之說而非可取者乎然素盞鳥尊是天忍穗耳尊之皇親而瓊杵尊之祖神也故尊其所出奉勸請之今貴布禰社是也依之下上賀茂并貴布禰三所相比並古當社寄附庄園在列國特江州安曇河爲當社之神領四時一日無怠慢引網取魚奉備日別供祭奠肅々然於今有神領二千七百石比他社則不爲不多然社家氏人有數十家且其外從社役者分領之故祭奠纔存二十之一而已參詣人跡亦稀五月朔日足揃同五日競馬日良賤群集爲遊覽之場痛哉末社有數十座其內太田白鬚新宮山尾藤尾白太夫福德社若宮奈良社土師尾川尾片岡諏訪稻尾澤田梶田等尊崇勝他末社岩本社在下片岡社與澤田社之間蓋岩上構神籬故有此號乎橋本在三鳥居北土屋西神前有流水架石橋故名之神祇拾遺曰住吉玉津島和歌之兩神也業平實方常詣此二社祈和歌之秀逸世人

稱一人爲兩神化現

聖武帝三年七月遣使奉幣帛延曆三年六月遣近衛中將紀船守於賀茂大神奉幣以告遷都十一月遣紀船守授賀茂下上二社從二位依遷都也同四年十一月詔賀茂下上社充愛宕郡封各十戶天應元年四月令賀茂下上禰宜祝等把笏

祭四月中酉日也始於欽明帝昔有神夢祠官鄉民懸葵與桂俗稱兩蔓國祭四月中申日是始於

欽明帝臨時祭乃十一月下酉日也宇多帝潛龍時寬元年十一月二十一日有故而始行之

(補遺) 一說瓊々杵尊爲天孫而始降臨斯國故是爲地神之始奉勸請上賀茂是爲山城國一宮

齋院 古在大宮杜西南云或言在雲林院村又云常盤古御所地齋院之舊址也未知孰是延喜式曰凡天

皇卽位時定賀茂大神宮齋王簡內親王未嫁者卜定若無內親王者依世次簡諸王女卜定云

案嵯峨帝與平城帝爭帝位嵯峨帝爲祈願以皇女有智子始爲齋王至土御門院元久元

年繕子而絕凡三十一人也

宇喜田社 在中賀茂所謂西賀茂地也三社中第一素

蓋鳥尊第二安倍仲磨呂第三安倍晴明也今上賀茂有陰陽家安倍流是晴明之末裔乎

大宮 前賀茂條下所謂大宮本社也凡大賀茂社家氏人之子孫加首服日先詣此社凡勤神職人天兒屋根命之苗裔中臣之餘流也故先詣此社世誤爲大賀茂土人之氏神今洛西大宮通自此宮前通南之街路也故稱大宮通

稻荷社 在安居院筋違橋西南社前有川號有栖川故謂有栖川宮凡稱有栖川者在嵯峨并藤社邊一說斯社所勸請藤杜崇道盡敬天皇也故斯川亦號有栖川者乎

下賀茂社 謂糺宮或作只洲高野川與賀茂川於此社南合流故或稱河合神又稱御祖或謂所祭丹塗矢然實所祭大己貴神也續日本紀桓武帝延曆三年六月遣紀朝臣船守於賀茂大神社奉幣以告遷都十一月遣船守授下上賀茂從二位皇朝類苑曰日本國專奉神道山城州有賀茂明神託四五歲童子降言禍福事云々此處社司有數輩其內廣庭梨木兩家交爲社務或叙三位鴨脚家爲祝部其餘社職今多絕古從公文所之事者今

以公文有爲稱號者傳言歌人菊太夫鴨長明之末裔也氏人有數十人住紇杜中又岩倉與長谷之間中村亦氏人數家栖之每年四月初申日葵祭時依舊例自斯處獻葵蔓思古到斯邊悉神領之內乎今纔有五百石河合社南有住吉社故六月晦日社家出河邊建五十串修禊事脫茅輪是超越夏月暑穢之義也其以前自六月十九日至晦日稱會式社家各修神事斯間京師良賤來聚爲納涼之遊林間設店水上攜榻酒茶麵瓜類無不有之應人之需而假床賣食社東有御手洗井其水至清冷而溢流參詣人先臨斯水洗頭面或浸詬瓜又洗麵子而食之凡洛内外修穢河有七處是謂七瀬穢所謂河合一條土御門中御門大炊御門二條耳敏河是也又每年冬十月十日叡山有法華八講之式斯時山徒來斯處汲御手洗井水携歸充灑水之用社務束帶坐拜殿而待之云

(補遺) 鷓鴣草葺不合尊叔母玉依姬爲后而產神武帝是爲人王之始下賀茂社稱御祖神奉勸請玉依姬者也

御祖神社 在本社南乃建角身命也按延喜式曰賀茂

御祖社二座者乃本社也

比良木社 古在一乘寺村西北比良木社今移本社西則地主之神也

河合社 或稱小社宅神也上賀茂社司詣下賀茂社

日先拜斯社而後拜本社是爲恒例

久我社 在本社北

小鳥社 在河合社東

靈輿社 下上賀茂有此社

御蔭社 在高野下賀茂神始來現處而猶上賀茂稱御生所古每年四月午日發遣勅使有祭禮世人稱曰御蔭祭自是名御蔭社祭日祝部社務等乘羽車神官悉出或騎馬或徒步各勤供奉今無其儀然下上賀茂社新改造曰此社亦被造營之

落葉神社 在下小野號落葉大明神傳言嵯峨天皇之皇后也帝有藤后旅子又有橘后嘉智子按橘后

梅宮是也然則藤后旅子社乎旅子贈相國藤百川之女也

高野明神 在叡山麓高野村謂御靈社也按延喜式

曰山城國愛宕郡出雲高野神社一座蓋是天照太神也

一曰光仁天皇皇子早良親王也案舊記天照太神

併祭早良親王者乎 桓武天皇延暦十六年紀云始
早良與黃門侍郎藤種繼有郤八月帝如平安城
發齋宮公主赴勢州種繼爲守宮太子黨人射種
繼於燭下斃事覺十月太子廢將受弑太子遣使於
諸寺預修白業諸寺恐而拒之獨善珠納之謂使
者曰太子夙殃不盡今受嚴譴此度債之又幸也
乞勿結怨使者復命太子喜曰我聞師言則披忍
辱之衣將遂幽死其母惱逼然醫巫不効而終薨
同十七年遣親王姪參議五百枝于淡路國迎親王
骨收葬大和國八島陵又建社祭之凡八所御靈
亦早良親王爲隨一

赤山明神 在赤山或作石山元支那山名其山
有神在天曰輔星在地曰泰山府君慈覺大師
圓仁在唐習清凉山引聲念佛時神現形與覺約
來于日本覺歸朝日海波惡將漂羅刹國赤山明
神著囊笠持弓矢而護覺或現不動形或爲毘
沙門船遂無恙慈覺歸朝日建社于西坂本也此神
與山王約吾須守西麓神實素盞烏尊也
修學寺天王 在修學寺村則牛頭天王也三月五日
有祭禮一

八大天王 在一乘寺村三月五日有祭
天滿宮 在同村一

白川天皇 在北白川八月十三日有祭禮淨土寺

村慈照寺村共有天王社祭禮各同日

十禪師宮 在白川是瓊々杵尊也十禪之義見于上

賀茂之條下

山中明神 在北白川東

鹿谷天皇社 九月九日有祭禮

牛宮 在知恩寺西南杜中或謂野神守護牛之神也

神也

田中明神 在田中傳言下賀茂之末社也

齋場所 在吉田山始在神祇館樓門額有日本最上

日高日宮之字嵯峨天皇之宸翰也太元宮元本八

神殿額後土御門院之宸翰也又日本最上南大神宮

額并日本最上神祇齋場額及日本國中三千餘座天神

地祇八百萬神額共清水谷家之筆也此山有清水谷

堂上清水谷稱號起自住此處者乎外宮源宮宇

氣皇大神并內宮宗宮天照皇太神也外宮宗內宮源額

者妙善院從一位富子之筆也富子者日野贈左府勝光

公之兄右少辨政光之女而贈太政大臣義政公之室常

德院內府義尙公之母也。鎮魂八神殿亦在神祇館。神祇館者古在平安城宮內省。則今二條所司廳之西也。自茲移東山如意嶽。後土御門院文明十六年移吉田神樂岡。八神所謂高皇產靈尊神皇產靈尊魂留產靈尊生產靈尊足產靈尊大宮貴御膳津神事代主是也。此八柱則八州守護驗神八齋靈命八心府神故以爲皇帝鎮魂之神。吉田卜部家主裁萬事。凡二十二社之外所。在日本國之大社小社神職皆自此家下。令并官位等執奏之。中臣卜部元同氏而天兒屋根命苗裔也。天兒屋根尊奉天照太神勅輔佐皇孫治豐葦原於是以三種靈寶傳皇孫是爲王道之元。又以神籬正印傳天兒屋根命。故是爲神道之祖。天兒屋根命十二世孫雷大臣命仲哀天皇時賜卜部姓。十八世孫常盤大連改卜部姓爲中臣姓。至二十一世大織冠改中臣爲藤原氏。大織冠爲朝家將誅入鹿時思事有難以神道傳其從弟右大臣清丸清丸意美九子是爲大中臣清丸四世曰平丸又改姓卜部依之吉田家爲神道長吉田春日社。在神樂岡。此社與南都春日社爲同體貞觀中中納言藤原山陰卿建焉。一條院永延元

年始奉官幣。奈良京則春日社長岡京則大原野平安城則吉田社皆近帝闕而守皇祚。御堂關白道長公造法成寺崇吉田社以擬興福寺之有春日社。神樂岡明神在春日社東南。延喜式曰霹靂神祭三座坐山城國愛宕郡神樂岡西北卜部家說曰昔神樂岡與高野山爲一雷神壁開爲二故吉田地主雷神也木瓜大明神在春日社西南一說神樂岡地主神也案祇園神牛頭天王始現瓜生山此地去瓜生山不遠木瓜明神則牛頭天王乎八月二十四日有祭西天王社在木瓜大明神傍六月十五日有祭十日謂御出預南北聖護院兩村中間地以杉葉搆假宮安神輿於斯前獻供物然又入本山此旅所地稱官位記不知其謂也中世正月十五日禁裏爆竹所爆御吉書之灰必棄斯處是因東方生氣之方也故或謂年德記。熊野權現。在東山若王子相傳崇德天皇甚崇熊野勸請那智宮於此處爾後等持院尊氏公又敬斯神以大僧正良海爲留守職若一王子者天照太神也兩尊所生第一御子故曰苦一王子乃熊野新宮也浮屠誤爲施無畏大士也。

東天王社 在岡崎九月十六日有祭禮。鉢七本、各

神輿、各捧之。行是謂祭。鉢其内一本劍鐔上泥塑大

鷹施彩置之。是謂大鷹鉢。村人稱神寶。而崇之。

劍鐔傍彫刻感神院之字。元感神院之神寶乎。

大將軍宮 在同處。古京城四方有大將軍宮。是東方

之宮。而是祭星者也。一說中古爭亂時王城四方建蜀

關羽廟。而祭之。羽以爲猛將也。

熊野權現 在聖護院杜。弘仁年中役行者第十世日圓

和尚勸請此處。每年三月十五日有祭禮。斯杜并村

悉聖護院門主之院領也。白河院時寬治年中園城寺

僧增譽僧正住此處。以來號聖護院。

稻荷社 在同所。村人修稻荷講。

崇德天皇社 舊記建崇德天皇社於大炊通東。慰尊

靈云。今大炊通東聖護院杜西北田畝民間有稱崇德

之處。古在斯地也。必矣。嗚呼惜哉。

大田明神 上賀茂大田明神也。古在聖護院村西。今社

絕一堆土殘其邊之田地有被壇等之名。

綾戶廟 在南禪寺中。則爲鎮守。相傳此地爲龜

山法皇離宮。于時飼牛人居綾戶小路。常釀醇

酒。獻之帝愛之。死後有靈土人祠焉。稱光院應

永年中伯英和尚改造之。廟貌巍然後伯英南禪寺大

寧院之住而入唐之僧也。

天王社 在下粟田九月十五日有神事。鉢十七本、各

捧之。行每二人一渡。南禪寺門外板橋。北方行鳥居

小路。其橋板甚狹小。捧鉢者多顛倒或落鉢。或自溺。

河水。見者大笑。凡自三條北行。黑谷門前。道謂鳥

居小路。相當此天王社鳥居之前。故也。

惠美須宮 在下粟田青蓮院門主之境內。相傳傳教大

師之所作也。始在下粟田口神明社山。

梅宮 在下粟田尊勝院之境內。也是謂東梅宮。始

在白川橋南人家之後園。近世移斯處。

神明社 在日岡村下粟田惠美須谷三代實錄曰。清

和天皇詔管原船津。勸請大神宮於粟田山。則是社

也。爾後元亨建武兵亂。此社亦罹兵火。悉爲鳥有。寬

永年中伊勢人野呂左衛門尉源宗光蟄居此下。一旦

得神託。再興之。相傳斯處號日山。故麓謂日岡。

也。一說五臣社也。一曰天兒屋根命。二曰太玉命。三曰串

女命。四曰鉏女命。五曰玉屋命。也是天孫降臨時陪從之

臣也。祇園社 在東山八坂鄉號感神院。二十二社註式曰。

牛頭天王始垂_ニ跡於播磨國明石浦_ニ而移_ニ廣峯_ニ其後移_ニ東山瓜生山_ニ北白川東光寺其跡也 清和天皇貞觀十一年移_ニ感神院_ニ昭宣公藤基經公尊_ニ崇斯社_ニ新造_ニ營之_ニ其形模表_ニ紫宸殿_ニ故後世雖_ニ改造_ニ依_ニ其樣_ニ今考_ニ之宮殿雖_ニ有_ニ大小之異_ニ柱數寸尺粗與_ニ紫宸殿_ニ相同世以_ニ昭宣公之殿_ニ爲_ニ此神社_ニ者誤也 後朱雀院長曆三年八月定爲_ニ二十二社之內_ニ所謂三座第一牛頭天王或謂_ニ感神大王_ニ又稱_ニ武塔神_ニ是則素盞烏尊也第二東八王子也第三西少將井也神代卷曰天照太神乃索_ニ取素盞烏尊十握劍_ニ打折爲_ニ三段_ニ濯_ニ於天真名井_ニ齧然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神號曰_ニ田心姬_ニ次湍津姬次市杵島姬凡三女矣既而素盞烏尊乞_ニ取天照太神髻鬘及腕所_ニ纏八坂瓊之五百箇御統_ニ濯_ニ於天真名井_ニ齧然咀嚼而吹棄噴之氣狹霧所生神號曰_ニ正哉吾勝勝速日天忍骨尊_ニ次天穗日命次天津彥根命次活津彥根尊次熊野樟日命凡三女五男合八王子也西少將井則稻田姬也神代卷曰素盞烏尊自_ニ天降_ニ到出雲國簸之川上_ニ時間_ニ川上有_ニ啼哭之聲_ニ尋_ニ聲覓往者有_ニ一老公與_ニ老婆_ニ中間置_ニ一少女_ニ撫而哭之尊問曰汝等誰也何爲哭之如

此耶對曰吾國神也我號_ニ脚摩乳_ニ我妻號_ニ手摩乳_ニ此童女是我兒也號_ニ奇稻田姬_ニ所_ニ以哭_ニ者往時吾有_ニ八少女_ニ每年爲_ニ八岐大蛇_ニ所_ニ吞_ニ今此少女且欲_ニ被_ニ吞_ニ無_ニ所_ニ脫免_ニ故以哀傷尊勅曰若然者汝當_ニ以女奉_ニ吾耶對曰隨_ニ勅_ニ於_ニ茲_ニ於尊立化_ニ奇稻田姬_ニ爲_ニ湯津爪櫛_ニ而挿_ニ於御髻_ニ乃使_ニ脚摩乳手摩乳_ニ釀_ニ八醞酒_ニ并作_ニ假皮_ニ八間_ニ各置_ニ一口槽_ニ而盛_ニ酒以待_ニ之至_ニ期果有_ニ大蛇_ニ頭尾各有_ニ八岐_ニ眼如_ニ赤酸醬_ニ松栢生_ニ背上_ニ而蔓_ニ延於八丘八谷之間_ニ及_ニ至_ニ得_ニ酒頭各一槽飲醉而睡尊乃拔_ニ所_ニ帶十握劍_ニ寸々斬_ニ其蛇_ニ至_ニ尾劍及少缺故割_ニ裂其尾_ニ視_ニ之中有_ニ一劍_ニ此所謂草薙劍也乃相與造合生_ニ兒則大己貴命也六月祭禮時稻田姬神與旅所在_ニ少將井町_ニ故稱_ニ少將井_ニ第二第三神輿始在_ニ烏丸四條南大政所地_ニ少將井尼後拾遺集作者之隨_ニ一也園有_ニ井神與遊行日偶置_ニ神輿於其上_ニ自_ニ茲_ニ爲_ニ恒例_ニ赴_ニ又神泉苑_ニ則赴_ニ南海_ニ之義乎 朱雀院承平五年六月十三日官符應_ニ以_ニ觀慶寺_ニ爲_ニ定額寺_ニ則名_ニ祇園寺_ニ然則祇園寺天台之別院而與_ニ感神院社_ニ異也觀慶寺今在_ニ感神院內_ニ山門慈悲記曰第六十四代 圓融院天

祿三年以祇園爲日吉末社同天延二年五月下旬有神託鎮座東洞院高辻助正宅是祭禮之始也祭日於四條京極齋場所供粟飯是蘇民之舊例也旅所始在壬生邊近世爲丸五條北今謂大政所之地於今有小社豐臣秀吉公令移三社旅所於四條京極今處祭寬喜三年始用六月七日所記祭禮次第儀式之版後圓融院之宸翰而祭日納此板於錦袋黃衣禰宜携之從行六月七日朝山鉾渡行凡所飾之山并鉾車牽或肩擔是謂渡同日午後三社神與寄本社簾外祇園執行寶壽院遷神於與中而遊行四條京極旅所於是梅坊遷神於旅所假宮同十四日朝所飾之山鉾行午後梅坊於旅所遷神於與中而入本山於茲執行又遷神於本社空輿先靠神前凡五月晦日三基中第三神與一基入夜出四條宮川邊則返本山二基神與共同置拜殿古第三神與於河邊灌氷於空輿洗塵埃今雖無其儀謂神輿洗七日十四日祭儀畢十八日夜又如五月晦日之式是亦謂神輿洗而後納三基神與於神輿屋祇園之神領有百三十石圓融院天延年中以祇園令屬山門青蓮院門主爲寺務石華

表感神院之額照高院門主道晃法親王之所筆也

蘇民將來社祇園第一攝社也傳言素盞烏尊赴南海

時日暮餓宿於巨且某一性慳貪而不聽之其兄蘇民性質慈仁則迎尊而能待之然其家貧窶也故粟其爲

座而饗粟飯尊大悅爾後歷八年來蘇民家將報其恩教蘇民作芽輪今歲天下大疫蘇民一

家各懸芽輪依之免其災自茲後每時疫流行一人々懸芽輪謂斯家蘇民之裔而蘇民今將來依之

免災厄云

後見殿是亦攝社而所祭大己貴命也

與官受福神社同上在本城南拜殿東南傳言所

祭日月也古兩社而今一社之中祭二座者也

美御前三座同上在本殿東社家說云素盞烏尊所

產之三女神也

氣毒神社同上在同處按八岐蛇之所化乎

牛王寺殿同上在祇園南下河原祇園神始降臨之地也故建社凡有所願之人先詣祇園社然後詣

斯社如此千度は謂千度參然則所祈如願云

日吉社在祇園社西南隅古山門有嗽訴之事則大

衆各昇日吉神輿來棄置禁門而訴之是謂神輿

振倭俗等閑棄之謂振棄一時大衆棄置神與於斯處遂建社祭之世謂棄山王

疫伏社 在祇園西樓門西北傳言祈此神則免時疫之疾病故謂疫鬼降伏之神也按是亦牛頭天王乎

一說元山伏宮而所祭淨藏貴所也故畫山伏所持法螺等之物於板面代畫馬而揭社頭到今有偶殘者疫伏與山伏倭語相近故誤之者乎

祇園社 在四御京極御旅町六月七日祭禮日三基神與於茲處備供物

祇園神旅所 則齋場所也在京極四條辻南北兩所凡每年六月七日午後靠三基神與於祇園本社各位三座前執行寶壽院侍神前奏幣唱祝詞還神於輿中每一座遷畢時昇神與人大呼三聲於茲各勇進昇出之執行亦乘腰輿供奉神事到四條御旅所假宮三家社僧中梅坊預候假宮前於茲又靠牛頭天王并八王子兩神與於東假宮前梅坊遷輿中之神於假宮又遷一基神與少將井之神於南假宮其式與本山遷宮同唯有執行與梅坊之異而已然後置天王并八王子之空輿於北御輿屋置少將井之空輿於南御輿屋如此則神存假宮然近

世社司獻供物并燈火於空輿而銜之食米錢夫神與元神之爲所遷則敬之可也獻供物於空輿則何有之乎參詣兒女不知此義先拜假宮畢遂拜空輿也

官者殿 在京極四條辻或謂冠者殿俗稱誓文返神而謂救僞誓之罪者也凡商賈鬻物時或亂真僞又二價直必盟神明而示無僞然元多不實之事故畏其罪十一月二十日各詣此社請免其罪未知名斯社祭何神俗誤謂土佐房昌俊也昌俊欺義經誓不爲追討使忽受神罰戮死不旋踵依之爲救僞誓之罪者乎

惡王子社 在同處是亦祇園之攝社也泉涌寺中來迎院知斯社事

夏禹王廟 相傳人王八十五代後堀河院安貞二年大風雨鴨河洪水泛濫使勢多判官爲兼防河水爲兼茫然失所計于時異僧忽然來告爲兼曰欲防此水則於鴨川東岸南建夏禹廟北建辨財天社須祭之言終異僧入寺不見寺今日疫地藏堂也其時在四條河原東田間故世謂畔地藏然則異僧地藏之現身乎爲兼爲奇異之思於茲建兩社而

祈之水忽乾夏禹廟今不知其處或說四條南鴨河西中島至近世有稱晴明塚者此邊有夏禹廟也未_レ知然否辨財天社始在大和橋北今絕斯堤上未_レ有家居時有大苦棟樹則此處也爾後民家並檐苦棟樹亦爲鳥有然到今斯處謂辨財天町神明社在地藏堂西四條辻則伊勢太神宮也

惠美須宮 在建仁寺門前凡稱惠美須者是蛭兒命也命住西宮海邊故以釣漁爲樂故斯社多在濱漁人尊崇之漁人數日舉網不得魚則必祈斯神若得魚之願成則裁縫衣服使著惠美須像又謂惠美須者福神也凡農工商共祭之商賈特崇之每年十月二十日家家祭之此宮祭亦此日也說建仁寺千光國師榮西歸唐時船中有暴風之難偶有蛭兒像隨波濤而漂者榮西收之於船中祭之則風止波靜而船無恙榮西歸寺則建社而祭之今惠美須宮是也到今赴西海人詣斯社而祈無風波之難云凡倭俗惠美須大黑天爲一雙民家戶々作小像安置棚頭祭之是謂惠美須棚凡白外所入家內之金銀絹帛并酒茶肴核之類先供斯棚言又祈得之也故與福神惠美須併祭之

者乎按大黑天者軍神也出佛祖通載二十二卷台家說曰傳教大師逢大黑天於東坂本短身黑面手持木槌足蹈米囊專掌壽福一々有問答自爾世人祭之案本邦所謂大黑者葛刺天而蓋別神也

繁昌宮 在三條北高辻元所祭針才女而實辨財天也針才女與繁昌倭語相近依之謬傳者也然今却就繁昌之字而男女參詣祈子孫之繁榮故社司之取米錢也倍祭針才女時是轉禍而爲福者乎凡本朝神佛之事謬傳多因其誤却爲實者不爲少矣一說昔有出雲前司某者住斯宮地前司有一女死時將葬爲戶山然其屍不敢動不得已而直葬其處然後建社祭之云豐臣秀吉公移斯社於東山佐女牛八幡社側然甚爲崇依之又移斯處

神明社 在綾小路高倉西源三位賴政奉詔而射怪鳥此時祈斯社願成後奉納數品珍寶今存甲冑并弓矢依之世調賴政神明

大原社 在四條綾小路元在丹波國桑田郡而所祭伊弉冊尊也爾後此處亦勸請之

惠美須宮 在四條室町一茶人武野因幡守仲村入道紹

鷗住_ニ斯南隣_ニ構_ニ茶亭_ニ饗_ニ賓客_ニ依_レ在_ニ惠美須宮之隣_ニ而稱_ニ大黑菴_ニ一世依_ニ惠美須大黑天爲_ニ一雙_ニ也

十八所權現社 平等寺因幡堂之鎮守也所謂天照太神

八幡春日賀茂祇園愛宕松尾熊野北野日吉白山住吉

摩利支天妙音辨財太白鬘多賀平野蛭子是也

夕顏社 在_ニ高倉通五條北_ニ按_ニ源氏物語_ニ夕顏女者中

將某女也美而艷然薄命爲_ニ頭中將妾_ニ無_レ幾而又離

別爾後光君潛通_レ焉一夕誘_レ之入_ニ六條院_ニ爲_ニ邪鬼_ニ

所_レ魘而卒死則瘞_ニ東山愛宕寺_ニ爾後好事者建_ニ小祠_ニ寓_ニ其名_ニ今稱_レ有_レ愈_レ瘡之盟_ニ按其身被_ニ鬼祟_ニ

而死故謂_レ治_ニ邪氣_ニ者乎源氏物語多雖_レ爲_ニ寓言_ニ今依_レ有_ニ斯社_ニ而存_ニ于茲_ニ

神明社 在_ニ富小路五條北_ニ

八幡宮 在_ニ五條橋西南_ニ凡伏見往來之舟舳聚_ニ斯所_ニ

自_レ茲浜_ニ二條樵木町_ニ故世稱_ニ船八幡_ニ

鹽竈明神 在_ニ五條南上德寺中_ニ相傳左大臣源融公斯

邊構_ニ河原院_ニ而於_ニ河邊_ニ被_レ摸_ニ陸奥千賀鹽竈之境

地_ニ日令_ニ人夫_ニ自_ニ攝津難波浦_ニ運_ニ漕潮汐_ニ燒_レ之

爲_ニ鹽被_レ催_ニ遊興_ニ其後建_ニ社祭之一說河原院在_ニ今

東本願寺新屋敷地_ニ今掘_レ地則鹽竈所_ニ用之具偶出

市姬明神社 在_ニ鹽竈明神東南御影堂南_ニ俗傳素盞鳥

尊之婦也有_ニ子二人_ニ其一大年神其二倉稻御魄神也

有_レ守_ニ護賣買事_ニ之盟_ニ桓武天皇延曆十三年十月

二十一日移_ニ都於平安城_ニ時勸_ニ請斯神於七條堀河_ニ

會日用_ニ牛日_ニ近世又移_ニ今處_ニ云一說市姬明神今

見_ニ其神體_ニ則鬼子母神乎

菅大臣社 在_ニ四條南綾小路西洞院東_ニ南北隔_レ路有_ニ

是善公之宅地_ニ其內北有_ニ菅神社_ニ是則菅神降誕之

地也故建_ニ社而祭_レ之古有_ニ神領二百石_ニ社僧五坊今

金剛院并常喜院兩院存各真言宗也然曼殊院門主

知_ニ斯社事_ニ案古是善公之宅地北限_ニ綾小路_ニ南限_ニ

高辻_ニ東至_ニ東洞院_ニ西至_ニ西洞院_ニ然則南北宅地古

一處而今中間道後世爲_ニ往來之路_ニ者乎一說斯地文

子之宅地而菅神始遷座之處也俗稱_ニ阿米神_ニ

住吉社 在_ニ油小路五條北_ニ傳言藤俊成卿之所_ニ勸請_ニ

也凡本朝以_ニ玉津島明神住吉明神柿本人丸_ニ爲_ニ和

歌道守護之_ニ三神_ニ住吉新玉津島兩社今現在_ニ洛中_ニ

人丸社亦須_レ有_レ之今不_レ知_レ爲_ニ何處_ニ街衢處々小社

中思須_レ有_ニ人丸社_ニ惜哉一說人丸社始在_ニ本國寺

地_ニ移_ニ斯寺_ニ時移_ニ八坂卿_ニ今人丸塚是也

五條天神 在_二五條松原通西洞院西_一所祭_二大己貴

命_一也命與_二少彥名命_一經_二營天下_一復爲_二蒼生及畜
產_一定_二其療病之方_一又爲_レ攘_二鳥獸昆蟲之災異_一定_二
其禁厭之法_一百姓咸蒙_二恩賴_一每年節分諸人詣_二斯
社_一買_二來白_一并白餅_一用_レ之則除_二疾病_一云蓋神代遺
風乎相傳賣_二朮餅_一人自_レ古所司之家隸勤_レ之近世不
然社家自賣_レ之

新玉津島 在_二五條松原通室町東_一此邊古爲_二藤俊成

卿之宅地_一因稱_二五條三位_一家內勸_二請紀州和歌浦玉
津島明神_一而號_二新玉津島_一神是_二允恭天皇之后衣
通姬而椎淳毛二岐皇第二之女也_一詠_二我春子之可來
宵也之歌_一自_レ是爲_二倭歌之神_一配_二住吉明神并柿本
人丸_一而稱_二倭歌之三神_一爾後等持院尊氏卿依_レ有_二
靈夢之告_一而再_二興之_一則以_二經賢法師_一爲_二別當職_一
每年十一月十三日祭祀于_レ今不絕

俊成社 在_二新玉津島東人家後園_一案自_二新玉津島_一

至_二斯處_一悉藤俊成卿之宅地乎

道祖神社 在_二油小路七條南不動堂前_一

(補遺)布留伊社 在_二七條大宮_一武人騎_レ馬過_二斯社_一

則必爲_レ祟云故爲_レ士者下_レ馬而過案古武將之社乎

惜哉不_レ知_二其實_一也

若宮八幡 始在_二佐目牛通堀河邊_一故世稱_二佐目牛八

幡_一社司佐々氏人守_二斯社_一或稱_二佐々八幡_一相傳始
其處八幡太郎義家之宅地也 後冷泉院天喜元年依

勅勸_二請之_一伊豫守源賴義奉_二旨卜部兼親奉行是
號_二六條新八幡_一源賴義征_二東奧_一日祈_二八幡神_一于

時社前有_二大惠木_一賴義誓曰今回有_レ得_二勝利_一此惠
木實落_レ地忽須_レ生_二萌蘖_一一夜中果生_二蘖賴義悅_レ之

遂大勝爾後聖護院門主道澄法親王爲_二大佛殿別當_一
時斯社司仕_二道澄_一道澄使_レ遷_二斯社於大佛殿北五條

橋東_一其跡爲_二西本願寺_一古惠木今在_二門主厨門之
內_一

地主權現 在_二清水寺_一是則地主之神而爲_二鎮守_一實大

己貴命也古旅所在_二白山通五條北_一今石地藏之所
存也年々衰頹四月九日祭日暫居_二神輿於經書堂

前_一是表_二旅所_一之微意也

新日吉社 在_二阿彌陀峯麓_一後白河院永曆元年十月

十六日移_二熊野日吉於東山新宮_一二條院應保二年

四月晦日始行_二新日吉祭_一

新熊野社 在_二新熊野村_一後白河法皇甚尊_二崇紀州

熊野權現^一有^二三十三度御幸^一爾後厭^二行程之迂遠^一永曆年中勸^二請此地^一則以^二那智土沙^一築^二斯地^一故號^二新熊野^一于^レ今掘^レ地則紀州海濱所^レ在青白石出今社聖護院先達勝仙院晃玄僧正再^二興之^一新熊野權現額照高院道晃法親王之筆也凡勝仙院住僧代々知^二斯社事^一

劔宮 在^二新熊野南^一傳言所^レ祭^二天叢雲劔^一也

(自^レ是南限^二二條^一至^二北山^一)

御所八幡 在^二二條南高倉東^一古斯處等持院尊氏公之第宅地也康永三年尊氏公使^二卜部兼豐^一家內勸^二請八幡宮^一猶^レ藤氏攝關家內有^二春日社^一曾建武年中尊氏挑^二軍於新田義貞^一尊氏祈^二斯神^一時有^二靈鳩飛翔之異^一於^レ茲義貞敗死云爾後爲^二寺號^一等持寺居^二三十利之第一位^一直以^二八幡宮^一爲^二鎮守^一今寺絕凡倭俗高貴第宅曰^二御所^一故到^レ今稱^二御所八幡^一

白山權現 在^二白山通押小路南人家後園^一斯處稱^二白山町^一此町之上下謂^二白山通^一倭俗縱橫直路曰^レ通

荒神社 在^二姊小路通町口西^一

神明宮 在^二同處^一與^二荒神社^一隔^二南北^一

相王社^{ヲウソウ} 在^二二條北室町西^一日吉之末社也俗兒童出遊

而不^レ知^二其所^一歸謂^二迷子^一相王與^二相逢^一倭語同故尋^二迷子^一之人先始^レ自^二此處^一祝^二前程相逢之義^一也辨財天^{ハナハタ} 在^二油小路近衛通北^一近衛通今出水通也相傳勸^二請箕尾辨財天^一者也

精大明神社 是蹴鞠之守護神而古在^二中御門滋野井邊^一然則今佐和羅木町西也今不^レ知^二其處^一

下御靈社 在^二京極大炊御門北^一斯社始在^二近衛通新町^一上御靈在^二京極西出雲寺之北^一上下御靈社每年七月十八日御出八月十八日有^レ祭神興一基遊行八所御靈所謂古備靈崇道天皇伊豫親王藤太夫橘逸勢文屋宮田丸藤原廣嗣火雷神是也世謂^二火雷神爲^一菅神靈^一者大誤也傳言御靈八所內上四所 桓武天皇時勸^二請之^一下四所 仁明天皇時勸^二請之^一云々上出雲寺者傳教大師之所^レ創而後爲^二上御靈之神宮寺^一今寺絕其地爲^二民家^一屬^二相國寺中慈照院^一出雲寺事見^二于源氏物語及毘沙門堂之舊記等^一古在^二毘沙門堂之地^一然則今洛北塔壇也一說塔壇非^二毘沙門堂之塔^一古相國寺塔之所^レ有也未^レ知^二何是^一也下出雲寺者又爲^二下御靈之神宮寺^一也今兩寺共絕

七面明神社 在京極妙傳寺一 是甲斐國身延山久遠寺守護神而日蓮上人於彼地而所勸請之也今洛下日蓮宗之寺院亦間勸請之相傳七面明神女神也未知爲何神一說龍女也

清荒神 在京神河原西一此社元在攝州清澄地而後勸請此所故謂清荒神又稱三寶荒神又謂竈神所祭興津彥興津姬中御神也婦人特尊崇之社僧所住號常施寺

稻荷社 在京極真如堂中一相傳真如堂住僧某與稻荷山神宮寺上人增圓結交相親斯僧甚崇稻荷社每日參詣一日謂上人曰多年詣斯社今已老矣往來不任心願授吒祇尼天之像乎上人遂附與之僧大悅還寺名宇賀神晨昏奉神供設燈燭爾來世人實爲稻荷神參詣不絕跡

妙見菩薩社 在京極今出川北立本寺一是亦日蓮宗寺院多有之

幸神社 在京極西今出川北幸神町一元所祭道祖神也斯神又稱幸神實猿田彥也此社桓武天皇延曆年中所勸請也今京極通古稱出雲路其內北稱上出雲路一南稱下出雲寺一猶謂上寺町下寺

町一者也故世斯社謂上出雲寺道祖神古出雲路在南北爾後上下共稱出雲路

山井神社 古在一條東洞院一見千顯註密勘一今不知其處也

福大明神社 始在堀河西一條南爾後移京極今九條殿宅地曾九條殿造營時墮斯社合祭神於家內春日社傍始所有神像有故今在本國寺中勸持院著聞集第七曰昔日知足院忠實公有所願于時有驗僧大權房修大法二七日夜忠實公夢一美女過枕邊其髮美而長將執其髮末而挽留之則髮斷不得留寢而見之則狐尾在側也以是告大權房大權房曰是吉夢也所願須成就其日及午時其願望應所期於茲入其尾於宮內納妙音院之護法殿云爾後冷泉東洞院建社而祭之號福大明神近世是稱紀貫之社者大誤也

(補遺) 世謂所祭紀貫之一也然是謬傳而實所祭

宇賀神也故稱福大明神始在京極今九條殿之地斯處造營時移斯社於京極北市中子時甚爲崇於茲遷二條京極日蓮宗要法寺中慧光院所併祭之斯社本願法興院藤忠實公像遷日蓮宗五

條堀河本國寺中勸持院其社于今存

安倍晴明社 在二條北葭屋町一

荒神宮 在二一條北大宮西一

神宮 在二柳原一古伊勢祭主之宅地而遙拜處也則有

兩皇太神宮傍有_二神樹_一老幹數株不知_レ歷_二幾歲_一

每月朔日十一日二十一日三日祭主供_二御酒於斯

社凡古每_二諸社_一一月三十日每日供_二御膳或御酒

至_二中世_一省_レ之上中下旬三十箇日以_二其首日_一供_レ之

准_二三十箇日_一是謂_二三日_一或稱_二旬日_一

拾山王宮 在_二同處_一古山門有_二嗽訴_一則大衆昇_二日吉

神輿_二寄_二禁裏_一是謂_二神輿振_一其事成則昇_レ之歸若不

如_レ願則棄_二神輿_一而歸_二山門_一於_レ茲建_レ社納_二神輿

古所々有_レ之今所_レ存者斯處與_二祇園_一而已也

京極八幡 在_二同所_一以_レ丹塗_二宮殿_一故世謂_二赤八幡

傳言勝定院義持公時凶徒蜂起據_二西陣_一義持公在_二

東京_一于_レ時白幡飛_二楊社頭_一遂落_二義持公陣中_一公大

悅拜_レ之遂因_二神助_一敵軍立敗走於_レ茲命_二結城某

再_二與_一之應仁年中爲_二兵火_一被_レ燒義尙公命_二齋藤上

野介飯尾兵衛大夫_一修_二造_一之

上御靈社 在_二京極北西_一詳_二于御靈條下_一祭禮亦同

五所八幡 在_二洛陽京極北田野中_一五所謂筑前國大

分宮肥前國千栗宮肥後國藤崎宮薩摩國新田宮大隅

國正八幡以上謂_二五所別宮_一神祇拾遺曰件五座在_二

外國_一不_レ便_二參詣_一依_レ之 後柏原院大永年中移_二山

城國小山庄_一

明神社 在_二洛北松崎_一未_レ知_二爲_二何明神_一也

八幡宮 在_二幡枝_一相傳今社小松內府平重盛公之所

建_レ也有_二神領少許_一

石座大明神 在_二北石藏_一相傳天神所_レ籠之窟戶也

八幡宮 在_二長谷花園兩處_一各八月十五日有_二祭禮

神明宮 在_二市原_一

辨財天社 在_二同處_一

明神社 在_二野中_一未_レ詳_二祭_二何神_一也

山神 在_二瀨_一凡稱_二山神_一者處々有_レ之多是祭_二大山

祇神_一者乎三月二十五日有_二祭

鑑取宮 在_二瀨北_一

石上社 在_二鞍馬_一

朝明神 在_二同所_一一作_二由木_一社家說曰斯神典_二蒼生

之罪_一又時疫流行日懸_二看督長所_一負之勒於神戶_一以

鎮_二時疫_一本朝風俗勅勸家懸_二勒於家門_一禁_二銅人之

出入一故懸^レ社亦謂^レ神之意也倭俗忤^二主上之旨^一謂^レ蒙^二勅勘^一凡違^二君父之命^一而竊居謂^レ蒙^二勘當^一一說此社大己貴命少彥名之二神也

細川社 在^二鞍馬僧正谷^一傳言細川政元修^二外法^一得^二魔法^一故斯處祭^レ之^二

貴布禰社 在^二鞍馬山西北^一所^レ祭之神二座第一高麗^{タカラキ}

神第二別雷神也神代卷曰伊弉諾尊斬^二軻遇突智^一爲^二三段^一其一段爲^二高麗水德神也^一第二別雷神第三與御前也是爲^二守護安穩^一所^レ祭而地主神也然與御

前社并船守社等社家秘而不^レ言^レ之攝社有^二奧深社^一吸葛社私市社^{キヤイ}二十二社註疏曰城州貴船社船玉命

與^二高麗^一也保延六年七月十日奉^レ授^二正一位^一弘仁九年五月爲^二大社^一一說本社國常立尊也又言所^レ祭

眞一元水之靈^二而號^二豐氣大神^一也畢竟豐受神號而其餘悉攝社也傳言人王百六代

後奈良院時京師小兒憂^二咳逆^一而死亡者甚多仍令^レ卜^レ之爲^二貴船神之祟^一也於^二茲弘治二年重九日令^レ追^レ疫今九月九日兒

童相聚昇^二小神輿^一稱^二貴船神輿狹小輿^一振^二市中^一者斯遺意也

牛頭天王社 在^二貴布禰西北下黑田村^一

靜原社 在^二鞍馬東南^一上賀茂之末社也上賀茂四月初酉日祭所^レ用之葵自^二此處^一採來也

江文大明神 在^二靜原與^二大原草尾^一之間所^レ祭之神一座倉稻魂命而伊弉諾尊之御子也

勝手明神 在^二大原勝林院中^一自^二古此寺僧精^二聲明^一世稱^二大原聲明^一傳言此寺僧三月十五日詣^二吉野^一

見^二勝手明神祭禮^一於^二茲神輿踟躕而不^レ進神人怪^レ之^二手^一時有^二神託^一不^レ聞^二此之僧聲明^一則不^レ得^レ行於^二茲唱^一之神輿忽進行自^レ茲勸^二請斯處^一云

天神宮 在^二八瀬^一相傳管神少年日登^二比叡山^一入^二法性坊僧正尊意之室^一舉^二文書^一往來之次憩^二斯村^一因

建^二社而祭^一之四月中辰日有^レ祭日吉社 在^二同處^一每年四月中申日日吉祭禮日八瀬村

人強建者各聚^二地主神天神宮^一拜^二當社^一爾後超^二山行^一東坂本^二昇^二三御殿神輿^一

聖御前 在^二同處^一則日吉聖眞子而正哉吾勝尊也神代卷云素盞鳥尊^二取天照太神髮鬘及腕所^一纏八坂瓊

之五百箇御統^二濯^二於天真名井^一齧然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所^レ生神號^二正哉勝々速日天忍穗耳尊^一

源大夫宮 在^二同處南^一曾日本武尊遷^二尾張國^一於^二同

國吾湯市村^{アユチ}建^レ社納^二草薙劍^一今尾州熱田宮是也於
茲娶^二尾張連等遠祖女宮寶姬命^一淹留跡^レ月子^レ時
宮寶姬之父尾張連某死則建^レ社而祭^レ之號^二源大夫
宮^一則熱田之末社也未^レ知何時勸^二請茲處^一

惟喬宮 在^二八瀨北戸寺東叡山麓^一斯處稱^二小野^一土人
或謂^二一本杉^一惟喬親王隱淪之地而在原業平訪來處
乎親王始閑^二居山崎南水無瀨^一吟^レ詩詠^レ歌以自遣每
歲賞^二櫻花^一一日遊^二河州交野奈疑佐院^一玩^二櫻花^一在
原業平從^レ行賦^二和歌^一惟喬宮自^レ茲到^二天河^一而被
設^レ宴業平紀有常等皆詠^レ歌爾後隱淪之志益深遂
隱^二小野^一時人稱^二小野宮^一貞觀五年二月薨壽二十六
貴布禰社 在^二正傳寺村^一安樂花著^二上野上下御前社^一
祭禮也

天神社 在^二同處^一相傳上野今所^レ有之淨土宗光念寺
地元管神別莊也曾建^二此寺^一時門前勸^二請此社^一云

今宮 在^二紫野^一一條院正曆五年又長保五年世上不
靜戶々患疫依^レ之建^二疫神社於船岡山北^一號^二今宮^一
行^二御靈會^一藤原長能詠^二和歌^一曰志呂多衣能登豫美
提久羅乎登利茂知底伊波比會武留牟羅佐岐廻野爾
云々每年五月十五日有^レ祭依^二舊例^一而從^二京兆尹^一

寄^二米五石^一爲^二祭禮之資料^一一基神與上鳳羽翼之下
有^二延曆四年五月九日之字^一又傍有^二作者之名^一一說
古山門有^二嗽訴^一則寄^二日吉神與於禁門^一其事不^レ如
願則棄^二置神與^一而歸是謂^二神與振^一倭俗以^二振字^一
爲^二棄置之義^一或作^二振棄^一此神與亦自^二日吉社^一所^レ
棄置^二之物而以^レ是爲^二當社之神與^一云

大將軍宮 在^二大德寺門前^一凡斯宮在^二不安城之四方^一
是則北方之宮而是祭^レ星者也一說非^二星而祭^二蜀關
羽^一者也

今宮旅所 在^二二股河西下松^一則齋場所也

惟喬宮 在^二二股河下松西^一傳言惟喬惟仁兩親王爭^二
繼嗣^一時以^二相撲之勝負^一決^レ之故角觝徒專崇^二斯社^一
誠可^レ笑凡定^レ儲天下之大事也輕以^二角力^一非^二可^レ決
者^一且案^二續日本紀^一承和十三年紀名虎卒此時惟仁
親王未^レ誕豈有^二名虎善雄角觝之事^一乎惟高 文德
帝第一皇子也皇嗣非^二可^レ議者^一然母靜子武衛次將
紀名虎之女也惟仁第四皇子而母公忠仁公之女也
因^二母之貴而爲^二皇太子^一者也惟喬遂閑^二居水無瀨
邊^一吟^二詠詩歌^一而自遣貞觀十年薨^レ髮名^二淨忍^一隱^二
小野^一十五年二月二十日薨有^二一男一女^一男曰兼賢

王女曰三國町此處去小野不遠故建社而祭之者乎今雲林院有三星野氏俗傳兩親王命角力時星野祖掌利勝負俗謂行事是皆謬傳也星野代々傳射藝今掌大德寺寺領收納之事俗所謂代官也說斯社非惟高而三十番神也

八幡宮在安居院北人家後園與今宮旅所相近此處元源賴光之宅地而家內勸請之社也或謂賴光直准八幡若宮而祭之者也此町曰若宮町

櫻葉神明宮在近衛通西朱雀東相傳古右近馬場五月端午荒手番時太陽光花降馬場則勸請神明是號日降神明然則右近馬場在斯處乎

石上明神或謂中山神社在三條堀河猪熊姑小路元在大和國山邊郡布留鄉所祭素盞鳥尊所持之十握劍也人皇十代崇神天皇時鎮座也垂仁

天皇三十九年作劍一千口藏石上神宮人皇五十六代清和天皇貞觀九年三月十日被贈正一位

後冷泉院永承五年六月十六日始建官幣此處勸請之未幾知爲何時也近世誤石上爲岩神且有通婦人乳汁之誓故養育幼稚之女子特詣

斯社板面畫乳汁洋溢之體以是代繪馬揭神

前子思神是前所謂十握劍也然則與素盞鳥尊同一體也始尊到出雲國簸之川上時脚摩乳手摩乳置童女稻田姬於夫婦之間涕泣尊問之答曰吾有八箇少女其內七女每年既爲八岐蛇所吞今此少童今年又欲被吞之今既時至故悲之尊憐之終殺大蛇依之則尊愛憐童女夫兒童撫育之本乳汁也取兒女愛憐之義附託脚摩乳手摩乳之乳字而稱之者乎今西陣有石神實建岩石祭之是亦號石上且謂有通乳汁之盟是謬傳之特甚者乎一說石上明神者豐石牖奇石窻命也然則大玉命之子也一說素盞鳥尊山日神之愠而見追新羅國三井寺智證大師歸唐日舟中神現曰我是新羅國神也先勸請護佛法必將吾而行語畢不見大師入京當守中山曰中山大明神爾後移三井寺北院號新羅明神後冷泉院永承五年六月十六日令改造中山神祠天喜元年四月始奉官幣四月中酉日有祭禮

揭速神社在猪熊三條南昔刑部省在斯邊斷獄以行死罪故爲刑死人建斯社修祭祀而薦之每年八月有神事謂死杖祭或又謂活速祭

一說千本引接寺并壬生地藏寺每春所修之念佛會
元是爲刑死人所執行也

祇園社 在三條大宮西人家後園六月十四日祇園會
三社神與昇居此人家前斯處預築壇建幣三本
勸請祇園神於壇上而於此前獻供物於三基神
與故此處謂御供町而後神與歷三條橋出東方

荒神宮 在三條油小路西

諏訪社 在東洞院三條南

三十番神社 日蓮宗寺院悉勸請之日蓮上人時勸

請伊勢八幡之二神而爲法華守護神日像上人時

勸請二十社之神而一月三十日之中每一日置

守護神

雍州府志卷二終

雍州府志卷三

神社門下

葛野郡

內野八幡 在_二五辻櫻井辻子_一 或謂所_レ祭_二桃園親王_一也

七野社 在_二船岡山東南_一 文德天皇貞觀元年冬十一月二十七日因_二染殿后所願_一而所_レ勸_二請春日明神_一也則爲_二內野北野萩野達臺野紫野上野平野等七野之惣社_一因號_二七野社_一一說安和年中因_二冷泉院之所願_一本社春日明神之外勸_二請伊勢八幡賀茂松尾平野稻荷六社_一依_レ之稱_二七社_一云爾後 宇多天皇之后因_レ失_レ寵祈_二斯社_一依_二靈夢_一以_二白砂_一築_二大和三笠山之狀_一遂得_レ寵如_レ初自_レ是諸人有_二祈願_一則置_二白砂於社前_一依_レ之俗或稱_二高砂山_一神職奥西氏守_レ之

小野篁社 在_二鷹峯北小野庄杉坂村_一篁參議正四位岑

守之長子也曾補_二遺唐副使_一有_レ故稱_レ疾不_レ果依_レ之謫_二西海_一

小野道風社 在_二同處_一土人稱_二潔社_一社前有_二池水_一雖_二炎旱_一水不_レ枯嗜_二筆法_一人以_二斯水_一爲_二研滴_一欲_レ倣_二道風之筆法_一也

北野宮 村上天皇天曆元年六月九日遷_二座北野_一同帝天德三年九條右丞相造_二增屋舍_一附_二神寶數品_一三座內東間中將殿而是管神之嫡子也中間管丞相道真公而西間吉祥女則管丞相之室也未_レ詳_レ爲_二何家女子_一一說西園寺家之女也住_二平安城西南吉祥院里_一故爲_二號人皇七十四代_一鳥羽院天仁二年二月二十五日始行_二北野御忌_一爾後爲_二流例_一正月四日有_二裏白之連歌_一凡連歌之懷紙四枚也中古缺_二筆人誤脫_一片面不_レ記_レ之自_レ是爲_二流例_一存_二片白紙_一又別添_二一枚_一爲_二五枚_一依_レ之謂_二裏白連歌_一二月二十五日忌日入_レ夜獻_二菜種御供_一大御供堆盛_二飯插_一黃菜花於其上故稱_二菜種御供_一依_レ年菜花未_レ開則插_二梅花_一大小供物不_レ知_二其數_一宮司自_二幣殿_一對立互轉供宮司一老二老侍_二立神前簾外_一一老取_二右轉之供物_一二老執_二左轉之供物_一各備_二神前_一凡年中自_二正月二十五日_一

至臘月二十五日於會所有連歌之會又每年六月九日男女先詣本社出南門外又詣本社如此九度是謂九度參倭俗詣神佛謂參信心交參彼神之義乎是昔日六月九日斯處依遷座之儀也七月六日出所在外陣之神寶於西間并幣殿及會所曝之其間宮司掃內外陣之煤塵同七日曉松梅院主一人入內々陣獻御手水神寶中松風硯宮上置穀葉供之爲被詠七夕祭之歌也又菅原氏五條高辻東坊城三家之息男十七八歲時詣神前於幣殿撰述文章一篇自書之供神前是謂獻策自茲後稱秀才此時自右近馬場傍南築地則入南門是謂坊城途菅神始現五條文子宅爾後遷當社文子夫末裔代々稱仁太夫勤神職其婦代々稱文子爲女巫松梅院妙藏院德松院爲社司其餘目代并宮司數輩交勤神前之役神領有五百石餘凡男女詣此社時必以石叩北門改曆雜事記曰人皇八十一代後深草院建長四年八月十八日北野社邊火起社家奔走而鎮之歸家時各向北門以小石叩之告曰火鎮收也自茲爲流例參詣之男女雖無其事必叩之舊記曰北野社尊崇

盛於村上天皇之時仲秋初四從一條西大宮至右近馬場神輿遊行一條院正曆四年五月二十日贈左大臣正一位同永延元年八月五日始祭之有官幣之儀第七十代後冷泉院永承元年改祭日爲八月四日五日依母后國忌也同寬弘元年十月二十一日始有行幸六十八代後一條院萬壽元年十一月二十二日有行幸使菅家五位一人捧幣

北野天神宮在菅原天神廟傍五十步北續日本紀云仁明帝時承和三年二月爲遣唐使祠天神地祇於北野然則菅神以前之勸請而地主之神也凡詣菅神者先當祭之與菅神依同名混合而不辨之

宰相殿菅神四世孫輔正之靈而攝社也輔正菅在躬之子而博聞強記蚤爲進士爲圓融院花山院二代之侍讀寬弘六年冬十二月薨八十五歲而薨從祀斯處

和泉殿是亦攝社而從四位下菅原定義也定義菅神六世孫太中太夫孝標之子而典籍爲業令聞不耻乃祖提筆入貢士籍以壽終從祀于茲

三位殿 所祭菅在良也在良定義之次子而善績家

業侍讀 鳥羽帝任翰林學士保安三年十月二

十三日薨八十歲從祀菅廟傍 後醍醐帝天德二年

追賜銀青光祿大夫黃門侍郎依號三位殿社

老松社 在本宮東二町柳町今小路福部老松兩社共

謂菅公眷屬神未_レ知爲何神也

紅梅殿 在老松社南一町許是號福部大明神或

謂執奏神也未_レ知祭何神

白太夫社 稱宜從五位下渡遇春彥與菅神有幽契

之睦故爲第一攝社春彥在任十六年承平三年十

一月二十日辭職讓男晨晴天慶七年正月九日卒

一夜松社 在本殿末申方世人稱梅宮村上天皇

天曆九年乙卯三月十一日神託曰於北野右近馬場

一夜松千本須_レ生果如其言遂建社

平野社 在天滿宮西野所祭之神四座第一殿名今

木社源氏祖神而日本武尊也第二名久度社是平

氏神而仲哀天皇也第三名古開社高階氏祖神而

仁德天皇也第四名比咩神大江氏祖神而天照太神

也第五乃四姓之總社也貞觀元年十一月九日始行

祭祀寬弘元年四月十日有臨時祭勅使奉幣如賀

茂又有春日社任部社共攝社也

雨宮明神 在衣笠山麓西南所謂春日社之攝社也

縣社 在大北山中原清原菅原秋篠四姓祖神天穗日

命也日本紀云素盞尊嚙右瓊置之右掌而生

兒天穗日命此武藏國造土師連等遠祖也桓武天

皇延曆年中立件社攝社有春日社任部社入皇五

十六代清和天皇貞觀六年七月十日贈正一位

同帝貞觀元年十一月九日始祭之今用四月并十一

月上申日六十四代圓融院天元四年十二月二十

五日有行幸

六所神社 或作六請在衣笠山東麓鹿苑寺南未

知祭何神也一說伊勢石清水賀茂松尾平野稻荷

春日上七社之中除近隣平野社而其外勸請六社

者也

天神杜宮 在大北山西六所社六社東所祭三座

而中天神左八幡右春日也今專稱天神杜北山村土

人每年二月十日行祭祀社司射鵲

大將軍社 在西京大將軍之事記上凡此社在平安

城之四方而此社西方之一社也

御輿岡天神社 在西京西天滿宮之旅所也元嵯峨

天皇嵯峨野游獵時暫休憩之處也

牛頭天王社 在妙心寺南門前

(補遺)花園社 在並岡東妙心寺南門前西傳言

後冷泉院時疫癘流行神示現曰並岡邊建社而祭

之則須止依之命兵衛府生時重與六府兵士

建社被行御靈會果而靜謐

(補遺)近世每月朔日十一日二十一日此三首日神明二

十一社參詣者多第一吉田第二下御靈社側第三京極

筋違橋第四京北塔壇行事官內第五上御靈社側第六

柳原川勝辻子第七北野石鳥居側第八出水通千本東

第九姉小路新町西第十佛光寺通新町西第十一京極

四條辻第十二祇園繩手隅第十三三條通鳥居小路一

町東第十四下栗田口山上第十五祇園塔下第十六靈

山國阿堂山上第十七若宮八幡社側第十八稻荷社側

第十九駄屋町五條北第二十富小路五條北第二十一

綾小路通東洞院東是也

福王子宮 在西山鳴瀑村是斯邊地主之神而爲仁

和寺之鎮守神是所祭班子皇后也皇后者桓武

帝之孫女而吏部尙書仲野親王之女也光孝帝立

爲皇后一生字多帝

夫荒神宮 小祠在福王子宮牆內傳言古六月朔日

自丹波國氷室運氷於禁裏若遲則氷解故其行也

疾走一役夫於茲氣息斷絕而死爾後有靈作妖怪

故建社而祭之因號夫荒神一說夫荒神謬傳而實

摩利支天王之社也未知孰真也

平岡八幡宮 在鳴瀑村西北平岡

青龍權現宮 在梅畑

善妙明神社 在梅尾一瀬村

春日住吉社 在梅尾高山寺

八幡宮 在高雄神護寺和氣清麻呂之所勸請也

兒社 在廣澤池西和傳遍照寺寬朝一旦昇天不知

所之侍兒悲別投池水而死建社祭之寬朝登

天石于今存一說斯兒文殊之化身而常護寬朝朝

遷化後入水去云

大辟神社在太秦桂宮院中今作大酒桂宮院緣起曰

大酒大明神者秦始皇帝之祖神也仲哀天皇八年巧

滿王來朝時將斯神來治曆四年二十五日授正一

位又空華日用工夫集曰太秦桂宮院主曰鎮守大裂

明神而元是所祭石也出自奉始皇鞭石之事者

乎一說物部尾與子弓削守屋大連之社也又謂所祭

秦河勝^一也夫桂宮院聖德太子之別宮而所^二自造立^一之八角堂于^レ今存河勝爲^二太子之近臣^一也宜哉在^二斯處^一也河勝造^二假面^一而作^二舞樂^一輔^二政道^一今四座中金春太夫其裔也播磨國大荒社亦所^二祭^一秦河勝^一也故能太夫赴^二西國^一之次必詣^二斯神社^一云又同國坂越村月^二大酒社^一是所^二祭^一守屋大連^一也然則以^二是大酒^一爲^二守屋社^一者亦有^二其謂^一者乎

木島神社 在^二太秦東南^一延喜式曰山城國葛野郡木島社天照坐御魂神也文章生英房遊仙窟跋曰 嵯峨天皇書卷中得^二遊仙窟^一召^二紀傳儒者^一欲^レ傳^二授之^一諸家皆無^レ傳學士伊時深歎^レ之于^レ時木島社頭林木鬱々處撓^レ木結^レ草爲^レ庵其中有^二老翁^一閉^二兩眼^一常有^二暗誦之音^一人問^レ之則遊仙窟也伊時聞^レ之潔齋七日整^二衣冠^一來見^レ翁曰爲^レ欲^レ傳^二遊仙窟^一而來也翁曰我自^二幼少^一愛^二斯書^一年闌倦^レ讀^レ之僅暗誦而已也然惜^二此書^一不^レ欲^レ傳^レ之伊時又請曰予佞^二王家^一居^二學士之職^一然不^レ能^レ讀^レ之請垂^二哀憐^一於^レ是翁暗^二誦之伊時點^二倭字^一於^レ傍^一考終大悅歸^レ家後贈^二數品珍物^一所^二住菴異香郁々不^レ見^レ翁時以爲^二大明神之所^一化現^一也文保三年四月十四日記云々一說江島明神

也一說源三位賴政所^レ乘之馬也雖^レ不^レ足^レ取^レ之載^レ玆資^二博識^一

齋院宮 在^二太秦東南^一此處古賀茂齋院而所^レ勸^二請上賀茂神^一也有^二御手洗河^一是修^二禊處也^一

五社明神 在^二上嵯峨大澤池西大覺寺中^一則爲^二鎮守^一五社所謂伊勢春日八幡住吉北野是也

愛宕權現 在^二清涼寺中^一釋慶俊始自^二鷹峯北^一先移^二斯處^一爾後又移^二今愛宕山上^一

義貞社 新田義貞愛妾勾當内侍爲^レ尼隱^二往生院邊^一爲^二義貞^一建^レ社而祭^レ之今不^レ詳^二其處^一

櫟^ノ宮 在^二法輪寺東北^一松^ノ尾之末社也大橋宮 在^二天龍寺門前四辻^一松^ノ尾之末社也斯處當^二京師一條通^一云

裏柳宮 在^二上嵯峨檀林皇后遺勅曰崩後須^レ野^一葬嵯峨野^一遂隨^二遺勅^一則野狐林鳥啄食經^二數日^一形肉糜爛其體分^二散處々々^一而後所^レ納^二其亂髮^一號^二裏柳宮^一

拳宮 在^二同處^一是所^レ納^二檀林皇后之拳^一也長^ノ宮 在^二同處^一二尊院前^一長或作^レ竹

日裳明神 在^二同處^一二尊院前是亦所^レ祭^二檀林皇后^一也定家社 在^二小倉山常寂光寺之中^一相傳古藤原定家卿

時雨亭在斯處爾後建社而祭之

野宮 在小倉山下椿原 古伊勢齋宮始先栖斯處故勸請伊勢太神宮斯地嵯峨野也故稱野宮

櫻宮 在下嵯峨所祭清原賴業真人也傳言龜

山院嵐山行幸日車駕過此宮前途中有石所駕之牛於茲臥地而不進行供奉人怪之始知有此宮主上下御車徒而行自茲此石稱車前石今在社西寶珠院之門內一說非主上之御車而關白之車也斯說近是乎賴業爲七代侍讀德行文材施美名於天下今患瘡者詣斯社拾社邊之小石而歸家則其病果愈而後始所拾之石又添一箇石置社頭也斯邊清原家之采地而大井川東南有伏原堤庶流伏原之稱號依之者也

下權現宮 在愛宕山清瀑之上或稱火燧權現是四所明神也傳言洛中若將有火災則斯社必鳴動云水尾社 在愛宕山西山腹水尾村 文德帝第四皇子清和天皇之廟社也三代實錄曰元慶四年二月四日天皇崩隨遺詔火葬上粟田山奉置御骨於水尾山于今納御骨處在前山水尾或爲丹波國然或所爲山城亦有之故今從之

愛宕權現 在愛宕山一座是祭軻遇突智神者也斯

神爲火所灼薨故有救火之誓一座祭素盞鳥尊往日神誓曰愛吾夫君言如此者吾當縊殺汝所知國民日將千頭云仍忌生甚於死故特忌產火此社始在愛宕郡鷹峯北于今有石門之存而上賀茂南大門村又斯社大門之所也有也然光仁天皇天應元年釋慶俊移今處斯山屬葛野郡然猶用舊名慶俊併祭勝軍地藏然地藏元無勝軍之號本朝依尙武慶俊附託謂本尊勝軍地藏也崇之則必得勝利依茲武家專尊崇之遂素盞鳥尊軻遇突智神二座號與院太郎坊而地藏權現爲本宮自茲社家絕跡天台宗四坊眞言宗二坊知社事大覺寺門主爲寺務

松尾神社 在洛西所祭神二座大山咋命瀛津嶋姬命以此二神爲相殿稱中本社高皇產靈尊月讀尊二座稱南本社田心姬命湍津姬命櫟谷神三座爲北本社又加三宮四太神宗像衣手號七所之本社也松尾神坐近江比叡山號山王大宮大權現用鳴鏑神也本殿之左右有社北號新宮爲北本社之遙拜所又爲賀茂別雷神南號本宮爲

南本社之遙拜所。又爲賀茂玉依姬命。又吉備宮若王子大山祇御食津四座號。別宮。又有攝社三宮。若宮。若御兒樹本水本梅宮大橋竹宮櫻宮藤社山神宿院宮兒守勝手野守神興津彥興津姬香山戸羽山戸大酒猿田彥十禪師大將軍秦氏社等是也。傳言當社上古鎮座所在。分土山中。分土山即今松尾山也。文武天皇大寶元年。秦都理承勅。始自分土山大杉谷。移神殿于今地。祭之慶雲三年。獻新羅之調。天平年中。始預大社。桓武帝延曆三年。遣大中臣諸魚。以告遷都之由。承和四年。四月上。申日行祭祀。爲式例。也是日。賀茂松尾二神同夢。告云。祭我人懸葵蔓花鬘。除諸火難。因茲今兩社神官祭前日。獻葵桂於陛下。云。又冬祭十一月上酉日也。以當社准一宮。與賀茂同爲皇都守護之神。推古帝十二年八月五日。聖德太子謂秦造川勝曰。吾昨夜夢北去五六里。到美邑。楓林太香於此林下。汝饗吾太盛。吾今將往川勝頓首。啓曰。臣邑恰如御夢。即日命駕。川勝先導。乃臨楓野大堰邊。而宿太子謂侍從曰。吾相此地。國之秀也。南開北塞。陽南陰北。大河東流。成順高嶽之上。龍爲窟宅。常臨擁護。東有嚴神別雷。

西仰猛靈松尾月神三百歲後有聖皇再遷成都云。云山城風土記曰。賀茂健角身命之女玉依姬神道。遙千石川瀨見小河邊。于時丹塗矢自河上流下。玉依姬採其矢。夾屋上頭之有身遂生。賀茂上社別雷神。其丹塗矢今在松尾神社。貞觀八年奉進神階於正一位。勳一等。同十五年十一月十六日。參議在原行平向社頭奉幣帛祈寶祚。寬平元年十月二日。松尾神告曰。住吉明達昔生此國。以選入唐京。儒業唐帝愛其才。賜姓名韓衡。仕爲諫議大夫。今又生此。必爲明師。天慶三年。明達於住吉社祈降。叛臣藤原純友。純友忽伏誅。松尾住吉二神出現。告曰。天慶年中伐凶賊。住吉爲大將軍。松尾爲副康平年中討朝敵。松尾爲大將軍。住吉爲副云。村上帝康保二年霖雨經月。九天覆雲依之。被奉幣於十六社。以當社第四置。又奉伊勢宣命紙用繅色。松尾賀茂社用紅梅紙。餘社皆用黃色紙。伊勢石清水遣中納言爲奉幣使。松尾賀茂兩社遣參議。餘社皆遣四位五位殿上人。是尤依朝家御尊崇者也。古當社神領在群國。特丹波國天田河自往古四時引網漁魚奉備日供神地也。

故養和宣旨曰件河並大井川者自上古引網漁魚所供松尾祭祀河也然近年於彼兩河甲乙輩妄打魚築漁鱗介之由罪科不輕者歟前年有前山伊豫前司爲盛者聊不恐神慮橫行于件河恣依漁魚鼈速令處遠流畢此近例也早上自丹波雀部庄下至丹波山城國境可停止私漁釣之由權中納言藤原忠親奉勅行之國中之輩宜承知云々弘仁六年二月朔詔大井川渡口准先例渡船二艘以可通松尾神用同九月五日神宮告官移居松尾土人等于神野里爲黃頭郎渡人令無執舟錢其衣食料分與神稅給之天長三年詔當社四至方十町內禁止伐樹木剝牛馬埋燒死人以爲永例後鳥羽院建久四年十一月奉納御製和歌三十首同六年二月征夷大將軍源賴朝參詣奉願文被獻黃金百兩神馬十疋緣起曰當社神德爲弓矢神爲社稷神爲壽命神爲酒德神釀酒者尊崇爲酒福神又以龜爲使者神領有千二百石山城丹波兩國內爲總社也社家有二流其一流爲秦氏以南家東家爲稱號又一一流爲占部家以松室爲稱號或又號歌荒巢田

寶龜元年及嘉祥二年始給位階於社家令取笏近世叙正從三位之輩間有之彼兩氏女子等或爲命婦又爲御乳母人叙四位內侍今權神主秦宿禰相平女爲今上皇帝之御乳母又其支族內堪事者或爲藏人叙六位或爲上北面叙從五位下勘解由次官從四位下秦宿禰相宿禰神主職學神道及天文云

月讀神宮在松尾南所祭神二座高皇產靈尊月讀尊是也神代卷曰天地初判始高天原所生神名天御中主尊次高皇產靈尊亦名高木尊亦號神魯岐尊御子有千五百神又曰伊弉諾尊伊弉冊尊共生日神月神此二子光華明彩照徹於六合之內二神喜曰吾息雖多未有若此靈異之子不宜久留此國授以天上之事又曰伊弉諾尊勅曰天照太神者可治高天原也月讀尊者可治蒼海原潮之八百重也又伊弉諾尊左手持白銅鏡則有化生神是謂大日靈尊右手持白銅鏡則有化出之神是謂月弓尊山城風土記曰月讀尊受天照太神勅降于豐葦原中國到子保食神許此神許有一湯津桂樹月讀尊乃倚其桂樹立之其樹所在今

號桂里。又筑前風土記曰神功皇后將入于三韓時既臨產月。皇后自爲祭。神主禱之曰事竟還日須產于茲土。于時月神誨曰以此神石可撫腹。皇后乃依神石。撫腹心體忽平安也。今其石在筑紫伊視縣道邊。後雷霹神石爲三段。顯宗帝三年阿閑臣事代卿命出使于任那國。還京日具奏。月神勅因茲奉崇高皇產靈尊於月讀祠。獻山背國葛野郡歌荒巢田十五町。以爲神田。命伊吉公先祖忍見宿禰令主神事。龜卜懷中曆云推古帝二年詔群臣興隆三寶。同六月五日夜有一貴人自稱月神告帝曰汝等當諦聽。夫我國者天讓日國讓月國而君臣共祭神祇以治天下。今汝等忘根元留枝葉恐有。天照太神之祟。帝不解夜半迎聖德太子告以神語。太子大恐翌日遣小野臣妹子於葛野月讀祠。點定七箇國中七郡以獻御厨子所敦禮祭神明。同八月太子命駕遊松尾山南麓。令植櫟木誓曰自今二百五十年後有一聖王遷神祠於此。以此櫟木爲神木。後世王法之興廢以此櫟木之榮枯可知。知焉停止數日旋于班鳩宮。舒明帝二年八月遣伊吉公乙等於筑紫伊視縣令求神

石。納一卷石於歌荒巢田神宮。此石昔神功皇后隨月神誨依延產月。後名月延石。其二片石今尙在伊視縣及壹岐島月讀祠。又武帝大寶元年二月初行幸觀神石。命宮主伊吉古磨奉幣帛以神稅給古磨。寶龜三年八月大風折木發屋占之月讀神爲祟。因茲遣忌部止美秦神島大中臣清麿於山城伊勢壹岐坐月讀神社以謝神怒。桓武帝延曆廿一年始預大社。當社祭四月上旬日也。文德帝齊衡二年春夏之間痘疫天流行帝憂之於是月神託曰我是天照太神之弟也我居近水有泛濫之害。今將移于松尾南。汝能祭我則災害當消除。帝大悅乃遷宮以祭之。是乃聖德太子所令植櫟木邊也。今此櫟木去太子雖及千七十年尙森々然翠色葱然近世有炮瘡之疫則祈之又嘗祈安產者參詣摩抄神石則必有感格云是蓋上古之遺風餘烈也或爲孝神爲福神又爲水德神祈免海上激浪怒風之難云。延喜六年奉進神階於正一位勳一等。天慶四年八月五日宮號宣下同日給位階於社家。仁和三年六月二日給笏。六條院仁安元年行幸以祈無痘疫之災。以宮主大藏大輔伊吉兼盛館

爲行宮兼盛獻和歌奉頌萬歲依之叙正四位下爲侍從今神領二百石也有攝社相場朝稻日隅春日雷太臣社是也宮主從五位上式部少輔松室重種傳習祖業供神事龜卜云

梅宮 在梅津村西所祭之神四座酒解神大若子神

小若子神酒解子神是也孝謙天平寶字年中祭此地爲帝基守護鎮守所謂酒解社大山祇而大若子

社伊勢度遇神主遠祖加夫良居命也小若子社同大若子弟而酒解子神木花開耶姬也爾後人皇五十二代

嵯峨天皇后姓橘諱嘉智子清友之女也少而涉獵經書眉目如畫爲人寬和而風俗絕異天皇始爲親

王納宮寵遇日隆登祚時弘仁之始拜爲夫人後立爲皇后然以無太子而淒々不樂因茲憑神

代幽契祈酒解二座神一旦應感有妊孕遂以當宮白砂敷御座下居其上生兒所謂仁明天

皇是也誕生之地在梅宮之西土人謂御產所天皇追神惠嘉祥年中以外祖父清友并酒解社以

嘉智子并酒解子神社又以瓊々杵火火出見命配若子二社以爲橘氏祖廟至今尊崇異他夏冬

祭祀無怠世人至臨產月則必取當社砂佩帶

襟此遺風也攝社四座所謂三石熊野三所來現處而市杵島社幸神護王社是也人皇八十代高倉院承安四年十二月被贈正一位一條院永延以後祭禮不絕同寬弘二年十一月依御願如舊例令勒仕祭自明年可用式日一條院以來相續四月十一月上酉日有祭此社爲橘氏祖神故中世蒙橘是定人知之薄家爲橘氏故知斯社之事然薄家斷絕此家爲九條殿之家禮爾後九條家知此社事薄家堂上之人也

神明社 在梅津村

桂御靈 在上桂河西

惠美須宮 在四條西野案斯處西宮高明公之宅地也

就西宮之稱號而後世還勸請蛭兒命者乎

梅宮 在三六條西南田間相傳所祭伊弉諾尊也諏訪宮 在七條西野

紀伊郡

東寺八幡社 在東寺內相傳嵯峨天皇依藤仲成

之變潛詔弘法大師而令修治國之法于時八幡尊容嚴然空中大師不堪渴仰以筆寫之然

後雕像當社八幡是也

六宮神社 在西八條大通寺中、則源家祖六孫王源經基之廟社也經基者、清和天皇皇孫桃園親王第六宮也故世稱六孫王、天福五年六月十五日始賜源姓、與小野好古、征藤純友、傳言源經基之靈化為八尺龍、栖西八條池、池水于今殘

吉祥天女社 在吉祥院、始菅原古人斯處爲宅地、清公相續住之、清公入唐歸朝時海上風忽變船將覆于時祈吉祥天女、風止船無恙歸、京後勸請吉祥天女、菅神亦栖斯處、則於茲被修五十賀、左遷日亦自茲處、首菅村神薨後建社祭之

城南神 鳥羽院之靈社也此地當平安城南、故謂城

南神 稻荷社 稻荷神降臨斯山、未詳何時也社家說

元明天皇和銅四年斯神始現于伊奈利山、則至今有舊址、社家稱御山、每年正月五日各參詣會弘法大師於東寺門前、逢荷稻老翁、其體不凡、大師以爲稻荷神之化現者也、則爲東寺鎮守於茲、移山上神社於今處、則號稻荷明神、稻荷或作稻成、或爲飯成、延喜式神名帳所載山城國紀伊郡稻荷神社三

座上社太田命中社倉稻魂下社大宮姬也是稱上下者、非神位之崇卑、就社之所、有而稱上下者、也今所傳謂五座、而中社爲三座、所謂伊冊諸尊瓊々杵尊倉稻魂也三座之中有瓊々杵尊在、故此社稱十禪師宮、或號客人宮、又曰中社猿田彦而掌導諸神者、也四大神住吉四所明神也、地主神則荷田明神也、其地置倉稻魂、故號稻荷、云斯說可取者乎神領有百四十石餘、文德實錄第三卷、文德帝勅稻荷神社被授從三位、云又延喜八年贈太政大臣藤原時平公修稻荷三箇社、云當社者本朝衣食之祖而蒼生安逸之神也、古雖天子諸侯、向盤臺未下箸、之以前、先置少許飯於臺間、以祭字賀神也、昔日當社出現、和銅四年二月九日也、從斯說、以長曆推之、則其日偶當初午日、然今不用九日、而於初午日、諸人參詣俗謂初午參、又稱福參、農民特參詣則於斯處店買五穀種、而蒔之、則生長豐熟矣、古有供僧數十員、與坊舍、斷絕其坊名爲田疇之號、今所存之愛染院者、當社修造之本願人而勸進聖也、倭俗呼僧或稱聖、凡斯社破壞、則斯聖勸尊卑諸人而請造營之資料者、也、每年正月五日五月五

九月五日社家各聚_ニ斯院_一是則舊例而謀_ニ社頭修補_一微意也

齋場所 稻荷御旅所在_ニ油小路七條南_一弘法大師營_ニ東寺_一時八幡爲_ニ土地神_一而後稻荷神現出暫寓_ニ芝守長者家_一歷_ニ年月_一移_ニ稻荷山_一今旅所則芝守之宅地也祭祀時神與在_レ茲二十日斯遺風也見_ニ于東寺緣起_一

藤杜社 在_ニ稻荷社南_一是所_レ祭_ニ早良親王_一也五月五日祭禮社家著_ニ甲冑_一騎_レ馬供奉并願人亦同然也是早良親王奉_レ勅征_ニ伐蒙古_一之行粧也故有_ニ獨武者等之稱號_一凡神社祭禮供奉著_ニ甲冑_一始_レ自_ニ藤杜祭_一云斯社始在_ニ今稻荷社地_一弘法大師稻荷神社自_ニ山上_一移_ニ今處_一時令_レ移_ニ藤杜社於今處_一今藤杜祭日於_ニ稻荷馬場_一有_ニ競馬之儀_一是元依_レ爲_ニ藤杜之地_一也舍人親王攝社而是元地主神也今稻荷社馬場北有_ニ天皇塚_一是則所_レ葬_ニ舍人親王_一也續日本紀云元明天皇養老四年奉_レ勅修_ニ撰日本紀三十卷_一云々日本式曰元明天皇時有_ニ一舍人_一年老而能記_ニ得上古之事_一親王就_ニ其人_一聞_レ所_ニ口說_一之事_ニ與_ニ諸儒_一撰_ニ集之_一號_ニ日本紀_一自_レ茲稱_ニ舍人親王_一云々續日本紀二十

三卷曰廢帝天平寶字三年六月追尊_ニ舍人親王_一稱_ニ崇道盡敬天皇_一又早良親王稱_ニ崇道天皇_一崇道之號依_ニ相同_一動互誤_レ之故藤杜社世稱_ニ舍人親王_一然本社早良親王而舍人親王地主神也此社于_レ今神領有_ニ百石餘_一

御香宮 在_ニ伏見_一神功皇后之廟也鎮座年紀不_ニ分明_一豐臣秀吉公築_ニ伏見城_一時遷_ニ神社於東岳舊御香宮地_一屢依_レ爲_ニ累又遷_一舊地_ニ

三洲天王宮 在_ニ伏見_一祭_ニ牛頭天王_一者也一說 天武天皇也

伊勢向神社 在_ニ淀驛小橋之東河中_一天逆向津姬神而實天照太神也日本紀曰 神功皇后元年三月壬申朔皇后選_ニ吉日_一入_ニ齋宮_一親爲_ニ神主_一則命_ニ武內宿禰_一令_レ撫_レ琴喚_ニ中臣爲賊津使主_一爲_ニ審神_一者因以_ニ千繪高繪_一置_ニ琴頭尾_一而請曰先日教_ニ天皇_一者誰神也願欲_レ知_ニ其名_一逮_ニ于七日七夜_一乃答曰神風伊勢國百傳度遇_ニ之縣折鈴五十鈴宮所_一居神名撞_ニ賢木嚴_一之御魂天疎向津姬命也石清水社家說曰依_ニ八幡遷幸_一之緣_ニ號_ニ伊勢向_一而祠_ニ之云_一水垂明神 或稱_ニ淀姬明神_一在_ニ淀城西北大荒木杜_一相

傳神功皇后之姉豐玉姬而自肥前國佐嘉郡舊社
所勸請也

橫大路明神 在橫大路東未_レ知_レ祭何神也

久世郡

神明社 在久世郡宇治橋西

道鏡宮 同上傳言弓削道鏡也未_レ知_レ因何故而在
斯地上也

縣神 所祭宇治惡左府藤賴長公而在平等院西門

北

橋姬 是姬太神而在宇治橋西因號橋姬一說昔

有_二妬婦禱_一于貴布禰神求_二生爲_レ鬼而頂戴_二鐵輪
口含_二炬火_一每_二深更_一詣_二貴布禰_一遂生爲_二厲鬼_一是
爲_二宇治橋姬_一未_レ知_レ然否

巨椋宮 在巨椋未_レ知_レ祭何神也

久世明神 在巨椋南久世本郷

宇治郡

木幡神社 在木幡所祭正哉吾勝勝速日天忍骨

尊也是尊地神第二代之神而父素盞烏尊也後天照

太神取而爲御子也神代卷曰素盞烏尊含其左髻
所纏五百箇御統之瓊而著於左手掌中便化生
男矣則稱之曰正哉吾勝因名之曰勝速日天忍
穗耳尊蓋吾勝尊不降下士故無山陵而祀其
靈名木幡神社

田中社 在木幡東北稱須麻神社又稱石田天照

太神日吉二座也傳言天武天皇時斯里一夜間積

苗數尺其上有白羽矢老翁來現云斯地宜鎮座

天照太神并日吉社然則永爲帝都南方之守護神

依是鎮座其積苗處號苗塚于今存今鏡曰洛内

外之勝境第一石田第二高陽院云々又橋俊綱伏見山

莊卽成就院是亦稱勝境者也

柳大明神宮 在五箇庄未_レ知_レ祭何神

大鳳寺明神宮 在大鳳寺村不_レ知_レ爲何神也

離宮 在宇治傳言所祭藤原忠文也然謬傳乎按

譽田天皇崩日皇太子菟道稚郎讓位于大鷦鷯尊

曰今我者弟也且文獻不足何敢繼嗣位乎先帝立

我爲太子豈有能才乎唯愛之而已大王者風

姿岐疑仁孝遠聞足爲天下之君我則爲臣王請勿

疑大鷦鷯曰預選明德立王爲貳我雖不賢豈

弃_二先帝之命_一輒從_二弟王之願_一乎各相_二讓_一之既經_二三載_一一朝有_二海人_一賫_二鮮魚之苞_一直_二獻_一于菟道宮也太子曰我非_二天皇_一乃返_レ之令_レ至_二難波_一大鷦鷯尊亦返_レ之終饒_二於往還_一海人苦_レ之云々太子曰我知_レ不_レ可_レ奪_二兄王之心_一豈煩_二天下_一乎乃自死焉時大鷦鷯尊聞_二太子薨_一以大驚從_二難波_一馳而到_二菟道宮_一已經_二三日_一尊探辭叫哭乃解_二髮跨_一屍以三呼曰我弟皇子乃應_レ時而活啓_二兄王_一曰天命也誰能留焉然聖王聞_二我死_一以急馳_二遠路_一豈得_レ無_二勞乎_一乃且伏棺而薨矣於_レ是大鷦鷯尊素服爲_レ之發_二喪仍葬_一於菟道山上矣大鷦鷯尊則是_二仁德帝也_一每年五月十五日有_二祭奉_一金銀幣_二祭日供奉人誤_レ有_二金銀幣_一謂_二義牟賀利々々々々_一

笠麻呂社 在_二宇治橋西二町許_一土人傳言笠麻呂之廟也笠麻呂仕_二文武元正二朝_一有_レ寵養老五年爲_二祈_一太上皇不豫_二請_一出家_二免_レ之剃髮號_二滿誓_一同七年卒_二于家_一

田原社 在_二田原村_一一座 天智天皇第二座施基皇子是號_二田原天皇_一則 光仁帝之皇親也

青龍權現 在_二下醍醐_一是則護法神也又上醍醐報恩院

中有_二青龍權現社_一此傍有_二清泉_一依_レ之報恩院或稱_二水本_一

萱尾大明神 在_二日野_一土人不_レ知_二祭何神_一也按日野法界寺緣起云日野家宗卿建_二立法界寺於家領日野地_一以下傳教大師所_レ贈_二家宗卿_一之藥師爲_二本尊_一傳教爲_二開祖_一于_レ時准_二比叡山之例_一勸_二請日吉社_一以爲_二法界寺之鎮守_一則斯社是也然則所_レ祭_二大已貴命_一也每年九月五日有_二祭禮_一

長尾天神 在_二同處_一則所_レ祭_二菅神_一而斯地之氏神也每年九月九日有_二祭禮_一

笠取明神 在_二笠取山_一未_レ詳_レ爲_二何神_一案安藝嚴島緣起曰市杵島姬託宣曰吾妹於_二山背笠取山_一垂_レ跡次妹於_二伊豆國江島_一垂_レ跡云々依_レ之則嚴島市杵島姬也次妹田心姬而胸肩神也笠取明神則宗像神乎

白石大明神 在_二小山村_一斯處有_二溪川_一其水至清水底青砂之間處々有_二大白石_一突起又東山下所_レ有_二一白石_一特大其前有_レ社是則白石明神也社南有_二白石庵_一南禪寺天授庵一源禪師之所_レ住而今有_二塔存_一

若宮八幡 在_二音羽村_一
天神宮 在_二大塚村_一此處氏神也

星宮 在同處所祭三妙見菩薩也相傳春日之神作而宇都宮彌三郎朝綱之所尊崇也

西岩屋大明神 在西山村山科宮四座內也

東岩屋大明神 在大宅村山科宮四座之內也

天神宮 在同處

三宮大明神 東野村之氏神也謂西岩屋第三宮

二宮 在栗栖野

八幡 日岡村之地神也

十二所權現 在上野村未知併祭何神也

八幡宮 在勸修寺村一年伐社後杉木割之內有彌陀梵字吉利俱之三字今建其板而與八幡宮

並祭之故自是世呼此宮謂吉利俱八幡

兩社大明神 在勸修寺村所謂兩社醍醐天皇之外

祖父母宮道彌益夫婦而是勸修寺家之祖也寬平十年祭之勸修寺家中興三條大納言實方卿忌日八月四

日也爲斯卿每年於斯社有法華八講一家之參詣行粧盡美云

新八幡宮 在竹鼻村

神明宮 在追分西

諸羽大明神 在四宮村山階十八卿內之第四宮也俗

謂蟬丸延喜第四宮也此社依稱四宮是謂蟬丸宮者是謬傳也古諸羽作兩羽然則大兒屋根命并太玉命而爲左右扶翼之神者也

青龍權現 在安祥寺中相傳神體以瑪瑙石造之曾弘法大師歸朝時所將來而文祿年中高野山木食

上人再興斯社云

天智天皇社 在御廟野御陵之前上世陵村有下司公文預等人今其神職絕社司十六人家猶存繪旨

緣起等今在古沙汰人之中竹鼻氏之家

辨財天社 在陵東陵道山明王寺中斯社前有清泉雖炎旱霖雨無增減云

六所大明神 在北華山厨子奥村伊勢賀茂春日八幡

熱田日吉是也

日吉社 在同處

三所權現 在東野村北空也上人開基西光寺中則爲鎮守所祭賀茂松尾貴船三座也

後白河院社 在三宮村白河寺塔前

辨財天社 在滑谷峠相傳嵯峨天皇時栗栖野有權藤太者甚崇斯社遂家門富有子孫繁榮辱叙爵

而勤禁門之守護賜折入菱之幕紋今山科士豪

干田氏其裔也

三島明神 在滑谷神代卷曰伊弉諾尊拔劍斬軻遇突智爲三段其一段是爲大山祇神則三島明神是也 聖武天皇天平五年伊豆國賀茂郡三島明神現出爾後攝津國下郡伊豫國越智郡勸請之此處未知何年祭之

相樂郡

辨財天社 在井手里東山橋諸兄公宅地內

八幡宮 在同處

辨財天社 在木津川之東平尾村弘法大師之開基而

號王臺寺眞言宗僧守之

同社 在笠置寺元斯山地主之神也

同社 在田原鷲峯山寺

三座社 在同所東寺道賢上人始登山于時當鎮守

三座日本神并金柱及岩戶開神親與上人有問答

日本神則天照皇太神也道賢上人依藏王權現之命

改號日藏所謂笙岩屋日藏而遷化後再蘇生奉

延喜帝命而奏之

荒神宮 在田原南椿井村

綴喜郡

八幡宮 在男山石清水地男山或稱雄德山又號

鳩嶺欽明天皇三十一年冬肥後國菱形池邊民家

兒三歲時神託曰我是人皇十六代譽田八幡麻呂

也於茲差勅使鎮坐於豐前國宇佐宮而稱八

幡一說昔白幡四赤幡四自天降于筑前國那珂郡

宮崎則其處植松而爲標其跡至今存依之得八

幡號云傳言貞觀元年秋七月八幡大神移鳩峯始

釋行教居南都大安寺斯僧俗種武內大臣之裔也會

貞觀元年詣宇佐神祠一夏九旬晝說大乘經夜

誦密咒一夕夢中大神告曰久受法施不欲離

師師歸王城我亦隨行居王城側當護皇祚教

漸到山城州山崎其夜又夢中大神告曰師見我所

居覺見之則東南男山鳩峯上現大光教凌晨到

發光之地實靈區也教便錄一事表奏之帝則詔

木工寮權允橋良基准宇佐祠規令造六宇新殿

則正殿三宇外殿三宇合六宇也正殿三座中八幡宮

則應神天皇也東氣長足姬尊則神功皇后也西比

咩大神則玉依姬也其社規魏々然矣後嵯峨院賜

源姓於諸皇子一則以八幡宮爲氏神一以此社爲本朝第二宗廟山下第一鳥居八幡宮額藤佐理卿之筆跡也山上村尾神社是當山地主神而山腹護國寺藥師自八幡勸請以前所_レ在當山也行教弟僧正益信爲護國寺檢校同俗姪安宗爲別當始自宇佐從來紀氏并大神氏互勤神職古有八社家善法寺田中新善法寺壇園西竹東竹等是也檢校別當之兩職則勅任也此中多是紀氏而武內之裔也大神氏絕今伶人山井近江等其餘流也八社家內田中元爲護國寺別當然於今別置僧令守護國寺自爲八幡宮之社家勸禁闕之祈禱善法寺新善法寺修公方家之祈禱善法寺田中新善法寺於八幡稱三門主各著袈代是亦僧衣也古僧中苦行人或著袈行願寺行圓等亦著之故世稱革堂上人然於神社忌革故仕神人以絹或布代之故稱袈代其衣色濃紫而帶黑與僧正所著之緋衣大同小異也依之謬傳謂三門主非僧正而著緋衣也每年十二月十一初卯日有神樂准禁裏御神樂伶人山井多豐安陪等勤之同八月十五日有放生會傳言神功皇后征三韓時多斷人命故放魚鳥比追

薦之微意而於當山修之者也又此法會社僧講最勝主經此經中有放生之事故修之云元正天皇養老四年始執行爾後久絕社家內田中特歎之請東武延寶七年放生會之料下賜祿若干再興廢禮每年上卿參議辨六府并諸役人等參向而勤之其餘神事不遑枚舉神領於今有六千七百石餘社家說此地元久世郡而八幡社之所_レ有屬久世郡科手鄉凡男山之麓自河原村以南綴喜郡也舊記之所載各然也近世誤爲綴喜郡者乎

若宮 在同處本社良隅應神天皇之皇子而所祭大鷦鷯尊也即仁德天皇是也

若宮殿 在若宮之右是應神天皇之姬宮也

水若宮 在若宮之左是亦應神天皇之季子菟道稚

郎子而號宇治皇子是也

住吉社 在本社北

武內社 在本社內殿西北隅是所祭武內大臣而

號上高良明神是也

高良社 在八幡山下自筑前國高良山移斯處西

一座祭住吉東一座祭武內者也是稱下高良明

神武內大臣以千珠滿珠兩願投于海故或號玉

垂命^{トカノミ}一凡斯社表^ニ船形^ニ而建^レ之者也

杵尾社^{トノノ} 在^ニ八幡山西^ニ是所^ニ祭^ニ國常立尊大己貴尊天兒屋根命之三座^ニ也男山地主神而八幡大神遷座以前之所^ニ勸請^ニ也此外護國寺并寶塔院合三所共同然也

乙訓郡

久我明神 在^ニ下鳥羽西^ニ延喜式所^レ載山城國乙訓郡久我神社是也未^レ知祭^ニ何神^ニ

羽束石明神 在^ニ下鳥羽西南羽束石杜^ニ延喜式所^レ載山城國羽束師社一座高御彥日神是也

向日明神 在^ニ西岡^ニ相傳素盞鳥尊孫太歲子而母須治比女也一說向^レ日者月也然則所^レ祭^ニ月讀命^ニ者乎或謂日向大明神而本朝人皇祖 神武天皇也未^レ知^ニ何是^ニ

春日社 在^ニ西岡大原野^ニ 桓武天皇始先遷^ニ都於長岡鄉^ニ子^レ時遷^ニ春日社四座神於斯處^ニ所謂第一武甕槌命第二齋主命或稱^ニ經津主命^ニ是香取神也以上二神天孫降臨日有^ニ大功^ニ故帝都必祭^レ之第三天津兒屋命皇帝輔佐之神也四座中第三殿而實謂^ニ春日神^ニ

是也第四姬大神也

若宮 在^ニ同處^ニ所^レ祭^ニ太力雄太玉兩神^ニ也一說云以上兩社人皇五十五代 文德帝仁壽元年二月二日乙卯依^ニ太皇太后御祈^ニ而建^レ之又謂五十四代 仁明帝嘉祥三年爲^ニ王城鎮護^ニ閑院左府冬嗣公執奏而勸^ニ請^ニ之^ニ 文德帝仁壽元年辛未二月二日乙卯別制^ニ大原野祭儀^ニ一准^ニ梅宮祭^ニ人皇六十六代 一條院正曆四年十一月二十七日始有^ニ行幸^ニ江家次第云大原野行啓起^ニ五條后順子^ニ以^ニ藤氏勸學院生徒^ニ爲^ニ車副^ニ二條后爲^ニ高子之姪^ニ故高子乘^ニ二條后車後^ニ在五中將業平獻^ニ和歌於二條后^ニ曰大原也小鹽之山毛今日已曾波神代之事茂思出羅米云々

神足明神 在^ニ神足^ニ文德實錄第六卷所^レ載 文德天皇齊衡元年十月戊辰以^ニ山城國神足神^ニ列^ニ於宮社^ニ者是也

明神社 在^ニ奧海印寺村^ニ每月有^ニ連歌會^ニ而未^レ知^ニ祭^ニ何神^ニ也

小倉明神 在^ニ大山崎北園明寺村西^ニ而斯邊之氏神也倭俗某土地所^レ有之神社は稱^ニ氏神^ニ是土人始祖神之義乎所^レ產^ニ之其神地^ニ之人總稱^ニ某神之氏子^ニ氏

神或稱生土神產其神地之義也今處々神社有牛王寶印札其牛王之字以生字下之一畫加土字上者也故以生土神之印璽貼門戶而禳障礙之義也

離宮 在山崎 清和天皇貞觀元年己卯南都大安寺僧行教詣筑前國宇佐宮則奉神託先移斯處同年行教又因神託再遷男山石清水離宮神宮寺則行教之院而近世爲律院離宮之稱號元對宇佐本宮而言之者也離宮神領有八百石餘

山崎明神 在離宮傍而所祭大山祇命也

神並神社 在山崎賀茂春日兩座也故稱神並

牛頭天王社 在山崎山上創建不詳爲何年養老二年再興上梁銘簡于今在本妨本社兩座東稱東

天王八王子西號天神八王子供僧每日修護摩正五九月轉讀大般若經離宮神宮寺僧徒來斯處交勤之豐臣秀吉公始築城於斯山頭然水利不便依之移伏見山本丸二九跡石壁于今存矣

關戸明神 在山崎南方關戸始斯明神社在水無瀨川北攝津國境一年爲洪水漂流而來斯處山崎土人建社於斯處號關戸明神故就此社今自此

地爲山城南界者乎

春日社 在杵杜每年自正月初申日至亥日四箇日間修神事也相傳此間惡鬼遊行至兒女雞犬牛馬觸之則有祟故預遣兒女及六畜於他村而男子在家然不揚聲凡四箇日間所用之物至酒食菜肉預經營之門戶禁開闔音故揭帶於戶而垂之民間是謂居籠亥日神幸旅所社司以片帛覆口鼻是謂覆面欲不使人氣觸神輿也手持櫛而從行又五穀雜種各盛一器令人持攜之又鋤鎌等農器農民各携之從後供奉神輿移旅所後諸民大呼也伊五美與々々々是混雜之謂乎於茲社司器中之雜種一手掬之與農民然後所受之農民撰其種五穀中多入掌內者其歲某人種之則必成熟事終入夜還幸翌日以大竹數莖造大竹輪兩村東西分列牽之其引勝方其歲萬事吉也案日本紀神武天皇於此所討長髓彥長髓彥遺屎於輿而退走今俗言垂屎而逃者職此由也自茲此地謂垂屎今誤謂杵杜其稱惡鬼者長髓彥而牽竹輪則表拔長髓彥首之微意乎

凡日本國祈雨神有八十五座其中山城一州所有賀

茂別雷社一座賀茂御祖社一座松尾社二座稻荷社三座
水主社十座權井社一座木島社一座羽束石社一座乙訓
社一座和伎社一座貴布禰社一座是也

凡疫神五畿內置二十處一其內山城一州有六箇所一其
在_下山城與_二近江_一之境_上其一在_下山城與_二丹羽_一之境_上其
一在_下山城與_二攝津_一之境_上其一在_下山城與_二河內_一之境_上
其一在_下山城與_二大和_一之境_上其一在_下山城與_二伊賀_一之
境_上

雍州府志卷三終

雍州府志卷四

寺院門上

愛宕郡

延曆寺 斯山始號_二日枝山_一延曆年中傳教大師奉_二桓武帝之勅_一創_レ寺號_二延曆寺_一改_レ山號_二比叡山_一或比_二中華_一謂_二天台山_一又稱_二四明洞_一也斯山元屬_二近江國_一然西坂本則屬_二山城國_一愛宕郡且此山稱_二帝都之良岳_一又及_二暮春_一有_二殘雪_一故或謂_二都富士_一然則取_レ之載_二雍州府志_一亦不_レ爲_二不可_一也凡平安城四邊之山悉向_レ內斯山獨向_レ外悉內繞則無_レ出_レ氣不_レ成_レ都猶_二中華金陵牛首山之別背_一金陵_一也凡斯寺有_二三塔_一所謂東塔止觀院西塔寶幢院橫川楞嚴院是也東塔南有_二無動寺_一慈鎮和尚之所_レ住而詠_二枕下月_一之處也大乘院之舊蹟尙存西塔有_二黑谷_一是始淨土專念宗祖法然上人之所_レ住也中堂本尊藥師也山門號_二文殊樓_一西塔有_二相輪檨_一轉_二妙輪_一開_二迷路_一之謂而則

是佛法鎮護之表也傳教大師作_レ銘記_二其下_一爾後輪檨雖_レ改_二造之_一銘猶沿_レ舊而又雕_二刻之_一也古凡有_二三千坊_一而有_二慧心院源信檀那院覺蓮之兩法流_一第二世義真第三世慈覺此時兼_二學密宗_一自_レ茲後法流有_二數派_一所謂法滿院流利生院流_二三昧院流_一等是也中世繁榮之餘僧徒踈_二台教_一勵_二武勇_一近世織田信長公與_二越前國朝倉氏_一對戰日信長公大怒_二寺僧之與_一朝倉_二悉燒_一坊舍_一且放_二僧徒_一一旦至_二亡滅_一今代被_レ再_二興寺門_一坊舍今有_二百二十五宇_一寺產五千石之內東塔學頭正覺院領_二百石_一西塔正觀院五十石橫川惠心院五十石其餘每_二一院_一各領_二二十五石_一

林丘寺 在_二修學院山中_一後水尾院之皇女光子內親王始稱_二緋宮_一天性傾_二禪宗_一後水尾院崩後天龍寺三秀院定西堂爲_二戒師_一剃髮號_二林丘寺_一照山元瑤延寶八年天台山之麓捨_二平素宅_一爲_二寺建_レ堂安_二正觀音之木像_一并有_二後水尾院宸影_一書妙法院堯恕法親王之筆也替法皇之御製則染_二宸筆_一供養泉涌寺新善光寺孤雲西堂修_レ之鐘銘黃蘗派高泉作進也住院在_二堂西_一

曼殊院 在_二修學寺東南_一天台門主之一院而三昧院之

法流也今住號良尚法親王八條家智仁親王之子也

修學院 元播州刺史佐伯公行之所建而爲比叡山之末寺今寺絕爲村名後水尾院在世時相斯攸爲別宮則被稱修學院花晨月夕屢被催御幸今其跡存而已嗚呼痛哉

守禪菴 在修學寺之北山微翁義亨之開基也今爲大德寺金龍院之末寺庭前有古溪和尚所自植之松樹上

一乘寺 元山門之末寺也今寺絕爲村名有八大天王之社

舞樂寺 同上此村北有赤山明神之社
圓光寺 在一乘寺村元足利學校閑室元倍之寺而在相國寺之中近世有故移此地有二百石之寺產

法幢寺 在高野村淨土專念宗而爲禪林寺之派也元在京師新町四條邊近時薰空旭移上人移此處本尊彌陀信濃善光寺本尊之形模也又別建堂安善導法然之像高野川北有崇道天皇之社其東邊山上人蹈之則有成響地上土人怪之年舊矣一旦掘

之則有金牌一枚表有飛鳥淨御原宮治天下天皇御朝任太政官兼刑部大卿位大錦上之字裏面有小野毛人朝臣之墓營造歲次丁丑年十二月上旬卽葬之字則知小野毛人之墓大驚而埋土金牌高野村豪民携之置家內無幾而一家有疾知毛人之祟寄牌於此寺今現存矣

蓮華寺 在高野村一遍上人之派而舊在七條鹽小路南俗稱麓道場然則始在山下一乎今不知其處移此地後廢壞年舊矣加賀能登越中三箇國今太守綱利之從臣今枝民部再興之改宗門爲山門末派一本尊釋迦也石川丈山隱士之所筆有蓮華寺之額堂前有井號漱玉泉東有池其中心岩上有碑爲民部之父宗二建之宗二元仕豐臣秀吉公及秀次公其履歷詳于碑銘矣

圓融院 舊在大原之中相傳宇多法皇暫在此院今不知其處

勝林寺 在大原而比叡山之末寺也本尊世稱證據阿彌陀傳言法然與台徒有法論是謂大原問答于時此彌陀爲證故稱之一說惠心弟子禪定院覺超與檀那院弟子靜慮遍教一佛果空不空之法論

於斯堂修之于時論空時本尊隱其相不空時顯相不辟空不空依是稱證據彌陀云々此寺僧自古精音聲世稱大原聲明陳思王曹子建每讀經文深嗟玩以爲至道之極也遂製轉讀七聲升降曲折之響世之諷誦咸憲章之曾遊魚山忽聞空梵中天之響清颺哀悅其聲動心彌悟法應乃崇其聲節爲梵唄撰文此寺亦慕之故號魚山(補遺)理性院在大原或號圓融院又稱梶井門主或謂梨本門主

來迎院在勝林寺之東山上本尊彌陀蟠龍爲座良忍修融通念佛之地也東有藥師堂

寂光院凡大原内河西總稱小鹽山河東稱大原東西都有八鄉此院在小鹽之管内草生村本尊地藏聖德太子之所雕刻也高倉帝之中宮建禮門院平德子平相國清盛公之女也平家亡滅時安德天皇沒西海後門院歸西海然不入京師直赴東山長樂寺剃髮爾後暫隱吉田山新長谷寺終入此院崩塔在後山上自是此處爲尼寺屬山門本尊之前有女院之像在世之日以下安德帝及自所書寫之反古手自脫砂而造之然後施粉彩且女院所被

著之内衣袈裟加像上夫女院容色之美麗世之所偏知也故爲尼後亦爲被避後世之嫌疑摸尼後憔悴龜面之御容者也然後人不會其意是謂阿波内侍老衰之像也依之置是於本尊之傍別造門院美麗之御容安本尊之右壇上尊崇之住尼亦不知之嗚呼痛哉其內衣袈裟爲女院像也爲必者也近世近江國守山邊有西鄉氏其女一旦爲尼住斯寺自茲以來其種族代々爲尼住之緣起二卷是又寫平家物語之所記者也寺產有三十石勝軍地藏堂在上栗田白川村東北山上自村中有十八町之坂路此堂屬聖護院門主入峯之前日登斯堂修護摩七箇口曾桓武天皇都平安城時東山上納土偶人爲帝都之鎮護是號將軍塚勝軍將軍以其音同一世人誤此山爲將軍塚然將軍塚在東山上也勝軍山上有佐々木承禎之城址照高院在白川村河水之南近世三井寺門主聖護院興意爲東山大佛殿之別當職依大佛殿上梁銘之故而暫遷居無幾而被免之此時建斯院而閉居有寺產千石爾後道晃法親王相續居之此院東有坂路是赴江州志賀東坂本之道也所謂志賀山越

是也。自白川行半里有山中宿一宿之西路傍有石地藏一向江州一向城州是山城與近江之境界也。

最勝寺 舊在北白川今不知其處。

淨土寺 古天台門主有淨土寺之號今寺絕爲村名。

慈照寺 在淨土寺村爲相國寺之末寺慈照相公義

政倦政務讓世於義尙公閑居此處故稱東山

殿專歸禪宗遂此處爲寺號慈照院天龍夢窓國

師爲開基方丈東建東求堂中間安持佛以八

幡爲鎮守東北有書院號同仁齋是齋四帖半

也今世上茶亭之四帖半是爲濫觴方丈南庭池水西

有閣以銀箔飾之故世稱銀閣是亦相公之所

設而其結構模大北山鹿苑寺之金閣者也閣之第

一重號心空殿第二重爲潮音閣書院有吟月之

額此外處々其名存今不知其處惜哉有寺產三

拾石相國寺派僧住之相公常嗜茶故玩古畫古

器又出新意而令造器其體製甚盡巧也其所

藏之書畫器物今散在良賤之家是謂東山殿御

物同朋能阿相阿藝阿傳阿多記其名者好事人甚

珍襲之始義政公移慈照院時家臣安西世繼山本

中山等四人從之其末裔落民間事農業各在淨土寺村然至今此四家無公諱安西氏之家有大柿樹則元祖安西氏所手植也今其樹大過一圍其柿形似美濃蜂屋其味至甜世人接其枝今在處々稱安西柿曾近衛相國前久公之家領在斯村于時此寺無住職依之前久公柄東求堂故號東求院龍山至三藐院信尹公時有故易領地於枇杷庄每年七月十六日晚斯淨土寺村并慈照寺村人以四百有餘松火點大字於淨土寺山上處處山上亦多有此儀俗稱施火或謂聖靈送火是皆施餓鬼之義而孟蘭盆會之一事也傳言弘法大師之筆畫也古淨土寺本尊春日神作之彌陀像一時放光弘法大師拜之曰見聞輩須爲生極樂之緣依之咒斯光爲大一字存方十丈之筆畫於淨土寺山今見之大字筆畫中有山有谷高低不一隨其地勢以小石爲大字之徵於山上無可稱大字自山下見之則大字筆勢非凡人所及也且每年七月六日村人各登山上伐松割之至同十六日曬各々之門外若誤以此薪木用他事則其家或患痼苦疫患非如此之靈驗則八百年來豈及

不退轉乎今俗說稱誰彼筆書是皆謬傳乎

萬無寺 在鹿谷舊法然上人之徒弟住蓮坊住斯處

上人亦暫栖焉故有塔然中絕良久延寶八年知恩院

萬無和尚再興之堂安置慧心僧都所作彌陀之

像新造立經藏寄附倭摺一切經等寺號萬無

寺或稱法然院一水涌出山間是稱善氣水一山

號善氣山斯寺之風景西南在一望之中

靈鑑寺 號園城山在鹿谷後陽成院之女房持明

院基久卿息女產妙法院宮堯然法親王後陽成院

崩後爲尼此處依爲妙法院之領地建寺接焉

後西院姬宮爲弟子稱谷宮無幾而遷化今住稱

千宮是亦新院之姬宮也

高岩寺 號圓成山安置不動石像分岩屋山不動

座石之半爲臺座相傳智證大師之所作也今淨土

專念宗僧守之

如意寺 古在如意山頭慶保胤栖遲之地也長德三年

於此地而卒於茲爲寺天台宗僧住之一說如意

寺在三井寺後山也未知就是也聖護院門主一

代有如意寺之門主

光雲寺 南禪寺大明國師之創建而始在攝州大坂芝

地中絕良久南禪寺天授菴英仲和尚再興此寺於南

禪寺之北號靈芝山光雲寺此寺建立時東福門院

有故被寄黃籙若干且賜門院之持佛釋尊之像

爲法堂本尊然後自公方家寄附二百石之寺產

東福門院及女三宮歸依此寺故女三宮薨後奉葬

前山號妙莊嚴院寺產外別賜百石爲女三宮香

燈之資料

金戒光明寺 號紫雲山傳言古紫雲起自斯山之石

上其石于今在西雲院中昔日法然上人始住叡

山西塔黑谷爾後建寺於斯處弘淨土專念之宗

故是稱新黑谷是亦淨土宗四箇本寺之一員也四箇

本寺所謂知恩院清淨華院知恩寺并當寺是也每年

自正月十九日至二十五日修法然忌然斯說多

異論暫措之本尊法然上人像之側有一向宗祖親

鸞之像是謂所自刻也然其所從來不分明或

言非親鸞之像山上有塔本尊文殊始在中山寶幢

寺本朝三文殊之隨一也中世寶幢寺中絕後塔本尊

在黑谷方丈中興應譽上人時建斯塔爲本尊今

方丈百五十石之寺產元爲寶幢寺之所也有也寺中蓮

池院有熊谷入道蓮生之像山上有平敦盛塔并蓮

生塔一寺之西北隅有西雲院於斯院修常念佛
前年既有萬日不退轉念佛之結願故世稱萬日
寺開基僧號心譽宗嚴也始此僧未披剃時豐臣
秀吉公征伐朝鮮日爲小野氏所虜來日本天
性無男根故所到爲閨人仕蜂須賀蜂菴又事
高臺寺政所亭爾後從知恩院滿譽上人羅染爲僧
于時公方家侍女一位阿茶局施資料創院於斯
處依之中華朝鮮投化人於本朝死則葬斯院
寶幢寺舊在中山本尊文殊也寶幢寺廢壞文殊今
在黑谷塔此文殊之靈驗具在勸修寺家藤宣胤記
一說此本本文殊太和安部文殊丹後切戸文殊是稱
本朝三文殊也

吉田寺 本尊觀音傳言吉備公之作也今寺絕本尊在
黑谷金戒光明寺之中相傳吉備公入唐々人示以野
馬臺文字其爲體也縱橫散亂而難讀過公憂之
於茲忽然蜘蛛降自空中牽絲文字上吉備公
隨蜘蛛絲之所牽而讀之則字義貫通其蜘蛛則本朝
長谷寺觀音之化現也公常歸長谷寺觀音故靈驗及
斯者乎今刺縫家信斯觀音蛛絲之結網也以絲
似縫花鳥之形故信之者乎

善正寺 號妙惠山日銳之開基而日蓮宗本國寺之末
寺也關白豐臣秀次公之母公瑞龍寺尼公爲大檀越
則被置秀次公之像薩戒記曰應永三十二年閏六
月十五日左頭中將藤隆夏朝臣來談云善勝寺者在
法勝寺西此寺藤家保卿建立也有供僧六口承仕花
摘等子今不絕矣於寺也回祿以後不及修造
法皇等於金山寺行之金山寺在雲居寺北而藤
家成卿之所建立也云々今按此善正寺再興斯寺
改宗爲日蓮宗勝字爲正者乎

神龍院 在吉田山下吉田社家卜部兼俱子爲僧號
九江屬南禪寺然後建此寺而修神道護摩相
傳兼好法師暫在此院也

智福院 在吉田山空海最澄於斯處聽神道於卜
部家也此院在虛空藏之靈像

神恩院 同上今濟家僧守之或謂兼好法師所寓者
此院而非神龍院也

神光院 同上元神宮寺而今爲濟家

敬田寺 舊在吉田山兀菴中興之開基也今寺絕元
爲吉田社神宮寺

新長谷寺 在同處山蔭中納言之所創建也本尊觀

世音與三和州長谷寺三相比並故號三新長谷寺三歸州富田總持寺通用之地也

夢倉藥師堂 號三法雲寺三始在三上賀茂邊夢倉一本尊藥

師也行某菩薩以三賀茂大明神歸依佛藥師小像三納三

斯像內三故古來無三拜三之人三此堂始 推古天皇所三

建立也一年洪水漲出堂宇及佛龕流行而留三止延曆

寺邊三則建三堂於流止處然依有妖怪三又被移三

今岡崎村斯地三井寺圓滿院之所三領也花園房能僧

正爲三別當三始在三賀茂夢倉三今雖在三岡崎村三世稱三

夢倉藥師三此事詳見三于中山定親卿薩戒記三

法勝寺 舊在三岡崎村三天台淨土也僧正覺深號三太毘

盧舍那寺三菩提房僧郁濟覺改爲三法勝寺三承曆元年

十二月十八日斯堂成就 白河院行幸有供養三則

爲三勅願所三中興祖慈意和尚而是則東坂本西教寺建

立之僧也中古斯邊有尊勝寺圓成寺成勝寺延勝寺

最勝寺三加三法勝寺三三稱三六勝寺三法勝寺絕本尊藥

師像今在三東坂本西教寺三故西教寺兼三法勝寺之事三

岡崎往々有三寺院之遺址三九重塔跡民間稱三塔壇三至

今不耕種三
(補遺) 覺深僧正號三太毘盧舍那寺三菩提房僧正濟覺

改爲三法勝寺三云

(補遺)善勝寺 薩戒記曰應永三十二年閏六月左頭中

將藤隆夏朝臣曰善勝寺在三法勝寺西三此寺藤家保卿

之所三建也有三六口供僧三然一旦燒失不及三修造三彼

供僧等勤行於三藤家成卿所三建之金山寺三修之云々

依之則今東山善正寺再三興斯寺三改三宗爲三日蓮宗三

者乎金山寺中古在三今東山高臺寺地三

元應寺 古在三法勝寺西北三傳信和尚之開基也第二世

慈意和尚時爲三戒灌頂之地三而自三山門三移三戒壇三

爲三受戒道場三依三爲三後醍醐後宇多二代之勅願三

也今寺絕東坂本來迎寺兼三此寺事三元真盛上人之一

派而法流同故然

知恩寺 在三吉田山下高島北三世所謂百萬遍也始在三

今出川通相國寺北三而元上賀茂神宮寺也堂安三置慈

惠大師所三雕刻三丈六之釋迦像故名三釋迦堂三又稱三

賀茂河原屋三此邊土人時々爲三禳三疫癘三則於三佛前三

轉三百八大念珠以誦三彌陀號三至三百萬遍三依三之此寺

或號三百萬遍也一旦賀茂神職人延三法然上人三使

住三之爾後小松內府重盛公孫備中守平師盛子法然

上人法嗣勢觀房源智爲三住職三自茲專爲三淨土專念

宗之道場改號知恩寺依之勸請賀茂明神爲鎮守每年此社火燒日賀茂社司來勤之淨土宗四箇本寺之隨一而後奈良院宸筆有知恩寺之額寺產有三十石每年自正月十九日至二十五日修法然忌永正五年五月五日三好長輝入道希雲其子長光長則自河內出攝津亂入京師與細川佐々木等合心戰然爲大内介敗亡長輝入道希雲於斯寺自裁

武藏寺 在田中村東此寺始在今出川今藤谷宅地永祿年中移此處元天台宗也相傳武藏坊辨慶時々來遊依之號武藏寺今日蓮宗僧守之屬京極今出川南本國寺末派法性寺

福禪寺 在田中村西元在今出川檜木茶店之傍豐臣秀吉公使改作親王家八條殿之第宅時移此寺於今處使構八條殿後門於其跡今淨海專念宗僧守之

光福寺 在今出川原東知恩院之末寺而開基僧號宗眞丹波國人也豐臣秀吉公在聚樂城時屢游獵斯邊一日暫憩斯寺住僧宗眞無可獻物於茲獻乾菜一把秀吉公感其質素賜寺產自茲世

稱乾菜寺此寺六齋大鼓之本也

聖護院 三井寺門主之隨一而近世多皇子也元名常住院聖護院之號三井長吏增譽僧正其始也此僧權大納言經輔卿息而三山別當職之始也山伏等屬之凡山伏役小角爲祖然有眞言天台之兩流天台山伏屬聖護院門主每秋自三熊野山入葛城大峯修鍊故稱修驗道又謂入峯或稱順峯入是謂本山衆然中世大蛇當大峯前路橫行出其首山伏不得入大峯也年舊矣醍醐寺聖寶歎之自提劍入自大峯後山而出大蛇之不意先斬其尾終斷其首自是行路平安而山伏再得入峯故是稱當山衆然先登大峯而出熊野依之謂逆峯入眞言山伏悉屬醍醐寺三寶院門主此兩門主一代一度入峯大峯山上構長寮是謂室眞言天台異其處薪炭等物者山下人運漕之兩門主各留數日其間修探燈護摩言探藏王權現堂之燈火修護摩之義也出山之日聖護院門主建木塔婆是謂碑傳古建石碑乎其面書熊野三山檢校三井長吏役優婆塞正嫡聖護院法親王某之字三寶院門主亦雖建之其所記有異同也兩門主多憑官家之人

使書之是自京師所携也入峯時先門主之與啓行者稱前鬼後鬼住大峯麓前牛村常馴攀躋其輕捷頗如獼猴是等爲鄉導又僧中先行路者謂先達先達山伏各在處々其所在京師積善院若王子勝仙院寺等之先達屬聖護院自是以下山伏者每年入峯又不住寺院而在市中者是謂俗山伏不僧不俗帶妻子凡山伏之爲事也半薙頭髮著篠懸袈裟并頭巾橫大刀大吹法螺徘徊市中入人家請齋料是本朝沙門之一種也篠懸山伏之衣也懸之於肩背拂山路篠葉之風露者也袈裟有纈纈是役行者著百結衣之遺風也世誤袈裟爲篠懸頭巾則巾也

積善院 在聖護院村或稱梅坊則聖護院之院家而爲先達也寺產有二十石

頂妙寺 在三條河原日蓮宗二十一箇寺之隨一而日祝之開基也細川若狹守爲大擅越而號頂妙寺然若狹守今不詳其家系樓門之內東有持國像西有多門像運慶之所刻也世誤謂二王像也男女祈疾病平復其願成日以大草鞋揭其前此寺鐘其音好與天王寺六時堂前之鐘同調也斯寺舊在

高倉中御門北寬文十三年有故移東河原寺產有二十石餘凡二十一箇寺之中今所存者十七箇寺也其餘四箇中所殘之坊舍分散在十七箇寺之內纔其跡存而已也

若王子 在東山如意嶽麓後白川法皇勸請紀州熊野那智權現於此地爾後等持院尊氏公歸仰權現大僧正良海爲座主爾後爲聖護院門主之先達

禪林寺 在若王子之南號聖衆來迎山也謂永觀堂西山流之內西谷派也文德天皇齊衡年中弘法大師之法孫眞紹僧都之開基也本尊坐像彌陀則弘法之所自刻而附眞紹僧都者也今在傳授堂第二世宗睿僧正從智證兼學顯密誠學解之碩德也清和天皇歸依之遂以此寺爲勅願所自茲十一二世之間不詳住職爾後花山院第四王子深觀僧都住之傳言深觀弟子三論碩匠永觀律師住職時每日於佛前念佛一萬遍或二萬遍唱之或行道念佛聲不惜響至一方稍躊躇于時彌陀左顧視行者其後面貌遂不復實永保二年二月十五日也遂此佛爲本尊世所謂廻顧佛是也自茲珍海良深尊譽貴譽相續住之曾池大納言賴盛卿息僧都靜遍始爲

仁和寺僧_レ然後住_レ之源空滅後披_レ閱撰擇集_二而立_一一向專修之義改號_二心圓坊_一又稱_二後禪林寺_一賴朝卿深被_レ歸依之爲_二武運長久之祈禱_一而轉_レ讀大般若經_二其規于_レ今不_レ絕善惠徒弟淨音自_レ住_二此大興_一西山流_二盛弘_一淨土宗_一寺產有_二四十石餘_一一說駒僧正道智亦住_二斯寺_一云相傳斯邊東山進士紀關雄之宅地也進士薨後眞紹僧都逢_二清和天皇之歸依_一買_二得此地_一而建_二兩寺_一號_二北禪林寺南禪林寺_一爾後北禪林寺除_二北字_一南禪林寺地爲_二龜山法皇之皇居_一然後爲_二寺時改號_二南禪寺_一

南禪寺 號_二瑞龍山_一又稱_二五山之上_一曾金吾將軍藤信賴被_レ誅其子幼弱流_二刑奥州_一治承年中被_レ免還_二家_一于此爲_二侍從_一其家多_レ金故世謂_二福地_一又呼_二金侍從_一而埋_二金龍_一以鎮_二此地_一文永十二年龜山院禪_二位於建治帝_一稱_二太上皇_一特愛_二山水明秀_一弘安年中置_二離宮於此地_一警蹕接_レ武焉元最勝院僧正道智暫棲_二此地_一然後其靈惜_二斯地_一親乘_二白駒_一飛_二行瀑邊_一故稱_二駒瀑_一又稱_二駒僧正_一自_レ是作_二障凝_一晝夜變怪千百太上皇寅昏梵誦每夜無_レ故戶扉開動人靡_レ暇_二安寢_一南都北嶺顯密諸師下及_二咒術巫祝_一百計拱_レ手矣

於是召_二東福普門大明國師_一奉_レ命率_二二十僧侶_一安_二居宮中_一九旬國師爲_二之冠_一然無_レ別行_二唯_一一時齋粥四時坐禪而已物怪匿_レ形上下安寢寂感之餘革_二宮爲_一寺創_二大佛殿_一後二年落成畧曰_二金剛王寶殿_一近世金地院僧本光國師以心宗傳爲_二五山僧錄司_一別賜_二五百石之采地_一自_レ爾以來代々僧錄出_レ自_二此院_一南禪寺產有_二八百九十石_一十刹廣覺寺亦今南禪禪寺兼_二帶之_一

觀勝寺 始在_二下栗田山上_一行基之開基而園城寺唐坊行圓再_レ興之_二本尊千手觀音而行基曾以_二聖德太子摸像正觀音_一安_二心內_一而所_二自作_一也鎮守者白山清瀧熊野三所也 後嵯峨院建長七年乙卯十二月二十三日爲_二勅願寺_一文永五年大圓遷_二住左女牛街_一若宮別當實深僧正死後以_二青銅三千緡_一附_二大圓_一祈_二冥福_一行圓曾於_二出雲路街_一求_二得定肇所_一作之彌陀三尊_一移_二觀勝寺_一建_二一字_一安_レ之云々詳在_二無住國師沙石集_一爾後應仁元年大內介屯_二軍於觀勝寺_一于_レ時大殿佛閣一時燒今下栗田口神明社西北其舊跡也曾爲_二王城鎮護_一而納_二經於四方之山上_一是號_二岩倉_一此處則東岩倉也近世眞言宗安井僧正性演再_二興觀勝

寺於東山眞性院中

眞性院 在東山建仁寺後眞言宗僧住之近世觀勝寺兼帶之院中有崇德天皇之宸影每年八月二十六日修御忌此前庭紫藤繁延花開時男女群觀世人不知眞性院之號專稱藤寺

青蓮院 在下栗田始名十樂院天台門主之一院而

三昧院法流也僧正慈道爲開祖伏見院之王子尊圓法親王亦爲此院之門主慈道以來代々精筆法尊圓特爲傑出故稱尊圓樣又謂御家樣於本朝爲能書之隨一也又諸門主任僧正時先著緋衣或著紫衣則告此院而後被著之凡山門多法流其內三昧院流仕僧正時元雖著緋衣又著紫衣爲榮青門院者三昧流之本也故著紫衣時雖他宗門主必告之是舊例也堂上著紫懸緒猶告飛鳥井家也本願寺之親鸞元爲此院家故本願寺新門主少年日多入此室留學

尊勝院 在下栗田有元三大師之像此寺天台宗爲青蓮院門主之院室也凡住此院之僧代々爲日野家之猶子又兼江州多賀大明神之社僧在彼地則稱不動院

善光院 在青蓮院之境内與山門善光院爲通用

此處有三猿堂傳教大師曾表天台不見不聞不言之三諦作三猿之形其一以兩手掩兩眼其一以兩指塞兩耳其一以双手閉口俗稱不見不聞不言不與猿倭語相同且猿與申字義相同故庚申日參詣多又爲訟者祈此三猿欲使爭論之敵不見不聞不言也

良恩寺 在下栗田華頂山相傳元天台宗也中世淨土宗僧住之然屬青蓮院門主本尊彌陀小野篁之所刻也古室町家每春櫻花開時屢來遊花頂山被催詩歌則斯寺乎今此邊田地并山林號良恩寺處多且掘地則金紋瓦出然則古境内廣大者乎斯寺東阿彌陀峯有下栗田一村之火葬場有故移此寺東隣故此寺自主此葬場一說公方家來臨之花頂山則常在光院也此院舊在花頂山麓然則斯說近是者乎知恩院 斯寺元山門慈惠僧正之所創而法然上人再興之而淨土宗四箇本寺之隨一也號東山始稱大谷寺又謂吉水院古此院在山上一今勢至堂是也後柏原院之宸翰有知恩教院之額慶長年中移今所其時滿譽僧正爲住職寺產有千七百石餘山

上有開山法然上人塔。每年正月十九日至二十五日一修法然忌。後柏原院勅書曰知恩院淨土宗之總本寺而修法然御忌者也。後奈良院繪旨曰任後柏原院之先例。爲淨土宗之總本寺。修法然上人之御忌者也。依之則今淨土宗門之徒稱御忌者非無其謂也。斯地元大谷而本願寺祖親鸞之墓古在。今知恩院中崇臺院後大松樹下。爾後移鳥戶山。

常在光院。舊在花頂山下。今知恩院鎮守社之邊。古五山之諸老有道德學術者。退老後必住此院。是爲榮令寺。絕然寺產少許。殘在相國寺領之內。惜哉。一心院。在知恩院之山上。淨土宗稱念上人之開基也。此僧隱遁而不出世。此一派寺院處々有之。稱一心院派。或號捨世地。

安養寺。在圓山。舊天台宗之寺也。慈鎮和尚暫住焉。山下有吉水。故稱吉水和尚。此水至清冷也。相傳三條小鍛冶宗近製刀日淬此水。云中世爲一遍上人之派。剩携比丘尼。每賣飲食。爲男女遊樂之場。醬梅諸缺餅爲名產。

長樂寺。在安養寺南。古天台宗也。本尊觀音洛陽三十

三所之隨一也。有寺產少許。藥師堂岩下有泉號奇特水。自古冠蓋交遊之地也。本朝詩集多有遊長樂寺之題詠。高岳相如遊此寺。賦落葉山中路詩。并有序是爲始。又有歌人大江正言等之詠。今在後拾遺集。相傳上東門院女房侍從隱此寺。云斯寺一代住職阿正坊印誓上人建禮門院之戒師而中興開基靈山十六代國阿上人也。自是爲時衆。今有一字坊舍。其事跡同安養寺。有鞠場及奕碁等之具。而牽遊人之興。而已與古題詠之遊大異。

雙林寺。在長樂寺南。號金玉山。古爲天台宗。中興僧時衆國阿上人也。動與靈山正法寺爭本末。僧儀與安養寺雙林寺相同。中古平判官康賴有別莊。西行亦栖焉。有所愛櫻。故有康賴西行之塔。寺中文阿彌庭有相阿彌所設之假山。

(補遺)景雲菴。始在東山雙林寺側。今不知其處。嘉吉三年六月朝鮮人來朝館之於景雲菴。斯波千代德司供給事云々。

地藏堂。在四條河原之東祇園町之西。開基僧未詳。何人傳言中華投化人鹽瀨淨因建立之。大檀越也。本尊地藏。後一條院時法橋定朝之所作也。此寺舊

在三四條東北田間今芝居之處故世謂之畔地藏寺僧傳言後堀河院安貞二年秋八月大風雨鴨河洪水漲出命勢多判官爲兼令防之爲兼忽逢異僧僧謂此水以人力難防之此河北勸請辨財天又河南建立夏禹廟勸修祭祀則水立乾言終而不見爲兼以爲是地藏尊之所現出也於茲兩處經營事成水果枯其後兩社廢壞今不知其處惜哉傳言大和橋北至近世有苦鍊樹辨財天社在其樹下爾後堤上悉爲家居其樹亦亡禹廟至近世在五條松原通河東云緣起曰中世錦小路有宗圓者常信此地藏一時患眼疾祈地藏尊夢中告曰汝可患眼宗圓寢後眼忽明又詣地藏謝之見地藏尊之眼兩眼不分明宗圓大驚且感嘆自茲世謂目疾地藏然非斯謂是寺僧附託之言也地藏憐衆生之墮罪而垂淚悲之體也地藏之右有千手觀音相傳春日之神作也是謂雲居寺本尊又謂追分觀音東山雲居寺所有號追分故稱之又一說雲居寺邊有桂橋寺或號玉蟾寺此觀音桂橋寺之本尊也未可知孰是

建仁寺 在大和路四條南源賴家公大檀越而千光

國師榮西之開基而居五山第三位也塔頭中華來朝之僧所開基者多其內禪居菴清拙之所住也所將來之泥塑摩利支天之像世人之所徧稱也又方丈一切經朝鮮國之物而是又爲絕品寺產有八百二十石餘也寺中西來院有畠山德本牌號光孝寺三位右金吾德本

六波羅密寺 在建仁寺南光勝之開基而是世所謂空也上人也本尊觀音三十三處之隨一也今新義真言宗僧守之鎮守松尾明神而空也上人之所崇也平清盛公亭在斯邊且被尊崇之堂有清盛之木像外有佛工運慶湛慶之兩像方丈普門院寺產有七十石

愛宕寺 在建仁寺之南隣本尊觀音也千觀內供奉之開基而與金龍寺通今爲淨土宗外門二王像佛工運慶湛慶之所作也始在車屋町二條北於今其處謂二王門町未詳爲何寺之二王門中世其處人寄附斯寺建門而安之本坊謂念佛寺每年正月二日夜門前大神人聚方丈作酒宴是謂天狗酒盛其後赴本堂牛王加持之場鳴太鼓吹法螺其體喧雜故稱天狗酒盛者乎

珍皇寺 在建仁寺之南弘法大師之開基而元爲葬場小堂安地藏并小野篁像庭多石地藏此處世稱六道傳言是處有通冥途之路故小野篁自稱此處親行六道而歸也依之每年七月孟蘭盆會前九日男女參詣撞鐘而置槓枝歸家置靈前俗傳聖靈乘槓葉而來也是依草附木之謂乎是謂迎聖靈故事談云珍皇寺別當某云當寺鐘慶俊僧都鑄之慶俊入唐時謂留守僧曰斯鐘埋土中歷三年掘之須撞之衆僧不堪待三年纔一歲許而掘之懸樓而撞之其音聞唐土慶俊告曰我寺之鐘聲聞此予思待三年而後掘之懸樓上則不撞之而六時自可有聲而大歎惜之云々三代實錄第十卷天安二年四月庚子是夜寶皇寺火金禮堂盡爲灰燼註云寶皇寺俗名鳥戶寺依之寶皇寺後改珍皇寺者乎此寺今屬東山建仁寺大昌院此院世所謂天隱之所住也此院住僧每年新正遣僧於東寺修賀儀是依兼帶珍皇寺也

高臺寺 在祇園之南號鷲峯山豐臣秀吉公正妃稱政所殿創建此寺請建仁寺常光院三江和尚爲住職政所殿稱高臺寺湖月尼公寺中六坊且

有十境其中有菊潭水相傳此寺僧飲菊潭水之下流故得壽也寺產有五百石薩戒記曰鷲峯山金山寺藤家成卿建立而在雲居寺北彼寺無供僧元應塔僧等行佛事當家公卿爲長者彼等寶藏紺紙金泥一切經有之故鷲尾中納言隆教卿爲長者時取出件經號管神御筆而多賣却之爾後中納言藤隆信卿爲長者時聞此事大驚歎取所殘之經以納我家云々雲居寺天治二年七月十九日瞻西上人所建立而爲天台淨土宗傳言元在青塚地岩栖院細川滿元入道道悅之所創也爾後移南禪寺中改號聽松院請村菴爲住職村菴自幼年細川道悅養爲子甚被愛憐之今按金山寺雲居寺及岩栖院共在今高臺寺之地者乎此山始名岩清不動山

法觀寺 在八坂鄉號靈光山建仁寺之末派也有五重塔舊聖德太子之所創建也其後普廣院義敦公再興之供養日義教公有來臨

正法寺 號靈鷲山今世稱靈山元天台宗而寺產有二十石餘其後一遍上人之派國阿彌住焉自爾爲時衆事跡同于圓山堂有彌陀像稱齒佛相

傳此衆一旦自生齒牙二月并八月時正中口午於堂內有踊躍念佛普廣院義教公據此山爲城故被寄庄園於此寺依之建牌又有中興國阿堂此人甚崇伊勢太神宮時々參詣終無行路之難故詣伊勢太神宮者必詣此堂上人像之傍有伊勢行脚所著木屐并杖拜上人後戴此杖履欲無行難路也每年九月十一日修國阿忌供花數瓶東光寺在靈山之西高臺寺之南元爲禪刹今寺絕近世靈山僧建菴室町記載康正二年斯波義敏遷居於東山光寺云々一說東光寺在北白川云

清水寺 寶龜十一年坂上田村九草創伽藍安置八尺千手觀音大同年中諸堂成延鎮爲開基寺僧今真言宗也然南都法相宗一乘院門主爲寺務執行謂寶性院目代謂慈心院倭俗監吏謂目代僧家借其名而稱之慈心院始在轟橋前故或曰轟坊此外有六坊又本願謂成就院寺產有三十石各分領之本堂外有與院千手堂并有田村堂田村丸并行睿延鎮之像在子斯三層寶塔者嵯峨天皇女御春子妊娠時爲安產之祈願田村丸之所建立也春子則田村丸之女也又有朝倉堂越前

國朝倉氏貞景甚崇清水建寺斯堂安置觀音凡當山四時風景非筆舌之所及故遊人常絡繹不絕跡特櫻花之爛熳也瀑泉之清冷也洛陽之一奇觀而世人之口實也

(補遺)鹽斷彌陀 在清水寺本堂西俗傳有祈願人斷鹽味祈此如來則所祈如願云

泰產寺 在清水寺樓門前相傳聖武天皇后光明皇后產前有煩惱祈伊勢皇太神宮一夜夢一寸七分觀音靈像現枕上寤而見之則在傍養老二年六年果誕皇女則孝謙天皇是也重有神託而天平二年山城國轟里建三重塔安置一寸七分靈像號泰產寺稱子安塔婦人專尊崇之然則此塔之建立者清水寺草創七十六年以前也今真言宗僧守之真福寺在清水坂本尊大日者弘法大師之所作也世謂大日堂堂中有五部大乘經之輪藏其形狀八角也每一角有南無阿彌陀佛之字其內一方有西教寺眞盛上人之筆蹟來迎院在同所聖德太子之開基而有自作之像住僧有信施之人則書寫經於小卒都婆授之則其人建之灌水而拜之故世稱經書堂

(補遺)玉章地藏 在清水之南滑谷之北俗言深草少將奉納玉章於斯地藏而祈與小野小町相逢之緣云俗俗艷書稱玉章

法國寺 在鳥部野東豐臣秀次公欲移足利學校於

斯處有故止矣于時遊行三十三世他阿上人者

後陽成院并新上東門院及豐臣秀吉公歸依之新上

東門院勸修寺前內府晴秀公之女也晴秀公剃髮號

松圃天勤門院爲晴秀公建之依號松圃山豐國

寺寄寺產與大津莊嚴寺爲通用斯寺因在

豐國大明神之地號豐國寺則有後陽成院宸

筆豐國寺之額近世豐改法字

寶福寺 遺址在鳥部野今有石地藏土人不稱寺

名直稱南無地藏聖武帝天平年中行基大士置

五尸侘林於山城州是處亦其隨一也又名鶴林治

安三年藤道長公葬此處其後遊行三十三世他阿

上人再興之故有他阿塔會豐國社建立時此地去

社不遠故火葬之臭氣通社頭依之厭其不淨

被移葬場於建仁寺門前今又移三條西郊外寶

福寺舊記等今在四條道場金蓮寺

正久寺 此寺舊在大谷今知恩院之地也一向宗祖親

鸞上人之所住而上人之墳墓在此處知恩院自山上移今地時遷此寺并墳墓於鳥部山然始以在大谷今亦稱大谷

清閑寺 在清水山之南播州刺史佐伯公行之所創

建也今真言宗僧守之高倉院之愛妃小督局死日

葬此山帝哀慕之崩御時依遺勅而奉葬此

寺陵上有大楓樹傍有小督局之墓

(補遺)延曆二十一年紹繼開基斯人未知爲何人

也佐伯公行爲中興之檀越爾後一代任職僧正道我

有詠歌之名與吉田兼好法師結交有贈答之

歌

妙法院 在鳥部山之下天台門主之隨一也山上有

日吉之社故或稱新日吉門跡豐國并大佛殿及蓮

華王院今爲此門主之有一也日嚴院門主之院家而

在妙法院之前

久遠寺 在鳥部野南會日蓮宗妙滿寺一代日曉上人

新立一派法依背制法創之放之爾後被免

之再興此寺住焉大佛邊常行寺二條本正寺等

爲一派

智積院 在鳥戶山麓紀州根來寺覺錢之派而真言新

義之道場也其法流日衰剩僧徒勵武勇動對武家爲一方之鱗織田信長公怒之燒伽藍滅僧徒今代惜之擇殘僧之中傑出之者偶有二人其一一人令住長谷寺小池坊其一人令住智積院是爲兩能化再興新義之法流使導所化僧每年自十月朔日至同月十二日修論義而十二月十二日修法事是謂報恩講所化僧來集者及七百餘人一寺產有五百石智積院地始號祥雲院元豐臣秀吉公之幼子祥雲院殿之墓所而妙心寺南化和尙住之和尙者信長公之歸依僧也爾後有故移祥雲院於妙心寺其跡爲智積院也

方廣寺 在五條東世謂大佛天正十四幸豐臣秀吉公創建之本尊釋迦大像以木刻之以漆膠塗其外斯像華嚴說法方廣佛之體相也故號方廣寺使大德寺古溪和尚住之然寺不及成而和尚遷化故聖護院道澄爲別當職慶長元年閏七月大地震佛像破壞秀吉公謂以佛之知見而不知其身之破壞則爲不足信而以矢射之然後請信州善光寺本尊如來爲此殿之本尊時方殘暑酷烈然俄飛雪滿天寒氣侵人是爲如來之祟秀吉公八月十八

日薨逝之前十七日使還善光寺爾後秀賴公欲使造銅像慶長七年鑄造之日火發自佛腹中堂爲焦土又再欲建堂則先鑄大像而後令構堂而遂成矣聖護院二品法親王興意相續爲別堂然大佛殿上梁銘并鐘銘依有不祥之語止供養興意法親王亦墊居無幾而被免之建白川照高院而閑居則賜院領千石元和六年庚申十月七日遷化爾後妙法院宮主大佛殿之事

得長壽院 古在蓮華王院之邊今不詳其處鳥羽院本願大檀越也命平忠盛爲監吏而使造十三間之堂安置十一面觀音像一千一體供養天承元年辛亥三月十三日而導師忠尙僧正也

蓮華王院 世謂三十三間堂也後白河院本願而安置千手觀音像一千體治承二年十月二十七日有供養號新千手堂又別置寶庫被納書畫器物等寶庫無幾而廢于今書冊貼蓮華王院之印者偶殘近世武家射藝者每初夏登此堂自曉至暮放矢其數至一萬其內直發者是謂通矢此堂亦妙法院之所主而坊官松井三河監之凡三十三間每一間量法二間也故其放矢之際六十六間也

妙安寺 在蓮華王院南而爲禪刹近世有異僧號朗庵不知爲何處人也曾與龍寶山大德寺一休和尚相親常慕風穴演肆之作略自好吹尺八或自稱風穴道考元住宇治郡吸江庵又暫住斯寺世所謂薦僧之本寺也斯徒露宿風食不厭險難經歷諸方到處坐葉薦而爲足故稱薦僧或謂虛無僧也亡命者或逃世隱斯宗門者間有之中世有暮露者是亦薦僧之類也凡東關西州風穴道者門派之寺院在處々一說朗庵慕普化振鈴之作略號普化道者也然今以吹尺八見之則風穴道者之義足取之者乎

養源院 淺井備前守長政薨後號養源院台德相公之夫人崇源院殿者長政之女也故崇源院殿爲長政被建之寄寺產三百石山門院家住之當家四代牌在當院每月忌日始自所司從公役之人各參詣寺產有三百石

法住寺 在養源院南有後白河法皇之雕像每年三月十三日開帳又有妙法院代々之塔古所謂法住寺非斯處乎
觀音寺 在新熊野三十三處觀音巡禮之隨一也

泉涌寺 號東山始稱仙遊寺一旦清泉涌出依之改號泉涌寺大和守中原信房請俊仍爲開祖禪律真言淨土四宗兼學之地也俊仍入唐歸朝日將來之經疏佛具書畫等有若干今所存者思恭并禪月所畫十八羅漢之圖特絕品也第二世湛海入唐歸朝時所携來之牙舍利今在舍利殿四條院始奉葬此山其後自後圓融院至後水尾院有代代々陵寺產有千石也外門傍有石藥師是謂駒形藥師始在萬里小路春日通北

觀音堂 在泉涌寺之中泉涌寺開祖俊仍歸本朝日携此像來相傳唐玄宗皇帝甚悲楊貴妃之死別使造貴妃等身觀音像建堂安置之今觀音是也於唐土則號補陀落山圓通寶閣染宸筆揭額俊仍併此額將來今在泉涌寺之寶藏古此寺有三門此觀音爲本尊揭此額云今世是謂楊貴妃之觀音

雲龍院 在泉涌寺中後光嚴院後圓融院陵在後山雕像在此院每年自四月二十日至二十九日修如法經會二帝之追薦也古如法經會之料寄附之庄園有幾許

戒光寺 在泉涌寺中 戒光寺開祖曇照入唐請釋尊大像來而爲本尊 泥塑阿難迦葉像爲脇侍 今其二像絕始在九條東洞院 其後移小川一條北 又移京極東三條通 又遷泉涌寺中 寺產有二百二十石

新善光寺 元在一條大宮 近移泉涌寺中 後嵯峨院爲本願 本尊銅像如來則摸信州善光寺如來者也 依之號新善光寺 後柏原院爲再興之本願

安樂光院 在京極今出川之北 元在京師上立賣 凡此邊有十二光院 所謂不斷光院智惠光院等之類是也 安樂光院元持明院家之寺而爲律院

悲田院 古在京北大應寺之地 方近三町 泉涌之末寺而有寺產五十石 應仁年中兵亂之時 後花園院在源義政公室町花御所 崩此時東山泉涌寺爲兵火燒故竊奉葬此院于今竹林中有陵爾後移悲田院於泉涌寺中 今天神辻子天神社者古悲田院之境內而則爲鎮守

速成就院 在五條橋西爲律院 而安置聖德太子像 世稱太子堂 相州鎌倉極樂寺忍性開基而今屬

泉涌寺 此院元在今知恩院地 自山上被移知恩院時遷此院於此處 忍性塔其營構至大而無力遷之故于今在知恩院開山堂之西林 每年七月五日寺僧來此塔修法事

長講堂 在五條橋西南 後白河法皇所創建也 則有宸像也有法事 則庭田家勤仕之本尊彌陀左觀音右勢至各惠心之作也 法皇曾被置過去帳於斯堂 近臣亡後悉被載此過去帳 今淨土宗西山派僧守之相傳此堂始在延壽寺中 中世分爲二寺 云有寺產二十石

來迎堂 在五條南 或稱新善光寺 本尊彌陀而淨土宗也 一條院建立而有寺產少許

宗仙寺 在高倉通五條橋南 曾因道元和尙之遺誡而曹洞宗寺院所在京師之者少 所謂慈眼寺天寧寺此宗仙寺三箇寺之外未聞有曹洞宗之寺 斯寺寬正年中京師所司代多賀豐後守高忠爲大檀越而號宗仙寺喜山洞院 則置肖像 本願寺 龜山院文永九年親鸞上人之息女覺信尼於大谷建立之上人遷化後十一年也 爾後移宇治郡山科鄉 又遷攝州大坂天滿宮之側 然後移京都六

條_二至_三光佐上人時_一其嫡光壽有_レ故隱_二居本願寺之後東方_一故號_二東本願寺_一又稱_二御裏_一其弟光昭雖_レ爲_二庶子_一續_二其統_一是號_二西本願寺_一又稱_二御表_一又有_二庶流_一其一爲_二興正寺門主_一其一爲_二理性院門主_一本國寺 號_二大光山_一日蓮宗二十一箇寺之隨一也始在_二相州鎌倉松葉谷_一日蓮上人之法孫日藏上人說法之地也故與_二妙顯寺_一爭_二位次_一而此寺開基日印上人也第二代日靜上人赤橋家而尊氏公之叔父也於_二宗門_一歸仰不_レ淺中世移_二寺於洛陽五條南_一爾後松永彈正歸_二依此寺_一今境內半是彈正之所_一寄進_二也官家之子多住_二方丈_一故多_二僧正之號_一有_二寺產百七十石_一寺中瑞雲院者豐臣秀次公之寺也別有_二寺產百石_一佛光寺 順德院建曆二年於_二城州山科鄉_一親鸞上人之所_一創建而附_二法嗣眞佛_一者也爾後移_二五條坊門萬里小路_一本願寺子孫相_二續之_一必不_レ依_二法器_一眞佛者法嗣也故以_二佛法荷擔之器量_一相_二續之_一依_二是爲_一榮然至_レ今則子孫相續不_二必依_一法器_二又高田專修寺_一後堀川院嘉祿二年親鸞於_二下野國_一創_二建之_一其後遷_二伊勢國一身田_一高田流道場本誓寺在_二二條河原町_一凡佛光寺專修寺本願寺爲_二一向宗之三流_一

耳輪堂 始在_二六條坊門西洞院西_一源賴義征_二東奧_一日悉殺_二凶徒之耳_一携_二來京師_一埋_二斯地_一建_二堂於其上_一安_二等身彌陀像_一而薦_レ之今不_レ詳_二其處_一

金光寺 在_二東洞院七條南_一元空也上人之開基也爾後一逼上人寓居以來爲_二時衆_一號_二一夜道場_一又稱_二七條道場_一寺產有_二百九十石_一一逼上人廻國行脚時久留_二此寺_一每_二日午_一修_二踊躍念佛_一

平等寺 稱_二因幡堂_一在_二五條烏丸_一本尊藥師天竺祇園精舍療病院之本尊而釋尊所_二自雕刻_一也天德三年少將橘行平參_二向因幡國一宮_一此時行平病惱夢中有_レ人告曰當國加留津海底有_二竺土之名醫_一請_レ之則疾病忽須_レ愈於是沈_レ網探_二海底_一果得_二佛像一軀_一見_レ之則行平等身之藥師如來也得_レ之則其疾果愈於是遷_二于當寺_一行平子僧光朝爲_二寺務_一今堂普廣院義教公之所_二再興_一而則有_二義教公自筆緣起三卷_一寺僧眞言宗也然天台宗聖護院門主爲_二寺務_一寺產有_二四十石_一三代實錄一卷載權中納言平朝臣高棟奏_レ之以_二山城葛野郡平等寺_一爲_二定額寺_一

本行寺 在_二五條室町西_一世稱_二谷口本行寺_一日雄上人開基而要法寺之末寺也有_二日蓮上人木像_一其色甚黑

俗號墨染高祖 日蓮宗之門徒稱日蓮上人 曰高祖

延壽寺

始在油小路五條北其所有於今謂金佛

町近世移五條下寺町後白河院本願而平忠盛

奉行之本尊以蓮慶所作之大日本像爲模範

鑄銅像其體相至大也左釋迦右彌陀世人不謂寺

名直稱金佛今淨土專念像守之寺產有二十石

傳言始今長講堂在斯寺中近世分爲兩寺云

本覺寺

在延壽寺東北淨土專念宗而屬東山知恩

院本尊彌陀安阿彌所作之如法佛也舊遍照心院之

本尊而源實朝公之室本覺尼公之持佛也有故置斯

寺依之號本覺寺開基號騰蓮社玉翁法丈所

有之畫像有蓮雪嶺之贊詞

新善光寺

在五條橋西所謂御影堂也一遍上人第二

世應阿自作彌陀之像自負來爲本尊若寺中有故

則寺僧自肩擔之遷于他所依之衣肩存破處

表所擔故此徒稱肩衆別有安阿彌所刻彌陀像

并定朝所作觀音地藏像每年二季彼岸作踊躍念

佛中世以來携尼常製扇賣四方是謂御影堂

折非他所之所及是摺扇之始也倭俗造扇是謂

折言屈折開合之義也

法城寺在五條橋東北中島安倍晴明祈河水氾濫

水立流去依之建寺於河邊號法城寺爲地鎮

言水去成土之義也晴明死後葬斯寺世稱晴明

塚此寺始真言宗也中世爲淨土宗安置彌陀改

號心光寺屬知恩院爾後洪水數度入寺中不

得安居慶長十二年住職壽林和尚移寺於三條橋

東今所存之器物有法城寺之字者多

頂法寺在三條南稱六角堂梶井門主爲寺務聖

德太子廣隆寺建立時代材木於此處其中觀樹有

靈光以此木刻觀音像安置之一說斯靈像聖

德太子自淡路國岩屋迎之云是三十三所順禮之

隨一也近世僧專光住方丈斯人得數品花枝於

瓶中而摸山水之景象倭俗謂立花至今代々

玩之僧俗爲此徒弟者多庭有大柳樹數株本根

至一圍者多枝低垂者拂地春末新綠爲奇觀凡

六月七日十四日祇園會前日難色在堂使所飾山

鉾之町人取闌定所渡之前後又倭俗二月八月

家僕互易是謂出易其未定居者每夜聚此處

故主人使人招之釋其人而用之

勝仙院 在頂法寺之中。天台宗而爲聖護院之先達。

古所謂楠木坊是也。始在東山新熊野。元德二年誘日野中納言資朝卿之息阿新丸。赴佐渡國。使伐本間者。亦此楠坊之住僧阿闍梨也。近世住心院僧正澄玄住勝仙院。是今川氏真之子而義元之嫡孫也。又常不動院一字是亦在頂法寺中。本尊不動明王二童子弘法大師之所作而始爲本尊觀音之脇侍。而備伽藍守護。古寄附庄園有若干。慶長年中住僧玄秀時一夜鼠咬不動左膝。秀戲謂不動像曰。明王有諸魔降伏之德。今不能伏。一鼠翌朝秀詣像前。忽見利劍之貫一鼠。秀驚歎信服。至今不動之靈驗間有之云。

極樂院 號紫雲山。在四條坊門爲淨土專念宗。古在櫛笥通四條。故稱櫛笥道場。空也。上人之開基而則安下置所。自刻之肖像。此院內一老稱上人。不食魚肉。不携妻子。剃髮著衣。其餘十八家者不剃髮携妻子。常製茶筵賣市朝。相傳空也。夜々修行唱念佛。巡洛邊。暫住貴布禰。于時每夜鹿來鳴。上人甚愛其聲。爲閑居之友。一夜不來。鳴心怪之。翌日平定盛來告曰。昨夜於此處殺鹿。空也。

上人大驚且悲。乞其皮角。皮爲裘著之。角插杖頭。爲遺愛之物。也。定盛亦悔之。愧之。終剃髮爲僧。今十八家其裔而所著之衣。定盛曾平生所著狩衣之袍直爲衣。至今存其遺風也。各々衣上有紋。是俗體家々之紋也。凡十八家人至巖冬寒夜。每夜巡洛外墓所葬場。各以竹枝扣瓢高聲唱。無常之頌文。是爲修行。依稱鉢歌。疑古扣所携之鉢。近世以瓢代之者。乎依之此門前謂歌町。

永養寺 在京極四條南。淨土專念宗而知恩院之末寺也。有故而有村井春長軒之畫影。

法然寺 在京極四條南。淨土專念宗也。後伏見院之宸翰有極樂殿之額字。安置法然所自刻之像。且有熊谷入道蓮生之像。

勝圓寺 淨土專念宗而知恩院之末寺也。有後奈良院之勅額。

空也寺 在京極四條南。空也。上人之所暫住也。今專念宗而屬東山知恩院。臺地有釋迦之銅像。相傳有愈瘡之誓。故患之者參詣以藥繩縛其佛。愈則解之。誠雖俗習之所爲。穢佛之至甚哉。淨教寺 在京極四條。淨土專念宗也。本尊彌陀大像者。

慧心之所作也近世有故在鹿谷法然院今所安置小像也淨教寺三字額後小松院之宸筆也此堂古代之物而其結構非凡工之所及鎮守八幡宮亦然也相傳飛驒內匠之所作也古工匠多出自大和飛驒故稱傑作謂飛驒內匠之作然則不限一人今稱倭畫之傑出一悉如稱土佐筆也傳言此堂元在七條世稱燈籠堂予思平重盛公於東山阿彌陀峯作堂安置彌陀像每夜點數百燈籠依之重盛公稱燈籠大臣其本尊今在山科小堂此堂恐阿彌陀峯之燈籠堂乎寺產纔在

春長寺在京極四條南淨土專念宗也京都所司村井長門守入道春長軒爲擅越則有春長軒之畫影

大雲院在京極四條南明智日向守光秀反逆日織田

城介信忠卿出妙覺寺之旅館暫據親王之邸拒之然光秀急攻之遂自殺貞安和尚納遺骸葬龍池山大雲院此寺始在鳥丸二條殿町此町或稱貞安町斯地元二條殿之宅地而池水存故號龍池山有後陽成院之勅額也城介信忠卿號大雲院故貞安和尚直爲寺號則近世移四條京極曾貞安和尚於江州安土淨嚴寺與日蓮宗有法論貞安

勝之信長公騎羣毛馬手持團扇來臨法戰場聽聞之則褒稱貞安和尚賜所持之團扇爲徵其團扇于今存矣貞安名譽施于世上故此寺俗不稱大雲院直謂貞安也

金蓮寺稱四條道場在錦小路與綾小路之間故號錦綾山淨阿上人之所以開基也此地元具平親王之宅地而今四脚門自其時存矣曾廣義門院熙子難產時因淨阿祈誓而有平產故再興此寺并建熊野權現社傳言始金蓮寺北隣有佐々木道譽之宅地則寄附之今寺中半爲道譽之宅地云寺中慶松庵庭有大松每年夏初杜鵑來鳴普廣院義教公枉駕聞之依號杜鵑松先年爲霹靂枯失又壽福庵素眼筆法一流之人而到今世稱素眼樣寺產有二十石餘

敬禮寺一名十住心院在四條京極金蓮寺中本尊釋迦而久我爲平親王家之御願寺也又有裸形地藏染殿后之歸依佛也世專稱染殿地藏染色家信之是依染殿之號也謬傳堪笑者乎弘法大師住斯寺時撰述十住心論故或號住心院傳言夢窓國師造西芳寺假山之時此地藏現出而助其巧始與

蓮寺爲別院中世釋迦堂破壞時金蓮寺助修復之料自是屬金蓮寺今見斯寺舊記自播磨法禪房肇上人傳圓海自圓海所讓與心海者分明也凡斯地舊久我爲平親王之邸地而捨宅爲寺者也金蓮寺緣起爲平作具平未知名孰是

了蓮寺始在三條北東洞院爾後移金蓮寺之北知恩寺之末寺也本尊彌陀元在東山雲居寺此寺零落時本尊流轉關東于時發心者了蓮坊請此像三條東洞院建寺安置之近世移今處一說此本尊者梶尾山高山寺阿彌陀堂之所也有也未知名何是也

安養寺在京極三條南淨土宗西山流之內西谷派也斯寺舊記云曾花山院寬和年中天台僧都惠心上人於和州剋建斯寺號華臺院師姨安養尼者上人之妹而尋居此因改稱安養寺鳥羽院天永年中沙門隆暹現奉佛勅移城州後深草院建長年中觀鏡和尚之上足證佛上人來住闍揚淨教故謂之東山一脉之古本寺也後深草院實治年中勅爲禪祚之道場賜宸奎額傳言斯堂剋建時方三間也嵯山重忠助資料佛前柱悉有撤金之繪近世嫌其

堂之狹小改造之然須彌壇等用始所有黑漆螺鈿實古代之物也

圓福寺號大本山在京極三條坊門淨土宗西山流之內深草派之一本寺而爲常紫衣之地三河國寶藏寺等亦爲此末寺此寺花園院後花園院爲大檀越故子今有御牌寺產有二十石

永福寺在圓福寺之中本尊藥師而世謂章魚藥師其來由有諸說元天台宗也今淨土宗而屬圓福寺

西光寺在誓願寺南舊在北白川而號藏坊始天台宗也今爲淨土宗西山立義屬誓願寺一本尊彌陀安阿彌之所作也

清帶寺在西光寺前元天台宗也今淨土宗而屬西光寺一本尊地藏泥塑佛而弘法大師之作也有婦人安產之誓故妊婦懸帶祈之世稱腹帶地藏倭俗妊娠至五箇月必著帶結腹爲不使兒成大也東光寺在同處元天台宗也今淨土宗而屬西光寺

本尊觀音銅像弘法大師之作也誠心院元淨土宗而在東北院中東北院始在誓願寺之中誓願寺自舊誓願寺町被移三條時此院

亦遷此地。近世爲律院。屬東山泉涌寺。院內有御堂關白藤道長公之像。又有和泉式部之墓。其前梅樹稱軒端梅。近世加州大聖寺城主山口玄蕃頭爲檀越。再與此院。

誓願寺 號大本山。始在南部。惠陰僧都之開基也。惠陰三論宗而爲談峯定惠和尚之師。也曾於舒明天皇之前殿淨土三部經之中被講無量壽經。爾後天智天皇之本願而造立之本尊傳言春日之神作而五臟六腑在佛腹內也。桓武天皇遷都後先遷城州深草里。改宗爲淨土。則西山立義內深草派之本寺而近世爲常紫衣之寺。中世移京北舊誓願寺町。在戒光寺南。一旦此寺回祿文明九年十穀沙門謀再興造營之事。勸進疏則一條禪閣之所作也。同六月二十六日有御堂上棟之儀。爾後移三條京極。今堂豐臣秀吉公愛妾松丸殿再興之。松丸殿淺井備前守長政之女而始嫁若狹武田氏。武田氏亡滅後在伏見城松丸。故稱松丸殿。堂額大覺寺門主空眞親王之筆也。藤澤道場一遍上人廻國時暫留此寺。每日午修法事。授六十萬人決定往生之紙符於諸人。是舊例也。每年自十月五日至二十五日朝有

法事。是謂十夜。又正月十九日至二十五日修法然忌。堂有天智桓武醍醐後柏原後光明院之牌。寺產有三十石餘。堂前有梅其花欲開時其色甚紅也。世稱未開紅春初洛人之奇觀也。自未開時至散亂日男女群聚。

(補遺)東北寺 舊在京北小川誓願寺隣。近世與誓願寺移三條京極。曾御堂關白道長公建立之。號華岳山誠心院。比法成寺。而或稱小御門。又因八幡之神助而建之。故又稱八幡多羅堂。一條院官女和泉式部仕上東門院式部女小式部臥病時式部祈斯本尊彌陀得愈。道長公遂以斯寺賜和泉式部。云有道長公之肖像并和泉式部之畫影。爾後一遍上人暫寓之。天文年中此寺爲兵火被燒。于時城州葛野郡下山田領主山口甚介秀景添資料。而再興之。秀景子加州大聖寺城主山口玄蕃頭相續爲斯寺之檀越。父子共有畫影。此寺中世屬南都大安寺。近年屬東山泉涌寺。

曇華院 在三條東洞院。始近衛院之太皇太后宮院崩後移于近衛河原御所。是稱前后宮。又謂大宮。大炊御門右大臣公能公之女而德大寺實定卿之妹也。

實定卿八月十五日夜爲賞舊都之月。自攝州福
原來斯大宮待宵小侍從在斯宮。以歌答物加
波藏人之事具在手平家物語。而世人之所偏識
也。至近世有髮女子一人置之表待宵小侍從八
幡山之社司西竹之女也。前後薨後爲禪刹。號通玄
寺。開祖智泉尼而尼寺五山之隨一也。有寺產五百
石。爾後皇姬多爲尼住之代々天龍寺松岩寺僧爲
戒師遷化日葬大德寺昌林院。今通玄寺絕其內一
塔頭曇華院殘近世移斯處。

瑞泉寺 在三條橋西淨土宗西山派而屬禪林寺。豐
臣秀次公之母公瑞龍寺尼公之所創建也。開基桂叔
也。秀次公於高野山自裁其後置首於三條橋下。
使幼子及三十四人侍女等拜之。則斬幼子並殺
侍女數十人。始自秀次公悉葬同穴。高築墳因
秀吉公之命而稱畜生塚。于今在三寺中。

矢田寺 在京極三條北。始在和州矢田。滿慶上人開
基而本尊地藏也。始屬建仁寺禪居庵。今爲東山禪
林寺之末寺。

本能寺 在三條京極。日隆上人之開基而日蓮宗二十
一箇寺之隨一也。始在三條坊門西洞院。織田信長公

寓斯寺。爲明智光秀被弑時。一旦爲焦土。其後
移今處。堂前有信長公之塔。有寺產四十石餘。
妙滿寺 在同處。號妙塔山。日什上人之開基。日蓮宗
二十一箇寺之隨一也。方丈有古銅鐘。紀州日高郡道
成寺之鐘也。鐘外面有紀州日高郡矢田庄。文武天
皇勅願所。道成寺治鐘勸比丘別當法眼定秀權源萬
壽丸并吉田源賴秀合山諸檀越男女大工山願道願小
工大夫守長延曆十四年乙亥三月十一日之字。不
知此鐘何時入斯寺。凡銅鐘散在處々者多矣。西
本願寺鐘舊在廣隆寺。而有少納言入道信西之銘。
東福寺之鐘西寺之所。有也。相國寺之鐘日蓮宗妙覺
寺之所。有也。

要法寺 在三條京極。日尊上人之開基而日蓮宗二十
一箇寺隨一也。方丈有八幡太郎義家甲冑之宮。其蓋
上有義家之金字。實古代之物也。始藤原兼家公號
法興院。薨後中關白道隆公捨宅爲寺。號釋泉寺。
傳言其處則今要法寺之地也。

本誓寺 在三條河原町。本寺在伊勢高田鄉。故稱
高田寺。親鸞門徒覺信坊創之。
妙傳寺 號法鏡山。在妙滿寺之北。日意上人開山而

日蓮宗二十一箇寺之隨一也有七面明神之社

妙泉寺 在京極大炊御門日舜上人開基而日蓮宗二

十一箇寺之一員也有寺產少許

寂光寺 在京極大炊御門號空中山日淵上人開基

而日蓮宗二十一箇寺之一員也有寺產少許織田信

長公時此寺中本因坊僧算沙之弟子宰相精園基召

見其術爾後自東武本因坊并將基巧手宗桂共

賜五十石之年俸自是後此坊住僧雖不知讀

經卷撰天性通園基者剃髮爲僧年々赴東

武謁見柳營凡園基將基之奕徒立家受祿是本

朝之流風也

聞名寺 在同處故稱大炊道場本尊彌陀安阿彌之

所刻也始在三條或稱一條道場又遷秋野道

場一逼上人之派也寺產有七十石舊爲天台宗之

寺其時有故建光孝天皇之塔于今存矣盲人多

參詣盲人傳言光孝天皇御子雨夜王子目盲天皇甚

哀憐之其餘波及一切盲人故爲瞽者賜若干

田地爲飯料此田今在上賀茂神領內依之瞽者

始自遠方來者無其所寓則先行上賀茂被鞠

養社家其後定京師之住宅盲人崇賀茂北野日

吉者非預此事依談平家物語而又別有其故

正行寺 淨土專念宗而在京極中御門本尊彌陀法然

上人被謫讚岐時所隨身之本尊也

見性寺 在京極裏寺町南淨土專念宗而知恩寺之末

寺也村井長門守貞昌之弟主膳爲檀越此時達豐

臣秀吉公而寄三十石餘之寺產

三福寺 在見正寺之北淨土宗而本尊彌陀也又有

夢見地藏傳言染殿后有疾夢中得此地藏之靈驗

而立愈矣寺產有二十石餘傳言此寺始在宮辻宮

辻五條通六波羅東建仁寺之東南也

行願寺 在京極中御門北本尊觀音所謂三十三處巡

禮之隨一也開祖行圓常著裴故世謂革堂在一條

北俗曰一條革堂行圓甚崇上賀茂明神故堂前

石塔之中勸請賀茂明神天台宗僧守之屬青蓮院

門主

遣迎院 在行願寺之北天台律法相淨土四宗兼學之

地面與般舟三昧院相通

廬山寺 元在一條猪熊今在遣迎院之北宗門同

上本光禪仙和尚開基也有寺產五十石餘元三大

師自作之雕像每月三日十八日二十八日開帳男女群聚方丈有_二法然自筆撰擇集之草本_一筆跡殊絕又有_二慈惠遺誠一卷并聖寶之墨痕_一後小松院時第十世大用照珍侍者十八歲而入_レ唐歸朝日永樂二年春正月十三日古竺住山惟雲帷實有所_レ贈_二照珍侍者_一之一軸_レ此僧將來之古佛等有_二若干_一此寺始在_二並岡東_一清淨華院 在_二廬山寺之北_一淨土宗四箇之本寺之一員也傳言 清和天皇貞觀四年慈覺之開基而元爲_二禁裏內道場_一爾後移_二禁闕之外_一誓誓上人再_二興之_一專爲_二淨土宗之寺_一第三世等熙上人俗稱出_レ自_二萬里小路家_一始住_二寺中松林院_一然後移_二住方丈_一曾爲_二後圓融院_一後小松院 稱光院三帝之戒師_一勅賜_二佛立惠照國師之號_一也此僧淨土宗國師之始紫衣之始而四脚門亦始_レ自_二斯時_一也黑谷金戒光明寺一旦廢壞歷_二年無_一住職_一等熙再建_二寺院_一爲_二退休之地_一其後金戒光明寺亦爲_二四箇本寺一員_一也

本禪寺 在_二清淨華院北_一號_二光了山_一日印上人之開基而日蓮宗二十一箇寺之隨一也久久保家爲_二檀越_一也故有_二代々塔_一又有_二蓮養院日淨尼公之塔_一是久久保氏之女也

大興寺 在_二本禪寺北_一本尊藥師等持院尊氏公之持佛也古多_二寄附之庄園_一元天台宗而在_二京北芝町_一故世稱_二芝藥師_一今禪宗僧守_レ之屬_二東福寺_一

極樂院 在_二大興寺之北_一本尊毘沙門而惠心僧都開基也又有_二惠心所作彌陀之像_一管神所作之大黑天運慶所_レ刻之惠美須像_二元天台宗而鹿苑院義滿公歸_一依之_一一遍上人再_二興之_一而爲_二時衆_一有_二寺產十八石_一

東北院 在_二極樂院北_一桓武天皇遷都日使_二傳教_一王城鬼門造_二寺院_一號_二東北院_一勸_二請安藝國嚴島辨財天_一坂上田村麻呂主_二經營之事_一爾後法性寺關白忠通公甚尊_二崇之_一庭隅有_二和泉式部塔并軒端梅_一天台宗僧守_レ之

真正極樂寺 號_二鈴聲山_一又專稱_二真如堂_一本尊彌陀如來慈覺大師之所_レ作而其始在_二叡山_一圓融院永觀二年本尊入_二山門戒算上人夢_一曰爲_二衆生利益_一欲_レ出_二聚落_一然三塔衆徒不_レ肯_レ之戒算不_レ能_レ止先移_二斯像於雲母坂地藏堂_一又入_レ夢告白神樂岡邊一夜檜木千本須_レ生是處則佛法有緣之地也須_レ遷_二斯處_一遂果 然其處則神樂岡邊東三條女院離宮之內也又與_二女院之所_一夢合於是先移_二離宮_一東三條女院

一條院之母公也 一條院正曆三年秋有勅建寺戒
 算上人天喜元年癸巳正月二十七日九十一歲而遷化
 東三條女院塔亦在此處 應仁兵亂時暫移 本尊於
 山門黑谷青龍寺 又遷 近江國穴太寶光寺 文明九
 年三月二十六日移 洛陽一條 近世移 京極今出川
 斯本尊如來諸人尊崇不淺與三條京極誓願寺彌
 陀爲一雙 寺僧天台淨土兼學之 中世以來山門
 院家上乘院代々住此寺 有寺產百五十石 每年
 自十月六日夜至同十六日朝有法事 是稱十
 夜 是因伊勢氏貞國靈夢之告始自此寺 近世誓
 願寺并其餘淨土宗寺院亦有此儀 本堂北有三元
 大師之像 相傳所 在山門之元三大師之畫影并盧
 山寺之所 有卿公覺起之筆也 此像元三大師之所 自
 雕刻也 每月三月十八日二十八日開帳取闍之人常
 不絕此闍中華所用觀音百籤之法也 宗門徒謂慈
 惠爲觀音化現 故用之 依以觀音百籤 附託之
 者也 又有稻荷神像 每年二月初午日諸人參詣
 相國寺 號萬年山 洛陽五山第二位而春屋妙葩之開
 基也 然讓開祖於夢窓國師 而鹿苑院相國義滿公
 爲大檀越 故號相國寺 足利家代々之寺多在此

檀頭古封境廣大也 今室町一條總門之辻者古此寺
 之外門法界門之所 有也 古鎮守八幡宮在烏丸通一
 條北今所謂八幡町也 又有鹿苑院町 是又鹿苑院
 蔭涼軒之所 有也 寺產有千六百五十餘石

普廣院 相國塔中一塔頭也 此院有藤定家塔 傳言時
 雨亭亦古在此地 案此院中元半冷泉家之宅地而所
 寄附此院之文書在院中 然則斯邊藤定家卿之
 宅而則寺家廟乎 時雨亭跡在大歡喜寺并嵯峨小倉
 山者是皆謬傳而古在此處者爲必乎
 立本寺 號具足山 日蓮宗日霽上人之開基而日蓮宗
 二十一箇寺之隨一也 在京極今出川北

本滿寺 在立本寺之北 號廣布山 日蓮宗日秀上人
 之開基而日蓮宗二十一箇寺之隨一也 堂內有日蓮
 上人木像 宗門徒尊崇不淺 時々開帳人舉而拜之
 相傳中古北山芹生里土中有誦經之聲 土人怪之
 則掘之 果得此像 且像唇潤依之誦經知此像之
 聲也 自是一村悉爲日蓮宗 爾後安置此寺 一說
 斯像(原本以下無)

十念寺 在本滿寺之北 而淨土宗也 此寺 後村上天
 皇皇子眞阿上人之所創建 而本尊彌陀惠心之所

作也眞阿之事跡在二念寺之條下緣起一卷又佛鬼軍圖是土佐家之筆也

佛陀寺 在二十念寺之北淨土宗門也相傳此寺古依二村上帝之勅而修念佛講太上天皇剃髮於此寺後花園帝後小松帝歸依斯寺此時住職曉堂法閑粗解文字與大德寺一休善友後柏原院有再興之繪旨

阿彌陀寺 在佛陀寺之北淨土宗而開山號生譽清玉織田信長公生害時本能寺燒終後清玉赴其場聚骨灰葬此寺灰中有信長公所常著衣服之餘燼以是爲徵別奉葬埋堂有信長公并信忠公之雕像及戰死百二十人之連牌

光明寺 淨土宗而在阿彌陀寺北本尊宇都宮賴綱入道蓮生之持佛也寺則蓮生之所創建也

安樂光院 在光明寺北與泉涌寺中安樂光院爲一同寺始在上立賣北安樂小路而爲十二光院之一員近世移斯處於泉涌寺亦建之

慈福院 在安樂光院北淨土專念宗而爲知恩寺之末寺也

大歡喜寺 始在千本南頗北今所稱之舊歡喜寺町

夢嵩之派而佛光之法孫金潭之開基也又所北頗之大聖歡喜寺弘法大師之開基而爾後江西和尚再與之爲禪刹又爲眞言宗今寺絕大聖歡喜

天堂一字殘大歡喜寺屬天龍禪寺有寺產三十石住僧代爲大聖寺住尼之戒師然此歡喜寺一旦無住職時自大聖寺置留守之老尼自茲後直爲尼寺藤定家卿時雨亭在舊歡喜寺中此南般舟三昧院中有定家塔其南有定家辻子依之則此邊古爲定家卿之別莊者乎相國寺林光院始在西京此處并嵯峨小倉山下亦有時雨亭之跡未孰眞然所舊歡喜寺之時雨亭近是者乎

長福寺 在歡喜寺北而爲泉涌寺之末寺本尊正觀音別有管神所作甲冑觀音之像

上下出雲寺 中古京北京極南北有上下出雲寺於斯寺眞濟法師有法華說法之事爾後寺絕桓武帝遷都十三年後遷幸神於上之出雲路一條北云其社今猶存然則上下出雲路舊名而此寺在其地因號

之者乎

大聖寺 今在禁門內開祖玉岩尼者西園寺家之息女而爲禪宗之尼寺此住尼爲尼衆第一之座位

西園寺 在長福寺之北淨土專念宗而知恩院之末寺

也此寺舊在大德寺西北始號常住心院後改西

園寺則公經公之創建也本尊彌陀并地藏惠心之所

作也增鏡載西園寺在鞍馬道案公經公家富而有

威權故自西園寺連大北山鹿苑院爲別莊者

乎然鹿苑院義滿公請此地爲退隱之地賜尾張

國松枝庄於公經公自其時此寺移京師公經公

以惠心所作地藏爲自己像于今在堂前

天寧寺 曹洞宗而在京極北

弘濟寺 在鞍馬口淨土宗而知恩院之末寺也後柏

原院爲檀越

本涌寺 在松崎日蓮宗而屬立本寺能化僧住之

所化僧多於日蓮宗是謂談所又稱學室也

妙泉寺 在同所日蓮宗妙傳寺之末寺也凡此村人悉

爲日蓮宗每年七月十六日夜男女聚此庭各唱

法華經題目作踊躍是謂題目躍山上以炬點

妙法二字

圓通寺 在幡枝近世園家贈左府基任公之息女園光

院文英大夫人捨宅爲寺安置觀音請妙心寺禿

翁爲住職禿翁讓開祖於景川建牌文英後光

明院及今上帝之外戚也依之爲勅願所

實相院 在岩倉三井寺門主之一員也

大雲院 在北岩倉山入唐沙門善惠大師成尋之所

創而爲天台宗然近世屬實相院門主山上有觀

音堂斯院住僧守之古王城四方山上納經而爲京

城之鎮護是稱岩倉是則北岩倉也一說唐僧鑑真

和尚之門徒法進曇靜思託如實等之末派真覺上人

以無二之志欲造大雲寺則奏圓融院則命

日野亞相敦忠卿被宣下勅願則真覺上人爲本

願

補陀落寺 今在小野市原元清原深養父之所創建

而真言宗延果僧正爲開祖安千手觀音此寺在

江文明神與靜原之間爾後寺絕今所存礎石

當時稱市原之堂誤爲補陀落寺然此寺貴布禰市

原邊之葬場也四位少將小野小町之畫影并有塔緣

起亦不足信

常壽寺 在同處淨土專念宗僧住之小野后藤歡子

塔存

鞍馬寺 號獅子頭山或謂松尾山大中太夫藤伊勢

人之所創也太夫歸佛尤篤常思欲得勝地安觀

音延曆之間依靈夢放白馬於城北乃從一童子以爲白馬靈畜也汝定知我夢地其馬至一山阿駐茅艸中童還告之大夫往見之宛如夢中適於茅裏得毘沙門天像大夫以爲我欲安觀音像今得天像願未果乎其夜又有夢告依之知觀音多聞異名同體則營一寺安置毘沙門天又別安觀自在像今所在堂西之觀音堂是也寺僧天台宗而青蓮院門主爲寺務中世峯延法師住此寺時大蛇蟠屈山門土人憂之時夏五月修護摩日中大蛇自北嶺來目如電舌如火延誦毘沙門咒蛇自斬爲段々三日後大夫來見段々發役夫五十人棄蛇靜原山俗呼其地稱大蟲峯今六月二十日竹功大蛇斬爲段々之遺意也古粟田右府藤在衛公常信鞍馬毘沙門天日々參詣携書冊於車中讀之主上偶尋問之事每度所携書中之事也故辨說如流因茲感其博識遂昇位進官是皆毘沙門天之靈應也每參詣其所居在本尊之東南至今謂進士間倭俗一室之中限一床稱何間其間又此山西北有僧正谷山門慈惠僧正爲魔接斯谷云

峯定寺 在鞍馬山之北六里許號大悲山觀音安坐之靈場也開基不知爲何僧今堂白河法皇之所建立而上梁銘有平清盛奉行之字有緣起一卷少納言入道信西代西念法師而所作也相傳一朝葛城大峯大蛇橫行故本山修驗道山伏不能入峯斯時每年自丹波國弓削歷幾許山岳入斯峯依之斯山謂北大峯或稱大峯寺樓門有大悲山發心門之字爾後醍醐寺聖寶再入峯殺大蛇自茲當山山伏入大峯故此處廢矣古此寺僧天台宗而修驗道山伏也故屬聖護院門主今纔有一坊每年二月十八日修觀音會此時多風雨烈是世謂大悲山荒斯山樹木蒼鬱岩石崎嶇真幽邃之地也法勝寺執行俊寬謫鬼界島時隱妻子於斯地此事見于舊記古此地始屬丹波豐臣秀吉公時自斯山北方至一里爲山城界

金峯寺 在鞍馬山西北岩屋山相傳役行者雕刻不動像置斯處天德二年罹鬱攸之變今所存之本尊不動像弘法大師之所刻也護摩堂本尊不動傳教大師之所作也爾後管神亦造不動尊置斯寺今與院不動像是也是謂岩屋三尊本堂後有岩穴清

泉涌出是稱_三不動尊香水_一傳言治_三諸病_一故參詣人盛
簡携歸與_三有_レ病人_一則必愈云又有_三瀑泉_一狂亂之男
女誘_三來斯處_一日夜令_レ灌_三瀑泉於頭上_一則忽如_レ舊云
是謂_レ被_レ打_レ瀑或稱_三瀑籠_一俟俗男女或一七日或二
七日之間發_三祈願_一而在_三神社佛閣_一謂_レ籠參籠之謂
也今眞言宗僧守_レ之

正傳寺 在_三西賀茂_一始元菴普寧居_三東山吉田敬田寺_一
爾後營_三一寺於今出川_一自書額曰_三吉祥山正傳護國
寺_一歸宋時留_三衣鉢於弟子東岩_一于_レ時賀茂神人多
受_三東岩衣鉢_一於是其徒勸_レ之移_三寺於西賀茂_一東岩
爲_三開祖_一曾鹿苑相國少年日屢來_三遊西賀茂_一始知
有_三此寺_一遂爲_三公府祈願所_一寺產有_三百五十石坊舍
六宇_一

靈源寺 在_三正傳寺北_一爲_三禪刹_一後水尾院之本願而
佛頂國師一絲文守爲_三開祖_一後水尾院之勅額有_三
靈源寺之三字_一

神光院 在_三靈源寺之東_一眞言宗而屬_三醍醐寺_一
西念寺 在_三上賀茂南堤下_一其地凹也故世稱_三窪御堂_一
行基之開基而本尊彌陀惠心所_一雕刻也今淨土專念
僧守_レ之相傳西行法師暫住_レ馬庭前植_レ梅愛_三翫之_一

因詠_三登迷古加志梅佐加里奈留我宿之歌_一爾後謂_三
此梅_一曰_三登迷古加志之梅_一到_レ今有_三殘種_一其色淡薄
其香芬芳堪_レ愛一說登迷古加志之歌所_レ題_三屏風梅
畫_一也

法光寺 在_三賀茂川西南_一本尊藥師傳教大師之所_レ作
也凡此邊有_三四箇所藥師_一所謂岡本大田竹鼻黑土而
法光寺地則黑土也今淨土宗僧守_レ之

妙覺寺 號_三本覺山_一日蓮宗二十一箇寺之隨一而日實
上人之開基也中興祖日與上人立_三不受不施之法
義_一依_レ之配_三對馬島_一無_レ幾而被_レ免古法眼狩野元信
爲_三此寺之檀越_一方丈有_三畫數幅三十番神社之畫棟_一
亦元信之所_レ筆而于_レ今存矣

本法寺 在_三妙覺寺之南_一號_三叡昌山_一日蓮宗二十一箇
寺之隨一也開祖日親上人諫_レ普廣院義教公之被
疎_三日蓮宗_一信_三禪宗_一普廣院大忍使_レ入_三獄舍_一又以
火燒_レ鍋乘_レ熱蒙_三上人頭_一然不_三動搖_一自_レ是此人所
書稱_三鍋蒙曼陀羅_一其外靈驗多依_レ之守獄小吏悉
拜_三戴法華經_一爲_三日親徒_一今難色等多爲_三日蓮宗_一職
此由也此時本阿彌清信亦因_三刀劍之故_一觸_三普廣相
公之怒_一與_三日親_一同在_三獄舍_一舍中歸_三依日親上人_一

互出_レ獄後剃_レ髮日親號_レ之稱_二本光_一。凡本阿彌一家名上置_二光字_一。始_レ自_二本光_一。悉爲_二日蓮宗_一。是亦因_二日親之故_一也。方丈有_二名畫數幅_一。每年七月十七日曝_レ之。有_二寺產二十石餘_一。

寶嚴院 天龍寺之末寺而在_二本法寺之前町_一。有_二寺產少許_一。傳言寶嚴院元細川賴久入道常久之昭堂而始在_二谷地藏院_一。開其天龍寺夢窓國師之弟子兩度入唐僧觀中_二三諦也_一。中世廢壞近世三叔和尚有_レ故得_二豐臣秀吉公之恩顧_一。依_レ之再_二興此寺_一。自_レ茲寄_二寺產三十石_一。

寶鏡寺 在_二本法寺西_一。尼寺而禪宗也。代々姬宮尼公爲_二住職_一。

瑞華院 在_二寶鏡寺北_一。淨土專念宗尼寺也是稱_二南御所_一。按元斯院北有_二本院_一。因_レ在_二其南_一而稱_二南御所_一者乎。淨土宗尼寺而代々官家之息女爲_二日野家之養子_一。爲_二住尼_一。近世屬_二寶鏡寺_一。

總持寺 在_二瑞華院北_一。爲_二同宗門_一。是亦代々官家之息女爲_レ尼而住_レ之。

興聖寺 在_二天神辻子_一。山號_二圓通_一。慶長年中虛應禪師開_二基之_一。專唱_二禪宗之旨_一。兼學_二台密_一。近世今出川藤

經季卿飛鳥井藤雅宣卿奏_レ朝爲_二勅願所_一。大應寺 在_二興聖寺之東_一。號_二金剛山_一。舊泉涌寺之末派。

悲田院 在_二斯地_一。後花園院應仁年中亂攘之間於_二花御所_一。崩于_レ時泉涌寺爲_二兵火_一。燒故竊奉_レ葬_二于悲田院_一。爾後斯院移_二泉涌寺_一。然陵今尙在_二大應寺竹林之中_一。大應寺亦虛應禪師之所_レ創也。然以_二日蓮宗本國寺僧意束始爲_レ受_レ業師_一。是爲_二開祖_一。而屬_二興聖寺_一。檀越有_二洛人平澤了佐者_一。天性得_レ別_二古人筆跡之真贋_一。也。世稱_二古筆見_一。又謂_二目利_一。倭俗凡別_二諸物之真贋_一。謂_二目利_一。了佐寄_二古人之墨痕數幅_一。置_二于斯寺_一。報恩寺 中世在_二今有栖川殿之邸地_一。爾後移_二小川通上立賣町之北_一。元天台淨土而號_二法園寺_一。後土御門院時一風玄譽上人再_二興之_一。改號_二報恩寺_一。後柏原院文龜二年賜_二宸筆之額_一。自_二斯時_一。專爲_二淨土一宗_一。屬_二東山知恩院_一。本尊彌陀并觀音勢至其安阿彌之所_レ雕刻_一。而樓門二王亦同作也。相傳自_二伊賀國八幡宮_一。來也。鐘樓彩畫古代之物也。寺物有_二牙舍利_一。則有_二傳來之記_一。舍利則室町女院被_レ寄_二附興聖菩薩_一者也。爾後令_レ安_二置葉室淨住寺_一。後醍醐天皇癸酉年凶徒掠_二奪葉室衣笠邊寺物_一。佛閣等遂爲_二焦土_一矣。

此時淨住寺亦罹火災。牙舍利并靈寶等分散。光明院曆應三年重求。得牙舍利。遂被置禁闕。後柏原院文龜元年舍利并佛具等賜當寺。自茲每年二月十五日佛涅槃安舍利於堂。修法會。曾豐臣秀吉公在聚樂城。日時々來臨斯寺。秀吉公之侍尼仁叔孝公首座爲斯寺之檀越。今門前板橋此人之所設也。于今有寺產少許。

本門寺 在上立賣之北。日蓮宗二十一箇寺之隨一而號卯木山。有日蓮上人像。宗門徒特尊崇之。

妙蓮寺 日蓮宗二十一箇寺之隨一而日中上人之開基也。有寺產十石。

雨寶寺 在妙蓮寺西。弘法大師之開基而安大聖歡喜天像。元大聖歡喜寺之一字也。大聖歡喜寺絕此一字殘斯地。前町謂聖天辻子。

岩神寺 在聖天辻子。而真言宗也以大岩石爲本尊。此岩元在聚樂城山里假山。爾後遷禁庭。時々有妖怪。依是被送岩於此寺。自是稱岩神。世人尊崇之。傳言有通乳汁之誓。故婦人特詣之。思誤石上神而附託之者乎。

本隆寺 在五辻之北。號惠光山。日真上人之開基而

日蓮宗二十一箇寺之隨一也。堂前有無著尼汲水之井。

瑞龍寺 在村雲。關白秀次公有事後母公瑞龍寺爲尼創此寺。修秀次公之追寢。世稱村雲御所。寺產附五百石。一說足利直義公於京師村雲創大休寺。爲菩提所。遂自稱大休寺。云々于時夢窓國師之法請有妙詰侍者。則直義公之歸衣僧也。請斯僧爲大休寺之開祖。此僧後爲相州鎌倉淨智寺之住職。號大同妙詰和尚。直義公於鎌倉亦建大休寺。京師大休寺則今瑞龍寺之地而世稱村雲妙吉。者妙詰之誤也。太平記所載亦誤妙詰。且爲天狗星之所化。是又虛誕之說也。按斯義足取之者乎。

不斷光院 在近衛殿櫻御所之中。則爲內道場。博陸侯前久入道龍山公以後有代々之塔。存木牌或畫影。淨土專念僧住焉。屬清淨華院。凡古此邊有二光院。所謂安樂光院不斷光院智惠光院等是也。

三時知恩寺 在入江辻子。故稱入江殿。代々攝家之息女多爲住尼。淨土宗門而清淨華院之派也。近世屬知恩院。

安樂光院 在上立賣北安樂小路。而爲淨土宗門之

尼寺 安樂小路今俗稱 安南小路

寶慈寺 在 木下 前所謂景愛尼寺之一塔頭也景愛寺

絕而寶慈一院存矣景愛寺無學祖元爲 開祖 祖元像

并法嗣如大無著尼兩像于今在 寶慈寺

夢覺寺 在 無學辻子 元天台宗而本尊地藏也寺僧傳

言本尊地藏有 夢中之靈驗 故號 夢覺寺 案誤 無

學 者乎今爲 淨土宗 古斯邊景愛寺境內也景愛寺

尼寺五山之隨一而以 無學祖元 爲 開山 故此町亦

謂 無學辻子

西林寺 在 京北柳原玄番町 號 羽休山西林寺 或

稱 飛行院 本尊勝軍地藏而此寺亦慶俊僧都之所

創也洛陽六地藏之一員而今淨土專念宗僧守之或

呼稱 木槿花地藏 或雖 稱 毳毛堂 是謬傳乎按中

古此寺廢壞四際挿 木槿花 以代 列塙 故俗稱 木

槿花地藏 者乎

轉法輪寺 日本王城之北有 瑞龍山轉法輪寺 正應元

年初建貞治年中延用和尚文珪中興應安二年文珪使

明奏求 輪藏記 大祖勅 學士宋景濂 撰 之見 濂

護法錄 然斯寺今考之不詳其所 有惜哉

楞伽寺 在 千本五辻 岡屋關白兼經公爲 東福寺虎

關師鍊 建之然今寺絕土人稱 虎關屋敷 斯寺舊記

大報恩寺 在 北野千本地 本尊釋迦也故俗稱 釋迦

堂 曾貓間中納言光隆卿家司岸高拾 千本宅 爲 寺

請 如琳上人 事在 興彥龍半陶臺大報恩寺幹緣疏

或言今本堂藤原秀衡之所 建也方丈謂 養命坊 其

坊內有 寮能登守平教經幼少時學 筆法 處也俗謂

手習間 倭俗學 書法 謂 手習 然據 幹緣疏 則時

代齟齬矣護摩堂本尊不動而又有 管神以 梅樹 所

作之十一面觀音像 中古天台宗也近世板倉伊賀守

勝重爲 京尹 日住僧違 法依 之放 此僧 於 茲附

與智積院僧正玄壽 爲 真言新義之道場 而爲 代々

能化退隱之地 寺產有 百石

(補遺) 相傳求法上人義空承久元年假構 小堂 安

一佛十六弟子像 一說貞應二年 義空俗姪興州秀衡

爲 上人 建 大堂 嘉禎二年奉 綸命 弘 通大小乘

三宗 貞治二年二月等持院尊氏公降 府命 令 行

涅槃講 自 是爲 常典

引接寺 在 大報恩寺之西北 與 上品蓮臺寺 一派而

爲 新義真言宗 本尊閻羅王佛工法橋定朝之所 作

而左掌合縫內有_二七條勅願所佛所家定朝作之十一_一字_一則定朝之筆跡而傍有_二定勢重加_一彩之字_一是又定勢之筆也引接寺額世尊寺家行季之筆而鐘弘曆年中之鑄造也方丈前庭有_二普賢象之櫻_一每春花開時住僧折_レ枝獻_二所司_一則賜_二米三斛餘_一以_レ是爲_二十日念佛會之資料_一斯念佛會與_二壬生地藏寺之會式_一粗相同共融通念佛之餘流也寺中有_二西達院并白毫院_一斯院始在_二大德寺總見院之地_一總見院建立之時移_二斯處_一本尊釋迦亦定朝之所_レ作也

(補遺) 千本引接寺 舊記云三月晦日鎮花法會依_レ舊詩寺從_レ之後小松院應永年中天下餓死人多分_二諸寺_一修_中踊躍念佛慈眞房良快修_二鎮花法會_一時一條經嗣公捧_レ花云按今千本引接寺并壬生地藏寺三月念佛會鎮花法會之之餘流乎又一說每年三月十日安樂花神事亦鎮花法會之微意也不_レ知_二然否_一

大德寺 號_二龍寶山_一後醍醐天皇之勅願所而大燈國師之開基也赤松圓心及則祐亦歸_二依國師_一而助_二興隆之資_一故住職入院時爲_二赤松_一亦燒_レ香洗心子玄惠法印捨_レ財建_二方丈_一今雲門菴面則爲_二大燈塔所_一三門連歌師宗長所_レ建而後千利休設_二閣於其上_一置_二己

像_一依_レ之豐臣秀吉公怒_二僭踰_一卸_二其像_一而肆_二於一條反橋_一也寺產有_二二千二百石餘_一四至境內甚廣而元二十五院之外所_二新構_一之寮舍追_二年多矣_一二十五院中總見院豐臣秀吉公爲_二織田信長公追薦_一創_二建之_一故有_二信長公信忠公之雕像_一天瑞寺豐臣秀吉公之母公大政所墳墓之所_レ有也大光院大和大納言秀長卿之寺而始在_二伊賀國_一爾後移_二于斯寺中_一眞珠菴有_二一休像_一大川院之假山東山殿同朋相阿彌之所_レ作而始在_二室町家臣水淵氏之家園_一爾後移_二斯庭_一也方丈及諸塔頭多_二名畫古器_一

(補遺) 妙覺寺 在_二京北_一舊尼寺而屬_二大德寺_一此時大燈國師所_レ置之壁書于_レ今殘近世爲_二日蓮宗之寺_一大虛菴 在_二鷹峯_一鷹峯地板倉伊賀守勝重奉_二束武之命_一令_二下本阿彌光悅開_二斯地_一且置_中馬驛_上遂使_レ監_二斯處_一依_レ之稱_二光悅町_一丹波往來之人馬得_二其便_一光悅日蓮宗而建_二大虛菴於斯處_一請_二本法寺中興壽院日達_一爲_二開祖_一而建_二勝重之塔_一四月二十九日正當忌日使_二村民_一祭_二之光悅死死葬_二斯寺_一自_レ茲號_二大虛菴光悅寺_一光悅之孫空中院光甫日諦亦相續監_二斯地_一又葬_二斯寺_一近世由信院日得光悅寺中別建_二一

院置僧十員晝夜不_レ退轉使_レ唱法華題目是謂_二常題目_一

雲林院 在大德寺東南三代實錄十六卷云雲林院故無品常康親王之舊居也貞觀十一年二月十六日親王以_二斯院附_二遍昭_一曰深草天皇賜_二斯院於某_一天皇登遐某又爲_レ僧此處永爲_二天台精舍_一而與_レ爾勤行無_レ怠當_レ報_二罔極之恩_一云々相傳此處元嵯峨淳和兩帝游獵之行宮也爾後爲_二兩帝_一於_レ茲修_二菩提講_一云後醍醐天皇時此院屬_二大德寺_一今荒廢纔存_二一草堂_一世謂_二此村_一稱_二宇治伊_一是誤_二雲林院_一者也

普明菴 元細川賴春之建立而號_二讚州寺_一在_二安居院今讚州寺之町_一近世大德寺中玉林院仙溪和尚移_二千束_一號_二普明菴_一有_二寺產少許_一

石像寺 在_二千本通五辻北_一本尊彌陀慧心之所_レ作也淨土宗門僧住_レ之而爲_二知恩院之末寺_一也堂前別有_二大彌陀之石像_一故號_二石像寺_一堂東竹林中有_二藤原家隆塔_一依_レ之稱_二家隆山_一

西福寺 始在_二西洞院東出水通_一傳言古斯處有_二獄舍_一則爲_二刑戮之場_一也中古梟_一首於獄舍門外依_レ之梟首專曰_二獄門_一斯寺在近隣_一故爲_二結緣功德_一薦_二刑

死人_一依_レ之世稱_二獄門寺_一本尊藥師像聖德太子之所_レ作也曾豐臣秀吉公朝鮮征伐時於_二彼地_一士卒得_二韓人之首級_一則厭_二海路之迂遠_一殺_二其首之耳鼻_一贈_二日本公大佛殿前築_一大塚_一納_二耳鼻於其內_一建_二塔於其上_一世號_二耳塚_一蓋效_二源賴義所_一建近江國耳納寺之例_一者乎斯時秀吉公請_二西福寺僧_一而欲_レ使_レ遂_二耳塚之供養_一然寺僧不肯_レ之秀吉公大怒_レ之遂沒_二收寺產_一移_二寺於洛北七野社邊_一

般舟三昧院 在_二千本大宮西_一天台真言禪律四宗兼學之道場也而寺產有_二三百石_一舊伏見皇居之內道場也爾後爲_レ寺於_レ茲修_二般舟三昧法_一故則爲_二寺號_一依_レ在_二伏見指月山_一號_二指月山_一天正年中豐臣秀吉公築_二城於伏見山_一時移_二斯寺於京師_一近世主上崩時奉_レ葬_二東山泉涌寺_一於_二斯院_一修_二追薦之法事_一方丈有_二後水尾院之畫影_一畫妙法院宮堯親親王之筆而贊後水尾院御製則宸翰也方丈後有_二藤原定家塔_一則石地藏也傳言斯處定家卿之宅地而時雨亭亦在_二此地_一也前町南號_二定家辻子_一

淨福寺 在_二一條北聚樂_一淨土宗而屬_二知恩院_一有_二後奈良院之勅額_一凡知恩院末寺住職出世香衣之繪旨

內侍執奏而降綸旨於知恩院方丈一 方丈住職招出
世僧於知恩院而授之則拜戴而入寺不及參內
末寺中十九箇寺住職直參內而受綸旨是爲榮

燈明寺 在聚樂佐竹町 日像上人の開基而元號學

養寺 日蓮宗立本寺之末寺也本尊釋迦日像上人修

開眼供養 脇侍不動愛染傳教大師之所作也曾

陽成院時有故於斯寺 一日有百燈供養 自茲

改燈明寺 則客殿有後陽成院宸翰燈明寺之勅

額

清和院 在北野七本松東 本尊觀音而始在京極河

崎 故世謂河崎觀音 清和天皇之勅願所而眞言

宗僧守之有寺產四十石

(補遺)稱名寺 始在靈山爾後移二條鳥丸或稱

秋野道場 一逼上人之派也曾徹書記暫寓之屢有

倭歌之會近世移大炊道場聞名寺之中

(補遺)妙顯寺 在京北安樂小路西開祖大覺上人妙

實始字月光及二十七八歲在嵯峨大覺寺遂歸日

像上人爲師資關斯寺爲洛陽日蓮宗之本寺

二十一箇寺古於此諸寺被
行恒例即讀經

廣隆寺在太上出雲寺在京下出雲寺同常住寺

珍皇寺在清水清水寺在東法觀寺坂在八聖神寺

東寺在坂西寺在九延曆寺比叡法性寺九條貞觀寺在伏極

樂寺在深元慶寺在山仁和寺在並祇園在洛法成寺近衛北

鴨神宮寺在上頂法寺在東洞院西南佐井寺

六勝寺

法勝寺承曆元年十二月二十八尊勝寺法勝寺西康和四年七月二

圓勝寺大治三年三月十三日最勝寺尊勝寺東元永元年十月二

勝寺保延五年十月六日延勝寺久安五年三月二十日

尼寺五山

今不詳其處竊考之通玄寺開基智泉尼而今曇華院

古通玄寺之一塔頭也景愛寺開基如大尼而在京北松

木島也今寶慈寺古景愛寺之一塔頭也檀林寺開基檀

林皇后而在嵯峨惠林寺不詳開基今京北寶鏡尼寺

之西北有法慈寺或稱南御所是則古惠林寺之一塔

頭也護念寺不詳開祖今方廣寺大佛殿北慈芳禪院

邊田疇之名有護念寺之號古在斯處乎

(補遺)

近世准西國三十三所觀音巡禮而於洛内外定三

十三所兒女甚得其便所謂頂法寺六角堂京極長吟

寺下御靈社側行願寺草堂新長谷寺吉田寺高臺寺門前

觀音同南隣青龍寺清水坂地藏院清水寺同奧千手堂同
朝倉堂泰產寺六波羅密寺愛宕寺蓮華王院泉涌寺中楊
貴妃觀音同善應寺同所新熊野法性寺東九條淨光寺東
寺中松原大宮長延寺松原妙壽院大宮祥雲寺北野觀音
寺西京西蓮寺大將軍村長寶寺同所地藏堂北野東向觀
音金山天王寺清知院是也

七觀音所謂草堂河崎吉田寺清水寺六波羅密寺六角堂
是也

十二所藥師所謂本興寺芝石藥師毘陽寺藥師福勝寺藥
寺誓願寺藥師圓福寺藥師雙林寺藥師因幡堂藥師布袋
藥師粉糟藥師北野德松院藥師祇園觀慶寺藥師是也
七所藥師所謂祇園觀慶寺八幡山護國寺太秦廣隆寺蓼
倉法雲寺延曆寺珍皇寺平等寺是也

六地藏所謂賀茂御泥池或謂御菩薩池山科伏見鳥羽
桂太秦是也近世斯外又定兩六地藏

淨土宗四十八願之四十八箇寺詣又日蓮宗百箇寺詣同
二十一箇寺詣近世各宗門徒定之

近世又每月七日并己亥日洛内外三十所辨財天女擇
次其處二日之中巡禮者多

雍州府志卷四終

雍州府志卷五

寺院門下

葛野郡

觀音寺 在北野社南。山本左大臣之建立也。舊爲北

野社神宮寺。而眞言宗也。本尊觀音。皆神之所。自刻

而向東方。故世號東向觀音。又稱朝日觀音。有

菅神自畫像。比世之所。有則特精絕也。律宗無人如

導中興之。到今屬東山泉涌寺。又稱朝日觀音。

者在本社西。而向南。

經王堂 名願成就寺。在北野天滿宮南。鹿苑相國義

滿公討山名氏清。遂於內野大敗之。得氏清首。

氏清無雙之勇士也。故義滿命士卒載其首於三方

臺。使麾下人各拜之。誠死後之榮也。倭俗高貴食膳

以檜木造之。同以檜板高著。脚其脚板左右并前

而鑿圓穴。是謂三方臺。前後左右有圓穴者。是

謂四方臺。古高貴中依其品。有用三方四方之

差別。今悉用三方者。一說或謂三峯膳言其脚鑿

圓穴。其上有三角形如三峯之聳。依稱之云。然後

爲戰死人。建斯堂於內野。埋氏清首於堂。良隅柱

下。於茲使衆僧轉讀法華經萬部。經王堂額。鹿苑

相國之筆跡也。方印有「大樹蔭涼之四字」。義滿公會

於相國寺中。營一寮舍。名稱「蔭涼軒」。爲習靜之

處。故如此。爾後鹿苑院蔭涼軒住職。交爲僧祿司。爾

後移今處。近年斯堂廢壞。故毀堂別建小堂。安置

舊本尊釋迦。嗚呼惜哉。斯堂智積院住持之所。知而大

報恩寺住職退隱地也。故經王堂額。今在大報恩寺。

東光寺 在經王堂南七本松之西。始在法金剛院中。

本尊彌陀。慧心之所。刻也。京極西光寺法譽上人住。斯

寺中興之。相傳豐臣秀吉公之愛妾松丸殿在。京時

一日詣斯寺。甚歸。依法譽上人。嘗謂上人曰。今

所。有之本尊。雖爲靈佛。至小也。予家有秀吉公所

安持之彌陀。臨終後須寄附斯寺。無幾而松丸殿

逝矣。先臨終之期。寄斯寺。今大像彌陀是也。秀吉公

甚崇斯佛。雖赴戰場。必携笈中。故稱陣佛。今

厨子則笈也。所負之繩索跡猶存矣。

華開院 始在京極北。近世移西京。元天台宗而四辻

宮善成勤修之地也曾伊勢三郎義盛爲檀越至近世有義盛所著之甲冑今蝶紋幕存而已後深草院爲中興之大檀越近世爲淨土宗而屬清淨華院

壽命院 在西京紙屋川東元律院而屬東山泉涌寺與寺中新善光寺爲通用近世遷斯院於院泉涌中而爲一院

法華寺 在西京日蓮法孫日像始唱宗於京師諸宗拒之爾後奉詔而住洛一日遊化北野取芻蕘爲座演法談遂其處建寺

長寶寺 在同所本尊觀音菩薩之所作也眞言宗僧守之

西王寺 在同處元北野神宮寺也近世爲禪利屬近江山上永源寺

地藏院 在同處紙屋川西本尊地藏行基之所作也傳言鹿苑相國義滿公建鹿苑院時義滿公斯所構木屋其中所安置也故稱木屋地藏倭俗爲家居經營別設假屋是謂木屋然非是斯本尊行基之作而元在攝州毘陽寺毘陽與木屋倭語相同故誤毘陽謂木屋者乎

慈眼寺 在西京東南曹洞宗大源派也始在石屋辻子今其處謂慈眼寺辻子曹洞宗祖永平寺道元常謂京師繁華地而非沙門之所可居也故洞家寺院稀矣今所所在京師者斯寺并宗仙寺及天寧寺之外不知其餘

石不動院 在大北山本尊石地藏弘法大師之所雕也于今眞言宗僧守之

(補遺)上善寺 在西京東坂本西教寺之末派而尼衆受戒之地也

鹿苑寺 在大北山元西園寺公經公之山莊而斯邊建西園寺安置彌陀大像鐘中華之物也遣使請置之置是寺鐘今猶存鹿苑相國義滿公剃髮號道義請斯處爲退隱之地別賜尾張國松枝庄於西園寺家斯時西園寺亦移他處應永四年相公創北山第一相國自書鹿苑院額揭之庭設三重閣第一號法水院本尊釋迦左右有觀音勢至西境有夢窓國師之像并鹿苑院道義之像第二號潮音洞有自然木之觀音并四天王之像第三號究竟頂額後小松院之宸翰也斯床三間四面也以板一枚爲床未見有如此之木也凡閣之內外悉貼

金箔_二故世稱_二金閣_一斯內有_二八境_一所謂法水院潮音洞究竟頂鏡湖池岩下水龍門瀑銀河泉安民澤是也_一邊有_二九川八海石_一并有_二夜泊石赤松石赤松石則赤松家之所獻也應永十五年戊子三月八日相公催_二後小松院行幸_一駐_二斯地_一三箇日其間有_二數品之御遊_一和歌會日相公愛子義尙令_レ著_二關白之座上_一是爲_二當世之美談_一爾後強借之餘以爲放_二天子自立爲_レ王滅_二攝家_一以_二細川品山等_一須_レ使_二爲_レ攝籙_一於_二玆主上大駭賜_二太上天皇之尊號_一其後宅地遂爲_二寺夢憲國師爲_二開祖_一被_レ寄_二二百石寺產_一到_レ今屬_二相國寺_一近世光源院義輝公之弟周嵩爲_二斯寺僧_一世稱_二侍者御所_一義輝公被_レ弑時嵩亦被_レ殺贈號_二照山西堂_一(補遺)觀勝寺 在_二北山_一堯譽上人之開基而與_二東山觀勝寺_一又別也今不_レ詳_二其處_一

眞如寺 在_二鹿苑寺西南衣笠山麓_一十利之第三位而爲_二相國寺之末院_一故相國寺中眞如寺西堂交往_二焉斯寺等持院尊氏公之寵臣高武藏守師直擅越而爲_二夢窓國師之所創建_一也國師所_二自記_一上梁銘簡一雙于_レ今存矣倭俗謂_二棟簡_一佛殿本尊安_二寶冠釋迦_一須彌壇下有_二佛光國師之雕像_一傍有_二興東陵所作之碑

銘_二左有_二佛國像并夢窓像及無著尼像_一先_レ是既如大無著尼創_二正脉菴_一請_二佛光_一佛光遷化後納_二骨髮於斯地_一故有_二佛光并無著像_一無著世所謂千代野也後水尾院姬宮寶鏡院尼公葬_二斯寺_一依_レ之 後水尾院再_二興斯寺_一

等持院 在_二眞如寺西_一斯寺古在_二山上_一而爲_二眞言宗_一本尊地藏也爾後移_二今處_一夢窓國師中興開基而爲_二禪刹_一則天龍寺之墳寺也等持寺額鹿苑院義滿公之筆跡也池邊有_二大聖歡喜天堂并鎮守六請明神社_一聖天像山城國聖天安置_二三箇所之隨_一而爲_二靈像_一明神社等古眞言宗時置_二之者乎足利家代々昭堂慈照院義政公之所_レ建也本尊釋迦左右有_二阿難迦葉之兩像東西設_レ壇自_二尊氏公_一至_二義昭公_一存_二十五代束帶之雕像_一中央有_二果證之額_一是尊氏母公之牌處而登眞尊氏公之室也靈壽尊氏公之息女也佛殿豐臣秀賴公再_二興之_一故有_二牌號_一嵩陽寺殿秀山大居士_二寺產有_二二百石_一

永圓寺 在_二等持院之西_一如導律師無人之所_レ創建_二也屬_二泉涌寺_一泉涌寺之內亦建_二永圓寺_一本願寺 小菴在_二永延寺之內_一是亦無人之開基也本尊

彌陀左右觀音勢至各慧信之作也相傳古九條殿甚有_下好古佛之人此本尊亦曾在九條殿爲持佛其事具在九條殿之記云觀音勢至共躡踞屈膝而坐矣俗謂慇懃佛觀音今不知在何處倭俗屈膝對人曰慇懃又謂加志古麻留是宇津俱麻留之誤乎本尊彌陀勢至今在永圓寺

龍安寺 在本願寺之西號大雲山本尊釋迦左右有迦葉阿難之像鎮守住吉明神也斯地元官家德大寺公有卿之別莊也細川勝元請之爲寺公有卿之文書并相阿彌之地圖等于今存斯寺義天和尙爲開祖此僧爲妙心寺六祖之隨一也然義天讓開山於先師日峯故佛殿置日峯之雕像傍安義天之牌又有勝元黑袍束帶之木像此堂東福寺中一塔頭之昭堂也求之建此寺故屋宇所畫之迦陵嚩伽并蟠龍兆殿司之所筆也方丈舊勝元之書院也故其體與平常方丈異也勝元細川家六侯之一員而威權輝天下故私遣船於大明國索書畫器物絹帛等物其船檣以大明材造之爾後剖此柱爲方丈之板床其徑近五尺一條理堅密而非本朝之產也庭疊水石倭俗作假山是謂疊水石其石之大者九箇

是勝元之所自疊而其布置非凡巧之所及也故世之設假山者以是爲龜鏡豐臣秀吉公在聚樂城時屢來臨於方丈眺水石一日被詠和歌其時所陪坐之僧侶并家臣各獻詩歌其一會之短冊今在寺中養花院凡有塔頭二十一箇所其內清源院爲細川家代代墳墓之地有寺產七百二十石是皆勝元歸依之餘光也堂前有池島嶼縈廻是又勝元之所鑿開也至冬鴨鵝鴛鴦群集游泳水上洛人爲奇觀凡松蘿洛山處々出然以斯山之產馨香風味爲洛下第一世人爭求之

寶莊嚴院 古在仁和寺東龍安寺西南崇德帝長承元年十月七日鳥羽帝慶之崇德帝亦幸之舊址今猶存

妙心寺 號正法山大德寺大燈國師之法嗣開山慧玄之開基而花園法皇爲檀越也斯地元左大臣清原夏野之宅地而種群花於苑中依之號花園然法皇愛斯地之風景則爲行宮別於洛北賜宅地於夏野今花園村是也法皇深好禪法歸依關山終捨宮爲寺請關山慧玄爲住職玉鳳院有法皇之彫像是號微笑庵法皇以鏡自所模寫御

容之一軸稱鏡御影上有御製則宸翰也是亦在此院院之東有關山塔凡塔頭有五六十箇所寺中大心院細川政元之寺也古在京北大心院町近世移斯處方丈多書畫靈雲院方丈壁古法眼元信之所畫宿鳥圖世稱絕品傳言斯方丈元在洛北鞍馬寺故經營非禪刹之模樣畫亦自其時存者也傳言妙心寺應仁之亂悉亡滅南禪寺中一山派廷用和尚兼帶斯寺爾後利貞尼公誘妙心寺殘僧再興之日峯和尚爲中興祖云

仁和寺 寬平法皇之御菴室跡也故稱御室法皇葬後山宇多野故號宇多院光孝天皇仁和年中中興此寺號仁和寺伽藍巍々焉光孝天皇則葬此寺之西野陵今在田間弘法大師昭堂在北凡本朝主上稱御門故字多法皇讓位後所住之室故稱御門跡又謂御室依之仁和寺外不可有御門跡之號此外門主號皆崇其人而准門跡之例者也然則准門跡而非實也此寺之門主多皇子也近世寺中多植櫻依之於今御室清水爲一雙然清水東方而暖故花之開也速矣御室西方而寒冷故花之開也遲矣自爲洛人一春前後之觀並闕在寺之西南

本寺 古在仁和寺邊今不知其處

長泉寺 在雙丘南二岡之東溪淨土宗門善譽正雲之所開基也相傳豐臣秀吉公征伐高麗時軍士凱旋日携高麗一男子來晚年爲僧則當寺第一世正雲是也吉田兼好法師塚元在此溪西近世移此寺中而建塔然實在伊賀國田井庄詳見于陵墓門

法金剛院 在仁和寺之南承和元年夏四月嵯峨太

上皇降臨右大臣清原真人夏野雙丘山莊愛水石

同廿四年十月授雙丘東墳從五位下一天皇游獵時

駐蹕於墳上以爲四望之地故有此恩壬子冬雙

丘下池水鳥成群車駕臨幸池邊放鶴集拂之東

墳今在法金剛院境內北方稱內山前所謂池水之

所有今池上村是也石岩散在處々也此院始稱雙

丘寺文德天皇天安年中實爲寺改號天安寺眞

言宗而與太秦廣隆寺相通其後廢壞待賢門院再

興之號法金剛院自是爲律院今屬東山泉涌

寺中興祖律師廣修道御令男女混雜唱融通念

佛與嵯峨清涼寺壬生地藏院相比並融通念佛緣

起一卷于今在斯院一說圓覺上人製融通念佛緣

起六十六卷令置六十六箇國又於仁和寺邊

建九箇所道場。自造彌陀像九體。安置各院。今法金剛院本尊亦是九體之一員。也有七十石寺產。

安養寺 古在法金剛院之傍。華臺院願西之所。栖也。

廣隆寺 在法金剛院之西。本尊藥師而爲眞言宗。

有寺產六百石。始號秦公寺。相傳秦徐福來日本。其子孫皆稱秦氏。其裔秦河勝建斯寺。故號秦公寺。或謂桂林寺。又稱蜂岡寺。或號香楓寺。或稱三槻寺。終號廣隆寺。太子眞蹟額于。今存本尊藥師也。元聖德太子爲本願。故上宮王院有雕像。主上一代一度下賜御衣。而使著此像。每年二月二十二日正當忌日也。然此時俗人等參向天王寺。依之。八月二十二日修聖靈會。有舞樂也。桂宮院太子之所。住也。其內八角堂太子所。自修造。而有所手作之。如意輪觀音并中華佛工所作之彌陀及太子自作之像。寺中陽春坊法橋顯昭所栖槻坊之跡也。古來此寺僧一老二老勤松尾社供僧職。而有其料。每年八月朔日松尾相撲場有太秦一老二老之棧敷。倭俗構床見事處稱棧敷。是亦誤。假皮者乎。到今寺產有六百石餘。

(遺補)廣隆寺 太秦廣隆寺始名秦公寺。故什物有秦

公寺之印符。又廣隆寺三字有弘法大師之額。或號蜂岡寺。又稱三槻寺。桂林寺。香楓寺。

海生寺 在太秦里南市川村。開基僧不詳。本尊觀音。而曾深山和尚住之。此僧始不稱名字。又不不知何許人。常乘破車。在四衢邊道旁小堅隨其所欲而推之。輓之。里人名曰破車。或語以七百歲事。而自謂所歷試。因茲又呼七百歲。謁南禪寺直翁。侃大悟則剃髮爲僧號深山諱正虎。結庵于山階山中。然後移此寺。而遷化則有遺像。相傳此像村人自筑紫携來也。今黃葉派僧守之。

龍翔寺 在太秦西安井村內。山號瑞鳳寺。稱龍翔。南浦紹明之所住也。後宇多帝慕紹明之德行。遷化後建之。近世移寺於大德寺中。然南浦塔今尙在此處。故每年七月大德寺中龍翔寺輪住之僧來此。所有諷經。西方有嘉陽門院之塔。門院禮子。後鳥羽院之皇姬而任准后。爲賀茂齋宮。古此邊有齋院。依之葬此寺者乎。

法雲院 在廣隆寺西北。江州山上永源寺中興佛頂國師一絲文守之法嗣如雪開基。而并伊弉負尉爲檀越也。爾後爲鳥丸亞相光廣卿之寺。并伊弉負之牌號。

峻德院從四位上拾遺天崖文清也光廣卿之牌稱法雲院前亞相泰翁山公

心淨光院 在壬生故或稱壬生寺又號寶幢寺中

世屬三井寺故暫稱小三井寺云本尊地藏而傍有鑑真像世誤爲夜叉神也元真言律而屬南都招提寺開基不知爲何人一條院正曆年中快賢僧都中興之每年正月供餅圍若干於地藏有修正之法事男女參詣供米代其餅是謂勝餅傳言食之則萬事得勝利則勝軍地藏之微意也後伏見院正安年中圓覺上人住斯寺始修融通念佛於今每年自二月十四日至同二十四日有念佛其間土人作俳優是爲驚衆人之睡也是亦融通念佛之餘流也寺產有三十石餘緣起三卷在寺中地藏院書畫共爲勝矣此寺北有壬生忠岑宅地之跡今爲田矣忠岑所常用之石硯一面今同在地藏院

更雀寺 在四條西雀森始在姉小路大宮西相傳其地古勸學院之所也近世移斯處森豐前守再興之故號森豐山淨土宗西山立義而屬禪林寺

祇陀林寺 在七條南朱雀古號歡喜寺或稱廣幡院元廣幡中納言庶明公之遺跡而左大臣顯光公之

宅地顯光遂捨宅爲寺釋尊爲本尊多寄資料官人等亦相共助力諸堂成畢供養日聚衆僧及奏音樂爾後西方院座主院源於斯處修舍利會大臣公卿來會左大臣則授斯地於上人也猶須達長者之造祇園精舍故或號祇陀林寺傳言行基菩薩見斯地謂三災不動之地也文德天皇時遷和州元興寺所之勝軍地藏像又安一宇堂自是世或呼朱雀權現堂宇多法皇暫駐之民部卿清貫亦來棲云元天台宗也故源信僧都亦住斯寺今爲淨土宗屬知恩院

鹽通寺 在西七條鹽小路通故號鹽通寺天台宗也本尊藥師堂後有泉至清冷也依之稱水藥師不相國入道淨海被冒熱病汲此水浸身體云妙光寺在鳴瀧村北山法燈國師之開基也國師初號覺心地入唐於無門之室得印可歸朝于時二品內府華山藤師繼公爲長男右少將忠季之追薦改仁和別業號妙光禪寺依忠季幼名爲妙光也忠季令弟心性空岩同弟二品內府師信公遵父命奉寺迎法燈爲開山一祖法燈舉行勇爲第二世今屬東山建仁寺山上有紫金臺其景象

非筆舌之所及也。古此邊悉仁和寺之境內也。故仁和寺一代門主有紫金臺御室也。西隣藻蟲菴京師富人打宅某之所。建也有人丸堂。其像俊賴之所。雕刻也。其形模非凡作。打宅嗜詠歌。故有斯舉。

常樂院 在鳴瀧村。舊聖禪已講之開基。而本尊釋迦也。爾後爲仁和寺之別院。而專爲眞言宗。

蓮華寺 舊仁和寺之別院。而在鳴瀑村西山。然廢壞年舊矣。明曆年中江城富人樋口某造立五智如來石像。安置山上。令新義眞言宗僧權大僧都尊祐住之。寬文十三年乘圓又再興之。民間多不識寺名。直稱五體佛。

西壽寺 在鳴瀧北泉谷。爲知恩院末寺。本尊彌陀大像。慧心之所作。而在近江國堅田。近世安此寺一般若寺。在西壽寺之東北。眞言宗觀賢之開基也。坐禪石于今存。突然廢壞年久矣。近世洛下富商端氏某再興之。堂安文殊像。并置弘法大師觀賢之像。眞言宗僧住之。傍有彌陀堂。每年六月十五日仁和寺僧侶相聚修觀賢忌。一說觀賢之法嗣聖澄之開基也。古南都般若寺之末院也。

三寶寺 在鳴瀧北。日蓮宗妙顯寺中正院秀與開基而

今出川家族爲檀越。中正院刻佛像。粗得其工。于今爲妙顯寺之末寺也。

善妙寺 在梅畑。元所屬。梅尾之尼寺也。始西園寺大相國公經入道以爲移古堂於斯處。而須建一寺。云々于時中御門宗行卿室尼公爲彼卿菩提。請古堂而建之。有華嚴守護善妙明神之社。故號善妙寺。阿難尊者始度。尼故尼寺多建。阿難塔。斯寺亦有斯塔。故俗不謂寺名。直稱阿難塔。古官家高貴女子爲尼住。斯寺連筆華嚴經一部。今現在。梅尾高山寺寶藏。雖爲女筆。其體不凡。明惠上人所附。斯寺之唐畫十六羅漢圖并此寺境內之記。今亡。惜哉。斯寺開基禪惠比丘而中世爲尼寺也。

石雲菴 在梅畑北一瀬村。本尊彌陀也。開基號圓譽上人。東山一心院派也。上人元相州人而住。大和三輪山。爾後梅尾觀海院之北山居地建。石雲菴住焉。山居北有細河村。曹洞宗因果居士在此所。此僧得織田信長公之寵遇。於江州安土。日蓮宗與淨土宗爲法論之判者。倭俗爭論時別是非。曰判者淨土宗終勝之。而後居士歸細河村。與山居相去不遠。依之掛金襴袈裟。擁大蓋。騎牛令娘子。

執牛繩上時々訪圓譽圓譽甚厭之移石雲菴於今處然居士猶慕之故寓居於洛陽七條東洞院正行寺中。天正十二年十一月六日八十一歲於正行寺而遷化然建塔於石雲菴曾圓譽嗜畫所自寫善導法然之像并自畫影在此寺。

神護寺 號高尾山有寺產三百五十餘石稱德天

皇神護年中所創建也故號神護國祚真言寺弘法大師住焉第二世眞濟也大師始興授戒灌頂之儀其式一卷大師之所筆而其時預之人各被載其名傳教大師等亦在其列今現在寶藏又紺紙金泥連筆一切經以簾帙裹之此外大師所筆有二十如是一幅眞僞不分明又木皮上所書無著菩薩之字其筆法殊勝非可疑者也又大師所畫六曲屏風之山水設彩也至濃矣元一雙物而其隻今在醍醐報恩院於彼院謂畫工康房之筆也弘法與康房倭語相同故當寺誤康房稱弘法者乎又有宅間法眼所筆十二天之屏風鈴獨鈷念珠并兩界曼陀羅圖弘法歸朝日所將來也鐘有橘廣相之詞管是善之銘藤敏行之書也世謂三絕三月二十一日弘法御影供許婦人登山中興祖文覺上人住寺中曼陀

院山有昭堂每年七月二十日誦陀羅尼而修忌又寺中迎接院尾張國長母寺無住老師之所暫寓也則有無住所自刻之千體地藏小像又地藏院臨溪間到秋楓葉染紅誠三秋之奇觀而與三春東山之櫻花稱一雙是亦京洛之遊賞也

平等心王院 在神護寺之東或號西明寺稱橫尾

山弘法大師上足智泉之所創也本尊釋尊也建治年中和泉國橫尾山自證上人再興之而爲律院爾後中絕慶長年中高雄山晉海上人分附高雄山之寺產然後明忍上人又興之今堂東福門院使改作之

高山寺 號樹尾山舊天台宗而比叡山法性房僧正尊

意之開基也明惠上人再興之金堂有釋迦像寶藏內西方有社春日住吉兩明神畫像存矣春日明神時々影向親見明惠然明惠一人見之他人不得拜之于時畫所宅間法眼竊祈願爲末世結緣親拜神像而爲之圖或夜夢中有神託曰凡眼見之則必殞命宅間誓謂朝拜神顏而夕死何恨之有也神亦愍其志忽現神相宅間不堪歡喜則拜寫之喜而歸京師時於鳴瀧北之野外墜馬而死矣於茲各恐神託之不虛也今神像其時之所寫也南

都一乘院大乘院兩門主交爲與福寺之寺務一時一代一度來此處開神像拜之而修法事此兩門主因預春日社之事也明惠昭堂曰禪堂院山中有七境明惠上人之所名也石水院定心石三伽禪蘭若臺遺跡窟華空殿羅婆坊是也此山北溪有取加持土砂之處寺產有五十石餘什物有數品每年十月十二日十三日有蟲供養山下農夫一夏耕種時不覺所殺之蟲有幾許故恐殺生之罪東西兩村兩日各供米穀修施齋是爲死蟲修供養者也曾明野上人種茶於斯山深瀬三本木等之園名今猶存會清拙獨芳夢窓三師遊斯山賦詩時呼斯山稱茶山自是有茶山之號

月輪寺在愛宕山腹號鎌倉山光仁帝天應元年藤井慶俊僧都之草創也慶俊模五大山而建五岳寺則鎌倉山爲第一峯也本尊千手觀音也土御門院時九條藤兼實公寓居此山空也上人亦因靈夢暫來栖焉今屬愛宕山福壽院

白雲寺始號手白山元葛野郡也勸請愛宕權現後改號愛宕山與院所謂太郎坊而是祭軻遇突智神者也此神被火灼而薨故有救火難之誓火札出

自此社元在葛野郡鷹峯西岩影其地巨石兩箇東西相對而立是稱岩門處々礎石存矣天應元年藤井慶俊始移斯社於清涼寺門內重又移當山建社又別建堂安置地藏權現本朝自古尙武故慶俊謂本尊勝軍地藏也崇奉之則得勝利矣故武家之尊崇日々盛而參詣拜趨勝本官始寺中有五坊其內四坊天台宗也所謂勝地院教學院大善院威德院是也眞言宗有一院曰福壽院其一代僧別建寶藏院而爲退隱之處爾後斯院亦住僧連綿依之今爲六坊也大覺寺門主爲寺務然近世四坊僧多自山門來住故自屬輪王寺門主列國侯伯憑六坊僧而修祈禱故各寄年俸凡登山者精進潔齋浴清瀧水而登始自小淵至山上鐵華表通計五十町而每町建石表是謂町石此山清涼地也故各院外別造庫倉是稱靈倉初夏良賤遣茶壺於宇治納茶了而藏靈於此倉盛夏土用過終各取之與院傍有所棄護摩灰其邊禁不淨故建塔誤謂本院大臣藤時平公之塔不知因何而謬之也此山有五岳朝日鎌倉龍岳鳥岳疊岳是也鐵華表有愛宕山裏面白雲寺之額共曼殊院法親王良尙之

筆跡也有寺產六百石

淨願寺 在愛宕山麓真言宗也堂有泥塑俱生神其巧也非凡作矣依之土人不謂淨願寺專稱俱生神傍有閻王像傳言小野篁之所作而鬚髯則著篁髯者也與著謝靈運之鬚於維摩像爲同日談也小野篁一旦入冥途因地藏之引導而廻地獄親見閻王故謂地藏閻王像多稱小野篁之作未知此像果爲篁之所作也否

圓宗寺 在水尾村本尊藥師也清和天皇崩後則因遺勅奉火葬下粟田山納御骨於圓宗寺西水尾山陵依之奉稱水尾帝此寺堂前亦有天皇之塔此村居之中有舊趾土人稱渡邊綱屋敷四際有石壁傳言源賴光討大江山鬼時歷此途赴丹波源綱相從于時宿此處思元賴光之寓所乎今專以綱稱之

遍照寺 在大澤之東廣澤之西寬朝之開基也凡真言宗有二流其一爲廣澤是則寬朝爲祖其一爲小野是以仁海爲祖此二流分爲十二流寬朝一旦昇天去云登天石今在山上中世以來寺院悉爲鳥有本尊不動像并寬朝像今在廣澤池南池裏小菴

惜哉

大覺寺 傳言嵯峨天皇之御室也然天皇之行宮而非御室其後爲寺淳和天皇之皇子恒寂爲開祖其後住職多爲王子與仁和寺兩立而爲天下真言宗之法務

清涼寺 元棲霞觀也後爲栖霞寺始爲真言宗嵯峨天皇之本願而弘法大師住焉淳和帝皇子恒寂爲開祖本尊則在今阿彌陀堂也法泉院之福滿虛空藏役行者之作也五大堂中大威德天之所乘牛者弘法之作也處處有伽藍之址法泉院法性院妙王院地藏院歡喜院是古栖霞寺之坊舍而各真言宗也大覺寺門主爲寺務也五大堂前有六石塔婆三基傳言其一嵯峨天皇其二檀林皇后其三爲左大臣源融公予思嵯峨天皇多皇子源融公因謠曲而世人之所偏識也故誤稱之須爲恒寂之塔也東大寺法橋齋然入唐將今釋迦像并十大弟子像來安置此寺改清涼寺然近世淨土宗僧守之住方丈僧稱上人多官家子也寺中有三坊其一古善導寺之跡也前有秘鍵藥師堂并弘法八宗論池其二古地藏堂之址也其三古多寶塔之址也齋然塔在堂東

狩野元信所筆之緣起在「方丈」其外寺物多翫然事跡粗見「文獻通考皇朝類苑宋史及元亨釋書等」寺產有「九十石」

仙翁寺 在「清涼寺北」今寺絕爲「村名」元本尊彌陀惠心之所作也今在「民家」又土人號「畑山靈社」者古仙翁寺鎮守之八幡宮也此寺跡仙翁花蕃茂仙翁花之號本「此乎」

往生院 在「小倉山下」始觀性法橋之草創而爾後爲「尼寺」本尊彌陀也平清盛公之愛妾妓王妓女并佛尼等之所棲也世謂「妓王妓女寺」庭有「清盛之塔及三尼并刀自女塔」

三寶寺 在「同處」淨土宗而屬「清涼寺」是平家物語所記瀧口入道之所棲也爾後厭「橫笛之尋來」而遷「高野山」

二尊院 號「小倉山阿耨菩提寺」古樓門有「小野道風之額」今絕本尊釋迦彌陀也故號「二尊院」元天台眞言律淨土四宗兼學之地也然不詳「其開祖」法然上人暫住焉法嗣信空相續自「茲兼」淨土宗「月輪相國兼實公甚歸」法然「欲寫」生前像「然不肯」之或時浴後伸「兩脚」而座相國召「畫工宅間」隔「簾竊令」寫

之法然見之大驚祈之兩脚立屈其畫影今在「掌是謂」足引影「法然碑石在」山上「然文字不分明」第十六世廣明和尚「後奈良院之歸依僧也方丈靈寶有」若干「法然所」自筆「之淨土宗門七箇條教誡殊絕也終有」諸弟子之名「其中有」綽空「是則本願寺祖親鸞也其外寺物不遑枚舉」寺領有「百二十石」

常寂光寺 在「小倉山」洛陽本國寺僧正日禎建「此寺」而爲「退休之地」日禎日野亞相輝資卿之子也第二世寂如院日韶上人時諸堂成矣凡世所稱藤定家卿時雨亭之跡在「所々」此寺樓門之北竹林亦謂其跡也未「知孰眞」也庭有「老松」土人是稱「定家所」題詠之「軒端松」予思軒端松不可「必限」此松「者乎」

天龍寺 號「靈龜山」禪刹五山之第一而舊檀林寺之跡也等持院尊氏公爲「後醍醐天皇之追薦所」創建「也寺中多寶院天皇之塔所也夢窓國師爲「開祖」依之尊氏公尊「崇天龍寺」寺僧出世後著「薄紫衣」是爲「天龍之位」有「寺產千七百石餘」夢窓慧福合比之僧而爲「七朝國師」天性好「假山」其所「作稱」嵯峨流「靈松菴絕海中津之菴而有」木像「妙智院策彥周良之院也」

金剛院 在天龍寺門前是光嚴院之塔所也

臨川寺 在天龍寺之東南夢窓之開基而居十刹之

第二位法堂後有夢窓所作之假山水石之景象特勝

三會院 在同處夢窓國師之塔所也

藏光菴 在同處始在伏見安光明院之牌豐臣

秀吉公築伏見城時移大井河東邊則爲天龍寺之末派

寶篋院 在同處斯地元善入寺之跡而則寶篋院義詮公之所建也夢窓國師之開基而屬天龍寺

寶幢寺 舊在同處臨川寺東也康曆二年鹿苑相國義

滿公一夕夢中有異人來告曰相國今年有大患若建伽藍安置寶幢菩薩觀音大士多聞天王則免

之因創斯寺一名曰覺雄山大福田寶幢寺令普明爲第一祖寺成日相國入山請普明而開堂說

法寺後狝一小院爲開山塔扁曰鹿王院蓋緣彼莊有白鹿瑞也至德元年陞寶幢寺位爲十刹

第五位今寺絕鹿王院殘

鹿王院 在同處覺雄山額寶幢寺之所也有也寶幢寺什物等供養日行幸記并佛舍利及傳來記并兆殿司二

十八祖畫像嚴中周靈贊悉在此院兩寺緣爲一寺也每年十月十五日有舍利會

安國寺 在西山洛陽禪刹十位之中第四位也今寺絕不知其處

西禪寺 元禪刹而在嵯峨小倉山下野宮西雪村友梅亦住之自是赴豐後萬壽禪寺之請退院頌世稱

淨金剛院 始在西禪寺邊天台淨土宗之道場也今寺絕二尊之中一院存其名耳惜哉

千光寺 在嵯峨大井河北西寧兀菴派也然名存而寺絕角倉吉田了意天性得水利自丹波鳥羽通

於此川時再興此寺而安置觀音大士像傳言嵯峨帝之持佛也

法輪寺 號智福山在大井川西始號葛井寺弘法大師法嗣釋道昌開基也一日道昌晏坐虛空藏菩薩

現衣袖上昌乃截袖圖之置法輪寺今本尊是也真言宗僧守之始承和年中大井河溢昌董防遏衆

人子來不日而成故老拭淚曰不料今復見行基菩薩

爲樂寺 在法輪寺南黑谷金戒光明寺之末派而有

慧心所_レ作之彌陀大銅像

萬石寺 松尾之神宮寺而眞言宗也 正月出 萬石寺牛

玉_二村民貼_一門戶_一 則免_二災難_一 云此門前謂_二萬石寺

噉_一俗野外通衢曰_レ噉

最福寺 在_二松尾山之南_一 本尊藥師而延朗上人_二之開

基元天台宗而世所謂谷堂是也上人俗種八幡太郎義

家之嫡男對馬守義親之嫡孫也今寺絕矣本尊在_二上

山田村豪民家_一 延朗像在_二下山田村松尾社司某後

山_一 小菴則號_二西方寺_一 淨土宗僧守_レ之會延朗勸_二松

尾社司_一而社頭之四際數里內使_レ禁_二漁獵_一

西芳寺 在_二松尾南_一 始號_二西方寺_一 元聖德太子之所

_レ開而本尊彌陀則太子之所_レ作也其後行基中_二與之

弘法大師亦暫住焉_一 平城天皇皇子高岳親王出家後

號_二眞如_一始入_二此山_一坂上田村丸訪_二其寂_一又小松殿

平重盛爭_二諫入道之過奢時暫避_一入道之怒氣墊_二居

斯寺_一最明寺道崇亦被_レ寓_レ之具在_二緣起_一夢窓國師

再_二與斯寺_一改_レ方作_レ芳則爲_二禪刹_一方丈前庭假山則

國師之所_二經營_一也水石之狀非_二凡作之所_一及其內處

々命_二其名_一國師塔所指東菴古眞如之所_レ棲也曾尊

氏公屢來_二臨斯寺_一花時有_二詩歌會到_一今屬_二天龍寺_一

地藏院 號_二衣笠山_一本尊地藏不_レ知_二其作_一始天台宗

也細川賴之再_二與之_一請_二夢窓國師法嗣周皎_一爲_二中

興之祖_一然周皎讓_二開祖於夢窓_一自_レ是爲_二禪刹_一應仁

年中亂堂宇罹_二兵火_一今龍濟軒延慶軒二寮舍纔存本

尊地藏及賴之像在_二延慶軒_一細川賴之以下一家墳墓

悉在_二斯處_一山名凶徒發_レ之今爲_二烏有寺_一產有_二少許_一

長福寺 號_二大梅山_一在_二梅津_一元眞理尼之創建也天台

宗之尼寺而本尊觀音也曾月林入_レ宋嗣_二法古林清

茂_一此處有_二院北面梅津左衛門尉清景者_一尊_二崇月

林_一則請_二此寺_一改爲_二禪刹_一花園法皇歸_二依月林_一

時々臨幸被_レ問_二法要_一則開山畫影有_二宸翰勅贊_一開

山塔謂_二圓明_一是又有_二勅額_一也花園帝慮_二末世之

變遷_一七箇處被_レ置_二宸影_一今所_レ在_二此寺_一亦隨一也

此村東野萩原有_レ陵土人謂_二王墓_一花園帝稱_二萩原

帝_一然則此陵爲_二花園法皇_一也決矣此寺今屬_二南禪

寺_一有_二寺產三百石餘_一弘治四年正月二十三日三好

修理太夫長慶男築前守義長_レ習留_二斯寺_一爾後移_二京

北木下宅_一云

眞如寺 在_二下山田村_一或稱_二法華山寺_一世謂峯堂是也

參議正四位下藤原朝臣良繩爲_二亡母紀氏_一建_レ之始

紀氏女田村比丘尼住之學天台宗慈覺大師圓仁

感其志自刻千手觀音并正觀音使爲本尊良

繩奏文德帝爲定額寺天皇崩後置牌於斯寺

使寺僧講法華然元弘三年千種忠顯陣峯堂時

斯寺本尊千手爲兵火燒正觀音殘今日蓮宗僧守

淨住寺始在下山田南元戒法流布之地而曾道宣律

師所傳之肉牙舍利嵯峨天皇感得之則被置之

斯寺今寺絕爲村名牙舍利在京北淨土宗報恩

寺并伊達天像又銅燈臺等亦在此寺

地藏寺在葉室南始號安樂寺本尊地藏而寺僧元

真言宗也曾染殿后所祈安産也故世稱子安地

藏斯寺前有桓武天皇之陵故稱御陵地藏今

爲禪刹屬東山建仁寺

棲玄菴在地藏寺南是亦禪刹而屬建仁寺中靈洞

院

福成寺在千代原爲禪刹也

永正寺在物集女永正年中之建立而爲曹洞宗也

寂照院在樺原南號木上山本尊千手觀音而果應

和尚開基也今淨土宗僧守之

乙訓郡

長保寺在西岡本尊正觀音而元天台宗也今淨土宗

僧守之寺僧傳言開山須伊俱波牟也恐誤千觀者

乎

福常寺在西岡號寶珠山古真言宗也中興開山建

仁寺靈洞院廣濟禪師而爾來爲禪宗

福田寺在久世號迎錫山行基之開基而本尊彌陀

聖德太子之所作也始天台宗如今淨土宗而屬知恩

寺俊惠法師棲斯寺詠古里之板井之清水處也

其井至今存

真經寺在鷄冠井日蓮法孫日像之開基也

蓮生寺在光明寺北宇都宮賴綱入道實信房蓮生之

所建而淨土宗也實信房或稱蓮生房動與熊谷蓮

生互誤之

光明寺號報國山在栗生所納法然上人骨

灰而淨土宗西山流之本源也建永二年春二月法然

上人因法義之事而謫譜岐國冬十二月八日蒙

恩赦然不入京師寓攝州勝尾寺凡四箇年之間

也順德院建曆元年有詔令歸洛東大谷同二年

壬申正月二十五日八十四歲而遷化則葬大谷于
時比叡山并板堅者定照撰書破撰擇集甚誹法
然於茲法然弟子隆寬又作微撰擇集大謗天台
宗此時山門大衆各發忿怒法然滅後既經十六
年嘉祿三年丁亥六月山門大衆大起各來大谷欲
墮法然廟棄其屍於妓勢觀隆寬等其夜俄掘出
法然上人之遺骸乘暗夜潛移棺於廣隆寺中來迎
院翌安貞二年再移西山幸阿彌陀佛之菴二十五
日朝茶毘斯處于時紫雲霞翬松間因號光明
寺東山大谷寺則今知恩院也

海印寺 在光明寺西在山上謂奧海印寺在村

中謂下海印寺兩處共弘法大師之法嗣道雄和尚
之開基而眞言宗兼傳華嚴宗本尊觀音也山上奧
海印寺護摩堂有不動像樓門有兩金剛之像共運
慶之所作也文德實錄第三卷載承和十四年道雄拜
律師嘉祥三年轉爲權少僧都初道雄有意造寺
未得其地夢見山城國乙訓郡木上山其形勝稱
情則尋得所夢奏朝營造之名海印寺于時
善財童子忽然現出謂吾須爲護法神
法皇寺 在今里弘法大師性靈集所載乙訓寺是也

傳言推古天皇始建堂安置觀音像爾後荒廢大
師一旦來此處于時八幡神現出相共作一像首
則八幡神體而肩以下大師之衣體也右手持獨鈷左
手持念珠是謂身首合體之像也非必謂兩作而已
宇多法皇再興之爾來號法皇寺鹿苑相國
義滿公尊崇之爲大檀越故有推古天皇宇多
法皇并鹿苑院之牌元眞言宗也鹿苑院義滿公時寺
僧有爭論之事依之追放兩僧于時南禪寺大寧
院住伯英和尚爲歸依僧則爲此寺之住職改爲
禪宗于今屬南禪寺大寧院俊伯英爲入唐僧法
皇寺邊有西芳寺并潮音菴是皆此寺自屬南禪
寺後所構也故各爲禪宗

金藏寺 號岩倉山天台宗也元正天皇之本願而隆
豐禪師之開基賀登上人之中興也上人入唐歸朝日將
來物多今所存者纔有天台大師之畫像一幅始隆
豐見紫雲在山上則登臨之時逢異人謂我來
自日向國栖斯邊爾興寺則我須爲守護神
言終不見則是神武天皇而今向日明神是也於茲
建此寺號金藏寺安置觀音像南有阿彌陀堂
北有闕伽井鎮守伊勢春日八幡三座也又別有辨

財天社樓門二王像安阿彌之所作也寺中四坊所謂西室坊寶地院櫻本坊上之坊是也西室坊有緣起寺僧傳言桓武帝遷都日王城之四方擇勝地奉納法華經爲佛法僧三寶之庫藏此處則西岩倉也堂前有老松其大四圍枝垂地其老幹屈曲少見其類者也本根中間有寄生之櫻其大過一圍

勝持寺號大原山或稱大原寺寺中多櫻特有西行法師所愛之樹世人爲珍玩故或稱花寺本尊藥師也有小野道風所筆勝持寺之額筆法俊逸也此寺四宗兼學之地而屬遣迎院前峯有白山權現社是則鎮守也斯山楓樹多到秋染紅故都人之往來不劣春風水真爲逍遙地門前有放生池是所謂佐江野沼而歌人之題詠多矣古此邊有四十九院行基之所開基也故山稱行基山今悉爲烏有正法一院纔殘律僧住焉

善峯寺在小鹽山之上號西山後一條院長元三年源算開基而本尊千手觀音長八尺洛陽安居院仁弘法師之所作而與京師行圓寺觀音同木也是亦西國三十三所之隨一也今天台宗僧守之中古慈鎮和尚道覺法親王慈道法親王尊圓法親王玄大僧正等

住斯山慈鎮和尚以下四門主時號西山宮源算上人像在昭堂此處則所葬上人而所自建之塔存矣堂後有慈鎮和尚住菴之跡今稱御所屋敷外有慈鎮和尚善惠上人及宇都宮入道實信房之塔也善惠上人淨土西山派之始祖而暫住斯處著淨土曼陀羅註記十卷今行于世爾後住粟生光明寺又有阿彌陀堂本尊慈覺所刻也有多寶塔鐘樓山門等昔日開斯山時分三尾四谷建寺院五十餘箇所應仁之兵火悉炎上寺產亦分散今僅七坊存而已坂間有阿智坂明神社是則此山鎮護之神也千載集有前大納言藤爲氏卿訪外祖父宇都宮入道蓮生舊跡之歌凡岩倉山金藏寺小鹽山十輪寺此寺三所通用也

三鈷寺在善峯寺之上始號往生院爾後依爲勅願所忌往生之文字以其山似三鈷形改稱三鈷寺源算退隱之地而有自刻之彌陀像天台真言律淨土四宗兼學之靈場而本尊佛眼明妃之畫像也明妃元女體而華嚴宗亦專崇之斯像當寺中興觀性法橋之所畫也別又有往生院或稱華臺是則當寺僧滅罪所也門外石表有不許女人并酒肉

五辛妄入門內之字是則源算之所建而其石甚舊矣依之則源算上人元天台宗而持律之僧乎其壽齡百歲而遷化

十輪寺 號小鹽山天台宗也近世爲花山家代々墳寺曾二條后赴小鹽山在原業平朝臣供奉之事世人之所偏識也山上有業平汲潮燒鹽之地則有黃潮之穴然予思此穴非入潮則是所謂鹽井乎

法菩提院 地西岡向日明神傍古繁榮地而與法勝寺元應寺相比並者也天台宗西山穴太流也一代住職律師仲快者平教盛之息男而能登守平教經之弟也平家沒落日斯僧亦被謫西海寺中願德寺本尊地藏入賴源朝卿之夢仲再快被赦而歸斯寺勝龍寺在勝龍寺村本尊觀音近世爲洛陽三十三

處巡禮觀音之一員眞言宗僧守斯寺

瑞泉寺 在調子村足利基氏公號瑞泉寺本尊地藏楞尼明惠上人之所自作而基氏公甚歸依此佛依之建斯寺則號神通山瑞泉寺眞言宗之道場也中世廢壞寬永年中律宗比丘良雲再興之改爲律院

圓明寺 在調子村南大山崎庄北本尊觀音而此寺一條殿祖光明峯寺道家公之二男攝政實經公之所建立也故實經公號圓明寺殿今寺纔殘此處稱圓明寺村

成恩寺 始在山崎或名西願寺九條殿之所建也今絕

觀音寺 在山崎天皇山腹本尊觀音行基曾山崎大渡橋建立時爲祈願所自刻之像也故俗稱橋懸觀音近世有眞言宗僧再興斯寺安置斯堂倭俗造橋梁謂之懸又謂渡義亦通

寶積寺 世所謂山崎寶寺也號補陀落山寶積寺聖

武天皇神龜四年依本願建立之不動毘沙門同作也一旦燒失後此兩像安阿彌作之古眞言宗僧有二坊所謂闕伽井坊東光坊覺昇坊極樂坊仙涼坊圓隆坊法喜坊實相坊雲坊塔坊東坊松坊是也今闕伽井坊東光坊法喜坊實相坊雲坊塔坊絕覺昇坊極樂坊圓隆坊仙涼坊東坊松坊存隨年老爲座位其內一人掌諸堂一年中之諸事是謂年預寺產有六十石餘曾聖德太子請百濟佛工令造十一面觀音置山崎山中山寺今寺絕本尊觀音在本堂太子像

在傍又有行基弘法慈惠之木像、每年二月十五日七月十六日十八日令參詣諸人見之

妙喜菴 在山崎寶積寺麓、而東福寺之末院也、千利休

時々來棲之、故利休所設之一帖臺茶亭、今存豐

臣秀吉公屢有來臨云

神宮寺 在山崎離宮北、元行教之本菴、而有寺產五

十石、然寺院廢壞、寺產亦分散、近世泉涌寺雲龍院僧

如周中興之

法華寺 在山崎律院而屬、南都招提寺、寺產有少

許

相應寺 在山崎相應和尚之開基、而天台宗也、本尊藥

師像、今在草堂中

觀音寺 在山崎關戸明神社南、本尊觀音、聖武天皇

之歸依佛也、眞言宗僧守之、後鳥羽院數度有臨

幸、又此南有觀音堂、寺僧眞言宗也、每年二月二十

二日、後鳥羽院御忌日到、水無瀬御廟勤法事、此

寺今在攝津內、然見鐘銘、則有山城國觀音寺之

字、然則至、今山城境界關戸明神社南此寺、屬山城

國者乎

宇治郡

明王寺 號陵道山、俗稱奧堂、在陵村北、本尊釋迦

左十一面觀音、右不動明王也、則天智天皇社之神宮

寺也、今淨土宗僧守之

阿彌陀寺 在陵村、淨土宗僧守之、寺物多

安祥寺 號吉祥山、仁明天皇妃五條后順子之所

建也、弘法眞雅兩開山而眞雅修大元法、處也、本尊

十一面觀音有長八尺、鎮守日吉稻荷兩神也、庭有

青龍水、又有宗睿惠運之昭堂、坊纔存高野山寶

性院知寺事、說此寺始在東山如意嶽壇谷、慶長

年中移、今十二所權現山、云古來迎寺、大立寺等在

斯邊、昔日讚岐守高階公輔始從慈覺大師、爲僧

號湛慶、還俗後世稱高太夫、當斯時、洛中有妖

怪、令卜者占之、卜者奏曰、洛東古寺佛像亂座、次

故爲之祟也、於茲檢之、安祥寺諸尊混雜而令公

輔整理之、公輔入堂以白杖指點、謂彼此處也、此

是所也、隨杖頭之所、指自邊坐、然後妖怪自止、文德

實錄第八齋衛三年、從五位下紀朝臣興我業、以山城

國宇治郡粟田山、施入安祥寺云

毘沙門堂 寬文中門主公海僧正再興之有五百七十石之寺產此地元爲禁裏之御領地賜之使爲寺外擇地爲禁裏之御領也

十禪寺 在四宮村本尊聖觀音而聖德太子之所作也明曆年中本院依有靈夢告再興之

六地藏堂 在同處古稱六所廻地藏斯地藏堂事見于源平盛衰記等

妙應菴 在西山村元眞言宗也東福寺善惠軒忠長老再興之爲禪宗仁叔尼孝藏主葬斯菴則建塔

忠長老并孝藏主俗種西洞院家而有同氏之好孝藏主豐臣秀吉公之侍尼而甚得寵遇故列候亦相親

招月菴 元在同所今不詳其處釋正徹世稱徹書記好詠倭歌應製之歌有知羅波知禮之詞實有

諷時世之意依之被謫山科正徹東福寺派僧而寓松月菴謫居慕彼菴號招月菴無幾而還

東福寺 其徒正廣正般等皆得詠歌名極樂寺 在同處本尊樂師而今淨土宗僧守之

白河寺 在山科東野村本尊彌陀也始淨土宗而號別時寺寬文六年關山派愚堂和尚之弟子無明再興

之號青龍山白河寺然後白川法皇之塔并御牌

在斯寺也不知其故

東金寺 在同處或稱井窪寺本尊觀音也西光寺 在同村空也上人於此處遷化然寺久廢而

唯有塔存故上人不知有西光寺之名直謂空也塔凡空也忌日洛陽極樂院任遺誠以下出北京

赴東關之日爲忌日故用十二月十三日所遷化日用九月十一

日西光寺亦用十一日一說空也晚年歸自東關於斯寺遷化天和二年大雲院前住退魯軒性愚再興之號大悲山西光寺

千日寺 在數下東北小關道岩面雕彌陀觀音勢至三尊是爲本尊相傳慈覺大師之所作也

山階寺 鎌足公始建寺於山階鄉號山階寺爾後移南都改號興福寺今山科旅辻村竹內現有舊

址土人稱景信房舊跡不知其故思沙門景信坊住斯舊跡者乎又謂竹內數今屬東野村妙知院

之境内也

本願寺 舊址在東野村中古一向宗本願寺在斯處日台徒有故屢侵之遂移寺於攝州大坂天瀨宮側

自是法流日々盛也爾後移京師六條世人始在大

坂天滿宮之側依之俗稱天滿今於京師亦稱天滿此寺一代蓮如上人墳有斯處西本願寺之產少許在此地門主小院今在小山村

三ノ堂 在山科鄉竹鼻村倭俗突出處謂鼻東堂寬文年中釋珂憶再興之中堂西念寺本尊彌陀聖德太子之作也西堂地藏寺本尊地藏亦同作也開山鐘山曉禪師也延寶年中盤珪再建之有尊氏公之雕像鎮守稻荷明神也

護國寺 在同處號了光山承應年中京極二條北妙傳寺十三世日勇開基而爲日蓮宗之學室

當麻寺 在同處本尊丈六彌陀也相傳慧心之所刻也始在北山麓上總生實大岩寺住職隨流上人寄資料移斯處再興之則爲大岩寺之末寺當麻寺之號不知其故今按陵村守陵戶有當麻氏古此人之所創建乎一說粟田口鍛工當麻丞之所建也此說近是乎

元慶寺 在北華山本尊藥師而元爲天台宗今真言宗也曾良峯宗貞一旦剃髮爲僧住斯寺終爲僧正所謂僧正遍昭是也其木像于今存或言所自作也

華山寺 在同處或號慈德寺又稱東山寺花山院竊出禁闕先赴此寺近世妙心寺愚堂和尚再興之

阿彌陀堂 在同處本尊彌陀丈六坐像也相傳阿彌陀峯所有九體之其一也明曆年中再興之

福應寺 在南華山常念佛之地也白石菴 在山科鄉小山村土人稱禪寺南禪寺天授菴一源和尚入宋傳圓照心印婦朝後結菴於白石神祠之傍號小廬山白石庵

梅本寺 在同處本尊觀音傳教大師之所作也今淨土宗僧守之

嚴法寺 在同處號牛尾山相傳行睿飛去音羽山東峯者此山也安置千手觀音是稱清水奥院嚴法寺額弘法大師之所筆也然廢壞年舊近世廣瀨某再興之請南都招提寺安養院僧實存而使住之爲中興第一世

隨心院 小野門主之室而始仁海之所住也真言二流中小野派出自仁海斯門主兼南都東大寺々務或號曼陀羅寺醍醐寺貞觀年中光仁帝裔葛城王爲檀越而聖寶

開基號深雪山醍醐寺。演顯密二教。貞觀九年爲官寺。于今寺產有四十石。聖寶好修鍊。經歷名山靈地。大峯嶮路聖寶再蹈。開之。凡聖寶所管攝。東西二寺。東大興福兩寺也。常有所持如意。背後刻五獅子形。面雕三鉢杵。而表顯密兼學之意。聖寶爲東大寺座主。時置東大寺興福寺維摩會講師。必執此如意。應唱演。凡醍醐山自山腹龍樋不動堂以上。不許女人登之。山中直谷南禪院者。成賢僧正隱遁地也。成賢少納言入道信西之子也。相傳不更生直爲天狗。常棲斯山。故或號直谷。斯堂有木像。開戶見之。則必爲祟。故今閉其扉。以鐵釘貼之。笠取山竹谷道慈之所住也。寂靜谷權大僧都心敬所詠散花之倭歌也。跳嶽近江湖水在目下。八景谷在。西谷則有八景。准昵堂本尊觀音三十三所之隨一。而聖寶像亦有之。如意輪堂本尊聖豪內供奉等身之觀音。而是亦三十三處之隨一也。長尾宮在下醍醐。菅丞相之社也。櫃河在醍醐山麓。深沙大王廟在河邊。故或謂深沙川。也是則所賦倭歌之名所而古有橋興。宇治東北櫃河。又別也。今自下醍醐登山。上其行程三十七町。標石之梵字亦成賢之所筆也。

三寶院。元聖寶之本菴。而今爲醍醐寺門主之室。凡聖護院爲眞言山臥之本寺。是謂本山衆。募役行者入峯之跡。自熊野入大峯。出吉野。是謂順峯。入爾後大蛇自大峯出。擁路依之。入峯年久絕然。醍醐寺聖寶自執斧鉞。自吉野山入大峯後山。出其不意。始自蛇尾。寸々截之。遂出熊野。自是入峯。又興起依之三寶院流。是謂當山衆。稱逆峯。入斯後入峯。又絕修驗道衰頹于時。聖護院祖法輪院准后良瑜歎之。後小松院永德二年。再與入峯。且誓曰。須爲末代修驗道之鎮護。遷化後應永年中。奏朝深山安良瑜像。自茲後本山當山二流共每入峯拜之。且修驗道灌頂於斯像前。傳授之。凡大峯稱深山。山上眞言天台兩流山伏止宿之室在。兩處。每年一夏中各有參籠之山伏。聖護院三寶院南門主各一代一度入峯建碑傳於山上。而爲後來之證。當寺門主室元號金剛輪寺。自古於此寺中撰有德人令住斯院。主裁寺事。然龜山院時實深創建報恩院。斯院有清泉。或稱水本。是眞言小野六流之隨一。而稱水本流。實深師弟定濟住寶池院。傳眞言松橋流。又兼金剛王院法流。于時

稱傑出人。又兼帶佐目牛八幡別當職。其後移住三寶院。斯院元山中有德人輪住之處也。斯僧蒙龜山法皇之歸依。且俗種爲官家之所緣。故三寶院自是以來爲獨住。至今連綿定濟弟子滿濟二條殿庶流師冬公之息而鹿苑院義滿公之養子也。後住義演二條殿晴良公之子而甚得豐臣秀吉公之寵遇。公斯山櫻花遊覽時義演被設經警。今門主客殿則秀吉公所賞花之亭而始在山腹。予今其跡存矣。殿中之彩畫狩野榮德之所畫也。樓門有菊桐之紋。是又賞花亭之外門也。庭前假山有藤戶石。相傳元有備前小島佐々木三郎守綱殺鄉導之人於斯石上。秀吉公取斯石置聚樂城。爾後寄斯寺。當山秀吉公遊覽時被附三百石寺產。

菩提院 在醍醐律院而爲醍醐寺之墳寺。

法琳寺 在同處。醍醐寺理性院派下也。

一言寺 在同處。本尊千手觀音而管神之作也。相傳諸願多則不成。唯一言祈之則其願無不成就。依之號。

一言寺 三寶院々家定心院知事。

法界寺 在日野。號東光山。嵯峨天皇弘仁十二年

六月延曆寺戒壇建立時藤濱成男從三位參議左大辨

家宗爲勅使帶官旨登山傳教大師不耐。歡悅即以七寸金銅鑿師像太刀一腰具多羅葉藥師經等。與家宗擬勅使酬謝。家宗歸京日家領日野地建法界寺。安置靈尊傳教爲開基。其後從三位式部大輔資業再興藥師堂。永承六年二月隱日野山庄。是稱日野三位。此人聚群書置文庫。每冊貼法界寺文庫之朱印。而文庫絕書冊今偶存在。處々中古每年七月六日寺僧獻數品花於禁裏。日野家執奏之。今無其儀。織田信長滅亡山門。此門亦爲兵火被燒。今阿彌陀堂一字殘安。置藥師并十二神於其中。今寺僧絕承仕法師十人分領百石寺產。交勤阿彌陀堂之結番。

勸修寺 在勸修寺村。真言宗而門主住之。有寺產五百石。堂前假山弘法大師之所作也。二尊院斯門主之院家也。

(補遺) 在宇治郡。勸修寺家記曰。昔日斯寺未建時

渤海國客人朝過羅城門前。歷當寺南山下。忽下馬北向拜云。是靈區而其形似龜甲。此地高貴人

出遂須爲伽藍地。果醍醐帝母公此地之產而

帝爲母公尊親宮道彌益。建斯寺。則宮道彌益夫

婦爲鎮守。今兩社是也。依此則昔日渤海使者經自河陽過羅城門前。廻山科。自大和大路過五條而入京師者乎。

大宅寺 在勸修寺前山。藤原高藤卿爲宮道彌益夫婦而所建之也。今寺絕爲村名。

地藏堂 在大宅村。此本尊并行願寺觀音善峯寺觀音等各上賀茂社後山之槻木也。

即成就院 在佛國寺北。宇治殿下賴通公之男而橘俊遠爲養子。故改藤爲橘常住。伏見而屋潤財饒也。時人稱伏見長者。倭俗呼富有之人謂長者。曾建斯寺。惠心所刻之彌陀觀音勢至爲本尊。然土人誤謂那須與市宗高所創建也。堂西南有大石塔。是亦謂宗高之塔也。是則俊綱之塔也曾那須與市歸依斯本尊。故割那須之領地以寄斯寺。依之謬傳者乎。一說斯寺始在伏見城南豐後橋北云。

佛國寺 在矢島峠麓。中世御香宮在斯山。故號天

皇山。黃蘗派而中華僧高泉再興之。

大善寺 始號淨妙寺。或謂木幡寺。藤道長公記有詣木幡寺之事。則是淨妙寺也。一說淨妙寺在今六地藏村之東南墓地。此村中行願寺之彌陀像古淨妙

寺之本尊也。此淨妙寺者智證之開基而藤原家基公之所建立也。故家基公號淨妙院。而有昭宣公基經并御堂關白道長公等之墳墓。其後移寺於此村中。昔日少納言入道信西造地藏六體安置斯地。故世謂六地藏。然平清盛公分置此六體於洛内外六所。此處亦隨一也。淨名寺元爲天台宗。近世淨土宗頓譽林公合置彌陀并地藏。改號大善寺。屬知恩寺。

萬福寺 在大和田。號黃蘗山。斯地元近衛殿之傳領也。中華黃蘗隱元琦禪師適住肥前長崎興福寺。明曆元年攝州富田普門寺龍溪和尚迎之令住普門寺。萬治元年禪師赴東武。謁公方家。明年賜斯地。則建伽藍。號黃蘗山萬福禪寺。本尊等大明國佛工范印官之所造也。於茲禪師爲開山始祖。大興濟北宗風。公方家捨庄田四百石以資僧糧。永作祝國道場。太上法皇亦慕禪師。詔龍溪請法語。允稱皇情。寬文四年秋九月命首座木菴瑠公補其位。乃退休松隱。木菴特賜紫衣住持職。山有十二景。寺内外菴院塔頭有三十餘處。

福清寺 號大雲山。堂有觀音文殊普賢三菩薩像。則表悲智行之三。也。高五尺許行基之所作也。鎮守天

滿宮此寺元有五箇庄井尻鄉享祿二年移于今處古眞言宗或淨土宗守之寬文中爲黃蘗派寺此寺去黃蘗不遠

吸江菴 中世有異僧號朗菴不知何處人也慕普化振鈴之作略常好尺八自號普化道者尺八一枝之外不携一物有人問佛法則吹一吹而去與大德寺一休和尚善友有一檀越建圓音寺於宇治川邊請之寺中吸江菴其所常住也居無幾不知其所終此寺始在槇島長閑淨觀寺鼻倭俗山河突出之處稱鼻一年洪水漲出佛宇僧房悉漂流然吸江菴依然其後逢祝融變近年再與黃蘗邊今黃蘗派僧住焉一說虛無僧之爲祖也非普化而風穴延口也風穴好吹尺八因爲祖者也大鳳寺 元眞言宗而在宇治川東圓山今寺絕爲村名

御室戶寺 號明星山智證開基而三井寺僧隆明中興之本尊觀音公文所下司宗淵自此山東岩淵之中取出之則西國三十三所巡禮所之隨一也三十年必開帳鎮守新羅明神也寺中有六坊屬聖護院門主門主入峯時一七日止宿於明星山頂被修護摩此邊源氏物語中有宇治十帖之跡悉有

觀音石像 是皆後人所附託者也

四十八願寺 在御室山舊淨土宗也今律宗僧守之常光寺 稱橋寺在宇治川東孝德天皇大化二年沙門道昭始造宇治橋爾後中絕西大寺寂尊又興之於斯寺修供養至今律院而屬南都西大寺正覺寺 在宇治川東號補陀落山本尊觀音也眞言宗僧守之

慧心院 在同處本尊藥師而源信僧都說法之道場也有持明院基時卿所筆惠心院之額

興聖寺 在同處號佛德山曹洞宗道元開基而始在深草然中絕年舊矣近世永井信濃守尙政領淀城時再興佛德山聖興寺於斯處關岩構堂宇其景象非筆舌之所及也本尊釋迦而堂在青蓮院尊純所筆佛德山興聖寺之額

紀伊郡

遍照心院 世所謂尼寺也元號桃園貞純親王之第宅而六孫王經基相續住之終葬斯地建社於其上而祭之今六宮權現是也又有春日八幡之社則爲鎮守而至源實朝公爲宅地實朝公遭害後其室

坊門內府雅親公之女來此處請真心廻心爲戒師剃髮爲尼號本覺遂此處爲寺稱遍照心院又號大通寺廻心爲開祖也方丈謂長老坊寺中之耆舊有道德之人請是於方丈有實朝公像并二品太夫人本覺尼公牌傍有親鸞上人持佛彌陀背後有親鸞之手書日蓮宗與一向宗於山科爭亂時取來此寺云一說五條淨土宗本覺寺本尊彌陀古此寺之所而有而爲本覺尼之持佛故號本覺寺大通寺方丈有假山是謂小善之所經營也南都春日山中院屋之假山稱善之所作然則對此善稱小善者乎善未詳僧俗之別也坊舍有三箇所謂多門院十方院恩德院等是也寺僧真言律而與東山泉涌寺相通古封境至廣大西限餘鹽田東限大餘鹽田餘鹽田者昔日門脇中納言平教盛之領所也子今有鹿苑相國義滿公袖判之地圖今處々分散餘鹽田爲東寺之有今纔有三百石之寺產此田古此寺之四至境內之地也凡公方家賜采地時始貼公方家之直判而爲證其次記采地各々之名及俸祿之實是稱袖判紙之端猶衣服之袖故倭俗謂印曰判以是別其人之義也

金光明四天王教王護國寺 世所謂東寺也山號秘密傳法彌勒山院稱普賢摠持院古此處東西有大道場東稱東寺西稱西寺猶南京之稱東大寺西大寺也各雖有寺號世人多不知之凡真言三部秘經之中此寺爲金剛頂經之道場而專說金剛界之理金剛頂經或號教王經故號教王護國寺弘仁十四年正月勅以此寺賜弘法大師建灌頂院空海准青龍寺法式每歲二序行灌頂事乃置惠果所附健陀國袈裟及念珠爲寺鎮承和二年三月二十一日大師於金剛峯寺結跏趺座作毘盧印泊然入定至今此日仁和寺并此外寺院所安大師像悉修法事是稱御影供寺產二千三十石坊中二十一箇也凡此寺至中世無各院寺僧住長寮是謂僧坊作古之寺院多皆然斯寺一旦衰頽真言宗中興願行再興之始先建寶菩提院住之自是各建別院此地始爲鴻臚館後爲寺唐橋今在寺西古蕃客來朝時經斯橋入鴻臚館故俗號唐橋或有迎蕃客於河陽之事河陽今山崎乎羅城門世誤多爲東寺南門是則九重城闕之南門也今田間有其地羅城門毘沙門天像今在東寺觀音堂

中相傳古所置王城南羅城門之閣上者也予始疑之按唐代屢有西蕃之寇使僧不空願之西蕃果敗走時不空奏曰予元無別法一向念毘沙門天依之神兵現出破之者也自茲後城樓上安毘沙門天像云然則傳教大師等亦倣之使置之者乎爾後羅城門絕本尊毘沙門天像置近隣東寺中者也

西福寺 在東寺慶賀門東傳言是自然居士說法之場也今爲淨土宗

西寺 在東寺之西一說始號西明寺今不詳其實守敏之所生也曾天長元年大旱春三月勅空海於神泉苑修請雨經法時守敏法師奏曰守敏世壽法臘共邁于海先承詔爲適宜依之詔敏敏以七日爲期散朝陰雲厚布都下暗如夜雷鳴雨灑舉朝感異勅見雨之所需只東京而已於是又詔空海于時霖沛三日天下皆治以是觀之則與弘法雖小有優劣世稱一雙亦不爲不可也然守敏之傳不見諸書如何乎今西寺跡悉爲田疇金堂講堂悉爲田園之號守敏塚纔一堆存而已以今觀之則弘法與守敏其跡之相去天淵遠矣也地藏堂 在東寺西南隅山崎道之傍也相傳守敏甚

妬弘法大師竊瞰其出以矢射之手時此地藏現出其間代弘法負其矢于今地藏木像有癩痕故號矢負地藏今淨土宗僧守之

吉祥院 菅原清公之所建也清公爲遣唐大使洋中大風將覆船于時三井智證爲求法入唐在舟中相共祈吉祥天女于時風止船無恙而歸朝時智證造天女像清公置之於宅地今吉祥院是自清公以下爲菅家傳領之地菅神五十賀於斯院被修之筑紫貶謫日亦自斯院首途於古川乘船云

實相寺 在上鳥羽日蓮宗而大覺僧正之開基也今屬妙覺寺

常高寺 在下鳥羽京極參議若狹守之室佐々木京極備前守長政之息女而崇源院殿之妹也若狹守薨逝後爲尼號常高院松岩榮昌日蓮宗而生前預建斯寺本國寺鷲峯院僧正日桓上人爲開山有寺產少許

法傳寺 在同處南寺僧傳言後鳥羽院妃芹摘后安置守本尊地藏於斯寺元真言宗也爾後法然上人十一世法孫圓智上人自住斯寺改宗爲淨土宗

彌陀爲_二本尊_一設_二藥師堂於其傍_一此藥師行基之作而元鳥羽殿之所_レ有也芹川戒德寺亦始爲_二眞言宗_一今爲_二淨土宗_一法傳寺之末院也法傳寺今屬_二知恩院_一

戀塚寺 在_二壇上_一淨土宗而屬_二知恩院_一文覺上人始號_二遠藤盛遠_一夜中誤斬_二源渡妻之首_一携_二來於此處_一

見_レ之大悔愧則埋_二首於此處_一剃髮爲_二僧自稱_二文覺_一其後建_二寺號_二戀塚寺_一義婦塔今猶存然近世誤建_二碑於上鳥羽_一此處鯉塚也鯉與_レ戀倭語相同故互誤_レ之者也古上鳥羽池中有_二大鯉魚_一時々作_二妖怪_一土人殺_レ之爲築_二塚云戀塚寺屬_二近隣淨土宗法傳寺_一

一念寺 在_二下鳥羽_一洛陽十念寺開基眞阿彌 後村上院之皇子也剃髮爲_二僧建_二十念寺_一住_レ之晚年又建_二此寺_一爲_二退休之地_一遷化前謂_二徒弟_一曰我死後須_二水_一葬前川_一遂如_二遺命_一到_レ今此寺之前川稱_二眞阿彌_一而限_二南北四町_一禁_二殺生_一堂有_二春日神作彌陀之

大像_一拜志寺 在_二拜志里_一見_二于_一文德實錄_一今不_レ知_二其所_一

石作寺 古在_二淀邊_一見_二于三代實錄_一今不_レ知_二其處_一九品寺 在_二竹田_一本尊彌陀也 鳥羽法皇構_二城南離

宮_一時此邊所々建_二九箇寺院_一被_レ準_二擬九品淨土_一此寺亦爲_二九處之隨_一一八處絕此寺一字殘今指_二斯一寺_一專號_二九品寺_一爲_二關東檀林園通寺之派_一

國分寺 在_二竹田_一本尊彌陀也堂楣有_二國分寺之舊額_一終有_二元曆元年仲秋吉辰之字_一其下有_二方印_一其字不_レ分明_二淨土宗僧守_レ之古六十六州每州有_二國分寺并國分尼寺_一聖武帝勅東大寺爲_二日本惣國分寺_一

安樂壽院 在_二竹田_一東西二門共以_二丹塗_一之故土人不謂_二寺名_一直稱_二朱門_一本御塔向_二東本尊彌陀者傳言春日之神作也 鳥羽法皇於_二此處_一崩則奉_レ葬_二本尊臺座之下_一新御塔向_二東八條女院葬_一其下_一傍有_二堂中地藏像左壇本尊不動覺鑲作也右脇有_二弘法大師像_一右壇有_二鳥羽院法皇之宸影_一左有_二八條女院之影_一右有_二美福門院之畫影_一此寺新義眞言宗而有_二坊舍十二所_一其內六坊勤_二本御塔之結番_一此六坊 鳥羽法皇入_二離宮_一時伴_二六人之淨侶_一皆老年近臣而剃_レ髮者也今多其裔也又六坊准_二六淨侶_一而置_レ之令勤_二新御塔之結番_一至_二後奈良院時_一寄附莊園在_二所々_一今寺產纔五百石也

此院或稱_二上菩提院_一云

不動院 在竹田 本尊不動慈覺之所作也新義真言

宗僧守之古爲安樂壽院之一院

西行寺 在竹田 本尊地藏行基之所作也今淨土宗

僧守之西行法師暫栖此處也庭有月見池

東福寺 號慧日山 在稻荷山北洛陽禪刹五山之第

四位也開基圓爾則所謂聖一國師也曾九條相國道家

公於城東創大伽藍宏構鉅材爲都下之冠嘗曰

我亞洪基於東大取盛業於興福故名東福寺俗

呼新大佛未成先署圓爾住持立爲禪刹寬元

四年相國以東福洪營晚成立普門寺令爾居之

建長七年冬十月十七日曉國師病急於是上禪椅

諸徒乞遺偈便書曰利生方便七十九年欲知端

的佛祖不傳授筆而逝矣每年十月十七日修聖一

忌世不稱其名直稱開山忌者是也偃月橋額

龜山法皇之勅筆也通天橋額大明國師之筆也橋下之

楓葉洛陽之奇觀也方丈之什物舊書畫不可勝數

寺產亦有千八百石餘

五大堂 在東福寺中古法性寺之一字也御堂關白道

長公記曰寬弘三年七月二十七日建法性寺五大堂

辰刻上棟午時遣清通朝臣令行事賜祿各有差

云々爾後法性寺絕移斯堂於東福寺中自此堂每

年二月出寺字簡東福寺門前八町人家每門楣貼

之則除疫疾免火災云寺字不解其義一說寺

字從土從力以生土佛神之威力守護之義也未

知是否今此堂東福寺中同聚菴知之簡板在門

前伽藍大工之家

萬壽寺 舊在五條今其處謂萬壽寺町此寺禪刹五

山之第五位也今寺絕坊舍在東福寺中寺產纔有

八十石

安國寺 禪宗十刹第四位也今寺絕始在萬壽寺傍今

東福寺中永安院知斯寺事

法性寺 藤原忠通公之所創而始在東福寺門前鴨川

之東岸上今舊址存土人稱寺屋敷本尊彌陀在東

福寺佛殿內寺中五大堂是又法性寺諸堂之一員也

凡寺屋敷并五大堂東福寺中同聚菴知之到今每年

自一月五日至同二十日預此堂地下人出五

大尊寺字之札東福寺門前八町間土人則貼戶々之

門楣如以此則禳疫云不限是凡斯外古諸堂本尊

今多在東福寺門前所々之小堂也

金剛性院 古在法性寺中今舊址存是美福門院藤得

子之所_レ建也

寶塔寺 舊在_二深草極樂寺村東_一極樂寺今絕矣始極樂

寺僧良桂聽_二日蓮法孫日像之說法_一改_二眞言宗_一爲_二

日蓮宗_一請_二日像_一日像建_二所_一書法華題目之塔_一自

茲號_二寶塔寺_一自_二良桂_一至_二七代_一此寺中絕然天正

年中洛下日蓮宗妙顯寺住職日堯之弟子日銀再_二興

之_一日銀俗姓爲_二秀吉公家臣正木氏之種族_一此人助_二

興立之資_一自_レ是爲_二妙顯寺之末寺_一

安樂行院 在_二深草_一始奉_レ葬_二仁明天皇_一則有_二陵爾

後主上若奉_二火葬_一則納_二御骨於其下_一舊陵古木陰森

也然近世伐_二木平_一土建_二堂於其上_一惜哉今眞言新義

僧守_レ之

眞宗院 在_二同處_一開山圓空上人諱號_二立信_一淨土宗西

山派深草立義之祖而_二後深草院婦依之僧也古封境

廣大而諸堂巍々然應仁年中兵亂悉爲_二烏有_一矣眞宗

院舊額偶殘今見_レ之非_二凡筆_一恐_二後深草院之勅額

乎圓空塔所號_二棲眞_一上人木像在_二方丈_一并有_二所持

之鉦及拄杖_一圓空能_レ歌載在_二新續古今集并新拾遺

集_一此寺北古有_二歡喜心寺_一是亦圓空之所_レ建也今寺

絕田地名往々有_二歡喜心寺并佛殿等之號_一眞言院本

尊彌陀定朝之所_レ作然小像也歡喜心寺本尊彌陀大

而觀音勢至像亦存故今安_二斯_一二尊於眞宗院_一而號_二

龍護殿_一是歡喜心寺佛殿之舊號也今用_レ之近年京師

誓願寺前住瑞山龍空來住後諸堂亦粗備凡自_二此寺_一

至_二寶塔寺_一東方後山不毛赭石地總曰_二霞谷_一以_二其

土似_二霞色_一稱_レ之者乎

卽成院 在_二伏見_一始號_二光明山_一傳言慧心僧都於_二宇

治_一說法時八句餘老翁來聽_レ之謂_二僧都_一曰願須_二來_一

臨_二吾草菴_一僧都以爲異人也則訪_二草菴_一時老翁與_二一

飯_一其香味非_レ常其所_レ說非_二直也人_一親示_二淨土之體

相_一然後吾是南京伽藍之守護神也言已不_レ見_二其形_一

草菴亦無_二其跡_一僧都以爲維摩之化身也於_レ茲命_二佛

工法橋定朝_一前所_レ示之彌陀三尊像并二十五菩薩悉

令_レ雕_二刻之_一建_二堂安_一置此像_二號_二光明院_一一條院

正曆二年辛卯八月十五日有_二開眼供養_一其後_二白河

院時宣陽門院歸_二依此寺_一寄_二門院家領下野國那須

庄_一一說元曆元年正月源義經平家追討日那須與_二一

宗高從_レ之而訪_二此寺_一拜_二佛像_一今度戰場無_レ故而祈

歸_レ洛遂於_二西海_一得_二武勇之譽_一故私領內寄_二幾許

庄園_一改爲_二卽成院_一今所_レ存塔卽那須宗高也件々載

在緣起予思是附會之說乎始修理太夫橋俊綱山莊在伏見城山之南豐後橋邊其地向南山水在目前一且其地形自有高低雪朝特添奇觀俊綱常以是誘人死後山莊爲寺號卽成院斯塔之爲體也官家之所設而非武人宗高之塔所寄斯寺之庄園在那須故斯塔亦爲宗高之塔者乎豐臣秀吉公被築伏見城時斯院亦移斯地此塔實蓋大而難遷之于今在舊地

願成寺 在伏見而淨土宗也方丈謂威德院庭有深草少將并小町之塔此又謬傳乎

墨染寺 在同處日蓮宗也相傳墨染櫻古在斯所予思仁明天皇崩時遍昭之所詠深草之野邊櫻志心有者今年許墨染爾佐計之詠歌惣指深草之櫻而言之非必謂一本也自有此歌後此邊曰墨染此寺偶在其內故稱之者也

月橋院 在同處豐後橋北川上此邊稱四月所々河水月影照之自山上見之則月在四處故稱之一說非四月而指月也自山上臨月之在河水則在指點之中是南禪寺大明國師之法嗣某僧設一庵其時所命名也信濃國更級郡多山田月映

之則每田水如月故稱每田月又洛西廣澤池自西望之則月影必在兩所是皆隨所見而變者乎

久世郡

平等院 號朝日山在宇治川西斯處舊有左大臣源融公之別業也爾後陽成院宇多帝朱雀帝三代主上屢御遊之地而被催遊獵燕飲之興行宮號宇治院一條院時爲左大臣雅信公之領地也長德四年御堂關白道長公愛斯地之風水構別莊時々往來息男宇治關白賴通公永承七年捨宅爲寺其結構慕中華之模範堂象鳳凰形左右閣比兩翼後廊表尾是謂鳳凰造而至建外門其地勢向北之外無所構門然寺門之向北方者不見其類無奈之何于時大江匡房爲童形乘賴通公之車後而來斯所謂曰凡寺門之向北者非無其例在天竺則竹林精舍於震旦則那蘭陀寺於本朝則六波羅密寺也然則斯門向北而雖構之何害之有遂依斯一言而定之世以爲美談也本尊彌陀佛工定朝之所作也圓光中有梵字醍醐

寺成尊僧都之筆跡也堂內四壁畫有釋尊八相成道體相并二十五菩薩也又四方扉淨土九品圖繪所長者爲成之所筆也色紙形之內文字 村上天皇孫堀河左府源俊房公之筆痕也傳言 應神天皇皇子菟道王宇治里豫知佛法興立之靈地而川上構離宮則今當寺鎮守離宮是也治曆二年上皇臨幸寶藏納三國傳來佛像經論并天下名器諸堂落成日天喜元年四月四日請四百口僧侶慶之平康四年十月二十五日有小三重塔供養于今有寶塔經藏之遺址治曆二年十月十三日左大臣藤師實公建五大堂及造鐘樓凡世論鐘於形模則平等院鐘爲宜於音響則園城守鐘爲好而是稱一雙數度有火難然本堂外門鐘樓免其災此寺元真言宗也天正年中玄譽上人自住方丈後至今十三代爲淨土宗而屬知恩院今最勝院一字天台宗而屬圓滿院門主寺中有六坊方丈有源三位賴政畫像并甲冑堂北有賴政自殺處扇芝于今存矣宇治大納言隆國卿每夏厭煩暑納涼于當寺南泉坊今方丈之南有其趾宇治川蓋世人之所偏玩也

藏勝菴 在平等院南建仁禪寺中大統菴柏庭清祖之

所建也柏庭鹿苑院義滿公之子也始有諸堂并坊舍今悉絕爲所々茶園之名近世上林竹菴再興之請大德寺寸松菴翠岩和尚爲中興祖

金色院 在白川本尊觀音也樓門有額然文字不分明諸堂亦零落有鐘建武年中之所置也元爲天台宗開基不知爲何僧也殘僧今多携妻子專製茶賣之宇治茶家尾崎坊等此寺僧之爲茶人者也連歌師宗長記自薪里赴京師時宿此寺之辻坊而修連歌之會云々辻坊今不知在何處矣

相樂郡

笠置寺 舊號鹿鷺山西方去木津川渡二里許賀茂村在斯北笠置寺中有六坊各眞言宗也山上岩石驚心目其間有傑出之岩壁其面雕刻彌勒地藏之兩尊雖不知其作者非凡工之所及也古伽藍魏々然此石像在堂內云釋無住沙石集載笠置彌勒地藏自施彩色以來諸人崇信淺靈驗亦減矣今被侵風雨自不見有粉彩傳言 天武帝皇子大津王子獵斯山山神怒之雷雨頻發進退失度于時虛空藏現出救皇子之難於茲爲備

後來之證_レ被_レ置_レ所_レ著之筭於此所_レ自_レ茲改號_二

笠置_一爾後解脫上人設_二盤若臺_一而居_レ之子_レ今解脫
自筆之講式一卷并緣起一卷在_二寺中福壽院_一西北隅
元弘年中有_二後醍醐天皇_一居之跡_一眞要害之地也

淨瑠璃寺 在_二木津東南西小田原_一人皇六十四代 圓

融院天元年中多田滿仲所_レ創建_一而安_二置行基菩薩
所_レ刻之藥師五尺坐像_一故擬_二瑠璃之寶珠_一而號_二淨

瑠璃寺_一則爲_二眞言宗_一寺產有_二七百石餘_一爾後 後
冷泉院時有_二義明上人者_一再_二興斯寺_一又置_二佛工定

朝所_レ刻彌陀大像九體_一古諸堂巍然 二條院宸筆
有_二秘密莊嚴院之額_一鎌倉右府源實朝公歸_二依之_一

被_レ寄_二千石千貫之領地_一寺中有_二莊嚴理趣兩院并四
十九院等_一今悉廢壞有_二九體彌陀像之存_一故世人

不_レ知_二淨瑠璃寺之號_一直稱_二九體佛_一而已

海住山寺 在_二木津川渡東南山_一本尊觀音解脫上人之

所_レ開也數年後唱_二滅于此處_一 後鳥羽院崇_二解脫之

德行_一賜_二七種之靈寶_一眞言宗僧守_レ之瓶原并鐵司
在_二斯邊_一

神童寺 在_二井出東南_一行基之開基而本尊藏王權現也
故稱_二北吉野_一眞言宗僧守_レ之每年三月十一日有_二鎮

守勝手明神之祭禮_一

光明山寺 在_二同處_一元眞言宗也今寺絕爲_二村名_一治承
年中高倉宮以仁於_二此山下鳥居之邊_一中_二流失_一遂薨
逝矣

泉橋寺 在_二木津_一行基之開基也天平十三年行基造_二

橋於木津川_一其時修_二供養_一所也 聖武 孝謙廢帝
臨幸地也今爲_二律院_一

哀堂 在_二木津_一三位中將平重衡卿被_レ誅處也土人建
_レ寺今其跡猶存

向觀音寺 在_二同處_一僧正遍昭住_レ之於_二木津橋邊_一詠_二

末露本雲之歌_一見_二子肖柏集_一
大智寺 在_二和東莊湯船村_一岩壁屹立高及_二百丈_一故

號_二百丈山_一大觀禪師大有之開基而爲_二禪刹_一近世佛
頂國師一絲之徒弟如雪再_二興之_一今屬_二近江山上永

源寺_一

岩上院 在_二和東村_一而爲_二律院_一
正法寺 在_二和東村_一古爲_二眞言宗_一今屬_二近江山上永

源寺_一爲_二禪刹_一
玉臺寺 在_二平尾_一本尊辨財天并十六善神則弘法大師
之所_レ作而眞言宗僧守_レ之

鷺峯山寺 在同鄉一役行者開基而本尊彌勒也寺僧真

言宗而有四坊一所謂新藏院多門院福壽院智德院也養老年中趣智泰澄再興之朗辨傳教等亦來棲東寺道賢上人曾住之此人有道德親與當山鎮守天照太神金柱岩戶分之三神有問答後因金峯山藏王權現之託道賢改日藏一所謂筌岩屋日藏是也曾伏見院有行幸今寶塔此院之建立而本尊愛染也

蟹滿寺 號普門山古此所有小民合家善奉佛有

女七歲誦法華普門品數月而終全部一日出遊村人捕蟹持去女問捕此何爲答曰充殮女曰以蟹惠我我家有魚相報酬村人與之女得放河中歸家多覓乾魚其父耕田中一蛇追蝦蟆而含之父憐而不意曰汝捨蝦蟆以汝爲婿蛇聞言見翁則吐蝦蟆而去父歸含思念誤發言懊惱不食女問之父告實女曰莫患而早殮焉初夜有呼門人女曰是蛇也只言三日後來臨期果來開門有衣冠人曰依約來父告曰又三日後來於茲女謂父使擇良材固造小室女則入內閉居三日後衣冠人來見女屏室生忿恨心乃復本形長數丈以身纏室舉尾敲戶父母大恐不得奈何半夜後

叩聲息有悲鳴聲頃刻悲聲又止明日父見之大螃蟹一箇十手亂離蛇又被瘡百餘所相共死女開室出顏色不變曰我聞戶外大小蟹千百挾殺此蛇大蟹多歸小蟹死然是亦大於尋常我通夜誦普門品有一菩薩長尺餘語我曰無怖我擁護汝父母大悅便穿土埋衆蟹及蛇就其地營寺薦冥福故號蟹滿寺又曰紙幡寺今真言宗僧守之

玉泉坊 在玉水村而爲律院

地藏院 在玉水東山本尊地藏相傳橘諸兄公之持佛也此邊有觀音寺藥師寺本尊皆是諸兄公之持佛也觀音寺之庭始有華藏塔三基二基今猶存一基金森法印在伏見時移之於第宅之假山云各曹洞宗僧守之東南田間有諸兄公第宅之遺址水石殘也又其西有橘諸兄公夫婦之塔

綴喜郡

神宮寺 在八幡山石清水麓真言宗而爲八幡宮之

供僧 光仁帝時始造八幡比賣神宮寺蓋此寺歟

藥師寺 在八幡山腹本尊藥師則當山之地主也大江

匡房卿之願文此寺罹火災時爲鳥有惜哉古田中

爲斯寺別當今使眞言宗僧交守之

足立寺 在男山西自樟葉村之南登山之路也和

氣清麻呂觸道鏡之怒斷脚筋放紫陽依宇佐

八幡之加護兩脚忽愈而步行如故於茲創足立

寺八幡宮遷幸之日此寺亦建斯山今寺絕爲山

名

神應寺 在八幡山北相傳行教守護八幡宮移此

山時建斯寺爲應神天皇之牌所故始號應神

寺其後爲曹洞宗峨山派曾文祿年中豐臣秀吉公

朝鮮征伐時先詣八幡宮追慕神功皇后之吉兆

率社司一兩輩欲使爲前鋒社司懼而不諾秀

吉公怒之于時神應寺住僧進出謂此地則應神天

皇之寺也首途莫如此秀吉公大悅則入寺門住職

供一獻又獻羽織衣服等於茲著羽織歡喜之

餘則賜二百石之寺產

善法寺 石清水八幡宮之社僧善法寺新善法寺田中是

稱三門主交爲社務職主萬事各眞言宗也其內

善法寺新善法寺紀氏而武內宿禰之裔也田中元八幡

山之地主藥師堂之別當也然加兩門主之列源賴朝

卿時善法寺之祖有社司成清者得賴朝卿之寵遇

被免門跡之號其末裔宮清蒙後嵯峨院之恩

顧特賜懷胎之宮女遂產男子成長後號尙清

斯時被免著僧正之緋衣携妻子著僧正衣是

爲始一說三門主之所著者所謂裴代而與僧正之

緋衣大同小異也凡裴者元僧家若行者之所著而其

色濃紫帶黑者也古行願寺行圓等著之故世稱革

堂上人然僧家亦於神前忌裴故以綿或布代

用之依稱裴代八幡三門主者社僧也故著之云尙

清有子二人兄通清號善法寺弟康清稱新善法

寺其裴善法寺幸清之女爲寶篋院義詮公之後妻

而誕詮滿則鹿苑院義滿公之異母弟也詮滿號養

德院大德寺之內養德院是也義滿公甚尊崇八幡

宮自被勤八月放生會之上鄉自茲公方家多被

勤之爾來門主益得繁榮善法寺主公方家之祈

禱田中修禁裏院中之祈禱善法寺新善法寺田中

共住八幡山下一說源賴朝卿時武內裔安宗別當之

嫡流有光清者稱常照房光清有子數人第二子

謂田中勝清第八子謂善法寺成清故兩家有嫡

庶之別賴朝卿是爲兩惣領云々歌人美濃局者成

清之姉也待宵小侍從者成清之妹也爾後新善法寺出

自善法寺。凡社司有數家。田中善法寺西竹東竹北田中園竹或稱柳殿。壇駿河小路新善法寺等是也。今多絕。

光明寺 在八幡山下。眞言宗而善法寺知之。

正法寺 號德迎山。寺在八幡山下南志水斯地。人菅原姓清水氏之先仕。右大將源賴朝卿有功。賴朝卿篤信神社。遂以清水氏爲八幡例幣使。中古此所有阿佛者。甚歸依三寶。而有子數人。兄國元繼父業。弟圓誓爲僧。創正法寺。阿佛三代孫高田宗久以其居之隣。石清水。避清水之清。而稱志水。正法寺本尊彌陀源信之所刻也。後奈良院天文十六年第十一世傳譽上人近侍玉席。有七箇日之法談。甚稱旨。自茲賜勅額。則爲勅願所。時々侯便殿。遂補知恩寺住職。則賜紫衣。也志水尾州亞相義直卿之母堂相應院之粉里也。故亞相再興之。爲相應院追薦之道場。自公方家被寄五百石寺產。而爲洛陽知恩寺之末寺。寺中聖賢院有大惠禪師之袈裟。相傳古在攝州吹田三寶寺。大日住職時自中華來物也。三寶寺衰頽後在泉南堺老尼之菴。有故寄斯院。斯院舊在八幡山東。號光通寺。東福寺中。

莊嚴院別峯之所。建也近世住僧移。院於正法寺中。改宗爲淨土宗。號聖賢院。大惠袈裟始所寄光通寺也。

圓福寺 在八幡山下東北。古珠林比丘尼之菴而無寺號。然有菴領少許。爾後妙心寺雜華院月潤和尚暫住之。號圓福寺。今所有達磨之像元和州片岡達磨寺之物也。兵亂時有人奪取斯像。而置斯寺。一說當社田中氏一代有故塾居片岡。爾後歸八幡。此時片岡住人有右衛門尉者。自片岡携來斯像。授田中以置斯寺云。

淨德寺 在橋本邑東北。曹洞宗春庭座元之所。開基也。春庭天文末長享年中之人而爲常德院義尙公之陣僧。凡室町家舊例而出軍時伴僧侶一人。是稱陣僧。依之則淨德寺元爲常德寺。乎斯寺始在八幡山下。而此處五箇禪刹之隨一也。爾後一峯和尚住職時移今處。豐臣秀吉公歸依一峯。於下奈良小川。賜二十石寺產。曾德善院玄以再興此寺。請妙心寺中蟠桃院一亩和尚爲住職。自茲爲濟家玄以推舉一亩。爲豐臣秀賴公讀書之師。又筑後久留米住毛利壹岐守在大坂時爲斯寺之檀越。斯人甚。

得_ニ秀吉公之恩顧_ニ故置_ニ秀吉公像於斯寺_ニ于_レ今存久修園院_ニ在_ニ八幡山東南_ニ本尊釋迦行基之所_レ作也

(補遺)同律院五箇寺 大乘院 金剛院 法恩寺 西寺 慈光院

俗謂_ニ木津佛_ニ此本尊之材出自_ニ木津川_ニ行基取_レ之刻_ニ釋尊之像_ニ木與_レ古倭音相近故謂_ニ木津_ニ者乎今律宗僧守_レ之一說此本尊手有_ニ擎_レ鉢之印象_ニ乞丐之体相也故稱_ニ乞佛_ニ者也

西方寺 在_ニ飯岡_ニ行基所_レ置_ニ山城州_ニ葬場之隨一也淨土宗僧守_レ之

妙勝菴 在_ニ薪里_ニ大德寺南浦紹明之所_レ建而則有_ニ木像_ニ

酬恩菴 在_ニ妙勝菴之中南浦先建_ニ妙勝菴_ニ隱_ニ于茲_ニ

一休純慕_ニ其跡_ニ建_ニ酬恩菴_ニ樓_レ焉今却酬恩菴爲_ニ方丈_ニ一休雕像亦在_ニ于茲_ニ世人遍識_ニ一休_ニ故如_レ今專稱_ニ酬恩菴_ニ不_レ知_レ有_ニ妙勝菴_ニ寺產有_ニ九十石_ニ曾連歌師宗長構_レ菴暫棲_レ焉

默々寺 在_ニ酬恩菴之南_ニ永井信濃守尙政之家臣佐川

田喜六昌俊晚年剃_レ髮號_ニ懸壺居士_ニ建_ニ此寺_ニ隱_ニ于茲_ニ此人好_ニ倭歌_ニ嗜_ニ茶會_ニ士林之中風流人也

(補遺)石清水八幡禪宗五箇寺 神應寺洞家 常德寺

濟家 全昌寺同 慶春菴同 巢林菴同

雍州府志卷六

土產門上

藥品部

元日御藥載延喜式三十七卷典藥寮部一

元日御藥

白散一劑 度幢散一劑 屠蘇一劑 千瘡萬病膏一

劑

臘月御藥

犀角丸六劑 芍藥丸三劑 温白丸四劑 千瘡萬病

膏一劑 升麻膏二劑 耆婆膏一劑 調中丸一劑 芒

硝黑丸一劑 鼓丸一劑

中宮臘月御藥

四味理中丸 七氣丸 八味理中丸 乾姜丸 烏梅

丸 吳茱萸丸 當歸丸 芍藥丸 神明膏 大萬病

膏 千瘡萬病膏 耆婆膏 賦風膏 各一劑

東宮

白散一劑 度幢散一劑 屠蘇一劑 七氣丸二劑

四味理中丸四劑

地黃煎料

生地黃二十石十石は和泉國凡山城國二町在葛野十三

條水谷下里四至東限二岑山二南限二堀越山谷口二西限

岑北限二幸河合二永爲下殖二地黃二之地上

諸國貢蘇依レ次貢來然以レ不レ在二山城國之土產一不

載二于茲一

山城國年料雜藥三十二種載延喜式三十七卷一

王不留行十二斤獨活十斤白朮三十五斤黃耆地榆各十

斤牛膝苦參各二十五斤桔梗三十斤香薷射干各十五斤

菖蒲三斤枳實漏蘆蘘本各九斤薺薺商草小蘗各六斤龍

膽通草各五斤紫苑三斤商陸八兩芍藥四兩厚朴十八斤

白斂二斤二兩葛根三十二斤鐵尾草三斤桃仁九升杏仁

一斗八升赤小豆四斗六升蜀椒一斗二升鼈甲一枚白粟

大一斗

今考レ之倭藥有下古有而今無レ之者上王不留行鼈甲牛酥

之類是也又有下古無而今有レ之者上當歸川芎茯苓之類

是也斯外所々種レ之者不レ可二勝而計一之且寬永年中應

峯相_レ攸置_二藥園_一南北二箇所使_二和氣氏并丹波氏兩家
醫生二人各守_一一方置_二種_レ藥人_一種_レ根蔕_レ苗不_レ愆
期又採_レ葉取_レ實不_レ違_レ時是有_レ便_レ辨_二色香_一別_レ眞
贋者也是皆太平之餘標而諸民之所_二依賴_一也夫本朝
神國也靈地名山不_レ爲_レ不_レ多矣感_二精靈之氣_一而奇卉
靈木之生也不_レ可_二得而知_一之恨無_二識者之眼_一然如_レ今
也興_レ絕舉_レ廢他日置_二採藥之人_一亦不_レ可_二識是所_一願
也

山城國平安城八百年來不易之帝都而繁華之地也故
至_二醫師之良_一不_レ乏_二其人_一故諸家有_二救_レ急之成藥_一
今舉_二其大概_一

龍腦丸 醫家和氣氏祖廣世清丸之長子也起_レ家補_二文
章生_一爲_二大學別當_一大學會_二諸儒_一講_二論陰陽書_一新
撰_二藥經大素等_一廣世之子時爾自_二幼年_一學_二醫術_一承
平三年秋七月被_レ試賜_二醫博士號_一又稱_二鍼博士_一遂
任_二典藥頭_一自_レ是後世爲_二典藥頭_一今半井家此裔也
半井宅元在_二鳥丸正親町_一北今施藥院地_一家有_二大
井_一隔_二其中間_一半用_二製藥之料_一半充_二雜用_一依_レ之
有_二半井之號_一曾和泉國界和氣氏有_二半井春蘭軒
者_一是亦同_二出自_一一旦入_二中華_一從_二熊宗立_一而學_レ醫
歸朝時傳_二龍腦丸方_一且得_二銅人形等_一而歸春蘭軒

有_二三子_一嫡子嗣_二其家_一子_レ時京師和氣氏無_二男子_一
春蘭軒之次男來_二京師_一爲_二和氣氏之養子_一今鱸菴等
其末裔也代々少年日暫結_レ髮與_二道三家之嫡子_一交
爲_二典藥頭_一常製_二龍腦丸_一而救_二急病_一然泉南春蘭軒
定衰弟_レ養軒連綿而今仕_二東武_一

快氣散并奈調散 堂上山科家之所_二調合_一也
保童圓 堂上富小路家製_レ之靈心丹亦然

屠蘇白散并度障散 丹波氏祖康賴出_レ自_二後漢靈帝

末_二元領_一丹波國矢田郡始賜_二丹波宿禰姓_一叙_二從五
位上_一歷_二鍼博士_一醫術通_二神妙_一褒譽溢_二宇宙_一永觀

二年十一月二十八日以_二醫心方三十卷_一獻_二納之_一其
裔有_二兼康者_一專得_二明醫之譽_一自_レ茲後末孫多以_二兼

康_一呼_レ之實丹波姓而氏號_二小森_一至_二其末裔_一醫術日
日衰纔領_二三十石之祿_一是爲_二屠蘇料_一每年臘月晦日

製_二屠蘇白散并度障散_一獻_二禁裏院中_一且捧_二官家_一而
已也舊記屠蘇之屠字加_二一點_一爲_レ屠忌_二尸之字_一而

加_レ點者乎是本朝之故實也近世醫家曲直瀨道_二傳_一
丹家之術_一而大興_レ家

延齡丹 曾寬正年中武藏國河越有_二道導諱三喜者_一自
號_二範翁_一又稱_二支山人_一及_二中年_一入_二大明_一留居十二

年學東垣丹溪之術。遂携醫家之方書歸本朝。救療蒼生。天文年中洛陽有曲直瀾道三者。字一溪別號。雖知苦齋。始入相國寺藏集軒。爲僧號。等皓二十餘歲赴關東。入足利學校。學群書。享祿四年始見道導。窺方書。傳醫術。天文十四年歸洛陽。遂遁浮屠。專醫術。施大名於天下。然道三無男子。而有女子。於是門人玄朔爲婿。傳醫術。玄朔相續仕公方家。號延壽院。自製延齡丹。而救人玄朔之末裔代々少年日暫束髮與半井家之嫡子交爲典藥頭。遂稱和丹兩家。今世業醫術者多出自斯兩家之門。

蘇香圓 相傳源賴光五世之孫充角號坂三郎。產于和州。其後家系斷絕。而後有九佛者。嗣之興醫業。其子十佛博學多聞而療養蒼生。光明帝使任民部卿法印。足利尊氏公恩遇特渥。其子諱慧勇號健叟。醫術通神。後光嚴院後圓融院後小松院三朝相續賜上池院號。鹿苑相公寵顧。又渥呼號士佛。以士字從十從一而亞十佛之謂也。其末裔連綿而仕公方家。曾製蘇香合圓傳家救人之急。又庶流專有業鍼之人。

萬病解毒圓 古有片山隆盈者。剃髮後號道正。古斯邊惣號松木島。松樹數株其蔭繁茂。景愛尼寺等亦在其間。因或稱木下。故世稱木下道正。曾從永平寺開祖道元和尙。入宋道元遍參中華宿德。所々經歷之間。中俄爾病發。氣息將絕。時一老翁忽然來謂於我國。近隣之名衲也。如何失之哉。則與一丸藥。病立痊。斯時老翁謂道正。爾不辭跋涉。從師之志。惟深今我授所用一丸之藥方。歸本朝。至子孫爲家業。須救諸人之疾苦。我是日本稻荷神也。言終失其所。往則今解毒圓是也。歸朝後家內勸請稻荷明神。于今存矣。道元始在深草佛德山興正寺。寺去稻荷社不遠。故被稱近隣。爾後興聖寺中絕近世再建興正寺於宇治郡。凡解毒圓流布日本國裏。至兒童走卒無不識道正解毒者。且自元祖道正至今二十七代相續其家。誠奇哉。是皆依稻荷神之冥助者乎。

外郎透頂香 禮部員外郎陳宗敬別號台山中華台州人也。舊爲大元之老臣。也。至正年中元朝爲大明所滅。宗敬以爲忠臣不事二君。遂投化本朝家。筑前博多津。于時本朝應安之始也。宗敬文材博達。兼

通_二占相_一且傳_二靈方_一調_二奇藥_一鹿苑相公聞_二其名_一雖
 被_レ招_レ之不_レ應_レ命創_二小院於_二郡之妙藥禪利內_一號_二
 明照_一後入_二崇福寺_一無方和尚之室受_二衣鉢_一行年七
 十有餘而死其末裔來_二住洛下西洞院_一製_二透頂香_一而
 賣_二之相州小田原透頂香此餘流而斯家之庶流也大
 覺禪師來朝在_二鎌倉_一傳_二斯藥於小田原土人_一云今小
 田原人來賣_二京師_一

蕪荑仁湯 近世有_二八坂崇譽者_一以_レ醫聞_二于世_一後花
 園院時被_レ叙_二法眼_一號_二大進法眼_一崇譽七代孫宗德
 改_二八坂_一稱_二板坂_一其爲_レ人挺_二出物表_一而不_レ爲_レ世
 所_レ拘束_二平日對_レ病施_レ藥無_レ不_レ愈故無_二貴賤_一便_二
 其門_一而求_レ治家方有_二蕪荑仁湯_一其藥煎汁至濃故
 至_二七度_一煎_レ之頭汁至_二末汁_一相合而用_レ之故世稱_二
 七度煎_一虛極之病傳用_レ之間有_レ得_二効驗_一者_上

產前後藥 相傳_二一條殿至_一昭實公養父晴良公_一自_二室
 町御池町西_一至_二鳥丸東_一方二町有_二亭地_一池水在其
 內_二一條殿家司有_一安藝氏大膳亮者_一得_二產前後之療
 養_一大膳亮宅在_二池水側_一一時少女來_二大膳亮宅_一求
 治療_二大膳亮問_一其病_二診_一其脉_一則刺_レ鍼授_レ藥其病
 忽瘳少女不堪_二歡喜_一謝_レ之謂我病苦因_二療養_一忽

得_二快復_一然無_二一物之可_レ表_レ謝者_一我有_二產婦之靈
 藥_一凡產前產後不_レ論_二虛實_一用_レ之則無_レ不_レ愈須_レ授
 之與_二一卷書_一而去神仙散安榮湯之黑藥類在_二書
 中_一大膳亮怪_レ之使_レ人從_二其所_一歸終_二於池水邊_一失_二
 其所_一往歸而告_レ之大膳亮彌不_レ會_二于_一時見_二前婦人
 之座席_一龍鱗三片現然而存於_二玆_一大膳亮以爲前少女
 知_二池中之神龍而殘鱗爲_一其徵_上者也則以_レ鱗爲_二家
 珍_一以_二靈方_一治_二產婦_一則無_レ不_レ愈依_レ之大膳亮或
 稱_二大蛇亮_一家有_二綸旨并御教書等_一爾後安藝氏出_二
 二條殿亭地_一住_二洛北_一今茂庵并吉田長因等其裔也
 各大膳亮爲_二稱號_一龍鱗在_二茂庵家_一云藥品之中號_二
 黑藥_一者急救_二產後之血量_一故世人爭_二求之_一此外一
 橋并吉益流中條流有_二數家_一本朝治_二金瘡_一家兼治_二
 產婦_一

牛黃圓 閑院太政大臣公季公八世之裔公經公之子竹
 田清水谷中納言公定卿十四代之孫昌慶稱_二山城守_一
 始學_二醫術_一今竹田祖是也其末裔代代仕_二公方家_一家
 傳之靈方製_二牛黃圓_一
 保童圓 古堂上富小路家代代製_二保童圓_一今醫家製
 之

牛黃清心圓 古有_二施藥院_一製_二數品丸散_一而救_二良賤之疾苦_一其中牛黃清心圓特有_二救_レ急之功_一爾後施藥院絕豐臣秀吉公時有_二全宗者_一元山門之僧而俗種近江人也中年遁_二浮屠_一就_二大醫一溪翁_一而學_二醫術_一有名_二于世_一秀吉恩遇特渥而常侍_二左右_一天正年中請_レ朝叙_二法印_一令_レ任_二施藥院使_一於_レ玆大開_二藥局_一招_二集疾病之人_一而療_レ之家傳牛黃清心圓特有_二效驗_一全宗末裔于_レ今仕_二公方家_一

鳳髓丹 近江國佐々木三郎秀義二男六郎嚴秀受_二封邑於洲之吉田_一故子孫稱_二吉田_一八世孫德春有_レ故去_二本邦_一到_二洛陽_一謁_二鹿苑相公_一又仕_二義持公_一晚年嗜_二醫術_一退_二居城西嵯峨角倉之地_一種族有_二湊快者_一仕_二豐臣秀吉公_一叙_二法印_一賜_二盛方院之號_一此家良方鳳髓丹世之所_二遍識_一也或說德春父從_二天龍寺策彦_一入_二大明_一德春有_二二子_一兄了意得_二水利_一弟意庵宗恂專傳_二醫術_一

神明圓 相傳伊勢皇太神宮託宣之藥方也細末爲_レ丸抹茶爲_レ衣五條邊有_二賣_レ之家_一用_レ之治_二諸病_一云金屑丸 山科四宮村有_二製_レ之家_一京師人倣_レ之處々賣_レ之專治_二食傷腹痛等_一世稱_二山科藥_一或謂_二樣金屑_一

丸_二倭俗試_レ之謂_二樣此藥試_レ之有_レ驗謂也_一山科製_レ之人有_二數家_一然其內滋井田氏加_二樣字_一其餘不_レ能_レ書_二樣字_一此家金屑丸家乎

豐心丹 傳言與正菩薩寂尊住_二南都西大寺_一於_レ玆爲_レ救_二諸人之疾苦_一製_二斯藥_一以傳_二于世_一稱_二西大寺藥_一今省_二藥字_一專謂_二西大寺_一一說斯方元投化人張三官之家方而寂尊傳_レ之者也南京人苗村氏家有_二巨鼓之筒_一裏面刻_二西大寺之字_一傍雕_二豐心丹之方_一傳言此洞出自_二西大寺_一者也思後世恐_二斯方之失_一其傳_二而雕_一洞內_一者乎世稱_二西大寺方_一者足_レ信_レ之斯筒今在_二泉南堺浦西本願寺派之道場_一云

返魂丹 一名麝香丸足利家之良方而畠山家亦傳_レ之一切積聚食傷霍亂等用_レ之則無_レ不_レ有_レ驗是又倭方之內特爲_レ奇

阿加陀圓 治_二一切食毒霍亂腹痛_一

發毒圓 奧州仙臺之醫師入_レ宋而所_レ傳_レ之也治_二食毒

霍亂等之急證_一

奇應丸 治_二食毒霍亂腹痛_一

青黃丸 其功粗同_レ上

赤龍丹 今川家傳_レ之世所謂今川赤藥是也治_二一切之

病馬

和氣渴下湯 俗稱和氣下、跌撲傷損用之有妙渴下

爲度倭俗以藥催渴下謂下藥

梁瀨^{フナ}節藥 所出自近江梁瀨之妙方也倭俗小兒浸

淫瘡稱草言雖恒有之春草生時與秋草萎時一特

多故號草乎凡諸病春初秋始易發故俗謂草生草

枯諸病發凡草瘡其膿汁點處隨發其浸淫蕃延難治

始發時以是渴瘡毒則治此藥劑絹包漬熱湯用

其汁是謂節藥

金德妙功丸 一切食毒腹痛小兒急慢驚風用之則妙

傳言高麗金德之家方而所傳本朝之人者也

圓齋妙功丸 醫師圓齋之家傳而專治小兒之諸病又

一方有萬能丸是亦與妙功丸兼用之則有効

驗

正法寺節藥 治產前產後撲損金瘡蟲獸咬絹包漬

熱湯用其汁

伯耆藥 杉原伯耆守之家傳也故世專稱伯耆藥專

治癰疽瘡毒之煎劑也

山名湯 山名家之所傳也專治婦人之諸病特血量

說日蓮宗僧奇驗坊之所製也

奇驗坊 專治楊梅瘡方中主土茯苓者也

鷄藥 是亦楊梅瘡之煎劑服用時燒鷄食之其煎劑

稱鷄藥

涎藥 是又楊梅瘡之一方也用之則大流涎瘡毒隨

涎之垂則盡云

出 同楊梅瘡之散藥也絹裏當鼻使之毒氣隨

出

接骨良方 倭俗稱骨續此方以白楊梅皮爲主少

加輕粉以紺屋之糊粘合之貼跌摩痛所則立

愈

治痢丸 柳馬場五條北有菅姓堀氏長順者元近江人

也自祖父長順往京師以一丸藥治數十度之

痢夏季秋初每痢病流行求之者滿門應酬不暇

相傳斯方元出自近江國小田村也

定齋藥 豐臣秀吉公在大坂城時城下藥店有定齋

者天性好俳優故公被催猿樂時定齋作狂言

曾遊擊將軍沈惟敬自大明國歷朝鮮國來本朝

時沈惟敬奉授靈藥方於秀吉公公以斯方被

授定齋賣之使爲恒產此藥治諸病世稱定

齋藥 其孫來_ニ洛陽_ニ住_ニ東洞院綾小路_ニ今稱_ニ木青屋_一

鴨脚藥 界町二條南某賣_ニ產前產後散藥_一家有_ニ鴨脚樹_一故世稱_ニ鴨脚藥_一

木斛藥 木斛葉似_ニ山茶_ニ至_レ冬不_レ落伐_ニ斯木_ニ陰乾去_ニ其外皮_ニ剉_レ之是爲_ニ主藥_一治_ニ食傷腹痛_一木斛於_ニ中華_ニ未_レ詳_レ爲_ニ何樹_一

桂藥 在_ニ室町四條南_ニ斯方元出_レ自_ニ桂里_一凡瘡毒濕氣用_レ之渴下則痊

東山小粒 在_ニ西洞院五條南_ニ相傳東山殿之方也日蓮宗要法寺之僧傳_レ之小兒急驚慢驚五疳一切病用_レ之有_レ效

桑山小粒 其功粗同_レ上今洛下處々賣_レ之是亦專用_ニ小兒_一之諸病_一

膏藥 凡本朝外科有_ニ兩流_一一本朝所_ニ傳來_一也一傳_ニ西洋耶蘇治療之法_一治_ニ癰瘍并金瘡_一是謂_ニ南蠻流_一今以_ニ斯傳_一爲_レ良太乙膏萬應膏楊柳膏等所々賣_レ之眼目藥 眼科醫有_ニ數家_一佐々木青木間島須磨穗積祐乘坊泉南界海乘坊等是也各住_ニ京師_一曾良峯源算上人製_ニ眼藥_一而救_レ之彼等僧到_レ今製_レ之凡僧徒之療

眼疾_一者處々多

齒牙藥 丹波康賴之孫俊雅任_ニ近江掾_一其子俊通爲_ニ侍醫_一叙_ニ從五位下_一聽_ニ半昇殿_一自_レ茲代々醫術爲_ニ業任_一典藥頭_一爲_ニ施藥院使_一二十五世孫賴元有_ニ數子_一山城州人賀茂玄泰依_レ與_ニ賴元_一爲_ニ親族_一養_ニ其子_一傳_ニ醫術_一是號_ニ兼康_一治_ニ諸病_一特得_レ療_ニ齒牙_一之術自_レ茲爲_ニ治_一口舌_一之醫_ニ賴元嫡流絕兼康孫子_一今連綿然不_レ稱_ニ賀茂氏_一直以_ニ兼康_一爲_ニ號仕_ニ公方家_一近世避_ニ御諱_一稱_ニ金保_一在_ニ京師_一者以_ニ兼康_一稱_ニ之凡中華醫通_一治_ニ諸病_一本朝人材力不_レ足故治_ニ大人病_一者稱_ニ本道_一治_ニ婦人病_一者號_ニ血道醫_一治_ニ小兒_一者_ニ稱_ニ小兒醫者_一治_ニ齒牙_一者謂_ニ齒藥師_一眼科號_ニ目醫者_一治_ニ癰瘍_一人專稱_ニ外科_一又一種有_ニ御坊藥_一凡本朝京師邊有_ニ五三昧_一主_ニ土葬及火葬_一之者是稱_ニ御坊_一此事始僧徒勤_レ之倭俗僧謂_ニ御坊_一近世僧徒使_ニ葬場之土人爲_レ之故今雖_ニ東髮人_一又稱_ニ御坊_一傳言此人有_ニ新死之者_一則尋_ニ其病_一若有_ニ積聚癥瘕入_ニ火不_レ燒者_一竊取_ニ其不_レ燒之癍塊_一再燒爲_ニ霜授_一其有_レ病者_一是從治之法乎凡御坊之於_ニ治療_一也多此類乎今專稱_ニ御坊藥師_一又謂_ニ御坊藥_一

成藥店 俗藥品未_レ經_二剉刻_一謂_二木藥_一近世藥店主擇_二真偽精麤_一法製而對_レ之篩_レ之應_レ需而賣_レ之元雖_レ不_レ及_二醫家之修治_一又於_二草醫_一甚得_レ便中華所謂見成藥是也今所_レ有_レ之是稱_二成藥屋_一又近世市中庶_下稱_二虎屋藤屋_一者_上製_二丸散之藥_一而賣_レ之庶人得_レ其便_一

香具 倭俗薰物并匂袋等所_レ用沉香丁香白檀麝香之類惣稱_二香具_一凡薰物方有_二梅花菊花等之名_一香劑依_二其方_一而有_二輕重之品_一各麤_二末之_一其調合法改_二衣服_一禁_二不淨_一則於_二一室之內_一先鳥子紙四折_レ之如_二井字之形_一置_二是淨几上_一香劑各以_二權衡_一量_レ之鳥子紙四折之內中間限_二方六寸_一比_二置所_一量_レ之香劑於其處_二各量_レ之有_二香劑之次第_一是謂_二疊_一遂_レ次重疊之謂也量_レ了後合_レ之以_レ匙香劑間爲_二境界_一如_二溝洫之形_一而後點_二麝香於白兔毛之屑掃頭_一灑_二溝間_一是謂_二打麝香_一其次第前後一失_二其次_一則調合後香氣不_レ發而後混合之香劑入_二藥臼_一和_二白煉蜜_一杵_レ之至_二二千或三千_一隨_二杵數之多_一而有_二香氣_一爾後納_二囊內_一或與_レ壺藏_二風雨所_一不_レ侵之中土_二隨_レ歷_二歲月_一而馨香分發是稱_二薰物_一又謂_二燒物_一點_二香爐并火

爐又一種有_二香囊_一或謂_二匂袋_一於_二其方_一也有_二花世界兵部卿等之名_一是亦麤末香劑各有_二輕重多少之差_一別_二各量_レ之而滾_二合之_一共盛_二絹囊_一而囊左右著_二緒繫_一項懷_二其袋_一故元稱_二掛香_一今無_二其儀_一徒納_二之諸懷_一是謂_二匂袋_一倭俗匂字代_二香字_一而用_二之本朝流風於_二斯二物_一也重_二調合之法_一故主上亦御手疊_レ之合_レ之近臣一兩輩外不_レ預_二斯事_一故謂_二勅作_一諸家亦有所_レ傳之方_一於_二今市中亦有_一調合之家凡香具各自_二肥前長崎港_一來_二京師_一藤播磨買_レ之而採_二擇之_一以充_二其用_一其外諸品藥劑亦所_レ在_二播磨家_一爲_レ真也薰物匂袋斯家之所_二調合_一爲_レ堪_レ用

造釀部

茶 凡本朝賞_レ茶也舊矣嵯峨天皇時旣玩_レ之中世建仁禪寺開祖千老國師榮西入_レ宋得_レ茶而歸_二本朝_一治_二源實朝公之餘釀_一明惠上人種_二茶實於梅尾_一其所種_二之深瀬等園名至_一今存矣曾來朝僧清拙正澄與_二夢窓獨芳_一遊_二梅尾_一之詩中稱_二梅尾_一爲_二茶山_一宜哉義滿公適在_二伏見_一時夢_二羽仙_一傳_二授植_一茗摘_レ鮮之術_一始使_二大内介某_一植_二茗於苑道_一爾後宇縣有_二森祝

長井氏之人而製茶其中森川下預公方家之茶事
武衛家之園謂朝日京極家之園謂祝與山至法
住寺義澄公特賞之故命彼等益精選之或稱
極或稱上揃或謂別義揃倭俗每物各比並而撰
之取用其良物惣謂揃近世上林峯順并竹庵等茶
人自丹波上林鄉遷居於斯所逐日富榮凡宇治
中十一家茶師納公方家之茶於壺而獻之其餘各
所製之茶或一袋或二袋納十一家所詰之壺內是
謂御通倭俗不能獨立而逐隊連屬是謂通周
密納物曰詰至茶特密極茶十錢目納小紙袋壹
雙謂壹袋故袋壹箇稱半凡小袋二十則約壹斤而
其重二百目也極極品之謂也於今茶園所々有之皆
煎葉而用之者也至抹茶之極品則宇治之外不
堪用且宇治橋自西第三柱之間於一河中水特
清冷堪用點茶之湯又此地山間茶磨石出彼此
茶之事畢矣凡橋以東宇治郡也橋以西久世郡也今製
茶之大家多在橋西然古茶家多在東故依舊謂
宇治茶

酒 凡京師井水其性清而柔其味淡而芳以斯水釀
酒故其味甘美惣謂京酒又稱地酒凡其地之出

生其所之造釀惣謂地堀川大炊通北花橋酒近世又
有蘭菊酒等為特宜又京北町口一條北酒店有
稱重衡者上平重衡減南都伽藍凡酒自古以南
都為勝此酒味勝南都之酒故有此號

白醴酒 今所々製之元倣筑前博多練酒而釀之其
色白如練故稱練酒其中油小路出水通北并衣棚
三條北酒店之製特為美

山川酒 六條油小路酒店釀之凡山間流水多白而濁
此酒似其色而甘美因號之又曾此邊有常薰者
釀醴酒今有倣其製而造之者其味甘而帶微
酸夏日造之

醬油 倭俗豉汁謂醬油其製法煮大豆熬大麥各
有其量兩種共合之為麴及其熟則盛大桶合
水加鹽是亦有其量而後每日兩三度以械滾合
之械竿頭橫小片木其滾之也似以櫓械操
舟故謂械倭俗櫓棹謂械又滾之謂搔凡及七十
日餘盛其糟於布囊置石於其上而搾取其滴
汁以是煮諸物而食之又有取末醬汁者是
謂多磨利比醬油則味恬一物共泉洲堺酒家多造
之世稱堺醬油為名產然如今則京師酒店多造

之又人家製之罨醬油雖在京師不及用之

醋汁以米造之謂米醋伏見之所釀造世稱伏見醋而爲名產猶稱駿河國善德寺醋然今京師之所製其味酸美而不及取他邦又一方有酒酢始米醋醇酒等分合之盛是於壺緊掩口夏六月土用中與壺置庭園曝炎日經七十日餘斟取之而用之隨其所斟之器大小又酒并水等分量之則亦如舊入其壺內歷年不腐用之有餘故謂萬年醋或又菖蒲葉細剉少許加其內則發芳氣故或謂菖蒲醋

油 山崎土人釀酒搾油離宮神職人亦造之凡賣油

家多書八字於門帷是稱八字屋是依八字幡地人而取八字爲稱號凡攝洲大坂人以槌大擊之取油其油多然傳言八幡神忌其音響故輾轆搾之

餅 處々店製之其中京北渡邊道喜并道和五條御影堂前方廣寺大佛殿前店製之但稱大佛餅一家者擔願寺前在之外不聞之各形色風味爲勝粟餅北野茶店爲佳

角黍 烏丸土御門南渡邊氏道喜道和兩家製造爲第

一第二道喜家每日獻餅黍於禁裏茅卷亦時々供之故稱內裏茅卷其粉色精潔其風味淡美非他家之所及也角黍或謂粉團舊以黍造之以青茅裏之蒸而食之其茅包之末尖而似牛角故謂角黍元以茅裹包之故謂茅卷如今多以篠葉裏米粉團以蘭殼纏之然依舊稱茅卷又稱篠粽此篠葉出自洛北鞍馬山他產不堪用此家又造強飯赤白隨其所好

饅頭 古建仁寺第二世龍山禪師入宋于時中華人林和靖末裔林淨因執弟子禮斯人於中華製造饅頭元順宗至正元年龍山歸本朝日林淨因相從來在本朝改氏鹽瀨始住南都製之其形狀片團是稱奈良饅頭是本朝饅頭之始也於中華始自諸葛孔明曾鹽瀨淨因有數子其內一人爲僧從龍山則建仁寺中兩足院祖無等以倫是也故到今鹽瀨一家悉爲兩足院之檀越以倫弟某於北京造之今烏丸鹽瀨之祖也一說淨因晚年歸中華云又一條虎屋饅頭祖三官亦中華投化人也如今製之家所々有之松屋龜屋二口屋寶來屋等互爭競造饅頭外皮貴精白內杏重甘美凡饅頭并餅納砂糖

并赤小豆紛於其內、蒸而食之、其所包裹之物如杏之仁、故稱杏或作餅、此外羊羹月羹外郎餅高麗仙袂類亦此等家之製造也

索麵 諸國之名產雖有數品、洛陽舟橋并堺町二條

北麵家之製造非他邦之所、及是稱地索麵、因京師土地之造釀也

饅飩 所々在之、其內中御門通丸屋并長濱屋一條虎

屋二口屋之所造爲宜、蕎麥麵亦然、油小路下立賣、南日野屋湯煮饅飩、雖歷數十町、不冷云、饅飩切麥

蕎麵是謂打以棒打成爲片細截之謂也、凡京師水至清、故其色潔白、凡造釀之物非他鄉之所、及也

地黃煎 古禁裏命醫家令製地黃煎、其法穀芽末

粉合地黃汁、入鐺內、慢火鍊之、而用之、則潤腸胃、益氣血、今不用地黃汁、以清水煎鍊之、其

味雖美、其功能爲劣、又東福寺門前菊一文字屋之滑飴爲精品、食之不粘齒牙、不滯胸膈

飴糖 東福寺門前菊一文字屋之所製爲佳、又桂里之

製造細密而甘美、形如竹管、是謂桂飴、或稱管飴、又南都春日禰宜春正月鍊糕贈堂上地下、是稱滑

糕、又謂禰宜糕、是亦在京師

豆腐 中華書所謂白豆腐、碎煮作腐、俗呼豆腐、是也

洛下所々製之、然五條御影堂前店建仁寺門前之所造、其形色精白而和柔、至其調味、則有諸品之製

法、祇園樓門外東西兩茶店、薄切豆腐、竹串貫之火燒之、與連串燒餅、合以味噌稀汁、煮之、麴粉點

其上而食之、其風味淡脆、非他之所、及是稱祇園豆腐、自遠方來者食之、爲口實、祇園東西兩店北

野七軒茶屋是洛陽茶店之本也、公方家祇園并北野社造營、日此兩店亦必令改造之、山門行者滿散、日詣

諸社、時此兩店必爲休憩之場、故然也、自古公武兩家因有歸依山門、又豆腐調和圓山靈山長樂寺雙

林寺僧互相爭而盡美

麩 處々造之、然西洞院東四條通河棚之製造爲勝、近世糟藏而送他邦、其所到是稱京麩、而專賞之

凡釀造物專依水之善惡、而有麩惡者乎

菟蓴 菟蓴根至冬採之、俗謂菟蓴玉、然去麩皮、入石臼、緊急杵之、細末後、以手揉之、而加石灰少

許、釜煮之、乘熱而盛、幅五寸許之長筥、然後截之、方五寸許、入水而賣之、買者再湯煮去石灰氣、而後

隨意調和之

洲濱餠 或謂二豆餠一麥芽大豆細末煉之作二三角竿形然以竹籊一包裹之食去竹籊薄截之其狀似二海濱洲一故今專謂二洲濱一所々製之然四條南室町松本町所製爲佳

與米 室町四條南松本町所有爲宜近世二口屋并虎屋之製亦佳其製法熬米以滑餠粘固之或長或圓造之是自粘固之中挽與之謂也

麩燒 所々製之其法小麥粉合水淡濃適宜而以匙斟之盛片鏟子火燒之則隨鏟形而爲片團以刀起之其外面如浮漚而其內柔脆塗味噌於其表卷之食之倭俗未醬謂味噌麩燒其粉細末其色潔白者是稱沈燒民門二月八月彼岸中逢親族忌日則招親族朋友供菓實給團餅又饗麩燒是稱茶子是以茶表父以菓表子之謂也卷麩燒之狀似經卷當斯時也食之謂續經幾卷或燒之點豐菓子於其上以刀細截而食之亦可也饗終煎葉茶而令服之是謂立茶或謂供養茶又謂彼岸茶倭俗抹茶并煎茶以茶筥滾合之曰立茶

燒餅 以梗米粉爲小片團其內盛赤小豆并砂糖

片鏟上燒過以二其形之相似一或謂銀鐔清水坂之製是爲始近世京極清淨華院前店製之然不及渡邊道和之製造

團子 粉團或謂團子所々製之每年六月晦日社司於御手洗河修穢其前日自十九日京師男女參詣掬社外之井水而積暑穢又林間設茶店賣飲食其中小粉團每五箇以青竹串貫之五十枚或百枚社家敷篠葉於臺盛其上獻高貴家又於茶店而賣之良賤買之以生竹葉裹之携家賺兒女又贈朋友是謂御手洗團子又清水坂茶店所賣是謂清水團子又賣蒲鉾是蘆蒲葦所生者也凡蒲葦中間長尺許黃綿色物圍繞之是謂蒲鉾言似鉾之謂也塗油日乾兒女點火照之倭俗以刀取鯉魚肉細敲石臼磨之加鹽而尺許圓竹莖外爲心面圓長塗之燒而食之是謂蒲鉾元依似此穗而稱之今誤貼板面曰蒲鉾又以竹貫之曰竹輪其名雖相當實蒲鉾是也然則竹輪古式而所貼杉板者近世之製也凡蒲鉾之製中華人稱肉餅

缺餅 凡倭俗新年所用之餅有數品鏡餅又菱花片

菱比菱花形一花片則圓而比之葩謂也又有小戴子持之號一戴則戴餅而子持其形小而比之子孫之繁榮者也以三片團餅獻宗親又供神佛是謂鏡以三其狀相似稱之其小者謂溫餅或士農工商共聚常用之器物於一所施注連供鏡餅注連則中華所謂葦索也是禁不淨之謂也醫師供藥籠又士人供甲冑是謂具足餅倭俗身甲一具謂具足一凡甲冑有六具悉具足之謂也其所供之鏡餅以刀截食之是稱開鏡又謂祝鏡至甲冑忌斬殺之詞故以手破餅缺一片食之故是謂缺餅於今一切稱缺餅圓山安養寺并雙林寺靈山正法寺僧嚴冬製餅是爲三片團乘半乾三寸許薄切之陰乾以文火遠焙之而後納壺內每有賓客供之凡家々惣雖有之不及三寺之製其內安養寺製造爲特勝故專謂圓山缺餅近世盛宮送遠方充方物

煎餅 六條製之故謂六條煎餅或稱仙袂又斯邊醒井之人家所製片餅亦此類而倣近江國醒井之製者也然煎餅經火故其外面膨脹而似鬼形面故或謂鬼煎餅片餅不歷火故燒而食之輕燒水

雪燒雪燒等雜品近世所々製之

古賀志 倭俗糯米陳皮山椒茴香各細末點湯而用之謂香煎又稱古賀志近世祇園町製之故稱祇園古賀志洛人專賞之遠邦人亦求之還鄉贈人而充方物其盛香煎一箇苦竹五寸許截之存節爲底盛香煎於內以檜木爲蓋其體製實都樣也醫家吉田盛方院之香煎是又爲上品

炒豆 北野真盛寺尼炒黑豆磨青芥菜水解爲黑豆衣別粳餅方三分許切之熬雜炒豆食之是稱真盛衣豆寺尼紙囊盛之贈檀越家倭俗團餅細截之熬過者是謂霞以其形相似稱之

納豆 大豆煮之加生姜紫蘇葉芥子等物製造之所々有之然大德寺中眞珠庵之所製也倣一休和尚之製法故謂一休納豆又聚樂淨福寺蓼倉法雲寺嵯峨清涼寺之製造爲佳凡納豆中華所謂豆鼓也又一方有稱金山寺味噌者案食物宜忌所載八寶鼓之類也則以出金山爲勝矣云々然則本朝所傳倣斯製法者乎

擣豆 六條本願寺寺內製之大豆少煮之乾後或十箇或五七枚大小隨心並置紙上置白紙一片於其

上隔紙以槌打成而爲片是稱六條打豆以是滾乾菜汁煮而食之其味甘美也

鹿茸 豆腐薄截之板面盛灰隔紙並置豆腐取水氣傳鹽少許而陰乾或剉之或斲之浸酒而食之其始形色似鹿茸故名之一說六條邊人始製之云六條鹿茸俚語相同故彼此互稱之

法論味噌 在柳馬場五條洛下唯一家也倭俗味噌謂味噌凡製法論味噌法黑豆煮之碎而作豆鼓南都所製布巾控之取汁爲煮物之料是謂伊呂採其汁者乾燥而不堪食之洛下製造不取汁故滑潤而味美相傳南都元興寺小塔院僧正護命始製之講問時爲衆僧半齋之添菜故號法論味噌又或稱護命味噌護命一日使止山門戒壇之人也

梅諸 五月梅子黃熟後鹽藏之其內梅子少許碎之混其內經日後所碎之梅子糜爛而與全形之梅子滾合兩種其其味甘而帶微酸圓山安養寺靈山正法寺之製造特爲美醬亦斯寺之珍味也

木目漬 洛北鞍馬土人春末夏初採通草葉與忍冬葉木天蓼葉合細剉之以鹽水漬之然後陰乾用

之倭俗草木萌芽謂目烏頭布漬醃土人製之多似木目漬以諸木之萌藥鹽藏者也

飯鮮 六條人家製之精飯長三寸許四圍寸許物相盛之貼乾魚皮一片緊密壓之而出之再盛桶以別飯鮮藏之然以石壓之是謂飯鮮或號月夜以其色白也熟後盛磁器灌冷酒加生蓼葉而食之是又夏日珍味也倭俗量飯之器謂物相或一合或二合或三合隨用而有之相木形之謂也每年西本願寺門主持藤花開而與飯鮮被獻禁裏院中禁松輩竹筍茄子皆倣魚鮮而藏之又有酒糟藏之者俗謂糟漬凡至魚禽肉及野菜根無不藏之

菓木部

山椒實 出自但馬國朝倉者爲佳京師富小路賣之山椒皮 洛北鞍馬土人山椒木不擇大小各三寸許切之入大釜煮之而後剝其皮以葭條插之賣市中買物去串再浸水以刀剉脆皮細剉漬醬汁而食之或糟藏亦可也今細剉日乾贈遠方又

出_レ自_二丹波_一者皮厚而其味爲_レ劣

茅栗 鞍馬並矢背大原土人九月初旬中三日間各有_二

遊樂之日_一斯時村中新婦各入_二山林_一採_二茅栗_一或稱_二芝栗_一其形小而內實去_二其外皮_一湯煮_レ之盛_二是於布囊_一新婦戴_二頭上_一賣_二京師_一而聚_二所_一賣之錢_二是充_二新婦一年中之費用_一又一種有_二大者_一風味形狀比_二丹波之產_一則爲_レ劣不_レ脫_二其毛毬_一謂_二伊賀栗_一倭俗毛毬謂_二伊賀_一湯煮去_二外皮_一碎_二其實_一而篩_レ之糝餅而食_レ之是謂_二栗粉餅_一斯製法西洞院餅店并本阿彌辻子所_レ有爲_レ勝矣延喜式載山城國貢_二平栗子_一此栗類乎

柿實 柿有_二雜品_一其內以_二木練_一爲_レ上在_レ木則練熟之謂也多出_レ自_二嵯峨_一然不_レ及_二頂妙寺柿_一日蓮宗頂妙寺始在_二高倉通北_一斯土地宜_レ柿形色風味異_二于他產_一近世頂妙寺雖_レ遷_二一條河原_一其柿所_レ接_レ枝今不_レ乏_二其用_一大和國五所之產爲_レ次俗稱_二五所柿_一又有_二安西柿_一傳言慈照院義政公在_二東山東求堂_一時安西氏人從_レ之宅邊有_レ柿其味恬到_レ今安西氏裔在_二淨土寺村_一古柿樹猶存矣今所_レ接_レ之又御室柿形肥大而霜後味至甘

木酬柿 不用_二羹湯煮_レ之柿在_二枝頭_一自然成熟者也

嵯峨之產爲_レ佳

筆柿 柿頭尖立而似_二筆尖_一故稱_レ之熟則其色紅而其味甘洛北村婦盛_二是於平盆_一戴_二頭上_一賣_二市中_一此外八王子并佐伊志牟等柿或以_二其所_一產之土地_一稱_レ之又以_二形狀_一呼_レ之者種類多々不_レ及_二枚舉_一

澁柿 所_レ有_二之然宇治郡山科七郷特多矣土人初秋柿未_レ熟時採_レ之盛_二籠賣_一京師買_レ之者去_二其蒂_一春杵_レ之以_二布囊_一搾_レ取其油_一是謂_二一番澁_一又稱_二木澁_一倭俗每_二物第一_一謂_二一番第二_一謂_二一番_一又不_レ難_二他物_一隨_二其自然之體_一者惣謂_レ木言木訥質橫之謂而其義亦相當然後以_二其所_一搾之渣滓_一盛_二壺或桶_一入_レ水經_二二三日_一後再杵_レ之取_二其油_一是謂_二二番澁_一凡柿油之爲_レ用也染_二衣服_一又塗_二強紙_一張_二篋宮_一倭俗貼_二紙於諸物_一謂_レ張又以_二澁糊_一續_二綴強紙_一或方一丈或二丈塗_二柿油於其兩面_一日乾又塗_レ之如此數遍是謂_二澁紙_一以_レ是包_二裹器物_一則雖_レ致_二遠方_一無_二雨濕浸淫之害_一凡漆器始以_レ糊貼_二紙於外面_一塗_二漆於其上_一是稱_二糊地_一又塗_二柿油於紙_一而張_二器物_一塗_二漆於其上_一是謂_二澁地_一至_二上品器_一則自_二其始_一塗_二漆於

布張^ニ其外^ニ而再漆^ニ其上^ニ是稱^ニ墜地^一

酃^ハ柿^ノ安居院人家白^ニ洛北郊外^ニ賣來^ニ澁柿^ヲ買^ニ之以^ニ新

芻湯^ニ煮^ニ一二沸^ニ新芻湯之煎汁謂^ニ灰然^ニ則^ニ苦澁忽去

變^ニ甘味^一是謂^ニ酃柿^一以^ニ新芻之煎汁^ニ煮^ニ之故外皮

壞爛依^レ之謂^ニ爛柿^一京極眞如堂每年十月十夜法事

之間爲^ニ節物^一故堂前賣^レ之又販^ニ市中^一或謂^ニ十夜

柿^一

釣柿 澁柿削^ニ其外皮^一以^レ絲繫^ニ其蒂^一揭^ニ屋檐下^一而

曝^レ之則經^ニ日後其色變而爲^ニ淡黑^一其味至甘是謂^ニ

釣柿^一又謂^ニ甘乾^一或謂^ニ生干^一苦澁甚者又變^ニ甘味^一

爲^ニ至也所々有^レ之

轉柿 宇治土人新秋採^ニ澁柿之小者^一去^ニ皮并蒂^一以

蔓繫^レ之陰乾至^ニ初冬^一外面帶^ニ霜色^一則其味甚甜此

柿形元小陰乾後圓成運轉故俗謂^ニ轉柿^一茶家盛^ニ宮

爲^ニ方物^一贈^ニ買茶之人家^一

梅子 所々有^レ之其中多出^ニ自^ニ北山梅畑^一

桃實 伏見產形大而味宜賣^ニ京師^一

杏實 所々出家園者其味爲^レ佳巴^ニ且杏子^ニ今亦在^ニ諸

處^一

李實 出^ニ自^ニ處々^一

梨實 凡梨有^ニ數種^一其內水梨味尤美又陸奧國會津鄉

松尾梨近江國觀音寺梨西州空閑梨類悉接^ニ其枝^一

在京師^一又樺欄實煉^レ之爲^ニ膏^一

林檎 嵯峨產爲^ニ良京師大宮所^一出亦不^レ爲^ニ劣丹波國

所^ニ出次^一之

葡萄 嵯峨產堪^ニ食京師大宮亦不^レ爲^ニ不可^一

柿 所々出嵯峨并水尾所^ニ有^一其形大而味亦佳

橘 凡橘類倭俗總稱^ニ柑類^一審柑柑子白柑子雲州橘九

年母橙等雜品悉在京師^一凡柑類南方海嶺產者風味

甘美也京師所賣多出^ニ自^ニ木津河邊鐵司^一鐵司地

在^ニ山腹^一背^ニ北向^一南故一切柑類并至^ニ米穀^一其味爲

甚^ニ是因^ニ土地和暖^一者乎按鐵司地古錢司之領地乎

楊梅實 處々出醍醐山中出者爲^ニ佳^一種色白者形狀

風味爲^ニ優中華人是謂^ニ水精楊梅^一近世浸^ニ楊梅實於

酒中^一而飲^レ之號^ニ楊梅酒^一

椎實 椎子所々山縣出其內矢背大原產爲^ニ佳本草綱

目不^レ見^ニ之泉州府志柯樹實條下載江東人呼^ニ柯樹^一

爲^ニ珠樹^一因呼^ニ其子^一爲^ニ珠子^一閩人呼爲^ニ椎者音近

而譌耳云々

榧子 所々出然大和國吉野山紀伊國高野山攝津國野

瀨村之產爲_レ宜又美濃國多羅之所_レ產殿內無_二澁皮_一其實至白其味亦宜悉在_二京師_一

銀杏 在_二京師_一鴨脚樹之實也

胡頹子 所々山林出

懸鈎子 凡伊知古種類多桑椹桑樹之所_レ生也覆盆子

蔓草而其實甚紅高麗伊知古其實黑懸鈎子樹似_二醯

醯而其質紅黃色也其味爲_レ佳

烏芋 黑白俱和惠之中其白者味爲_レ佳烏芋亦其味淡

脆而堪_レ食共賣_二京師_一

著木 俗稱_二著萩_一是又萩一種也所々出然卜筮家嵯峨

龜山之產專用_レ之近世又僂見城山所_レ生者採_レ之是

狼谷誤依_レ稱_二大龜谷_一也

諸木并花草 北野種樹家諸品樹木高低大小應_レ所_レ好

而賣_レ之又接_二柿梨橘_一凡一切果實或花木無_レ不_レ有

至_二草部_一凡有_レ花類悉種_レ之是謂_二草花_一近世草花上

中下分_二三段_一限_二百種_一應_レ價之貴賤而賣_レ之北野

外亦所々有_レ之又近世河內國土人携_二藕根_一來種_二家

園池中_一其歲必花開赤白隨_二其所_一好一種自_二中華_一

所_レ來紅蓮花小而色紅尤堪_二愛玩_一

樹枝 倭俗伐_二諸木條_一雜_二草花_一插_レ瓶貯_レ水爲_二山水

之粧_一是謂_二立花_一或銅鉢或磁器盛_二白砂_一插_二花草或

枯條_一是稱_二砂物_一近世六角堂池坊泉能江州蘆浦寺

泉州堺木阿彌筑紫朱阿彌京師珠慶坊等爲_二巧手_一今

玩_レ之人多出_レ自_二池坊泉光_一凡催_二立花_一前自登_二山

岳_一擇_二其枝幹之堪_一用者_二手伐_一之泉涌寺山清閑寺

山所_レ生爲_レ宜凡一瓶之中一條高挺出者謂_二眞其大

稱_二小眞_一自_二眞木并小眞_一合有_二七種枝名_一雜_二插小

枝及草花於其間_一凡眞雖_レ用_二諸木或竹莖_一多以_レ松

爲_レ本此兩山松多屈曲而葉短色青爲_レ堪_二用_一故市中

人亦伐_レ之販_レ之又賣_二雜品花草_一是謂_二花屋_一凡立花

元出_レ自_二假山_一供_二座上之觀_一各有_二其式_一或松或楓

或蓮花或菊花或水仙其一種專用_レ之者是謂_二一色_一

不_レ堪_二其技_一者不_レ能_レ作_レ之

松葉 倭俗書院并茶亭之庭謂_二露地_一其徑點_二平石_一賓

客步_二其上_一是謂_二飛石_一又種_二樹木_一模_二山野之風致_一

其下撒_二枯松葉_一是謂_二敷_一松葉_二松葉貴_一赤色_二所々

雖_レ有_レ之近江勢多山出者爲_レ宜其葉長大而其色淡

紅也土人携來賣_二京師_一又所_レ種之苦專用_二龍安寺山

之杉若_一

雜穀部

米穀 近江丹波播磨之所產爲宜自所々齋來於京師米店賣之

大多米 其外皮帶赤色比白米則風味爲劣謂大唐米則謬也中華書稱大多米

黑大豆 所々出近江產爲勝黑大豆之中一種至小者俗謂吞豆每朝生吞之則治痰調胃悉在京師米店菜豆惠牟豆部牟豆悉在大宮三條南

赤小豆 是亦自近江來者爲良其色淡黑而帶紫色者外面不麗民間謂鄰虛蒙風味爲佳外面色偏赤者其味不堪用

角豆 白赤角豆實日乾而用之是稱實角豆在三條南大宮延喜式載山城國交易雜物大角豆六石云々

麥 麥有大小之異是亦所々有之多大宮米店之所賣爲宜延喜式載山城國交易雜物大麥三石小麥三十石云々

黍稷 凡黍稷粟薺麥諸豆之雜穀多在太宮通三條四條之間葛粉蕨粉之類亦在斯所

罌粟子并芥子 凡罌粟子赤白芥子胡麻之類三條四條

大宮店有之山城國交易雜物有荏子四石今不聞有斯儀

青豆 西京田疇種之熟時去其莢村婦盛圓盆戴頭上賣京師自季夏至仲秋曉出西京味爽賣來京師故民間味爽謂青豆時

雜菜部

凡瓜類并水菜芝菌附三條下

蒟瓜 倭俗專賞之所々有之然東寺邊其味爲勝世

稱東寺真桑然其種每年用美濃國真桑瓜之髓核

也故元稱真桑瓜至今略瓜字直謂真桑上賀

茂邊所產謂賀茂田瓜其形肥大然其味劣凡東寺

邊爲腹田依近京師不淨之穢水流委溝洫故

乎所住之瓜土人自擇其良者貼黑印於瓜皮面

而賣之是謂判瓜倭俗印稱印判其風味不及

擇之倭俗於瓜十箇謂一頭近世西郊川勝寺村

谷川蒟瓜風味爲勝又和州南都梵天瓜泉州堺鱸松

瓜亦在京師

越瓜 越瓜諸處皆有特山城伯邊多種之賣京師此

外茄子角豆生薑等物亦多出自斯所凡瓜茄子等早熟者俗謂初物皆出自斯邊此邊專謂山城

此地向陽故土地和暖依之諸物早生果實然至越瓜風味不及賀茂河東吉田邊之所種泉州府志青瓜質長而色白或名白瓜或稱菜瓜云々依此則越瓜或稱青瓜又稱稍瓜又一種有青瓜其形狀小而味又甘美也倭俗一切賣野菜家謂八百屋凡諸菜并瓠類芝栴類八百萬物無不有之義也又自四方携來者買而居之謂會屋會家出自日本紀神會之會者也今誤爲問字矣其所聚居謂市絹帛之類在室町及西陣野菜之類在五條橋東南凡自正月一日至十二月晦日朝暮二時商賈群集惣稱市

乾瓜 三條墨華院尼寺而禪宗也皇女多爲尼住之侍尼夏日寂寥之餘割胡瓜或四或六去瓢塗鹽日乾其色青變白其味至美被獻禁裏院中
冬瓜 倭俗謂加茂宇利西郊山内庄之所種爲名產

西瓜 近世所々種之南瓜亦然也

絲瓜 倭俗所謂倍知麻是也去肉并瓢陰乾則其形狀如紗巾如羅網故有絲瓜之名剃髮時以是浸湯洗頭髮則柔軟而易剃或亦洗鍋釜底亦可也

故中華村人呼爲洗鍋羅瓜或藉韓履所々有之然稻荷社前町所有爲佳

姬瓜 出自九條田間其大如梨其色至白故以姬稱之女兒求斯瓜少留莖傳白粉於其面以墨

畫髮眉目口鼻以水引結其莖提携爲玩具一壺盧或謂葫蘆又稱瓠瓜又謂匏瓜倭俗謂瓢

簞又稱浮壺便凡壺酒器也盧飯器也老硬者作盛

藥佳器或盛山椒粒或用繩繫腰盛酒茶爲

遊山之具是稱約腹壺以其腹有約束也其大者

盛飯又一種長如越瓜而首尾如一者爲瓠又瓠

之一頭有腹長柄者爲懸瓠又稱杓瓢老硬者作

杓輕快堪用倭俗謂柄杓瓢簞又短柄大腹者存

短柄之心伐其側之左右盛炭於腹內以手提

携短柄之所存置爐邊倭俗稱手浮壺便又一切

伐短柄盛炭者是謂炭斗浮壺便茶人專用之是

亦爲茶亭之一具凡瓠瓢小者處々有之其大而盛

炭者自近江國武佐來又洛東田中村人農業暇種

之到秋成實其未熟時好事茶人自行其棚頭

就蔓上之所而有約其形狀之所稱心者或以

繩縛之則其形隨所好而成後伐之陰乾而用之

其外皮微腐而有斑點者爲良又大瓢去瓢核緊塞其口一著胸膈之間以絡縛胸而浮水則不沈有便游泳故倭俗或稱浮壺便

茄子 處々種之或有紫茄黃茄白茄之異然紫色者爲佳其於形狀也或有細長者一民間稱長茄然風味不及圓大者洛東河原之產爲殊絕角豆并刀豆 處々有之然角豆東河原之產爲佳刀豆

九條邊之所種特爲良

山藥 凡長條者爲山藥大塊者爲薯蓣今處々有之然山城國狛里之產爲佳又山間有自然生者風味特勝民間直稱自然生堪充藥劑之料

芋魁并芋莖 九條邊專種之其根一塊形如老茄子是謂芋頭煮而食之其莖謂土芋莖里芋莖其色青其味不佳其根專用之一種有稱唐芋者其莖薄紫色也長大者有至六尺餘者其味甘而堪食之其根比里芋則爲劣矣

水菜 東寺九條邊專種之元不用糞穢而引入流水於畦間耳故稱水入菜或謂麻俱利菜倭俗每物拂盡謂麻俱留農民採此菜自田地之本至田末次第麻久利登留凡此菜成熟後不堪久用之

故然如他菜成長日久故採之其始生自兩葉至三四葉者其繁茂間採用之是謂摘菜既生長中擇其穉小者用之是謂間引菜或間引蘿蔔其大者次第採之凡麻俱留與間引爲表裏勢多判官家領在九條每年載水菜於臺插梅花於其上獻禁裏院中近年東寺僧亦破生竹插水菜以藤蔓約束之贈人家

葱 處々出然此菜并胡蘿蔔菠薐菜者東寺并油小路南不動堂邊之產爲宜

藍 九條邊專種之凡染家之所用夏夷其需九條之藍其染色青而麗也

蕪菁并蘿蔔根 凡洛外西山蕪菁東山大根是爲一雙珍珠蕪根扁大爲良凡西山赭土而堅故蕪根入土淺而扁大風味又和柔故西山產爲佳然近世民家得種之法下賀茂邊之所種其形大而其味宜東山吉田邊土地多砂而和柔也故大根入土深而自然長大其味爲佳此外伏見淀南御牧村之所出亦長大而似尾張宮茂之產然其味不佳攝州森口來者其形細而長糟藏者爲佳倭俗蘿蔔根爲大根其名雖卑俚其義相當者乎

牛蒡 八幡山東園村之產爲名產一專稱八幡牛蒡

園村去八幡半里許元社家大臣氏之所住也今京師北野并小山堀河所々產者亦爲宜一說八幡園牛蒡非園村而社人家園之所種者也

野老 案草薺之類也洛北鞍馬山之產爲佳土人掘其

根水洗煮之後村婦盛布囊戴頭上賣京師一

種有稱江戶野老者其狀長大而其味甘美也

蓴菜 伏見澤廣澤大澤池所々生採來賣京師然伏見之產滑而煮之則白粘汁浮俗謂銀言白色似銀之謂也

芹菜 芹所々河邊生葉莖短根鬚長者爲佳出自宇

治者根長而白多去其莖葉而用其白根又防風

萱草 菰草及木天蓼山梔花等亦賣之

菅藻 古出宇治川載在萬葉集今不聞有之凡

海苔海濱之所產其種類甚多惣謂海苔今雖川

產又准稱海苔川海苔之所出大和布留川安藝吉

田川肥後水前寺斯外亦在處々

昆布 出羽國松前宇賀出者其狀細薄其色黃赤其味甘

而帶微酸又若狹昆布爲宜倭俗高貴之所食是謂召上其味美而堪高貴之所食故謂召昆布今

悉在京極西竹屋町

欸冬^{フキ} 倭俗是謂落所々有之欸冬好濕故竹田邊

濕地生者長大而柔脆風味爲宜又嵯峨產爲佳矣

唐芥子 所々有之稻荷邊所種爲佳唐芥子中華所

謂番椒是也

蓮藕 近年處々洪水氾濫伏見南巨棕塘下亦爲沼沚

故土人專種蓮京師七月中元所用之蓮葉并蓮華悉

出自斯所藕根亦採之賣四方其花開日不劣

近江國支那遊人棹小舡遊其間

菖蒲 伏見美豆多菖蒲洛下端午所用悉出自斯

所

松茸 所々山多採之然洛西龍安寺山之所產特爲

優風味馨香非他產之所及也凡松茸洛陽四邊山

之產馨香有餘是中土地氣之所使然者乎他邦之

產不然於洛下是謂田舍松茸凡洛人山城之外

稱田舍又或謂伊奈加五月徵雨節因濕蒸偶

生松茸是謂早松秋初黃嫩茸爲始初茸紅菰雜

生紅菰是倭俗所謂胭脂茸也菰菌磨菰茸類次第生又

一種有豫志茸自季秋至季冬生

多波古 倭俗茸謂多波古然其形狀氣味小異本草

洞詮所載烟草是也中華人專好之名稱烟酒近世本朝之流風而家々有來賓則寒暄談未了中先出烟草盛是於筥埋火於銅鐵器或磁器是稱火入并棄所吸之渣滓灰燼器并火入等之物居方盆或圓盤是謂多波古盆多波古山城州山科華山攝津服部丹波斯田河內和泉新田產爲宜悉賣京師

諸魚部

魚店 在所々其中武者小路并大炊通及四條北錦小路爲盛至川魚則三條并二條生洲町以板或簾

圍流水養諸魚諸鳥應人之需而賣之

氷魚 延喜式載山城國御贄有氷魚今不知在何所

鯉魚 所々有之其中淀橋下所產爲勝是稱淀鯉峨嵋大井川深淵所有味美近江湖水之所出又爲

宜

鮒魚 處々有之然近江湖水中自天津松本浦至膳所濱所取之鮒其狀風味與他產大異其大者稱鮒鮒又謂源五郎鮒其次謂煮古呂又謂鮮

鮒源五郎稱不知其義一說元漁人源五郎專取此鮒云聶而切之爲鮒特爲珍味倭俗恰好謂古呂或鮒燒之後煮而食之是謂煮漬煮漬鮒其大者却不宜恰好堪其用者謂近江煮互呂鮒鮒亦然也湖水之中檜原之所取其形狀與膳所邊之所

有大異而其味又劣

波須并和多加 此二魚湖水之所而有而他邦無之斯魚春初多出酢藏者佳矣二魚共似鮒狀勢多橋下之蜆具其味異他至伊佐々魚至冬出是又他邦之所無也

鰻鱺魚 近江國勢多之產爲勝其下流宇治川之所取

亦美以其形肥大稱宇治丸燒而用之是謂樺燒其所燒之色紅黑而似樺皮之謂也鮮藏者亦佳也贈遠方不損

鱸魚 河海共有之宇治川所產稱河鱸特爲珍味伏見川之產亦次之今按延喜式山城國贄有鱸魚然則自古賞之者乎

鱒魚 在峨嵋大井川是稱川鱒其味至美又川鱒是世人之所賞也

鮓魚 夏日所取來八瀬川高野川邊多禁裏之御領也

夏月每日獻^{シテ}之此運漕村中寡婦主^シ之鴨川并嵯峨大井川之產爲^ニ味美^ニ丹波所^レ出次^レ之春末岩水張處小鰍群聚^レ之^ニ以^ニ木杓^ニ酌^ニ取^ニ之^ニ是謂^ニ杓鰍^ニ至^ニ其大^ニ則鵜并網取^レ之至^ニ秋則設^ニ梁大取^ニ之

鰯魚 所々川有^レ之賀茂川其水至清小鰯魚其味甘美魚背有^レ紋如^ニ鷹羽^ニ者特勝是稱^ニ鷹羽鰯魚^ニ此外波惠遠伊加波互利石茂知之類各美也是皆夏日珍味也鰻魚 鰻有^ニ數種^ニ淀川之所^ニ產其形小而其鬣至長湯煮一沸則其色如^ニ朱兩脚屈蟠如^ニ老翁之倚^ニ杖土人稱^ニ杖衝鰻^ニ又自^ニ近江堅田^ニ來者稱^ニ熬鰻^ニ其味美與^ニ勢多蜆貝爲^ニ一雙^ニ凡淀川伏見澤至^ニ嚴冬^ニ積柴薪於水中^ニ魚避^レ寒入^ニ其內^ニ以^レ簿圍^ニ之又下^レ網執^レ之是謂^ニ下木魚^ニ立春後水漸溫故魚不^レ聚於^ニ茲止矣下木或謂^ニ布志都計^ニ中華所謂^ニ寐也或作^レ慘又謂^ニ淨^ニ

諸鳥部

蟲并獸附^レ下

鵝アラスカ 倭俗所謂青鷺也并白鷺五位鷺所々捉^レ之於^ニ魚店^ニ賣^レ之凡生捉^レ之謂^ニ落^ニ鳥又謂^ニ執^ニ之入^ニ籠而畜^レ之謂^ニ飼鳥^ニ於^ニ山林原野^ニ捉^レ之則以^レ手殺^レ之謂

縮^{シムル}又謂^ニ野縮^ニ縮^ニ取命根^ニ之謂也凡鷄鶩類賣^レ之一說中華所謂鷄鶩本朝所^レ有之五位鷺也

鴻鴈 洛外於^ニ所々^ニ竊執^レ之賣^ニ市中^ニ黑鶴亦飼^レ之應^ニ人之需^ニ而賣^レ之

鴨 所々來者其種類多其中真鴨風味爲^レ勝雉 洛外山林執^レ之賣^ニ市中^ニ凡雉在^ニ寒谷^ニ而不^レ飲^ニ

海潮^ニ者形小而脂多其味爲^レ良

鵲 鵲於^ニ中華書^ニ未^レ見^レ之夏初在^ニ澤邊^ニ者有^ニ大小之異^ニ其大者謂^ニ大鵲^ニ又稱^ニ水鳥^ニ羽毛偏佳而風味麗惡也其小者謂^ニ小鵲^ニ又號^ニ梅首鷄^ニ其頂有^ニ赤毛點^ニ故稱^ニ之羽毛淡黑而兩脚淡黃其味爲^レ佳是又夏初之珍味也與等并伏見澤多一說中華所謂秧雞是也鵲 鵲多^レ品其狀圓而肥者味堪^ニ調和^ニ是謂^ニ保土志義^ニ自^ニ夏末^ニ至^ニ新秋^ニ特賞^ニ之都俱美并加志鳥及秘惠鳥類亦有^レ之

鶉并藁雀 凡一切魚鳥水草清潔地其風味大勝故洛邊所^レ有^ニ其風味與^ニ他鄉之所^ニ產爲^レ異矣鶉并藁雀其餘雜禽其形小者惣稱^ニ小鳥^ニ自^ニ秋至^ニ冬賣^レ之諸禽 凡諸品鳥入^レ籠而飼^レ之應^ニ人之求^ニ而賣^レ之是謂^ニ鳥屋^ニ四條京極西特多

諸蟲 凡諸蟲堪飼者蛭松蟲鈴蟲之類入籠而賣之
京俗新秋入夜點燈行叢間松蟲鈴蟲就燈光而
飛來以紗籠受納之是謂吹蟲洛北蓮臺野小栗
栖野并相國寺及建仁寺叢間特多入夜人群集聽
其音又吹執之

螢 近世洛人專賞螢火五月始上賀茂并水上村北野
西平野特多入夜行觀之又執而入紗籠揭檐而
玩之石山寺西黑津田上八島之螢其形倍常其光亦
大洛人行而見之又執之歸京師或勢多土人賣
之遊人爭而買之是又好事之風流也

鹿猪并兔 一條堀河西有屠人至冬屠麋鹿并野猪
家狼兔之類而販之故是處謂鹿屋町倭俗屠人
稱穢多其名相當洛東田中村并天部村屠人專剝
牛馬皮并麋鹿而鬻之

竹木部 炭并硫黃附下

竹 所々有之西郊產特大也其至巨者直破之其本末
留一節其餘悉剝去其節橫屋檐受屋上所滴
之雨水自端末圓穴傳堅通樋是謂橫通樋又
不破之內剝去其節建橫通桶雨水落所之穴下

是謂堅通桶朝市每屋無不用之其次半割之
代屋瓦又爲屋椽其次小者編取之爲床又貼
窗牖其外竹之爲用也不可勝數其中苦竹爲良
凡諸竹陸地黑壤生者多巨大然竹性柔脆也生山間
石地者其性堅實而不蠹近江國園城寺山之產剛直
宜作弓其細者用爲旗竿倭俗謂農保利旗竿或
上賀茂并石清永八幡山生者伐用之是爲下依神力
之冥助而得勝利也凡伐竹自秋八月至冬十
月是謂秋切冬切他月伐之則速朽腐而不堪用
一種其莖細長而其葉片大也是稱女竹又謂忍竹
建是比並而爲垣又半破之縱橫結束之爲牆壁
之骨或貼窓間又一種篠葉每一枚葉端周圍細
白似刀刃是謂刀篠此篠莖短而著土茶人愛之
種茶亭之前庭凡洛北山上寒氣甚而霜雪重故葉端
瘁白土人掘來而鬻京師

竹筴 處々出凡苦竹之外惣謂淡竹又名雷竹或
號話竹倭俗稱半竹也淡竹所生之筴其生也早
矣然其味淡脆醃邊苦竹多俗稱真竹真竹所生
之筴其形大而味厚煮食之籜皮有斑點者爲佳醃
醐寺僧蒸之而食之世稱醃醐蒸筴是爲春末之

珍珠蒸之法不_レ去_二籜皮_一連_二根入_二大釜_一盛_二水燒_二大槽_一蒸_二之_二三日柔脆至_レ如_二綿則止然後而截_二之_二合_二醋醬或熬酒_一而食_二之_二近世彼寺僧以_二青竹_一插_二之_二贈_二遠方_一雖_レ歷_二數日_一不_二朽腐_一

材木 凡丹波國多_レ山故材木不_レ可_二勝用_一其中杉樹特
多大小共直立如_二竹木客伐_一之先剝_二其外皮_一長三尺
許伐_二之而幅隨_二其廣狹_一是謂_二杉皮_一小民以_二是蓋_一
屋又貼_二壁防_二風雨_一或以_二竹插_一之爲_二牆其木乾後_一
於_二山城國大悲山之東麓_一以_二藤編連_一爲_二筏其長或二
十丈或三十丈浮_二是於溪水流_一管工操_二之傍_一流避
岩下_レ灘而到_二丹波國鳥羽_一於_二玆稻_一載_二舟舡_一來_二山
城國嵯峨_一其間十里餘也隨_二水之多少_一或三日或五
日而來嵯峨土人買_二之又賣_一之其材木之形狀大小長
短共圓而長惣是謂_二嵯峨丸多_一倭俗多字爲_二助語之
辭丸多者則圓木之謂也凡松杉共去_二外龜皮_一建_二路
頭_一置_二屋上_一曝_二風雨_一則其外面淡白而黑斑點出是
謂_二鏽木_一猶_二刀刃之生_一鏽或稱_二曝木_一風雨曝_二之謂_一
也良賤共賞_二之爲_二書院并茶亭之柱_一或不_レ去_二外龜
皮而用_二之者是謂_二皮著柱_一於_二京師二條北東堀河
并春日通西_一賣_二之則號_二丸多町_一凡材木大和國吉野

郡并土佐國山岳之產爲_二堪_一用其長圓者謂_二丸多_一其
四角者稱_二角物_一其四面幅有_二方五寸_一則稱_二五寸角_一
有_二三寸_一則號_二三寸角_一其大者有_二下_一及_二一圍_一者是則
棟梁之用也木匠是謂_二引物_一引_二橫兩柱間_一之謂也其
長者或稱_二二間木三間木_一又謂_二五間物六間物_一又土
佐國產有_二稱_二鹿料_一者_上相傳昔時春日明神乘_二鹿自_一
常陸國鹿島_一遷_二大和國春日里_一三笠山_一故南都甚重
鹿故山林市中麋鹿成_二群縱令雖_下食_二田疇之黍稷_一
啄_二棚頭之米豆_一畏_二之不能_一追_二之故古寄_二斯木於_一
春日社_一伐_二米穀_一飼_二三笠山并市中遊行之麋鹿_一又
以_二此野外田畝并市中棚頭結_二堪_一鹿故斯木稱_二鹿
料_一同國野根山所_レ出之材其條理直而宜_二割_一板是
稱_二野根板_一又謂_二長片_一又方而細長者是謂_二月役_一凡
杉或檜尺餘伐_二之以_二刀割_一之爲_二片板_一掩_二屋是謂_二
葺板_一又稱_二曾木_一或號_二桁古多_一出自_二安藝國_一故庭
訓稱_二安藝桁_一然京師所_レ專用_二信濃國木曾山之產_一佐
和羅木爲_二良倭俗以_二片板并芻藁或茅莖_一掩_二屋宇_一
是謂_二葺_一屋根_一業_二之者稱_二屋根葺_一多住_二西京_一以_二
小片刀_一加_二木端_一以_二槌搗_一之割_二板謂_二上_一桁屋上所
々修_二補朽腐_一是謂_二插_一屋根_一言_二插_一新板於屋上而

防雨漏之謂也悉以竹釘貼板或山上風烈處以鐵釘打成之

檜皮 凡禁裏院中及神社檜木外皮細割之假束之緊

掩屋宇是謂檜皮葺檜皮屋久右衛門專主之

黑木 多出自洛北矢背大原鞍馬土人入山伐木

尺餘然後作土窟於山中窟內四方積所伐之木

其中央燒生薪薰乾依之其色黑故謂黑木又稱

竈木或號燒物三四日薰後出之知志也木皮五尺

許長割之以是束之其大者稱大束以長二三尺

皮束之謂小束又薪柴并炭每日村婦載頭上村

夫負肩背又牛馬載之來賣京師近世矢背土人

土窟內薰黑木終後取棄其所燒之餘燼敷鹽薦

於其跡而男女有溫氣之病者裸而入土窟乘熱

坐薦上是謂竈風呂三四月間多來入者潤肌膚

和筋骨與攝州有馬之溫湯相比並又自一條

河原町東至五條橋於河邊專賣薪木并炭是

謂樵木町又稱木屋町自諸國運漕之一

炭 所々出然於山城國鞍馬山并小野里山產爲宜

是俗稱燒炭又茶亭爐中所用是謂切炭攝津

池田丹波一倉土人燒之柞木或桤木隨其木之狀

長三尺許伐之連皮燒之而後或五寸或三寸任心以鋸截之是謂切炭其圓大者謂胴炭置是於爐中央自是左右比並小炭猶人身之胴加手足或其大者薄切之其狀如車輪是號輪炭或半割而用之謂割炭又河內國光瀧土人伐樹枝五七寸許連小枝而燒之其色白灰色也是稱白炭又謂細炭雜置黑切炭之間爲爐中之飾今躑躅枝又連葉松柯連葉竹枝燒用之

硫黃 凡檜木長五寸許割之爲小片塗硫黃少許於其端末點火於其末著薪柴是謂硫黃木稻荷社前并伏見墨染人家所造爲宜則中華所謂引光奴也上賀茂神惡硫黃故以燈石鑽火点之藥又民家點松木之有油者是謂肥松

土石部

敲土 凡山間黃土之交礪礪者是謂志也禮土探斯土加石灰少許以水粘之而敷檐下并飛石間以木槌緊擣之其堅硬如石是又他邦之所不爲也斯土自泉涌寺并等持院山間取來土砂處々山有之然自古持律僧取梶尾山之土砂

清水洗淨數過後盛_レ壺置_二護摩壇上_一七箇日間加_二持之_一是謂_二土砂加持_一傳言撒_二加持土砂少許於新死之尸_一則其筋骨雖_レ歷數日不_二強直_一有便_レ納_二棺內_一也

聚樂土 京師良賤屋壁悉採_二用之_一特塗_二倉廩_一爲_レ宜土性周密而雖_レ逢_二火災_一不_レ使_二火氣入_二內_一遊行鋪土 東山清水山之麓法國寺邊其土赭用_二之塗_一壁則其色淡紅而有_二斑點_一坊者採_レ之茶亭壁用_二之然不_レ及_二大坂之產_一法國寺遊行一遍上人之派也故俗專稱_二遊行土_一

中山赭土 東山中山所_レ有之土也倭俗菜店謂_二八百屋_一凡菜菓八百萬之物無_レ不_レ有故號_二八百屋_一或栗實生菓類蓄藏者以_二此土_一覆_二藏之_一則經_二月而不_レ腐岡崎黑土 洛東岡崎村土民間謂_二黑保古利_一其色黑而輕俗鄰虛稱_二保古利_一織座之義也又鍛工鑄_レ刀時取_二斯土_一埴_レ埴塗_レ之然則去_二火氣_一云

窟土 俗龜謂_二窟土_一厚板爲_二臺座_一建_二片細竹_一又橫_二片倭縱橫以_レ藁結_二之是爲_レ骨塗_一赭土_二釜鑑或_二三居_一之提携隨_レ所_レ欲置_二便宜之處_一是謂_二置窟土_一二條三條河原町坊者製_二造之_一倭俗坊者謂_二壁塗_一又

謂_二左官_一不_レ解_二其義_一一說砂官也然則其義粗通者乎

石 凡山城國處々出者有_二雜品_一上粟田北白川山土中悉白石也村民農業之暇事_二石工_一故隨_二其用_一而斫_二取之_一大鑿採者至_二長二三丈_一凡朝廷宮殿之柱礎市廊溝渠之界石并石壁石橋井欄礎石碑碣石塔等物無_レ不_レ用_レ之其鑿穿時所_レ碎散_二之砂石至白是謂_二白砂_一禁廷及行路敷_レ之而清_二道是謂_二撒_一砂高貴來臨處門前左右各_二一堆高盛_一砂是號_二立砂_一又北白川山北淨土寺山并鹿谷有_二一種石_一其狀多平夷而淺紫色也宜_二置_二庭園_一洛北高野川石其色青其狀堅硬而沈重也然無_二砂礫之累_一故酒店榨_二酒糟_一時以_二此石_一貼_二酒囊之上_一置_二桶於其下_一而承_二其汁_一入又山科鄉小山邊多_二大石_一其色紫黑方廣寺大佛殿之樓門左右石壁多採_二於斯處_一云西山嵯峨大井川石其狀有_二大者_一其色純青而間有_二白條_一宜_二置_二假山_一又其小者有_二宜_一硯者或有_二安_一盆者洛東清閑寺山高高低磊落自有_二峯巒之體勢_一且濕潤而含_二水氣_一自然間處堪_二種_二樹木_一貯_二水於平盆_一安_二其內_一是稱_二盆山_一爲_二座_一上之觀_二又小者自有_一存_二峰巒體勢_一者敷_二白砂於盆_一

裏安_二其上_一是謂_二盆石_一多有_二其名_一故或謂_二名石_一撒_二白砂於盆中_一俗謂_レ打言打成之謂乎打_レ之有_二式凡石之大小有_二疊替之體_一者置_二假山_一其經_二營之_一人稱_二庭作_一又大小石面平者比_二置露地_一賓主取_レ次蹈_レ之而超行是稱_二飛石_一倭俗家園謂_二露地_一凡飛石之安排布置多情_二好事之茶人_一而使_レ置_レ之是謂_レ作_二露地_一又謂_レ直_二石倭俗萬事布置適_一宜謂_レ直使_レ爲_二正直_一之謂乎又所_レ敷_二露地_一之青小石是稱_二青石_一荒神河原并二條河原人擇_二拾之_一而應_二其求_一近世取_二河邊砂石_一以_二竹篾_一篩過取_二大小齊者_一撒_二庭園_一是謂_二豆砂_一以_二其形狀相似_一而稱_レ之又洛西紙屋川赤小石數圍而可也是稱_二紙屋川石_一此外近江國木戶石紀伊國海青石攝津御影山石備前國小豆島石之類悉於_二一條河原町_一賣_レ之

礪砥 凡砥石有_二數品_一細礪石俗所謂眞礪也龜礪石俗所謂阿羅斗也礪礪俗所謂青礪石也細礪石洛西鳴瀑山之所_レ出爲_二良龜礪石_一瓶原爲_レ堪_レ用爲_二凡本阿彌一家自_二中古_一以來從_二公方家磨刀之事_一專用_二鳴瀑砥_一然近世粗至_二穿盡_一故高雄之產間又用_レ之依禁_二他人濫取_一之是謂_二止山_一言止_レ他不_レ使_レ取_二用之_一謂也

倭俗山之於_二材木及松草_一也川之於_二砂石并諸魚_一主人獨取_二用之_一過_二濫取_一之惣謂_二止山止川_一又制_レ刈_二採薪柴_一是謂_二鎌止_一河內國禁野古 主上遊獵場而所_レ禁_二外人之妄捕_一鳥獸也故稱_二禁野_一之類也凡鳴瀑山地中悉石也其色淡白而間有_二紅條理_一石性柔也故鑿_レ之則必爲_二一片_一大小長短從_レ所_レ欲取來置_二假山_一安_二露地_一

燧石 處々出然鞍馬山之產爲_レ堪_レ發_レ火鞍馬松尾東山腹造_二小堂_一一人居_二其內_一著_二長繩於芻蕘_一有_二往來之人_一則卸_二是蕘於往來之路頭_一求_二燧石_一則多少隨_二其心_一入_二錢於蕘內_一於_レ茲提_二舉芻蕘_一應_二其錢之多少_一而盛_二燧石於蕘內_一再卸_レ之買者取_二得之_一而歸是謂_二鞍馬蕘下_一凡鞍馬山下土豪多剃_二髮故謂_二鞍馬坊主_一倭俗謂_二僧稱_一坊主 其餘亦剃_二髮者惣謂_二坊主_一卸_二斯蕘者土豪坊主中_一二三家主_二斯事_一或又賣_二市中_一

金玉部

水銀 倭俗永專謂_二水銀_一嚮_レ之者在_二處々_一白粉屋買之燒_レ粉硃座求_レ之燒造_二硃

硃 凡硃各權之而賣之他人不能濫賣之是謂硃座在兩替町自古權沽世之所禁也然硃金銀三座蒙免許者也此事不交他人住此職而不_レ去故謂硃座

金銀 凡金銀出自諸方山未經鍛鍊者謂鑢金於小判師之宅以槩鑢鍛鍊之倭俗是謂吹預此事者稱金吹吹火鍛之謂也金之品以壹步判爲上小判次之大判又次之製造後行後藤家請極印并判倭俗古未作印之前以其人諱字代印是稱草字印又謂判印證明之謂也判依其諱而分判其人_レ之謂也銀於兩替町中村常是宅吹_レ之其始謂灰吹後加鉛少許再吹_レ之而造板銀豆板銀凡銀爲大小片其形似板故稱之凡預其事者謂銀座兩座中老年人謀萬事是謂年寄銅賣之者在處々俗謂赤金赤金屋吹之或作片團之形又作竹竿形五寸許是謂竿金凡赤金元有金氣先吹取金氣而別作純金銅之取金氣者是謂搾金_レ倣搾油之例而稱之鍛鍊而後色黑者稱唐金赤金器物鳥丸二條之北并下栗田口及五條東音羽橋邊造之唐銅具七條油小路佛具屋

造之又或於下栗田亦造之又有稱登多牟者鉛之類也合銅而用之

鐵 鐵西州處々山出三條釜座人鑄大小鐵器是謂鑄物師又刀鍛冶以槩鑢燒鐵乘熱以鐵槌打成鍛鍊及數度而作大小刀是謂打物又造細大釘及銷鑢等物家是謂鍛冶屋

鉛 多出自銀山之邊者爲好豐後州之所出爲勝其色似銀新町二條北及五條東以鉛造數品物工人槩鑢吹之依模範粗作其形而後以轆轤削磨其形是謂錫挽又稱錫屋凡錫銀山邊所出爲良銅金山側所掘爲佳

土圭 自鳴鐘倭俗謂土圭元自阿蘭陀國來今本朝人倣彼所製而處々造之其內御幸町二條北所造爲宜又砂土圭漏刻亦今造之

銅鏡 處々鑄之然一條南松下有青氏者代々鑄禁裏院中之鏡故有家領其餘室町鏡屋町武藏之所作爲良凡鏡元表月故始所鑄如大彈丸揭之於屋宇照座間爾後打成爲一片或圓或方隨其所好而背後紋始多用菱花又或圓形中四邊有到成八葉菱花之形者凡諸花元屬陽故多五出也

至雪花與菱花一則是陰氣之所結成一是故六出也
鏡表月且屬陰故用菱花一依之婦人呼鏡或稱花形一

鐵鐵^{ハリガネ} 五條高倉人家伸銅鐵一如絲是謂鐵鐵一以是

纏諸物柄一又造網貼一密櫛一又作籠爲薰籠一

課^{フヤコ}伏籠籠中置香爐被衣服於籠外薰之取其

香一或作飼鳥蟲之籠是謂蟲籠一

金銀鍍 處々磨之然四條南京極彌左衛門之所作爲

佳故鍍術人多取用之

金銀薄 處々有之凡倭俗以黃金壹錢壹分五厘爲

方片金是謂壹步合四片爲金子壹兩壹步金

性爲上品截少許載石盤上隔紙以鐵槌緩

緩擣之凡壹步金分爲方四寸薄五六百枚百鍊剛

爲繞指之柔又磨斧爲鍍亦比打薄之未足

爲奇也凡打薄交字和須美則易打云

撒金具 凡細末金銀爲粉撒漆器或作花草鳥獸

形倭俗謂蒔繪金銀粉其庵者撒漆器是謂梨

地斑紋似梨皮之謂也蒔繪五十嵐田付山本等爲

近世之巧手曾慈照院義政公嗜蒔繪器硯宮文臺

香合等于今所殘是謂東山殿御物世人珍藏之

義政晚年閑居東山東求堂故時稱東山殿又或

謂時代物東山殿時代之謂也然東山殿以前高倉

帝之時既有撒金具是爲上品至近世酢屋五十

嵐田付原田山本等五家互爭巧或新婦婚姻時所

行蒔繪具多於鳥丸通二條北蒔繪町製之是謂

鳥丸物或謂祝言道具倭俗婚姻謂祝言凡蒔繪

具高倉院時代之物今偶存來知其以前始于何

時也寫蒔繪之筆別有造之家

玉石具 御幸町三條北多玉人水精并珍石以金剛

砂磨琢之作雜品物是謂玉屋金剛砂出自

大和國金剛山凡此處所製之髮髻勝盤船所載

來者髮髻眼鏡之一名也

(補遺)

按本朝古六十六州每州有風土記。今出雲豐後之殘篇纔存而已。頃偶得山城風土記之脫簡。不堪歡喜。其內文字連續者。摘之載于茲矣。於其處也。今不知爲何地。也。土產亦今不能詳。其有無。然舉茲備他日之考索而已。

久世郡 風土記曰。一郡東西十三里。南北十里。東限長野川。西限藤岡。南限百舌鳥原。北限小川。凡當郡川多山。少民家富有而出竹木奇沙。

名杉靈竹 風土記曰。久世郡平間山出。名杉靈竹。每歲冬至之後。初申日。兵庫寮之掌取竹。便箭用。

大材諸鳥 風土記曰。久世郡尾山出。材并鳥。稚日本根子彥大日。天皇二年丙戌冬。此山出光數日。土人恐之。又奇之。而告率川宮。某連清城往而察之。課土人令狩山。出一鳥。土人不曉之形。賤而黑色。清城搏之。奉率川宮。又無難。

鱗類奇沙 風土記曰。久世郡柚野目良川之末。秦賀川者小。而少鱗類。出奇沙。似金大者如玉。

鮎并鱈 風土記曰。久世郡小川之末。畦日川出鮎鱈。麥 風土記曰。久世郡藤岡頭神座天德日命二座。

以仲夏初癸祭之。土人以麥爲神供料。

藥草 風土記曰。紀伊郡友田保出藥草三十種。充寮之公田。

馬栖仙草 風土記曰。紀伊郡松保出馬栖仙草。充寮用。

藥劑 風土記曰。宇治郡宇治野出柴胡氣連草。川實等多狐狸。而往還西後。又無見。

沙并石 風土記曰。宇治郡宇治野東四女地野出奇沙及奇石。

雍州府志卷七

土產門下

服器部

凡諸品器物類附條下

冠 洛下造之者多矣近世木村某造之獻禁裏及武家綏亦雖製之不_レ及中華之所_レ作其良者插冠則每如_下帶_ニ微風_一而戰搖_上又天冠并烏冑有_下造_レ之家_上

烏帽子 製_レ之家在三室町三條南板面書_ニ十一_一之字而揭_ニ門楣_一爲_ニ烏帽子屋之證_一買者認_レ之然今不_レ解_ニ其意_一案始製_ニ烏帽子_一之家以_ニ十一屋_一呼_レ之乎一說十表_ニ立烏帽子之形_一一表_ニ士烏帽子之狀_一者也_レ是亦可_レ取者乎凡造_ニ烏帽子_一謂_ニ折出自_ニ風折烏帽子_一之詞而屈折之謂也風折烏帽子倣_ニ中華折角巾_一者乎烏帽子元烏帽而烏紗巾類也後世漆_レ之著_レ緒而蒙_レ之凡烏帽子前額左邊有_ニ凹處_一者源家著_レ之右邊

凹處_ニ者諸家共用_レ之凡左右之內一方有_レ凹者是謂_ニ片額_一俗誤爲_ニ左折右折_一左右共有_レ凹者是謂_ニ諸額_一又平禮并士烏烏帽子造_レ之

(補遺)烏帽子洛下烏帽子屋之棚頭有_ニ簡書_ニ十一_一之字_ニ爲_ニ烏帽子屋之徵_一如_ニ立烏帽子_一其製法以_ニ幅一寸許強紙_一縱橫貼_レ之而以_ニ紙又張_ニ其表_一其始縱橫之紙其體如_ニ十字_一如_ニ此則烏帽子堅固而耐_レ久故烏帽子之良者謂_ニ十文字_一一字則表_ニ士烏帽子_一者也烏帽子屋多在_ニ洛南_一也

裝束 此一具洛下裝束師受_ニ山科高倉兩家之令_一而裁_ニ縫之_一斯兩家主_ニ裝束衣紋之事_一也其內山科奉_ニ禁裏裝束之事_一高倉被_ニ參_ニ仕公方家之衣紋_一也凡裝束絹塗糊貼_ニ板面_一而及_ニ其乾_一則取_ニ起之_一是謂_ニ板引_一兩家人手自作_レ之法糊製法各家秘而不_レ漏_ニ他人_一又石帶石多用_ニ瑪瑙_一其至良者色青是謂_ニ石上品_一之謂也倭俗百工堪_ニ其事_一者以_ニ師呼_レ之所謂裝束師豐田氏冠師木村氏之類是也

笏 笏音倭音與_ニ骨同故忌_レ之爲_ニ尺音_一且以_ニ笏量_ニ物之長短_一故借_ニ尺音_一而用_ニ其義_一多以_ニ飛驒位山襟木_一造_レ之構與_ニ一位_一倭語相同故取_ニ一位之義_一而

祝昇進之謂也

檜扇 有製之家其板數隨位之品而有其多少高貴之所携至二十五枚餘此外古男女共用蝙蝠扇其體似蝙蝠羽故稱之其後用摺扇從其輕者也

扇 元鷹司通城殿駒井氏製之今良賤常用之扇小川并所々有之然不及御影堂之製也其寺僧尼共造之是謂折屈折而摺疊之謂也號之謂某阿彌折舞扇 凡能太夫起舞時所用謂舞扇製之家在小川一條北

扇骨并要 駄屋町四條南造之扇心以竹造之是謂骨十本或十二本以木釘或砲頭銀釘聚貫其骨於一所是謂要干要之義也古製扇長一尺一寸今多一尺也是謂尺扇一端末之骨斲竹皮其幅與所摺疊之紙幅相齊而掩兩端是謂平骨是皆倣中華之製者也

網代團扇 油小路一條北專有製團扇之家以竹編之其狀似取魚之網代網代編竹橫河水遮魚而漁之以是代網之謂也故細割竹編連之是謂網代團扇其兩面塗漆是謂漆團扇近世或是圓竹爲柄細割其末是爲心貼紙或紗婦人

女子專用之中華所謂輕羅小扇之類也又自南都來者以紙貼竹其體製至輕有便生風多春日社禰宜製之是稱奈良團扇

木綿蹈皮 在綾小路革蹈皮在所々皮匠家三條通特多

韓履 六波羅密寺門前感禪院犬神人製韓并機或僧家帽子鳥皮襪又官家馬上所用之襪等亦製之淺沓以桐木造之塗漆於外面其內貼紙是官家著衣冠時所用也京極下御靈前造之凡造沓家多作笏及柳宮等一說淺沓元麻沓也以麻苧製之元絲鞋類也今淺沓誤木履者也一說今所謂淺沓取去鼻高之鼻者也

緒太 北野有造之家又丹波姬栗谷人交待禁裏清所取穢物勤洒掃其舍長號八十傳言後陽成院時八十歲會長強健而勤之帝以八十呼之子孫遂爲名斯徒獻緒太於禁裏其所被用廁之鞋以藁造之其形似蝦蟆凡緒太以蘭造之其形如草鞋而鼻緒圓大也故號緒太

甲冑 所々製之然御幸町岩井氏某爲巧手凡身甲一具有六物悉足而不闕謂具足造之家謂具

足屋_一凡裂_二甲冑_一謂_レ威是耀_二武威_一之謂也_二以_レ紅絲_一飾_レ之稱_二緋威_一以_二黑絲_一飾_レ之稱_二黑絲威_一結_レ冑緒謂_二忍緒_一倭俗每事秘_レ之不_レ使_レ外人_一知_レ之謂_二忍著_一冑時不_レ令_レ人知_レ結_レ之法_一忍緒在下_二鳥丸賣_一鼓調_レ之家_一倭俗縮_二鼓革_一於筒_一之緒謂_二調元_一以_二此緒_一結_二束兩端_一革_レ而後擊_レ之操_二調子_一故稱_二調_一

弓矢 在京極五條北_一凡造_レ弓者謂_二弓打_一造_レ矢者

謂_二矢師_一凡造_レ弓者多又作_レ矢是稱_二矢矯_一其法以_二苦竹_一之堅實而直者_一爲_レ幹其末貼_二鳥羽_一三片_一其本以_二鐵爲_一鏃又造_レ弓法苦竹堅實者破_レ之爲_二二片_一存_二外皮_一削_二裏面_一又波是樹削_レ之與_二竹齊_一長短_一以_二牛膠_一挾_二兩片竹之間_一爲_レ心揉_レ之作_レ弓苦竹性堅剛而波是樹其性軟柔也故剛柔相須而爲_二一張_一弛之用_レ而得_二飛箭之便_一也凡其外面或五所或七所以_二枯籐皮_一緊纏_レ之其謂_二村繁籐_一引_二自_レ弓本_一至_レ末悉卷_二纏之_一謂_二繁籐_一漆_二其上_一謂_二黑繁籐_一以_レ之卷_レ之則強張時爲_レ使_レ不_レ至_二破裂_一也倭俗物之不_レ等謂_二村言野外_一村居散_二在所々_一不_レ如_二市中街衢_一一齊_一之謂也新造_レ弓後若少有_二所_一曲所_レ反則揉而直_レ之是謂_レ取_レ村工人元雖_レ爲_レ之射藝巧手謂於_レ直_レ村也有_レ

勝_二工人之所_一爲_レ者是謂_二誰某村_一而是爲_二口實_一如_レ此後爲_二施_一弦放_二箭也_一始感神院犬神人專製_二弓矢_一并弓弦故或謂_二弦指_一此徒居_二清水坂西_一隸_二感神院_一六月七日十四日祇園社祭禮日各著_二甲冑_一先_二神與遊行_一疾馳_二大路_一有_二臭穢不淨之物_一則取_二去之_一至_二死尸之類_一猶然也日本紀神代卷火闌命之盟曰吠犬而須_二護_一御藩_二云々_一今神人亦護_二御藩_一者也故所_レ著之白巾表_二白犬_一之微意也其爲_二體半薙_一髮不_レ僧不_レ俗橫_二大刀_一常出_二入武門_一賣_二弓矢_一每年正月上旬身著_二赤布衣_一頭戴_二白布巾_一覆_二頭面_一纔露_二兩眼_一而賣_二紙符於市中_一是謂_二懸想文_一男女祈_二所_一懸_レ念之事_一或祈_二良緣_一或索_二富貴_一又求得_二買賣之利_一或祈_二有_一君臣之遇_二弦指_一因_二其所_一願而口唱_二其事_一則授_二其符_一十四日夜與_二爆竹_一同焚_レ之然則化而令_レ如_レ願云_レ爾此人又製_二造僧徒之革履_一也

楊弓 相傳自_二古公家之所_一玩也楊弓射禮舊本有_二卷_一曰楊弓七月七日唐玄宗與_二楊貴妃_一相其所_レ弄之物也則伐_二未央宮之楊柳_一而爲_二弓取_二太液池之芙蓉_一而爲_二矢故號_二楊弓_一云凡弓本懸_二弦所謂_二本筈_一長二寸是表_二牽牛織女之二星_一其弓插_二弦所謂_二裏

等其長二寸八分表三二十八宿之星其餘亦滑稽爲
文凡矢二本稱一手二百本謂百手繫格臺謂
棚格中央有小穴是謂喜利穴中其穴者稱美
之凡射者座去棚七間半也近世能射者二百本之內
其中者至百九十餘今造楊弓并矢人在所々京
極下御靈前小倉出羽之製造爲良近世雀小弓亦玩
之又一種有吹矢長三尺或四尺圓木突貫其內
入矢於其頭以息吹矢其矢中鳥則立斃其所用
之筒長短應吹之人氣息強弱

空穗^{ウツボ} 盛矢器也凡造長竹籠其內盛矢其籠之尾端

貼獸毛以緒括其中央橫繫武人之腰間或稱
毛空穗其內空虛而其尾末毛頭似麥穗故稱空

穗云又其大者似米囊故謂土俵空穗凡米囊編

藁芻而造之盛諸穀倭俗是謂俵其穀用盡後充

土置河邊防水之氾監是謂土俵空穗之大者

形似是故稱之凡空穗一條北小川每家造之又所

盛矢之簾有數品壺鏤平簾等各有造之家

太刀 太刀有數品衛府太刀草緒太刀銀作太刀蒔繪

太刀木地螺鈿太刀細太刀毛拔太刀持太刀帶太刀打

太刀打刀等是也其名異而實多相同其外有稱使

太刀者多於一條北小川人家造之倭俗爲表
賀儀遣使者於他所時高檀紙橫折之後堅三折
之於其中間記太刀一腰馬一疋誰某而爲贊
此太刀鐵片爲真鞘之粧甚龜惡而不堪用之馬
爲馬料贈金銀黃金一片謂大馬代白鏤一片
稱小馬代使者合太刀而携行故是稱使太刀又
有稱真太刀者是治工之所打而有上中下品
然悉適用之物也故其粧亦盡美平緒油小路一條北
有造之者然自中華來者爲佳

刀

山城國自古有巧手栗田口治工當麻丞等之所

打爲上作於今也二條北西洞院正俊國俊金道徒

是爲良俗謂刀鍛冶金道小刀堪用故每年獻

禁裏院中親王元服所用之笄刀亦依舊例金道

調進之凡高貴之息男童形時長髮垂背後元服日

以筆刀剪其末髮包裹之是謂深殺然忌殺

字作深會義然後聚髮於頂上一所而結之則

加冠是謂元服凡鑄刀謂打依之太刀刀稱打

物又自南都來者謂奈良刀或稱奈良物又謂

束刀言自南都携來時或五柄或十柄以藁索束

之故有此稱非上品京極四條南人家買奈良

物作_レ鞘以_二金銀_一飾_レ之。鮫皮并色絲粧_レ之。長短隨_二其所_一求賣_レ之。是稱_二寺町物_一。又謂_二拵物_一。倭俗之製_レ物謂_二拵二條油小路亦賣_レ之比_一。寺町物_一則爲_レ佳矣。倭俗誤_二鍛冶_一訓_二加治_一。

鐵炮 凡本朝之鐵炮中華所謂鳥嘴銃也曾弘治元年南蠻人氏宇志俱智者超_レ海行_二琉球國_一教_二造_一鐵炮。自_二琉球_一來_二薩摩國多禰島_一又教_レ之傳_二其術_一同年三月入_二京師_一見_二將軍家義輝公_一遂使_レ是傳_二本朝人_一而後命_二佐々木家義秀_一使_レ居_二江州國友村_一義秀則與_二百貫地_一古百貫祖與_二今百石之領地_一粗同自_レ茲本朝工人倣_レ彼之製_二今處々作_レ之特和泉國堺造_レ之家多其內箕形氏人爲_二巧手_一凡製_二鐵炮_一謂_レ張言張_二鐵片_一而作_レ筒之義乎堺之所_レ張又賣_二京師_一京師亦鐵炮張間又有_レ之又造_二發煩并佛狼機等_一盛_二鐵炮藥_一之器等於_二二條京極邊_一造_レ之。

鎗長刀 倭俗鎗謂_レ鑢所々鍛冶鑢_レ之利鈍擇_レ之可也。磨刀 相傳足利尊氏卿之時相州鎌倉有_二妙本阿彌者_一專相_二刀劔之新舊眞贋_一并事_二磨礪_一尊氏卿入洛日從_レ後而來途住_二京師_一元松田氏也然始妙本嫡流一人以_二本阿彌_一爲_二稱號_一自_レ茲後一家中爲_二嫡子_一者亦

稱_二本阿彌_一至_二庶子_一不_レ能_レ稱_二本阿彌_一用_二本氏松田_一今專以_二光字_一加_二諱字上_一普廣院義教公時有_二本阿彌清信者_一此人有_レ功_二一家剃髮稱_二本光_一自_レ是後一家人用_二光字_一凡擇_二刀及之新舊眞贋_一則嫡流本阿彌某宅聚_二一族_一相共撰_二擇之_一定_二眞贋_一并莖無_二冶工之名_一則擇_二其所_一作之巧_二謂_二何國誰某之所_一作也倭俗是謂_二目利_一於_レ茲本家嫡流一人出_二折紙_一其法白紙橫折_レ之其中央書_二鍛工誰某作而價幾何_一也其終貼_二印凡價黃金五枚以上稱_二折紙_一自_二黃金一枚_一至_二四枚_一謂_二之札物_一白紙細切_レ之其表記_二誰氏作代幾何_一也上古無_レ紙元簡木札記_二字其後以_レ紙雖_レ代_レ之直謂_二札倭俗諸物價謂_二代言_一以_二金銀_一代_レ之而取_レ之義也凡本阿彌一族多住_二本阿彌辻子_一

彫鑄物 後藤祖祐乘得_二彫鑄之巧_一凡小刀柄髮搔目貫是太刀刀一具之飾而是謂_二三所物_一不_レ可_二一物而缺_一之者也一所彫_二刻花木_一則兩所又相同自_二祐乘_一至_二宗乘光乘_一爲_二巧手_一特光乘與_二狩野越前守元信_一居處相近交接又親光乘欲_レ彫_二花草或鳥獸_一則先令_二元信_一畫_二其物_一然依_二其樣_一而摸_レ之鑄_二之元信畫工之傑出而任_二越前守_一剃髮後亦用_二諱字_一而以_二其音_一

呼_レ之又會叙_ニ法眼_一爾後元信子正榮相續叙_ニ法眼_一故元信稱_ニ古法眼_一元信之粉本于_レ今在祐乘末裔之家祐乘所作之_ニ三所物價至黃金三十枚或五十片_一其內赤銅魚子上彫_ニ人物鳥獸_一爲_ニ上品_一草木次_レ之凡地紋有_ニ細點_一如_ニ魚子_一是稱_ニ奈々古_一

鮫皮 凡鮫魚皮阿蘭陀人齋_ニ來長崎港_一京師_ニ二條商賈行買_レ之歸_ニ二條店_一浸_レ水數日而織細割_レ竹尺許以_ニ麻苧_一結_ニ束_一之_ニ是稱_ニ編竹_一以_レ是洗_ニ鮫皮_一於水中_ニ則其色潔白其礫何狀大而其粧相齊者粧_ニ刀柄_一是謂_ニ柄鮫_一又粒間交_ニ花點狀_一者謂_ニ梅花鮫_一又小點帶_ニ青白色_一者是謂_ニ鱗鮫_一此等類有_ニ數品_一是稱_ニ室鮫_一則粧_ニ刀室外_一漆_ニ其上_一

刀袋 倭俗漆革大小縫_レ之爲_ニ袋裏_一刀室_ニ是謂_ニ寸袋_一言應_ニ刀劍長短之尺寸_一而造_レ之義也行旅人多用_レ之并裏_ニ金銀_一袋及座氈等悉烏丸春日通製_レ之又馬之所_レ用切付肌付并泥障馬氈雨鞍覆等於_ニ斯所_一製_レ之

剃刀并鐵鐔 所々製_レ之然不_レ及_ニ埋忠之所_一作伏見文殊四郎之小刀并剪刀或謂_ニ鉸爲_一堪_レ用剃刀京師金義之所_レ造次_レ之至_ニ剃刀鐵_一鐔埋忠爲_レ勝倭俗作_ニ有

及者_ニ謂_レ打作_一鐔謂_ニ磨琢磨之義也_一古埋忠宅前有_ニ大池_一無_レ力埋_レ之于_レ時以_レ木巧作_ニ鳧鷖之形_一浮_レ水大人小兒以_ニ瓦礫_一擊_レ之爲_ニ戲無_一幾而其池水枯爲_レ土倭俗不_レ及_ニ價而取_一物謂_ニ直直與_一忠倭語相同埋_レ池不_レ及_ニ資料_一而成故世謂_ニ埋忠_一自_レ爾來爲_ニ稱號_一

庖丁 凡於_ニ庖厨_一截_ニ魚肉_一之刀不_レ論_ニ大小_一倭俗總謂_ニ庖丁_一是出_レ自_ニ庖丁解_一牛之義_ニ者乎多於_一鍛冶屋町_ニ打_レ之又截_レ魚時插_ニ一雙鐵箸於左手_一以_レ是插_ニ魚肉_一右手以_ニ庖丁_一任_レ心而截_レ之是謂_ニ真那箸_一載_ニ魚肉_一之盤謂_ニ真那板_一倭俗謂_ニ魚曰_一真那_ニ又截_ニ野菜_一之短片刀是謂_ニ菜刀_一北野通西鍛工口人之所_レ打爲_ニ宜_一

鞍鐙 始平貞盛之裔有_ニ伊勢攝津守貞孝者_一其先貞繼任_ニ伊勢守_一爾來以_ニ伊勢_一爲_ニ稱號_一世仕_ニ室町家_一而爲_ニ執事之一員_一又兼_ニ勢州之任_一伊勢守貞繼嘗傳_ニ乘馬之法於大坪道禪_一而受_レ作_ニ鞍鐙_一之巧_ニ其後祈_ニ鹿島神_一而益得_ニ其妙_一因_レ茲彼所_ニ造始謂_ニ神作_一爾後省_ニ神字_一號_ニ作鞍作鐙_一其形模異_ニ于他_一且雖_レ行_ニ遠方_一其鞍不_レ裂其馬不_レ痛今伊勢祐仙其裔也

因幡守亦一流乎凡鞍一具前輪後輪居本其外處々有_ニ其號_ニ鞍一具謂_ニ一口_ニ就_ニ馬一口_ニ而謂_レ之者乎又謂_ニ一背_ニ安_ニ馬背_ニ之義乎於_レ鐙也一雙謂_ニ一掛_ニ依_レ掛_ニ鞍之左右_ニ也倭俗造_ニ蓑席馬鞍假面_ニ惣曰_ニ打故造_レ之人稱_ニ鞍打_ニ言打成之義乎又以_ニ鐵製_レ鐙以_ニ金銀_ニ細鏤_ニ花鳥_ニ是謂_ニ藏含_ニ中華所謂錯也京師友眞友重等造_レ之又自_ニ加賀國_ニ來是謂_ニ加賀掛_ニ凡倭俗所_レ粧_ニ馬之物全備謂_ニ皆具_ニ

啣 俱都和所々製_レ之然大佛門前明珍所_レ作爲_レ良又攝津國譽田一口所_レ作亦好倭俗造_レ啣謂_レ磨謂_レ啣家又作_レ燧能鑽_レ火野沓等又有_ニ製_レ之家_ニ

火繩 鐵砲火繩所々有_レ之多削_ニ取志濃邊竹鹿皮綯_ニ之木綿火繩東福寺門前唯有_ニ一家_ニ號_ニ刀石又右衛門_ニ

鷹鈴 凡本朝高貴之所_レ玩在_ニ馬與_ニ鷹故至_ニ馬具_ニ各有_ニ主家_ニ製_レ之鷹緣所々製_レ之鈴作_レ之者稱春日通新町西有_ニ造_レ之家_ニ是爲_ニ巧手_ニ鷹隼追_ニ鳥無_レ不到動失_ニ其所_ニ之故尾本繫_ニ小鈴_ニ雖_レ入_ニ茂林_ニ鷹工慕_ニ其鈴音_ニ尋_レ之以_ニ策或紙幣_ニ招_ニ呼_ニ之_ニ鷹必還_ニ鷹師_ニ之拳頭_ニ鈴者以_ニ銅鐵_ニ製_レ之此家又造_ニ鐵鉢_ニ律僧求

_レ之又攝州大阪有_ニ作_レ之家_ニ不_レ及_ニ京師春日通之製_ニ造_ニ

翠簾 禁裏院中之翠簾谷口和泉守製_レ之公方家之所_レ用者望月某造_レ之其餘簾箔大佛邊伏見町造_レ之茶亭窓間所_レ揭之伊豫國產細竹簾別有_ニ其家_ニ

車 凡造_ニ車者所々有_レ之其內造_ニ禁裏院中之車_ニ時預_ニ其事_ニ者其酋長號_ニ惣司久右衛門_ニ有_ニ家領五百

石餘_ニ常住_ニ京北柳原_ニ轅大工中井氏造_レ之所_レ駕牛仙納彌市兩家常飼_レ之稱_ニ載雜品物_ニ者謂_ニ雜車_ニ洛下三條橋西南鳥羽橫大路造_レ之

與 京師新町作_ニ竹輿_ニ倭俗專謂_ニ乘物_ニ并板輿手輿等亦造_レ之長櫃小袖櫃擔子臺子燭臺水風爐之類多於_ニ二條南北新町_ニ造_レ之

柳篋 載_ニ諸品物_ニ之臺也或謂_ニ柳篋_ニ凡柳樹削_ニ鹿皮_ニ則其木色潔白故始用_ニ柳_ニ今間雖_レ用_ニ檜木_ニ惣稱_ニ柳篋_ニ造_レ之法割_ニ柳爲_ニ小片木_ニ以_ニ紙捻_ニ編_ニ連_ニ之_ニ爲_ニ座座之下左右著_ニ編木脚_ニ凡編木之數吉事用_ニ陽數_ニ故五七九十一爲_ニ式凶事用_ニ陰數_ニ故六八十二爲_ニ式凡雖_レ有_ニ大小長短_ニ不_レ過_ニ陰陽之定數_ニ檜物屋造_レ之或造_ニ木笏淺沓_ニ家亦製_レ之一說上古未_レ知

割板時代樹枝編連之大小隨其用而爲載
物之臺故編木無定數云此義可取者乎

石硯 京極通造之又二條通有巧手凡硯石洛西嵯
峨大井川洛東高野川間又有宜硯者於餘國則
以丹波石王寺之石爲上品然稀出多出自周防
國土佐國美作國高田瓦硯大佛殿南造瓦者燒之又
嵯峨大井川石偶有宜硯者妙澤之馬蹄硯是也

筆 筆工小法師造大筆小筆獻禁裏院中其外河原
町祐仁京極南裏辻等爲巧手凡造筆謂結筆其
造之者稱筆結多以福字爲氏相傳弘法大師入
唐歸朝口誘中華工福氏人來今稱福者其裔也本
朝筆道專宗青蓮院之家風故其筆法稱御家樣其
所用之筆謂御家樣筆

墨 近江武佐丹波貝原并洛下太平墨之製造自古有
之然其色淡黑而龜薄中世南都興福寺二諦坊取持
佛堂燈火烟之薰滯屋宇者和牛膠而製之是南
都油烟墨之始也今偶存爾後南都土人倣之取油
烟造之今洛陽稱墨所者亦其製造精密而不愧
中華之所作也

紙 凡加賀奉書越前鳥子以是爲紙之最杉原紙之

所出也始謂杉原紙今省紙字直稱杉原本朝
高貴之侍臣奉主人之命令而告之於下謂奉書
其紙用堅硬而純白者是謂奉書紙今畧紙字而
言之加州產爲堪用鳥子其紙色似鷄卵色故稱
鳥子越前產爲宜至雜紙則美濃紙關東紙修禪寺
紙小杉紙周防安藝諸口片口厚紙五色紙等悉齋來
京師而賣之至宿紙檀紙則他邦之所不能造
也古禁裏院中書捨反古堆盈或有艷書懸慕之詞等
厭人見之則裂之直使紙師再漉之漉紙者以
故紙屋川水洗之數回合登呂々根汁而漉之登
呂呂葉并花似木綿花至仲秋花開其浸水間經
三五日故宿紙屋川邊而造之故俗謂宿紙其
製紙處號宿紙村今於西洞院河邊造之數遍雖
洗墨汚猶帶淡墨色依之號水雲紙凡職事
辨官預萬事依之筆記者多故造此紙於職事雜
用或使書口宜案等遣外記外記因之寫綸旨
於檀紙世人見其案紙多誤謂薄墨綸旨今造宿
紙者兩家在西洞院西綾小路通西也兩家小佐治
氏也是則紙師座會長也至近世自諸方齋紙來
者悉譏而征之是謂取運上今無其儀檀紙自

備中來其漉之人自_レ古有_二家領_一此紙綸旨口宜懷紙等用_レ之或號_二大高小高_一或稱_二引合_一又謂_二引大小高則紙大小之號也引合此紙三屈折之_一其體如_二引合衣領_一其紙有_二礪礪_一而似_二松皮_一故中華人稱_二松皮紙_一其名相當凡所_レ用_二神社_一之宣命紙於_二伊勢內外宮_一用_二青色紙_一其餘悉黃紙也外記書_レ之此紙亦兩家之紙師造_レ之凡造_二紙謂_一漉格汁并登呂々汁相合和_レ水壓_レ日後後漉_二渣滓_一容_二淺宮_一以_二竹簾_一貼_レ之而後取_二起謂_一張_二板面_一日乾用_レ之也此外打曇雲紙墨流等白紙施_二文采_一者也又擣_二紙於石盤之上_一而施_二雲母汁於其上_一則其紙透徹宜_レ臨_二寫書畫_一或謂_二雲母紙_一又稱_二玉盤紙_一臨寫之際若有_二損失_一則忽拭_レ之又如_レ舊又一種有_二湊紙_一舊於_二泉州湊濱_一造_レ之其色淡黑其狀龜惡多以_二赤紙片_一貼_二之於紙面所々_一是謂_二附_一座是用_二質素野樣_一者也茶人貼_二茶亭壁_一又張_二障子兩面_一此謂_二太鼓張_一湊紙今於_二洛下_一亦製_レ之此外扇地紙亦於_二西洞院_一製_レ之又近世白紙半截_レ之以_二糊橫續_一之爲_二一卷_一書_レ事_二隨_一其長短而切_レ用_レ之依稱_二切紙_一又謂_二手紙_一近世專用_レ之是亦西洞院製_レ之

(補遺) 本朝人近世多用_二楮皮_一造_レ紙檀紙漉_二檀皮_一以製_レ之檀訓_二麻由美_一考_二延喜式圖書寮條下_一凡紙以_二穀皮斐皮_一製_レ之穀訓_二加治_一不_レ見_二以_一檀製_レ之穀斐內有_二與_一檀皮_一同者乎可_レ考_レ之又所_レ出_二自_一羽州相馬郡_一之松皮紙實以_二松肉皮_一相雜而漉_レ之紙一枚內所々有_二皮點_一

文匣 以_レ紙貼_二宮之內外_一塗_二漆於其上_一或盛_二書冊_一或藏_二雜品紙_一是稱_二文匣_一此外一切器物無_レ不_レ爲_レ之近世挾箱亦造_レ之古行_二他處_一人以_二竹挾_一衣服或袴羽織等_一令_二僕擔_一之適_二寒暄用_一是號_二挾竹_一今嫌_二其不_レ便而造_一箱其蓋上施_二棒_一令_二僕擔_一之元出自_二挾竹_一故號_二挾箱_一開闔自由而有_レ便_二往來_一烏丸勘解由小路稱_二豐後_一者其巧美而堅固也近世枕屋宗源所_レ製之枕是謂_二塗枕_一是亦柔軟而堪_レ用

樂器 凡樂器琴_二箏_一琵琶_二鼓_一笙_二簫_一篳篥_二鼓_一羯鼓_二太鼓_一三鼓_二鼗_一太鼓等之物各有_二製_一之家近世筑紫琴_二三味線_一之流行也非_二古樂之所_一及也依_レ是巧人亦多

琴 有_二稱號_一者多矣是謂_二名絃_一

笛 尺八 所々造_レ之內宜竹之所_レ作爲_レ妙近世指田某

所造亦佳也吹_レ笛有_二數流_一所謂牛尾流一草流守田流是也尺八倭俗爲_二洞簫_一今按洞簫其製與_二尺八_一異考_レ之中華所謂短笛是也俗專弄_レ之近世吹_レ之有_二兩流_一所謂宗左流西實流是也宗左弟子有_二理菴宗勳者_一而於_二尺八_一也世稱_二美之_一其次謂_二宗招_一今西實流絕凡弄_二尺八_一者多出_レ自_二宗勳_一者也尺八之發_二好音_一者多有_二稱號_一是謂_二名管_一

(補遺) 日本紀神代卷云猿女君祖天鈿女命採_二天香山竹_一其節間雕_二風穴_一通_二和氣_一是笛之始也

大太鼓 太鼓之大者亦以_二馬革_一製之天部_レ屠人貼_二之於筒_一筒自_二近江山中_一穿_レ之來天部村屠人買_レ之

再改_二斲之_一而貼_二馬革於兩端_一伶人之所_レ用羯鼓三鼓龜太鼓及猿樂所_レ用之太鼓於_二茲處_一張_レ之猿樂之

鳴_二太鼓_一各有_二數流_一

鼓筒 大小鼓筒多以_二櫻木_一造_レ之凡造_レ筒謂_二衝筒外

如_二球子_一而內貫通故衝突之義乎古於_二和州多武峯_一

有_二造_一之者則稱_二談岑_一又折居者稱_二傑作_一也爾後

代々以_二折居_一稱_レ之其祖先所_レ造謂_二古折居_一又一

代巧手老後爲_レ譬此人所_レ作謂_二官折居_一近世彌助

筒是又爲_レ良寺院所_レ用之大鼓筒近江山中龜工造

之賣_二京師_一天部并田中屠人改_二斲之_一而張_二馬革_一

大小鼓革 京師二條加賀屋并鳥丸三條南賣_レ之元出

自_二加賀國_一其製_レ之人謂_二丁金_一彼所_レ張爲_レ良猿樂

之所_レ用大鼓亦在_二一條通加賀并鳥丸_一懸_二革於筒兩

端_一以_レ緒結_レ之是稱_二調纏_一緒後調_二其音_一之謂也大

凡調緒用_レ紅禁裏貴_二紫色_一故堪_二其藝_一者被_レ許_二紫色_一

又公方家鼓調絲貴_二青色_一故猿樂等中能_レ之者

免_二青調或紫調_一凡擊_レ鼓有_二數流_一所謂大倉流觀世

流之類是也又絢_レ調家製_二冑緒_一是謂_二忍緒_一倭俗不

使_レ人知_二其事_一謂_レ忍結_二冑緒_一也於_レ我有_レ便爲_レ良

不_レ使_レ他人_一知_レ之謂也

黑漆器 凡造_二諸漆器_一是謂_二塗師屋_一倭俗凡製_二造萬

物_一之人多以_レ師呼_レ之佛師鑄物師之類是也或又工

人有_二泰阿彌并清阿彌等之稱號_一是古慈照院義政公

退老後在_二東山東求堂_一聚_二古畫古器_一以慰_二心目_一或

又隨_二其所_一好新製_二諸品物_一至_レ今有_二存者_一是世謂_二

東山殿御物_一其製造多使_二近侍同朋_一而從_二其事_一上其

裔直爲_二家業_一今某阿彌何阿彌是也塗師之中造_二梳具折敷膳重箱等物_一是謂_二家具屋_一倭俗凡梳并膳專

稱_二家具_一。洛下道憲道志之製造是爲_レ宜又盛_二抹茶_一之漆器有_二數品_一。是稱_二棗屋_一。其茶器之狀有_レ似_二棗形_一者。故號_レ之。又有_レ稱_二藤重_一者。元樽井氏而南京之漆工也是漆_二羽田氏之類也_一。至_レ今藤嚴十一代也。第七世人剃髮號_二藤重_一。特爲_二巧手_一。自_レ茲後不_レ稱_二樽井_一。從_二倭訓_一號_二藤重_一。是專製_二中次茶器_一。其圍五寸餘高一寸半徑一寸半以_二轆轤_一削_二内外_一。函蓋中_二分之_一。故謂_二中次_一。其合縫緊密而不_レ令_二風濕浸_一。抹茶_二斯家_一又以_レ漆補_二盛_一茶磁器之缺。又修_二罅漏_一。

疊 倭俗堂室之座席是謂_二疊_一。凡疊量法長六尺三寸幅三尺一寸五分是謂_二一間_一。先以_レ藁造_二臺厚三寸許_一。又別以_二蘭蓆_一編_二蓆蘭中華所謂燈心草也_一。其編_レ之或謂_レ打是則所謂疊面也。自_レ備後_一來者爲_二良丹波近江之_一所_レ打是爲_二下品_一。以_二斯面_一敷_二芻牀上_一。處々以_二麻苧_一縫_レ之。而後著_二緣於兩端_一。是謂_二疊一帖。凡疊緣白地織_二雲象_一。是謂_二雲網緣_一。是禁裏院中及諸親王攝關家諸門主爲_二准后_一時用_レ之。白地有_二小紋之緣_一。是謂_二高麗_一。元此帛自_二高麗_一來者也是公卿以上用_レ之。其赤色地下人之所_レ座也。黃色又其次也。於_レ今藍染綠武家及地下良賤通_二用之_一。按古所謂疊今緣取也。

稱_二厚疊_一者。今所用之疊也。今世其厚倍_二常疊_一者。謂_二厚疊_一。是謬傳也。凡造_二疊人_一稱_二疊刺_一。以_レ鍼刺縫之。謂也。其家謂_二疊屋_一。京師大針氏并伊阿彌等爲_レ。長禁裏院中之疊製_レ之。延喜式載調廣布二百八拾枚。挾席百九拾枚。折薦八百五拾八枚。葉薦四百六枚。食薦一千五百枚。依_レ時有_二損益_一。云々今無_二其儀_一。

草履 草鞋謂_二草履_一。又稱_二金剛_一。始金剛氏人使_レ造_レ之。云一說其製法堅密而雖_レ行_二遠方_一不_レ損。故俗謂_二金剛_一云。

雪蹈_{キタク} 簪鞋底敷_レ革故雖_レ履_二霜雪_一。滔_二濕地_一不_レ沾濡。依_レ之稱_二雪蹈_一。然其所_レ敷_二之革_一亦滑而蹈_レ石則有_二轉仆之患_一。故重敷_二革於其下_一。是謂_二裏著_一。倭名鈔屨_二下賤之人以_二牛皮_一補_二著革屨_一下者也。然則屨_二今所謂雪蹈_一乎。

笠傘 凡諸品之笠并陰晴所_レ共用_二之傘_一。悉二條新町製_レ之挑燈等亦多在_二此所_一。竹簾笠大和大路古法性寺邊造_レ之。故專謂_二法性寺笠_一。凡笠細竹輪爲_レ骨以_レ絲縫_二簾皮_一。依_レ之造_二笠_一。謂_二笠_一。

合羽 倭俗綴_レ紙傳_レ油爲_二雨衣_一。代_レ簑著_レ之。是謂_二合羽_一。人之著_レ此也。其體似_二鳥之合_一。兩翼_一。依_レ之號_二合羽_一。人之著_レ此也。其體似_二鳥之合_一。兩翼_一。依_レ之號_二合羽_一。

羽者乎合羽之有雙袖者裳短是謂徒合羽^{カサ}一徒步人之所用也其無袖者長大也旅人馬上著之以短領纏頂其下左右合領如著衣其裳掩馬背之荷包不使雨濕侵之是謂馬合羽一又稱圓合羽一又武人騎馬時著之者粗如徒合羽一自柳馬場二條至四條家々製之其造之法以糊綴紙後傳桐油數遍天晴則每日北方自荒神河原南至五條河原乾之而無隙地其製造之多也可推而知之也又有以下以絹製之者上

椀折敷 二條南北新町所製謂縹椀^{アサギ}黑漆上以縹

色并赤白之漆畫花鳥臺盤謂膳或謂折敷元折板而敷之居椀具故謂折敷近世上品椀亦造之此外方盆又圓盆亦造之圓案中華所謂椀而倭俗稱臺者是也重箱提合水風爐張付障子緣書院床緣凡諸品物以漆塗之類無不有

白箸 在四條坊門一箸木者美豆木或宇利木用之元出^レ自丹波并若狹^レ於茲又改斲之杉箸專用

杉

楊枝 所々斲之其內下栗田口猿屋爲本百本或五十本入桐宮并紙袋贈遠方今自四條京極西至

祇園町一特多其木自河內國玉串村出者爲良豐前國立石之楊枝木爲純品各在京師立石村堂上荻原家領地也

權衡 權衡斗量尺寸天下所通用而有少違則大誤人故近世被定其人關西洛下善四郎所作權衡用之關東江戶守隨所製用之權衡倭俗稱禮伊氏牟具中華人今謂厘厘等具倭俗禮伊氏牟具誤厘等具者乎

天秤 泉南針口屋製之其餘流今在洛下賣之法馬後藤家製之俗所謂分銅也

算盤 倭俗謂十露盤凡算盤以竹串貫十箇木顆並置盤上數行凡算物時以斯木顆爲逐一之徵而算之十露呈露十箇顆之義也造之人多在京師京極北又於山科鄉大谷製之

斗量 凡盛米穀一升之方器是直謂舛其式四方內自一隅至一隅上橫鐵準量米穀時滿其準爲限是謂弦掛舛鐵準之橫舛上也似施弓弦之謂也洛下伊豆倉屋并鍛冶屋清水某斯兩家造之貼鐵印而賣之其外不能造之

革匠 以革製諸品物是謂革屋造蹈皮并革袴及

革頭巾革道服_二多在_三三條通_一又以_二不_レ去_レ毛皮_一造_レ物是謂_二毛皮屋_一在_二春日通西_一

植虎虎_一以_二虎毛_一插_二他皮_一其紋采不_レ與_二真虎皮_一相

違是謂_二植虎屋_一插_二其毛_一猶_二植草木_一故稱_レ之在_二

鳥丸二條北_一

菖蒲草_一八幡山下大谷染_レ之傳言準_下神功皇后征_二

三韓_二之鎧威_上而以_レ草染_レ之故名_二高麗勝武_一也源義

家朝臣奉勅伐_二東夷_一時祈_二石清水八幡宮_一從_二大谷_一

獻_二高麗勝武_一義家悅爲_二鎧威_一立_二軍功_一故歷代幕下

稱_二此草_一其後豐臣秀吉公征_二朝鮮_一時倣_二神后嘉

兆_一詣_二石清水_一祈_二戰利_一且使_二陪臣木下半助吉政_一

徵勝武草_上即獻_二高麗勝武草_一秀吉公賜_二書嘉_レ之其

書今在矣當時名爲_二菖蒲草_一者以_二仲夏節_一染_二成之_一

故歟

象牙_一以_二象牙并水牛角_一造_二器物_一或盛_二碾茶_一之磁器

用_二象牙_一爲_二蓋造_レ之人稱_二蓋挽_一又作_二印章及雙陸

賽之類_一凡書畫卷末軸多用之近世婦人櫛篋又用之

釜煮_レ湯之具也中古於_二筑前葦屋里_一所_レ鑄號_二葦屋

釜_一其所_レ畫之紋畫僧雲舟之所_レ圖者間有_レ之雪舟備

中人也去_二葦屋_一不_レ遠且雪舟應_二大内氏之招_一而時

時往_二來周防長門之間_一治工請_レ之使_レ畫_二釜之模範_一

而鑄_レ之多有_二松杉或梅竹之圖_一是謂_二下畫_一下野國

天明之所_レ鑄是謂_二天明釜_一或作_二天貓_一葦屋天明如

今不_レ鑄_レ釜厨料之大釜或大_二鑄賣_一之伊勢國之所

鑄草花竹樹等之紋甚細密是謂_二伊勢釜_一倭俗暖_レ酒

之鐵器謂_二間鍋_一今有_二狩野探幽并永真等之下畫也_一

又於_二釜環_一出_二自_二南都_一爲_二良凡釜左右有_レ耳其內

有_レ空以_二一雙環_一貫_二左右耳_一以_二兩手_一提_レ之不_レ用

環則不_レ堪_レ熱奈良鍛冶所_レ造之環千鍊而製_レ之故

金性冷茶人暗中摸索而知_二奈良之製造_一也曾豐臣秀

吉公浴_二有馬溫湯_一千利休從_レ之於_二阿彌陀堂庭_一構_二

茶亭_一秀吉公來_二臨斯亭_一利休煮_レ湯點茶而獻_レ之其

所用之釜形狀相宜茶人甚慕_二利休_一模_二此釜_一而所

鑄者不_レ論_二新舊_一號_二阿彌陀堂釜_一今京師釜座彌右

衛門并孫三郎等代々爲_二巧手_一釜鑄類悉鑄_レ之近世

大鐘亦於_二治工後園_一設_二蹈鞴_一而鑄_レ之

風爐_一以_二銅鐵_一鑄_レ之者釜屋製_レ之埴_レ埴而造_レ之者

號_二土風爐_一元南都宗善之所_レ造爲_二上品_一依_レ之或

號_二奈良風爐_一有_二赤黑之二色_一然赤者不_レ及_二黑色_一

自_二琉球_一所_レ來之知牟加羅風爐是亦珍物也

埴田焙爐具^{ホロク} 茶人入^ニ炭火於埴田^ニ盛^ニ末灰於焙爐具^ニ

以^ニ末灰^ニ粧^ニ爐中^ニ而置^ニ炭安釜也古行基於^ニ河內
國埴田陶器^ニ始令^ニ人作^ニ磁器^ニ盛^ニ遺骨^ニ或納^ニ經卷^ニ
而藏^ニ土中^ニ今偶有^ニ存者^ニ世號^ニ行基壺^ニ或稱^ニ行基
燒^ニ茶人取^レ之盛^ニ水挿^ニ花多懸^ニ壁爲^ニ席上之觀^ニ此
兩所如^レ今也燒^ニ埴田并焙爐具^ニ而已

土器 北山幡枝土器村人造^ニ三度七度并塞鼻等之器^ニ

凡土器名出^レ自^ニ九獻之盃^ニ凡盃自^ニ一獻^ニ至^ニ九獻^ニ
每^レ度次第用^ニ大者^ニ故謂^ニ何度^ニ於^ニ幡枝土器村^ニ造^ニ
^レ之者新年著^ニ烏帽子蘇芳^ニ獻^ニ禁裏清所^ニ或於^ニ深草
并上嵯峨三軒村^ニ亦製^レ之斯處元土器師之始也此人
有^ニ土器之土^ニ處則移^レ居而取^レ之燒^レ之故家有^ニ公方
家之御教書^ニ

磁器 今洛内外所々燒^レ之^ニ二條南押小路之製造稱^ニ內
燒^ニ家內設^レ窑燒^レ之謂也清水坊音羽山下栗田御泥
池其外窑爐在^ニ處々^ニ隨^ニ人之嗜好^ニ而造^ニ諸品物^ニ近
世仁和寺門前仁清之所^ニ製造^ニ是稱^ニ御室燒^ニ始令^ニ
狩野探幽并永真等^ニ畫^ニ其土上^ニ依^ニ其畫樣^ニ而燒者
多矣自^ニ中華^ニ所^レ來之磁器有^ニ畫僧牧溪之下畫^ニ者
往々有^レ之多畫^ニ鯉魚^ニ是謂^ニ牧溪鉢^ニ之類也磁器之

皿其大者倭俗謂^ニ鉢准^ニ鐵鉢^ニ而稱^レ之者乎豐臣秀吉
公在^ニ聚樂城^ニ時千利休招^ニ朝鮮人之造^ニ陶器^ニ者^ニ使
^レ燒^ニ茶碗^ニ利休取^ニ朝鮮之朝字^ニ名^ニ朝次郎^ニ其茶碗
有^ニ赤黑二色^ニ其底樂字突起取^ニ聚樂之樂字^ニ者也依
^レ是號^ニ樂燒^ニ又稱^ニ樂茶碗^ニ今其子孫在^ニ聚樂邊^ニ燒
^レ之然不^レ及^ニ利休時之製^ニ傳言今長門國萩之所^ニ燒
是稱^ニ萩燒^ニ是亦毛利輝元自^ニ高麗^ニ招^ニ造^ニ陶器^ニ之
人是號^ニ高麗左衛門^ニ今造^レ之者其末流也云

面桶片口 片口盛^ニ水器也其吐^ニ水口在^ニ一方^ニ故稱^ニ

片口^ニ面桶或稱^ニ覆面桶元^ニ一人所^ニ服食^ニ之飯盛^ニ此
一器携^ニ遠方^ニ爲^ニ行厨^ニ五人十人隨^ニ人之多少^ニ就^ニ

一人面^ニ而與^ニ一器^ニ依^レ之號^ニ面桶^ニ今每^ニ一人^ニ與^ニ
飯料^ニ是如^レ謂^ニ顏扶持^ニ或爲^ニ覆水之器^ニ茶人點^ニ茶

時湯或水之餘瀝納^ニ此器^ニ凡面桶片口或有^ニ以^ニ銅
鐵^ニ造^レ之者^ニ又有^ニ用^ニ磁器^ニ者^ニ然千利休所^ニ好杉片

口杉面桶外未^レ見^ニ勝^ニ之者^ニ宜哉茶人之宗^ニ利休^ニ也
其時所^ニ造其末孫今猶存此外棗行燈短檠燭臺一切

器物稱^ニ利休形^ニ者皆以爲^ニ宜也又以^ニ薄杉板并片檜
板^ニ製^ニ造諸物^ニ者是謂^ニ檜物屋^ニ

覆茶物^ニ凡裏^ニ茶器^ニ拭^ニ茶杓^ニ之紫方巾惣謂^ニ覆茶物^ニ

或稱_二覆茶絹_一雖有_二青白黃_一之別不及_二紫色_一洛下鹽澗絳縫爲_レ宜依_レ之世號_二鹽澗覆茶_一又其大者謂_二打敷_一是敷_二佛前_一之具也是多裁_二縫僧衣_一之家製_レ之播蓋等亦然

茶巾 白布七寸許裁_レ之拭_二茶碗_一是號_二茶巾_一南都曝布雖用_レ之不_レ及_二朝鮮照布_一此布乾_レ濕甚速也京師室町卷物屋賣_レ之

茶杓 揉_二竹片_一掬_二抹茶_一是謂_二茶杓_一利休之所造專爲_レ珍常盛_二茶杓於竹筒_一而藏_レ之其筒亦作_二茶杓_一人之所設也或筒上記_二茶杓號_一又有_二作者名_一者間有_レ之故無_レ筒則不_レ爲_レ眞凡於_二茶杓_一專謂_レ斷_レ之今洛下人依_二前作之模樣_一而造_レ之者多

茶筥 河內國高山并寶來人製_レ之賣_二京師_一其內寶來之所造者是利休之所好也比_二尋常所用之茶筥_一則良大而滾_二茶爲_レ宜四條坊門極樂寺空也上人之徒亦專造_レ之然施工而充_レ滾_二煎茶_一之用而已

藥罐_二以_レ銅製_レ之今造_二諸品物_一然元出_レ自_二煎_レ藥器_一故總號_二藥罐屋_一

火箸灰匙 大炊御門田中氏人造_レ之茶亭所用之火箸長火箸火匙灰匕又香爐之所用灰押香箸木箸等物

悉在_二斯家_一

蠟燭 凡中華山中人養_レ蜂取_レ蜜其色白者爲_二白蜜_一黃者爲_二黃蜜_一藥店求_レ之再煉充_二藥劑之用_一又取_レ起黃白蜜之疑_二滯壺底_一者再煉爲_二蠟燭_一其內之堅固者取_レ之大小隨意窪_二其內_一兩蓋相應造_レ盛_二丹藥_一之器是稱_二蠟香合_一兩蓋合縫之間以_二小刀_一撫_レ之則緊合而無_二罅隙_一欲_レ取_レ其蓋則又以_二小刀_一截_二合縫之間_一其開闔自由而不_レ入_二風濕_一甚爲_レ有_レ便於_二本朝_一肥後豐後及石見紀伊山中土民取_レ蜂蜜其良者非_二中華之所_一及也唯充_二藥劑之用_一偶造_二香合_一而已如_二蠟燭之蠟_一也自_二漆樹_一取_レ之凡製_二蠟燭_一法其良者以_二髮捻_一爲_レ心纏_二燈心數莖_一然後灌_二懸所煉之蠟_一是稱_二木掛_一又謂_二生掛_一俟俗不_レ交_二他物_一惣謂_二木又稱_二生言木訥質樸之謂也_一凡造_二蠟燭_一謂_二懸_一之倭俗灌_二水并油_一謂_二懸凡蠟燭之大小數量謂_二幾拾錢目懸_一幾挺_一其輕重自_二一拾錢目掛_一至_二五百錢目_一又其龐惡者以_二兼葭條_一爲_レ心卷_二燈心_一蠟亦加_二牛油_一其心大而其光不_二赫奕_一是謂_二牛蠟_一少有_二臭氣_一而逢_二雨濕之時_一則易_レ爛故點_レ火則蠟淚如_レ流速爲_レ燼而易_レ見_レ跋凡蠟燭自_二越後_一來者爲_レ上蠟色潔白而燭光

明陸奧會津越前福居次之

喜世留 倭俗良賤好煙草吸之筒謂喜世留是朝鮮所謂烟筒也今處々製之然洛下間町并大佛邊所造爲本

竹屋 近世二條京極所々并四條京極東以竹造諸品物第一倣茶人之舊製而以大竹一切插花之筒又削掬茶之杓或引切或柄製悉製之倭俗圓竹徑二寸許長二寸餘存節切之置爐邊安釜蓋於竹頭是謂引切言以鋸引切之謂也或稱竹輪又謂蓋置柄杓汲湯之具也竹筒存節二寸許切之橫貫竹柄以之杓湯并水檜杉柄杓檜物屋造之竹具建仁寺町大佛前亦以竹造諸品物竹輿竹床竹椅竹枕竹簾竹杖及菓籠等物無不有

桶屋 凡外圍繞片木內以板爲底別割青竹二條互纏之以是爲輪約束片木圍繞之外面或三所或五所是謂桶在堀河一條南大小桶無不有之專盛水謂田子桶駿河國田子浦土人汲潮燒鹽時做所汲潮之桶形者也今略桶字專謂田子竹輪中華所謂箴繩也或以鐵有造輪者是謂鐵繩

棕欄帶 五條大佛邊人製之又八幡山南樟葉村之內

中芝土人是爲巧手來賣京師造之法至秋剝取棕欄毛皮束之以圓竹爲柄是謂棕欄帶近世棕欄葉細割束之作帶然不及毛皮

糊刷 以板插鹿毛浸糊及柿油并漆一張紙於諸物是謂刷毛二條京極藤田某所造爲佳矣糊刷中華所謂鬚筆也

繪具 凡畫工之所用彩色雜品有十五六種倭俗總稱繪具賣之家在五條邊號繪具屋所畫之筆是謂畫筆別有造之家

屏風 所々製造之特四條通沼津某家兩曲六曲大小屏風撒金墨畫隨所好而有之

表具 凡書畫縱橫之裝潢其卷末著緒卷本著牙軸

豎卷之以卷末之緒結之是謂表具又書畫橫至數尺者著軸卷之以緒結之是謂卷物唯有

橫而無縱經師屋多製之凡表具與卷物橫豎之異而已然表具師之卷物不堪用經師屋之表具又不宜物各有不能擇其能者使造之可也

額 凡神社佛閣記其名於版面揭門闌上或殿堂檐是謂額言顏之謂也主上之宸翰是稱勅額勅額西

掘河某彫刻之地下良賤宅亦記其第宅名或記其所見之風景而揭檐下倭俗揭額謂打額

絹帛 大凡以白黃絲織絹帛其白謂白羽二重其

中有三諸練無垢練之異白羽二重中是爲上品凡黃絲比白絲則下品也其內擇其善者而織之謂撰絲羽二重中古斯兩品於白雲村織之白雲村舊新在家之地也凡練絲專擇水舊新在家土地井水性惡故豐臣秀吉公使移今新在家然如今織之家漸絕其外所製之羽二重或熨斗目或片色綾島龜屋島等物於西陣多織之凡絹帛以染色絲織數品紋采始專造島嶼洲渚之狀故稱島絹或號島木綿島曝布之類亦然於今雖有縱橫條理之紋一切文采之於絹帛木綿也總謂島

卷物 大凡每年番舶所載來長崎港之絹綿倭俗稱

卷物每二疋卷之謂也商賈於長崎港買之京

師室町賣之

金襴唐織 近世西陣人倣中華之巧而金襴綴子繻子

細綾縞紗紋紗類無不織之又倣阿蘭陀製而天

鷲絨羅紗及木綿織物悉織之一種有稱唐織者

以五色絲織成花鳥或菱花等雜品之紋倣蜀江錦者也故號唐織俗人之裝束猿樂之衣裳婦人之臥具等用之今所用之金襴以西陣野木氏爲始唐織以倭屋爲本

繪絹 寫繪之白絹也所々雖織之三本木繪絹屋之所織細密而爲堪用

木綿 丹波并河內及攝津近江其外所々出大宮三條四

條邊人買居而賣之

倭錦 一名神錦一名文錦一名雲縹錦染五色絲織成其文章如蜀

錦故名倭錦山海經東海有冰蠶其蛭五色織爲

文錦入水不濕又六帖大倭國貢神錦冰蠶絲織

之龍文鳳彩殆非人工即是也萬葉集名車錦延

喜式稱雲縹錦禁裏用之韞內侍所神鏡之御蓋

及大社之斗帳飾神輿悉用之今織之所東洞院二

條南櫟氏隼人良元家織之他無之櫟或作市井本錦織氏

也

布 南都之所織特擇苧織得後湯加灰煮之數沸而

後木白搗之其後洗淨清水曝沙場或原上如此

數遍故其色至白是謂奈良曝布有紋采者謂鳥

曝凡隨織不曝而用之謂木曝倭俗每物本色

而不交_レ他謂_レ木質樸木訥之謂也八講布出_レ自_二加賀國_一古修_二法華八講_一時施_二僧徒_一多用_二此布_一依_レ之始稱_二八講布_一今省_二布字_一稱_二八講_一又近江高宮布丹波布等爲_二下品_一京師所々賣_レ之

紙衣 倭俗糊合_二柿油少許_一續_二白強紙_一然後塗_二柿油_一

日乾如_レ此數度其色自赤爾後晴天一夜露宿則發_レ色於_レ是兩手揉_二和之_一以_レ是製_二衣服_一是謂_二紙衣_一又稱_二紙子_一有_レ便_レ禦_二寒氣_一洛下白山通四條邊製_レ之中古清水坂人亦造_レ之是謂_二清水紙子_一又稱_二素紙子_一倭俗每_レ物不_レ雜_レ他總謂_二素或作_レ空_一所謂素面素謠之類是也又與_二賓客_一相對互交_レ語而不_レ饗_二酒食_一曰_二素咄_一倭俗談話謂_二波奈志_一又紀伊國根來土人以下白紙不_レ塗_二柿油_一者爲_二紙衣_一是謂_二白紙子_一是不_レ經_二女子之手_一而成者也故持律僧及南都東大寺二月堂參籠僧徒各著_レ之其色潔白是稱_二白紙子_一好事俗士亦偶著_レ之傳言二月堂參籠僧徒所_レ著之紙衣截_レ之爲_レ帶使_レ著_二立婦_一則易_レ產故婦人爭_二求之_一

澁紙 五條松原通東造_レ之是油單類也強紙綴_二續方五六尺_一重_二紙三遍_一然後塗_二柿油_一日乾又灌_二柿油_一數度以_レ此裏_二旅裝之具_一則無_二雨溫之患_一倭俗柿油稱_レ澁

苦澁之謂也倭俗所謂澁柿中華所謂樟小而綠者也或名_二漆柿_一漆柿打破浸_二油造_一傘褶油紙_二云凡席薦繩之類或口澁紙_一旅裝之具在_二四條京極西_一是謂_二奈良物町_一此類古自_二南都_一來又疊華院東堀端町井正親町通西堀河賣_レ之染色家所用之楊梅皮梓木皮黃蘗皮又五島蘇海苔_{トコロシグサ}太凝菜等亦有_レ之

蚊帳 中華所謂蚊幃也以_二青布_一裁_二縫之_一或以_二紗造_一之凡其大小廣狹隨_レ所欲而無_レ不_レ有矣三條東洞院至_二京極邊_一多有_レ之凡蚊帳限_二幾布幅_一或稱_二幾布幅_一又限_二疊幾帖_一故謂_二何疊釣蚊屋_一屋之四隅角掛_二環鉤_一著_レ緒鉤_二蚊帳四隅角_一是謂_二鉤手_一下賤人不_レ能_レ設_二布帳_一者以_二白紙_一作_レ之是謂_二紙帳_一又豎_レ竹以_レ布掩_二其上_一纔覆_二小兒頭面_一者是謂_二枕蚊屋_一是亦下賤之所_レ用而雖_二大人_一有_レ用_レ之者又有_二以_二木綿或絹帛_一造_レ之者_一是謂_二綿帳_一冬日釣_レ之禦_二寒氣_一紅梅_一以_二臘脂_一染_二絹帛_一是謂_二茂美_一染家謂_二臘脂屋_一近世有_レ稱_二中紅_一者倭俗每_レ物其善惡以_二上中下_一稱_レ之此色不_レ及_二本朝茂美_一故以_二中紅_一稱_レ之斯染色元是倣_二中華之方_一而臘脂加_二蘇枋木汁槐花等_一者也其價廉而難_レ辨_二真假_一又唐染暹羅染佐羅佐染紫

染梅染茶染紺屋染茶屋染吉長染等各有「染」之家
茜染并紫染者山科多「染家」

吉岡染 西洞院四條吉岡氏人始染「黑茶色」故謂「吉岡染」倭俗每事如法行之稱「憲法」斯染家吉岡祖每事如此故世稱「憲法染」此人得「劍術」是稱「吉岡流」而行「于今」也

結鹿子 凡以「絲緊聚」結絹帛「爲」紋而後染「所」好之色「口乾後解」其絲「則所」期之紋現存其跡如「鹿兒之皮紋」是總號「鹿子目結」一領衣服悉有「此紋」謂「惣鹿子」所々有「紋謂」村鹿子「是則婦人之業而是稱」鹿子結「此外摺繪縫箔縹物志保利染等各有」其家「而存矣」

絲具 凡以「絲造」諸品「是謂」組屋「倭俗綯合謂」組或謂「打所々製」之其內室町出水通南鶴屋鼠屋之所「作甚爲」佳凡經卷之緒多以「青白黑絲」相交組「之其形狀似」松皮之礫柯「故曰」松皮「又稱」啄木「傳言其高低斑點似」啄木鳥以「喙撲」樹皮「之跡」故云「爾又稱」高低「啄木與」多賀尾俱「倭語相近未」知「爲」何真「也」

鉸 女工之所「用元姉小路人家製」之又山科東大谷造

之號「池川針屋」然近世三條通河原町東翠簾屋之所「磨是爲」堪「用夏夷共求」之

簾枕 以「細小片木五寸許」縱橫四角造「枕形」是謂「指」枕而後縱纏「藤蔓」兩端貼「板塗」黑漆「是謂」簾枕「良賤嫁娶夜必用」之故新婦携「一雙」而行是又婚禮之一端也或謂「殿枕」倭俗崇「男子」稱「殿故爾造」之者唯一家在「室町南草枕疊枕模形枕黑漆塗枕」等在「鳥丸下立賣通北」

表挿囊 凡裁「唐織」而縫「大小囊」以「絡括」諸物出入之口「又別赤色組緒自」囊口四隅「垂」四方「是爲」飾故謂「上挿囊」是亦婦人嫁娶時其大者盛「衣服」二三領「其小者盛」簪櫛剃刀剪刀等雜細之物「又赴」他方「時輿中携」之甚爲「有便」其內小者或稱「調度囊」倭俗男女常用雜細之器物謂「調度」今誤「調度謂」數珠囊「製此囊」者室町三條南有「一兩家」此家以「錦或唐織」又造「婚禮一雙枕」又製「筒守」倭俗竹筒尺許截「之內盛」禁厭之靈符「以」唐織絹「卷」裏之「兩端以」金造「環自」左右「著」紅緒「自」兩端「釣」之兒女他行則必懸「乘輿前是爲」避「邪祟也元出」自「城殿所製」之天兒「者也城殿其家之稱號而駒井氏也」

相傳元三韓之投化人而始住近江東坂本邊駒井。自茲終爲氏斯人來住京師。始製扇爾後製雛并張子等之物。猷禁裏代々有受領之號。倭俗雜工中堪其巧者受國守之號。爲其名是謂受領。准下領其國之義者乎。天兒一尺餘竹筒上以白絹造。偶人首建之於尺餘竹筒頭。又別以尺許竹筒橫首下。是爲肩必置小兒之枕頭。若有邪祟則代小兒爲使觸斯偶人也。或又以白絹造人形。內充糟糠。外施白粉。是謂御咖母子。倭俗陪從左右而交語謂御咖相伴之義也。此偶人元造大。小母子之形。始稱母子人形。今略人形字而言之。別以紙張犬形一雙。是亦置小兒之傍。凡邪必欲害正。故置犬則邪鬼以爲己類而不加害男女。共爲小兒時幼名號。虎或犬或猿。又稱棄或拾之類亦是也。人家門闌懸擁劍蟬蜚殼。又懸蒜亦此遺風也。茶壺茶器之網并袋在釜座二條北。婦人以手摘白綿爲片而造被綿。其狀形有大小之異。然總稱綿帽子。老女多蒙頭所造之一條北入江殿尼寺而號三時知恩寺。此所曰入江辻子。故世此尼寺曰入江殿。淨土宗而屬清淨華

院近世爲知恩院派。皇姬或攝家姬公多爲尼住。斯寺有寺產二百石。侍尼多問暇也寂寥之餘製婦人之綿帽子或尺長帶或被帷子。是出自尻懸者乎。又頗蒙又奇特頭巾或長半頭巾等處々製之。櫛篋處々造之。其內京極二條北舟木屋之所作爲良舟木長門國而所造櫛之黃楊木并伊須木之所產也。近世或又以玳瑁象牙造之。

眉作或稱眉掃。五寸許竹管兩頭挾白兔毛。其末點白粉而粧面顏。其狀如筆頭之亂。良賤婦人以是點白末粉。粧面又傳竈突墨造眉倭俗女子至十六七歲則存眉過是則剃眉別以竈突墨粧眉形。是謂作眉會。後白川院時甚重男色。故堂上男子及十六七歲剃眉毛。別以突墨造雙眉。以白粉粧面顏。鐵漿染齒牙。臙脂傳爪端。專爲婦人之粧。自茲爲流例。雖爲大人染齒牙。聚頭髮於頂上而結之。以是別堂上地下。聚頭髮而結之。謂四方髮。前後左右其依存髮也。爾後寺院之喝食小兒亦倣之。垂頭髮於背後。又前髮少許截其末垂下。以油貼是於額上。其垂髮之形狀如鴨脚葉。而傳白粉於面顏。刷突墨於眉毛。是

皆以「眉掃粧」之古仁和寺門前有「造」童形侍兒眉掃之家「依」之世專謂「仁和寺眉作」於今處々製之凡喝食之於體也元如「今所」畫寒山拾得之貌然室町家甚歸「依禪宗旨」時々來臨五山之寺院「于時僧徒喝食之中擇」其容貌之美者「傳」白粉「粧」脂「著」斑紋之衣服「黑衣內緣」紅色之絹「使」供膳獻「茶自」是爲「流風」粗如「婦人之粧」公方家亦間寵之僧徒爲之執著甚違「戒法」誠堪「嘆息」凡大人之染齒也元文身黑齒之遺風乎

白粉 凡製「白粉」者入「水銀於釜」燒之故其本家謂「釜本」所々雖有之不及「洛陽之製」故稱「京白粉」其中神岡越中某所「燒爲」洛陽第一「禁裏院中女子專用」之

髮心 凡倭俗婦人頭髮稀少者別束「長髮」是爲「心」或謂「添則結」之或下「之結者」所圍繞而置「頂上」之謂也下者束「髮於」所「垂」其水於背後「是謂」下又等「其身」垂「髮於下」是謂「滑女子髮添號」加文字「加美之下畧」美字「者也凡婦人每物多略」下字「以何文字」呼之洛西常盤里婦人戴「布囊於頭上」徘徊市中「問」落有否「若有」蓄「藏脫落之髮」者「則買

之清水洗淨數遍而後大小長短擇之聚之隨婦人之所求而造「髮添」近世男子亦冶容而少「髮者聚」他人之落髮「相加自己之頭髮」今俗所「稱野郎亦少髮者如此又少年著「假髮之長」爲「婦人之粧」而歌舞凡造「假髮」家謂「髮屋」凡每町有「髮結床」諸人來令「結」之又巡「市中」取「錢剃」月額「是謂」錢剃「假髻」凡髻丈夫之證也故男子爲「俳優」無「髻者著」假髻「假髻俗謂」作髻

髮捻 今本結元謂「髮捻」中華所謂「鬘」也倭俗杉原紙或奉書紙又長永紙幅「寸許直切」之長「二三丈捻」之是謂「捻」髮捻而後浸「水或米泔」而取「出之」左右牽「張之」以「布巾」緊急拭之是謂「凌」而日乾短長隨「其所欲而截」之束「髮而結」之

假面 凡舞樂并猿樂依「其事」掛「數品」之假面於面顏而舞造「其面」謂「打」面凡面有「十作」倭俗巧手造之物總稱「作其於」作「舞面」也古今內十人有「得其名」者近世井關近江爲「巧手」舞樂面自「中華」來者多

鞠并履 所々製「造之」其內町口竹屋某所「造爲」良蹴鞠時所「著」兩足之履亦然也於「鞠是謂」括充「氣於

革裏而囊括之謂也又一種有手鞠其大如橙自始以綿絲纏環之婦人女子於家園或板床上以手擊之是謂衝手鞠其堪之者以千算之碁盤二條通人家碁盤將碁盤共以樅木造之雙陸盤以櫻木或黑柿製之圍碁之所用黑白石始自紀伊海濱來其形之大小自然有適其用者今絕故多磨白貝黑石而作之倭俗爲碁雙陸之戲謂打凡能碁者其會長稱碁所代々仕公方家受祿

將碁盤於二條東或京極造之以樅木製之馬亦然也其所用之簡是稱馬大凡樗蒲之賽摠稱馬者也至其文字則擇堪筆法之人而使記馬名近世所用之馬多有水無瀬家の筆跡始水無瀬家兼成卿無男子養高倉藤大納言永家卿子號親具朝臣子時兼成產實子成長後號氏成於是親具辭家督剃髮號一齋頗有能書之名豐臣秀次公使一齋書將碁馬名是水無瀬家書馬名之始也凡將碁有小將碁中將碁大將碁大大將碁摩訶大將碁之品堪其事者有家領猶稱碁所倭俗爲將碁之戲謂指以指點馬之謂也

貝倭俗婦人合貝爲遊戲其法三百六十之貝左右分圍並床上空其中央貝一隻內右貝稱地而並床上左貝稱出每一箇而出置中央之隙地各圍坐視之則出貝與地貝其紋采有合者則取出貝合地貝其所合之貝多者爲勝少者爲負其貝大蛤蜊也始出自伊勢桑名海濱今大者絕故多用朝鮮貝也桑名貝其形色麗而有溫潤朝鮮貝形色共疵惡而不及之畫草子屋并張子屋多製貝并桶而賣之凡盛貝器其形似桶故稱貝桶

青貝螺鈿之所用二條河原町人家磨之賣漆匠家阿蘭陀不滅貝並琉球貝是螺鈿之上品也古代器物木地螺鈿悉用斯貝今多磨石決明千里光貝而用之古器多木質而不漆之直施螺鈿是謂木地螺鈿高倉院時既有此製其始末知始于何時鈴蟲籠下賀茂社司婦人造養松虫鈴虫之籠其式纖細列竹爲籠內安一小筒盛土敷苔草露草少許倭俗所謂露草則鴨跖草也而以紫白絲作藤花形自籠上垂下其體堪供觀到秋入蟲揭檐下或掛簾眉畫見之悅目夜聽之娛耳藥玉并燈籠小川人家正月兒女所用球杖羽子并板

上已所用板橫端午所用木刀或謂_レ菖蒲刀_レ以_レ其狀之相似_レ准_レ節物_レ而稱_レ之兒輩橫_レ腰間_レ端午石戰戲後多以_レ斯刀_レ相戰是謂_レ菖蒲切_レ菖蒲與_レ勝負_レ倭語相近故寓_レ一戰勝負之義_レ者乎本朝所謂印地朝鮮人稱_レ石戰戲_レ又木長刀木甲冑山伏之頭巾袈裟并藥玉等物賣_レ之以_レ彩絲_レ作_レ花枝_レ貼_レ白紙上_レ掛_レ之於女兒背後_レ是謂_レ藥玉_レ古以_レ藥丸_レ交_レ其間_レ避_レ穢氣_レ則中華所_レ謂長命縷之類也倭俗中元夜家家張_レ燈至_レ二十四日夜_レ故豫造_レ種々之燈籠_レ也又兒女踊躍所_レ用之具太鼓梅花絞室之木刀假髯團扇編笠金銀箔紋所倭俗以_レ金銀之箔紙_レ剪_レ裁雜品形草木鳥獸_レ隨_レ其所_レ好求_レ之貼_レ衣上_レ是謂_レ紋所_レ女兒踊躍衣貼_レ之又以_レ三色絲_レ縫_レ製諸品形_レ是謂_レ縫紋所_レ一切是等之具悉賣_レ之八月朔日之行器并波伊波伊重陽之行器等物又雜遊具無_レ不_レ有_レ之

(補遺)長命縷 關白道長公寬弘二年記曰五月五日壬子京師絲所持_レ來藥玉_レ云々藥玉則長命縷也絲所則今所謂組所或組屋是也

張子 凡以_レ木造_レ人形及鳥獸之形狀并諸品之模範_レ然後貼_レ稀糊於白紙_レ而張_レ其外面_レ數遍日乾後縱或

橫中_レ分之_レ以_レ小刀_レ截_レ所_レ張之中間_レ二別_レ之爾後再合_レ之爲_レ函蓋_レ是謂_レ張子_レ子助語之辭也又至_レ人形鳥獸_レ則中間_レ截_レ之出_レ所_レ在_レ內之模範_レ別以_レ紙補_レ直合縫之間_レ而爲_レ全形_レ而施_レ彩色於其上_レ分_レ面顏衣服之彩_レ是稱_レ張脫細工_レ貼_レ紙後脫_レ出模範_レ之義也中華人張脫謂_レ脫砂_レ始以_レ泥砂_レ塑_レ造其範模_レ而貼_レ紙於外面_レ之謂也今多以_レ木爲_レ模範_レ凡爲_レ諸品雜細之巧_レ總稱_レ細工_レ凡以_レ紙造_レ之物比_レ木板製造者_レ則甚輕易故旅裝之具文匣并挑燈之類悉張_レ脫之_レ又以_レ板造_レ小篋宮_レ諸色絹裁_レ之貼_レ外面_レ又以_レ絹造_レ貼_レ鳥獸花草之形_レ是謂_レ御所文匣_レ凡本朝高貴所_レ住稱_レ御所_レ萬事盡風流也故每_レ物美麗稱_レ御所樣_レ或謂_レ內裏風_レ中華所_レ謂都樣并宮樣也故斯細工亦謂_レ御所文匣_レ也

作花 京師一條鳥九西人家造_レ之所_レ著_レ長絹_レ之菊花等在此家_レ於_レ今處處_レ製_レ諸品_レ與_レ真花_レ無_レ差別_レ

衣裳人形 木偶人作_レ男女老少形_レ施_レ衣裳_レ其小者謂_レ芥子人形_レ芥子比_レ至小者_レ其外作_レ雜品玩具_レ今所々有_レ之其內京極東四條多造_レ之龜惡者在_レ五條

橋西

水引 元城殿之所製爲始近世兼康町八木某多造之如今所々製之其式杉原紙或奉書紙隨紙之長短一幅一寸許直切之以手指捻之其長一尺餘而暫浸米泔水取起之以白巾絞引之故謂水引一日乾而後半塗臘脂是謂赤白水引半白所爲本半赤所爲末以是括短冊結玄猪其外括諸物至近世則金箔臘脂鬱金汁藍汁段々彩之而以箔細紙每十條束之是謂一把至百把或三百把爲婦人之贊其剛堪結束諸物又烏子紙一枚段々彩各色細切不及捻而用之是謂平水引是又近世之製也

書冊 倭俗書冊總謂物本以倭字撰之謂草子賣之謂物家本屋多在京極

繪草子 在烏丸一條北倭俗以國字假名作之書謂草子言草稿之謂也其間加繪稱繪草子或謂繪入倭俗以紙作小偶人夫婦之形是謂雛壹對其外大人小兒之形各造之女子並置座上供酒食爲人間而玩之是謂雛遊又稱雛事女子平生雖玩雛三月三日專爲此戲凡雛諸鳥之子

也誤稱之者乎此外色紙短冊等之物多於此家造之

淨瑠璃本 二條鶴屋并九兵衛店淨瑠璃本類無不有之倭俗書冊專稱本

風車 所々製之然祇園町爲本春初多造之以片細竹造小花輪貼青紅之紙片摸花葩之狀或五箇或十箇貼竹輪或二或三插一莖竹頭觸風則花輪悉轉舞是稱風車建置臺臺而賣之是兒女之玩具而其令和風之體自有春初發生之氣又兒童造紙爲著絲乘風而操之使飛揚空中至夏節則不揚是又足見春陽上升之氣其高舉者衝天動失其形納之時徐々而受風牽下之若緊急牽之則絲絕失紙爲所之或以紙造鳥賊之形故或謂鳥賊旗

韓紙 倭俗是謂加羅加美今處々製之然東洞院二條南岩佐氏所製尤爲宜張襖障子專用之賀留多六條坊門製之其良者稱三池以金銀箔飾之者謂箔賀留多是於繪草子屋造之元阿蘭陀人玩之長崎港土人倣之爲戲凡賀留多有四種紋一種各十二枚通計四十八枚也一種紋謂伊須

蠻國稱劍曰伊須波多。此紋形似劍自一數至九第十畫法師之形是表僧形者也第十一畫騎馬人是表士者也第十二畫踞床之人是表庶人者也一種稱波宇蠻國稱青色曰波宇此紋自一數至九數第十第十一第十二同前一種紋謂古津不蠻國酒盃謂古津不是表酒盃者也一種紋謂於宇留蠻國稱玉謂於宇留是表玉者也其玩之法其始三人或五人圍坐其內一人左手取持賀留多以裏面上下混雜不見其畫配分而置各々之前是謂切賀留多其爲戲謂打賀留多然後人人所得之札數一二三次第一早拂盡所持之札是爲勝是謂讀倭俗每事算之謂讀又互所得之札合其紋之同者其紋無相同者爲負是謂合言合其紋之義也或又謂加宇又謂比伊幾或又謂宇牟須牟加留多其法有若干畢竟博奕之戲也又賀留多札百枚半五十札書古歌一首之上句圍並床上中央殘隙地是謂地又半五十枚書上歌之下句是謂出前所謂中央隙地出置所應手之下句一枚圍座人各視之所置在床之上句與今所出置之下句有相合者則取之然後其所

合取之札算多者爲勝算少者爲負是稱歌賀留多。元出自貝合之戲者也。細物倭俗雜細具總謂細物多在京極三條南北并四條京極東革或絹製小袋倭俗謂巾著又謂下物自中華來肥前國長崎港人是謂荷包或稱銀包其內盛貯救急之丸散藥以絲緒囊括其口而丸石并角珠穿小穴縮束其緒是稱緒縮又謂緒止此石珠御幸町玉人攻之又小片香合塗之以金銀粉畫外面或三重或五重疊之左右耳貫通細穴著緒與巾著插腰間又以玉石縮緒是謂印籠每重盛丹藥印籠元盛印石并印色之器而始以竹籃造之其後用堆朱堆鳥剔金累々之漆器而第一重盛印石第二藏印肉自玆後大小重疊隨其所好而製造之盛菓實供賓客其小者蓄密丸丹劑然依舊總謂印籠凡巾著緒與印籠緒聚其端末於一所以銅象牙輪等物貫之以是插帶垂腰間是謂根著著其本根之義也又別以革或絹縫片囊其內盛丸散藥或藏耳爬石筆等物與鼻紙合而懷之是謂鼻紙袋古疊紙之遺風乎或鼻紙亦有納斯袋內者倭

俗小片紙一帖堅折而懷之或拭鼻涕又拭不淨始稱懷紙今專謂鼻紙凡目貫髮搔小刀柄香合匕匙櫛篋銅鏡硯筆墨瑣細之物無不有故稱細物屋一說細物元高麗物也

葺遣戸并障子 倭俗良賤家宅庭際座上以板壁隔中間是謂葺又開闔戸謂遣戸言排遣之義也又縱橫以細木爲骨貼白紙於外面以二枚建六尺三寸一間之際左右便開闔遮日又防風是謂障子言障風日之義也又號明障子隔紙一片而因引明也內外兩面貼紙是謂太鼓張是亦雖引明不如此一方張之者又兩面以厚紙張之謂襖障子未張紙之前號障子骨又一間厚板四方以矮板爲緣一方隅穿小穴常以圓木塞其穴其內畜水洗淨諸物然後祓圓木之杭則濁水落自其穴是謂走令洗物水自床底之穴而走流之謂也其大小品隨其家之豐險又造井欄倭俗井欄謂井筒或作盛水櫃倭俗謂水船又民家所置之長櫃唐櫃戸棚等物悉西堀河三條邊造之長櫃大者其底兩所施小車輪著繩而牽之出入有便是謂車長持長持元謬長櫃者乎近世小

袖櫃着棚半長持及真那板等物亦造之

工匠 倭俗造家屋者總稱大工其長謂棟梁自十二三歲從大工學其術者稱番匠番匠元侍大家勤其役之謂也今誤稱之其所作工之處謂木屋凡從禁裏經營之事者謂木子總官近世勤公方家之事者謂中井氏元是大和國法隆寺邊之人也於今禁裏院中之造營亦中井氏主之所屬其下之大工矢倉氏并池上氏是自古爲公方家之棟梁於今有家領然近世中井氏得公方家之眷遇自茲皆屬其下一凡本朝於伽藍也盡其巧者多謂飛驒工匠之所作也然是非一人而言之者也飛驒國并大和國工匠多出大抵爲巧手故謂飛驒工人所作之義也

板匠 凡桐杉并紫檀黑檀杞榔樹樺梨桑板黑柳等諸品木造宮并棚或椅子机案卓子之類凡倭俗以板造器總謂指造之家號指物屋所々有之然二條北指物町有巧手

剖劔 倭俗鑲書冊於櫻板是謂板木雕中華所謂剖劔氏也二條河原町并出水通西聚樂邊有刻之家備書之中寫所雕板之字則用楷法正者是

謂板下書備書中人稀也

鋸 所々鍛工打之其內專造之家多號天王寺屋始攝州天王寺門前鍛冶造之俟俗山人木客謂杣杣人自新秋至初冬入山林伐取材木其所用之大鋸伏見中屋之所鍛爲好人求之

(補遺) 今以大鋸挽割材木者稱大鋸挽倭語大鋸與於我音相近故謂於我者乎

鋸 倭工以片木板爲臺中間橫鑿細穴其間插片刀其及少許一齊出板外以是臺削木則平而麗是謂加牟奈是近世之所製也始造短鎗以木爲柄以之削木故板面有高低而不平夷是謂鍵加牟奈大和大路稻荷之所爲堪用也

鐵 所々製之然是亦稻荷社前人家得其巧鐵槌 其大者謂玄翁古武藏國那須野有怪石時々作妖怪且鳥獸觸斯石則立斃依之號殺生石洞家僧玄翁和尚誦咒以大鐵槌碎其石然後怪止世稱石破玄翁自茲石工謂大鐵槌直曰玄翁其小者謂鐵槌工匠專用之所鍛工造之

鑿 小鎗五寸許以木爲柄穿穴於木時建鑿於其所以木槌敲之隨手則穴成其槌謂佐伊都知

其鑿及徑有三分者謂三分鑿五分者謂五分鑿廣狹隨其用而有之稻荷社前打之

手斧 工匠用之徑五寸許及以曲木二尺餘爲柄脚踏材木以兩手持手斧大削木是謂手斧又稱斬大和大路稻荷邊鍛冶屋造之

鑄錫 倭俗是謂賀牟義并也須利工匠以是磨鋸之所禿則及屹立而有利伐木所々鍛工造之

規矩準繩 工匠專用之各有製造之家圓座 以蘭莖并芻藥造之爲座禁裏院中及神社至地下人總用之元出自讚岐國依之或稱讚岐藥座又稱讚岐圓座

繪席 倭俗彩席謂繪席依有雜品之文彩也元來自長崎港今四條通并三條殿大和橋北編之毛氈室町賣之又有御座席備後浮世御座丹波御座近江御座及琉球筵

佛工 倭俗造佛像者謂佛師曾光孝天皇皇子是忠親王御子曰英我王英我王之子日向守康行其子康高凡僧而爲清水寺別當是本朝佛師之祖也其子兄康助京師佛工之始而大佛師左京其末裔也世住今七條金光寺地故稱七條大佛師豐臣秀吉公時

移金光寺於今所。左京令住。四條鳥丸。康助弟定朝佛師之祖而叙法橋。是佛工綱位之始也。自定朝第六代裔運慶其子湛慶特得巧手之名。父子像在六波羅密寺。近世佛工在所々。皆是康助定朝之餘流也。又有大宮流也。

繪所 狩野家并土佐流及俵屋野々村氏又友松末裔海北等之外專畫佛像。者稱繪所。其西長謂別當。古大寺大社各有繪所。所住京師者多是重氏也。今三條南室町有繪所。號丁琢。代々有家領。中古有畫工土倉者。仕足利家是亦繪所而形佛像。其裔今仕西本願寺。古造佛像者刻木造其全軀而已也。彩色令能畫人。施之故佛像嚴然。

佛具 凡所供佛之花瓶香爐銅燈臺倭俗是稱三具足。三物具足之謂也。或鐘鏡鉦磬鈴獨鈷三鈷五鈷花皿金剛盤之類。總謂佛具。所々製之。然七條與州并羽州兩家之所鑄爲良。

經卷 凡摺經卷。或製標袂。并書畫之類。橫卷之者俗謂卷物。悉製之。是稱經師屋。其內曾長內匠一人謂大經師。每年受南都幸德井賀茂氏所考之新曆。鏤梓而行于世。今專謂大經師曆。其餘或稱。

御經藏之經師。又謂承仕經師。傳言經師屋多田滿仲子美女御前之末裔也。昔時富榮超百工。凡佛經之外本朝所玩之歌書紙色紙短冊并表帙等一切以紙製之者。悉此家事也。故多有帶綸旨院宣者。爾後日日衰或侍禁闕。而有兼伶人者。或剃髮入寺門。而有勤承仕者。又製散華之葩。凡葩有盛花片花之異。其爲製也。元表蓮華散亂之體。故古製之一片之內。青上紫。下以赤黃絲相交覆其緣。或有加金銀箔者。如今失舊製。金碧上畫婦人女子之形。者間有之大失其真者。也。古各在四條南鳥丸。今在所々。

三衣 三條衣棚專裁縫之。如法衣割截一切僧家之衣服坐具等之物。并天蓋幃幡之類。悉製之。又山伏所著頭巾袈裟鳥丸六角堂南袈裟屋岡田但馬製之。

念珠 在京極通以雜品木造之。或菩提樹實或水精琥珀之類。又婦人之所用念珠。百八箇內半用黑檀顆半用水精顆。是謂半裝束數珠。又山伏之所用其顆小。圓而有圭角。是謂最多角數珠。各隨所好而有之。是謂數珠屋。近世黃蘗山萬福寺所用之十八遍念珠。世人多用之。與正菩薩宇治橋供養日製水精。

念珠百連_レ施_二衆僧_一今纔殘在_二所々_一其水精非_二今世之所_レ有也

鐘木_{シム} 在_二東洞院_一三條北_一造_レ之者稱_二因果某_一橫_二圓木

五寸許者_一以_レ木爲_レ柄以_二其所_レ橫之端末_一擊_レ鉦是

謂_二鐘木_一

葬具并石塔 凡棺槨幡蓋紗籠一切葬送之具誓願寺門

前通造_レ之木牌等亦然石塔自_二京極_一二條北_一至_二今出

川北_一所々造_レ之

宮殿屋 近世工匠豫造_二大小宮殿并須彌壇持佛堂等_一

而賣_レ之故稱_二宮殿屋_一始在_二大佛殿門前大和大路_一

今京師所々有_レ之

古金棚 凡在_二人家_一久用敗壞之器又無用物或大小恰

好不_レ稱_二主人之心_一者又久用_レ之而後嫌_二厭之_一者或

破鍋破銅燈臺一切銅鐵則搥稱_二舊物_一又謂_二古金_一斯

類物聚賣處是謂_二古金見世棚_一使_二他人_一見_レ之謂也

或稱_レ之謂_二仕舞物棚_一倭俗一切止_二其事_一謂_二仕舞_一

不限_二古器_一至_二材木遣戶障子疊簾_一其舊號_二仕舞物

或墮屋具_{コホチヤ}近世所々構_レ棚賣_二舊本_一是謂_二古本屋_一仕

舞物棚在_二所々_一其中二條南押小路并西堀河一條西

及佛光寺通又六條坊門醒井通專有_レ之或置_二市而賣_一

之凡倭俗每_レ物多聚_二一所_一賣_レ之買者亦聚會是謂_二立_レ市_一故謂_二仕舞物市_一或入_レ夜張_レ燈而賣_レ之是謂_二夜市_一多亂_二真僞_一或欺_二新舊_一不可_レ不_レ戒矣

雍州府志卷八

古蹟門上

夫本朝自_レ古玩_ニ倭歌_ニ風花雪月外或有_下賦_ニ山水_ニ者_上
其所_レ詠_ニ倭歌_ニ是謂_ニ名所_ニ是因_レ歌而顯_レ名者也凡山
城國中名所多載_ニ山川門_ニ其外有_ニ古蹟之可_レ記者_ニ則
列_ニ于茲_ニ

愛宕郡

洛中之舊蹟從_ニ古記之所_ニ有而載_ニ于茲_ニ然多不
詳_ニ其處_ニ今見_ニ其跡之所_ニ存者_ニ粗列_ニ于下_ニ

世尊寺 在_ニ一條北大宮西舊小路東_ニ貞純親王家而藤

伊尹公亦住_レ之

桃園 世尊寺南保光卿家行成卿傳_レ之

一條院 一條南大宮東二町謙德公家又爲_ニ法住寺大

臣爲光公之家

東北院 一條南京極東上東門院御所西北院一條南京

極西也

井戶殿 或稱_ニ縣井戶_ニ一條北東洞院西隅

染殿 正親町北京極西二町忠仁公家或言舊染殿清和
院同所也

清和院 正親町南京極西清和天皇母后之宮也

宇多院 在_ニ西京土御門北木辻東_ニ

北邊亭 土御門北西洞院西左大臣源信公家

棗院 土御門南東洞院二町左大臣家

高倉院 土御門南高倉西一町昭宣公家又入道大相國

家又左大臣仲平公家云

鷹司殿 同萬里小路東從一位倫子家或富小路

土御門內裏 在_ニ土御門南鳥丸西_ニ離宮在_ニ同室町東_ニ

京極殿 土御門南京極西南北二町其南町入道道長家

或謂入道家上東門院是也 後一條院 後朱雀院

後冷泉院三代帝於_ニ此處_ニ誕生匡衡宅皇后四人誕生

此家稱_ニ紀伊島_ニ

枇杷殿 左大臣仲平公宅昭宣公家近衛南室町東或鷹

司南東洞院西一町云

小一條 近衛南洞院西藤師尹公家一云大山吹殿 清

和天皇誕生處貞信公家

華山院 近衛南東洞院東一町舊名東一條云式部卿貞

保親王家貞信公傳_ニ領之_ニ住_ニ居小一條之間_ニ號_ニ東

家 冷泉院時爲東宮坊花山院傳領之

菅原院 勘解由小路南烏丸西一町菅贈太政大臣御所

或云參議是善家也當時號歡喜光寺北野祭日神氏

來此處取枇杷供神云

富家殿 民部卿忠文家也

貫之宅 在京極中御門北按今九條殿之亭地也

櫻町 在中御門北萬里小路東南斯處多櫻故號云

一說是亦歌仙貫之家也

石井 同東洞院東源重信公家

內記井 中御門南東洞院東惡所云

菅是善宅 在烏丸中御門北又綾小路西菅太神社是

亦宅地也

滋野井 中御門北西洞院西滋野貞主卿家

本院 中御門北堀河東一町右大臣時平公依訴而勅

勘之時籠居此家

高陽門 同南在堀川東南二町西北一町後有賀陽

親王家

常盤井 春日南京極太政大臣實氏公之家也

近院 春日北烏丸東號松殿左大臣能有公家今松殿

押四分一

小松殿 大炊御門北町東 光孝天皇誕生處云

冷泉院 大炊御門南堀川西嵯峨天皇御宇此所爲累

代院舊名冷然院依火災爲泉

小野宮 大炊御門南烏丸西惟喬親王家定賴公傳領

之又傳清慎公

伊勢宅 在三條東洞院然今不詳其處清輔袋草

子載能因乘兼房車後時於茲俄下車徒步過其

前兼房驚而問之曰歌道達人伊勢之舊跡也何乘

車而徒過之哉遂限前園松梢之不見處於茲又

乘之云一說在高辻室町西伊勢後爲枇杷左大臣

妾書詠歌於禰須茂知之木葉而贈左大臣自茲

斯處謂禰須茂知町

二條院 二條北堀川東天曆母公領所也

町尻殿 二條北町東關白道兼公家

陽成院 大炊御門南西洞院西則陽成院誕生處也

法興院 二條北京極東舊號東二條二條關白傳領

小二條 俊賢卿家師尹公家御堂殿以下大二條殿傳領

二條南東洞院東南北二町或號山吹殿二條后宅地

也

二條殿 二條南東洞院東入道大相國道長公造之二

條關白傳領

堀川殿 二條南堀河東南北一町昭宣公家忠義公傳_二領之一

閑院 二條南西洞院西一町冬嗣大臣家金岡壘_二水石_一公季公傳領

神祇館 古在_二今所司廳之西屋敷地_一近世移_二吉田神

樂岡_一今齋場所是也倭俗宅地曰_二屋敷_一

神泉苑 在_二二條南大宮西_一古所謂乾臨閣之跡而主

上遊覽之地也弘法大師於_レ茲祈_レ雨是則世人之所_二

遍識_一也爾後爲_レ寺今池冰殘中島有_二辨財天宮并寶

塔_一東寺寶菩提院知_二寺事_一

東三條 四條院誕生處或重明親王家云々二條南南北

二町忠仁公家貞信公大入道傳_二領之_一

鴨院 二條南室町西一町南北二町或作_二鴨井_一堀河院

誕生處一說古有_レ井鴨常栖云

押小路殿 或號_二一條殿_一押小路南室町東普光園殿下

住_レ之又號_二二條殿_一

竹三條 押小路南洞院東或說二條院內也

蠅松殿 姉小路北堀河東橘逸勢家居也

高松殿 姉小路北西洞院東高明親王家

大西殿 三條坊門北萬里小路大臣定方公家

中西殿 同富小路西同人家

山井殿 三條坊門北京極西惡所云三位永賴卿家信

家卿通家卿傳_レ之

御子左 三條坊門南大宮東兼明親王家長家卿亦住

_レ之

御倉町 三條北烏丸東今七條院御所也

西三條 三條北朱雀藤原良相大臣舊居號_二百花亭_一是

屬_二西京_一

三條院 三條堀河廉義公宅

三條內裏 舊濟家卿宅埋_二千金於地中_一云

梅園 三條南京極東朝綱卿家也

鬼殿 三條南西洞院東有_二佐卿宅_一惡所云

南院 四條北壬生西是忠親王宅

西院 四條北西大宮東橘太后家

公任宅 在_二西洞院四條南_一倭漢朗詠集之撰者四條大

納言公任卿之所_レ住也一說勸修寺家有_レ稱_二爲隆_一之

人是亦稱_二四條大納言_一西洞院宅則斯人之所_レ住而

非_二公任_一未_レ知_二孰是_一也爲隆卿富有之人而深信_二佛

法_一是永昌記之作者也

四條宮 四條南西洞院東廉義公家又大納言公任家

紅梅殿 五條坊門北北野御子家或言天神御所

天神御所 高辻北西洞院東

東五條 五條后宮

大江公資宅 古在_三五條東洞院_一今不_レ詳_三其處_一能因

法師每_レ春欲_レ見_三洛陽花_一自_三古曾部_一來_三京師_一公資

宅爲_三止宿_一云

北院 楊梅北鳥丸西又號_三小六條_一小六條院領所也

鈎殿院 六條北東洞院東號_三六條院_一光孝天皇御所

而被_レ附_三屬淳子內親王_一云

中院 六條北鳥丸西淳和院御領給_三信家卿_一

杜宮一町 六條北西洞院西

中六條院 六條北東洞院西寬平御所

六條內裏 六條北東洞院東高倉二町萬壽寺地是也

南院 六條北鳥丸西小一條院御領也

六條院 六條南室町東號_三天橋立_一有_三連理樹_一祭主輔

觀家也

千種殿 六條坊門南西洞院東中務卿具平親王家保昌

傳領

池亭 六條坊門西町尻東隅保衡卿宅也

河原院 六條坊門南萬里小路東源融大臣家後 寬平

法皇御所舊在_三六條京極西_一號_三東六條院_一

六宮 八條北朱雀西今遍照心院也

亭子院 七條坊門北西洞院西二町 寬平法皇御所元

東七條后亭也

弘誓院 八條南東洞院東大納言教家卿宅

九條殿 九條坊門南町尻東右大臣師輔公家

花園 九條北朱雀西二町

城興寺 九條北鳥丸西太政大臣信長公家

(自_レ是以下今新考_レ之)

四際封疆 豐臣秀吉公當_レ權日平安城之四方高築_三土

手_一植_三修竹_一爲_三四至之封境_一今現存倭俗隄防曰_三土

手_一近世民戶日增板倉內瞻正重矩爲_三所司_一時以_三東

方封疆既爲_三民家後_一自_レ茲以東限_三賀茂川西岸_一新

築_三石壁_一爲_三隄防_一

白川馳道 織田信長公在_三近江安土城_一自_三京師_一赴_三

安土_一人多歷_三此道_一至_三上栗田白川_一經_三山中越_一自_三

東坂本_一乘_レ船至_三安土_一今自_三今出川口_一至_三白川村_一

間處々挿_レ道並木松殘倭俗行路曰_三海道_一元出_レ自_三

東海道南海道之稱號_一凡海道之左右築_三短堤_一一列

植松爲二路傍限是謂並木相比並之義也

滅苦寺跡 在北白川勝軍山西北麓古斯處置葬場

有寺號滅苦寺今寺絕葬場殘土人誤滅苦寺稱

目扶滅苦寺與目扶因倭語相近也猶誤苦集

滅道而稱俱知奈波辻子之類也且因目扶之誤

而遂惡七兵衛景清爲六波羅稱被扶兩目之

處是謬傳之甚者也

勝軍山城址 在勝軍山上斯山在白川北山上有

勝軍地藏堂故號勝軍山曾三好筑前守長慶與佐

々木承禎對捍時承禎構城於斯處洛中在目下

眞要害地也

北白川城址 在北白川山上享祿三年三月晦日前將

軍義晴公及義輝公入北白川城斯時近衛准后植家

公聖護院門主大覺寺門主日野大納言晴光卿鳥丸大

納言光康卿高倉中納言永家卿日野中納言資行卿從

二位賀茂在富等從之行

萬松院城址 在慈照寺大嵩中尾義晴公斯處構城

欲移之然不終其事遂於東坂本穴太而薨今

其跡猶存

東明寺 在神樂岡北上粟田之南左大臣在衛公別業

之所_レ有也於茲有_二尙齒會_一今其跡存

齋場 曾卜部兼俱造立大元宮八角壇於如意嶽山上

爾後移吉田山今處

鹿谷 在東山如意嶽麓古平相國清盛公之別莊在

斯處云

談合谷 在鹿谷法勝寺執行俊寬僧都丹波少將成經

平判官泰賴等各聚斯處廻滅平家之謀其事發

覺三人同謫鬼界島倭俗相共謀事謂談合

大塔屋敷 在吉田神樂岡之東麓舊眞如堂之西南相

傳始眞如堂中多寶塔之所_レ在也自茲出白川之徑

路稱大塔道一說古大塔宮尊雲法親王之別院在

此處云是謬傳乎

龍澤池 在神樂岡春日社南溪傳言比南都猿澤池

而後鑿開之者也

日降坂 在吉田社西傳言日輪降臨之地也按臘月除

夜正月十九日夜清秋時參詣人執松明依之號火

揮坂乎

明星水 在吉田社前橋之東溪

風車軒 在吉田山神光院之西隱士風車軒牧野任他

之所_レ棲也

法勝寺跡 在岡崎村今堀地則所蓋屋之檜皮并金紋瓦等出自地中

塔壇 在岡崎村西古法勝寺九層塔之所_レ有也其外諸堂今爲田疇之名

五大尊 在塔壇西北古法勝寺中五大尊堂之所_レ在也今爲田疇民間直以五大尊呼之

元應寺跡 在岡崎村西今爲田疇土人稱元茂元應之應與元茂之茂倭音相近故誤之者乎

新羅杜 在黑谷道北聖護院杜東寬治年中聖護院祖增譽僧正勸請新羅明神於斯處今社絕爲杜名

泉殿 新羅明神杜北田有泉殿之號未_レ知始爲何時泉殿之跡也

佛佛 在泉殿北古佛寺之所_レ有乎今爲田民間以佛々呼之

聖護院杜 隔黑谷道在南北兩處南有熊野權現社北有聖護院并民家數百家斯邊則聖護院門主

之院領也
廣田明神跡 在聖護院南杜之西南今社絕爲田疇

之號也
西天王旅所 古吉田天王旅所在聖護院杜東今絕然

六月十五日祭禮日以杉葉假構神與屋暫卸神與而獻供物土人斯祭稱角豆祭也

彌勒川 在吉田村之西始斯河邊有石彌勒堂近世斯像埋土中爾後有_レ人再興一宇堂安石地藏

然依舊名斯水出自斯邊井出也倭俗所引田間水稱井出

月輪川 在彌勒川之西土人相傳月輪相國兼實公甚歸依法然上人每詣黑谷則於斯河邊必下車

徒行是依崇上人也是故號月輪川云今按法然上人傳上人始出自叡山西谷黑谷先移西山廣

谷爾後住東山大谷寺今金戒光明寺雖稱新黑谷不聞法然之住斯寺然則月輪川之說不足

信之一說聖護院之門徒古有月輪院住斯河邊云因斯院名而爲川之號乎又因川而號院者乎未_レ知其實

近衛河原 在月輪川之西清荒神社東古德大寺實定卿姉前后宮在斯邊稱大宮殿爾後爲尼寺移

三條北東洞院則今曇華尼院而號通玄寺者也

崇德田 在近衛河原東北古大炊通東建崇德天皇社祭之云按大炊通今樁木町乎此田稱崇德昔

社之所_レ有乎惜哉

荒神河原 清荒神社東川原惣謂_二荒神河原_一 每年五月五日洛下兒輩聚_二斯河邊_一 左右相別拋_二礮石_一 互相戰倭俗是謂_二印地_一 或又讎字訓_二伊牟地_一 東國通鑑所謂石戰戲是也 荒神川原外今出川口聚樂郊外五條大佛殿前亦各群集及_二晚景_一 則大人亦出帶_二弓矢_一 拔_二刀劍_一 而相戰遂至_レ殺_レ人於_二茲近世一切禁_レ之辨慶芝 在_二二條河原東南_一 相傳武藏坊辨慶從_二義經_一 在_レ京日構_二寓居於斯處_一 土佐房昌俊襲_二義經堀河館_一 時亦宿_二茲處_一 則馳_レ馬而行終捕_二昌俊_一 此地于_レ今不_二耕種_一 倭俗原野謂_レ芝

鶴杜 在_二東三條鳥居小路西_一 傳言 近衛院時怪鳥每夜出_レ自_二斯杜_一 經_二押小路_一 翔_二禁闕上_一 於_レ茲主上必弗豫源賴政射_レ之 今押小路鳥丸以西塞_レ路而不_レ通斯時禁闕在_二押小路西_一 故塞_二鶴鳥飛翔道_一 之微意乎此怪鳥音似_二鶴音_一 故直稱_レ鶴 今民間誤謂_二榆木杜_一 者依_二鶴榆倭語相近_一 也

南禪寺三門 禪刹五山之上也 斯寺三門中絕慶長年中攝州大坂陣後藤堂高虎暫寓_二聽松院_一 時歎_レ之 再_二與山門_一 高虎大坂之役有_二大功_一 相從者數人戰死於_レ茲

爲_二自他之結緣_一 建_二各位之牌於閣上_一 而追_二薦之_一

同寺十境 所謂獨秀峯羊角峯歸雲洞攀龍池曇華堂鎮春亭蘿月菴綾戶廟愈好亭蒼荀林是也

聽松院 在_二南禪寺中_一 始號_二瑞松院_一 清拙禪師之塔所也 細川滿元剃髮號_二岩栖院_一 道悅_一 或稱_二聽松軒_一 曾歸_二依瑞松院_一 而再_二興斯院_一 改號_二聽松院_一 普廣相公暫栖_二斯院_一 萬松院義晴公亦久在_レ茲於_レ今見有_二古僧堂屋敷處四壁跡_一 義晴公爲_二要害_一 所_レ設也 又松井佐渡守者光源院義輝公之寵童而爲_二斯院之檀越_一 義輝公有_レ事後建_二斯院_一 薦_二義輝公_一 松井後仕_二細川家_一 其裔于_レ今在_二彼家_一 爾後信長公暫被_レ寓_二斯院_一 蒲生氏卿藤堂高虎等亦寓居高虎所_レ設之書院到_レ今存慈聖院 在_二南禪寺中_一 應仁年中細川山名爭亂日南禪寺爲_二焦土_一 矣 斯院幸免_二火災_一 于_レ時鳥山率_二兵士_一 寓_二居斯寺_一 凡士卒施_二弦於弓_一 時靠_二彌於柱面_一 矯_二弓幹_一 以_レ弦張_二弓之本末_一 是謂_レ張_二弓_一 斯院方丈柱處々靠_二弓末_一 之癭痕到_レ今存

大草河 自_二駒瀑_一 流出歷_二南禪寺楞伽栖雲後_一 則經_二東三條河原_一 入_二鴨河_一 南禪寺中出_レ自_二少林慈聖之間_一 曰_二小草河_一

小宮_一入_二鍼并絲革_一補_二履破_一此天部悲田寺共號_二穢多_一元剝_二取牛馬皮_一故觸_二穢多_一因稱_二穢多_一或號_二皮太_一太字倭俗助語之詞也其家富者多然世人忌_レ之不_レ共_二家居_一不_レ同_二座席_一兩村共建_二堂安_一彌陀像_一修_二念佛_一又以_二蟬丸_一爲_二開祖_一每年八月二十八日揭_二畫像_一修_レ忌相傳蟬丸在_二逢坂關_一餉_二往來之人_一以_レ此爲_二乞兒之祖_一者真可_レ笑而堪_レ痛凡所_レ在_二洛内外_一之紺屋以_二藍汁_一染_二衣服_一者號_二青屋_一又稱_二藍屋_一如_レ今紺屋爲_二染家之通稱_一其中青屋元穢多之種類也穢多并青屋每_レ有_二刑戮_一此徒必出_二其場_一預_二斯事_一或礫_レ尸或梟_レ首凡穢多之始吉祥院南小島爲_レ本此處有_二稱_一乃保里_一者是有_レ罪人曝_二道路_一時紙旗記_二罪狀_一書_二姓名_一先以_レ竿捧_二持此旗_一以唱_二道路_一者也斯徒每日輪次掃_二除_一一條城外之塵埃_一是出_レ自_二棄_一不_レ淨_一者也禁裏院中掃_二棄塵埃_一者謂_レ覆是丹波山國人而京師與_二棄_一不_レ淨_一之徒_一其類同者乎大嘗會跡 在下_二一條與_二三條_一之間鴨川東面今頂妙寺邊傳言古大嘗會終後公卿雲客聚_二斯處_一祝_二之被_一催_二遊宴_一之處也今專稱_二大嘗會跡_一三條橋 在_二三條東賀茂川上_一斯橋同五條橋每_二朽腐_一

自_二公方家_一令_レ改_二造之_一俗稱_二公儀橋_一倭俗公事謂_二公儀_一凡自_二東北_一入_二京師_一者必經_二斯橋_一是謂_二三條大橋_一在_二斯西_一者謂_二小橋_一伏見往來之舡船自_二此小橋下_一過

惠比須山 下粟田神明社之所_レ有也傳言傳教大師所

刻惠美須在_二斯山上_一今宮絕其像在_二青蓮院_一斯山或稱_二日山_一故麓謂_二日岡_一一說今所謂日岡始稱_二入

日岡_一云不_レ知_二何是_一也

松坂 在下_二粟田與_二日岡_一之間或謂_二袖角_一

小鍛冶宗近鐵盤石 在_二知恩院西門内_一斯地東三條而

鍛工宗近打_レ刀處也故號_二三條宗近_一倭俗鑄_レ刀謂

打

瓜生石 在_二鐵盤石之東_一相傳牛頭天王來_二現此石上_一

依_レ之建_二社於今祇園_一始現_二洛東瓜生山_一又現_二斯處_一故此石亦號_二瓜生石_一世謂_二慈鎮和尚坐禪石_一者

謬傳乎瓜生與_二和尚_一倭俗語相同故誤_レ之者乎

坐禪石 在_二同寺方丈池水西_一相傳慈鎮和尚之坐禪石

也

紫雲水 在_二同寺勢至堂之東南隅_一紫雲石則在_二其側_一

眞葛原 在_二同寺山門南_一今鎮守八幡社在_レ焉慈鎮和

尙所_レ詠_レ歌之眞葛原是也台徒說曰叡山橫川有_二眞葛原_一慈鎮和尚所_レ詠_レ歌之眞葛原者其處也未_レ知_二何是_一也

常在光院跡 古在_二眞葛原邊_一此院五山諸老宿德之人交退隱之地也今寺絕然院領在_二相國禪寺_一產之內

(補遺) 常在光院號_二花頂山_一古五山之宿德退休地而住_レ之爲_レ榮知恩院滿譽上人建_二今堂_一時斯邊之寺院遷_二處々_一常在光院亦相國寺承允長老移_二相國寺鹿苑院內_一寺產百石餘附_二相國寺產之中_一今所_レ在_二知恩院堂之東南_一巨松古所_レ在_二常在光院_一者也

吉水 在_二丸山下_一凡斯邊依_二此水_一惣稱_二吉水_一傳言每_二旱歲_一祈_二斯水_一則必有_二靈應_一也法然上人所_レ住之吉水院今知恩院山上勢至堂之地也然後附_二慈鎮和尚_一故世稱_二吉水和尙_一慈鎮和尚於_二天台宗_一青蓮院第三世也依_二舊例_一青蓮院主灌頂時取_二斯吉水_一爲_二阿伽水_一取_レ水人著_二甲冑_一來而有_二其式_一

雙林寺假山 雙林寺文阿彌庭有_二假山_一相傳東山殿同朋相阿彌之所_レ疊也倭俗作_二假山_一曰_レ疊_二水石_一又曰_レ作_レ庭

祇園女御屋敷 在_二雙林寺之前_一今爲_二田疇_一掘_レ地則石出是古石壁之所_レ用者也間又有_二假山之石_一此女御 白川院之所_レ愛而元源仲宗之妾也帝聽_二其美麗_一則訖_二源仲宗於罪過_一而後貶_二謫之_一爾後置_二斯處_一因稱_二祇園女御_一

祇園興聖寺跡 興聖寺傳言在_二東山祇園_一今不_レ知_二其處_一是清拙正澄之徒弟曇獨房之所_レ住也與_二深草興聖寺_一同_二名而異_一實也

種玉菴 連歌并倭歌之達人宗祇法師所_レ棲也傳言在_二東山_一一說在_二園池邊_一然則大宮一條邊也不_レ知_二孰是_一

青塚 祇園南高臺寺西野稱_二青塚_一未_レ詳_二其由_一傳言古雲居寺在_二斯地_一

建仁寺十境 建仁寺在_二四條南大和大路_一禪刹五山之第三位也斯寺有_二十境_一所謂慈視閣望闕樓大悟堂群玉林入定塔樂神廟無盡燈清水山第五橋鴨川水是也

苦集滅道 在_二東山觀勝寺前_一自_二祇園林南_一經_二建仁寺竹林東_一所_レ出_二六波羅密寺東宮辻_一之路也古教待和尚著_二木屐_一自_二三井寺_一赴_二山崎別業_一時過_二斯路_一

殿音似苦集滅道之音響故斯道號苦集滅道俗誤謂久知奈和之辻子此辻子南六波羅東岐謂宮辻高臺寺十境山謂鷺峯十境所謂白山巔菊潭水岩栖洞蟠蛇池湖月堂安閑窟棋吟墳雙林溪祇園林長樂鐘是也

芝居 在四條河原大凡傀儡場歌舞妓田樂猿樂并狂言舞々之類衆人所舉見之場倭俗惣謂芝居元原野謂芝故人々坐芝而見之義也一說芝居之號元起自南都南大門薪能者也人形芝居或謂操其式中央正面設舞臺橫長五間構矮欄其上下設幕操偶人者居幕內一出人形於上下幕間一段幕稱顏隱操偶人者以此幕隱顏面之謂也幕內惣謂幕屋近世准舞樂之樂屋而稱樂屋也凡芝居之外圍緊結垣傍之舞臺左右二方并正面高架床是謂棧敷遊覽人或登見之棧敷元假皮也今專謂棧敷芝居外門闌上高設床外張幕其體似城樓故稱櫓會板倉伊賀守勝重爲京尹一時免櫓七箇七箇所芝居之外不能構之無櫓者稱小芝居凡天晴則早朝於櫓上大鳴大鼓招聚諸人洛人早晨考此鼓聲有無則卜一日之陰晴又櫓下

板壁設小屋二箇所是稱鼠戶口入芝居人屈曲背肩越門限而入之如鼠之入竇鼠戶之傍設床代札於錢而賣之札小牘貼印爲徵者也不携此札者不得入鼠戶口其說淨瑠璃人稱太夫倭俗每諸藝其一部曰一座其一座之長稱太夫其次謂脇太夫太夫比胴其次比脇之謂也凡淨瑠璃之詞始出自源義經愛妾淨瑠璃御前之事其詞織田信長公夫人之侍女小野御通作之然太夫居樂屋幕內高聲曲節作文而談之是謂談淨瑠璃自茲後雖說他事悉稱淨瑠璃三味線助其曲節木偶人男女老少應其事而出之於舞臺之上下幕間操之故謂操又謂舞人形或謂使人形淨瑠璃之間又作狂言是亦木偶人作俳優之事淨瑠璃太夫自文祿年中及慶長監物某并次郎兵衛某招攝州西宮之傀儡師相共經營之監物并次郎兵衛談淨瑠璃西宮人舞人形其始纔張幕於兩楹之間舞人形於其上河內介是淨瑠璃太夫受領之始也次郎兵衛後稱上總介自茲左內宮內相續而盛行常芝居元在五條橋南豐臣秀吉公自伏見城入京師之路也故嫌其喧雜

移_二今四條河原_一傀儡之外雲舞并幻術連飛輪脫緒小桶水操及珍禽奇獸或矮人長女又施_二雜品藝術_一者各開_レ場是近世之流風也貞和五年六月足利尊氏公構_二棧敷於四條河原_一觀_二田樂_一直義卿諫_レ之尊氏公曰天下事既附_レ汝我以_二般樂_一爲_レ業而已遂往_レ焉以是觀_レ之則四條河原者室町家時既爲_二俳優場_一者乎然斯時依_二其年_一依_二其人_一而催_レ之者也如_レ今爲_二常舞臺地_一者始_レ自_二秀吉公時_一者乎又一種有_二歌舞妓者_一元出雲大社巫女有_二號_一國女_一者_一轉神樂_一而歌舞是古所謂白拍子之類而元神樂之變風也永祿年中有_二名護屋三左衛門者_一元武人而落魄生也在_二京師_一則與_二國女_一密通共謀_レ之作_二歌舞妓之曲_一歌舞妓中古所稱狂言樣也其稱_二猿若_一者三左衛門所_二每赴_一之娼家奴隸男有_二猿者_一性魯鈍而不_レ通_二人情_一三左衛門常玩_レ之至_レ今有_二狂言猿若_一是皆所_二假爲_一猿若者也倭俗少年人稱_二若衆_一或謂_二何若某弱_一又老少稱_二老若_一然不_レ解_二其義_一若與_二弱倭音相同以_二弱字_一代_二若字_一則其義亦粗通者乎遂於_二洛東祇園社南門_一開_レ場催_レ之是歌舞妓之濫觴也自_レ茲遊女長佐渡島某使_二遊女妓者_一教_二歌舞_一并施_二能藝_一良賤群集而見

之誠誑_二人心_一者無_レ過_レ此於_レ茲禁_二女藝_一近世又使_二小娼_一施_二藝_一是稱_二狂言盡_一男風之流行不_レ減_二女流_一故又有_二法制_一美少年剃_二前額髮_一頂上少許留_レ髮以_二髮捻_一結_レ之是稱_二野郎_一施_二藝時蒙_二紫巾_一覆_二前額_一與_二有_一前髮_一者_一不_レ異凡野郎之號元出自_二薩摩國_一彼國風專嗜_二武勇_一輕率爲_レ行故不_レ好_二美麗_一凡爲_二男子_一者至_二十四五歲_一則悉剃_二前髮_一今小娼似_レ是故稱_二之中華所_一賞_二之小娼類有_二遊冶郎_一然則稱_二冶郎_一亦可乎又一種有_二舞舞_一凡舞有_二兩流_一越前幸若流并大拍流是也幸若自稱_二桃井直常之裔_一代代々領_二公方家之祿_一其舞詞或戰場之事盛衰之變戀慕之情種々有_二三十番_一其後所作是號_二新曲_一其所_レ唱曲節音聲與_二猿樂之所_一唱大同小異是亦有_二太夫_一其左右二人連舞是稱_二連又謂_二脇大小鼓助_一之又一種有_二猿樂_一或謂_二謠樂_一古所謂散樂乎今謂_二能各依_一施_二其所_一能之藝能也猿樂神代猿田彥之餘流也然彼徒忌_二猿字_一是謂_二神樂之變風_一而除_二神之示篇_一猿代_二中字_一而用_レ之狂言專作_二俳優之事_一於_レ今也有_二兩流_一中古猿樂有_二兩座_一觀世金春是也凡自_二能太夫脇太夫_一狂言太夫以下至_二笛大小鼓太鼓地謠者_一悉備

是謂一座一座中通達諸藝者是謂權頭在樂屋主裁萬事也擊鼓者以宮松彌左衛門爲祖其中助能太夫之音者十人或二十人同音唱之謂地謠凡謠曲有三百餘番狂言亦有三百餘番近世能藝盛行故自觀世座保生一座相分自金春座金剛座相別終爲四家是謂四座猿樂觀世出自伊賀國服部氏結崎等亦其種族也金春出自秦河勝其家系雖先觀世觀世太夫偶爲公方家之能太夫且中古有世阿彌音阿彌者甚得公方家之寵遇故於今觀世爲第一座凡自歌舞妓并舞藝及猿樂舞臺式與淨瑠璃異其爲場也觀世太夫之爲勸進能時棧敷有六十六軒是表本朝六十餘州者也其中設舞臺正當處高構之謂公方棧敷芝居中央建舞臺方三間餘是則施藝術之場也舞臺之後構一室是謂樂屋於此所各刷裝束廻橋懸出舞臺其橋懸之長自五間七間九間十一間至十三間橫一間餘左右設欄干倭俗諸物體相曰懸其經營似板橋故號之施藝人經鏡間使揚幕出自橋懸能太夫於樂屋刷裝束臨橋懸之處謂幕際斯處懸大圓鏡照見吾形

故或謂鏡間若有不正之事則使著其衣裳者改正之其人稱衣裳著凡猿樂之中能并脇及狂言堪其事者稱太夫故此三太夫出橋懸時樂屋之幕使二人揚幕之左右是謂諸幕而爲榮也倭俗每事一雙謂諸至笛鼓一則雖下堪其事者無太夫號出橋懸時使揚幕右一方而已是稱片幕大小鼓并大鼓能其事者被免紫調凡大小鼓并大鼓以紅緒縛兩面草於筒兩端此緒謂調本朝貴紫色故堪其藝者用紫又公方家所用之鼓以青色調結之小鼓役者中上手人常預此鼓倭俗諸藝堪其事者稱上手携常所預之青調鼓出舞臺擊之是預鼓之徵而其人爲榮凡萬事從役是悉役者也然倭俗近世之流風所預能并歌舞妓等者專謂役者凡四座太夫一代一度必於京師施能是專非貪利而已爲施其人之名也是稱代能凡三箇日也公方家歸路多來臨三管領之宅每一家有饗凡稱勸進能者中古以來沙門堂塔建立時構芝居必請觀世太夫而催猿樂其始北山鞍馬寺有僧號青松院法印善成自慈照院義政公至普廣院義輝公世壽保一百餘歲斯

僧爲_レ再_二興鞍馬寺_一請_二觀世太夫_一而於_二只洲河原_一催_レ之是勸進能之始也勸進勸_レ人使_レ赴_レ善之謂也中世以來爲_二佛神供給_一請_二米錢_一是亦謂_二勸進_一如_レ今專爲_レ乞_二取諸物_一之義也倭俗沙門稱_二聖凡能未_一始數日以前揚_二籍於洛中所々十字街頭之門柱_一其板面記_二何月何日觀世太夫殿於_一其處有_二勸進能_一有_二一覽念望之人_一則須_二來見_一終有_二年號月日_一其下有_二勸進聖誰某之字_一以_二其所聚之金銀_一爲_二建立資料_一故元因_レ倩_二公方家之觀世太夫_一板面用_二殿字_一今觀世雖_二自催_一勸進能依_二此舊例_一用_二殿字_一倭俗貴_二其人_一稱_二殿猶_一稱_二殿下閣下_一之類也又一種有_二田樂_一是又有_二本座新座_一謠曲亦有_二數十番_一兩座共法師而施_二藝術_一寺社修_二神事佛事_一時多有_レ之是賤術也(補遺) 凡舞曲有_二兩流_一其一幸若其一_二大柏傳言中古桃井氏之童爲_二小兒_一在_二比叡山_一岩松家童亦然_二是稱_二幸岩丸_一兩童共在_二山門_一爲_二慰_一寺僧一作_二舞曲_一唱_レ之是稱_二幸若流_一又有_二一家_一其家紋大柏葉二枚相並依_レ之其一流稱_二大柏流_一至_レ今有_二兩流_一今稱_二大頭_一者誤_二大柏_一者乎倭俗僧家之侍童在_二天台眞言_一稱_二小兒_一於_二禪刹_一謂_二喝食_一其體大同小異

北御門 在_二六波羅密寺西_一土人誤謂_二古禁闕之北門_一在_レ茲也思中古京師監護兩六波羅第宅之北門在_二斯處_一時世人稱_二北御門_一者乎本朝高貴之門以_レ御稱_レ之倭俗御或謂_二美今傳_一謬謂_二北美加登乃町_一五條橋 在_二五條東賀茂川_一斯橋始每_二朽腐_一清水寺本願成就院爲_二勸進聖_一請_二諸人_一聚_二米錢_一而經_二營之_一是謂_二勸進橋_一豐臣秀吉公時被_レ營_レ之以來到_二今自_一公方家_一被_レ命_レ之是又謂_二公儀橋_一凡自_二南方_一來_二京師_一者多入_レ自_二斯橋_一籠谷 在_二鳥戶町西_一相傳惡七兵衛藤景清爲_二源賴朝_一所_レ執暫在_二斯處之獄舍_一故稱_二籠谷_一國俗謂_二獄爲_一鳥戶野 在_二鳥戶山麓_一六波羅密寺東南_二古葬_一人之場也豐臣秀賴公爲_二秀吉公_一被_レ建_二豐國神廟_一於_二鳥戶山_一于_レ時火葬之臭氣通_二社頭_一依_レ之厭_二不淨_一移_二葬場_一於_二建仁禪寺前鶴林_一今六體石地藏殘焉土人斯處稱_二南無地藏_一中世時衆一遍上人第三世他阿上人設_二保福寺_一於_二斯地_一今寺絕一遍上人并他阿上人之塔存寺物舊記等今在_二四條道場金蓮寺_一一說行基所_二定置_一之京師五三味場之延年寺斯地也今自_二鳥部

山所出清水寺西門前之徑路號延年寺辻子三代實錄第二十卷載貞觀十三年閏八月二十八日辛未制定百姓葬送之地一其在一山城國葛野郡五條荒木西里其二在六條久受原里其三在紀伊郡十條下石原西外里其四十一條下左比里其五十二條上佐比里云々

山井 在東山靈山古山井中務栖斯處事見于顯註密勘近世隱士長嘯子棲斯處爾後移居於大原野山上

鏡池 在正法寺堂北傳言當寺開基國阿上人九十一歲時臨斯水而刻所映水之影於木像今所者是也

普廣院城址 在同寺山上室町家義教公構城而暫棲之

嘉元菴 大燈國師住大德寺後暫栖東山嘉元菴又再住大德寺遂於雲門菴遷化嘉元菴爲台徒被滅云今不詳其處

春浦宗熙跡 傳言大德寺春浦曾暫住東山靈山麓今不詳其處

北斗堂 古在三年坂上今不知其處

轟橋 在清水寺堂西參詣人歷斯橋入堂古慈心

院在斯傍故稱轟坊今在鐘樓東

鴉水 在轟橋下參詣諸人用此水而洗手處也

安大石盆 溪水自盆脚石裏逆上常洋溢其石脚外面彫刻鴉形故號鴉水自古所有之石不利

休取之爲茶寮洗手之石盆今所存其時新造之

者也

竹谷 在清水寺東南曾法然上人徒弟乘願房之所

住也性好隱逸始隱醍醐菩提寺澗爾後棲斯

處

觀勝寺谷 在清水山北古觀勝寺在斯谷乎或下粟

田山觀勝寺所領之山乎靈山正法寺有釋迦像傳

言觀勝寺之本尊也然則與下粟田之觀勝寺又別者

乎

小廬峯 傳言在東山清閑寺南古道我僧正棲斯處

云思昔年有瀑布乎道我僧正之名出兼好徒然草

然不詳其傳一說小廬峯則清水山也或言山科牛

尾山也自是愛宕郡中自東北至西南

大追物場 在河合社東北傳言慈照院義政公之時

於斯處有大追物云

下松^{カキ} 在^ニ一乘寺村^一簀里^一洛西北野七本松是亦稱^ニ下

松^一

詩仙堂 在^ニ同處^一隱士石川丈山倣^ニ本朝歌仙三十六

人之例^一擇^ニ中華詩人三十六人^一各圖^ニ其像於板面^一

記^ニ其所作之詩於^ニ其上^一而揭^レ壁是號^ニ詩仙堂^一則

擇^ニ詩仙^一之始也丈山既沒其堂殘又有^ニ十境^一所謂

老梅開嘯月樓獵雲窠洗蒙瀑流葉陌小有洞百花塢躍

淵軒膏盲泉加^ニ詩仙堂^一爲^ニ十數^一又有^ニ凹凸窠十二

景^一所謂滿蹊櫻花前村翠雨嚴牆瀑泉砌池印月溪邊

紅葉四山高雪台橋閑雲鴨川長流洛陽晚烟難波城樓

園外松聲隣曲叢祠是也

比羅木杜 在^ニ下松西北^一今所^レ在^ニ下賀茂^一之比羅木

宮古在^ニ斯處^一云

簀里 始在^ニ比羅木社西南^一高野川水年々氾濫民人不

得^ニ安居^一近世移^ニ一乘寺村內^一簀里下松邊古屬^ニ山

門^一此兩處人動起^レ兵與^ニ山門^一

那多葉^{ナタエ} 在^ニ高野村^一曾法然上人與^ニ台徒^一論^ニ法於

茲處^一熊谷蓮生法師藏^ニ那多於衣袖^一而從^ニ上人^一來

倭俗伐^レ木之短刀謂^ニ那多^一蓮生以爲^ニ上人若有^レ負

之則以^ニ那多^一碎^ニ台徒首^一上人豫識^レ之大戒^ニ蓮生^一

蓮生悔愧棄^ニ所携之那多於斯竹林^一云

相逢杜^{モリ} 在^ニ叡山西麓^一每年夏五月時節入^レ夜數點火

自^ニ南北^一飛行於^ニ斯杜^一則其光滅矣微雨陰濕之夜特

多士人是謂^ニ逢火^一傳言昔日山門有^ニ淫僧^一其僧所^ニ

寵愛^一之美童在^ニ北谷^一其童病死僧亦尋卒其愛著之

所^ニ凝死後不^レ散亡魂化^ニ鬼燐^一飛行於^ニ斯杜^一相逢則

滅依^レ之稱^ニ逢火^一云此節叡山西面自^ニ所々^一見^レ之

自^ニ大德寺邊^一見^レ之則特現然也非^ニ野火^一非^ニ鬼燐^一

每五月時節斯邊五位鷺多飛行倦則各入^ニ斯杜^一而休

然林茂不^レ見^ニ其光^一是謂^ニ相逢則消滅^一凡夏夜諸所

山林多有^ニ此事^一或稱^ニ蜘蛛火^一是謂^ニ大蜘蛛之所

爲^レ怪然是五位鷺羽毛之所^レ爲也夜在^ニ陸地^一而爲

光者五位鷺也又在^ニ海中^一而有^ニ光者多平魚之鱗光

也非^ニ可怪者^一也

王塚^{ミナト} 在^ニ松崎西南王塚南^一倭俗一條道路謂^ニ繩手^一

似^ニ牽繩之義乎古語^一王塚之路乎

上賀茂山 號^ニ武雷山^一傳言賀茂明神始現^ニ御生所^一

則此山也每年夏四月初酉日葵祭以^ニ松杉條^一構^ニ假

宮於此所^一山南謂^ニ壇春末夏初躑躅花多都人來遊

謂^ニ壇躑躅見^一到^ニ秋則採^ニ松蕈於斯山^一

御生所野 或作御陵野 上賀茂神山西北之地而賀茂明神始出現之處也 每年四月初酉日社家設假宮於斯處 社司氏人及土人各懸葵桂於衣領而詣之也 葵桂謂諸蔓 凡賀茂祭是神社祭之始也故不稱其神社 專稱祭限斯宮者也

蛇塚 在上賀茂內 今不詳其處 土人傳言古其邊碩鼠多出而害米粟 民間以是爲患 一時大蛇出逐田鼠 鼠急逃 堆石之間 蛇亦入其內 土人怪之 除石而視之 則吞碩鼠 鼠尾猶在口邊 蛇亦遂死 近來衆鼠所取之米粟在處々之石間 或穴中 諸民悅而採納之 於茲理死蛇 築塚自是後土人不妄殺蛇云

西賀茂山 鴨川西惣謂西賀茂山 麓有賀茂神宮寺 井水上村等連雲畑山

大門村 在上賀茂西南紫竹村之北 今愛宕山權現宮始在斯村西 時東大門在茲云 愛宕社跡于今石門存

若狹川 在鷹峯東麓 源出自若狹國 經大德寺門

前入安居院 出一條反橋

菩提瀑 在千束村普明菴之北

長坂 自千束村至丹波之路也

氷室山 在千束村北 古山城州氷室在斯山 清原賴業真人任主水正 主斯山 至今爲船橋清家之傳領

法然筋 今上御靈社面白壁辻子也 古相國禪寺之地 北有賀茂神宮寺 法然上人住之上人甚信 上賀茂明神 自茲時々詣賀茂神宮 其往來之道稱法然筋 倭俗稱道路謂筋比人身之筋骨而稱之者乎 爾後以斯寺附法嗣源智上人 自茲專爲淨土宗 號知恩寺 後移京極北 近年又遷北白川

子捨馬場 在上賀茂南 平敦盛密通大納言源資方卿之女 得一男子 未離襁褓 時壽永亂起 敦盛遂赴西海 於茲資方卿女棄幼兒於斯處 法然上人捨得之 成長後爲僧 舊記載法然上人詣大賀茂社之次於下松邊 捨得之 云然則子捨馬場是紫野今宮旅所邊乎

安居院法印井 大宮通東寺內人家後園有井 相傳古安居院法印聖覺之里坊在斯處 其井今猶存 水至清 冷 今安居院絕則爲町號 凡不限安居院古山門僧徒於京北斯處々構別院 入京日寄宿之俗

稱三里坊。曾賀茂河水不_レ時而洋溢自_二山門_一出_レ京時動不_レ得_レ涉_二今出川_一。此邊高野川與_二賀茂川_一於_二河合社南_一合動水溢自_レ此以北賀茂川一條流耳。故雖_二大雨_一水又大不_二洋溢_一。依上賀茂南大宮通北御園堤上有_二大橋_一。是謂_二御園橋_一。故山門僧多枉_レ道經_二斯橋_一而入_二京師_一。依_レ之寄寓坊舍多在_二京北_一。今處々爲_二町號_一。

寺內 安居院通東寶鏡院前石橋西謂_二寺內_一。相傳古悲田院境內自_二今大應寺_一至_二斯邊_一。故斯處到_レ今稱_二寺內_一。

千代野井 在_二洛北日蓮宗本隆寺_一。夫人千代野剃髮後號_二如大禪師無著尼_一。曾慕_二大惠禪師之弟子無著尼_一。自號_二無著_一。云斯尼元金澤越後守顯時之女而足利讚岐守源貞氏之後妻也。貞氏則尊氏公之父也。弘安八年冬十一月平貞時信_二長崎賴綱之讒_一而殺_二泰盛及其子宗景_一。其族類皆罹_レ難。顯時雖_レ有_二外家之睦_一而以_二北條之親_一。故無_レ咎然殃々過_レ日及_レ卒如大身親_二香火_一。口誦_二經咒_一。追_レ薦之。則自_レ有_二出家之志_一。一日潛行就_二美濃國松見寺老尼_一。斯徒日夜坐禪勤行如大爲_二賤婢_一。爲_二諸尼_一採_レ薪汲_レ水身不_レ顧_レ勞有_レ暇則

坐_二禪床_一不_レ臥不_レ眠。貌悴神疲。一尼憐_レ之。語以_二坐禪之要術_一。爾後八月望夜月明無_レ雲如_二大下_一。澗汲_レ水于_レ時。桶底脫落水隨盡。忽然大悟而詠_二倭歌_一。曰。兔仁角仁多具美志。桶濃底奴計。天水多末良。瀾波月毛也。登羅須世傳_二稱之_一。然後歸_二鎌倉_一。到_二建長寺_一。就_二佛光國師_一。薙_二紺髮_一。著_二禪衣_一。爾後入_二京師_一。參_二惠日聖一國師。又歸_二鎌倉_一。從_二佛光寺國師_一爲_二證明_一。一說再入_二京師_一。周_二遊名藍偶逢_一。妙超侍者於_二第五橋上_一。與_二超有_一問答。超則大德寺開山大燈國師也。然今考_レ之。千代野遷化時大燈國師纔十歲許也。然則豈有_二問答之事_一乎。於_レ茲上杉民部太輔二階堂山城守及諸檀越巨施_二淨財_一。鼎_二建一宇於洛北松木島_一。名_二景愛寺_一。則昇_二位于尼寺五山之甲_一。今本隆寺地亦古松木島之內。而距_二景愛寺_一不_レ遠。故稱_二斯井_一。曰_二千代野井_一。則爲_二下賦_一。桶底脫落之倭歌。處_二然斯歌於_一美濃國松見寺。賦_レ之非_二景愛寺住職之時_一。彼此謬傳之甚者也。一說桶底脫落比_二開悟通徹_一。而言_レ之者也。元非_二實汲水之謂_一也。後世因_二斯歌_一而後爲_二汲水之井_一者也。斯義可_レ取者乎。今本隆寺地佐々木種族杉若若狹守之宅地而始其門向_レ西。故今斯寺西町謂_二前町_一。言門

之謂也若狹守領ニ紀伊國新宮城ニ豐臣秀吉公時有
レ故被ニ沒收ニ若狹守塔今在ニ日蓮宗本能寺ニ爾後本
隆寺移ニ此地ニ

大門村 在上賀茂西南紫竹村之北ニ今愛宕山權現社
始在此口西ニ時東大門在レ茲云愛宕社跡于レ今石門
存

筋違橋 在ニ安居院北ニ應仁年中山名細川兩家爭亂日
斯橋邊多爲ニ戰場ニ又一處在ニ京極北ニ是亦爲ニ戰場ニ
依ニ其戰ニ而可レ擇レ之

曼陀羅辻子 在ニ大宮通東埋忠町北ニ古歡喜寺內曼陀
羅堂在ニ斯處ニ云々

橋次井 在ニ西陣五辻南櫻井辻子ニ相傳此處賣金商
橋次末春之宅地也此井大而水又清冷也源義經從ニ
橋次東行ニ時自ニ此處ニ首途又妙心寺南門東有ニ木辻
村ニ是古官家木辻之領所而于レ今有ニ第宅之跡ニ土人
誤ニ木辻ニ爲ニ橋次ニ村中一箇井亦號ニ出門之水ニ是義
經首途日所レ用之井也云皆是謬傳也

百々橋 在ニ妙顯寺通ニ股川末ニ橫ニ東西ニ橋西寶鏡院
前町謂ニ百々町ニ依レ之爲ニ橋號ニ乎古百々氏人住ニ斯
町ニ乎百々之稱號未レ詳ニ其實ニ近世改ニ板橋ニ爲ニ石

橋ニ應仁年中山名與ニ細川ニ對捍時隔ニ斯橋ニ相戰數
度也又永正四年八月三好筑前守長輝與ニ細川政元
家臣香西又六隔ニ此橋ニ每度相戰

水落橋 在ニ上立賣小川西ニ凡小川水及ニ上立賣通ニ直
南流過ニ橋下ニ則水東屈折又南流故纔數步間而橋
有ニ兩箇ニ其一過ニ上立賣通ニ者涉ニ東西橋ニ又南行者
流水屈折而東流處過ニ南北橋上ニ此南一町則謂ニ水
落町ニ

千利休宅 在ニ本法寺前ニ豐臣秀吉公賜レ之利休所レ設
鏢ノ間于レ今存倭俗以ニ鐵鏢ニ釣ノ釜置ニ爐上ニ煮レ茶故
斯處稱ニ鏢間ニ倭俗床上稱ニ何間ニ或號ニ某間ニ呼ニ其
稱號ニ以別レ之

御三間町 今報恩寺北有ニ稱ニ御三間ニ處ニ俗傳室町公
方家三軒廐之所レ有也然今按斯波細川畠山三家之
宅地也乎其時三管領比ニ藤氏五攝家ニ故稱ニ御三家ニ
者乎

射場寺 報恩寺前町也曾室町家之射場在ニ斯處ニ今東
面人家之後園有ニ大石ニ傳言掌ニ射場ニ者在ニ斯石陰ニ
擇ニ見射者之中與レ不レ中也斯石號ニ虎石ニ
大心院町 在ニ安樂小路北ニ曾大心院細川政元宅在ニ

此處今爲民家

西倉口 在京師之北是自四方入京師之七口隨一也古御倉在斯處乎今誤稱西藏口又謂清藏口

道正菴 在京北木下曾從永平寺道元和尙入宋

道正菴亦從之道元在宋國遍歷之中於途病急發一老翁現出謂於日本我近隣之名衲也不可失則與一丸藥其疾立愈老翁又謂吾日本稻荷神也於茲告道正菴曰爾從師不辭跋涉吾憐爾志則授此藥方歸本朝以是須救諸人之疾苦老翁忽失其所之今道正解毒圖是也道正所設之興正寺始在深草故稱近隣者乎歸朝後因道元之遺誠曹洞宗僧出世并賜禪師號時自諸邦入京師日必寓道正菴道正菴主則自斯時憑洞家之諸寺施賣解毒圖於群國

岩栖院町 在室町柳原北曾岩栖院細川滿元之宅地

而俗謂賀世伊辻子曾後藤長乘合岩栖院并崇禪寺兩寺之地而爲宅地兩寺移京極北

塔壇 在今出川北上御靈杜西相傳相國寺九重塔之跡也一說東北院塔在此所或言古毘沙門堂在斯

處未可知就是也

鑑町 自京北塔壇所出寺町之路也南北兩方民家居曲出入如鑑及之齟齬故謂鑑町

細川宅 應仁年中細川家構宅於上御靈杜西北是處也

三好長好宅 弘治四年四月二十三日三好長好築第

宅於上立賣北木下町而請將軍義輝公也

針屋宗春宅 在上立賣室町西宗春茶人也豐臣秀吉

公一時來臨宗春宅茶亭釜湯沸騰宗春則供菓獻

茶秀吉公大感宗春之嗜茶則賜祿子孫於今傳

領之自茲後每年九月獻盛炭之康瓠二箇於東武

山名辻子 在船橋西山名家代々之宅地也船橋川西

面石壁則山名宗全時所築也

羅漢橋 在飛鳥井町東小川上相傳東山戒光寺在

斯邊舊誓願寺北町斯時此橋亦戒光寺之境內也橋

上有瓦屋而左右欄干板壁畫羅漢像是故於今

稱羅漢橋

御料人辻子 上立賣南小川東櫻御前西門前也櫻御所

中世以來近衛殿之所也世所謂近衛殿絲櫻又在斯所曾近衛植家公之息女有故不嫁豐臣秀吉公

以_二斯邊之地子錢_一被_レ寄_二此息女之厨料_一爾後被_レ免_二京師民家之地子_一時以_二五十石之家領_一易_二地子錢_一至_レ今然故斯處謂_二御料人辻子_一民間誤稱_二御靈殿辻子_一倭俗高貴女子稱_二御料人_一言爲_二誰某妻女料_一之義乎

白雲町 舊新在家也始在_二白雲村_一故爲_二町號_一爾後移_二一條南_一今新在家_一

辨財天町 在_二兼康町南_一傳言古辨財天社在_二斯處_一社前有_二池水_一今社絕池水亦無_レ之然每年春末蘆芽生_レ自_二地中_一是古蘆根之所_一致乎

常盤井辻子 在_二西洞院一條北_一古常盤井相國實氏公之第宅在_二斯處_一井水今猶存而水至清矣凡常盤井在_二三處_一第一斯處第二飛鳥井殿町第三船岡山東田間各常盤井相國第宅之地也未_レ知孰是_一也

徒斯_レ辻子 在_二一條北油小路與_二堀河_一之間近世耶蘇宗門之寺在_二斯町_一倭俗誤_二徒斯_一謂_二太宇須_一故今稱_二太宇須辻子_一

德大寺町 在_二新町武者小路北_一古堂上德大寺家宅在_二斯處_一云

狩野辻子 在_二小川東新町德大寺町西_一畫工狩野越前

守元信宅在_二此所_一故此町稱_二狩野辻子_一元信宅末裔至_レ今知_レ之元信剃髮後直以_二元信_一稱_レ之則世所謂古法眼也凡 本朝畫工無_二勝_一之者故從_二繪事_一者無_レ不_レ慕_レ之曾織田信長公在_レ京時一日微行過_二古法眼宅_一見_レ寫_二畫於扇面_一于_レ時元信伸_二兩脚於_レ几下_一傍若_レ無_レ人而寫_レ畫自若信長公心感_二其量大_一而歸然後近隣人各聚賀_二信長公之來臨_一且笑_二其無_レ禮古法眼謂信長公微行而過_一我我亦假爲_二不_レ知_一之者而遇_レ之何害之有乎且來臨爲_レ見_レ畫也然則於_レ我也亦不_レ足_レ悅矣

出雲寺町 在_二相國寺慈昭院之北_一則其町南有_二門通_一慈昭院中_一是古上出雲寺之所_一有也

相國寺十境 相國寺在_二烏丸東今出川北_一曾鹿苑相國義滿公正中三年定_二禪利五山之位次_一相國寺爲_二第二_一位寺中十境所謂般若林、妙莊嚴城、圓通閣、覺皇寶殿、洪音樓、龍淵水、功德池、天界橋、護國廟、祝釐堂是也

石橋 石橋處々有_レ之其內不_レ謂_二稱號_一專稱_二石橋_一者相國寺門前之橋也

慈照院 在_二同寺中_一則是慈照院義政公之塔所而相國

寺十三塔頭之隨一也斯院開基在中中淹也始織田信長公入洛時寓斯院列侯達官及地下良賤來執謁時今川氏真亦來見獻千鳥青磁香爐是宗祇法師之珍藏而千鳥名取古歌之義而號之者也信長公豫聞氏真能蹴鞠爲見其藝乃有遊庭會三條大納言實條鳥丸高倉飛鳥井廣橋五辻庭田及氏真爲其人數也其時方丈今猶存玄關之模樣恰好非凡工之所及爾後構玄關者來視而依斯樣云倭俗蹴鞠場稱遊庭又謂懸也倭俗諸物之體相謂懸舞臺之橋懸家屋之庭懸類是也凡鞠場方六間或八間或十二間各有廣狹西方堅細圓竹而圍之四隅植松竹楓柳是謂四本懸於懸之大者有植松六本者飛鳥井家之設遊庭四方堅柱以細木橫圍之是謂橫算倭俗細木稱算依似ト筵家之算木也飛鳥井家之懸四隅共植松凡四本松并懸橫算飛鳥井難波兩家之外不能爲之蹴鞠時所著之裝束并履依其家因其藝之工拙而有差飛鳥井家擇其器而免之是謂免古御子左裔冷泉家亦事蹴鞠也然於今無其儀於倭歌之題者飛鳥井并冷泉家交出之凡倭俗詠風花雪月之時豫取其題

號以詠其歌是謂兼白題又各會其席而詠其事是謂當座自飛鳥井家所出之題是稱飛鳥井題自冷泉家所出之題是謂冷泉題
大光明寺始在伏見豐臣秀吉公時斯寺造營日仁叔孝公藏主尼爲勸進尼上自秀吉公下至列侯悉募之請金銀米錢而爲建立之資料孝藏主所作倭字幹緣疏于今存成畢後令承允長老住之秀吉公築伏見城時此寺在城地之中故移相國寺中豐光寺豐臣秀吉公欲建斯寺於相國寺中然無隙地假方丈之地而營之故納地子錢於方丈倭俗出金錢而假他地稱地子言以地比母其所出之利息比子之義也豐光因豐臣威光之謂乎鶯宿梅大鏡卷第八云村上帝天曆年中清涼殿前之梅樹枯萎勅令詩索可代之梅有人奏曰西京某家有梅花開則其色深其香濃是應其選者乎於茲令入掘之主女曰枝間有短冊著之可獻斯梅樹既移於禁廷主上偶覽之則有歌曰勅奈禮波最茂加志古志鶯之宿和登々と波如何古多邊牟云々主上憐之令問其主女爲何人也其邊人答曰是主女則紀貫之女也自是此梅曰鶯宿梅云

其殘種猶在舊主宅爾後足利義嗣建林光院於其宅地且賞梅花應仁亂後移此院於相國寺中一梅亦移三種方丈前庭今檜存每年暮春花開其色白而有斑紅其香至濃也

搥門辻 今出川室町南辻也舊傳室町殿之搥門在玆云一說古相國寺法界門之所也有也倭俗外門稱搥門(補遺) 室町一條辻也相國禪師中古封境廣大而法界門南在二條通爾後南方并東西爲公用被滅法界門亦北退今所謂總門辻則法界門之所也有也至近世守室町斯辻者相國寺有大齋會則此人來寺門請佛供之餘是元守搥門之徵乎又每歲此人獻緒大并草鞋於寺僧

八幡町 在烏丸北上立賣南傳言古斯邊伏見殿之宅地而斯處勸請五箇所八幡宮其社近世遷京北小山口古斯處社之所有此町之西北隅也至今人不_レ得住其地若棲之則必爲祟一說斯地古相國寺鎮守今八幡宮之所_レ有也

足利公方家室町殿 在今出川北室町築山町邊足利家代々被住斯所因稱室町殿其結構盡美康正三年慈照院義政公又被營新館是號花亭世所

謂花御所是也假山亦在其內倭俗高貴之所住謂御所此處與相國寺比並故鹿苑院五山左右僧錄司自院內日々入御所執達萬事住蔭涼軒者西堂也從僧錄司而謀事應永四年四月鹿苑相國義滿公讓此京於義持公隱北山鹿苑寺永祿八年乙丑六月十九日光源院義輝公爲三好遭害爾後第宅廢頽終爲民家盛衰誠堪感慨

鹿苑院町 自相國寺門前出烏丸通之町也古花御所在此西鹿苑院在此町僧錄司日々入花御所爲有便也

上下出雲路 京北京極通南北有上下出雲路桓武天皇遷都十三年後勸請幸神於出雲路一條北今小社纔存其處稱幸神町上出雲路下出雲路猶今上寺町下寺町之號乎昔日傳教大師其地建寺在上者稱上出雲寺在下者稱下出雲寺真濟法師於斯寺法花講談之事見于舊記上出雲寺町今在相國寺中慈照院後小門通慈照院內此町人隸慈照院

中川 今寺町川是也斯源出自今出川邊在京極殿與御堂之間故有斯號中古京極之南今四條道場

金蓮寺半是佐々木道譽之宅地而後寄_二附道場_一者也
只洲河原 下鴨社南也北有_レ社高野川與_二鴨川_一於_二斯社南_一而合_レ流故稱_二河合社_一寬正五年四月五日於_二紇河原_一有_二勸進猿樂_一青松院法印善成爲_二勸進聖_一觀世音阿彌及子又三郎爲_二太夫_一其外優者役人多慈照院義政公構_二假皮_一而覽_レ之管領細川勝元獻_二盃酒_一還御時被_レ枉_二駕於勝元宅_一七日又有_二猿樂_一義政公亦覽_レ之畠山政長獻_二盃酒_一歸路政長假_二勝元亭_一而饗_レ之十日又有_二猿樂_一斯波治部太輔義廉進_二盃酒_一還御時入_二義廉宅_一每度猿樂纏_二頭衣服_一細川畠山斯波各授_二一萬疋_一相伴衆并供奉人以下亦各脫_二衣服_一而畀_レ之吉良石橋京極大内土岐六角等謂_二之相伴衆_一三管領及吉良石橋不_レ及_二免許_一而乘_レ與其餘無_二免許_一則不_レ能_二濫乘_一也倭俗侍_二高貴之食_一謂_二相伴_一中華所謂館伴之義乎中古射者多賭_二鳥獸_一以_二鳥目十錢_一充_二鳥一疋_一故鳥目百文錢謂_二十疋_一一貫稱_二百疋_一千疋萬疋可_二准而知_一之倭俗錢謂_二鳥目_一則出_レ自_二鵝眼_一之詞乎

畠山辻子 在_二今出川室町西_一古畠山氏在_二此所_一今町内有_二大井_一是謂_二畠山殿井_一

伊勢守宅地 今近衛殿第地内今出川通之一方元伊勢守之宅地而到_二近世_一稱_二伊勢守屋敷_一伊勢守每日近_二待公方家_一而執_二達萬事_一斯處近_二公方家花御所_一宜哉有_二伊勢守之宅_一也爾後爲_二近衛殿之第_一京北櫻御所號_二上御所_一今處稱_二下御所_一

阿古是池 在_二後水尾院之御園_一未_レ知因_レ何而號_レ之也一說婦人阿古是者宅地之池也一說古東北院内之池水也

半井 在_二鳥丸正親町北_一相傳古施樂院之所_レ在而醫家和氣氏住_レ之家内大井中間以_レ板隔_レ之半充_二製藥之用_一半爲_二雜用之水_一自_レ茲和氣氏有_二半井之稱號_一一條殿町 在_二一條室町_一九條道家公之_二三男實經公_一爲_二左府_一時使_二家司備前守行範_一加_二修理_一上十月二十九日移_二徙之其跡_一今悉爲_二民家_一然于_レ今號_二一條殿町_一堀河 源出_二自_一鷹峯_一過_二大德寺前_一入_二都城_一出_二鳥羽_一國史曰天長十年六月太政官所分課_二左右京戶_一令_レ輸_二檜柱_一一萬五千株_一爲_二東西堀河杭料_一今堀河乃古東堀河而都城之溝渠也西堀河在_二西京_一京極中川之外或又此川有_二稱_一中川_一者_レ依_レ舊可_レ擇_レ之一說西堀河今堀河在_レ西者也東堀河則今京極中川

而比_ニ中華涇渭_一則自與_ニ涇濁清渭_一符合

一條反橋_{モトリ} 在_ニ堀河一條_一曾_ニ三善清行卒子_一時清行子淨藏貴所自_ニ雲居寺_一訪_レ病來於_ニ橋上_一逢_ニ告_一死之使者淨藏貴所大驚祈_レ之因清行暫蘇生與_ニ淨藏_一通詞自_レ是世號_ニ反橋_一言返魂之義也曾安倍晴明通_ニ天文_一且得_ニ妖術_一十二式神爲_ニ使令_一晴明妻甚怖_ニ畏其形_一故置_ニ十二式神於反橋下_一有_ニ所用_一則呼_レ之式神得_ニ通力_一豫識_ニ他人之吉凶_一籍_ニ往來之人言_一而告_レ之自_レ茲世人欲_レ知_ニ事之吉凶_一則出_ニ反橋_一聞_ニ往來之人言_一而占_レ之是謂_ニ辻占_一婦人特信_レ之倭俗四通街衢謂_レ辻

サラシナ

更級川 小川與_ニ堀川_一之間一條通西流川是稱_ニ更級

川_一不_レ知_ニ其故_一也

村雲 在_ニ西堀川舊誓願寺之北_一太平記所_レ載村雲妙吉侍者所_レ住之大休寺今村雲瑞龍尼寺之地乎

福大明神町 在_ニ一條北堀河西_一白狐之社號_ニ福大明神_一元在_ニ京師下出雲路南今九條殿之內_一九條殿造營之時移_ニ斯處_一今社絕所_ニ併祭_一之藤忠實公像今在_ニ本國寺中勸持院_一建_レ社祭_レ之具載_ニ福大明神社條下_一此社爲_ニ貫之_一者誤也

紹巴町 在_ニ新在家中町通堀河之西_一里村紹巴得_ニ豐

臣秀吉之寵遇_一於_ニ其處_一賜_ニ宅地_一其裔分_ニ領之_一依號_ニ紹巴町_一

聚樂 天正十三年閏八月豐臣秀吉公南北自_ニ一條_一

至_ニ二條_一東至_ニ堀河_一西限_ニ內野_一爲_ニ城地_一築_ニ大第_一

自號_ニ聚樂_一正親町院有_ニ行幸_一爾後讓_ニ斯城於關

白秀次公_一公亦被_レ催_ニ行幸_一文祿甲午三年秀吉公別

築_ニ伏見城_一而移_レ之同四年乙未七月十五日秀次公

於_ニ紀州高野山_一有_ニ事後聚樂城樓門廡離折而移_一處

々其跡爲_ニ民家_一又爲_ニ田疇_一天守二九彼樓某閣此

門某池并山里等名爲_ニ町號_一又爲_ニ田字_一又列侯第宅

亦移_ニ大坂并伏見_一其名殘爲_ニ民家之町號_一或稱_ニ如

水町_一是黑田甲斐守入道如水圓清館舍之所_レ有也又

號_ニ有馬町_一是有馬玄蕃頭豐氏之所_レ住也凡斯類處

々多矣

松丸殿町 在_ニ西洞院中立賣北_一豐臣秀吉公愛妾松丸

殿秀吉公薨逝後棲_ニ斯處_一始在_ニ伏見城_一時斯人在_ニ

松丸_一依_レ之稱_ニ松丸殿_一京極長門守之女也

獄門町 在_ニ近衛通西洞院西_一古斯所有_ニ獄舍_一罪重者

斬_レ之則梟_ニ首於獄舍之門外_一倭俗自_レ是梟首直稱_ニ

獄門_二故爲_二斯町號_二至_二近世_一其跡有_二大槐木_一罪重者於_二此樹木_一斬_レ之則梟_二首斯處_一及_二近世_一卽位改元等行_レ赦時五判官來_二此所_一粗有_二其式_一今直至_二小川二條獄舍_一古斯獄舍邊有_二西福寺_一本尊樂師聖德太子之所_レ作而眞言宗僧守_レ之薦_二刑死者_一因俗稱_二獄門寺_一今在_二京北_一具在_二獄門寺條下_一

大方町 在_二近衛通南下立賣北_一倭俗高貴之夫人謂_二北御方_一高貴之母公稱_二大御方_一故慈照院義政公之母公亦稱_二大方殿_一故世或謂_二御大方_一古其宅在_二斯所_一云

梅雨穴 在_二鳥丸正親町南西禁門之側_一每年每_二梅雨節_一此處水涌出其邊人掘_レ之爲_二井梅雨節家々井水多濁此水純清故自_二處々_一來汲_レ之梅雨晴則此水亦枯_一說古此處有_レ井 桓武天皇遷都日傳教大師誦_レ咒而封_レ之云梅雨又謂_二微雨_一此雨濕侵_レ物甚故諸物微腐微倭俗訓_二加美留_一

白雲村 今新在家元在_二今所謂舊新在家_一其地近_二村雲_一是稱_二白雲村_一始此一村不_レ交_二他人_一互爲_二婚姻_一代々各互相親猶_二朱陳村_一村人織_二白絹_一爲_レ業充_二高貴衣服之料_一然此地井水性不_レ清以_二是水_一練_二白絹_一

其色不_二潔白_一故移_二今新在家井水純清之地_一然猶因_二舊號_一稱_二白雲村_一古來因_二紅織之事_一有_二公方家御教書數通_一于_レ今存是故終爲_二公方家之被官_一倭俗隸_二其家_一者號_二被官_一

寶珠菴 在_二白雲村中町東_一是又連歌師里村紹巴之所_レ棲也其亭向_二東山如意嶽_一故號_二寶珠菴_一豐臣秀吉公時々來_二臨斯處_一加藤肥後守清正少年時每度從來候_レ門其間以_二小刀_一彫_二刻寶塔之形於紹巴門柱_一至_二近世_一現存寬文年中火災爲_二鳥有_一兵始舊新在家號_二白雲村_一爾後雖_レ移_二今新在家地_一猶隨_レ舊稱_二白雲村_一

安倍晴明宅 古在_二河口土御門_一町口今新町也寬和二年六月二十三日夜 花山院潛出_二土御門皇居_一路過_二土御門町口晴明宅前_一于_レ時晴明避_レ暑在_二庭中_一邊擊_レ掌謂帝退_レ位既出_二皇居_一大變不_レ過_レ之須_二粧車欲_一入_二皇居_一而窺_レ之帝聞_二斯言_一急過_レ之於_レ茲晴明先遣_下所_二使令_一之式神於禁內_二式神開_一戶出忽還謂今已過_二門前_一帝遂赴_二花山寺_一薙_レ髮此宅自_二土御門_一赴_二花山寺_一街衢也

仕丁町 在_二新町中立賣通南_一此處人昇_二風輦_一故

謂仕丁町是故無課役

御靈町 新町出水通北中古下御靈社在茲處

頂妙寺町 新町中町北日蓮宗頂妙寺始在斯地

武衛陣 在下立賣南室町古武衛陣在此處云一說

武衛者三管領之斯波而住斯地云

革堂町 在東洞院東榎木町通中古行願寺革堂在

斯處

白山町 在今麩屋町通南古白山社在斯通南自

是此通衢謂白山通

御幸町 斯通衢在京極一町西豐臣秀吉公在伏見

城時自伏見歷五條橋自此道詣禁闕世人

崇秀吉公准院中而稱御幸

清少納言宅地 中御門與春日通之間萬里小路西南

有清少納言所住之跡今爲民家清少納言墓在

阿波國撫養郡里蟹村

妙顯寺町 在西洞院二條南日蓮宗妙顯寺中古在

斯處爾後移今地

御池町 在室町二條南古二條殿在斯邊庭設假

山池水縈廻此水至清冷二條殿至盛夏則漬甜

瓜而被獻禁裏今第宅雖不在斯處依舊例

夏日被獻甜瓜古御池今纔殘在兩替町久米某之後園古池殿有十景所謂水明樓梅香軒御榻閣藏春閣政平水古靈景綠楊橋觀舊臺洗暑臺龍躍池也是一說此地元尊氏卿之庭池而今稱御池氏者其裔也然此說不足信者乎

妙覺寺町 在衣棚突拔二條南始日蓮宗妙覺寺在斯處曾織田信長公有事時秋田城介信忠君被寓斯寺陽光院邸近斯寺故誠仁親王避亂入禁裏信忠君慮妙覺寺要害之不便則入親王之邸一旦拒明智光秀之士卒然小不敵大遂於斯處戰死少將井町在鳥丸二條之北古少將尼宅地之井也今在人家中中世祇園三社神興祭禮遊行日稻田姬神與偶安斯處自茲斯神稱少將殿二座神興安大政所今鳥丸四條南大善院地也近世三座之族所同移四條京極辻

慈照院義政公第 寶德元年二月構第於北小路云北小路在三條北車屋町

二王門町 二條通東洞院西也斯處不知有何寺一至近世二王門存二王像連慶作也今在清水坂愛宕寺門

足利直義第宅 始在三條北東洞院與高倉通之間

元高倉宮以仁親王之宅地而今曇華院之地是也然直

義構宅時其外門在高倉通東面故直義剃髮後稱

高倉禪門慧源倭俗男子薙髮後多稱何禪門某禪

門倭俗尚佛道故薙髮入禪定之義也直義薙後

歷歲月而移近衛河原大宮於斯處則爲通玄寺

曇華尼院今按太平記直義稱高倉殿又稱錦小路

殿又稱三條院然則今高倉誓願寺通之南淺井氏

之宅地乎

等持院尊氏公第宅 在萬里小路二條南第宅後爲

寺故今號等持寺町御所八幡宮尊氏公家內之八

幡宮而則爲等持寺之鎮守今寺絕

等持寺十境 所謂安帖菴清晏齋故鄉處寶雲閣音殿

香雪亭聽雨軒聚星樓宗鏡堂八講堂芙蓉池萬年松是

也今與寺絕

虎石 始在柳馬場二條南此石狀似虎傳言日蓮上

人踞斯石唱法故於今謂虎石町斯石今在深

草寶塔寺方丈庭

二條城跡 曾靈陽院義照公在本國寺時徵織田信

長公之亡三好一族大圍之信長公急入洛於茲三

好軍退營中無恙爾後信長公築二條城相共移之

今高倉二條北謂天守町二條城在斯處乎

耳敏河 古在三條邊今不知其河水之所流也

御供町 在三條大宮西古神泉苑池及斯池每年六

月十四日祇園會祭禮神與遊行日三基神與必安置

斯池邊而備供物今池多埋沒而爲民家然依舊

例安神與備供物近世其處民家之後園構小

社勸請祇園神祭禮日斯家前別築壇建幣三本

表祇園神三座安神與於其前也

洲濱町 在岩神通三條南倭俗假山池水謂洲濱泉

石之模樣象水隈洲濱之謂也今專稱洲濱或謂

泉水斯處今不知何水之爲泉水也

最勝河原 在三條西封疆之外良賤火葬之場也相傳

古最勝寺在斯處今按誤三條河原者乎倭俗葬場

謂三昧自古有綸旨及御教書下知狀職事勤之

鶴林 在同處始在鳥戶野豐國社造營時忌臭氣

之通社頭故移建仁寺門前近世又移斯地

伊藤町 在新町三條南始豐臣秀吉公未領天下

時入洛日必寓斯町伊藤道光家道光在京師掌

洛外處々稅租收納之事者也今代官之類乎

武藤町 在二條烏丸與二東洞院之間今所司之廳古在二斯町南而向二北矣

了頓辻子 三條南室町與二新町之間也相傳廣野了頓祖元足利家之從臣而至二義晴公義輝公之時有二采地少許至二末裔流二落民間住二斯所剃髮號二了頓其嗜二茶故構二茶亭常置二釜於爐人來訪則供二菓點二茶而遇二之豐臣秀吉公在二播州姬路城時入洛日必被二寓新町三條南伊藤某之宅伊藤與二了頓其居相近秀吉公豫不告二了頓一時俄然入二了頓宅於二茲逆履而出迎二之請二茶亭于二時釜湯沸騰則點二茶而獻二之秀吉公亦嗜二茶故大感二了頓之志則賜二家領其末孫到二今然故此町號二了頓辻子凡倭俗多嗜二茶或雖二貧窶間有二設二茶寮者是謂二和微數奇一和微貧窶之稱而數奇不遇之義也凡茶亭多茅屋而萬事之經營假爲二貧窶不遇者故謂二和微數奇又稱二數奇一

武衛家宅地 在二三條南六角堂前相傳武衛家世々住焉故此家到二今無二課役近世爲二長谷川氏之宅地二鹿苑院義滿公亭應永十六年十月義滿公自二北山亭被二移二居於三條坊門云今不知二其處一

卜者道滿宅 在大宮三條南二道滿法師者播州人也常與二安倍晴明爭二占術互嫉二忘之曾因二堀河右大臣之命而咒二咀御堂闌白道長公之時人皆知二道滿之所爲然不知二其所二寓居因二晴明之術畫二鸞於片紙而隨二風放之飛揚任二風遂落二其宅上則使二人捕二之

手洗水 在二烏丸三條坊門中古祇園神旅所在二兩地二六月祭禮時第三神輿在二烏丸一條北少將井町牛頭天王并蛇毒神此神輿二基有二烏丸四條南而此井在二中間凡詣二旅所者必汲二斯水洗二面手爾後拜二兩旅所一

大黑菴跡 在二室町四條北茶人武野紹鷗始名武田因播守仲村則武田信光之裔也祖父仲清應仁亂戰死父信久爲二孤寓二泉州界其子仲村成長後專嗜二茶入二京師住二四條室町惠美須社南隣倭俗以二惠美須大黑爲二一雙一以其居在二其隣稱二大黑菴一終刺髮號二閑齋武野紹鷗隱遁後避二武田氏改稱二武野一今其跡爲二民家一

茶屋宅 在二新町三條伊藤町南所謂中島情延者在二斯處茶屋其家號也天正十四年春東照神宮入二洛日

暫被_レ寓_二斯宅_一。豐臣秀吉公大悅_二神君之入_一。洛則馳_レ駕而來賀_レ之。至_レ今及_二八十年餘_一。斯宅不_レ罹_二水火之難_一。現然存是亦神君餘光之所_レ及乎。

柳水 在_二西洞院三條南_一。元內府織田信雄公之宅井也。斯水至清冷也。植_二柳於井上_一。避_二日色_一。因號_二柳水_一。千利休專賞_二此水_一。點_二茶故茶人無_レ不_レ汲_レ之_一。說柳水元在_二本能寺之舊地_一。今茶屋中島之宅地。然今無_二其井_一。

古田織部正重能茶亭 今堀河三條南藤堂和泉之第宅。元織部正重能之所_レ住也。故茶亭并露地猶存。

本能寺跡 在_二三條柳水町_一。中古日蓮宗本能寺在_二斯處_一。織田信長公有_レ事之地也。爾後本能寺移_二京極二條南_一。其跡古田織部正重能暫住_レ之。然後重能移_二堀河三條南_一。附_二與其跡於重能之從者茶人木村宗智_一。宗智慶長年中大坂陣時企_二逆謀_一。依_二之宗喜礫_一。於下栗田。其家被_レ沒收。爾後茶屋中島長右衛門拜_二受之子孫至_レ今住_レ之。

賴有松 在_二大宮四條南_一。俗謂古源義經之宅在_二此處_一。庭上遊覽時掛_レ刀。故稱_二刀掛松_一。然義經堀川館非_二斯所_一也。此地細川賴有戰死場而後人植_レ松爲_レ徵者也。

賴有建仁寺永源菴之檀越而所_レ著之甲冑并旗竿等。于_レ今在_二此院_一。

笠鷺橋 堀河通中御門北板橋也。昔日時平大臣里亭號_二本院_一。在_二中御門北一町_一。泉大將定國沈醉乘_レ夜入_二本院_一。大臣驚問自_レ何處來。大將隨身壬生忠岑草卒詠_二歌曰_一。加佐々義乃渡世留橋乃霜乃上遠夜半爾蹈分古登佐羅爾古曾大臣甚感_レ之云々。於_二斯處_一。依_レ詠_二斯歌_一。是號_二笠鷺橋_一。

雀杜 在_二四條大宮西_一。古藤氏勸學院之所_レ在也。此處所_レ有之雀亦微_二唔啞之音_一。其鳴聲似_レ唱_二蒙求題目_一。呂望非熊_一之音。故俗謂_二勸學院之雀_一。轉_二蒙求_一。具在_二更雀寺之條下_一。

杜鵑松 在_二四條道場金蓮寺中慶松菴庭_一。每年春末夏初杜鵑早遷_二此松_一。發_レ音。普廣院教公每_二春末_一枉_レ駕聽_二杜鵑_一。自_レ玆號_二杜鵑松_一。古來倭俗專愛_二杜鵑_一。愛惡與_二中華_一異。故春末早聽_二其音_一。爲_二口實_一。凡嗜_二詩歌_一。人特賞_レ之。傾_二耳於樹林_一也。此外堀河東中立賣西町稱_二杜鵑岡_一。中古京師人來_二斯處_一。聽_二杜鵑_一云。

千鳥池 在_二同處金蓮寺後竹林_一。棧敷跡 中古六月七日祇園會祭禮月四條通高倉東町。

向_レ北有_二公方家之棧敷_一而覽_二山鉾之渡行_一雜色等侍_二棧敷前_一而警_二固之_一其跡今爲_二民家_一倭俗神輿遊行時供奉之人列行是謂_二渡又稱_一鍊於_二山鉾_一亦然如_レ今雖_二無_二公方棧敷_一依_二舊例_一雜色等列坐而視_レ之以戒_二非常_一凡七月前六日朝雜色等於_二頂法寺六角堂前_一聚_レ所出_二山鉾之町人_一上七日行列前後之次第使_レ執_二圖而授_一與所_レ記_二一二三次第一之紙符_一每_二一枚_一有_二所司之印_一七日山鉾供奉之町人於_レ茲還_二納昨朝所_一受之紙符於雜色_二十四日之祭禮所_一渡_二飾山_一之次第前後亦如_二七日之式_一然斯時雜色在_二三條通東洞院東_一於_レ茲還_二納紙符_一古雜色之會長有_二二人_一今萩野五十嵐是也稱_二上雜色_一又所_レ屬_二其下_一者有_二數人_一是謂_二下雜色_一行幸御幸日著_二烏帽子蘇芳_一携_二行鐵棒_一下雜色持_二黑色棒_一前驅而追_二其前_一各有_二法式_一或野行幸時鐵棒著_二紅緒_一驚_二諸人耳目_一等之義也曾普廣院義教公時有_レ故加_二會長二人_一所謂松尾松村是也然則萩野五十嵐者禁裏之雜色而松尾松村者公方家之雜色也於_レ今四人上雜色并下雜色悉隸_二所司廳_一

松本井 在_二四條東洞院_一茶人松本正樂接_レ焉常汲_二斯

水_二點_一茶今爲_二他人之有_一

小結棚 凡造_二鳥帽子_一者在_二處々_一其內室町三條南所_レ有爲_レ本造_二小結鳥帽子_一者古在_二新町四條北_一此町稱_二小結棚_一今誤謂_二戀棚_一小結少年之所_レ著也以_二班紋五色之紙捻_一結_二鳥帽子角_一爲_レ飾凡元日上巳端午中元重陽兒女之所_レ玩物悉於_レ茲賣_二之元起_一自_二少年所_一著之小結鳥帽子_一者乎

陳外郎町 在_二西洞院四條北_一陳外郎事在_二土產門透頂香條下_一

金佛寺 在_二油小路五條南_一延壽寺始在_二斯處_一本尊彌陀銅像至大也俗不謂_二寺名_一稱_二金佛_一斯寺 白河帝之本願而平忠盛爲_二監事_一近世移_二五條東南_一一說金佛元在_二長講堂中_一

萬壽寺十境 萬壽寺禪刹五山之第五位而舊在_二五條南室町西_一今寺絕然寺僧纔殘在_二東福寺中_一十境雖_レ無_二其跡_一舉_二其名_一而存_二古所謂十_一起閣大雄寶殿三山神廟千松客徑枯木回春新花更雨東軒南院琴臺鏡沼是也

源義經宅 油小路與_二堀河_一之間六條南有_レ跡世所謂堀河御所是處也

醒井 在六條堀河佐目牛通西。此水至清故茶人專用之。相傳茶人珠光元南都淨家稱名寺之僧也。還俗後來往此所。慈政相公專嗜茶。故時々有來臨。珠光以此水一點茶而獻之。今井垣石織田有樂齋改築之者也。建仁寺古澗長老作記以雕石。今猶存。按醒井誤佐目牛者乎。

鹽竈跡 在六條河原。古左大臣源融公戲使入夫。自攝州難波浦汲海潮於茲。令燒鹽。是摸千賀鹽竈之景而寓遊興者也。

文覺町 在七條坊門。古獄舍在斯處。文覺因勸進帳之嗽訴。暫彼囚。茲故于今號文覺町。

佐藤忠信屋敷 在七條坊門不動堂東南。相傳忠信在京日棲斯處。至今其地不耕種。忠信有一男子。成長後號坊門三郎。凡在武家。則稱坊門者多是忠信之裔也。

月見橋 在油小路七條南。相傳於東山。自清閑寺山與阿彌陀峯之間所出之月似所出自。信濃國姨棄山之月。故自古賞月地也。故斯橋稱月見橋。云一說左大臣源融公見月之處也。又曰小松重盛公亦斯處構亭賞月。云一說重盛公之小松殿在下堀。

河與猪熊之間。梅小路南稻荷社之北。然則小松殿去此橋不遠。一說小松殿在滑谷東。

阿彌陀峯 在島部山。古小松內府平重盛公此山下建四十八精舍。每夜點四十八燈。每月十四日十五日修大念佛。自是斯山稱阿彌陀峯。到近世阿彌陀堂猶存。一年日蓮宗與親鸞徒論法義。日蓮宗大怒欲滅山科本願寺。時途過斯山。日蓮徒以爲滅淨土門之吉兆也。於茲燒斯諸堂。本尊阿彌陀幸免火難。今在山科草堂。

(自是愛宕郡西北至東南)

鷹峰 在洛北乾隅。斯處有三峰。所謂天峰、鷲峰、鷹峰。是也。中古至秋冬。此峰上設鷹網。以執鵝。是謂打鷹。峰是稱網懸鷹。世謂鷹峰鷹。或有月輪鷹。自此兩處打來者間有逸物。云倭俗大鷹并貓之俊逸者是稱逸物。

愛宕跡 在鷹峰北溪。今愛宕權現始在斯處。故號愛宕權現。古石門干。今存爾後慶俊移之於手白山。此山雖爲葛野郡。因神號稱愛宕山者乎。冰室 冰室山同在鷹峰乾隅。古此山有冰室。清原真人賴業領斯處。任主水正。預藏冰之事。今冰室。

絕

藥師山 在鷹峰東北斯山古屬比叡山傳敎大師斯山絕頂建堂安置藥師像爾後此山爲大德寺大燈國師封內之山藥師像在叡山西麓修學寺村二百年餘然後大德寺古溪和尚請斯像暫置大德寺門巷又移安居院之一院近世古溪和尚之法孫清巖宗渭置高桐院裏于時大醫法印野間玄琢買斯山清巖授與醫王靈像夫藥師本朝之習俗而醫家特尊崇之故玄琢不堪歡喜則建堂而安置之到今存

鏡石 在洛北鷹峰北鷲峰下一其石橫出二丈許高半之其石面平如砥光如鏡因名鏡石俗言昔日源義經臨斯石整戎衣也

利休松 始豐臣秀次公在聚樂城時々赴鷹峰以鳥銃使打町而覽之倭俗放鐵炮限何町幾間建格試中與不中是謂打町凡本朝量法三尺二寸半爲間半六尺五寸爲一間六十三間爲一町倭俗鳥銃謂鐵炮正鶴謂格擊鐵炮謂放或謂打干時千利休於鷹峰土手上向南設茶亭爲秀次公休憩之處自點茶而獻之倭俗謂堤曰

土手前山鷲峰植松爲茶亭窻前之眺望今猶存土人稱利休松

白馬池 在鷹峰北山中古此山有仙人一旦乘白馬入此池云

兒井 在同處大德寺徹翁和尚一旦栖此邊然苦無水一時兒童忽然現又自其所入地中徹翁以爲龍女現來示水之所出而去則其所掘井于今存

雖水旱曾無增減云
產湯水 在紫竹村大德寺之末寺大源菴方丈之南庭相傳斯地源義朝之第宅而義朝之愛妾常盤在此所產源牛弱其時汲此井煮產湯也倭俗兒產時則以溫湯洗浴之是謂產湯土人此地稱古御所

和泉式部井 在栗栖野中御前社邊傳言和泉式部汲斯水滴硯詠歌云

菩提瀑 在鷹峰西北千束村之北倭俗瀑字爲瀧千本凡松岡西南總稱千本其內上品蓮臺寺東北船岡山西麓有火葬場俗呼斯處專謂千本火葬之

資料蓮臺寺中六坊僧分領之古感神院大神人祇園會祭禮日先神幸取棄前路不淨之物若有死屍

則携之埋他所。平生亦巡祇園境內。若有死屍。則如祭日依之埋死人。則於他處。亦爲已所作之事。每年巡察諸寺院之墓地。有新葬之跡。則就其寺院請葬埋之料。近世諸寺院共正月七月每年兩度預施米錢於犬神人。自是後不及見。墓地蓮臺寺六坊其坊中各有土葬場。是亦春秋兩度贈米錢於犬神人。犬神人今清水坂之弦指也。

賴光屋敷 在安居院西北筋違橋北。今爲民家。傳言古源賴光構第宅於斯處。其時所勸請家內之八幡宮猶存。今雖爲民家。土人稱賴光屋敷。

船岡山舊壘 在船岡山上。應仁二年一色左京大夫山名相模守據之細川家攻之。無幾而城潰矣。後柏原院永正八年二月細川右馬助政賢聚四國東國之士卒。欲攻將軍義尹室町之館於茲。義尹慮小軍之不可當。大敵遂退。京師赴丹波。大內介義興亦從之。行政賢遂入洛。義尹催大軍歸洛陣于船岡山。政賢攻之。義興勵武勇。政賢遂死。義尹暫寓高雄山。秋九月遂入洛居妙本寺。爾後入室町之柳營。同年冬大內介義興挾室町家自立。威望欲施於令於天下。諸人妬之于。時丹波半國領

主竹內大夫欲滅大内氏之意。念不止。遂出丹波。構寨於船岡山。大内氏率五百騎兵急攻之。竹內諸卒大半戰死。其纔存者亦離散。竹內太夫不少退。則於山下死。

爐壇 在船岡山西。弘法大師在蓮臺寺時。於斯所鑿岩石爲爐壇。修護摩。又岩壁有弘法大師所彫刻之彌陀像。

大德寺十境 所謂達磨峰瑞雲軒看雲亭金剛軒古岩松起龍軒官池梅橋雲門菴明月橋是也。

同寺三門 斯寺至中世無三門。連歌師宗長寄白銀百片爲資料而建門。然無構閣之力。千利休重施白銀門上。設閣造自己像。著履置閣上。豐臣秀吉公怒其僭踰。則殺利休。肆所置閣上之木像於一條反橋。使辱之。此時住職古溪和尚亦負妄使置像之罪。故遂出大德寺。隱市原常樂菴。五老松 在大德寺方丈東南。五株老松現存。開山塔始在斯處。

明智門 同寺方丈南門。明智日向守光秀建之。故謂明智門。

和泉式部井 在同寺中真珠菴。相傳斯地和泉式部之

所棲也爾後爲寺并猶存一休宗純號斯井曰聖泉

金森法印茶亭 在同寺中金龍院豐臣秀吉公在伏見城時金森法印設書院并茶亭屢饗秀吉公爾後移書院并茶亭於金龍院中今現存

威德井 在大德寺門前石壁下一相傳中古密宗僧於此處修大威德法時此井水爲關加水故號之

梅雨水 在大德寺門前人家後園相傳近隣御泥池大蛇化爲婦人時々來大德寺中德禪寺聽徹翁和尚之法往來過此處故每年梅雨節水漲出

水石跡 在大德寺南田間傳言梶井門主竹影之別院在斯處曾設假山摸近江湖水之景象云應仁兵

亂寺院爲鳥有然到今水石跡粗殘

常盤井 在大德寺之南船岡山東田間傳言常盤井相國實氏公宅地之井也此外又在常盤井辻子并飛鳥井殿町未知名孰真相傳北京有九井所謂常盤井縣井石井少將井鴨井松井滋野井飛鳥井等是也

(補遺)

古阿彌谷 在大德寺西北中世於本朝亦有五葬所謂火葬土葬水葬野葬林葬是也斯處巨松下有大

石其形似大鼓依之謂大鼓石土人林葬場而有新死之人則靠屍於斯石覆衣而去入夜狐狸食之誠不仁之甚也近世無斯儀石亦今亡其松存耳古阿彌之號不知其謂也野僧古阿彌住之乎斯地今屬大德寺中寸松菴而爲後山

西河 在西倉口而自西流東俗謂千賀川恐誤西河者乎

塔壇 在相國禪寺之東元毘沙門堂之地而爾後相國寺九重塔之所也有也今考相國寺塔供養記方角地位符合者乎

二本松 在東河原彌勒堂與吉田之間古勸請春日大宮之處也

長塚 在同處彌勒堂之東南始勸請春日若宮於茲處爾後山蔭中納言遷大宮若宮於今吉田山中

勸使塚 在吉田山中春日社前古奉幣勸使之所座也于今芝壇殘一說吉田元地名而卜部家之稱號室町也近世避室町家之稱號稱吉田然則世所謂吉田兼好亦就地名而呼之則可也就吉田家之稱號而言之則誤也兼好法師之時卜部家專稱室町者也

頽岡 在吉田神樂岡之北岸傳言古高野山與神樂

岡相連一旦雷神劈開爲二斯處則劈之跡也

妙德石 在建仁寺方丈後東北隅溝洫之中出地纔

三尺許搖之不動其入地深不知幾尺也傳言時

々作妖怪也

青塚 在七觀音院與苦集滅道之間

宮辻 若集滅道之南所出自六波羅之十字街頭也

三本卒都婆 在六波羅野傳言熊谷直實於西國

討平敦盛終於此處其所携之弓三折之棄斯

地而入法然上人之室薙髮爲僧後人於斯地

建卒都婆三箇表三折之弓以爲徵

釘藏町 在佛光寺通烏丸西近世洛下有三人

其一角倉其二十四屋倉其三醍醐倉是也斯內十四屋

倉在此町其家之結構盡美倭俗高貴家構書院

於上下闕之內上闕兩面添片木是倭俗稱長押

觀以爲美其長押以鐵釘貼之嫌其鐵釘之現出

別以鉢或銅鳥獸草木造其狀令蒙其上是稱

釘藏是柱頭之護朽門扉之泡頭類也斯時民間用釘

藏之家稀故世人來觀者多依有斯家爲町號于

時京師三富人之外有三太夫所謂虎屋葦屋深江是也倭俗藝能之中堪舞曲者稱能太夫

小醒井 在西本願寺之庭世醒井通水稱大醒井是

謂小醒井是此寺未移時既有之

柳原 今方廣寺大佛邊始稱柳原堂上柳原家住斯

處慶長年中豐臣秀吉建大佛殿時改柳原領

地於紫野邊別賜之云

定朝宅地 始七條金光寺者佛工定朝之宅地而子孫連

綿住之稱大佛師後世其地爲金光寺凡遊行派

遠方僧徒出蒙參內時先入京師暫寓金光寺

憑大佛師左京達觀修寺家自是執奏而遂參

內斯寺元依爲左京之宅地旅寓僧必告地主左

京者也是爲舊例

歌中山 伊勢守記云寬正六年八月今出川殿夫人安產

當年巽吉方也伊勢守著直垂典藥頭著狩衣從行

先經滑谷赴歌中山於斯處擇地自清水寺

出清閑寺處自清閑寺門前弓杖十四五許之地也

河原者四五輩先行預掘土置壺胞衣桶以赤白絹

二遍裹之典藥頭取之納壺內掩蓋埋土植松

於其上_一而歸此時住_二河原_一者主_三納藏掃除等之事_一

雍州府志卷八終

雍州府志卷九

古蹟門下

葛野郡

一夜松 天曆九年三月十二日營神託曰北野右近馬場一夜松千本當生則果如託宣是號一夜松今七本松原是也北野舊名松岡也

玉座屋敷 一條院北野行幸時設行宮於今德松院地依之稱玉座屋敷倭俗宅地謂屋敷

利休井 在北野西方尼寺東南竹木中曾豐臣秀吉公使列侯及部下良賤嗜茶人於北野社南林間各從所好而結構茶亭上千利休茶亭汲此水煮湯自茲後號利休水

(補遺)聚樂城 傳言天正十五年豐臣秀吉公於洛北內野東南築城號聚樂其結構非言語之所及也本丸內有假山有山里又外門有黑門日暮門

之號黑門以鐵飾之日暮門其門闌彫刻鳥獸草木諸人眺之不覺及日暮依之世稱之斯城荒廢後其地爲民家或爲町號又埋湮開田疇其外列侯宅地亦名存耳

茶亭跡 豐臣秀吉公在聚樂城時天正十三年十月冬命洛下嗜茶人不擇良賤於北野經王堂東北各使構茶亭互盡風流又爭奇巧秀吉公遊行其間若有所適心則入之喫茶菓遣雅興是稱北野大茶湯倭俗茶會謂茶湯雖列侯亦有預斯會者細川三齋於影向松西營茶亭扁曰松向菴面影向松之義也自茲後自稱松向菴

(補遺)朝日園 倭俗種茗處專稱園古此地有茶園稱朝日園傳言此茗園先梅尾也今無茗然原上存數株松

影向松 在北野經王堂前相傳營神託曰初雪降時必可有來現斯松上故松梅院冬每初雪必於斯松下遙拜云

紙屋川 在北野社西源出自千束村北南經吉祥院東自下鳥羽西入淀川北野南有宿紙村古於斯川製宿紙故號紙屋川云

(補遺)高橋 自_二北野社西北_一越_二紙谷川_一到_二大北山_一之橋也

御輿岡 在_二紙屋川西_一曾 嵯峨天皇嵯峨野遊獵時於_二斯處_一卸_二御輿_一暫休憩之處也後世爲_二北野社旅所_一今所_レ有之松勝定院義持公之所_レ植也

(補遺)八町畷 自_二西京紙谷川_一西到_二宇多川_一之行程凡八町餘也

衣洗池 在_二北野西南御輿岡_一菅神旅所在_レ茲其邊西

王寺古爲_二神宮寺_一今爲_二禪宗_一

鹿苑寺八景 鹿苑寺在_二大北山_一屬_二萬年山相國寺_一世所謂金闕在_二斯寺_一鹿苑院義滿公退隱之地也八景則法水院潮音閣究竟頂鏡湖池龍門瀑安民澤岩下水銀河泉是也

位山 衣笠山西北第一峯而斯山當_二洛陽一條通衢_一云眞如寺境致 眞如寺在_二衣笠山西南麓_一十禪刹之一員而屬_二相國寺_一開山塔曰_二正脉院_一此內有_二三塔_一中曰_二常照_一是佛光塔也東曰_二普濟_一是佛國塔也西曰_二心宗_一是夢窓塔也此外歸元菴寶光院聖果院鈞深軒原壇 在_二鹿苑寺西_一到_レ今存矣

宇多野 在_二御室山北山間_一古仁和寺別院又在_二斯處_一

山間方十里餘悉原野也近世闢_二土地耕種時天長通寶錢并佛器銅鏡及磁器出_レ自_二地中_一古有_二寺院_一者乎於是新建_二小社_一納_二銅鏡并天長錢等_一而爲_二地神_一也 宇多天皇葬_二斯處_一故奉_レ稱_二宇多天皇_一此野西南有_二岩窟_一是則爲_二天皇之陵_一也必矣惜哉今識_レ之者稀也土人多是不_レ識_二宇多野之號_一直呼_二御室屋敷_一凡來_二斯處_一者入_レ自_二鹿苑寺西衣笠山北山間_一自_レ是行_二西方_一者經_二龍安寺山西溪間_一出_二仁和寺之東_一

宇多河 在_二妙心寺北門前東_一源出_レ自_二宇多野_一凡此邊悉宇多村之內也太平記所謂六本杉處在_二宇多川板橋西南妙心寺中智勝院之竹林_一

(補遺)大坂 越_二宇多川板橋_一至_二妙心寺北門前_一之處也太平記所謂六本杉跡在_二此坂南妙心寺中智勝院後竹林_一

妙心寺十境 所謂萬歲山拈華室度香橋百花洞宇多河舊籍田南華塔齋宮社鷄足嶺高安灘是也

吉次宅 在_二妙心寺東南木辻村_一斯處元官家木辻之所_レ領也今土人稱_二吉次之宅地_一者木辻之宅地乎是可

レ謂_二謬傳_一也

(補遺)天授院山 在_二妙心寺西北_一元仁和寺之境內而中古妙心寺中天授院之所_レ領也又佐都寺暫分_二領之_一故或稱_二都寺山_一近世爲_二妙心寺之延壽堂_一

覺鑊爐壇跡 在_二仁和寺內外二門之間_一傳言覺鑊於

茲修_二護摩_一今植_レ松爲_レ徵傳言覺鑊之院古在_二鳴瀑東南_一今土人謂_二覺鑊屋敷_一

舊御室 仁和寺中世衰頽堂并院纔存在_二雙岡溪間_一爾

後移_二今處_一故斯地稱_二舊御室_一

內山 在_二法金剛院中_一嵯峨太上皇遊獵時登臨處也

依_レ之授_二從五位下_一故土人稱_二五位山_一

雙池 在_二法金剛院門前_一今池絕其地爲_二村居_一號_二池上村_一

御所屋敷 在_二安井村_一古安井門主之所_レ住也土人專

稱_二御所屋敷_一

木島 在_二安井村西_一曾斯處有_二老翁_一能解_二遊仙窟_一

一篇學士伊時就_レ之而學_二訓點_一翁則木島明神之化現

也

御手洗川 在_二太秦東北_一古此邊有_二賀茂齋院_一故有_二

御手洗河_一于_レ今每年六月晦日廣隆寺僧徒來_二斯河

上修_レ稜

槻坊跡 法橋顯昭住_二太秦廣隆寺中槻坊_一或謂_二陽春坊_一今坊絕其跡爲_二竹林_一

妙光寺十境 降魔堂對神軒五通廟大徹堂紫金臺甘露

井寶陀閣歲寒庵坐禪石應供岩是也

七處古蹟 在_二梶尾高山寺_一明惠上人再_二興高山寺_一

定_二七境_一所謂石水院華空殿羅婆坊三伽禪定心石遺

跡窟而禪堂院上人之昭堂也

深瀬三本木 在_二同處橋東北_一古明惠上人始種_二茗實_一

之園地也中華來朝僧清拙禪師呼_二梶尾山_一稱_二茶山_一

御所口 在_二梶尾_一瀬村護法神善明明神社傍_一傳言建

禮門院暫來_二住斯處_一自_レ茲赴_二大原草尾寂光院_一也

倭俗高貴所_レ住稱_二御所_一又所_レ入_二其處_一之門戶謂

口凡口出入之路也故云_二爾乎_一

帶取池 在_二鳴瀑西千代舊道東北_一中古斯池有_二大龜_一

其妖靈浮_二帶於水上_一誑_二往來人_一見者欲_レ取_レ之而

游_二泳水上_一則大龜牽_二其人於水中_一而食_レ之云其帶

亦實水萍也

千代_{コフル}古道 在_二帶取池西南_一是則自_レ京所_レ赴_二上嵯

峨_一而是道稱_二上道_一傍_レ北所_レ行也藤原定家卿千代

古道跡登米氏之詠歌人所遍識也

京見峠 在鳴瀑西北是自丹波一出嵯峨并仁和寺

西之坂路也洛下在一望之中峠有大松是稱山神故民間或稱山神峠

廣澤池 在千代舊道西自古賞月之處也池西有月見壇八月十五六日之間洛人來遊月出東山則其影映池水或爲二或爲三是月影浮無萍藻處之故也

八軒屋 在廣澤西南上嵯峨東土人專以赭土造燈盞倭俗謂土器

六兩 廣澤與大澤之間南北松連處也嵯峨天皇在嵯峨時是道街路廣而六兩車並行故民間斯處稱六兩

大澤池 在大覺寺東一池之中有杜蘅之處謂杜蘅池

菖蒲谷 在大覺寺之北菖蒲谷通稱而其中有別稱今所稱之細谷則元所謂寶藏院谷也保曾與寶藏院倭語相近故誤之者也斯谷南平維盛卿幼男六代御前之所逃居也今其處稱六代屋敷倭俗無男女稱高貴謂御前六代元服後稱高盛寶藏院

大覺寺之寺僧也

六代屋敷 在大覺寺之東北菖蒲谷之麓平重盛公之嫡孫維盛卿之息男也彼卿從安德帝之潛幸赴西海日使妻女幼息六代隱斯處源家一統日搜出六代此人平家之嫡孫也故既欲斬之文覺上人請彼命剃髮號妙覺爾後束髮爲一丈夫源家忌疑之遂斬死于時十八九歲也

名社ノ瀑 在大覺寺北山月輪山在愛宕東山腹古九條相國藤兼實公暫栖之故稱月輪相國別莊今爲寺中古初冬於此山設網執鵒是稱月輪鷹云

小倉山 在上嵯峨二尊院往生院三寶院常寂光寺等皆在此山中

定家卿跡 在小倉山常寂光寺前藤定家卿山莊跡今建小社其處有大松土人是謂軒端松予思定家卿所詠歌之軒端松總指山莊傍軒之松而言之者乎非下必謂一木而已乎

西行菴跡 在小倉山二尊院東南隅竹林之中歌石 在三寶寺門前曾建禮門院雜司女橫笛尋訪瀧口入道之閑居然不許一面橫笛恨之書一

首歌於寺門石而去遂沒大井川寺門石今稱

歌石也

阿大志野 在小倉山下之西北嵯峨土人之墓處也倭

俗化字訓阿太變化無常之謂而其義相當者乎

後龜山院跡 南帝熙成王文中二年卽位明德三年十

二月與北帝平而出吉野山居嵯峨應永三十

一年四月十二日崩於嵯峨今不詳其處

小倉院跡 後龜山院王子滿雅一旦世保持賴等奉爲

主將然爲北軍被破滿雅戰死爾後小倉宮與北

帝和平小倉院跡今不詳其處

野依宮 東寺一長者安井宮大僧正道尊高倉宮以仁親

王之子也以仁於光明山下有事後木曾義仲欲

爲義主而令還俗世稱木曾宮後住嵯峨野

依云々野依今不知其處

維康親王跡 維康親王後歸自鎌倉住嵯峨云今

不知其處

人見岡 在清少納言之記傳言嵯峨邊也今不知其

處

勾當內侍跡 傳言新田義貞寵女內侍隱往生院邊義

貞於北國有事後其處建塔修追薦然今不詳其

其處新田義貞社今在三寶寺是則勾當內侍之所

建也

八宗論池 在清涼寺中弘法大師於斯池邊與諸

宗僧有法論云

中院 在清涼寺西愛宕山之路藤定家卿山莊在斯

所故爲家亦住之故爲家謂中院大納言定家卿塚

則在茲近世二條家墳墓亦在茲處

中書水 在龜蒙山前中書兼明親王營苑表隱斯

山會祈水於龜山作祭文時滴斯水於硯而書

之云

歌詰橋 自二尊院到天龍寺之間也

有栖川 在天龍寺東又一所在洛東南稻荷社西

芹川 今自清涼寺樓門前西歷民家外過金剛院

前而入大井川者也又一所在下鳥羽與竹田之

間是昭宣公祈深草極樂寺本尊所拾得筭爪也

小督櫻 在天龍寺西林外三軒茶屋之東相傳小督局

高倉院所愛之女房也倭俗女子謂女房建禮門院

之父平相國清盛甚妬之小督遂出宮中而栖斯

所然非斯地大井川西法輪寺東北松林之所有也

平家物語所記與彈正大弼仲國所尋來符合者也

天龍寺十境 天龍寺在大井川東禪刹五山之第一位

也寺有二十境一所謂普明閣絕唱溪靈妣廟曹源池拈花嶺三級岩萬松洞龍門亭龜頂塔加渡月橋爲二十數一也

水石跡 在同寺方丈後一夢窓國師性好水石一故每所住水石之跡多凡本朝作假山一有兩流嵯峨流四條流是也其內所謂嵯峨流者夢窓國師之模範也一赤松岩 在同寺妙智院方丈之前庭一傳言赤松氏之所寄附一也

渡月橋 是則同寺十景之隨一也古出自天龍寺山門前西橫大井川一到嵐山麓一今按舊地圖一三軒茶屋之南今所赴法輪寺之橋北竹林所一有之前也俗誤臨川寺門前所臨大井川之石壁臺是謂渡月橋之所一有也倭俗營橋謂懸橋又謂渡橋所懸橋之本末謂橋臺一

臨川寺境致 梵音閣圓融道場枯木堂篩月軒三會院靈龜山密附冥資天厨院是也

寶幢寺故蹟 覺雄山鹿王院大福田是也

七處古蹟 惺齋藤歛夫屢遊大井川一嵐山千光寺麓七處命名所謂浪花隈舊名大瀨叫猿峽舊名猿飛群書岩舊名出合鳥船灘舊名鵜川觀瀾盤陀舊名鷹巢石門

關蒙山是也

椎野瀑 在嵐山一

戶灘瀑 在同處一

千本櫻 古植千本櫻於嵐山一而模吉野山之景一且建藏王權現堂一至今櫻處處殘堂跡絕

扇流 在大井川一中古高貴遊覽時浮金銀扇於斯川一而遣與云倭俗以金銀箔飾扇面一

赤太郎石 大井川中臨川寺前水底有一箇赤石一俗號赤太郎一傳言龍神之枕石也早歲村民祈雨於斯石一必有效驗一云

投身松 在同處河岸一此松枝垂臨水婦人女子有怨者動自松上投身於淵一

千鳥淵 在大井川中一傳言建禮門院雜司橫笛怨慕瀧口入道遂投身而所沒也

香西城址 在嵐山上 後柏原院永正四年六月細川右京太夫政元家臣香西又六企逆謀與賄賂於政元之近臣小倉某竊伺政元之在浴室令弑之政元常行魔法長爲潔齋一故無子養下屋形細川讚岐守元勝子六郎澄元一爲子然澄元未來洛於茲

香西等請九條關白尙經公之季子一爲政元之嗣一

號_二九郎澄之_一洛中大亂香西等挾_二澄之_一嵐山上構

城同年七月三好筑前守長輝自_二阿州_一入_二京_一八月香

西亦赴_二洛_一隔_二百々橋_一相戰波々伯部進出殺_二戶倉_一

香西亦中_二矢死_一九郎澄之遂爲_二長輝_一所_レ殺

車前石 龜山帝嵯峨嵐山行幸車駕過_二清原真人賴業

社前_二於_二此石邊_一所_レ駕之牛臥_二地而不_二進行_一供奉

人怪_レ之始知_レ有_二斯社_一主上則下_二御車_一自_レ茲稱_二

車前石_一凡自_二斯邊_一南謂_二下嵯峨_一一說非_二主上之

御車_一而關白之車也此說近_レ是者乎

伏原堤 在_二賴業社西大井川東_一自_レ茲到_二松尾_一古斯

邊船橋清家之所_レ領也今庶流有_二伏原稱號_一則斯由

也

(補遺)角藏屋敷 嵯峨釋迦堂西門外中院內有_二此屋

敷之跡_一古王城之四方置_二御倉_一蓄_二米穀_一以備_二凶

荒_一此處則西方之所_レ有也始吉田了意父了德自_二丹

波國保津_一來_二住斯屋敷_一依_レ之了意束髮時稱_二角藏

與市_一角藏以_レ音呼_レ之板倉伊賀守勝重爲_二京尹_一日

謂_二了意_一曰角藏其號不_レ雅則賜_二板倉之倉字_一自_レ今

後以_レ訓呼_レ之須_レ稱_二角倉與市_一則從_レ命於_二今其種

類繁榮於_二嵯峨_一稱_二倉方_一又稱_二堀氏_一此兩家土豪而

堀氏則了德之本姓也

野_レ寺 在_二伏原堤東南_一下嵯峨土人之墓所也

帷子辻 傳言檀林皇后任_二遺勅_一奉_二野葬_一時所_二著御_一

之帷子殘_二斯處_一云

安堵橋 自_二下嵯峨_一赴_二京師_一之路是稱_二下道_一傍_レ南

所_レ行者也斯橋在_二下道_一傳言一時異香聞_二比叡山_一

山徒聞以爲此香氣非_レ常赤栴檀之香氣也疑是清涼

寺有_二火災_一本尊釋尊羅_レ災也驚下_レ山於_レ茲知_レ無_二

火災_一其心定倭俗其心定謂_二安堵_一言安_二其居_一之義

乎

衣手社 在_二嵐山與_二松尾_一之間_上

西行櫻 在_二同處_一古西行設_レ菴而愛_二櫻爾後爲_レ寺今

眞言宗證菩提院是也

萬石寺畷 自_二松尾前_一出_二京師_一之路也松尾社之神宮

寺號_二萬石寺_一斯道路自_二此寺前_一始故稱_二萬石寺畷_一

倭俗野外通衢謂_二畷舊記山名率_二大軍_一自_二豐繩口_一

入_二京師_一云元豐繩午而與_二萬石寺畷_一同者

松尾神降臨石 在_二下山田_一最福寺跡_一傳言松尾明神

來_二現石上_一聽_二延朗上人_一之法_一西芳寺池東亦有_二影

向石_一明神出現聽_二夢窓國師_一之法_一處也

月讀山 在二月讀宮上

廣野城址 在松尾近隣井戸邊未_レ知爲何人之所_レ構也

丹波道 在二下山田村_二赴_二丹波_一之坂路而古來往還之

道也行程雖_レ近險隘難_レ攀故近世老坂爲_二順路_一

西芳寺故蹟 西山西芳精舍有_二三十境_一西來堂無縫塔瑠

璃殿藏密鈎寂礪精惜烟賣風店縮遠亭合同船是也

道場畷 自_二梅津村_一到_二葉室村_一之路也道場畷之號不

知_二其由_一

小泉城址 在_二道場畷東南_一曾應仁亂後公方家之威權

日衰自_レ古所_レ附_二屬公方家_一之譜代三十六人衆中多

離散其中細川松井小泉等纔殘細川松井等在_二西郊_一

小泉據_二斯處_一倭俗代々所_レ附_二屬其家_一者謂_二譜代

衆_一

傾城町 在_二朱雀西七條北_一俗稱_二遊女_一專謂_二傾城_一言

一笑則傾_レ城傾_レ國之謂也始在_二六條室町西并西洞

院中道寺町寬永年中移_二今處朱雀西_一方二町餘其

內有_二三條街衢_一故謂_二三筋町_一而外面塗_レ壁掘_レ溝東

一方有_二門凡入_一夜則不_レ許_二妄出入_一其內當_二斯時_一

也肥前島原耶蘇徒蜂起據_レ山構_レ案設_レ壁深_レ湟此遊

女町粗似_レ之故世俗稱_二島原_一中華書淫肆謂_二不夜城_一然則城寨之號亦偶相當者乎於_レ今雖_二高貴人_一間稱_二島原_一流風之所_レ使_レ然乎始_二六條外荒神河原口并三條四條之樵木町_一下粟田口松坂五條及北野等有_二遊女町_一近世島原外悉禁_レ之

藥師井 在_二鹽小路鹽通山藥師堂之西_一斯井至清冷而

溢流相傳平相國入道淨海憂_二熱病_一汲_二斯水_一浴則暫

覺_二清涼_一然水忽變爲_レ湯云

唐橋 在_二東寺西梅小路南山崎路_一古蕃客來朝時自_二

河陽_一歷_二斯橋_一入_二鴻臚館_一故稱_二唐橋_一河陽今山崎

乎在_二阿西_一面向_二東南_一依稱_レ之者也鴻臚館之所_レ有

則今東寺地也古漢唐代多通_二日本_一依_レ之倭俗稱_二中

華_一謂_二漢或稱_レ唐於_レ今多是稱_レ唐而已相傳豐臣秀

吉公爲_レ征_二三韓_一赴_二肥前名護屋_一時出_二京師_一渡_二斯

橋_一赴_二山崎道_一自_レ是稱_二唐橋_一是謬傳也秀吉公時山

崎道并此橋在_二今道北_一秀吉公嫌_二其迂遠_一易_二道於

今處_一斯橋亦於_レ茲改_二造之_一云々凡斯邊管家唐橋之

家領也高武藏守師直請_二此地於唐橋家_一欲_レ作_二第

宅_一唐橋謂_二先祖廟在_レ茲所_一不_レ忍_二改葬_一故不_レ肯_レ之

師直大怒遂殺_二唐橋某_一此事見_二舊記_一按_二三韓自_レ古

通日本故稱加羅者非唐字而或用韓字則於義又有相通者也依處依事則擇之而可也

多武杜 豐臣秀吉公欲征伐三韓出京赴肥前名護屋路過唐橋前程有杜使人問其名一土人謂是多武杜也秀吉公則使燒斯杜多武與唐倭語其音相同倭俗稱外國謂唐今征唐首途之吉兆何加施大悅過之無幾而到桂川勝與桂倭訓又相近於心增悅之云

葉室屋敷 在葉室則于今葉室家之采地而古別莊之所也有也

淨住寺 在葉室南其跡猶存矣今稱法華山寺

德大寺 在淨住寺南于今德大寺家之傳領而別莊之遺址存矣

桂別莊 桂村八條殿之領所也智仁親王之別莊其跡今尚存矣

板井清水 在久世卿迎錫山福田寺東田間俊惠法師所棲之歌林苑菴在斯邊俊惠暫赴他卿歸菴汲斯井自詠歌曰古里之板井之清水水草生月佐邊須磨須奈利爾計留加奈云々

向月 在福田寺邊

乙訓郡

弟國宮城 今不知其處一作乙訓實墮國也國史

曰垂仁帝喚丹波五女納於掖庭日葉酸媛立爲皇后以其弟葉田瓊入媛眞祗野媛簡瓊入媛三女並爲皇妃唯竹野媛古事記作國野比賣者因形姿醜返於本土羞其見返到葛野地自與墮死故號其地謂墮國始以乙訓山爲府山而其地向東高然則古宮城在此地乎

長岡宮城 在大原野杜北遺跡猶存桓武帝始先

遷都於斯地土人今稱內裏跡倭俗禁闕謂內裏

上野城址 西郊神足村南北有二村南謂下上野北稱上上野斯處有城址是中世室町家之臣上野氏之所居也凡西郊三十六人衆者公方家譜代之士也今纔二三家存而已

見返杜 在西岡古川邊菅神貶謫時出自吉祥院於斯處顧故園樹梢而所詠歌也

明星野 在西郊今里西北傳言推古帝離宮在斯地故近隣法皇寺則推古帝之所建也寬平法皇脫

履日暫爲離宮因名法皇寺弘法大師當推古
帝一百回忌之日於茲修曼陀羅供大師之像秘
在民家爾後安置法皇寺今現存世所謂合體像
是也

勝龍寺城址 在勝龍寺村文明二年冬十月畠山築
斯城而據之爾後明智光秀亦山崎敗北前暫在斯
城

大原野 凡自勝持寺邊至奧海印寺前總稱大原
野

天哉翁跡 如隱士長嘯子栖京師東山靈山晚年移
幽居於大原野勝持寺北山號天哉翁其所詠歌
之櫻樹并玄賓石驢象岩猶今存

柳谷 在勝持寺東南古有寺慧心僧都閑居之地也

汲潮井 在小鹽山傳言在原業平令入夫自難波

津濱汲潮入斯井再燒之矣今纔存其跡而已

予思非蓄潮之井疑是鹽井平中華歸州及四川諸
郡皆有鹽井汲其水以火煎作鹽如煮海法也

阿彌陀峯 在今里東南舊法皇寺西是處亦古有寺
曾慧心僧都所暫棲也舊法皇寺跡今廢井存

御倉山 在圓明寺村上或謂小倉山傳言古米穀之
官倉在斯山下或謂伐採此山之薪柴納官倉小
倉明神社在斯麓

鞆岡 在圓明寺村東北土人今稱登茂加是催馬樂
所歌之鞆岡也

福井村 在山崎西北相傳真如親王暫棲斯處云
宿院村 在山崎東北古在河東爲八幡宮宿院年

々逢洪水故移村於河西然到今勤放生會之供
奉倭俗從高貴之左右而行謂供奉從神與遊

行亦然

五位川 在山崎北界不知因何號五位川也一
說古五位鷺多在此河邊也

河陽離宮 在大山崎始山城國以乙訓爲國府源

唱爲山城守時奏以河陽離宮欲爲國府遂許
之

天皇山城址 文明二年山名是豐築山崎天王山城據

之室町殿兵士宇野上野守入道并浦上美作守等攻
之不克而還京師天正十年六月十三日豐臣秀吉

公張陣一戰而破明知同年秀吉公視山崎天皇
山構城郭土木之役未畢同十一年九月秀吉公

見山崎土地不廣移攝州難波名曰大坂然城址石壁猶存斯山上

千利休茶亭 在山崎寶積寺麓妙喜菴之中妙喜菴慧

日山東福寺末院也千利休構茶亭於斯菴而時々來

棲之豐臣秀吉公亦屢有來臨凡六尺三寸床敷疊

一帖其外有二疊設爐於其處是謂一帖臺世

人之設一帖臺也必以此茶亭爲本而倣之

關戶 在大山崎南傳言古斯處置關戒非常又征

商賈故有關戶古一代主上讓位後構院於斯

處故有關戶院之號今處々有御所內車路等之

名今所有之關戶明神社故在水無瀬川之北塘上

一年爲洪水漂流到斯處土人建之依是稱關

戶明神始此明神社在山城南界今此社依移斯

處自是關戶自爲山城南界是以南屬河內國

紀伊郡

御所屋敷 在西八條平相國清盛公之別莊也今田間

有泉石之跡年々梅雨節水草生育白蓮華亦偶開云

羅城門 平安城之南門也東寺之西千本通南九條通南

面田間有其跡柱礎今在地中六尺許下今東寺中

觀音堂有二臂毘沙門天像寺僧是謂羅城門本尊

古所置羅城門上者也案唐帝時屢有西蕃之寇

使下僧不空壓之西蕃果敗走不空奏曰予元無別

法一向念毘沙門天一依之神兵現出而破之者也

自茲後城樓上安毘沙門天像云然則傳教大師之

徒亦倣之然乎爾後羅城門絕本尊毘沙門天像移近

隣東寺中者乎昔日桓武天皇自長岡又欲遷

都於今平安城經營宮殿故時々行幸視之于時

羅城門漸成於門前留御輿詔曰今蓋瓦墜墻經

營既成然斯地勢郊外風烈處也特獨立之門至高則恐

有倒仆之患每柱根須伐一尺門卑則風又不

侵也工匠心謂構門甚堅固何有風難哉然王事

靡監應命而竊半截五寸再幸日又詔曰始伐一

尺則可也今視之則未也五寸又須伐之工匠大

驚懼天眼之不掩直告之帝曰遷都日近然則須

被期他日而事止矣遷都之後三度顛倒每度改

造之到圓融院時又仆爾後不改作之一著聞集

載羅城門上有女盜

醢醢田在東寺西北今東寺役人等住之傳言門脇

中納言教盛卿之所領也遍照心院四至境圖南以醢

釀田^カ爲^レ界云々

上石原 在^二東寺西南^一今吉祥院在^二斯處^一凡此邊有^二城址^一三箇所^一未^レ詳^二誰某住^レ焉

田中社跡 在^二九條^一今稻荷社前田中社古在^二斯處^一凡此邊地主之神也年々洪水侵^二斯地^一故遷^二今處^一古和泉式部詣^二稻荷社^一時於^二田中社前^一借^二襖於牛豎^一則斯處也

九條村 在^二東九條^一凡九條有^二三箇村^一九條鳥丸宇賀辻子是也

鳥丸村 在^二同所^一今京師鳥丸通之始也

御所屋敷 在^二東九條^一古九條家之所^一住居^一也家領于^レ今在^二斯處^一

古城跡 在^二吉祥院西北^一西岡住吉村與市依^二細川晴國之命^一而守^二斯城^一云

紀僧正跡 傳言今吉祥院舊紀僧正所^レ栖之跡也造^レ道 自^二上鳥羽^一至^二下鳥羽^一之間是謂^二造道^一傳言

元良親王新年奏賀之音聞^二鳥羽造道^一斯事見^二吏部王記^一然則造道之稱號其所^一從來^一既舊矣然不^レ詳^二誰某關^二此路^一

今里 在^二上鳥羽^一覺明有^二詠歌^一

秋山 在^二上鳥羽南^一曾 鳥羽法皇設^二離宮於斯處^一東

庭築^レ山種^二花木^一愛^二春光^一西庭種^二楓樹^一賞^二秋色^一南方避^レ暑北方見^レ雪各有^二其趣^一今悉爲^二田疇^一秋山纔殘其麓有^レ寺淨土專念僧守^レ之

田中御所 在^二城南神邊^一是亦 鳥羽法皇離宮之所^一有也于^レ今水石之跡殘

洲濱殿 在^二同處^一新大納言成親卿之別莊也今水石跡

殘凡水濱謂^二洲濱^一倭俗作^二假山^一置^二水石^一其體模^二水濱^一故今專池水謂^二洲濱^一

壇^上 在^二鳥羽上下之間^一古斯所有^二眞言宗寺^一爲^二鳥羽院之勅願所^一故住僧爲^二護持僧^一而常修^二護摩

於壇上^一奉^レ祈^二寶祚之長久^一故土人稱^二壇上^一斯僧被^レ許^二牛車^一故駕^レ車牛常在^二門前^一于^レ時人或假^二之駕

車自^レ茲後土人別飼^二牛駕^一車定^二其價^一假^二人而使^レ乘^二之爾後運^二漕米穀薪炭^一如^レ今自^二上下鳥羽^一至^二斯處^一有^二車八十輛餘^一

久我暖 涉^二下鳥羽西久我渡^一到^二久我村^一自^レ是西南

到^二山崎^一之一條路是謂^二久我暖^一

見月池 在^二竹田安樂壽院西南西行寺之中^一傳言西行法師暫栖^二斯寺^一見^二月於斯池水邊^一云

草津 治承四年三月 高倉上皇安藝國嚴島御幸時

於鳥羽草津被御舟云草津今不知其所疑與

古川同處乎

古川 在下鳥羽西古西國遷謫人多自斯川乘舟

出孤川管神亦自吉祥院來此處乘舟時有故里乃杜乃木末遠行行茂加具留々麻氏爾眺社也禮之

詠歌依之此處杜稱見返社

真阿淵 在下鳥羽一念寺之前斯寺開基真阿上人

投此河而遷化則從遺言水葬斯川此淵南北四

町間于今禁殺生具記于一念寺下一相傳真阿

村上天皇之皇子也

赤井河原 在下鳥羽西南元弘年中千種頭中將忠顯

涉淀大渡而屯赤井河原自茲向京軍

羽束杜 在淀西土人謂耻不知杜杜中有社所

勸請高產火神也

一口 在與等之東南世所謂淀一口是也然伊茂阿羅

井之訓不_レ解之今文字與古所書異乎

御牧 在一口之東古養御馬處也

淀美豆渡 凡大河以舟濟之謂渡近世築淀城

時二川合爲一而大橋成矣

同郡(自東至南)

門跡町 大佛前伏見道自五條橋南在第七町古妙

法院門主在斯處故雖爲妙法院之境内此一町

無課役依舊例每年十一月子日被招斯町人於

院内被饗酒食至近世門主之境内不漏一

宇悉被饗之

池田 在蓮華王院南瓦町東南古白川法皇之離宮

法住寺殿千畝池之所_レ有也今悉爲田依之稱池

田今法住寺法皇堂之前有池是表千畝池者也

鳥居崎 在泉涌寺前東西通衢之間古新熊野社繁

時鳥居在斯處向南御幸歷大和大路而入自

斯道今社頭東面石桓後世設之乎

今村城址 在泉涌寺通衢鳥居崎之西大和大路之東

南田間中古今村氏斯處構寨末裔今尚存

一二橋 凡大和大路自京師三條橋東歷南到伏

見豐後橋之通稱也三條與四條之間有大和橋

經斯道南方到大和國木津河南有山城大和之

境界斯道在方廣寺前謂大佛門前其南有一橋

二橋一橋之所_レ有謂菅谷是愛宕郡與紀伊郡之

境界也其南謂_二法性寺八町畷_一或稱_二稻荷前_一又號_二深草前_一其名在_二處々_一雖_レ異其實一條通衢也傳言平家沒落後平知盛卿之男暫隱_二菅谷_一遂自_二六波羅_一執_レ之被_レ誅

晴明屋敷 在_二大和大路一橋東南_一傳言天文博士大膳太夫安倍晴明之別莊也方_二二町餘_一于_レ今無_二課役_一陰陽師住_二斯中_一是晴明之餘流乎

御所屋敷 在_二東福寺門前人家後鴨川東岸上_一法性寺忠通公之宅地也今東福寺中同聚菴知_二斯處_一

釜淵 在_二東福寺門前鴨水之中_一傳言天正年中有_二石川五右衛門者_一家_二藤杜南_一是強盜之會長而率_二其徒_一濫入_二豪民家_一盜_二竊金銀衣服等_一京師人畏_レ之豐

臣秀吉公命_二京兆尹德善院玄以法印_一令_レ捕_レ之遂大釜熬_レ之於_二三條橋南_一傳言五右衛門及_二斯時_一貪欲之意念猶未_レ止竊懷_二黃鐐一錠_一身體既鎔化然黃鐐亦鎔解而粘_二貼釜底_一則預_二斯事_一之穢多採_二起之_一云斯釜久存_二其處_一一年洪水漲出斯釜流_二止御所屋敷前

川_一其處爲_レ淵釜猶在_二水底_一云

井町 在_二東福寺門前二町之門_一故土人以_二上下_一呼_レ之則遣迎院之前路也古弘法大師於_二斯處_一修_二護

摩時以_二獨鈷杵_一穿_二井爲_一閤御水_一依_レ之有_二井町之號_一爾後西山上人善惠證空其處建_二遣迎院_一又阿倍晴明塚在_二斯寺後竹林之中_一

東福寺十境 東福寺在_二太和大路一橋南_一禪刹五山之第四位也斯寺有_二十境_一所謂妙雲閣選佛湯潮音堂梅檀林恩遠池成就宮通天橋千松林甘露井洗玉欄是也繪具谷 在_二東福寺東山_一倭俗畫圖彩色之藥石總謂_二繪具_一傳言東福寺明兆之於_レ畫真妙手也粉彩特爲_レ觀其中殊色絕_レ類寺僧相傳此殊一旦出_レ自_二斯谷_一

是謂_レ得_二山靈之神助_一予思不_レ然斯邊古高貴之墓所也棺內所_レ納_レ屍之殊所_レ存_二土中_一者偶掘_二得之_一者乎明兆專稱_二兆殿司_一

自然居士屋敷 在_二東福寺龍吟菴東溪_一泉石跡殘居士爲_二南禪寺開山大明國師之弟子_一而龍吟菴國師之本菴而則爲_二塔所_一宜哉居士之菴在_二斯所_一也

凌宵山 在_二東福寺中_一十刹中普門寺之山號也三峯 在_二稻荷山上_一三峯相連是稻荷神始鎮座之處也土人或謂_二御壇_一影向杉樹在_二斯處_一倭俗神之降臨

曰_二影向_一每年正月五日社家各詣_二斯處_一稱_二御山參_一車坂 自_二東福寺南山中_一至_二三峯_一之路也古行幸之車

自是過云一說田中社亦古在斯路一然則是古詣稻荷社之人過斯路者乎

御前溪 三峯之前溪也溪間楓樹多到秋紅葉可愛世所謂稻荷山楓葉是也

雷石 在御前溪之北傳言昔年神僧誦咒縛雷於斯岩神僧今不知其名疑是淨藏貴所乎古記曰淨藏或棲稻荷山令神童取瓶花水上云然則任心使令鬼神者乎

房崖 在同所古僧房在斯處昔日溪間有瀑布泉今則亡暗水涓々而若遇炎旱則村民叩岩求雨必有應云

竹葉山 在稻荷山南

芹川 在深草西曾仁明帝行幸芹川于時昭宣

公爲少年然在供奉之列仁明帝落御愛之琴

爪帝惜之甚帝顧左右命公竟焉公奉命物色原野心念三寶且誓曰吾若不辱命就得爪

處創一精舍酬三寶德果於深草得之遂造極樂寺今日蓮宗寶塔寺則古極樂寺此地稱極樂寺

村芹川今一處在嵯峨

月見岡 在伏見源平盛衰記曰源軍或自伏見赴

尾山月見岡到法性寺二橋月見岡今不知其處伏見與深草山之間乎

日蓮石 在深草寶塔寺之中日蓮上人踞斯石說法云

霞谷 在深草凡寶塔寺之後山赭赤之地總號霞谷土人今謂霞岡曾日蓮宗詩僧元政隱斯谷

奧山 在藤杜東相傳猿丸大夫深草鄉人也於茲詠奧山爾紅葉踏分鳴鹿之歌因此歌而斯山稱奧

山者乎 墨染井 在伏見墨染地其水至清冷也往來人必掬斯水或言深草四位少將所汲之水也故又稱少將

井 城山 在伏見豐臣秀吉公讓聚樂城於秀次公而後

命佐久間河內守瀧川豐前守佐藤駿河守水野龜介

石尾貞右衛門等令築城於斯山慶長五年城潰後

不再造之天守今所在備後福山城中之是也城山中于今淺野彈正曲輪石田治部曲輪等之跡其名存

倭俗城中一部處各稱曲輪一圍似輪之謂乎或又稱丸

舊御香山 在城山北矢島峠中世御香宮暫移斯地

爾後又遷_二始處_一故斯處稱_二舊御香_一近世建_二小社_一
櫃川 源平盛衰記曰源軍自_二宇治_一涉_二櫃川_一至_二木幡_一
云々依_レ之則櫃川今六地藏村之川乎

澤田 自_二六地藏村_一到_二太和田_一之間道路之西畔也

枇杷庄 在_二伏見南_一是五箇庄之隨一也斯處有_二怪松_一
往來人必見_レ之

狼茂屋 在_二寺戶邊_一此處狼多而動害_レ人茶店老翁作_二
陷穽_一悉殺_レ之自_レ是稱_二狼茶屋_一

草內渡 在_二長池與_二玉水_一之間_二斯川亦木津之下流也_一

天正十年六月二日織田信長公於_二京師本能寺_一有

事時翌三日穴山梅雪自_二泉南_一欲_レ赴_二近江國信樂_一

邊自_二枚方_一到_二斯處_一土豪蜂起終殺_二梅雪於草內村_一

中_二後人憐_レ之葬_二草內渡西岸_一築_レ塔近世年々洪水

欲_レ頽_二岸故改_二葬飯岡淨土宗寺_一移_二塔於其處_一

梨間村 在_二長池南_一太平記第三卷載元弘年中 後醍

醐天皇移_二官軍於笠置山_一時自_二鎌倉_一催_二山陰道八

箇國士卒一萬千餘騎自_二斯村東南_一廻_二市野邊山

麓_一向_二笠置山之當面_一云

玉水 在_二伏見南南都往來之路_一相傳古此南有_二藤爲

時卿之山莊_一或言爲時玉井別業在_二泉州_一然按_二歌

枕_二城州有_二玉井_一和州有_二王井沼_一常州有_二玉井里_一
於_二泉州_一無_二斯名_一

井出里 在_二玉水南_一敏達天皇之胤美奴王之子橘諸兄

公之別業在_レ茲水石之跡于_レ今存諸兄初名葛城 持

統天皇時依_二諸兄之力_一而遂翼_二定珂瑠王於儲君_一

文武帝是也天平七年勅賜_二橘姓_一革_二名號_一諸兄_二世

稱_二井手左大臣_一醢_二藤原今纔殘在_二高堤邊_一又井手

南山下御園浦所_レ有之蛙其音聲清朗世所_レ謂井出蛙

是也

俊寬屋敷 在_二井手東南有_二玉山麓_一思俊寬僧都之寺產

在_二斯處_一故構_二別院_一者乎僧都所_二使令_一之有王則斯

處之人而屬_二俊寬_一者乎

柞杜 在_二木津村西北_一日本紀載 崇神天皇十年秋九

月武埴安彥反自_二山背_一將_レ攻_二入大和瑞籬宮_一于_レ時

天皇命_二彥國葺_一而迎戰彥國葺射_二武埴安彥_一殺_レ之

相從者悉被_レ斬屍骨溢_二平地_一依_レ之名_二其地_一曰_二羽

振苑_一今稱_二柞杜_一斯時安彥士卒甚怖走屎漏_二于_二禪

依_レ之其處曰_二屎禪_一今河內國樟葉是也按今俗垂_レ屎

而逃者本_二于此_一者乎

(補遺)

彫崎 在_二泉涌寺山東南_一倭俗製_二衣服_一衣領之外有_二遠具微_一其形上尖而下方也今此地泉涌卦疆之餘分而東南地形似_二遠具微之狀_一故稱_レ彫訓_二遠具微_一凡山川共突出之處稱_レ崎又謂_レ鼻

雙蛾石 古東福寺中莊嚴院庭有_レ池々中龍出聽_二聖一國師之法_一遂令_レ龍埋_レ地則建_二岩二箇_一爲_レ微今雙蛾石是也

相樂郡

相樂山 在_二相樂郡中西北_一

泉川 在_二相樂山東南_一元挑河也爾後誤稱_二泉川_一

一隔山 在_二泉川邊_一

恭仁宮跡 在_二泉川之側_一恭仁或作_二久邇_一天平十二年

聖武帝移_二都於久邇鄉_一

石原 在_二恭仁鄉_一續日本紀曰 聖武帝天平十五年正

月登_二石原宮樓_一云々

鹿背山 在_二恭仁鄉泉川北_一斯山麓行基創建寺跡殘土

人稱_二古寺_一此山中有_二柳谷_一

馬咋山 在_二泉川前_一柿本人丸詠_二泉川邊_一歌有_二春草

馬咋山之詞_一

狛里 在_二木津東南_一木津里東山號_二狛里_一

念佛石 在_二木津一坂_一源空上人來_二一坂_一坐_二斯石_一

唱_二念佛之號_一云

笠置山 在_二木津東南_一解脫上人之所_レ住也 後醍醐

天皇之城址在_二山上_一

綴喜郡

金橋 コガネ 在_二橋本南_一是山城與_二河內_一之境界也斯橋改造

時隔_二中間_一自_二兩國_一互半造_レ之造畢渡初之日自_二

山城國_一所_レ出之監事人與_二河內國經營之人_一各互

渡_レ橋而於_二中間_一行逢互別歸是表_二兩國境界_一之

微意也倭俗處々橋改造時感就日始渡者稱_二渡初_一而

祝_レ之

橋本 在_二金橋北_一古山崎大渡橋在_二斯處_一故稱_二橋本_一

八幡之神人又在_二斯處_一

大谷 八幡山下神寶所十九人之所_レ住也斯人放生會

時携_二神寶_一從_二神輿_一之遊行_一

放生川 在_二八幡山下_一每年八月十五日放生會放_二諸

魚於斯川_一

八幡五井 所謂石清水獨鈷水阿伽井藤井筒井是也

山ノ井 在ニ八幡山東ニ古八幡神人大臣氏之所ノ領也大

臣氏并紀氏自ニ宇佐宮ニ從來神人也然今於ニ神職人
則斯氏絕俗人山井氏其裔也

園 在ニ同處ニ世所ノ稱八幡名產牛莠出ノ自ニ斯處ニ也

一說園天家園之謂也

遙拜 在ニ八幡山南ニ是則洞峠而八幡遙拜地也此處

有ニ大楠ニ是則山城河内之境界也

美濃山 在ニ八幡山南方伏拜之東ニ善法寺光清第三女

子美濃局 後鳥羽院之所ノ寵也斯處構ニ別殿ニ棲ニ此

局ニ帝時々有ニ臨幸ニ園號ニ美濃山ニ則寄ニ斯處ニ爲ニ局

之粧田ニ倭俗女中所ノ領之田稱ニ粧田ニ言爲ニ女中脂

粉料ニ之義也

御幸谷 則上所謂別殿之所ノ有也

三國橋 在ニ洞峠麓西南ニ是則山城河内攝津之境界也

宇治郡

宇治宮城 萬葉集有ニ額田王菟道之宮借舍之歌ニ然則

菟道稚郎子之宮乎今不ノ詳ニ其處ニ也恐宇治川東離

宮之所ノ在乎

扇芝 在ニ平等院之中ニ源三位賴政從ニ高倉宮以仁王ニ

起ノ兵然其軍敗績賴政斯所敷ノ扇坐ニ其上ニ而自裁後

人憐ノ之存ニ扇跡ニ草茅繁ニ茂其上ニ又宇治川螢火世

人之所ノ稱也每年五月二十三日夜特多飛散土人傳

言源三位賴政治承四年今月今日戰死亡魂化爲螢

云

橘小島崎 在ニ宇治橋南平等院良隅ニ承久年中佐々木

梶原互爭ノ魁自ニ小島崎上下ニ騎馬涉ノ川向ニ平軍ニ

云々宇治川邊至ニ夏初ニ陰雲夜螢火散亂如ニ星點ニ人

群集見ノ之是謂ニ螢見ニ

經島 在ニ宇治橋南河中ニ曾興正菩薩戒ニ殺生之罪ニ

使ニ土人ニ棄ニ綱代ニ悉埋ニ斯處ニ納ノ經建ノ塔爲ニ供養ニ

其塔今猶存

醱醪瀨 在ニ宇治川ニ今不ノ知ニ其所ニ

三ノ間ノ水 宇治橋自ニ西方ニ第三柱間其流水至清點

ノ茶人必汲ニ斯水ニ然川流或爲ニ淵爲ニ瀨故清水之所

ノ有今必不ノ限ニ其處ニ

通圓茶店 在ニ宇治橋東ニ傳言近世宇治橋邊有ニ通圓

法師者ニ構ニ茶店於宇治川側ニ施ニ茶於諸人ニ爲ニ結

緣ニ近世有ノ人構ニ茶店於其跡ニ賣ノ茶往來人得ノ便

而茶店中設ノ棚置ニ古通圓像故世稱ニ通圓茶屋ニ中

華賣茶家置盧同像一屠肉家安樊噲像之類乎聊堪發_二胡盧_一

宇治大路方 凡宇治橋東到_三室_二之道路稱_二宇治大路_一是古自_二宇治_一經_二木幡_一到_二京師_一之道路也今土人誤稱_二乎知加多_一

宇治十帖跡 紫式部女所撰之源氏物語末十帖記_二宇治之事_一是謂_二宇治十帖_一今自_二宇治_一至_二御室_一田間十帖跡存或建_二小社_一或安_二觀音石像_一然是皆後人之附託而不足_レ取_レ之者乎

森視茶園 凡所_レ在_二宇治_一之茗園年々闢之各有_二其稱號_一然森視朝日等自_レ古所_レ稱之園也始茶園多在_二宇治橋以東_一製_レ茶人亦家_二橋以東_一故世專謂_二宇治茶_一近世上林等茶人在_二橋西_一茶園亦多闢_レ之然橋以西久世郡而非_二宇治_一今依_レ舊而總稱_二宇治_一者也今橋東土人謂_二大路方_一則宇治大路也古自_二南都_一入_二京師_一者過_二斯路_一經_二木幡山_一而出_二大和大路_一所_レ載_二延喜式_一之宇治彼方神社則在_二大路方_一百夜月井 在_二宇治茶人橋本氏後園_一其水至清冷橋本家在_二宇治橋西_一傳言聖德太子自_二南都_一來_二臨_二今京_一時掬_二斯水_一止_レ渴云

觀音淵 在_二御室戶山東溪_一御室戶寺本尊觀音出現處也或稱_二岩淵_一傳言斯邊有_二宗休者_一一旦得_二感應_一入_二斯淵_一負_二觀音像_一來云

御殿屋敷 今黃蘗山萬福寺中松陰堂之地也後水尾院母公中和門院之所_レ棲也于_レ今稱_二女院御殿屋敷_一

岡屋跡 在_二太和田宇治川東岸_一古岡屋關白兼經公別莊之所_レ有也于_レ今近衛殿傳_二領之_一

關山 在_二木幡_一是古木幡關之所_レ有也淨名寺跡 在_二關山之北_一是古藤氏建立之寺而昭宣公

基經公御堂關白道長公塔之所_レ有也方丈石 在_二日野外山_一此處鴨長明方丈堂之所_レ有而

今大石存其石面平而可_レ容_二數十人_一石面一丈許也俗或名_二千人石_一登_レ之則西南在_二一望中_一

石田 在_二栗栖與_二木幡_一之間_上神明宮在_二斯杜中_一始稱_二伊和田_一萬葉集所謂_二山品石田_一是也自_レ古稱_二勝境_一

鉢尾 在_二山崎山上_一曾慈信棲_レ茲而埋_二空鉢_一之處也相場川 在_二日野_一本三位中將重衡卿就_レ囚自_二鎌倉_一

赴_二南都_一路經_二斯處_一于_レ時重衡婦鳥飼中納言惟實女大納言佐局自_二西海_一歸與_二姊太夫三位_一竊在_二日

野於斯處相逢述永訣之情

(補遺)白鳥越 自一桑寺村出叡山東坂本之坂路也

(補遺)小野小町宅地 在小野今樹木陰森然土人不能折之若誤伐之則一村爲祟又其間小徑有竹然不見生筭傳言四位少將訪小町之路也故不

生筭按岩石在土中故無筭者乎

琴曳山 在相場川東重衡卿惜離別彈琴於斯山下云

大佛古跡 在大塚村俗謂土大佛思古泥塑大佛像

在斯處乎

大宅寺趾 在大宅村相傳延喜帝爲外祖父母宮

道彌益夫婦追薦所建之也今按大宅寺今勸修寺

乎此事具在小世繼物語

御所杜 在同所俗謂內裏跡也元享釋書曰聖武

天皇天平十二年橘廣嗣於築紫叛于時遷都於山

城州山階恭仁鄉傳言恭仁卿則斯所也日本紀云

聖武天皇十二年八月行幸伊勢國奉幣太神宮還

幸經美濃伊賀歸南都遂遷都於山城國相樂郡

是稱久邇都恭仁則訓久邇然則恭仁久邇同名

而相樂宇治異郡者乎未知何是也

山階寺跡 在旅辻村三宮明神社之邊始鎌足公建

山階寺於斯所然後移南都改號興福寺其跡東

野村妙知院之所知也土人今謂景信坊舊跡思中

世景信坊者亦住斯處乎俗或謂竹內藪

長者池 在同處相傳此所有權藤太者家甚富倭俗

富有人稱長者則藤太宅地之池水也故稱長者池

招月菴 釋正徹世稱徹書記因諷世之詠歌而謫

山科時構招月菴而棲之云今不知其處

三宮杜 在栗栖野

本願寺舊址 在東野村一向宗本願寺始在斯處爾

後移攝州大坂天滿又移京師六條今處

四宮河原 在四宮村

四辻 在同處

泉水藪 在四宮村人康親王舊跡也親王光孝天皇

之令弟也通世在斯所世稱禪師宮蟬丸到斯

處詠歌曰世中者兔底茂角底茂阿里奈麻志宮茂藁

屋茂波底志奈計禮波云々

神無杜 在四宮村諸羽大明神之旅所也此杜名見

于源平盛衰記

追分 在四宮東京路與伏見道之兩岐間凡左右相別之岐所稱追分者在處々追分牛馬於兩岐之謂也一說斯處元負分也相傳嘉禎年中佛工有號安阿彌者世稱巧手于時東奧僧來求造立無量壽佛造得日其體相甚適安阿彌之意惜與斯佛相別安阿彌至斯處送之佛亦憐其志一體忽爲二軀全形不違寸依之二人大悅東奧人負一軀安阿彌亦負一軀互相別東西故號負分此處則山城近江之境界也

足摺池 在柳山麓四宮村之中也俗謂蟬丸御手洗水斯人修秘處乎足摺義不知爲如何

坐禪地 在北華山元慶寺境內僧正遍昭之坐禪石在斯處

佛法僧谷 在北華山土人言古斯谷有寺故號佛法僧谷一說斯谷有三寶鳥偶鳴故稱之云本朝深山幽谷有鳥形類鸚鵡多入夜則鳴靜聽之則其音聲如謂佛法僧故號三寶鳥又稱佛法僧紀州高野山亦偶鳴山僧傳言斯鳥鳴則山中宿德僧出弘法大師性靈集有三寶鳥之詩然斯詩弘法住河內國高貴山時所賦之也

蛇岡 在同處事見于世繼物語

陵村 在北華山東北斯村北謂御廟野天智天皇陵在斯處古六家人掌斯陵之事云是古守陵之戶乎

陵山 天智天皇之陵也

鏡山 在陵山東斯麓有鏡池傳言曾天智天皇所

寫宸影也至清冷而水旱無增減云

蹴舉水 在下栗田源義經爲牛弱時出鞍馬山從賣金商橘次未春而東行於茲逢關原與市與

市美濃國之士也騎馬入京師其從者十人意氣揚々然列行誤蹴斯水汚義經衣義經怒其無禮拔

刀斬從者十人殺與市之耳鼻而放之義經喜以爲東行首途之吉兆也今誤斯水稱關清水關清水

在近江國大津之西追分東

血洗池 義經斬與市徒而後洗刀處也

六軒茶屋 在蹴上水之邊土人稱蹴上六軒茶屋

九體町 在同處相傳與市徒九人於斯處被斬土人憐之葬斯處造九體石彌陀佛薦之今其像纔

殘

(補遺)山城近江界 在上醍醐與岩間之間

雍州府志卷九終

雍州府志卷十

陵墓門

愛宕郡

俊舊塔 東山泉涌寺之開山也塔在方丈之東南

四條院陵 在泉涌寺

稱光院陵 在同處

後柏原院陵 在同處

後奈良院陵 在同處

正親町院陵 在同處

陽光院陵 在同處

後陽成院陵 在同處

後水尾院陵 在同處

後光明院陵 在同處

豐樂門院塔 在同處

左府敎秀公之女也

新上東門院塔 在同處

後奈良院之母公而觀修寺贈

後陽成院之母公而觀修寺

內府晴秀公之女也

中和門院塔 在同處 後水尾院之母公而近衛太政

大臣前久公之女也

東福門院塔 在同處 後水尾院之皇后而本院興子

之母公也

壬生院塔 在同處 後光明院之母后而園贈左府基

任公之女也

新廣義門院塔 在同處 當今之母后而園贈左府基音

公之女也

後光嚴院陵 在泉涌寺中雲龍院後山

後圓融院陵 在同處

後小松院陵 在同處

法親王良純塔 後陽成院第八宮也一旦爲知恩院門

主還俗後號以心菴被寓泉涌寺中樂音院故斯

院有塔

光明峯寺塔 在泉涌寺後山光明峯九條道家公薨日

任遺言火葬而建十三重塔於斯處毘沙門天木像

爲本尊納遺骨於塔下應仁兵亂悉爲焦土然其

跡殘其處號毘沙門堂谷本尊今在東福寺常樂菴

閣上

三基塔 在同寺山上、相傳御子左長家卿并法性寺忠通公及息慈鎮和尚之塔也未_レ知_二然否_一

永井右近太夫直勝塔 在同寺中悲田院、武藏國久我城主也

永井日向守直清塔 在同寺中悲田院、攝津國高槻城主也

本多豐前守正真塔 在同寺中法音院山、

忠仁公塔 藤原良房公而在_二東山蓮華王院東竹林中_一

白河院陵 在_二蓮華王院東法住院_一是則古法住寺之跡也其內有_レ堂安_二 白河院彫像_一 每年三月十三日開

帳威儀嚴然

妙法院門主堯然塔 近世妙法院門主塔多在_二法住院_一

國泰院俊山雲龍塔 在_二東山方廣寺大佛殿之南_一豐臣

秀吉公也慶長年中貶_二豐國大明神之神位_一而改號_二

國泰院_一築_二塔於茲處_一然實在_二鳥戶山上_一

耳塚 在_二同大佛殿樓門之外_一豐臣秀吉公朝鮮征伐時

軍士每_レ得_二韓人首級_一厭_二海陸運遭之煩勞_一斬_二耳

鼻_一贈_二日本_一秀吉公悉令_レ納_二埋斯所_一建_二塔於一堆

墳上_一是號_二耳塚_一爾後朝鮮入貢日使_三三使_二見_レ大佛

殿_上其所_二相從_一之人若有_レ先祖死_二斯戰_一者之子孫_上

則下_レ馬拜_二斯塚_一會源賴義東奧之戰得_二敵首_一則殺_二片耳_一携_二歸京師_一是爲_レ捷然後於_二賴義所_一住之京師內_一納_二其骸於一所_一築_二塚傍建_一寺號_二耳納寺_一追_二薦之_一秀吉公追_二其舊例_一而有_二斯舉_一者乎凡本朝軍士得_二敵首_一謂_レ取_レ首或謂_二高名_一依_二忠功_一高得_二武名_一之謂也敵之所_レ隨_レ身物或冑或刀等物添_レ首取之來謂_二分取高名_一倭俗一種謂_二一分_一依_レ之一種分來故稱_二分取_一敵首携歸入_二主君之一覽_一是謂_二實檢_一蓋檢_二軍實_一之義乎記_二首多少_一之書謂_二首帖_一本光院塔 在_二方廣寺大佛殿之北_一慈芳院 山中山城守而號_二無夢自性_一

慈芳院塔 在_二同處_一山中山城守之夫人也

二基塔 滑谷有_二十三重華藏塔_一二基_一土人傳言佐藤忠

信夫婦之塔也然不_レ知_二其實_一今考_二之石塔臺座表

記_二永仁三年二月二十日施主法西之字_一案永仁年號

伏見院之時也正法爲_レ人而建_二之者乎又所_一自爲而

立_二之乎不_レ知_二之正法亦未_レ詳_一何人_一也或謂山伏也

一說鳥部野自_レ葬_二岩淵勤操_一以來爲_二良賤之葬場_一

斯處去_二鳥部野_一不_レ遠然則此一基勤操塔而一基納

經塔乎

妙本阿彌塔 在滑谷西北本國寺所領之山中一妙本

阿彌元相州鎌倉之人而天性得_レ相_二刀劍之術_一從_二等持院尊氏公_一而來_二京師_一鎌倉松葉谷本國寺住職日靜上人尊氏公之族叔父也至_二日靜上人_一移_二本國寺於京師今處_一妙本歸_二依本國寺_一而爲_二檀越_一寺中一行院爲_二宿坊_一故死後築_二塔於本國寺墓所滑谷北山_一四月三日正當忌日本阿彌一家詣_二斯塔_一是報恩之微意也曾普廣院時文明年中妙本末裔有_二清信者_一一日義教公將_レ赴_二赤松滿祐之饗應_一干_レ時所_レ帶之中刀自拔乃命_二清信_一令_レ迫_二之俟俗以_二片紙或木片_一固_二刀於室口_一是謂_レ迫清信雖_二緊迫_一之自拔及_二第三度_一是則逢_二赤松害_一之前兆乎義教公不_レ解_レ之大怒以爲清信之用_レ心淺而囚_二清信_一于_レ時日親亦令_レ入_二獄舍_一在_レ獄清信聞_二日親之說法_一甚歸_二依之_一爾後二人共出_レ獄清信剃髮日親授_二法號名_二本光_一本阿彌元姓菅原氏松田自_二元祖妙本_一代々相_二刀劍_一事_二磨勵_一清信特爲_二傑出_一凡妙本以後不_レ稱_二松田_一而直本阿彌爲_レ氏一家祝髮後使_レ冒_二光字於諱上_一者取_二本光之光字_一者也自_二本光_一以下塔悉在_二本法寺_一

高倉院陵 在滑谷北清閑寺宸影有_二御贊_一者元清閑

寺之什物而今在_二祇園竹坊_一

小督局塔 在_二同處_一相傳小督局仕_二高倉院_一特得_レ寵始小督局葬_二此寺_一高倉院愛_二慕之_一依_二遺勅_一奉_レ葬_二小督局塔側_一云

西本願寺代々塔 本願寺開山親鸞上人以來代々塔舊在_二東山大谷_一知恩院自_二山上_一移_二今處_一時門主塔移_二鳥戶山_一則其處稱_二大谷_一而再_二興正久寺_一爲_二一向宗_一斯庭有_二大岩窟_一傳言親鸞上人之學室也然斯寺之移_二此地_一近世之事而與_二親鸞之時_一迥異矣案古高貴之塚而盜發_レ之者乎

鹿間塚 在_二清水寺中_一清水寺緣起云始延鎮欲_レ建_二伽藍於斯山_一然樹木陰森岩石屹立不堪_レ設_レ之一夜風雷急起山鳴谷應就_レ明視_二之樹倒岩頽地勢粗平而有_レ便_レ建_二堂傍有_二鹿死_一鎮以爲此鹿之所_レ作也則築_レ塚葬_レ之今猶存

一竹塚 盛衰記云一時禁裏有_二怪鳥_一于_レ時平清盛爲_二左衛門佐_一命_レ之使_レ執_二此鳥_一鳥驚入_二清盛袖內_一執_レ之則大老鼠也於_レ茲令_レ取_二南臺竹_一伐_レ之籠_二鼠於竹筒中_一埋_二清水寺岡_一則謂_二一竹塚_一云今考_レ之不_レ知_二其處_一

本法寺親塔 在鳥戶山本法寺墓地。日親元洛陽人也。

赴上總國地谷妙宣寺。事權大僧都日英。十四歲

登正中山。拜日邇上人。爲師。中年開法筵於本法

寺。花園院永享十一年。諫將軍義教公之疎。日邇

宗公大怒。曰此度不加罰。吾未下命也。汝若再諫

必當斬于時。於相國禪寺。有鹿苑相國之追薦。日

親又作立正治國論一卷。獻之謂君公信邪法。爲

亂天下之本。於是囚日親。被禁獄。逢幾許之

呵責。然不少動搖。遂燒鐺紅色蒙頭上。皮肉雖

爛。燒忍受之。自是世稱鐺蒙上人。遂被赦。

源賴朝卿塔 在鳥戶山。

鳥戶野陵 在鳥戶野。圓融院之皇后詮子而稱東

三條。一條院之母公也。又一箇在東山舊真如堂山。

他阿彌塔 在鳥戶野保福寺之跡。此處火葬場移三

條西。今鶴林是也。始所葬火葬場之石地藏殘矣。土

人今不謂鳥戶野。專謂南無地藏。又有三遍第三

世他阿彌陀佛之塔。是相州藤澤道場之開基而又住

保福寺。

平淨海塔 平清盛入道淨海塔并木像在清水坂六波羅密寺之中。

井伊兵部直之塔 在同寺。

千光國師塔 在東山建仁寺中護國院。是則斯寺開基

榮西而護國院其塔所也。各院祖塔在寺中諸塔頭。

安國寺塔 在同寺方丈之後。東福寺退耕菴惠瓊瑤甫

和尚塔而世所謂安國寺是也。曾建建仁寺方丈慶

長年中有故而刑死。

武野紹鷗塔 在建仁禪寺中正傳院。斯院織田有樂齋

之忌男左門長好之所建也。左門中年剃髮號道八

性嗜茶。故慕茶人武野紹鷗之風。故建塔於斯院。

而祭之。紹鷗始號武野。因幡守仲村祖父仲清應仁

亂戰死。父信久爲孤寓和泉堺浦。其子仲村甚嗜茶

又詠歌。遂剃髮號一閑居士。紹鷗避武田改武

野。爾後居四條北室町大黑菴。隣家有惠美須社。

倭俗以惠美須大黑天爲一雙。故自稱大黑菴。

石塔 盲人傳言曾光孝天皇一人王子目盲。故稱雨

夜御子。依之天皇特愍盲人。置田若干。被惠

無所歸之瞽者。二月十六日雨夜御子忌日也。盲人

各集清聚菴。於王子畫影前誦心經數遍。而修

法事。爾後各臨四條河邊。以石建塔供香華。而拜之。是謂石塔會。又盲人納涼會六月十九日也。其

式粗同今日之儀

織田有樂齋一家塔 在同院

崇德天皇廟 在東山眞性院 此院多紫藤 春末洛人

群觀故世謂藤寺有宸影 每年八月二十六日修

御忌 近世移東岩倉觀勝寺於此寺東合爲一寺

東本願寺門主代代塔 在東漸寺北以斯地近古大

谷 近年卜此山又稱大谷 築開山親鸞以後代々

之塔

政所湖月尼公塔 在鷲峯山高臺寺 尼公豐臣秀吉公

之正妃而世所謂政所殿也則創建高臺寺 被寄

寺產 倭俗博陸候之母公稱政所

木下二位法印夫婦塔 在同寺 始號肥後守家定 高

臺寺湖月尼公之叔父也剃髮後叙二位法印 號岡

林院長翁量公 爾後改稱常光院茂叔

長嘯子塔 在同寺 若狹少將勝俊者木下肥後守家利

入道二位法印之子而政所之姪弟也關原陣以後有

故遁世剃髮號長嘯 蟄居東山靈山山井邊 天性

嗜和歌 得其名 老後隱西山大原野 改號天哉

翁 八十餘歲而薨矣

木下一家塔 木下宮內少輔利房同右衛門大夫延俊是

皆金吾中納言秀秋并長嘯子弟也利房號圓德院 今

所 在高臺寺 是也其子淡路守利當號大光院 其

子淡路守宗利號劍峯院 木下右衛門大夫延俊號

慈光院 淡路守備中國足守城守也右衛門太夫豐後

國日出城主也此外木下一家塔多在此寺 木下法印

夫婦木像在同寺開山三江和尚之昭堂 堀鹽物直矩

與開山爲方外交 且昭堂建立時助資料依之

直矩木像亦置於開山像之傍

龜井豐前守政矩塔 高臺寺之檀越而塔在山上 石見

國津和野城主也父龜井武藏守茲矩始領出雲國 豐

臣秀吉公欲加賜因幡半國 茲矩辭曰某於日本

無所望願賜琉球國 須征伐而取之秀吉公感

其志之大 則秀吉公所持之團扇而自書龜井流球

介而賜之既艤出海上逢逆風而歸惜哉

平泰賴入道塔 在高臺寺北雙林寺 平判官泰賴入道

號性照 曾歸自鬼界島 後隱東山雙林寺山莊

於茲撰寶物集 今大德寺山門西南一堆墳上之松

亦是康賴之跡也

藤周光塔 古在雙林寺 今不知其處

西行法師塔 在同寺

頼阿法師塔 在雙林寺西行法師塔之側近世好事者所建之乎

慈鎮和尚塔 在圓山安養寺吉水之傍古法然上人所附屬慈鎮和尚之吉水院在今知恩院山上勢至堂之地也是則古知恩院也

雲生寺道入塔 在同寺良阿彌之庭織田左門者有樂之子而信長公之孫也剃髮號道入行狀似風狂曾用達磨畫像爲自己之肖像自加贊於其上所謂昔達磨今道入之詠歌世人之所徧識也其畫影亦今在良阿之菴左門子號三五郎長好法名空八

將軍塚 在圓山頂相傳桓武天皇遷都於平安城時造大土偶人使下著甲冑帶太刀而向帝都納斯山上則爲王城之鎮護故至後世天下若將有變則斯山必鳴動而豫告前表又上粟田北白川有勝軍山世人多誤謂將軍塚然在斯山者則將軍塚也彼有勝軍地藏堂故號勝軍山者也今按將所泉涌寺山上者是也所在圓山上者花園帝之陵也其故花園帝陵下

法然上人塔 在東山大谷知恩院忍性塔 南都極樂寺忍性後住東山大谷速成就院一世所謂太子堂也終於茲遷化則葬松林中知恩院自

山上移今處時移速成就院於五條南于時忍性塔大而無力改移之今猶在知恩院堂西每年七月速成就院僧來塔所有諷經

尊光法親王塔 在同寺山上知恩院門主良純法親王之後住而後水尾院之王子也

大猷院殿魄屋 在同所知恩院方丈東北倭俗高貴廟稱魄屋

天壽院殿塔 在同寺豐臣秀賴公之室也廉貞院殿塔 在同寺九條攝政道房公之室也父松平

三河守忠直卿母高田尼公也忠直後號一白尊智院塔 在同寺尊智院清譽源覺光誓者三時智恩

寺一代之住尼而近衛信尋公之息女也三時智恩寺代々葬清淨華院至尊智院有故葬東山智恩院

智恩寺在入江町故世稱入江殿池田輝政塔 在同院俗名三左衛門

良正院塔 在同寺中良正院東照宮之姬君而池田輝政之室也號良正院

松平忠雄塔 在同院號宮內少輔酒井忠次塔 在知恩院中先求院酒井左衛門尉忠次

於京西北西陣櫻井辻子而病死號先求院高月緣心

生前預建_二斯院_一世崇_二斯人_一稱_二尉殿_一

大乘院勇哲政運塔 在_二同院_一忠次之父而叙_二四品_一

號_二酒井攝津守_一

光樹院宗月九心塔 在_二同院_一忠次之室而東照宮之叔

母也

長壽院法安養生塔 在_二同院_一忠次之子而同號_二酒井

左衛門尉_一

欣未院拾譽淨哲塔 在_二同院_一忠次之弟而號_二酒井下

總守恒城_一

梅香院輝巖緣崇塔 在_二同院_一忠次之次男而號_二本多

縫殿介_一

養修院皎月光輝塔 在_二同院_一牧野右馬允之祖父也

月照院翁譽榮感塔 在_二同院_一牧野右馬允之父也

清巖院德崇興和塔 在_二同院_一牧野右馬允友和也

超雄院利岳乘見塔 在_二同院_一牧野飛驒守也

正宗院向東宗陽塔 在_二同院_一松浦肥前守鎮信之父也

專光院俊白淨有塔 在_二同院_一近江國膳所之城主本多

下總守俊次也

安倍晴明塚 在_二三條橋東心光寺_一相傳古賀茂川年々

漲出人家動壤流故安倍晴明咒_二水水忽乾則咒_一水處

五條橋北建_レ寺號_二法城寺_一言水去成_レ土之謂也眞言

宗僧住_レ焉晴明死後葬_二斯寺_一建_二塔婆_一後世又每_二梅

雨_一洪水漲斯寺不_レ得_二安居_一遂移_二今所_一淨土僧中_二

興之_一改名_二心光寺_一晴明塚亦改_二築斯處_一

須藤刑部俊通墓 在_二東三條白川橋東南青蓮院境內

人家後園_一斯人平治元年於_二六條河原_一與_二源義朝_一

相戰而死遺骸葬_二斯處_一

明智光秀墓 在_二下栗田谷川町民家後_一斯西有_レ川號_二

草內川_一

安井門主塔 在_二下栗田山上觀勝寺之跡_一是安井門主

祖道尊法親王而高倉宮以仁王之息也

無關普門塔所 在_二瑞龍山南禪寺天授菴_一則斯寺之開

基而所謂大明國師是也

規菴祖圓塔所 在_二同寺中歸雲院_一號_二南院國師_一自

得_二龜山法皇之歸依而後此寺大成故稱_二兩開山_一

寧一山塔 在_二同寺中雲門菴_一來朝之僧也

俊明極塔 在_二同寺中少林菴_一來朝之僧也

澄清拙塔 在_二同寺中聽松院_一來朝之僧也

俊伯英塔 在_二同寺中金地院_一斯人入唐之僧也

渭太清塔 在_二同寺雲門菴_一

信義堂塔 在同寺慈氏院

京極安智塔 在同寺天授菴一始爲丹後國宮津之城

主而稱丹後守有故隱洛東死後葬斯菴

松井佐渡守塔 在同寺聽松院始名新介康之元山城

國西郊人也少年而仕光源院義輝公義輝公有事

後屬細川幽齋文武之材超人世稱名人佐渡倭

俗萬品堪其事者總謂名人

大鏡院定譽一法塔 在東山禪林寺伊勢國桑名城主

松平越中守定綱也

松嚴院光山徹源塔 在同寺松平但馬守直留而越前

國大野城主也

德本院前大僧正澄存塔 在若王子是則若王子之住

職而爲聖護院門主兩峯之大先達聖護院門主入峯

時山伏內先門主而啓行者是稱先達本山當山

之先達在處々澄存今川氏眞之子而八千枚行人兩

峯十一度也七十有餘歲而遷化

今川氏眞塔 在同寺

細川遠江守塔 在三條河原頂妙寺斯寺創建之大檀

越而號頂妙寺未詳爲何人也

役優婆塞塔 在三條之東善導寺舊在頂法寺六角

堂中元和四年有故移斯寺內

里村一家塔 在同寺自連歌師昌休昌叱至法眼

昌琢各々塔在同所

澁谷一家塔 在同寺倭俗所謂能太夫也自元祖

至澁谷紀伊守勤禁裏之能其先二代剃髮後叙

法眼

善正寺前殿下高嚴道意塔 在東山善正寺則豐臣秀

次公而斯寺之大檀越也

建性院三位法印日海塔 在同寺豐臣秀次公之父也

瑞龍寺日秀塔 在同寺豐臣秀吉公之妹而秀次公之

母公也自茲瑞龍寺尼公代々葬斯處

致祥院榮岳利生塔 在同寺秀次公之室而稱政所

妙泉道喜妙喜妙授各靈塔 各在同寺秀次公之初息

也

光德院前參議清嚴塔 在同寺秀次公之弟丹波少將

秀勝也

瑞光院贈亞相花嶽妙喜塔 在同寺秀次公之季弟也

自運院塔 在同寺大和大納言秀長卿之母公也

景光院一品前右府月叟常空塔 在同寺今出川宣季

卿而本國寺日桓僧正之父也

山王塚 在_二黑谷西聖護院杜東人家後園_一曾三井寺智證大師本院謂_二山王院_一然則智證之塔乎又古日吉神社在_レ茲乎

萬無和尚塔 在_二鹿谷善氣山萬無寺_一心阿萬無智恩院二十八世住職而斯寺之開基也

法然上人塔 在_二黑谷紫雲山金戒光明寺_一

往譽沓谷塔 在_二同所_一金戒光明寺二十八世住職而爲_二中興之祖_一晚年於_二山中_一建_二清心院_一而棲_レ之

平敦盛塔 在_二同所_一號_二空顏嶺莊_一

熊谷直實塔 在_二同所_一直實於_二一谷_一斬_二敦盛_一不堪_二悲慕_一遂剃髮爲_レ僧號_二蓮生_一蓮生豫識_二死期_一自_二鎌倉_一來_二斯寺_一而逝矣今所_レ存之蓮池院則蓮生在_二黑谷_一時所_レ住之菴也菴有_レ蓮生所_レ自作_レ之像_上

崇源院殿塔 在_二同寺_一台德相公之正妃也

相應院殿塔 在_二同寺_一尾張亞相義直卿之母公也

正清院殿塔 在_二同寺_一東照宮之妃君而淺野但馬守長晟之室也

廣橋家塔 近世_二三三代及儀同兼賢公等之塔_一在_二斯寺_一

庭田家塔 在_二同寺_一

樋口家塔 在_二同寺_一

雲峯院淨閑塔 在_二同寺_一石見國濱田城主松平周防守

康映也

普王院存秀塔 在_二同寺_一丹波國龜山城主松平伊賀守

忠昭也

石川主馬佐吉信碑 在_二同寺_一松平薩摩守忠吉薨去日

與_二稻垣將監并小笠原監物等共殉死之人也_一

澤村大學介碑 在_二同寺_一仕_二細川越中守忠興入道三

齋_一至_二同越中守忠利同肥後守光利_一數度有_二戰功_一

天野半介正清碑 在_二同時_一元三河國人也慶長年中攝

津國難波之役屬_二松倉豐後守_一而有_二武功_一爾後遊_二事西藝_一

山本權兵衛尉源義安碑 在_二同寺_一慶長年中攝州難波

之役屬_二松倉豐後守重政_一而於_二河州片山_一大坂方之

先軍後藤又兵衛與_二重政_一挑鬪義安合_二一番鎗_一獲_二首級_一世多稱_レ之爾後遊_二事豫陽_一

王韃南塔 在_二同寺_一中華投化人而在_二京師_一醫術爲_レ業好作_二詩文_一且精_二筆法_一黑谷山中西雲院開基宗

嚴元爲_二朝鮮人_一於_二京師_一死則必葬_二斯山_一

東三條女院塔 在_二神樂岡東舊真如堂前山_一古山門戒

算上人夢中因_二如來之告_一而移_二尊像於聚洛_一欲_レ利_二

衆生一然三塔衆議不_レ肯_レ之斯尊像慈覺大師之所_レ作而靈驗甚多依_レ之不_レ能_レ強拒_レ之於_レ茲先移_ニ山西雲母坂地藏堂_一于_レ時本尊又入_ニ東三條女院之夢_一有_レ須_レ移_ニ女院離宮_一之告_レ於_レ茲上人益隨喜先移_ニ斯處_一爾後建_ニ鈴聲山眞正極樂寺_一於京師一條像_ニ尊像_一女院一條院之母公也薨後則葬_ニ離宮地_一故有_レ塔斯處小菴則號_ニ舊眞如堂_一屬_ニ本寺_一

貓塚 在_ニ神樂岡西北田間_一古此邊田中村有_ニ淨蓮寺_一是勸修寺家代々墳墓之地也貓塚去_レ斯不_レ遠疑是觀修寺家祖貓間中納言藤原清隆卿之塚而後世誤稱_ニ貓塚_一者乎

福塚 在_ニ神樂岡西北知恩寺之東_一案勸修寺家一代五條大納言國綱卿家甚富曾造_ニ五條內裏_一又治承四年因_ニ平相國清盛公之勸_一而遷_ニ都於攝津國福原_一于_レ時令_ニ國綱_一造_ニ里內裏_一然則此塚國綱卿之墳乎元富有之人也故稱_ニ福塚_一者乎又有_レ稱_ニ佛々_一處_ニ今土人所謂二體佛之石地藏始所_レ有乎

法然上人塔 在_ニ知恩寺_一元祖上人塔在_ニ中央_一第二世勢觀源智上人塔在_レ傍其外自_ニ第三世住職_一至_ニ三十九世上人其塔在_ニ左右二行_一

光譽滿靈塔 知恩寺三十九世中興之祖而三十八年爲_ニ住職_一九十二歲而遷化塔在_ニ開山塔東方_一

六條局塔 在_ニ知恩寺_一號_ニ貞松院蓮生_一後西院之女房而六條家之女也八條宮并曇華院尼公入江殿尼公又聖護院及毘沙門堂等之母公也實佛光寺中眞乘院之息女而清閑寺一位之姪女也

小一條局塔 在_ニ同寺_一號_ニ榮雲院_一後光明院之局而女一宮之母也庭田家源正純之姊也

中御門家塔 代々多在_ニ斯寺_一

日野家塔 始在_ニ報恩寺_一近世代々多在_ニ斯寺_一

陽春院塔 在_ニ同處_一日野家晴光卿之室而晴光薨後

爲_ニ光源義輝之乳母_一則葬_ニ斯寺_一

廣橋家塔 廣橋家之塔始多在_ニ知恩寺_一近世二三代

葬_ニ紫雲山金戒光明寺_一

天崇院塔 在_ニ洛東田中村知恩院之末寺豐光寺_一台德

相公之姬君而松平三河守入道一白之室也號_ニ高田

殿_一薨後稱_ニ天崇院隱譽泰安尼公_一

豐光院塔 在_ニ同寺_一九條道房公之姬君而高田殿之孫

女也嫁_ニ松平下野守_一薨後號_ニ豐光院貞譽祐清尼公_一

斯寺始號_ニ福禪寺_一近年有_レ故改號_ニ豐光寺_一

後二條院陵 在_二北白川_一今不_レ詳其處

後伏見院陵 古在_二同處_一今不_レ知其處

照高院門主道澄塔 在_二北白川山中_一

同門主道晃塔 在_二同處_一

聖護院門主道寬塔 道寬法親王葬_二三井寺_一然塔又

在_二白川照高院山中_一

石川丈山塚 在_二一乘寺南鑑山上_一丈山元三河之產而

仕幕下_一曾難波之役不_レ願_二軍令_一先登而得_二首級_一

其後不_レ歸_二幕下_一遊_二事西藝_一中年辭_二祿而隱_一四明

山下一乘寺村_一誓不_レ入_二朝市_一二十年餘平生嗜_二詩

文_一八十有餘而卒

王塚 在_二御泥池南_一不_レ知_二爲_二何帝_一也惜哉其西有_二

一路之通_二西南_一者是稱_二王塚_一古參詣人往來之

道路乎

魔滅塚 在_二御泥池良隅_一相傳寬平年中洛下疫病流行

依_二神說_一而斯處勸_二請貴船神_一除夜土人昇_二神輿_一而

巡_二此池_一爾後入_二炒豆於舛_一而撒_二四方_一追_二疫鬼_一然

後納_二殘豆并升於土中_一故其處稱_二豆塚_一又號_二舛塚_一

倭俗斗量摠謂_レ舛

小野毛人墳 在_二高野川北蓮華寺西南山_一中世斯地土

人蹈_レ之則爲_レ響怪_レ之年舊矣一旦掘_レ之則有_二石棺_一內存_二金牌一枚_一表有_二飛鳥淨御原宮治天下天皇御

朝任太政官兼刑部大卿位大錦上之字_一裏面有_二小野

毛人朝臣之墓營造歲次丁丑年十二月上旬即葬之

字_一則知_二小野毛人之墓_一大驚金牌寄_二高野村法幢

寺_一石棺則掩_レ土其跡猶存

散空塔 在_二叡山西麓黑谷_一法然上人始從_二源光_一爾後

師_二叡空_一故取_二兩師之諱字_一自號_二源空_一

後鳥羽院陵 後鳥羽院因_二遺勅_一納_二御骨於大原山_一云

順德院御製在_二續古今集_一然今不_レ知其處惜哉

惟高親王塔 在_二大原山上野鄉之東北_一有_二大杉_一土人

斯處稱_二一本杉_一

小野篁塔 在_二同處上野鄉_一其邊有_二舊址_一小野篁時

々來_二棲斯處_一云案家領在_二斯處_一乎一說篁塔在_二雲

林院白毫院東北_一也

建禮門院塔 在_二大原草尾寂光院_一高倉院之皇后而

安德帝之母公號_二德子_一平相國清盛公之女也

空也塔 在_二貴船末社梅宮後山壇上_一曾空也上人暫

栖_レ之其住菴跡今猶存凡極樂寺徒敲_レ瓢之竹枝於_二

鹿一

林家祠堂 在二瀬林道春本朝博學廣材之人也諸儒

多出_レ自_二斯門_一明曆三年丁酉正月二十三日七十三

歲而卒_二于江戶_一令嗣春齋始賜弘文院號父子二代

本朝中興之儒宗也延寶八年五月六日六十二歲而

卒_二于江戶_一二瀬代々之傳領也

小野山陵 在_二市原常壽寺_一皇后藤歡子之陵也常壽寺

今稱_二慶壽寺_一也

四位少將塔 在_二市原今所謂補陀落寺_一世傳少將戀

小野小町_一然終不_レ遂_二婚合_一而卒少將今不_レ知_レ爲_二

何人_一也

小野小町塔 在_二同處_一寺有_二少將并小町之畫影并緣

起一卷_一

今出川入道相國塔 在_二京極北鞍馬口淨土宗淨善寺_一

是藤兼季公而今出川家之祖也自_レ此代々葬_二斯寺_一

自_二公季公_一以來葬_二日蓮宗本國寺末寺下鳥羽常高

院_一倭俗剃髮人稱_二入道言入道心_一之義也

簀家塔 在_二同寺_一近世多葬_二斯寺_一

西園寺公經公塔 在_二京極北西園寺_一曾因_二公經公之

遺命_一而以_二慧心僧都所_レ作之地藏_一爲_二公塔_一而祭

之自_レ是西園寺家代々葬_二斯寺_一

式子內親王塔 在_二西園寺南大歡喜寺_一此寺舊在_二千

本五辻西北所謂歡喜寺町_一今五辻北聖天堂大聖歡

喜寺一字也相傳藤定家卿時雨亭始在_二千本斯寺地_一

凡稱_二時雨亭跡_一者在_二處々_一相國寺林光院中并嵯峨

常寂光寺亦有_レ之然定家塔在_二近隣般舟院_一然此門

前南稱_二定家辻子_一且式子內親王塔在_二此寺_一則時雨

亭爲_二斯處_一明矣

織田信長公同信忠公塔 在_二大歡喜寺南阿彌陀寺_一信

長公於_二本能寺_一有_レ事後貞安和尚納_二遺骨於斯寺_一

本能寺戰死百二十人墓 在_二同寺_一是亦貞安和尚聚_二

骸骨_一葬_二斯處_一

德大寺家塔 多在_二同寺_一

西洞院家塔 多在_二同寺_一

陽雲院塔 在_二佛陀寺中永孝軒_一後水尾院之乳母也

伏見官代々塔 在_二相國寺中大光明寺_一此寺始在_二伏

見_一豐臣秀吉被_レ築_二伏見城_一時寫_二相國寺中_一

藤原定家卿塔 在_二同寺普廣院_一斯地舊定家卿之末裔

冷泉家之宅地也爾後爲_レ寺斯塔即元冷泉之家裔也

同寺中慶德院亦有_二定家塔_一傳言患_レ虐人祈_二斯塔

則痊

八條殿代々塔 在_二同寺慈照院_一

廣幡家塔 在_二同院_一斯家中興祖忠幸者八條宮智忠親

王之令弟也自_レ茲以來葬_二斯院_一

唯心院林岳松公塔 在_二同院_一日野亞相輝資卿也

日峯院心叔明公塔 在_二同院_一日野家資勝卿也

寶慈院澤甫周林尼塔 在_二同院_一日野家之尼而住_二寶

慈尼院_一

寶慈院覺林周真尼塔 在_二同院_一同_レ上

中正藏主塔 在_二同寺普廣院_一此僧筆蹟世人重_レ之

藤歛夫塔 在_二同院_一世所謂妙壽院惺齋也本朝儒風興

起之人而林道春林永喜堀正意那那道圓等出自_二斯

門_一

足利義滿公塔 在_二同寺鹿苑院_一法諱號_二道義_一

足利義持公塔 在_二同寺勝定院_一法諱號_二道詮_一

足利義量公塔 在_二同寺長德院_一法諱號_二道基_一

足利義教公塔 在_二同寺普廣院_一法諱號_二道惠_一

足利義勝公塔 在_二同寺慶雲院_一法諱號_二道春_一

足利義政公塔 在_二同寺慈照院_一法諱號_二道成_一

足利義尙公塔 在_二同寺常德院_一法諱號_二道怡_一

足利義視公塔 在_二同寺大智院_一法諱號_二道存_一

足利義澄公塔 在_二同寺法住院_一法諱號_二道舜_一

足利義晴公塔 在_二同寺萬松院_一法諱號_二道照_一

足利義輝公塔 在_二同寺光源院_一法諱號_二道圓_一

足利義嗣卿塔 在_二同寺林光院_一法諱號_二道純_一斯院始

在_二西京_一是則古鶯宿梅之所_レ有也近世移_二斯寺中_一

鶯宿梅之殘種猶在_二斯庭_一

足利義昭公塔 豐臣秀吉公以_二常德院_一之寮舍養源軒

欲_レ爲_二義昭之塔所_一于_レ時朝鮮征伐之事起不_レ果

今在_二常德院中_一

齋藤內藏助塔 明智光秀之家臣也號_二忘諦利三_一山崎

敗北時於_二大津_一自殺真如堂中東陽坊僧葬_二遺骸於

真如堂墓地_一秀吉公使_レ發_レ塚而梟_二首於下栗田_一爾

後東陽坊又竊盜_二其首_一再葬_二之_一

和泉式部墓 在_二真如堂南東北院_一古所謂東北院在_二

今出川之東_一後世移_二斯處_一又在_二三條京極誠心院_一

蓮葉院尼塔 在_二京極本漸寺_一大久保氏之女而於_二三

河_一侍_二東照宮_一于_レ時稱_二西鄉殿_一

大久保家塔 凡公方家廳下大久保氏塔多在_二斯院_一

竹屋家塔 在_二京極勝定院_一

敬法上人塔 在京極清淨華院-上人淨華院中松林院之開基而後移住方丈-彼徒傳言曾爲龜山法皇之戒師-

等熙上人塔 在同院-清淨華院第三世之住職也傳言曾爲後圓融後小松稱光三帝之戒師-勅賜佛立

惠照國師號-俗種萬里小路家之人也黑谷金戒光明寺一旦廢壞斯人住彼地-而中興之爾後清淨華院

住職七人老後隱斯寺-故或稱淨華院退隱之地-入江殿塔 在清淨華院-三時知恩寺或稱入江殿斯

寺尼公多爲攝家之息女-代々清淨華院之僧爲戒師-遷化後則葬斯院-近衛植家公之息女爲中興

祖-近世同家信尋公之息女住職時歸-依知恩院-遷化後始葬知恩院-

峯松院塔 在同院-甘露寺前亞相嗣長公也

瑞光院塔 在同院-葉室前亞相賴業卿而號雲晴-

龍雲院塔 在同院-山科家言綱卿也

華岳院塔 在同院-同家言繼卿也

韶景院塔 在同院-同家教利卿也

岳春院塔 在同院-同家言經卿也

清陽院塔 在同院-同家言總卿也

龍光院塔 在同院-同家言行卿也

眞空院塔 在同院-阿野家公福卿也

慈順院塔 在同院-清水谷家實任卿也

香林院塔 在同院-姉小路公景卿也

梅樹院塔 在同院-同家濟俊卿也

正議大夫塔 在同院-同家實道也

峯松院塔 在同院-勸修寺家嗣長卿而法諱號一爰-

曉覺院塔 在同院-松木家宗保而號喜屋-

林光院塔 在同院-山本家勝忠也

清樹院塔 在同院-園家基定卿而號桃岸-

春松院塔 在同院-贈左大臣基任卿而號雲岩-

南崇院塔 在同院-贈左大臣基晉卿也右二基并斯外

塔亦近世多在誓願寺-

冬松院塔 在同院-東園家中興祖基景卿也

松林院塔 在同院-同家賢房公則寺中松林院創建

之人而號眞覽-

建聖院塔 在同院-萬里小路家時房公也

能證院塔 在同院-同家秀房公而號等祺-

崇恩院塔 在同院-同家惟房卿而號文溪-

松柏院塔 在同院-同家充房卿而號潤利-

惣觀院塔 在同院 同家兼房卿而號 空月

松月院塔 在同院 同家總房卿而號 雲岩

瑞雲院塔 在同院 同家雅房卿號 性方

淨法身院塔 在淨華院南廬山寺 東山靈鑑寺谷宮而

後水尾院之皇女也

久我家塔 在同寺

照一院塔 在同院 今出川家右府宣季公而號 歡日

三條家代々塔 在同寺

西三條代々塔 在同寺

清光院塔 在同院 正親町家季康卿而號 正圓

禪廣院塔 在同院 同家季俊卿而號 花伯

中山家塔 在同院

永壽院塔 在同院 持明院家基久卿而號 松月

善立院塔 在同院 同家基定卿而號 性雲

光淨院塔 在同院 同家英親卿而號 圓屋

慈西院塔 在同院 中院家通爲卿而號 月亭

竹溪院塔 在同院 同家通勝卿而號 素然

後十輪院塔 在同院 同家通村卿而號 虛觀

榮玄院塔 在同院 同家通純卿而號 貞山

高照院塔 在同院 北畠家信意卿而號 高岳

松岩院塔 在同院 白河家顯成卿而號 立雪

現光院塔 在同院 同家雅陳卿而號 本譽

瑞雲院塔 在同院 甘露寺家時長卿而號 瑞雲院

了廣院塔 在同院 西三條家實福卿而號 月空

已心院塔 在同院 同家實秀卿而號 歡空

國家塔 代々多在斯院

清水谷家塔 同上

野々宮家塔 同上

櫛笥家塔 同上

武者小路家塔 同上

押小路家塔 同上

園池家塔 同上

西洞院家塔 同上

萩原家塔 同上

見性院塔 在京極遣迎院 當今 識仁帝之第二宮而

母公少將內侍五條菅爲庸卿之女也 延寶五年七月十

八日三歲薨

冷光院塔 在同院 飛鳥井家雅敦卿也

芳光院塔 在同院 飛鳥井家雅知卿也

知覺院塔 在同院 飛鳥井家雅賢卿也

青雲院塔 在_二同院_一小河坊城賴豐卿也

花岳院塔 在_二同院_一山科家言繼卿而號_二月峯_一

清陽院塔 在_二同院_一山科家言經卿而號_二天真_一

韶景院塔 在_二同院_一山科家言遠卿而號_二覺夢_一

岳春院塔 在_二同院_一山科家言緒卿而號_二唯月_一

言總卿塔 在_二同院_一山科家准大臣正二位也

龍光院塔 在_二同院_一山科家言行卿而號_二覺了_一

香林院塔 在_二同院_一姉小路基綱卿而號_二華岳_一

濟俊塔 在_二同院_一同家也

慈順院塔 在_二同院_一清水谷家實任卿而號_二心月_一

淨光院塔 在_二同院_一五條家實爲庸卿也

大炊御門一家塔 自_二經宗公_一以後多在_二遣迎院南西

方寺_一此寺舊在_二大炊通_一豐臣秀吉公時移_二此處_一

德善院法印玄以塔 在_二西方寺南專念寺_一

松光院道譽塔 在_二同寺_一

草堂塔 行願寺或稱_二草堂_一傳言行圓上人信_二上賀茂

神_一曾建_二斯堂_一日勸_二請賀茂明神於斯塔中_一

堂上竹內家塔 在_二京極春日通南正行寺_一

光孝天皇陵 在_二西方寺南聞名寺_一此寺始在_二油小路

一條北_一而元真言宗也曾 光孝天皇仁和年中再_二興

今仁和寺_一故 陵在_二仁和寺西田間_一此寺亦有_レ故建

塔後斯寺移_二大炊通_一改_二宗門_一爲_二時衆_一故世稱_二大

炊道場_一

四條家塔 在_二聞名寺南妙傳寺_一

日隆上人塔 在_二日蓮宗本能寺_一則斯寺開山也

織田信長公塔 在_二同寺_一此寺始在_二西洞院今茶屋中

島氏之宅地_一而信長公有_レ事處也兵火後移_二此處_一

杉和賀若狹守塔 在_二同寺_一元佐々木之種族而爲_二紀

伊國新宮城主_一豐臣秀吉公時有_レ故被_二沒收_一

清光院淨心信敬塔 在_二同寺_一當今內侍局而五條菅

爲庸卿之女也故稱_二菅內侍_一妙法院堯恕法親王之資

第五宮之母也

畜生塚 在_二三條橋西瑞泉寺_一豐臣秀次公忤_二秀吉公

之旨_一終於_二紀州高野山_一而自裁置_二其首於三條橋

下_一而使_二幼息并三十四人侍女等_一拜_レ之遂斬_レ之於

茲秀次之首并幼息遺骸悉納_二斯處_一高築_レ墳依_二秀

吉公之命_一世稱_二畜生塚_一

園家塔 代々多在_二三條誓願寺_一

勸修寺家塔 多在_二同寺_一

油小路家塔 多在_二同寺_一

橋本家塔 多在_二同寺_一

福正院梅雲妙白尼塔 在_二同寺福正院_一是東福門院侍

女權大納言局也福正院之額 後水尾院之宸翰也斯院有_二妙白尼紫衣之像_一又置_二板倉伊賀守勝重衣冠之像_一

壽芳院月晃盛久禪尼塔 在_二同寺_一豐臣秀吉公之愛妾

而始在_二若狹國_一爲_二武田元明之室_一產_二長嘯子_一元明生害後在_二伏見城松丸_一故稱_二松丸殿_一倭俗城中主人之所_一居謂_二本丸_一又謂_二天守_一其次謂_二二丸三丸_一外郭謂_二大手_一松丸殿斯寺再_二興之_一大檀越也

漏世院雲山智西塔 在_二同寺_一豐臣秀賴公之幼子國松君也

薩摩守忠吉公塔 在_二同寺_一尾州亞相義直卿之舍兄也忠吉無_レ子故從士多屬_二義直卿_一

小笠原監物忠重塔 在_二同寺_一忠吉公之家臣而公薨日殉死之人也

佐々紀內墓 在_二小笠原監物塔之傍_一是監物寵重而爲_二監物_一殉死人也

曾我丹波守古祐塔 在_二同寺_一
池田備中守長幸塔 在_二同寺_一

池田帶刀長賢塔 在_二同寺_一

渡邊華菴墓 在_二同寺_一始仕_二中村式部少輔_一而相州小

田原陣時從_二式部少輔_一攻_二北條氏直城_一華菴插_二天月之指物_一先_二登山中城_一直入_二秀吉公之一覽_一甚被_二褒稱_一其後仕_二藤堂和泉守高虎_一難波之役施_二武功_一始名勘兵衛晚年隱_二東山大佛殿南_一倭俗稱_二武將插_一

甲背_一之符_上而謂_二指物_一指插_レ之謂也亦是亦農保利之類也華菴以_レ竹造_二大輪_一插_二鷄尾毛_一表_二月輪形_一故俗斯指物稱_二烏毛天月_一實葬_二妙心寺光國院_一

和泉式部塔 在_二誓願寺南誠心院_一塔前有_二軒端梅_一傳言式部之所_一愛物也斯寺元在_二一條北_一誓願寺移_二斯地_一時此寺亦移_二于茲_一云

山口玄蕃塔 在_二同寺_一凡山口家代々多葬_二斯寺_一父甚介塔在_二同寺_一

村井春長軒塔 在_二京極四條南春長寺_一村井長門守貞勝也

織田信長公塔 在_二京極四條南龍池山大雲院_一
織田信忠公塔 在_二同寺_一信長公之息男城介信忠公天

正十年戰死而葬_二斯寺_一號_二大雲院_一
德善院玄以塔 在_二同寺_一前田法印玄以豐臣秀吉公時

爲五奉行之隨一而兼京兆尹倭俗奉主君之命令而施行是謂奉行

頓阿塔 在四條道場金蓮寺頓阿和歌之達人也

石塔 每年二月十六日衆盲檢校於四條河原建之

警者傳言 光孝天皇王子一人目盲故奉號雨夜御

子特懸衆盲故於上賀茂封境之中置田疇若

干而被惠無所歸之盲人今其田爲賀茂社司

之有依之遠方盲人始來京師未定宿者先寓

上賀茂社家爾後點宿而移之是故衆盲尊崇光

孝天皇又日吉二十一社中取十社祭之是稱守

警神又依彈琵琶尊妙音辨財天今日光孝天

皇之御忌日也盲人檢校以下至衆分自味爽聚

清聚菴總檢校在座上壁揭守警神并妙音天之

畫像各拜之然後誦心經修御忌爾後有獻於

茲酌太瓶酒盲人六派之中於四派擇檢校之能

說平家物語者上交使談平家是謂石塔會一會

終後及晚衆盲於四條河原傍以石建塔各拜之

故世專謂石塔每年六月十六日又各會清聚菴而

有納涼之會是謂涼一座之式粗如石塔會之儀

倭俗總稱衆盲曰座頭其間官位有階級上普

謂總檢校其次謂二老三老是稱一老凡自一

老惣檢校下至十人是謂十老至十老之座常

住京師不能行他邦於十老之外檢校中擇

有材之者四人而使掌官祿之出納萬事之算勘是

謂結解衆又有主宰雜件之事者兩人是稱職

事是有髮之男子而於清聚菴有之事之日著烏帽

子蘇芳而預其事清聚菴者盲人衆會之場也常使

關山派僧守之凡衆盲之中有六派而生佛爲始祖

爾後如一檢校是人有二弟子曰覺一曰城一城

一弟子城元住洛東八坂鄉城元弟子曰城意城意

弟子曰城存一覺一弟子有四人曰通一曰靈一曰景

一曰清一是也所謂六派者城方之中大山派妙文派都

方之中志道派戶島派玄正派是也然城方南派盲人少

都方中戶島玄正派亦人少故此兩派之中各隔年而

勤之故六派之中四人檢校談平家平家未始前總

檢校大音唱太平之詞其終高呼鳥羽湊船著衆盲

一同揚大音呼惠伊々々也古檢校中之所領在

日向國至秋糧載米於大船到山城鳥羽津今雖

無其事是祝語而存古之微意也
蜘蛛塚 在五條北島丸大善院中古斯處大蜘蛛爲

妖怪遂殺之埋土中是號蜘蛛塚

日印上人塔 在本國寺日印日蓮上人之徒弟而斯寺

之開基也始於相州鎌倉松葉谷創建斯寺爾後

移京師

日靜上人塔 在同寺是則本國寺第二世而俗種足利

尊氏卿之叔父也

僧正遍昭塔 元在山科元慶寺加藤肥後守清正日蓮

宗也曾寓本國寺中觀持院日設茶亭饗賓客時

取元慶寺遍昭之塔中間鑿燈籠爲石燈臺夜會

饗客時點燈于今在勸修院

瑞雲院塔 在同寺瑞雲院瑞雲院秀巖日詮而所謂金

吾中納言秀秋卿也斯寺有白石之寺產也

今出川家塔 今出川家或稱菊亭本國寺一代住職僧

正日桓爲今出川右府宣季公之伯父故此一家先代

人多葬斯寺

六條家塔 在同寺

加藤肥後守清正塔 在同寺堂東肥後國主也

加藤肥後守忠廣塔 在同寺清正之子而肥後國主也

有故被謫出羽國庄內而薨

清淨院日壽塔 在同寺是紀州亞桐賴宣卿之室而加

藤清正之女也

松永彈正久秀塔 在同寺久秀大和國多聞城主也本

國寺之大檀越而今封境半是彈正寄進之地也倭俗

施與田地并金銀米錢及器物等於寺社是謂寄進

青木法印塔 在同寺號勸持院淨憲是五法印之一

員也

大野道犬一家塔 在同寺

多賀高忠塔 在五條橋通南宗仙寺是多賀豐後守高

忠也應仁文明之際京極持清補京師之所司于時

高忠爲所司代掌雜務聞訴事時人服善政

稱德化歸依曹洞宗而建此寺曾永平寺道元之

遺誠而曹洞宗寺院所在京師者少矣宗仙寺慈眼

寺天寧寺等也

騰蓮社玉翁塔 在同處本覺寺斯寺之開祖而俗種越

後國上杉之族也方丈有畫像建仁寺雪嶺加贊詞

此僧因細川政元之命而與日蓮宗有法論

山村觀夢塔 在同寺永正年中斯寺創建之大檀越而

爲京兆尹也不詳其諱名并稱號惜哉

佐竹氏塔 佐竹家二代塔在同寺

秀山淨輝塔 在同寺佐竹家之執事而號澁谷內

膳

(自_レ是愛宕郡至_二西南_一)

日圓塔 始在_二西京_一中世移_二一條北大峯辻子_一日圓役行者十代法孫而有_レ功_二於修驗道_一者也今誤_二此塔_一爲_二役行者_一或又謂_二辨財天勸請之塔_一

藤原定家卿塔 在_二大宮西般舟三昧院_一此門前南號_二定家辻子_一傳言古斯邊定家卿之宅地也

元證院塔 在_二同寺_一後水尾院第三王子也

正源院塔 在_二同寺_一後西院第一王子也

日蓮上人塔 在_二京北妙覺寺_一始日蓮上人少年日暫

栖_二比叡山西谷之中樺尾谷_一上人於_二武州池上本門寺_一雖遷化_二樺尾谷定光院亦築_レ塔近世妙覺寺住職

請_二斯塔_一改_二建妙覺寺中_一云

藤原家隆卿塔 在_二千本家隆山石像寺_一未_レ詳_二其故_一

後花園院陵 在_二金剛山大應寺_一元泉涌寺末院悲田院

在_二斯處_一曾 後花園院避_二應仁亂_一入_二御足利家室

町亭_一終於_二此亭_一崩于_レ時泉涌寺爲_二兵火_一所_レ燒

悲田院去_二室町殿_一近故竊奉_レ出_二白雲安禪尼寺_一遂

奉_レ葬_二斯院_一近世悲田院移_二泉涌寺中_一而後建_二大應

寺於其跡

狩野古法眼元信墓 在_二日蓮宗妙覺寺_一凡本朝畫工之

秀逸不_レ乏_二其人_一畫僧有_二雪舟周文揚月等_一於_二俗

家有_二土佐一家光茂等并狩野家之種族其外能阿彌

能之子藝阿彌藝之子相阿彌及蘇我蛇足小栗宗湛等

各有_二出藍之青_一其勢奇而甚巧也然動有_二企及者_一只

至_二元信_一筆法有_二格式_一一草一木無_レ不_レ盡_二力非_一他

人之可_二髣髴_一者_一也本朝畫工之品評以_二中華之牧

溪_一比_二本朝之雪舟_一以_二中華之馬遠_一比_二本朝之元

信_一斯論爲_二適當_一者乎

狩野法眼榮德墓 在_二同寺_一斯外近世狩野一家墓多

在_二此寺_一

慶譽和尚塔 在_二上立賣西北淨土宗報恩寺_一則斯寺開

基而 後柏原院歸依之僧也

清閑寺代々塔 在_二同寺_一

黑田長政塔 黑田古筑前守以_レ病死_二斯寺_一

仁叔周孝尼藏主塔 在_二同寺_一曾豐臣秀吉公之侍尼

而甚得_二寵遇_一世專稱_二孝藏主_一此寺前橋斯人之所

造也欄干銅護朽頭有_二慶長七年周孝首座寄進之

字_一依_レ之則後轉_二藏主_一又號_二首座_一者乎山科西山明

應菴者東福寺善惠軒忠長老退隱之地也忠長老孝藏
主俗種共官家西洞院之族也故依斯好實葬明應
菴一者也

源賴光塚 在船岡山南田間或言蓮臺寺中真言院之
後壇上所_レ有是也

天皇塚 在紫野雲林院南傳言圓融院陵也案榮花
物語云圓融院奉葬紫野閑院左大將朝光不
_レ堪懷舊之情詠歌曰紫之雲之懸氏茂思幾也春乃
霞爾奈志氏見牟登者云々依之則圓融院之爲陵
也爲必者乎土人今專稱天皇塚

二條院陵 在洛北船岡山北麓陵上有五重石塔
然千利休取其九輪爲己塔于今在大德寺中聚
光院其餘鑿凹處爲洗面手之水盆利休因斯
崇遂不克終

後冷泉院陵 在船岡今不知其處一說千利休之
所取用者斯陵之塔也未_レ知孰是也

乙弱龜弱鶴弱天王丸塔 舊在船岡山然今不詳其
處斯四入源爲義之幼息也保元亂後爲義被殺時此
四人亦於斯處殺之
信貴圓能塔 在同處

阿刀氏塔 在千本蓮臺寺中光明院弘法大師之母而
光明院大師之所創建也
後藤祐乘墓 在同寺石藏坊祐乘元美濃國之武人而

仕普廣院義教公一旦觸義教公之忿怒而使入
獄舍于時季夏暑氣逼肌而難堪守獄者憐之以
桃實壹箇與祐乘祐乘大悅食其肉爾後核面以
小刀彫刻日吉二十一社并猿六十六疋其細密也
非言語之所及也遂聞義教公公一覽之大爲奇
則免其罪使出獄舍則命祐乘以金銀銅使
造粧刀劔之具是俗所謂目貫髮搔小柄也是稱
三所物其所彫刻之花鳥人形真如生也世人甚爲
珍前所謂桃核今在常陸國土人爲日吉社之神
云其次宗乘光乘特爲傑作祐乘與古法眼元信同
時家居亦相近故欲彫刻人物花鳥則先使元
信寫其圖而依其樣彫之元信之粉本并榮德之
畫本于今在末裔家到今八代連綿凡斯一家之
所造世謂家作今見祐乘畫像之在末裔者則
著烏帽子蘇芳然則祐乘始諱而剃髮後直以音呼
之者乎

大森宗勳墓 在同寺是吹尺八之巧手也近世東山

黑谷亦築塔

紫式部塔 元在紫野白毫院 白毫院近世移 千本引

接寺中 然今無其塔 引接寺閭魔堂前元有大華藏

塔 寺僧以是爲紫式部塔 塔臺有至德三年丙寅

八月二十二日圓阿彌之字 然則圓阿彌爲式部 建

之者乎抑又爲萬靈結緣所設之者乎未可知其

實

大燈國師塔 在龍寶山大德寺方丈雲門菴 是則宗峯

妙超而大德寺之開祖也

南浦紹明塔 南浦曾入宋傳虛堂之法 而歸本朝

住龍翔寺 大燈國師嗣法於南浦 龍翔寺始在洛

西安井村西 後世移寺中 置像於茲 然塔猶在舊

龍翔寺跡 塔同龍翔寺第二世南浦法嗣松岩宗友塔

同在其地 土人其處稱大德寺屋敷

徹翁義享塔 徹翁大德寺第二世也 塔在寺中德禪寺

言外宗忠塔 在寺中如意菴

華叟宗曇塔 大德寺中無塔所 近江國堅田祥瑞寺祖

也

養叟宗願塔 在寺中大用菴

春浦宗熙塔 在寺中松源院

東溪宗牧塔 在寺中龍源院 東溪者實傳宗真之法嗣

也

陽峯宗韶塔 在寺中龍泉庵

實傳宗真塔 在寺中養德院

古岳宗旦塔 在寺中大仙院 古岳者實傳之法嗣而

爲大德寺北派之始祖

大林宗套塔 寺中無塔所 泉南界南宗寺是也

笑嶺宗訢塔 在寺中聚光院

春屋宗園塔 在寺中三玄院

以天宗清塔 在寺中龍泉菴 陽峯者北條早雲所歸

依也 遂應其招而住 相模國早雲寺 故斯派稱關

東派

近衛殿二代塔 近衛信尋公尙嗣公二代始爲大德寺

之檀越 故方丈有塔

一休宗純塔 在同寺中真珠菴 此僧之法流爲一休

派 北派南派關東派 一休派是稱大德寺四派

江月宗玩塔 在同寺中龍光院 則斯院之開祖也

高松殿塔 在同院 高松宮好塔親王而 後陽成院之

王子也

妙吉祥院塔 在同院 號聖輔義英太夫人 好仁親王

之姬君而後西院之女御也

黑田如水圓清塔 在同院始號小寺官兵衛孝高爾

後號黑田甲斐守剃髮後稱龍光院如水圓清

黑田筑前守長政塔 在同院以病於報恩寺薨

養德院塔 在同寺養德院鹿苑相國義滿公之異母弟

詮滿而號養德院

傑山竹影塔 在同院梶井門主也被歸依徹翁和尚

智泉尼塔 通玄寺曇華尼院之開祖而俗種四辻宮左府

義成公之女也始葬大德寺中德禪寺之寮舍清源院

爾後移同寺中昌林院自智泉尼以下曇華院住尼

代々葬斯院

織田信長公塔 豐臣秀吉公爲信長公追薦建惣見

院於大德寺中寄寺產有塔并彫像

織田信忠公塔 在同院又有彫像

同常眞公塔 在同院內府織田信雄公剃髮號常眞

信忠公之弟也織田一家塔多在斯院

花屋壽永尼塔 在同院信長公之母公也

天瑞寺殿塔 在同寺天瑞寺豐臣秀吉公之母公而世

所謂大政所也

豐臣一家塔 多在天瑞寺

岡崎殿塔 在同寺信長公之女而松平三郎信康公之

室也信康公始號岡崎三郎故此室稱岡崎殿信康

公自裁後久在京師烏丸中御門南

佐々成政塔 在同寺肥後國守佐々陸奥守也

大光院塔 在同寺中大光院豐臣秀次公之舍弟而所

謂大和大納言秀長卿也

豐臣秀俊塔 在同寺秀長卿之長男也

藤堂高虎塔 在同寺始藤堂和泉守高虎仕大和大

納言秀長卿爾後領伊勢伊賀兩國大光院舊在伊

賀國高虎移大德寺中號寒松院權少都高山道

賢

要仲玄英塔 在同寺中金龍院飛驒國主而始號兵

部大輔剃髮後叙法印

雲峯閑公塔 在同院玄英之養子而號飛驒守自

茲以下代々斯院建塔

春溪宗梅尼塔 在同院法印玄英之室也

三要隆玄塔 在同寺眞珠菴入明醫家半井春蘭軒也

畫像狩野元信之所圖而贊詞惟高妙安之所作也自

茲後半井家塔多在斯菴

長生巨松塔 在同菴半井氏醫家而叙法印號友

竹院

昌室瑞桂塔 在同院 號半井通仙院 仲菴休菴驢菴

等之父而高壽人也

宗鑑上座塔 在同菴 世所謂山崎宗鑑也始爲常德

院義尙公之侍童也

夫泉宗丈塔 在同菴 曾我式部入道號蛇足軒元武

人而寓越前朝倉家且有能畫之名 曾聞禪法於

大德寺一休和尚 故眞珠菴畫幅多末裔今仕飛驒國

金森家

茶人珠光塔 在同菴 珠光始爲南都稱名寺僧元嗜

茶而得點茶之法 慈照院義政公愛之遂使還

俗後來住京師六條邊而構茶亭 義政公屢有來

臨曾學插花之法於相阿彌 凡倭俗點茶法珠光

紹鷗利休等爲本而倣之俗其長謂和尚准法中

和尚之例而尊尊崇之謂也珠光子稱宗珠

久菴宗長塔 在同菴 連歌達人而宗祇法師之高弟也

晚年得今川氏之眷遇棲駿河國丸子村柴屋爾後

柴屋爲寺屬京師正法山妙心寺 宗長時憂大德寺

之無三門捨白銀壹佰兩而建之然後千利休重

設閣於門上今號金毛閣

眠室進公塔 在同寺聚光院 三好修理大夫長好而則

號聚光院

千宗易塔 在同院 世所謂拋客齋利休也元和泉國

界之人而田中氏也斯祖仕室町家而爲同朋號

千阿彌其裔終以千爲稱號也曾鹿苑院義滿公時

漸世治而良賤事過奢俗風好諂諛故細川賴之憂

之使剃髮徒四人著斑紋之衣服橫大小之刀

劍徘徊殿中而於群士列座之前作俳優而爲中

諂笑是稱同朋或謂童謀自茲後呼面諛之人

而專謂爲同朋之事故士大夫諂諛之流風自己而

愧悔之今公方家同朋亦職此由也一說泉南時衆千

阿彌之子而專嗜茶者也

里村紹巴塔并一家塔 在同寺正受院

大友宗麟塔 在同寺瑞峯院 豐後國主也然家系斷絕

蒲生氏鄉塔 在同院 世所謂蒲生飛驒守而會津百二

十萬石之領主也始名忠三郎薨後號昌林院高岩

宗忠

蒲生秀行塔 在同院 氏鄉之男也自茲代々建塔於

斯院號弘眞院覺山靜雲

蒲生忠郷塔 在同院 秀行之息男而號松平下野守

法名見樹院得譽玄光

蒲生忠知塔 在二同院一忠鄉之息男而號二中務大輔一法

名興聖院華岳宗榮至二斯時一蒲生家系斷絕

福昌院怡伯宗悅塔 在二同院一前田又左衛門利昌之息

男而肥前守利勝之弟前田孫四郎利政也始領二能登

國一有故被沒收一

松倉重次塔 在二同院一松倉豐後守重次始名右近仕二

大和國筒井順慶一爾後事二豐臣秀吉公一領二豐後國內

某地一大有二武名一號二龍珠院雲岩宗關一其子長門守

重政有故而於二東武一自裁號二切外院久叔宗遠一自

茲後家系斷絕

前黃門隆景塔 在二同寺中黃梅院一毛利元就子而爲二

毛利家之執事一領二筑前筑後兩國一世謂二小早川隆

景一死後號二黃梅院泰雲一生前住二中納言一文武兼備

之人也

天樹院雲岩宗瑞塔 在二同寺一毛利輝元而長門周防兩

國之主也

春谷正榮塔 在二同寺中清泉院一世所謂桑山法印而

號二果法院一

佐竹義宣塔 在二同寺中玉林院一佐竹修理大夫也

春林院如夢道長塔 在二同院一有馬玄番頭賴利也

瓊林院龍雄道雄塔 在二同院一有馬中書也

靈源院賢峯道哲塔 在二同院一有馬玄番頭也

祥雲院眞英宗英塔 在二同院一片桐出雲守也

東井玄朔塔 在二同院一世所謂延壽院也啓廸院玄治塔

亦在二斯院之派下鷹峯普明庵一

緣翁正因塔 在二同院一醫家亨德院也

小出播磨守塔 凡小出一家之塔多在二同院一

古溪宗陳塔 在二同寺大仙院一

正岫因公塔 在二二玄院一石田治部少輔三成而號二江

東院一刑死後葬二斯院一

先翁宗進塔 在二同院一森美作守而號二本源院一

休甫宗可塔 在二同院一寺澤志摩守也

金甫宗屋塔 在二同院一古田織部正重能也

天叟紹運塔 在二同寺大慈院一立花飛驒守忠貞也斯一

家塔多在二斯院一

村上周防守塔 在二同院一

大雲用公塔 在二同院一四品拾遺補闕筒井伊賀守也

心月宗安塔 在二同院一山口左馬頭也

機翁宗法塔 在二同院一田中民部少輔也

順翁宗曲塔 在同院_二分部左京亮也

松隱宗茂塔 在同寺碧玉菴_一立花立齋也

傳翁德胤塔 在同寺興臨院_一畠山家而斯院創建之大

檀越也則號_二興臨院_一

前田利昌塔 在同院_二能登太守前田又左衛門也

畠山入菴塔 在同院_二號_二長門守_一法名宗波

同 一菴塔 在同院_二法名紹閑

蜂須賀蜂菴一家塔 在同寺大源菴_一始號_二阿波守_一自

茲以下代々至鎮忠英元隆等塔在_二斯菴_一

水野忠重塔 在同寺瑞源菴_一水野和泉守而號_二瑞源

院_一自茲以下代々日向守勝成美作守勝重等斯寺有

塔

松浦隆信塔 在同寺正宗院_一松浦壹岐守而正宗院大

檀越也號_二向東宗陽_一

威德院塔 在同寺威德院_一宗對馬守義智之室而宗對

馬守義成之母也號_二月桂宗江_一

玉甫紹琮塔 在同寺高桐院_一則此院之祖而俗種細川

幽齋之弟也

以南宗薰塔 在同院_二三淵加賀守晴員之養子而細川

幽齋之實父也幽齋三齋共爲_二細川刑部太輔之養子_一

故稱_二細川_一

細川幽齋塔 在同院_二兵部太輔藤孝而死後號_二泰勝

院徹宗玄旨_一

細川三齋塔 在同院_二豐後小倉城主細川越中守忠興

而剃髮號_二松向菴三齋宗立_一此人武藝之暇甚好_二茶

茶亭庭有_二所愛之石燈臺_一遺言謂死後以_二是爲_二塔

故從_二之_一

細川忠利塔 在同院_二細川越中守而領_二肥後國_一其息

肥後守光利塔亦在_二同處_一

細川光尚塔 在同院_二越中守之男而稱_二肥後守_一薨後

號_二其解院回巖宗夢_一

山崎家盛塔 在同寺派瑞光院_一號_二山崎左馬頭_一斯人

瑞光院創建之大檀越而自茲以下代々塔在_二斯院_一

山崎家治塔 在同院_二山崎甲斐守而號_二桂岩院正溪

遊覺_一

淺野長治塔 在同院_二備後國_一三次領主而號_二因幡守_一

城外宗摺墓 在同院_二觀世彥右衛門是世所_二謂御山

而擊鼓之名手也

牛翁道叱墓 在同院_二觀世又次郎也

鐵叟宗冶墓 在同院_二觀世新九郎也

貞岳榮公塔 在同院 別所豐後守而號 德岩院

玉室宗珀塔 同寺芳春院之開祖也

芳春院塔 在同院 羽柴肥前守利常之室而 臺德院

殿之姬君也斯院創建之檀越而號 芳春院華岩宗富

聖山英賢塔 在同院 贈亞相羽柴肥前守利長卿而

號 瑞龍院

一峯克乾塔 在同院 前黃門松平肥前守利常卿而

號 微妙院

將岩天良塔 在同院 松平筑前守光高而號 陽廣院

肥前守利常卿之息男也

瑞岩良祥塔 在同院 肥前守利常卿之次男而越中富

山城主號 松平淡路守利次 死後稱 龍光院

機雲宗甫塔 在同院 松平淡路守利次之弟而稱 松

平飛驒守利治 加賀國大聖寺之城主也死後號 實性

院

靜山宗光塔 在同院 丹後國宮津城主京極丹後守高

國而號 淵龍院

春室宗信塔 在同院 青山伯耆守而號 泰雲院

青山因幡守塔 在同院

全齋性圓塔 在同院 建部丹後守而號 自德院

山陰宗可塔 在同寺寸松菴 作久間將監眞勝而或

號 匿數齋 斯菴創建之大檀越也

大有宗甫塔 在同寺孤蓬菴 小堀遠江守 一而斯菴

之大檀越也

三叔宗圓塔 在同寺高林菴 片桐石見守貞昌而此菴

之檀越也

平判官泰賴塔 始在大德寺三門前 始建 二石地藏

爲 泰賴夫婦塔 石地藏今置 門外大將軍社後 其跡

老松數株存相傳此邊元泰賴之宅地也

野間玄琢塔 在鷹峯白雲溪 以 醫業 叙 法印 號

壽昌院

武田道安塔 在同處北山 以 醫術 叙 法印 號 獵

德院

慈光院塔 在同處太虛山光悅寺 京兆尹板倉伊賀守

勝重法名傑山源英也 寬永年中勝重奉 台德相公之

命 令 本阿彌光悅 關 鷹峰之地 爲 田疇 且置 一

村 爲 丹波往來之馬驛 人民得 便最初先所 置之

南北四町土人稱 光悅町 光悅爲 日蓮宗 故斯地建

寺請 日蓮宗本法寺法性坊 爲 開祖 號 興壽院 日

蓮 此寺中東岡設 伊賀守塔 則爲 鷹峯之守護神

每年四月二十九日正當忌日光悅聚_二村民_一使_レ祭_レ之
自_二光悅光瑳_一至_二光甫_一代々監_二護鷹峯_一人民從_レ之

近世由信院日得於_二光悅寺中_一建_二一字堂_一晝夜修_二
不退轉之常題目_一米錢施入之人不_レ絕以_レ是爲_二資
料_一晝夜限_二一時或半時_一交唱_二法華題目_一

松雲院塔 在_二同寺_一板倉勝重之男同氏周防守重宗
號_二松雲院_一法諱秀峯源俊相續爲_二京兆尹_一光悅特
得_二寵遇_一

了寂院光悅墓 在_二同寺_一本阿彌光悅能相_二刀劍_一甚
得_二磨拭之術_一凡本阿彌家之三事第一相_レ刀是倭俗
謂_二目利_一第二磨礪是謂_二磨第三淨拭是謂_レ拭是也相
_レ刀易_レ爲_レ之磨礪次_レ之至_二淨拭_一甚爲_二難光悅兼_三
事_一特長_二淨拭之事_一且精_二筆法_一而遂作_二一家_一世稱_二
光悅流_一八十有餘而死法諱日豫

空中院甫光墓 在_二同寺_一本阿彌家之三事共兼_二能之_一
其內淨拭法超_二祖父光悅_一世人見_レ之必知_二光甫之
所_一爲也凡不_レ名而知_二其人所_一爲是非常之巧手也光
甫平生嗜_二茶構_一茶亭於鷹峯千利休亭之跡_二招_二貴
賤_一人又不_レ辭_二遠方_一而來八十有餘歲而死法諱日諦
柳原家塔 始在_二大德寺北紫竹村淨德寺_一近世有_レ故

移_二聚樂西北淨福寺_一淨德寺則柳原家一代之號也
(補遺)

後花園院陵 一說奉_レ火_二葬_一京北悲田院_二納_二御骨於丹
波常照寺中_一光嚴院之陵傍_二云悲田院今京北大應
寺之地也近世移_二泉涌寺_一今大應寺有_レ陵常照寺無_二
其跡_一

小倉家塔 在_二西賀茂正傳寺中瑞泉菴_一菅玄同石碑亦
在_レ玆

清和天皇陵 奉_レ火_二葬_一下栗田山_二納_二御骨於水尾山_一
云今栗田山無_レ陵在_二丹波水尾山_一水尾始屬_二山城
國_一

花園院陵 中山定親薩戒記曰 花園院崩東山太子堂
山上築_二山奉_一葬_レ之則於_二太子堂_一修_二法事_一十樂院
上人主_二斯事_一故於_二萩原殿_一無_二法事_一云々按速成就
院太子堂忍性之開基而始在_二今知恩院之地_一十樂
院之地者青蓮院之別號而今東山知恩院山者悉青蓮
院之所_レ知也其山上有_二俗所謂將軍塚_一依_二薩戒記_一
則斯塚是 花園院之陵也 桓武帝時所_レ設之將軍
塚今所_レ在_二東山泉涌寺上_一之者是也 花園帝慮_二後
世之變遷_一七處置_二陵七處置_一宸影_二今萩原所_レ存俗

謂王塚則花園帝之陵而此地則萩原殿之跡也西
梅津長福寺所置之宸影者法印豪信奉命而寫之
者也觀應元年八月洞院公賢卿詣長福寺奉拜
宸影之事并公賢卿令季忠寫宸影之事詳見于
園太曆

源爲義塔 按保元物語源爲義入道義法於七條朱
雀被斬首則納圓覺寺云々今朱雀權現堂前竹
林塔之所存則古圓覺寺之跡乎

人丸塚 古在日蓮宗本國寺中斯寺舊記云本國寺第
二世日靜上人自相州鎌倉松葉谷遷斯寺於洛陽
時上人載本尊等於舡一艘北自一條堀河從流而
下於其舡止處須建寺則於人丸塚前舡止而不
行遂建寺於茲處云案倭歌三神社內今於洛下
有住吉社玉津島而無入丸社依之則人丸社在
本國寺中也爲必矣今所在八坂鄉法觀寺北之
人丸塚始在本國寺地而建斯寺時移人丸塚於
今處以建社於塚上者乎

在原行平塔 在三條等善寺未知因何在茲此寺
淨土宗深草立義而屬東山禪林寺

國阿上人塔 在靈山正法寺傳言雙林寺上人行法之

地而正法寺墓地也

實忠塔 實忠者南都東大寺之僧而始修二月堂之行
法人也遷化後洛東鷲峯山金山寺築塔云金山寺今
高臺寺之地也然今不知其塔之所也有也
須藤刑部俊通塔 在東三條白川橋西南人家後園一

說非俊通佐藤忠信愛妾力士之塚也

本多三彌塔 在南禪寺稱忠烈廟

竺仙梵仙塔 在南禪寺楞嚴院來朝之僧也

本杯椿庭塔 在同寺語心院入元之僧而或名海壽

欲了菴錄所謂日本書藏主也傳言俗種足利尊氏卿之
季子也

得岩惟肖塔 在同寺雙桂軒是少林院之寮而此軒之

祖也

太渭宗渭塔 在同寺

蘭坡景湛塔 在同寺正因菴

靈彥村菴塔 在同寺聽松院

太白眞玄塔 在同寺雲門菴

景南英文塔 在同寺東禪菴

玉曉梵芳塔 在同寺

藍田塔 在同寺金地院

大有有諸塔 在_二同寺_一製_二南禪記_一之人也

兀菴普寧塔 在_二西賀茂正傳寺_一則斯寺之開基而來

朝之僧也晚年歸_レ宋

等連竺雲塔 在_二天龍禪寺妙智院_一

清曇獨芳塔 在_二同寺_一

謙岩原冲塔 在_二同寺_一

無礙中膺塔 在_二同寺_一

妙澤龍湫塔 在_二同寺南芳院_一

絕海中津塔 在_二同寺靈松菴_一近世靈松菴絕絕海像并

遺書等在_二寮舍招慶菴_一此僧入明見_二太祖_一賦_二熊野

詩_一太祖則賜_二和章_一

汝霖妙佐塔 在_二同寺鹿王院_一此僧與_二絕海_一入明見_二

太祖_一受_二宸筆_一

海印善幢塔 在_二同寺藏光菴_一

海門承朝塔 在_二同寺慶壽菴_一

鐵舟塔 在_二同寺_一善_二草書_一之人也

車岳塔 在_二同寺_一入明出世俗種一條禪閣之令弟也

策彥周良塔 在_二同寺妙智院_一

江心塔 在_二同寺_一

古劍妙快塔 在_二等持寺_一

臥雲周鳳塔 在_二相國禪寺慶雲院_一此院今絕寮舍茲雲

菴殘周鳳所謂鳳瑞溪是也

嚴仲周噩塔 在_二同寺大智院_一

周興彥龍塔 在_二同寺_一

觀中中諦塔 在_二同寺普廣院_一

仲芳中正塔 在_二同寺蔭涼軒_一入明施_二楷書之名_一仕_二

鹿苑勝定普廣_二三公_一蔭涼之號始_レ自_二斯人_一

橫川景三塔 在_二同寺小補軒_一

叔英寶播塔 在_二同寺雲頂院_一

宗山等貴塔 在_二同寺萬松院_一俗種伏見殿之息男也

一菴一麟塔 在_二建仁禪寺靈泉院_一入元得_下讀_二柳文_一

之法_上

中岩圓月塔 在_二同寺妙喜菴_一骨撰_二日本紀_一然有_二朝

議_二不_レ行_一

雪村友梅塔 在_二同寺大龍菴_一十八歲入元及_二四十_一而

歸朝曾在_レ元與_二趙子昂_一結_レ交

九鼎器重塔 在_二同寺大中菴_一

相山良永塔 在_二同寺祥雲菴_一入宋之僧也

南堂良楷塔 在_二同寺_一

山叟慧雲塔 在_二同寺_一

天與清啓塔 在同寺禪居菴一兩回入明有再渡集一

此山妙在塔 在同寺如是院一

桂林德昌塔 在同寺一

子建淨業塔 在同寺妙喜菴一入明之僧而終彼地一

嚴竹隱塔 在同寺五葉菴一

章建藏主塔 在同寺靈洞院一

玖石梁塔 在同寺興雲菴一來朝之僧而爲斯院之開

祖一世傳懺法節石梁始唱之云

蘭洲良芳塔 在同寺清住院一鹿苑花相國之歸依僧也

德久藏主塔 在同院一入明與諸老結交勸住嘉興

府圓通寺一

祖德濟塔 在同寺瑞光院一世稱暗誦大般若經之人

也

月舟壽桂塔 在同寺一葉軒一

河清祖淵塔 在同寺興雲菴一

東輝永果塔 在同寺十如院一

無雲義天塔 在同寺光澤菴一與月中岩交然妬中

岩之材一夜中岩自僧堂歸無雲竊窺之則放矢

射之矢中僧堂簾不中中岩一

魯菴宗連塔 在同寺靈雲院一

元方正棱塔 在同寺洞春寺一

鏡堂覺圓塔 在同寺瑞光菴一來朝之僧而此院之開祖

也

義翁紹仁塔 在同寺正傳菴一

心田周播塔 在同寺大統菴一

楞元芳塔 在同寺洞春院一

蘭室圓伊塔 在同寺長慶菴一

孫菴龍派塔 在同寺靈泉院一

虎關師鍊塔 在同寺東福寺海藏院一此僧著元亨釋書禪

儀外文濟北集佛語心論聚分韻等一

岐陽方秀塔 在同寺不二菴一爲勝定院義持公之師一

雲章實清塔 在同寺本成寺一俗種成恩寺經嗣公之男

也

夢岩祖應塔 在同寺與月中岩同時互以文鳴一世

愚極禮才塔 在同寺曹源院一善草書諸方寺院額

就斯翁一求之僉曰免火難又因靈夢多畫管神

之像一

十地覺空塔 古在萬壽禪寺是聖一國師之法嗣而斯

寺之開祖也萬壽寺則北京五山之一員也

後三條院陵奉火葬神樂岡源中納言資綱卿奉

懸御骨納山陵云然今不知其處

醍醐天皇陵 扶桑略紀二十四卷云長元九年四月十七

日崩葬神樂岡東邊今菩提樹院是也云々今考之

無其跡爾後奉改葬醍醐者乎今實有陵

堂上七條家塔 多在舊真如堂山

鳥井彦右衛門塔 在知恩寺中龍見院慶長五年伏見

城戰死之人也

後鳥羽院陵 在大原理性院邊今不詳其處

惠信僧都塔 在叡山橫川阿彌陀峯

日蓮上人塔 在同上權生谷定光院近世遷洛北妙

覺寺中

葛野郡

釋日本紀曰諸陵寮式所謂日向國埃山陵天津彦火瓊杵尊陵在日向國無日向高屋山上陵

日向高屋山上陵 日向國無日向高屋山上陵 日向國無日向高屋山上陵

日向國無日向高屋山上陵 日向國無日向高屋山上陵 日向國無日向高屋山上陵

原祭之云々田邑松尾南今下山田也

無準塔 在北野社中輪藏之西傳言菅神靈入徑山

無準師範之夢親傳無準之衣鉢今世所傳渡唐天

神圖是也然虛妄之說而難信者乎一說此塔納經者

也是可取者乎

辨財天塔 在同所東塔內納辨財天銅像也

山名氏清塔 在北野經堂之隅山名氏清於內野

爲鹿苑相國義滿公敗死一旦爲敵其罪雖重勇武

亦有餘故義滿公載氏清首於案使諸卒拜之且

建堂於內野埋其首於堂之良隅而且爲死斯

役者聚衆僧轉讀法華經萬部爾後雖移堂於

斯處氏清之塔亦遷于良隅

忌明塔 在北野宮石鳥居西南相傳菅神之父善卿之

塔也故倭俗失父母人五十日忌明後詣斯塔使

東向觀音寺僧誦經今無讀誦之儀凡倭俗重神

故貴生嫌死凡親戚死時各有長短之忌於父母

五十日間謂之穢其間忌憚而不詣神社又不

交外人故謂忌又其間止萬事故或謂暇他人

之入其家則是謂觸穢凡俗止其事謂明隙故

忌憚之日數過終謂忌明一說此塔謂三善清行也

此人菅神之友也依其子淨藏貴所之祈誓而暫蘇生

矣故祈蘇生之微意也或謂佛工稽文會稽主勳父子

之墓也文會曾入唐學造佛之法在唐間有姜文

會歸朝後生男子成長日向母問父母謂汝稽文

會日本人也於茲尋父之志不能止遂來日本果逢稽文會然父子之親無可爲徵文會謂主勳曰互當造佛軀半片造立後合之無違則爲眞父子也主勳祈春日明神謂今不知寸法互造佛半軀願與文會之作無毫釐之差明神憐之夢中與佛指一箇夢醒見之儼然在傍凡作佛像則指爲始隨指之長短有佛軀之大小主勳得之不堪歡以夢中所得之指爲範刻佛軀造立日合之則一體無差於是知依神助有父子值遇之緣此塔則稽氏父子之塔也故失父母人詣之祈再生值遇一凡此父子所作之人佛像世謂春日神作猶大坪道禪弟子伊勢氏受鹿島明神之託宣造馬鞍是謂神作上一說古北野社官逢重輕服則以除服日修禊於神谷川忌中所用之具悉納斯所因建塔故據假服除齋之由緣至今有餘習云光源義輝公薨後四十九日忌辰齋饌畢後使高和泉守師宣爲使代公詣北野石華表然則中古以來雖高貴有斯儀者乎

一條院陵 在大北山石影
後三條院陵 在同所

瑞華尼院塔 瑞華尼院代々塔多在西京華開院
寶慈尼院塔 在同寺

仙壽院塔 在萬年山眞如寺寶鏡尼寺之一代久嶽昌

長老而後水尾院第六皇女也

淨藏貴所塔 在鹿苑寺林間傳言患瘡而祈之則痊

平清盛公塚 在衣笠山東麓六所明神社南斯處踏

地則有響土人傳言平相國葬斯處是則石槨之響

應扣者也然案清盛入道淨海治承五年閏二月四日

於洛東六波羅亭薨同七日於愛宕寺火葬圓實法

眼繫遺骨於頸納攝津國經島云々然則清盛塚謬

傳而古高貴之塚乎

等持院尊氏卿塔 在衣笠山南麓等持院

寶篋院義詮卿塔 在同處凡公方家十五代塔在斯

院

淨名寺貞氏塔 在同處讚州太守法名道觀尊氏卿之

父也

果證院雪庭心公尼塔 在同處貞氏之室尊氏卿之母

而上杉安房守之女也

大休寺古山源公塔 在同處尊氏卿之弟直義也

登眞院定海尼塔 在同處尊氏卿之室而赤橋氏之女

也

藤業子塔 在同處鹿苑院義滿公之室而日野大納言

時光卿之息女也

三寶院義覺塔 在同處慈照院義政公之三男也

知足軒直山道性塔 在同處諱義在義昭卿塾居泉

南所誕之子也有故到薩受島津家祿妻永山

氏女稱永山休兵衛尉領武卒監城外十四里

地

法源院嵩山禪定門塔 在同處初南都大乘院門主也

落墮住京也靈陽院義昭卿之子也

細川植國塔 在同處清源院細川高國之子也

中川秀盛塔 在同寺中大圓院號修理大夫豐後國

岡城主也

中川久盛塔 在同院號內膳正秀盛之男也

日峯禪師塔 在大雲山龍安寺則斯寺之開祖也始細

川勝元歸依妙心寺義天和尙則建一寺號龍安

寺而諱義天然義天讓第一祖於其師日峯和尙

故建塔於斯寺

細川勝元塔 在同時則號龍安寺斯寺創建之大檀

越也

石川宗林塔 在同寺中大珠院始號石川備前守美

濃國犬山之城守也爾後剃髮號宗林來住京師此

外石川家塔又別在妙心寺中陽德院

細川家代々塔 在同時清源院

關山惠安塔 在正法山妙心寺則斯則寺之開祖而既

有國師號爾後修三百年遠忘時萬治帝重賜佛

心覺照國師號

花園院陵 在同寺中玉鳳院有宸影是謂鏡御影

言以鏡照覽御容則以宸筆被摸寫之者也

授翁宗弼塔 第二世而在天授院

無因宗因塔 在退藏院

日峯宗舜塔 在養源院

義天玄承塔 在如是院

雪江宗深塔 在衡梅院自第一祖關山至第六世

雪江謂六祖

景川紹隆塔 在龍泉菴

悟溪宗頓塔 在東海菴

特芳禪傑塔 在靈雲院

東陽英朝塔 在聖澤院自景川至東陽各雪江之

徒弟而是妙心寺四派之一也

麟公童子塔 在ニ微笑菴前ニ豐臣秀吉公之息男而秀賴

公之令兄也號ニ棄君ニ天亡號ニ祥雲院玉君岩麟公一

武田信玄塔 在ニ同玉鳳院一

武田勝賴塔 在ニ同院一武田信玄之令子也

武田信勝塔 在ニ同院一勝賴之息男也

織田信忠塔 在ニ同寺大雲院一

細川勝元塔 在ニ同寺大心院一

細川政元塔 在ニ同寺同院一

松平下總守塔 在ニ同寺天祥院一號ニ天祥院心巖一

松平美作守信昌塔 在ニ同院一號ニ久昌院泰雲道安一

斯一家塔又在ニ同寺光國院并實相院一

鹿納殿塔 在ニ同寺盛德院一東照神君之第一嬪君而松

平下總守信昌之室也

松岳壽保塔 在ニ同寺長慶院一是則政所高臺寺湖月尼

公之姉君也

長翁量公塔 在ニ同院一木下肥後守入道二位法印而長

慶院之令兄也建仁寺常光院是也

三折全友菴主塔 在ニ同院一長慶院之夫而業ニ醫術一元

尾張國之人也

桂昌尼塔 在ニ同寺盛岳院一池田勝入之母而織田信長

公之乳母也

池田勝入塔 在ニ同寺護國院一近世移ニ斯塔於備前國

岡山城下一

前田玄以塔 在ニ同寺蟠桃院一所謂德善院玄以法印也

石川一族塔 在ニ同寺養德院一

真田信仍塔 在ニ同院一是世所謂真田左衛門尉而有ニ

武名ニ之人也龍安寺大珠院亦有ニ塔號ニ大光院道白一

大野一家塔 在ニ同寺雜華院一大野主馬佑之類亦在ニ

斯院一

瀑川一益塔 在ニ同院一瀑川左近將監一益也

石田隱岐守塔 在ニ同寺壽聖院一同治部少輔三成塔亦

在ニ斯院一

津田興菴塔 在ニ同寺長興院一始號ニ津田小平次長興一

歷ニ仕公方家一老後退ニ隱京師一屢招ニ賓客一爲ニ茶會一

又放ニ鶴隼一爲ニ獵遊一

徹菴禪高塔 在ニ同寺中東林菴一山名豐國入道號ニ東

林菴徹菴禪高一

稻葉一鐵塔 在ニ同寺智勝院一

福島正則塔 在ニ同寺海福院一世所謂左衛門大夫也

堀尾帶刀塔 在ニ同寺春光院一

脇坂氏一家塔 在同寺隣華院脇坂中書少卿安治以下塔多在斯院

生駒氏一家塔 在同寺玉龍院生駒雅樂頭近規以下塔在斯院

山内一豐塔 在同寺中大通院山内對馬守一豐土佐

國守也薨後葬斯院一號大通院使其弟僧湘南和尚住斯院一豐男號土佐守賜松平氏自是

改山内爲松平斯一家塔多在斯院

春日局塔 在同寺隣祥院則號隣祥院稻葉内匠頭之妻而丹後守之母也

池上墳 在妙心寺北門前西田間斯地屬池上村一疑是一代主上之陵乎今不詳其實

宇多天皇陵 在二和寺北宇多野故奉號宇多院一光孝天皇陵 在同寺西田間今大秦東北有稱小松

之處恐奉葬斯地依之奉稱小松帝者乎

圓融院陵 在同寺圓融院今不知其處惜哉一說雲林院東南天皇塚是也

車塚 在同寺樓門西南土人謂車僧塚然車僧塚在仁和寺西南太秦市川村海生寺一案天子陵前必

納所御之車是謂車塚是亦一代主上之車塚也

依車字誤稱車僧塚者乎惜哉然不詳其實

後宇多院陵 在同寺西北蓮華峯寺此寺中絕明曆年中江城人再興之安置五智如來石像故世謂五

體佛傳言後宇多院葬蓮華峯寺今山頭有岩窟一疑是後宇多帝之陵後人發之者乎今置石不

動像一在中中淹塔 在鳴瀑村西南相國寺中慈照院之開基

而龍湫周澤之弟子也龍湫建梅熟軒於鳴瀑村斯處栖之在中亦晚年隱于斯軒而遷化故有塔爾後梅

熟軒移于相國寺慈照院內今鳴瀑土人斯塔謂相國寺墓每年七月慈照院并梅熟軒住僧詣斯塔有

諷經也藤忠季朝臣塔 在鳴瀑村妙光寺清華花山院庶流二

品内府藤師繼公仕南朝一旦喪長男右少將忠季爲追薦請仁和寺紫金臺爲妙光寺是依忠季

之幼名號妙光忠季之令弟二品内府師信公適父命奉斯寺請法燈國師爲開山第一祖

宅間法眼塔 在鳴瀑北繪所宅間勝實依願望寫梅尾春日明神之神影歸京時於茲墮馬而死是親

依拜神像之祟也則葬斯處建塔

平族一家塔 在鳴瀑北梅畑蓮華谷會壽永年中平家

奉帝出京終沒西海其妻女爲尼多隱斯地善妙尼寺而爲亡夫築塔於斯地尼衆亦葬此谷其外源家人亦所歸依明惠上人_二之徒多建塔於茲今石塔婆多存然文字漫滅而不見惜哉且尼衆爲薦亡夫等所自書寫之連筆華嚴經一部元善妙寺之所_レ有也今在梅尾寶藏每卷尾有尼衆之名雖爲女筆其體不_レ凡然不_レ知其族譜也

阿難塔 在鳴瀑北梅畑善妙尼寺斯寺屬梅尾明惠

上人遷化三十二年後文永八年冬十月建之其記今現在塔陰阿難尊者始度尼故尼寺建其塔猶大乗修行之寺建文珠塔比丘衆會之院建賓頭盧塔上

文覺上人塔 在高尾神護國祚真言寺山上

上覺上人塔 在同處

明惠上人塔 在梅尾高山寺禪堂院之後山

同上人母塔 在同所一瀬村歡喜苑案紀伊國湯淺鄉

明惠上人之舊里也上人建歡喜寺此寺有上人母之塔故梅尾墓地亦名歡喜苑者乎

清原夏野塔 在雙岡北第一高峯其次稱二岡三岡

然一峯總號雙岡

兼好法師塔 吉田兼好法師塔在二岡麓長泉寺園太

曆云兼好於伊賀國卒塔在同州國見山麓國分寺任助法親王塔在法金剛院內山上仁和寺一代之門

主而伏見宮二品式部卿邦高親王之息也則爲一路之資二路仁門遺俗之人也任助法親王有故久被

住藝州嚴島西方院故稱嚴島御室天正十二年甲申十一月二十九日寂葬此山

覺深法親王塔 在同寺仁和寺門主而號後南御室後陽成院之王子也

性承法親王塔 在同寺仁和寺門主而號後大御室慈祥院塔在同寺性承法親王之母后也

大塚 在千代古道南來知爲何人塚也或號冑塚

烏丸光廣卿塔 在太秦法雲寺烏丸亞相光廣卿號法雲院泰翁山公光廣卿之息男光賢卿同息資慶卿

塔亦在斯寺

勘解由小路資忠塔 在同處

井伊朝負尉塔 同在處號峻德院天涯文清

車僧深山正虎塔 在太秦鄉七村內市川村海生寺常盤井相國實氏公塔在常盤村田間

後宇多院塔 在安井村

嘉陽門院塔 在同村龍翔寺舊址之內 嘉陽門院禮子

後鳥羽院之皇女而爲賀茂齋院 古斯邊有齋院依

之葬斯所者乎

南浦紹明塔 在同村南浦明紹所住之龍翔寺舊地

曾南浦入宋歸朝後大燈國師從之嗣 法近世遷龍

翔寺於大德寺中 然南浦塔猶在斯處 每年七月龍

翔寺輪住僧來有諷經 此時嘉陽門院塔亦拜之士

人斯處稱大德寺屋敷村民守之

嵯峨天皇陵 在廣澤池西北隅八角堂

法然上人塔 在嵯峨二尊院有碑銘文字漫滅而

難讀過惜哉一說碑文宋景濂之所作也

二條殿塔 代々多在同院

應司殿塔 信房公以下多在同院

高政院竹子塔 在同院 應司前關白房輔公之室而毛

利長門守秀就之息女也稱政所

西三條家塔 在同院

熊谷直之塔 在同院 熊谷大膳直之者爲豐臣秀次

公之傳秀次公於紀州高野山有事後直之於斯

寺因秀吉公之命而自裁

嵯峨天皇陵 在嵯峨清涼寺

檀林皇后塔 在同寺

恒寂法師塔 在同寺 以上三箇塔在同處恒寂

淳和天皇之皇子而大覺寺祖也世誤爲源融公之塔也

育然塔 在嵯峨栖霞寺竹林

藤原定家塔 在同中院北田間

日禪僧正塔 日禪上人日野輝資卿入道唯心之息男而

元日蓮宗本國寺之住職也爾後小倉山麓建常寂光

寺而隱斯處遷化後建塔

小笠原兵部太輔并信濃守塔 在同寺斯人難波役戰

死之人而與土人有俗緣故葬斯寺

瀧口入道墓 在同三寶院

橫笛墓 在同院邊

妓王妓女并佛女三尼塔 在同往生院

刀自尼塔 在同院刀自妓王妓女之母也

平相國清盛塔 在同院

新田義貞塔 傳言義貞寵女勾當內侍隱在生院邊義

貞於北國有事後內侍爲尼建義貞塔於此地今

不詳其處

夢窓疎石塔 在天龍寺三會院 則天龍寺之開山而

爲三七朝國師惠福兼備之人也 其餘各院祖塔在寺

中諸塔頭

後醍醐天皇陵 在同寺多寶院

松蔭和尚塔 在同寺松岩院 松蔭和尚俗種 順德院

之彥孫源善成公之子也 善成明德五年六月五日任

內大臣 爾後任左大臣 剃髮後號常勝 稱松岩

寺 此左府源氏物語河海鈔之作者也 松蔭爲父善成

公 建松岩寺 依之則松岩院天龍寺以前之創建乎

松岩寺左府塔 在同院 前所謂源義成公而稱四辻

宮

智泉尼塔 曇華尼院開祖智泉尼松岩寺左府善成公之

息女而與松蔭和尚爲兄弟 故葬斯院 自茲以

下代々住職尼公同葬此處

杉本法印大道墓 在同院 智泉尼之外祖父也

二階堂駿河守滿春塔 在同寺南芳院 滿春爲斯院

之檀越 故滿春并諸族塔亦多在茲處

細川持元塔 在同寺性智院 賴元之息男也

細川持之塔 在同寺弘源院 持元之舍弟也

細川澄元塔 在同寺眞乘院 元義春之子而政元養

之爲子

細川植國塔 在同寺清源院 高國之息男也

細川紹高全隆塔 在同寺眞乘院

二階堂家塔 在同寺招慶菴 自二階堂出羽入道道

蘊 以下塔多在斯菴 今悉絕

藤原俊成卿妻塔 傳言在嵯峨法輪寺邊 曾俊成卿

詣斯墓 而詠稀聞夜半茂佐美志幾松風乎多惠須

也 苔之下爾聞覽之歌 也今不詳其處

吉田了意塔 在大井川西嵐山北千光寺 了意鑿開

大井川之人也

吉田素菴塔 在同處 是了意之子而解文字 精筆

法

舟橋清家塔 下嵯峨天龍寺末寺寶珠菴中有清原眞

人賴業社 今稱櫻宮 自茲清家代々之塔多在斯

處 每年正月十五日清家之裔詣賴業社

清和天皇陵 在水尾村 故或號水尾帝 三代實錄

三十六卷載 清和天皇所々歷覽自勝尾山 歸山

城國海印寺 俄而入水尾山 爲終焉之地 一說水

尾村古屬丹波國云

明智坊塔 在松尾北山腹 相傳中古叡山有僧明智

坊者依違寺法山徒擯斥之斯僧出山寓斯地遂發憤而將死謂徒弟曰吾死後葬斯山以石造吾像向叡山須建之死後必當滅山門曾織田信長公滅山門時明智光秀爲部將然則明智光秀者明智坊之再誕乎可怪

王塚 在谷地藏院門前疑是一代主上之車塚也今不詳其實惜哉

王墓 在梅津村東萩原一堆墳存土人謂王墓按花園法皇慮後世之變遷七所設陵又置宸影於七箇寺一花園帝稱萩原院今此陵在萩原土人又稱王墓則彼此爲花園帝之陵者乎且歸依梅津長福寺之開基月林和尚被置宸影於當寺是則宸影七所七幅之隨一乎

山名宗全塔 在梅津長福寺

梅津清景塔 在梅津邑曾梅津邑長梅津豐前左衛門清景藤原惟隆十八世之孫也清景代々爲院之北面清景歸禪法請月林於長福寺清景剃髮號是心

大岡墓 相傳桓武天皇夫人從三位藤氏墳古在斯邊今不詳其所下山田田間有一堆塚土人謂

大岡墓 是疑藤氏之墓乎

細川家塔 細川家賴之以下塔多在谷地藏院應仁亂山名徒濫入斯寺發墓今有其處而已

願應塚 在葉室願應未詳爲何人也

文德天皇陵 在田邑鄉故或奉稱田邑帝斯地

始稱眞原後號田邑今稱下山田

桓武天皇陵 在樞原御陵村東北

(補遺)

二陵 今大北山、田間有大石人蹈之則爲祟云榮

花物語曰石影西園寺東北野北云々西園寺跡今鹿園

寺也依之則一條院三條院奉葬石影云此處

則是石影而一堆墳上石二陵之跡乎

北院御室塔 在仁和寺西北宇多野山腹

藤時平公塔 舊記云在愛宕護案愛宕權現始在愛

宕郡鷹峯北愛宕山于今石門存矣一條院天應元

年釋慶俊移權現於葛野郡手白山自玆號愛宕

山則今所謂愛宕山是也藤時平延喜年中之人而薨

去在權現未遷今愛宕之前也然則時平塔在

舊愛宕者乎然今考之未詳其處然近世俗言所

在在今愛宕權現堂傍之塔是也遂詣愛宕權現者

直以_レ詣_ニ北野天滿宮_ニ爲_ニ禁忌_ニ是可_レ謂_ニ謬傳_ニ也今
愛宕山寺僧棄_ニ護摩灰_ニ之處禁_レ棄_ニ不淨之物_ニ故建
_レ塔爲_レ證者而非_ニ時平之塔_ニ也爲_レ必矣一說時平之
塔在_ニ愛宕山腹月輪_ニ

乙訓郡

名護屋高家墓 所_レ謂尾張守也在_ニ久我巖_ニ則於_ニ斯
處_ニ戰死

長岡陵 在_ニ長岡山_ニ 桓武帝皇后乙牟漏之陵也

物集女陵 承和七年五月八日 淳和天皇崩任_ニ遺勅_ニ
奉_レ火_ニ葬乙訓郡物集目村_ニ碎_ニ 御骨_ニ撒_ニ大原野西
嶺上_ニ

般若塚 在_ニ西郊成就院_ニ 古斯寺眞言宗而有_ニ弘法大
師所_ニ自筆_ニ之大般若經_ニ多破壞故埋_ニ土中_ニ號_ニ般若
塚_ニ今淨土宗僧守_レ之屬_ニ京師誓願寺_ニ

在原業平父母塔 在_ニ小鹽上羽村_ニ

在原業平塔 在_ニ小鹽山下十輪院_ニ好事者所_レ設_レ之乎
花山院定好公塔 在_ニ同寺_ニ斯地元清華家花山院代々
爲_ニ傳領_ニ故近世自_レ葬_ニ從一位左大臣定好公_ニ後一
家多葬_ニ斯寺_ニ

藤忠長卿塔 在_ニ同寺_ニ 則花山院定好公之父也號_ニ霜
松院_ニ

大光院塔 在_ニ同寺_ニ則定好公之母也

法然上人塔 在_ニ粟生光明寺_ニ

行基塔 在_ニ勝持寺之山上_ニ斯寺元行基之開基也故
名_ニ行基山_ニ

源算塔 在_ニ西山善峯寺_ニ承德三年三月二十九日寂壽
一百十七歲也

善惠證空塔 在_ニ同處_ニ

蓮生法師塔 在_ニ同處_ニ宇都宮彌二郎賴綱出家後號_ニ
實信房蓮生_ニ世誤爲_ニ熊谷_ニ然則與_ニ熊谷入道蓮生_ニ
同名而蓮生歌人也其所_レ詠多載_ニ歌集_ニ故誤以_ニ實信
之歌_ニ爲_ニ熊谷蓮生之所_レ詠者往々有_レ之矣

金原陵 在_ニ金原所_レ納_ニ 土御門院御骨_ニ之金原御
堂是也

大塚小塚 在_ニ今里東田間_ニ今見_レ之大塚則主上之陵
而小塚則車塚也今不_レ詳_ニ其實_ニ痛哉

(補遺)

法然上人塔 在_ニ處々_ニ然粟生光明寺上人火葬之地
而納_ニ骨灰_ニ之處也上人一生之事跡具在_ニ四十八卷

緣起又貶謫讀岐時號俗形之名稱藤井善仲
法橋定禪所寫烏帽子淨衣之畫像今現存

綴喜郡

杉山塔 在男山北杉山麓土人父母忌五十日過後必

詣之猶詣北野塔未_レ知爲何故也

景清塔 在八幡山七曲坂之中間相傳惡七兵衛藤原

景清於斯所窺源賴朝卿八幡參詣欲殺之然其事
忽露不遂其志土人憐之建石爲徵示義士
之志後世呼稱景清塔

如法塚 在同處是納經之塚也俗言經塚是也

相應院殿塔 在志水正法寺

竹腰山城守塔 在同寺尾州源敬公之庶兄而相應院

之男也父竹腰氏之武人也

志水氏墓 代々多在斯寺志水氏八幡山下志水之人

而所屬八幡社之邑長也相應院亦出自志水家

男女塔 在男山南萬稱寺前相傳男山麓有賴風者

男山并京師有兩妻一時賴風久在京不歸男山妻

以爲棄我也甚恨之遂投河水而沒無幾賴風歸

家不見妻心怪之尋河邊于時河岸其妻投水

日有脫去之衣賴風知爲亡妻之衣遽然大驚遙
於下流得其屍也賴風悔已非忽投河水而死
土人憐之埋夫妻之屍於東西兩所是稱男塚女塚
今小路古新宗春塔 在新酬恩菴一休和尚設此菴
時助資料之人也

穴山梅雪墓 在木津川西南飯岡織田信長公於京

師本能寺有事時梅雪在泉南界浦大驚則出彼

地到枚方自是不入京師歷河內山城近江伊

賀伊勢尾張欲歸三河國於山城普賢寺谷梅雪

從者斬卿導者奪其太刀之銀鐔於茲土人蜂起

遂殺梅雪於草內村西

久世郡

七帝陵 在伏見南平川七陵儼然土人稱七帝然不

知爲何帝也其外山陵多在斯邊惜哉不詳其實也

實也

平重衡卿塔 在木津之中上津村本三位中將重衡卿

於斯處斬死故築塔於斯處又建寺稱哀堂近

世改號安福寺此寺有重衡卿之畫像并有重衡

卿所著之烏帽子狩衣等六十年以前斯寺炎上時是

亦燒失北去。安福寺一町許有池相傳洗重衡卿之首處也。依之稱重衡池。又其邊有柿樹。然終不^{ナラス}成實。故俗稱不實柿。又宇治郡日野有重衡之塔。曾此卿妻女遷世在日野。故請其首而葬斯處云。
(補遺)

田原陵 光仁天皇之尊父白壁皇子而是十陵之一也。今有其跡。

泰澄和尚塔 在田原鷲峯山寺。則斯寺泰澄開基而今新義真言宗僧守之。

相樂郡

貞慶塔 在笠置寺。所謂笠置解脫上人也。

寒松院權大僧都塔 在同寺。伊勢國主藤堂和泉守高

虎法名號。寒松院高山道賢。笠置寺在高虎采地之內。故建塔。

大通院權大僧都塔 在同寺。藤堂和泉守之男而號。

藤堂大學頭高次。相續領伊勢國。法名號。大通院智智堂。

紀伊郡

源爲義塔 在朱雀祇陀林寺前竹林中。此外有二墓。一六孫王源經基塔。在遍照心院。所謂六宮是也。故稱。

六孫王。遍照心院者源家代々連綿之宅而後爲寺。貞空廻心塔 在同院。源實朝公室八條禪尼請。斯僧

於遍照心院而爲住職。寺號。大通寺。眞空亞相藤定能卿之孫親衛將軍安能之子也。

八條禪尼塔 在同院。禪尼坊門內府雅親公之女而源實朝公之室也。實朝公有事後爲尼號。本覺。遂斯處

爲寺號。大通寺照院。守敏法師塔 在東寺西田間。斯處則古西寺之跡也。

說守敏塚在大和國樺生山。狐塚 在東寺西野。凡鳥戶野中山最勝河原鶴林狐塚

是謂京師五墓所也。倭俗葬人場謂三昧。或謂墓所三昧梵語也。此云正受。又云正定。思人死歸之義乎。一說五墓所東寺四塚三條河原千本中山延年

寺是也。案今所謂最勝河原誤三條河原者乎。日蓮并日像寺 在上鳥羽實相寺。凡日蓮上人塔宗門

寺院處々存其內以斯寺塔爲舊矣。戀塚 在上鳥羽。曾遠藤盛遠中誤斬源渡妻之首。携

來於茲始見之大驚且悔則埋首於斯處。盛遠不

塋_レ悲歎終剃髮爲僧號_二文覺_一時々詣_二斯塚_一戀慕之依號戀塚永井日向守直清領攝州高槻日請_二林道春_一使_レ作碑銘建塚上然斯所元鯉塚也中古此邊有_二大池_一池有_二巨鯉_一作妖怪士人殺_レ之埋_二此所_一源渡妻塚在此南壇上戀塚寺然誤建碑於斯處惜哉

本御塔 在_二竹田安樂壽院_一鳥羽法皇奉_レ葬斯處

新御塔 在同處則美福門院之塔也

安倍晴明墓 在_二東福寺門前遣迎院之竹林_一

圓爾塔 在_二惠日山東福寺_一斯寺開基而所謂師一國師

也其餘各院祖塔在_二寺中諸塔頭_一

普門塔 在_二龍吟菴_一無關普門而南禪寺之開山大明國

師也

近衛殿塔 東求院龍山公三藐院信尹公二代塔在同

寺海藏院并信尹公之息女塔亦在同院

光明心院塔 後水尾院第二姬宮而近衛尙嗣公之室也

是又在_二海藏院_一海藏院虎關以來至今爲_二近衛殿之

宿院也

九條殿塔 代々在同寺常樂菴一姬君等之塔在_二常樂

菴西_一寺中大機院爲_二九條殿之宿院_一

一條殿塔 在同寺芬陀利華院斯院爲_二一條殿之宿院_一

南明院殿塔 在同寺南明院東照宮之夫人而豐臣秀

吉公息女也於_二伏見城_一而天死

藤原俊成卿塔 在同院古斯處亦爲_二法性寺之境內_一

故淨如尼所_二自筆_一之遺誠有_二法性寺俊成卿墓地山

林境界等三箇條之制終有_二弘安三年八月五日淨如

之判雖_レ爲_二女筆_一其體不_レ凡今現在_二南明院_一依_レ之

則俊成卿之塔此地屬_二法性寺_一時所_レ設而東福寺建

立以前之經營也案九條道家公建_二東福寺於斯地_一後

設_二斯院於永明院南_一故號_二南明院_一者乎案弘安三年

十月十七日聖一國師遷化然則開山遷化後建_二此院_一

者也

淨如尼塔 在_二俊成卿塔西_一傳言俊成卿之母也案俊成

卿爲_二釋阿_一後有_二九十賀_一然則俊成死後豈有_二老母

之存_二乎且淨如記中甚尊_二崇俊成卿_一斯卿元久元年

逝與_二弘安三年_一相去七十年也然則淨女者俊成卿之

女乎或又孫女乎

吉山明兆塔 在同院相傳明兆赴_二鎌倉圓覺寺_一寫_二

思恭所_レ畫之五百羅漢圖像百幅斯時老母在_二淡路_一

罹_レ疾病_一故思_二明兆之歸_一鄉明兆以爲老母之心雖
不_レ得_レ已繪事亦半途而不_レ忍措_レ之於_レ玆自寫_二我
像_一贈_二老母_一慰_二愛慕之情_一老母見_レ之於_レ心爲_レ足矣
其畫像所_レ著黑衣處々破裂退耕菴性海加_二贊於其
上_一有_レ衣破戒不_レ破身貧道不_レ貧之句_一其圖于_レ今
在_二斯院_一又有_レ虎關所_二自筆_一之元亨釋書六冊_一其外
大道等加_レ筆是亦爲_二斯院之什物_一

島津修理大夫義久塔 在_二同寺卽宗院_一

島津義弘塔 在_二同院_一

島津陸奥守氏久塔 在_二同院_一剃髮號_二龍伯_一

多賀高忠塔 在_二同院_一是多賀豐後守高忠而號_二大源
本公_一

日像上人塔 在_二深草寶塔寺_一日像所_レ置_二京師七口_一
之法華經題目之石塔婆亦在_二斯寺_一是處所謂伏見口
也

仁明天皇陵 在_二深草安樂行院_一爾後主上奉_二火葬_一則
納_二遺骨於此陵_一此院今新義眞言宗也

立信上人塔 在_二深草眞宗院_一立信號_二圓空上人_一淨土

宗西山派深草立義之祖而斯寺之開基也

寺本氏墓 在_二深草山上_一織田信長公與_二足利家義昭

公_一相_二戰於六條河原_一時寺本氏從_二信長公_一而戰死
斯人深草極樂寺村人也故築_二塚於斯山_一

昭宣公基經塔 在_二木幡山淨妙寺之跡_一近世移_二寺於
六地藏村_一改號_二大善寺_一淨土宗僧住_レ之屬_二東山大
谷知恩院_一

御堂關白塔 在_二同所_一所謂藤原道長公也

宇治山陵 在_二宇治_一贈正一位王氏之墓而所謂八基之
一也王氏諱斑子 桓武帝孫式部卿仲野親王之陵也
光孝帝潛龍時納爲_二中饋_一而生_二字多帝_一遂爲_二皇
后_一

中宇治陵 在_二同處_一圓融院母后安子之陵也右大臣
藤師輔公之女也 村上帝在_二儲宮_一時爲_レ妃生_二冷
泉院_一天德二年十月爲_二中宮_一三年爲_二皇后_一生_二圓
融院_一

今宇治陵 在_二同處_一後三條院皇后諱茂子之陵也
白河院母公而贈太政大臣藤能信公之女也

後宇治陵 在_二同處_一藤茨子陵也 堀河院皇后而生_二
鳥羽院_一贈太政大臣藤實季公之女也

閑院冬嗣公塔 在_二同處_一

永井信濃守尙政塔 在_二宇治興聖寺_一尙長剃髮號_二信

齋斯寺建立之人也故斯一家塔多在茲

道正菴塔 傳言道正菴祖從永平道元和尙入宋於

彼地傳解毒圓方到今二十七代相續守家

宇治川塔 曾興正菩薩新宇治橋時悉取漁舟埋

之水底造石人塔建乎其上乃教漁人曝布

爲活業又建橋寺置茶房惠存亡接來往其

願力不可則也嘗考興正感身記云弘安七年正

月奏破宇治網代蓋是年始修宇治橋未成時年

八十四夫感身記興正自錄一生事業至八十五歲

絕筆然興正年九十而卒則其埋舟造塔等之事盡

在後五年之間者乎宇治橋供養時製水精念珠百連施衆僧今猶殘

隆禪塔 在宇治御室寺杉山之頂元三井寺僧而

爲此寺中興之祖

橘俊綱塔 俊綱富有之人也設山莊於伏見而建

成院故塔在伏見卽成院世誤謂那須與市宗高之

塔也一說斯寺始在伏見豐後橋傍豐臣秀吉公築

城於伏見山上時移此處云

四位少將塔 在伏見黑染井南願成寺此寺爲淨土

宗門

小野小町塔 在同處

二基塔 在伏見南井出里此處橘諸兄公之宅地而泉

石跡猶殘二基塔傳言橘諸兄公夫婦也

宇治郡

僧正遍昭塔 在山科元慶寺良峯宗貞奉悲仁明天

皇崩剃髮爲僧住斯寺遂爲僧正且得和歌之

名墨染櫻之詠歌奉悼天皇者也斯寺有塔及

木像相傳像所自刻也

花山院陵 在元慶寺前土人謂遍昭塔也然其體爲

陵也爲必者乎

仁叔尼孝藏主塔 在山科西山明應菴豐臣秀吉公之

侍尼而甚得寵遇

天智天皇陵 在山科御廟野前村謂陵村此村民家

有數十戶其內十六家預此陵之事特竹鼻氏爲

之長此家有綸旨并緣起等此十六家古守陵之戶

乎

蟬丸塔 在四宮地藏堂前

本願寺蓮如塔 在同處東野村始本願寺在斯處

移攝州大坂天滿宮側時憚改葬從舊置斯處

白河院塔 在同處白河寺傳言後白川院之陵也然

不知其故一

空也上人塔 在同處東野村三宮邊一傳言空也上人建西光寺於斯處一而住之處々經歷後九月十一日於斯寺一遷化則有塔其後西光寺絕坊舍之名存其內有小菴之存一稱妙德天和二年京極大雲院前住性愚和尚再興西光寺一改築空也塔京師極樂院任上人之言一出京之日爲忌日用十二月十三日然上人於關東一遷化正當忌日九月十一日也故關東所_レ有之上人寺院用九月十一正當忌日一宜哉今斯寺亦用九月十一日一

平定盛塔 在西光寺空也塔側空也上人留貴船菴一時每夜鹿來鳴上人愛_レ之一夜不來鳴於茲則知一定盛殺之上人大悲_レ之定盛亦悔其罪終發菩提心今京師極樂院中十八家之造茶筌者定盛之末流也其所著之衣定盛狩衣之遺風也

一元禪師塔 在牛昆山下白石菴南禪寺天授菴一代住僧一元隱于茲而遷化故有塔

醍醐天皇陵 在醍醐山東北麓天皇慕外祖父母宮道彌益夫婦之所出故依遺勅而築陵於茲處云朱雀天皇陵 在下醍醐陵村一則理性院家司內匠某宅

後竹林內也

村上天皇陵 在同處一

宣陽門院塔 在醍醐山南鶴谷此院後白河院之皇女而高倉院之妹也

日野資業卿塔 在日野法界寺資業卿日野家之一代

而晚年隱法界寺此地自家宗以來爲日野代々之傳領世稱日野三位而建法界寺文庫是故斯寺有衣冠之肖像一

平重衡塔 在同處日野茶園之中則本三位重衡卿於木津河邊被殺于時重衡卿之室大納言局住

日野村請重衡卿之首埋斯處土人今是地稱武士田一

坂上田村九塔 在勸修寺北小栗栖茶園中

(補遺)經塚 在宇治興聖寺山上傳言洞家道元住宇治一時火災連起元誦經咒之則止納其經於斯處云一說興聖寺元在宇治故今茶園之號有興聖名云或言在深草里一

十陵 此內八箇陵在雍州內其餘散在他邦今舉所在雍州者

山階 天智天皇陵在宇治郡山階一

山階

天智天皇陵在宇治郡山階一

山階

山階

山階

山階

山階

山階

山階

山階

柏原 桓武天皇陵在ニ伏見山一按與ニ今所レ有大異可

レ考

深草 仁明天皇陵

後田原 光孝天皇陵在ニ仁和寺內大教院丑寅方一

後山階 醍醐天皇陵在ニ醍醐寺北曼陀羅堂丑寅方一

中宇治 贈皇太后宮藤安子

後宇治 贈皇太后宮藤茂子

後宇治 贈皇太后宮藤茨子

九墓是內舉_下所_レ在ニ雍州一者_上

愛宕護 贈太政大臣

葛野 贈一品太政大臣仲野親王

後葛野 贈正一當宗氏

宇治

小野

後小野

後宇治

今宇治

古荷前使十陵九墓其使有_レ差今舊記之中舉_下所_レ在ニ

雍州一之名_上而已

貞享三丙寅年九月吉日

書

林

和州舊跡幽考序

智愚不同飛沈有異余生洛陽銅駝坊一住寧樂植槐
傍家素賈簞而乏惠子之五車性特閑散而抱季仁之
三願蓋夫惟此山跡國者兩尊鼻子之洲八荒首開之地
子帝都子神籬梵王之所盧仙客之所爰歷世遠
矣累年久矣物換星移而陵谷易位彼之三笠之山呼
皇祚之萬代四社之靈護后宮之千秋洋洋乎盛矣豈
非信美之士哉其餘名區勝踪或詠於倭歌或載於
唐典者不寡矣余不自揣竊欲爲之志者有年矣
而學不富二酉材不兼三長求諸舊史則昧沿革
綴諸新語則感適莫而素志益堅確乎不拔旣而
擢揚古記二百餘部囊括成二十卷名曰和州舊跡
幽考唯憾不下洗仁裕之腸胃而淬江淹之筆鋒也
非敢傳之好事聊以備遺忘而已

延寶九年歲次辛酉孟夏吉旦林氏宗甫涉筆和州
添下郡山之草舍

和州舊跡幽考第一卷

林 宗甫 撰

添上郡

春日明神

春日明神の御鎮座は人王四十八代稱徳天皇神護景雲元年六月廿一日たけみかづちの神常陸國かしまより御住所たづねに出させ給ひて伊賀國なばりの郡なつみの郷にうつり給ふ供奉の人は時風秀行時風の末は神宮の預とねりは乙野丸禰宜の祖森木氏同年十二月七日薦生の中山につかせ給ふそこにして時風秀行供御に栗を奉りしかば神感ましゝて殖栗よくもの姓をぞ給ひき時風秀行が末葉中臣の姓の下に殖栗氏をあらはすの根元なり同二年正月九日大和國安部山同十一月九日に三笠山に跡をたれ給ふ春日記公事根源の説とはたがふ所ど

もあり又神白き鹿にめして鞍の上に櫛をたてそのうへに五色の雲あり雲の上に五つのかゝみあらはれさせてりかゝやきて三笠山にうつり給ふともいふ説あり盛衰さる程に天兒屋根命は河内河内平岡より齋主命記は下總の香取より姫御神は伊勢の渡會わたあひより來り給ふ天照太神の分神なり託宣の事によりて御門より勅使をたてられ三笠山の下津岩根に宮柱ふとしくたて、かの四柱の明神をあがめ奉らる景雲二年より延寶七年まで凡九百十四年靈驗日日に新なり

此所に鳥居あり大鳥居といふ是よりはるかかの東に春日の大宮四社若宮一社あり其道すがら古き名どころあり左に記す

大鳥居

緋の鳥居の二柱に青櫛一本をたてそへたりこゝをよめる

春日古記
櫛葉にゆふして付て打はらふ

身にはけかれの雲霧もなし

此所より東は春日のやしろのほとりまでを春日野といふ此鳥居のわづか東にちいさき橋あり馬

出橋といふその北に二基の塔の跡あり

春日野

萬葉

千早振神のやしろしなかりせは

娘子

春日の里に粟まかましを

堀河太師

春日の若葉はやくと見えなくに

公實

下もえわたるはるの早歲

一宮紀伊集

はるたつとさくにつけても春日野の

若なをなとか人のわするゝ

拾玉集

おもはん思へは袖に露ふかし

慈鎮

そよ春日野の棹鹿の聲

拾遺愚草

朝日さす春日の小野のをのつから

定家

まつあらはるゝ雲の下草

壬二

春日野やいつくみむろの梅かえに

家隆

霞たな引うくひすそなく

難題百首

春日野は昨日の雪の消かてに

定家

ふりはへ出る袖をかすそふ

師兼千首

春日野や霜にかれにし冬草の

又もえ出てゆくほたるかな

草根

春日野もやまとはあれとからなつなの

正徹

もろこし人の摘むとてもなし

榮花物がたりはつはなの巻にとのゝ

道

長わか君たつぎ

み

宇治殿

少將にならせ給ひて二月に春日のつかひに

たち給ふ略とのゝはしめたるうゐごとにおぼされて

いといみじういそぎたゝせ給ふもことはりなり略た

たせ給ぬる又の日雪のいみじうふりぬればとのゝお

まへ

わかなつむ春日の野邊に雪ふれは

心つかひをけふさへそやる

御かへし四條大納言公任

身をつみておほつかなきはゆきやらぬ

春日の野邊のわかななりけり

是きこしめして花山院

我すらにおもひこそやれ春日野の

雪まをいかてたつのすくらん

馬出橋

まだしのはし

春日古記

千早振甲斐の黒駒引よせて

のりていさむる春日野の原

二基塔 號新御願

傳へ聞東塔は天安二年そめどの、大臣良房公の御願
本尊は釋迦藥師地藏觀音此尊容と申は貞觀三年に遣
唐使感得して來朝の靈佛赤旂檀の像なり其後覺信僧
正一乘院に御入室の時父師實公時の長者にておはし
ければ一門の繁榮をねがひ僧正にぞゆづられける僧
正かほどの靈像をいかでかよのつねにせんやと此塔
にすへられしとぞ扱西塔もおなじやうに銀の釋樂地
觀の四佛を安置す前僧正覺昭造營せられて後文珠を
作りそへ五佛ともに師子を座とせられて其後應永十
八年壬子月廿五日二基の塔雷火にかゝりて灰盡とな
る後は興福寺一乘院に御座ありけるが寛永十九年十
一月廿七日に又炎上ありされども靈佛はつゝがなく
てぞおはしましき扱長講堂延寶元年再興ありての後
はそこにうつされ同年九月に衆縁を結ばしめなん
とて開戸ありしには人群集せりとぞきこえし

片岡

所をしらず撰集抄に春日野のけしき二もとの塔のあ
りさま馬出の橋をあしもといろにふみけんわかむら
さきのゆかりあればすみれつむなる小笹原玉笹のう
へには玉あられつもありひろはむ事もかたをかの松の
みどりは君がため千代の色をやふくむらんとかゝれ
しはこのほとりにや

わづか東に若宮の御旅所あり

若宮御旅所

御旅所つねは宮居もなく芝生の露をむすび尾花霜が
れて木の葉を踏分る道もなし只霜月の祭禮に黒木の
柱青松葉の軒形ばかりなる御殿を立て若宮の出御な
し給ふ

猶東に行南へ分入ほそ道に雪消の澤あり

雪消澤 あきげのさは

堀川太郎百首
春日野の雪消の澤に袖ふれて

仲 實

藏玉集

君かためにそ小芹をそつむ
春日野や雪けの澤に引まくさ

同

花ひらきけり雪におはれて

大道の東にはそきながれあり參詣の人手洗にむ
すぶ是を率川といふ

率川いさかは附鹿道善趣橋

萬葉

はねかつらいまする妹をうらわかみ

いさ率川のをとのさやけさ

むかし率川の祭の祓ありし川なり爰を鹿道といふ事
は春日明神鹿にめしてうつり給ふ道なればなり神職
家には鹿道とかけり西行法師は六道とかゝれたり爰
に又板橋あり石橋あり板にてかけたるを古郷の橋と
いひ石にてわたせるを善趣の橋といひ撰集抄に六の
みちわかれたる六道のちまたに是を擬せりまさしき
道やこれならんと善趣橋を過ぬればみやしろもやう
く近づきぬとぞかゝれし

執行するに車屋殿五位橋二の鳥居あり五位の橋
をよめる

春日古記

うちわたす橋に五色の雲たちて

まことの神の御祓をそなす

二鳥居

春日古記

鳥居たつ左右も高間の原なれや

あつまり給へ四方の神々

鳥居の内の祓戸宮は瀬織津比咩神也春日記其東の
北づらに神垣の森の跡わづかにあり

神垣森

風雅集

神垣の森の草葉はちりしきて

院兵衛督

尾花そのこる春日野の原

神垣山

神垣の森と同所にや類字名所大和國と云々もし
は草に春日なるとよめりさかきなどもよめりと
云々まづ爰にあらはすあらためらるべし

後撰集

千早振神垣山の榊葉は

讀人不知

時雨に色もかはらさりけり

玉吟集

千早振神垣山をこえん日や

家隆

物おもふ戀のかきりなるへき

神垣の森のほとりに左右にわかつて道二筋あり
まづ右のかたの道をこゝにしろす

著到ちやくどう殿附地獄谷

著到殿は延喜十六年二月に造立也此所は春日祭の勅
使つきたがふ役人等を著到にのせられて後神前に
まうでらるゝより此名あり此南に地獄谷といふ所あ

りむかしならの京に少輔僧都瑠圓とて解脱上人の御
弟子に碩學の人あり遷化の後いかなればにや有女身
に詫て種々口ばしる中に我大明神の御方便よりいみ
じきはなし假にも値遇したらんものはたとへいかな
る深重の罪人なり其他方の地獄へはつかはすまじ春
日野の下に地獄をかまへそれにあつめ入洒水をそゝ
ぎ經陀羅尼などを聞せたすけ給ひなんとなり我も魔
道に沈つれども慈悲方便の洒水口に入て三熱の苦み
をはなれ和光垂跡の説法を耳にふれて九泉の樂をき
はめん事ありがたくはあらずやとかたりければ聞人
みな感歎をなせり沙石これらを地獄の證とやせん

東のほとりに榎本宮あり

榎本宮

猿田彦神

春日記

春日山の地主といへり春日明神大和國

あべ山にうつり給ひける時猿田彦神あべ山に行まし
て是より北に我領する靈山あり三笠山と申かしこに
うつりいまして此安部山を替代に給へかし明神忽に
うつりて三笠山に跡をたれ給ふ春日神記此社に毘沙門の
像あり

榎本の宮の前に青瀧といふあり橋ありそれを青
瀧の橋といひ瀧は青瀧の瀧ともいふ是より若宮
に中間道としてほそ道ありそこにかたらひの橋と
てさゝやかなる橋あり

青龍橋せいりゅうのはし

春日古記

青龍の橋をとをりし神水を

うけ祝やとを即身なり則佛

解脱上人

中間道なかつまみち

何事もかなふ三笠の中間道^同

杉の下枝やかたらひの橋

立かへりて左のかたの道筋を記す前段に申す稜戸宮神垣森のほとりに劍先の石といふありかなる濫觴にやこの石をわすれてもふりなばあしかりなんといいひつたへけるひがしに行て藤の鳥居あり

藤鳥居

むかし此鳥居に藤あり春毎に咲みだれて榮ありければ藤の鳥居とはいひけりその藤かれ果て後は鳥居の左右のつむひちのうら板に釘をつらぬきてかの藤のさかりを表してながく傳へしと或説にあり

新千載集の言葉書に元弘三年立后月次の屏風に春日祭の儀式ある所を

立よらはつかさくも心せよ

後醍醐天皇

藤の鳥居の花の下蔭

回廊に三の門あり北は内侍門中は僧正門といふ南の慶賀門は治承二年に門となしけるとぞ^{春日舊記}

此回廊の東のもとにはそきながれありみたらし川といふ

御手洗川^{みたらし}

京極御息所歌合

春日野の松のかれすはみたらしの

川のなかれて絶しと思ふ

みたらし川は山城の賀茂にかざらず^歌枕神の前の川をいふ御手洗川とかけり^{袖中抄}

小社

内侍門をいりて北顔の忠隆金剛童子社は^{伊非}其東に椿本の明神の社は^{三見宿禰命}此社の南に風神の社は^{立田瑞籬を越て}梶本明神の社は^{大山}其東に佐軍神の社は^{田心}次の栗辛明神の社は^{大物}此社の南に海本明神の社は^{毛命}其東に西にむかふ社は八雷神の社いづれも春日記にくはしく見えたり

春日大宮四社明神

二階の樓門をばたちて三の廊のかけ燈籠光をあらそ

ひ四の御殿南にむかひ給ふまづ東の一の御殿は武甕槌神又の御名は武雷神又建布都神又豐布都の神ともいふ常陸國かしまの神なり抑此神はいざなぎの尊火の神かぐつちをきり給ふつるぎのつばより血したゝりそゝぎこえてなり給ふ神なり日本二の御殿は經津主神又の御名は齋主神又齋之大人ともいふ下總國香取の明神也舊事紀神明景云一年此所にうつり給ふ春日記是はいざなぎの尊火の神をきり給ふつるぎの乃よりしたゝる血化してなり給ふ神なり此神天にましゝし時高皇產靈尊諸神たちをつどへて葦原の中國につかはすべき神をえらび給ふに只經津ぬしの神をつかはすべしとあり其時たけみかづちの神すゝみ出ましてふつぬしの神ひとりのみ丈夫にして我ますらおにあらずやと詞をいらゝき仰られしかばすなはち經津主の神にたけみかづちの神をそへて葦原の中國をたいらげしめ給へとなり二神出雲國五十田狹の小汀にあまくだり終に此國をしづめ給ふ日本紀

三の御殿は天兒屋根尊中臣祖神也興台產靈の神の兒日本紀河内國平岡明神なり此神天照太神あまの岩屋にとちこもり給ひて國のうち常闇になりければ太玉の命と共

に天香山の五百箇眞坂樹をねこしにして上つえには八坂瓊の五百箇御統をかけ中つえには八咫のかゝみをかけ下つえには青和幣白にぎてをかけもろ神だちとあひとともにいのり給へば其時岩戸をひらき給ふより終に常闇の雲はれ晝夜をわかつて日本紀抑天兒屋根尊の御鎮座は人王四十八代稱德天皇神護景雲二年四社明神ともに三笠山に御鎮座のよし公事根源又其外の文どもにもあり然ども春日社家の記録には天兒屋根尊は人王卅七代孝德天皇四年十一月戊申日鎮座あり三神にさきだつ事王代十一代年曆百二十一年なり爰に人王四十五代聖武天皇天平十二年大中臣清麿三笠山の春日の社より攝津國島下郡壽久山にうつし奉りて本座の山の名にしたがひて壽久山をあらため三笠山と名附たり三神にさきだちて春日山に鎮座あきらかなるよし見えたり春日記

四の御殿は大日靈貴又の御名は天照大日靈尊又天照太神とも伊勢國五十鈴河上の内宮にてまします

内院小社附中院小社

内院の小社二座西にむかふ南的一座は神力雄北の一

座は飛來天神社天尊中院の小社は四所明神の坤に
岩本明神の社住吉四所明神の東顔に神護寺の社次の
南の青櫛明神社青和次の南の辛櫛明神の社白和次の
南の穴栗明神の社穴次次の南の井栗明神の社高魂く
はしくは春日記にあり

直會殿又號三入講屋附幣殿

直會殿は古今集に大直日おほなほひといへるに同じ諸社に直會
殿として神事にしたがふ人の來る所也梁塵愚案抄又八講の
屋と號せる事は法華八講修せられしより此かたの名
也此ならびに幣殿あり祭の勅使幣を奉らるゝ所なり
△八講のはじめは人王六十二代村上天皇天曆元年よ
り二季にをこなはれき其時の長者は貞信公別當は平
源大僧正なり又の説に人王六十八代後一條院寛仁元
年二月廿日にはしまるともあり其後人王七十代後冷
泉院康平八年より四月九日九月四日にぞをこなはれ
ける舊記それより中絶て年經たりけるが去寛文十二年
十二月五日より九日までをこなはれしなり

此つゝきに舞殿あり貞觀元年の造立陪從のかぐ
らは爰にして奏せらるゝ此まへに林檎の木あり

りんごの場と號して春日祭の奉幣をさゝげらる
る所なり又二つの橋あり北を一位の橋南を二位
の橋といふ

藻鹽草八乙女のふるてふすゝのころ／＼と

ならのやしろは宮ゐをりとそ

南門

南門は承保二年に二階の樓門となる又治承元年播磨
宿禰光親造建ともいふ瑞籬回廊等は同三年に造立あ
り

當門の南のほとりに赤童子影向の岩あり近き南
に如意石あり此石は康保四年此所に底かぎりも
なき穴のあきけるほどに神主祐任大般若經一部
萬座の袈を納めし所とぞ布生の橋とも御間みまの橋
ともいふ橋あり

布生橋ふしやうの

春日古記ありかたや布生の橋をうちわたり

手向のかくらくきくそ嬉しき

若宮外院小社

一童子明神の社^{三輪} 次の南の南宮明神の社^{金山} 次の東の兵主明神の社^{諏訪} 明神

若宮附内院小社

若宮は天押雲命^{天兒屋命之兒也} 此よし名法要集に書つれども只若宮の神は神主一家の秘説にして他にしる事なしと春日の記に見えたり夫若宮御鎮座は長保五年三月三日二三の御殿のあいだにあらはれ給ひしを時風五代の孫中臣連是忠三の御殿にうつし祝を奉る其後百卅一年を経て長承四年二月廿七日時風八世の孫祐房別に御殿をたてゝうつし奉る今の若宮是なり^{春日記} 内院に小社二座あり南に一座^{雄神} 北に一座^{通令神} 抑通合神は中臣祐房朝臣の靈社なり祐房若宮をうつし奉りて後仁平二年十二月廿四日に卒して廿七年を経て治承二年に神託ありて通合神と崇め申^{春日記} 因に此やしろに春日曼陀羅あり壽永年中普賢寺殿基通公の御夢想の圖なり長承四年に若宮生ましてより延寶七年まで凡五百四十五年か

若宮外院小社

廣瀬明神の社^{俗云鬼} 次の南に懸橋明神の社^{葛城} 其南に卅八所明神の社^{神日本磐余彦尊} 其南に佐良氣明神社^{蛭兒} しばらく南に辨財天の社^{又南に紀伊御社四座} 日前神五十猛神大屋姫命孤津姫命^{春日記} あり卅八所の南方に居石あり解脫上人明神を禮拜ありし跡といふ又明恵上人にて侍るといふ解脫上人笠置の閑居に明神を請じ給ひければ童子のかたちにて上人の頭上に乘てわたらせ給て

我ゆかむ行てまもらん般若臺

釋迦の御法のあらんかきりは

と神詠ありけるとぞ^{抄石}

是より本宮嶽に行道あり

△春日明神は嘉祥三年九月に正一位を授け奉り給ふ勅使は藤原助朝臣也

△行幸の始は一條院永祿元年三月廿二日^{拾芥}

後一條院の御時はじめて行幸ありけるに一條院の御時の例をおぼしめし出させ給ひてよませ給ひける

千載集

三笠山さしてきにけりいそのかみ

上東門院

ふるき御幸の跡をたつねて

此行幸の時の事は榮花物語しづくの巻にくはしくあり又建保二年春日の社に行幸ありとぞありがたきほどいどみつくしおもしろうも侍りければさてその又の年御百首のうたよませ給ひけるに

去年の事おぼしいで、内の御製

増鏡

春日山こそをやよひの花の香に

そめし心は神をしるらん

▲神供領三千四百七十五石九斗餘社家領千五百五十四石二斗餘燈明領禰宜方千六百五十一石八斗餘都合六千七百十五石餘

△春日祭といふは大宮の神事なり二月十一月の申日一年に兩度あり勅使など立せ給ふ抑此祭は仁明天皇嘉祥三年九月に中臣秀基はじめて奏聞を経て後に清和天皇貞觀十一年十一月九日庚申の夜はじめて祭あり

舊記

嘉祥三年より延寶七年まで凡八百卅一年か

辨乳母集

一と、せにふたゝひまつる三笠山

常

陸

さしてちとせのかけとこそみれ

堀川二郎

まつらるゝ神の御前の乙女すも

忠房

花も紐とくかすか山かな

榮花物語

けふまつる春日の山の神ませは

範永

あめの下にや君そさかへむ

拾遺愚草

けふまつるしるしにとてやそのかみは

三笠とゝもに天くたりけん

法性寺のおとゝ忠通公まだおさなくおはしましし時春日のまつりのつかひせさせ給ひしに内侍周防のごまへりて行事辨ためたかに申をくりける

壇世繼

いかばかり神もうれしと三笠山

ふたはの松の千世のけしきを

△霜月の御祭といふは若宮の神事なり此祭は保延二年九月十七日にはじまれり

注進

其後寛正年中より十一月廿七日に口をかへられたり

舊記

凡此祭の例式左

にあらはすまづもちる殿の町大宿所と號す爰にして願主人長谷川黨あつまり毎月晦日に龍田川に行て垢離ありそれより明神を勸請申十一月廿五日に御湯

を奏し廿六日春日に社參せり是を遍照院のわたりといふ此院にかり屋立つけて雉一千二百五十六羽兎百卅四耳狸百四十二疋の贅をかけならべ公饗のかざりもの献菓子けどうづたかくもりて規式おほし

未勅野邊に栖けたのゝ我に縁なくは

うかりし闇に猶よはまし

此歌は春日の神詠に侍るよし或ふみに見えたり霜月廿六日の夜御旅所に出御なりて亂拍子あり廿七日の祭禮大鳥居の東のほとりにして例式あり鳥井の東の南顔は南都御奉行の御陣其東は衆徒裏頭にてたつ仕丁白杖を持てしたがふ鳥居の東の北顔は御門主の御陣なり例式凡次第

一番俗人赤衣の仕丁二人共にちはやかけ布を引其一人は奉幣を持一人は白杖を持つきしたがふ仕丁二人あり冠綏にて馬上の俗人あまたあり又冠に藤の花をさして一騎行關白殿の御名とかや

二番神子馬にのりてあまた行扈從の法師くろ衣にて馬にのり行又立ゑぼしに白張の歩行一人著笠をもちて行是は春日明神影向の時めされし笠とかや

三番細男六騎白張に立ゑぼし笛太鼓を持

四番四座の役者開口のまひあり今春金剛は弓矢の祝言をうたひ觀世實生は船の祝言をうたふ

五番馬頭兒紅手笠に山鳥の尾をさしてうしろに牡丹の花をおふもの五騎其一騎毎に一つものとして異形の出立にてしたがふ又龍の笠をかぶり木履をわきはさむものあり

六番競馬五騎

七番的持立ゑぼしに赤衣をきて行兒五騎尻籠の矢をおひ馬にのる又隨兵五騎よろひかふとにて行又張替持馬にてしたがふ

八番將馬數十口

九番野太刀大小百腰長太刀あまたあり

十番願主人十騎是はむかし大和侍のまつりをつとめし例なりとぞ長谷川黨といふ

十一番長柄の鍵千餘筋

十二番田樂法師本座新座ともに廿六人かたなだま編木高足などいふ曲あり

右行列の内に願主人長谷川黨の事は貞觀十年壬十二月廿五日勅をやまとの國にくだし給て春日の齋女參社の時供奉にとて騎兵四十人執杖士六十人をさだめ

させ給ふよし三代實錄に見えたりもしはこれらのすゑにもありけるにや

扱廿七日の夜御旅所にして流鏑馬伶人の舞百廿番ならびにすまふ十番せいなふの舞あり深更にして還御あり廿八日の夜四座の役者の能あり後日の能これなり又田樂法師のうち入といふ曲などあり抑せいなふの舞は神功皇后三韓退治の時磯良の神をめせども綸命にしたがひ給はず遅参いかにとあれば我海底にありて一ねぶりに十日を経るほどにかほに蠣がらつけり是をはちおもひてすゝみも出ずと勅答ありさらば謀をしてめさるべしその謀はかの神せいなふの舞をこのみ給ふなればその舞奏したらんになじかは來り給はざらんやとて舞を奏せらるゝ神舞曲にひかれてきたりますにも御袂を顔におほひ給ひしより例としてせいなふの舞にふくめんをたるゝなり又なら舞ともいふ響田八幡縁起崇徳院保延二年より延寶七年迄凡五百三十一年か

屋

屋はあまたある中にまづ五ケの屋をあらはす新造の

屋瓦の屋上の屋西の屋本談儀の屋中院の屋ともに六箇の屋なりそれが中に西の屋には地藏の靈尊をすへたり本談儀の屋には弘法大師の細字の法華經平宗盛公の願狀鎮守府將軍維茂公のよろひ住吉法眼の競馬の屏風ならびに萬里小路の宣房卿の一字香花三禮の五部の大乗經あり此經は太平記にも見えたり扱村上天皇より仲算已講へ給はりしあふぎには勅筆の歌あり

君か代は天の羽衣まれにきて

なつともつきぬ巖ならなん

白玉かをのれか色はそれなから

もみちにをけくれなぬの露

抑此扇は村上天皇應和三年清涼殿にして法華講あり南京北京の名徳二十人五十座の論義ありしに仲算已講ことばのはなあざやかに義の實をそなへて光あり釋みかど叡感のあまりに給ひしと也

公方家の御屋は松の屋近衛殿の御屋は但馬の屋此二ケの屋は零落して其跡のみあり九條殿の御屋は舟戸の屋一乗院御門主の屋は杉の屋大宮神主は椿の屋若宮神主は三大社の屋社家は渡の屋又竹の屋菊の屋な

どといふもあり般若の屋はむかし大般若經講書の法師こもりゐけるより此名ありとかや内侍房又は細藏といひ赤藏といふ皇后春日行啓の時典侍内侍などのけしやう所なり永祚元年三月廿二日一條院行幸の時上東門院此屋におはしましき其後大宮炎焼の時四所明神をうしろの山にうつし奉けるに白雲たなびきをのづから御垣をなしけるとかやさればその夜二ヶの屋にうつし奉る赤藏の内に影向の間といふあり神鏡四面あり至徳三年内侍房の回廊にうつし奉りて細藏赤藏となづけゝる安居の屋に後白川法皇の紺紙金字の一切經あり

水屋社

社の北のほとりに水屋川あり

水屋社は第一そさのおの尊第二稻田姬第三南海神女也こゝに毎四月五日に能あり世に水屋の能といふ是なり濫觴は伏見院の御宇世の中疫病になやまされけるほどにさらば此社をなだめ奉らんとて神樂を奏し舞曲をなしぬれば靈驗たちまちにありしより恒例となれり

傳社

水屋川

類聚

春日山水屋の水のすゑまでも

衣笠

神にまかせて身を頼む哉

夫木

水屋川すゑせかけて春日野の

爲家

野田のさなへはけふそとるなる

千首

おもふ事今はやさらは水屋川

爲尹

なかれをしらは春日野の神

天地院

此院絶果て後は俗に天神山といふ

濫觴をしらす延義法師一日此院にして七大寺の僧みなつどへてその講師をつとめられしよし釋書にあり廢亡は石淵寺の所にあらはす

三笠山

春日山に三笠山とてひきくだりてちいさき山に春日の社おはします春日山は總名なり三笠山は

別なり願注
密勘

萬葉
春日なる三笠の山にゐる雲を

出みることに君をしる思ふ

同
大君の御笠の山を帶にせる

人 九

細谷川の音のさやけさ

月清集
うき世にも露かゝるへき我身かは

三笠の森の陰にかくれて

壬二集
からにしきたれ手向せん大和なる

家 隆

三笠のもみち春日野の萩

春日山

仁明天皇承和八年春日大神の神山の内にして狩獵伐
木の事當國の郡司におほせて禁制し給ふよし續日本
後紀に見えたり

萬葉
冬過て春は來ぬらし朝日さす

津鹿能山に霞たな引

久安百首
春日山麓の野邊のねのひこそ

神のしるしを待心地すれ

親 隆

長秋詠藻
いつしかとたかきにうつれ春日山

俊成卿

谷の古巢を出る鶯

月清集

朝日さす春日の嶺の空はれて

良 經

其名残なる秋の夜の月

龜山殿七百首

君か代に契りありてそ春日山

經 繼卿

しかもさかへん北の藤波

八雲御抄にはるひ山はるべ山ともよめりと云々

備香山かりの山

備香山は歌枕にいはく是春日山にや然ども八雲
御抄に備香山春日山別に立らるゝやもしほ草に
大和國と云々萬葉集第十卷に備香能山同十二卷
に衣備香之宜木川よきと點じたり正義をわきまへず
歌枕
かりかねの聲きくなへにあすよりは

かりかの山はもみちぞめけん

武藏塚

號手向山

或人いはく此塚は東大寺の八幡宮のうしろの山
を手向山といふ又此山を武藏塚とも號するなり

と云々此山は春日の社より北にあたりいかかとぞおぼゆる澄月歌枕に武藏づかは春日の社の南に森ありそれぞ安世卿の墓所なりと云々

むさしづかは大納言兼武藏守良峯安世卿の墓所むさしづかと號しかの卿を神にあがめし所也能因歌枕素性法師爰にまうでゝよめる抄今

手向にはつゝりの袖もきるへきに古今

もみちにあげる神やかへさん

此歌よりして手向山ともいふとぞ

本宮嵩ほんぐうだけ

本宮嵩は春日明神はじめて御鎮座の所也其後景雲四年正月十二日中臣時風今の社にうつしかへ奉る春日記又の説弘法大師うつしかへられしといふ本宮の社水谷の社あり

香山かうぜん

爰にして大明神つねに般若を説給ふよし沙石集にありうぐひすの瀧は花山のとりにあり

鶯瀧

夫木

三笠山春は音にてしらせけり

西行

氷をたゝくうぐひすの瀧

高圓山たかまるとやま

三笠山の南にならびて俗に白毫寺山といふ高圓山高松山同山歟津と登と五音通歌枕高松山やまとの國但不審と藻鹽草にあり萬葉集には高松山とあまた所に點あり然ども古人たかまつとよめるあり次下にたかまつをしるしぬ

萬葉

春日野に時雨ふるみゆ明日よりは

枹ふちかざらん高圓の山

靈龜三年九月志貴視王薨じ奉るの時

同

あつさ弓手にとりもちてますらおのども矢手はさみたちむかふ高圓山たかまどに春野やき野火と見るまでもゆる火をいかにとへは玉はこのみちくる人のなくなみた

萬葉

鴈かりかねのきゝつるなへに高松たかまどの

萬代集

あつさ弓春の心に入るものは

大炊御門

高圓山の櫻なりけり

新撰和歌集

高圓の野路の篠原風さえて

俊恵法師

たまくる袖にあられたはしる

此山に白毫寺あり焼春日といふ所あり南の尾さきに鹿野園寺ありそのうへの岡を尾上の宮のふる跡といふとかや

高松山

もしほ草にやまとの國と云々

家集

春雨のしきくふるに高松の

家持

山の櫻はいかゝあるらん

夫木

夕されは衣手寒したかまつの

讀人不知

山の麓に雪はふるらし

高松野山は丹波國なり

森鹽

白毫寺

びやくがうじ
寺領五拾石

高圓山白毫寺は天智天皇の御願開山は種操僧正といふさだかにしらす

焼春日

焼春日は平岡明神御影向ましくて後は本宮の嵩にうつり給ひき遷宮の後雷火に社焼しより俗に焼春日といへり春校神記當代二座のやしろは一社は春日明神一社は法明房忍覺をいはひしとなり傳

尾上宮

尾上の宮いづれの御子の離宮といふをしらず元明天皇和銅元年九月春日の離宮にいらせ給ふよし續日本紀にあり又天平寶字二年二月依_レ興各思_二高圓離宮處_一作歌

萬葉

高圓の尾のうへの宮はあれぬとも

たゝしき君のみなわすれめや

後京極百番歌合

ふるき跡_二霞果ぬる高圓の

尾上の宮の春の明ほの

壬二集

雪おれの聲しきるなり高圓の

宮の梢やあれまざるらん

草根集

高圓の尾上の雲の上人も

わけゝん露や野邊の萩原

若草山

俗につゞらおりの山といふ三笠山の北にならび

てあり

夫木
今も猶妻やこもれる春日野の

中務親王

若草山に鶯そなく

歌枕
春日野の若草山に立雉子

好忠

今朝の羽音に目をさましつゝ

羽買山

三笠山は中にあり南にならびて高圓山北に若草

萬葉
山此三山をいふとぞ

春日なる羽買の山へさほのうちへ

鳴行なるによふこ鳥かも

大鳥の羽易の山ともよめり藻鹽草

能登川

三笠山に近き川なり八雲高圓山三笠南山の中よ

り出て西にながれ行

萬葉
能登川の水底さへに照まてに

三笠の山は咲にけるかな

此歌の五文字を新登川とかきてもしほ草に萬葉
とあり世流布の萬葉集には能登川とあり

飯合川

俗にいや川といふ高圓山の南より出て西は大安
寺の東にて能登川に落合又郡山の大橋川も落合
てながれ行

萬葉
山きはの雪はきえぬかありやみつ

飯合川のそへはせくとも

和州舊跡幽考第一卷終

和州舊跡幽考第二卷

添上郡

東大寺

寺領二千二百拾一石四斗餘

東大寺は大華嚴寺又恒說華嚴寺又城大寺ともいふ

傳通 又は國分寺又は金光明 四天王護國之寺と申續日本紀

當寺は聖武天皇の御願天平勝寶元年に成就せりそれ

より延寶七年迄凡九百三十一年八宗兼學の窓の雪消

やらず七堂伽藍の軒の苔青やかにふりて金銅十六丈

の尊容儼然あらはれ給ふ誠に天竺震旦にも石木の太

佛はありといへどもかゝる金銅の像はいまだきかず

と弘憲僧正の筆の跡おかむにたよりあり

△西大門の額は金光明四天王護國之寺弘法大師の御

筆その國の字形おほきにその中の王の字體又おほ

きなりしは國ひろくさかへ帝德普天にみちみてん事

を表せり額の二邊に梵釋四王金剛力士の像をすへら

れしは國を守護の相の表示なり大宗高祖傳に此寺を
城大寺と號し國分寺の門たりとのせられたり佛法傳
通記
此門なくなりし時代をしらず雲井坂の東のほとりに
礎石あり

△南大門の額は大華嚴寺と弘法大師の御筆なり佛法傳
通記

記にしへ東南院の寺務一代の御門主此寺は八宗兼

學といへども三論華嚴を殊にせりいかでか華嚴にか

ぎるべしとて西南兩門の額おろされしと也傳聞應永

二年八月柱をのづからくちてたふれしを再興ありけ

るとぞ二王の像うしろに石の獅子あり中門は礎のみ

△大佛の大殿は二重樓の軒にかけられし恒說華嚴院

の額は弘法大師の御筆佛法傳
通記殿の高さは十五丈六尺

東西二十九丈南北十七丈基砌の高さ七尺東西の砌卅

二丈七尺南北の砌二十丈六尺柱八十四枚殿戸十六間

天壺三千百二十二蓋歩廊一廻の戸二十間東西の經五

十四丈南北の經六十丈わたり番匠は從五位下猪名部百世從

五下益田繩手とぞ聞えし朝野群載斯る靈跡も時あればに

や絶果てむかしをしのお礎に正徹和尚とかや目なれ

ぬ寺はおほくなり古きはあれまさと詠せられしも

思ひ出られたり

△遮那の大像は大殿絶はてぬれどもつゝがなくなつた、
せ給ひしが鳥瑟うじやう高くあらはれ曉の露珠をかざり白毫びやうごう
あらたにおがまれさせ給ひて秋の月光をそへて星霜
を經給へり抑遮那の僧の濫觴は聖武天皇の御歸依に
良辨僧正として智行やん事なき人ありある夜聖武天皇
御まどろみありけるに僧正の前身はもろこしの僧に
て佛法修行に思ひをよせ渡天におもむく流沙川にい
たりし時傭賃なくして渡る事をえずその時天皇は渡
守にてかの僧の心ざしをあらはれみわたしてえさせた
り僧いとよろこびて汝來世はかならず國王とならん
とちかひしが君今日域の主たり僧正はその時の僧な
りと御夢御覽ましゝて後大佛御造營の御心あり釋書
又の説あり御門河内國大縣郡の智識寺の盧舍那佛を
禮拜ましゝてより此事寂慮に絶やらせ給はず續日本紀
終に天平十三年行基僧正を勅使として皇太神宮につ
かはれしに造建なさせ給へと神託ありしかれども法
師を勅使となす事神國の義に非ずとかさねて右大臣
橘公を勅使に遣す釋書又豐前國宇佐郡廣幡の八幡宮に
勅使をたてらるゝ續日本紀兩社の託宣寂慮にかなひしか
ば天平十五年十月十五日あふみの國紫香宮にして盧

舍那の大像つくり給なんと同十七日寺の地をひらか
せ續日本紀又行基僧正勅をうけ天下の士庶を勸進す其發
願の疏は帝の御筆かけまくもかしこき御みことのり
なり同十六年十一月あふみの國甲賀寺にして四大寺
の僧みなつどへ音樂を奏し骨柱をたてゝ大像の模を
とゝのへ御門みづがら繩を引給ふされども事ならず
して同十七年四月にならのみやこに還幸成て續日本紀同
八月廿三日更に大像をゐさせ給ひなんと御門御衣の
袂に土をつゝみ御座をぞつかれける朝野群載同十八年十
月聖武天皇元正上皇光明皇后金鐘寺に行幸なりて大
像の御供養あるには佛の前後に一萬五千七百餘のと
もし火をかゝげさせ給ふ續日本紀同十九年九月廿九日
はじめて天平勝寶元年十月廿四日に其功成就す三年
を経て八箇度改め鑄たり朝野群載同年十二月ひのとい
七日孝謙天皇聖武上皇光明太后行幸なり給ふに路次
の行粧を事とし僧五十人禮佛讀經の威儀をとゝのへ
續日本紀婆羅門僧正の導師行基僧正の咒願師又なき御供
養にぞありける東鑑しかれども行基僧正は十ヶ月已前
二月に遷化のよし續日本紀に見えたり行基僧正の導
師いとおぼつかなし同四年正月行幸なりて二萬燈を

かゝげさせ給ひき釋同四年三月十四日はじめて金をぬるその功いまだ終ざれども開眼あり朝野群載

△開眼供養は天平勝寶四年四月きのとのとり九日と續日本紀に見えたり釋書曰三年盛衰記曰天平寶字四年四月八日云々扱開眼の日

は文武百官供奉して行幸あり齋會の儀式は元日におなじ此時大小灌頂二十流の具樂は胡樂中散樂高麗樂珍寶等を奉納あり朝野群載萬人の僧をまねぎ物の音東西にひき釋書導師は菩提僧正咒願師は道濟律師講師は隆尊讀師は延福帝王編年とぞ聞えし

此供養の日元興寺より奉ける

御願禮記
法のもと花さきにたりけふよりは

佛の御のりさかへ給はん

又聖武天皇

同
うるはしきわかおもふ君はこれとりて

みかとかよはせ萬代迄に

これよりはじめ行基僧正を開眼の導師にと宣下を給ひしが僧正加程の導師凡僧の身に應はぬ事にて侍る只ちかき程に異朝の僧來たらんそれぞ導師に足れりと辭し申されしが天平八年すでに來朝の期なりとむ

かひ船をよそひ難波の磯を漕はなるゝに法衣の袂は只百花の風にひるがへるにことならず伎樂の響はともにも萬水の波のしらべるにこそあれ去程に沖波はるかによせ來る船ありたがひにそれぞとやおもひけんるかいに船を飛せしほどに見るがうちにちかづきぬればたがひに打笑たゞ舊友にことならず帝王編年

行基僧正

靈山の釋迦の御前に契てし

眞如朽せず逢見つる哉

返し婆羅門

迦毘羅衛にともに契りしかひありて

文珠のみかほあひみつるかな

此二首は拾遺集扶桑略記などにも見えたり

△舍那の大像の薄となすべき黄金をあつめさせ給ふに本朝いまだ黄金なし御門和州金峯山の金剛藏王にいのりてかの山の黄金を見て箔のたすけとせよ良辨僧正勅言を蒙り丹誠に祈られしかば藏王の御告ありその靈瑞にまかせあふみの國勢多の里に行しに老翁石上に釣をたるゝあり僧正老翁は誰ぞ老翁我は比良明神なり此地は觀音の靈地なりといひ果て消すがご

とくに見え給はず神約何たがふべきやとそこにいはり結び如意輪の像をすへていのらるゝ釋いく程なくして天平廿一年二月奥州よりはじめて黄金を奉りしかば帝徽感ましゝて同四月に改元あり天平感寶元年と號す續日本紀此時よめる歌

萬葉

すへらきの御代さかへんとあつまなる 家持

陸奥山にこかね花咲く

扱御門行幸なりて舍那佛を拜禮し給ふ時橘宿禰諸兄宣命をよむ其詞

白佛三寶乃奴止仕奉流天皇羅我命乎盧舍那像能太前仁奏賜部止奏久此大倭國者天地開闢以來爾黃金波人國用理獻波有登毛斯地者無物止念部流爾聞看食國中能東方陸奥國守從五位上百濟王敬福伊部内少田郡仁黄金在奏氏獻此遠聞食驚俊悅備貴備念久波盧舍那佛乃慈賜比福渡倍賜物爾有止念閉受賜里恐毛無久奏賜波久止奏續日本紀仕奉事遠桂畏三寶乃太前爾恐毛無久奏賜波久止奏續日本紀又かさねて黄金九百兩を奥州より捧ぐる續日本紀此功によりて敬福に銀青光祿太夫の位を授らるゝ釋書
△舍那の大像の佛身量ならびに鑄具の斤目の事は朝

野群載にいほく舍那の大像結跏座にして其高さ五丈三尺五寸續日本紀五丈面長さ一丈六尺廣九尺五寸肩五尺四寸五分目三尺九寸口長さ三尺七寸頤一尺六寸耳長さ八尺五寸頸長さ二尺六寸五分肩徑長二丈八尺七寸胸長さ一丈九尺腹長さ一丈三尺臂長さ一丈九尺掌長さ五尺六寸肘至腕長さ一丈五尺中指長さ五尺脛長さ二丈三尺八寸五分膝前徑三丈九尺膝厚さ七尺足下一丈三尺
△螺形らうぎやう九百六十六箇高谷一尺經谷三尺六寸朝野群載
△銅座高さ一丈徑口八尺周二十一丈四寸基周二十三丈九尺
△石座高さ八尺上周三十四丈七尺基周卅九丈五尺
△圓光一基高さ十一丈四尺廣さ九丈六尺此圓光絶果てなし
△鑄具用熟銅七千三萬九千五百六十斤白鑄一萬二千六百三十八斤練金一萬四百三十六兩銅五萬八千六百二十兩炭一萬六千三百五十六石
△狹侍菩薩二軀高さ各三丈ならびに繡觀自在菩薩二鋪各高さ五丈廣さ三丈八尺四寸
△四天王像四柱高さ各四丈右の分量ともいづれも朝

野群載にあり此四天王の像は炎上の後元久元年十一月卅日に供養ありと帝王編年に見えたりおもふに大佛供養より八年後なり然ば狹侍の二菩薩四天王の像等も永祿年の炎上に絶果けん今は敷石のみのこれり△鑄師は從五位下柿本男玉從五位下高市眞國從五位下高市眞麿大佛師は從四位下國公麿朝野群載扱是よりはじめ大像修造の時あへて手をつくはふべきたくみなかりし時此公麿といふはすぐれてたくみふかき人にて終に鑄奉り成就せり此功勳によりて四位をさづけられ官は造東大寺の次官兼但馬員外介を給はりき扱寶字二年大和國葛下郡國中村に居住の人なればとて氏を國と給はりしより國公麿とはいへり續日本紀誠にためしまれなる伽藍なれば聖武天皇我寺興復せば天下興福せん我寺衰弊せば天下衰弊すべしとの御記文あり盛衰記又慈鎮和尚此みほとけをよめる歌

拾玉
是體如は東大寺なる盧遮那佛

けにあかかねの大佛かな

△最初の再興は齊衡二年五月二十三日帝王編年五月二十三日齊衡三年三月八日云々平家物語方丈記等には同六月七日に參議從四

ちさせ給ふ平家物語方丈記等には同六月七日に參議從四

大地震に落ると云々

位上藤原朝臣氏宗を勅使として佛頭の様を見せしめられ九月に修理の上奏あり其詞東大寺司檢校傳燈修行大法師位眞如大納言正三位兼行右近衛大將藤原朝臣良相奏言謹案去天平勝寶四年勅言稱朕發菩薩大願奉造盧舍那佛廣及法界知識夫有天下之富者朕也有天下之勢者朕也以此富勢造彼尊像事也易成心也難至但恐從有營人預無能感諸知識者發至誠心各人招福宜每日三拜盧舍那佛自當存念各造盧舍那佛像如更有願持一枝花一合土造像者勿禁勿障同進百姓一催命加造者即知先皇本願以一切人衆爲善知識欲共其福利不專於一己而今佛大佛已爲大破修理所順殆及新造案佛所說莊嚴佛事修理舊物所得功德勝於新造而獨用官物以充給恐乖弘濟之本願望請命天下人不論文錢一合米隨力多少以得加進又一切神祇不望功德勝利者蓋寡矣故先皇始自八幡太神以爲善知識賴其冥助果彼大願若諸神祇望預件功德者命所司隨其所願辦送料物然則先皇大願始終不違人神福利古今如一勅許之於是命郡國以米及輕賣等遣使運送

云々文德實錄にくはしくありその頃大佛の御ぐしを
つぎ奉るべき人なかりしに爰に文山といふ人ありい
とたくみふかき人にて轆轤の術をもつてはるかに高
きはしをかまへ御ぐしを引のぼせ終につぎ奉りてむ
かしにかはらずことなり給ふ此功によりて從五位下
を給ひしなりさる程に貞觀二年四月八日眞如法親王
は修理大佛檢校になり給ふ又賀陽親王大納言弘中納
言善男等に勅を下し給ひてくやう大佛會の事をつか
さどらしめ給き同三年正月廿一日宣下ありすでに大
佛修造ことなれりしかあれば三月十四日無遮の大會
をまうけさせ給ひて御くやうあるべし十一日より廿
日にいたるまで諸國の殺生をとめ會の日にいたり
ては國分二寺に僧尼をまねきあつめくやうせよとの
御事なり扱三月十四日になりければ賀陽親王三品中
務卿^{光孝}本康親王中納言善男右中辨藤原冬緒右京大
夫在原行平左衛門佐紀春枝布留宿禰清眞三善宿禰清
江少外記正安常等にいたりて會の事をとりをこなは
れし也開眼の佛師は籠に入轆轤にて引あげられて御
眼に點じてぞありける伎樂かざりものいふべくもあ
らず^{三代實錄}其時の咒願文は菅原是善つくられたり其文

の詞三代實錄五の卷にあり導師は藥師寺の惠達律師
也^{帝王}此日つどへる人に十善戒をさづけ給ひしなり
也^{編年}齊衡二年より延寶七年迄凡八百二十六年か
△文德天皇より十二代を経て人王六十七代三條院萬
壽四年七月廿六日大佛殿のはしらを引人夫の事を奏
聞のよし野府記にありもし又炎上再興の料にや又修
理の料にやしらす
△第二の再興は人王八十代高倉院治承四年十二月廿
八日平重衡卿の兵火にかゝりて伽藍は煙となる三
國無双の舍那の像も御ぐし鎔ながれておちさせ給ふ
家再興なくてやあるべきとて醍醐俊乘坊重源上人に
勅して大勸進の職に補せられき^{法然}上人むかしの例
をおもひ皇太神宮にまうで、造修の事をいのられし
に風の社のほとりにして二の寶珠を得たり扱は成就
にこそあれとてかの寶珠を東大寺勅府の倉にぞ納け
る^東上人たくみある人にて身をいるゝばかりの小車
一輪をつくり左に勅書を右に幹䟽をつけて諸國を勸
進し萬民をすゝめらるゝに寄進の梁柱ありながさ二
百尺つたふるに只神のなすかとうたがふばかりに
ぞ侍る^釋治承五年三月三日大佛殿の事始なりその奉

行は前左少辨行隆なり先年やはたにこもりしに菩薩夢に告させ給ふ大佛殿の事始の奉行の時もつべしとて笏を給ひしとぞおぼえてさめて後枕上にまことの笏はありけり終にけふ奉行とは成たりけり盛衰記 扱元曆二年三月七日幕下朝頼八木一萬石沙金一千兩上絹一千疋を御奉加にぞよせられける又重源上人に約諾ありて西行法師は沙金を觀進せんとて奥州に行又佐々木の高綱は畿内西海より柱を引よするの奉行せりその一本のはしらには牛百貳拾頭をかけてぞひかせける建久元年七月廿七日はじめて柱二本を立つ去壽永二年四月十九日大宋國陳和卿御ぐしを鑄奉るに五月二十五日に至りて成就し給ふ卅餘日を經て鑄かへ奉る事十四度なり東鑑或説に鑄師は陳和桂日本草部是助佛師は康慶連慶定覺快慶大工は伊勢の國物部爲里櫻島國宗なりといへり文治元年八月二十七日法皇後白川ならに御幸なり給ふには公卿殿上人供奉をつらね伊豫守義經淨衣にして後陳をうたれしたがふ兵六十騎なり盛衰記此日太上法皇みづから御開眼あり法皇は數重の足代にのぼらせ給へども供奉の卿相その外目くるめきあしふるひてはしのなかばにといまりての

ぼりえずその時の唱導師は東大寺の定遍僧正咒願師は興福寺權僧正信圓講師は大僧都覺憲とぞ聞えし東鑑 扱建久五年大佛の御光料とて沙金貳百兩佛師院尊にくだしをかるゝ同六年三月十一日幕下朝頼若公御臺所奈良にいらせ給ひて馬千疋を施入せられ米一萬石黃金一千兩上絹一千疋御奉加にぞよせられき東鑑 同十二日供養の導師は覺憲咒願師は勝憲なりこの日御門も行幸なり給ひて百官供奉せられき釋書 扱壽永二年より二百十餘年を経て應永二十四年九月將軍勝定院義持此寺にまうで給ひて舍那佛に箔をぬらせ給ひし時耕雲といひし人

世を照す君か光をかりてこそ

明 魏

佛ももとのすかたみせたれ

となん詠じけるとぞ綠起 治承四年より延寶七年迄凡五百一年か

△第三の再興は人王七代正親町永祿十年十月十日當國信貴の城主松永彈正忠の兵火にかゝりて大殿けぶりとぞなりける舍那佛の御ぐしおち給ひしがその世につぎ奉るべきたくみもなくして月をかさねけるがこゝにやまとの國に山田道安といふあり弓馬の家に

して繪に妙ありいとたくみやふかかりけん御ぐしを
鑄奉るべき料にとて籠の術をとゝのへ良匠治工等に
をしへてつぎ奉らしめて佛は猶もとのごとく成就し
給ひつれども大殿は造營あらすしていしすへのみの
これり永祿十年より凡百十三年

△舍那佛の瑞相あまたの中にしばらくしるす伽藍建
立のはじめ鯖を賣翁きたれり聖武天皇かれをめしよ
せ給ひて大會の講師とせさせ給ふに翁鯖を経机にお
きしが變じて八十華嚴とぞなる講説のあいだ梵語を
さえつる法會の中間に高座より忽に失さりき又の説
は鯖賣翁高座に杖をもちて鯖をになふ其鯖八十なり
變じて八十華嚴經とぞなる件の杖の木を大殿のうち
東の回廊の前につきたてけるが忽枝葉をなして白樺
木とぞなりけるそれよりはるかの年經て後にはかれ
ながらたてりしが平家の兵火にやけゐるとぞ聞え侍
る東大寺に法會あり華嚴會といふ大佛殿のうちに高
座をかまへ講師のぼりて堂のうしろよりかひけつや
うにしてにげて終る事なりかの鯖賣翁よりはじまり
てながく例となりしなり續古
事談

供養の日生れながら成人にいたる迄をし痘子あり法會の

場ばにのぞみて天皇の御前にひざをつき南謨阿梨耶波もありや
盧枳帝ろきてい欒鉢羅耶はら菩提薩埵ぼだいさたは波耶やとなへ拜してけつが
ごとくうせさりぬ又南大門の木像の獅子ほえのゝし
りたり御願のかたじけなきを感じけるにや盛衰
記

平重衡卿源空上人に奉り給ひしかゝみあり縁をむす
ばしめんとて佛を鑄奉る鑪ろの中に入たりしかども飛
出々々遂に湯とはならざりし程に後は大殿の柱にう
ちつけて置けるとぞ盛衰
記

舍那の像重源上人の枕上に立おはしまして我右の手
そこねておもふかたきあれどもうつべうもなし鑄つ
かすしてなどかたきはうたせぬぞよと夢につげ給ふ
さめて後いそぎ御手をつきたり平重衡卿のとらはれ
給ひしと佛手成就の日とかはらざりけるこそふしぎ
なれ盛衰
記

建久年中再興供養の日午の時より風あらく雨しきり
になへゆりたりけふ雨師風伯の降臨天衆地類の影向
その瑞ならんか盛衰
記

建長元年七月二十四日舍那像おのづから鳴動する事
漸久しかりけるとぞ帝王
編年

東大寺諸堂

講堂

講堂は天平勝寶年中の造建本尊は五丈の千手觀音也
一萬僧會のくやうありしには天人あまくだり花ふり
異香しけるとかや是より十天樂はつくりはじめて奏
しけるとぞ盛衰記

△延喜十七年十二月

正統錄十
二月一日

此堂三面の僧坊炎上其

後承平五年に再興あり

盛衰記

△治承四年に炎上其後嘉禎三年四月十九日棟上

編年記

再興あり

△永祿年中炎上それより絶果て大佛のうしろに石す
へのこれり

鐘樓

鐘の高さ一丈三尺六寸口の徑九尺一寸三分厚さ八寸

用熟銅五萬二千六百八十斤白鑄二千三百斤

朝野群載

奈良八景

おく霜の花いつくしき名もたかし 前大納言善成

古ぬる寺の鐘のひゝきは

念佛堂

念佛堂は又淨土院と號す舍利塔銘本尊地藏菩薩是は重源

上人上の醍醐にして不斷念佛を興せられしより其外

七ヶ所におかれしなりまづ東大寺の念佛堂高野山新

別所等なり法然御傳此堂に重源上人のゐはいありおもて

に大勸進上人阿彌陀佛其うらに俊乗坊重源元久二年

六月五日入滅春秋八十六法然御傳曰建久六年六月六日かけまくも

かたじけなき土御門院の宸筆をそめさせ給ひ宋の陳

和桂えりつけけるとかや毎六月五日位牌脇息等を出

さるゝ人群をなしてぞをがみ侍る抑上人の名を南無

阿彌陀とつかせ給ひしもとは道俗炎魔王宮にしてひ

ざまづきまづ名字をとはれん事うたがひなししかあ

らんに我名につきしかばやはかわするべき南無阿彌

陀佛とこたへたらんにいかでか蓮臺にいたらざらん

やとてみづからつき給ひき阿彌陀佛の名此上人より

ぞはじまりける法然御傳爰につたへし聖武天皇の御冠に

納め給ひし舍利は今更金塔の内にあざやかにかゝや

き鞍坂つさかの圓空法師夢に見し地藏尊は蓮の葉の笠をめ

し横笛をならして

笛をふき蓮の葉かふる地蔵尊

伊勢や河内の弓矢納る

となんさめてみづから繪にうつしき年の經ぬるから
にぞ綵色はげて當堂の柱にのこれり

此北に淨土堂の古跡あり阿波民部重能の建立に
て侍りしかやさだかにことのよしをしらず
重能は經島つかれる時の奉行のよし平家物語
に見えたりこゝに源義朝公賴朝公俊乗坊ならび
に重能などの石塔あり當代奈良後藤代代の墓所
あり

後藤墓所

永祿年中の事かよ奈良後藤乘意吉正とてほりもの
に妙をえたる人あり東大寺をいとたふとみつゝ常に
忠功人にこえたり乘意大衆にむかひて我末々まで菩
提のたねならしめん東大寺の内に墓どころを申請な
ましといひつゝありければ常の忠功を感じてゆるし
てけり此所は鐘樓の西のほとり後藤代々の石塔あり
其末葉奈良に居住して此事は東大寺の記録にもあり
とかやかたられしまゝにうち拾難くてかきつけゐる

俊乗坊重源上人遺像堂

俊乗坊重源上人は黒谷源空上人の御弟子なり仁安二
年もうこしにわたり台山にのぼりて阿羅漢を拜し明
州にして舍利の瑞光を見給ふ三年を経て歸朝あり其
後東大寺再興の勸進し給ひしなり釋かの上人の杖ば
くり笠など當堂にあり此杖はくりの事は釋書にのせ
て上人の威風を感歎あり

良辨杉

良辨杉は良辨僧正童子の時給へる跡なりもとは櫟
の木にてありしが鳥羽院天永九年九月におのづから
たふれ御順禮記其跡に杉生たちけるより俗に良辨杉とよ
ぶ夫良辨僧正は百濟氏あふみの國志賀の里の人なり
又さがみの國ともいふ其母年のさかりまでも子な
りければ觀音にいのりて此良辨をうみけり二歳の時
母桑をとるにその木陰に子をぞすへおきけるがおも
ひあへぬ驚のきたりて子をつかみ行けりあなやとは
しり行ども翅はかるきものにてかいけつやうに雲に
入にき孔子の鯉にわかれ樂天のさきだてしおもひは

さる事なれどもこれはためしなきにこそ侍ら
め其頃南都に義淵僧正といふあり春日の神祠にまう
で給ふに驚ひとりの兒を弄するあり人音にやをどろ
きけん兒を野に残して遠く飛さりき僧正見捨がたく
やありけんとりてそだてられしに五歳といふには一
ををしへぬれば十はやすくわきまへけり其後相宗に
入華嚴の奥旨をえ給ひ聖武天皇の歸依僧となり東大
大寺大佛なども良辨のすゝめ給ふなり天平寶字四年
に僧正になり寶龜四年壬十一月十六日にをはりをと
るはじめ驚のつかみ行しを母たづねさまよひてしら
ぬ山路はるか海を越晝は野原の草をわけて子をお
もふ雉の鳴にもなみだをさそはれ夜は孤村の辻に臥
し親をしたふいぬこゑにあはれをもよふされ一擧の
糧とぼしく半日の命のうき事幾度こそかありつらめ
きのふ過けふくれ卅年ぞさまよひける心は老驥の千
里をおもへどもつかれは飢鷹の一呼をまつにたえが
たくやありけん古郷にかへりなましとて淀舟にのる
しらぬ國しらぬ里の人もあひのりければをもひ／＼
にさえづり出ける中に世にめづらしき事こそ侍れ奈
良の京にすみおはします良辨僧正は御門の御歸依あ

つく世のきこえもためしなく侍るがこの僧正はをさ
なき時驚のつかみきて捨たりし人にてありとぞかた
りける餘所ながらに聞に心もそゝろに飛立ばかりに
てならの京にきたりとかくしてわが子の良辨僧正
にぞあひける僧正母公をうやまひ又なくつかへて終
に母公うせ給ひきくはしくは釋書にあり其後子安の
神と祝してやしろたてゝ大佛の西のかたに今にあ
り

三昧堂

三昧堂は本尊普賢三昧なれば三昧堂とも普賢堂とも
いふ俗に四月堂といふ二月堂に對してこそかくはい
ふらめ此堂の濫觴をしらす或は治安元年仁安法師助
慶上人たてられしとかや

二月堂

絹索けんじやく院俗に二月堂とよぶ天平勝寶年のはしめ勅定に
よりての造營なり
△小觀音菩薩これは良辨僧正の御弟子に實忠和尚と
いふありある時夢見給ふに兜率の内宮常念觀音院に

法事ありたうとかりければ聖衆にこひて法事のやうをならひえたりさめて後それよりかの法を修せんとおもひ給ひしかども尊像なし常にこれをもとめんといのられけりあるころほひ攝州難波の津にさまよひ給ひしに關伽器の波にうかべてきたるありけり峯によりぬるを見れば十一面大悲の像器のうちにいますそのたけ七寸の銅像にしてあたゝかなる事人のほだへのごとし頂戴禮拜してぞかへられける釋それより書起山城國笠置山の洞にしてをこなひぬ給ひけるが起緣これをきこしめさせ給ひて勅をくだし東大寺にして羅索院をたてゝ和尚をすへ給ひしなり和尚年ごとの二月朔日にかの法事をはじめ十四日の明かたにことをはり十五日に後堂にて涅槃會あり二月の行ひは天平勝寶四年にはじまり延寶七年迄凡九百二十九年涅槃會は天平寶字五年にはじまりて凡九百十九年がほど共に闕事なし釋書又鳥羽院の御宇日本國の靈驗の觀音をしるしおはします中に二月堂の觀音肉身となんかゝせ給ひきこゝに法守護の天狗常にあつまりゐられしよりけがれいとうとがめ給ふと縁起に見えたり今の世もあやしき迄そのしるしはある事にぞ侍る

△大觀音は實忠和尚補陀洛山の觀音を勸請してすへ奉り懺悔の法を行ひ給ふよし佛法傳通記に見えたり△炎上再興は正嘉二年二月九日おもひあへぬ瓦の隙より煙の立のほりし程に大衆いかなればにやと扉をひらくに煙火内陣にみちゝ佛壇やけをちながら觀音の厨子ならびにつくり花などはけふりもかゝらずそれが中にふるき水引はうへにかけあたらしき水引は下にかさねかけたりけるにうへなる水引はなにのつゝがもなく下にかゝりつるあたらしき一重こそやけたれ大衆あやしみ僉議まちゝなる所に繪師のいふ水引をもひあへず葬家にとり入てしばしをき侍りしぞかし扱こそそのとがめとはしられけれ又治承年の兵火に此堂の南のはし夥しうもえかゝりけれども俄に風變りをのづからに消けるとぞ起緣又寛文七年二月十五日卯の時ばかりに内陣より火玉飛出てはしらにあたると見しより延焼灰盡となるしかれども小觀音は東大寺の住僧出し奉りしばし三月堂にすへ奉りき大觀音はけぶりの中に立給ひしが持物の數珠のふさだにも火にそこなはれさせ給はす巨材をちぬれども像のあたりは除たり又聖武天皇の宸筆の涅槃經光

明後の親書の華嚴經午王の印板夢ばかりも火にそこ
なはれずこの事は當堂の鐘の銘にもしるされたり

△關伽水是俗に若狹の水といふ當初二月堂の行ひの
初夜に諸神の名帳をよみ供養せらるゝに若狹の國遠
敷明神此會にましゝてねがはくはわれ關伽水を奉
らん實忠和尚ことうけし給ふにたち所に黑白の鵜二
羽飛來り地をうがつかと見しに甘泉わきながれ和尚
石をたゝみ關伽井とし給へり一年てりつゝきて井の
水ある事なし修中のあか水はなにをかせんや衆僧さ
らばとて井のほとりにあつまり若狹のかたにむかひ
ていのられしかば見るがうちに水盈滿せり二月十二
日の夜なりその時わかさの國の神祠の前のみたるし
川ながれを絶て音なしその後國の人此事をきゝて河
水あか水に通せし事をしれりそれよりの川を音無
川とぞ名づけき又やまひあるもの此あか水をのみぬ
ればおほくは平愈しけるとなん書釋所につたへて黑白
二鵜を神にいはひ井の南のほとりに宮たてゝ鵜のや
しろとぞ申

二月堂の北の小社は遠敷大明神南の小社は飯食
大明神いひみちともいふ

法華堂

法華堂又は金鐘寺又は絹索堂ともいふ佛法傳俗に三
月堂とよぶ又金熟寺ともいふこれは優婆塞金熟とい
ふありその住給ひしより寺號とす書釋或は金鐘行者と
いふ御禮記或は金鷲仙人ともいふ佛書傳その名ひとし
からず只良辨僧正のもとの名にて侍る御禮記優婆塞
は執金剛神御禮記の脛に繩をつけて晝夜をわかつ引
うごかして行ひゐたり書釋聖朝安穩增長寶算とゝなふ
御禮記或夜像の脛より光をはなちて宮中をてらす天皇
あやしみおぼしめして勅してたづねさせ給ひしかば
かのひかりのもとに入きたり汝なにをかもおもひてか
くはをこなふにや優婆塞得度をもとめなんとこたふ
帝聞しめし給ひしより得度をゆるし給ひき時の人金
熟菩薩と申帝この地の勝區たる事ををばしめしてか
の執金剛神をすへ給ふなり書釋又の説優婆塞大伽藍を
たてんとをもふと勅答を申すなほちまづこの堂を造
營ありて其後東大寺をたてさせ給ふと佛法傳通記に
あり

抑執金剛神は此院の後戸に安置して俗には蜂の宮と

いふ當初天慶三年前將軍平良持の男將門關東にして
 反逆のさたあり其時此金剛神の前にしてかれを降伏
 の法を修するにいかにかしたりけん像たち所にうせ
 て見え給はず官軍利をうしなひけるにやありけん
 と大衆色には出さねども心は空になりながらも修した
 りき扱二十餘日過て像をのづからかへりてもとの座
 にたゝせ給ふ見れば天冠衣巾所々かけて御はだへに
 汗ながれたり將門は二月十四日に貞盛の矢先につけ
 秀郷かの首をとるすなはち像のうせ給ひしも其時に
 侍りき佛法傳又の説あり調伏修法の中蜂堂の内にみ
 ちくたり其時俄の風にして金剛神の髻糸を吹折東
 に行かの蜂相したがひて飛けり終に敵軍の甲の穴に
 入てさしころしてほろぼしたり帝王それより蜂の宮
 とはいふとぞ

△本尊彌勒菩薩は良辨僧正みづからつくりてすへ給
 ふとなり佛法傳又拾芥抄に此堂の丈六の千手觀音は
 道基上人つくられしよしあれども内陣には見えす

此面のほとりに新造の屋といふあり善導大師つ
 くり給ひし五劫思惟の靈像ならびに市守長者の
 大黒天安阿彌のつくりし彌陀などあり

八幡宮

鎮守八幡宮は中の殿は八幡大神右の殿は姫大神玉依
 左の殿は神功皇后緣起天平勝寶元年十一月十九日内
 裏にして年七つの童子に神うつらせ給てわれみやこ
 にうつりなましとなり緣起同二十四日甲寅石川朝臣
 年足藤原朝臣魚名等を宇佐八幡太神をむかへ奉るの
 勅使として道すがらのけがれをきよめさせたり續日本紀
 神御のりものなきよし神勅ありしによりてみかどの
 玉輿をたてまつらせ給ふ詞林探葉禰宜左太朝臣社女神輿
 におなしくのりぬれば田麿神驛にのりたり緣起同十
 二月十九日五位十人散位二十人六衛府舍人をのく
 二十人神を平群郡に迎へて此日戌寅みやこに入奉り
 宮南の梨原宮に新殿をつくり神宮となして僧早口に
 して七日行ひき同十二月丁亥の日みかど行幸なり給
 ふ禰宜左太朝臣社女東大寺をおがむ僧五千口禮佛讀
 經あり太神に一品比咩神に二品を奉り給ひ又尼の社
 女に従四位下大神朝臣田麿に外従五位下を給ひしな
 り左大臣橘宿禰諸兄みことのりを申
 天皇我御命爾坐申賜止申久去辰年河内國大縣郡乃智識

寺爾坐盧舍那佛遠禮奉天則朕毛欲奉止思登毛得不
爲之間爾豐前國宇佐郡爾坐廣幡乃八幡大神爾申賜閉止
勅久神我天神地祇宇水止成我身遠草木土爾交天障事無
久奈左牟止勅賜奈我良成奴禮波歡美貴美奈毛念食流然猶止
事不得爲天恐家禮發毛御獻事宇恐毛恐美毛申賜久止申上
續日本紀

しかあれば梨原の宮より大佛殿のほとりにうつし奉
るそれより後鎌倉の西明寺殿のおほせによりて三月
堂の南のほとりにうつし奉るそのやしろ寛永十九年
十一月二十七日に炎上してその後くろ木の神殿にう
つし奉りてより造宮なし

抑宇佐八幡太神は欽明天皇の御宇にはしめて神とな
り給ふつくし肥後の國菱形の池といふ所にあらはれ
給ふ我は人皇十六代譽田の八幡九也との給ふ譽田は
もとの御名八幡は垂跡の御名なり後に豐前の國宇佐
の宮にしつまり給ひしなり東大寺にうつり給ひし時
の神託に御出家の義あり神皇正統記又延暦元年五月四日
うさのみや託宣し給ふやうわれ無量劫のなかに三界
に化生して方便をめぐらし衆生をみちびく名は大自
在王菩薩となんいふとの給ひきたうとく侍る也水鏡

手向山 俗呼八幡山

古今
此たびはぬさもととりあへず手向山

もみちのにしき神のまに／＼

此歌は北野の御製にして朱雀院ならに行幸の時手向
山にて詠じ給ふとなり又萬葉第六に
木綿たゝみ手向の山をけふ越えて

いつれの野邊にいほりせんこら

とよめるはあふみの會坂山にてよめるなりかの山も
手向山といふなりくわしくは澄月歌枕にあり

壬二

手向山紅葉の錦ぬさはあれと 家 隆

猶月影のかゝるしらゆふ

東塔

野田の入口に礎のこれり

朝野群載に七重高さ二十三丈八寸釋書二書三丈露盤の高さ
八丈八尺二寸

西塔

氣比氣多明神の邊に礎のみあり

同書に七重高に二十三丈六尺七寸

釋書二十三丈

露盤の高さ

東塔におなじ兩塔露盤の鑄具熟銅七萬五千五百二斤五兩白鎔四百九斤拾兩練金千五拾兩或説に天平勝寶五年三月三日造立あり東塔は一條院長保二年十月十九日炎上西塔は朱雀院の御宇いかづちおちて焼火す其後後宇多院建治元年二月二十九日西塔の日どり時どりをさだめ

帝王編年

再興ありて後兩塔なくなりし時代をしらず

東大寺寺中の事

東坊

南大門の東のわきにそのかたばかり残りてあり俗に聖寶堂と申又東南院ともいふといへりさだかにしらすすなはち東南院を別にあらはす

東坊に鬼ありこれにをそれて居る人なし聖寶僧正こひうけて住給ひしかば鬼あらはれてあらそふ僧正終にかつ事をえ給ひしより後更にきたらず又あるころはひ燈下にして書をよみ給ひしにねぶりをさまさん

と茶をくみてかたはらにをき給ひしがなをしきりにして漸しばしねふり給ひてみ給ふに梁の間より大蛇のくだる影茶盞のうちにうつりたりあふのきて屹とにらまへ叱とをどろかされてたちまちに消うせて見えす

釋書

其後絶々に住僧もありしが中比より住める僧もなし然とも修理をくはへて只形ばかり今にあり

東南院

有人東坊と當院は同院なりといへりしからば東坊はさきの名にして聖寶僧正建立の後東南院と申にやさだかにしらざれば今別段にこれをあらはす聖寶僧正の造營三論のもとにして代々院主となり宗の長者となれり殊七十一代後三條院勅書をくだし給ひて猶院務となり宗の長者たるべきとなり

佛法傳通記

又大佛供養の時將軍家

賴朝

の宿坊にせさせ給ひき

東鑑

嘉暦二年に後醍醐天皇みやこををささせ給ひて此院に入せ給ふと

太平記

也故ある院とは聞えし聖寶僧正の傳はくはしく釋書に見えける爰にかの僧正わかくおはしける時東大寺に上座法師のいみじくたのしきありけり露ばかりも人に物をあたふる事なく只慳貪にいと

つみふかく見えければあさましきにとてわざともの
あらがひをせられける學坊何事したらんに大衆に僧
供ひき給ひなんやといひければ上座おもふやう負た
らんに僧供ひかんもよしなしさありとて大衆の中に
てこたへせぬもほゐなししかれがえすまじき事をお
もひめぐらしていふやう扱賀茂の祭の日眞裸にてた
うさきばかりをして于鮭をたちにはきてやせたる女
牛に乗て一條の大路を大宮より川原まで我は東大寺
の聖寶なりとたかく名乗てわたり給へしからば此御
寺の大衆より下部まで大僧供ひかんといふ聖寶大衆
みなもよふし集めて大佛の御前にて金うちてたがへ
じくとしてさりぬその期ちかくなりて一條富の小路
に棧敷うちて聖寶がわたりなんそれこそ見めとて大
衆あつまりぬ上座もありけりしばらくありて大路の
見物のものどもおびたいしくのゝしる事ありいかに
やと首さし出して西のかたを見やればやくそくのご
とくのかたちして東大寺の聖寶こそ上座とあらがひ
して渡れとたかくいひけり扱をのゝ寺にかへりて
上座に大僧供ひかせたりけり此事みかどきこしめし
て聖寶は身を捨て人をみちびくものにこそ有けれい

かでかゝる貴人のありけんとてめし出されて僧正ま
でなしあげさせ給ひけるとぞ宇治拾遺

△此坊に聖寶僧正のもち給ひける如意ありおもてに
三鈷杵を背に五師子をえりつけて顯密をあらはせり
僧正遷化の後此院につたへたりいにしへ興福寺の維
摩會にして賢聖義及二空比量義の法門を聖寶僧正は
じめて三論宗に立給ひしより後は興福寺の維摩會に
講師かならずこの如意をもつ事になりぬもし東大興
福の兩寺不和なる時はかの如意をかす事をせず如意
あらねば興福寺の會を行ふ事ならずしかある時みか
どに奏聞を経ねれば勅を東大寺にくだし給ひてより
如意をかしぬるとなり釋なが恒例のよし當代猶
東大寺の寶藏にあり

△託宣の池は三社の託宣水上にうかべしより此名あ
りとぞ此説まち／＼にして明ならず只愚童訓に神護
景雲三年丙午七月十一日東大寺の前の池水に三社託
宣うかみしよりおきとめて末の世につたはれりと
ありたゞし丙午は天平神護二年なり是を勘へらるへ
し此池は此院の泉水にてありとかやしかならば聖寶
僧正の金峰山よりせおひきたり給ふ巖石は庭にすへ

られしよし釋書に見え侍れば今の世までもありぬべけれどもいづれといふをしらず

西のかたに西南院の古跡あり藤原貞子の建立とかや

眞言院

眞言院は善無畏三藏と云あり天竺の人にして甘露飯王の末なり元正天皇養老年に此國に渡り給へり釋年書代たしかならずいまた東大寺の造營もなかりし以前にいほりをむすびて八十日住給ひき其所は東大寺の西南今の眞言院なり其後高市郡米目寺めくみの東院にいほりを立ておはしましけりかの三藏のむすび給ひし東大寺のいほりのむかしを忍給ひて弘法大師此眞言院を立給ひし也又南院とも號す佛法傳通記承和三年五月去ぬる冬大雪ふれりこれ水害疫氣の難あらんといへりすなはち此院に灌頂の場をたて給ひて二十一僧を置て夏中ならびに三長の齋月に息災増益の法を修し鎮護國家をいのり給ひしより恒例とせしとぞ續日本寬後紀永十年に炎上してわづがに一字あり

此のへんの新禪院は開基明珍僧都中興は中道上

人なり

戒壇院

戒壇院は聖武天皇の勅使として從四位上眞吉備鑑眞和尚のもとにゆきて申込みかど東大寺を御建立より十年を経給へりしかれども本朝にいまだ戒壇なし和尚これをいとなみ給ふべしとなり和尚みことのりをうけ奉りて釋書まづ大佛殿の南の前に釋書戒壇をきづく佛法傳通記和尚來朝の時天竺那蘭陀寺の戒壇の土をもて來り給ふありその土こゝの地味におなじきなればとてこゝにぞつき給ひき中納言高房勅使にたち給ひて天平勝寶七年九月に成就せり盛衰記又六年四月といふ説もあり天皇皇后太子菩薩の戒をうけさせ給ふ其外受戒四百四十人佛法傳通記に人數の不同あり又もとの戒をあらためてけふ受戒の僧八十餘人なり其後大佛殿の西にうつされしにはみかど受戒ありし壇なればとてその土をうつしてきづきぬるとぞ今の戒壇院是也佛法傳通記其後伏見院永仁中に法皇日吉の社に御幸をはしまして御受戒あり東大寺此事をうらみ奉りて鎮守八幡の神與三基をふりたてまつりて富小路内裏の陳

外にすへ奉りしかばまづ東寺に神輿を入奉らしめ給

ふとなり帝王
編年

△受戒堂再興は大和納言豊臣秀長卿の後室慈雲院殿の造立なり

惣持院の地藏

俗に文づがひの地藏と申東大寺の縁起に造寺の長官左少辨行隆大佛殿再興事終て病死せりいとけなきむすめありしが父にをくれしをふくなげきてせんすべをしらず父のとしごろ歸敬せらせし地藏菩薩の御手に文かきてむすびつけ大聖は六道の能化にましますなれば父のもとにをくりて返事とりてたうべよといのりしかば七日にあたるあした像の御手にあたらしき文ありとりて見れば父の手跡にして返事ありその詞に

生者必滅は分段の常のことはり會者定離は有爲の定まれるならひなりしかば生をへだてぬる事は力及ざる事なれども我東大寺を奉行して造寺修佛の功をいたし興法利生の誠をもつらにせし故に都卒の内院に生れて彌勒慈尊の説法を聽聞す身心安樂にして勝

妙自在なる事第三禪の快樂にもすぐれたり更に歎きかなしふ事あるべからず常に東大寺に參詣し給ひて大佛を拜み給はゝかならず一佛淨土の生を受べしなに事もその時くはしく申べしと書たりとぞその文此院に今にありとかや

勅府倉

勅府の倉正倉院は知足院にあり和漢兩朝の珍寶あまたの中に名香二種あり蘭奢待もとの名は黃熟香重目三貫三百五拾目又大紅麝重目四貫六百目ありとかや△寛嘉二年十月廿七日の夜盜人火をつけ戸をひらきて寶物をうばふ同十二月四日興福寺の衆徒かれをかためたり只御かゝみ八面うちわりしと也帝王
編年△建長六年六月十七日雷火にやけあがりしを戸をひらきてしづめしよりなにの事もあらざりしとなり帝王
編年

△開封の勅使むかしより數ヶ度あり其規式舊例のこくとく寛文六年三月四日破損内見の時開封の勅使日野右中辨上使川口氏のなにがし奉行は南都の所司代土屋氏同七日勅府あり其時も右の勅使いづれもおなじ

此邊に玄武山ともいひ二十五所山ともいふあり
治承年中大佛再興の時精進齋の巧匠二十五人
あり成就の後此山に飛入二十五菩薩と化して雲
に入しより其跡に社たてけるとぞ今に上生院と
いふ坊の内にあり此北に空海寺は弘法大師の建
立洞の内に石佛の地藏をすへ給ひしより俗に穴
の地藏といふ

宜木川

東大寺南大門の南のほとりにはしをわたせる川
あり俗に高橋といふこれなり

萬葉
わきも子に衣借香の宜木川

よしもあらぬかいか目をみん

同
世の中は衣かすがのよろし川

ころもよろしくぬる、袖かな

吉城川よしか宜寸河ともかけり萬葉よろし川ともよめり
藤田此のならびのがしひに禰宜の住所あり野田
といふ

野田

萬葉
吉城川水せきとめてわきも子が

夫木
水屋川末せきかけて春日野の 爲 家
野田のさなへを今やとるらん

此ほとりの四恩院に十三重の塔又内院に春日明
神の御笠杖などありとかや浮雲の明神あり

浮雲社

春雨抄
かしまよりかせきにのりて春日なる

三笠の山のうき雲の宮

此歌は或説に春日第一の殿をよめるとあり此所の勸
請をしらす一往浮雲の宮の名によりてあらはす

飛火野とひの

東大寺の前に北向の荒神といふ社ありその所を
飛火野といへり

飛火野は春日明神はじめて御出現の時八代尊をめし
ぐし給へり夜半にならの里につき給ひしに道いとく
らかりけるほどに尊の口より火を出し給ひきその火

とびて空にもえけるひかりにみちをゆき給ふその火
きえやらすておりく飛ければ聖武天皇の御宇に
佐丸宿禰といふ人を野守にさだめさせ給ひて此火を
まもらせけるとなり玉傳神此火のとぶといふ説は秘抄火を
しらざりけるが是は他國のいくさおそひ來る時
たかき岡にのぼりて火をたきぬればそれをもつぎて
次第に火をたく是をしるしにて軍あつまりて日本を
かためけるなり袖中抄かくあれば遠き國にも一日のう
ちにしらせるなりその野をまもるものを野守とはい
ふなり奥義抄又あぐる火をみつぎて告申を火の飛行心
にたとへて飛火とはいふなり顯注抑春日野の烽火は
和銅五年正月河内國高安の烽火をやめて此野にをき
て平城宮に通せしめしとなり續日本紀爰に烽火は山の峰
などにあるべきに野はたがひたるやうにこそ侍れ童
抄此義もつとものやうには侍れども今みるにこの野
は春日山の上にしてしかもいとひろくぞ侍る平城の
宮より見たしさだかなる所なり

古今

春日野の飛火ののもり出て見よ

讀人不知

今いくか有てわかなつみてん

此歌につきて飛火の野守又飛火の森といふ説あり袖

中抄奥義抄などにくはしく見えたり

久安百首

若菜摘袖とぞ見ゆる春日野の 教 長

飛火の野邊の雪のむら消

壬二

むかしおもふ飛火や螢春日野の 家 隆

野守よいかに夕闇の空

草根

出て見よ寺のまへなる春日野の

飛火も法の光ならずや

此ほとりにさぎ原といふ所にいさゝかなる水あ

り野守の池といふ

野守池

野守の池は雄略天皇と申御門かりをこのみ給ひけり
野に出て狩し給ひけるに御鷹をれて見えす野守をめ
してとはれるに御鷹のあり所を申いかにしてこゝ
にゐながらたなごゝろをさすがごとくにはさだかに
申ぞと問せ給ひければ此野にある水に鷹のかけうつ
りて侍れば申よし奏したてまつりけるによりて野に
ある水を野守のかゝみとは申傳へたり無名抄には天
智天皇の御時とかけり顯昭は雄略天皇と申説につき

て侍りこの天皇狩をこのみ給ふ事國史に見えたれば
その説をもちひ侍る也奥義抄

此野守につきてさだかにおもひさだめがたく侍
る春日野の野守は人王四十五代聖武天皇のをか
れしといふ一説玉傳神秘抄にあり又四十三代元
明天皇和銅五年に烽火を爰にをかれしと續日本
紀にあり此時さだめて野守もをかれけん然ども
爰に野守のかゝみといふその時代をおもふに無
名抄の義によりても天智天皇の御狩なれば人王
卅九代なり顯昭の説にしては雄略天皇は人王二
十二代也兩説ともにはるかの已前に侍るもしこ
ゝにいふ野守は烽火をまもる野守にはあらずし
てたゞ野をまもるものにやしらす

新後撰

春日野の野守のかゝみ是なれや

よそに三笠の山のはの月

和州舊跡幽考第二卷終

和州舊跡幽考第三卷

添上郡

興福寺

寺領二萬千百拾九石五斗餘

興福寺又の名は山階寺といふ夫山階寺は大織冠山城國宇智郡小野郷山階の村陶原すはらの家に居住し給ひし時造營ありしより山階寺となづけられしなり帝王編年其時齊明天皇三年也書釋又の説天智天皇即位八年嫡室鏡女王大織冠の御ためにたてられしともあり御順禮記ありて後に天武天皇白鳳元年やまとの國高市郡厩坂にうつされて厩坂寺と申盛衰記それより元明天皇和銅三年春日の地にうつしかへられ淡海公の造營ありてもとの名をあらため興福寺と申書釋盛衰記には和銅二年とあり齊明天皇三年より延寶七年迄凡千二十四年か和銅三年より凡百七十一年か五重唯識の法水は佐保川のながれ絶すつたはり四所明神の擁護は三笠

山の風萬代をよぶなればにや度毎の炎上はあれどもむかしにかわらぬ薨の軒又なくこそおぼえ侍れ

△南大門は二王の像をすへたり爰にして薪の能あり四座の太夫毎二月七日よりつとめて十四日にをはる夫薪の能は弘仁十二年興福寺の東金堂二十八相の花西金堂三十二相の花六十種の香花をかざり擁護の租神權實の諸神を勸請して供養せらる此法會には晝夜をわかつたすおほくの薪をたきけりとかや此時もろこし人西金堂の場にして舞かなでけるとぞ其後清和天皇貞觀六年より五とせがほど絶たり貞觀十年の事かとよ空のけしきかはりて風木をきりいかづち山をくづすかとうたがふ吹行末は芝をひるがへす事大象の田かへすよりもはやく土のはれ行は土龍の穴をうがつはおろかにして終穴つうけ一つ西金堂の前にあきて其すゑは南大門の芝にぬけ出夥しう吹ほどに空に飛瓦は秋の木の木葉のみだるゝにことならず地にたふる柱は夏草ののべふすよりもしげく扇は只雁などのかけるやうにぞありけるこはいかなる事にやと大衆仰天せし所に空晴雲きえしはがれ聲して天に俗星出は天子の愁四海に戎エビスおこらば我國の正法つきなんと

空によばはりてこそ行けれ大衆僉議まち／＼にして
 只是擁護の神の法會のなきとがめにぞ侍りなんと満
 座同じて絶たるをおこし西金堂の法會を南大門にう
 つしてをこなはるゝ是は風穴南大門にぬけたるゆへ
 とぞ聞えしかのもろこし人舞かなでける舊例なれば
 とて能をぞ勤られき是薪の能の濫觴也記舊延寶七年迄
 凡八百十二年か抑四座の役者のむかしをたづぬるに
 其説まち／＼なる中に聖德太子臣下秦河勝におほせ
 て六十六番の面をつくらせ紫宸殿の前にして舞をぞ
 つかうまつらしめ給ふ其舞神樂のかたはらなればと
 て神の字をわかちて申樂さうがくとぞ名づけ給けるとかや源氏抄
 扱堀川院の御時内侍所の御神樂の夜職事家綱をめ
 してこよひめづらしからん申樂つかうまつれとおほ
 せことありうけ給はりて弟の行綱をまねぎよせてお
 ほせごとのさふらへ家綱がおもふやうあり庭火をろ
 く焼たるにはかまたかく引あげてほそはぎをいだし
 てよりに／＼夜のふけてさりにさりにさむきにふり
 ちうふぐりをありちうあぶらんといいひて庭火を三め
 ぐりばかり走りて入なんと思ふはいかに行綱さも
 ありなんしかあれど大やけの御前にてはびんなくや

といひければ家綱むべなりとうなづく殿上にはなに
 事をかせんずらんとまたせ給ふに家綱めすとめせば
 家綱出てさせる事なきやうにて入けりまたすゝみで
 行綱めすといへばまことにさむげなるけしきをして
 ひざをもゝまでかきあげてほそはぎをいだしわな
 ゝきさむげなるころしてよりに／＼夜のふけてさり
 に／＼さむきにふりちうふぐりをありちうあぶらん
 といひて庭火を十二三度ばかりめぐりはしりて入け
 り上中下大かたどよみたりけり家綱はかられたるは
 にくけれども兄弟の中たがふべくもあらずとてあり
 しにかはらざりけるとぞ是はむかしの申樂といふも
 のにぞ侍る宇治拾遺それより後今の世の能にはなりたり
 けりその時代をしらず中門にして四月八日に佛生會
 あり俗人の樂あり俗はな高のまつりといふ

△中金堂は釋迦如來二菩薩なり書釋此東西に二基の鐘
 樓あり此堂造營のもと皇極天皇元年日本紀十一月

蘇我入鹿山背大兄王子をうち奉りしよりいきほいま
 うにあくまでおごれり我家を宮闕といひ子を王子な
 どゝいふ又逆心ほのかにあらはるゝ程に中大兄王子
 天智帝 中臣鎌足となげき給ふ帝と輕王子孝德かの入鹿

を誅し給なんの謀を運し給ふ又鎌足誓を立て丈六の
釋迦の像をつくらるゝ終に四年六月宮中にして入鹿
を討給ふ釋此此時のさた日本紀に詳し是より而藤氏の
繁昌あり父鎌足公の遺言あればとて淡海公興福寺を
たてゝ此釋迦の像を置えられたり釋中金堂是なり扱此
釋迦の像のみぐしの内には大織冠のもとりの中に
收てつねに信じ給ひし銀の釋迦三寸の像を込られた
帝王り編年食堂は金堂同時に淡海公建立とぞ聞えし

△東金堂は神龜元年御順禮記盛衰記水鏡七月太上天皇元正
帝御惱の時玉體安穩の御いのりに聖武天皇の御建立

藥師の像をたて給ひしよし釋書にあり

當堂の後戸に釋迦三尊の靈佛あり濫觴は敏達天皇八
年十月新羅國より枳叱政奈末なみつぎものならびに此
三尊を奉る其文に此像甚靈なり是をたうとみぬれば
わざわひをのがれさいはひをうる若なひがしろにせ
ばわざはひをまねぎ命をついめん日本しかありしよ
り帝敬崇供養ましゝて後此堂にすへさせ給ふ
釋此尊像は大織冠の御本尊にして觀音虛空藏の三尊
なり御順禮記此佛は印度波斯はし匿王のつくり給ひて御たけ
一尺二寸拜見の人口坐像は二尺五寸と云々はじめ五臺山にうつし奉り其

後百濟の國王たうとみ給ひ次に新羅王是をうやまひ
給ひて後此國にをくり給ひしを蘇我大臣こひうけ奉
りて本元興寺をたてゝそれにぞ安置せられけるかの
寺の後こゝにぞうつされける玉林抄

△西金堂は天平六年正月十一日光明皇后御母橘公の
氏の御ためにたて給ひぬ水鏡本尊釋迦如來二菩薩羅漢
神王等の像をすへられたり釋此尊像は印度健駄羅國
王の後あり生身の觀音をおがみ奉らすばあらじとち
かひ給ふに御枕上に人ま見へて日本の國王の後光明
子こそ生身の觀音にてましませと告奉るとおぼえ給
ひて御夢はさめたり此事臣下におほせごとありけれ
ば群臣儀して此人きたるべき人にあらず后又ゆき給
ふべきにあらず只そのかたちをうつし奉らんにはし
かじとて巧匠を日本國にぞわたされける巧匠此土に
つきてかくと奏聞を經る光明皇后我母君の御ために
佛をつくりなんさいはひ汝さぎみてゑさせよ則釋
迦の像をつくり眉間の玉を入なんとせしに像をのづ
からに光明をはなち給ひしかば信仰胸にみち感涙袖
にあまりていやよしなしとて玉をは入すなりにき當
堂の本尊是なり扱光明皇后の御かたちをうつし奉り

もろこしにかへりけるとぞ御順禮記 又自然涌出の観音の像平家物語 當堂にあり抑此像はむかし傳法院の修圓僧都とてありけり壽廣已講を相ぐして尾張の國よりのぼられしに賀茂坂といふ所のすがたの池のほとりにして已講くと呼聲あり誰にやとかへり見れども人さらになし又こなたにおもむけば呼かへす程にいとあやしくてこゑにつきて行ぬれば田の中に十一面観音の像いますにぞありけるゆめうつゝともわきまへすいだき上背負奉りてぞ南都にかへりける先南大門にすへ奉りいづれの堂にいらせ給ふなんやと大衆僉議して金堂よりはしめ扉をひらき入奉らんとすれども像おもくなり給ひて千萬人のちからにもかないつべくもあらず堂毎にうかへどもかろくもなり給はず只西金堂といふにぞいとかろくあがらせ給ひしより西金堂にすへられけるとぞ盛衰記

△南圓堂は弘仁四年に造立釋書不空羂索くうりんさくならびに四天王の像をすへたり釋書是は内麿のつくり給ひけるとなり水鏡又弘法大師つくり給ふともいへり盛衰記此羂索の像は三目八臂丈六にして御順禮記左の御肩に鹿の皮をかけさせ給ふ春日大明神鹿をあひし給ふよりその因縁

とぞ聞へし抑南圓堂の濫觴は淡海公の後參議中衛大將房前その子大納言眞楯その子右大臣内麿の三代は上二代のごとくさかへすやありけむ内麿の子冬嗣の大臣藤原のおとろへぬる事をなげきて弘法大師に申あはせて興福寺に南圓堂をたてゝいのり申されけり正統記しかありけれどもいまだ佛殿つくらざるに弘仁三年十月六日内麿五十六にしてうせ給ふより冬嗣先考の心ざしをおもひて弘仁四年に造建あり御順禮記此地底に銀の観音の像一千軀をおさめ詞林採葉壇をつき給ふには春日明神老翁と現し匹夫にまじはり一首をうたひ給ふ盛衰記

新古今 補陀洛ふだろくの南の岸に堂たてゝ

北の藤なみ今そさかへん

此歌は鬼の來りてよめるともいふそれはいはれなし只春日明神の御使としていざか率河明神詠じ給ふと袖中抄には見えたり又観音の淨土補陀洛山は其山のかたち八角にして藤波常盤にありその山を表して此堂も八角にはつくられたり盛衰記其後藤氏ふじ繁營のよししくはしく釋書にあり房前大臣は藤氏四家のうちに北家の

祖にぞありける又こゝにして法華會ををこなはるゝ
當世は三年に一度なりむかしは毎九月晦日にはじめ
て十月六日にをほりき内膳公の御忌日なればなり公
事根源にくはしくあり此堂の前に俗に茶白山といふ
あり是はむかし興福寺の南大門に日輪山の額をかけ
られしにあやしき事侍りつれば爰にうづみしより額
塚と號す

△北圓堂は梅多はいたら隸佛ぶつ寶號ぶつをすへたり養老五年八月三
日元正天皇元明天皇御心をひとつにして淡海公周忌
のをほりに御建立あり鏡水淡海公は養老四年八月三日
にうせ給ふなり鏡大

△講堂は彌陀三尊あり又淨名居士の像をすへたり
盛衰是は長岡大臣の建立武智麿の女ならびに同惠美
大臣など母君のために造立あり又光明皇后の御建立
ともいへりいづれも出書をしらす爰にして維摩會を
つとめらるゝむかしは十月十日より十六日にをほり
き延喜大織冠の御忌日なり公事當世は其年月さだま
らず此會には勅使などたゝせふ給ふ又つとめられし
には僧正の任をぞ給ふ夫維摩會は齊明天皇二年大織
冠山城國宇治郡小野郷山階村陶原の家にして多武こ

こち例ならすいとたのみすくなくなりけり百濟國
の人にて法明といふ尼ぞありける大臣に申さく我大
乗を持す名を維摩經といふその經の中に問疾品あり
是を讀誦し給はゞ御なやみなをらせ給てんと申さら
ばとて此一品を誦するにいまだをほらざりしに病は
なをらせ給ひき大臣稽首合掌して生々世々大乘に歸
依せんとかひ給ふ根源しかあれば齊明天皇三年此
繪を山階寺にてはじめ十二年つゝきてをこなひ給ふ
釋天智天皇八年己巳年大織冠薨じ給ひてより三十六
年ぞ絶たりける文武天皇慶雲元年更にはじめてを
こなはれしなり帝王又の說に元明天皇和銅七年此會
を興福寺にうつし給ひき此會九所にてをこなはれし
に其事中たえて四十二年にぞなり侍りしとあり鏡水
れより後絶る事あらざりけるとぞ公事又延暦二十
一年此會外にて行ふべからざるよし根源宣旨ありてもと
のやうに興福寺にてぞをこなはれける鏡水かゝる會
はもろこしまでも聞え侍るとかや此會によむなる縁
起は北野天神の御筆かけまくもかしこき神のみこと
のりに名は三國にきこえ會は興福寺にとゞまり朝の
朝たる事は此會のちからなどゝあそばされしとなん

公事 根源又むかし此會の講師の僧は宮中最勝會の講師をつとめ後紀 日本又帝釋天の御札にしろされ撰集いとたぐひなき會とぞ聞え侍る

後拾遺集 山階寺の涅槃講にまうで、讀み侍ける

古の別れの庭にあへりとも 光源法師

けふの涙そなみたならまし

白川殿七百首 維摩會をよめる 新大納言顯朝

神無月時雨ふりをける御法とて

ならの都に残る言の葉

五重塔は天平二年四月藤の皇后ならびに僕射はくや房前文武のつかさ／＼をまねき村を引かせ地をならし給ひて建立あり釋貞觀十八年七月七日寅の時此塔震動して十九日までやまざるよし三代實錄に見えたり

此邊に月日の宮ありむかしは手わけの森にありけるとぞ東には東院山こゝに天平寶字八年藤原豐成の草創の東院の東堂同四年惠美の大臣の造立の西堂寶龜二年建立の地藏堂など絶果て跡なし

窪辨財天

窪辨財天は弘仁年中に弘法大師てんの天川の辨財天に參籠して南圓堂建立をいのり給ひしかば生身の宇賀辨財天現じ給ふを觀請し給ふ宮なり此時南都に七辨財天を勸請せられきそのやしろも所々につたへてあり勸請の時の供物に餅飯もちひをとゝのへて七ヶ日法施ほふせにたてまつりしよりもちる殿の町とぞなべける餅飯殿町縁起

此ほとりに吒天だてんの宮ねふりの明神などいふやしろあり三重の塔又般若波羅蜜の五字を表示せる石五川聖天宮

一言主社 俗聖天宮といふ

興福寺の坤ひづさの隅にいましてかづらき一言主の神なり社の前に木患樹もくわんじゆありしが平家南都をやきける時の餘煙此木の穴にいりてけぶり夥しうのほりしほどに水をそゝげどもつゐにきゆる事なく七十餘日ぞけぶりける清盛入道淨海公熱病にかゝり給ひし時木の穴より猛火もえ出しが淨海公命をはり給ひし時にぞをのづかり消果たり其後枝葉しげりぬれば人あやしき事にぞいひけるとなん盛長年經て後かれけるにや當世はの木とてもなし

△第一の炎上は人王五十七代陽成天皇元慶二年堂宇僧房焼失類聚國史再興をしらず人王六十八代後一條の院

萬壽四年八月二十三日興福寺の塔を立野府十一月

二十日關白左大臣賴逋公供養あり帝王編年かくあるは再

興にや又新塔建立にやしらず重てあらため給ふべし

△第二の炎上は人王七十代後冷泉院永承元年十二月

二十四日諸堂焼失此時佛像けぶりをまぬかれさせつ

ゝがなくなつせ給ふ朝野群載御門いとたうとき事におぼ

しめして勅使をたて聖武天皇の陵などへ御ことのり

をさゝげさせ給ふ其みことのりの詞は聖武天皇の陵

の所にあらず扱永承二年柱立棟上同三年三月

供養あり此時宇治殿

ふかき海のちかひはしらす三笠山

心たかくも見えし君かな

是は弘誓ぐぜいげん深如海しんよかいの心なり願海のほどはしらねども心

だかくをほきにくはだてたりと見えしことかなとよ

めり奥義抄

△第三の炎上は後冷泉院康平三年五月四日廻廊僧坊

南大門焼失同御宇再興あり治暦元年二月二十五日供

養帝王編年

△第四の炎上は人王七十三代堀河院寛治元年二月東金堂焼失帝王編年

△第五の炎上は寛治元年より九年を経て堀河院永長

元年九月二十五日金堂焼失此時佛の眉間の玉中の釋

迦の小佛灰の中よりとり出し奉るその玉のうちに佛

像をいれし跡夢ばかりもなし佛師定朝拜禮して希有

のおもひをなし感涙をそゝぎけるとぞ帝王編年抑眉間の

水精はもろこしよりわたり給ひきまことに左右前後

より拜し奉るに釋迦三尊の影像うるはしくうつり給

ひきとなり盛衰人王七十六代近衛康治三年五月四日

金堂棟上帝王再興あり

△第六の炎上は人王八十代高倉院治承四年十二月二

十八日平家の兵火にかゝりて伽藍一字ものこらず一

時のけぶりとなる清涼院は清水の學窓大聖文珠の靈

應あり一乗院は定照僧都の聖跡貞松房の松室なつむらならび

に興靜僧都の喜多院大乘院松陽院東北院發志院五大

院傳法院眞言圓成院一言主の社辨財天の宮龍藏惣宮

住吉の社等炭灰となる盛衰人王八十二代後鳥羽院建

久五年五月二十二日再興の供養あり

△第七の炎上は人王九十代後宇多院建治三年七月二

十六日日雷火にかゝりてけぶりとなる同年八月朔日廻祿實檢の勅使は頭左大辨經長卿なり帝王 此年春宮

御げんぶく八月と聞えしを興福寺の火の事によりてのびさせ給ひて十二月十九日にぞさせ給ひける鏡増

同御宇弘安二年二月棟上ありしかども其後造營遅々せし程に同九年十月二十七日春日の神木を興福寺に

うつし奉り此事うつたへ申にしきりなりと云々又人王九十一代伏見院正應四年正月三日院の御所常盤井

殿に行幸なり給ひなんと内大臣已下供奉のよそほひならざりけるが春日の神木金堂にうつりいますよし

聞えしかば行幸のさたもなかりきすでに同二十日神木木津川迄渡御ましゝて遅々の事あながちにうつ

たへ申にとかくしてまづなだめられけるほどに二十三日に神木木津より御歸座ましゝきさありければ

廿七日にぞ行幸はなり給ふ只藤氏の公卿は神木の事によりて供奉をせられざりけり其後正安二年五月十

九日供養の日時をさだめ同十一月二十一日再興の供養をとげられたり帝王 繼年

△第八の炎上は人王九十五代後醍醐天皇嘉暦二年の春南都大乘禪師房六方の大衆と確執の事ありて合戦

におよびしほどに金堂南圓堂西金堂兵火の餘煙とぞなりける太平 記人王百一代後小松院應永六年三月十一

日公方鹿園院義滿公の御建立此時の佛師は藤山とぞ聞えし嘉暦二年より延寶七年迄凡二百八十年か

△法相宗傳來は玄昉僧正歸朝せられて興福寺につたへられしよし神皇正統記にあり

△仁明天皇寶算の賀嘉祥二年三月朔日興福寺の法師たち天皇の四十にみてさせ給ふを賀し奉られき聖像

三十軀つくり奉り金剛壽命陀羅尼經三十卷をうつし轉讀のかずかさなりて四万八十卷にぞなりける更に

天人芥せをひはろざれば天女うすものをもて石をはらふ事あらず天衣をひるがへして御くすりをさゝげな

どせしやうのもの浦島が子の雲漢にのぼりて長生をえぬれば芳野の天女上天より通ひきて五渡袖をかへ

してさりぬるかたちなど只みるやうにぞつくれり其時の歌

日の本のやまとの國は言玉のまさ國とぞふることにつたへきたれる神ごとにつたへきたれるつたへきたれる事のまゝにむかしの事をたづぬればうたのこと葉によみかへして神事に

もちゐきたれりと

續日本後紀にあり

興福寺の寺中

中院屋ちゅういんのや

中院の屋に春日相傳の舍利其外佛像あり只築山のただすまひ池水の涼しきことにぞ見え侍る

一乗院は西のかたにあり寶倉あり

一乗院

一乗院は定照僧都の造立とかや此僧都は藤氏みやこの人なり仁敷にんかの庵室にやみしては法相をまなび寛空の閑庵にこもりては密灌みつくわんのうけつぐ東寺興福寺の長務を経たり門弟にかたり給ふわが屍更にやく事をせざれたとへ枯骨となるとも法華を誦し一切をすくひなんつゐに永觀元年三月二十一日定印端坐にしてをはりをとる遺言にまかせ墓につきけるに誦經の聲鈴の音などたえざりける此僧都幼年のむかし一指を女身にふるゝ事あり今更おもふに此一指清淨ならぬ事にさらばとて指燈しとうとなし三寶に供養し懺悔せられけ

るとなり又淀のわたし舟にのり給ひしには暴風いとあやうきまで吹て途をうしなへる所に十羅刹女十人の童子と化しやすらかに舟をぞ岸につけ給ひき兩岸に立やすかひて見し人感嘆せざるはなしかゝるやんごとなき人にてましませば一とせ此院の庭の桶をのづからに枯けるには大佛頂の咒をとなへられしかば更に枝葉しげりたりけり釋當院と大乘とかはるゝの寺務職にぞおはします抑興福寺の寺務職は寶字元年釋慈訓僧都にはじまりて書後當世に絶す

松室

一乗院のうしとら

松室貞松房は仲算已講の住給ひし所なり此仲算はいづれの所なりともさだかならず興福寺の北の門に六七歳の童子にてあそびゐられしがつねのうつはものにあらずとて空晴法師のそだてられし人なりいと身をしりぞける人にやありけん僧官を給ふれば辭して他にゆづり維摩會の宣下あれどもいなび給ふ事三度の瀧の本にして般若心經を誦せられしには千手千眼の像あらはれ給ふその講をはりて岩上にのぼりて終

に見え給はずとも申又慈恩寺山に入て更に出給はず
只草鞋をのみ残しをかれしともあり釋書

八重櫻

観禪院のうしろ集會堂しやうかいの前に東圓堂の跡そのほ

とりに八重櫻なごりばかりにのこりてあり

八重櫻は東圓堂のまへにあり沙石集又東金堂にさかへ

たり盛衰記など、書れたり八重櫻といふは一本にはか

ざらざりけるにこそ又吉田の兼好は八重櫻はならの
みやこにのみありとぞかけるさもこそありけめ

一條院の御時ならの都の八重櫻を人のたてま
つりけるを御まへに侍りければそのはなをた

まはりて歌よめとおほせられければよめる

詞花集
いにしへのならのみやこの八重櫻 伊勢大輔

けふ九重にほひぬるかな

建久六年大東寺供養に行幸の時興福寺の八重

櫻さかりなりけるを見て枝に結び侍る

新古今
古郷とおもひなはてそ花櫻 讀人不知

かゝる御幸にあふ世なりけり

又上東門院とて后おはしましける八重ざくらをみ
やこにめされしかば大衆いとびんなしたとへいのち
はともあれ櫻をほりてはえこそまいらすまじといな
びてあながちなるわざなどもありとかや女院かくと
きこしめし給ひて奈良法師は心なきものところおも
ひしがまことに色ふかしくて櫻はめさすなりけりこ
とに伊賀國余野よのの庄をよみ給ひてそれより花のさか
り七日のあいだ宿直をしてまもらせ給ひけるかくあ
りければ余野の庄をあらためて花垣の庄とは名づけ
ける沙名集いまに此寺の領にぞ侍る又春日若宮の神主
祐茂といふあり八重櫻をつきとめてをのがせさいに
ぞうへける年を経て色香もことに侍りければいとめ
でたき物にぞおもひける此事大内に聞しめしあげら
れて其櫻をぞめされけるほりて奉りながらいとなご
りやありけむ

八重櫻けふ九重にうつされて

古き都の春ささひしき

となんよみて花にぞ結びける大内にも此歌をめだ
せ給ひてさくらはならにぞかへし給ひけるかの祐茂
は優にやさしき人にて撰集のありけるに

和歌の浦に跡つけながら濱千鳥

人にしられぬ音をのみぞ鳴

とよみてえらびには入けりそれより濱千鳥の神主とは人いひけり

花林院けりんいん

松室の西に花林院の跡あり中筋といふ所なり

花林院は別當永圓やうえん僧正のすみ給ひし所なり僧正優にやさしき人にてほとゝぎすの鳴を聞て

金葉
聞度にめつらしければほとゝぎす

いつも初音の心地こそすれ

といふ歌を詠じてぞ初音の僧正とはいはれ給ひしぞかし治承四年平家の兵火に佛像經卷のけふりとたちのぼらせ給ふを見まいらせあなあさましとてむねうちさはがれるよりやまひづきて終にをはられけり
平家釋書五卷に興福寺永縁といふあり永圓とは別人物語
にや永縁は人王七十五代崇徳天院の御代の人永圓は八十代高倉院の御宇の人のやうになん見え侍る然共金葉和歌集に右の歌をのせて權僧正永縁とあり後の人さだかにせらるべし

勸修坊

山野邊といふ所にあり

勸修坊は周防得業とくごう聖佛の住坊なり文治三年源義經師檀のよしみありて逐電の時しばし身をかくし給ひし坊なり東鑑むかし此防のほとりに火の事侍りしに源の義經筆をそめ使をつかはされけるそのふみ此坊に今にありとぞ

菩提院

呼ニ大御堂

興福寺南大門之東に鐘樓あり

本尊は無量壽佛右方の厨子つしに生身の菩薩ぼさつ兒觀音あり鹿野園梵福寺の緣起曰一條院の御宇に朝欣上人といひしは菩提院にありて修學他事なししかあれども名刊にほだされ出離の道をろかなりしが種子生現行現行薰種子と云論文におどろきて出離の心ざしありしかども猶顯密修學のかたはらに心のにごる事をかなしみて毎月初瀬寺にまうで、此事をなげくに三とせを経たり寛弘四年十二月晦日にまうで、我道心開發と祈る事は是佛菩薩の本誓なり此願もしむなくば

又悲願もむなしかるべし悲願又むなしくば誰かは菩提を頼べき我に菩提心をさづけ給へと泣かなしぶ夜あけぬれば山路をしのびてかへりしにならの京の辰巳鹿野園の松陰にして日はくれたりおもひあへぬに十二三ばかりのわらはの來りて我にしたしきものなし上人我を哀み給へとなげくいへあはれなりけりいさともなひて寺にかへりき其後上人につかへ奉りし事いふべくもあらずかくて六とせといふ長和二年三月十八日に童子今はいく程あるべしとも覺えず只師恩むなしくなさんこそかなしけれ我死にたらん後棺にをさめて初逢奉りし鹿野園の松の上にをき七日を経てひらき給ふべしといひて息絶ぬさのごとくにしてをくり捨かへりぬ上人心におもふやうつねづねの祈だにもかなへさせ給はずながらうき目を見せ給ふこそうらめしけれと長谷寺にまうで、菩薩にかこもなく、念誦してゐたりける夢にかの童子の棺のうちより觀世音の御正躰となりて飛來りて正面の御戸の上にかゝるとおぼしてさめたりかたはらなる僧のいひけるは此六とせうせ給へる御正躰の忽然として出來り給ふぞやといひあへるを見れば夢に見し

御正躰にてぞをはしける上人いとあやしくおもふおもふ坊にかへりぬありし日も七日になりぬれば棺をひらきけるに金色生身の十一面觀世音いましき誠菩薩の利生方便となみだをながし詞をうしなひつゝいだし奉りて當院に安置せしなり世俗に兒觀音を申し上人初は都卒の行者たりしが此後は觀世音を念じ兼て死期をしり臨終正念にをはりをとられける其後補院洛山に生ずと門弟子どもにつげ給ひけるとかや

鹿野苑
緣起

大乘院

傳へ聞大乘院は堀川院の御宇寛治元年二月に造立なり今の所は元興寺の別當の住坊たりし禪定院の跡とかやむかしの大乘院の跡は興福寺院の内龍雲院といふ僧坊のほとりなり本願は隆禪大僧都と申き左將藤原政兼朝臣の長男なり康和二年七月十四日に迁化ありて大安寺へ葬きその所は大安寺觀音堂の北のかたに松の一本生たる塚是なり

猿澤池

興福寺の南のほとりにあり此池の西に采女の宮東に衣かけの柳などいふあり楊貴妃の櫻ありむかし興福寺に玄宗法師といふありいとあひせしきくらなればとて楊貴妃とは名づけゝるとかや猿澤の池は天竺の獼猴池をうつせしよりこの名ありとぞ池の西北の方の松井坊に獼猴の形像あり弘法大師の作なり俗説玄なぐあり抑天竺毗舍利國に獼猴池ありその池の遠からぬ西にもろくの猿ありて如來の鉢をもちて樹上にのぼり蜜をとる池の遠からぬ南にむらがる猿ありて佛に蜜をさゝげ奉る所なり池の西北に獼猴の形像あり西域かの獼猴池のほとりにして目蓮尊者無所有所定に坐せられしに象のなく聲猿のたはぶるゝ聲など耳に入て定を出られけるとぞ唯識むかしならのみかどにつかうまつるうねめありけりかほかたちいみじうきよらにて人々よばひ殿上人などもよばひけれどあはざりけりそのあはぬ心はみかどをかぎりなくめでたき物になんおもひ奉りけるみかどめしてけり扱後又もめさゝりければかぎりなく心うしとをもひ略世にふまじき心地しければよるみうかにいでゝ猿澤の池に身をなげてけりかく

なげつとも御門はえしろしめさゝりけるを事のつゐでありて人のそうしければ聞しめしてけりいといたうあはれがり給ひて池のほとりにおほみゆきし給て人々に歌よませ給ふ

柿本八丸

わきも子かねくたれ髪を猿澤の

とよめる時に御かど
池の玉藻と見るそかなしき

猿澤の池もつらしなわきも子か

玉もかつかは水そひなまし

とよみ給ひけり扱此池にはかせさせ給てなんかへらせおはしましけるとなん大和物語

玉計集

身を捨は哀とも見よ猿澤の

忠 度

いける世にこそ情なからめ

とどろきのし
轟橋

東大興福兩寺の中間押明の門の南のほとり此橋のならばの北に雲井坂あり

奈良八景

うち渡る人めも絶す行駒の

冬 宗

ふみこそならせ轟の橋

あられふり玉ゆりすへてなどゝよめるはあふみの國
のといろきのはしなり澄月 歌枕

雲井坂

同

村雨の晴間に越よ雲井坂

爲 重

三笠の山は程ちかくとも

山城國は北に大和國は南にあり小坂といふ所兩
國の境なり大和國の名をあらはす

大和國

大和國はたゞ日本國の總名にしてわかちていへば大

和一箇國の名なり釋曰 本紀

日本國といふは大己貴の幸魂奇魂日本國三諸山にす

み給はんと宣ひきすなほちかの所に宮たてゝ三輪の

神とあがめ申より此名あり日本 紀

耶麻止とかけるは或は山に住止のゆへなり或はあめ
つちわかれていまだ土濕かはかす山を住家としてゆ

きゝの跡おほかりければとなり釋日本紀曰 弘仁私記序

山戸とかけるは山をより所にして住ゆへにといへり

釋日本紀曰 延喜開題紀

山跡とかけるは山にのぼるに人跡あらはるゝゆへに

といへり釋日本紀曰 延喜開題記

大日本豐秋津洲といはふ陰陽の二神おほやしまをう

み給ふの時まづはじめに大日本豐秋津洲をうみ給ふ

神代といへともやまとを國の最中とし給ふとなり大

はわが國をたうとみ豐はわが國をことぶくの心なり

釋曰 本紀

虛盈日本といふは饒速日命あまの岩ふねにめしてお

はざらをかけり此郷を見てあまくたり給ひし時そら

みつやまとゝ宣ひしなり日本 紀

秋津嶋倭といふは神武天皇此國のかゝちを見そなは

し給ひて内木綿眞達國といへども蜻蛉のかたちに似

たりと宣ひしより此名あり日本 紀

秋津羽の國ともいへり

倭國といふは舊説にもろこしの人我國の名をとひし

程に我國やとこたへしかば我のはじめをとりて倭國

天御虛空豐秋津折別ともいふ舊事紀

浦安國ともいふ

細戈千足國ともいふ

磯輪上秀眞國ともいふこれらはみな伊弉諾尊のなづ

けさせ給ひし名なり釋日本紀

玉壙たまがきの國ともいふおほあなむちの神の宣ひけるとな

り日本紀舊説曰玉壙は倭なり三輪の神すみ給ふ故なり

日本國といふは陰陽二神はじめて日の神をうみ給ふ

よりして日本を名とせり弘仁私記序にはく日本國

は大唐より東にして萬餘里日東より出て扶桑にのぼ

る故にかくはいへり又此國日邊にありし故此名あり

又倭國の名な雅からざるによりてあらためて日本とい

ふともいへり纂疏

耶馬臺國ともいふ倭の音をかりもちゆるのみといへ

り釋日本紀

大縣郡ともかけり養老四年に此勅あり拾芥抄

大養徳國ともかけり天平九年十二月に此勅あり續日本紀

又もとの名にかへりて大倭國といへり又あらためて

大和國といへり拾芥抄抑一國の名をもつて日本國の總

名となせる事は神武天皇此國のかしは原にみやこを

はじめてつくり給ひし時はじめて天皇と申奉り妃を
皇后又嫡子を皇太子と申奉る只帝都の開基なるがゆ
へにとあり釋日本紀又世にやまとことばといへるも此國

其もととなり大和國に言玉のまさ國とぞふることにつ

たへ來れり神語につたへきたれりと續日本後紀にか

かれりたり言玉は詞なり無名抄大和國は畿内の國の第

一にをきしかども平安城にうつし給ひて後に仁明天

皇三年に勅をくだし給ひて山城國を第一とせさせ給

ひしなり續日本後紀

郡は十五郡 添上、添下、平郡、廣瀬、葛下、

忍海、宇智、吉野、葛上、城上、山邊、高市、宇陀、

城下、十市也、延喜式

田の敷は一萬七千九百五町九段百八十歩倭名類聚

倭路

倭路は聖德太子御年卅四と申に此國の大道をつくら

せ人馬のつかれをやすめ給ひしとなり上津道は東に

ありて長谷の大道中津道は芳野の通路下津道は今の

西の大道なり玉林抄

萬葉

わきも子を夢に見えこと倭路の

拾玉

わたる瀬毎に手向我する

なによりと聞るうりを倭路や

慈 鎮

いかて持夫にすこしゆるさん

草恨
敷島やすくなる中津道あるを

しらてやつるに大和言の葉

奈良

平城 なら 平 なら 那羅 なら 諾樂 なら 寧樂 なら 乃樂 なら 檜 なら ともかけり

萬葉集日本紀釋書 夫奈良は崇神天皇十年九月武垣安彦と妻の吾

田媛と國家をかたぶけむと夫はやましるより婦は大

坂よりいくさをゐて來る御門五十狹芹彦命をつかは

してあだひめを大坂にしてうちとりたり又武埴安彦

のよせ來るやましるのかたへは大彦と和珥臣彦國菫

をつかはし給ふ輪 かみ 韓川 又名いどみ川又泉 にしてたゝか
ふ敵の軍やぶれて武垣安彦をうちとり爰に忌菟 いっへ をも
つて和珥の武鐸坂 たけきき の上に鎮坐すなはちつはものをゐ
て那羅山にのぼる軍兵あつまりつどひて草木をふみ
ならしけるよりして那羅山とはいひけり忌菟は青瓷
なり 袖中抄 瓷は酒器なり 詞林探葉抄 又青瓷よしなら青丹 あそによし 吉な

ら青幣 にきて 手ならともよめりくはしくは詞林探葉抄に見

えたり

あをによしならの都は咲花の

にほふかこときいままさかりなり

同 なら山を含丹紅葉は手折きて

こよひかさしのちらはちるとも

同 我宿 はぎ の芽子咲にけりちらぬまに

玉吟集 なら山 な のこの手柏もめくむらん

家 隆

ふるさと人のさくらおるころ

著檜里 きならのさと

勅撰名所類字名所等添上郡歌枕に奈良里なり

萬葉 君に戀いともすえなみ檜山の

小松か下に立なけくかも

同第十二 戀衣著檜の山に鳴鳥の

間無時無吾戀良苦者

澄月歌枕曰著猶とかくあり猶と檜と和訓不同か
仍歌一所にのせたり或曰檜是正字也則奈良山也

著は助語字也先達著櫓を奈良山とさだめらるゝ
うへはうたがふべくは侍らねども萬葉集第六卷
に

幸_ニ于難波宮作歌四首の中に

萬葉
韓衣服櫓の里の島待爾

玉乎師付牟_{よきひとかみん}好人欲得

服櫓の島とよめるはもし津の國の名所にはあら

すやかさねてあきらかにせらるべし

夫木
鳴をくれこちこせ山の時鳥

後 賴

きならの里の松の絶間に

奈良大路

萬葉
青丹吉ならのおほちはゆきよけと

後 賴

この山道はゆきあはしけり

奈良坂般若路_{はんにやち}
附酒野在家

奈良坂般若路の二つの道さだかならず今の大道の其
東に伊賀よりの道路ありもし是らにや酒野在家もさ
だかならずむかし平家ならをせめぬべきよし聞へあ
りし程に大衆も勢をまねきあつめ奈良坂般若路の二

つの道にほりをほり城櫓をかまへてまちたり治承四
年十二月二十八日の事なりければ軍夜に入てくらか
りければ大將軍平の重衡卿例の大たいまつはと下知
せられし程に酒野_{さけの}在家_{さいけ}に火をかけならをぞやきたり
ける_{盛衰}
記

般若寺

寺領三拾石

般若寺は聖武天皇の御建立勅書の大般若經を地底に
納めさせそのうへに十三重の塔をたて給ひしより般
若寺と號せりといふ説あり然ども和州般若寺は觀賢
僧正の開基と釋書に見えたり本尊文殊大士は忍性律
師諸人に衆縁をむすばしめむとて丈六の文殊菩薩を
つくり此寺にすへ給ひしなり_釋

△開山觀賢僧正は秦氏にしてさぬきの國の人なり聖
寶の御弟子たり延喜二十一年勅定によりて弘法大師
の定扉_{さだひら}をひらき御すがたをおがみ給ひしに御髮など
いとながくおはしましければそり奉り又御門よりま
いらせ給ひしむらさきの御衣_{盛衰記}
ひはた色_{ひはた}をめしかへさせ
給ひし人なり延喜十九年醍醐寺の座主たり此職のは
じめなり延長三年僧正になりその年の六月十一日に

をばりをとる釋書

△炎上は治承四年平重衡卿の兵火にかゝりて煙となり其後文永年中に西大寺の興正菩薩の再興なり年經て延徳二年炎上して經藏樓門のみ殘しかば文珠大士を經藏にすへて年久しく經たり今の堂は寛文中の再興なり

△むかしは眞言たりしが文永年より此かた律宗たり寶物に大塔の宮御身をかくさせ給ひてあやうき御いのちをのがれさせ給ひし大般若經同櫃ありくはしくは太平記にあり

△此寺の山十町のうち木をきる事を禁制の宣下あり貞觀五年九月二十六日なり三代實錄

是より南に三間卒都婆あり

三間卒都婆

平野の三間卒都婆と盛衰記いふこれなり石のはしらを

左右にたてその頂上に石の蓋ありしより俗に笠卒都婆といふ左のはしらには諸行無常の文右には如來涅槃の文をえりつけたり石淵寺の勤操こんそうのたてをかれしとも中川寺の實範のたてられしともいふ

惡左府墓

所にいひつたへて今の大道より十町あまりひがしゑびすの宮はかの左府の墓のあとなりといふ今の大道は奈良坂かのゑびすの宮のほとりは般若路にやさだかにしらす

惡左府賴長はみやこのいくさにながれ矢にあたり給ひて大和路にをち給ひしが保元元年七月十四日御とし三十七にしてうせさせ給ひしかばこゝに葬したりき同二十五日實否じつふの實験とて死かばねをほり出しけるその所は添上郎川上村般若野の五三昧なり大道より東に入事一町あまり玄圓律師實濟得業つかの墓の猶ひがしゆがめる松のもとへ保元物語に見えたり其後治承二年中宮御産の御いのりに太政大臣正一位を送り給ひけり平家物語延寶七年迄凡五百二十四年か

奈良坂

草根
影そ見ぬ風は夕そなら坂や

此手柏のまねく三ヶ月

正 徹

奈良坂癪人

いつの比よりにやありけん癪人の住宅となれり
むかし此所に手足まとはれて行歩もかなはざれば袖
こひもかなはず日を経るといへども物もくはざりけ
る癪人ありその比忍性律師は西大寺にぞ住おはしけ
るかゝる癪人を見給ひていとあはれがり曉ごとにな
ら坂のいほりにいたりて癪人をうしろにおひ來り市
中にすへをき暮ぬれば又をひてかれがいほりにをく
りかへし風雨寒暑にもをこたりなし癪人臨終の時ち
かひあり我かならず又此世界にうまれて師につかへ
て厚恩を報じ奉らん顔に一瘡を残してしるしとせん
といひてぞをはりけるその後忍性律師につかへし人
の中にあながちにつかうまつるものありかほに一瘡
あり時の人癪者の後身とぞいへる忍性律師の修營の
伽藍八十三所塔婆二十基大藏經一十四藏諸國の川橋
一百八十九所嘉元元年七月十二日をはりをとる年八
十七書

佐保川

今新在家町の石橋是なり水上は春日山より出て
西は眉間寺の南のふもとをながれ行眉間寺の山
號を佐保山といふ

萬葉 佐保過てならの手向にをく幣は 長屋王

妹をめかれすあひみしめとそ

萬葉 梅柳過らくおしみ佐保の内に

あそひしことを宮も動々に

持賢門院堀川 あみかくるさほの川瀬にたつ千鳥

又いつかたへなき渡るらん

覺雅僧都百首 佐穂川の涙にぬるゝから衣

おもひをかけぬをりのなきかな

後京極百番歌合 水上にたのみはかけきさほ川の

すゑの藤波なみにくたすな

佐保殿 所しらす

左大臣長屋王の佐保の宅にて

萬葉 はた薄尾花逆茨くろ木もて

作れる宿は萬代迄に

同 あをによしならの山なるくろ木もて 天皇

作れる宿はをれとあかぬかも

榮花物がたり紫野の卷にうちのおほと、少將どの今は三位中將としてよになくはなやかなる御ありさまなり左のおとこの御むこにぞなしたてまつらせ給へり略ほどなく中納言にならせ給て中將の中納言にてはるの春日まつりの上卿せさせ給ふ略こつがはなどわたらせ給ふほどえもいはずおもしろうおかしかりけりかくて佐保殿につかせ給ふてまつりのぎしきありさま世のつねならずめでたくまいらせ給ふとあり

梨子原なしはら

俗に内侍原町といふもしほ草にやまとの國と云云なしはらは二條の大路の南にあり

梨子原はむかし近衛府の領地なり春日祭の勅使まづ山城國淀の美豆御牧に一夜とまり申の日ならの梨子原につきて装束など正しくよそほひ山階寺の北ならびにひがしを経て祓殿の座につき神前の規式ごとをはりかへりきて紐をときもとよりをはなちて梨子原につきてよもすがら酔あそび給ふとあり江家次第又東大寺八幡菩薩を宮南の梨子原の宮に新宮をつくりてう

つし奉りきとあり續日本紀是も此所なるべし

君はかりおほゆる物はなし原の夫未 讀人不知

むまや出こんたくひなきかな

こしかたはそむる時雨もなし原の 正三位

むまやありてふ山の紅葉は

率川坂本陵

林の小路韓國の社の奥なる念佛寺の境内にありと古老のつたへなり韓國の社は園韓神是名無雄なり説俗に加牟古不の社といふ

率川坂本陵は和州添上郡にあり延喜式人王九代開化天皇の陵なり御宇六十年四月九日に崩御なり給ふ御年百十五歳古事記曰その年の十月春日の率川坂本陵に葬り奉る日本紀延寶七年迄凡千七百七十六年か

率川宮

率川宮は開化天皇春日の地に都をうつし給ひて率川の宮といふ日本紀

古老傳へていふ率川の宮の跡は今の子守町にして率川の社あり俗に子守の宮といふ此ほとりに

率川のながれあり

率川社

率川社は春日の御やしるにはるか引のけていさが
はと申けんぞくの神にしおはしますなり天下をもら
さずはごくみ給ひなんととの御ちかひあり撰集率川に
います大神御子神の社三座延喜式第一は開化天皇第二
は子守神第三は住吉の神なり小社二座なつみ巽の方は春日
大明神ひかり坤の方は住吉大明神なり當世社は正一位にて
おはしますとかや或傳

△三枝祭は率川の祭ともいふ春日祭のあくる日をこ
なはるゝなり神祇令にのする三枝祭とおなじかるべ
くは四月にてあるべし公事根源令義解に孟夏の部に入て
三枝祭は率川祭といふとあり延喜式に此祭四月なり
夫三枝祭といふは華三枝を酒蹲にかざるゆへに此名
あり令義藤原南家の口傳に率川の社は左大臣は公の
建立と侍れどもおぼつかなし此故は令と申書は淡海
公のえらばれて養老年中に奏覽あり是公の大臣は淡
海公の曾孫なり既令に率川の社と侍なれば是公の
はじめて建立にはあるべからざるや養老已前そも

はやありける神社也是公の再興し給ひけるを建立と
申やらんいとおぼつかなし公事根源三枝さきくさともさ
いくさともよめり此祭絶果ける時代をしらす
白川殿七百首
はふりこははやまつらんといさ川の 資 季
かみの宮井にぬさ手向なり

率川阿波の神社

此社は率川の大神御子神社とは別宮にして神名帳に
も別宮にのせられたりいづれの所ともしらす仁壽二
年十一月大和國率川阿波神に従五位下をさづけ給ひ
しよし文徳實錄に見えたりかさねてあきらかにせら
るべし

餅飯殿町もちいとの附大寮所

もちる殿町は舊名福貴島郷といふ是はあめのみかど
の御宇に國司和氣利實卿五月一日に始て路の供御を
さへげしより此名あり其後窪の辨財入を勸請の時餅
飯の供具を奉りしより餅飯殿の名ありくはしくは窪
の辨財天の所にあらはず扱むかし役行者大峯の道を
ひらき給ひしより後中絶て榛葛洲路をふさぐ聖寶僧

正入峯の絶ぬるをふくなげき更にひらかんと出たち給ひしに當町の俗七人僧正の厚恩ありとて供奉せり終に二度ひらき給ふより當山とはいへりそれより相つゞきて此町の人々山上の峯入今に絶ず餅飯殿吉町縁起吉野より峯までその旅館のもてなし舊例にたがはず八百歳の年は經れども聖寶僧正の威風絶やらず扱大宿所といふあり遍照院と號す春日霜月の祭禮の贅をそなふる所なりくはしくは若宮祭禮の所にあらはす

悲田院ひでん

住僧のかたられしはむかしの悲田院は絶はてゝ中比より此院建立せしなり舊院の跡はさだかにしらすとなり釋書に興福寺の内にたてられしよし見えたり今此所は興福寺よりはるかの南にぞ侍る

悲田院の本尊は觀音菩薩にしてことやうにぞ侍る左の御手はひちより樂師の立像につくり右は御ひちより阿彌陀佛の立像につくれりむかし悲田院の佛かくぞ侍りけると住僧のかたられしなり元正天皇養老七年施樂悲田の二院を興福寺にたてられしなり釋書

誕生堂 鳴川町

中將局の誕生の所なり父は藤原朝臣豐成なり此豐成の石塔は南都高坊といふ所にありしにいとふりてけしきえならぬ塔にありけれは世にいきほひあるかたのさぶらひとて人あまたぐして入きていなともいはず石塔をはこびなんとせしほどに連歌師心前とかやおりふしゐられけるが無下にあさましくおもひて

引のこせ後も又見む石のたけ

と句をいひ出されたればさすがにおもひとまりて年久しくありけるが延寶五年といふには鳴川の大念佛寺にうつしかへすへたりと或人かたりけるより聞捨がたくかき侍る

元興寺 寺領五拾石 當代眞言宗

元興寺はをとろへ果て五重の塔一基大日如來います又堂一字觀音菩薩をすへたり此觀音の像は長谷の觀音をつくりし靈木の第二のきれにてきざみぬれば長谷にまうでぬる人はまづ此觀音にまうでぬれば事のかなふ事かならずに侍る御願夫當寺は推古天皇四年

高市郡飛鳥の地にたて給ひて日本その四門の額は南

に元興寺北に法滿寺東に飛鳥寺西に法興寺とかけら

れたり又建興寺又建通寺ともいへり玉林抄御其後人王

四十三代元明天皇和銅三年高市郡藤原の宮より都を

ならにうつされし日御門飛鳥寺に行幸なり給ひて是

佛法元興の場なり伴の寺奈良にうつし給ひなんと勅

言おはしましき三代格はしくは帝王編年にあり四十

四代元正天皇靈龜二年五月元興寺をならにうつし左

京の六條四坊にたつる續日本紀又同御宇養老二年八月法

興寺を新京にうつせしよし見えたり續日本紀靈龜二年よ

り養老二年迄はわづかに二三年を経る靈龜二年に元

興寺をはじめて養老二年に成就せるにやかさねてあ

らため給ふべし元興寺法興寺異名同寺也扱高市郡元興寺は舊都に

ありて本元興寺といひ新京ならにはあらたにたてゝ

新元興寺といへり帝王編年佛像などは半うつされしとか

や玉林抄靈龜二年より延寶七年迄凡九百六十四年か

極樂坊

元興寺の北にありむかしは元興寺の寺中にて侍
りしがいづれの年にや西大寺の法流になりたり

極樂坊は智光法師のこもり居給ひし所也夫智光法師
は河内國の人書釋或は大和國の人とも申神中抄むかしや

まとの國に猛者ありけり家には山をつき池をほりい

みじうつくりけり門守の姫の子なりけるわらはの麻

福田丸といひてありけり池のほとりにいたりて芹を

つみけるが猛者のいつき姫君いでゝあそびけるを見

しより此わらはおほけなき心つきつゝ病になりて其

事となくふせりければ母あやしみおもふからにあな

がちにとひければわらは此よしをかたるにすべてあ

るべき事ならねば我子のしなん事をなげくほどに母

も又病にふしぬ其時にかの家の女房此姫のやどりに

立いりけるに二人のものゝやみふせるを見てあやし

みいかにととふに姫のいはくさせるやまひにてもあ

らずしかゝの事の侍るをおもひなげくによりてお

やこしなんとするなりといふ女房わらひて此よしを

姫君にかたるに姫君あはれがりてやすき事はや病を

やめよといひければわらはもおやもかしこまりよろ

こびて起て物くひなどして例のごとくになりぬ姫君

いふやうしのびてふみなどかよはさむに手かゝざら

ん口おし手ならふべしわらはよろこびて一二日にな

らひつ又いはく我父母しなん事ちかし其後はなに事も沙汰せさすべきに文字しらざらんわろし學問すべし童又學問して物見あかす程になりぬ又いふしのびかよはんにわらははみぐるし法師になるべし則なりぬ又いふそのことゝなき法師のちかづかんあやし心經大般若などよむべしいのりをさするやうにももちなさんといふ猶したがひてよみつ又いふはいさゝか修行せよ護身などするやうにて近づくべしといへば修行に出たつ姫君あはれみて藤のはかまを調じてとらす片袴をばみづからぬいつ是をきて修行しありくほどに姫君世になくなりければそのよしを聞て道心をおこしひとへに極樂をねがひてたうときひじりにてうせぬ弟子ども後の事するに行基菩薩を導師にうけたり禮盤にのぼりていはくまふくだ丸が藤袴われぞぬひしかたはかまといひてかねうちてこと事もいはでをりぬ弟子あやしみてとひければ亡者智光はかならず往生すべき緣ありしものゝはからざるに世間に貪著して惡道にゆかんとせしかば我方便にてかくはこしらへいたりとなんありけり姫君は行基菩薩の化身行基は文珠なりまふくだ丸は智光なり智光

頼光とて往生したるものは是なり是はうきたる事にもあらず人の文珠供養しける導師にて仁海正の宣けるなり袖中抄

芹つみしむかしの人も吾ことや

心にものはかなはさりけん

此心をよめるとなんの給けると袖中抄にくはしく見えたり

抑智光法師は智行そなはりやんごとなき人なりその比行基菩薩といふあり聖武天皇の御歸依いとあつかりけり智光おもふやう行基はとしもわかく智も又何ほどの事かはあらん御門いかにして我をすてさせ給ふにかといとらめしうて世をしりぞき山ふかき寺にぞすみける智光おもひあへぬに死せりつねに門弟子に遺言ありし程に日を経ぬれどもはうぶらざりけり十日といふにぞ蘇よみがへりに弟子等にいはく炎王宮の使我をおつたてゝ行其路邊に金殿あり我是を使者にとふ使者あれはとよな行基菩薩の生れぬべき所なりなを行て遠見すれば煙火虚空にみちてもえあがる所ありいかなる所かといふ使者これぞ汝を入なん獄よとおつたて行程に炎王の御前にぞひざまづきける炎王

おほせ給ふ汝闇浮提日本國にして行基菩薩を嫉惡の
心あり今汝をよびてその罪を徵す則銅柱の炎にこが
れたるを我にぞいだかしめられる我身筋骨ともに
とろけぬれば終にゆるさるゝとをばえて生出たり此
事を行基菩薩に謝し奉らん其時行基菩薩は難波江の
橋をつくり給ひしか智光法師たづねて行ぬるに苦
薩遙に見てそれぞと心にやしられけんゑみてぞたゝ
れける智光法師なみだをながし地にふし禮拜して罪
をぞ謝したりけるとぞ萬陀羅抄かゝる妙なる人にてあり
ければにや阿彌陀佛國の圖なども感得せられたり
△當坊に淨土萬陀羅あり西譽曰方一尺二寸
白記曰方二尺本朝最初曼
陀羅は俗に智光曼陀羅といふ智光法師禮光法師とて
智行やんごとなき二法師ありけり禮光法師年たけて
は無言を修せしなから終にをはり給ひけり智光法師
つくづくとおもひしは無言の臨終はいとふかくこそ
おぼゆれその生所をしらずばえあるまじとて月をか
さねて此事をぞいのりける一夜夢を見けるに禮光法
師のもとにいたりてま見えぬるに其住ける所は七寶
莊嚴五色の光明言葉にいふべくもあらずいかなる所
なればかくはおはするぞや禮光法師是は極樂世界に

ぞいまそかりける我此年月言語を施して觀相の床ゆかを
はなれざりし功德にかゝりてかくめでたき身とはな
り侍れ智光法師しかあらばその觀相のやうをしらし
め給へかしといひければ禮光法師しかあらば阿彌陀
佛の御前に將てまいりなんとといざなひ行とおもひし
が眞身の阿彌陀佛にま見え膝を屈し掌をあはせかう
かうの事をぞさぶらひ侍れと奏し奉りしかば佛の宣
はく極樂世界ならびに莊嚴を觀相せよとて見せしめ
られしかば智光法師莊嚴かぎりをしらず世界いとひ
ろしいかでか凡身の觀相にかなひましやとなげくけ
しき侍れば佛右の掌をひらかせ給ひて小淨土を現じ
給ふをおがみ奉るとおぼえて夢はさめにけりしかあ
りければ小淨土を圖繪せられしなり今當坊にあり書釋
いにしへ西譽上人といふあり應永廿四年十月十四日
爰にまうで、曼陀羅ならびに佛舍利を拜禮せらるそ
の事どもたづねられしかば長老此曼陀羅の畫師は西
方極樂彌陀佛の左脇士の菩薩童子と化してかき給へ
り舍利は佛のたなごゝろに小淨土を現じ給ふ時婆娑
衆生うたがひもありなんそのしるしにせよとて給ひ
し釋迦如來碎身の舍利なりとかたられしより西譽上

人述作の曼陀羅の抄にかくぞのせられける

仙光院

ごくらく坊の北なるべし此跡さだかならず

仙光院は禮光法師住給ひて北にあり極樂坊は南にありて智光法師の住給ひき兩院元興寺の内にありと御順禮記に見えたり釋書又佛法傳通記等には禮光日本往生傳には賴光とかへれたり此二法師は智藏に三論の深旨をつがれてやむごとなくましませば世に二光とぞいひける書此二法師は大化年中の人にて侍るよし水鏡にかへれ侍れども大化の年は三十七代孝德天皇の御宇なり釋書によらば四十五代聖武天皇の御宇の人と見えたり此法師達より靈睿は三論をうけつがれたり今の三論家皆靈睿のすへにぞ侍る書釋

少塔院

此跡は西の新屋といふ町なり

少塔院は元興寺の院内護命僧正の住院なり護命は秦氏美濃の國各務郡の人年十五にして元興寺の萬耀大法師につかへて吉野山の苦行又法相大乘をまなび月

の上絃には山ふかく入てをこなひ下絃には本寺にかへりてまなぶ又物をくふ口の中に佛舍利一粒をえたりその後以上に一粒をえたり靈異しきりにあらはれ天長四年僧正たり同八十五にしてこの院にをはる臨終にいたりて同寺の僧善守石上寺より來るに音聲院中にきこへたり淨利のむかひ天人の樂にぞ侍る續日本紀又世につたへて法論味増といふあり護命僧正のはじめてつくられしより人みな護命味増とぞいひける

禪院寺

此跡をしらず元興寺の別院然れども釋書に右京にこれをたつるよし見え侍ればもし郡山邊などには此跡あらずや先一往こゝにあらはす

禪院寺は元興寺の別院なり道昭法師もろこしより歸朝して本元興寺の東南のすみなたてらるゝ道昭法師本願記に眞身の舍利一切經論を納めしとのせられたり三代實錄平城にみやこをうつされしの時弟子等奏聞を経てならの右京に禪院を建立せりとあり書釋

奈良飛鳥

元興寺のほとり
ないふなるべし

元興寺の里をよめる

萬葉

古郷の飛鳥はあれと青丹吉

ならの明日香をみらくしよしも

草根

明ほのにならのあすかはこゑたえて

とよらの鐘を西にのこれる

同

古郷とならのあすかに飛鳥の

こゑも昔の夏やこひしき

飛鳥川

俗に元興寺の西のほとりにほそきながれあり奈良の飛鳥川といふいつの世よりかくはいひなせるぞや奈良の飛鳥川には川なきよしこそ古詠にも見え侍れ

草根

むかし今かはる淵瀬を世にや見ぬ

ならの明日香に川はなけれど

此南に福智院あり土佛の地藏尊をすへたり

十輪院

元興寺の東にあり俗に十輪院を町の名によぶ

十輪院は弘法大師の開基といふさもこそあらめ御堂などを石にてつくられけるが世の人のなすべき事とも見へずその内に石佛の地藏尊の三四尺ばかりなるをおなじ石にぞつくりそへられたり院内に朝野宿禰魚養の塚といふあり碑銘あり果ぬれば一字として見えず

此南に南光院といふあり元興寺の道昭法師のすめる所といふ道昭は文武四年本元興寺にて入寂のよし釋書に見えたりそれより十七年を経て靈龜二年に新元興寺建立のよし續日本紀にあり本元興寺にて卒せる人こゝにすめるといふおぼつかなしかさねてあらため給ふべし

和州舊跡幽考第三卷終

和州舊跡幽考第四卷

添上郡

紀寺

紀寺口といふ所にあり
寺領二十石

紀寺は舊名璉城寺行基菩薩の開基起緣桓武天皇延暦二年十二月封戸を給ひしより書其後破壊におよびしかば紀有常再興せられしより紀寺といふ又御靈の社は崇道天皇にてまします宇智郡御靈緣起

頭塔

頭塔は玄昉僧正の枯櫚骸を納し所也濫觴にまぢりありその比太宰少貳從五位下藤原朝臣廣嗣といふあり廣嗣の妻みめかたち世になく心ばせいとゆうにやさしかりけり玄昉花鳥使をしのびやかに通はしけるに廣嗣はの聞てうらみのもととなりけるとぞ書釋又光明皇后と玄昉とみそか事侍るよし廣嗣密奏せしにみ

かどきこしめしもいれ給はず更に后と玄昉と枕をならべ床をおなじうせさせ給ておはしますよしあながちに奏せし程にみかどひそかに后宮の簾隙より見給ふに后は十一面觀音玄昉は千手觀音にあらはれ見え給ひしよりみかど惡臣のおもひほのあらはるゝより廣嗣反逆のもととなり盛衰又廣嗣表を奉る時政の得失ならびに天地の災異をしるし玄昉僧正と下道朝臣眞備をのぞきなん事をうつたふ續日本紀又玄昉僧正廣嗣を調伏せられけるともあり平家程に廣嗣朝敵となりうたれて後天平十八年六月丙戌己亥つくし觀音寺の供養たり導師玄昉僧正を虚空につかみて見えず人みな廣嗣が靈なりとぞいひあへりける本紀同十九年六月十八日枯櫚骸に玄昉と銘をかきて興福寺の場にぞおとしける平家物語又唐院におとすともいふ書又南大門におとすといへり盛衰是を墓につきけるより頭塔とはいへり抑廣嗣國家をかたぶけ奉らんとて軍兵群をなすよし聞えしかば天平十二年九月大野朝臣東人を大將軍とし紀朝臣飯麿を副將軍として其勢一萬七千人をさし向らるゝ廣嗣遠珂郡の家にして軍をたて兵弩をまうけ烽火をあげ軍兵をまねぐ程こそありけれ十月廣嗣數萬騎を卒して板橋川にたゝかふ二

十三日松浦郡值嘉島長野村にして廣嗣を生捕それより飛脚をもつて奏聞を経十二月一日肥前國松浦の郡にして廣嗣ならびに綱手を誅したり生捕る所の與黨死罪二十六人沒官五人流罪四十七人徒罪三十二人杖罪一百七十七人とぞ聞えし續日本紀又の説廣嗣名馬にのりて海中に馳入けるが其亡靈あれて常におそろしき事どもおほかりけり平家物語天平十八年より延寶七年まで凡九百三十九年歟

新藥師寺

清水といふ所にあり
寺領百石

新藥師寺は聖武天皇の御目をわづらはせ給ひしよりやくしの像御造立ありてすへさせ給ひしかば御目あきらかにならせ給ひしなり御順禮記

不空院

高島といふ所にあり
寺領二十石

不空院の元來をしらず圓時大徳の住院なり鳥羽天皇の御宇に中古戒律を弘通せられし人なり佛法傳通記

藤原

鹿野國の南にあり

八雲御抄なに諸樂宮は藤原にありと見えたり然ども今

さだかにおもひわけがたし平城宮は是より一里ばかり北に其跡あり藤原の宮は五六里南の高市郡に跡ありかさねてあらため給べし爰の藤原をよめる歌

樂家歌合

三笠山神のちかひにたつ鹿の

聲かすかなる藤原の里

八島陵

藤原の南にあり帝王編年曰古市の里の南なり

八島は崇道天皇の陵にして添上郡にあり延喜武江抑家次第

此天皇は桓武天皇の皇弟にして早良親王とぞ申奉りき桓武天皇の御宇天應元年に春宮にたせ給ひしがよしなき御わざの侍りて延暦四年に春宮をおりさせおはします續日本紀終に淡路國にながされ配所にてかくれさせ給ふ御いきどをりふかきによりて世中の人うるさきやまひにかへりおほく死せり此事御門おどろきおぼしめして勅使を兩度淡路國につかはし給ひしかども官船風波にそこなはるゝ群臣議してかの親王のをひにてまします宰相五百枝をかさねてつかはされてなだめさせ給ふべきにやと奏すすなはち延暦十七年三月五百枝を勅使として淡路國につかはし親

王の骨をむかへ奉りて大和國八島陵におさめられつくはしくは水鏡に見えたり其後延暦十九年早良皇太子を崇道天皇の後の御名を給ふべきよしの勅使は大伴宿禰是成又淡路國の陵に謝し奉りき又少納言稱城王をして追尊の事をかの陵につげ給ふ類聚國史延暦七年より延寶七年まで凡八百八十二年か

八島寺

爰を山階の地といへるは釋書山階寺ちかき所なれば此名ありけるにやしらず

八島寺は延暦二十五年山階の地に造營あり天下に勅をくだし給ひて國々の稻をわから別倉に入させ此寺にをさめて崇道天皇にはつ尾ものをすゝめ奉らしめ給ふ釋書天長九年八島の陵の國忌をとゞめ給ふとなり拾芥抄延暦二十五年より延寶七年迄凡八百七十四年か

永井里

八雲御抄にやまとの國なり又攝津國にも同名あり八島の西に永井の里あり

堀川後百首
すへらきの永井の池は底すみて 常 陸

長閑に千世の影そうつれる

龍腹寺

神殿村といふ所にあり

龍腹寺はむかし南都に日をかさねて照りける程に水かれ土さけて春の種をおろさねば秋の實をまつべきにあらずさらば雨のいのりに法華八講をとて講せれるに人群をぞなしける講をはりて人みなかへりしに老翁只ひとり残り講師にむかひ龍女成佛の文心肝に銘じ龍宮城をいとひ成佛土におもひをかくる此厚恩にわれ雨をまいらせん事いとやすけれどわれは小龍たり大龍王のゆるしをいまだえずしてふらしぬれば命を害せらるゝ也よし〱菩提にかへなん命は露よりもやすく塵よりもかろしわが命を捨て雨をまいらせん菩提は講師にまかせ奉るといひもはてぬに雲くだり翁は虚空にぞかくれける風俄に雲おこりて雨車軸のごどく泉舟艦をたつべくなん人民は轍魚の三升の水を求め籠鳥の一天の雲に翔るおもひあり雨晴雲消て物ならば千引の石をおとしけるにやと夥しう響けりあやしやと見れば龍三つにきれてぞ落

たりけるさらばかれが菩提にとて龍頭寺龍尾寺龍腹寺とて三寺を立てとぶらひける今の龍腹寺その一つなり雑談集

山村

山村は欽明天皇元年二月百濟國の已知ヨシチ來り添上郡山村にをらしめき今の山村の已知部の先祖なりと日本紀にあり

和爾

山村の南

和爾は伊勢齋宮みやこにかへらせ給ふ時やまと都介ツケの頓宮たびみやにして供御をそなへ和爾の川のはらひし給ひて卜部に祿など給はりそれより大安寺のほとりを經て奈良坂を越山城國相樂の頓宮に入給ふよし江家次第にあり

櫟本社

和爾の南

午頭ごづつ天王山城の祇園同神也卜部兼俱

此社の鳥居の内に柿本寺ありその東に人丸の塚あり

人丸墳

人丸の墳は大和國添上郡治道はるみちの柿本寺しほんにあり文明八年勅進帳ハチ清輔集にやまとのいそのかみといふ所の柿本寺といふ所の前にかの墳ありと聞て卒都婆に柿本の人丸の基つちとしるしつけてかたはらに此歌をなんかきつけ

ける世を經てもあふへかりつる契とて

苦の下にもくちせさりけり

村のものとあまたあやしき夢をなん見たりけりとあり

清輔集にいそのかみとあるはたがひたるやうに侍れども和名類聚にいはい添上郡に石上郷あり

此所は添上郡のはづれいそのかみの境なり

又鴨長明は人丸の墳は初瀬へまいる道なり所の人は歌墳といへり無名抄

此所なん清輔長明などの詞にかなふやうにぞ見え侍る又是より道の程四五里南の葛下郡に人麿の墳ならびに柿本寺といふ草室あり又芳野の山の中に人丸の墳あり

抑柿本人丸は生れ所又をはり所もさだかならず上世の歌人なりかの畫像に藤原敦光の贊は朝野群載に残り雲と見し櫻は紀貫之の序にながくつたはり又時代の不明配流の否實等は詞林採葉にあらはれ又拾遺集にはもろこしのつかひにまかりける時の歌をのせられ侍れども上道の人丸玉手の人丸田口の人丸として同名異人ありてあきらかならず扱いかなればにや近臣ならぬ淺官だに日本紀實錄等には見え侍けるにおほき三つのくらゐの大夫の事は見え侍らずその外のふるき文どもゝまち／＼のやうに侍り此事は和歌の奥秘とかや聞え侍れば今又贅せざるのみ

田原陵二基

鹿野園より二里ばかり東に陵一基あり俗に王の墓といふ殘一基ある所をしらす

田原陵は春日宮の御宇の天皇なり大和國添上郡にあり三代實錄抑此天皇は天智天皇第七御子志貴親王と申奉りて靈聖元年六月にかくれさせ給ひき後の御名を春日の宮の天皇とおくり給ひしなり續日本紀後田原陵は人王四十九代天宗高紹天皇光仁やまとの國添上郡にあ

り三代實錄寶龜十一年十二月乙酉丁未崩御なり給ふ御とし七十三かのおえ申日廣岡山陵にかくし奉る或は曰廣岡陵其後延喜三年八月陰陽師に勅して大和國に陵の地を見せしめ同五年十月甲子甲申の日陵をあらためて田原にうつし給ひしより續日本紀すなはち田原天皇とぞ申奉りき正統記

光仁天皇陵

人皇四十九代光仁天皇天應元年十二月に崩御なり給ひて廣岡陵にかくし奉る續日本紀其後田原陵に改葬り奉る田原村の北に廣岡あり

菩提山だいせん

寺領三百石
當代眞言宗

ならより一里半ばかり巽にあり

菩提山正曆寺龍樹院は正曆年中勅をうけて兼俊僧正の建立此僧正は法興院攝政家の御子なり其後建保六年信圓大僧正の再興ありしより是を中興開山といふ此大僧正は月輪禪定公の御子なり本尊藥師佛は龍樹菩薩のつくらせ給ひしを善無畏三藏の來朝の時もて來り給ひき又佛牙の舍利あり是は法然上人の御弟子

蓮光法師のをさめられしなり寛永六年炎上の時も如
來の像火にもそこなはれさせ給はず其年再興あり
當寺
舊記

石淵寺いはぶち

高圓山の東に此寺の跡あり俗に石淵といふ

石淵寺に勤操こんそう僧都といふあり秦氏にして後大和國高市
郡の人なり大安寺の信靈を師として後は善議法師に
三論をまなびその名をもえ給ひしより大極殿の宸勝
王經を講じさらに紫震殿にして諸宗の碩德をあつめ
をのゝ義をたてられしかば座主にぞなさせ給ひき
三論を君父とし法相を臣子とせられ終に僧都を経た
り書釋

△石淵八講の濫觴は勤操僧都はじめ大安寺にゐ給ひ
し時隣房に榮好といひていとほしき法師あり老母
をやしなふにひとりの童子をつかへものとせられし
なり其比は七大寺の庫にて煙をたつる事なくして別
院に飯をかしぎ午の時にいたりて僧坊に是をわかつ
每人に四升をつかはす事にぞありける榮好是をうけ
て一分は母のそなへに奉り一分は童子にあたへ一分

は行巧ぎやうかうに施し一分はみづからのかてとし給ひきこよ
なふ孝をぞつくされけるしかありて後に榮好なくな
りけり童子は師にわかれぬるのみならず葬し奉らん
にも物なし又老婦をけふよりのち誰ありてかそなへ
をせんとていとなげきしかば勤操僧都あはれがり給
ひて童子と二人しのびやかにからをぞ葬せられける
扱老婦には榮好此世にありがほにしらせよそなへは
我たすけなんとて日ごとにつかはされしかば老婦久
しく榮好の見えぬをあやしまれぬる時はけふはかう
かうの事さぶらひてまいり給はずきのふはさる事
ありておはせずなどとあらぬ事どもつくり出ていひ
しかば榮好は世にあるぞとおもはれける明年僧都
に客あまた頓の事なりければ老婦のそなへをわす
れ童子も酔てねぶりがさめて見れば日はるかにた
けたりいとあさましくてそなへをぞ奉りける老婦け
ふはいと日たけたり榮好をこたりけるにやとつぶや
きうらめしげに侍れば童子そのことばをきくよりな
みだ袖にかゝりぬれば老婦あやしみていかなればに
やなみだはおちぬるぞといたくとはれしにはこたふ
べきせんすべをしらず只ありし事どもかたり出たり

老婦榮好なくなりときくよりいとをどろき絶入たり童子いとかなくして老婦の死せるは我あやまちにこそと只なげきになげきしかども終に同志七人して石淵寺のうしろにはうぶりけり僧都もあはれがり給ひて法華八卷をわかち八人してをのゝ一巻つゝをよみて亡婦の追善とせんはいなや七人みなことうけありしかば四日二座の講席を修し給ひけりされば法華八講會といふ延暦十五年にはじまりよし毎年をこたりなし世に石淵八講と申是なり天長四年五月七日西寺の北院にをはりをと給ふ年七十三書釋
△廢亡は古老つたへていふ天地院に兒あり石淵寺の僧なにのゆへにやありけん兒をやいばにかけてその身も若草山の西の麓にしておなじ枕にぞうせける此事天地院の法師等遺恨やすからず或はやなぐゐをおひ或三尺をよこたへて三笠山の東の山道を経て石淵寺にをしよせんとす石淵寺にはかくと聞てさらば逆よせにせんといでつ此法師等は西の大路を経てよせける程に兩陣道たがひて人もなき寺にたがひによせたり闘をつくり火をはなちて兩寺おなじ時にぞけぶりととなるそれより兩寺はながく絶にけり天地院の

跡は東大寺のうしとら若草山のひがしにありかの兒法師も若草山の西のふもとに塚につきけるがおりおり火の出てたゝかふ事ありければ俗に逢火の塚とぞ

中川寺

奈良の東

中川寺成身院の開基實範大徳は藤氏諫議太夫顯實の第四の子也はじめ忍辱山にゐ給ひし時花をもとめ給ひなんとて中川山に入給ひしがその地只ならず見えし程に官に申こひて伽藍をたて成身院と名づけられしとなり書釋

忍辱山

奈良のうしとら二里ばかり
寺領二百三十五石眞言宗

忍辱山圓成寺はもろこしの虚漉和尚の開基なり當山智恩院の位牌帳にあり

笠置山

かさぎ山やまとの國と拾芥抄にありしかれ共山城國にまぎれなし

佐保山

さほ川の末は南のふもとにながれ此山の北はや
ましろについき西の尾さは添下郡のさかひに
あり

萬葉

我せこが見らん佐保道の青柳を

大伴坂上郎女

源順集

羅にもがなしくもかれにし秋の野の

もえにけるかな佐實の山かつら

久安百首

狹穗山に霞の衣そめかけて

小大進

四方の木のめもはるにあるらん

眉間寺

寺領百石
律宗

前はさほ川うしろはさほ山なり

佐保山眉間寺は聖武天皇の御建立といへり

眉間寺の堂の軒についきて聖武天皇佐保山南の
陵あり此わすか北に行てふるき墳三四基あり

聖武天皇陵

勝實感神聖武天皇は佐保山南陵添上郡にあり

延喜式

天平勝實八年五月二日に崩御なり給ふ同月みづのえ
さるの日此陵にかくし奉る續日本紀此天皇は行基菩薩に
菩薩戒をうけ給ひて御年五十にして御かざりをおろ
し給ひて勝滿と申奉り五十八にしてうせさせ給ふ
△此陵には度毎にみことのりありけりそれが中に一
つ二つをかきのせ侍る齋衡三年五月東大寺大佛のみ
ぐしおちさせ給ひし時のみことのり

遣右大辨從四位上清原真人岑成_ニ向_ニ佐保山陵_一曰
天皇恐_ニ奉_一毛掛畏_ニ支佐保山陵_一爾奏賜_ニ止奏_一久御願_ニ止_一
之天奉_ニ造_一理給_ニ江留東大寺_一乃廬舍那佛代久經_ニ爾太禮波_一
自然爾毀損天去年五月二十三日顛落給_ニ江利因_一茲參
議宮内卿從四位上源朝臣多安藝守從四位上清原真
人龍雄等違差使天可_ニ奉_一造固_ニ狀_一乎奏給_ニ江利而_一國家
事繁久故障多之天今爾末天怠太利今奈毛始天_ニ的久奉_一造
固_ニ留畏山陵_一乃御願爾相助護給_ニ爾依天之佛毛奉_一造固_ニ
利平久可在止之天奈毛_ニ右大辨從四位上清原真人岑成_一
乎差使天恐_ニ奉_一毛奏久止奏_ニ文德實錄_一

△興福寺炎上のみことのり

維永承二年歲次_ニ丁亥_一二月十四日己未吉日良辰爾
大日本國關白從一位行左大臣藤原朝臣掛_ニ毛畏_一支佐

保山推^{そのをの}菟廟乃廣前爾恐美恐美毛申賜久止申久興福寺
波靈廟乃所^二建立^二也其後次々乃皇后丞相乃加^レ作禮
焉堂塔毛有^二其數^二中略爰去年十二月二十四日夜不
慮^レ于有^レ火天數字乃堂舍一時于爲^レ灰太利忽聞^二此告^二
天氏乃卿相等土引率之天參謁世留處爾堂宇雖^レ爲^レ燼毛
佛像波免^レ煙^{多麻}不^レ覺之淚各下天不^レ知^レ所^二載^二須云
々續日
本紀

佐保山東陵

所をしらす

ならのみかどの太后ふちはら氏はさは山東の陵そふ
の上のこほりにあり^{式延喜}續日本紀曰く寶字六年七月
丙午壬子にうせさせ給ふ八月丁卯千尋葛藤高知天宮
姬之尊と後の御名し給ひてさは山に火葬し奉る

佐保山西陵

聖武天皇の陵より西にあり法蓮村の東なりもし
これらにや

平城帝の太后ふちはら氏はさは山西の陵添上郡にあり^{式延喜}
廣帝四年六月乙丑天平應眞仁正皇太后御年六十
にしてうせさせ給ふ淡海公の御むすめ光明皇后と申

奉りき高野天皇をよび皇太子をうみ給ふ同月癸卯爰
にはうぶりたてまつりき<sup>續日
本紀</sup>

淡海公墓

聖武天皇の陵の北にふるきつかと見えしもの三
四基ありそれが中に一基所につたへて淡海公の
つかと申

淡海公さは山にはうぶりしとあり<sup>帝王
編年</sup>しかれども延
喜式江家次第など多武峯にありと見えたりくはしく
はたふの峯の所にあらはす

欲良能夜麻

八雲御抄もしは草等によらの山は大和國にあり
又よこの山ともいふ^{萬葉}續日本紀曰く藏寶山雍良峰
あつさ弓欲良能夜麻邊のしけかくに

いもろをたてゝさねとはらふも

元明天皇葬所

此所は聖武天皇推菟陵の乾なり俗爰を七疋狐と
いふ事は七つの立石に狐のかたちあらはせるゆ

へにかくいひつたへける年經ぬればにや數なく
なりて當代石一つ残りたりその表に狐の杖をつ
き躍るすがたありその刻ざま世のつねの物とも
見えず元明天皇爰にして葬し奉るよしいひつた
へたり

人王四十三代元明天皇御惱たのみすくなくならせ給
ひて養老五年十月癸未丁亥太上天皇右大臣長屋王參
議藤原朝臣房前をめし給ひて勅あり朕聞よろづのも
のうまれて死あらざるといふはなし是則天地のこと
はり何によりてかなしみぬべきや葬をあつくしてな
りはひをやぶり服をおもくして生をいたましめ是朕
がこのまざる所也朕崩じて後は大和國添上郡藏寶山
雍良峰にして煙となし外所へあらためず後のいみな
は其國郡朝廷の御宇の天皇と號し後の世につたへよ
葬具に金玉をちりばめ丹青に繪かく事あるまじ只い
やしくへりくだりてとりをこなふべし丘體けづる事
なかれ山に竈をつくりそこをかりはらひ喪處とせよ
その地に常葉の樹をうへ碑をたてよとなり同十二月
戊寅己卯崩御なり給ふ御年六十一大和國添上郡藏寶山
養老五年より延寶七年迄凡九百六十二年か

不退寺

眉間寺より西五六町ばかり寺領五十石

不退轉法輪寺は濫觴さだかにしらず業平朝臣の建立
にしてみづから親自在菩薩をつくりすへ給ふといひ
傳ふる説あり又は滋野宰相の家を寺となし慈恩寺と
名づけられて城上郡三論里のほとりにありしを爰に
うつされけるともいふ又その慈恩寺は業平朝臣の居
住の所にて後爰にうつして不退寺といふとも玉林抄
に見えたり

△此地は平城天皇の住給ひし宮なりといひつたへた
り然ば平城天皇は大同四年平安城にて御位を春宮に
ゆづり給ひてならのみやこに遷幸のよし續日本後記
に見えたり此所なるべし

△眞如法親王佛事料を奏し給ひしかば勅許ありて不
退超昇の兩寺に絶入ありしよし三代實錄に見えたり
△業平朝臣のみづからかき給ふ遺法あり陽成院の宸
翰の贊曰

右近衛權中將在原朝臣業平者平城天皇之權孫阿保
親王之五男也元慶第四曆癸酉廿八日行年五十六而

卒

大かたは月をもめでし是ぞ此

つもれは人の老となるもの

法華滅罪之寺

寺領二百二十石

法華寺は尼の國分寺にして法華滅罪之寺と申

延喜式此

所は淡海公の舊宅たりしを光明皇后の御建立なり

緣起

又の説榮花物語うたがひの卷に左大臣正二位藤原朝

臣道長公雲山淨土釋迦尊の前にむかひて申給ふ詞に

淡海公興福寺法華寺を建立と見えたり抑建立のもと

をたづぬれば聖武天皇東大寺御造營ましゝて内陳

に女身をまうでさせ給はずしかありしより后又此

寺をはじめさせ給ひてをとこをまうでさせ給ふ事な

し

△國分寺の事大和國にしては東大寺を僧の國分寺と

し法華寺を尼の國分寺とせられしなり

延喜式

天平九

年三月國々にみことのりして丈六釋迦ならびにば

さつをつくり大船若經一部六百卷をうつさせておさ

め給ひしより國分寺ははじまれり

釋

同十三年三月國

國の僧の國分寺に封五十戸水田十町施入ありてか

ならず二十人の僧をすましめて金光明四天王護國之

寺と號し尼の國分寺には水田十町かならず十人の尼

をすませて法華滅罪之寺と號し兩寺の道のほどをへ

だてられたり拵勝寶元年大和國法華寺に墾田地一千

町金光明寺に四千町給ひて

續日本紀

僧の寺の安居會には

最勝王經を講じ尼の寺の滅罪の場には法華妙典をと

かしめ給ふ

續日本紀

爰より東大寺の道の程十八町なり

光明皇后御順禮のたびごとにその道の左右に東大寺

まで屏風をたてられしとかやその屏風は大佛くやう

の日もろこしより卅よろひわたしけるなり鴨の毛の

屏風といふ是なり其銘

種好田良 易_ニ以得_レ穀 君賢臣忠 易_ニ以至_レ豐

諂辭之語 多_レ悅會_レ情 正直之言 倒_レ心逆_レ耳

正直爲_レ心 神明所_レ祐 禍福無_レ門 唯人所_レ招

父母不_レ愛_ニ不孝之子_一 明君不_レ納_ニ不益之臣_一

清貧長樂 濁富恒憂 孝當_レ竭_レ力 忠則盡_レ命

君臣不_レ信 國政不_レ安 父母不_レ信 家國不_レ睦

此屏風東大寺の勅符の倉にありとかや

△本尊十一面觀音菩薩は光明皇后みづからさざみし

なり

緣起

又の説に天竺健達羅國の后のおほせによりて

光明皇后の御かたちをうつし奉らんとて來朝せし巧匠のつくりし象なりとあり帝王編年

△維摩象はむかし此寺にして維摩會ありその會を興福寺にうつされて後は西むきにすべ奉りし維摩の像たつみにねぢむき給ひしは興福寺の會をこひしたひ給ふと見えたり又五粒の舍利は光明皇后の御所持なり又小粒の舍利はもと一粒おはしましつれども分散ありていくばくといふ事なし縁起

△再興は北京嵯峨の堪空上人修理せられし後は西大寺興正菩薩の再興あり其後又破壊して堂一字塔一基ありむかしの金堂の跡は今の堂の前にしていしすへのこれり此堂の御建立は慶長六年九月御母君の御ために幕下豊臣公御再興あり奉行は片桐市正銀帽子銘

△當代律宗たり寛元三年西大寺の興正菩薩を師として此寺の文筐沙尼戒をさづかり建長元年慈善等大比丘尼戒をうけつぎしより西大寺の末寺とはなりたり

法華寺の東の門のうちに横笛の堂有

横笛堂

横笛といふ女あり建禮門院の雜司にぞ侍る小松殿の侍龍口時頼にあひなれたり枕にかゝる青絲の髮莖にならぶ紅玉の膚世にあらばつらなる枝とちぎりをはらば星ともならんとたはぶれしが此事父にいみじういさめられせんすべをしらすかしらそりて嵯峨の法輪寺にぞこもりゐたりける女いとかなくしてたづね行たりしかども對面もせずしてそれより高野山にこもりゐたりぬ女もかみおろして侍けるよしほのかに聞て瀧口入道

そるまては恨みしかとも梓弓

眞の道に入そうれしき

尼かへし

そるとても何かうらみむあつさ弓

引とゝむへき心ならねは

其後尼は法華寺にゐけるがおもひのつもりにやありけむ程なくなくなりけり平家物語又女はかつら川の水上大井川のはや瀬御幸の橋のもとにて身をなげたともしふ又天野に瀧口入道ゐられしかば尼そこに行てせんだくなどしてまいらせけるともしふ盛衰記

阿闍寺あしやくじ

法華寺の鳥居のたつみわづかにへだゝりて田の中に松の一本ありし所ぞ阿闍寺の跡なり三語當集代はとりゐもなく松も見えず

阿闍寺は光明皇后いみじう佛の道をたうとみおはしまして伽藍佛像御造營の後たゞほこる御心ましゝきをやかなる夕ぐれの空に聲ありて后ほこり給ふ事なかれたい風呂をたき垢をさるの功德はいとすぐれりとよばゝりてぞつげゝる后あやしみ給ひて風呂をたてさせみづから千人の垢をかきなんとちかひ給ひて終に九百九十九人の垢はかき給へり今ひとり來るものあり癩瘡とろけ膿ながれて目をそむけにほひ垢がたくて鼻をふり后かれが垢をばいかでかきなましやは只おもひすつればちかひにたがふ是ひとりにしてなにむなしくせんやとてことに念比に垢をすりてぞえさせ給へりかのもの云やうわれあしきやまひをうれふるにくすりなし人ありて申膿をすはしめば除愈せんとなりしかおもへども誰人かいかで是をすはましやただ后大悲あり膿をすひてたすけ給へかし后いなび給はずかしらよりあなうらにいたりてかき

をすびうみをはき給ひしかばかのもの大光明をはなち后に申阿闍佛の垢をかきしと人にいふ事なかれとて妙相端嚴の阿闍佛となりてけつがごとくに見え給はず后おどろきながらよろこび伽藍をたて阿闍寺と號し給ひけるとなり書釋

淨土院

或人の申法華寺より坤一町ばかり田中に石ありかの寺の跡なり

淨土院は皇太后明の周忌をとぶらひ給ひなんとて法華寺の西南のかたに彌陀佛の淨土院をたてゝ年毎の忌日に僧十人つらなりて彌陀佛を一七日くやうし禮拜しけるとぞ續日本紀

法華寺社

所さだかにしらず

貞觀元年四月十日法華寺の從三位薦枕高御座こまざくらたかみむすび日神に正三位又從四位下法華寺に坐神に從四位上をさづけ給ふよし三代實錄に見えたり

海龍王寺

法華寺の東北のならび寺領百石

海龍王寺又の名は脇寺讀日角寺とも帝王編年かけり光明皇

后天平三年七月に建立延寶七年迄凡九百四十七年か

又玄昉僧正入唐の時風波をだやかにと願立て造營せられしともいふ

△玄昉僧正は阿刀氏義淵につかへて唯識を學び靈龜

二年勅をうけ奉りてもろこしにわたり智周法師に相

宗の源旨をうけたり釋書もろこしの御門玄昉をたうと

み給ひて准三品とし紫の袈裟をさせられ天平七年眞

人廣成に友なひて歸朝あり經卷五千餘卷諸佛の像を

將來せられたりむらさきの袈裟を施してさせしめら

れ内道場に侍らしめたうとみ給ふ事日にまし夜にさ

かむなり續日本紀扶翼の童子八人をそへられ九年八月僧

正たり釋書かくありて後沙門の行にそむき給ふ事ども

ありとて時の人あしざまにさたしけるとかや續日本紀

△此寺の毘沙門の像より舍利三粒出現ましゝき法

華寺より此舍利をこひ奉られしかばをくり給ひける

道の行粧美をつくし宣命などあり其詞續日本紀にく

楊梅宮

法華寺西南邊に楊梅の天神といふ社あり此ほとり

にや
楊梅の宮をたて、天皇うつり給ふて後五位以上を宴し給ふよししくは續日本紀にあり

惠美押勝宅

大師押勝家は楊梅の宮の南にたつる東西に樓を高く

かまへて内裏を見る世の人不臣のおもひありて目を

そばめける續日本紀押勝は天平寶字八年太政官の印をさ

してことををこなへり大納言仲丸といひし人なり鏡水

贈太政大臣武智丸の男なり系圖藤原の姓に惠美といふ

二字をくはへ給はせき又一人と世を押へをこなひて

是に勝ものなければ仲丸の名をかへて押勝と付られ

たりこれらみな孝謙天皇の御おぼえならびなくてせ

させ給ひしなりゑみといふ姓も御らんするたびにゑ

ましくおぼすとして給はせ給ふとぞ申あへり水鏡

楊梅陵

俗にうはなべといふ此南に楊梅の天神といふあり又平城天皇の陵のほとりに一字をたて、念佛

の地とせんとて善淵朝臣超勝寺の内にたてける
と三代寶錄に見えたりその超勝寺も此ほとりな
りおほかたは此うはなべ楊梅の陵か

平安宮の御宇日本根子推國彥尊平城楊梅の陵にをさめ
奉る大和國添上郡にあり延喜式

奈保山東陵俗に大なべといふ

人王四十三代元明天皇奈保山東陵大和國添上郡
にあり延喜式藏寶山雍良岑にしてけふりとなし奉る日
本爰にうつしかへられし事のよしをしらずかさねて
あきらかにせらるべし

奈保山西陵

此陵は元明天皇の陵の西楊梅陵の北にあり

奈保山西の陵は人王四十四代淨足姬天皇正元大和國添
上郡にあり延喜式天平二十年四月庚申崩御なり給ふ御

年六十九同十二月佐保山の陵に納め奉る天平勝寶二
年十月丙辰朔癸酉奈保山の陵にうつしかへ奉る續日本紀
天平二十年より延寶七年迄凡九百三十二年か

諸高墓

典侍すけ從三位飯高宿禰諸高は奈良山に葬とあり日本紀

柏木杜かしはすもり

六條の大道の北にかしは木村あり又はより南に

同名あり

新六帖三笠山跡ふみ絶て柏木の

めづらしからぬ杜の木の下

名寄柏木の森のあたりをふり捨て

公則

御笠の山に我はきにけり

近衛を三笠山兵衛を柏木など諸歌枕にかきつけたる
も堤中納言宰相中將より中納言になりて賭弓かきつのかへ
りあるじの日ふるさとの三笠の山はとをけれどとよ
めり土御門中納言兵衛佐になるにはかしは木のもり
にし物をとよみたるよりさきに此三笠山柏木萬葉に
も近衛の本文見および侍らねど頼頼注これらよりもつけ
てをのく申事にやとこそ侍れ密勘

薦枕川こしや

俗にこも川といふ水上は法華寺より出て南にながれ行六條の大道の東に高橋あり西にこも川の橋あり

法華寺の薦高御座栖日神社^{三代實錄}是をおもふに薦枕川なるべきを片言にこも川といふなるべし

大安寺

大安寺はもと熊凝^{くまかた}精舎にはじまりて後百濟大寺といふ其後高市地にうつして大官大寺といふ和銅三年伽藍ならびに丈六の佛像等を奈良にうつされしに沙門道慈大唐西明寺の圖を奉りしかば御門よろこばせ給ひて天平元年此寺を御建立あり食封一百戸を給ふて二七年の間に造營なりたり扱大法會をひらき三百町の水田を施入あり同十七年大宮大寺をあらため大安寺と號せられき又東大西大兩寺に對して俗に南大寺とはいへりくはしくは聖廟の御筆の緣起に見えたり此大安寺は都率天の一院を天竺の祇園精舎にうつし祇園精舎をもろこしの西明寺にうつし西明寺の一院をうつせり^鏡水夫大安寺は南都七大寺の一にして北野天神俗別當にておはしましければみづからの御詞聖

書の緣起をのこし給ふ弘法大師は門弟子に告で當寺を本寺とさだめ給ひしとなり^{勅進帳}
△むかし貧女此寺の本尊に福分を祈しかば錢四貫文をあたへさせ給ひてより増上大富貴の家となりけるとなり^釋書天平元年より延寶七年まで凡九百二十七年か

△天平十九年聖武天皇の勅にしたがひ當寺の資財目錄を書して奉りしなり其真軸ならびに後花園院の御宇の勸進帳の正卷菩提山正曆寺の院内にあり資財帳を見るに食封一千戸論定出舉本稻三十萬束墾田地九百三十二町水田二百一十四町今墾田地九百九十四町國々に此知行あり毎年の未納六十九萬七千九百三十四束二把四分そのほり諸色金銀等詞にのべがたき中に布二萬四千七百二十端餘ありと見えたり

△聖廟の御筆の緣起は今の世に残りて奈良の般若寺と海龍王寺隔年に預り置るゝ也

△廢亡をしらずわづか一むかしにやなりけん阿誰といふ盲人あり靈跡の絶なんをなげき觀音の像一軀のこらせ給ふを修補しわづかに二間四面の堂を建立して大安寺のしるしとなせり野府記にいはいく人王六

十八代後一條院治安三年七月二十日大安寺杣の司材木をあつめる解文又柱十六本淀津よりひきよすべきのおほせあり檢非違使成通貞證等無事につとめけるよし見えたり人王百三代後花園院の御宇大地震に堂社僧坊あれ果ぬれば修理の勸進せり勸進帳それよりをのづからに絶はてけるとなり只靈山も鳥の宿り祇園も鹿のふしどのみ

△慶長年中淨家の和尚大安寺にまうでられしに諸像二間四面の草室にかさねをき本尊も分々にわかれ佛面は庭の芝生のしきものとなせり或和尚拾來て住檐にをかれしよし述作の書に見えたり

△鎮守八幡宮ありそのほとりに石清水の跡とて松一村あり行教和尚宇佐八幡神を勸請の時大菩薩本房につかせ給ひて御手水のために清水をめしけるに水なかりければをのづからかたはらの石より冷水ながれ出けるより御手水に奉る是を石清水の名のはじめとせり平安城男山の石清水も大安寺よりつかはしけるとなり然ども石清水の名は大安寺より已前男山にありといふ大安寺には男山は後といふ二義たがひにあり石清水末社記爰に天永四年四月興福寺の大衆うつたふべ

き事ありて大安寺本宮の神輿をみやこにふり奉らんと評定しけるが男山の石清水八幡護國寺は大安寺の末なり此度神輿上洛に供奉なくばあるべらざるよしの牒狀をつかはしけり男山護國寺に是を披見して此義案外至極せり夫行教和尚先男山に勸請して後大安寺にうつし其後榮昭大法師藥師寺にうつす其證跡をしりながら如何本官とはかけるやとて一味同心はおもひもよらず結句鬱憤のふくみけるとかやくはしくは朝野群載にありいにしへより前後のあらそひ不明に侍りけると見えたり

陵

大安寺村の東のはづれに一基あり

此陵いづれの御代いかなる山陵といふをしらす

辰市社

大安寺村の南にあり

辰市社二座俗に鴻の宮といふ春日明神鹿島より春日山にうつり給ひし時供奉せし時風秀行の靈社なり春日

辰市

一村の名によぶ八雲御抄勅撰名所等大和國とあ

り辰の日市のたつなり藻鹽

辰の市や日を待賤のそれならは 定 家

あすしらぬみにかへてあはまし

名におひて風もけふより辰の市や 家 隆

たつあき人の袖ぞ涼しき

しきしまの道に我名は辰の市や

いさまたしらぬ大和ことのは

草庵集 龍田山夜半に越ける程見えて

また朝霧にたつの市人

此邊に倭文明神社あり俗にひづりの社といふそ

のひがしの東九條村に賣間の清水あり

賣間清水

建保百首 辰の市賣間の清水底澄て

康 光

人の心のくまも残らず

散木集 辰の市賣間の清水涼しくて

俊 頼

けふはかひある心地こそすれ

美濃國に宇留馬あり勅撰名所に美濃國は市とい

ふべからず宇留馬なり東路に爰をうるまといふ

ことは行かふ人のあればなりけりと後拾遺集に

見えけるは美濃國なり

帶解寺

辰市村のたつみ

帶解寺の地藏尊は文德天皇の皇后染殿后御産たいら

かならず醫陰兩道の妙斷もかなはず有驗の高僧秘法

もしるしなし一夜後の御夢に和州添上郡に裙帶の地

藏尊ありなどは是を念じ給はぬやと告げたりさめて後

御願丹心にありしかば皇子御誕生ましゝしかあ

りければ帶解寺と號して御建立あり是より參詣市を

なしければ其所を今市の里と名付たりと縁起にくは

しく見えたり

眞野萩原

所しらず八雲御抄に大和國勅撰名所もし同草等

に添上郡

萬葉第三 いざやこら倭へはやくしら菅の

遠島御歌合

玉をぬくまのゝいと萩かたよりに

打 輔

千五百番歌合

をのれみたるゝ秋の夕暮

秋風に絶間

おしとやおもふらん

顯 昭

にしきをさらすまのゝ萩原

山家

分かねし袖に露をはとめ置て

西 行

霜にくちぬるまのゝ萩原

眞野の同名おほし眞野浦まのゝ入江は近江國ま

のゝかやはらは陸奥なりとよ國のまのゝ濱は豊

前國まのゝ池の小菅は攝津國まのゝ萩原は大和

國右井蛙抄に見えたり下總國葛飴郡しんまに眞野とい

ふあり

類字名
所集

眞野まゝのゝとよむにや

かつしかのまゝの井見ればたちならし

水を汲けんでこなしそおもふ

是はむかし下總國勝鹿の眞間野の井に水汲下女あり

あさましきあさきぬをきてはだしにて水をくむその

かたちたへにして貴女には千倍せり如望月り月如花

咲にてたてゐるを見て人々相きそふ夏虫の如入火

如入水門船なり爰に女おもひあつかひて一生い

くばくならぬよしを存じてその身を港になげけりそ

の心をよめるなり又かつしまのまゝのてこななどよ
めりまゝの入江まゝのつきはしまゝのうらまゝの井
まゝ野などよめり皆此所なり又曰ふらすげのまゝの
萩原若はまのゝかや原などよめる歌あり或は大和國
或は相模或は陸奥國によめり是らにまがひぬべし可
用意なりと奥義抄に見えたり

奈良墓

所をしらす唯名のみをあらはす

般足媛命の墓

延喜式

太山守皇子の墓

日本

磐之媛の墓

日本

これら奈良山にありとぞ

大念佛宗大和國之本寺

大念佛宗は大和攝津河内などにのみさかりにして外

の國にはなしそれ故大和國の本寺七ヶ寺をあらはす

南都の徳融寺郡山の圓融寺櫻井村の來迎寺宇多の光

明寺はいばら村の宗祐寺白石村の興善寺東谷村の

堂より
一里許
大念佛寺也

△惣本寺は攝津國がけの郡にありて大原山諸佛護念

院大念佛寺といふ開基は良忍上人それより後六代中

絶せり中興開山は攝津國深江村の法明上人なり

△開山良忍上人はおはりの國富田の人にして顯密にやんごとなき人なりあるころほひ異人來りていふやう上人なにとて融通念佛はとなへぬにや融通といふはひとり唱ふれば諸人に融通し諸人唱ぬれば我に又融通して功德他に越たり上人諸國の人民に是をすゝめよ我又天神地祇を友として唱へなまし上人いとあやしみ誰人に侍ればかくは宣ふにや我は鞍馬寺の毘沙門天なりとて消がごとくうせ給ひきそれより上人融通念佛を唱へ諸人にすゝめられき天承二年二月一日をはりとる年六十一此上人は大原山に住て來迎院をたてられ又鬼魅の物がたりの聲をきく又待賢皇后の宮女は上人の凡人ならぬをしりてかざりをおろししかのみならず八字文珠の法を修せられしかば庭上の大石變じて獅子となり或時は持經の彌陀經時々光をはなち給ふとなり

釋書

△中興開基法明上人は攝津の國深江村の俗なり男山八幡菩薩の神託にまかせ山城國におもむきしが河内國なすづくりの茶屋にして人あまた伴ふにあひけりそれがいふやう翁はいづくにか行深江村の法明上人

といふめるをしれりやしらざりけるにや翁聞てさればさある上人は侍らず法明といふは我名にて侍る我昨夜瑞夢ありし程に男山八幡宮にまうでなんとおもひたち侍れ扱をのゝはいづくよりいづかたに越給ふにやさればこなたやうのものは男山八幡の神人なり昨夜あまねく夢見けるは八幡の社内に融通念佛の祖師良忍おさめられし一佛十菩薩の畫像ならびに龜鈕鼓持經の法華などあり深江村の法明上人融通念佛をひろめ給ふべき時なりかの上人にこれらのものをあたへよとの瑞相にまかせ深江村をたづねしが扱はそなたざまの事にこそ侍らめ貌かたち誠に夢にたがはず神勅幸なりとてかの寶物をえさせたり法明瑞夢もさにて侍ればいとたうとくぞうけたりける此時の請取渡しし證文八幡山杉本坊にありその時元享年中なり代々上人の位をぞつがれる抑一佛十菩薩の畫像は自然出現にして社内にあり龜鈕鼓といふは鳥羽院の御かゝみを良忍上人の御布施に給はりしかば御菩提の縁ともなれかしとて鈕鼓にぞ鑄られける一とせ上人攝州芦屋の浦を漕わたられけるに波風はげしく船あやうかりければ此鈕鼓や龍神のほしがるにこ

そあらめとて波にぞ入られけるそれより追風をだやかに著岸あり其後芦屋の浦にして鉦鼓戀しく見わたされけるに龜いたゞきて鉦鼓をぞ奉ける是より龜鉦鼓とは名づけられしとなり又天より降臨の旗一流あり扱大念佛寺は他力融通なりしを良忍上人の門弟子嵯峨の清涼にして自力融通の法を立られるより後六代中絶しけるとかや

△惣本寺大念佛寺に舊例あり一佛十菩薩の畫像にそなへける初春の鏡の餅飯は芳野藏王の神人こひうけ奉るその法施は芳野の板をしき十數ならびに鳥目百疋なりかのもちゐをえて藏王權現の前にそなへ供養讀經ありて後かの餅飯を破碎してをほくの米の中にまじへかしぎてもちに調じて毎二月一日諸人に是を施せり芳野の餅くばりといふ是なり又二月十一日芳野の會式あり神與三社出給ふに大念佛寺より苧一把もて來りて神與にむすびつけそのすゑに善の綱をむすびけるとぞその苧をこひうけて子をうめる時腰にまとひぬればやすからずといふ事なし當代にいたりて此舊式絶すくはしくは大念佛寺舊記に見えたり

南都七大寺

東大寺 興福寺 元興寺 大安寺 藥師寺
西大寺 法隆寺拾芥抄

十五大寺

東大寺 興福寺一守長者宅云々 元興寺又豐福寺又建福寺又建興寺
大安寺元大官 藥師寺 西大寺
法隆寺 新藥師寺聖武天皇 太后寺
不退寺 超證寺真如親王 京法華寺光明皇后號法華滅罪寺
招提寺新田部親王宅鑿真和尚爲戒壇 龍興寺
宗鏡寺崇敬寺弘福寺已上十六箇寺拾玉
いにしへの三つの三室そしのはるゝ

十五大寺の跡を見るにも

延喜式神名張三十七座大九座小廿八座

鳴雷神社 率川坐大神御子神社三座
狭岡神社八座 率川阿波神社
宇奈太理坐高御魂神社

和爾坐赤坂比古神社

穴次神社

和爾^{わにのもと}下神社二座

奈良豆比古神社

大祝詞神社

高橋神社

神波多神社

宅布^{いふせ}世神社

大和日向神社

夜支^{ひめた}布山口神社

春日神社

賣^{ひめた}太神社

春日祭神社四座

赤穗神社

島田神社

御前社原石立命神社

天の石吸神社

五百立神社

天石立神社

和州舊跡幽考第四卷終

和州舊跡幽考第五卷

添下郡

山城大和國境

山城國は北にして大和國は南にあり兩國のさか
ひはうたひめ村よりはるか北にあり

萬葉

そらみつやまとの國あをによしなら山越て山城の
管木つぎぎの原

などいよめり

又當代添上郡春日の境地にかぎりて奈良といへ
りいにしへは添上添下の郡共に奈良にこそ侍ら
め先は平城宮又古詠にならの菅原元享釋書に奈
良の古景殖槻これらの所とも添下郡にあり

平城宮

平城宮は又さながしまの宮ともいふ御順記此宮は東は
添上郡西は添下郡なり三代實錄其跡超昇寺村二條といふ
所に方八町あり今に九條の地の名のこれり抑平城宮
の濫觴は元明天皇和銅元年九月すがはらに行幸なり
て奈良を巡幸ましゝみやこをたて給ふべき地形を
窺覽あり十月伊勢太神宮に都うつしの事をうかいひ
給ふ奉幣使は正四位下犬上王とぞ十一月菅原地の民
九十餘家を外にうつさるゝ其料とて布又米などを給
ひて後地祭をせさせ給ふ終ふにみやことなりて同三年
三月平城宮にうつりまします舊都の留守には正二位
石上朝臣麿なりその後元明天皇は養老五年十二月に
かくれさせ給ひて元正天皇御位をたもたせ給ひそれ
より聖武天皇御ゆづりをうけさせ給ひき此御宇天平
十二年十二月都うつしの事又あり伊勢太神宮ならび
に七道の諸神に幣を奉り新京の事をつけさせ給ふ此
時みかのはらの宮ことなりて兵器をこの宮にはこび
き此所は山城國駕世山のひがしを左京とし西を右京
としてかの山の東の川に橋をかけられき同十六年二
月恭仁宮みかの原の宮といふの高御くらの大楯などを難波の宮
にはこばしめ給ふしかれ共御心になふ宮もあら

萬葉
春日なる三笠の山に月も出ぬかも

佐紀山にさける櫻の花の見るへき

佐紀山に陵三四基ありそれが中に神功皇后の陵といふものあり外はいづれの御代の陵にやありけむわちがたし只陵の名のみ左に記す後の人のさだめをまつのみ

神功皇后陵

人王十五代神功皇后の陵は大和國添下郡にあり延喜式

是を狹城盾列陵さきあたしろといふ日本紀又狹城盾列池上陵共いふ

延喜式御宇六十九年四月に崩御なり給ふ御とし百歲同

年十月此陵にかくし奉る延寶七年まで凡一千四百八

十年か今此陵を見るに年ふりにければにや石棺土を

出垣輪草むらのかげにのこりたり釋日本紀曰垣輪は山陵のめぐりにつちの人の形

ごとし故にはにわといふ夫諸陵に勅使をたてらるゝは常

の事なれども此陵にはわきてその事しげくそのみこ

とのりふるき文どもに見えたりそれが中に仁明天皇

承和十年三月十八日の食時に此陵いかづちのごとく

なり出て赤氣風にひるがへるごとくにして南をさし

て飛行又申の時なり出て西をさして飛行是只事にあ

ざりけるにや同十七年四月諸司宮人を太政官にめし

ていづくをみやこにさだめ給ひなんやと宣下ありか

さねて四大寺の僧に勅ありしかば只ならの京を跡に

と勅答申さるゝ此儀尤と同じて飯廳平城宮をさうじ

す恭仁宮の市人夜を日にかへて平城宮にあらそひ行

終平城宮に行幸なる去程に時うつりて廢帝天平寶字

五年又都をかへられてあふみの保良の宮にまします

同六年又平城宮に還幸なり給ふとなり右は續日本紀

に見えたり其後延暦七年都を平安城長岡にうつし給

ひしより七十七年を経て平城宮の跡も田畠となりけ

るよし三代實錄に見えたり和銅三年より延寶七年迄

凡九百七十一年歟

反歌

萬葉
あをによしならの家には萬代に

われもかよほんわするとおもふな

佐紀山

うたひめ村の西にあり此山ならより見ゆるそれ

を佐紀山といふよし八雲御抄に見えたり

らずとて奏聞を経たといとあやしみおぼしめして參議正躬王をつかはされしに正躬王こゝにいたりて見けるに陵の木七十七本其外榎木はかすをしらずきりたり是陵守が科にあらずやとて勘當せり然ども天皇猶あやしみやみ給はず圖録をかんがへさせ給ひしかば楯列の南北二の陵は北は神功皇后の陵南は成務天皇の陵なる事あきらけししかるを世の人南を神功皇后の陵北を成務天皇の陵といひつたへしかば神功皇后の陵に奉る弓劔のたぐひなど皆成務天皇の陵に奉りきおどろきおぼしめして成務天皇の陵にたがへ奉りし弓劔を更に神功皇后の陵にかへし納奉られき勅使は從四位上藤原朝臣助從五位下坂上大宿禰正野なりかの赤氣西南に飛行しも此たゝりにや聚聚國史に見えたり

成務天皇陵

人王十三代成務天皇の陵はやまとの國添下郡にあり延喜式是を狹城盾列陵といふ日本紀又沙紀多池那美陵とも古事記又狹城盾列池後陵ともいふ延喜式御宇六十年六月に崩御なり給ふ御年百七日本紀又九十五歳ともあり古事記明

年九月に此陵に納奉るとなり日本紀延寶七年迄凡一千四百九十年か

鷹塚

神功皇后の陵の南にならびてあり

鷹塚は俗にむかし金の鷹をうづみ給ひしより此名ありとぞいふもしさもあらば豊前國宇佐郡の八幡菩薩は馬城峰に石體權現とあらはれその山の頂にみつ石となりそれより金色の光をはなち給ひしかば仁德天皇勅をたてゝ其光のもとを見せしめ給ふれば金色の鷹と現じ給へりそこに寶殿をたてられけるよし譽田八幡の緣起に見えたり是をおもふに八幡菩薩は神功皇后の御子なりかの皇后の陵に八幡化身の金の鷹をうづみならべて御母子のよろこびをなしけるにやたい後の人のあらためをまつのみ

孝謙天皇陵

人王四十六代孝謙天皇の陵は大和國添下郡佐貴郷高野山陵といふ續日本紀寶龜元年八月に崩御なり給ふ御年五十三日本紀此陵に納奉りしより高野天皇とも又寶字

孝謙稱德皇帝とも申奉る釋書抑此高野といふ所は故式部卿從二位鈴鹿王の舊宅にてありしを勅によりて此陵の地となりしより鈴鹿王の息三人に加階あり此勅功とぞ聞えし續日本記延寶七年迄凡九百十年歟

高野

ならの宮の長皇子と志貴皇子佐紀の宮にとも

なひあそび給ふ歌

萬葉

秋さらは今も見ると如妻戀に

鹿鳴山そ高野の原のうへ

萬葉

見わたせは高野の野道のうつ木原

みな白妙に咲にけらしな

文 逸

日葉酢媛陵

日葉酢媛命の陵は狹木之寺間陵也古事記これらも佐貴

山にやありけむ只狹木の名によりて書のせ侍り後の

人正しくなさん事をまつのみ抑日葉酢媛命は景行天

皇の母后丹波主王のむすめなり舊事紀垂仁天皇二十二

年七月にかくれさせ給ふそのはうふり奉るの時群卿

をめして勅ありいける人を陵のめぐりに埋める事は

狹城池

むかしの法ながらいかにかはせんや野見宿禰すゝみ
出て高市郡に倭彥命の陵にいける人を埋めりいとさ
がなしいかでかは末の世にかゝるためしをつたへむ
やすなはち出雲國の土部一百人をめしよせ土にして
人馬ならびに種々の物のかたちをとゝのへてけふよ
りのち此土の物をいける人にかへて陵にうづみたら
むになにのなげきかましきさんや天皇大に敬感まし
くゝて末の世のためしともなれり此陵こそ壇輪のは
じめに侍れ此勅功によりて本の姓をあらため土部臣
を給ふ是より土部連等は天皇をはうぶるのつかさを
とれり日本紀

狹城池は俗に水上の池といふ譽田八幡縁起曰神功皇
后池上にはうふり奉ると云々もしくは池上の池とい
ふべきを水上池とあやまりていふにやしらず夫狹城
池は垂仁天皇三十五年十月に作りけるよし日本紀に
あり又楯波池ともいふ

△神龜四年六月楯波池より飄風にはかにして南苑の
樹二本吹おりたりその樹化して雉となりたり續日本紀

超昇寺

超昇寺

三代實錄

又超勝寺

書釋

ともかけり眞如法親王の御建

立なり

三代實錄

天正年中に絶果て今は形ばかりなるいほ

りに大日如來一軀ありむかしは密法の華風にきほひ

て四方に薰じ今は民業の苗露になびきて一村のたの

しみとなる誠に時あればにや白鷺池も水かれ華清宮

も草しげしとかや夫眞如法親王は平城天皇第三の御

子高岳親王と申奉りき御母は贈從三位伊勢朝臣繼子

也大同年中のするに春宮の位にのぼり給ふ世の人躋

居太子と申奉る

三代實錄

しかありて後尙侍藤薬子ならび

に兄の仲成の變にかゝりて春宮をしりぞき

書釋

弘仁元年九月十二日御年三十七にして御かざりおろさせ給

ふて

編年記

東大寺の道詮律師の室にいらせて眞如親王

となん申き宗叡僧都の禪林寺の閑居に閉籠給ひては

鹿園の谷の水に見思の垢をすゝぎ修圓大徳の傳法院

にやすみしては覺知一心の悟をひらき弘法大師にし

たがひて眞言宗をきはめ給へりかゝる有智高僧の

人々も猶あきたらずおぼしめしけん

撰集抄

貞觀三年に奏聞を経四年にもろこしにわたり給へりけるが是に

は明師なしとて天竺にわたり給へり

書釋

もろこしのみ

かと渡天の心ざしを感じ給ひておほくの寶をあたへ

給へりけるにそれよしなしどて皆々返しまいらせて

道の用意とて大柑子を三つとゞめ給へりけるとぞ宗

叡は歸朝すれども友なひ給へる親王は見え給はねば

もろこしへいきしにを尋給へりける其返事に渡天す

とて師子州にて群れる虎の逢てくる奉らんとしける

に我身をおしむにはあらず我は是佛法のうつはもの

なりあやまつ事なかれとて錫杖にてあばへりけれど

つるに情なくくゑ奉るとほのかになん聞えしとこそ

かきたれ

撰集抄

又三代實錄元亨釋書等には在唐の僧中

瑾申狀に親王羅越國にいたり逆旅に遷化すと云々弘

仁元年眞如親王御落髮より延寶七年迄凡八百四十七

年か

念佛堂

念佛堂は正暦年中夢の告にまかせ清海法師超昇寺の

院内に造立あり

西受院羅抄

かの法師は身のたけ七尺餘ち

から人に越て武の道をこのみ給ひけるがいかにかお

もひけん弓矢を捨かしらおろして興福寺の閑庭にこ

もれりある時寺中にあらそひ戦ふ事ありしに清海法師なじかはこらふべきよろひを肩にかけ三尺をこしによこたえてすゝみ出られるがみづからおもふやう我はむかしを捨佛家に入今更むかしにかへりなんもいとほゐなし所がらこそ心もすみぬれとて興福寺を出超昇寺にうつり念佛三昧に入られきある時香烟の中に彌陀の像を現じ給ひ其たけ五六寸釋只嵯峨の釋迦に面影ひとし抄石かの法師感喜にたえず像をとりて安置せられける釋書又世に清海の曼陀羅といふは日本第三の曼陀羅也濫觴は清海法師蓮糸の絹三鋪をととのへ兩界ならびに九品の曼陀羅を圖せんとみや

こにおもむく木幡山を越行にあやしの老翁あり其翁の夜一夜にかきてえさせられきいとあやしみかたはらなる松の枝にかけならべて拜禮せしに白黃の泥の光は七樹をのづからにかゝりき瑠璃の絹の色は實地めのまへにあらはれ只觀相成就の思ひをなしようこびにたえずしてかへりき又化女のかき侍るといふ説もあり西曼陀羅鈔此萬陀羅ならびに香烟の小佛洛陽の寺に今書ありとかや聞侍る扱又淨家西譽上人應永四年十月十五日超昇寺に入きて清海の曼陀羅ならびに香

烟の小佛を拜禮あり其時清海法師の勤行の具として一尺二寸の三鈷あり一尺三寸の鈴あり西京にして是をふられぬれば東京般若寺にひいきけるとぞかの法師のちからの程おもへり又銅の彌陀の立像長六寸ばかりなるありいかなる小佛にかとたづねられしに是はむかし奥州におはせしが我は是西方極樂彌陀の化身の小佛也大和國超昇寺の曼陀羅は我か本身なり超昇寺にうつり給ふべきの告ありて此寺に納られき西曼陀羅抄かゝるめでたき靈寺も終に天正年中井戸若狹守の兵亂にかゝりて跡なくなり靈寶は其名ばかり残れりと或記に見えたり

善淵朝臣寺

此寺の跡をしらず超昇寺の内と見えたり

當寺の願主正五位下在原朝臣善淵は平城天皇の御孫高岳親王の御子なり天皇御いつくしみ人しれずいとあつかりければ崩御の後陵のほとりに一字をむすび念佛の地となし天皇の御ぼだいとなしなんさいはい父の親王のたて給ひし超昇寺荒廢しながらも猶のこれり此内に一字をたてん事を奏し奉られき貞觀四年

十二月二十五日勅ありて建立せられたり三代實錄年を経て貞觀八年二月二十八日此寺の修理の料にとてならの京の内田地十六町三段二十七歩よしぶちに給ひよし三代實錄にあり

菅原 超昇寺の南

菅原は野見宿禰の末葉土師宿禰古人土師宿禰道長などのすみける所なり此人々姓をのぞまれしより光仁天皇土師の姓をあらためずめる所の名なればとて菅原の姓をぞ給ける續日本紀此野見宿禰は垂仁天皇の御宇野見の姓をあらため土師の姓を給ひけるとぞ日本紀天總日命十四世の孫系圖因に菅原の池は推古天皇十五年にはる日本

萬葉 おほき海のみなそこ深く思ひつゝ 石川女郎

古今 こひしき奈良の菅原の里
いざ爰に我世は經なん菅原や

伏見の里のあれまくもおし

此歌はふしみの翁といふ物がたりにありと惠心僧都の勸女往生義と申造紙にいまめきの中將長井の侍従伏見の翁などいふ古物がたりありと

のせられたりさやうのものゝありさまをよみたりける歌にや又隆縁と申僧は伏見の仙人が歌とぞ申侍りし題注

菅原天神

菅原院は天神の御所是なりもし草しか書ぬれども菅丞相はみやこうつしのはるか後に平安城にして出給ひしなり只このやしろは天神にして聖廟にあらずと或説にあり

菅原寺 寺領三十石

菅原寺は又喜光寺ともいふ行基菩薩の造營にして彌陀の坐像を安置す一とせ聖武天皇行幸ましゝけるに如來光明をはなち給ひしより喜光寺の勅號あり元和年中のすゑに或和尚まうでゝ濫觴をたづねられしに寺住の僧かく物がたりせられけるよし和尚の述書に見えたり夫行基菩薩は高志氏いづみの國大鳥郡の人なり天平十七年大僧正の位を給ふこの任行基よりはじまれり天平二十一年正月大菩薩號を給ふくはしは釋書に見えたり又の説あり靈異神驗ことにふれ

ておほし時の人行基菩薩といふ類聚國史にあり同年
二月二日此寺の東南院にしてをはりをとる年八十二
書釋それより延寶七年まで凡九百十六年か

新勅撰

伊駒山のふもとにてをはりける遺戒の歌

法の月久しくもかなとおもへとも 大僧正行基

續後撰

さよふけにけり光かくしつ

かり初の宿かる我そ今更に 同

菅原伏見陵二墓

今此所の見たしに陵はあらず世々を経て年ふ
りにたればをのづから陵夷しけるにや

此陵二墓はひがしは垂仁天皇の陵西は安康天皇の陵
共に添下郡菅原の伏見にありと延喜式に見えたり又
の説にこの陵二墓は葛上郡の菅原の伏見にありと帝
王編年にかけり然ども延喜式に見えけるうへは帝王
編年もちゆるにたらず人王十一代垂仁天皇は御宇九
十九年七月に崩御あり御年百四十同年十二月に陵に
はうふり奉る日本紀又御年百五十三古事記延寶七年迄凡
一千四百七十年か

人皇二十一代安康天皇は御宇三年八月に崩御あり三
年の経て陵にはうふり奉る日本紀延寶七年迄一千二百
二十四年か

田道間守墓

垂仁天皇の御宇に田道間守といふ人あり勅定にまか
せ常世の國にいたりぬ天皇の御宇九十九年に崩御な
り給ひて後田道間守非時ときじつ香菓八ははこ八かけとりてか
へりき田道間守天皇のましまさぬをなげきかなしみ
われ勅をうけて萬里の波をしのぎて常世の國にいた
りぬ十とせ經てやう／＼にこそかへれ天皇なくな
せ給ひていづくにさゝげいづかたに奉らんや我此世
に生けりて何かはせん天皇の陵のほとりにしてもだ
えこがれなきさけびかなしみておのれと死せり日本紀
群臣いとあはれがりて陵のほとりに田道間守がから
を納めけるよしある文に見えたり此墓もこゝにこそ
あらめ此見たしに見えず

此たちばなをよめる歌

家持

萬葉
かけまくもあやにかしこしすめろきのかみのおほ
みよにたちまもりとこ世にわたりやはこもちまい

てこしときときしくのかくのこのみをかしこくも
のこしたまへれ國もせにおいたちさかへ後略

反歌

たちはなは花にも實にも見つれとも

いやときしくになほしみかほし

伏見岡

菅原寺の東のならば

此岡にふせる翁あり三とせがほど起もあがらず物も
いはす時々枕をもたげてひがしをみるのみある時
起たちしが時なるかな／＼とうたひまひにき天平八年
行基菩薩姿羅門僧菩提をむかへて菅原寺にかへり給
ひし時翁起あがりて共に寺に入只舊友にことならず
物など調じてまいらせなどしける程に二僧よろこび
にたへて箸をとり拍板をならしてまひけり其後翁は
行がたしらずこれより伏見の岡とぞいひける翁ひが
しを時々見けるは東大寺をさしけるにや釋書
又の説ありかの二僧金剛山を越てきたり給ひし時伏
見の翁起あがりてあひたりと詞林採葉にあり是は又
葛上郡の伏見のやうにぞ見えける

古今

いさ爰に我世は經なんすか原や

讀人不知

伏見の里のあれまくもおし

源氏
菅原や伏見の里のあれしより

かよひし人の跡はたえにき

後撰
これらの歌はこゝろをよめるなり又

菅原や伏見のくれに見渡せば

霞にまがう小初瀬の山

これらは葛上郡の伏見をよめるなり添下郡の伏
見よりは小初瀬の山は三輪山にへだたりて見え
ず葛上郡よりは初瀬山打見わたしなり

興福尼院

伏見岡の南

興福尼院は舊名は弘文院むかし圓能法師といふあり
信貴山にのぼりて物ならふに暗鈍にして教授なしつ
ねに彌陀をねがふかの法師もとより大和國菅原の伏
見の人なりしがその里の弘文院に丈六の法師の像あ
りかの法師眞身の如來をおがませ給へと百日まうで
の誓願をぞ立ける月日に鎖をさゝざれば行すゑ四日
にせまりて終に廣野にして薬師の眞身虚空にみち阿
彌陀の眞身三十尊文珠ぼさつ等現じ給ふを拜禮して
後年五十七の三月晦日夜のふしどの枕ながらをはり

ぬ心胸あたゝかにして二七日をへたりその後かき出
て野中に置つれどもけだものちかづかざれば鳥猶や
ぶらず五月八日に蘇生して極樂國土ならびに地獄の
やうを見けるとぞ仁平元年正月二十四日にをはる書釋
その後年久しく經て寺もなかりしがひとりの尼あり
舊地をしのび草庵をむすびてすみけり天正年中寺領
を給ひしより阿彌陀堂をたてゝ弘文院の絶たるをぞ
おこしける年經て興福尼院とあらためたり其後寺領
闕止ありしかども更に寛永年中に舊領二百石くだし
給はる寛文年の初添上郡ならぬ賓間寺の西北にうつ
しかへたり

是より西に靈山寺あり追分といふ所の北也又此
尼院の南に新田部親王の陵あり

靈山寺

寺領百石

鼻高山靈山寺は行基菩薩の草創鼻高を埋しより此山
號あり又婆羅門菩提と行基菩薩はじめてあひ給ふの
時靈山の釋迦の御まへにちぎりてしの詠歌になぞら
へて此寺號あり起緣やくしの秘佛を安置せり零落の後
弘安二年再興あり西のかたに行基菩薩の室の跡あり

新田部親王陵

新田部親王の陵は俗に蓬萊とよぶ親王をはうぶり奉
りしよしは招提寺の舊記にありとぞ親王は天武天皇
の御子御母は五百重姫日本紀天平七年に卒し給ふそれ
より延寶七年まで凡九百四十六年か

唐招提寺

蓬萊村の南
寺領三百石律眞言兼學

唐招提寺もとの名は建初律寺といふ孝謙天皇の勅額
より此かた唐招提寺の名あり起緣抑當寺は天平寶字三
年八年鑑眞大僧正聖武天皇をすゝめ奉られしより御
草創あり此地は新田部親王の舊宅にてありしを大僧
正に給ふ寶坊となしぬるには諸公卿沙門等心をひと
つにして造營ありとぞ書釋延寶七年迄凡九百二十一年
か

諸堂

△金堂はもろこしの僧如寶たてられて丈六の釋迦の
像をすへをく書釋その光中に千佛をさざみ背後に二千
牀三千佛を繪かく左脇のやくし如來はもろこしの思

訖の作右脇の千手觀音菩薩は天人の所造なり起緣

△講堂は平城の朝集殿を捨て造營あり彌勒菩薩狹侍

の二菩薩もろこしの法力の作なり書釋

△食堂は藤の仲公の家を捨てたてられたり書釋

△經藏はもろこしの義靜建立して佛舍利半合佛菩薩

經論寶物等にいたる迄納たり書釋賢璟法師鎮護國家の

ためにとて大藏四千二百卷を書寫して納をきしとな

釋書資治夷寫大藏
五千四百八卷云々

△絹索堂は藤清河家を施して不空罽索像二十八部神

衆をすへられたり書釋

△御影堂はもろこしの思訖つくりて鑑眞の遺像をす

へたり緣起

△西方院の阿彌陀堂は中興開山大悲菩薩の廟所也起緣

△開山鑑眞和尚はもろこし楊州龍興寺の大徳なりも

ろこし天寶二年入唐の僧榮寂業行等和尚をすゝめて

中佛法東流は我本國にありしかれども是を傳ふる師

なし和尚日本の土にわたり教化をなし給へ和尚こと

うけて楊州に船をもとめ海上はるかにこがれ行に

風はげしう波しきりに船は箕をひるやうにぞなりに

ける和尚念佛せらるれば人みなおなじうしてやうや

う死をまぬかれて後七年を経たり又海にうかみしに

猶波風はげしう艦にも船にもなじかはかなふべし終

に日南に吹つけたり其時榮寂なくなりぬれば和尚か

なしみの泪にたへ給はず終に又もろこしに歸られた

り去程に勝寶四年日本の使もろこしに著岸せしに業

行等又渡海のおもひあり和尚猶確乎としてぬけず終

に弟子二十四人をともなひ副使大伴宿禰古磨が船に

のりて東大寺に來朝せり續日本紀元亨釋書佛法傳通記緣

起等にくはし此三四書其外互見するに其說繁多なり

釋書曰く天平勝寶六年正月十二日太宰府につく緣起

十二月二十六日云々盛四月みやこに入傳通記緣起等二五年

の佛舍利三千粒阿育王塔様銅支提止觀玄義文句菩提

子三斗晉王右軍が眞行の書一卷盛衰記曰佛舍利三千粒天

戒壇玉白檀千手像此聖武天皇に奉らる書其後勅によりて

東大寺の戒壇院を立又招提寺を立る大僧都ならびに

僧正に任す大僧正は後にをくられき佛法傳通記天平寶字

七年五月六日にをばりをとる年七十七書釋又七十六歲

佛記傳鑑眞和尚此國の大藏經論の文字あやまつ所を

あらためらるゝに日南になかされし時暑毒眼に入て

あきらかならずおほくはのこりしとなり又藥種をあ

らためらるゝに色をもつて見わかつ事かたければ香をかぎてまこといつはりをわかつてに一つとしてたがはず釋書又人の相を見る事あきらかなりさる大臣のむすめ色かたちめでたく世にならぶ人なかりき和尚此人千人のおとこにあひ給ふ相おはすといはれしが父大臣軍にまけ給ひしにかたきの手にわたりて千人のおとこにあひけるとなり鏡水和尚の遺言にまかせ唐招提寺は如寶法戴義靜等住せらるゝと佛法傳通記にあり

△中興開山覺盛和尚又名朝情上人四條院仁治年中に宮中にめして菩薩戒をうけさせ給ひて三朝國師の號を給はる建長元年五月十九日をはりとる後深草院の御宇大悲菩薩と後の位をたまひけるとぞ緣起

△佛舍利三千粒佛法傳通記此寺第一の寶物なり此舍利は鑑真和尚の將來其來朝の時海路風あらく客舟波にゆられてせんすべをしらすこはいかなればにやと仰天するところに金鳥飛來て艫舳をやぶらんとかけり鐵魚うかみ出て櫓も舳もさまたぐるほどこそありけれすでにあやうかりけり是只龍神の佛舍利をほしがるにこそあらめ佛法弘通の海路なればなにかはくるし

うあるべきとて則舍利を海に入れぬれば忽に波風しづかに日本の土につきたり扱招提寺建立の後かゝるめでたき佛舍利をいかでか海底の寶とせんやとりかへさずばえあるまじとて和尚火界の印をむすび眞言を修し三蜜則是の深秘ををこなはれければ龍宮城ほのほに身をせめられ龍神龜と化し此寺の小水に浮み出て舍利をさゝげけるしかありしより小水を龍池と名つけ社を立て舍利の護神とし輪蓋龍王と號す此時より日毎の午の時に舍利の戸をひらき供奉今年に絶す其時白淨衣の翁出てかならず拜禮をする是かの龍神の化人なりとぞ佛法傳通記

△桓武天皇二十年正月招提寺に官符をくだし給ひて猶律を講すべし四分律一部卷七十疏一部卷十華嚴經一部卷八十涅槃經一部卷三十右は寺におかるゝならびに田地十三町在禰前國水田六十町在越前國是は知識物のために買あたへらるゝ物なり帝王編年文德天皇仁壽三年十月田地百七十八町四段三百二十三歩傳法田に給ふよし文德實錄にありいにしへの戒律さかりの事これらにておもへり

招提寺の南のならびに藥師寺あり

藥師寺 寺領三百石

藥師寺は天武天皇白鳳九年

類聚國史又東塔銘等八年又拾芥抄二天智元年云々

十一

月皇后御やまひおもくまし／＼ければ天皇藥師如來をつくり堂塔をたてんと御願ありて一百僧を供養し給ひしかば忽にたいらかにならせ給ふと日本紀に見えたり其比伽藍の模様をしる人なし祚運和尚入定して龍宮の伽藍のやうをかきうつし奏聞を経る叡感まし／＼て造營の勅定あり書釋しかれどもいまだ御造營ことならずして天武天皇清御原の宮にして崩御ならせ給ひき緣先帝の御遺勅なればとて持統天皇十一年藥師の開眼あり日本紀又文武天皇二年十月に藥師寺となりぬ續日本紀或は元年書釋此時はやまとの國高市郡岡本にたて、藥師寺と號す其後元明天皇養老二年に高市郡より添下郡右京六條の二坊にうつしかへける今の藥師寺是なり緣起白鳳九年より延寶七年迄凡一千一年又養老二年よりは凡九百七十二年

諸堂

△金堂の藥師如來は天武天皇の御願十二夜及神觀音

菩薩二軀

一軀は孝德天皇御願一軀は永尾天皇御願此藥師如來は高市郡本藥師

寺より車にして引けるが七日を経て此寺につき給ふ

よし緣起にあり又の説に當藥師寺のほとりに金置山

といふあり藥師の像を鑄奉りし所とぞ或記に見えたり

此堂にして造花會あり嘉承二年にはじまる二月一日より七日迄とりをこなふ今に絶す緣起

△講堂爰にして最勝會をこなはれしとぞ抑最勝會

は仲繼律師といふあり淳和天皇天長六年六月二十一日

此會をとりをこなふべき奏聞を経る同九月十四日

勅許あり播磨國の寺田七十町をかの會の料にくだし

給ふ最勝會表白翌年八月にはじめてとりをこなふ類聚國史又の

說三月二十一日より二十七日まで行ひしよし緣起に

あり仁明天皇承和年中に宣旨ありて三月七日にはじ

めて十三日に終る恒例として絶す表白又延喜式等此會の講

師の布施料は絹二疋綿五十屯調布二十端からびつ一

合内藏寮よりをくらるゝよし西宮抄に見えたり後花

園院文安二年炎上の後此會退轉せり緣起因に大般若經

會毎年七月二十三日にはじめて二十九日にをはる儀

式等延喜式にくはしくあり又慧達大德の年毎に修せ

られし萬燈會釋かゝるめでたき三會も絶て名のみぞ

のこりける

△西院は舍人親王の御建立慶長元年七月十二日大地震にくづる、縁起

△東院又東禪院ともいふ養老五年九月五日長屋親王の御造立本尊觀音菩薩は孝德天皇御造建其後雷火にそこなはれて修補したりしが年經て弘安二年三月十一日又修理あり棟本之銘一説に吉備内親王元明天皇の御ために養老年中に造營ともいへり縁起此堂は軒あれ柱かたぶきながら今にあり

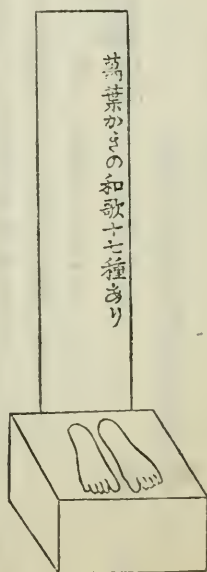
△東塔は天平二年三月に立て釋今にあり西塔各十一丈五尺縁起西塔は光仁天皇十一年正月雷光に焼失たり

續日本紀再興の後慶長二年五月二十八日に又炎上の後は再興もあらず縁起今の文珠堂は西塔の跡なり孝德天皇の御願の食堂平超律師の傳法院其外伽藍も絶果て師鍊和尚の宏壯麗妙の藥師の詞を筆に残りける

△鎮守八幡社此所を休息の岡ともいふ當寺の別當榮昭宇佐八幡菩薩を勸請して朝野群載寺家の南園にやしろたて、いはひける宇佐縁起又休息の岡といふは貞觀元年行教和尚大安寺に八幡菩薩をうつされし時しばらく此所に休息ありそれより此名あり縁起扱又今の社は豊

臣前殿下の御修造也

△佛跡の石金堂のわづか西の草むらのかたはらにあり



佛足形に千輻輪相穀輞相

具足魚鱗相 金剛杵相 足跟亦梵王頂相 衆蠡相の

紋をえりつけたり此石は藥師の像御造立の時百濟國より奉る此佛足形をもとゝして丈六の像を鑄奉りし

と縁起にあり然ども立石の面十七首の内第二の歌三十あまり二のかたちそなへたるむかしの人のふめる

跡ぞこれとえりつけたる此歌は拾遺集にのせて其こ

とばに光明皇后山階寺にある佛跡にかきつけらるゝ

と見えたり山階寺より當寺にうつしぬる由來をしらす

△いにしへは八宗兼學たりしかども行基菩薩唯識の

法門をひらかれ戒明和尚入唐の後猶法相をもてあそばれしより當代まで法相宗にして眞言を兼たり又靈寶あまたの中に兩面の黒箇鼓こ是はいにしへ天人あまくだりて舞歌をなし雲に乗じてかへりし跡に残し箇也とぞ其跡を拍堂と號す舊譯

△面あり名をふりおもてとぞいひつたへけるしからばならの京に舞の師博士晴遠といふものあり還城樂けんじやうらくといふ舞をして帝につかふまつりけるほどにいまだ人につたへざりけるさきに死にけり炎魔王宮にて此舞の國にたへなん事いかにと議し給ひしより蘇生して人に傳へて後又うせにけり弟子は上府生季高とぞいひける晴遠が先祖の舞人に家に還城樂のおもてあまくだれりふりおもてと名づけて重代是をつたへもちけるがいまは南都の寶物にてありと聞ゆと十訓抄にありこれらのおもてにてもありけるにや

△炎上は人王六十四代圓融院天延元年二月二十七日諸堂一時のけふりとなるそれが中に金堂一字は神鎮禮宗等身を炎にこがすもいとはず命の消るもおもはず終に火をけしえて金堂もつゝがなかりき釋書此勳功にかへり神鎮は三河の讀師禮宗は大和の讀師たるべ

きの宣旨ふしを給はりき同三月五日實檢の勅使は左少辨源朝臣伊勢いせたり同二十八日一字を一國の役として修造なすべきのよし九箇國に宣下あり十五年を経て寛和三年正月八日にはじめて柱をたつるそれより二十一年を経て長和二年に成就す寺家は別當趁禪大徳の修造なり扱又いまだ諸堂成就せざりしに永祚元年八月十三日の夜大風金堂の上の重閣を吹おとせしが別當平超律師修理してもとのごとし起緣人王百三代後花園院文安二年炎上たりその年柱立の儀式ありといへどもことなりがたく數十年を経て大永年其勳造帳後先金堂を再興せり又百八代後陽成院慶長二年五月二十八日超昇寺のなにがしの兵火にかへりてけふりとなる慶長五年再興のよし棟木の銘にありとぞ

やくし寺をよめる

無名抄
春日山峰こく舟の樂師寺

廣 足

あはちの島のからすきのへら

御在所

御在所その所をしらす俗にやくし寺のほとりを西の京といふもつとも右京にあたり猶おもふに天平成

寶元年孝謙天皇藥師寺の宮にうつり給ひて御在所と
さだめられしよし續日本紀にあり又御出家釋書曰法
名法基
せさせ給ひてならの西の宮になんまし／＼けると正
統記に見えたりかた／＼右京といへるもむかしの名
残とぞおぼゆる

勝間田之池

獻ニ新田部親王ニ歌一首

萬葉

勝間田之池者我知蓮無然言君之鬢無如之

右或有人聞之曰新田部親王出遊于塔裡御

見勝間田之池感緒御心之中還自彼地不

忍憐愛於時語婦人曰今日遊行見勝間田

之池水影濤々蓮華灼々可憐斷腸不可得

言爾乃婦人作此戲歌專輒吟詠也萬葉集

詞林採葉曰親王世に勝たる大鬚にておはしける

をなすらへて戯によめるなり

抑此池の在所不分明古歌枕には美作國に入畢雖

然萬葉集に今相違歟新田部親王大和國藤原宮より

當日遊覽して歸給ふ然是美作國なるべからず爰に顯

仲卿作良玉集曰泊瀬へ參ける時むかしの勝間田池の

跡を見てと云々此則奈良の藥師寺也むかし池水絶て
後已に精舎を立たり水なしと詠せし事尤其謂歟帝國
系圖曰白鳳九年十一月依皇后病造藥師寺是則彼
池の跡と云々詞林採葉袖中抄曰勝間田池をば水絶たるよ
し申侍れどそれは如何とおぼゆかの親王の見給けむ
事藥師寺の立けんよりさきといはんも知がたし又藥
師寺の跡とも聞えずかつまたの池とてい井ばかり見
ゆと書けりかの邊のあんない知人の申侍りしはかの
寺の近き程に侍るとぞうけ給はると申きそれはたが
はず侍歟新田部親王は文武天皇第七皇子なり天平七
年九月に薨せらるゝこと云々文武天皇二年高市郡に
やくし寺をたてられ元明天皇養老二年に添下郡奈良
にうつされしなり

初瀬へまいりける勝間田の池を見て

良玉

道 齋

むかしの池とたれか見てまし

佐藤顯仲折花臨水といふ題にて

勝間田の池もみとりに見ゆる哉

岸の柳のかげのかへりて

かの池に水なきゆへ時人わらひて勝間田の兵衛

佐と異名にいひけりとかや今案むかしは水ありけるにや

六帖歌に

勝間田の池にすむてふ戀々て

まれにもよそに見るそかなしき

云々
澄月歌枕

勝間田形橋すかたはし

廣田社歌合

勝間田のすかたの橋のいはねとも

うき名はなをや世にとまるらん

此歌こゝをよめるにや又美作國をよめるにや後

人あらためらるべし

常見集

此山や道のかきりとおもへとも

かつまたの見ゆとをきなりけり

此うたの詞書に美作國勝間田の湯をよめると云

々

羅城門

門の跡は俗に來世といふなりらいせは羅城の片

言か天正年中田の中よりいしすへの石を得たり
羅城門の銘ありとかや平城宮のはるか南にあたり

鑑眞和尚來朝の時しばらく此所にすへをかれ佛法傳通記
又天平十九年六月雨のいのりもこゝにしてつとめられけるとぞ續日本紀

藥園宮

舊地は郡山御城内にありいづれの御代にやうつしかへられけん鹽町ふくろ町にまたがりてありしを又うつしかへて矢田町にあり今の藥園の宮これなり此所の舊圖にぞ見えける

此所は天平勝寶元年に南の藥園の新宮にして大嘗會などをこなひ給ひしより續日本紀に見えたりしが代々を経て藥園の名のみ残りわづかのやしろたて、八幡の地となせりまことに平城宮より南にあたれり

植槻道場

侍町にまじりてわづかに残れりやしろたて、植槻の八幡とよぶかたはらに觀音堂一字あり

植槻の道場は和銅二年十月淡海公釋の淨達をまねぎて維摩會ををこなひ給ひし所なり書釋當代安置の觀音菩薩は木像にして房前大臣尊敬の佛志度寺の觀音なりといひつたへたりいとおぼかなし和銅二年より延寶七年まで凡九百七十二年を經るむかし此植槻寺のほとりに住ける人あり大悲の銅像二尺五寸なるを奉り殿をかまへふかく信じあつくうやまひしが夫婦なくなりて後むすめひとりぞ住けるかたぶく垣は薦かづらのかゝりて丹青の色をなしやぶれし壁は雪のふりつみてさながら白粉にぬりかくすより外に雨のもゝ風のすきまもさへる人もなくいとあはれにまづしかりけりつねに大悲の像にむかひうへをぞいのりける世にすむからにやありけんとなりよりみそかにかよふおとこありけり手枕の夜半もかさなれば面に紅粉を施ねども桃顔の笑よりもなづかしく身に羅騎を帶せざれども柳髪のみだれよりげにおとこはおもひをんなは待宵のかねもすいろになみだをもよほし別れの曉の鳥のこゑもいたく身にしみ芝蘭のちぎり偕老のむつびわりなくこそ通ひけれおりふしきぬくのあかつきの空雨しきりに蓬の窓をさそひ風

はげしく竹の扉をたゝく又心もひかるゝにやありけんけふはとてかへらずなりにけり日くれぬれども調しぬべきそなへもあらず猶又あくるあしたはなにをかしくべきしのぶにあまるなみだながら大悲のまへにふしてぞなげきける誠に相如が破壁の風寒く劉仲が乾鍋の新つきぬるよりも今のかなしさはこそまさりけめやうゝ午の時もかたぶくに門たゝく音ありあやしや誰にかとひらきぬれば里人そなへなど調じてまらうとのもてなしにやとてもてきたりき病雀の花を喰て翅をのべ轍魚雨を得で唇を濕す心こそしたためつかひの人にきぬゝぎてえさせたりあるあしたをんな大悲菩薩のまへに手をあはせて見ればきのふとらせたりつる絹は大悲の肩のうへにかゝりてありけるとぞいとたうとくこそ侍れかゝるめでたき銅像もなくならせ給ふこそほるなけれ釋書取意

美濃山二基陵 植槻の南

いづれの御代の陵にやしらず此わづか北にいぬづかといふあり

犬塚

いぬづかは聖德太子の白雪丸とめされしいぬをうづみし所なり郡山にあり太子傳抄そのほとりに鷹つかといふあり由來をしらす

美濃山よりはるか坤小泉村の南のはづれに赤檮いもひの基あり善隣寺のほとりなり

赤檮基いもひのつか

赤檮は物部守屋を射たりし人なりくはしくは日本紀に見えたり

松尾寺

小泉村の坤の山

松尾寺延喜式西松尾寺又山號は補陀洛山此山のかたち補陀洛山に似たりとて舍人親王の御建立ましゝて玉林抄親王みづからきざみ給ひし十一面觀自在の像をすへ給ひしなり

△社あり寺住の僧此やしろは山城國松尾と同神といへりしかあらば大己貴神の御弟大年の神の御子大山咋の神なるべしやましろ葛野郡松尾にいますよし釋

日本紀に見えたり

矢田寺

松尾寺の北

金剛山寺俗に矢田寺といふ釋書堂塔あまたあり本尊は地藏菩薩なり天武天皇の勅願開山は知通僧正起緣此僧正は齊明四年七月にもろこしにわたり玄奘三藏に唯識をまなび歸朝の後白鳳元年三月僧正たり釋書抑地藏菩薩はむかし此寺に住ける滿米上人とて戒行やんごとなきひじりあり小野筆と師檀のちぎりふかし筆はいとあやしき人にて身は朝廷にありながらたましゐは炎魔王宮にぞあそびけるある時炎王なげき宜くすゑの世の衆生罪重しその罪かへりてわが身をくるしめる事はなほだし時に炎王の臣只菩薩戒をうけさせ給ふにはしかじと奏す炎王さはおもへども陰府に戒師なしいかいせんは筆すゝみて我師友に戒業純淨の人ありと奏す炎王その師をよびきたれ則筆かの上人のもとに行てしかゝの事侍ると申上人あやまたす筆と共行かとせしが琰宮にいたりき上人を獅子の床にあふきすべて炎王かぶりをかたふけ菩薩戒をうけ給ふて後なにかは布施に參らせん上人只地獄の苦

報を見んこそねがはしけれ則炎王上人を將て行給ひ

しが忽に阿鼻城にいたりき見わたせば鐵門の風銅釜の焰を吹なびかせ山には劔の枝をつらね池には血のけふりをたて其外受苦の衆生かすをしらずそれが中に法師ひとりほのほにこがるゝありけりいかなればにや身に三衣をまとひながらかく苦にせめらるゝといへば我は是地藏菩薩なり衆生の苦にかはりてかくのくるしみをうくるされども無縁の衆生はすくふにたよりなし汝娑婆世界にかへりて我に縁をむすばしめよ又かくの苦をうくる事をかたれ上人拜禮して立歸らるゝに冥使うるしぬりの箱一つを上人に奉る娑婆世界にかへりてかの箱をひらけるに白米みちたりけりとるにしたがひてみつるほどに生涯いとやすし釋書さらば地藏尊を造立せんとて良工をまねきぬれば化人のきたりてつくりけるとぞ長五尺今立せ給ふ地藏尊これなり起緣又上人のもとの名は滿覺かの白米をえられしより後は滿米上人とぞ申き釋書

△小野篁は岑守の息仁壽三年に卒す年五十七長六尺二寸破軍星の化身といへり小野系圖

東明寺

矢田寺の北

鍋藏山東明寺は舍人親王の御建立やくし如來を安置せり

河上陵

東明寺のうしろ

小和田村の東に陵又ふるき塚と見えしものあり富緒川の川上なればもしこれらや河上の陵ならんか

川上陵はやまとの國添下郡にあり贈皇后藤原氏川上の陵と延喜式にかけり

西大寺

小和田村の北寺領三百石

西大寺は孝謙天皇の勅願天平勝寶元年にはじまり十七年を経て天平神護元年にことなりぬ拾芥抄孝謙天皇は高野天皇と申奉りきされば高野寺ともいふ又仁明天皇は此寺をもてあがめさせ給ひて兜率天宮ともおほせられき類聚國史開山は釋の常騰とかや或宗派に見えたり其後實敏僧都此寺に住て三論宗をひろめられしよりながく傳たり佛法傳通記常騰は人王五十二代嵯峨天

皇弘仁六年に卒せり實敏は五十五代文德天皇齊衡三年に卒せり兩僧の傳は釋書二三卷にあり

△四天王は長七尺の銅像なり天平神護元年に奉るそれが中に増長天一軀ぬれども／＼ことなり給はず七度におよびぬれは高野天皇治處に行幸なり朕此功勳にかゝりて來世女身を轉じて佛道なりなば洋銅を手にかゝんにみづから手にいたみなく像ことなり給へもししからずばたゞれて像なる事あらじとちかひ給ひて玉手にて洋銅をかき給ひしかども何のいたみもなく増長天もことゆへなく成就し給ひしなり釋今書

の觀音堂の四天王是なり

△觀音堂は延寶二年に建立此丈六の觀音の立像は鳥羽院の御願にして洛陽に年を経給ひしが興正菩薩勅をうけ奉りてこの寺にうつしすへられけり此觀音ならびに四天王は文龜年中の炎上に御堂はげふりとなりしかども尊像はことゆへなく残りましけるとぞ舊記
△愛染堂此愛染明王は化人の作とぞさればにや弘仁四年七月二十日蒙古降伏の御いのりありしに勅使光泰卿西大寺にむかひてはや／＼降伏の法を修すべきよし再三におよべり辭するに所なくして興正菩薩ま

づ男山八幡宮にして七晝夜七壇のいのり護摩のけふりは空にみち鈴の音は山をうごかし伴僧八百人が修法の聲身の毛堅てぞ聞えける滿る夜の戌尅に鐺矢西をさして飛行終に太宰府博多金津にして異賊を對治せらるかの夜明王の持物の矢うせて見えざりしより後は此明王に持物の矢あらずとかや此時の僧名ならびに修法の錄三卷男山八幡宮に奉納ありとぞ聞えし起緣

△塔の礎此礎のあり所たづねしにさだかならず實龜元年二月西大寺東塔のいしすへの石わたり一丈余あつさ九尺なるを東大寺のひがし飯盛山にもとの出て爰に引けるが時々鳴聲ありあやしみおぼしめさるるよし宣下ありしかばすなはち博士かんがへ申雲石にしてをそらくは禍あらんと申さらばやきやぶるべきとおほくの薪をつみ火をかけ酒をそ／＼ぐほとに三十石にみてり終に碎破して片々となりて後は道のかたはらにありけりいく程あらずして帝御なやみましましければ石のたゝりにこそあらめと片石をひろひ淨池にあつめつみける也續日本紀今東南のすみに此石ありと釋書には見えたり

△興正菩薩の塚は奥院とよぶ西大寺貞觀二年の回録より絶て三百七十八年を経て嘉禎二年興正菩薩更に立らるゝ中興開基といへり起縁もとは寂尊思圓上人とぞ申侍しが正安二年壬七月三日興正菩薩と諡し給ひ帝王き編年抑興正菩薩は年十一にして家をはなれ醍醐山寂賢の室に入てかしらおろし秘乗をまなびもろこしの鑑眞の跡をしたひて律戒をしのばれしに世に戒師やあらざりけん嘉禎二年同志四人みづからちかひをたてゝ具足戒の正軌をまうけ律儀の糺綱をつき給ふそれより西大寺に居して戒法さかりなり寛元三年法華寺の文篋に沙彌戒をさづけられ建長元年に同寺の慈善等に大比丘戒をさづけらるゝ釋それより此かた法華寺は此寺の末寺とぞなれる起縁又諸國に放生禁斷のをく事一千三百五十六箇所扱又文應上皇興正菩薩をたうとませ給ひて宮中にめして菩薩の大戒をさづかり給ひき釋后妃をはじめ戒をさづかる人九萬七千六百人末寺五百九十餘箇寺起縁正應三年八月二十五日西大寺にをほりをとる年九十書

△道成會は三月十五日儀式延喜式にありいつの比より絶けるにやしらず當代毎八月十八日より七箇日光

明眞言を勤修す是は文永年中よりはじまりけるとぞ△炎上は承和十三年十二月十一日續日本後紀又貞觀の大日でりに西大寺の銅がはらとろけおつるそれより後土がはらをもちゐられけるよし貞觀の官符にのせられたり帝王又貞觀二年に炎上起縁文龜年中炎上起縁再興の主をしらず

△豊心丹俗に西大寺といふ此寺傳來の妙方なり或人曰西大寺豊心丹は律師道宣もろこし永徽元年に毘沙門天王より補心丹の方をうけられき今和劑となれりと佛祖統記に見えたり西大寺豊心丹是にてこそ侍らめ道宣の傳方律院によせあるといへり然ども醫書に補心丹は別方とぞ聞え侍る或人かたりけるは畠山のなにがしいにしへ河内紀伊の兩國を領せられし時もろこしの秘方をこひもとめられしに豊心丹の方をぞわたしきそれより畠山の家の秘方となれりしが其後西大寺の大衆軍場に心のはたらきあり此功勳にとて豊心丹の方を黄紙にかき三百石をそへてつかはされけるよし此記祿畠山の家にありとぞ聞傳へ侍りき

△西大寺の柳の跡は寺より東はそきながれのほとりとかいひつたへける

古今
西の大寺の柳をよめる

あさみとり糸よりかけて白露を

僧正遍昭

玉にもぬける春の柳か

夫木・
さりとともと西の大寺頼む哉

殷富門院大輔

そなたのねかひともしからしを

西隆尼寺

西隆尼寺の跡さだかならず西大寺の乾に尼が谷

といふ所ありこれらの所にや

西隆尼寺は高野天皇の御草創西大寺の衆僧の法衣を

浣濯の所なりとぞ

三代
實錄

秋篠寺

西大寺の北寺
領百石眞言宗

秋篠寺は薬師如來を安置す光仁桓武兩帝の勅願

香水
記

開山は善珠僧正と或宗派に見えたり此僧正は唯識宗

をまなぶには心のたはむ事をしらす因明論にむかひ

てはまなこにあく期あらず延暦十六年四月にをはり

をとる年七十五

釋
書

△香水は寺内に井あり丹ぬりの祠をもとめて扉をと

ち常に人見る事をえすそのもとをたづぬるに山城國
小栗栖の常曉阿闍梨もろこしにわたり花林寺の大德
元照に大元師の靈像秘法をうけつぎ歸朝の後小栗栖
の法林寺にして此法ををこなひむ給ひしが釋書續日
本後紀
一夜此やくし如來にこもり曉のあかをむすび給ひし
に井のうちに大元明王の影像うかべて常曉のたもと
にうつり給ふとかやそれより後七日の御修法は常曉
阿闍梨をこなはれしと香水記に見えたりそれ御修法
の濫觴は承和元年弘法大師もろこしの内道場になぞ
らへて宮中に眞言院をたて、曼陀羅を修法せんと奏
聞あり勅許にまかせ毎正月一七日をかざりてをこな
はる、鎮護國家五穀豐饒のためとぞ聞えし後七日の
御修法是なり續日本後
紀釋書此奏狀は性靈集にくはしくあり
其後大元法秘を修せん續日本
後紀と常曉阿闍梨奏聞を経られし
に承和七年に勅許あり後紀恒例として今に絶す後
七日の御修法は大元の法なり平家
物語常曉の事釋書にく
はし

△當寺は保延元年六月に炎上其後再興あり

秋篠

類字めいしよ集に平群郡とあり添下郡あきらか

壬二
なり

長き夜の生駒おろしや寒からん

秋篠の里にころもうつなり

草根
伊駒山めに見ぬかたのうき雲に

身をあきしのゝ里に時雨る

此北に清水のながれあり外山の里とよふ

外山里

新古今
秋しのゝ外山の里や時雨らん

西行法師

伊駒の嵩に雲のかゝれる

高山八幡

外山里のはるか乾

添下郡高山八幡宮は聖武天皇豊前國宇佐郡廣幡の八幡菩薩を東大寺にむかへさせ給ふにまづ此所にしばらくといまらせ給ひしより其跡にやしろたてゝ今にありと或記にのせたりいとおぼつかなし此時のさは續日本紀にくはしくありその詞に八幡神を平群郡にむかへてとこそ侍れもしいにしへは此所も平群郡

にてありけるにやしらす

村國墓

所しらず

村國の墓やまとの國添下郡にあり贈正一位安倍命婦の墓と延喜式にあり

延喜式神名帳添下郡十座

大四座
小六座

矢田坐久志玉比古神社二座

菅田比賣神社二座

佐紀神社

菅原神社

登彌神社

菅田神社

添御縣坐神社

伊射奈岐神社

和州舊跡幽考第五卷終

和州舊跡幽考第六卷

法起寺 小泉村の南

平群郡

青垣山

景行天皇十七年西國子湯縣ゆふぐさに行幸ましゝて丹裳にもの小野にあそび給ひ東を見そなはし野中の大石にのぼりまして都を忍び給ひてのうた日本紀

はしきよし也端清わきへのかたより我家方雲居たちゐる雲居立やまとは大和國のまほろは鳥腋羽如掩來也たいちつ立之義青垣山はこもれる籠也大和し座人うるはしや麗いのちの壽也也ましけむ人は座人たゝみこめ平群山留之義今へぐりのやまの平群山也私記曰有大和國言諸山之聲籠也中指平群山者命乎遠歷代而來也しらがしがえをうすにさせこのこ此子也天日本紀に見えたり

註は釋日本紀によれり

法起寺又は池ちこうじ後寺又岡本寺ともいふ夫池後寺は聖德太子法華經講説の時唄師きたらざりしに池の蛙唄聲を吟じぬれば講席ことゆへなくつとめ給ひしより法用池とぞいふなる又池の後の寺なればとて池後寺と號し給ふ抄王林その池の跡草村しげりて只名のみ計也又岡本寺といふは人皇三十四代推古天皇十四年聖德太子岡本宮にして法華經を講じ給ふ天皇いとよろこびおはしまして播磨國の水田百町太子にをくり給ひしかば太子班鳩寺に納給ひ侍りぬ日本紀岡本の皇居の跡なれば寺の名とせり但高市郡の岡本宮は三十五代舒明天皇二年にはじめて岡本宮をたてられし也日本紀異所同名なり

塔の露盤銘文曰上宮太子聖德皇壬午之年二月二十二日臨崩之時於山代兄王勅御願旨此山本宮殿宇即處專爲作寺及大和國田十二町近江國田三十町至子戊年福亮僧正聖德皇御分敬造彌勒像一軀構立金堂至子乙酉之年惠施僧正將竟御願構立堂塔而丙午之年三月露盤營作云々抄王林

△草創は舒明天皇十年戊戌の年なりそれより凡一千五十餘歳を経ぬれば堂舎佛閣をのづから朽たふれて觀音一尊たゞせ給ひしが延寶六年具足戒の律師再興ありて草室など建られしなり

瓦塚

玉林抄曰
法起寺の西の山

瓦塚は聖德太子數萬枚の瓦を地底に納給ひしより此名あり俗に猿塚ともいへり玉林抄

栗毛馬墓

玉林抄曰
岡の原又栗毛の岡ともいふ所也

聖德太子御手なれさせ給ひし栗毛馬の墓なり玉林抄

法琳寺

法起寺の西十町

法輪寺撰集鈔
通要法琳寺又は三井寺又は御井寺ともいふ

推古年中の草創伽藍は法隆寺にかはらざりしかども星霜一千五十餘歳を経つれば只塔一基崩れながらかたばかりにあり願主は百濟國の開法師圓明法師したひの下水にんり新物等心をあはせての建立なり下水新物は聖德太子の御子山背の大兄王にてましますとかや玉林抄又資財雜物錄に「名法琳寺東は限法起寺堺南限鹿田池

堤北限氷室池堤西限板垣峰

在平群郡夜麻郷

右寺斯奉下爲小治田宮御宇天皇御代歲次壬午二年上宮太子起居不安于レ時太子願平復一即男山背大兄王并由義王等始立二此寺一也所二以高橋朝臣預二寺事一者膳三穗娘爲太子妃一矣太子薨後以レ妣爲檀越今斯高橋朝臣等三穗娘之苗裔也維于レ時延長六年歲次戊子三三二十歳と云々玉林抄

富小川

川上は平群山より出て法隆寺の東を南にながれ

行

辨乳母集
萬代をすめるかめ井の水やさは

富の小川のなかなるらん

拾玉集

前相國公經

人をみち引底のこゝろは

高安里

高安村あり若河内國の高安里をよめるにや後人さだめらるへし

玉葉集

立田山嵐の音に高安の

里はあれにし寺と答へよ

阿一上人

中宮寺

むかしの跡は法隆寺の東の田中につゐぢの跡の
これりその後うつしかへられて當世は班鳩寺の
良にあり

中宮寺又は鴈はつに尼寺又は法興寺玉林抄推古天皇三年上宮
太子の母后間人皇后の御草創又二臂如意輪の像は上
宮太子の聖作なり年序かさなりて零落の時文永年中
河内國西林寺日淨上人の再興其後西大寺思圓上人再
興ありて眞如尼を寺主とせり當院に天壽國の曼陀羅
あり莊嚴微妙にしてめぐりに大錢の如なる龜甲一百
ばかりつらなり一甲に四字をぬひあらはせり瑞應つ
ねならぬよし或上人の述書に見えたり

駒墓

玉林抄曰
中宮寺の南

聖德太子崩じ給ひし日くろつこ驢駒悲鳴して水草を喫によし
なし御基所にいたりて一躍して斃しぬれば群臣あは
れがりて墓につかれけり平氏傳此駒は甲斐國より奉り

き書釋かれに乘御ありて虚空をかけり給ひしには秦川
勝一人御馬の口そへにぞ侍る是隨身の濫觴也河海抄
此南のならびに松一本生たる塚あり調子丸がつ
かともいへり

舟塚

駒墓の西

舟塚といひつたへしかども舊記にも見えすして年經
けるが十とせばかりにもやなりけんをのづからに土
うげて樟の舟地底にあり又きづきてもとのことし

調子丸家地

此跡鴈宮の乾法隆寺の良の隅にあり玉林抄
調子丸は百濟國の調宰相が男にして聖德太子の御馬
副なり玉林抄

斑鳩里

斑鳩の里は常こ斑鳩群居せしより此名あり推古天皇
九年聖德太子宮をたて給ひて日本紀斑鳩の宮といへり
今の法隆寺の東院の地これなり玉林抄かの斑鳩の宿せ
し木は福居といふ所の民家の内にありしが一むかし

にもやなりけんさけなく斧をくだして伐けるとぞ聞えし

因可乃池よしかの池

いづくといふ事尋ねしにしれず當世蓮池院の地はむかし蓮池にて侍りしより此院號ありもし爰の事にや侍なん法隆寺の寺中にあり

萬葉
斑鳩のよるかの池のよろしくも

君をいはねばおもひそわかする

夫木

いかるかやよるかの池は氷れとも

公朝

富小川そなかれたえせぬ

法隆寺

寺領一千石四斗
法相宗八宗兼學

法隆寺又は七德寺又は聖國寺又は寶龍寺又は來立寺

又は法隆學問寺又は鳥路寺又は往生所寺玉林抄

抑法隆寺は用明天皇の御惱の御いのりに藥師の像を

造營し佛閣を建立し給ひなんと然ども終に崩御

なり給ひしかば造營も絶たりしかども聖德太子いか

でか止給なんと推古天皇十五年丁卯の年終に佛閣こ

となりたり玉林抄延寶七年迄一千七百十三年か

金堂藥師如來の光銘曰池邊大宮治天下天皇大御身勞賜時歲次丙午二年召於大王天皇與太子而誓願賜我大御病大平而欲坐故將造寺藥師像作仕奉詔然當時崩賜造不堪者小治田大宮治天下大王天皇及東宮聖王天命受給而歲次丁卯年仕奉云々玉林抄

△同堂釋迦如來は聖德太子の御不豫御平復の願ありて山背大兄王の御造營その年推古天皇三十一年癸未なり

釋迦光後の銘文曰法興元世一年歲次辛巳十二月鬼前大后崩明年正月二十二日上宮法皇枕病弗愈于食王后仍以勞疾並著於床時王后王子等及與諸臣深懷愁毒共相發願仰依三寶當造釋迦像尺寸身蒙此願力轉病延壽安住世間若是定業以背世者往登淨土早昇妙果二月二十一日癸酉王后卽世翌日法皇登遐癸未年二月中如願敬造釋迦尊像並脇侍及莊嚴具竟乘斯微福信道智識現在安穩出生入死隨奉三主紹隆三寶遂共至彼岸普遍六道法界合識得脫苦緣同趣菩提使司馬鞍首止利佛師造云々玉林抄

△金堂儼然して七德寺と名づけたり西に輪藏そばた

ちて鳥路寺と號せり東に鐘樓あり北に講堂をかまへて聖國寺とよふ乾に鎮守の社頭を祠して寶龍の寺號あり南に法隆學問寺の門巍々として金鼓の二口をかけたなり上堂奥院大湯屋伽藍若生して松風寶鐸にをとづるれば法のこゑをのづからなり

△五重塔婆は彌勒慈尊の三尊維摩居士不二の説法の相釋迦涅槃の相茶毘入棺の相を土にして鞍作の鳥のつくりけるが只生ける像の物いはぬばかりにぞおがまれける此塔婆を往生所寺と號する事は山背大兄王ならびに子弟妃妾二十五人西方に飛行して現身往生の塔なれば此名あり玉林抄夫山背大兄王は斑鳩宮におはしましけるに皇極天皇二年十一月蘇我臣入鹿大軍を引率して宮を圍み手痛く攻たりしかば宮の奴三成一人常千の勢をあらはし拒にけれ其味方は退きに退きて負色にぞ見えたりける爲方なく山背大兄王馬骨を寢殿に投入圍みをもれて膽駒山に入らせ給ひしかば敵勝に乗じて火をはなれ斑鳩宮を焼たりけるが灰の中に白骨あらはれしかば大兄王御自害とのゝしりて圍みをこそとぎにけれ大兄王五日を経て山を出給ひしが群臣に命じて我兵を起して入鹿を伐なん事掌

にありといへども我一身によりていかでか百姓をやぶらんや唯一身を入鹿に給ふならんとて子弟妃妾ともに縊てをはり給ひしに五色の幡蓋種々の伎樂虚空に照かやき寺におほふ衆人仰觀せずといふはなし只入鹿が眼には幡蓋反じて黒雲と見えけるとぞ聞えし日本紀廻廊の西の三經院には安居の口説年序ながくつたはり此寺の安居の事は三代實錄にも見え侍る八軒寶形の藥師堂は靈驗瑞應ことによるゝ毎にあらたに侍れば奉納の武具太刀かたな堂内にみちみり廻廊の東の聖靈院は俗に太子堂といふなり聖德太子みづから沈水香をきざませ給ひし攝政東帶の遺像也西東兩院の中路に門をひらきて來立寺と號しほとりに守屋退治堂見えたり

法隆寺東院

東院は斑鳩宮の地なり三代實錄聖德太子御圓寂の後佛閣となる玉林抄斑鳩寺と號せり又は鶺鴒寺又は鶺鴒寺ともあり平氏傳

△八角寶形の堂は夢殿又は上光院又は上宮王院共いふ聖武天皇の御宇かよ此院退轉の事ありしには行

信僧正建立あり又其後退轉の事ありしには福貴寺の

道詮律師建立その時八角の堂につくられるとなり

會式此夢殿は聖德太子三昧定に入せ給ひてもろこし

衡山にありし前身所持の法華經をとり來り給ふも此

院なり平氏此經は崩じ給ひての冬十月二十三日夜半

に忽うせて行所をしらず傳或は崩御より二十一年

後或は七年後明ならず唯六年後にうせけるよしを決

定とせり玉林抄

△本尊は二臂の如意輪觀音ともいひ或は十一面觀音

にして佛量は一尺一寸ともいひ或は俗形に太刀を帶

し給ふともいふいにしへより錦帳ふかく戸ざせる秘

佛にましませば舊記もまち／＼なり

△沈水香木にて聖德太子の聖作の觀音菩薩あり年毎

の正月十二日に此院の南西に出し奉り諸人拜禮をな

す事にぞ侍る

治安三年に御堂入道殿道長まいらせ給ふて東院

の南門のほとりにて

御順禮記大君の御名をはきけと又も見ぬ

夢殿まではいかてきつらん

風雅集般若臺に納めをきてし法華經も

夢殿よりもうつゝにはこし

△舍利堂は護持堂といふ御順禮記毎日午の上刻に鯨江七

聲をかざりて舍利講をはじめ錦袋七重をひらき玉塔

の舍利を出さるゝ誠萬德圓滿の形あらはれさせ利益

衆生の光あざやかにまします此南無佛の舍利は月の

朔に黒點一つを現じ日々にまして十五點を満り十六

日より日々に減じて三十日には一點として有事なし

舊記南無佛の舍利を出せる七つ鐘 紫式部

むかしもさそや今の双調子

法隆寺の舍利の御はこの歌を見て

かきりありし鶴の林のかたみをは 敦富門院

とゝめ置けるいかるかの里

夫南無佛の舍利は聖德太子二歳の春二月十五日東に

むかひ合掌して南無佛と唱させ給ひしが平氏傳御堂の

内に出現し給ひし舍利なれば南無佛の尊號あり又佛

法最初なればとて見佛開法の舍利とも申奉る抑此舍

利は聖德太子の前生印度にして勝鬘夫人と申奉ける

が世尊の御說法に垢衣を心水にすゝがれ迷雲を覺月

にはらひ給へるにやありけん涅槃のけふりの後世尊

の左眼の舍利をえ給ひけり拜禮に御膝を屈し香花に

つかふまつり給ひしより本朝まで此舍利のきたらせ給ふならんかし此事扶桑畧記玉林抄通要ならびに七卷抄などにはのせられけれどもかゝる尊敬の舍利をいかなればにや日本記平氏傳釋書などにはかきもらしけるぞいとほゐなし軒につき西にならびて繪堂あり武殿院と號して聖德太子の一生を金岡が筆にあらはせり年ふりにたれば緑色いとかすかに所々は消侍りしを延寶三年參河國高橋の庄山田氏心空といふあり絶なんをかなしみ畫工におほせて更に緑色をくはへける伽藍諸佛等は舊記に見え侍れども毫毫に堪がたく畧し侍るものなり

△聖德太子は用明天皇第一の皇子母后は穴穗部間人なり生ながら能言聖智まし／＼て御年のさかりには一度に十人の訴をきこしめしてあやまち給ふ事もあるす内教はもろこしの惠慈を師範とし外典は博士覺荷にならひ物にふれ給ふごとに達し給はすといふ事なし御父の天皇いつくしみまし／＼て宮南の上殿にすへさせ給ひしより上宮厩戸豐聰耳太子と申又は厩戸皇子又は耳聰聖德又は豐聰耳法大王又は法主王日本紀又厩戸豐聰耳皇子平氏傳とも申奉りき厩のほとり

て生れさせ給ふより厩戸の御名あり平氏傳くわしくは平氏傳日本記などに見えたり

△靈寶あまたの中に聖德太子の御手皮の題の梵網經又義疏の草木三經とも又蘇我妹子が將來の法華經此經の事は水鏡平氏傳釋書其外等にも見えたり舊事紀古事記日本紀などには見えす又鈴子あり賢聖瓢あり△道詮法師奏言にまかせ法隆寺東院修理ならびに忌日轉念の功德料を給ひしよし三代實錄にあり

△推古天皇十五年丁卯四月三十日扶桑略記同十八年庚午四月三十日斑鳩寺炎上平氏傳此二義虛説のよし玉林抄にあり

△天智天皇八年十二月斑鳩寺炎上日本紀
△同九年四月夜半の後法隆寺炎滅一屋も残らず類聚百七十卷然ども寺僧の曰法隆寺の記録に見えず又古老の傳もなし建立已來火災をしらすといへり

叶堂

法隆寺より三十町ばかり乾安明寺村にあり傳聞安明寺叶堂は聖德太子守屋大連を對治の御誓願いとやすくあきらかにかなひしかば安明寺叶堂の名

あり本尊は太子みづから斧をくだし給ふ觀音の像なり年經て破損したりしかば解脱上人再興ありて後又久しく年經ぬれば寺塔なくなりてたゞ一字ぞのこり侍る守屋大連對治の御出陣の官軍をそろへ御幡をあげさせ給ひし所は當寺の西五六町を経て旗岡と名づけて今にあり

常樂寺

法隆寺村の巽古市場に一字かたぶきながらのこりてあり

常樂寺は聖德太子四十六箇御建立の其一つなりといへり

御廟

太宇の御廟にまうでゝよめる

玉葉集
消にしをうしとばかりは御墓山

さきだつ雲の行衛しらせよ

花山院入
道左大臣

歌枕に大和國と云々二往爰に記す聖德太子の御廟は河内國科長科長にあり平氏傳

蘆埔宮あしがき

古今目録抄曰聖德太子崩じ給ふのところなり俗に神屋といふ當世神屋村あり然ども通要曰神屋を上宮と書と見えたり今見るに崩御の地とて蘆垣の宮の名残りて法隆寺より五六町ばかり巽の方神屋村といふあり又聖廟神毫の大安寺縁起に飽波宮にて崩じ給ふと見えたりこの邊に飽波村あり只おもふに上宮王院も蘆垣宮も共に御住所なるべし

蘆埔宮は聖德太子の宮にして蘆もて垣をかこはせ給ひしより此名あり七卷抄わづかに草室残り

新龍田社

法隆寺より六七町坤に民屋軒をつらねて龍田の町といふ

龍田比古龍田比女神社二座延喜式

新龍田は推古天皇十四年二月十五日聖德太子法隆寺を建給ひなんの勝地をたづねて巡行あり平群の川より西坂の東をおもひよせ給ひしに龍田明神老翁に化

しまし／＼て伽藍の勝地を／＼しへられ我又守護神と
ならんと有神誓あり則法隆寺の地是なり此時神約に
龍田の祭禮に法施の僧三十人奉りなんとなりそれよ
りながくつたはりてつとめられけるが立野迄は程遠
しとて爰にうつし法隆寺の鎮守新龍田明神とぞ祠け
る撰集抄
通要

竹原井 たかはらの
所しらす
一往爰にあらはす

上宮聖德皇子出遊ニ竹原井ニ也時見ニ龍田山死人

悲傷御ニ作歌一首

萬葉集
家ならは妹か手まかん草枕

客にふしたる此旅人あはれ

夫木
朝な／＼立朝霧の寒きにも 人 丸

たかはらの山の紅葉ぞめけん

歌枕
たかはらの石井の水やあまるらん 光 俊

龍田の山の五月雨の比

藻鹽草に竹原の石井竹原山大和國と云々澄月歌

枕に龍田山歟

清水墓

新龍田より三四町南の清水といふ所に清水山吉
田寺とて堂一宇塔一基ありその二町ばかり南の
田中につかあり是ならんか

清水墓は間人女王の墓なり大和國平群郡龍田の清水
にあり延喜式孝德天皇の后舒明天皇の皇女天智天皇御
妹也釋曰
本紀

苑部墓 そのへべ

法隆寺西里といふ所の道の道の北俗に陵といふあり
是ならんか

苑部墓は大和國平群郡龍田苑部にあり石前王女墓也
延喜式

推坂

聖德太子信貴山の北の推坂にして尺八を吹つゝ通ら
せ給ふに其曲音に感をもよはされ山神かたちをあら
はせりそれを天王寺の伶人舞にうつしてつかうまつ
りけり蘇莫者の樂のもと是なり菩薩傳かの山神のため
に仙香寺を御建立あり勢益の里に今にあり

北岡墓

玉林抄曰推坂の北岡は法隆寺より二十町ばかり
西平群川の西なり

北岡墓は大和國平群郡北岡にあり山背大兄王墓なり
延喜式聖德太子の御子なり日本紀

平群山

萬葉
韓國の虎とふ神をいけどりに八頭とりもちきその
皮をたゝみにさして八重疊平群の山に四月とや五
月の程に藥狩つかふる時にあし引の此片山にふた
り立伊智比何本爾略

乞食者詠

大野墓

所をしらす

大野墓は太皇太后先大枝氏の墓なり大和國平群郡に
あり延喜式

福貴寺

玉林抄曰福貴寺は平群の里にあり平群の里は推
坂の北廣き谷なり

福貴寺は道詮法師の求聞持の法を修せられし寺なり
はじめは法隆寺にして三輪をまなびのちには自然慧
を得たり貞觀十八年をはりをとる國は武州の人なり
書釋

平隆寺

玉林抄曰勢益原にあり勢益の里は法隆寺より三
十町ばかり西立野の通路也
平隆寺は推古天皇の御造營起又仲範曰持統天皇かく
はしくは玉林抄十九卷にあり

龍田

龍田といふ事はむかし此所に雷神落てあがる事をえ
ずして童子となりたりけるを農夫やしなひて子とせ
り比しも夏の初なりけるが隣村にはふらざれども此
農夫が田のうへに白雨時々そゝぎ稻花をなし熟して
秋のおさめおもふまゝにしてけり其後此童子いとま
こひて小龍となりて天にのぼるかれが作る田を龍と
ぞ云けるをやがて所の名とせり龍田は正字立田は半
假名也詞林採葉

龍田山

萬葉

大伴のみつのとまりに舟は出て

龍田の山はいつかこえけん

大伴の御門に近し

八雲御抄

妹が紐解とむすひて立田山

同

今こそ紅葉はしめたりけれ

風吹は沖津白波龍田山

夜半にや君かひとり越らん

此歌伊勢物語大和物語の詞書おほくたがひて見
え侍る

大和物語

人のむすめをぬすみてかきいだきて馬にうちの
せてにげていにけり 龍田山にやどりぬ草の中
にあふりをときしきてふせりけり女おそろしと
おもふ事かぎりなしわびしとおもひて男のもの
いへどいらへせで泣ければおとこ

たかみそきゆふつけ鳥かから衣

龍田の山にをりはへて鳴

女かへし

龍田川岩ねをさして行水の

行末しらぬ我かことやなく

とよみてしにけるいとあさましうてなん男いだ
きもちてなきける

奥義抄

風ふけは雲のきぬかさ龍田山

拾遺愚草

絲にのはせるあさかほの花

絲田山神のみけしにたむくとや

くれ行秋のにしきをからん

定 家

難題百首

立田山木葉の下のかり枕

同

かはすもあたに露こほれつゝ

龍田社 社領十二石

龍田本社は立野にあり法隆寺より一里餘

龍田坐天御柱國御柱神社二座

延喜式

夫龍田明神の御鎮座は天武天皇四年四月小紫美濃龍
小錦下佐伯連廣足をつかはしめて龍田の立野に風神

を祠給ふ又大山中曾禰韓大をして廣瀬の川曲に大忌

神を祭らしめ給ふ

紀

日本抑此神は伊弉諾伊弉冊尊大八

洲の國を生給ひて後伊弉諾尊我所生の國唯朝霧のみ

ありてかほりみてるかなと宣ひて則吹撥の氣化して

神となる御號を綴長戸邊命又曰綴長津彦神是風

神女

神男

神なり日本紀又飢し時生給ふを倉稻魂命と申釋曰

第一の社は東向級長戸邊命纂疏曰級長とは息氣長しといふがごとくなり戸は語助字にして邊は姫也女神に

ていますより龍田姫と申

第二社は東向級長津彦命纂疏曰津語助字にして彦は男

なり風神にてまします又北に向社二座南に向社三座坤方に一座有

△瀧祭神又寶山といふ事は伊弉諾伊弉冊尊海を採給

ひし神の天瓊矛あまのとうぼうを納められしより瀧祭の仙宮といふ纂唯瀧祭神と廣瀧龍田神則同體異名にして水氣の神

なり故廣瀧龍田の神の御名を天御柱國御柱と申是天逆矛の守護のもとなり神祇本紀かの天瓊矛の神寶を龍田

に納しとなり又の説に瀧祭宮は御裳濯川原坐御神也寶殿はあらず地底にいます天逆太刀を納し神仙也元長

記其瀧祭仙宮は常世郷と號して是龍宮なり天地麗氣府錄倭姫命世紀元長記纂疏天地麗氣府錄等に粗見え侍れども

も龜毫に堪がたく畧し侍る

△神階は貞觀元年正月廿七日廣瀧神立田神正一位を

授給ふ註式額は正一位立田大明神と小野道風の筆也又

三代實錄には貞觀元年正月廿七日廣瀧神龍田神正三

位を加へられしよし見えたり

△祭は天武天皇五年四月朔龍田風神廣瀧大忌神をはじめてまつり給ふ日本紀又大忌神風神祭並て四月四日

七月四日なり釋曰本紀くはしくは神祇令延喜式西宮抄等

にあり定日しばらく異なるか當世は九月十三日也風

神祭二座祝詞曰御名者天乃御柱乃命國乃御柱乃命止

御名者悟奉氏中略龍田乃立野爾小野爾吾宮波定奉氏中略

公民乃作々物乎惡風荒水爾不相賜皇神乃成幸爾賜者初

穗者ミカノハラ堪乃開高智堪腹滿藤氏汁爾母額爾母八百稻千稻爾引

居置氏秋祭爾奉乎延喜止式

立野

壬二もしは草に大和國又武藏國にあり

行まゝに立野の野邊の霞かな

わくとやよその人は見るらん

神南

本宮より三町餘勅撰名所に倭國又丹波國備中國

に同名もしは草に山城國攝津國に同名

立田川紅葉はなかる神なひの

三室の山に時雨ふるらし

井蛙抄曰大和國なり神なひ山神南の三室の山

不_二混亂_一神南の森とよめるも大和國あり

神子内親王密庚申歌合

山吹の花やさくらんひまもなく

新撰和歌集

ゆふかけて鳴そあやしき時鳥

こは神なひの森にこそきけ

正治歌合

立田姫ちへの錦をそめたてゝ

梢にさらす神南の森

拾玉

紅葉はをぬさと手向て行秋を

おしみとめぬや神なひの森

壬二

忍ひ侘おもひやかるゝ神南備の家

三室の山に鹿を鳴なる

同
名もつらしはつきの嵐たつ田姫 同

しはしなそめそ神南備の山

神南川

萬葉

蛙鳴甘南備河にかけ見えて

今やさくらん山ふきの花

浅小竹原

爰のほとりにや所しらす澄月歌枕に神南備篇に

入レ之

萬葉

神南備の浅小竹原の美妾

なみなへし

夫木

おもひやる君か聲のしるけく

かれぬるか衣のあきの神なひの

衣 笠

三田屋附垣津田池

澄月歌枕に神南備篇入レ之

萬葉

神なひのきよき三田屋の垣津田の池の堤の百たら

す五十槻枝に水枝さす秋の黄葉

占手山

うらて

澄月歌枕に神南備篇入レ之

名寄

ふく風にすまひやすらん神なひの

うらての山の峯の紅葉は

惠慶法師

毛無乃岳

澄月歌枕に神南備篇入^レ之

萬葉

神なひの磐瀬の森の時鳥

毛無乃岳にいつかきなかん

神邊山

神邊山萬葉集にかみなひ山と點ありみつもろは
三室なるべし龍田山は西に三笠山は東にありさ
しむかへり此歌龍田の三室をよめる

萬葉

みつもろの神への山にたちむかひ三笠の山に秋萩
の妻をまかんと朝つくよ明まくおしみ足引の山彦
とよみよひたち鳴も

龍田川

堀河太郎

龍田川しからみかけて神なひの 俊 頼

三室の山のもみちをそ見る

北院御室御集

龍田川瀬おちの波も色つきて

木葉の下に聲むせふらし

五十首和歌津守國冬
秋ならはにしきも絶し龍田川

わたる人なき五月雨の比

紅葉川 立田川の異名か

月
秋風の龍田山よりなかれきて

後京極良經

紅葉の川をくゝる白波

三室山

本宮より四町ばかり三室は神の社をいへり神樂註抄

三室山は神のいます山なり顯注密勘

新古今

立田川三室の山のちかければ

關白左大臣

紅葉を波に染ぬ日そなき

三室岸 三室の内

壬二
神なひの三室の岸にゐるちどり

家 隆

龍田川原の風やはけしき

那良志岡

三室山につけり八雲御抄にいはく大和國又紀
伊國に同名

新勅撰

神なひの岩瀬の森の時鳥

田原天皇

草根

又そふく誰にちきりをかしは木の

ならしの岡にいつかきなかん

宿にならしの岡の松蔭

歌枕

去きしまやふるき都はうつもれて

長方

ならしの岡に雪つもりつゝ

岩瀬森

神南備より六町あり八雲御抄に大和國也越中國

同名

萬葉
武士の岩瀬の森の霍公鳥

今もなかぬか山の常影爾とかげに

後撰

立田川立なは君か名をおしむ

元方

岩瀬の杜のいはしとそおもふ

續後拾遺

神なひの岩瀬の森の冬枯に

信實朝臣

三室の山は雪ふりにけり

四月四日祭禮に岩瀬に樂をうち此日神供の魚をとる
の舊例今の世に絶す

龍田關

立田より河内國の通路に關屋戸といふあり此所
ならんか

天武天皇八年十一月龍田山に關をばじめてすへられ
しとなり日本紀

龜瀨山

龜瀨越龍田の南又往駒越等の河内國の通路は聖
德太子のひらき給ふ道也玉林抄

桓武天皇いまだ東宮にもたゝせ給はざりし時龜瀨山
の峯にあそび給ひしに師子無畏の身忽然と出現し大
聖老翁の姿を變じ又本形にかへりて後童子の形をあ
らはす是五髻文殊童子にやあらん等定法師も拜禮し
て臨幸を我住河内國西林寺になし奉りしなり佛法傳通記

信貴山しき附信貴畑

拾芥抄宇治拾遺等に河内國と云々縁起にいはいく
大和國と云々此山兩國の境なり

信貴山觀喜院朝護國孫子寺は開山大明蓮上人也拾芥抄

聖德太子官軍を引率して守屋大臣を攻給ひしに大臣の軍兵手痛して官軍三度破れて信貴山に逃入けり太子御誓願丹心に侍りければ山中に石櫃あらはれて多門天の銘あきらかなりふかく信じたかく貴み給ひて白膠木にして四天王像をきさみ御髻に納られ更に進み給ふ所に往駒山のふもとにして老武者二騎忽然と味方につかうまつれりをそらくは修羅をもあざむくべきつらだましゐあり一人は阿多大臣とめされ一人は坂本大臣とよび給ひしがかれが軍功たとへをとるにかたなし終に守屋大臣を討ければ二臣雲に乗じて跡を見せず扱かの多門天の石櫃の上に方一丈の殿をたて給ひき信貴山の毘沙門天是なり舊記ども互見にまかせあらはすものなり當世は堂一字坊舎九軒△信濃國に法師あり東大寺にきたりて受戒して後信貴山にをこなひゐたりしが不圖に小毘沙門厨子ながらに出現ありてえたりそこに堂たてゝすへ奉り年を経てをこなひけり此麓に下すながら徳人ありけりここに聖の鉢つねに飛行つゝ物を入てぞかへりけるありし時飛きける鉢を藏の内にありながらわすれて戸をとち鎖などさしたりしかば藏はすいゝるにゆるぎて

土より一尺ばかりゆるぎあがりしほどにかの鉢もれ出て倉をのせて空に飛行人々のゝしりさはぎて藏の行跡をゝひぬれば河内國に此聖のおはする山中に飛行聖のかたはらにおちゐたりかの徳人ひじりにむかひて藏をなん返したうべよといひければ藏は物を置なんれうにあなればさらに返しやるまじとぞいふさあらば納置ける千石の米をたうべよといへばかへしやらんとて一俵を鉢にのせられつれば残る俵はことごとく村雀の飛がごとくしてぬしの家にぞ行たりける其比延喜のみかどの御やまひおもくわたらせ給ひしには河内國信貴山にゐながら加持し侍ればやすくをこたらせましゝき扱聖の姉なる人たづねのぼりて聖のもうれんこゐんにたいめしてふくたいといふものもてきつゝ奉りぬればひじりさむさをふせがれけりいと久しくき給ひしまゝに寸々にやぶれしを堂にこめたりけり世の人かのやぶれぎぬを夢ばかりこひうけぬればまもりにしてげりその藏も朽やぶれていまだあなるをその柱のきれなど露ばかりえたる人は毘沙門天をつくり奉りて持ぬれはかならず徳つかぬはなかりけりとかや宇治拾遺にあり又縁起には猶

つまびらかなり信貴畑のほとり俗に七藏といふ所ありかの藏の跡なり

△大塔宮も信貴山にしばらくおはしまして後御入洛ありしよし太平記に見えたり松永霜臺の城跡山頂にのこれり

△信貴畑は毘沙門堂より半里ばかり麓にあり多門天焼捨給ひし米に侍るとてくろくやけながら米のかたちあざやかに土にまじりてぞありけるいにしへよりまうでの人々おほく拾ひかへれども絶る期なし此事往々の説どもふみに見えたり或人の申毘沙門經に孝ある人には寶をあたへ貪欲の人には日に三度寶をやきすつるといへどもあたふ事なしとありこれらの物ならんかとなり俗に米の尾といふ

小鞍嶺^{をくら}

小倉寺とて役の小角の建立の跡に草室五六坊あり鬼取といふ所のほとりなり小倉峯は立野

より一里計乾の方信貴山につけり

春三月諸卿大夫等下難波時歌二首

禹葉

白雲の龍田山の瀧の上の

反歌

小鞍嶺にさきをける櫻花は

同
我去は七日はすきし龍田山彦

勸此花を風にちらすな

千五百番哥合
白雲の春はかさねて龍田山

定家

をくらの峯に花匂らん

八雲御抄又井蛙抄小倉嶺はやまとなり小倉山に不_レ可_二混亂_一云々小倉城は山城なり

施鹿苑寺^{せろくをんじ} 勢益の里^{せやく}にあり

施鹿苑寺は聖德太子河内國に行啓の時信貴山の北山にして鹿のかけり通りけるをあやしく犬のくひころしけり太子三昧定に入らせ給ふに互の噴悲消やらす九百九十九世生をかへて害にあふ事かくのごとしいとあはれがり給ふて一字を立て施鹿苑寺と號せられき平氏傳玉林抄にくはしくあり

久土里附久土寺久度社

勢益^{せやく}の里より七八町巽久土^{くど}の渡舟あり

花山法皇久土にやどらせ給ひて龍田神南森龍田川三室岸など覧まし御心にそみければにや夜をかさねさせ給ひけり御修又在五中將業平朝臣も紅葉の秋は此里を又なきものにながめ給ひしとかや玉林抄久土寺は西安寺と號して聖德太子の建立又久度神社は神名帳にあり延暦二年十二月從五位下に叙せられ官社となし給ふとなり續日本紀

惣持寺

龍田より十餘町異惣持の渡舟あり

惣持寺は平群郡下の神南山にあり帝王編年聖德太子の遺像ありて蘆塘宮の額をかけたなり

額安寺

法隆寺より東一里ばかり額田部村にあり

額安寺本尊は十一面觀音菩薩濫觴は推古天皇二十五年上宮太子三昧定を出給ひて御世の皇位佛法力ならでなにをか護とせましやと熊凝村に一の精舎をたて給ひき扶桑略記其後推古天皇御額にあやしき瘡見えさせ給ひしかば藥師の像を御造營の御願によりて御

平復ありしよりあらためて額安寺の名あり玉林抄中興開山は忍性律師鎌倉の頼朝公の御歸依僧とぞ聞えし

△鎮守社は池の中島にあり推古天皇豐浦宮に即位しして小墾田の宮にうつらせて後額田部におはしましき是額田部の皇女の御所にて侍りしより額田部の名あり額安寺は推古天皇の勅願なれば天皇を鎮守の社に祠奉りしなり玉林抄

柏木森

額安寺の埵十町ばかり

六帖

柏木の森の下草年ふとも

人丸

光をいつか見んとたのみし

玉吟集

雪ふれは葉もりの神やかへるらん

家隆

しらゆふかゝる柏木の森

或人の申菅田池に柏木の森を詠じ合たりと云々古詠をもとめえず一往爰にあらはす後人の添削をねがふのみ

菅田池

二階堂村の南菅田村にあり俗こもが池といふも

久安百首 しほ草類字名所に大和國にあり

戀をのみすかたの池にみくさゐて 作賢門院安藝

覺雅僧都百首 すまてや見なん名こそをしけれ

見まくほし菅田の池のかきつはた

かきたくふへしおもひやはせし

龜山殿七百首 咲にけり底にうつろふかけみれば

おなしすかたの池の藤なみ

伊駒山

往馬じま 伊古麻いこま 膽駒いんこ 射駒 伊駒いこ

駒建保御會 生駒釋書 大和河内兩國の名所八雲御抄

萬葉 妹許と馬鞍をきて射駒山

同 うち越くれは紅葉ちりつゝ

君かあたり見つゝをくらん伊駒山

雲なかへしそ雨はふる共

瀬川二郎

伊駒山手向はかれか木のもとに

兼 昌

岩藏うちて神たてけり

住吉百首 出るまの月のうちより聲をする 正 徹

草根 鐘やいこまの峯の山寺

かへり見る淡路はあはて伊駒山

たかくよりくる瀬戸の早船

往馬大明神社

往馬坐伊古麻都比古神社つひこ二座延喜式垂跡出書をしらす

後人の添削をまつのみ寛文五幸正月二日炎上樓門小

社所々残れり假御殿なり

長屋王墓

所しらす

長屋王ならびに吉備内王神龜四年二月に生駒山に葬

となり檀日吉備内王は日並智皇子女又長屋王は高市

親王皇男なり

鬼取

くらがりこえ

暗越西島村十町ばかり北に入行所に鬼取山鶴林

寺一字藥師如來をすへたり俗に鬼取山といふ所

は舊名般若岩屋なり

鬼取は役行者儀學儀賢の二鬼をとらへられし所といへりされば役行者かづらき山にをこなはれしには鬼神をめしつかひておほせをそむくには咒縛し給へばしたがはずといふ事なし續日本紀

竹林寺

平群郡往駒山の麓帝王編年

大聖竹林寺は本尊文殊大士行基菩薩の建立なり行基菩薩は添下郡菅原寺にて圓寂ありしかども遺詞にまかせ此堂の下にぞ納めたり草野仙房は母公の住所奥院は其墓所十廻光菩薩と號せり竹林寺の西の方の山の半腹に般若岩屋あり

是より二十五町西の山頂の南の大道は闇峠とて大和河内國境なり

高安城

當世河内國高安村ありむかし大和國迄かゝりて高安にて侍りけるにや但別の所にや後の人さだめらるべし

天智天皇八年倭國高安の城をきづきて畿内の田租な

らびに鹽などおさめられしなり日本紀天武持統の兩帝も高安の城に御幸あり日本紀其後大寶元年にやぶりて其具たるものを大和河内の兩國にたまはりしとなり續日本紀

平群郡神名帳神社二十座延喜式

龍田坐いみぎ天御柱國御柱神社二座

龍田比古龍田比女神社二座

往馬坐いみぎ伊古麻都比古神社二座

平群石床神社

平群坐紀氏神社

船山神社

神岳神社

伊古麻山口神社

久度神社

猪上神社

御櫛神社

平群神社五座

雲甘寺坐檜本神社

和州舊跡幽考第六卷終

和州舊跡幽考第七卷

廣瀬郡

百濟宮

百濟七村はくだら川二町ばかり西これ皇居の跡なり川上は越智にて川々落合北にながれ行

百濟宮は人皇三十五代舒明天皇の皇宮なり日本紀

百濟大寺

百濟川より二町西にあり川の東に佐味村有此川の東は十市郡西は廣瀬郡なり三重塔一基堂一宇當世にあるにまかせて廣瀬の郡に記すものなり抑此郡のわかちにふるき文どもまち／＼なり玉林抄に曰百濟大寺は今の佐味百濟にはあらず橘寺の坤石川といふ所の百濟にして五條野のほとり有と云々此説を思に高市郡なり然とも聖

廟の神筆の大安寺の縁起又三代實錄釋書等に百濟大寺は十市郡と見て侍れば玉林抄の高市郡の説もちゆるにたらず十市郡にある伽藍なるべし當世百濟川をへだて、廣瀬郡にかの寺の侍るを思に堂と塔の中間に弘法大師のほらせ給ひしまん字の池あり池の濫觴は奥にあらはす是をまおもふに弘法大師百濟大寺のむかしをしを二度建立ありけるにこそ侍らめの後の人明にせらるべし

百濟大寺は上宮太子熊凝村に精舎をはしめ給ひしかどもことわづかにして薨給ひき上宮太子の遺詞を仰せ給ひて舒明天皇百濟川のはとりに寺の勝地をえら縁起び御宇十一年百濟に宮處をさためかの精舎を爰にうつしかへられ百濟大寺と號し給ひて封邑三百戸良田二百町種々の財寶など施入をさせ給ひき此時百濟川のはとりの子部の社の木をきり九重の塔をたてたりしかは社神いといかりまし／＼て火をはなち終に寺を焼給ひけり是よりはじめ宮處ならびに寺御造營の時百濟川の西民は宮造りの役東の民は寺を造るの役とわかち給ひて縁起釋書直縣大匠としてとりを

こなひたり類聚國史又舒明天皇の遺勅をうけ給ひて皇極天皇御造營あり皇極天皇の遺勅をうけ給ひて孝德天皇寺院をいとなみ佛像をつくり給ふ齊明天皇崩じ給ふにおよびて天智天皇に附屬あり天智天皇より天武天皇遺勅をうけ給ひて伽藍を高市郡にうつして大宣大寺といふ縁起

△釋迦佛像は丈六にして脇士の菩薩を安置せしなり天智天皇此像を御建立のはしめ錦帳にふし御祈念こよなかりしかば其曉二女天降佛像を禮拜し妙花を供養し讚歎漸久しくありて雲に入たりしかのみならず開眼の日は紫雲空にみち妙音天にひいき瑞應一にあらず縁起釋書かゝる靈瑞の伽藍もなくなりて唯聖廟の神毫のみ残れり當世本堂の本尊は八臂八刀の毘沙門をすへたり

あやんうんの三池

あやんうんの三池は弘法大師あ字の池は田原本といふ

所の坤の方にしあやん字の池は廣瀬郡うん字の池て秦樂寺にありあ百濟大寺にありあは廣瀬

郡田中村にあり爰にして三教指歸を聖述ありとて池の中に三教島をつき給ひしも今にあり

百濟川

歌枕勅撰名所攝津國百濟郡藻鹽草に大和國百濟川河瀬をはやみあか駒の

あしのうらまにぬれにけるかも

長琳寺

長谷川の南穴暗村にあり

長琳寺又は那藏寺なぐさ共いふ聖德太子の御建立なり破壊して觀音堂一字あり縁起に曰く推古天皇例ならぬ御枕にしづませ給ひて柳髮筋なくならせおはしまして玉のかぶりにほひかすかに桃顔しほたれ給ひて袞龍の色も爽ならねは聖德太子御誓願に天皇の御命のびさせ給ひなば伽藍をたて佛像をつくりなん終に御つつかなくならせ給ひしかば大和國廣瀬郡河相村かあむらに勝地をえらび御建立ありて那藏寺と號せられたり玉林抄菩薩傳の説はしはらくは異あり穴冥寺ともかけり

河合村

な泊瀬川と倉橋川の落合なれば此名有三國傳記

廣瀬川 河合川同しながれ

萬葉 廣瀬川 仙つくはかりあささせや

心ぶかめてわかをもふらん

千五百番 御稜して神の恵みも廣瀬川

幾千世迄かすまんとすらん

草履 末をはみ廣瀬にならぶ鵜かひ船

ひとりくそまた落て行

澤田川

川の邊りに澤田村といふあり井蛙抄に大和國とありしかれども催馬樂註秘抄類字名所などには山城國とあり一往爰にあらはす澤田川廣瀬川おなじな

拾玉 かねなり

澤田川まきのつき橋うきぬれは

慈 鎮

人も渡らす五月雨の比

廣瀬社 河合村にあり

廣瀬坐和加宇加賣命神社 延喜式 又の御名は大忌神 日本紀 又御膳持若宇加賣命 令義 又倉稻魂穀神 義 とも申奉りて

水徳の神なり此神は伊弉諾伊弉册尊の御子豐宇賀の賣神にして神祇官にいます御食神是なり 神祇書

△御鎮座は天武天皇四年四月に龍田廣瀬兩社を祠給ふ 日本紀 くはしくは龍田明神の所にあらはす天武天皇

四年より延寶七年迄凡一千五年か

△神階は貞觀元年正月二十七日正一位たり 式註

△祭は天武天皇五年にはしめてまつりあり 日本紀 廣瀬

龍田二神の祭は四月四日七月四日と簾中抄西宮抄釋

日本紀等にくはし但日本紀には四月朔日と見へたり

是をまつりぬれば山谷の水變じてあまき水となり アキ

稼うるほひ秋にきはひをえる 令義 延喜式大忌祭一座

廣瀬社七月進之 祝詞曰廣瀬能川合爾稱辭竟本流皇神乃御名平

白氏御膳持須留若宇加乃賣能命登御名者白氏中略將 作ニ

奥都御歳乎八束穗爾皇神乃成幸賜者初穗者汁爾母千

稻八十稻爾引居氏如横山打積置氏秋祭爾奉幸登皇神

前爾白賜登宣 延喜式

廣瀬野

和名抄に廣瀬郡と云々當世大野村といふ

天武天皇十年十月廣瀬野に苑をかり給ひなんとて行

宮をたてさせ行幸の装束ありしかども其事はあらざりけり類聚國史

大福寺管尾村にあり寺領三十石眞言宗

満島山大福寺はつたへきく聖徳太子の御建立みつからさみて薬師如來をすへ給ふ弘法大師満嶋の辨財天を勧請ありしより此山號あり

牧野墓

廣瀬村より三十町ばかり西にあり俗に莫邪が墓つかといひて莫邪の劔のふること共かたりつたふいとおぼつかなしおもふに牧野は牧野はなやのよみ侍れば片言にして莫邪といひつたふるならしかたち園丘也

牧野墓亦牧岡ともいふ大皇大後の先和氏大和國廣瀬郡牧野墓なり延喜式

成相墓

牧野墓の十町ばかり東にありて墓のかたち陵にをなしをもふに牧野墓の後東西にならべつきけ

るによりて成相の名あるか

成相墓は押坂彦人大兄皇子大和國廣瀬郡にあり延喜式人王卅一代敏達天皇の皇子舒明天皇の父なり

三立岡墓

牧野墓成相墓の五町ばかり南にあり右三基の墓鼎の足のごとし墓のかたち陵にをなしおもふに二基の墓をつきて後にならべてきづかれしより三立の名あるか

三立岡墓は高市皇子大和國廣瀬郡にあり延喜式人王四十代天武天皇の皇子なり

廣瀬郡神名帳五座延喜式

廣瀬坐和加宇賀賣命神社

讃岐神社櫛うへ比賣命神社

穗雷命神社於神社

和州舊跡幽考第七卷終

和州舊跡幽考第八卷

葛下郡

二上嶽

二上山ともいへり葛城山の内にあり

△二上嶽坐豐布都靈神社亦名武雷尊西譽記

△大將軍坐大國魂尊津神同

二上山

二上嶽同山井蛙抄類字名所二上山越中國に同名あり

大津皇子の屍をかづらき二上山にうつし葬る
の時大來皇女をばくよみ給ふ歌二首

萬葉
うつそみの人にある我や明日よりは

二上山をいもせとわれ見ん

同
木道にこそ妹山有といへかつらぎの櫛上

二上山も妹こそありけれ

大貳經平家歌合

郭公明日もあるかな玉くしけ

二上山のひとつへの空

新撰和歌

我戀は二上山のもろかつら

諸共にこそかけまほしけれ

俊恵法師

大坂山

二上山同山異名麓の里に大坂村といふあり日本

紀に大坂山の石を運びてとあるも此山なりとぞ

俗に逢坂村とかけり

萬葉

大坂を吾越へくれは二上に

紅葉はなかる時雨ふりつゝ

崇神天皇御宇十年九月帝をかたふけ奉らんとて武埴むすけ

安彦やすひこは山背國より軍兵を引率して奈良坂を経てよせ

たり妻の吾田媛は大坂を経て都を攻なんとよせたり

官軍五十狹せう芹彦せりひこ命挑戰ひて終に吾田媛を討たり日本紀

神願寺

二上山神願寺帝王元來をしらす

葛城岩橋

盛衰記曰役行者二上山嶽より神山にいたりて石橋をわたしなんとせり今見るに金剛山の社の北に高くそばだてる峰に岩橋の跡のこれり俗にかの爪といふ橋爪といふ心にやかくは、ふならし岩橋は役行者かつらぎの峰より金峰山の通路に岩橋をかけなんとなり衆神此命をうけ給ふ只かつらぎの峯の一言主神形いと見にくかりければ晝役をはいかりて夜をまち給ひしより橋をわたしえず行者いかりて一言主神を咒縛して深谷につなげり此事書々に侍れば只略のみ

拾遺

岩橋の夜の契りも絶ぬへし

藏人左近

明る佗しきかつらぎの神

後拾遺

中絶る葛城山の岩橋は

相模

ふみ見る事もかたくそありける

當麻寺

寺領三百石
淨土眞言二流

二上山萬法藏院禪林寺又は當麻寺ともいふ麻呂古親王の御建立なりはしめは推古天皇の御宇二十年河内國山田郡に御建立ましゝて萬法藏院とて伽藍にて侍りき其所は今の味曾越なり抑禪林寺の地は役小角

諸神を勸請ありて勤修の勝地なりしが天武天皇白鳳二年麻呂古親王瑞夢を蒙らせ給ひて河内國萬法藏院を爰の地にうつし給ひなんの御心ましゝければ天武天皇に奏問を經させ給ひしかば靈夢を叡感ましまして麻呂古親王刑部親王勅使として役の小角の許につかはされしに小角詔をうけてよろこび宅地を二皇子に奉りき同十年寺となりしかば舊名をあらため禪林寺と號せられけり落慶の導師は慧灌僧正也白鳳十年より延寶八年迄凡一千年西譽抄又當麻寺の名は當麻國見真人ミコトミといふあり祖父麻呂古親王の願寺なれば今更我姓を寺號となさんとて當麻寺と改名ありしとぞ聞へし西譽抄

△金堂彌勒菩薩は丈六土佛なり佛胸に一磔手半の孔雀明王像を納たり抑此孔雀明王は役小角大峰三重の瀧の上にして骸骨を見らるゝ其左手に鈴右手に獨鈷を持ちりあやしやと不動尊にいのりしかは汝第三生の骨ぞかし此山にをこなふ事七生にをよべりとなりしかあらばとて獨鈷をとりて鑄奉られし像なり鈴は大峰三重の瀧に納めけるとぞ堂内の靈佛はしるすにいとまあらず西譽抄又金堂の前に一言主明神の來座

の石又瑞籬の内の石は熊野權現影向の所なり諸堂薨をならべたり

△曼陀羅堂夫曼陀羅は横佩^{よこはぎ}右大臣豐成の娘中將局名如の誓願に乗じて西方の教主化人とあらはれ蓮絲をもて一夜に織現せてえさせ給ひし淨土の變相なり當世まで織殿とて一間所ありくはしくは釋書又青山上人西譽上人の抄にありかの變相の中品上生と中品中生の中間に織著の緣起四百十三字あり其詞曰此大曼陀羅者人王四十六代帝孝謙天王政也依中將局願

織^{和カ}變^カ繒^カ圖顯^カ莊嚴^カ是則厭離穢惡境界求願西方極樂世界自茲道心堅固一食長齋天平寶字七年六月十五日無著世間參隨此寺但有淨土經書寫願自去寅年夏六月一時時求此場稱彌陀行住坐臥偏專敬至鳥呼懸憑一如來之誓約運思三菩提之法輪故著花色厭女身捨金衣祈無生於人間不見貪落於鬢髮久失天上之雲志存明潔依之

禪尼一人不圖來以蓮爲絲寺異角穿井雖高乾無水之士如志願修得之成五色然間同來一人織女執絲寄堂乾角造織阿彌陀淨土變一鋪又寫稱讚淨土經一千卷深頂戴受持以縷繡百袋入

之縱使於未來世雖片端之見聞於一佛土爲淨業之主伴此變相者不簡親疎爲憂患者顯之皆蒙授記有得益之功今應欲拜生身之願上織觀無量壽經曼陀羅初文爲序起惡指掌善分定散入末利夫人清淨室說一乘來韋提希女壯嚴宮教西方今爲中將局願彌陀現亦然冀臨終正念而傾西夕見佛早期預彌陀如來來迎必坐九品之榻願此功德回法界利生不限人普及四生傍共開生三九品之志天平寶字七年歲次癸卯季夏六月二十三日

西曼陀羅抄

△曼陀羅は九百十餘歳を経て延寶年中に破れを補ひ表具をあらたにせられしには靈端事にふれて魂を消し折にのぞみては眼をよろこばしめ心感肝に銘して施主兄弟表具師等あまた衣を墨に染欣求淨土の身とぞなりける扱舊軸は函底に納め道場には新曼陀羅をかけられたり

△新曼陀羅は天平寶字七年より四百五十年を経て土御門院の御宇承元二年に院奏を経ての後順德院御宇保延二年十月に勅許を蒙り同四年阿波國浦庄にして絹をえたり同五年六月廿三日に功なりぬ畫工は良賀

法印源慶法眼銘文は修理太夫藤原朝臣行能卿也西譽抄
△炎上は治承年中兵火に金堂講堂二基塔鍾樓經藏坊
舍けふりとなるといへども曼陀羅堂は巽の角に火
つきながらをのづからに消侍りき西譽抄建立已來火災
なし

奥院

奥院往生寺の源空上人の遺像は上人みづからの開眼
四十八度に滿給ひし像にして洛陽東山智恩院にすへ
奉りて年序を経給ひけるが或夜夢にま見えさせ給ひ
て我額に釘をうつものあり苦惱しのびがたしとなり
翌朝拜禮せしに誠御額に竹釘ぞありけるいとあさま
しくてぬきぬれば血のながるゝ事只肉身の如し又夢
の告あり我本師は當麻寺の曼陀羅なりかしこにうつ
しすへよかしかの曼陀羅堂の乾は八功德池にして千
世の青蓮華ありとをしへさせ給ひてさめにけり衆僧
あやしみおもひ巡行すれ共蓮華なしおもふに役小角
往昔諸神勸請の所は清淨の地ならんかしとて土をう
がちぬれば地底に蓮華あり則堂たてゝ遺像をうつし
すへたり往生寺是なり西譽抄世に鏡石といふ奇異の靈

寶あり

石光寺

石光寺又は染野寺ともいふ夫石光寺は天智天皇の御
宇夜々に光あり官使におほせてたつねさせ給ひしに
三大石あり形佛像に似たりと復奏せしより三石を彌
勤三尊にきざましめ堂を立させ給ひしより石光寺の
名あり釋書又染野寺といふ事は曼陀羅の蓮糸をそめ給
ひし所なれば此名あり西譽抄織著縁起に寺巽角穿井
雖ニ高乾無水之土如志願修得之成五色とあ
らはし給ひしは此所なり又一木の櫻あり役小角佛法
おとろへば枯なむと誓ひうへられしが枝葉しげりて
今にあり釋書

横佩墓

西譽抄曰當麻より坤十餘町

よはす
横佩右大臣豐成は武智麻呂の長男淡海公の嫡孫正二
位右大臣藤原朝臣豐成と云人なり横佩は廟所の名に
よりていふなり天平寶字八年に葬せり西譽抄年六十二
又の説藤原の豐成は天平神護元年十一月に卒去のよ
し續日本紀に見へたり

狐井村

當麻寺より北半里餘一字の堂あり

惠心院源信僧都の誕生の地也父は正親母は清原氏天
慶五年壬寅歲大和國葛城郡にしてうまれ給ふ正統釋錄

書曰和州葛城郡の人又續本朝往生傳曰葛上郡當麻郷
の人とあり然は葛上郡と古書には見え當世當麻郷は
葛下郡なり倭名類聚曰葛下郡に當麻郷とありおもふ
に葛上郡は書寫のあやまりならんか只此所誕生の地
なるべきか源信僧都の傳は釋書續本朝往生傳往生要
集記なとにくわしくあり

腰折田

所しらす

垂仁天皇七年當麻邑にいと力のすぐれたる人あり名
を當麻蹶速といへり角を刺鉤^{さき}などをのべぬるにいと
やすくあれば世の中に我にならべなん力はいかでか
あらんやと心にをもひ詞に出てもかたりければ天皇
かれにあはせなん力人ありや臣進み出てつたへ聞出
雲國野見宿禰といふありかれこそ力はすぐれ侍れと
奏しける程にさらはかれをめせとてその日倭直祖長

尾市をつかわして野見宿禰をめして蹶速とすまひを
とらしめられきたがひに蹴たりけるか終に蹶速が脇
骨を蹈折られて命をうしなひけりしかあれは蹶速か
地を野見宿禰に給わりたり其邑に腰折田の名あるも
の也日本紀

水越

當麻の北にあり又穴虫越といふもあり

水越ならひに穴虫越は大和國より河内國の通路なり
聖德太子のひらかせ給ふ道也玉林抄

大和川

大和國中の川落合て龜瀬越の南葛下郡の北のは
づれを西になかれすゑは河内國に入

萬葉

大和川清き川瀬にあそへとも

ならの都は忘れかねつも

草根

色ふかみ此敷島の大和川

紅葉や秋の人のことは

歌枕

大和川櫻みたれて流れきぬ

衣笠大臣

初瀬の山にあらし吹らし

片岡

月清集
片岡の花も残らぬ梢より

良 經

白川殿七百首
白妙の袖ふりはへて片岡の

雅言朝臣

朝の原に若菜摘なり

あしたのはら
朝原 片岡の麓

家集
片岡の朝の原を過行は

伊 勢

山時鳥今ぞ鳴なり

角總
霧ふかき朝の原の女郎花

心をよせて見る人そなき

朝野

もしほ草に倭國がある人のいはく朝原同所一往

爰にあらはす後の人添削にさだめ給へ

正治歌合
あちきかなや朝の野邊の草枯て

經 家

虫こそかゝる音をは鳴しか

達磨寺 寺領三十石

玉林抄曰放光寺の良二町ばかり

片岡山達磨寺は聖德太子の飢人を墓につかせ給ふ地

なり達磨墳といへり釋書その墳のうへの塔は勝月上人

の起立にして聖德太子と達磨の遺跡をすへられたり

笠置の上人同時代の人なり撰集抄通又の説に解脫上

人かの墳に三重塔を立て草室をかまへ達磨寺と號せ

りきとも申なり濫觴は推古天皇二十一年十二月太子

片岡山の邊にして飢人道のかたはらにふせるを見給

ひて姓名をとほせ給ひしかどもこたへず太子飲食を

あたへ衣裳をぬぎてかれにきせなどし給ひてやすく

ふせるに則御歌

しなてるや綴照や私記曰山かたうか山に片岡いひにえ

て飢飢やさす乃之奈倍留也の君はやなき無いひにえて飢飯こ

やせる臥その旅人とははれ

右は日本紀注は釋日本紀によれり此歌を類聚國史に

は

しなてるやかたうか山のいひにうへて

返し

ふせる旅人あはれをやなし

いかるかや富の小川の絶はこそ

我大君の御名をわすれめ

とのせられたり扱翌日飢人死せり太子かなしみ給ひてその所に埋み葬せ給ひき其後日かすを経てかの屍骨を見せしめ給へば衣服を棺の上にたゝみて屍骨はなくなりけり其きぬをとりかへさせてつねの如く服たまひければ時の人いとあやしみ聖の聖をしれる事これ實ならんかなといひあへりけり日本紀今見るに堂のしりへの碑銘にくはしく見えたり是は東福寺惟肖和尚の立られしとなり

放光寺

達磨寺より坤二町ばかり玉林抄當世王子村といふ所に礎石あり

放光寺は又王寺といふ聖德太子の御建立四十六ヶ寺の目錄にのせたり供養の會日に尊像光をはなち給ふ玉林抄此靈瑞を敬感ましめて推古天皇御藍を御造營ありて放光寺と號せさせ給ふ緣起

顯宗天皇陵

人皇二十四代顯宗天皇は傍丘磐杯かたなかいはつき南陵大和國葛下郡にあり延喜式又は片岡石上陵とも古事又は片岡磐築岡上陵ともいへり帝王編年御宇三年四月八日釣宮にして崩御なり給ひしを仁賢天皇元年十月に此陵にかくし奉る日本紀延寶七年迄凡一千百九十三年か

武烈天皇陵

人皇二十六代武烈天皇傍丘磐杯北陵大和國葛下郡にあり延喜式御宇八年十二月に列城宮にして崩御なり給ひしを繼射天皇二年十月此陵にかくし奉る日本紀延寶七年迄凡一千百七十四年歟

茅渚皇子の墓

茅渚皇子は片岡葦田墓大和國葛下郡にあり延喜式茅渚皇子は押坂彥人兄皇子の御子也敏達天皇の皇孫也釋日本紀

孝靈天皇の陵

俗にいはくせこの坂をのぼりて馬の瀬坂といふ
峰の垣戸といふ所にあり東のならひ一基ありし
は田畠となれりとなり

孝靈天皇は片丘馬坂陵大和國葛下郡にあり延喜式御宇
七十六年二月崩御なり給ひしを孝元天皇六年九月此
陵にかくし奉る日本紀延寶七年迄凡一千八百九十四年
歟

肩岡池

達磨寺長邊葦が池といふありこれらにや
肩岡池は推古天皇十五年にほりしと也日本紀

飯豐皇女墓

飯豐皇女は埴日臺大和國葛下郡にあり延喜式
顯宗天皇五年十一月崩し給ひき日本紀延寶七年迄凡一
千百九十一年歟

龍峯寺

當磨寺より北半里ばかり當世加守村といふ此所
其跡なるへし

龍峯寺又は掃守寺かもりといふいづれの御代の皇子にやま
し／＼けむ龍と化して雲に乗じて行方を知らず斷惡
修善の御ために寺を建龍峰寺と號し給ひけると也
藥師寺縁起

柿下人磨墳

柿下村のほとりに人磨の墳あり柿本寺とよふ草
室あり

柿下朝臣人磨は爰にして生れ給ひしより古墳ありと
村老はいひつたへ侍りきしかいひしかども袋草紙朝
野群載續世繼物語詞林採葉續本朝文粹などにもかの
朝臣の生所をかきもわかれず只播磨國明石浦の人
磨の古墳の碑銘曰人磨のさきは孝昭天皇の皇子天足
彥國押人命世々に綿々して敏達天皇の御宇にあたり
かの門邊に柿樹あり是よりなん柿下の氏を給ふと云
々おもふに敏達天皇は十市郡磐余幸玉宮にをはし
ましけると日本紀に見へたり葛下郡と十市郡は別郡
といへども其程遠くもあらざりければ此所や柿本の
氏を給ひける跡にも侍りなむ又の説は古今集灌頂に
いはく石見國に家名といふ人の後苑の柿樹より人磨

化生し給ひしより柿下の氏をぞ給はりけるかの朝臣
なん孝昭天皇より世々の末葉にて侍るよしかけり只
いつくの生れいづれのをはり所さだかならざると文
ともにも見へ侍る又或人大和國に人麿の古墳所かは
りて數ありさもあるまじき事にあらすとなりしかあ
れば添上郡葛下郡吉野郡にありけるも人麿の墳にこ
そとおもひ侍れ人麿の事はつたへを得ざりつればし
らずくはしくは此所の石文にあり

葛下郡神名帳十八座

延喜式

葛木倭文坐天羽雷命神社

片岡坐神社

長尾神社

石園坐多久虫玉神社二座

調田坐一事尼古神社

金村神社

葛木御縣神社

深溝神社

志都美神社

伊射奈岐神社

當麻山口神社

當麻都比古神社

大坂山口神社

葛木二上神社二座

火幡神社

和州舊跡幽考第九卷

忍海郡

角刺宮

忍海村をしのみにあり西に西辻村東に東辻村南に南花内村なとゝいふあり此忍海村や皇宮の跡にこそあらめ

角刺宮は人王二十三代清寧天皇五年正月崩御なり給ひて皇太子億計王と御弟弘計王と互に御位をゆづりあらそひ給ひしかは即位もあらす日を経たり御妹君にてをはします飯豊あらのゆめ青皇女忍海をしのみ角刺宮にして臨朝秉政し給ひてみづから忍海飯豊あらのゆめ青尊と名乗給ひき世に歌つくりてうたふ日本

やまとへに日本見まほしものは見欲をしのみ忍海をしのみのこのたかき名は角刺の宮

この歌の註は釋日本記によれり抑飯豊皇女は清寧天

皇三年七月角刺宮にして與夫はじめて侍りしが人にかたり給ひしは一たび女の道をしりにきなにの異なることかあらんその後交會の道おはしまささりけると日本なり或又其道もありけるとも

笛吹社附遊岡

ふえふきむらにあり

笛吹明神の社よりはわかの木をきりてみやこにたてまつりぬれは神司かんづかさ龜のうらをする事に侍りけるとかや奥義抄

藻藻草草吹笛の社の神は音にきく

遊岡や行歸るらん

笛吹池

もしほ草に大和國と云々

夫木集 笛吹の池の堤は遠く共 讀人不知

すくといふ名は忘さるらん

忍海郡神名帳三座延喜式

爲志神社

葛木坐火雷神社二座

和州舊跡幽考第九卷終

和州舊跡幽考第十卷

若宮社 御山村にあり

宇智郡

井上皇后陵 ふのいみ

吉野より半里はかり南御山村にあり

井上内親王は聖武天皇の姫宮にして孝謙天皇の御妹にてそまし／＼ける寶龜元年光仁天皇の皇妃にたへ給ふ此御腹にておはします他戸親王を皇太子にすへ給ひしか皇妃あしき御心あらはれて寶龜三年皇妃の位をとめ他戸親王の皇太子の位をしりぞけ同四年に大和國宇智郡沒官の宅にをしこめ給ひき同五年四月皇妃皇太子共にかくれさせ給ひしなり 續日本紀

寶龜五年より延寶七年迄凡九百六年歟

△延暦十九年井上内親王に皇后の位を贈り其墓を山陵と號すへき宣下あり勅使は從五位下葛井王なり 類聚

史國

若宮は雷神にてまします濫觴は井上内親王御著帶ながらながされをはしまして後に御産ありおのこ御子なればとて御名を雷神とぞ申きその御産の所は大岡郷小山にぞ侍るそれより産屋の峰とはいひけり雷神年經給ひて御母の皇后ならひに兄の他戸親王のながされ給ひし事などつたへきこしめしふかくうらみつよくいかり帝に御惱をかけ人民を害し給ひしよりなだめられなんとて神に祝ひして若宮と號し給ひき 靈安寺縁起

御靈社 みりやうしゃ

靈安寺にあり五條村より半里南其所を靈安寺村といふ

御靈社は井上皇后他戸親王の御いきとをりつよく上一人より下万民迄なやまし給ひしかば世中安たり扱こそ勅使を立いろ／＼なだめさせ給ひて終に御靈大明神とあがめられき御靈の社をまもる寺なればとて靈安寺とぞ申 靈安寺縁起

本社は御靈井上皇后東向

北脇は早良親王南向

南脇は他戸親王北向

本社三座若宮一座本地は准肥觀音聖觀音千手觀音如意輪觀音にして弘法大師のきざみて安置せられしより本地堂と號せり靈安寺縁起

△再興は人王百二代稱光院の御宇正長元年の秋兵火にかゝりて神社佛堂本地四佛の像も一時のけぶりとなるかの像は厨司にこめてひらかざればいかなる佛といふをしらず然ども北畠准三后の御靈大明神の記録せられたるにあらはれしより本地觀音の像を再營して安置し靈安寺ふたゝび成就せり靈安寺縁起

矢田畠笠辻

五條村より八町東今井村に笠辻堂ありしが十年ばかりさきにをのづから壞れてなくなりし也

矢田畠笠辻はむかし此宇智郡櫻井郷に武者所康成といふものあり幼少にして父にをくれ繼父にぞそでたられけるが知行すべき世帯の下司職など繼父にとられいとうらみふかゝりけり天慶五年九月二十二日の

夜玄のびやかに宿戸ふとどによりきて繼父を討しとおもひしがいかにかしたりけむたがへて母をぞ討たりけるいとかなくして亡母の菩提自身の懺悔ともなりねかしとて矢田寺の地藏尊に月毎にまうでゝなげくにかざりなし天曆年中康成重病にかゝりてをはりけり常くいけるものをころして業とし殺母の罪おもく侍りければ地獄にぞ落けるその炎煙の内に矢田寺の地藏尊まじり給ひて獄卒に康成をこひうけ給ふとおもひしより蘇生けりいとうれしくて猶矢田寺にまうづる事他念なし或曉矢田寺にまうでなんと出たちけるに櫻井のほとりに地藏尊來臨ましゝてけふより後遠く來る事なかれ我爰に來りて禮拜をうけんそのしるしぞかしとて御笠をかけをかれしより笠辻の名あり其後康成かみをろして終にたうとき往生をしたりけり矢田寺縁起天慶五年より延寶七年迄凡七百三十八年か

櫻井

笠辻より西八町ばかり須惠村の中程にあり井の横九尺堅五間ほど當世に残れり

櫻井寺 須惠村にあり

櫻井寺は天曆年中武者所康成が建立なり天文二十二
年鑄造の鐘の銘にくはしく見えたり

武智麻呂墓 字野村にあり

武智麻呂は後阿陀の墓大和國宇智郡にあり延喜式武智
麻呂は不比等の長男なり天平九年七月諸兄ならびに
男人をつかはして正一位をさづけ左大臣に任せられ
しがその日薨せられき續日本紀年五十八帝王編年天平九年より
延寶七年迄凡九百四十三年か

阿陀墓三基

一基は五條村より一里計良の方にあり俗に王の
墓といふ住川村すかうのほとりなり一基は五條村より
二里許東山なり芳野川より南の方に南阿陀村の
たつみにあり俗に王の墓といふ一基は五條村よ
り三十町計うしとらにあり俗に青墓と云一むか
しにもやなりけむ此墓より大小の劍あまたほり
出せし人あり其後祟りふかくなやみけるとぞよ

の常の墓にはあらずとおぼえ侍る三基何れと分
ちがたければ只名のみを左にあらはす

阿陀墓は贈太政大臣藤原朝臣良繼平城天皇祖父大和
國宇智郡にあり延喜式平城天皇の御母藤原乙牟漏の父
なり殘二基の墓は親王ならびに雷神などの塚にはあ
らずやあらためらるべし

阿多大野

類字名所に大和國とあり

萬葉眞葛原なひく秋風吹ことに

あたの大野の萩の花ちる

一字抄女郎花うしろめたくも見ゆるかな 顯季

あたの大野にたてりとをもへは

夫木秋風にをけはかつちる白露の家 宗

あたの大野にうつら鳴なり

をすて小爲手の山 所さだかならず

萬葉安太郎去小爲手の山の槇の葉も

久しく見ねは蘿こけむしにけり

信土山まつちやま

澄月歌枕曰或紀伊國に立^レ之萬葉集歌に木道入立眞土山と云々大和國の交際也今暫新古今集の詞にしたがひて大和國に入^レ之催馬樂註秘抄曰大和國紀伊の國境也

能宣朝臣大和赤打山あかつちやまちかくすみける女のもとに夜ふけてまかりて侍りけるにあはざりけるを恨侍けるに女のよめるとなん

新古今
たのめこし人をまつちの山風に

さ夜ふけしかは月もいりにき

角田川すみだ

範兼類聚に駿河國入^レ之但大和國信土山の邊に

有^レ之同名所枕歌

萬葉
白妙ににほふ信土の山川に

我馬難家戀らしも

内大野

八雲御抄もしほ草に大和國と云々澄月歌枕曰宇智郡にあるか

萬葉
玉きはる内の大野に馬なへて

夫木
霜さやく内の大野の冬枯に

あさふませ行駒なつむなり

行家

宇智郡神名帳十一座延喜式

宇智神社 荒木神社

阿陀比賣神社 二見神社

宮前露禰神社 火雷神社

高天岸野神社 落柿神社

高天山佐太雄神社 一尾背神社

丹生川神社

和州舊跡幽考第十卷終

和州舊跡幽考第十一卷

吉野郡

西南は紀伊國をさかひとし東は伊勢國につづく
凡大和一箇國は三つが二つ此郡なり

吉野山

芳野山は七高山の其一つなり拾芥あるひは金御嶽又は金峯山又は國軸山ともいへり抑吉野山は日藏上人の傳には天竺佛生國のたつみ闕ながら飛來りて此山となる袖中抄又もろこしの五臺山の岸の端かけて雲にのりて飛來るともいへり江中納言のみだけの御塔の御願文にもかくとこそ記されたれ又貞崇禪師はもろこしに金峯山とて金剛藏王菩薩の住おはせし山あり其山日本國に飛來りて金峯山となるといへり袖中抄
△貞觀元年の秋螟螽おほはねしといふ虫五穀をくひやぶる事たとへていふにもたらずしかあれば藤原朝臣山蔭滋岳

朝臣川人等宣旨をうけ給りてかの虫をはらひやるまつりをなすかの祭禮は清淨の地をえらふの舊例なれば芳野郡の高山にして是ををこなへり同五年二月にも芳野郡高山にして祭よし三代實錄に見えたり

萬葉

三芳野の山下風の寒けくに

爲は當や今宵も我獨ねん

信明家集
行年の越ては過ぬ吉野山

いく萬代のつもりなるらん

忠見家集
霞たつ吉野の山を越くれば

麓は春のとまりなりけり

堀川二郎
花と見て尋きつれば吉野山
大進

人はかりなる峯のしら雲

同
みつきの君か御代には吉野山
忠房

よし心見よ絶やしけると

遠島御歌合
山城のみつ野のまこもかり初に
基家

御吉野の山を戀わたる哉

建仁元年八月十五夜歌合
芳野山すゝ吹みたる秋風に
宮内卿

たれしのへとて有明の月

新撰和歌集

冬の夜は消るにしろしみよしの、御製

山の初雪いまそふるらし

後京極百番歌合
春は皆同じ櫻に成果て

雲こそなけれみよしの、山

拾玉
いかにして二つの山に家居せむ 慈鎮

同
人のすむやまとは花の國なれや
春は三吉野秋はをはずて

三吉野の山をはつせの山

壬二
ふしのねも匂ひはあらし吉野山

花の盛につもるしら雪

山家
木の下のたひねをすれば吉野山 西行

花のふすまをきする春風

寂然集
吉野山花咲ぬればあちきなく

心にかゝる峯のしら雲

北院御室御集
芳野山うき世の外にのかれ来て

なか／＼花に心とめつる

金御嶽

御かねが嵩^{たけ}又こがねの峰又御たけなどともよめり源氏物がたりにみだけさうじともかけり金峯山は皆黄金なり慈尊出世の時閻浮提の地にのべ敷なんとて藏王權現のまもらせ給ふと也^抄拾芥^抄むかし宮古の七條にはくうちありみだけにまうで、かなくづれを行て見れば金のやうにてありけりいとうれしくて袖につゝみて家にかへりはくにうちぬる程に七八千まひにぞなりける其比檢非違使なる人東大寺の佛つくらむとておほくのはくをもとめけるありそれがもとに行てかのはくを賣けりかぞへなんとてひろげぬれば細字にて金嶽／＼とこと／＼にかきつけたりいかなる事にかあなるとて帝に奏しければはくうちをめてせめごうしてとはせ給へばしか／＼とこたふわづかに十日ばかりありてぞ死ける薄^{はく}は金峯山にぞ返し給ひけるとなり^{宇治}拾遺^抄されば又聖武天皇の御宇に良辨僧正此山の金を得なんと金剛藏王にいのられしかども神是をゆるし給はずと釋書に見えたり^{萬葉}三吉野の御金嵩にひまなくそ雨はふるといふ時な^{略末}くそ雪はふるといふ略

方輿集

朝もよひ紀の川上を見渡せば

顯 昭

金御嶽に雪ふりにけり

夫木

神のますこかねの峯はのりとときし

信 實

鷲のみ山の跡とこそきけ

青垣山

さして所をいふべきにあらず或人よし野山の異

名ともいへりとなん

萬葉

ヤサリシ

安見知之我大君の神ながら神さひせすと芳野川瀧

津河内に高殿をたかしりましてのほりたち國見を

すればたゝなはる青垣山の山神のまつる御調と春

へには花かさしもち秋たては紅葉かさせりゆふ川

の神も大御食につかへまつると上瀬に鶉川をたて

て下瀬に小網さしわたし山川もよりてつかふる神

の御代かも

反歌

山川もよりてつかふる神ながら

瀧津河内に船出するかも

同
たゝ名つく青垣山のへたつれば

しは／＼君をこととはぬかも

同
吉野の宮は立名つく青垣隱

河なみの清き河内そ

耳我嶺

或人曰芳野の山の異名也八雲御抄に吉野にちか

きと云々もしほ草に又中山ともいふとあり

同
三芳野の耳我嶺に時なくそ

清見原天皇

雪はふりけるひまなくそ

吉野川

同
八雲刺出雲の子等か黒かみは

芳野の川の沖になつそふ

同
我をこか憤鼻にするつふれ石の

吉野の川に氷魚そかゝれるは

元真家集
吉野川おろす筏の折ことに

思ひもよらす波の心を

芳野川の河上は大臺が原といふ所也北山に越行道の娘が草といふなる所のはるかの方にし

て見たしにもおよぶ所にあらすまして人の通ふ所にもあらず只いとひろく葎萩などの高くしげり藤かづらはひおほひて淺澤などやうの水ありその中にいとふかくて巴が淵などいふ所ありとかや風だにふけばそのしげりの露落つもありて川の水累をなし北よりふけば熊野川の水をまし西よりふけば伊勢の宮川のながれをそへ東よりふけば芳野川の水かさめりとなり

大臺原

未勘
吉野川その水上を尋ねれば

むくらの雪萩の下露

宮川

山家集
瀧おつる吉野の奥の宮川の

むかしを見けん跡したはゝや

西 行

吉野川はみなもと大臺原より出て和田村鹽の葉村に來りてはながれいと細し此故に俗かの兩村を芳野川のみなもといへりあやまりなるべし鹽の葉村より西に流れ西川の瀧にて北にまがり

宮瀧より猶西に落て末は紀伊の海に入るなり
和田村より東の川の北に川上の投地藏と云あり

投地藏堂

抑投地藏尊は役優婆塞濟度利生のために金峯山に一千日籠りて生身の薩埵をいのり給ひしにまづ地藏菩薩の形にて地より涌出し給ひたりしを優婆塞の心に柔和忍辱の御かたちにてするゑの世の衆生いかでか利益かなふべしやとて地藏を掌にとりてなげられければ此所にとゝまらせ給ふと所につたへていへり又の説あり此時涌出の地藏尊は優婆塞の心になはざれば伯耆國大山へ飛さり給ふよし太平記に見えたり
此南に菊の岩屋あり古詠をもとめえず聖天の岩屋あり投地藏堂のはとりに南帝王の社あり

南帝王社

當社は後醍野天皇第七宮にぞおはします芳野小瀬村といふなる所にて崩御なり給ふその瀧川寺に御位牌あり白天王正聖佛とえりたり崩御の時の御製とて此寺にいひつたへたり

のかれきて身を奥山の柴の戸に

月も心をあはせてそすむ

蜻蛉小野

此ほとりに清明が瀧といふあり是は蜻蛉が瀧といふなるべきをあやまれるとおぼえ侍る猶おもふに蜻蛉もおなじ虫なれば文字をたがへきたりて清明が瀧とかけるにや蜻蛉の小野は大和國と類字名所集にあり

新後撰
しられしを霞にこめてかけろふの

爲家

小野の若草下にもゆとも

草庵集

をとにたてゝはや更にけり蜻蛉の

頓阿

小野の秋津の秋の初風

かけろふの小野又かたちの岡又かたちの小野又あきつの野邊などゝもよめり

蜻小野

萬葉

三芳野の蜻の小野にかるかやの

おもひみたれてぬるよしもかな

堀河太郎
三芳野のかたちの岡の女郎花

俊頼

たはれて露に心をかゝる哉

顯昭曰、蜻をばあきつと讀なり然るにあきつの小野とよみぬべきをかたちの小野とはかたぐそのいはれなしあきつとは蜻なり

秋津野

萬葉
芳野の宮に行幸の時柿本朝臣人麿

吉野の國の花散相秋津の野邊に宮ばしらふとしきませは百敷の大宮人は舟なべて朝川わたり船きはひ夕川わたり此川の絶る事なく此山の彌高良之珠水の激瀧たきの宮古は見れとあかぬかも

萬葉
芳野の飽津の小野の野上には略

同
三芳野の秋津の川の萬世に

たゆる事なく又かへり見ん

詞林採葉曰「蜻の小野かけろふの小野かたちの小野三訓なり然而秋津の小野といふべき歟其據は日本紀にあり」と見えたり

抑秋津の小野は雄略天皇四年よし野の宮に行幸なり

給ひて川上の小野にして狩人からしめ給ひみづか
ふも射給ひなんと待給ふに蛇飛來りて天皇の臂をく
らひしかばたち所に蜻蛉飛來りて蛇をくらひて飛さ
りき天皇いとよろこばせおはしまして群臣に勅して
蜻蛉をほめてうたよめとおほせ給ひしかどもよみて
奉る人なし天皇御口すさびに「さはまつと狹猪也わかた
たせま我立也たくふらに竹原あふかきつ蛇來也そのあ
ふを其蛇也あきつ羽のくひ蜻蛉也はふむしも昆虫也おほきみ
に大君也まつらふ謂社也なかくたち名形也をか置也あきつや
ま秋津島也とよみ給ひて蜻蛉をほめさせ給ひしより爰
の地を蜻蛉とぞ名づけゐる

此歌おほく前略してあらはす日本紀にくはしく
あり細字は釋日本紀によれるものなり

吉野皇居

此跡秋津の小野のほとりなるべし秋津の宮とよ
めり

芳野の宮いづれの御代に立給ひしにやしらず神武天
皇蘆原中津國をたいらげ給ひなんとて西の國より難
波につかせ給ひ河内國より射駒山を越なんとせさせ

給ふに長髓彦といふありけり櫛玉速日命を君とたと
へて天皇をふせぎ奉りしかば葛城を越紀伊國を経て
吉野に出させ給ひて御軍をとゝのへ給ひし程に行宮
の定てありけるにや其後代々の御門の皇居の有無あ
きらかならず然に應神天皇芳野の宮に行幸なり給ふ
には國栖人くすみ三寸を奉るとあり應神天皇已前に吉野の
宮とてありける事勿論なり又大泊瀬天皇吉野の宮に
行幸あり又皇極天皇吉野の宮に行幸なりて肆宴とよのちかりさこ
しめす又清見原天皇吉野の宮に行幸おはしまして
萬葉
よき人のよしとよく見てよしと云し 御 製

吉野よくみよよき人よくみつ

又元正天皇養老七年五月吉野の離宮に行幸の時笠朝
臣金村

同

美吉野の秋津の宮は神からや貴からん國からか見
まほしからん山川をさやけくすめりうへし神世ゆ
さためけりしも

反歌

同

山高み白木綿花におち瀧津

瀧の川内は見れとあかぬかも

萬葉
神代より吉野の宮にありかよひ

たかくしれるは山川をよみ

此兩首神世よりとよめり爰知ぬ神武天皇畝火の柏原宮におはしゝ時かの吉野に離宮をかまへて臨幸ありけるにより神代よりとは神武の御宇をさすなるべし葺不合尊の第四の御子なれば神代とよめるもことはりにや
詞林採葉

瀧御門

もし秋津の宮をよめるにやおもふに宮瀧は西にあり蜻蛉が瀧は東にありかさねてあきらかにせらるべし

萬葉
東の瀧の御門にさもらへと

昨日もけふも召事もなし

舍人等

同
一日には千度まいりし東の

同

瀧のみかたとを入かてぬとも

玉水瀧宮古

名寄歌枕に大和是も秋津の宮にや

萬葉

秋津の野邊の宮はしらふとしくませは略此山のいやたかゝらし玉水の瀧の宮古は見れとあかぬかも

人 丸

夫木
今は、や氷も解けぬ玉水の
光 朝

瀧の宮古は春めきぬらん

瀧浦

萬葉

吉野川河波高し多寸能浦乎不視歟成嘗戀布真國

もしは草曰瀧の浦と宗祇法師注たるものにあり名人のしたる事なれば不_レ及_二是非_一但又無_二不審_一にもあらずもしは瀧の裏と云心歟と云々

多藝津河内

歌枕に大和國と云々

萬葉
吉野川瀧津河内に高殿を
人 丸

高知ましてのほりたち

夫木
三芳野の瀧津河内の春風に
前中納言宰相

神代も聞ぬ色そみなきる

遊副河

仙覺抄にはくゆふ川吉野にある川の名なりか

萬葉 しくは遊川といふ是同事か

萬葉 山神のたつる御調と春へには花かさしもち秋たては紅葉かさせり遊川の神も大みけに仕へまつると上津瀬に鵜川をたてゝ下津瀬には小綱さしわたし山河もよりてつかふる神の御代かも

三船山

藏王堂の鳥居の東に見えたり

芳野の離宮に行幸ありし時

萬葉 瀧のうへの三船山より秋津邊に

同 瀧のうへの三船の山に居雲の
さなくわたるは誰喚兒鳥

つねにあらんとわかおもはななくに

西川瀧附大川

大瀧ともいふ萬葉集におほく瀧の歌あり又大川などいよめるも此ほとりにや顯注密勘にいはい

大川のべとは芳野川はおほきなればおほ川のべ

とよめるなり

萬葉 大瀧を過てなつみにそひてゐて

淨河瀬を見るかさやけき

同 今敷はみめやとおもひし三芳野の

大川余杼をけふ見つるかも

千五百番歌合 三芳野の大川野邊の藤波の

春もふかしと色に見すらん

家 隆

西川の瀧より佛が峰といふ坂を過ぬればふもとに蟬が瀧ながれ猶行て檜尾の茶屋それより三町ばかり過ぬれば夏箕川なり

夏箕川

萬葉 吉野なる夏實の川の河淀に

鴨を鳴なる山陰にして

湯 原 王

吉魚張

同 我宿の淺茅色つく吉魚張の

夏箕の上に時雨ふるらし

萬葉

吉魚張の夏身のうへの山を出て

家持

西をさしける月の影見ゆ

浪柴野

萬葉

我門の淺茅色つく吉魚張の

夫木

波柴の野の紅葉ちるらし

ふなはりの浪柴野の秋風に

定嗣

はやくよ渡る月のさやけさ

司馬野

八雲の御抄藻鹽草大和國と云々波柴野同所なる

べきか

萬葉

國栖等か若菜つむらん司馬の野の

しはく君をおもふ比かな

宮瀧

りうもんにまいるとて

後撰集

宮の瀧むへも名におひて聞えけり

法皇御製

おつる白淡の玉とひけは

山家集

瀬をはやみ宮瀧川を渡り行は

西行

心の底のすむ心地する

新六帖

なにかその波はかくれと宮瀧や

行家

鶺鴒のゐる石のうへそかくれぬ

爰に屏風岩とていと高くそばだてるいはほあり

銅錢百文をあたへぬればこ巖の頂上よりそこし

らぬ芳野川に飛入なり吉野の岩飛といふは是に

ぞ侍る清河原此ほとりにや

清川原

澄月歌枕曰清川原古詠不_レ限_二芳野_一不定一所の

名歟先達歌枕に以久木生_二清河原_一の歌立名所いひ

未勘國と云々今按是就_二萬葉集第九歌_一吉野篇に

入_レ之とあり

萬葉集第九

くるしくも暮行日かも吉野川

清河原を見れとあかなくに

同

毎年かくもみてしか三吉野の

清河内の瀧津しら波

日晩野 ひぐらし

亭子院宮瀧を御覽じにおはしましける御供に
つかうまつりて日ぐらし野といふ所をよめる
新勅撰
ひぐらし野行過ぬともかひもあらし 大納言昇

ひもとく妹も待しとおもへは

妹脊山

宮瀧の西上市村の東にあり吉野郡に詠し合する
古歌をもとめえず河海抄にはくいもせ山は紀
伊國に妹山背の山とて吉野川をへだてゝさしむ
かへる二の山あり又顯注密勘八雲御抄其外の文
どもにも紀伊國とあり

萬治二年の春飛鳥井雅章卿吉野まうでに
いもせ山をながめやりて

うき中のたか洞より芳野川

いもせの山をなかれ出らん

象小川 きさの

宮瀧よりさくら木の宮にまうづれば外象の橋を

うちわたり象の小川は櫻木の宮の前にながれ象
山は瀧高の上にそばてたり

萬葉
むかし見し象の小川を今見れば

いよ／＼きよくなりけるかも

夫木

芳野山青根か嶺に月すめは

知海

象の小川に玉そしつめる

櫻木宮

花のにしきも瀧のいともて織出したるやと艶
におぼえ侍りて

瀧の糸を花にうちかはて芳野山

雅章

にしき織なす櫻木の宮

象山 きさ

八雲御抄にはく象山象中山きさはちかき山と
もいふみよし野に近きといふ心なりきさは名所
にあらずと云々勅撰名所芳野郡と云々仙覺抄吉
野の山に象山ありと云々

萬葉

倭には鳴てか來らん呼兒鳥

高市黑人

象の中山よひそこゆなる

夫木

大和路に越へき道は絶にけり

行家

象の中山雪ふかくして

猪養山 うかみ やま

飯貝ともいふにや上市村の川むかひにありふな

はり山は本善寺の近き所にあり

萬葉

ふなはりのゐかひの山にふす鹿の

良女

妻よふこゑを聞かともしき

同

ふる雪はあはになふりそ吉隠の

穗皇子

猪養の岡の寒なるまゝに

本善寺

本善寺は親鸞上人八世蓮如上人の建立なり

芳野山心とまれる川つらに

蓮如上人

すみても見はや爰に飯貝

六田淀

萬葉

吾に聞目にはまた見ぬ吉野川

六田の淀をけふ見つるかも

續後拾遺集
櫻咲水分山に風吹は

大寄大武童家

六田の淀に雪つもりけり

六田のわたしの事にやありけんむかし吉野郊に藤太
主源太主とて二仙あり一とせ吉野川洪水にして船だ
にうかべえざりければ淨藏貴所いかでかわたりえな
んと杖をひき河のほとりにさまよひ給ひしが二仙來
りてたやすくわたしまいらせんとしばらく咒をと
なふれば神人大木をきりうかべたり仙と共に棹さして
貴所を渡しける書釋淨藏貴所は三善清行が第八の子母
は嵯峨天皇の孫女なり三國傳記又吉野川の渡し船は聖寶
僧正のはじめておき給ひしよりながくつたはりて絶
ず書釋

雙墓 ふたつみ

仲範のいはく今木野滑谷岡吉野川の北古勢の里
の南にあり玉林抄

雙墓は入鹿大臣今來に雙墓をつくりて一は父大臣の
墓として大陵とあがめ一は我墓として小陵といふ我
なくなれる後人を勞させる事をいとふおもひありぬ

るよりかくするにぞあるといひながらその墓をきづく歩役に上宮の民をつかひぬれば上宮大娘姫王いとなげきおはしまして蘇我臣國の政をほしいまゝにしいかで心のまゝに封民の勞をいとはすつかひけるぞや是よりうらみをむすび終にかれをほろぼし給ひなんの御心あり日本紀

今來寺いまき

つたへ聞今來寺又は石光寺といふなり此寺かすかに残りけるとなん

今來寺は蓮入法師伯耆國大山寺につとめ居られしが寛弘年中長谷寺にまうでゝ誓願を立て我來世の生所をしめし給へともりゐたり七夜の曉ひとりの比丘ま見えさせ給ひて是より西南九里さりと勝地ありそこにしてをこなひたらんにはかならず兜卒内宮とそに生をうけん夢さめていとうれしくて則かしこに行けり山高く地形ふかく人蹤絶て寺もなし只夢の事をたのみて樹の下にゐたりけるが其夜西方より光來りたりあやしやと翌日行て見るに大巖の上に石板ありて落葉埋苔いやくもへ猶上に生たりかの石面の散葉を拂ひ苔をの

ごひぬれば彌勒三尊像をえりつけたり人工のわざにあらす則精舎を建て年久しくをこなひて終に祥瑞ありてをはりをとりけり書釋

一坂といふ所の櫻一木道の行手にさかりなれば

三芳野や櫻一木に先見せて

雅章

山口しるく匂ふ春風

四手掛社しとかけの

四手かけの明神をおがみて

芳野山花のゆふしてかけまくも

雅章

かしこき神の心をそしる

四手かけより左四五町を経て水分山の跡あり

水分山

いつの代にやありけむ洪水にながれて當世は砂原なり

萬葉神さふる岩ねこしき疑敷三芳野の

水分山を見ればかなし

新後撰

三芳野の水分山の瀧津瀬も

末はひとつの流なりけり

壽證法師

比蘇寺

毗蘇寺釋曰比蘇寺釋曰書とかけり

比蘇寺又現光寺といへり額は栗天八一抄玉林當代たづ

ねしに此額なくなりし時代をしらすとなり推古天皇

三年四月沈水香なづかう淡路島にうかみよれりその大さ一圍

あり浦人沈水香をしらす只薪にまじへてくゆらかす

そのけふりいと遠くかほりける程にいとあやしみて

御みかどに奉りけり日本紀聖德太子是は沈水香木にて

その實は鶏舌のごとくその花は丁子そのあぶらは薫

陸なり水に沈みて久しきを沈水といひ水に入て久し

からぬを淺香と申と奏し給ひしかば御門みかどよろこびお

ぼしめして觀音の像をつくらせ吉野の比蘇寺にすへ

給ふに時々光明をはなち給ふとなり釋それより現光

寺の名あり玉林抄

△再興は弘安二年金峯山より聖人來りて再興あり西

大寺の興正菩薩戒法をすゝめて律院となりたり太子傳抄

やうく繁昌せしが又破壊して當代かすかにのこれ

り

四手掛より並木櫻つゝきて長岑を経て丈六山一

藏王堂又長岑の藥師堂あり

松山御茶屋

文祿三年二月二十五日豊臣幕下花の御ながめにたて

給ひし御茶屋の跡なり此時の御詠歌世にのこりて一

卷あり

是より多武峯に行通路あり

千本櫻

千本のさくらとてあまたあり

吹ませてふかきやいつれ吉野山

雅章

千本に匂ふ花の春風

日本が花七曲ななまがりの坂などを過行にもろ人櫻苗を

もとめ爰にうへて權現に奉る櫻三十本をうへ

させて

いつか又十といひつゝ三芳野の

我植置し花を來て見ん

大納言雅章

山の花園谷の櫻田ひたりにかくれ松右に山井な

どいふあり
新勅撰

三芳野の山井のつらゝ結へはや
藤原基俊

花の下ひもをそくとくらん

玉葉集
三芳野の峯の花蘭風吹は
入道太政大臣

麓にくもる春の夜の月

吉野山誰か植けん櫻田の
道助親王

ところ／＼の花のはしり穂

さかりなる花にかくれて名もしるく

たてるやいつこ三吉野の松

藤尾坂

俗に藤井坂といふ

文治元年十一月十七日源義經の妻しづか藤尾坂をくだり藏王堂に來りしを衆徒等見とがめてとらへけるよし東鑑に見えたり

關屋の花櫻嶽などいふ所あり

金鳥居

金鳥居高二丈五尺
一圍

かねの鳥居に書付けける

二王門

千載集
夢さめむ其曉を待程の
敦 光

闇をも照す法の灯

藏王堂

藏王堂南向なり本尊藏王二丈六尺狹侍の千手觀音二丈四尺彌勒二丈なるをすへたり役行者の遺像あり

四本櫻

四本の櫻に蹴鞠の興をおもひいでゝ

鞠の場にうつしうへなん三吉野の

金鳥居雅章

四本の櫻おもかけもなし

威徳天神社

威徳天神は菅丞相の靈なり日藏上人社をたてゝうつし奉られき抑當社の溜觴は日藏上人天慶四年八月一日金峯山の岩屋にして頓死せられしが威徳太政天の臨幸にあひ奉り神勅にしたがひてかの御住所にぞいたられける種々の神語のありての後汝本國にかへりてあまねく流布せよもし人我像をつくり我名を唱へて懇懃に尊重せば我かならず擁護せずはあらじ上人

金峯山にかへりて藏王權現にありし事どもかたり奉らる爰に滿徳天いまして上人につけらるゝかの太政天は十六萬八千の眷屬ありかれらが毒害はなほだしきは天下の善神もそれをとめえずと神語ましゝきくはしくは釋書に見えたり是よりして此社を建立せられけるとなり天慶四年より延寶七年まで凡七百三十九年か

△貞和五年正月十四日越後守師泰武藏守師直寄來たる所に帝は天川の奥賀名生の邊に落させ給ひしかばさらば焼拂へとて皇后卿相雲客の宿所に火をかけし程に貳丈五尺の金鳥居金剛力士の二階の門北野天神社七十二間の廻廊三十八所ならびに藏王堂一時のけふりとなる太平記

△堀川院寛治七年九月二十日金峯山の寶殿炎上帝王編年再興あり

△藏王權現に定朝が造進せし狛犬社殿の上に啖合て大床より落たりと盛衰記に見えたり

△金峯山の塔成就の供養承暦三年十一月と釋書にあり

金御嶽

金の御嶽は芳野山の異名にしてわかちては爰をこそいふならめ飛鳥井雅章卿爰にしてしはしなを夕へをのこせ入相の

かねの御嶽の花のひかりに
藏王堂より西に實城寺あり

實城寺

實城寺又は金輪寺ともいふ後醍醐天皇の皇后にさだめられ此御代にこそ北京と南朝とわかれて年號なども別にぞ侍る爰にして新葉和歌集などをえらび給ひ又天皇御手づから茶入十二をきざませ給ふ或は二十一つともいふそのかたち藥器にひとし世に金輪寺といふこれなり漆器といひながら勅作にて侍れは盆にのせ金輪寺あひしらひとて茶湯前もありとかや

藏王堂より一町ばかりを過て駄天山其東のかたに朝原あり

朝原

あしたのはら

續後拾遺集

芳野山霞立ぬるけふよりや

朝の原はわかなつむらん

吉水院

吉水院は源義經落人とならせ此院に入給ひしが衆徒心がはりせし程にしのび出て中院谷に御身をかくし給ふそれもかなひがたうして佐藤忠信をのこしをかれ靜も捨をき多武峯藤室十字坊にぞ入給ひける此院は豊臣幕下の花の御ながめにも旅館とさだめ給ひてけしきことなる寺のかまへにて侍るむかし後醍醐天皇爰に行幸なりて御枕ながら

花にねてよしや吉野の吉水の

枕の下に石はしるをと

吉水院の西に行て右の方に五臺寺又櫻本とて當

山の先達大峯修行の宿坊あり

佐抛明神社

さなき明神の山を御影山といふは天人の影う

つりしよりいふとかたり侍りしかば

さなきたにさなきの神の御影山

飛鳥井稚章

勝手社

うつろふ花に風もこそふけ

勝手明神は愛鬘命也天孫臨幸の時三十二神相そひてあまくだります次に護國後見にくださるゝ三十二神と云々愛鬘命は勝手大明神也又文治元年靜法樂の舞をまひし饗束ならびに源義經の鎧など寶藏におさまれり又後醍醐天皇賀名生の邊へ落させ給ふに勝手の宮の前を過おはしまさせけるが御馬よりおりさせ給ひて

憑かひなきにつけてもちかひてし

勝手の神の名こそおしけれ

師兼千首
三芳野やかつての宮の山鳥

神につかふる身もふりぬめり

袖振山

右に御影山左に袖振山此山の頂上を那良志山となんいふ天女舞しより袖振山の名あり然ども袖振山に付てはふるき文どもに説ぞ侍る

先範兼卿類聚にいはく未^{みつ}勘^{かん}國^{こく}或は對馬の國にあり或は大和國布留山なりと云々詞林採葉抄にいはくをとめらが袖ふる山とよめり此山のあり所分明ならず先達石山布留山を申なり萬葉集第十二卷に石上ふる川のとよめり尤より所あるものなり然共八雲御抄にいはく吉野にありと云々神女降臨の所誠に由來あるものなりといへり今猶芳野の袖振山とつゞける古詠をもとめえず只爰に神女降臨の事のみをあらはす本朝月令にいはく淨御原天皇吉野の宮にましゝて日暮琴を引給ひしにいと興ありけり俄に前の峯の下より雲氣たちまちに起り神女のかたちなる人髣髴として曲に應じてまひけり他人見る事をえず天の羽衣の袖を五度翻して河海抄

乙女子がをとめさびずもから玉を袂にまきてをとめさびずもとうたひける五節の舞の根源なり又袖振山といふも此時よりとぞ

勝手の宮より坤の谷に如意輪寺あり

如意輪寺

塔尾山如意輪寺は本尊如意輪觀音菩薩也藏王權現あ

り御厨子の扉に吉野より熊野迄の畫圖あり後醍醐天皇の宸筆の讀曰晴岫月前爲^ニ教主^ニ金峯嵐底現^ニ藏王^ニ斑荆禪客安居砌、縉素群焉滿^ニ願望^ニ慈風扇^ニ境四流渴、惑霧晴^ニ心六度差、碧樹集^ニ雲飛^ニ驚嶺^ニ黃金敷^ニ地契^ニ龍華、風月澄^ニ心文道祖、火雷宥^ニ忿法陀尊、日藏聖感瑞夢處、太政天爲^ニ教海^ニ繁、兩山梯峻古仙跡、四海船浮權化神、行積^ニ僧祇^ニ鑒^ニ末世^ニ威政鬼類縛^ニ其身^ニ、

後醍醐天皇陵

如意輪寺のうしろのかたにあり

後醍醐天皇南朝延元三年八月九日より御不豫の御事ありけるが次第におもくならせ給ひて終に同十八日丑尅に崩御なり給ひき藏王堂の良なる林の奥に圓丘たかくつきて北向に葬奉りき太平記楠正行御廟にまうで、討死の御暇乞など、なげき申て如意輪寺の過去帳に楠正行同正時同將監和田新發意同舍弟新兵衛同紀六左衛門子息二人野田四郎子息二人西川子息關地良圓

各留半座乘花臺 待我閻浮同行人

さきたゝはをくるゝ人を待やせん

ひとつ蓮のうちを残して

願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國と正行筆をとりてかきたりけるとぞ又

歸らしと兼て思へは梓弓

なき數にいる名をそとゝむる

となんかきつけゐるは戸びらにのこりて今にあり

椿谷椿山寺

椿山寺は日藏上人の修行の地なり上人は宮古の年

十二にしてかざりをおろし名づけて道賢法師といふ

其時延喜十六年二月也それよりして鹽害を絶して六

年の精脩を経られたり其時母君のやまひのおもきを

ほのきゝてとはすはえあるまじとて古郷にのぼり東

寺にして密教をならひ釋書其後芳野山に更に入て笹窟

に住給ひしと也釋書

布引櫻

布引の櫻は高根より谷の底までさきつゝきて見

え侍りぬ

布引もにしきと見えて芳野山

飛鳥井雅章

名にこえにけり花の一しほ

雨師夢違觀音堂

行幸をさせ給ひしに雨やまざりければ

此里は丹生の川上程ちかし

後醍醐天皇

いのらは晴よ五月雨の空

此所より一里ばかり川下に丹生大明神の社あり

觀音堂を行て西の谷に瀧櫻雲井櫻といふあり

瀧櫻

いかなれは水なき空の瀧櫻

大納言雅章

花の波立三吉野の山

雲井櫻

雲井櫻は名におひて高ねに見え侍りぬ

御階さへ思ひやられておなし名の

大納言雅章

雲井に花もみよしの春

中院谷

源義經身をかくされし谷なりうへに山ぶしがくれ龍がへしなどいふ岩あり爰は佐藤忠信が手にかゝりて横川の覺範の討れける所也又忠信ふせぎ矢射ける所は花矢倉といふ也

世尊寺

世尊寺は炎上の後形ばかりなる堂あり本尊は釋迦如來狹侍は阿難迦葉なり抑釋迦如來は欽明天皇十四年五月戊辰朔河内國泉郡茅渚海中に梵音いとひきて雷の聲にやたぐへなんうるはしく照かゝやく事日の色をあざむき侍るよし奏し奉る天皇あやしみおぼしめして溝邊直に勅して見せしめらるゝに直海に入て見ぬれば樟木のうかひて照かゝやくにぞありける則是をとりて奉りしかば佛つくりにおほせて佛像二はしらをぞつくらしめ給ふ今吉野寺に光をはなち給ふ樟木の像はなり日本紀欽明天皇十四年より延寶七年迄千百二十六年か

△鐘あり銘曰保延五年庚申十二月三日平朝臣忠盛と云々保延五年より延寶七年迄凡五百四十一年か此所は天竺靈鷲山にひとしき靈地にて侍るとかや

月清
鷲の山御法の庭にちる花を

後京極良經

よしのゝ嶺の嵐にぞ見る
鷲の尾のかたはらに丸の墳あり

子守社

籠守神は大宮三座住吉同躰なり一宮記炎上の後再興八十年前也

草根
吹はらへ山は芳野の秋霧に

子守かつても見えぬ神風

大納言雅章

三芳野の山ふところにおひたちて

子守の宮の花そことなる

御子守神

澄月歌枕に御子守神とかけりしからば子守同社と見えたり然ども神名帳に吉野水分神社みづのりとあり文字によらば別宮か一往爰にあらはすかさねてあきらかにせらるべし

清少納言
もろこひに今はなるらん御子守の
神のしるしはありとこそきけ
經家

新六帖

いかにして心の末をあらはさむ

衣笠内大臣

かけてちかひし御子守の神

子守の社を過て

高算上人遺像堂

高算上人は後白川院の御惱を加持したち所に妙をあらはす又二月一日の花供懺法は此上人のはじめられて今年に絶す

高城山^{たかき}

俗に城山といふ大塔宮のこもらせ給ふ所とかや又つゝじが岡遙谷も此所也忠信虚腹を爰にして

萬葉^{きり}けるとなん

三芳野の高城の山に白雲は

釋道觀

ゆきはゝかりて棚引て所見^み

拾玉^{高き}山ふかき谷こそあはれなれ

慈鎮

さならぬ人は音信もせず

躑躅岡

躑躅岡は名もしるく見え侍れば

折にあへは吉野の花もくれなゐの

大納言雅章

つゝしか岡の色にとられて

遙谷

はるか谷はふかき谷にて侍しも花にむもれぬるやうに見えぬれは

高ねより見れははるか谷の戸も

大納言雅章

花にとちたる三吉野の山

岩倉谷

岩倉山は宮古の東西南北にはかならずあり^{拾芥}しかあれども大和國は年久しく經ぬればにや其名によぶ山もしらず今芳野の皇居とて爰にのみのこれり古詠をもとのえず

金情大明神社

金情大明神の垂跡をしらず俗此山の金をまもらせ給ふ神なりといへり

是より一町ばかり過て蹴^{けり}拔の塔あり

安禪寺

飯高山安禪寺寶塔院本尊は一丈の藏王權現又役行者の遺像を安置せり

青根我峰

萬葉 安禪寺のうへなる山は青根我峰なり

三芳野の青根我峰の苦むしろ

堀川太郎 誰將織たてぬきなしに

さほ姫の遊ぶ所は奥山の

新撰和歌集 青根か峰の苔のむしろは

芳野川いはせの波による花や

青根か峰に消る白雲

安禪院より三町ばかり右に行て奥院

奥院四方正面堂は聖觀音菩薩不動明王愛染明王地藏菩薩其脇に藏王堂

苔清水

西行上人の庵室の跡として草室にかの遺像をすへ

たり

芳野の苔清水にて

山家集

淺くともよしや又汲人もあらし

我に事足山の井の水

未勘

とくくと落る岩間の苔清水

汲ほす程もなき住ゐかな

同

文治の年西行法師河内のひろかはといふ山寺にてわづらふ事ありと聞いていそぎつかはしたりしかばかぎりなくよろこびつかはして後すこし宜しとてとしのはての比京にのぼりてと申せし程に二月十六日になんかくれ侍りける彼上人先年にさくらの歌おほくよみける中に長秋詠藻
おなしくは花の下にて春死なん
西行

そのきさらきの望月の比

かくよみたりしをおかしく見給ひしことにつゐに二月十六日望の日をはりとげけること哀にありがたくおぼえてかきつけゐる

ねかひをきし花の下にてをはりけり 俊成

蓮のうへもたかはさらなん

西行櫻は此法師此山に三とせの門住みせし所なりとかたりしかば花ちりなはとよみしことのも此所ならんかし

花にいりておもひしられぬ吉野山

飛鳥井雅章

やかていてしといひしことのは

青折需といふなる所より道二つにわかれて左は西川の瀧への通路右は山上にのぼる道なり是より山上までは五里餘の道にて侍るとかや

薜嶽

あさみだけ

薜嶽に住おはせし良算上人は關東の人なり法花讀誦して身は水の淡よりもやくす命は朝露よりもかくこそおもはれけれ鬼神來りて果臝くはらを供じ天女ま見えき顔にあらはるゝ或人あやしやとゝひぬるはいかなればかくは笑給けるぞや上人垢穢の軀を捨て妙淨の階にのぼるよろこびずやはあらじといひはてゝぞをばりをとりける

釋書

萬葉
和射美能嶺行過て降雪の

うとみもなしとまうせその兒に

海峰寺

海峰寺此所をしらず廣恩法師の住居せしよししくはし
く釋書に見えたり

堂原寺

堂原寺此所をしらず昌泰四年八月天台の沙門吉野堂原寺のほとりにして仙術をえて天に飛行せしよし帝王編年紀に見えたり

△吉野山の麓に都藍尼といふ女仙あり金峰山は黄金の地にして藏王權現是をまもり給ひて女人をのぼらしめ給はず我女人ながら仙術をえたりいかでかのぼらずはあらんやとて大峯苦行の道にかゝる俄に神なり雨ふり風しきりにして通路をうしなへりそこにして杖をぞすてたりけるその杖枝葉をなし大木となる又咒をとなへて龍をよぶ龍來りぬればそれにうち乗て行しが爰にいたりて龍もすゝみえざれば都藍尼つぶやきながらいかりて巖をふみぬればくぼみ蹴ぬればやぶれてみちんになる龍は終に池にぞ入にき

釋書

し爰のほとりにや侍りなむしらす

是より山上大峯の秘所あまた所ありとかや人さ
らにかたりつたへざればましてしらす

蟻門渡ありのとなり

山家集

笛ふかみきりこすくさを朝立て

西行

なひき煩ふ蟻の門わたり

天川

長秋詠藻

吉野山花やちるらんあまの川

俊成

雲のつゝみをくつす白波

卒都婆

平等院の尊名かゝれたる卒都婆に紅葉のちりか
かりけるを見て花より外のとありけむ人ぞかし

山家集

とあはれにおぼえてよみける

哀とも

花見し嶺に名をとめて

西行

柗もろちそけふは共にちりける

山上

寺領千拾三石

山上藏王堂夫藏王權現は役優婆塞金峯山に一千日こ

もりて生身の薩埵をいのり給ひしに地藏尊の形まづ
地より湧出し給ふ是優婆塞の心になはぬよしあれ
ば地藏は伯耆の大山に飛さり給ひき其後大勢忿怒の
形をあらはし右の御手には三鈷をにぎり臂をいらゝ
げ左の御手には五指をもつて御腰をおさへ給ふ一睨
大にいかりて魔障降伏の相をしめし兩脚高くたれて
天地の經緯をあらはし給へり示現の貌よのつねの神
にかはり給へり太平記此時人王二十九代宣化天皇三年
にあたり優婆塞とし六十五なりならびに十五童子
涌出あり其八大童子を大峯にをくる其所は禪師宿多輪
宿玉東宿深
山水飲吹越七大童子をかづらきの峯にをくらるゝ是よ
り湧出の嶽とはいふ也西曼陀羅抄それより尊像を錦帳の
中に鎖され其湧出の體を秘せんがために優婆塞と天
曆の帝上村とをのゝ手づから二尊を作りそへられ三
尊を安置し奉給ふ惡愛をあいを六十餘州にしめして彼を是
し此を非し賞罰を三千世界にあらはして人を惱し物
を利しすべて神明權迹をたれて七千餘座の利生のあ
らたなるを論ずれば無二亦無三の靈驗なり太平記
△鐘あり鐘樓もなく堂の椽にすへ置たり其鐘の銘曰
遠江國佐野郡原田庄長福寺天慶六年七月二日と云々

延寶七年迄凡七百三十七年か

此所に二つの道あり南に向ふは大峯の通路西に行は天川の通路小篠へ一里ばかり

小篠

山家集 小篠のとまりと申所にて露しげかりければ
分きつる小篠の露にそほちつゝ

西行

ほしそわつらふ黒染の袖

篠宿

さゝのすくにて

山家集

庵さす草の枕に友なひて

西行

篠の露にも宿る月哉

小池宿

小池と申すくにて

同

いかにして梢の隙をもとめえて

西行

小池に今宵月のすむらん

へいちの宿

へいちと申すくにて月を見けるに梢の露のた

もとにかゝりければ

同

梢なる月も哀をおもふへし

西行

光にくして露のこほるゝ

古屋宿

ふる屋と申すくにて

山家集

神無月時雨ふる屋にすむ月は

西行

くもらぬ影もたのまれぬ哉

姨捨峰

をばすての嶺と申所の見わたされておもひな

しにや月ことに見えければ

山家集

姨捨はしなのならねといづくにも

西行

月すむ峯の名にこそ有けれ

拾遺愚草

三芳野や姨捨の山の春秋も

定家

ひとつにかすむ雪の明ほの

千種嶽

山家集
ちぐさのだけにて
分て行色のみならず梢さへ

西 行

ちぐさのたけは心そみけり

東屋峰

山家集
あづま屋と申所にて時雨の後月を見て
神無月時雨はるれば東屋の

西 行

峰にそ月はむねとすみける

屏風立

行者歸

ちごとまり
兒留

行者がへり兒留に續きたるすくなり春の山伏は
屏風立と申所を平にすぎん事をかたく思ひて行
者ちごのとまりにても思ひわづらふるなるべし
山家集
屏風にや心を立ておもひけん

行者はかへり兒はとまりぬ

西 行

三重瀧

三重の瀧おがみけるにたうとく覺て三業のつ
みもすゝがるゝ心地しければ

同
身につもることはの罪もあらはれて 西 行

心すみぬる三かさねの瀧

轉法輪嶽

轉法輪のだけと申所にて釋迦の説法の座のい
しと申所をおがみて

同
爰こそは法とかれたる所よと 西 行

聞さとりをもえつるけふ哉

釋迦嶽

釋迦嶽又轉法輪嶽とは同山異名にはあらずや釋迦の
嶽の濫觴をしらず

神仙

大峯の神仙と申所にて月を見てよめける

山家集

ふかき山に住ける月を見さりせば 西 行
おもひてもなき我身ならまし

笙窟

大峯の笙の岩屋にてよめり

金葉集

草の庵何露けしとおもひけむ

僧正行尊

もらぬ岩屋も袖はぬれけり

みだけの笙の岩屋にこもりてよめり

新古今

寂寞の莓の岩屋のしつけきに

日藏上人

涙の雨のふらぬ日そなき

みたけよりさうの岩屋へ参りたりけるに漏ぬ

岩屋もとありけむおりおもひ出られて

山家集

今宵こそ哀もあつき心地して

西 行

嵐の音をよ所に聞つれ

△笙岩屋は日藏上人こもり給ひし所也はじめは芳野

山椿山寺にをこなひる給けるが後は笙窟に入無言斷

食にして三七日をかぎり密供をぞ修せられけるが天

慶四年八月一日舌操氣塞終に息絶たりしかありしに

一人の和尚來り日藏をいざなひまづ藏王菩薩の金峰

山の淨土を見せしめしかのみならず日藏九九年月王
護の短札を給ふ又管丞相にま見え奉りてかの短札八
字の註釋をうけ給りしより道賢の舊名をあらため日
藏とぞ名をつかれける又地獄のやうなどを見せらる
るに鐵窟に人ありていはく我は是大日本國主金剛覺
大王の子なり管丞相配流のうらみふかく佛寺を焼有
情を害せり其重罪我身にうけてやるかたなし汝本國
にかへりて一萬の卒都婆をつくり供養して我苦患を
たすけよとの宣下をうけ給はる書又都卒内院を見め
ぐり聖衆の妓樂をきく盛衰終に十三日を経て蘇生し
たり其後かの都卒内院の樂を和朝につたへて見佛聞
法樂と號す又の説にかの樂はもろこしよりつたへぬ
る曲なりともいへり日藏上人は朱雀院の御子なり盛衰
記かの上人爰の岩屋にをこなひ給ひける比にやあり
けむ鬼神來りて手をつかねて申やう我人界にありし
時遺恨によりて鬼の身と成て四五百歳を経たり其か
たきの末々まで今根を斷たりかゝる心のつかすは極
樂又は天上にも生れなんものを無量億功の苦をうく
るかなしやといひもはてぬにほのほもえ出て山の奥
にぞ入ける其後上人はかのつみほろぶべき事どもさ

まゝにこそとぶらひ給ひけれ宇治拾遺

大峰

大峰にて

金葉

もろ共に哀とおもへ山櫻

僧正行尊

花より外にゑる人もなし

修行し侍りけるに大峯にて

玉葉

時雨ふる外山のするは晴やらて

僧正教範

雲のうへ行峯の月影

山上より原八十町をくだりぬれば蟠螂が岩屋を
見て泥川にいたる大峯修行の人の旅館なり

天川白飯寺

琵琶山白飯寺は役行者大峯の道をひらきなんとて先
此山にして靈驗をいのり給ひしに山に冷水湧ながれ
神靈圓光をかゝやかす廟には琵琶の響ありて人心の
迷雲を拂ひしより琵琶山と號せり其後弘法大師の千
日のをこなひには辯才天女現じ給ひしかばその尊像
をきざみ神雲をおさめられき今の本尊是なり弘法大

師伽藍造營より凡八百歳靈驗日々に威をまし利益夜
々に徳をぞあらはしける勸進帳

△好色の先達業平朝臣芳野の川上の石窟天川といふ
なる所にて入定ありと縁起に見え侍るよし河海抄に
あり廟といふは入定の地にや

丹生山

此山は下市村の西にあり丹生川はそれよりなが
れ出て芳野川に落ゆく

萬葉

斧とりて丹生の檜山の本こりきて機爾作二梶貫磯
榜回乍コギタミツシマ島つたひ見れ共あかす三吉野の瀧とゝろき
おつるしら波

草根

丹生の山水をたゝく川波も

月のかつらをきるかとそきく

同

ねをたえてきえぬたつ木もあれぬへし

水の金ほる丹生の柚山

名寄

五月雨に丹生の川瀬の柚くたし 俊

徳

ひかぬによするきさの山きは

丹生社

丹生明神一座あり延喜式神明帳に芳野郡丹生の川上神社とあれば尤一座と見えたり然ども三代實錄に大和國丹生川上七社に奉幣のよし見え侍るかさねてあきらかにせらるべし

△丹生社は罔象女神也伊弉並尊軻過槌のためにやかれて終給ひぬ其さりなんとし給ふの間に土神埴山姫および水神罔象女をうみ給ふ日本紀

△此社に雨を乞霖雨をやめさせ給へとの勅使をたてられし事古き文どもにあまた度見えたり

△人王四十代天武天皇白鳳四年に垂跡それより延寶七年迄凡九百七十四年か

△神武天皇の御宇に兄磯城といふ賊ありけるが軍を磐余のむらにそなへて道をふせぎし程にみかどの軍とをりぬべき道なし神武天皇こよひみづから天の神にいのりましゝぬれば瑞夢あり弟獵奏し奉るやまとの國磯城のむら又高尾張のむらに八十梟帥兼方曰人ありみかどゝふせぎたゝかひなんととおもふわれ天香山の土をとりて天平兼方曰瓮兼方曰供神物一之土器也として天津や

しる國津やしろをまつらんしかあらば賊をやすくしたかへむ天皇御夢のをしへにたがはざりし程に御心によろこび給ひて椎根津彦をおきなのかたちにつくり弟猪おとこを女おきなのすがたになして天香山の土をとりに來れすなはちふたりまかりしに賊軍どもかのすがたを見て大にわらひあれ見にくやといひて道をさりと通らせけり山にいたりて土をとりかへりぬその土にして八十平瓮天の手秋八十牧嚴瓮兼方曰天者例女器之義扶者玉篇排戰也云々可戰勝之象造于土器祭諸神之義也兼方曰嚴重之義瓮者土瓶也今世神今食新嘗祭等供神物陶器土器此因縁也凡嚴瓮者祭つくりて丹生の川上にのぼりまして天神地神をいはひまつり給ふ菟田川の朝原にしてちかひ給ふ我今八十瓮をもつて水もなしに兼方曰餉阿女をつくらん餉ことなりなば吾かならず天下をしがへなんすなはちつくり給ふにことなりぬ又嚴瓮を丹生の川にしづめんにもし魚の大小となく酔てながれん事たとへば彼の葉のうかびながれんごとくあらば吾かならず此國をさだめんとちかひ給ひて瓮を川にしづめさせ給ふに其口下にむかひしばらくありて魚みなうかび出にき椎根津彦うかべる魚を見てかくと奏し奉るに天皇大によろこび給ひて丹生の川上の五

百箇眞坂木をねこしにしてもろくの神をいはひ給ひしよりはじめて嚴食の置あり日本紀

天野丹生神

天野丹生都姫は天照太神也やまとの國丹生川の末にいます故に丹生都姫と號せり

國標

今一郷の名によぶなり

國標の翁は心いとすなほにして山の菓をとりくひ蝦蟇を煮てよきあちはひとおもひ名づけて毛瀾とぞいひける國標がすめる所はみやこの巽山おほくへだてて吉野の川上の峰さがしく谷ふかうして道いとせばくさがしかりければみやこにまうでくる事もまれにぞ侍る應神天皇十九年十月一日吉野の宮に行幸なり給ふには國標人三寸を奉りて歌うたふ

かしのふに所名よこすを横白也つくり造也よこすに持聞持聞白横也かめる釀也おほきみ也御酒うまらに也甘きこしもちて食也をせ飲也まろがち也丸父となんうたひをうたひをはりて口うちあふのきわら

へり又土毛を奉る日に歌うたひをはりて口うちあふのきわらふ是は國標がいにしの遺則なり是より參赴土毛奉りき其く日本紀にのものは菓あはくもら菌ならびに年魚のたぐひなり日本紀代々を経て淨見原天皇大伴皇子に襲れて芳野の奥の岩屋の中に御身をかくさせ給ひしには國栖の翁菓の御料にうぐひといふめる魚をそへて供御に奉りしかば朕帝位にのぼらば翁と供御とをめされなんとおぼしめされけるより此かた元日の御祝には國栖翁まいれり桐竹に鳳凰の裝束を給はりて舞けるとかや豐明五節にも此翁まいりて菓の御料にうぐひの魚を御祝に奉る殿上より國栖とめされば聲にて御こたへも申さず笛を吹てまいるなり此翁まいらぬには五節も始る事なしとなり盛衰記

遠津川芳野の國栖のいつしかと

つかへそまつる君の始に

賀名生

賀名生は天川の奥なり後醍醐天皇宮古を落させ給ひて御身をかくさせ給ふ所のよし太平記にくはし

銀嵩かねがたけ

銀がだけは南にして金か嶽は北にあり

賀名生の奥銀が嶽といふ山にして吉野の將軍の宮合戦のよし太平記に見えたり

十津川

十津川の温泉いせゆは縁起二通あり是をもとめえざれば濫觴をあらはさずむかし大塔二品親王山臥のかたちにておちさせ給ひて十津川に御着おはしまして竹原八郎入道の甥に戸野兵衛といひし人の家にしばらく入せ給ふよし太平記にくはしその末葉今の世にもあり現存六帖

遠津川芳野の國栖のいつしかと

つかへそまつる君の始に

夫木

三芳野の山のあなたの十津川の

公 朝

いつみの原も哀浮世を

湯原

湯原類字名所に大和國にあり十津川の温泉にこそ侍らめ爰を吹田といふにやしらす

吹田の温泉にて鶴の鳴を聞て類字名所玉葉集
湯の原に鳴慮たつはわかことく

大納言族人

妹にこふれや時わかす鳴

泉柚

八雲御抄に大和國とあり古詠に十津川の泉の原とあり是によりて一往しるすかさねてあきらかにせらるべし

壬二
柚人のくたす宮木も泉川

家 隆

白川殿七百首
霞なからも春はなかるゝ
日にそへて水も泉の柚川に

師 繼卿

宮木を流す五月雨の比

龍門寺

芳野郡宇陀郡の境にあり礎のみ

龍門寺は義淵僧正の構造なり釋書

龍門の瀧を見てよめる

古今
たちぬはぬ衣きし人もなき物を

伊 勢

何山姫の布さらすらん

ふぢ井のともなが龍門より給はりける歌の返事
によめるかの家の集にあり

名寄
雲と見え人まとはすは流出し

素性法師

龍の門より来る水かも

是は大和龍門寺の瀧にてよめるなり彼寺には仙
窟の洞ありむかし仙人住しより龍門の仙といひ
つたへたり顯注
密勘

弓ゆづるはの絃葉三井

八雲御抄に大和國にあり

吉野の宮に行幸し給ふ時

萬葉
いにしへにこふる鳥かも弓絃葉の 弓削皇子

三井の上より鳴わたりゆく

安騎野

仙覺抄大和國芳野山のかたにありと云々

萬葉
あきの野に宿る旅人うちなひき

いもねこしやもいにしへおもふに

東野あづまの

言塵集にいはく此東野は芳野の安騎の内と云々
藻鹽草に吾妻野安騎野同名あきのをのともよめ

萬葉
東野の煙のたちし所にて

寶治首
かへり見すれば月かたふきぬ

東野の露わけ衣はるゝと 敎 定

きつゝ都を戀ぬ日はなし

爲尹千首
吾妻野の空には雲の晴ぬれと

袖にしらるゝ萱か下露

御垣原

河海抄にいはく御垣原は名所ならね共御垣によ
せていふなり御かきの松ともよめり同事なり八

雲御抄勅撰名所藻鹽草大和國なり三芳野のみか

久安首
さが原とつゝけたりと云々

震たり雪も消ぬや御芳野の 顯 廣

千五百番
御垣か原に若なつみてん

春さぬと三垣か原は霞とも 釋 阿

猶雪さゆる御芳野の山

師兼千首
三芳野の山には雪も消々に

御垣か原そはや霞なる

大峰開基

夫大峯は役優婆塞はじめてひらき給ひしより年を経て中絶にたれば通路は只荆棘のとちぬる程に聖寶僧正いかでかゝる靈山を空しくせんやはとて更に開き給ひしなり釋書

△役小角又は役行者又は役優婆塞ともいふ大和國葛城上郡うづま弗原村の人にして高賀茂氏なり舒明天皇六年にうまれいまだ年わかくしてひろく學び佛法をたうとみ年三十二といひしにはがづらきの岩屋にとちこもり藤をきものとし松の葉をくひものとして孔雀明王の咒をとなへて五色の雲にのり仙宮にあそぶ二の鬼をさふらはせて水木をになはせなどしてつかふにしたがはせずといふ事なし一とせかづらきの岩橋をかけなんとしては一言主神をからめ箕面の瀧口に入ては龍樹大士と物かたらひなどせしたぐひ書なば紙もかさなりけんかし終に文武天皇大寶元年六月七日年六十八にして母君を鉢に入竹の葉を波にうかべ諸

共に海に入て後見え給はず爰に道昭法師もろこしにありし時新羅の山中にしてむらがれる虎にあひしがその中に役行者の後身の虎ありて詞を通せしとかや師鍊和尚は是をけづりて年代のたがひをそへられたり釋書西西纂纂抄抄されば三年に一度かづらき山とふじの峯へとは來り給ふておりくは人のあひ侍るとかやもろこしにては第三の仙人にておはするとなり水饒大寶元年より延寶七年迄凡九百七十九年か

吉野郡神名帳十座延喜式

吉野よしの水分神社 吉野山口神社

大名持神社 丹生川上神社

金峯神社のみだり 高井神社たかい

波寶神社は 波比賣神社はひ

川上鹿鹽神社 伊波多神社

和州舊跡幽考第十一卷終

和州舊跡幽考第十二卷

葛上郡

葛城

葛城は神武天皇二年高尾張邑舊事紀にに土蜘蛛あり身は短く手足はながくして只勇いさめり官軍かつらの網をもて終に殺しけり是より葛城の名あり日本紀

葛城山

金剛山同山異名

萬葉

青柳のかつらき山にたつ雲の

人 九

立てもゐても妹をしぞ思ふ

菅家百首

咲かけてそれとも見えす葛城の

花のよそなる峯のしら雲

堀川二郎百首

かつらきや木蔭に光る稻妻を

兼 昌

山伏のうつ火かところ見れ

廣田歌合

葛城や菅の葉しのき入ぬとも

僧 淨縁

うき名は猶や世にとまりなん

御集

さゆりはの葛城山の峯の月

後鳥羽院

暁かけて影をすゝしき

△齊明天皇元年五月龍にのりて虚空をかけるものあり貌唐人に以て青きあぶらきぬの笠をきけりかつらぎの嶽より出て生駒山に馳行午の時には住吉の松嶺の上より西に向ひて馳さりたり日本紀

△天武天皇九年二月葛城山に麟角あり角のもととは二枝にして末合て突あり突の上に毛生たり毛の長さ一寸則是を奉りけるとぞ日本紀 同 御宇白鳳十三年葛城に四足の鶏あり日本紀

金剛山

やまと河内の境なり

金剛山は天瓊矛のさきより滴潮こりて礫馭あまのころ盧島となる此のころしは則金剛山なり纂又の名は金剛峯又は縛はさき羅獨らど矛又は一乗峯西譽又は神祇寶山又は大日本日高見國といふ是は日神所化より此名あり葛城山記

花嚴經曰東北海中有一處名金剛山一從昔已來諸菩薩衆於中止住現有菩薩名曰法起一與其眷屬諸菩薩衆千二百人俱常其中而演說法云々是大和國の金剛山なり正統紀

△本堂は法起菩薩不動明王藏王權現の三尊役小角の刻み給ひしとなり正月三ヶ日大峯八大金剛童子に供物をそなへ葛城心經といふをこなひあり役行者自然涌現の十五童をわけて八大金剛童子は大峯に祠し七大童子はかづらきにをくられし也先第一經護童子は一乗嶽又第二福集童子は大福山又第三常行童子は金剛山又第四集飯童子は二上の岩屋又第五宿著童子は紅宿又第六禪前童子は船若嶽又第七羅網童子は釋迦留岳にしづまり給ふとなり西舉抄

△開山堂役行者の遺像あり六月七日に法事を修しその日護摩堂に柴燈の護摩あり役行者の傳は芳野郡の大峯の所にあらはす又本堂より漸はるかの坂中に朝原寺石寺などあり

一言主神

葛木坐一言主神社延喜式一言主神は孔雀明王と號す言

主社葛城の神ともいふ是なり抑一言主神は一説に大穴六道尊子味鋼高彥根尊本記雄略天皇四年天皇かづらぎ山に狩し給ふ時一言主神出て天皇とともに箭をはなち轡をならべてかりし給ふ日本紀古事記天皇大暎給ふて神を土佐國にうつし奉らるゝその後天平寶字八年從五位上高賀茂朝臣等奏して葛城山の東下高官岡上にむかへて鎮奉る本記土佐國にうつし給ふ義は信用せざるよし舊說傳れども既續日本紀にその説をあらはせり

△神階は貞觀元年正月廿七日葛城一言主神を從二位に叙せらるゝ三代實錄そのちをしらす

續古今集

君をいのる只一言の神の宮

加茂氏人

二心なきほどはしるらん

大木集

逢事をよるとや人も契るとて

顯昭

一言ぬしにねぎそかけつる

高天山 附高天寺

金剛山の半腹にあり又石見國に同名あり高天寺はかの初陽每朝と囀りて宿せし梅とて朽なが

らたてり又土蜘蛛と名にいはれしものゝ栖すみかとて岩穴
蒼生して残れりされば此人はつねに穴の中を栖とせ

り賤號を給はりて土蜘蛛とはいへり釋曰

萬葉集

葛城の高間の草野早しりて

さめさらましをいまそ略

高天彥神

仁明天皇承和六年大和國葛上郡從三位高天彥神を名
神とし給ふ續日本後紀

白鳥陵

或人曰葛城の根に白根明神ありなから村の際一
言主神はその上にあり兵庫村の西

日本武尊東夷をほろぼしてかへり給ひしが伊勢の能
褒野延喜式にして崩御なり給ふ御とし卅歲能褒野陵

に葬奉りし時白鳥と化し大和國をさして飛給ひしか
ば群臣棺をひらきて見奉りしに只明衣みぎのみあり又白
鳥は大和國琴彈原ことひらにとゞまらせ給ひしかばそこに陵
をつくれり更に白鳥飛て河内の國舊市邑にとゞまり
給ひしより陵をつくりて白鳥の三陵といへり然ども

終に天にかへり給ひしかば衣冠を葬奉りけり日本ま

ちくの説あり舊事紀には尾張國に薨云々太平記に
は尾張國に飛落給ひしより白鳥塚の名ありといへり

盛衰記には讃岐國に飛落白鳥の明神と顯給ふとあり

△仲哀天皇は日本武尊の第二の御子にておはしまし

き父王白鳥と化しさり給ふ朕しのび奉るにやむ時な

し只白鳥を陵のめぐりの池にかひなんそれを見つゝ

なぐさみなんとの勅言ありしかば國々より白鳥をさ

さげ奉りき日本紀

△仁德天皇六十年十月に白鳥の陵はもとより空しと

て陵守に役よはろ丁を宛給ひしかば陵のうちより白鹿と化

しさり給ひしほどにいとあやしくいとをそれおはし

類聚國史

琴彈山

澄月歌枕曰丹後國に琴引濱又琴引の松は別國琴

引の山いづれの國にやと云々日本紀に琴引の原

大和國と見へ侍れば一往こゝにあらはす

六帖 いくにかしらべの聲の絶ぬらん

琴引山のをとのきこえぬ

高丘宮

帝王編年に曰く葛上郡村老申一言主の社のほとり

人皇二代綏靖天皇元年正月都を葛城にうつされ高丘宮と名づけ給ふ日本紀

高宮廟

續日本紀に曰くかづらき山の東の下高宮岡上に一言主の神をいはひ奉るよし見えたり

皇極天皇元年蘇我の大臣蝦夷あまがし祖廟をかづらきの高宮に立けるとなり日本紀

葛城寺

村老申寺村その跡なり

葛城寺又は妙安寺ともいふ聖德太子御建立の後蘇我葛木臣に給はりけると平氏傳に見えたり

△葛城尼寺の彌勒銅像は天平年中寺の前南の原に悲痛の聲聞えしかばこゑにしたがひてたづねしに盗人かの彌勒の像をとりきたりてやぶる程に像聲をたて

給ふにぞありけり終に寺にかへし入奉りき書釋

室秋津島宮

古事紀曰葛城室秋津宮帝王編年曰葛城の上の郡今の掖上池上ひきかみ池南田中なり今の室村その跡なり

寺村より乾にして川の東

人皇六代孝安天皇二年十月都を室地にうつされて秋津島の宮と名づけ給ひき日本紀又葛城宮ともいふ古事記

掖上池

推古天皇二十一年この池をほりしとなり日本紀

玉手丘上陵

玉手村この所なり室村より乾にして川の東

孝安天皇の玉手の丘上陵は大和國葛上郡にあり延喜式御宇百二十年正月に崩御なり給ひき日本紀

茅原村

玉手村の乾にして川の東

茅原村は役小角の誕生の地なりくはしくは芳野郡に

あらはす

掖上池心宮

村老申今の御所村なり茅原ちほらの南にして川の西帝

王編年曰葛上郡古事記曰葛城掖上宮

人皇五代孝昭天皇元年都を掖上にうつしまして池心宮と名づけ給ひ日本紀

孝昭天皇陵

所さだかならず

孝昭天皇の掖上博多山上陵は大和國葛上郡にあり
延喜式即位八十三年八月に崩御なり給ひて孝安天皇三十八年八月にこの山陵にかくし奉る日本紀

掖上噺間岳

ひきがみほゝまのをか

所さだかならずかさねてあきらかにたづねらるべし

神武天皇三十一年四月天皇掖上噺間岳にのぼり給ひて國の狀を見めぐらし内木綿の眞迹國まきわたのまことくにいへども蜻蛉かげろうの譬たとへ帖のごとしと宣しより秋津國の名あり譬は尻なり帖は掌なり西は額の方東は腹の方南北は兩羽なり

釋日本紀

雲櫛社

所しらす

雲櫛社は倭國葛上郡にあり下照姬命也大己貴神の兒味鉏高彥根神妹也舊事紀

捨篠社

號高鴨社所しらす

捨篠社は味鉏高彥根神倭國葛上郡高鴨神也舊事紀又大葉刈劔又は神戸劔ともいふ此劔味鉏高彥根の神の帶給ふ劔なり此劔大和國高鴨社に納めるか釋日本紀

御年神社

所しらす

葛木御歳の神社延喜式大己貴命兒御年神なり一宮記

△神階貞觀元年正月二十七日從一位に奉られしなり三代實錄

巨勢山

倭名類聚曰高市郡又藻鹽草に葛上郡とあり巨勢村葛城上郡の西にありて高市郡の境にちかし大寶元年辛丑秋九月太上天皇幸三子紀伊國一時の

萬葉集 歌

巨勢山のつら／＼椿つら／＼に 坂門人足

見つゝおもふな許湍こぞの春野を

新六帖 霞たつこせの春野に鳴雉子

光 俊

いつかありかを人にしらるゝ

巨勢川

藻鹽草

はねかつらいまするいもをうらわかみ

うちこせ川の音のさやけさ

をあきか原

千五百番歌合

駒なめてこせの春野を朝ゆけは

をあきか原にさゝす鳴なり

菅原伏見

俗に伏見村といふ

月清集

春の色も遠さかる也すか原や

後京極良經

伏見にみゆる小初瀬の山

拾玉集

初瀬山かねの音さへすか原や

慈 鎮

伏見の夢はまたよふかきに

壬二

なかめつゝ夕こえくれは初瀬山

家 隆

師兼千首

小初瀬の山はそれとも見えぬまで

伏見のくれに立かすみかな

千葉屋城

千葉屋城東條谷など金剛山にありて河内國のうちなればしるさず太平記にくはしく見えたり

葛上郡神名帳十七座

延喜式

鴨都波しもつかのなみやへ八重事代主命神社二座

葛木御歳神社

葛木坐一言主神社

多太神社

長柄神社

巨勢山口神社

葛木水分神社

鴨山口神社

大穴持神社

葛木大重神社

高天彦神社

大倉比賣神社

高鴨阿治須岐詫彦根命神社四座

和州舊跡幽考第十二卷終

和州舊跡幽考第十三卷

城上郡

磯城郡しきの日本しきの續日本紀延喜式しきの式郡大安寺資財帳

穴師社

鳥井は大道にあり社頭ははるか東に立給ふ穴師社は天皇の始天くたり來り給ふの時護齋鏡は三面子鈴すず一合を御身にそへさせ給ふその一つの鏡は天照太神の御靈として天懸神と御名をあげ一つの鏡は天照太神の前御靈として國懸神と御名を申奉る今紀伊國名草宮にあがめうやまひ申大神也一つの鏡ならびに子鈴は天皇御食津神朝夕の御食夜護日護齋奉る今卷向の穴師社にいます大神也釋日本紀

山陵

此ほとり十町ばかりの内に陵六七基ありそれが中に俗に王の墓とよぶ所あり又くらかけ山など

とかたりつたふるありいづれとわからがたければ名のみ左にあらはす

崇神天皇陵

人皇十代崇神天皇は山邊道まがりの勾岡上陵古事記山邊道上陵ともいふ大和國城上郡にあり延喜式御宇六十八年十二月崩御なり給ふ御年百二十歳日本紀又古事記御とし百六十八歳延寶七年迄凡一千百九年か

景行天皇陵

人皇十二代景行天皇は山邊道上陵大和國城上郡にあり延喜式御宇六十年十一月に近江國高穗宮にして崩御なり給ふ御年百六歳又古事記に百三十七歳又正統錄に百四十一歳とあり成務天皇二年十一月にこの陵にかくし奉る日本紀延寶七年迄凡一千五百五十年か

舒明天皇陵

舒明天皇は御宇十三年九月に崩御なり給ひしを皇極天皇元年十二月に高市郡の滑谷岡なみののぼろのにはうぶり奉りて同御宇二年九月に押坂陵にあらため葬りき押坂内陵

ともいふ日本紀大和國城上郡にあり延喜式撰集鈔通要に
此陵は添上郡内山とありいかいとそおほえ侍る

田村皇女墓

田村皇女は大和國城上郡舒明天皇陵の内に葬る
延喜式敏達天皇の皇女糠手姫皇女とも申奉りき

大伴皇女墓

伴皇女押坂陵大和國城上郡にあり延喜式

忍坂山

萬葉隠來の長谷の山は青幡の忍坂山は走り出のよろし
き山の出立の妙山ぞ新らしき山のあれまをしも
藻鹽草倭國也宗祇法師忍坂山と點したり

鏡女王墓

鏡女王は押坂陵大和國城上郡にあり延喜式此ほとり
に十市のなにがしの出城の跡といひつたふる所あり

釜口寺

寺領百石

穴師の大道より十五六町ひがし沙石集に鎌口山
寺とかけり

釜口山長岳寺金剛身院は弘法大師の開基也出書をし
らす

此寺の紅葉を見てめしつれられし小法師あるじ
の馬の口にとりつきて

沙石鎌口こかれて見ゆる紅葉かな

といひかければ阿闍梨
なへての世にはあらしとそおもふ

痛背川

あなし水上は三輪山痛背山のあいだより出て西になが
れ末は北に行

萬葉世の中のをとめにしあらば我わたる人
痛背の川を渡りかねめや

同巻向の痛足の川の行水の
家隆

壬二横向のゆつきか嵩は雲さえて
絶ることなくまたかへり見ん

あなし河波朝水けり

痛足山

仙覺抄大和國云々延喜式に穴師ともかけり

萬葉
纏向の痛足の山に雲あつゝ

雨はふれともぬれつゝそ來る

遠島御歌合
風むかふ檜原の時雨かきくらし

基 俊

あなしの嵩にかゝる村雨

顯住密勘曰大和國にある山也横向の山ともいふ
あなしの山ともいふさてかく横向のあなしとよ
み續くるなり又二の山をとりあはせていふは常
の事也かづらきやたかまの山さらしなや城捨山
かゝる事かずしらず神樂註秘云まきもこは大和
國の山の名也あなし山も其あたり也穴師山の頂
に十市のなにがしの城跡ありそのほとりに藤と
いふ所は桃尾の瀧の水上なり

箸墓

大道の西のほとり俗に箸中はしなかの墳といふ則箸中村
にあり

箸墓の濫觴は崇神天皇十年天皇姑こはやまとと倭迹今日百ひも襲姫そひめ

命に大物主神かよひ給ひしが晝は見えず夜のみきた

らせ給ひき姫かの夫にいふやう君常にかねれば晝

は見え給はずしばらくといまりまして美麗うつくしみづかた威像を見

ん事ををもふ大神我あした汝の櫛笥にゐなん我かた

ちにおどろく事なかれ姫心のうちにあやしとおもひ

ながら明るをまちて櫛笥を見ぬればうつくしき小蛇

あり只衣の紐のごとし則おどろきさけぶの時大神忽

に人の形となり汝しのびずして我にはち見せつ我又

汝に見せんとて虚おぼぞろ虚をふみ御諸山にのぼり給ひし也

姫いとくやしくおもひて箸もて陰をつきて命なくな

りにたれば則大市に葬りきこれより人箸の墓とはい

ふなりこの墓者晝は人こぞりてきづき夜になりぬれ

ば神の作り給ふしかあれば大坂山の石をはこび山よ

り墓迄人民相踵手たじまし遞傳て運びき時の人歌うたふ日本紀

をほさかに大坂大阪つき也築也のほれる昇也いしむらを石村た

こしに每手運こさま不越こしがてんかも難越

緒環墓

大道の東のほとりわづかにかたばかり残りて緒
環墓といふ箸巽の墓にさしむかふ

緒環墓の濫觴は大己貴神妻をもとめ給なんと天羽車にめして虚空をかけり節渡縣せとわさぎにおりひそかに大胸祇おほむちかきのむすめ活玉依姫に通ひ給ひしがこの通路を人のしる所にあらざりけり其女はじめて孕たり父母あやしみ誰人の通ひ來けるにや女神人ありて屋上より通ひ給ふしかあれば苧玉卷おだまきに針をつけその裳すそをさして跡をしたひ行に鑰の孔より出て節渡山を経て吉野山に入三諸山にとまりけりその糸の三丸残しより三輪山と號せり舊事紀

纏向珠城宮

帝王編年曰此宮の跡は城上郡今の纏向河の北の里の西の田中云々俗この田の中を長者の屋敷といふ緒玉卷墓のほとりなり

纏向珠城宮は垂仁天皇二年十月更に纏向に都をつく

り給ひて珠城宮といふ日本記

又師木玉垣宮古事記

長秋詠藻

まきもくの玉きの宮に雪ふれは

さらにむかしの朝をてしる

珠城山

夫木

里人のつたふ岩ぬの道たえて

たまきの山は雪ふりにけり

實伊

纏向山

あなし

痛足同山なり

卷向の山邊ひゝきて行水の

みなはの如し世の人我は

人丸

久安百首
槇向のあなしの山の鶯は

今いくかとそ春を待らん

季通

卷向川

痛足川おなじながれ

痛足川河波たちぬ卷目の

由槻我嵩に雲もたてゐらし

黒玉の夜さりくれば卷向の

川音高しもあらしかも

人丸

檜原

痛足山の南にして三輪山の西につゞけり

萬葉
卷向の檜原にたてる春霞 人 丸

くれし思ははなつみこめやも

雲葉
夜もすから何を時雨のそめつらん 覺 性

檜原の山の峯の推柴

同行河の過行人の手をらねは 人 丸

うらふれたてり三輪の檜原は

纏向日代宮

帝王編年に城上郡今の卷向の檜村これ也

纏向日代宮は景行天皇四年十一月美濃國より還幸な

りて更纏向を都とし給ひて日代宮といへり 日本 同御

宇五十八年二月近江國志賀に三とせおはしましき

それを高穴穗宮と申日本 紀

王二
よ所に見しふるき梢の跡もなし 家 隆

檜原の宮の秋の夕霧

豊受氣太神御鎮座地

豊受氣大神しばし檜原に御鎮座の跡といふ所侍れど

も出書をしらす

三輪山

痛足山の南につゞけり

三輪 三室 神南火 同山也

神岳山とも點あり詞林採葉抄

神樂註秘抄曰三室とは神ノ社也

萬葉
三輪山をしかもかくすか雲たにも

心あらなんかくさふへしや

同
三諸つく三輪山見ればこもり江の

初瀬の檜原おもほゆるかも

同
みてくらを檜より出て水蓼の穂積にいたり鳥網張

坂手を過り石はしの甘南備山に朝宮につかへまつ

りてよしのへといますみればむかしおもほゆ

反歌

同
月も日もかはり行とも久にふる

三諸の山のとつ宮地

同
神山の山へに眞蘇木綿短木綿

かくのみゆへになかく思き

同
八隅知之我大君のゆふされはめし給へらしあけく

れはとひ給へらし神岳の山の紅葉をけふもかも略
元眞家集
けふよりは霞山邊に立のほる

三輪の古里ほのかにぞ見る

敦忠家集
三輪山のかひなかりけり我宿の

いり江の松はきりやしてまし

内裏名所
花の色に猶折しらぬかさしかな 定 家

三輪の檜原の春の夕くれ

草履集
祈こし道こそかへれ初瀬河

はやくゑるしの三輪の杉村

同
三むろ山をろちにつけしをたまきの

末のちきりそ絶てやみぬる

萬葉
味酒の三輪の祝の山てらす 長屋王

秋の紅葉のちらましをしも

此五文字に三訓あり味酒味酒味酒也崇神天皇の

御製宇麻作階游和能とあそばされしを證とする

にうまさかといふべきものを字訓にまかせてあ

ちさけ混俗か凡酒をみわといふ事神のつくりは

じめ給ひしゆへか右は詞林採葉にながくとし
るされ侍る

神岳山

三輪山同山也神岳山詞林採葉に點あり

登神岳山部宿禰赤人作歌一首并短歌

萬葉
三諸の神名備山に五百枝刺繁生者都賀の樹の彌繼

嗣爾玉かつら絶る事なくありつゝもやます通はん

あすかのふるき京師略

反歌

同
明日香河川よとさらす立霧の

おもひすくへき戀にあらなくに

同
神岡之山之柁をけふもかもとひ給はまし略

神山

同
神山の山下響行水の

水尾たえすは後も吾妻

澄月今案云此歌就三和訓一載三于三輪山雖然後

頼朝臣神山にまゆふのぬさをひきかけてとらす

や花のさかりなるらんと取詠似取萬葉集然

則若有_二神山之和訓_一歟可_二尋決_一云々俊賴朝臣の歌は文治三年貴船の歌合に見えたり

三垣山 附神邊山

萬葉

三諸之神邊山爾立向三垣の山に秋萩の妻を卷_{まか}六跡_{むす}朝月夜明卷_{あき}鶯視足_{うしひき}日本_にの山響令動喚立鳴毛 人丸

神邊山

神邊山右の歌にかみなび山と點あり澄月歌枕曰神南備山也今按神之邊山可_レ和歟是但神南備山之依_ニ反本_ニ也但先達歌枕に神南備山の外に無_ニ神邊山_一云云神邊山就_ニ文字_一異一往分云歟云々

三輪川

長谷川おなじながれなり三輪崎佐野渡もこの河なり

萬葉

暮木去蛙なくなり三和川の

清瀬音をきくはしよしも

壬二

三輪の山川邊もいまや夏のよの

家隆

しるしの杉

みしかゆふかけ御祓涼しも

萬葉

三輪の山麓めぐりの横霞

仲正

しるしの杉のこれなくしそ

古今

我庵は三輪の山本戀しくは

讀人不知

とふらひきませ杉立る門

永祿家集

三輪の山尋て行かん春霞

しるしの杉は立なかくしそ

三輪の山をたづね又しるしの杉をよめる根源はむかし伊勢國奄藝_{あまぎ}の郡に侍りける人深山に入て鹿を待ける程に風吹雨ふりけしきたいならずして來ものあり形くろくして長高し目はてれるほしのごとくし獵師これを射あてつ血のあとにつきてたづねいたるに遙なる山中にすこしはなれて野中に塚あり其中にいれりその塚のまへに神女ありて此獵師をまねくすなはち弓に箭をはげてすゝみよる神女おそろゝけしきなくていはく汝が射たりける物は此塚にすむ鬼也我この鬼にとられて年來此塚にすめり汝此鬼を射ころ

すべしといへりしかば柴をかりその塚の口に入て火を附て焼ころしつその後此神女を具して家にかへり又相住事三年なるに獵師富さかへぬ兒一人をうましめたり其時此男白地あかじにあるきけりそのまに女うせぬ泣かなしみてたづね行ど行方をしらす又兒もうせぬいよ／＼かなしむに此女常にゐたりける所を見るに三輪の山もと杉たてる門とかき附たり是によりて大和國にたづね入て三輪の明神の社に參て此女にあふべきよしを祈申程に其社の御戸をおし開て見え給ふ兒も見えたり此男の心ざしの切なる事をみてともにちかひて神になれりと見えたりこれによりてその神の祭をば伊勢國あふぎの郡の人のおこなふ也それよりしるしの杉とはいふなる謠に云鬼に神とらるゝとはこれなり顯註 密勘

三輪神社

社領百七十四石九斗八升

一の鳥居二の鳥居、樓門、寶倉、拜殿などはあれども社頭は侍らず

當社は大神大物主神社神名帳舊事紀曰大己貴神社はやまとの國城上郡大三輪神なり嫡后は須勢理姫神

と云々神光海あまのうみをてらしうかび來るものありおほかなむぢの神とひたまはく汝は誰ぞやこたへて申吾は是汝の幸魂さきたま奇魂きたまなり大己貴神の給はく吾幸魂奇魂今はいづくにかすみなんやこたへて申吾日本國の三諸山にすみなんとおもふ故に則宮をかしこにいとなみ住しめ給ひき日本又崇神天皇七年倭迹今日百襲姫命に大物主神かみ著給ひて告あり更に御夢に我は是大物主神なり我兒太田々根子をして我をまつらしめよかくありしより太田々根子命を神主としまつらしめ給ひつ太田々根子命は大三輪君等が遠祖なりくはしくは日本紀にあり毋祭の日は茅の葉をみつくりて岩ほのうへに置てそれをまつるなり社のおはせぬあやしとて里人どもあつまりて作りたりければ鳥百千來りてつゞきやりふみこぼちてその木どもをばをの／＼くはへて行きりにけりその後神のちかひとしりてつくらざりしとなり典義抄抑大己貴神は日本紀曰素戔鳴尊奇稻田姫とあひ共に遊合ありて生ます兒なりしかれども次の一書に素戔鳴尊の五世の孫大己貴尊といへり六世の孫ともあり

古事記ウ檢

須佐之男命

八島七奴美神やしましぬみの母ハハ櫛稻田比賣

布波能母遲久奴須奴神

母木花知流比賣

深淵之水夜禮花神

母阿比賣

游美豆奴神

母天之都度閉知泥上神

天之冬衣神

母布帝耳上神

大國主神

母刺國若比賣

亦名大穴牟遲神亦名葦原色許男神亦名八千矛神亦名宇都志國玉神并有並八名五名舊事紀以上又大物主神又國造大穴牟遲大國玉神

一神階は貞觀元年二月正一位をさづけ奉りき三代實錄

杉社

夫木
もしほ草に大和國云々

今つくる三輪のはふりか杉社

鎌倉右大臣

過にしことはとほすともよし

三輪若宮

若宮社は太田々根子命とも又少彥名命とも後の人添削あるべし

大御輪寺

三輪の神の近き所にあり

大御輪寺は慶圓法師の開基といへり傳は釋書十二卷に見え侍れども開基のよし見えず又垂仁天皇の御宇かとよ三輪明神の通はせ給ひし女いくほどなくして子をうめりその子十歳ばかりまで常の人のごとくにて何の奇特も見えざりしがある時博覽の人ありてかけまくもかたじけなき明神の御子にておはしますよしいひふるゝによりて大御輪寺の丑とらのすみに入定し給ふ末代に奇特を見せんとて敷板に御足の跡をのこし給ふ其跡今にあたゝかなり太子傳之撰集抄所にもかくぞいひつたへける

天照太神御鎮座所

此所は三輪明神の奥にあり

人皇十代崇神天皇の御宇五十四年大和三輪御室嶺上に宮つくりて二年まつり奉りきこの時豐鋤入姫命わが日足ぬと申きしかあれば姪倭比賣命を御杖代と定て天照太神を載奉り所々に行幸なし給へり倭姫世紀

玄敏谷

當世其跡とてあり

玄賓僧都發心錄姓は弓削氏河内ノ國の人なり釋山階

寺の

書

山階

のやんごとき智者也けれど世を厭心ふかくして更に寺のまじはりをこのまづ三輪川のほとりに僅なるいほりをむすびてなんおもひつゝ住けり桓武帝の御時此事きこしめして強にめし出ければ遁べきかたなくてなまじゐにまいりにけりされども猶本意ならずおもひけるにや奈良のみかどの御世に大僧都に成給けるを辭し申としてよめる

發心集

三輪川の清き流にすゝきてし

衣の袖を又はけかさし

その後或所に大なる河あり渡守していませしを弟子ほのみてかへりのぼるをりにこそよくみとゝめて對面せんとおもひてかへりけるをりたづねければかの月日にいづちともなく身をかくされしとぞかたりし

發心集

海拓榴市

初瀬より五の町北林逸抄かなや村より四町ばかり
東近年觀音堂をたてたり

海拓榴市つばきの市ともいふ能因歌枕又つば本市といふ

は土卿をころしたる所なり海拓榴市とは別所也河海抄

又つばいち大和にあまたある中に初瀬にまいる人か

ならずそこにとまりけるは觀音のつげあるにやあら

ん心ことなり枕草子かくありければこそ玉かづらの君

をはつせへとなんいだし奉るにつばいちといふ所に

四日といふみの時ばかりにいける心ちもせでいきつ

き給へり略日くれぬといそぎたちてみあかしのこと

どもしたゝめいでゝいそがせば中々いと心あはた

しくて略玉葛卷につまびらかに見えたり又初瀬へ參

る人はいちにいたりて御明の事などを用意する事に

こそあらめ小右記曰正暦元年九月八日長谷寺にまう

での時椿市にいたりて御明灯心土器などとのへ御

堂にまうでゝ諷誦を修し布二十端御明萬灯かゝげさ

せ給ひしとなり林逸抄

萬葉

紫ははいたすものを椿市の

やそのちまたにあひしこやたれ

同
海柘榴市の八十衢にたちならし

むすひし紐をとかまくおしも

三輪崎

三輪山の南の尾さきにして長谷川ながれたり佐野のわたりもこゝに待るとかや
萬葉
くるしくも降來る雨か神之崎みのがさき

狹野のわたりに家もあらなくに

夫木
三輪か崎夕鹽させは村千鳥 定 家

佐野の渡りに聲うつる哉

佐野渡

佐野の舟橋又は佐野の中川瀬絶してなどとよめるも上野國なり又佐野の岡とよめるは紀伊國

佐野の渡は大和國なり井蛙抄

駒とめて袖うちはらふかけもなし 定 家

さの、渡りの雪の夕暮

師兼千首
時鳥佐野の渡りにさのみなと

聞人もなき音をは鳴らん

草根
駒とめて船をやいそく末遠き 正 徹

さの、渡りにかゝる旅人

源氏物語に薰大將うき舟にたづねそめたる所に三條のたびのやどりに大將いとしのびておはしたりとかく案内いはせ給はどやゝ久しくさのゝわたりに家もあらなくになど口ずさびてさとびたるすのこのはしつかたに居給へり

磯城島金刺宮

釋書曰山邊磯城島云々扶桑紀帝王編年善光寺緣起等に山邊郡云云玉林抄云山邊郡は大誤也思ふに日本紀曰遷都倭國磯城郡磯城島一仍號磯城島金刺宮云々然は磯城郡明也玉林抄曰今敷島とて一郷の所あり金刺宮は河向に竹原あり其内に小社あり是欽明天皇内裏の跡也云々當世田島にしてしきしまの名あり

人皇三十代欽明天皇元年七月に都を倭國磯城郡磯城島に都をうつし磯城島金刺宮と名づけ給ひき御宇十三年始て佛法日本國にわたる世尊滅後凡一千五百一年か欽明天皇元年より延寶七年迄凡一千百四十年か

磯城瑞籬宮しきみや

帝王編年に山邊郡此義磯城島金刺宮にあらはせり
詞林探葉曰磯城瑞籬宮又磯城島金刺宮ともに磯城島と見え侍れば磯城郡なるべし

人皇十代崇神天皇三年九月都を磯城にうつし瑞籬宮と名づけ給ける日本紀延寶七年迄凡一千七百七十四年歟

磯城島

詞林探葉曰磯城とは大和國の内の名所皇居也崇神天皇磯城島瑞籬宮欽明天皇磯城島金刺宮也八雲御抄ニ大和國ト云云

萬葉
しき島の倭國はことたまの

たすくる國こまさくあれよく

月清
大和にもしきしまの宮しきしのふ 良 經

昔をいとし露やへたてん

壬二
しきしまや三輪の檜原も萬代の 家 隆

君かかさしと折やそめけん

磯城島高圓

高圓は三輪崎のたつみ赤尾山の東に龍谷村に高圓山あり

新古
敷島や高圓山の雲間より 堀川院

光さしそふ弓はりの月

續後撰
しき島や高圓山の秋風に

くもなき峯をいつる月かけ

泊瀬山

八雲御抄曰海士小舟泊瀬山といへりとまかせ山ともいへり泊瀬又長谷萬葉

萬葉
隱口の泊瀬をとめか手にまける 山前王

玉は見たれてありといはしやも

同
隱口の泊瀬の山の山きはに 人 丸

いさよふ雲は妹にかもあらん

同
隱口の豊泊瀬道はとこなめの

かしこき道はこふらくはゆめ

同
隠來の泊瀬を國につまあれと

石はふめともなをそきにけり

同
隱口の長谷小國に夜延爲

我夫皇寸與奥床に

隱口、隱口、隱口、先達古訓かくのごとくま

ちまちなり其中にかくらくは字の訓なりゆへに

尤そのいはれありこもり江更に相かなはず若う

たがふらくは口の字を草にして大きなが江に

混するか所詮此所は山の口より入て奥ふかき故

に籠口の初瀬といふなるものを採集大初瀬小初

瀬ともあり同
萬葉

君か代は大はつ路の百枝槻

百枝なからもさかへます哉

同
事之有者小初瀬山の岩木にも

こもらは共に思ふな我せは

同
海小船泊瀬の山にふる雪の

消かたくこひし君かをとそする

海士小船泊瀬は舟とむるといふ詞は近來の歌な

るを同くは舟はつるといふ心に詠せり採集

清輔集
かくらくの豊泊瀬路を分入て

眞 觀

尾上の寺に雲をかゝれる

壬二
紅のうす花櫻ほのくと

朝日いさよふを初瀬山

同
ふる雪にまたこもり江の初瀬山

同
檜原も見えず花や散らん

龜山殿七百首

鐘の音やしるへなるらん初瀬山

草根

我かたに心ひけとていのりをく

弓槻あまたの小初瀬の山

泊瀬

八雲御抄泊瀬初瀬同所

六帖

海士小舟とませの野邊に降雪の

けなく思ひし君か香する

同
かくらくの泊瀬の山の山きはに

いさよふ雲は妹にもあらん

御集

打出る春やとませの波間より

白ゆふ花の色そくたくる

後鳥羽院

家 隆

同

經 秀

赤 人

黒 人

木葉宮

是は初瀬にありむかし初瀬は海にうかぶなりあま人のさる瑞相ありて木のはのみやに禰申て今に侍る觀音是なりこれは二十卷の神社のみやのうちへ入られしと也藻鹽草

紅葉里

初瀬の名なりといへり藻鹽草古詠をもとめえず紅葉の山とよめるも爰の事にや一往あらはす拾玉紅のふりいてゝそ鳴郭公 慈 鎮

紅葉の山にあらぬものゆへ

泊瀬川

泊瀬山は水上にして三輪崎佐野のわたりにながれ行なり詞林探葉曰この川に百瀬川といふあり長谷寺にまうでぬるにわたる所は最初の瀬なる故に初瀬といふなるべし

萬葉 泊瀬河白木綿花におちたきつ

同

さゝれ波うきて流る長谷川

よるへき磯のなきかさひしき

古河野邊

二本の杉は一むかしばかりにやなりけん絶果て古河野邊の名のみのこれり萬葉いにしへもかく聞つゝや忍ひけん

この古河のきよきせの音を古今はつせ河ふる河野へに二本ある杉

年をへて又もあひ見ん二本ある松

玉葛卷 二本の杉のたちとをたつねすは

古河野へに君をみましや手習卷はかなくて世にふる河のうき瀬には

たづねもゆかし二本の杉

布る川同の杉のもとたちしらねとも

過にし人によそへてそみる

初瀬川の古河野邊二本の杉たゞりけるによせてよめりける歌歟近代の達者は初瀬山にふた

もとの杉よまれて侍き古今によらばはつせ河

とよむべきなり顯註密勘

二本の杉は初瀬の川上にあり

鶯山

藻鹽草大和國云々澄月歌枕に初瀬云々

懷中抄

我宿の花そのにまた音せぬは

鶯の山を出ぬなりけり

夫木

くもの井は谷の心も夕とて

かへるやよひの鶯の山

爲實

弓月嵩

八雲御抄曰槻は初瀬也

萬葉

足引の山河の瀬のなるなへに

弓月嵩に雲たちわたる

拾遺愚草

初瀬のや弓月か下にかくろへて

人にしられぬ秋風そ吹

壬二

朝またき霞たなひく横向の

家隆

定家

人丸

弓月嵩に春立らしも

石村山

長谷より半道ばかり南に磐坂谷といふありこれ

らにや

萬葉

角障經石村もすきす泊瀬山

つゝさる

いつかも越ん夜はふけにつゝ

同

角障經石村山に白妙の

かゝれる雲は大君にかも

長谷寺 寺領三百石

豐山神樂院長谷寺は緣起にこの豐山に二の名あり一は泊瀬寺又本長谷寺ともいふ十一面堂の西の谷その西の岡のうへに諸堂あり是本長谷寺也泊瀬の川上の瀧藏權現の社のほとりに天人つくりし毘沙門天ありしを雷降くだりとり奉りて空にのぼりし時御手の寶塔落て此山のふもと三神の里袖川の瀬にとまりしを武内宿彌といふありて見づからとりあげ奉りて西北のすみにに納奉りしより舊名三神をあらためて泊瀬豐山と

いへり三百餘歳を経て弘福寺の僧道明聖人これを石室にうつし奉られしより里の名になぞらへて泊瀬寺とせり天武天皇勅を、だし給ひしかばかの聖人この所に精舎を造營せられしとなり二には長谷寺又後長谷寺とも今の十一面堂これなり聖武天皇の勅ありて徳道上人釋書曰法道仙諸人をすゝめて天平乙亥年五月十六日に棟上して同十九丁亥のとし九月二十八日に供養せらる勅使は中納言奈互麻呂道師は天竺の僧菩提願師は大僧道正行某僧百人興福寺二十一人元興寺二十一人大安寺二十八人藥師寺法隆寺この時の瑞應縁起に見えたり徳道上人は播磨の國指寶の人姓は辛矢田部名は米麻呂後名子君天武天皇即位四年二月二十五日出家す年二十五當寺驗記曰神龜三年十二月晦日大僧都に任す

△觀世音菩薩は縁起に徳道上人は大師道明大徳のをしへにしたがひて長谷の里にきたるそこに靈木あり老人ありてかたれりしはつたへ間繼體天皇即位十一丁酉年釋書曰辛酉洪水に近江國高島郡三尾前の山の谷よりながれ出る木なり楠木長十餘丈釋書曰橋木志賀郡大津浦盛衰記に難波浦にといまりて七十年を経るころほひ大和國高市郡八木の里に小井門子をまのといふ女ありおもふゆへありて佛

像をつくりなむと八木のちまたに引よせしがことなさずして死せりこの里に三十餘年を経る同國葛下郡に出雲臣大水河彌法勢釋書に大満といふあり十一面の像をつくり奉らんと申同郡常麻の里釋書に城下に郡當麻郷に引よせたりしかども大水も死せりこの所に五十餘歳釋書に八十を経る天智天皇即位七戊辰年城上郡長谷の里袖河浦釋書曰葛下郡袖河浦に引捨る又三十九年釋書に三十二年を経るかの木といまりありし所毎に火災疾疫あらずといふ事なしとなり徳道上人釋書に沙彌德達老人の物がたりを傳聞てかの靈木を里人にこひうけたりしかども佛をつくりなん糧なくして十五年を経る或夜夢あり東の峰に三の燈あり今三燈の嶺といふ三世利益を表するなりかの峰にして造佛すべしとめて後をしへのごとく養老四庚申年二月に靈木を東の峰に引のぼせ庵を結びて聖朝安穩藤氏繁昌乃至法界平等利益十一面の像をつくり奉らん大悲の弘誓我願を感じ給ひてこの木をのづから佛となし給へといのりつゝありけり元正天皇即位六年七月房前臣事のたよりありてこの峰にわけ入かの庵に入きて汝君臣をいのるはなにのおもひありけるにや聖人佛法興廢只君臣にありといふ臣此事を元正天皇

に奏しかさねて聖武天皇に奏す神龜元年三月二日宣下ありて香稻三千束を營作の料に給ひしかどもいまだなす事をえざりしかば同六年四月八日かさねて大和河内兩國數ヶ年の正税を給ひしより御衣木の加持あり其修行は道慈律師なり三日のあいだ十一面觀自在菩薩の像なり給ふ長二丈六尺巧匠は稽文會稽主勳なり天平五癸酉年五月十八日開眼供養あり僧百口興福寺元興寺大安寺西大寺法隆寺等なり導師は行基菩薩咒願は義暹大德なり此供養の年に異説あり釋書二十二卷に神龜三年三月成就云々釋書二十八卷に神龜四年成就云々水鏡曰神龜三年三月成就云々導師咒願師いづれもかはらず△同石坐緣起に天平元己巳年八月十五日の夜瑞應ありをのづからとして金剛寶磐石土うけて外にあらはるゝ方八尺にして足跡の穴あり像の御足にえりあはせしがごとし扱こそ十一面の像をすへたて奉りしなりこの石に三枝あり一枝はこれなり一枝は麻伽陀國佛正覺の寶石なり一枝は補陀洛山大悲の坐石也けるとぞ此寶石の左脇に龍穴があり無熱池に通じぬるとかや

△登廊當寺驗記に一條院の御時奈良春日の社司に信

近といふものあり正賴中臣信清男トヤチヤウ三國傳記同之蛇眼疔といへる瘡をわづらひたりしが大悲にいのり申ければいくほどもなくして愈たりこれによりて建立せしとなり

△再興は長谷寺驗記に粗見え侍る所に長谷寺炎上を錄せられし慈鎮和尚の眞跡一卷をえたり互に見あはせ左にあらはす

△人皇六十一代朱雀院天慶七年正月九日炎上大悲の像はけぶりとならせ給ひしかども頂上佛の御ぐしは後の山の石上に飛うつり給ひしとなり驗記前夜靈夢あり慈鎮錄

△人皇六十六代一條院正曆二年三月三日諸堂炎上觀音堂つゝがなし驗記

△人皇六十八代後一條院萬壽二年正月二十七日觀音堂の底のみ火つけりをのづからに消たり驗記

△人皇七十八代後冷泉院永承七年八月二十五日炎上頂上佛の面は梧桐の枝葉の中にゐさせ給ひし也驗記

同十月造佛の時の佛面を佛身中に納たり塗料漆など關白左大臣已下御奉加薄の料は皇后宮職内親王家法務大僧正など寄附せられたり天喜二年八月十一日供養あり講師法務大僧正明尊咒願は權少僧都圓緣讀

師は權少僧都長守慈鎮錄

△人皇七十三代堀河院嘉保元年十一月十三日炎上頂

上佛の御ぐし灰炭の中よりとり出し奉る驗記承徳年中

に觀音堂昇廊中門再興ありしかども其外ことならず

して三十餘年を経て終に天承元年供養あり慈鎮錄

△人皇八十四代順徳院建保七年二月十五日炎上同御

宇承久元年四月十七日より五月二十日迄に觀音の像

ことなり給ふ佛師は法眼快慶號安阿彌陀佛はじめ灰炭の

中に残り給ひし佛顔半面左右掌ると唐櫃に納奉りて

寶座上に安置せしが後は佛身中にこめ奉りたり眉間

の水精の内に招提寺の舍利一粒をこめられたり法阿

彌陀佛所持の舍利也慈鎮錄

△仁明天皇承和十四年長谷寺定額とさだめ給ふ權日本後紀

又貞觀十八年長朗法橋上人の奏しけるによりて毎

年安居に最勝仁王經兩部を講演して國家をいのるべ

しとの宣旨あり三代實錄

△長谷寺の觀音菩薩は住吉物がたりに戀路をいのり

てあふ事をえられ又玉かつらに右近がつは市にてめ

ぐりあひ又馬頭夫人の美女となり給ひけるなどかぞ

へなばかぎりもあらじかし吉備大臣の野馬臺の文を

よみけるも江讀といふ書にのせたりけるとかや或は
たしかならずともいへり

護法善神

驗記に元慶五年三月大和國十市郡はじ土師時躬といひけ
るものゝ子二刻ばかり息絶て後いき出たりしが我は
これ馬頭夫人なりけふより後この山にすみて護法善
神とならんと也しかありしよりやしろをたてゝいは
ひけるとぞ鐘樓の東の脇の社これなり

白山權現

驗記にこの寺の阿闍梨行圓といふありけり加賀國白
山にまうでられしに甲斐國八代郡よりまうできつる
男に權現乗うつらせ給ひて我泊瀬山に鎮坐せんと神
託あり又一鏡飛きたりしを阿闍梨の衣の袖につゝま
れしなり天祿二年七月一日午の尅なりそれより本山
に歸り同八月三日に社たてゝうつし奉る觀音堂の西其北の隅
夜長谷のさとは大雪ふりけると也三國傳記

山口神

長谷の町の内にあり

驗記曰手力雄命也延喜式曰長谷山口坐神三國傳記見詳

與喜山天神

又三燈の嵩ともいふ

與喜山の天神の御鎮座は朱雀院、御宇大和國長谷寺に神殿大夫武麻呂とて一生不犯酒肉五辛を斷じ當寺に住して難行を宗とせし俗ありけり天慶九年九月十八日武麻呂觀音堂に夙夜せしがまどろみけるに狩衣裝束の老人來りて我は是大威驗の神なりこの山に住して大聖に値遇し奉りなんとおもふとおほせられしとおもひて夢はさめにけりその月の二十日日は西山にかたぶき人しづかに侍るに當山大川の下武麻呂が家の前に六十計の客俗狩衣裝束にて石上に尻をかけつゝありけり夢に見し人なりそれより一町ばかりのぼり四辻なる所にて川におり垢離とりて休みぬられけり武麻呂家より物などとり來て奉りなんどしけるが大路杉坂をばのぼり給はず直に小路をぞのぼらせ給ふ武麻呂道明上人の廟の前にして追付三寸をなん勸けりそれより御堂にまうで給ひしがやゝしばし念

誦ありけるに夜半に空より雲くだりて客俗におぼへり終に雲晴て後客俗我は是右大臣正二位天滿天神菅原の某也この山に居をしめて大聖に値遇し奉り苦を遁なんと思ふ瀧藏權現いまして我むかしより此山の地主としてこの川上に居せり君にゆづり奉る今より後なが／＼この山の地主となり給へかしこは因曼陀羅峰としてよき所に侍るなり神則飛うつり給ふ此二神の御物がたりは武麻呂しのびて聞侍るぞかしよき所の詞よりはじまりて與喜山の天神とぞ申奉りける

天曆二年七月武麻呂寶殿を建て祠奉れり三國傳道記天曆二年より延寶七年まで凡七百三十二年歟

△祭禮の儀式先大河の前に出し奉る今總門前也是武麻呂の家の前なり次に大路の四辻にして居奉る今橋爪與喜村爰は垢離りとり給ふ所なり道明上人の廟の前にして御供を奉る今仁王門内是三寸をすゝめ奉りし所なればなりそれより假社に居奉りしを一條院、御宇勅願として藤原景齋に詔して仁王堂をうつし立て天神影向の跡をおもひ杉坂の道をあらためて直道を行今の登廊是也

三國傳通記驗記

天神御腰をかけさせ給ふ石は長谷の町の東^か顔の北にあり武麻呂が家地は西顔の民屋になれり道明上人の墳又天神に三寸^さを奉りし石などは二王門の内に今に有

別院長勝寺

當世この寺なし

驗記曰、宇多天皇勅願美福門院の修造なり醍醐の天皇いまだ春宮にわたらせ給ひける時御不豫の御願ありしにいくほどなくして安平ならせ給ひしかば八大觀音像三十三身の像を營造ありこの山の二本の杉のほとりに臨幸ならせ地形をえらばせ給ひて建立ありしと也^{三國傳記}

蓮華院

當世本願坊の南に蓮華谷といふあり是也

驗記曰蓮華谷に池あり二丈一尺にして方なり役小角勤行^{きんぎょう}の關^{かん}伽^がにむすばれしに十羅刹女水上に出現し給ふそののみならず靈瑞あまたあり行仁上人の記に見えたり又密法相應にして皇胤鎮護の本尊をすへんんとて二丈六尺の方形の圓堂を立て萬德莊嚴の秘像を

すへ奉り天平十五年三月二十五日に供養す神護二年四月六日石川朝臣豐成に勅してかの圓堂の上に三間四面の堂をつくりおほはせ給ふ神護景雲元年九月十日宣下ありて蓮華院となづけらるゝむかし天人あまくだりて蓮華をすゝぎ大悲に供養せし瑞應あればなりそれよりして聖武天皇の勅願としてとしごとの六月十八日に蓮華供養ははじめさせ給ひしなり

安養院

當世この院なし

驗記曰、行仁上人は兼隆中納言の息にして惠心院の僧都の弟子也永承七年の秋この寺にまうでゝ菩提心をいのる安養世界決定往生の瑞夢をえたり又觀音の告によりて勤進聖となりて仙洞の御所に奏し奉る白川ノ法皇勅して一間四面の堂又一院を造營ましましてえさせ給ふ安養院と號し生涯禁足して保安元年九月十五日高聲念佛して西にむかひて終年八十九

藤井坊

この跡しれず

永享年中十一月中旬の比南都成就院法橋清賢ともな

ひて長谷寺に一七日參籠せしに藤井坊といふ坊にて
法樂せし中に

長谷寺佛前五十首

夕時雨ふるやゆつきか下露も

正 徹

氷ておつる冬の山風

道明上人廟

驗記曰、今の仁王堂の内なり

泊瀬朝倉宮

帝王編年に城上郡磐坂谷なりしきの當世尋しに長谷より半道ばかり南にあり

人皇二十一代安康天皇三年泊瀬朝倉に宮をさだめ給ふ日本紀延寶七年迄凡一千二百二十四年か

泊瀬列城宮

帝王編年曰城上郡云々長谷より十町ばかり南に出雪村其跡といへり

人皇二十六代武烈天皇元年泊瀬列城にして即位ましまして都をさだめ給ふ日本紀

延寶七年迄凡一千百八十一年

泊瀬齋宮所しらず

天武天皇白鳳二年四月大來皇女を天照太神に奉る泊瀬齋宮にいまゐりして同三年十月に伊勢の神宮にまうで侍る日本紀

延寶七年迄凡一千八年か

迹驚淵所しらず

天武天皇白鳳八年八月泊瀬に行幸なりて迹驚淵上にして宴し給ふ日本紀

泊瀬小野所しらず

雄略天皇六年二月泊瀬の小野に行幸なりて山野のけしきめで給ひて

日本紀

こもりくの國泊瀬の山はいまたちの今時よろしと山はあや綾にうらくはし麗也あやにうらくはしこの御製より道の小野とぞいひける

伊豆加志本

當世俗にむかし天照太神たてさせ給ひし鳥居の

跡とて長谷の町のうちの南民屋の内に礎二つありおもふに磯城島は半里坤に名のみ残り伊豆毛村八十町ばかり坤にあり伊豆加志本の鳥居の跡に侍りなんかし

人皇十代崇神天皇四十三年天照太神大和國伊豆加志本の宮にうつり給ひて八年いはひつりけり倭姫まの世紀磯城嚴櫃之本とも葛木寶かけり山記

狹井神社

三輪の社二町ばかり北にあり當世絶果たり城上郡鎮花の神これなり

狹井神は大己貴荒魂也花散の時疫神分散ありてわざはひをなし人民をわづらはしめ給ふなれば鎮花祭あり宇多天皇寛平九年三月七日勅してまゐり給ふとなり舊記延喜式に狹井坐大神荒魂社五座云々

笠山

萬葉 藻鹽草に大和國と云々
雨ふれはさゝんとおもへる笠の山

乙麻呂

人にさゝすなぬれはひすとも

竹林寺

笠山にあり俗に笠の荒神といふ

鷲峰山竹林寺はむかし役小角行ひる給ひし靈山なり善無畏三藏來朝の時天竺もろこしの中路にて天くだりける天人所造の笠を將來ありて此山につたへさせ給ひしより笠山の名ありこの笠靈寶として當世にあり

一荒神は良辨僧正參籠の時荒神現形し給ふ僧正小板に圖せられき其後弘法大師かの圖の像をうつして荒神をさざみ給ひしよりながく此寺につたはれり抑大和國笠山の荒神は三座おはしまして土祖神一座澳津彦命一座澳津姬神一座舊事紀曰大年神天和迦流美豆姬を妻としうめる御子澳津彦神興津姬命此二神は諸人竈神に祠奉る神也

城上郡神名帳三十五座

延喜式

大神大物主神社

たけに神坐日向神社

穴師坐兵主神社

卷向坐若御魂神社

他田坐天照御魂神社

志貴御縣坐神社

狹井坐大神荒魂神社五座

長谷山口坐神社

殖栗神社

水口神社

兼田神社

玉烈神社

網越神社

穴師大兵主神社

塙倉神社

宗像神社三座

忍坂坐生根神社
等彌神社

忍坂山口坐神社

桑内神社

宇太依田神社

伊射奈岐神社

稔代神社

若櫻神社

高屋安倍神社三座

和州舊跡幽考第十三卷終

和州舊跡幽考第十四卷

山邊郡

山邊里

壬二
霜こほる柴のさ枝やうるふらん 家 隆

懷中集
煙そしめる山邊の里
打なひき春さりくれば山の邊の

槇の梢にさきゆく見れば

磯上寺磯上村にあり
寺領五石

石上在原山本光明寺は在原業平朝臣住おはせし地に
寺を立られけるとぞ老にけらしなどゝたはぶれ給
ひし井筒の跡かすかに夜半にや君がひとり越らんと
詠せられし千載とて薄など生たり拾芥抄には磯上寺
は寶蓮寺と號せしよし見え侍ればいつの代より改名
して本光明寺とはいふにや堂一字觀音菩薩をすへた

り因に紀有常の家地此南にならびて當世田にほりて
有常田とぞいひける

ならの石上寺にて

古今
石上古き都の時鳥 素性法師

聲はかりこそ昔なりけれ

此歌の端書にならの石上寺にてとかける詞心え
ず奈良都は添上郡石上は山邊郡なり石上寺をな
らといはん事いはれなし只奈良を過てまかれは
石上遠からぬにおもひわたりて奈良の石上とか

きて侍るなり顯注
密勘

あり原寺を見てよめる

玉葉
形はかり其名残とて在原の 贈従三位爲子

昔の跡を見るもなつかし

歌枕
昔より植けむ時を人しらぬ 宮内卿

花にふりぬる石上寺

石上いそのかみ

家集
石上村とてあり磯上古事
記石上日本
紀
年をへていひふるさるゝ石上

公 實

なをたにかへて世を経てしかな

^同 染返しいくしは經てか石上

小大君

生ふる松葉を結びをく哉

^同 立かへり思ひ出れと石上

友則

ふりにし戀は忘れたりけり

^{奥義抄} 石上ならの都の初より

ふりにけるとも見ゆるころもか

つねは石上ふるとぞよめる其うへは大和に石上

の社といふ所に布留明神といふ神います故なり

されば石上ふりとはいふまじなど申せ共ふるく

みなよめり五音の字なればかよはせるにや又か

の社世のはじまりの所なればたふふるきことに

よせていふにや^{奥義抄}

陵

かづさ村に一基俗に王墓山といふ一基は東の山

にあり俗にうはなり山ともみづか共いふいづ

れの陵ともしらす

穴穗宮

允恭天皇四十二年天皇崩御なり給ふ其十二月人皇二

十一代安康天皇石上に都をうつし給ひて穴穗宮とい

へり^{日本紀}延寶七年まで凡一千二百二十六年か

廣高宮

人王二十五代仁賢天皇元年正月石上廣高宮にして即

位まします^{日本紀}

帝王編年に曰穴穗宮は山邊郡石上左大臣の家の

西南古川の南の地なり廣高宮は同左大臣の家の

北なり田原とあり今尋ぬるにしれる人なし^{拾玉}

心すむかきりなりけり石上

慈鎮

古き都の有明の月

^{師兼千首} 石上古き都に立かへり

又あら玉の春を茶にける

磯上布留社

石上坐布都御魂神社^{延喜式}

鹿島の神宮同體^{釋曰}本紀十握劍にてまします^{古語拾遺}

△十握劍は其名天羽斬^{拾遺}又天尾羽張又伊都之尾羽

張^{古事記}又師靈劍又布都主神魂刀又佐土布都又建布都

又豐布都舊事紀又龜正又韓鋤劔又斐布都神釋日本紀とも申抑

此劔の濫觴は素戔鳴尊出雲國にして八岐の大蛇をきり給ふその尾をきり給ふ時に劔の刃すこし缺たりい

かなればとてその尾を割て見そなはし給へば尾の中に劔あり是草薙の劔にして尾張國熱田神なり蛇をき

る劔は蛇の龜正と號し石上にいます日本紀又天羽斬といふは大蛇を羽といふ故なり古語拾遺初は大和の石上に

ましゝ後常陸の鹿島の神宮にまします正統

△韓鋤の劔のかたちは鋤に似たるより此名あり又先師の説には加良須岐のかたちならん釋日本紀

△爰を布留と名づけゝる元來はむかし布留の川上に一の劔ながれたり物にふるゝごとと石木といへども

やぶるゝにやすくきるにかたきはなし川耳にあやしの賤女布をあらふありけりその布にまつはれて劔の

といまりしより神と祠布留明神と號し奉る扱こそ布留はぬのにといまるとぞかけりける盛衰記又布留とい

ふは瑞寶を一つづゝよびて咒文をして手ふるゝ事あるよりして布留とはいへり正統

△御鎮座は人皇十代崇神天皇の御宇なり神宮御鈔かの御宇に伊香色雄命宇麻志摩命六世孫大臣にして天社國社をさだ

め八十萬群神をまつる時大和國山邊郡石上邑にうつし奉る其神十種の瑞寶は高皇產靈尊より饒速日尊に

つたはり其子味間見命にあたへそれより神武天皇に奉りて後は藏齋石上の大神と號し國家あがめまつり

けり舊事紀日本紀古語拾遺元々集神皇正統記等にくはしくあり又の説人皇十七代仁德天皇の御世布都主

神社を石上の御布留村の高庭の地にいはひき市川臣を神主とせり新撰氏錄

△神庫ヒラ當世かたばかりの寶藏社頭にならびてあり垂仁天皇八十七年二月五十瓊敷命妹の大中姫にいへり

我老ぬれば神寶つかさどるにかなはずけふより後汝つかさとなれ大中姫いなびて我羽女の身にしゐいか

にして天神庫にのぼりなんや五十瓊敷命しかあらば神庫に梯をつくりなんなにの勞かあらんやとなり神

の神庫にはしたてのまゝに隨樹梯とは是そ縁なり日本紀當世寶藏の内

に方五尺の横あり神符にしてひらく事をしらす小狐といふ劔あり

△垂仁天皇三十九年五十瓊敷命茅渟菟砥川上宮河内國にして千の劔をつくり其劔を川上部と名づけ又櫻伴

とも名づけて石上神宮に納めき日本紀同御宇八十七年

丹波國桑田村の獸の腹にありし八尺瓊勾玉も爰に納奉る日本紀其後天武天皇二年八月忍壁皇子におほせて

石上の神宮の神寶をあぶらもてみがかせはじめ諸家より神府につめられし寶物をその子孫にかへしつかはされき日本紀

△神階は貞觀九年三月十日從一位勳六等石上の神に

正一位をくはへさせ給ふ類聚國史

△祭は當代六月晦日かの浣布にとまりし劔とて袋におさめて鳥居の外まで出し奉り又七月七日神前に護摩を修し寶藏の笈三員出して僧の肩にかけてをこなひあり是を笈わたしといふ内山永久寺桃尾山龍福寺ならびに氏子五十餘卿の僧等あつまりてつとめける事にぞ侍る

△貞觀五年六月此社の南に五色の雲あらはるゝよし三代實錄に見えたり

神宮寺

石上神宮寺出書をしらす只貞觀八年正月大和國の田二十八町施入のよし三代實錄に見えたり

萬葉石上振の神杉神となる

戀をもわれは更にするかも

辨乳母集石上布留の社をわするれは

うしろめたなき三輪の山哉

堀川太郎百首石上ふるの社に春くれは

師 賴

霞たなひく高圓の山

同二郎たのみては久しくなりぬ石上

常 陸

ふるの社のもとのちかひを

久安百首五月雨のふるの社の時鳥

三笠の山にさしてなくなり

師兼千首跡たれし印の杉の名に立て

侍賢門院安藝

いく代かふるの神のみつかき

良因寺

布留社の乾

良因寺は藥師如來をすへたり素性法師住おはせしとてかの法師の石塔などありとうすぎうしに見えたり

石上池

いそのかみ大將軍の池といふ是なり

石上の池の邊に須彌山をつくる高き事廟塔などのこ

としその時齊明天皇六年なり日本紀延寶七年迄凡一千十五年か

石上溝

いその上の五六町東寺井川是なり

石上の溝をほるは履中天皇四年十月なり日本紀延寶七年まで凡一千三百年か

布留瀧

俗に桃尾の瀧といふいその上より一里東仁和帝御子におはしましける時ふるの瀧御覽じにおはしましてかへらせ給ひけるによめる

古今

あかすしてなかるゝ汨瀧にそふ 兼藝法師

白川殿百首

今も又行ても見はや石上 御製
ふるの瀧津瀧跡を尋ねて

龍福寺

桃尾の瀧の邊
寺領五十石

桃尾山龍福寺は行基菩薩の開基とかや観音菩薩をす

へたり釋書には龍福寺は義淵僧正の開基とあり

布留山

萬葉
石上振の山なる杉村の

おもひ過へき君にあらなくに

寛和殿上歌合
初時雨布留の山里いかならし

住人さへや袖のぬるらん

布留野

家集
桃尾に行道の龍の馬場といふ所ふる野なり
石上ふる野の道の草分て 貫之

堀川太郎
朽にけり人もかよはぬ礎上 顯仲

千五百番歌合
五月雨のふるの中道中々に 家隆

しける草葉も見えぬ比哉

拾玉
白雨や雨もふる野の末に見て 慈鎮

いそくたのみや三輪の杉むら

草根

泪のみふる野の露にまかふらし

正 徹

また初瀬路に思ひいるかな

古柄小野ふるかへ

石上ふるから小野も野の名なり石上ふるの中道

ともよめりから小野とは枯野といふにやらとれ

と同五音布留の乾たる野といふにや顯註 密勘

拾玉

君か世にふるから小野の本柏

慈 鎮

もとに歸や我身なるらん

忘水

新後撰

むかし見し布留の、澤の忘水

寂超法師

なに今更におもひ出らん

散木集

五月雨のふるから小野の忘水

俊 頼

みな沼江にて渡る瀬もなし

布留川

水上は桃尾瀧より西にながれ川合村に落行

藻園草

わきも子ややすをいみすな石上

袖ふる川の絶むと思へは

布留高橋

鳥居師兼千首より社のかた十五町高橋あり

五月雨は通ふたゝちも波越て

はれぬ日數をふるの高橋

長屋原

永原村とてありもし長屋原の略言にや倭名類聚

鈔日本後紀等に山邊郡

和銅三年二月藤原宮より寧樂宮にうつり給ふの

時長屋原にして古郷をかへり見給ひて

萬葉

飛鳥の明日香の里をゝきていなは

太上天皇

君のあたりは見えずもあらん

都介つひ

三代實錄倭名類聚に山邊郡と云々尋しに所しれ

す

都介は伊勢の齋宮歸京の時大和國都介の頓宮かみにて供御を奉るよし江家次第にあり

△都介野は天長承和の御代に獵し木をきる事を禁制

せられてながくつたはれり元慶六年九月猶狩し鳥を拂ふ事を制せられたい草木をとるのみをゆるし給ふ
三代實録

田村

當世田村とて一郷あり石上より一里南

田村は大納言藤原朝臣仲麻呂の家なり勝寶四年四月東大寺の大佛開眼供養に孝謙天皇行幸まし／＼てそれより田村の第に還幸ありしより御在所と號す
續日本紀
其後光仁天皇寶龜六年三月同八年三月此舊宮にして宴のまうけ祿など給ひよし類聚國史に見えたり

竹谿村堀越

所しらす

天平十二年十月伊勢國に行幸の時山邊郡竹谿村の堀越の頓宮に入せ給ふ
續日本紀

木殿

木殿村といふあり石上より十五六町坤泊瀬にまいるにきどのかといふ所にやどらんとし侍りけるに誰としりてかといひければ答へすとてよめる

續拾遺集
名乗せは人しりぬへしなのらすは

赤染右衛門

木凡殿をいかて過まし

山邊御井

仙覺抄に伊勢國と云々大和國といふ説も侍れば一往あらはす

萬葉
山邊の御井を見かてら神風の

伊勢の乙女らあひ見つるかも

二階堂

二階堂村にかたばかりの堂のこれり建立は十市郡天香久山の北表なり今此所にうつしかへける年曆をしらす

二階堂は膳夫寺と號す膳夫姫の造營なればとて此名あり本尊は虚空藏菩薩をすへけるとかや抑膳夫姫はあやしの賤の子にして根芹をつみけり聖德太子はの見そめ給ひしよりむかへて妃とせさせ給ふと能登傳に見えたり又高家の人の子に侍るよし橘寺の抄にのせたり只あやしの賤女のよし一向虛説にて侍る先太子の傳文に吾つねに諸氏の女子の體をあひ見る更に

卑人を見ずと記されたり猶膳夫かたしや姫をおもふに姓氏錄に景行天皇の御宇に膳夫の臣の姓を給ふとあり姓をおもふにいやしからず高家の息女なり右は玉林抄にくはしく見えたり

山邊郡は大道の東の山際に山陵とおもひしもの古墳と見えしものあまたあり衾田の墓もその中にこそあるらめ

衾田墓

衾田墓は手たしろ白香皇女大和國山邊郡にあり延喜式仁賢天皇の皇女欽明天皇の母后なり

衾道

歌枕に或は越中國先達大和國と云八雲御抄もしは草大和國とあり只衾田の墓の名にたよりて一往あらはす

衾道引手山

所しらず

萬葉
衾道を引手の山に妹を置いて

山徑行はいけりともなし

明玉

紅にふかくそ見ゆる衾道の

顯季

引手の山の峯の柵葉

引手山

夫木

梓弓引手の山の時鳥

後九條

雲を宿とやをして入らん

千塚

二階堂の近所大道の東の山際に岩穴所々にあり數へ盡されぬばかり許多也俗に千塚といへり千塚は或ふみを見侍りしにむかしいかなる人のいひ出けるともあらず只賤山賤などのさえづりけるは世中近きほどに火の雨ふりなんといふよりして身のかくれ所に岩穴をかまえけるとぞもし是もその世のものにや侍りなん

大和大國魂社

大和坐大國魂社延喜式

大宮一座大國魂神 舊事本記云素戔鳴尊兒大歲神大

歲神兒大國魂神母須治比女神大和神

二宮大歲神

三宮須治比女神兼石説

△大和大國魂神は天照太神と二神あひならべて天皇大殿の内にまつり給ふ事日本にぞ侍る神代より代は十つぎ年は六百餘歳になりて正統崇神天皇の御宇神勢を恐れもろともに住給ふにやすからずしかあれば天照太神は豐鋤入姫命をして倭笠縫邑に磯堅神籬を立てまつらしめ給ふ又日本大國魂神を淳名城入姫命をしてまつらしめ給ふに淳名城入姫命髪おちかたちやせてまつる事かなはず崇神天皇五年國の内あながち疾疫ヤミヤミし死亡者半に過なんとす同七年天皇此事なげきおぼしめしき時に倭迹々日百襲姫命に大物主神著給ひて告あり更に御夢に我は是大物主神なり我兒太田々根子をして我をまつらしめよくありしより太田々根子命を神主とし又市磯長尾市を倭國魂神の神主としまつらしめ給ひしより後天下太平なり日本紀崇神天皇五年より延寶七年迄凡千七百七十二年か△神階は貞觀元年正月二十七日從一位をすゝめ奉る

三代實錄今は正一位たり

永久寺 寺領九百七十一石

内山金剛乘院永久寺は寺僧の傳を聞侍つるに鳥羽院の御願開基は釋亮慧眞言傳法の人なり其地五鈷のかたちの山にして中央に山ありされば内山と號せり永久年中の御草創なれば永久寺の名あり延寶七年迄凡五百五十六年

△笠置城落て後醍醐天皇しのびて入御あり又大塔宮御身をかくさせ給ひし内山是なり太平記

△眞言宗醍醐金剛王院の法流にして當山方の山臥ヤマダシの法頭なり

來迎寺

内山永久寺より二里半ばかりうしとらにあり

多田の來迎寺の善導大師の遺像は彼大師みづからきざみ給ひて入滅八十七年の後日域來朝の船にのり天平寶字七年筑紫はかたの浦に著給ひしかばその極樂寺といふ寺にぞすへ奉りきあくる年の春大和國十市郡藤井の三光寺にうつし侍りしが建曆元年の亂逆にかゝりて多田來迎寺にうつし奉りきかの遺像或時

は僧と現じ僧又化して木像となり時あれば瑞夢をつ
げ時あれば尊體おもくなりて人力に及ばずその奇恠
なる事縁起にくはしく見えたり

笠間山

なにより五里ばかり巽伊賀の通路なり八雲御抄

に笠間山は大和國

龜山殿七百首

たちよらん笠間の里のちかけれは

中納言入道

時雨し雲のはれ間まつ程

山邊郡神名帳十三座

延喜式

大和坐大國魂神社三座

石上坐布留御魂神社

つひのさきらの
都祁水分神社

山邊御縣坐神社

白堤神社

夜都伎神社

都祁山口神社

祝田神社

石上市神社

下部神社

出雲建雄神社

和州舊跡幽考第十四卷終

和州舊跡幽考第十五卷

高市郡

此郡大和國の國府也倭名類聚

細川山

多武岑の西についで長安寺より十四五町細川は水上に瀧ありて末は坂田尼寺にながれ行

衣笠内大臣歌合
南淵の細川山を時雨める

まゆみの紅葉今さかりかも

南淵山

八雲御抄云、細川山のならびの上の山なり玉林抄云橘寺より五十町ばかり瀧の名所なりと云々八雲御抄いはくなんぶちとも細川山みなぶちともよめりと云々

萬葉

御食へけ向南淵山の岩ねには 人 丸

落波たれかけづりのこせる

同
眞十鏡南淵山はけふもかも

白露をきて黄葉なるらん

井蛙抄
五月雨に渡るあさせもなかりけり 定 家

みなふち山の谷の川水

皇極天皇元年八月南淵の川上に行幸なりましゝて雨をこひ給ふに御膝をつかせ四方を拜せさせ給ひしより雷雲に鳴渡り雨は地に波をたゝへて五日晴ざりし程に國土いとうるほひ天下豊年にぞあひける日本紀

元朝四方拜のもとにや侍なんかし江家次第

△天武天皇五年南淵山細川山草を刈薪をこる事を禁制あり日本紀

稻淵山

歌枕

秋ははやいなふち山のきりくす

聲よはり行老そかなしき

同
年をふる涙をいかにあふ事は 具 氏

猶稻淵の瀧まされとや

南淵いなぶち同山異名歟

萬葉

南淵の細川山にたつ眞弓

東まぐまで人にしらるな

淨御原宮 附御島宮

俗に淨御といへり細川村より四五町西なり石の塔五重にして軒口の徑九尺ばかり高さ二丈あまりけたますがたなどまでつくりたりそのちかき所に石太屋とて陵あり

淨御原宮は人皇四十代天武天皇元年大和國御島宮にうつり給ひてそれより岡本宮にうつらせ此年宮を岡本宮の南にさだめさせ飛鳥淨御原宮と號しうつりおはしまし給ふ同二年此宮にして即位まし／＼けり同十二年宮室一處ならす雨參つくらしめ給ひき先難波都あり又十三年畿内にしへの都の地を見せしめられ天皇も京師に巡幸まし／＼宮地をさだめ給ふに又みやこをたてさせ給ふべきにやと信濃國の圖を奉りき終に十四年朱鳥元年と改元ありその八月に飛鳥淨御原宮にて崩御なり給ふ日本紀天武天皇二年より延寶七年迄凡一千七年か

萬葉

明日香の清御原の宮にあめが下しらしめし八隅知之吾大君のたりてらす日之皇子は何方におぼしめしてか神風の伊勢の國には沖津藻もなびきし波に略

東西市

勅撰名所集鹽藻草等に山城國とあり一往爰にあらはす

東西の市は天武天皇大寶三年にはじめて立られける

帝王編年此御宇大和國淨御原宮にいます

門部王東市の樹をよめる

萬葉

東市のうへ木の木足左右こたるまで

あはぬ君うへわれこひにけり

同西の市に只獨出て目ならはす

買しきぬのあきしこりかも

南淵坂田尼寺

詮要抄云橘寺より南今此所を見るに棕橋山の尾さきの北に坂田寺ありて細川流れたり尾をへだ

て、南に稻淵川ながれ尾さきをめぐり兩川落合
て末はひとつにながれ行

南淵坂田尼寺は金剛寺といふ日本紀又は小墾田坂田尼

寺釋書又は橘尼寺ともあり明一傳抑坂田寺は繼體天皇十

六年來朝の司馬達等大和國高市郡坂田原に草室をむ

すび佛をたてまつりけり世の人佛をさらにしらざり

しかば只異域の神とのみいへり司馬達等は南梁の人

なり釋書その後爰にして上宮をつくり聖德太子の宮と

せさせ給ふ抄又用明天皇二年帝御みやまの瘡さかんにし

ていとあやうく見へさせ給へば鞍部多須奈ちかひを

たて、帝の御爲に我出家となりなん又丈六の佛像を

つくり寺院を建立せむと佛に願立たりけり歡感ふか

かなしみなどはせ給ひけり終にその年の四月二十

九日にぞ崩御なりけるかの鞍部多須奈は司馬達等が

子出家して德濟法師とぞいひける日本紀又推古天皇御

宇十四年鞍作の鳥に勅ありて丈六の佛をつくらし

め給ひき佛ことなり給ひぬれども堂に入奉る事かな

はず鞍作鳥心をめぐらして元興寺の戸をやぶらずな

がら入奉りけり歡慮つねならざりければ大仁たいにの位の

をもつて天皇の御爲に金剛寺を造營せり南淵坂田寺
是なり日本紀丈六の佛狹わきたち侍菩薩は多須奈の造營なり日本紀
鞍作鳥は多須奈の子司馬達等の孫なり
聖德太子の上宮を爰に立らるゝよし詮要抄にあ
り多武の峰の麓上宮村はかの太子の宮にして上
宮寺の勅額ありくはしくは十市郡にあらはす然
は二所にありけるにや
玉林抄云大佛供の里と云所に小治田宮かはらたとて小社
ありそれ宮所也于レ今有之と云々今尋しに大佛
供の里は櫻井村の町のいぬいにあり十市郡なる
べし然ども扶桑記曰小墾田宮は大和國高市郡葛
野王の棲る地是也と云々玉林抄又續日本紀曰大和
國高市小治田宮と云々又釋書曰小墾田坂田尼寺
と云々此寺は棕橋山くろはしの尾さきの北に有かたがた
高市郡なるべし大佛供の里と小治田坂田尼寺と
は遙か隔り侍る後人所をあらため給ふべし
人皇三十四代推古天皇豐浦宮に即位ましゝて小墾
田宮にうつり給ふ人皇三十六代皇極天皇は舒明天皇

の后にぞいまそかりける岡本宮にして卽位おはしまして元年九月宮をつくり給ひなんとて國々におほせて梁柱をとらしめ東は遠江國をかぎり西は安藝國をかぎり丁よほうをめしよせ宮づくりことなりて十二月小墾田宮にうつらせ給ひき日本本是葛野王の家地にて侍る也扶桑略記

△人皇四十五代聖武天皇天平寶字年中小治田宮に行幸なり又四十八代稱徳天皇神護元年に大和國高市郡小治田宮に幸行なりて美濃國を由機方とし越前國を須伎方として大嘗會をつとめ給ひしよし續日本紀に見へたり然は小治田宮は人皇三十六代皇極天皇よりして其後遷都たびゝに侍りて御代は十つぎあまり年は百六十歳を経ぬるといへどもこの宮猶のこりけるにや又玉林抄云小墾田と小治田と同名異字

續古今
小墾田の宮の古道いかならん

絶にし後は夢のうきはし

土佐門院

白日王子立埋跡

たづねしにしれず小治田に穴をほりてと日本紀に見え侍るにたよりて一往爰にあらはす

人皇二十一代安康天皇の御宇大草香皇子の御子に眉輪王といふありけり安康天皇晝の御枕によりふさせ給ひしに眉輪王しのびきて害し奉りけりくはしくは日本紀にあり其比大泊瀬天皇いまだ春宮におはしましけるがいとおどろきふかくいかり給ひてよろひを御肩に劔を御腰にめされ軍兵を卒してまづ御兄の黒日皇子のもとに行ましてかくの事こそあれとおどろかし聞え給へども黒日皇子さはぐ御心も見へ給はざりしかば大泊瀬の皇子劔をぬきて討給ひけりそれより白日王子のもとにいたりてかくとありければ白日王子もおどろき給ふけしきもなかりければ門の外に引出し小治田に穴をほり立埋にしせられけるほどに腰まで土のいたりぬれば兩目はしりぬけて命をはり給ひしなり古事記日本紀とはたがふ所あり

いまきのあやのつきもと
新漢槻本南丘墓

所しらず

大泊瀬皇子眉輪王を討給ひなんと進み給ひしかば黒彦皇子眉輪王ともにのがれ出て圓つらら大臣の宅にこもり給ひしかばやがて家に火をぞかけたりける黒彦皇子眉輪王ともにやかれころさるゝの時坂合部連にえのすくね賛宿禰

皇子の屍をいだきて共にやかれて死せりその骨を一棺に盛入て新漢槻本の南丘に葬りけるとぞ日本紀

板田橋

細川のながれにいとさゝやかなる板橋をわたせり南は坂田尼寺北に淨見原有小墾田の板田の橋は先達攝津國云々おもふに小墾田の坂田尼寺もちかく侍れば爰の板田の橋もよめるにやもしほ草類字名所などに一説大和國云々師兼千首をはたゝの板田の橋のいたつらに

なす事なくて世をやわたらん

龍蓋寺 寺領二十石

東光山龍蓋寺眞珠院は俗に岡本寺といふ拾芥抄舒明天皇の皇居岡本宮の地なればかくぞいふなめる天智天皇の御願義淵僧正の開基なり義淵僧正は化生の人なりしが天智天皇いつくしみましゝてたい皇子とおなじやうに岡本の宮にして御いたはりおはしまして人となし給ひて後出家してやんごとなき智人となりもろこしにわたり歸朝して大和の龍蓋寺龍門寺龍福

寺を構造せり大寶三年僧正に任じ神龜五年十月に遷化たり書釋

△本尊は如意輪觀音菩薩なり初は一磔ちやく手半の六臂の小像を道鏡禪師の造立たりしが其後弘法大帥三國の土をもて丈六二臂の像をつくりかの小佛を佛胸にこめられしとなり御堂は孝謙天皇の勅願と縁起にあり然ども拾芥抄曰丈六の土佛は弓削法皇の造立にしてそれより炎上なしと見へたり又年のやく難を轉じ給ふ菩薩のよし水かゝみに見へたり

逝回岳ゆきのか

仙覺抄大和國岡寺同所なり

萬葉 故郷豐浦寺の尼私房宴歌

明日香河ゆきのか逝回岡の秋萩は 丹比真人

爲尹千首ゆきのか けふ降雨にちりかすきなん
里人の逝回ゆきのかの岡の小笹原

風もいくたひ分て吹らん

飛鳥岡本宮 附厩坂宮百濟宮田中宮

帝王編年曰鳥の東の岡本地也玉林抄曰岡本宮は

橘寺の東近廻の岡則今の岡寺の地也と云々

人皇三十五代舒明天皇二年十月都を飛鳥岡の傍にうつして岡本宮と名づけ給ひき八年六月此宮炎上ありし程に田中宮にうつりましゝけり十一年伊豫國溫湯の宮に行幸なり十二年四月還幸ありて厩坂宮にましゝ御順禮紀曰十月百濟宮にうつり給ふ十三年十月此宮にて崩御とぞきこえし日本紀舒明天皇二年より延寶七年迄凡千五十年か

後飛鳥岡本宮

岡寺にならびて礎のこれり

人皇三十八代齋明天皇二年飛鳥の岡本にして更に宮地をさだめ宮を立られ後の飛鳥の岡本宮とぞ名づけ給ける日本紀延寶七年迄凡一千二十四年か

後園

能登傳曰高市郡難波の劔池の北なる小林苑中と云々撰集鈔通要是を信用せざる由見へたり詮要抄曰橘寺の丑寅十餘町去て小原と云所其跡也聖德太子御年十一にして童子達三十六人といざなは

せ給ひて後園にいでまして詩句の御あそびありしに童子達ははるかにをとり太子たかくすぐれさせ給ひて句々を難じ給ひしかば童子達かへりおはしまして父母にむかひ此事いとうらみがほにかたり給ひしかば父母難辭をつくりてをくり給ふれば太子難をとき給ふにあきらかならずといふ事なし天皇我兒聖人ならずばいかでかくはあらんやと歎慮ありしかば妃殊更によるこび給ふよし平氏傳にくはしく見へたり

橘寺

玉林抄云高市郡と云々後飛鳥岡本宮より西五町ばかり

佛頭山上宮院菩提寺は又橘寺ともいふ平氏傳に推古天皇十四年七月聖德太子をまねかせ給て勝鬘經を講せさせ給ひしに三日を経て講をはりけり日本紀其講會の儀は聖德太子塵尾をとり師子座にのぼり給ひしはたゞ出家のごとくにぞ侍るもろゝの名僧大德其妙義をたづねたてまつればこたへさせ給ふにいとあきらかなり講をはるの夜蓮華ふりしきて地にみちたりそのはないとおほきにして二三尺ありけりとかやこ

れよりして皇居を施し寺塔を立られたり今の橘樹寺
これなり平氏傳ふる所の瑞花は曼陀羅花白色のはな
なり扶桑のふりつみし所は金堂と講堂の間にぞ侍

る鎮守明神は推古天皇也社は北にむかへり玉林抄

△佛頭山又聖譽曰又赤部山ともいふ通濫觴は勝鬘經

講會の時清涼殿の前の山頭に千佛の御くし出現あり

しより此山號とせり玉林抄此山今にありて清涼山とも

いへり高さ十四五丈ばかり亦上宮院は上宮太子の御

建立より院號となせり橘寺は橘の都の皇居の地なれ

ば寺の名によぶならん碑文あり其詞

上宮太子勝鬘講讀之砌千佛涌出蓮花庭前下云云

△勝鬘經講會の定日まぢくのさた侍る中に年暦の

異をあらはす平氏傳には推古天皇十四年と云々法皇

帝記には同御宇六年と云々しかれども平氏傳證たる

べきのよし玉林抄にあり

△當寺は志度の道場上西海人の立けると拾芥抄にあ

り若再興にやしらす

△聖德太子二歳の遺像は日域の最初也玉林抄同十六歳

の遺像は法空上人のつくられける此上人は久我殿御

息持明院殿の時代の人也

△人皇五十三代淳和天皇の御宇に故中務卿親王の御

ために藥師如來日月遍照兩士を御建立ならびに金文

の蓮花法曼陀羅書寫の功ことなり給へり天長四年九

月に橘寺に寄附し給ひしよし御願文の詞にあらはな

り性靈集

△再興はおほくの年序かさなりてをのづから形ばか

りにのこり侍りけるが頃年今春八郎太夫再興せしな

り

八雲御抄勅撰名所などに橘寺は河内國に云々お

もふに斑鳩の宮の古道なほにほふなどよめる

は大和の國なるべし

草根

斑鳩の宮の古道なをにほふ

たちはな寺の花の下風

田中宮

田中村といふあり此皇居の跡なり

舒明天皇の皇居田中宮厩坂宮の事は岡本宮の所にあ

らはす

厩坂まうさか

所しらす

應神天皇十五年八月百濟國に阿直岐をつかはされしに馬二匹をえて奉りたりすなはち輕の坂上にして阿直岐をつかさとして飼給ひけり馬をやしなひし所なれば厩坂とぞいひける日本紀延寶七年迄凡一千三百九十六年歟

厩坂宮

舒明天皇十二年伊豫の溫泉より還幸なり給ひて厩坂の宮に入御ならせ給ふ日本紀此宮つくりさだめ給ひし年曆をしらず

厩坂池

應神天皇十一年十月池をほらせて厩坂池と號せられたり日本紀亦同御宇三年十月厩坂の道をひらかれけるとぞ日本紀かの山科寺を建られし厩坂も爰にや侍りなん

橘島宮

河内國と云々勅撰名所おもふに橘の京は大和國あきらけし一往爰にあらはす

第案橘の島の宮にはあかぬかも

さたの岡邊に殿井しにけり

島宮

勅撰名所集、大和國と見へたり

同島の宮上の池なるはな千鳥

舍人

荒備勿行そ君まさすとも

同高光吾日の皇子のいましせは

同

島の御門はあれさらましを

勾池

八雲御抄、大和國と云々

同島宮勾の池の放鳥

人目に戀て池にかつかす

澄月歌枕

うへこほり底は霜をく島の宮

まかりの池の秋の夜の月

眞名池

勅撰名所高市郡云々勾池同所歟

萬葉

鳥宮のまなの池なるはなち鳥

ひとめにこひて池にくらはす

右橘の島の宮又鳥宮勾池眞名池たづねしに所し
れず島の宮の詞にまかせ爰にあらはす後の人添
削せらるべし

川原寺

橘寺の二町ばかり北むかしの礎石あり草室一字
古佛の二天ならびに十二天の像あり

川原寺亦是弘福寺ともいふ人皇三十六代皇極天皇重
祚ましゝて齊明天皇と申奉り三十八代にぞあた
せ給ひける此御宇元年飛鳥の川原宮にうつりおは
せしより川原寺を御建立あり書釋四十代天武天皇十四年
淨土寺ならびに川原寺に行幸なり給ひて僧衆に稻を
ほどこし給ひき同朱鳥元年新羅の客をもてなしにと
て川原寺の伎樂をつくしにはこはしめ給ひしには皇
后より稻五十束施入あり同五月帝の御やまひやすか
らざりしかば樂師經會をつとめられ六月燃燈供養九
月親王已下爰につどひて天皇の御病の誓願あり日本紀
其後世々を経て五十三代淳和天皇弘仁九年弘法大師

高尾山より高野山にかへりなんのよしきこえしかば
太上天皇川原寺を大師に給はらせて高皇より都にか
よひ給ふ道のやどり所にせられよとの勅あり鏡水しか
ありて寺の東南院に大師おりゝ住おはせしぞかし
その院はほどふるまでものこり侍りしが定慧和尚の
住給ひし西南院はなくなりけると玉林抄に見へたり
當世は名のみばかりにぞなりける齊明天皇元年より
延寶七年迄凡一千二十五年歟

海石榴市つはいち

玉林抄曰、海石の二字をうみはと讀なり豐浦の
近所にうみはの里といふ所あり通要曰橘寺の良
五六町川のはたに榴市いちといふ所是なり上二字略
して榴市といふにや今この所をたづねえす

海石榴市は炊屋姫皇后の後宮の別業也海石榴市宮と
ぞいふなる抄玉林又守屋連寺を焼佛像を難波の堀江に
しづめながら三尼の法衣をうばいとりからめとらへ
て海石榴市亭うみいちにをしこめけると日本紀に見え侍る

常林寺

川原寺の坤三町ばかり立部村に小堂あり
常林寺又は立部寺ともいふ聖徳太子四十六箇御建立
の一字なり玉林抄

山田寺

玉林抄云橋の京にあり當世山田村これなり

山田寺亦是華嚴寺といふ孝徳天皇五年蘇我山田石川
麻呂大臣天皇の御ために構造して山田寺と號せり同
年三月二十四日讒にかゝり大臣をはじめおほくの
人ほろびにけり日本紀二十五卷にくはし今只略のみ十
一面觀音菩薩をすへたり後一條院の御宇長元七年檢
校善妙僧大臣の忌日をおもひはじめて法華八講を修
行せられしとや礎今に残れり多武峯略記

藤原宮

釋日本紀曰此地定かならず玉林抄云氏族略記曰
藤原宮は高市郡鷲栖坂の北也多武峯記曰藤原の
宮は大原也今見るに後飛鳥岡本宮の舊地より民
三四町ばかり近年御造營の大織冠の大宮是也
藤原宮は人皇四十一代持統天皇飛鳥の淨御原にいま

すの時御宇四年十月高市皇子藤原の宮地を見そなは
し給ふ公卿百寮御供にしたがひき其年十二月天皇行
幸なり給ひて藤原の宮地を觀覽あり八年正月藤原宮
に行幸ましゝて同十二月にうつり給ふとなり日本紀
慶雲元年十一月はじめて藤原宮をさだめ給て宮中に
百姓一千五百五烟を入しめ布を給ふに差あり續日本紀
△四十三代元明天皇四年藤原宮炎上せり帝王編年

大原

藤原同所異名

萬葉 我里に大雪ふれり大原の 天武天皇

ふりにし里にふらまくはのち
是は清御原の宮にてよませ給ふとや

藤原

萬葉 藤原のふりにし里の秋茅子は

咲てちりにき君まちなかねて

同 吾背子がいにしへの里の明日香には

千鳥なくなり鳥まちなかねて

右明日香より藤原宮にうつりて後此歌をよめり

埴安池

萬葉

山部宿禰赤人故大政大臣藤原家の山池を讀る
いにしへのふるき堤は年ふかき

池のなぎさに水草生にけり

八隅知之わが大君の高照す日のわかみこ
龜妙の藤井が原に大御門はしめ給ひて埴安の堤のうへにあ

りたゝし見し給へれば略

同

白妙の麻の衣き埴安の御門の原に

あかねさす日のくれぬるやらん

大織冠家地

今見るに俗に誕生の地としてしげりたる岡あり其
本の埋井は産湯の井といへり思ふに藤原の御井
の清水にや侍りなんうたは左にあらはす

大織冠鎌足は和州高市郡人なり釋此郡の大原藤原の

第にして推古天皇二十一年甲戌八月十五日にむまれ

給ふ多武記おもふに推古天皇二十一年は癸酉にあたれ

り後の人さだかにせらるべし亦の説ありかまたりの

大臣むまれ給へるは常陸國なり

大鏡

△大織冠は天兒屋根命の御すゑにぞおはします天智
天皇八年十月藤原の内大臣鎌足なやみいとおもかり
ければ勅として東宮天武をかの家につかはしましたま
して大織冠と大臣の位ならびに藤原氏をぞ給はりけ
るその翌日年五十にしてうせ給ひき又五十六歳とも
あり日本紀二十七卷にくはしく見えたり此大織冠は
正一位のかうぶりにて侍ればいとほまれたかくまし
ますより大織冠といへり

藤原宮御井

萬葉

八隅知之わが大君の高照す日のわかみこ
龜妙の藤井が原に大御門はしめ給ひて埴安の堤のうへにあ

りたゝし見し給へれば日本の青香具山は日の經の

大御門に春山路しみさびたてり畝火のこの美豆山

は日の緯の大御門に彌豆山と山さひいます耳高の

青苔山は背友の大御門によろしなへ神さひたてり

名くはし吉野の山は影友の大御門に雲居にそとを

くありける高知や天の御蔭天知や日の御影の水こ

そは常にあらめ御井の清水

此歌の意は詞林採葉曰藤原宮に東西南北の大御

門を立られたり初の二つは日の經緯に依て方角を表せり後の二つは山の陰陽を定めしと見たり因^レ茲日本紀以^ニ東西爲^ニ日經南北爲^ニ日緯^一山陽曰^ニ影面陰曰^ニ背面^一是以^ニ百姓^一安居天下無事焉

藤井原 藏原御井同所

萬葉
龜妙藤井か原とよめり

夫木
紫の藤井か原の花かつら

松にや春の暮かゝるらん

後九條

衣通媛家地 所しらす

衣通媛はいとうるはしき色の衣よりとをりぬればかくこそいふなれ稚^{わか}淳^ね毛^け二岐皇子の御女なり允恭天皇の後の忍坂大中姫の御いもうとにぞいまそかりける天皇衣通媛をめし給ひしかども姉君のこゝろいかにぞやとまうきたり給はず御つかひ七度にかさなりて後舍人中臣鳥賊津使主みことのりをうけまいり衣通媛のみもとにまかりて君まうきたらせ給はずばわれかならずつみなはれなにかしたゝ爰にてこそ身をうしなひけめと庭の中に伏て七日を経たり衣通媛いな

ひがたくまうきたり給ひしかば藤原に殿屋をたてゝすへられけり天皇藤原に行幸なりまして衣通媛の消息をしのびながら垣見せさせ給ひしに衣通媛ひとり君待がほにて

わかせこか來へきよひなりさゝかにの

くものをこなひこよひしるしも

天皇此歌をきこしめしより御心にいとめでおはしまして

さゝらおかたにしきのひもとときさげてあまはねずいたゞ一夜のみ詳しくは日本紀に見えたり

法光寺 此跡所しらす

法光寺は中臣寺ともいひしが亦あらためて藤原寺ともいへり大織冠の氏寺にして大和國にあり拾芥抄

身狹桃花鳥坂墓 さかの

橘寺より西七八町ばかり俗に生ながら埋ける墳といへりおもふに倭彦命の陵にこそ侍らめ石棺あらはに見えたり

倭彦命は人皇十一代垂仁天皇の母君の御弟なり御宇

二十八年十月にかくれさせ給ひて十一月に大和國身狹桃花鳥坂の陵にこめられけりその程の世のならひにて近くつかうまつる人々をいきながら陵のめぐりに立うづみにしければ久しく死なずして朝夕に泣かなしぶ事かぎりなし終に命たえて爛ぬればいぬ鳥などあつまりきつゝ噉けり天皇泣さまよう聲を御心に悲傷なりとおぼしめさせて是古風ながらいとよからず今より後なす事なりれと群卿に詔し給ひき日本紀延寶七年迄凡一千五百四十一年歟

此倭彥命の陵より西の田中に俗に鬼の魚板まないたといふ大石ありなを西に鬼の雪隠といふなるものあり今みるに鬼の魚板も雪隠も石櫃又石蓋にて侍るいかにくだれる世なればにやいととおほけなき名をばいひけるぞかし此邊に陵と見へし所々あまたありたい名のみを左にあらはす

桃花鳥坂上陵

人皇二十九代宣化天皇は大和國高市郡身狹桃花鳥坂上陵なり延喜式御宇四年二月御年七十三にして崩御なり給ふ十一月に此陵にかくし奉る皇后橘皇女其婦子

を此陵に合葬せしなり日本紀延寶七年迄凡一千百四十一年歟

桃花鳥田丘上陵

桃花鳥田日本紀つぎはなとりだ桃花鳥田鏡桃花鳥田帝王御年古事

桃花鳥田立上陵は人皇二代綏靖天皇をかくし奉る大和國高市郡にあり延喜式御宇二十三年五月崩御なり給ふ御年八十四日本紀又四十五古事翌年此陵に葬奉る日本紀延寶七年迄凡二千二百二十八年歟

此西に俗に鬼頭田くじたと云ありその田の中に石もて作れる頭二つその刻なせる様つねのものとも見へず一つは大きにして炎王の顔に似たり一つは法師の頭なり猶西の高き岡の上に俗に耳無の池といふ有めぐりに石をたゝみ水を湛たりいとおほつかなし耳無の池は十市郡耳無山の麓にこそ侍れ思ふに陵の石棺の蓋なくなりしに自から水のたゝへければかくはいひなしけると見へたり此邊に岡山ありいたゞき平にして末ははるかにつゞけり俗にむかしの湯起請のはじめの所といへりおもふにしからば味樞丘あまかしのうきなるべし

あまかしのを
味樞丘

此味樞丘をおもふに是より十四五町北についき
て豊浦寺のほとり飛鳥川に到りて味樞丘にてこ
そ侍らめ飛鳥川にあまが瀬のわたりといふあり
あまかしの片言なるべし玉林抄曰甘樞嶽は豊浦
寺の東橘寺の北と云々帝王編年曰高市郡と云々
允恭天皇の御宇四年よろづの姓まことをしろしめす
事かたかりければ甘樞丘に釜をすへ神にちかひつゝ
熱湯を手してかゝげさせなんの宣勅ありしかばもろ
もろの氏姓の人湯あみ齋戒して味樞丘に行てをのを
の木綿手纏ゆふだすきをかけ釜にむかふ實なる人はをのづから
にこたなくいつはりある人はそこなはれずといふは
なししかあればいつはりある人はおどろきをそれさ
らにすゝみえずしてしりぞきに退けりをのづからに
さだまりて氏姓をいつはれる人なし日本紀是より後の
世の帝には世々に本系を奉り圖書寮に納められけり
此ちかひは釜に熱湯を沸して手にかゝげ或は斧を火
の色にやきて掌にをく本朝湯起請の初にやあらん釋
日本紀に弘仁私記天書等の證書をかきのせてくはし

くは見えたり

甘樞丘須彌山

齊明天皇五年三月甘樞丘あまかしのをのひがしの河上に須彌山を
つくれり日本紀

あまかしのを
甘樞岡谷宮門

此所は豊浦寺の近きほとりえのは井の南にあり
湯起請の所とははるかへだゝり侍ぬれども甘樞
の丘の内にて侍ぬれば爰にあらはす

甘樞岡谷宮門は皇極天皇三年十一月蘇我大臣蝦蟇の
子に入鹿臣といふありけり甘樞丘に家をつくりなら
べ大臣の家を宮門といひ入鹿が家を谷宮門と申男女
などを王子といはせたり家の外に垣かたくして門の
ほとりに兵庫ひんぐらをならべ門々に水舟をすへたりけるは
火災をおもふならんつねに力人にまもらせまた五十
人の兵を身にしたがへて出入にいさゝかも立はなれ
ざりきかくてひとへに世の政をとれりきまた長直ながのちのに
おはせて大丹穂山に檜削寺ひきくしを立させさらに畝傍山あきの
ひがしに家つくらせ池をうがち城としては庫くらをかま

へ箭をつみたりけりいとこゝろだかくぞ住ける同御
宇四年六月に入鹿大臣を禁中にめしよせふかくたば
かりて討給ひけり扱蝦夷大臣誅せられなんと見えし
かば天皇の記國記珍寶ことごとく焼捨たり船史恵尺
けぶりにまじはる國記などとりあつめて中大兄に奉
りき日本紀入鹿大臣亦の名は鞍作又は太郎などゝもい
へり日本紀太子傳皇極天皇三年より延寶七年迄凡一千三十
六年歟

越智をち

湯起請の岡より西一里ばかり太平記に見えたる
越智のなにがしの住所也半道ばかり東にかの城
柳の跡などあり

小市岡上陵 附間人皇女陵太田皇女墓

越智同所越智をち延喜式

人皇三十八代齊明天皇大和高市郡越智岡上陵なり
延喜式つくし朝倉宮にして崩御なり給ひしがそのゆふ
べ朝倉山のうへより鬼大笠をきて殯屋をのぞけり天
智天皇六年二月齊明天皇又間人皇女を小市岡上陵に

かくし奉る又太田皇女を陵のまへの墓に葬奉る日本紀
延寶七年迄凡一千十四年歟

越大野このおほの

萬葉飛鳥明日香の川の上瀬に生る玉藻は下瀬になかれ
ふれふる玉藻なす中略玉垂の越の大野の朝露に人丸
同敷妙の袖かへし君玉垂の 人丸

越野を過てまたもあはのやも

右或本曰葬河島皇子越智野之之歌云々
久安百首花薄人も越野の名をしらて 中納言公能

誰まねくらん秋の夕暮

眞弓岡 越村の南眞弓村

萬葉餘所に見し檀岡も君ませは

常都御門ととのゐするかも

同鳥埴立飼之雁乃兒栖立去者

檀岡爾飛かへりこぬ

檀岡墓 それと見ゆるものも侍らす

吉備島皇祖母命檀弓崗にかくし奉る皇極天皇二年九月に崩じ給ふ日本紀

佐太岡

眞弓村のちかき坤の方に佐太村といふあり

島集

橋の島の宮にはあかすとも

舍人等

佐田の岡邊にとのゐしに行

名寄

駒なへていさ見にゆかむさた川に

えたさしかはすやまとなてしこ

冬野寺

多武岑の南冬野村この跡也

冬野寺又は妙金寺ともいへり建立の時代さだかなら

多武岑
略記

滑谷岡陵

なめはぎのやかの

冬野村のほとり俗うばそくの古墳といふ是ならんか滑谷俗なめらだにといふ

舒明天皇滑谷岡にはうぶり奉りてのち押坂内山陵にうつしかへ奉りき委くは日本紀にあり

菅丞相山庄

所しらす

昌泰元年十月十五日上天^{宇多}天皇^{天皇}御鷹狩に吉野の宮

瀧に行啓なり給ひしには貞數親王^{清和天皇}右大將菅

原朝臣^{北野}天神其外六位等二十二人つかうまつりけり上

皇寮馬にめして道すがらのてらぐを御巡覽まし

しけるには素性法師前駟にぞつかうまつりける二十

三日高市郡右大將の山庄に御一宿なさせ給ひて和歌

など侍りしよし帝王編年記にあり

小野榛原

はりはら

神樂註秘抄曰、榛^{はりはら}榛ともよめり畝傍村より坤一

里ばかり行て上のはぎもと下のはぎもとありと

聞え侍る後の人さだかにせらるべし

神武天皇海内を平給ひて天神をまつり給ふ靈囿を鳥

見山中にたてゝ其地を上の小野榛原下の小野榛原と

名づけて皇祖神をまつり給ひき日本紀上の小野にして

は天神を下の小野にしては地祇をまつり給へり釋日本紀

鳥見白山とりみのしらやま

又鳥見白庭山ともいへり所しらず

鳥見白山は饒速日尊天磐船にめして天くだり河内國
河上たかみね哮岑にいます則大和國鳥見白山にうつりいます
天磐船にめして大虚空をかけり此卿を見給ひて天降
ます即虚空そらみち見日本國と宣ふとなり此神は天照太神高
皇彥靈尊とおひともにあれましき故に天孫と中皇孫
と申奉りき舊事紀

鳥見山

鳥見山は神武天皇長髓彦とたゝかひ給ひし時金色の
靈鵄飛來り皇弓の弭にとゞまれり其鵄光かゝやく事
流電のごとしかゝりければ長髓彦軍破たり鵄の瑞を
得給ひしより鵄邑と名づけけり今鳥見といふは訛り
舊事紀

和州舊跡幽考第十六卷

高市郡

向原寺むくはら

或和尚元和年中の述作の書に向原寺の跡は曲川の邊にありと云々この義にしたがへば始め向原寺は曲川の邊にありて後石川にうつして石川の精舎といひけるにや又日本紀に守屋大連焼拂ふ體を思ふには向原寺石川精舎大野丘の塔同所のやうにも見え侍る後の人さだかにせらるべし

人皇三十代欽明天皇十三年十月百濟國の聖明王の御つかひとして西郡姫氏達卒奴唎斯致契等釋迦の金銅の像一軀はたきわがさ幡蓋經論におほくの卷を欽明天皇にぞ送り奉られけるその表讚詞

流通禮ニ拜功德ニ云是法於諸法中一最爲殊勝難解難入周公孔子尙不能知此法能生無量無邊福德

果報乃至成辨無上菩提譬如人懷隨意寶逐所須用盡依情此妙法寶亦復然祈願依情無所乏且夫遠自天竺爰泊三韓依教奉持無不尊敬由是百濟王臣明謹遣陪臣奴唎斯致契奉傳帝國流通畿内果佛所記我法東流云々

天皇叡感なのめならずまじくながら群臣に勅して西蕃より得たりつる佛の御かほいと端嚴し拜禮なまじやせまじや群臣夫我國は天地社稷の百八十神をこそまつり給べけれ他國の神をあがめ給べしやと報奏しけりたゞ蘇我稻目宿禰ひとり諸國もつはら尊敬拜禮をせりたうとませ給ひなんになにのさばかりありなんと奏しけりしかあれば稻目宿禰に佛を給はりぬ汝供養をなせよ稻目よろこびつゝ小墾田の家に安置し向原を寺となしけるが終に守屋大連寺を焼はらひ佛を難波の堀江にしづめにけり日本紀此向原寺は本朝寺院のはじめにて侍る書釋

向原寺は蘇我稻目宿禰にはじまり蘇我馬子つくりくはへて石川の精舎となし守屋大連焼はらひての後元興寺となしけるにや三代實錄曰建興寺は蘇我稻目所建云々建興寺は元興寺の異名也又三代格曰元興寺

は佛法元興之場聖教最初之地也と云々おもふに同地寺號異歟

石川精舍

玉林抄云、豐浦より西四十町ばかり蘇我大臣の領知の内にしてかの家の東なりと云々今見るに石川は西に豐浦は東にならびなを東につゞきて元興寺の跡に草室有

石川精舍は人皇三十一代敏達天皇十三年九月百濟國の使鹿深臣彌勒の石佛一軀又佐伯連佛像一軀もちて來朝せり蘇我馬子宿禰此二軀の佛をこひうけ奉りて播磨國に法師の俗にかへりし人ありけり惠使みづへとぞいひける本は高麗國の人なり是をまねきよせて法の師とさだめ司馬達等のむすめ烏女といひて年十一なるをかしらおろして善信尼とぞいひける又其弟子として漢人夜菩の女豐女かしらそりて禪藏尼といひ錦織壺がむすめ石女を尼になし惠禪尼といひて三人の尼に佛をうやまひつかうまつらせけり佛殿を家のひがしの方にかまへかの石佛を安置し三人の尼をうけよろこびて大會をとりおこなひしに司馬達等の飯のう

へに佛舍利現じ給ひしぞかしそれを馬子宿禰にまいらせけり馬子さらば試すばあらじとて鐵鎚をふりてあながちにうちたりしが鎚のみくだけやぶれて更に舍利はやぶれ給はず又水に入て見ぬれば舍利ころのまゝにうきしづみ給ひしかば是よりして馬子宿禰池邊水田司馬達等佛法をたうとみをこたりなし馬子宿禰又石川の宅に佛殿をつくりき佛の道是よりはじまりけるとぞきこえし日本

大野丘塔

石川同所也石川精舍ならびに此塔ともに守屋焼拂ふと見えたり

大野丘の塔は人皇三十一代敏達天皇十四年二月蘇我大臣馬子宿禰建立して司馬達等の得たりける佛舍利を塔の柱頭に納め奉りけりしがありしに馬子患疾したり又國に疫疾おこりて死せる人おほかりければ物部弓削守屋大連と中臣勝海太夫奏しけるは先帝より階下にいたり奉りてかくのやまひ國民にたえやらすおもふにたい蘇我臣が佛法を行ふからにあらすや帝しかあらば佛の道を斷つべしとの宣勅をうけ守屋み

づから寺に行て塔をきりたふし火をかけ佛像佛殿を
焼はらひながらその焼残りし佛像は雖波のほり江に
しづめたり其日一天に雲なくして風吹雨しきりなり
三人の尼をよび出し三衣をはぎとり海榴石市の亭に
おしこめたり扱天皇も大連も瘡といふものやみ給ひ
しが橘豊日皇子にみことのりあり瘡やみて死せるも
の國にみてるとなんその瘡のくるしき事身を焼がご
とくまたうたれくだかるゝかと泣かなしぶ老若竊相
かたりて只是佛像を焼奉るの罪ならんかしとなり六
月馬子奏聞を經る臣やまひおもくかさなるとはいへ
どもをこたる目なしたゞ三寶のちからならずはいか
でかたすかりなむ馬子に命じ給ひしはけふより後汝
ひとり佛法をたうとみさらに餘人をまじへる事なか
れすなはち三人の尼を馬子にかへしえさせ給ひしか
ば馬子いとしろこび精舎をたてゝ供養したりき其年
の八月に天皇崩御なり給ひしなり日本紀 敏達天皇十四
年より延寶七年迄凡一千九十五年歟

元興寺 附樹葉家眞神原筥田

元興寺流記曰、大野岳の北と云々或抄曰大野岳

の北は豊浦寺の東佛門也と云々元興寺は石川精
舍大野岳の塔を焼はらひし後の建立と見えたり
今見るに形ばかりなる草室に鞍作鳥のつくられ
し靈佛御膝よりうへのみのこり給ひしをすへた
てまつりき礎石所々にみえわたりたり

元興寺又の名は飛鳥寺又は法興寺亦是大樂寺又は豊
浦寺又は櫻井道場共いへり御順禮釋書緣起等に見え
たり夫法興寺の濫觴は蘇我大臣馬子おもひたちしよ
り諸皇子群臣等をすゝめて物部守屋大連を滅しなん
の謀あり則聖德太子を大將軍として攻たりけるが終
に守屋大連を迹見あとみ首赤檮誅したりけりその誓願に聖
德太子は四天王寺をつくり給ひなん蘇我大臣は飛鳥
の地にして法興寺を造營せむの願ありければ卅三代
崇峻天皇元年飛鳥ひばのの縫造ぬいぞうの祖の樹葉の家をやぶりて
寺地とせり此所は飛鳥の眞神原又飛鳥の筥田ともい
へり御宇五年十月大法興寺の佛堂歩廊ことなりたり
卅四代推古天皇元年正月佛舍利を柱の礎の中に納て
塔成就せり御宇四年伽藍つくりをはりし程に惠慈惠
聰の二法師を住しめ給へり日本紀 扱四門は南に元興寺
北に法滿寺東に飛鳥寺西に法興寺の額をかけられた

御順
禮記
推古天皇四年より延寶七年迄凡千八十四年歟

△釋迦如來は人皇卅四代推古天皇十三年四月帝丈六の銅像ならびに繡佛をの／＼一軀をつくり給なんと鞍作鳥を佛工にぞさだめられける此造佛の事を高麗國の大興王つたへきこしめして黃金三百兩を獻せられしなり御宇十四年佛成給ひつれども元興寺の金堂の戸より佛像たかくまし／＼ければ納めえなん事をしらす工人どもたゞ堂の戸をこぼちなんと議したりしが鞍作鳥工すぐれにたればやすらかに納めすへ奉りき光銘曰推古天皇十三年歲次乙巳四月八日戊辰以銅二萬三千二百斤金七百五十九兩敬造釋迦丈六像銅繡並狹侍等云々延寶七年迄凡千七十五年歟其後齊明天皇三年須彌山のかたちを寺のにしにかまへて盂蘭盆會あり日本本朝のはじめに侍るならんかし天武天皇六年に一切經を讀誦ありしには帝寺の南門にして三寶を拜禮まし／＼亦帝の玉體安和にといのり給ひしには珍寶を施入あり持統天皇元年には天武天皇の御衣をもて袈裟となし人別に一領づゝを施し給ひけり日本人皇五十四代仁明天皇承和十年には油・斛正稅三百束を施入まし／＼て六月十五日萬

花會十月十五日下午燈會恒例として勤修すべきの宣下を給はる續日本紀たゞ是佛法最初の寺に侍ればなり貞觀四年の官符にのせられし詞

此寺佛法元興之場聖教最初之地也去和銅三年帝都遷平城之日詣寺隨移件寺獨留朝廷更造新寺備其不移間所謂本元興寺是也三代格

△炎上は五十八代光孝天皇仁和三年十二月晦日也其後再興ありしかども衰破して名ののこりけるいつの世か再興の時ならむかし

△元興に道場法師といふありけり尾張國の人なり敏達天皇の御時とかや法師の父田に水をまかせなんとせしほどに雨ふり神鳴落たりけり其かたちおさなきものゝやうにぞ侍る鋤にてうちなんとせしにいかづち我をこゝす事なかれ此恩にはよきおのこうませなんかし楠木の舟に水をたゝへ竹の葉をうかべてわれにえさせよといふさらばとてさのごとくしてえさせぬれば雲にのり天にぞのぼりけるいく程なくおのこをうめりしにそれがかうべに蛇のまとひて尾頭はうなじのかたにぞありける年十あまりにしては方八尺の石をやすらかにぞなげける其後元興寺につかへて

ありけるが鐘樓に鬼ありて人をとる程にかねつくべ
きやうもあらざりけり此わらはしのびやかに待たり
しに鬼のきたりしかばわらはその鬼のかしら髪をと
りて引よせむとせしがかみはのこりなくぬけて鬼は
にげ行けり血をしたひてたづね行しにむかし心あし
かりし人の古塚にぞ入にき鬼のかみは寶藏に納めて
侍りけるとなり亦寺の田をつくらせけるに水をまか
せなんとせしに人々さまたげて侍れば十餘人ばかり
してになひつべき鋤がらをつくりて水口にたてたり
しかば人あまたしてぬきて捨たりけりさらばとて五
百人ばかりしてひきつべき石にて水口をせきけるに
ぞ人々おちをそれてとりもすてざりし程に寺の田は
照日にもいたまざりけり其後かしらおろしぬれば世
の人道場法師とぞいひける水鏡

眞神原

萬葉

掛文忌之伎鴨言久母綾爾畏伎明日香の眞神まこと之原爾

久堅能天津御門をかしこくもさだめ給ひて神さぶ
と磐隱座中略白妙のあさのころもき垣安の御門の原

にあかねさす日のつまくるまで中略百濟の原に神葬はふりまゐりて
葬伊座而朝毛吉木上の宮を常宮とたかくしたてゝ
神のまに／＼しづまりましぬ

萬葉

大口能眞神之原にふる雪は

舍人娘子

いたくなふりそ家もあらなくに

澄月歌枕
飛鳥風むべさえけらし今朝見れば

良清

眞神か原に雪はふりつゝ

豊浦宮とよらのみや

人皇卅四代推古天皇は欽明天皇の皇女用明天皇同母
の御妹にして敏達天皇の后にぞおはしましける敏達
用明崇峻の三帝の後豊浦宮にして卽位まし／＼厩戸
皇子を皇太子にすへ給ひながら攝政に録せられき御
宇十一年小墾田宮にうつり給ふ日本紀其後皇居を施し
給ひて寺となさせ給ひしより豊浦寺の名あり元興寺
これなり豊浦寺をよめる

壬二

かつうきや豊浦寺の竹の葉に

家隆

こほれる霜はとくる日もなし

夫木

ふりにける豊浦寺の榎の葉井に

長

明

猶白玉をのこす月影

飛鳥寺

拾芥抄云、元興寺は推古天皇始て造給ふ飛鳥井

寺又本法興寺と云々

堀川二郎
うゐの世はけふかあすかの寺の鐘を

哀いつまてきかむとすらん

名寄
いかはかり光をそへむ朝日まつ

飛鳥の寺の法のともしひ

石川百濟村 附大伴村阿田村

石川の百濟村は敏達天皇御宇もろこしの日羅といひし勇士來朝せり日本紀平氏傳などに委くあり日羅死去して後其類妻子等を石川に居らしめたりしかあれど大伴の糠手子連議て申一處にいかでをらしめなんと妻子を石川の百濟村に永手等を石川の大伴村にしこめ德爾等をからめて百濟の阿田村にぞをきける

日本紀

百濟大井宮

是も此所に侍なんかさだかにせらるべし

人皇卅一代敏達天皇元年四月百濟の大井に宮をつくり給ふ

日本紀 池田宮古事記

八年歟

城上宮

類聚名寄大和國と云々

萬葉集 磯城島の日本國に何方御念食可津禮毛無城上宮爾

大殿をつかへまつりて略

同 百濟原にたまふりはふりいまして朝もよひ木の上

の宮を常宮所とこや

飛鳥川

萬葉集

飛鳥の明日香の川の上瀬に石橋わたし下瀬にうち

橋わたし略

同 神名火山の帯にせる明日香の川のはやし瀬に

ともよめり

同 明日香川紅葉はなかる葛木の

山の木葉は今しちるらし

榮花物語

中々に定めなき世は明日香川

玉つくりなるやとゝならしや

久安首

飛鳥川波の花こそ咲にけれ

實 清

高圓の山に櫻ちるらし

千五百番

冬はたゝあすかの里の旅枕

定 家

おきてやいなむ秋の白露

拾遺愚草

飛鳥川淵瀬もしらぬ色ながら

同

都の花といつにはひけん

枕草子詞

飛鳥川淵瀬さだめなくはかなからんといと哀なり

などゝもかけり

當世飛鳥川といひつたふる所尤飛鳥寺のほとり

難波の堀江にも近くしてよせなきにしもあらず

しかあれども亦不審なきにしもあらず神名火山

の帯にをる明日香の川のとよめるをおもふに神

名火山は三輪山なるべし程はるかに北東にへだ

ゝりて三輪山は式上郡にあり又明日香川紅葉ば

なかる葛城の山とよめるをおもふに葛城山はい

とはるかの西にあたりて葛城の郡也亦高圓山たかまゝの

櫻飛鳥川に流るゝやうによめるをおもふに磯城

島の高圓山のはなの流れ來べきもたよりなし但

ならの高圓山のはな奈良の飛鳥川に流るゝをよ

めるやとおもへば正徹和尚の歌に奈良の飛鳥に

は川なきよしを詠しられたりたい管見におよぶ

べき事ならねば後の人明にせらるべし

飛鳥井

註秘抄云、大和國飛鳥川のあたり也

龍馬樂

飛鳥井にやとりはすへしおかけもよし見もひも

まむしみまくさもよし

神名火淵

此邊にやあらためらるべし

萬葉 大納言大伴卿在_ニ寧樂家思_ニ故郷歌

たゝしはし行てみてしか神名南の

淵はあさひく瀬にかはるらん

七瀬淀

所さだかならず

萬葉

明日香川七瀬の淀に住鳥も

心あればこそ波たゝさらめ

内裏名所

飛鳥川七瀬の淀に吹風の

順徳院

いたつらにのみ行月日哉

王二
春の日も今幾日とは飛鳥川

家隆

七瀬の淀にしからみもかな

飛鳥板蓋新宮附 飛鳥川原宮所しらす

人皇三十六代皇極天皇二年四月より宮より飛鳥板蓋
の新宮にうつり給ふ日本紀又三十八代齊明天皇元年十
月飛鳥板蓋（板蓋）の宮にして即位まします皇極天皇の重祚
也此冬飛鳥板蓋宮炎上せりそれより飛鳥川原の宮に
うつり給へり日本紀齊明天皇元年より延寶七年迄凡一
千二十五年か

飛鳥川邊行宮

人皇三十七代孝德天皇元年十月都を難波にうつし豊
崎宮と名づけ給ける老人等相かたりて春より夏にい
たりて鼠難波（難波）都うつしのしるしなり同二年十月
豊崎宮にうつり給ふしかあれど四年七月太子奏して
倭の京にうつし給ひなむ事をねがひ給ひしかども勅
許あらざればかひなし太子間人皇后皇弟達ともに倭

の飛鳥川邊の行宮にいたり給ふ天皇是をうらみおほ
しめして御位をさり給ひなむと山崎に宮つくりし給
ひき五年正月鼠倭の方にむらがりうつり行十月天皇
御やまひおもくわたらせ給ひしかば皇祖母尊間人皇
后太子皇弟を友なひ公卿等難波宮に越給ひて後天皇
崩御なり給ふ十二月大坂磯長陵にかくし奉り其日皇
太子皇祖母尊倭の川邊行宮に還幸なり給ふ日本紀

飛鳥都

萬葉

玉かづら絶る事なくありつゝも

人丸

やます通はむ明日香の古き都は前後略

蘇我馬子家地

所しれる人もあらず

蘇我馬子の家は飛鳥川の傍にありて庭の中に小池を
かまへ中に小島をつかせてあひせられしより時の人
島大臣とぞいひける推古天皇三十四年五月に卒去し
て桃原墓に葬りけり日本紀此桃原墓は河内東條石川に
あり東條龍山寺は蘇我大臣の寺也古今目録抄

遠明日香宮

所しらす

人皇二十年允恭天皇遠明日香宮にして即位なり給ひて此宮におはしましける古事記

難波堀江

玉林抄曰、豐浦寺の東の佛門のなをひがしに飛鳥川の西の入江是なり當世かすかにのこれり

難波堀江は守屋大連寺塔を焼ながら佛像をしづめたりし所なりむかしはいとひろく底かぎりもあらざりしかば海にたとへ浦にことよせて或は豐浦といひ又難波江ともいひつたへしなり玉林抄佛像を捨ける入江は攝津國ならんか又善光寺緣起に攝津國難波浦にして佛をとり奉ると云々たゞ管見にさだめがたし後の人あきらかにせらるべし法隆寺の舊説大和國難波江決定に侍ればうたがひもなきものならんか

劔池

平氏傳曰、高市郡難波劔池云々所をしらず

應神天皇十七年十月に池をほり劔池と號せり日本紀此

時輕池もほりたり日本紀

△舒明天皇七年七月此池に一莖に花二ふさの蓮花咲

けり日本紀亦皇極天皇三年六月一莖に二つの萼の蓮華咲けり豐浦の大臣が將來の瑞なりとて金墨にかきて大法興寺の丈六の佛に奉れり日本紀

萬葉

御佩乎劔の池の蓮葉に淳水の行衛なみわかため時にあはむとあひたる君を莫寢等母寸巨勢友吾情清隅の池の池の底吾はしのびすたゝにあふまでに

清隅池

萬葉

仙覺抄大和國と見えたり我心清すみの池の池の底

堀川二郎
みきはには立もよられす山かつの
我はしのひすたゝにあふまで

かけはつかしき清澄の池

顯 仲

孝元天皇陵

孝元天皇は陵大和國高市郡劔池島上陵也延喜式日本紀亦劔池中岡上陵古事記御宇五十七年に崩御なり給ふ御年百

十七開化五年二月に此陵にかくし奉る日本紀延寶七年迄一千八百三十五年歟

榎葉井

豊浦村の民屋のしりへにありてむかしの井はを
のづからにうづもれ果その名残とてかすかの清
水ながれたり俗に近衛の瀧といふ

無名抄云宮内卿有賢朝臣時の殿上人七八人あひと
なひて大和國かづらきのかたへあそびにゆかれたる
事あり其時ある所にあれたる堂のおほきにやうく
しきが見えたればあやしくて其名をあふ人ごとにと
ひけれどしれる人もなかりけりかゝるあいだに事の
ほかに鬢髭しろきおきなひとりま見えけりこればし
もやうあらむとてたづねければ是をばとよらの寺と
ぞ申といふ人々いみじき事やかへすく感じてさ
るにてはもし此邊にえのは井といふ井やあるとたづ
ねしにみなあけて水も侍らねど跡は今に侍りとて堂
より西いく程ならぬ程にゆきてをしへければ人々興
に入てやがてそこにむれゐてかづらきといふ歌數十
返うたひて此おきなにきぬどもぬぎてかづけたりけ
ればおぼえぬ事にあひてよろこびかしこまりてさり
にけるとぞ

かつらきの寺の前なるや豊浦寺の西なるやえのは
井に白玉しろくやましらずくやをしとむどと
しとんどくかしてはくにぞさかへんやわいへらそ
とみせむやをしとんとしとむとをしとむとし
とんと龍馬
樂呂

夫木

かつらきや豊浦寺の西にある

えのは井にこそ白玉しつく

櫻井

櫻井榎葉井同井異名歟後人さだかにせらるべし
續日本紀の歌に

萬城寺の前にあるや豊浦寺の西にあるやをしとん
ととしとむとさくら井に白壁しづくやよき壁しつ
くやをしとむととしとんとしかせは國ぞさかへた
はや五の家らそさかゆるやをしとんととしとんと

豊浦村社

推古天皇を祠奉りしとなりこの天皇は豊浦を皇居と
せさせ給ひしかばさも侍りなんかし

雷岡

飛鳥川の東のはたにあり俗に雷村といふかの雷爰におちけるとなん

舊傳曰雷岡は雄略天皇の御宇小予部の栖輕といふありけり帝にちかくつかうまつる人なれば大安殿にまうのぼり侍ける時帝と后とはぶれましゝければ栖輕に對面せさせ給ひなんはあるべうもなしおりふし雷天にかけり地にひゝきしかばいかに雷神をとりとめてきたれよかし栖輕宣勅を蒙りて馬を馳て阿部の山田より豊浦寺にをひ行虚空をにらまへて勅命ぞゝとよびかけて馳ぬれども磅礴としてやむことなしなを馳行て我朝の虚空なり勅命をしらずやとよびかけ行程に雷終に豊浦寺と飯岡の間にして落たりけり栖輕是を將てかへりかくと奏しぬれば覧ましますに雷神目をいからかし鱗をたてゝ異光御殿をかいやかしけり帝をそれおはしませて幣帛を供し送りかへさせ給ふそのおちつる所を雷の岡とぞいひける

萬葉

すへうきは神にしませは天雲の

雷のうへにいはりするかも

同
すへらきは神にしませは雲隱

伊香土山に宮敷坐

八鈞宮

山田寺と大原の中路大原より四町ばかり北俗にやとり村といふ

人皇二十四代顯宗天皇近飛鳥八鈞宮にして即位ましゝき紀日本三月上巳の日曲水をはじめさせ給ふ正統此宮にして崩御なり給ひしなり紀日本

矢鈞山

萬葉

矢鈞山木立も見えずちりまかふ

雪もはたらにまひてくらしくも

同
矢鈞河水底絶す行水の

つきてそこふる此としころは

蘇我稻目家地

所しらす

蘇我稻目の館は和州八鈞河の邊にあり太子傳抄

大官大寺

だいぐんだいじ

俗に講堂といふ思ふに一字の礎石はありしにかはらず残り昔の講堂の跡なればにやかくはいふならんその礎石徑六尺計柱口四尺五寸又ほとりに塔の礎あり心柱などの石よのつねのものにもあらず天香久山より十町計南也又撰集鈔通要曰大官大寺の跡は南淵川の邊なりと云々此所よりはるか南なり後人さだかにせらるべし

大官大寺は舊名百濟大寺と號して十市郡にありしを天武天皇二年に高市郡にうつし封邑七百戸公田三百町利稻三十萬束を施し加へられ大官大寺と改號せさせ給ひし後十三年を経て帝御やまひいとおもくわたらせ給ひしかば東宮草壁皇子諸王臣百宮人等をいざなひつれ大官大寺にまうで給ひて玉體安平をいのり給ふもし定業たらんには三年の寶算をのべさせ給へとの誓願空しからず帝瑞夢を蒙らせおはしましてすみやかに御平復ならせ給ひしが三年の暮行空は夢路よりもやすかりければ終に藤原宮にして崩御なり給ふ日本紀曰淨御原宮持統天皇相つたへて舊をあらため洪鐘をあらたになし種々の施入千僧の齋會こよなき尊敬にぞ侍りける文武天皇なをたうとみおはしまして九重

の塔をたて施入かすをつくし五百僧の會をつとめ給ひけり天智天皇進感ましめて丈六の像をつくり給ひなんの御心願侍つれども良工をもとめえ給はずその夜御まぐらがみにひとりの沙門ま見えて舊佛は化人のつくる像なれば更に來たるべきにあらす良工ありとも斤斧の蹟などかなからむや畫師といふとも丹青のあやまりあるべしたゞ舊師の前に大鏡をかけ其映像を拜禮あれかし圖にあらす像にあらす其空を觀すれば法身の理也御夢覺て大鏡をかけ五百僧を供養あり其後元明天皇相つたへて添上郡にうつし大安寺と號し給へり緣起日本紀釋書水鏡等凡ことかはらず

八木村 附會武橋

當世八木村に俗にそむぼうの橋といふあり

聖德太子班鳩宮よりすちかひちを経て會武の橋

をわたり八木の里を過て橋宮にかよひ給ひしなり林玉抄

畝傍山

八木村の南一里ばかり俗に慈明寺山といふ

萬葉

思ひあまりいとすへなき玉手次

雲飛山にわれしめむすふ

家持家集

おほ空に雁を鳴なるうねひ山

御垣か原に紅葉しぬらし

△神社一座神功皇后にてましますなり毎歲二月朔霜
月初子日住吉より此山の土をとりに來りて神供に調
じけるとなり雲飛山を本鳥山ともいへりもとゝり山
麓にあり

畝傍池

推古天皇二十一年にほらせて畝傍池と號せり日本紀

片鹽浮孔宮

帝王編年曰、畝火山の北にあり今の四條村の北
皇宮の跡也

人皇三代安寧天皇二年都を片鹽にうつし浮孔宮と名
づけ給ふとなり日本紀 延寶七年迄凡二千二百二十六年
歟

神武天皇陵

うねび山のうしとら

神武天皇は大和國高市郡畝傍山の東北陵なり延喜式 又
畝火山の北白檣尾上陵ともいふ古事記 御宇七十六年三
月に橿原の宮にして崩御なり給ふ御年一百二十七歳
翌年此陵にかくし奉る日本紀 又御年一百三十七古事記 延
寶七年迄凡二千二百六十三年歟

神八井耳命陵

うねび山の北

神八井耳命の陵は大和國高市郡畝傍山の北にあり延喜式
綏靖天皇四年四月に崩じ給ふ日本紀 此命は綏靖天皇
の御兄にてまします延寶七年迄凡二千二百五十年歟

安寧天皇陵

うねび山のひつじさる

人皇三代安寧天皇は大和國高市郡畝傍山の西南蔭井
上陵なり延喜式 御宇十一年十二月崩御なり給ふ御年五
十七日本紀 又は御年四十九古事記 延寶七年迄凡二千二百
十七年歟

三山

美豆山とも澄月歌枕曰高山其讀子細あるか天香久山
畝火山耳梨山是を三山といへり

萬葉

高山は雲根火雄男志と耳梨とあひあらひき神代よりかゝるにあらしいにしへもしかにあれこそうつせみも妻をあひみつらしき近江宮天皇

反歌

同高山とみゝなし山とあひし時

たちて見にこしいなひ國はら

樫原宮

當世柏原村は畝傍山の巽にして葛上郡にあり高市郡のさかひなり此所より畝傍山につゞきてみやこなるべし萬葉集にうねび山の樫原とよめるによりて此郡にあらはず

夫樫原宮は人皇のはじめ神武天皇國々をしたがへ給ひて大和國うねび山の東南の樫原は國の埴區なればとて宮をはじめて定めさせ給ふ己未年三月なり辛酉年正月即位ましゝて元年とせり妃の蹈躡たらいすづ五十鈴媛命を皇后となし給ふ日本紀此時天照太神の靈八咫鏡ならびに草薙劍を大殿にあがめ奉り床をおなじうせさせ給ひて皇居神宮さらにへだてなし北畠准すなはち天兒屋根命の孫天種子命又天太玉命の孫天富命祭禮

をつかさどれり壬寅年神淳名川耳尊皇太子の位せさせ給ひぬ又宇摩志麻治命内物部を卒し道臣命米目部をひきゐて御宮の御門をまもりき日本紀

天祖降跡ましゝて神武天皇元年迄凡一百七十九萬二千四百七十餘歳になれり又それより延寶七年迄凡二千三百三十九年歟

萬葉

玉手次畝火の山の樫原の

ひしりの御世ゆ略

萬葉

あきつしまやまとの國の可之婆良能うねひの宮に宮はしらふとしりたてゝあめのしたしらしめける

前後略

現存六帖

秋かけて露やいそめる玉たすき

家持

畝傍の山の峯のかしはら

國源寺

此跡たづねえす

國源寺は人皇六十四代圓融院の御宇天延二年三月十一日横雲の空いとしづかなるに檢校秦善法師高市郡畝傍山の東北の道を過行しにいと老やつれたる翁の秦善法師にま見えて師爰にして國家榮福の一乘を講

せられよ我は是人皇第一の國主也常に爰にこそ住ぬ
れとて消がごとくうせ給ひしより泰善法師毎三月十
一日此所にして法華を講じけり同御宇貞元二年當國
の守護藤原國光此瑞相をつたへ聞て方丈ならびに堂
を建て觀音菩薩をすへをかれしなり多武峰
略記

懿德天皇陵

或記久米寺のたつみにありと見えたり

人皇四代懿德天皇は大和國高市郡畝傍山の南織沙谿
上陵なり延喜御宇三十四年九月崩御なり給ひしが十
月に此陵にかくし奉る日本紀延寶七年迄凡二千百五十
六年歟

久米

久米は神武天皇二年道臣命功ありしより築坂の邑を
宅地に給はり又來目いつくしみことになればとて畝
傍山より西の川邊に地を給はりしより來目邑の名あ
り日本紀

久米川

水上たかとり山より出ていぬいの方にながるゝ
なり日本紀曰一事主神雄略天皇を米目水迄をく
り給ふと云々古事記曰長谷の山口迄送り給ふと
云々しかれば久米川は長谷の山口同所かしかれ
ども長谷ははるかにへだゝり侍る

夫木御狩する君かへるとて久米川に 有 穂

ひと言主こそいてませりけれ

久米寺

畝傍山より七八町南にあり

釋迦山東塔院久米寺は久米仙人建立といへり本尊藥
師如來は久目皇子の御願なり此皇子は聖德太子の御
弟にぞおはします玉林抄抑久米仙人はきぬあらふ女の
脛のしろきを見て通をうしなひ人間にまじはりなが
らも舊友に文をつかはしぬれば前仙某とぞかゝれけ
る其後修練して空中にかけり終に飛さりき大伴仙人
安雲の仙人などいふありて爰にすみけるとなり釋書
△塔は善無畏三藏養老年中に來朝ありて米目寺に二
年住給ひしが多寶大塔高さ八丈なるを建立せられき
是は南天の鐵塔の半分のうつしなりその心柱の下に

佛舍利三粒大日藏七軸を籠をかれしか佛法傳通記其後延暦十四年弘法大師夢の告ありて久米の道場東塔の下にしてかの七軸の藏をえられたり釋書或曰舊名來目寺を弘法大師久米寺と改字せられしとなり

益田池

久米寺のほとりに花出山といふ際に益田池のありてかすかにのこれり其西につゞきて池じり村といふあり村老いひつたへてかの池の樋の口にて侍れば池尻の名ありとなりおもふに是より南半里ばかり行て碑銘をすへける石今にのこれり池尻村より爰までむかしは池に侍りなん尤廣太の池とかゝれしもおもひやられたり性靈集鈔云むかしは廣太の池たりしかども今わづかにのこれり池の左に龍海寺龍門寺龍蓋寺あり右に琴彈原白鳥陵あり南に大野臺太皇太后先大枝氏の墓平群郡にあり北に畝傍山有良に來眼寺あり坤に武内大臣の靈廟あり檜隈川ながれたりと云々おもふに尤先大枝氏の墓は延喜式に平群郡とありしかれども平群郡は此池より西北にあたれり

南といへるおぼつかなし性靈集に南の大墓ありとかき給ひしは別のつかならんか

益田池に弘法大師碑銘を立給ひし其詞性靈集につまびらかなり此所の舊名は村井といへり此池は漢直の舊宅なり嵯峨天皇日照に田のいたむ事をなげかせ給ひしかば弘仁十三年十一月前大和守藤原朝臣繩主紀伊守末等此所よろしき地なる事をわきまへしり池をほらせぬべき奏聞を経たりしにやすく勅許ありしより繩主末等眞圓律師申あはせてほらせたり大伴參議國道_{和州}大守藤廣を池の檢校職に補せられたり或人曰日照といへども田を益の功ありしより益田池と號せられけるとなり性靈集延寶七年迄凡八百五十八年歟

さはらひ卷
にくさのみ益田池のねぬなほの

いとふにはゆるものにそありける

内裏名所
思ひのみ益田池の水かくれに 順徳院

師兼千首
しらぬあやめのねにみたれつゝ
名にしあふ池の玉もに澄月も

秋や益田の光なるらん

草枕
床そうく涙身をしる世々の雨

はれす益田の池の水かさに

益田池碑銘

碑銘はなくなりて臺と見えし石あり俗に岩船といふ東西三丈二三尺南北二丈二三尺高さ二丈五六尺もやありけむ其頭に五尺五寸の穴方にして二つありふかき事三四尺ふたつの穴の中間に一尺五寸のへだてをのこせりそのけづりなせるさまなめらかにして木をはりたるにひとしかの碑銘をすへける跡と見えたり

大和州益田池碑銘并序

東大寺沙門大僧都傳燈大法師遍照金剛文并書若夫威星銀漢下灑之功深湖水天地上潤之德普故能中輟因之而鬱茂蟲叩頼之而長生至若八氣播殖五才陶沿北方之行偏居其最坎之爲德遠矣哉皇矣哉粵有_ニ益田池_ニ兩尊鼻子之州八鳥初導之國地是漢語之舊宅號則村井之故名去弘仁十三年仲冬之月前和州監察藤納言紀太守末等慮_ニ亢陽之可_レ支歎_ニ膏輿之未_レ開占_ニ斯勝處_ニ奏_ニ請之_ニ論詔即應爰則令_ニ藤紀二公及圓律師等_ニ剏_ニ功未_レ幾皇帝逝_ニ駕汾襄_ニ

藤公從_レ之辭_レ職紀守亦遷_ニ越前_ニ今上膺_ニ堯揖讓_ニ馭_ニ舜寶圖_ニ照_ニ玉燭乎_ニ二儀_ニ撫_ニ赤子於_ニ八島_ニ簡_ニ伴平章事國道_ニ代檢_ニ國事_ニ並拔_ニ藤廣_ニ任_ニ判史_ニ兩公檢_ニ校池事_ニ於焉青鳧引_ニ塊數千之馬_ニ日聚赤馬驅_ニ人百計之夫夜集既而車馬轟々而電往男女戮々而雷歸土雰々而雪積堤條忽而雲騰宛如_ニ靈神之挺_ニ垣還疑_ニ鑑之化產_ニ成也不日畢也不年造之人也辨_ニ之天也爾乃池之爲_レ狀也左_ニ龍寺_ニ右_ニ鳥陵_ニ大墓南聳畝傍北峙米眼精舍鎮_ニ其良_ニ武遮荒壟押_ニ其坤_ニ十餘大陵聯綿虎踞四面長阜灑迤龍臥雲蕩_ニ松嶺之上_ニ水激_ニ檜隈之下_ニ春繡映_ニ池觀者忘_ニ歸秋錦開_ニ林遊人不_レ倦鴛鴦鳧鴨戲_ニ水奏_ニ歌玄鶴黃鵠遊_ニ汀爭舞龜鼈延_ニ頸鮒鯉掉_ニ尾淵獺祭_ニ魚林鳥反_ニ哺泊_ニ如_ニ積水舍_ニ天疊山倒_ニ景深也似_ニ海廣也超_ニ淮笑_ニ昆明之非_ニ儔晒_ニ耨達之猶少_ニ虎嘯鼓_ニ濤則驚汰沃_ニ漢龍吟決_ニ堤則容與不_レ飽囊_ニ陸之罔象不_レ得_ニ溢_ニ其塘_ニ燠_ニ山之女魅不_レ能_ニ涸_ニ其底_ニ六郡蒙_ニ潤萬滄湯々一人有_ニ慶兆民頼_ニ之舞_ニ之蹈_ニ之詠_ニ千箱_ニ以擊_ニ腹手_ニ之足_ニ之唱_ニ萬歲_ニ而忘_ニ力歎_ニ蒼海之數變_ニ索_ニ銘詞乎余筆_ニ貧道不才當_ニ仁固辭不_レ能課_ニ虛吐_ニ章廼爲_ニ銘曰

希夷象帝 一未萌 盤古不出 國常無生

元氣倏動 葦芽乍驚 八風扇鼓 五方縱橫

日月運轉 山河錯峙 千名森羅 萬物難起

藤膚既隱 稷稂爰始 天地人地 灑霽功似

前堯後禹 慮厚恤人 智略廣運 慈悲且仁

機事不測 成功若神 潤物如雨 榮人似春

綸繖雷震 有司創功 紀藤蘿草 果績圓豐

伴相施計 原守在公 良才奇術 民具靡風

爰有三坎 其名益田 掘之人力 成也自天

車馬霧聚 男女雲連 歸來似子 畢功不年

深而且廣 鏡徹紺色 湜澹渺瀾 瞻望罔極

百溪之宗 萬派之職 魚鳥涵泳 虬龍斯匿

畎澮汎溢 留畬播殖 萐萐我執 穰々我穡

如抵如京 足兵足食 井田我事 堯帝何力

屯倉 みやけ 所しらす

垂仁天皇廿七年米目邑にして屯倉をたつる 日本 屯倉

は天子の米廩也 釋曰 延寶七年迄一千五百四十二年歟

武内宿禰墓

性靈集鈔曰、益田池の坤にありと云々今たづねしに所をえず

武内宿禰は人皇十七代仁德天皇七十八年に卒去せり 日本 齡つもりて三百五十歳にぞ侍る抑宿禰は人皇八

代孝元天皇の孫男武雄心命の子なり代々の帝につかうまつりけり 姓氏錄 延寶七年迄凡一千二百九十年歟

鳥屋村

池尻村坤に鳥屋村とてあり

雄略天皇十年九月身狹村主青といふ人吳の鵝二羽を奉る筑紫にして此鵝を水間君の大噉死しつ水間の君鴻十羽と養鳥人とを奉りて罪をかなしみき天皇ゆるし給ひてかの鳥を輕村磐余村二所にして飼給ひしなり 日本 此所にや侍りなん延寶七年迄凡一千百三十三

輕 米目村の良

萬葉

天とふや輕の道より玉田次敵火を見つゝあさもよひ紀路に入立眞土山こゆらん

天とふや輕の社の齋觀座世まであらんこもりつま

そも

輕境原宮

帝王編年曰、輕大路の西方云々今見るに大道の西天神の宮ありその所を俗にさかきばらといふ此所に寺りなん

人皇八代孝元天皇四年三月都を輕の地にうつし給ひて境原宮とぞ號せられたる日本紀延寶七年迄凡一千八百九十年歟

輕曲峽宮

かるのまがうおの

輕の町より西南五町ばかりを経て田地にまはりおさと俗よふ所ありまがりほの片言といへり

人皇四代懿德天皇御宇二年正月都を輕の池にうつし給ひて曲峽宮と號せられしなり日本紀又輕境岡宮ともいふ古事記延寶七年迄凡二千百八十八年歟

輕島明宮

帝王編年曰、高市郡と云々たづねしにしれず應神天皇御宇四十一年二月明宮にて崩御なり給ふ御

年百十一歳日本紀又百三十歳古事記延寶七年迄凡一千三百七十年

新六帖輕島の明宮のむかしより

つくりそめてし唐人の池

輕池 大輕といふ所に池あり

應神天皇十七年十月に池をほり輕池と號せり日本紀同年輕の市をはじめられたり日本紀

古來歌合鴨のたつ羽音寒けし輕の池の

上手の堤人やすくらん

師兼千首身にかへて世の治らん道もあらは

しなんいのちは輕の市人

法輪寺

緣起曰、豐浦寺の西米目寺の東なり今見るに五條野の北石川村の西の草室の藥師如來此寺の跡なり緣起曰推古女帝の御宇に賀留大臣遣唐使として唐高宗皇帝の後宮則天皇後にま見え侍るよし見えたり年暦いとおぼつかなし思ふに推古天皇崩御は戊子の年也それより二十二年を経て高

宗皇帝即位永徽元庚戌年也それより十一年を経て則天皇后即位嗣聖元甲申年也後の人さだかにせらるべし縁起の詞左にあらましあらはす

法輪寺又は輕寺共三十四代推古女帝の御宇に遣唐使賀留大臣玄理もろこしにいたりし時則天皇后の尊敬の樂師如來ぞいまそかりける其靈瑞異驗をほのゝき侍りしより宮女をたより所にして終に尊像をぬすみえて來朝して後に當寺を造營しかの像をすへ奉りしなり三十五代舒明天皇の御宇にかさねて遣唐使たりしかば則天皇后の命によりて遣唐使大臣からめられ面皮をはぎ額に燈臺をいたゝかせなどしてともし火をぞかゝげさせ給ひける程に世の人燈臺鬼とぞいひける三十六代皇極天皇の御宇かの大臣の息にてありし宰相玄光卿遣唐使たりし時燈臺鬼にま見え侍れども父とはいかでしりなんことやうの事かなとまもりつゝゐたりけり父は我子の玄光卿よと見つゝいとうれしくて一指をくひて詩句をかゝれしより父にていまそかりつるとはしりたりけりよろこびに堪ずしてともなひつゝ來朝したりと縁起に見えたり又日本紀曰朱鳥元年輕寺に封戸百戸三十年をかぎりて給はり

しとあり

陵

燈明寺塚と俗いへり石棺二つ見えたりいづれの陵にやありけむ輕の町より十町南にして大道の西也

檜隈川

歌枕曰、河内國といふ異説あれども宣化天皇の皇居檜隈廬入野宮大和國也是によりて大和國にあらはすとあり鷹取山の北に檜隈村あり村の西に檜隈川北にながれ行水上はたかとり山なり

龜山殿七百首

駒とめてしはし涼まむうちわたす

御製

檜隈川の水のゆふなみ

佐味隈

萬葉

さひのくま檜隈川に駒留て

駒に水かへ我はよそに見む

檜隈廬入野宮

ふるさ文に檜隈川の邊と見え侍れども當世所し

れず今の檜隈村は皇居の跡ならんか

人皇二十八代宣化天皇元年正月都を檜隈廬入野にうつして宮の名とさだめ給ひしなり日本紀延寶七年迄凡

一千百四十四年か

歌枕檜隈

入野の宮のさゆる日は

光俊

川瀬こほりて駒もわたらす

欽明天皇陵

此郡におほく陵侍るよしふるき文共に見え侍れども今うち見わたしに見えず後の人あらためらるべしただ名のみをしるすのみ

人皇三十代欽明天皇は大和國高市郡檜隈坂合陵なり延喜式御宇三十二年四月崩御なり給ひしが九月此陵にかくし奉る日本紀延寶七年迄凡一千百九年歟

檜隈陵上大柱

推古天皇二十八年十月砂礫をもて檜隈陵上に葺せたり則めぐりに土をつみて山をなし氏人におほせて大柱を山のうへに立させられき倭漢坂上直たてる柱すぐれておほきかりければ時の人名づけて大柱の直と

ぞいへる類聚是は御父欽明天皇の陵にや侍りなんしらす日本紀

天武天皇陵

或記曰、清見原村とて寺より半里ばかり西に陵ありと云々

人皇四十代天武天皇は大和國高市郡檜隈大内陵延喜式

朱鳥元年九月に崩御なり給ひしが持統天皇元年十月に皇太子公卿百官人等をめしつれさせならびに諸國のつかさゝ國造百姓の男女までおほせて大内の陵をはじめてきづかしめ給ひて二年十一月にこの陵にかくし奉り給ふ日本紀延寶七年迄凡九百九十四年歟

持統天皇陵

人皇四十一代持統天皇は大和國高市郡檜隈大内陵とあり延喜式大寶二年崩崩御なり給ひて同三年十二月飛鳥岡にしてけふりとのぼらせ給ふ帝王の火葬のはじめにてまします天武天皇の陵に合葬し奉る續日本紀延寶七年迄九百八十八年歟

文武天皇陵

人皇四十二代文武天皇は慶雲四年六月に崩御なり給ひて十一月に飛鳥岡にしてけぶりとなし奉り二十日檜隈安古山の陵にかくし奉る續日本紀延寶七年迄凡九百七十六年歟

吉備姫王墓

吉備姫王は大和國高市郡檜隈陵也延喜式吉備姫王は皇極天皇の母公茅渟王の御女なり

堅鹽媛陵

皇太夫人堅鹽媛は推古天皇二十年二月に檜隈大陵に改葬せられたり類聚國史堅鹽媛は欽明天皇の妃にして蘇我大臣稻目宿禰の女也用明天皇又推古天皇の母公延寶七年迄一千六十八年歟

檜隈野吳原

土佐の町と鷹取の城との中路に俗に栗原といふめる所あり吳原の片言にや

人皇十六代應神天皇二十七年二月吳の縫工女をもとめさせ給ひなんとて勅使をつかはさるゝ則高麗國にいたりしが吳の通路をしらす高麗の國王に奏しければ久禮波久禮志の二人導を副られしより吳にぞいたりつきけり吳の王にかくと奏しにたれば工女に兄媛弟媛吳織穴織の四人の婦女をぞ給ひける類聚國史しかありて婦女を將て筑紫に著岸せしに智形大神工女を乞ひ給ひしかば兄媛をぞ奉りけりそれより三人の婦女を將て津國武庫に著岸の時天皇崩御なり給ひぬれば大鷦鷯尊に奉りき吳衣縫蚊屋衣終に是よりはじまれり日本紀人皇二十二代雄略天皇十四年正月身狹村主青等どもに吳の國使將て漢織吳織ならびに衣縫兄媛弟媛を奉る住吉の津にとゞまる此月吳客道をして磯齒津路に通はしぬれば名づけて吳坂とぞいひける三月臣連にみことのりありて吳使をむかひて檜隈野に侍らしめ名づけて吳原とぞいひける日本紀推古十四年より延寶七年迄凡一千七十四年歟

子島寺

土佐の町より東七八町古堂一字四町ばかりひが

しにのぼりて開山石塔あり

子島寺は天平寶字四年三月報恩沙彌といふあり高市郡子島の神詞のほとりに伽藍を造建し一丈八尺の觀自在菩薩の像ならびに四大天王の像をすへをかれて子島寺とぞ號せられける報恩沙彌は年十五にして家をはなれ三十の年には吉野山にこもりて觀世音の咒を持し居られけるがはやく靈感をえ給ひけり天平勝寶の帝の御なやみ又長岡宮の帝のいともあやしき御病なども加持にしろしをあらはし根本咒わづかにとなへてたいらかになし奉りしかば叡感のあまり得度の名を給はりしかども辭して本山にかへる又むかひの鳳輦をたて給ふにもいなひて徒歩宮中に入られけりつゝに封戸をうけて後延曆十四年六月遷化たり釋書報恩と延鎮は同人異名なり釋書眞興法師此寺に住おはせしが後の人いとたうとみて子島の先德とぞいひける傳は釋書にあり

檜隈寺

天武天皇朱鳥元年檜隈寺輕寺大窪寺各封百戸三十年をかぎり又巨勢寺封二百戸を御寄附あり日本此寺等

の濫觴さだかにせらるべし

竹取

當世鷹取とかけり詞林採葉曰竹取の翁の舊跡は當世大和國に竹取の城とてをどろ／＼しくきこえし是也と云々竹取物語の翁は駿河國大綱の里に住し人なれば別人にぞ侍りなむ竹取の翁といふありけり季春の月に岡にのぼりてながめけるに九人の仙女にあひけり翁

萬葉死はこそあひ見すあらめ生てあらは

白髮子等におひさらめやも

又をとめ等のよめる歌九首あり委しくは萬葉集に見え侍る今かすかにあらはすものなり

壺坂寺

寺領四十五石六斗

土佐の町より南東一里ばかり

壺坂寺は又南法華寺と拾芥抄いふ本尊千手觀音菩薩は道基上人の造營なり拾芥抄開基は元興寺海辨僧正とい

へり然れども帝王編年曰文武天皇大寶三年癸卯佐伯姬足子の尼善心といふあり高市郡南法華寺を建立せ

し人なり此寺元來靈驗の蘭あれんにや若なればとて仁明天皇承和十四年十二月に定額ならびに官長の檢校たるべしとの宣下あり續日本後紀つたへ聞鎮主龍藏權現は吉野川赤根が淵の龍神にてましますとなり

壺坂より八町ばかり東に高香山と云所に五百羅漢ならびに兩界の曼陀羅を彫たる石あり

蘇我河原

八木より十五町西なり蘇我村の西のほとり蘇我川北にながるゝ水上は越智こさといふ所にて諸方の川落合といへり此所蘇我臣の家地にて侍ける十三四町北に蘇我のやしきの跡あり其西の社は入鹿大臣の靈なり蘇と宗とかよひ用るにや類聚國史萬葉集等に宗我とかけり

萬葉
眞菅吉宗我の川原に鳴衛

まなしわかせこ吾こふらくは

勾金橋宮

曲川村皇居の地といへり蘇我より乾四町ばかり人皇二十八代安閑天元皇年正月都を大倭國勾金橋に

うつして宮の名とさだめ給ひしなり日本又勾之金箸宮古事記此帝は大和國金峯山權現是なり正統延寶七年迄一千百四十六年歟

太玉神社

安房地にいます舊事紀今たづねしに所しれず

高市郡坐太玉命神社四座延喜式夫太玉神は天地剖判の

はじめ天中に生ましける神を天御中主神と申次に高

皇產神次に神產靈神古語拾遺高皇產靈神天孫幡千々姫命天

神功は神代卷につまびらか也天津彦尊之母也天忍日命大伴宿禰天太玉命齋部宿禰古語拾遺にあり

岡本天皇陵

所しらす

岡本宮御宇天皇陵は大和國高市郡にあり延喜式或抄曰

文武天皇の御父なり並知皇子尊又は草壁太子とも又

岡本天皇とも申奉る

高市宮

たけちのみや
藻鹽草大和國倭名類聚に高市郡

萬代集
しらすりし昔さへこそ戀しけれ

高市の宮に月をなかめて

高市社

高市社は甘南備飛鳥社といふ舊事紀高市御縣坐鴨事代主神社と神名帳にのせられたる是なり大己貴神高降姫を娶給ひて生まれ給ふ都味齒八重事代主神にぞまします舊事紀

△神階は貞觀元年正月二十七日從一位に叙せられき三代實錄其後をしらず

高市郡神名帳五十四座

延喜式

高市御縣坐鴨事代主神社

飛鳥坐神社四座

宗我坐宗我都比古神社二座

飛鳥山口坐神社

甘樫坐神社四座

稻代坐神社

畝火山坐神社

牟佐坐神社

高市御縣神社

鷺栖神社

巨勢山坐石棕神社

天高市神社

輕樹村坐神社

治田神社

太玉命神社四座

櫛玉命神社四座

加夜奈留美命神社

飛鳥川上坐宇須多伎比賣命神社

吳津彥神社

東大谷日女命神社

氣都和既神社

川俣神社三座

大歳神社二座

波多神社

御歳神社

於美阿志神社

瀧本神社

鳥坂神社二座

天津石門別神社

許世都比古命神社

波多瓊井神社

久米御縣神社

氣吹雷響雷吉野大國御魂神社三座

和州舊跡幽考第十六卷終

和州舊跡幽考第十七卷

宇陀郡

菟田日本紀 宇陀又は宇太延喜式 宇多倭姫世紀 宇陀倭名とも
かけり

宇陀野

宇陀の町より一里ばかり巽萩原村ありそれより一里ばかり北までをむかしの禁野といひつたへ侍れば此所にぞあらめ宇陀野は禁野に侍るよし鷹百首に見えたり

推古天皇十九年五月五日に藥狩を菟田野にし給ふ曉を時とりにして藤原の池のほとりにあつまりてそれより供奉せられしなり諸臣おもひのきぬの色心にうたがふ冠を著しをのゝ髻をさす四位は金をもちゐられ五位は豹尾六位は鳥の尾をさしけり日本紀
△貞觀二年十一月三日みことのりして源朝臣融に大

和國宇陀野を給ひしより狩しあそび給ふとなり三代實錄
萬葉
宇陀の野の秋茅子しのき鳴鹿も 丹比真人

妻にこふらく我にはまさし

草根
日の影のかたふくまでをかきりにて

鳥立尋ぬる宇陀の御狩場

宇太山うた

皇極天皇三年菟田郡に押坂直といふ人あり童子をいざなひて菟田山の雪をわけのぼる雪の中より紫の菌生出て其おほきさ六寸あまり四町ばかり上が上にぞ見えける是をとりて家にかへりければ見る人毒物にありなんとはいひあへりしかども押坂直も童もあつものとしてくひついかうばしくあぢはひことなりしかば又の日も菌をとりなんと山に分行しが一本もあらざりけり菌をくひしより病もなく壽もながし或人いはく俗に芝草をしらずして只菌とのみいへり日本紀

氷室ひやむろ

氷室の跡とていひつたへたる所もなし誠に大和國には三十餘箇所の氷室ありとかや氷室の歌お

ほく見え侍れども其所／＼をしらざれば餘は略して爰にのみあらはす

草根

都まで涼しかれとや通ふらん

宇陀の氷室にくるゝ山風

高倉山附女坂男坂墨坂

高倉山宇陀の郡に二三箇所あり然ども女坂男坂墨坂の名をよぶ所あらず先伊賀見村といふ所に國見山といふあり又勢州と宇陀の郡さかひに國見山といふあり後の人さだかにせらるべし

神武天皇菟田の高倉山の峯にして域中を見そなはし給ふ時國見岳の上に八十梟帥ありて天皇に敵し奉る女坂に女の軍男坂に男の軍を墨坂に炭を焼してをきけり終に天皇かの八十梟帥を討とり給ひき女坂男坂墨坂の名これよりはじまりたり日本紀

墨坂神

所しらす

崇神天皇九年御夢の告によりて四月一日墨坂の神を祭らせ給ふよし日本紀にくはしく見えたり

穿邑

うがちのさと

宇陀の町より巽の方二里俗に宇賀志村といふむかし凶徒を御退治の所といへり

神武天皇國々をたいらげ給ひて中州に入せ給ひなんと山路におもむかせ給ふにいと嶮絶道絶にたり爰に天照太神の御夢のをしへのまゝに八咫鳥飛來けりそれが行方にしたがひて進みおはしましゝかば終に菟田の下縣につかせ給ひしその所を菟田の穿邑と名づけたりくはしくは舊事紀日本紀等にあり

血原

ち はら 所しらす

神武天皇みことのりして天孫兄狹および弟狹菟田縣におはしましゝをめし給ひしかども弟狹はまうきて仕禮兄狹はめしにしたがひ給はずさばかれを攻よとていたく攻戦ければ兄狹をのづからおとし穴に入てをしにうたれ命をうしなひけり其屍を只にやはとて斬てけり其血のながれぬればそこを名づけて菟田の血原といふくはしくは舊事紀日本紀にあり

訶夫羅前

所しらず

かの兄宇迦斯鳴鏑をもつて待かけつゝ使^{八咫}を射た
りしがその鳴鏑の落たる地を訶夫羅前といへり古事記

八咫鳥社

菟田の町より一里長俗に鷹塚村といふ一むかし
にもやなりけん社くづれ果て礎のこれり

八鳥咫神社延喜式慶雲二年九月大倭國宇陀郡に此社を

まつれり増目本紀抑八咫鳥は神魂命孫鵬建津見命化して

大鳥のごとくかけり飛神武天皇を道引中州に人奉る

其功ならびならずとていとあつく賞し給ひき八咫鳥

の名是よりはじまりき新撰姓氏録八咫鳥は神皇產靈の靈

にてまします元々集

秋宮附笹幡

もしは明山とて宇陀の町の東に城跡あり其所に
神樂石といふあり明秋よみ同じこれらにや笹幡
宮は山邊といふ所に笹幡村といふありいにしへ
より天照太神の御鎮座所といへり此所に山邊の

赤人の石塔あり

宇多の秋宮は夫天照太神豐鋤入姫命を御杖代とせさ
せ給ひて御鎮座所をたづねめぐり給へり人王十代崇
神天皇六十年豐鋤入姫命我日足ぬと申き其時姫にて
侍る倭姫命を御杖代とさだめ是より倭姫命天照太神
を載奉り大和國宇陀の秋宮にしづめ奉り四年を經た
り其後佐々波多宮實基本紀篠幡それより伊賀國淡海國美濃
國伊勢國名野代宮同阿佐加藤方片樋宮同飯野高宮同
伊蘇宮に御鎮座ましゝて垂仁天皇廿六年十月に度
過五十鈴川上に祠奉るくはしくは倭姫世紀にあり
△泊瀬朝倉宮雄略天皇の御宇三十二年七月止由氣皇太神
但波國告佐宮よりうつり給ひて倭國宇太宮に御一宿
ましゝて伊賀國六穗宮に御二宿いましてそれより
往々の離宮にとゞまり給ひて九月に伊勢國山田原の
新殿にしづめ奉る鎮座本紀にくわしくあり

神戶かんべ

當世宇陀の町より四五町坤の方に俗に皇太神御
鎮座の跡とて小社あり其所の名を神戶といへり
天照大神宇陀の秋宮に四とせいはひ奉るの時倭國造

采女香刀比賣地口の御田を奉れり倭姫なり此所その田なるべし

朝原 所しらす

神武天皇菟田の朝原にして天か下を平給ひならの御誓あり此事委くは芳野丹生の神社の所にあらはす

竹川

所さだかならず河内國と云々但大和國宇陀郡に竹川の流あるよし舊記に見えたり河海抄一往爰に

あらはす

たけかはのはしうちいでしひとふしになど源氏物

語にもあり

河海抄紅葉はのなかるゝ時は竹川の

淵のみとりも色かはるらん

室生山 むろふ 寺領三十八石

宇陀の町より四里ばかり良室生山ふろふ延喜式のりふ檀生山さん三代實錄べんいちざん或は山一山或面一山といふ寺號は室生寺日域無双の眞言の勝地にして弘法大師萬

民衆庶の薄命をすくはんがために三國相承の重寶を納め本尊海會彼岫に安置し麓に伽藍あり佛隆寺と號す行狀此山は杉松峯をつゝみて青天つらなり巖石樹をもれて黒雲かとうたがはれ麓にめぐる川浪は春の雪のくづるゝにことならず地にみだるゝ落葉は秋の雨のふるかとあやまたれ橋をふみゆけば廬山のさびしきをおもひ山路をよちのばれば鷄足のしづけさゝながらかくやとこそおもひやられけれ弘法大師の住おはせし慈尊院は朽やらずして人すめり護摩修せられし岩巖は苔のみむして風こそやどり侍れ伽藍甍をならべて露しげく寶鐸響ありて嵐冷し斯る靈區なれば世の人女人の高野ともいへり

△寺領は興福寺の御朱印の内しかあればにや住持職は西大寺招提寺戒壇院の律宗の中にえらび興福寺の僧侶二人一夏の結番をせらるゝなり

龍穴社 りゅうけつ

室生山室生寺の鎮守にして麓にいます

龍穴社の元來は釋の慶圓室生山にとちこもる事一千日黎河橋を過行に容儀體佩果麗なる女の顔ふかくか

くして慶圓にま見え即身成佛の印明をさづけてたう
べよとてなげく慶圓あやしやとはおもひながら誰人
にいまするぞや印明をつたふるには名をしらすばあ
らじといひけり女われは是善女龍王なりしかありて
終につたへられしかばいとよろこぶけしき見えて我
過去七佛傳受皆かくこそ侍れとていとたうとがりけ
り慶圓かの女に今ははや顔かたちを見せよなどかあ
らはさぬやといへりしかばいとやすかりけりまさし
くま見えなばいかいといひながら空中にのぼり雲の
ちぎれより右の手の小指をあらはすに爪の長さ丈餘
にして五色の光あり釋是より佛法擁護の龍神として
こゝに祀けるとぞ

萬葉

日本の室生の毛桃本しけみ

我大君物をならすはやまし

鴿山ひばり

紀伊國在田郡又大和國宇太郡の兩説あり

西曼陀
羅抄

鶴山紫雲庵は中將局法如尼の閉籠の地なりそれより
つたへて尼の住院として勤行今に絶す抑中將局は横
佩右大臣豐成の息女なりしが繼母の讒にかゝりてひ

ばり山にすてられ幽谷にこもりて命を草葉の露にあ
らそひおはせしが父大臣鶴山に狩しありき給ふにぞ
不意對面して古郷にかへり給ひぬ更に厭離穢土の心
絶やらせ給はず常麻寺の實惟法師を師としてかみを
おろし善心尼と申き又改名して法如尼と申爰にいほ
りをむすびて紫雲庵と號し傾求淨土こんぐの外は心にまた
なし終に淨土曼陀羅をえて往生の素懷をとげられし
なり西曼陀
羅抄

大藏寺おほくら

宇陀の町より巽一里ばかり麓に栗野といふ所あ
りそれより坂にのぼる事八町

雲管山醫王院大藏寺は本尊藥師如來也濫觴は上宮太
子の御草創其後役小角練行の地とせられしより後は
弘法大師嵯峨天皇の勅をうけ堂宇を建立せられき嵯
峨天皇の宸筆の大藏寺の額今にあり

△靈寶あまたの中に小佛の愛染明王長二あり惠果阿

闍梨より弘法大師に附屬なり此愚染の佛身に月の上
弦には御胸より上に青色の舍利を現し下弦には御腰
より下に現し給ふおりによりて其數不定なり此尊像

の事を密宗博學の老法印にたづねしに密宗の書に見え侍りて一宗傳授の事に侍るとかや五指量の愛染と申とかたられしなり出書をしらざれば元來をしるすにたらず

宇陀郡神名帳十七座_{延喜式}

宇陀水分神社_{うだみづみ}

阿紀神社

門僕神社

丹生神社

御杖神社

棕下神社_{くろもと}

高角神社二座_{みとさか}

八咫鳥神社

味坂比賣命神社_{みとさか}

御井神社

岡田小秦命神社_{おかだ}

神御子美牟須比命神社

櫻寶神社_{うきはらみ}

劍主神社

室生龍穴神社

都賀那木神社

和州舊跡幽考第十七卷終

和州舊跡幽考第十八卷

城下郡しろのしも

屏風里 黒田村北十四五町

聖徳太子鰯宮より橘の宮にまうで給ふに道遠しとて
あらたにちかき道をひらかせ直達路すぢかみちといふ其中路に
して供御を奉るにつねに屏風をたてしより此名あり
玉林抄

黒田都

當世黒田村の近き所に宮古村といふあり是なり
黒田都は孝安天皇の御宇百二十年正月崩御なり給ひ
て其十二月人王七代孝靈天皇黒田にみやこをたて給
ひて廬戸宮といふ日本紀延寶七年まで凡一千九百五十
二年か

鏡作社 八尾村にあり

鏡作社二座一座は鏡作麻氣神此神は天糠戸命なり一
座は伊多神社此神は石凝姥命なり兼俱記石凝姥命は天
糠戸命の御子なり抑石凝姥神は天照太神岩戸にこも
らせ給ふ時天香山の銅をとりて日像の鏡をる給ひし
神なり古語拾遺

△神階は貞觀元年正月二十七日從五位上三代實錄其後の
位をしらす

鏡池

鳥井の内にあり俗に神代の鏡を給ひし時の水に侍る
よし申

堀川

みさひゐる鏡の池にすむ鴛鴦は

みつから影をならへてそすむ

韓人池をらんのいり

二階堂の南八尾村の北に唐子村といふありもし
これらにや

韓人の他は應神天皇七年九月高麗人百濟の人新羅の
人等におはせてほらしめ給ひしより韓人の池と號せ
り天皇は高市郡に都せさせ給ひて輕島の明宮におは

しましける日本延寶七年迄凡一千四百三年か
新六帖 紀 うがり 延寶七年迄凡一千四百三年か
かろしまの明の宮の昔より

つくりそめてし韓人の池

法樂寺

寺領六石四斗餘
眞言宗

黒田村のならび曾武川のひがし

法樂寺本尊は勝軍地藏尊の秘佛也此寺は孝靈天皇の
陵地にして聖德太子の開基といへりさも侍りけるに
や然ども孝靈天皇の陵は葛下郡片丘にあるのよし延
喜式にあきらけしもしは孝靈天皇の黒田の皇居の跡
にや

宮古森

大和國類聚三輪山のはるか西に宮古村といふあり

三輪の通路也

類聚 すきゆかん三輪の山へをしるしにて

宮古の森のなをな忘れそ

坂手

萬葉 みてくらを櫓より出て水蓼の穂積にいたり鳥網は

る坂門を過て石はしる甘南備山に朝宮につかへま
つりて吉野へと入ます見ればむかしおもほゆ

反歌

同 月も日もかはり行とも久に經る

三諸の山のとつ宮地みやとら

坂手村といふあり此東に蒲津村といふあり穂積
の片言か萬葉集にみてぐらをならより出てとよ
めり行路をおもふに平城宮より下津道を経て須
知加部路ぢかべちにおもむき十市郡穂積を過て式下郡坂
手にいたり芳野に越けるにや甘南備三諸の山は
三輪の社ならんか日本紀に大己貴尊我三諸山に
といまりなんと宣ひしは三輪山なり

坂手池

景行天皇五十七年九月坂手の池をほり堤の上に竹を
りへしとなり日本紀

大安寺村

大安寺は奈良の大安寺資財帳に所々十六處の庄園の
内に式下郡村屋とのせられけるは此所なり

法貴寺

寺領十七石五斗

法貴寺實相院は傳聞聖德太子の御建立なり衰破して一字残れり本曾樂師如來は百濟國より來朝といへり

齋宮

法貴寺のほとりに禿倉はこらあり俗に在五中將伊勢齋宮をいざなひつれて爰にかくしすへ長谷川黨に守護させけるより此名ありといへりいとおほつかなし太田命記曰倭笠縫邑に磯城の籬をたつる若こゝや笠縫邑ならんか齋宮のはじめなればおもひよれりもし又日本紀に泊瀬の齋宮とあり此時の野の宮にやありけんかさねてあきらかにせらるべし

笠縫邑は崇神天皇の御時代より代は十つぎ年は六百餘歳になりて神璽劔鏡と御殿をおなじうせさせ給ふ事やうやく神威をゝそれ給ひて卽位六年己丑の年神代のかゝみつくり石凝姥神の初子をめして鏡をつつしゐさせしめ天日一箇の神の初子をめして劔をつくらしめ大和の宇陀郡にして此兩種をうつしあらた

められき護身のしるしとして同殿に安置し給ふ日本正統神璽劔鏡是なり名づけて内侍所とぞいふ古語拾遺神代よりつたはりし寶鏡および靈劔をば皇女豐劔入姬命つけて大倭笠縫の邑といふ所に神籬を建て天照太神をあがめ奉る是よりして神宮皇宮各別になれりき神のをしへありて豐劔入姬命神體を頂戴てところどころをめぐり給ひけり正統記笠縫邑にまつるゆふべに人みな夜もすがら酒のみうたふ歌

宮人のおほよすからにいとほしゆきのよろしもよすからに

是を今俗うたふて

宮人のおほよのころもひさとほしゆきのよほしもおほよそのもと詞をかへたり古語拾遺

村屋神社

俗に森屋の社といふつたへきくむかし森屋のなにがしの所領の地なればそれより森屋といふにこそあらめ大安寺資財帳をみるに此邊村屋村とかきたり猶おもふに鳥居の内に中津道あり又五十町ばかりさりて大井の井手といふ所あり比叟箸陵

あり

村屋坐彌富都比賣神社延喜式此神は御靈みたまの劍にてましま

すかの劔の事は日本紀にくはしく見えたり抑神功は
天武天皇と大伴皇子の合戦に雌雄をあらそひ給ひし
時天皇方の將軍吹負ふりもの親當中道かみちをよせきたり皇子方の
將犬養連五十君中道にむかひて村屋に陣をとる別將
廬井造鯨二百の精兵を率して將軍吹負の陣にぞよせ
たりける吹負小勢にしてふせぐにたく見えける所
に大井寺の住人德麻呂等五人先陣に進みて矢じりを
そろへ透間すゐまなく射けるにぞ鯨は進みかねたりけり又
今日上道の箸陵の合戦皇子方の軍大に破しかば天皇
方の兵勝に乗鯨が軍の後をたてへだてける程に鯨が
軍勢おほくうたれ鯨は白馬にのりて落行けるが渥田
に馬を乗入引共打どもかなはざりける所に將軍吹負
あの白馬に乗る武者は廬井鯨と見るぞ討ものどもと
下知せられければ甲斐の勇士ども急に馳けるを見て
鯨馬に鞭をつよくあてゝ渥田ふかをのがれてぞ落たりけ
るそれより吹負は本陣にこそかへられければ是より先
金網井の合戦の時高市郡大領縣主許梅俄こめに口とぢて
物をいはず三日を経て後神著かきていふやう我は高市社

の事代主神又牟狹社の生雷神なり神武天皇の陵に馬
種々の兵器を奉られや天皇のまもりとならん又西の
道より敵よせきたりなんつゝしみあるべしとて則醒
たりしかあれば許梅を勅使としてかの陵をまつりな
らびに高市の社二社の神をまつり給ふ後壹伎史韓國
大坂二上を経て責きたりけり時の人二社の神のをし
へ是なりといひあへりける又村屋の神も神人に著て
吾社の中道に敵きたりなんふせがすばあるべからず
といふいく日を経ずして廬井鯨中道よりよせくる時
の人神のをしへの御詞にあへりとぞ感じける此事を
奏し奉れば則三神に位階を贈給ひしより終に軍に利
をえて不破にして大伴皇子の頸をえたり日本紀にく
はし

神山 所しらす

天平寶字二年城下郡大和神山に藤生たりその根に文
十六字の虫くひありその文字は王大則二并天下人二此
内任大平臣二守吳命二續日
本紀

三宅道

三宅郷は城下郡倭名たづねしに所にしれる人もな

し三宅は官の穀倉也釋曰本紀

父母にしらせぬ子ゆへ三宅道の

夏野の草を菜つみ來るかも

打久津の三宅の原ともよめり

打久津のみやけの野邊の朝霞

つたへし道をなとへたつらん

城下郡神名帳十七座延喜式

村屋座彌富都比賣神社

池坐朝霧黃幡比賣神社

鏡作坐天照御魂神社

千代神社

倭恩智神社

比賣久波神社

糸井神社

鏡作伊多神社

久須々美神社

岐多志太神社

服部神社二座

富都神社

村屋神社二座

鏡作麻氣神社

和州舊跡幽考第十九卷

十市郡

磐余幸玉宮 いはれさきたま 所しらす

又譯語田宮 なきた 日本 又池田宮 なきた 古事 ともいふ玉林抄曰大

佛供の東智井里を譯田 なきた といふ此所ならんか帝王

編年記曰十市郡

人皇卅一代敏達天皇四年宮をつくり給ひなむと海部

王の家絲井王の家地をうらなはせ給ひしにうらなひ

御心になひけるよし奏聞を経しより宮を譯語田に

つくり給ひて幸玉の宮と名づけ給ひし也 日本紀 延寶七

年迄凡一千百五年歟

池邊雙槻宮 なみつき

扶桑略記に十市郡雙槻宮一には磐余池邊雙槻宮

又は池邊列槻宮と云或説に高市郡とも云り玉林

抄曰雙槻宮は十市郡古老相傳曰阿倍寺の北の山猶北にして今は長門里と云是也其東に松本山有

池邊雙槻宮は橘豐日天皇 用明 二年四月磐余の川上に

して新嘗ありしよし日本紀に見えたり又二槻宮 日本紀

とかけるも此宮ぞや後の人さだかにせらるべし延寶

七年迄凡一千九十四年歟

磐余池 いはれ

履中天皇二年十一月磐余池をほらせ給ふ 日本紀

萬葉 百傳磐余の池に鳴鴨を

けふのみ見てや雲かくれなん

用明天皇陵 所しらす

人皇卅二代用明天皇は御宇二年四月に崩御なり給ひ

しが其七月に盤余池上陵にかくし奉る 日本紀 しかりあり

て後七年を経て推古天皇元年九月に河内國科長山陵 しなが

にうつしかへ奉る 玉林抄 此事古事記にも見えたり延喜

式曰用明天皇は河内國磯長原陵なり延寶七年迄凡一

千九十三年歟

磐余若櫻宮

帝王編年曰、十市郡磐余の池の里これなりと云々當世池内村といふあり

若櫻宮は人皇十五代神功皇后三年正月譽田別皇子を皇太子にたて、磐余に都を造らしめ給ふ是を若櫻宮とぞいふなる日本紀延寶七年迄凡一千四百七十七年歟

磐余若櫻宮 附市磯池掖上室山

人皇十八代履中天皇二年十月磐余に都を造り給て明る年の十一月磐余の市磯池に此池内裏の兩枝舟をうかべて遊び給ひしがおほみきに時ならぬ櫻の花ちりて御さかづきにうかべり此花の所をしらせ給はずばあらじとおほせごとさぶらひしかば長眞膽連獨花をたづねて行しが掖上の室山にして櫻をえて奉りきいと珍らしき事に興せさせ歡感ましゝて若櫻を宮の名にぞめしける日本紀延寶七年迄凡一千三百九年歟

磐余甕栗宮

帝王編年曰、十市郡白香谷是也白香谷は城上郡

にあり後の人あきらかにせらるべし

人皇二十三代清寧天皇元年磐余甕栗にして即位ましゝより爰を宮所とさだめられしとなり日本紀延寶七年迄凡一千二百年歟

磐余野

勅撰名所類字名所等に十市郡覺雅僧都百首うき人にいはれの野邊の花薄

かたよりにのみなびく君かな

磐余玉穗宮

人皇二十七代繼體天皇は樟葉宮にして即位おはしまして御宇五年に山背の筒城に都をうつされ十二年にみやこを弟國にうつし給ひしが又二十年九月大和國にうつしかへられて磐余の玉穗の宮とぞいひける日本紀延寶七年迄凡一千百五十四年か

磐余附猛田城田類枕田

磐余舊名は片居又は片立日本といふ

磐余は神武天皇己未年二月そむけるをしたがへ給ひ

なんとて大軍あまた此地に満めり舊名をあらためて磐余と號し給ふといへり又天皇嚴銃の糧をきこしめせ給ひて磯城の八十梟師をうち給ひなんとなり其八十梟帥爰に屯聚居たりしが天皇と戰あらそひしかども終にほろぼされけり是より磐余邑といふ官軍立詰の所を猛田といひ城をつくる所を域田といひ賊衆うたれて臂を枕とせし所を頬枕田といへり日本紀

八十梟帥は兼方按之凶黨八十人と云々いはめり滿のメリの二字の反はし也然あればイハレと云なるべし

土臺部

長門里のほとりに高き岡の上に平地あり土舞臺といへり櫻井の町の坤にあり詮要抄に云々三輪山の南櫻井村といふ所に土舞臺の跡ありと云々推古天皇二十年百濟國より味摩之といふ人來朝せりみづから詞に出て吳國の妓樂と舞を得たりとなりしかあらばとてわらはをあつめ櫻井村にしてならはしめ給ふ日本紀今の諸寺の妓樂の舞是なり太子傳

阿部崇敬寺

土舞臺の南にならべり寺領五石

安陪山崇敬寺智足院は大日如來を安置せり孝德天皇の御宇大化年中に建立なり又文珠堂は滿願寺と號せりむかし空中に光ありて空より石窟に物のおちける音あり只山を動し地を震しほどにあやしと見れば一寸八分の黄金の文珠の靈像にぞいます其溫なる事生ける人のごとし是を感得して安陪山に安置せし後に安阿彌におほせて佛量九尺の像をつくらしめかの靈像を眉間に彫籠たり猶それより利生夜々にあらたに効驗日々にまして奥州永井丹州切門和州安陪山本朝三文珠大士として信仰あらざるはなし緣起

△文珠大士天降給ひし石窟は堂の裏にあり名を淺古といへり

△中興開山還覺沙門は豐後の國人也承暦三年安陪山に草室をかまへ前非をかなしみ顯密をまなばれしが保延六年衆僧と共に佛號をとなへながら彌陀を瞻仰してしばらくも目をはなたす終に端居にして氣絶せり其後二十七日を経ぬれども印手更にみだれず遺言にしたがひて佛堂の下に納たり肉身やぶれず今にいますよしくはしくは釋書にあり年九十一

阿倍 夫木集に大和國

萬葉
吾妹子に不相久しも馬下の

阿倍橘の蘿の生まで

此阿倍橘の事委しくは詞林探葉にのせられたり

安倍島山

風雅集

玉勝間あべ島山の夕露に

旅ねはえすや長き此夜を

名寄
都おもふ袖もかた／＼ほしあへん 通 具

あへ島山は露ふかくして

安陪の西の田中に安倍仲磨の墳かたばかりのこ
れり

膳部村 かしこ

安陪山より二三町西むかし芹つみし所とて冷水
ながれたり

膳部村は聖德太子の妃あやしの賤女にて芹をつみて
おはせしをほの見そめ給ひしより妃となし給ふよし

能登傳にのせ侍れども信用しがたきよし玉林抄にあ
らはせりおもふに袖中抄にのせられし麻福田丸がお
もひそめし姫の芹つみ給ひし所にはあらずや法師と
なりて矩光といひし人なりくはしくは元興寺極樂坊
の所にあらはす

高屋安倍神 附下居神

高屋の屋敷は此郡松本山の東のほとりなり近年
うつしかへて高治明神の小社は谷村にあり

天安元年八月大和高屋安倍神ならびに樟橋下居神
を従五位上になし給ふ同年高屋安倍神に従四位下
を奉り給ひしよし文德實錄にあり

鏡池 安倍村東のならば

鏡池は神代に日像の鏡をみ給ひし所とかや其後城下
郡鏡作の明神のみづがきのうちにうつされけるとか
や濫觴ならびに古詠は鏡作明神の所にあり

荻田寺 あいた

阿倍の南の荻田村此寺の跡なり

萩田寺又は本願寺ともいふ長和多武岑の檢校聖昭の建立なり多武岑略記

二階堂

天香久山の北表にありて名のみばかり也
二階堂爰にして草創ありて後は山邊郡にうつしかへられたり濫觴は山邊郡にしるす

天香久山

範兼卿類聚云、此山あり所をしる人なし大和國のよしつまびらかにあり澄月歌枕曰此山あり所ならひつたふる事ありとかや披露におよぶべからずと云々興善の西一二町さりて南浦といふ所に天磐戸あり其前に榊生たり半町ばかり南に生しがりたる笹あり湯笹といふ祭禮の時かならず此榊湯笹を用る事にぞ侍る

天香山は伊豫國風土記曰天降の時二つにわかれて片端は倭國にとまり天香久山といへり片端は伊豫國伊豫郡にとまり天山といふ是なり釋曰本紀凡此山は本朝の靈山として在所陰陽家に沙汰せらるゝ山なり天

照太神岩窟に幽居六合常闇にして晝夜をわかつた高皇產靈神八百萬神を天八瑞河原に議奉りて天香具山の銅をとり日像鏡をゐさしめ麻をうへ青和幣とし穀木をうへ白和幣とし給ふ是木綿の初として一夜に蓋茂此等の儀式よりして今の世にも豊御神樂と申は是をうつしてをこなはるゝなり此心をよめる詞林採葉
白幣手榊の枝にとりかざし
顯 仲

同
くらやみの天岩戸もあけにけり
後鳥羽院

同
天にますとこよを姫のゆづかづら
はや明やすき人のうたふ神樂

萬葉
昔者之事波不知乎我見ても
かけてかすめる天香具山

久安百首
しほたるゝ海士のかこ山なにとして 隆
やゝともたゝく夜半の水鶏そ 季

建保會
香具山の瀧の水もとけなくに 好
吉野の嵩は雪消にけり 忠

白川殿七百首

かこ山の松風はやく春たちて

眞 観

波にぞかへる池のこほりは

草根

日影さす霞の衣かく山の

あまぎる雪にぬれてほすらし

香具山宮

香具山の宮は藤原の御宇天皇の離宮と見えたり其故は萬葉集第一の長歌

我大君の萬代とおもほしめしてつくられし香久山の宮代にすぎんとをもふや

香久山

大和國十市郡天のかく山にいますは櫛眞命神也釋日本紀

啼澤女神なきさはめの

啼澤女神は香山かこの畝尾丘の樹下にいます舊事紀澤女は

水神の通稱とかや

萬葉

哭澤の神社に三輪すへいのれどもいのれわが大君は高日しられぬ

興善寺香久山の麓

天香久山興善寺の文珠院は本尊文珠大士也元來をしらす帝王編年曰香久山三學院と見えたり

△寺領三十石豊臣幕下よせ給ひしより已來絶す

埴安はやす

仙覺抄藻鹽草に大和國

神武天皇の御宇天久香山はこの埴土をとり八十平瓮をみづからつくりおはしまして諸神をまはりあめがしたをしづめさせ給ふその土を取所を埴安といふ日本紀

上宮櫻井の町の南六町

上宮は聖德太子の御父にていまそかりける用明天皇かの太子をいといつくしみましたて宮の南の上宮にすへさせ給ひしより上宮厩戸豊聰耳太子と御名を日本紀又上宮太子とも申奉る玉林抄

△上宮寺の額は後鳥羽院の宸筆也上宮村に今にあり

淺古あさこ 上宮の東六七町

淺古は阿陪の文珠の降臨の地なり

陵

此邊に陵と見えしものおほし淺古村に二基櫻井より十町ばかり坤谷といふ所に一基上宮村の西の手に一陵ありあらまじなかくづれ侍りき棕橋村の北口に一基あり

倉梯宮くらはし

詮要云、多武峯の東の口倉梯の里のうちにむかしの皇居の跡とて小社ありと云々此所は上宮村より十町ばかり東に倉梯村あり

倉梯宮又は柴垣の宮ともいふ古事記人皇三十二代用明天皇二年八月倉橋にして宮つくり給ふ日本紀延寶七年迄凡一千九十二年歟

棕橋川

くらはし川水上は多武岑と音石山より出て乾にながれ行歌枕曰倉橋は丹後國駿河國にあり先達大和國と云々仙覺抄勅撰名所等大和國城上郡と

六帖云々尤川すゑ城上郡にながれ行爰にのみこもといひてし倉梯の

峯の白雲たゆたひにけり

倉梯離宮

慶雲二年三月倉梯離宮にみゆきのよし續日本紀に見えたり

倉梯齋宮

いつきのみや齋宮は天武天皇七年の春天神地祇をまつり給ひなんと天下ことく稜稜してくらはしの川上に齋宮をたて給ひて四月に行幸ありなんとありしかども十市皇女宮中にして薨給ひしより行幸もあらず神祇のまつりもやみにき十市皇女は赤穗にはうぶりたり日本紀

下居里をりのさと

棕橋村より五六町經て多武岑のひがし口

人皇三十三代崇峻天皇即位ましめて倉橋の宮をつくり給ふ日本紀此所はくらはし山の下居の原といふなる所也いみじう庭つくらせ四季にしたがひて觀覽あ

りけるとぞ七卷抄

崇峻天皇陵

多武岑の東口に此陵あり崇峻天皇の社西にむかひてあり

人皇三十三代崇峻天皇は御宇五年十一月崩御なり給ひて倉橋岡の陵にかくし奉る日本紀大和國十市郡にあり延喜式延寶七年迄凡一千八十八年歟

倉橋山

倉橋日本紀倉梯古事記椋橋三代實錄とも書けり龍岳巔より西は高市郡東は十市郡二郡に跨る山也略記

萬葉倉橋の山をたかみか夜こもりに

出くる月の片待難き

△貞觀十一年七月八日此山の岸くづるゝ事高さ二丈深さ一丈二尺其中に一鏡あり廣さ一尺七寸禁裏に奉

三代實錄

多武岑

三方に路あり東は倉橋五十餘町西は細川卅七町北山四十九町北山の通路今は絶たり略記

夫多武岑は釋書に臺山と書れたり東は伊勢の高山西

は金剛山南は金峯山北は大神山中央は多武岑也荷西記

萬葉うち手折多武の山霧しげきかも 舍人皇子

細川の瀬に波さはきける

談山妙樂寺

寺領三千石二升穀山の末寺

談山妙樂寺護國院は定恵和尚の草創なり山號或は談山又談峯又は談武峯又は多武峯又は龍岳共いふ

抑談山は中大兄皇子天智天皇と中臣の鎌子連と心をあはせて鞍作入鹿臣を誅して國をだやかにとはかりし程に

皇子を將て城の東倉橋山の峯藤花の下にして此事しのびやかにかたらひ給へば皇子いとよるこびまし

まして若我天位にのぼりなんには汝が姓をあらため

藤原とせんと宣ふその談し所なれば談峯とぞいふな

縁起又は此時談武峯と名づけ給ふ御順禮記又龍岳といふ

は此山のかたちを音石峯より見わたせば大龍起立て左を見かへるの頭腹さながらに尾足はたらくやうに

なん侍れば此名あり起縁

△十三重塔は定恵和尚の草創にして此寺のはじめなり此地底に大織冠の遺骨を納たり夫この塔は定恵和尚白雉四年にもろこしにわたり習學のみならず清涼山寶池院の十三層の塔をうつしつくり歸朝の舟にのみ給ひしかども塔材繁多にして一層はもろこしに残し白鳳七年九月日本國に著岸ありて御弟不比等に對面ありしに父大織冠は和尚在唐の時薨せられしを攝津國阿威山にはうふり奉りしよしをかたり給ひき和尚我ひそかに亡父の詞を聞く和州談峯は靈勝の區もろこし五臺山にをとらず我をかしこにはうぶりなんには子孫益さかへずばあらじとなり又我もろこしにありし時夢見るに我身は談峯に居しに大織冠ま見えさせ給ひて吾今天上に生をうくる此地に寺塔をいとなみ佛乘を修せよ其時己巳歲十月十六夜二更なり不比等先君の薨せられしも其年月日也夢の正しき感涙袖をひたし給ふしかありて和尚阿威山に行遺骸をとりにて談峯に葬かへられそのうへに來朝の塔を建らるるに一重不足をなげきをせしかばもろこしにのこりし塔材雲に乘じ風にきはひて飛來りて終に十三重

の塔ことなりしかば文珠菩薩を營作ありてすへられ書釋たり白鳳七年より延寶七年迄凡一千二年歟

△聖靈院むかし異光時々大木の邊にあらはれしより定恵和尚方三丈の御殿を建らるゝ荷西其後延喜十四

年眞昇大法師長者貞信公に訴へ奉りしかば營造あり要

又大織冠の尊像はあふみの國高男丸が所造なり荷西又檢校千滿法師つくり奉るともあり古老相傳曰

高男丸が所造の像を千滿法師のつくれる像の中に納奉りて安置せしなり後左右は定恵和尚淡海公なり神

階は正一位勳一等又延長四年に談山權現の勅號を給

ひしなり起縁

△妙樂寺は聖靈院と號し寂寞として心をすましめ樓

門軒をかさね寶藏いとたかくならびたり西に十三重の塔峨々として眼ををどろかし攝政右大臣藤原伊尹

公のたてられし常行三昧堂は世々に絶やらす定恵和尚の遺像堂如覺禪師の啓白に七十餘所諸大明神とか

かれし鎮守の社定恵和尚の草創の講堂大納言經輔卿大藏卿藤原長房の法施の温室等年かさなり代々を経

ねれども今に軒をならべたり

△定恵和尚のたて給ひし金堂實性僧都の如法堂村上

天皇の勅願たりし法華三昧堂攝政右大臣伊尹公の曼陀羅堂圓融院の勅願の普門堂座主眞昇の食堂等は年ふりぬればにやその名のみばかりぞのこりける諸伽藍はくはしく略記に見えたり

△大織冠の尊像は天下に凶事あれば破裂し給ふ先永承元年正月二十四日右の御面四寸餘破裂し給ひしより已來文治三年迄十三ケ度なり其後をしらず破裂のたびごとに奏問を経ぬれば勅使登山ありて宣命をよみ給ふにかならず愈させ給ふよししくはしくは略記にあり

△再興は人皇七十二代白河院永保元辛酉年三月五日くらはし山音石（金工）の民宅より火もえあがりて堂舎佛閣一時のけぶりとなる只是興福寺の僧の意恨をふくみ發向して火おこれりとなり（釋書寺略記）其後再興あり

△人皇七十四代鳥羽院天仁元戊子年九月十一日興福寺の衆徒蜂起して堂塔ならびに諸院諸坊等山郷（さんこう）残りなくけぶりとなりしが（略）再興あり

△人皇八十代高倉院承安三癸巳年六月二十五日興福寺蜂起して残りなく灰盡たり（略）同御宇治承元年十二月二日斧始ありて十三重の塔をたつる願主は大和國

廣瀬の住人右馬允康教なり（略）其後寛文七年御造營あり

△開基定恵和尚の墳は當寺にあり碑曰入唐求法沙門定恵和銅七年六月二十五春秋七十端座遷化矣然ども定恵和尚の墳は山城國木幡寺にあり（略）夫定恵和尚は孝德天皇の妃御著帶六月になり給ふあり天皇大織冠をめてかの妃を汝がこひぶしにえさせなん生なんに女ならば朕が子とせん男ならば汝が子とせよとの勅をうけ月滿ぬれば男ぞうまれ給ふ則大織冠の子とし沙門惠隱の弟子となしかざりををろし定恵とぞ申（釋母）は車持夫人車持國子のむすめなり（略）
△僧賀上人の墳は當寺の乾にあり此上人は參議正四位下橘垣平子也つねに名聞をいとひ位にすゝみぬる事をのぞみ給はす或時内論義の施行ありしには乞丐人にたちまじりあらそひくひなどせられたり又師にをはしき慈恵の僧正に任せらるゝの前驅にたちて干鮭を太刀に帶骨かぎりなる女牛にのるしかのみならず太皇太后の戒受あらんとあれば宮中にのほり龜語を咄（はな）てたち出られ又佛の開眼にまねけば行て口論いとやすからずして空しくかへられき其後勢州より下

向の道すがら眞裸になりて叡山にかへりそれより多武峯にこもりをはしきが衰老の時只ひとり碁盤にむかひ生けるぞ死せるぞとうちあらそふのみならず障泥をかづきて小蝶の舞に袖をかへされける程に門弟子あやしみいかなればとてたづね侍れば我いとけなかりし時此二事を人にいさめられてやめにき若一念のこりたらんには生死の執となりもやせんとかくこそはすれとこたへられけり長保五年六月八日に

みつわさす八十あまりの老の波

海月の骨にあひにけるかな

と詠じて九日には金剛印をむすび安禪として終をとる年八十七三年を経て廟をひらくに全身やぶれず色だに變せざるとかや釋書往生傳發心集増賀行業記などに見えたり

△如覺禪師の墳は俗に晝飯塚といへり此禪師の父は九條右大臣藤原師輔公母は延喜帝の皇女前齋宮雅子内親王なりわらは名はまち君とぞ聞えしおひたち給ひては高光の少將となんいひけりいと心ある人にてたれにあひ奉りたりける時にや車よりおりてふところをたかくたくみなしてしやくになしてなんと

れりけるとぞ又月のくまもなうすみのぼりてめでたきを見給ひて

かくはかり經かたく見ゆる世の中に

うらやましくもすめる月かな

とよみ給ひてその曉に出給ふて法師になり給ひにけりみかどもいみじうあはれがらせ給て

都より雲の八重たつ奥山の

横川の軒はすみよかるらん

御かへし

九重のうちのみつねは戀しくて

雲の八重たつ山はすみうし

はじめは横川にすませ給ひしぞかし後には多武峯にすみおはしましき榮花物語大鏡續世繼などにくはしく見えたり

紅葉洞

類字名所に未勘と云々多武峯に谷あり紅葉の洞

といふ

玉葉集

花衣かさゝき山に色かへて

紅葉の洞の月をなかめよ

此歌を多武岑の舊記の端に書加へて紅葉の洞は當山の異名と云り思ふに據なきにしも非ず此歌は粉川の觀音素意法師に告給ひけると玉葉集に見えたり素意法師は當山の住僧にして和歌を讀りかの法師に告させ給ふは爰の事にこそ侍なり素意法師は父は越前守懷尹母は祭主輔親の女なり

語山

藻鹽草に陸奥國と云々語山の名にたより一往あ

らはす後の人さだめ給ふべし

方輿集

小夜更て語山の時鳥

肥 後

獨ね覺の床にきくかな

兩槻宮

兩槻宮又は天宮あまつみやともいふ齊明天皇二年後飛鳥岡本宮

を起てうつらせ給ひて又田身嶺たみみねのめぐりに垣をなし

嶺の上の兩槻の樹の邊に高殿をたて、兩槻宮と號し

又天宮とも名づけ給ひき時に興事をこのみ則香山の

西より石上山にいたりて渠をほらせ二百隻にして石

上山の石をつみ流にしたがひて船をひかせて宮の東の山に石をかさねて垣となせり時人いとそしりて狂心の渠みちは民夫のくるしみやといへり渠をほりしには切夫きつ三萬餘垣をつくるにわ切夫きつ七萬餘也宮の材まき欄山らんざん椒埋さくみもれり又人そしりて石上匠をつくるをのづからに破れなんといひける日本紀

淡海公墓

此墓たづねしにしれず帝王編年に添上郡奈良に

ありと云々則其墓といふものあり然ども延喜式

江家次第に多武岑にありと侍ればうたがふべき

にあらず此所をかさねてたづね給ふべし

太政大臣正一位淡海公藤原朝臣の墓は大和國十市郡

多武岑にあり延喜式元正天皇養老四年八月一日に薨せ

りをくり名を文忠公と給ひしなり延寶七年迄凡九百

六十年歟

春井

多武岑の西のふもとにあり高市郡の内にて侍べ

けれどもしばらく多武岑によりて爰にあらず

聖德太子御産湯にとて東井千歳井赤染井のみつの井をほらせたり二つの井はかくれて春井のみのこれり人春井の靈水といふこれなり撰集鈔通要にくはしく見えたり

紫蓋寺

多武岑より五町許乾念誦屈といふ所にあり高市郡なるべけれども多武岑の山内なれば爰に顯す紫蓋寺は僧賀上人の廟所なりはじめ多武岑の講堂の下におさめたりしが後三年を経て爰にうつしかへたり上人の傳は談山妙樂寺にあらはす因如覺禪師の廟は多武峰五町ひがし飯盛塚これなり傳は妙樂寺にあらはす記略

音石寺

多武岑の東北にあり多武岑の末寺なり

音石寺又善法寺といふ千手觀音の靈應の地なり勝寶元年沙門心融の草創其後天長年中營造あり願主安部中納言入道國香記略

耳梨山

俗に天神山といふ北八木村の東にあり仙覺抄十市郡又耳高山とも青苔山ともいふ萬葉に藤原の御井の歌に見えたり耳無川麓にながれ耳無池かすかにのこれり

萬葉
高山は雲根火雄男志等耳梨とあひあらそひき神代よりかゝるにあらじいにしへも然にあれこそ虛蟬もつまをあひ見つらしき
懷中抄
あた人は耳無山の紅葉かな

まててふとしをきかてちりぬる

耳梨行宮

推古九年五月天皇耳梨の行宮に行幸なり給ふ日本紀

耳梨池

むかし女ありけり鬚兒となんいひけりおとこ三人して戀あらそふからに女せんすべをしらす扱おもふやう我身一つ消なんは露よりもかろし三人の男の心和平がたきは石のごとし終に此池にして身をぞなげけ

る三人のおとこなげきに堪ずしてよめる 萬葉集

無耳の池しうらめしわきも子か

きつゝ潜かはみつもかれなん

足曳の山かつらの兒けふゆくと

我に告せは歸りこましを

足引の玉纒の兒けふことに

いつれの隈を見つゝきにけん

耳無川

耳梨山の東の麓をながれて北に行

目なし川みゝなし川の見すきかす

ありせは人をうらみさらまし

目無川

藻鹽草には大和國と云々耳梨川詠じ合せるにま

かせて爰にあらはす目無川たづねえず

村山

山常には村山あれどとりよろふ天香具山のぼり立

國見をすれば國はらは煙立龍海原は加萬日立多都
恰何國曾蜻島八間跡能國者

高山

藻鹽草に大和國類字名所に十市郡

高山と耳梨山とあひし時

たち見に來之伊奈美國波良

澄月歌枕曰、高山歌所詠之高山其讀有子細

歟又八雲御抄又常陸國在之歟と云々今按萬葉

集第三曰丹比真人登筑波岳作歌鷄之鳴東國爾

高山佐波爾雖有云々今按是唯惣高山也非別

名者一所名歟又作別名所一と歟と云々

十市里

歟火山の乾

竹取翁物語に大和國とをちのこほりにある山寺に賓

頭盧の前なるはちのひたくろにすみつきたるをとり

てとかけり

清輔集

あふ事のとせちの里は大和川

おもはぬ中にありとこそきけ

石清水歌合

三芳野の里もとせちの山櫻

幸清法師

夕ゐる雲に色そうつろふ

此歌澄月歌枕に唯遠きをさしてよめり十市郡を

よめるにはあらずくはしくは歌枕に見えたり

多社 なほのやしろ

八木村一里ばかり北九品寺村の五六町長にあり

多坐彌志理都比古神社二座 延喜式

常磐里

藻鹽草に大和國と云々山城國に同名あり耳無山

のひがしに常磐村あり 草根

こぬ人を待とせしまの松のかけ

おなしときはの里そあれにき

穗積

俗に蒲津とかけり十市郡坤のはづれにあり

氷蓼の穂つみに通ふむら鳥は 現存六帖

立ゐにつけて秋そかなしき

竹田村 はつ村の西

大伴坂上郎女竹田庄作歌二首 萬葉

たゝならす五百代小田をかりみたり

田廬爾居者京師所念 たなせにををみやかしをほめ

隱口の始瀬山はいろつきぬ 同くちりくはつせ

時雨の雨はふりにけらしも

十市郡神名帳十九座 延喜式

多坐彌志理都比古神社二座 おほにいます

十市御縣坐神社 いはき

石寸山口神社 いはき

耳成山口神社

坂門神社

畝尾都多本神社

皇子神命神社

小社神命神社 こむと

下居神社 したな

目原坐高御魂神社二座

畝尾健土安神社 たけはたやす

竹田神社

子部神社二座 こまのふた

天香山坐櫛眞命神社 てんまのまこと

姫皇子命神社 ひめみこ

屋就神命神社 やつきの

和州舊跡幽考第十九卷終

和州舊跡幽考第二十卷

郡未考

滋岡

八雲御抄にしげ岡きの字なし藻鹽草にしげき岡
と云々勅撰名所に大和國
萬葉 滋岡に神さびたちてさかへたる 紀朝臣鹿人

千世の松の木としのしらなくに

大島岑

八雲御抄藻鹽草に倭國
萬葉 妹があたり行て見ましを大和なる

大島岑に家もあらましを

大我野

もしほ草に大和國

萬葉 山跡にはきこへも行か大我野の

竹葉薊敷いほりせりとは

御間坂池

堀川太郎百首
いせなくはひが事すともおもはまし 忠

大和なるてふみまさかの池

房

口無山

澄月歌枕
大和なる口無山の山人の

いはてそおもふこゝろひとへに

吉志美我高嶺

もしほ草に大和國

萬葉 霞ふるきしみかたけをましみと

草とるかなや妹か手をとる

樟葉宮

類字名所に河國內一説大和國

續古今 曇らしなますみのかゝみ影そふか

關白左大臣

くすはの宮の秋の夜の月

大野

八雲御抄に筑前國もしほ草倭國

萬葉

おもはぬを思ふといはゝ大野なる

三笠の杜の神ししるらみ

假寐橋うたゝねのはし

八雲御抄に大和國

夫木

君こふる泪の川の絶せねは

堅琳

なけきそわたるうたゝねの橋

上安池うへやす

藻鹽草に大和國

萬葉

上安の池の堤のかくれぬの

人丸

行衛はしらぬとねりはかよふ

打廻里うちほ

仙覺抄に大和國

春雨抄

ふたつなき月とはいはし諸人の

ならすうちはの里の卯の花

阿保山

八雲御抄に大和國

萬葉

阿保山の佐宿木の花のけふもかも

ちりまがふらん見る人なしに

安太師野あだしの

もしほ草に山城國又大和國

月清

人の世は思へはなへてあたし野の良

よもきか本のひとつ白露

經

標野しめの

類字名所に大和

拾遺愚草

久かたの天津空行月影を

定家

をのれしめ野の秋のしら露

飛羽山松

藻鹽草に大和國

萬葉

白鳥の飛羽山松の待つゝそ

家持

我戀わたるこの月比を

多奈久良能野

萬葉

手束弓手にとりもちて朝かりに

君は立いぬ多奈久良の野に

或紀伊國と云り袖中抄云手束弓とは考紀伊國風

土紀云弓のと束を大ににする也紀の關守がもつ

弓也と云々宗祇法師の國わけ藻鹽草等に大和國

ながらの池

藻鹽草に大和國

藻鹽草

あらためてたのむのみかは汲てしる

はかななからの池のこゝろを

中山

もしほ草に大和國

元輔家集

はるかにそ思ひやらるゝうとからぬ

わか中山の松の梢に

鳥栖山

とすみ

藻鹽草に大和國澄月歌枕に國未考和泉式部抄に

やまとの國

懷中抄

ふかければ聲も聞へす鳥すみの

讀人不知

やとりは山の名にそありける

絶間池

もしほ草に攝津國或大和

眞玉

戀わひておつる泪のつもりてや

常陸

あはぬたへまの池となるらん

玉井沼

もしほ草に大和國

しきしまや玉井の沼のあやめ草つらぬく千代のかす

もこそ見れ

赤膚山

あかはだ

類字名所もしほ草に大和國

夫木
紅葉するあかはた山を秋ゆけは

下照はかりにしき折つゝ

顯 仲

跡見乃丘

もしほ草に大和國

跡見庄とみのしやうを作歌

萬葉

射目たてゝ跡見の丘邊のなてしこの花ふさ手折吾
はもてなん寧樂人のため

弓削川原

澄月歌枕に河内國仙覺抄八雲抄藻鹽草に大和國

萬葉

眞鉋まがなもちゆけの川原の埋木の

あらはるましきことならなくに

見馴河

類字名所に大和國

類聚

いそけともわたりやられぬみなれ川

みなれし瀬々も面かはりつゝ

大和島

もしほ草にやまと島は日本國の總名なりいつく
とは定なきか但さして一所ある歟

夫木

天雲に岩船うけしそのかみを

おもへはつきし大和島人

常磐井入道

始見埼

八雲御抄もしほ草に大和國

大伴坂上いづみかみ郎女跡見田庄いづみかみを作歌

萬葉

妹か目を見そめしさきの秋茅子あきは

此月比はちりこすなゆめ

歸市

六百番歌合

やまと路や歸るの市女ことゝはん 季

あふにつらさをいかゝかふへき

顔池

藻鹽草に越前國又大和國

大木
我もいさ立よりてみん玉光

顔の池には水やひかると

讀人不知

木瓶宮こびんの

八雲御抄に大和國

萬葉
御食向ふ木瓶こびんの宮みやを常宮とこみやと

定めたまひてあらさほふ

鶯浦

藻鹽草に大和國或は河内國歟又曰和泉國歟

蒿里藻鹽草に大和國或は河内國歟蒿里藻鹽草に

大和國或は河内國歟能因歌枕に河内國と云々

明玉
我おもふ心もつきぬ行春を

康資王母

こさでもとめようくひすの關

多能茂池

八雲御抄藻鹽草に大和國

おりたちて引やつくさんけふをのみ

たのむの池に生る菖蒲を

宇治間山

八雲御抄仙覺抄藻鹽草類字名所并蛙抄古歌枕に

大和國然ども故法印定爲宇治間山を宇治川の

邊の様に讀れて侍りし定て子細侍りなん此宇治

間山の混亂は詞林採葉にながくと見へ侍る

持統天皇吉野宮に御幸の時

續古今
宇治間山秋風寒し旅にして

衣かすへき妹もあらなくに

佐保左大臣

獵路池かりぢ

萬葉
長皇子遊獵路池之時柿本朝臣人麻呂

馬並て御かりにたてる若草を狩路の小野に鹿こそ

はいはひふせらめうづらこそいはひもとほれ前後略

同
遠津人かり道の池にすむとりの

立ても居ても君をしぞおもふ

古詠未考

おほの路 藻鹽草に大和國或は越中國しげちとも

まきの外山 同書に大和國

孫豆山^{まこす} 同書に大和國

下檜山^{したひ} 同書に大和國下行水など、よめり仙覺抄に

津國

高瀬川 同書に大和國五月雨こも枕袖のみなど

よめり或は河内國茨田郡

きませ川 八雲御抄もしほ草に大和國

にゑ野の池 八雲御抄もしほ草に大和國

うき目の池 もしほ草に大和國あはれ世をなど、よ

めり

くにのみやこ 八雲御抄に大和國仙覺抄に山城國

甘樫宮^{つかさほ} 同書大和國

司穗宮^{つかさほ} もしほ草に大和國

和州舊跡幽考第二十卷終

跋

和州舊跡幽考者予舊友宗甫翁之所^レ作也一日翁持^ニ此書^一來被^レ示^ニ於予^一就繙^ニ閱之^一茲和之中古蹟之勝探索無^レ遺古人云西湖之勝可^レ言不^レ可^レ悉矣吾土亦然乎今見^ニ翁之志^一其可^レ謂^レ勉也翁需^ニ跋尾於予^一不^レ得^ニ固辭^一遂書^ニ數言^一以投呈焉

延寶九年辛酉夏之孟

懶齋龜藏書

堺鑑序

孔夫子曰里仁爲美誠哉斯言扶桑六十餘州最著者攝
 泉河堺也地屬畿內居接海涯風俗淳朴人物質素而
 以仁厚交是故境雖偏小名甚廣大也神廟餘輪奐之
 美人家聯鱗差之觀萬物無不悉備獨存古風者
 餘堺豈有他求子生其地長其鄉是以時々考其
 由來以示不忘只恨性魯鈍而胸無楞里智囊腹無
 邊韶經笥癡々跋々直旌寸志想其一州事迹繁多不
 堪徧探于茲舉一邑所有記其梗槩夫扶桑神國也
 是故以祠廟宮室陵墓爲始古跡寺觀爲中人物名物
 土產爲終括爲三卷號曰堺鑑案堺境也疆壤相與
 同意唐帝曰我有三鑑以銅爲鑑可視妍蚩以
 古爲鑑可識興替以人爲鑑可明得失魏徵死
 一鑑亡今日拾得以爲吾堺鑑看者無笑予謏陋幸
 甚

天和三稔龍輯癸亥夏五月望

衣笠氏一閑宗葛序

堺鑑上

○神廟

神明宮

此社ハ天照皇太神宮四社ノ中神明ハ中八幡ハ西春日ハ東其此大ノ宮ハ伊勢外宮内宮ヲ一所ニ勸請シ奉ル何ノ時ニカ勸請スト云事分明ナラズ此社内表頼オモテガキ裏ウラ間マ也毎年九月十一月各十六日ニ神主祭禮ヲ勤此神前ニ町造故神明町ト云傳リ毎年六月祓ノ爲ニ住吉ノ神與堺ニ御幸在ト云共神明ヲ恐奉遙ニ道ヲ隔テ神與ヲ供奉仕申也世俗ニ此社ヲ住吉ノ婦人ト云テ御祓ノ神與ヲ去シト云傳ルハ誤也且又本社ノ棟札ニ文祿ト云年號アリ再興ト見タリ

三村宮

南莊泉州大鳥郡鹽穴下條開口村密乘山念佛寺大寺ト

號ス鎮守三村大明神ハ舊事本紀云カケマクモ忝モ天神七代伊弉諾尊ノ御子トシテ日向國小戸ノ鹽瀬ニテ御誕生在テ其後葦原瑞森ニ移住玉フ事無量歲也御神號ヲ事勝食勝國長狹尊ト申奉鹽梅ノ事ヲ司ドリ玉フニ依テ鹽津老翁トモ名付奉然ニ人王十五代神功皇后三韓退治ノ時ハ當社明神即住吉明神ト顯玉ヒ皇后ニ力ヲ添玉ヒテ大敵ヲ討平日本ヲ安全ニ守玉フ事偏ニ當社三村大明神ノ御神力也即三韓御出陣ノ時方違アソバシケル地今田出井三國山ノ良ニ御社アリ扱御歸陣ノ砌御船九艘此堺浦ニ著シ所ヲ九艘小路ト云又船維玉フ所ヲ舳松町トテ今ニアリ明神ノ神馬御甲御銚ヲナド此地ニ於テ神ニ祝奉次ニ三村明神ト崇申神明神當津ニ御影向ノ時今ノ川尻ト申所ニテ御食ヲ進奉ル初テ口ヲ開在ケルニ依テ此堺南莊ヲ開口村ト云其時捧奉開口團子ト云今ノ御祓團子ノ事也又堺ノ木戸村原村トテアリ是ニ開口村ヲ添テ三村トシテ氏神ト崇敬シ奉ニ依テ三村大明神ト申奉木戸○原○兩村ノ跡ハ今大小路ノ西南ノ田地トナ即住吉ノ外宮トシテ明暦元年己未住吉ト一所ニ御造替アリシ事世ノ知處也此開口村ヲ堺ト申始リハ白鳳二年ト云傳タリ扱又念佛寺ト申ハ人王四十五代

聖武皇帝行基菩薩ニ勅定在テ天平十六年中申佛地ニ
開基アンバシケル因茲開山ハ行基大菩薩宗ノ祖師
ハ弘法大師也當天和三年ニ至テ九百四十年也又大寺
ト云事ハ本號ハ大念佛寺ト申シヲ世俗大寺ト呼來リ
此寺往古ハ知行モ多代々帝王勅願所トシテ綸旨アリ
院宣アリ其外ハ尊氏將軍ノ末代々御教書アリ管領衆
ノ書狀モアリ然共太閤秀吉公御朱印ヨリ大寺ノ知行
高八十石ニ減ジ御當家御代々御朱印ニモ八十石トア
ンバシ候ニ依テ猶以大寺ハ眞言宗ニテ無本寺ノ所也

大寺諸伽藍本社末社由來目錄

金堂一宇

五間中尊藥釋左釋右藥陀日光菩薩十二神將

明曆元年乙未御造

替也

三重塔一基

二間半本尊日聖德太子作

四天王寛文三年癸卯氏

子建立再興也

高樓一基

鐘時刺吏長谷川左兵衛守尙再興也

食堂一宇

本社

三村大明神

相殿南祇園牛頭天王北生玉大明神

末社

伊勢

外宮

安住寺鎮守

天神一社此社大寺ノ内安住寺ト云寺アリ本寺觀音堂ハ一亂ニ炎上スレ故今遺轉ス

荒神一社大寺地主神也神木楠アリ

馬堂明神一社大寺北門前南大小路町ノ内ニアリ

甲明神一社

稻荷一社

舟玉明神一社

戎宮一社

大黑天神一社

影向石三村大明神御影向ノ時此石ニ御腰チカ云寺ノ前ニアリ

鉢塚境ノ異角不盡庵ト云寺ノ前ニアリ

如意御前一社大寺ヨリ三町離良角向井領町ノ内ニアリ大寺ノ本社也寶曆ト云寺也

瑞森藥師堂一宇本尊ハ行基菩薩作也萬治二年己亥開帳アリ此森結界ノ地大寺ノ總所也世俗云傳ハ堀浦ノ三浦坊

ト云天狗ノ住所トカヤ道春神社老僧正谷ノ條下ノ許ニ云ク楠本紀僧正ハ入高雄峰起大慢心爲太郎坊或曰和泉堺ノ側有與紀僧正

同名者以我慢心死而爲魅考之三浦坊乎未詳

西門額密乘山竹内門圭眞尙親王御眞筆也

石鳥居額三村大明神御眞筆也

衆徒六坊并西座二坊

當寺内間詰東西南北六十間四方也

天神宮

北莊攝州朴津鄉常樂寺ノ鎮守聖廟ノ御神容ハ菅承相筑前ノ太宰府ノ謫所ニ御座時自御影ヲ彫刻シ玉フ七天神ノ其一ノ御影也延喜年中ニ當濱ヨリアガラセ玉

フ即民家ノ側ニ靈祠ヲ營構シテ庶民參詣ス一條院御宇長徳二年丙申正月十八日寅ノ一點ニ奇瑞有テ彼寶殿ノ御戸開御神體飛行シ玉ヒテ當社紅梅ノ樹頭ニ安座シ玉フ貴賤群集シテ未曾有ノ思ヲナス爾以來當寺ニ御神體鎮守セシメ昔日不意ノ災ニ罹テ烏有トナラセ玉ヒシヲ其後世人ノ手ニ渡セ玉ヒシヲ求假殿ニ舍玉ヨリ以來北莊氏子トシテ明暦三年ニ造替有シ事世ノ知處也殊ハ太閤秀吉公ヨリ以來御當家ニ至テ御朱印社領トシテ二百廿石納所ス寺内間諺東西六十三間半南北六十一間半

諸伽藍本社末社由來目錄

金堂一字七間
四面中尊彌左大右迦釋

護摩堂一字三間十二間○不動
觀音藥師元三大師

高樓一基二間
四面

連歌所一字四間半一間○每月
於是連歌發行ス

食堂一字

本社天滿天神

拜殿一字二間七間○於
片間神樂奏ス

末社

伊勢一社外宮
內宮

荒神一社

相殿春日十一面觀音表
二間入七尺五寸

大梵天王一社天神地
主也

賓頭盧一社

多賀大明神一社

大黑天神一社

熊野權現一社

辯財天一社

稻荷一社

愛宕一社

二王門表二王真隨身○表三間半入
二間○棟並正氏圓通建立

衆徒昔六并西座坊

宗ノ祖師傳教大師叡山末寺天台宗也

今池辨財天

禪通寺ト云寺ヨリ支配ス尊體ハ大和國志貴ノ麓教興寺ノ辯財天ト同作聖德太子彫刻也昔日不意ノ災ニ罹テ烏有トナラセ玉ヒシニ此池ノ水底ヨリ御手ヲ拾出奉寛永年中ニ再興シテ今京佛師ノ新作也即今池ト云所ノ北側ニ假ノ宮構アリ往古ヨリ毎年正月七日ニ禪通寺ヨリ御本體ヲ供奉シ奉テ寺僧祭禮ノ儀式ヲ調諸人參詣群集ス其晩ニ及デ御本體ヲ禪通寺ヘ還入シ奉古昔ハ此所禪通寺ノ領内タリシ時此今池ノ水ヲ近邊ノ田地ヘ水分セシ故田夫其時ヨリ崇敬セシ由來ヲ以

テ延寶八年庚申正月ニ新殿ヲ造奉トカヤ

方違大明神

本地十一面觀自在菩薩也往昔神功皇后新羅ヲ攻玉フ

時諸人天神地祇ヲ請シ玉フニ日本國中三千七百五十

餘座ノ大小ノ神祇冥道勸請ニ順出現シ玉フ就中住吉

大明神ハ副將軍トナラセ玉ヒ三韓ヲ容易ニ征伐シ玉

ヘリ是ヨリ異國吾朝ニ隨事誠ニ以テ神力ノ冥助也其

後皇后攝州住吉ニ至玉フ時爰ハマスミヨシノ國也ト

住吉明神ノ神託有シカバ皇后即西海ニ向セ玉ヒテ後

祓ヲシ玉フ時カケマクモ忝住吉明神海中ヨリ出現シ

玉ヒ神船九艘ニテ泉州堺地守ノ浦ニアガラセ玉ヒ御

鉾ヲ立サセ其ヨリ先惡神魔障ヲ拂清住吉ニ永御鎮座

有ベシトテ此勝地ニ於テ方違ノ政ヲナシ玉ヒ此地ヨ

リ住吉ニ御鎮座有シ事也末代ニ至マデ惡方ノ祟有事

ヲ人ニ知シメ魔障ヲ除シメンガ爲ニ此地ニ跡ヲ垂方

違大明神ト現シ玉フ也因レ茲家ヲ作者ハ此宮地ノ土

ヲ受其普請スル所ノ地ニ埋或旅立スル時ハ其首途ノ

席ニ置又ハ船中長途ヲ經者ハ此土ヲ持テ行也是ハ向

ヨリ向ヘ行時方違ノ守トスルナリ此札土ヲ受信心ヲ

ナス者ハ方違ノ祟災難有事ナシ毎年五月晦日ハ方違
宮ノ祭禮也因レ茲此日土粽ヲシテ諸人群集ヲナシ是
ヲ受事也常ノ日ハ別當向泉寺ニテ申受也住吉御造營
ノ時ハ此宮モ天下御建立ノ所也

戎宮 附島 芝居 水茶屋

此當境ノ濱ト申ハ王城近所ナレバ町靜ニシテ世ヲ渡
浦ノ船人マデモ平砂ノ磯ニ盃ヲ浮メ贍シヨリ以來災
殃ノ難ナクシテ其德ヲ以テ一ノ島顯濫觴ハ寛文四年
戊申八月八日ニ小島顯十一月十一日海中ヨリ龜上二
日經テ死ケルヲ十五日ニ葬龜ノ長四尺幅四箱板ノ厚
一尺此龜ヲ入ル埋所ハ橋向ニシテ別當堯識觀月院賴
辯法印加
持シテ辯財天ト崇奉ル且又石戎ノ上セ玉フ事ハ戎町
濱ノ某此浦ノ海中ニ石戎ノ在所ヲ先祖ヨリ見聞ニ及
ニ依テ島ノ顯ト又龜ノ上ニ就テ某ト浦中ノ人民ヲ語
在所ヲ尋上奉ント願シヨリ戊ノ十二月朔日子ノ刻ニ
海中ノ石戎ニ尋當テ其在所ニ幟ヲ指注連飾シテ歸シ
ニ其夜大風シテ荒玉フ三日過テ浦中ノ人夫百餘人シ
テ舉奉拜スルニ御影石ノ苦蒸貝殼取付テアリ石ノ形
ハ戎ノ體形在キ御長三尺幅三厚一尺也境ヲ得時ニ逢テ

龜宮ト同所ニ假ノ宮造ニテ日數十五日開帳シテ諸人拜ヲナス同月十七日ニ閉帳シテ其ヨリ造宮執行龜宮モ同時ニ造宮有テ別當堯識遷宮シ奉然處ニ延寶六年戊午ノ中比マデ此所ニ宮立在ケルヲ翌年己未十二月十三日宮地北ノ磯側ニ替テ宮移十八日戌ノ下刻ニシテ今宮立在也其夜モ前ノ如荒玉フ又戎ノ上ラセ玉フ海中ノ跡ハ今築地ト成リ其上ニ町屋ヲ建リ

同所芝居

延寶五年丁巳十二月末ニ芝居建テ戊午ノ正月ニ初芝居有テ群集セシニ庚申十月廿三日子上刻ニ舞臺ノ後ヨリ火出燒失ス誠ニ世俗ノ詞ニ午ハ火ニテ果ト云ニ合ルニヤ其後又興行ス

同水茶屋 并 觀音堂

延寶八年庚申ノ中秋ノ比刺吏水野氏ノ御時ニ茶屋五軒御免ヲ請誠ニ水ノ流ヲ戀茶屋行末富サカイノ浦ノ鹽茶ヲタテ、世ヲ渡舟人モ泊ノ津トナレリ戎ノ後ニ觀音堂アリ寛文十二年壬子十一月八日ニ堂建立ス此觀世音ハ聖德太子ノ御作長_{二尺}五寸ノ立像也本

ハ但馬國窟ヨリ守來テ堯識法印此所ノ別當タル故ニ一字建立シテ安置ス

○宮室

甲明神 附 馬堂

神功皇后住吉明神ヲ副將軍トシテ三韓退治有テ御歸陣ノ時明神當津海濱へ上セ玉フ砌甲ヲ神ニ祝奉ル御社ハ雛橫小路町ニ在

又住吉ノ神馬ヲ繫玉フ所ヲ神ニ祝馬堂明神ト世俗云習セリ古昔ハ大寺北ノ門前ノ宮造在ケル今宿院ノ山ノ西鳥居ノ南北ニ中興勸請ス北ハ馬堂南ハ甲社ト云習セリ又或人ノ云ク馬堂藥師ト云ルハ誠ニ靈驗新ニ御坐故ニ諸民參詣ス或時南北ノ馬借此堂ニ集リ後後ハ寄合所ト成故ニ馬堂藥師ト名付タリ所ハ今ノ雛橫小路町ノ中ニ在

宿院

此地ハ住吉明神毎年六月晦日ノ御祓御旅所也山ノ上ニ二社有北ハ檝取明神寶御前ト云リ此所へ近年勸請ス此所ノ良ニ寶藏有山ノ下ニ瑞垣ヲ廻テ空地有此中

へ御祓ノ時御輿入玉フ住吉御造營ノ時此所ノ諸式モ同ク公儀ノ御造立也南ニ堀有是ヲ飯匙堀ト世俗云來ル住吉明神ノ干珠ヲ埋セ玉フ所トカヤ此地東西南北ノ通路ノ口十一口有住吉ノ吉ト云文字ニ准タリ世ニ云傳レ共正說ヲ不レ知又宿居トモ書事有神ノ假ニ在故ニトカヤ大鳥居ノ兩脇ノ宮ノ事卷ノ端ニ記

稻荷

此社ハ櫻町鍛冶芝辻氏道逸元和年中ニ勸請中所也此地ハ台德院殿ヨリ拜領ス時ノ刺史ハ喜多見若狹守勝忠也因_レ茲芝辻ノ代々此宮地ノ領タリ

荒神堂

古昔攝州清澄寺ヨリ勸請申石體ノ荒神也御長_二幅_二厚_二八有此石ニ文字彫付有シトカヤ一亂後ニ今ノ辯財天ノ社ノ前ノ池中ヨリ掘出シ宮内ニ納即三村大明神ノ末社也然ト云共池長三宅兩氏ヨリ三村寺僧へ訴南莊大工中間へ恩借ス文明十六年甲辰十二月廿九日別所ニ移奉ル南莊樽屋町ニ勸請申シ大工中ノ寄合所トス今ニ至テ毎年十一月ノ火燒祭右ノ故有ヲ以テ三村

宮寺僧參勤ス

乳守宮

何ノ御時ニカ有ケン此森ノ地主神ヲ祝津守明神ト崇奉御社ヲ構タリシニ古昔或人ノ娘乳ノ不_レ垂ヲ歎津守ト云ヲ乳モリト聞テ此神ニ詣祈誓ヲ罹シニ靈驗新ニシテ心ノ儘乳味垂事ヲ得タリ其ヲ様トシテ祈ニ不有驗ト云事ナシ因_レ茲乳女郎ト世俗云習セリ俗說ニシテ可_レ不_レ有ニ正說ニ誠ニ神ハ人ノ敬ニ依テ威ヲ増トカヤ

○陵墓

仁德天皇陵

此陵ハ泉河攝ノ堺大小路ノ東ノ町外ヨリ八町許離タリ世人大仙陵ト云リ天皇己亥ノ歲ニ崩ズ宮廟ハ難波ノ邊高津ニ平野明神ト號ス誠ヤ諸國ヨリ來テ此陵ヲ築シニ尾州ヨリ人步遲來故其築殘ハ其儘谷トナレリ今ニ尾張谷ト云リ是俗說未_レ考ニ實否一山ノ間數ノ事摠山ノ根廻_{七百}山ノ南ノ高_{十四}北ノ高_{十六}間_{中ノ高}十_五尺_間中島摠ジテ此陵ヨリ方角ヲ取余ノ陵所記ス秀吉公度

度此陵ニテ獵シ玉フニ假ニ居ヲ構玉ヒレバ其墟ヲ今ニ茶屋山ト所ノ人云リ此近郷萬代村ト云所ニ履中反正兩天皇ノ陵アリ

田出井山

此陵菟道太子ノ陵也然ヲ誰人カ云習シテ田出井山ト云來ゾヤ未_レ見_ニ本據_ニ又三國山ト名付也摠山ノ根_{百三十}東山ノ根南北_{七十}西山ノ根_{七十}也按大鷦鷯尊ト菟道稚郎子命ト互_ニ位ヲ讓玉フニ菟道太子ハ弟タルニ依テ自思召ハ我生テ天下ヲ煩サンヨリハトテ山城國菟道里ヲ忍出玉ヒ此地ニ於テ自死玉フトカヤ即此地ニ葬奉ト申傳侍古書ニ自死玉フト云ヲ自穀味ヲ斷テ飢死玉フトモ丁簡セルトカヤ又說ニ此陵ヲ推古天皇ノ陵トモ云リ兩說ニシテ不_レ慥

武內宿禰墓

大仙陵ヨリ坤ニ當リ三國山ヨリハ午未ノ方也武内ハ應神天皇ノ臣也世人長塚山ト云リ

當津在家四所之三昧

摠ジテ堺ノ中ニ四所ノ三昧アリ湊村向井領皇子飢七度濱也是皆行基菩薩ノ開基ト云傳也中ニ就テ皇子ガウヘト云名ハ所様々ニ申傳侍昔龜山法皇毎年熊野ヘ御幸成玉フ其終路ニ九十九所ノ皇子ヲ勸請在ケルトカヤ此地ノ少西ニ當テ一皇子ノ宮居有ケル故俗此所ヲ一皇子ガ上ト云ケルカ又菟道太子此邊ニテ飢死シ玉ヒケルニヨリ皇子ノ飢死玉フ所ト云詞トモ云リ何カ是也哉否又世俗ノ口談ニ祖父ガ上ト云付ルモアリ其近所ニ少キ成谷間ノ道筋アルヲ祖母懷ト名付タリ今ニ於テ歸人小子モ能覺侍也是又一事ノ戲談也小子ナド祖母懷ト云モ物ノ形ニ似タル所成ニヤ此所ヲ戶立野ト云古歌ニ讀テアリ即古跡戶立野ノ所ニ記ス右此一巻ノ由來ヲ當津ノ古人ニ尋反古ニ書集日記ヨリ見出ス故ニ本說聊可_レ有_ニ違事_一

堺鑑 上終

堺鑑中

○古跡

莊二村五南云ニ鹽穴^{アツチ}莊開口村木戸村^〇
北莊向井領村中筋村原村^〇三ノ村是也

九艘小路 附 九本松

神功皇后三韓御退治ノ時住吉明神ハ副將軍ト成セ玉
ヒ御歸陣ノ砌御船九艘ニシテ此海濱ニ上セ御船ヲ此
所ノ松九本ニ繫玉ヲ所ヲ舢松ト云リ船ノ舢頭向故ヲ
以テ所ノ名トス其時ノ九本松在所ハ今旭蓮社ノ内地
ノ門前鎮守七社ノ外一社有ヲ九本松ノ明神ト祝奉也
然故ニ此宿院ノ邊マデモ押並テ九艘小路トハ云リ

銚塚

住吉明神御歸陣ノ砌御銚ヲ土中ニ埋玉ヲ其所ハ舢松
村ノ南ノ近邊不盡庵ト云寺ノ門前在家ノ軒端ニ塚ア
ルヲ土人銚塚ト云傳或說ニ住吉明神御歸陣ノ時御旗
ヲ立置玉ヒシ塚也其後此地モ住吉ノ末社ニテ有シト

也所ハ右ニ同又明神ノ御銚ハ住吉ノ神官方ニ今ニ寶
物トシテ傳來ス

飯匙堀

地神四代彦火火出見尊鹽津翁^{三村大}功ニ依テ海童ニ
至リ豐玉妃ト契玉ヒテ干珠滿珠ヲ引出物ニ得玉フ
トカヤ海童ヨリ還玉ヒテ干珠ハ今宿院ノ地ニ埋玉フ
其堀ノ形飯匙^{イシ}ノ如成故ニ世俗飯匙堀ト名付タリ滿珠
ハ住吉ノ新家町ノ南廻廊ノ畔玉出島ト云地ニ埋玉フ
事ハ南ハ陽ヲ取テ宿院ニ干珠ヲ埋玉ヒ北ハ陰ヲ取テ
住吉玉出島ニ滿珠ヲ埋玉フトカヤ即九月晦日ニ神輿
ヲ此所ヘ移奉モ滿珠ヲスバシメノ爲也又六月晦日ニ
神輿ヲ宿院ノ飯匙堀ヘ遷玉フモ干珠ヲスバシメノ爲
也六月九月ハ陰陽ノ御祓ト云リ 神社考住吉ノ條下
ニ云干珠滿珠ハ紀州日前ノ宮ニ納<sup>一云干珠滿珠ハ肥前國
佐予嘉郡河上ノ宮ニ納</sup>
リ^ト案ズルニ此等ノ義博雅ノ君子ノ沙汰ヲ待者也

住吉御田植勤所

例年五月二十八日住吉明神ノ御田ヲ當津津守町ノ遊
女參植初也或說ニ云何ノ帝ノ御時ニヤ後惡瘡ヲ愁玉

ヒシヲ占侍ルニ如何成宿因ニヤ諸人ニ面ヲ顯玉ハハ
可^レ有^ニ平愈^ト奏シ申ニ依テ此地マデ吟來賊者ノ手
ニ渡浮宕玉ヒシ時所願ノ爲ニ住吉明神ノ植女ニ出サ
セケレバ惡瘡程ナク平愈成セ玉フ以^レ有^ニ故今ニ此所
ノ遊女其例ヲ勤ケルト也然ニ當津遊女町ノ暖簾ニ紫
ノ耳ヲ付事不^レ成他所爲トカヤ 又或說ニ明神御
歸陣ノ時長門國ヨリ植女ヲ召列玉ヒテ五穀成就ノ爲
植サセ玉フ植女ノ子孫後ニ遊女ト成シ其例トカヤ古
昔ハ五月ノ節ニ入テ日取ヲ撰中興ヨリ二十八日ニ御
田植ヲ相定植女ハ賀茂ニモ其例アルトカヤ

七堂

七胸 附 繼島 躍念

北莊旅籠屋町ノ西ニ當テ七堂ノ濱ト云アリ古昔此地
堂伽藍ノ舊迹アルガ故也然ニ此伽藍ノ迹在家トナル
今ノ伽藍ト云是也又或說ニ何ノ時ニヤ此浦ヘ四天王
ノ像浪ニ漾上玉ヒシヲ見レバ御影七ニ分玉フヲ取上
繼タテ其所ニ安置セシ所ヲ七胸繼島ト申トゾ今七胸
ヲ七堂ト書是モ一說アリ前ニ記ス異說ニ住吉明神三
韓退治ノ時自削玉ヒシ佛像也ト云誤リ用ニ不^レ足又
繼島ノ古跡所ハ三昧ノ南近邊也又說ニ七度濱ト云リ

住吉ノ神輿ヲ昇居奉ル者身ヲ淨ンガタメ潮垢離ヲ七
度浴ル故也トゾ昔ヨリ躍念佛有シヲ何ノ比ヨリカ中
絶シテアリケルヲ當津大念佛ノ末寺琳昌寺ニ知三坊
ト云アリ此僧慶長年中ニ中興シテ綾町大濱ニ草庵ヲ
結テ來迎寺ト號シテ七月八日ノ前日ニ南北ノ勸進ヲ
請テ上人ヲ請待セシメ念佛修行毎年退轉ナシ又上人
持來玉フ扣鐘ハ攝州關郡ニ深江法明トテ念佛ノ道者
アリ又播州ニ賀古教信トテ是モ念佛德行アリシ人也
去ニ依テ法明ハ教信ニ逢事ヲ願播州ヘ越^レン時此浦
ニテ彼扣鐘ヲ海中ニ沈シト也其後此浦ヘ龜被上シ鐘
成故ニ今ニ至テ龜鐘ト云傳リ且又元和元年乙卯七月
八日ニ大念佛ノ御本尊河内國平野ト云所ヨリ上人守
來テ毎年其日ニ至テ此所ノ三珠ニ於テ法界無緣靈魂
ヲス、メノ爲ニ卒都婆ヲ書テ佛供ヲ備躍念佛執行シ
玉フ

高野堂

高野山弘法大師歸朝ノ御時北莊九間町ヘ著岸有シト
カヤ其時假堂ヲ建玉ヒテ大師ノ御影ヲ安置シ高野ヨ
リ往來ノ僧ノ便トス世人是ヲ高野堂ト名付タリ其後
宿院町ヘ所替アリト云リ

勢至塚

所ハ鹽穴ノ近所磯多村ノ畔近塚也本ハ鹽穴堂也昔ノ本尊ハ勢至菩薩也或時此本尊損玉ヒシヲ修復スルニ無^レ程又摧玉フ事再三也住僧奇異ノ思ヲナス處ニ或夜菩薩靈夢ニ曰ハ此海中ニ天竺ノ月蓋長者守觀音坐マス此觀音ヲ取揚奉テ勢至ト可成對坐ト靈夢分明ナレバ其夜海濱ヲ尋出海中ニ光明アリ急浦人ヲ語大綱ヲ下シニ觀音ノ尊體上セ玉フ然バ勢至ト兩尊今ニ崇奉海中ニ久經玉フ故觀音ニハ蠣殻藻屑ナド取付玉フト也鹽穴縁起ハ紛失セルカ此義モナシ所ノ古老語シヲ聊書載侍也

朴津郷 エナヅ

此所ハ北橋東ノ野邊也ト云傳リ又天神記錄ニハ北莊住吉郡朴津郷トアリ

古歌

住吉ノ朴津ニ立テ見ソタセハ

讀人不知

ムコノ浦ヨリ出ル舟人

ト續後撰雜上ニアリ

玉横野

所ハ南宗寺内利德庵ノ側南野ヲ云トゾ

古歌

終夜露ノ光リヲミカクナリ

讀人不知

玉ノヨコノ、秋ノ月影

ト新拾遺雜上ニアリ又

雲サソフ峯ノ木枯吹ナヒキ

玉ノヨコノ、霞フルナリ

ト藻鹽草ニアリ

戸立野

此所ハ世話ニ祖父ガ上ノ下ナル祖母ガ懷ト云說アリ

古歌

イツミナル堺ノ浦ノ戸立野ニ

春ハアケタルカキワラヒカナ

目口町

住吉明神御歸陣ノ時神馬ヲ此所ニ係玉ヒシ時秣ヲ備シヨリ此所ヲ根口町ト云今俗ニ目口ト云習セリ毎年六月御祓ニ神馬ニ秣ヲ進ル事其例ヲ勤來リ又清祓錢トテ南莊十四町ヨリ鳥目ヲ集神輿ノ先ヲ清祓スル宮

子ニ參セ來リ則南莊職事役ニテ是ヲ禰宜ニ渡ス

占辻

市町ト湯屋町トノ間大小路ノ辻ヲ云リ此辻ヲ泉攝境目南北ノ分地トスル所也昔安陪晴明泉州篠田村ヨリ經過ノ時後來人民ノ爲ニトテ占ノ書ヲ此ニ埋リ今ニ此所ニテ辻占ヲ聞ニ正違事ナシト云リ

釣狐寺

南莊少林寺ノ塔頭永德年中ニ耕雲庵ト云アリ其住僧伯藏主ト云リ此僧鎮守稻荷明神ヲ信仰シテ毎日法施不_レ怠或時感應有テ森ノ中ニ三足ノ野狐アリ抱歸テ養愛ス此狐ニ有_レ靈達ニ隨仕用ニ追_レ賊難_一事アリ其孫孫三足ニシテ今ニ至寺内ニ住居ス稻荷靈驗新也世ニ云傳釣狐ノ狂言_{イヘリ}又吼藏共此寺ヨリ發リ然ハ才覺ナリシ狐感ジ老翁ニ化シテ狂言ヲ見テ猶野狐ノ骨髓動ヲ口傳セシトナリ誠ニ狂言綺語トハ云ナガラ道ニ達シムレバ如是奇特モ有事ニヤ尤家ノ大事トスル狂言也

鹽風呂

泉南ノ風呂ハ行基菩薩海邊ニ井ヲ掘此井中ニ石像ノ藥師佛ヲ安置ス奇ナル哉海邊タリト云共其如來ノ胸中ヨリ清水涌出ス此水ヲ風呂ニ用入湯ス諸人ノ衆病悉除ス文龜二年壬戌正月三日曉天ニ屋敷主八萬貫屋妙德ニ多門天告玉ハク寺物ナラズンバ井水退轉セント新ナル靈夢ヲ蒙然ニ依テ旭蓮社ヘ寄進シ寺内ニ寶塔ヲ建立シ弘法大師一刀三禮ノ多門天王ヲ安置ス都鄙ノ尊卑晝夜市ヲナスコト日々ニ盛也天正年中ニ豐臣朝臣大閣秀吉公有馬湯治ノ後此風呂ヘ入湯アツテ不日持病平愈ス其靈驗ヲ感ジ諸役免除ノ御朱印ヲ賜刺吏石田隱岐守政成ニ仰付ラレ定條目ヲ天正六年戊寅十二月廿日ニ下賜ル其條目今ニアリ相次テ當家御代代御朱印被_レ下者也知行四十石受納ス此風呂ノ在所ハ大町ノ西六間筋即町ノ名ヲ鹽風呂小路ト云來也

市戎并大黒町

此戎ハ石體也昔日弘法大師當境ニ暫坐シ時勸請ナサレテ所ノ人市ヲ催シ時ノ鎮守也實ニ時移事去ヌレバ其義ヲ知ル人モ希ニシテ今ハ民屋ノ軒端ニ纔ニ星霜ヲ經許ニテアリ然バ此所ヲ市戎町トハ申也又大黒町

ト云アリ是モ大師大黒天ヲ勸請シ玉フ故也

向井領井

向泉寺ノ領内ノ地ニ行基菩薩ノ名井アリ在所ハ向井領ノ三味南ノ側ニ在レ之此井水ニテ諸瘡ヲ洗用シ又ハ藥煎ノ水ニ用テ平愈スル因縁ヲ尋スルニ天平癸未年行基菩薩此地ニ闕伽井ヲ祈其奇瑞ノ故也由來ハ寺觀ノ所向泉寺記錄ニ委記ス

海會寺井

此井ハ大寺門前ニアリ昔ハ海會寺開山乾峯和尚ヘ鬼而龍神老人ト成テ參ニ上リ其法恩ニ報シ爲清水ヲ與ントテ龍神ノ云鶴ノ羽ヲ地ニ指露ノ多浮方ニ井ヲ掘ト教和尚其詞ノ如ク仕玉ヘバ案ノ如ク清水漲出タリ是正慶年中ノ事也トカヤ其老翁ノ歸方ヲ人ニ見セケルニ傍近所ニテ姿ヲ見失ケルト也其所ヲ時ノ俗名付テ蛇谷町ト云來リ今ニ其名ハ殘リ海會寺ハ今南宗寺内ニ寺地ヲ構タリ昔ハ大寺ノ門前ニ在ト見ヘタリ

聾井

此井ハ文明四壬辰歲ニ今林六郎三郎ヨリ代々傳テ于レ時寛永四丁卯歲一向宗萬福寺ノ支配也聾井ト云事ハ井守豐成故ニ異名ヲ像リ此井名井ナルトテ秀吉公ノ御時ノ茶湯ノ用水トセリ

高須

北莊町ノ入口ヨリ東ニ高須ト云町アリ 此所ニ遊女今ニアリ古昔モ佛ト云名アル白拍子アリトテ名ヲ替テ地獄ト付タル遊女アリケレバ紫野眞珠庵一休和尚遊行ノ時此由ヲ聞玉ヒテ一休尋寄テ

キ、シヨリ見テオソロシキ地獄哉

トアソバシケレバ 地獄

イキクル人モオチサラメヤハ

トシケレバ和尚聞玉ヒテ感ニ絶玉ヒテ卽此二句ヲ書テ被レ遣シト也

又半井ト養當津住居ノ砌狂句

南北ノミナ鳥トモカトラル、ハ

タ、一モツノタカスナリケリ

首截地藏

此薩埵ハ行基菩薩ノ作也北莊皇子ガ飢ノ北ノ邊ニ草庵アリ昔此所ニ葉屋ノ辻堂アリテ西國順禮高野山通路休所ノ爲ニアリシニ夜ナ夜ナ奇恠ノ事アリ或夜道行人ト往會テ化生ノ者ヲ截留タリ明テ見レハ卽石地藏也其ヨリ名付テ今ニ首截地藏ト云傳リ諸願祈ニ驗アラズト云事ナシ其時ノ太刀疵ノ跡現ニ拜レ玉フ也

○古事并戰場

此戰場之仕官ハ信長記大闇記其外軍書ヨリモキイダシ此ニシルスナリ

細川清氏

細川相模守清氏四國ヲ討平テ今一度都ヲ傾將軍ヲ亡奉ト金堺ノ浦ヨリ船ニ乗テ讃岐ヘ渡ル

細川氏春

細川兵部少輔氏春淡路ノ勢ヲ卒シテ兵船八十餘艘ニテ堺ノ濱ヘ著

赤松彈正氏範

五百餘騎彈正少弼氏範ニ付テ船ニ乗堺天王寺ヘ押寄

大内義弘

應永六己卯歲十月大内左京大夫義弘筑紫中國ノ兵ヲヒキキテ泉州堺ニ著テ上洛セズ

三好海雲

享祿五壬辰歲六月二十日三好筑前守長基泉州堺津ニ至テ畠山高政ト戰テ敗績シ入ニ顯本寺一手自臟腑ヲ繰出天井ニ投生害ス南宗寺殿海雲善室是也

三好宗三

天文十八年己酉六月十七日神五郎政長入道宗三於攝州中島江口城ニ戰死ス歲四十二曾テ攝州童子山ノ城退治ノ時ハ宗三ヲ大將ニシテ堺南端ニ陣ヲ取テゾ扣ヘタリ

又大和國筒井喜藏ト宗三ト戰宗三突懸喜藏ヲ討捕テ高名セラレタリ

將軍源義尹

永正五年戊辰正月大内介多多良義興京都ノ亂ニ政元ガ死ヲ聞テ時分ヨシト思前將軍源義尹ヲ取立テ筑紫中國ノ勢ヲ催上洛四月細川左京大夫澄元京ヲ沒落シ

阿波へ退將軍源義澄京ヲ逃出テ江州へ赴テ佐々木ヲ頼ル義尹泉州堺マデ到著ス

三好實休

三好豐前守之康入道實休永祿壬戌ノ比泉州久米田合戰ノ時紀州廣浦ニ畠山高政世ヲ假初ノ住居ニテオハスヲ紀州河内ノ人々大將ニトリタテ、二萬餘騎ニテ攻蒐由飛^レ檄頻並ニ告ケレバ三好實休後詰セントテ出向堺津ニテ人數ヲ揃阿波讃岐伊豫ノ勢都合一萬餘騎篠原右京進長房ヲ大將トシテ岸和田ノ城ニ籠ケリ久米田ニ陣營ス何方ヨリカ來ケン流矢一筋來テ實休ノ胸板ニ寛深ニズハト立受モ不^レ堪馬ヨリ落テ永祿五年壬戌三月五日ニ卒ス歳三十七

松永彈正久秀

永祿十三年庚午久秀ト信長ト戰時松永ヨリ泉州堺へ文ヲ遣加勢コハセケリ其使ハ筒井ガ若黨弓削三郎ト云者也此者信長へウラガヘリ松永腹立スト云リ

信長公

信長公佐久間右衛門尉信盛同甚九郎信榮父子ニ折檻ノ詞ニ云參河尾張近江大和河内和泉紀伊已上七箇國ノ内ニ於テ數箇所ノ與力等付置シ間自分ノ勢ヲ相加一戰ヲ遂候共サノミ越度ハ不^レ可^レ有^レ之處ニ一向武道ニハ不^レ立入^レ堺ノ町人ノ腹脹共ヲ召寄數奇三昧ノミ專トシ徒ニ年月ヲ空センコト了簡ノ及所ニアラズ畢竟數奇ハ天下國家ヲ治爲ニ利益タルカ損害タルカ可^レ申間予ガ存スル處ハ若益タラバ甚九郎信榮自然ニ武道ノ冥加有テ敵ヲ擒ニシ父ガ面目ヲモ施^ニ其身^一武勇ノ名ヲモ舉ベシ若利タラバ信長ニ忠シ父ニ孝而天下ノ守有テ永榮ベキカ不^レ然則其可^レ有^ニ分別^一事

東照大權現

大權現發ニ安土ニ爲^下覽洛中^一且遊^中和泉堺^上也信長公以ニ長谷川竹一^一副^レ之以爲^ニ案内者^一又當津妙國寺ニ御旅館ヲシメサセ玉フ時信長公信忠公御事ヲ聞届玉ヒ此勢ニテ合戰シテ孝養ニセント頻ニ宣ツ、悶焦シ玉ヘ共中々小勢ノ體ニテハ叶申マシ重テ義兵ヲ舉彼逆徒ヲ亡サセ候ヘト酒井石川ナド達テ諫申ニヨリ伊勢路ヲ指テ夜ヲ日ニ次急セ玉ヘ共剛兵ハ疵ツク事ナ

シト云シ如ク一揆ノ奴原群渡テ物欲サウニハ見ヘシ
カ共中々手指事ヲ得ザレバ三日ノ午刻ニハ伊勢國白
子ニ着玉ヒテ其ヨリ御船ニテ尾州智多郡大野へ著津
有テ故ナク遠州濱松ニ至テ御歸城アルコン目出度ケ
レ

秀吉公古今數奇沙汰ノ事

雍州ノ伏見殿下居城御定有テ漸石垣二重三重出來ケ
レバ早御臺所長屋ナド立テ作事此彼ニ急也山下ノ河
邊ニ二十丈ニ山ヲ築上諸木ヲ植並枝ヲ垂葉ヲ敷深山
ノ如シ松柏生茂シ中ニ堂塔伽藍ヲ建並學文所ト號シ
古今數奇ノ沙汰アリ珠光古市播磨守北向道陳ナドガ
流ト引合其中ノ宜ニ付沙汰仕候ト説玉ヘリ

納屋助左衛門呂宋ヨリ歸朝

泉州堺津納屋助左衛門ト云シ町人小琉球呂宋へ天正
初夏ニ渡文祿三年甲午歲七月二十日ニ歸朝セシ其比
堺代官石田木工頭政澄ニテ有シ故奏者トシテ秀吉公
へ傘蠟燭千挺活麝香二疋上奉御禮申上即眞壺五十御
目ニ懸シカバ特外御機嫌ニテ西九廣間ニ並ツ、千宗

易ナドニ御相談有レ之上中下段々ニ代付サセラレ札
ヲ押所望ノ面々誰誰ニヨラズ執申ト被ニ仰出也因茲
望ノ人人西丸ニ致伺候代付ニ任五六日ノ中ニ悉取テ
三殘シテ秀吉公へ召上ラレ金子請取助左衛門五六日
ノ中德人トナレリ

六殘屋^{シ、クヒヤ}

長宗我部元親元龜三年壬申己ニ土佐一國ノ主君ト成
テ武名モ天下へ聞タリ或時家老ヲ召テ云ケルハ今七
雄禰關ノ時至テ天下ニ主ナシ畿内モ三好嫡子絶テ一
族等漸城ヲ守ノミ此時天下ニ望ヲカケタマヒシハ尾
州ノ信長參州ノ家康公甲州ノ信玄也信玄ハ道遠二將
海道ニ塞玉ヒケレバ其功業立ガタシ唯信長ノミ公方
ヲ都へ仕居申上ハ天下ヲ領セン事近カルベシト堺
ノ町人宍喰屋ト云商賣人親出入スルマ、是ヲ頼マン
トテ召出シ信長公へノ通路ノ便トセリ

九鬼右馬允嘉隆

天正六戊寅歲十月朔日信長公大坂一向宗顯如上人ノ
御一戰ノ砌右馬允ヲ以テ船中ノ指引ヲ泉州堺ニ於テ

御上覽アリ其節堺ノ富家ノ者共ヨリ御座船二艘ヲ金
欄段子ヲ以テ是ヲ飾立捧奉公方御機嫌宜ト也又西國
ヨリ大坂へ船ノ出入自由ニシテ更ニ屈スベキ體ナケ
レバ右馬允大船數百艘付ラレ可_レ相支_二旨去年ヨリ
被_二仰付_一シカバ泉州堺津ニ於テ越年シケルガ年頭
ノ御禮申上ントテ天正七年己卯正月五日ニ安土へ參
著セシカバ久苦勞ノ由仰有テ黃金二百兩小袖三重賜
テ本國勢州ニ下リ暫休息スベシトテ御暇クダサレケ
レバ右馬允畏悅テ國ニ下ケル二月十八日御上洛有テ
二條新造ノ御所へ渡玉フ又天正七年己卯七月下旬右
馬允泉州堺浦へ上リ紀州雜賀ノ一戰ニ赴同九年辛巳
大船數千艘大坂へ押廻敵船ノ通ヲ支申ベシト御誼有
ケレバ去六月二十六日ニ伊勢ヨリ紀州熊野へ押出シ
ケルニ雜賀浦浦ヨリ賊船五百艘許乗カケ乗カケ攻ケ
ル處ニ右馬允船ヲ會釋近寄テ弓鐵炮ヲ射懸船ノ櫓ヨ
リ炮烙火箭ヲ投入攻捕ト云ケレバ兵共承テ一命ヲ海
上ニ棄前後ヲ顧ズ攻懸攻懸矢場ニ三十餘艘乗取ケリ
九鬼右馬允心地ヨキ船軍シテ七月下旬ニ泉州堺浦へ
ゾ上リケル九月二十三日信長公御上洛有ケルガ越中
國一揆共令ニ蜂起_一由注進有ケルニ齋藤新五龍與馳參

可_レ致_二退治_一旨被_二仰出_一ケレバ承テ急發向ス同二十
七日ニ右馬允ガ大船共可_レ有_二御覽_一トテ信長公住吉
へ著津仕玉フテ同二十九日ニ安部野ニ於テ御鷹狩シ
玉ヒ角テ船モ御覽ノ事ハ天氣次第ト被_レ定十月朔日
ニ天氣穩ニ風靜ナレハ彼大船共ヲ旗指物幕ナドニテ
夥ク飾立浦浦湊湊ノ兵船共迄モ其手其手ノ船幟我不
レ劣ト美麗盡ケリ推分テ船軍ノ様子仕テ見セ候へ剛
弱ノ可_レ有_二御指南_一トノ御誼アリケレバ雜賀表ノ兵
船共ト打戰テ勝軍セシ様子ヲ憚處ナク下知シテ御目
ニ懸申ケレバ無_二殘處_一ト御感ニテアリケリ

○寺觀

大經寺旭蓮社甘露山

開山ハ智圓上人_{號ス}何ノ所ノ人ト云事ヲ知ズ初ハ
台家ニ入テ奧義ヲ極其後廣諸宗ノ旨ヲ盡終ニ宋ニ入
テ廬山一流ノ宗派ヲ傳來シ歸朝アリテ此地ニ來白蓮
池ヲ湛此寺ヲ建立シ甘露山大經寺旭蓮社ト名付玉
フ於是ハ宗兼學ノ道ヲ修行シ論文ヲ制作シ玉フ事
數百卷也或淨土家ニハ脈ノ譜訣ヲ授玉フ然バ社號ノ
始祖タル事明也彌淨土ノ教ヲ都鄙ニ被_レ弘事多年也

是惠遠流義ノ摠本也如レ此ノ德無レ隱故ニ村上天皇忝
モ大乘菩薩澄圓ト謚號ヲ賜其上大阿彌陀經寺ト云額
ヲ下シ玉ハル誠ニ希代ノ盛事也世ニ普澄圓菩薩ト申
事所爲有事也其後應安五年壬子七月二十七日ニ何國
共ナク失奉ヒヌ門徒其日ヲ記シテ忌日トシ奉也中比
大閤秀吉公四十石ノ燈油料ヲ下サル當御代ニ至テ相
違ナク御朱印頂戴シ奉也鎮守七社明神 寺家ノ内ニ
聖譽上人玄恕老師ノ住玉フ寺アリ其寺内ニ上人ノ塔
アリ念佛長行ノ道場也 又鹽風呂ノ事ハ古迹部ニ記

向泉寺三國山

開基ハ行基菩薩也初聖武皇帝行基ニ勅ヲ玉ハリ伽藍
ヲ作千手觀音ヲ安置セシメント也於レ是行基泉河攝
ノ堺ニ來寺ヲ建立シ玉フ先阿伽井ヲ祈ニ忽清潔成水
涌出タリ因茲寺ヲ泉ニ向ト云ヨリ向泉寺ト名付玉ハ
ル又俗ニハ向井寺トモ云リ惡瘡眼翳諸ノ痛痒有者此
水ヲ汲デ洗浴スレバ驗有ト云傳タリ是泉河攝ノ三國
ニ臨寺タルガ故ニ三國山ト名付別ニハ遍照光院ト號
ス鎮守ハ祇園牛頭天王也門前ノ民家氏神ト仰奉永正
年中兵火ニ罹テ堂社道場神殿僧坊忽ニ滅亡ス其後寺

ヲ境ノ里中ニ移ス昔日ノ本尊什物等今猶歷然タリ鎮
守ノ神殿ハ古跡ニ坐也正月五日六月十四日八月五日
霜月十四日ヲ祭禮ノ日トシテ今ニ至迄絶ズ秀吉公ノ
御時故有テ封田九十石下玉フ當御代ニ至迄相違ナク
御朱印ヲ頂戴シ奉也

悲田院法護山

開基ハ恩計上人諱衆德也俗姓ハ源氏江州ノ佐々木家
ノ侍某ガ家ノ子也相傳熊野權現ノ再誕也トカヤ長成
テ出家學文シ念佛ノ宗旨ヲ尊天文年中ニ此津ニ當寺
ヲ建立シテ惠心ノ眞作ノ阿彌陀如來ノ尊像ヲ安置シ
玉フ其後十方ノ衆ヲ勸テ淨財ヲ抛シメ上人自十萬卷
ノ彌陀經ヲ書寫シ讀誦シ玉フ一夕熊野權現靈夢有テ
此寺ヲ十萬ト號スベシト宣シヨリ今ニ至迄寺ノ別號
トス又上人市ニ出テ乞食シ貧人ヲ助玉フ故ニ悲田院
ト申也秀吉公ノ御時采地五十石ノ許ヲ下シ玉フ當御
代ニ至迄相違ナク御朱印ヲ頂戴シ奉ル 鎮守辯財天
ハ弘法大師ノ彫刻也靈驗アゲテカゾヘガタシ

極樂寺清淨山

開基ハ行基菩薩也本尊ノ中尊ハ阿彌陀如來八尺ノ坐像行基菩薩ノ眞作也昔ハ寺内ニ法界引導ノ墓有其邊ニ地藏堂ヲ構タリ嵯峨天皇ノ御宇其由緒ヲ勅問有テ堂ヲ御再興アソバサレ清淨山ト勅號ヲ玉ハリケレバ此地大伽藍所トナレリ寺内ニ室ヲ構比丘ト比丘尼トヲ相別薰鍊セルトカヤ然ニ此境民居繁榮シテ墓所ノ近事ヲ厭ガ故ニ其墓所并ニ地藏堂ヲ野邊ニ移シテ同比丘モ其地ニ隨來シニヨリ此寺ハ一向ニ尼寺トナレリ終ニ佛閣僧坊年ヲ經ニ隨テ零落ス剩兵火ニ罹テ佛像寶物燒失ス其後覺心大師ト云者發願シテ中比秀吉公ノ御時知行二十石ノ所ヲ下シ玉フ當御代ニ至マデ相違ナク御朱印頂戴シ奉ル

金光寺

開基ノ師何人ト云事ヲ知ズ傳云ハ人皇五十四代仁明天皇ノ御宇承和年中草創ノ寺トカヤ御本尊ハ藥師如來也當浦ノ海中ヨリ漁翁ノ網ニ懸テ上セ玉フト云リ昔ハ何ノ宗ヲ行ジタルト云事モ貞ナラズ其後天台宗ノ道場トナレリト云其貞和ノ比寺院炎上シテヨリ當境ノ引接寺智演上人ニ歸入シテ末寺ト成即其時ノ住

持ヲ往阿彌ト號ス文和元年壬辰ニ再興造畢ス本尊ノ靈驗奇特アゲテ筆シ難シ諸人普存知セル事ナレバ今更記ニ及ズ中比秀吉公ノ御時十九石ノ祭田ヲ下サル當御代ニ至迄相違ナク御朱印頂戴シ奉又此寺ヲ俗ニ網道場ト云リ御本尊海中ヨリ網ニ懸上セ玉フ故ニトカヤ或人ノ云往阿彌ノ比ヨリ中興シテ繁榮ノ寺ト成シカバ阿彌道場ト云來ルトモ云リ堂前ニ藤有人王百一代後小松院ノ御宇ニ及デ此藤ヲ帝聞召テ即帝都ヘ移植サセ玉フニ程ナク枯ニケリ或夜帝夢中ニ

オモヒキヤ堺ノ浦ノ藤浪ノ

都ノ松ニカ、ルヘキトハ

ト御夢想アリシニ依テ正ク彼藤ノ精靈ノ玉體ニ奏シ申シケルヨト御感有テ勅筆ニ歌ヲ被レ遊又御製ヲ添サセ贈返シ玉フヲ植置シニ程ナク榮テ有シ由ヲ帝都ニ聞召テ又御詠吟ヲ下シ玉フ此御製共絶テ今ハナシ國俗ノ謠物ニ其時ノ首尾ヲ書連吟弄セルモノナリ又當寺ニテ歌ノ會有シ時住持覺阿彌ノ比聲ヲシル友ナラスヤハ下萩ニ

宵 柏

ナラノ枯葉ノ野邊ノ朝風

南宗寺龍興山

開山ハ正覺普通國師大林和尚也弘治二年丙辰ニ創建ノ檀那三好修理大夫長慶也爲先考筑前太守元長入道海雲齋善室慶公建立也卽南宗寺殿ト云リ當津顯本寺ニ於テ自害ス澤庵和尚中興ス本寺洛陽大德寺也佛殿ト法堂ト兼タル堂一字有山門ハ甘露門ト號ス開山ノ影堂ハ曹溪庵ト號ス中比秀吉公ノ御時封田一百十石下シ玉ハル當御代ニ至迄相違ナク御朱印頂戴シ奉ル

當寺ヘ御成 台德院殿元和九年癸亥七月十日
大猷院殿同年八月十八日也

禪通寺

開山ハ大聖禪師諱宗然字可翁和尚生國筑前ノ人師匠ハ大應國師南浦也檀那ハ南帝後醍醐天皇臣下西園寺左幕下諒空大禪定門同武臣石堂右馬頭賴房此外梶原ノ子孫道山行公庵主親子六人大檀那トシテ嘉曆年中諸伽藍悉成就シ畢ヌ開山遷化ハ貞和元年乙酉四月二十五日也其昔者建仁寺天潤庵ノ末流タリト云共回祿

ノ災ニ依テ諸堂焼失ス故大德寺ノ前住黃梅院春林和尚伽藍再興ニ依テ卽中興ス彌今ニ至テ黃梅院ノ末派タル者也中比秀吉公六十石ノ領田ヲ被レ下當御代ニ至迄相違ナク御朱印ヲ頂戴シ奉

大安寺布金山

開山ハ秀德和尚應永元年甲戌ノ草創本寺ハ洛陽東福寺ノ塔頭莊嚴藏院也御朱印二十石五斗頂戴シ奉ル

海會寺宿松山

開山ハ廣智國師諱士星字乾峰和尚也卽聖一國師三世ノ孫也正慶元年壬申草創ス本寺上ニ同此寺地元和兵亂ノ前迄ハ三村明神ノ西ノ門前ニ有今南宗寺ノ内ニ入テ一坊ヲ構御朱印三十石頂戴ス此名井ノ事ハ古述ノ部ニ記セリ

引接寺勅定山

開基ノ師ハ智演上人也人王九十七代光明院ノ御宇貞和三年丁亥建立也本尊ハ阿彌陀佛也是住吉明神ノ御作ノ靈像ト云舊記ニ見ヘタリ其比三宅氏五郎三郎ト

云者當境ニ好有テ住居ス其家富ト云共佛法ノ名字ヲ知ス其子重五郎ト云者孝行且又佛神ヲ信仰ス常ニ父母ノ菩提心ナキ事ヲ歎時ニ釋阿ト云人有信州ヨリ當境ニ來リ念佛修行懈玉ハズ一鄉悉深信セズト云事ナシ彼重五郎モ師ニ親奉益悅テ信心堅固也貞和元年乙酉初冬五郎三郎病ニ臥リ醫療祕術ヲ盡共無_ニ甲斐_ニ死期既ニ極リ重五郎深歎キ正月二日ニ住吉ノ神社ニ誓テ七日斷食シ潔齋シテ長坐不臥口ニ彌陀ノ寶號ヲ唱父ノ病苦ヲ救事ヲ祈_ニ其上_ニ此願成就セバ一夏ノ間毎日寶前ニ參詣シ禮拜恭敬シ奉ント發願シ畢テ後一七日滿ズル寅ノ刻ニ當テ夢中ノ如ク御殿震動シ新ル御音ニテ神勅有テ宣吾刻處ノ無量壽佛境ノ浦ニ有其尊ヲ求奉精舍ヲ建立シテ常恒念佛セヨ汝ガ諸願速ニ成就セント示現坐ケレバ奇異ノ思ヲナシ海邊ニ至リ神命ノ如ク尊像ヲ守奉却テ父母ニ拜セシメ終ニ七日七夜ノ別行開闢三日未滿ニ父ノ病平愈ス是ヨリ彌佛ニ歸シ神ヲ仰テ怠ズ終ニ七堂并四十二院ヲ建立シ八月八日釋阿比丘ヲ請ジテ入佛供養ノ尊師トシ且開基ノ師ト崇奉ル光明院勅許有テ即山ヲ勅定山ト號シ寺ヲ引接寺ト被_レ下其上釋阿比丘ニ智演上人ト云別勅ヲ

玉ハル繪旨猶歷々タリ於_レ是重五郎入道發心シテ名ヲ專阿ト改念佛誦經休時ナシ毎年正月八日阿彌陀ノ法號ヲ書テ住吉ノ神社ニ納奉ル是即專阿父ノ病ヲ祈シ時ノ結願ノ日也其因緣ニ依テ如_レ此ト云リ此寺ヲ建立スル時住吉社務金紫老祿大夫_{夏國}此地ヲ以テ如來ニ寄附セラレ且又依羅明神并勝軍地藏ヲ勸請シテ此寺ノ鎮守トセリ即是モ住吉ノ末社ト成リ三宅五郎三郎後ニ主計頭ト受領シテ當境ノ司トナレリ抑引接寺ハ念佛最初ノ寺成ガ故ニ近國ノ門派ノ宿老タル者先此寺ニ入テ法談念佛執行シテ後ニ各其寺ニ入院ストカヤ應安二年己酉ノ初冬ヨリ洛陽四條ノ道場ノ末寺ト成故ニ當寺ヲモ四條ト云傳リ御朱印十石三斗頂戴ス

經王寺

開山ハ日延上人應永年中ニ建立ス本寺ハ洛陽妙覺寺也御朱印二十六石頂戴ス

顯本寺

開山ハ日淨上人文明十三年辛丑建立也本寺ハ洛陽本

能寺ト尼崎本興寺ト也御朱印二十七石頂戴ス當寺ニ於テ三好筑前守元長最初ハ薩州太守ニ任ズ名乗長基ト號ス泉州久米城ノ戰ニ勝利ヲ得ズシテ享祿五年壬辰六月二十日當寺ニ於テ自害腸ヲ抓テ天井ニ擲血痕大坂一亂迄アリ

光明院

開山心地念空上人永正年中ニ建立ス四修兼覺ノ道場也本寺ハ洛陽西山三鈇寺也御朱印十八石頂戴ス天正十年壬午五月穴山梅雪當寺ニ旅宿シテ六月ニ宇治田原ニテ討死ス

櫛笥寺ウシヅ 本教寺トモ云

開山ハ本住院日染上人明應元年壬子ニ建立ス本寺ハ洛陽立本寺也御朱印一石一斗頂戴ス

右十四箇寺ニ天神ノ常樂寺三村念佛寺ヲ加テ俗ニ十六箇寺ト云リ何モ其寺由緒正殊勝靈地ナレバ中比秀吉公ノ御時別別ニ御封田ヲ被_レ下泉州踞尾村ニ於テ納所ス當御代ニ至迄無ニ相違ニ御朱印頂戴シ奉者也故ニ天下ノ御祈禱毎日ノ香華退轉ナク有難勤行也

總知行高八百三十石九斗也

妙國寺

開基ハ日珖僧正永祿五年壬戌建立ス中比秀吉公ヨリ封田被_レ下當御代ニ至迄御朱印百二十石頂戴ス攝州關郡桑津村ニテ納所寺建立ハ油屋常言寺地ハ三好實休寄進也此寺ニ蘇鉄一根有高二間一寸根廻三間二寸有枝木共ニ十三本也誠ニ希代ノ珍物也且又天正十年壬午五月家康公御上洛直ニ當寺ニ渡御有六月ニ入洛シ光秀ヲ討_レ議ス御家人諫ニヨリ直ニ遠州ヘ御歸城又大坂冬陣ノ時モ渡御成テ御機嫌宜ト云リ大友義鎮入道宗麟ハ秀吉公ヘ一味セントテ天正十三年乙酉三月下旬ニ豊後國ヨリ船ニテ揚當寺ニ旅宿ス又妙國寺院殿光德實休ノ舍弟安宅木攝津守冬康當寺連歌ノ會ノ時座席ニ被_レ出テ前句ニ古沼ノアサキカタヨリ野ト成テトアルニ冬康ス、キニマシル葦ノ一モトト付玉ヒテヨリ舍弟討死ノ由ヲ被_レ申座ヲ立玉フト也且又法名龍音寺殿以徹實休當寺ノ石塔ニハ妙國院殿光德實休ト有

北御坊

西本願寺信證院

文明年中ニ檜木屋道顯ト云者有開山親鸞上人ヨリハ
世法孫蓮如上人^{信證院ト號ス}ヲ信仰シ奉此寺ヲ建立シ直ニ
信證院ト名付テ道俗參詣スル道場トナセリ昔ノ本尊
ハ聖德太子ノ御作也今ノ本尊ハ御長三尺一寸四分
^{但白毫ハリ}御足マデ故有テ十二代ノ准如上人自如來ヲ刻玉ヒ御
足ノ裡ニ御判許ニテ造レ之ト有テ御名ハナシ今ノ御
堂ニ安置セラル、處也昔ノ本尊ハ今ノ江戸ノ御堂ニ
被^レ奉^レ移也御朱印三百石ノ内^{二百八十石ハ泉州郡尾村ニ}
テ京本寺ヘ納所ス

右十六箇寺ノ外二箇寺入テ御朱印所合十八箇寺是
迄也

南御坊

東本願寺羅漢院

慶長年中ニ西然寺二代善順ト云者開山親鸞上人ヨリ
十一世顯如上人法孫教如上人ヲ信仰シ奉眞言宗羅漢

院ト云寺有ケルヲ再興シテ上人ニ奉道俗男女ノ參詣
ノ道場トナセリ昔ノ院號ヲ今ニ至テ呼用御本尊ハ太
子佛也

鹽穴寺

開基未^レ詳本尊ハ十一面觀音也和銅年中元明天皇ノ
勅ニテ造營有ケルトカヤ此本尊ハ當津海中ヨリ上セ
玉フ故蟬貝取付腰簍有ト云リ舊記何比ヨリカ紛失ス
本尊ノ來歷ハ古跡ノ勢至塚ノ所ニ記ス

專修寺

開基ハ玄譽上人永祿元年戊午六十三ニシテ當寺ヲ建
立ス古昔玄譽初テ當津ニ來玉ヒシ時前ニ同津西向寺
ヲ建立シ淨土門ヲ開テ道俗貴賤ヲ導玉フ於是西國
著岸ノ船人迄モ參詣シ結緣ニ不^レ預ト云事ナシ其後
當住建立シ玉フニ彌德義大ニ弘リ修行益熟シ玉フト
カヤ此上人何ノ所ノ產ト云事ヲ知ズ天性聰明ニシテ
耳目觸處臆記シテ不^レ忘淨土ノ三部ヲ東關ニ學天文
年中ニ洛陽ニ入テ講經論談シ玉ヒ群盲ヲ導玉フ如
是名德成ガ故ニ宇治平等院ヲ再興シ南京ニ走テ說

法化導シ泉州綾井ト云村ニ專稱寺ヲ建立セララル又或時ハ自靈夢ヲ感シ其像ヲ刻テ安置シ玉フ又杖ノ頭ニ刻テ安置ス其杖今ニアリ行住坐臥念佛三昧ノ外他事無リシカバ自臨終ノ時至事ヲ知手ニ彌陀經ヲ握端座合掌シ佛號數百遍唱面見彼佛阿彌陀佛即得往生安樂國ト云文ヲ誦シ春秋八十二歳ニシテ入滅セリ時ニ天正五年丁丑五月廿七日也初大坂一心寺ニ至玉ヒ元祖法然上人ノ遺跡ヲ拜玉フ既三百餘年ヲ經タリ故實殿零落シテ佛像風雨ヲ凌玉フニ所ナシ於レ是見ニ忍ビズ淨財ヲ抛テ再興ノ功終シカバ住持比丘此信實ヲ感ジテ一心寺代々ヨリ奉持セル元祖上人自筆ノ名號一幅有シヲ玄譽ヘ與ラル其名號ノ左右ニ一首ノ和歌有
アマダフトイフヨリ外ハ津ノクニノ

ナニハノコトモアシカリヌスヘシ

是夫木集雜十六釋教ノ部ニ見ヘタリ此詠歌ヲ書付玉フ故世ニ難波名號ト申奉是也今ニ至テ毎年正月廿五日ニ開奉諸人ノ渴仰ヲナセル處也慶長年中ニ大將軍家康公ヘモ奉レ備ニ御覽トカヤ

少林寺

開基ハ桃源和尚元德年中ニ建立ス檀那小林氏成ニ依テ小ノ字ヲ用テ書シニ彼達磨大師ノ少林寺ヲ表シテ後ニ少ノ字ヲ改ケルトカヤ中比紫野大德寺ノ塔頭黄梅院ノ末派タリ大坂落城以前ハ大伽藍ニシテ寺内ハ今ノ在家ト成寺地町少林寺町トテ今ニ其名ヲ記セリ其兩町ノ海邊迄寺内成シ時信長公ヘ召上ラレケレ共其後秀吉公時代ニ公狀有テ石田治部少輔三成小西攝津守行長兩人トシテ少林寺屋敷竹木不_レ可_レ疎トノ掟有其上兩町ヨリ地子ヲ此寺ニ納其後堺町中ノ地子御赦免ノ時同此兩町ノ地子ヲモ當寺ヨリ赦玉ヘリ且又耕雲庵ト云塔頭有此庵ニ就テ釣狐ノ故事有古跡ノ部ニ記ス

妙慶寺榮照山

日蓮宗日英上人開基也本寺ハ洛陽妙顯寺又唱法師天正年中ニ來テ中興ス寺内ニ日像上人ノ自筆ノ石塔有因_レ茲世俗ニ御石塔ノ寺ト呼リ抑此石塔ハ日藏上人西國弘通有シ時法華讀誦シ題目ノ文字ヲ海上ニ書玉ヒテ其誓願ニ云吾弘處ノ法世ニ繁昌スルニ於テハ此文字消ベカラズト心中ニ念ジ玉ヘバ其文字波ニ洶

テ不レ消姿ヲ石塔ニ移國國七所迄立置玉フトカヤ今
此石塔ハ其内ノ一基成事分明也諸人信心不レ懈立願
スレバ諸病悉平愈セリ

了覺寺 光明山

當寺開基ノ和尚并年代分明ナラズ古昔洛陽黑谷紫雲
山金戒光明寺ヨリ開基シ玉フ靈地成ガ故ニ今ニ至迄
本寺トシテ山緒不レ絶因茲當寺ヲモ又黑谷ト呼來レ
リ初本山黑谷ノ上人鑑池ノ邊ニテ水鏡ニテ刻玉フ御
自影有シニ正親町院^{人王百七}代帝也此影像ヲ御信仰有テ邊
鄙ニ下玉ハバ朕モ結縁アラント淨土宗ノ勘文タル一
枚起請ヲ宸筆ニ被レ遊上人ノ眞影ニ添サセ玉ヒ善秀
ト云僧ニ詔ジテ當寺ニ下シ玉フ因茲近邊ノ道俗渴
仰ノ思ヲナシ奉扨又御本尊ハ和州當麻寺ニ御座有シ
ヲ此寺ニ移奉ケルトカヤ抑此所以ヲ傳聞ニ昔惠心僧
都母ノ善根ノ爲ニ彌陀ノ三尊ヲ自造立有テ同千體ノ
尊像ヲ畫裏ニ御經ヲ移中尊ヲ身内ニ籠テ當麻寺ハ彌
陀來迎ノ地タレバトテ納奉セ玉フトカヤ然ニ善秀大
德此黑谷ニ彌陀尊ノ坐ス事ヲ歎朝暮上人ノ御影ニ祈
願ス或夜ノ夢中ニ獨ノ僧有テ云汝ガ諸願滿足セシメ

ント御長三尺ノ佛像ヲ玉フト見テ夢覺ス其翌日何國
共ナク一人ノ僧佛像ヲ持來善秀大德ニ謂云是故有ニ
本尊トテ與去テ行方ヲ不レ知棄拜奉バ惠心ノ作也吾
本山黑谷常住ノ如來ノ分身也ト歎喜身ニ餘晝夜勤行
懈事ナシ至レ若度度ノ奇瑞不レ可ニ勝計ニ其後七年經テ
當麻ノ中尊コソ境黑谷ニ坐スト聞テ當麻寺ヨリ取還
奉ント他勢ヲ催起來是正ニ永祿十一年戊辰六月廿一
日也善秀大德熟熟オモヘラク憂喜轉變手ヲ覆ガ如世
ノ中ニ存命シテモヨシナシ適祈テ感得セシ佛ヲ奪取
ンモ心ウシトテ本尊ニ向捨身ヲナシ終ス當麻ヨリ來
人人此體ヲ見テ流石命ニ替シ本尊ナレバトテ却隨喜
取還不レ奉シテ歸ス其ヨリ本尊ノ德光倍輝威力彌剛
シテ日日月月ニ寺ノ繁昌法ノ興隆比類ナカリシトカ
ヤ因茲次ノ住持本山ニ請テ此寺ノ號ヲ望シカバ遍
照庵ト名付玉フ是光明遍照ノ謂乎其後寛永年中ニ至
テ了覺寺ト改號ニ本尊并上人ノ御影利益ノ深重成事
本山ニ恥事ナキガ故ニ洛陽黑谷三十三世ノ上人山號
ヲ光明山ト名付玉フ

祥雲寺 龍谷山

開山ハ澤庵和尚檀那ハ谷氏正安寛永二年乙丑建立也
本寺紫野大徳寺也庭前ニ蘇鉄二十株餘有其中大也ト
スルモノ高サ一丈八尺ニ及郷人奇觀トス當寺落成開
堂ノ翌日當津新刺史從五位下土佐守石河勝正使者ヲ
以テ賀儀ヲ述ラレ賦ニ和歌一首一是ヲ被_レ贈

オノツカラ露ノ玉シク庭ノ面

サ、ン書ムスイハホカサネン

澤庵和尚和韻

詠出和歌敷島跡

吟聞新寺暮樓鐘

秋其三五夜中月

花又八重猶一重

和歌賜カヘシニ

ケフコソハラク露マテモ光リマズ

コトハノ玉ヲミカキノヘケレ

長谷寺

開山ハ徳道上人天平勝寶年中ニ造營ス初上人聖武天
皇光明皇后ノ詔ヲ承テ大和國長谷寺ヲ建立ス本尊十
一面觀音ハ稽文會稽首勳三尾ノ杣木ヲ以テ作奉安置
ス其後重テ上人ニ詔有テ國國ニ新長谷寺ヲ建立セシ

東光寺

メ玉フ當寺ハ其最第一也上古ノ記錄今現然タリ
開基ハ化翁道者寛平年中ニ建立ス本尊ハ樂師如來也
初化翁此所ノ海中ニ日夜光明出現スル事奇特ニ思綱
ヲ入摸取ニ此尊像ヲ得奉於_レ是此寺ヲ造立セルトカ
ヤ世人濱藥師ト云是也

西向寺

昔ノ開基ハ當津專修寺ノ玄譽上人也照蓮社寂譽上人
天正年中ニ中興ス本寺ハ洛陽知恩院也本尊ハ慈覺大
師ノ弟子寛印供奉ノ作也并藥師如來ハ春日佛師御長
三尺三寸ノ座像也元來奈良帝ノ御守本尊タリシヲ永
祿年中ニ由緒有テ此寺ニ安置ス

善長寺

開山ハ顯空上人昔日洛陽粟生光明寺ノ住持タリシヲ
當寺ノ檀那三好因幡守政勝元龜年中ニ去子細有テ當
津ニ寺地ヲ求子孫ノ菩提所ニ光明寺ヨリ顯空上人ヲ
住持トナサシム天正元年癸酉正月六日ニ遷化ス政勝

ハ寛永八年辛未十二月十日ニ病死ス歳九十六白骨ハ當寺ニ納法名善長寺殿前因州賢通爲三大居士ト號ス今ニ至テ三好氏ヨリ寺領有レ之本寺昔日ハ粟生光明寺タリシヲ中興去子細有テ知恩院ノ末寺ト成今ノ寺地ハ大坂落城後ノ替地也

本成寺遙寶山

開山ハ日親上人嘉吉二年壬戌ニ建立ス本寺花落本法寺ト本成寺兩寺一寺也本寺ヨリ七年以前ニ當寺草創ス然其本法寺ノ隱居所トセシ也日親在居ノ時一牙ヲ脱ス或時一人當寺ニ來テ告云是ハコレ親師ノ牙齒也汝ニ是テ與トク影中ニ納ベシ是所レ命也ト云終テ歎焉トシテ不レ見檀那上京シテ此旨ヲ親師ニ申ケレバ微笑シテ答玉ハズト也尤牙齒ヲ納シ影像今ニ有此日親上人ハ初發心ノ時ヨリ志深法ノ爲ニハ身ヲ捨命ヲ抛玉ヲ弘通ノ爲ニ人王百三代後花園院ノ御宇ニ禁獄セラレ水火ノ責ニ合或風呂ヘ入テ戸ヲ閉或男根ヲ惱舌頭ヲ切シ故ニ其音呷シ玉フ又或時ハ其頂ニ鍋ヲ燒焙シムト云共佛力ニ因テ恙ナシト云里去ニ依テ鍋被ノ上人トハ世俗ニ申也時ノ將軍義教公詰問シテ云法

華ノ行者ヲ惱者現罰有ト云簡程汝ヲ攻共罰モアタラズ然ハ汝ガ法華經虛事ニテアラント也上人答云今百日ヲ不レ過可レ有ニ其驗ト云云然ニ九十九日ニ當テ嘉吉元年辛酉六月廿四日ニ將軍義教公赤松ニ害セラル其時ノ落書ニ

應永ノヨキ年號ヲウチステ、

御所ノ首ヲハ嘉吉元年

又大内殿迹玉ヒテ後ヲ截ケレバ

迹トテ後ニ手ヲハ大内殿

ウキヨノハチヲ嘉吉元年

又細川伊豆守臺所ヘ迹玉ヘバ御腹メサレ候ト云バ判

世大夫ガ唐櫃ヘ迹入ヲ引出サレケル時

猿樂ノカラウトヨリモ伊豆守

タスケタマヘヤ觀世音ホサ

此時上人二十四歳也太守不慮ニ生害ニ及玉ヘバ天下ノ諸人ノ云權者ノ上人ヲ呵責セラレシ現罰也トテ時ノ人奇異ノ思ヲ成リ然バ普廣院殿ノ忌中ニ出籠セント有シカバ親師ノ云吾身命ハ法ノ爲ニ一度國主ニ奪タリ吾身ナガラ吾身ニアラズ吾宗ハ不レ受ニ謗施ニナレバ諸人受法化儀ナクンバ聊籠ヲ不レ可レ出ト云リ此

時謗法ノ士女此宗ニ歸スル者多々也御一家ノ衆モ當
宗ノ法理強盛成事感ジテ受法有_レ之其後上人籠ヨリ
出玉ヘリ末代希有ノ行跡ニアラズヤ然バ今ニ至テ當
寺ノ御影ニ諸願ヲカクルニ成就セズト云事ナシ日親
上人示寂長享二年戊申九月十七日八十二歳
南北總寺庵數百八十六箇寺九十五箇寺南莊○九十一箇寺
北莊○此内無_レ由緒_レ除_レ之

堺
鑑
中終

堺鑑下

○人物門附仕官僧道隱逸伎藝

仕官

三好存保

十河氏部太輔一存子也始三好修理大夫長慶ノ命ニ隨テ暫堺ニ居住シテ和泉河内ノ政道ヲ執行此故ニ政所殿ト申也今ノ町奉行ヲ政所ト云モ此例トゾ後ニ阿州勝瑞城ニ居シテ長宗我部宮内少輔元親ト戰シガ豐臣秀吉公ノ命ニ隨テ豐後國年滿ニ於テ天正十四年丙戌十二月十二日ニ討死ス歳三十三法名眞光院義賢實存禪定門

松井友閑法印

信長公ノ御時堺ノ代官ヲ友閑勤砌元龜元年庚午四月

朔日信長公濃州岐阜ヨリ御上洛アツテ京堺ノ茶湯名物珍器可レ有ニ御上覽トテ法印ト丹羽五郎左衛尉長秀兩人ニ仰付ラレ是ヲ奉行スト云云又信長公事ノ子細アリテ高野山ヘ催促ノ武士三十餘人被レ遣ケルモ此友閑法印ニ被ニ仰付ケリ

松山新助

永祿年中ニ新助ト云シ三好家ニ於テ爪牙ノ臣ニ備シ者也其始ハ本願寺ニ番士ナド勤居タリシガ天性優ニ艷物眞成ニ萬ノ裁判モ長シウ小鼓尺八早歌ニ達シ酒ヲ愛シテ興有シ者也其比堺ノ津ニシテ三好家或方々ノ勇士或其家々ニ於司アル者其此新助ヲ呼出酒飲デ浮世ヲ忘互ニ戰場ニ可レ赴身也誠ニ無ハ數ソウ世ニ在テ何ヲ期センヤ唯隙々ヲ求遊戯ト云ツ、敵味方堺南北ニ打寄酒ナド愛シ興ズル時ハ當津ノ新助倡出慰シトナリ

小西如清

天正年中ノ比當津樂屋小西彌十郎ト云町人アリ富貴潤屋財寶巨累ノ者成ガ福岡ニ居テ備前國ノ浮田直家

へ伽ニ出テ親タリ秀吉公此者ヲ召見玉フニ才覺辯口成者ナレバ汝浮田直家へ參テ可レ云某モ毛利征伐ノ使トシテ播州ニアリ御邊モ信長公へ一味シテ共ニ毛利ヲ退治セラレヨ承引ニ於テハ美作一國ヲ加恩申ベキナリ此旨彌十郎承テ即往テ三寸ノ舌ヲ掉直家大ニ悅テ承引ス其動ヲ以テ後ニ彌十郎大閣へ召出サレ法體シテ如清ト云初千石ヲ領ス

同息攝津守行長并木戸作右衛門

攝津守行長太閣へ小姓ニ出テ大名トナレリ肥後國ヲ賜宇土ノ城主也○同家來木戸作右衛門ハ高麗陣ニ手柄ヲセシ故是モ後ニ受領シテ主殿ト云リ此子孫今ニ當津ニ居ス

僧道

瑞溪

諱ハ周鳳字ハ瑞溪泉南堺ノ人也臥雲山人ト號シ又號ニ北禪僧錄司一也

一休

諱ハ宗純字一休大德寺眞珠庵開山ニシテ住吉牀榮庵ノ主也初此所ニオハシマサン前ニ先住吉ノ社ニ通夜

シ玉ヒシニ八句許ノ老僧香染ノ袈裟掛テ居玉ヒケルガ一休ニ問テ曰和僧何國ノ人ゾ一休答テ曰都方ノ者也ト僧又云都ノ人ナラバ定テ歌ヤ讀玉フ覽ト一休ノ云我モ桑門ナレド吾國ノ俗ナレバ今夜シモ神明ノ手向ニモヤ成侍ントテ愚ナガラモ一首ノ幣ニ替奉リ侍來テ見レハコ、モ火宅ノ宿ナレハ

ナニ住吉ト人ノイフラン

老翁ノ云和歌尤殊勝ニ思侍ド此翁サモ不レ存

來テ見レハコ、モ火宅ノ宿ナレト

心ヲトメテスメハスミヨシ

程ナク夜モ臆ト明侍スレバ彼老翁何地トモナク行方不レ知一休然バコソ是ハ明神ノ化現成ラント此所ニ宿ヲシメ牀榮庵ヲ營住玉モケルゾト世ノ人遍知ニ依テ詳ニ不レ載

岐翁

昔日岐翁ハ一休和尚ノ弟子也一休ノ御心ニ背撥出セラレ當津市町六間筋ニ庵地ヲ求集雲庵ト號シテ被ニ

住居ニシニ其折一路居士ト宗祇トヲ賴一休ノ免ヲ蒙
シトキ然ラバ吾太刀ヲ持供スベシ又集雲庵ト云モ
不似合トテ南坊ト呼玉ヒシト也今ニ一休肖像ノ傍
ニ太刀持シハ此岐翁也尤活達力量アリシ人ト云リ其
後南宗寺ヘ寺地ヲ移シ今ノ集雲庵開基是也

隱逸

沅南江

諱ハ宗沅字ハ南江濃州ノ人也本ハ相國寺雲溪和尚ノ
弟子也永享四年壬子南莊葦原海濱ニ草庵ヲ結ンデ隱
居シテ漁庵ト號スル道人也又ハ鷗巢共云リ一休和尚
ニ相隨テ拘子無佛性ノ話則ニヨリテ投機ノ頌作テ一
休和尚ノ稱名セラレタゾ其頌ニ曰

妾是多情郎薄情 長門春雨釀愁成

銀屏宛轉還飛散 乍有乍無啼鳥聲

寛正四年癸未之夏沒ス歳七十七

一路居士

一路ハ一休ト同時ノ人也或時一休和尚一語ニ問曰萬
法有路如何是一路一語答曰萬事皆可一休如何是一

休一路ハ作レ詩詠レ歌真ノ隱逸也 狂歌ニ

手捕メヨオノレハクチガサシデタゾ

ゾウスイタクト人ニカタルナ

今石津ノ上市村ノ邊一路菴ノ跡有世ノ人畧ノ内ト思
ルニヨリテ爰ニ載侍泉州ノ事跡ハ事多ケレバ略シス
後人和泉一州ノ事ヲ記シ侍人モヤ有ラン手捕トハ手
捕鍋ト云釜一ツヲ樂此所ニ居住シテ人ノ往來ヲ絶シ
一ノ簀ヲ下テ志有人ニ食物ヲ受テ朝暮送レシトゾ或
時童共馬糞馬ノ沓鞋ナド入テ置ケレバ其ヲ見テ最早
世ハ未ニ成タルトテ其ヨリ斷食シテ終ラレケルゾト
申傳品ハ替共真ノ隱者也伯夷叔齊トモイヒツベシ其
誰ノ氏ノ子ト云事ヲ知ヌゾ怨ク其身ハカク有シカド
モ其名ハ今ニ留リテ其所ヲ一路山ト名付テ世ノ人普
不レ知ト云事ナシ手捕鍋今ハ細川殿ニ有由申傳リ昔
作ル詩ニ曰

節後黃花吹不レ飛

籬根臥レ雨似ニ露薇ニ

萬年峯頂新長老

啖下禪牀對ニ布衣ニ

其比ノ五山ノ名僧達各贈答ノ詩有

牡丹花

扶桑隱逸傳云牡丹花具平親王遠孫也早出塵俗一名以肖柏又自稱牡丹花人皆隨呼之喜讀書詠和歌兼善連歌從自然齋宗祇而學焉又每遊五岳解作詩其出必騎牛乃塗牛角爲金色觀者怪笑自若也垂老隱于攝州池田顏曰夢庵長松花樹環簷又以四時花次第栽之故榜其軒曰弄花性好酒愛香併花爲三愛而自作記永正七年秋帝夢見牡丹花乃命藤公實隆召見便殿親唱和服萬中觴咏而樂於後避攝之亂徙居泉南大永七年丁亥四月八日卒歲八十五

又春夢草云永正七年庚午八月十一日夜禁裏御夢想ノ事承テ令上洛御會ニ參刺發句ヲ申ベキヤウニ有シカバ兎角申上不及申侍過分共中々申ニタラヌ事アリキ其夜心中ニツバケテ侍シ及ヒナキホトハ雲井ノ夢ウツ、

アヤシキ身トモオモユル哉

御夢ノ中ヨリノ次第ヲ記シ留タキヨシ前ノ内府ニ頻ニ申シカバ筆ヲ染ラレ侍ヲコ、ニ記置者也

サイツノ比ウチノ帝ノ御夢ニ先皇ノ御代御連歌有ベキニテ發句ハ肖柏法師申スベキ由有シカバ先ウチウ

チニ御覽有タキ由當代ノ仰事成シニ發句ニヲキテハ當座ニ申スベシ歌ノ心ニオナジ風情ヲ思メグラシ侍トテ

アシ曳ノ山トヲキ月ヲ空ニヲキテ

月影タカキ末ノカケハシ

ト云歌ヲ申上タリト御覽セラレヌルヨシ語仰ラレシカバサテモメヅラカニモ有難カリケル御事哉天曆以往ノ歌ニ取テモ正ク柿本山邊ノ風體ノ外カ、ル稀ニヤアラン本ヨリ凡人ノ見ル處ニアラザレバ凡慮ノ所詠ニアラザルベシオホヨソ青雲紫宸ノ夢ニ入類唐ニハ傳野ノ遺賢ノ舟楫輔佐ノ名ヲ殘巫山ノ神女ノ雲雨妖艶ノ情トナレルタメシモンコヲ聞アリケン今此老法師ノカ、ル言葉ヲキコヘアリスト寂慮ヲ驚ケレバ古今道絶タル事ニコソ年比夢庵ト呼來ケルモカ、ルベキコトノ識ノ文ニヤト迄危オボヘ侍シカバ折節便ニ文ツカハス次デニ記シ送シカバ思ニモコヘタル感悅手ノ舞足ノ踊所ヲ知ズトテ九月十日ノホドニフリハヘノポリ來ラレシモ誠ニヤサシキ志ナルヲ同十三日空ノ氣色コ、ロヨク晴テ吾國ノ月ノ名モ實甲斐有メベキ折ナレバ御連歌アソバサルベシ彼老人召具

シ候ベシ發句ハ下官申ベキヨシ仰ラレシカバ此事ヲ
思出テサラバ私ニ相ユヅルベキヨシ申請テ彼法師ノ
發句也

空ニヲキテ見ン世ヤ幾世秋ノ月

詠ハ則御製ニテ

庭ニクモヲスタマシキノ露

コレカレアマタサブライテ御一座暮カ、ルホドニナ
レリ
是迄在ニ春夢草一

又イツノ比カトヨ

春サカス花ヤ心ノフカミ草

ト云發句セラレケレバ其ヨリシテ牡丹花ト異名ニ云
傳由ト云リ

當津連歌門弟者

河内屋宗訊

其子宗周一咄齋

下田屋宗柳 茶竹齋

等惠晴齋

或時宗訊所ニテ歌ノ會アリケルニ

瀧邊時雨ト云題ニテ

宵 柏

山姫ノ瀧ノ白キヌ染カネテ

ケフ初時雨サソヒ來ヌラン

金光寺覺阿彌所ニテ

枯野風ト云題ニテ

同

音ヲシル友ナラスヤハ下萩ニ

ナラノ枯葉ノ野邊ノ朝風

伎藝

意雲

後土御門ノ時ノ園基ノ良手也泉南ニ居住シ可竹ト號
シ又皓隱トモ云

紹鷗

當津南莊舳松町ノ住人也茶湯ノ道執心不レ淺其德ニ
ヨリテ京都田舎茶湯ノ宗匠トシテ人々崇敬セリ弘治
元年乙卯十月廿九日病死ス此人武田因幡守仲村ト名
付武田信光ノ裔孫也祖父仲清應仁ノ亂ニ討死シテ父
信久孤ト成テ四方ニ周流セラレテ竟ニ泉南ニ止住ス
當津ヤ住ウカリケン都ヘ登四條戎堂ノ隣家ニ身ヲ隱
テ居住セラレケレバ大黒庵ト名付戎大黒相并心也剃
髮シテ紹鷗一閑居士ト號ス初周防國山口大内殿御在
京アリケレバ時々伺候セリ其耳ナラズ其折シモ西三
條逍遙院殿ニ因歌道ノ望不レ淺出入ス年久カリケレ

バ三條殿其志ヲ感シ思召古今集ヲ被_レ遊被_レ下ケル其
比五條松原町ニ宗陳宗悟ト云數奇者アリ是ハ珠光ノ
弟子也紹鷗彼所ニ至茶道ヲ兩人ニ尋究疑ヲ晴年月ヲ
送堺ヘ歸住テ彌數奇ニ身ヲナシテ世ノ覺ヒトカタナ
ラズ其後大内殿ヘモ下ス春ハ花ニ心ヲ盡鴈ノ歸時ト
云ハ風爐ノ茶湯ヲ出又渡聲ヲ聞ハ圍爐裡ノ樂ニ心ヲ
ノベ永夜ヲ明ス折シモ同所ノ北向ト云所ニ道陳トテ
茶湯ニ身ヲナス人アリ此人紹鷗ノ宿ヘ夜寒ヲ便ニ音
信テ古今ノ物語ノ次デニ此歌ヲ口占ケリ定家卿歌ニ
見渡セハ花モ紅葉モナカリケリ

浦ノ筈ヤノアキノ夕暮

紹鷗自筆ニ書數奇屋勝手ニ押ケルトカヤ紹鷗ノ數奇
ノ心ハ此歌ヲ以テ心トセリト申傳リ又道陳ノ紹鷗ニ
云シハ數奇ニハ坐禪ノ心モ捨ガタキト語合相友ニ紫
野大林和尚其比堺ニ御座アリシ時佛法ヲ信仰セラレ
ケル其後虛堂南浦和尚ノ印可ノ墨跡ヲ求得テ世ノ重
寶トセリ紹鷗其後時移事去テ甲州武田世ノ聞オモア
リシカバ紹鷗武田ヲ改テ武野トゾ號セラレケル歌ニ
タネマキテオナシタケタノ末ナレト
アレテソ今ハ野トナリニケル

其子宗瓦ト云ケル其子武野安齋幼ナリシトキ朝藏主
トテ澤庵和尚ノ巾瓶ニ隨侍セラレケル委ハ不_レ載

道陳 附空海

舳松町ノ北向ト云所ノ先祖久住ノ人也財寶田畠其身
ニ餘シガ歳五十九某歲正月十八日病死ス紹鷗死去ノ
後京田舎ノ數奇者ノ宗匠ト云名ヲ取リ此人數奇ノ道
ヲ執心セラレシ發ハ洛陽東山ニ慈照院ノ在ケル其御
内ニ能阿彌相阿彌ト云二人アリ能阿彌ノ小姓老テ當
津ニ下リ剃髮シテ空海ト云リ世人弘法大師ト同名ト
云バ世ニハ釋迦院阿彌陀院トサヘ付ニ弘法ノ名ヲ云
バ何カ苦カラント云リ道陳此老人ノ衣食住ヲ心安セ
リ右ノ兩人朝夕ノアヒシライ道具ノ次第ヲ不_レ淺傳
タリ是モ大林和尚ノ參徒也即紹鷗道陳心ヲ一ニシテ
南宗寺建立セリ

千宗易

道號ハ利休

南莊今市町千與四郎ト云シ人也先祖ヨリ久住ノ人後
ニ千宗易ト改名シ利休居士ト云リ十七歳ノ比ヨリ茶
湯ニ心ヲ寄道陳ヘ通數奇ニ名ヲ得タリ十九歳ノ時道

陳紹鷗へ物語ノ序ニ千與四郎ト云者茶湯ニ心ヲナシテ我方へ切々來ケルガ茶湯不_レ見惡難談モ詞艶聞侍ト語玉へバ茶ヲ吞候ン者ヲト紹鷗宣ケルトカヤ年ヲ經テ利休ノ茶道道陳紹鷗ノ如ク天下ノ數奇ノ司世ノ用隱ナシ其上數奇ノ心持ハ家隆卿歌ニ

花ヲノミ待ラン人ニ山里ノ

雪間ノ草ノ春ヲ見セハヤ

此歌ノ消息ヲ以テ道トセリ又利休法體ノ事ハ紹鷗ヲ請待セラルル其朝事新ヌルトテ法名宗易拋筌齋ト云リ利休ハ道號後ニ居士號ヲ賜也其節古溪和尚ノ賀頌ナド有_レ之其後太閤秀吉へ召出サレ知行拜領ス然其本ヨリ閑居セント思ハレケレドモカク世ニ出タル事ヲ本意共思ハザリケルニヤ慈鎮和尚ノ歌ヲ口占玉ヒケルナリ

ケカサシト思フミノリヲトモスレハ

世ヲタル橋ト成ソカナシキ

ト云歌ト聞及侍其後讒言ノ事有テ切腹シ終ヌ辭世其今ニ當津ニアリ少庵ト云ハ利休ノ繼子也幼少ヨリ利休ニ隨逐シテ茶道ノ上手タリ利休死后流罪ノ後ニ御免京都宗旦ノ親也道庵ハ利休ノ實子也茶道ノ妙手ト

云是モ利休死后流罪ノ後ニ御免今ニ末流筑後州ニアリト云共一生獨身ニテ養子モセズ近比死シテ其跡斷絶ス

連歌師宗椿

牡丹花ノ門弟ニテ逍遙院殿ニモ知レ侍テ和歌ノ道ニ深心ヲ入テ源氏物語書ル事二十部ニ及リ世ニ類ナキ事トゾ聞シ煩事ニテナク成侍ル其際迄彼物語ヲ書ケルガ朝顔ノ卷ニ至テ失ニシ由聞シカバ思續玉ヘルトテ牡丹花

筆ニソメ心ニカケシ契リトヤ

オリシモ消シアサカホノ露

宮尾道三

今春及蓮ノ家人也此地ニ來テ上源町ニ住ス今春家ノ謠ノ中ヨリ又一流謳出セルニ依テ是ヲ宮尾流トテ世ニ用是ノミナラズ千利休ノ時茶湯ノ道ヲ家毎ニ嗜ケル故此道モ專弄ケルトカヤ然故ニ息女モ見習テ茶具ノ其々ニ心ヲ就物數寄成事多後ニ利休ノ内室ト成バ或時短繁ノ柱ノ持所ノ手懸ニ燈心ヲ持ル作意ハ此内

室ノ好トカヤ

高三隆達

元ハ日蓮宗ノ僧當津顯本寺ノ寺内ニ住ス有故還俗
シ高三氏ノ家ニ往テ藥種ヲ商年ヲ經テ小歌ノ節ヲ一
流謳出スヨリ世俗隆達流トテ謳賞毓

鼠樓栗新左衛門

南莊目口町ノ内ニ淨土宗ノ寺内ヲ借テ住居ス刀ノ鞘
師也細工ニ名譽ヲ得タリ小口ニ刀ヲ差入ルニソロリ
ト鞘口能合故ニ異名ニソロリト云ケル後ニ太閤ヘ召
出サレ細工ヲ承ニ口ノ能者トテ細工名人ノミナラズ
鼠樓栗ガ咄ト世俗迄モ云傳也鼠樓栗存命限ニ及時秀
吉公ヨリ上使ヲ被レ下何事モ望ハナキカトノ上意ア
レバ別ニ望モ御座ナク候若ハ御一門中ヘ御書ニテモ
被レ遣候ハバ片便ニテハ候ヘ共可ニ届申上ト上聞ニ
達シオハシマセト云ケルトカヤ臨終迄モ咄ハ休ザリ
ケリ咄耳ニアラズ詩歌ニモ携テ艶カリシゾ然バ關白
秀次公ノ御前ニ伺候セシ時昔日北山行幸ノ時牀ニ飾
セ玉ヒシ時ノ土峯石ヲ或人捧奉シヲ見侍テ仰ニ任テ
作レ詩曰

千里飛來入ニ座間ニ
不レ知山魄化成レ石
自レ今何用在ニ東關ニ
士嶺無レ端拈出看
アフミ路ハオフシノ昔イテトコロ

ウシヤ小富士ノ國ニノコリテ

車屋道説

今春大大夫ノ弟子也當津ニ來テ車町中濱ニ住シテ家
流ノ中ヨリ一流撰出シテ聲ヲ吟ジ自筆ニシテ板ニ彫
行車屋本ト世ニ用ハ是也元ハ七十五番ナルヲ再加増
シテ百番トナス

喜多七大夫長能

誕生所ハ市町中濱住居ハ北莊櫻町也小名ハ八之丞親
父ハ醫者也願慶ト號ス舍兄ヲ萬丞ト云リ秀頼公ニ召
遣レテ大坂陣ニ討死ス二男ハ醫師ノ家ヲ續陽春ト號
ス七大夫七歳ノ時ヨリ當津勘大夫ト云能大夫ノ弟子
也其時ヨリ踏舞ノ妙ヲ得タリトヤ故後ハ天下無雙ノ
大夫トシテ今ニ至テ子孫其藝ノ道ニ達シ公方ノ御用
ヲ承リ奉ル

惠藤源左衛門

北莊矢藏下町ノ住人也中村備中入道一噌ノ笛ノ弟子ニシテ其妙ヲ得タリト云リ所持ノ瓦落ト云笛ハ當津常樂寺ノ僧成就坊ノ什物管絃ノ笛ニテ有シヲ惠藤所望シ一噌ノ指圖ヲ受京指田ニ直サセテ亂舞笛ニ用ト也其後常樂寺ニテ能アリシニ此笛ヲ吹ケレバ金堂ノ軒ニ響瓦落ケル故笛ノ德世ニ聞近衛殿ヨリ記ヲ被レ遊瓦落ト名付玉フ名管也此笛ヲ弟子藤田清兵衛ガ手ニ渡ス其後尾張大納言義直卿扶持人ト成由也

堺舜慶

世間ニ堺舜慶トテ茶入ヲ持弄事ハ此人根本當地ノ生ニテ其後尾州瀬戸ニテ茶入ヲ焼又伊勢ニテモ焼故ニ其々ノ所ノ名ニヨリテ分アレドモ根本此地ヨリ出タレバ一事也其子孫利休時代迄堺ニ居住スト也

一節道清

鼓ノ胴築也名字ヲ云付テ一節ノ胴ト云也此作ノ胴ハ木地ヲ用ル事也塗胴ハ鳴劣リ先祖ヨリ今三代ニシテ築

甫竹

茶杓細工ノ名人也本ハ利休ヨリ傳授スト云リ後古田織部殿ノ引廻ヲ蒙リ世ニ被レ知者也或時台徳院殿ヘ召出サレ茶杓ヲ削數度捧奉者也今ニ子孫甫竹某トテ有レ之

土佐久翌

天正年中ノ比最繪ヲ書其子ヲ源左衛門ト云舍弟左兵衛將監光起ハ寛永年中ニ京都ニ移住ス

表具師西順

生國ハ奈良ノ笠置ノ住人中氏古來表具ノ名人成故千利休當津ヘ呼テ其比表具專用卽生國ヲ家名トシテ代々奈良屋ト號ス西順ヨリ其子孫慶勝慶音慶庵慶嚴

雜賀淨甫

唐木細工ノ名人也生國ハ紀州雜賀ノ住人豐後守ト云傳紀州浪人當津ニ來テ細工ノ譽ヲ殘セリ卽彫印ニ名ヲ記ス

加賀四郎

慶長年中ノ刀鍛冶也二代ニシテ滅ス銘ニ加賀四郎ト
ウツナリ

碁利立

日蓮宗ノ僧ニシテ碁ノ上手也南莊湊村ノ海濱ニ庵ヲ
構テ住ス寛永年中ニ專碁ノ術ヲ以テ天下ニ流布ス

中將碁溫故

北莊妙國寺寺内法林坊ノ住侶日蓮宗ノ門徒而中將碁
ノ良手也或時法皇ノ御所ヘ召出サレ法橋宗知ト中將
碁ヲサ、シメ兩人ノ勝負ヲ觀覽アリケルニ溫故兩度
勝利ヲ得タリ因_レ茲天下ノ名人ト聞ヲ取リ

松井與次郎

御醍醐天皇ノ御時典藥頭和氣丹波兩流ノ醫術ノ内ニ
武藝ヲモ嗜家也或時天皇ノ御惱ノ時陰陽ヲ占ケレバ
是恠鳥惱所爲也トテ勸奏スルニ依テ即此時兩家ノ者
共被ニ仰付一ケレバ和氣與次郎ヲ撰出サレ恠鳥ヲ忽射
落ケレバ即時ニ御惱愈其恠鳥ノ落所ハ井ノ邊也松篠
有シニ帝ヨリ勅ヲ承テ即和氣ト云名字ヲ改玉ヒ松井

ト號セリ代々松井ノ庶子俗名與次郎ト呼來リ其後當
津ニ住居シテ今ニ至テ與次郎法體シテ醫師松井宗岡
ト號ス家ノ紋ハ篠也前宗岡ハ古今傳授也

○名物

古來ヨリ此地ニ茶湯ノ會ヲ持弄ニ就テ古人天下ノ名
物ヲ貯ル旁々多記錄セル舊卷ヲ求出顯者也然共世遠
時移テ此記錄ノ中ノ人ノ子孫今ニ存モ有又ハ何方ノ
誰人也ト知者モナシ故ニ此道具モ亦此地ニ留モ有誠
ニ世ハ常ナラヌモノトゾ元龜元年四月朔日信長公美
濃國岐阜ヨリ御上洛有テ堺ニ求蓄タル名物ノ道具共
御覽有ベシトテ松井友閑法印ト丹羽五郎左衛門尉長
秀ニ仰付サセラレ兩人承テ堺ノ南北ニ觸シカバ所持
ノ物共此度奉デハトテ持參程ニ幾等トモナク集信長
公一々御覽有テ勝タルヲ留シカバ

天王寺屋宗及

菓子繪

藥師院

小松島

油屋常祐

柑子口

即應シタル貨ヨリ遙ニ過分ニクダサレケレバ三人ノ
者共頓ニ德付タルヤウニゾ見ヘタリ又元龜以前永祿

八年乙丑信長公へ進獻セシ道具ニハ

今井宗久 松島葉茶壺

紹鷗 菓子繪也

天正十三年乙酉十一月朔日北野松原ニ於テ秀吉公御

茶湯ノ時常津ヨリ被ニ召出ニ茶具被ニ持參ニテ飾奉シハ

先秀吉公ノ御道具ヲ一番トシテ 此茶具爰ニ不レ及レ記

二番 千利休 三千石被レ下

鳥丸香爐 鴈繪 拾子

檜柴 尻膨 攻紐釜

銅 燭 塗天目 高麗茶碗

入道蜘蛛 竹蓋置 折撓茶杓

蛸壺水瓢

三番 天王寺屋宗及三千石被レ下

枯木 撫子 初花

尼子天目 高麗茶碗 折撓茶杓

入道蜘蛛 竹蓋置

四番 納屋宗久三千石被レ下

月繪 松花 祖母口釜

信貴肩衝 頭巾茶碗 竹蓋置

三島茶碗 折撓茶杓

此時秀吉公御手前ニ被レ下御茶衆中ハ

近衛 一番

信輔公 日野 輝資卿 家康卿

信雄卿 津 待從 信 兼

二番

秀長卿 秀次卿 利家

氏 鄉 貞通 利休

三番

有樂 秀勝 賴隆

秀家 忠興

古來當津所持名物茶道之事

笠原宗念

肩衝 何ノ肩衝トモナシ摺ジテ何トモナ 肩衝キハ其主ノ家名ヲ名トスルニヤ

萬代屋道安

投頭巾 或人此茶入ヲ珠光方ヘ見セケレバ折節頭巾ヲ著シテ見
頭巾トハ名付タリ此壺ニ殘目四アリ摺藥濃餡色也向ニ一ツ
下ニ一文字ニ押込殘目アリ其内流色藥アリ木ハ珠光ノ所持
九重壺 此壺白柿壺也ケフコヘニ匂ヌル 裁ト云歌ニテ名付タリ七斤餘入也

珠光茶碗 竹田茶碗

筒ハイクツキ
灰被

茜屋吉松

竹茶碗前ニハ守徳所持

木野邊肩衝

弦付茶入

牧溪鷄繪

斷江茶碗

寅申壺寅申ト云事天王寺ヨリ出壺也天王寺ノ市ノ日寅申ノ日市ニ出タルニ因テ名付タリ六斤八ツ入也前ニハ木屋宗勸所持

小西道純

驢蹄茶入

肩衝

内赤盆

鹽屋宗悅

末松山石上下一寸八分横五寸三分前後二寸九分許高山アリ黒白トニ交末ノ松山演コサジト讀シ古歌ヲ取テ名付

象瀉葉茶壺也此壺ニ煙十五アリ松島ニ等ト云テ奥州ノ名所ニ象瀉ト云所有ニ因テ名付タリ歌ニ松島ヤ小島ノ海士ノ詠ヨリ猶マサリユ

灰被天目

水仙花繪

醋色合子

小野肩衝前ニハ尼崎屋道易所持

肩衝前ニハ尼崎屋宗向所持

油屋常祐

細川晴元天目

淺茅竹茶杓

臺數ノ内也

小島屋道察

客來一味唐繪ノ名筆也ト云傳

時雨壺

船前ハ宗祐所持

經粉屋宗陽

肩衝新田ニ似テ趣アリ面白藥アリ

虛堂文字

茜屋宗佐

趙昌花繪

驢蹄茶入前ハ經粉屋帶刀所持

淡路屋宗和

鶴頸茶入

柿茶入前ハ小崎屋宗活所持

夕陽繪

餌簀茶入

太鼓茶入

赤松則祐肩衝

臺七之内也

芙蓉繪舞臺筆也赤色ノ絹ニ書

餌簀水指

枯木

藤腰五德前ハ日比屋了慶所持

臺七ノ内也前ハ革屋長善所持

浪繪

臺數ノ内也

紹鷗天目

虛堂文字

志野茶碗

志野宗波風流名匠ニテ所持セシ茶碗也但唐茶碗ノ由申傳

鍋釜

前ハ珠光所持

芋頭茶指

前ハ紹鷗所持

開山五德

林哲釜

守德竹茶杓

今井宗春

蟲繪

飯銅

内赤盆

網千屋道琳

淺見天目拜領

馮海粟繪

伊勢屋道滴

瘦馬繪小軸李忠

圓座肩衝

唐茶碗

肩衝

太子屋宗宇

牧溪大根繪

臺數ノ内

小島屋

肩衝

粒リウゴ子花瓶

藥師院

肩衝

飯銅

子昂硯

葉室文琳

天目

石橋良叱

串指雀繪

釣瓶

坂東屋筒

前ハ蜂屋道於所持

蝸牛花生

松江隆仙

砧花生

觀物初墨跡

瘦馬繪

李安忠筆也前ハ伊勢屋道滴所持

天王寺屋宗及

江月和尚ノ父也

文琳茶入

天目

臺數

數ノ内黒臺也覆輪鍍朱ニテ梅内輪ヨリ中朱ニテ一文字有

船子繪筆ハ牧溪讀ハ虛堂也

鐫無花生

鷺丸繪梁楷筆

志野茶碗

合子

了無

但本書ニ名家ナシ

貨狄船前ハ本邊所持

黃天目

石津屋宗嬰

雀繪

深山茶壺

錢屋宗納

無準文字

虛堂文字

須彌釜

簞笥

宗本

本書ニ名家ナシ

貝盡繪

玉礪多照繪ハ幅ノ内也前ハ淨安所持

重宗甫

飯銅

虛堂文字

千種茶入壺

內赤盆

圓悟文字

武野宗瓦

小茄子

漁父硯

象牙茶杓

正通

本書ニ名家ナシ

牧溪摩腹布袋

翁天目

稻繪月山筆前ハ練屋宗和所持

蒲公英繪拜領

千宗易

利休事

情張釜

鶴一聲花生

香爐前ハ三好宗三所持

三好實休肩衝

右之内家名無ニ舊卷ニ故是ニ不レ記

○土產

一休和尚烏繪扇子

和尚住吉牀菜庵居住ノ時當津甲斐町中濱扇子屋甚右衛門ト云者ノ所ヘ折々來臨シ玉ヒテ家内窺シキヲ憐玉ヒ白地扇子ニ烏或銀臺繪ナドヲ書玉ヘバ世人此扇

子ヲ賞翫スト云リ俗語ニ扇子屋へ入智シ玉フト云ハ
僻言也

湊壺鹽

今ノ壺鹽屋先祖ハ昔年ハ藤太郎トテ猿丸大夫ノ末孫
ト云リ花洛上鴨島枝村ノ人也シニ天文年中ニ當津湊
村ニ來住居シテヨリ以來紀州雜賀鹽ヲ求土壺ニ入テ
燒反諸國へ商賣シテ壺鹽屋藤太郎ト號シ世ニ廣用故
ニ今ニ至迄其子孫相續ス承應三年甲午ニ女院御所ヨ
リ天下一ノ美號不_レ苦トアリ時ノ奉行石河氏はヲ承
リ頂戴ス又延寶七年ノ比ニハ鷹司殿ヨリ折紙狀アリ
呼名伊織ト號ス

湊紙

昔年川端道仙ト云者洛陽二條堀川ノ住人也シニ後醍
醐天皇御宇宿紙ヲ漣所ノ名ニ寄テ湊紙ト云習セリ

鐵炮

古老物語ニ云本朝ニ鐵炮傳シ事上代ニハ是ナシ中比
文永二年乙丑八月ニ大元老皇帝日本ヲ攻ントテ兵船

六萬餘艘ニ軍勢ヲ乗テ博多津ニ推寄日本ニモ出向テ
防戰ニ寄手ノ方ヨリ鐵炮トテ鞠ノ勢成鐵丸迸事板ヲ
下車輪ノ如霹靂スル事閃々タル雷光ノ如成ヲ一度ニ
二三千投出タルニ日本ノ兵多燒亡サレ船櫓ニ熾付テ
可_レ消隙モナカリト太平記ニ書侍日本ニハ此時分鐵
炮ト云物知タリケルニヤ正ク日本ニ傳シハ永正七年
庚午泉堺ヨリ小田原ノ山伏玉龍坊ト云客僧買求テ北
條氏綱ニ奉其後氏康ノ世ニ成テ和泉堺ヨリ國康ト云
鐵炮鍛冶ヲ呼下シテ數多張ラレシニ根來法師ニ杉坊
二王坊ナド云者關東ヲ廻テ鐵炮ヲ教弘タリ又甲州家
ニハ大永六年丙戌西國ノ浪人井上新左衛門ト云者信
虎ニ奉公シテ鐵炮ヲ教ケルト也未_レ慥トアリ又天文
八年己亥八月二十五日薩州太守島津修理大夫義久領
地赤尾木湊へ南蠻ノ大舶大明國ノ俗儒五峰乘來船中
ニ蠻賈ノ長牟良叔舍ト云者始テ鐵炮ノ秘術ヲ義久ノ
家臣種子島兵部丞時堯是ヲ傳授ス當津住人橋屋又三
郎是ヲ鍛鍊シテ普諸國ニ流布ス是鐵炮ノ濫觴也已上古老物語
又大筒ノ張初ハ當津芝辻氏也此氏ノ先祖ヨリ鍛冶
ノ家ニシテ北莊櫻町ニ住ス中比清右衛門入道妙西ハ
鐵炮張事其妙ヲ得タリ其子孫理右衛門入道道逸ニ至

テ彌精微ノ處ヲ極タリ其比異國ヨリ銅ノ鑄筒玉目一貫目許ノ大筒渡シニ東照宮鐵炮ノ大筒得玉ハン事ヲ思召諸國ノ鍛冶ヲ召集鐵張ノ大筒ヲ調進上仕トノ上意成下ト云共誰カ御受ヲ申上者ナカリシニ道逸畏テ領掌シ奉ル即本口一尺三寸末口一尺一寸長一丈玉目一貫五百目ノ大筒ヲ不日ニ張上奉是蓋鐵張ノ大筒ノ始成ベシ其大筒今紀州ノ御城ニ有之由申傳今ニ至テ其子孫門葉相續シテ忝モ公方ノ御用ヲ承列ニ加ル家ト成リ

土居原鋸

昔日櫻町ノ西ニハ人ノ家居モナク土居也シ所ニ小家ヲ建住居シテ鋸ヲ打出セリ他人ノ工ヨリモ勝タル故ニ世人持弄テ土居原鋸トテ重寶ス今ニ至迄其子孫不レ絶其土居原ニ町屋ヲ建テ役地ト成リ此所櫻町ノ續成故カ梅小路ト町ノ名ニ云リ

出齒庖丁 附御方庖丁

魚肉ヲ料理スル庖丁他國ニ勝テ當津ヨリ擣出ヲ吉トス其鍛冶出齒ノ口本成故人呼テ出齒庖丁ト云リ今ニ

至迄子孫不レ絶○又荳蔻庖丁鍛冶ノ名人有シニ吾妻ニ相槌ヲ擣ルニヤ是又人名付テ御方庖丁ト云習セリ今ニ子孫不レ絶

甲鉢鍛冶

鉢鍛冶宗鐵ト云ハ昔ハ甲鉢ノ上手也シニ千利休ノ比ヨリ數奇屋金物細工ノ名人トナレリ

白粉

諸國ニ白粉此ヲ燒家多ト云共當境ノ小西白粉ハ古來ヨリ其名ヲ得タリ異國ノ六官ト云者彌其制法ヲ傳テヨリ精好也トカヤ延寶四年丙辰六月二十八日中御門大納言宣旨承テ和泉目ノ官ヲ玉ハリ宣案ヲ頂戴ス

天神前櫛

此櫛ノ名ヲ得ル事ハ鋸ヲ左右ヘ引事ヲ得タル故ニ髮筋不レ刻ト云リ

塗木履 附雪踏

女ノ著ル履也諸國ニ多ト云共當津今市町ノ木履吉ト

スル故ハ舊成迄齒ノ拔事ナシ譬石原ヲ行共轉事ナシ
○雪踏ノ始ハ昔日尻切ト云物ヲ用千利休作意トシテ
雪ノ比茶湯ノ時露地入ノ爲ニ草履ノ裡ニ牛革ヲ付サ
セ用ル也卽雪ヲ踏ト云義ヲ取テ名付タリト云傳也

白炭

茶湯ノ爐中ノ色炭也光瀧ノ炭ヲ取寄テ白塗テ用ユ

舳松瓜

南莊舳松村田地ヨリ作出ル甜瓜也古昔東照宮ヘ獻上
シ奉シ例ニ因テ今ニ至迄毎年其時節ヲ得テ公方ヘ奉
擎者也

鬼煎餅

海會寺前鬼煎餅ト云事ハ或人ノ被レ仰シハ伊勢物語
ニ鬼一口ト云縁ヲ取テ小ヲ云ト也シニ近年ハ鬼ト云
ハ無ニ散氣ニ物ト心得テ殊ニ大ニ拵テ鬼ト云名ニ合ス
ルト見ヘテ燒誤リ詩人ハ煎餅ヲ仙袂ト書リ

紅葉豆腐

何國ニモ豆腐ハ有共別シテ當津ノヲ勝タリト古人ヨ
リ云傳リ紅葉ト云名ヲ加タルコトハ堺ノ櫻鯛ニモ不
レ劣味ナレバトテ角云トゾ花ニ對スル紅葉ノ縁成ベ
シ又或人云此豆腐ヲ人ノ能カフヤウニト祝テ付タル
名共云リ買様ト紅葉ト音便成故歟今豆腐ノ上ハ紅葉
ヲ印ス詞ニ就テ形ヲ顯成ベシ買用モ通テヨシ

前魚

住吉明神ノ社ノ御前ノ海邊ヨリ寄來魚ヲ前魚ト云又
一說ニハ西宮戎ノ御前ノ海邊ヨリ寄來ヲ云共申傳リ
時節ハ三月ヨリ六月マデノ事也ト云習リ

歌枕爲家卿歌ニ

ユク春ノ堺ノ浦ノサクラ鯛

アカスカタミニケフヤ引ラン

ト讀タレバ鯛許ニ限様ナレ共摠ジテ當浦ノ魚ヲ前魚
ト云習セリ

撰糸絹

往古此浦ヘ唐船ノ入シ時織人ヲ乘來ヲ此地ニ留テ始
テ絹ヲ織出セシトカヤ其子孫不レ傳ト云共其工今ニ

至テ精好也

金紗

元和年中ノ比唐人當津ニ渡テ錢屋松屋ト云兩人ノ者
ニ金紗ノ織樣ヲ相傳シテヨリ其兩家相續テ織出セリ
因レ茲今代ニ及デ世間ニ散在セル物ヲ名付テ錢屋裁
松屋裁ト持弄者也

貞享元甲子年二月吉辰

文臺屋次郎兵衛

堺鑑 下終

蘆分船序

十日の雨塊をやぶらで五日の風をだやかに潮のさし引時を違す波の鼓のうちおさまりしあら玉のとし立歸る朝より夕附日のおかしげなるに棚無小船にたよりしてこぶりくと吸筒の口をならし盃もうかび出たる堀江のどう龜も五萬歳とうたひはやされ誠にめでたふ候ひし昔の京を尋むといともかしこく作りみがせ行ふ鳳闕の御ありさまも今指を折て其いにしへを考みれば十づゝ十の百の数にもあまりける星霜を経たればいづこを皇居の跡としれる人もまれなり宜なるかな彼するすみのいひけむやうに萬にみざらむ世までおもひ置てむもはかなかりけるよと思へば思へば予もまたすゝろに袖の鹽垂し泉良の焼火はをのづから民のかまどの烟と高き屋の空になびき合八重の霞と立のぼる遠き雲井のむかしをかこち其香ばかりを名残とて今を春べと咲やこの花の梢をあへなくもをのが羽風に散しつゝこゝろに侘てなく聲は大

鶴鷄の鳥をなすかしむやと花にも泪をそゝぎ三津の濱松物いは言問ましと所から都鳥の蹈分たりし跡を認神社佛閣のかたちをゑがき前後六冊とす是かしながら搖唇鼓舌擅におもひつゝ侍ること人の見るべきにもあらずいと物ぐるをしけれどもかいやり捨べきわざならねば此草藥をつゝりて名づけて蘆分船としかいふ延寶三乙卯彌生末五日難波の旅館に筆をとり侍る物ならし

蘆分船第一

一無軒道冶撰

難波京

人皇十七代仁德帝の皇居今の高津宮又難波村東の北に據あ
千三百六十三
年にあたるに御父應仁天皇登霞したまふ時春
宮を宇治の雅倉これくらの宮に譲りたまふに仁德は兄にてま
し／＼ければ是ををそれ宇治の親王辭したまひき
仁德は又御譲にあらねば位につきたまはで三年迄に
ぞなりぬ國のさ／＼げ物も朽うせて民の愁たり爰に宇
治の親王神變をもてかくれ給ぬ其後仁德は猶即位な
かりき其時王仁と申て日本の文道の師の爲に應神の
御時高麗より來朝せしが仁德をいさめ奉りてよめ
る

難波津に咲や此はな冬こもり

今は春へとさくやこのはな

異國の人和歌をもていさめ申ける事えならぬ理なり
まことにやんごとなき王仁を師とし文學世に行はせ
たまひ政道かしこく民の勞をいたはり給ひ御調物を
ゆるしをかせたまひて

高きやにのほりてみれば煙たつ

民のかまとは賑にけり

又三十七代孝德天皇は冬十月難波の長柄の豊崎に都
をうつしたまふとなり御治世十年の間なり難波と云
こと日本紀には波花と見えたりしかるを難波と誤り
けるとかや三の浦といふこと蘆津汐津難波津といふ
人もあり又御津ともいへども此説いづれかなるこ
とを知らず予おもふに御津とは仁德の皇居の津なれ
ば御の字をそへたるか敷津高津難波津といふ是等に
隨べきか

住吉の松のいはねをまくらにて

後大德寺左大臣

敷津のうらの月をみるかな

むかしおもふ高津の宮に跡ふりて

慈 鎮

難波のあしにかゝる春風

難波人あし火たくやはすゝけたれと 人

九

をのかつまこそとこめつらなれ

又大坂といひならはせしことはいづれの御時にかありけん大坂茶屋と云名によるとかや今の島屋町の小坂是也尋ぬべし

堀江

仁徳天皇十一年の冬十月南水を引て西海に入因て以て其名を堀江と號したまふと日本紀に見えたり今の木津村と云所也

萬葉
船きおふ堀江の河のみなきはに

來ゐつゝ鳴は都鳥かも

江 鳥

今宮夷いまみやのえびす

此やしろは天照太神宮蛭子素盞鳥の三神也并廣田大明神當社より北のかたに有玄かれども蛭子を所の守護神とあふぎ奉るなり抑此御神は伊弉諾尊御子也既に三歳にならせたまふまで脚猶たゝすかれ天の岩櫨樟船に載て風のまゝにはなちすてければ根の國へながれよらせたまひしを沖の釣する夷ひろひ奉りて養君の三番目なるがゆへ夷三郎とあがめ侍るなり又二神には三男とも申傳へたり

かそいろはいかにあはれとおもふらん

三とせになりぬあしたゝすして

又源氏あかしの巻に

わたつ海にしなへうらふれ蛭の子の

足たゝさりし年は經にけり

緣日はとしごとと孟春十日なり俗につたへて十日夷と云長月十八日には此やしろにをいて俗人の舞ありて神輿を天王寺の西門まで遷幸し奉る又いつのころよりか洛陽祇園六月の御神會には此所の里人神輿ふる役にまいるなりまことに由緒あること也當社より乾のかたに星が池といふあり是は此御神惡星を射落したまふ所と也又かたはらに鰯川といふあり其いにしへ天王寺造營のとき用水を引のぼせし川となり

逢坂清水あぶさかのしみづ

此清水は天王寺の三水の隨一なりと申傳へりいかなる三伏の夏旱魃にも靈水なれば潤る事なし此水頭にいたればおのづから下くゐる水に秋もかよふかとおもはれむすぶ泉の手さへすゝしくて夏なきとしと詠せるもかゝる所ならんとおもひ出られ侍るぞかしま

た歌には玉出の水ともよめり

續後拾遺

しらしいの玉出の水を手にくみて

前太政大臣

結ふ契りのすへはにこらし

柳陰ちらて秋たつ清水哉

宗 祇

松蟲塚

後鳥羽院の御時松蟲といへる宮女の塚なり其比法然上人都ひがし山にて別時念佛をはじめたもふ聴聞の貴賤群集しける時鈴蟲松蟲とて此二人發心して出家せしかば帝大に逆鱗ありて上人を土佐國へながせたまふなりすいむしの向後はいかいありけん松むしは此ところきたりて身まかりぬるゆへ其印にのこしをける所とて名づけて松むし塚といふ是すなはち七不思議の標の下也此靈木俗につたへて説々あまたあれどいづれを證としがたしいかさま子細あること

にや
經よみて其あたとふか松むしの

藤原言因

塚のほとりにちりゝんの聲

一心寺

坂松山高岳院一心寺は不斷念佛の道場也御本尊阿彌陀佛并二菩薩也中尊御長三尺五寸釋尊羯磨の作也文治元年後白川法皇と法然上人と日想觀を修し給ひし時天王寺の西門の岸に新別所とて四間四面の一字を建立したまふ其堂の西の小壁に上人の御筆して六字名號をあそばし其傍に書付給ふ

阿彌陀佛といふより外は津の國の

なにはのこともあしかりぬへし

今に傳へて難波名號といふ是なりされば上人此所におはしける時明遍僧都善光寺へまうでたまふ折から尋來らせ給ひ上人に對面し給ひて僧都此度いかゞして生死をはなるべきとあれば上人南無阿彌陀佛と唱て往生をとげんにはしかじとぞの給へば僧都又誰もさは見およぶに侍れども念佛の時こゝろの散亂し妄念のおこりしはいかい侍るべき上人云欲界の散地に生を受ものゝ心なんぞ散亂せざらんや煩惱具足の凡夫いかでか妄念を止べき其條は源空もちからおよばずこゝろはちりみだれ妄念はきおひおこるといふとも口に名號をとなへ彌陀の願力に乗じて決定わうじやうすべしとの給ひければ僧都これをうけたまはら

んが爲にまいりて候つるなりとてやがて出さり給ひければはじめて對面の人の一言も世間の挨拶の言葉なふしていであられけるよとて人々たうとみあへりけりとぞ

一慶長年中 東照宮神君當寺に御墨印等を下したまはる子^レ今現然たり又高臺院殿并木下宮内少輔翰墨數通あり靈寶あまたある中に

一聖德太子御直筆之御影

一幅

一中將姫御直筆之御影并縫之觀音同く稱讚淨土經

一卷

一法然上人一紙三行之六字名號

一幅

一本多出雲守忠朝元和元年五月七日戰死す則此寺に葬り三光院殿岩譽良玄居士と改名し并家臣殉死の輩までいまに石塔あり

茶白山

仁德天皇御治世八十七年春正月御とし百十齡にて崩御し給ふ御廟は^{今の轉方町平野大明神也}其としの冬十月陵を此所にきづかむとありしにいかなることによりて異り^モの^ツかたにあたりて百舌鳥野といふ所に葬り奉りしと

也それより此所を荒陵^{あらはか}といひけるとなりしかるをいつの比よりか山のすがた茶臼によく似たればとてかく世俗にいひ傳へり又元和年中御進發の御とき恭征夷大將軍源朝臣内大臣家康公此山頭に御本陣ならせ給ひ御武運益たかく御還陣の節^{かつ}勝山と嚴命ありしより子^レ今此名を呼來れりとぞ其比何れの御人やらん御所様はみなもとうちの茶白山

引まはされん武士はなし

安居天神

菅丞相昌泰四年正月二十日太宰權帥に遷されて筑紫へながされ給ふべきにさだまりにければ左遷の御かなしみにたえて一首の歌をつらね亭子院へたてまつり給ふ

なかれ行我はみくつとなりぬとも

君しからみとなりて留めよ

法皇此歌を御覽じて御泪御衣をうるほしければ左遷の罪を申宥させ給はむとて御參内ありけれども帝遂に出御なければ法皇御憤を含てむなく還御成にけり其後流刑さだまりて遂に配所に趣き左遷の罪にし

づみて延喜三年二月廿五日はかなくなり給ひつくし
安樂寺に葬にけるしかるに猶讒言の御憤やます雷と
なりてあだをむくひ給はんと都へのぼり給ふ時亡魂
の御すがたを此所にあらはしたまふゆへに今にいた
りて亡魂の天神と申つたへり此御神の事は人皆しれ
ることに侍れどもあら／＼しるし侍るべし抑御父は
參議從三位是善卿也天神の御名は道眞字は三、世に
管三と稱し奉る幼して和漢の才にとめること父祖に
も過給へり御とし十一歳の時父菅相公御髪をかきな
で若詩やつくりたまふべきかと問まいらせたまひけ
ればすこしも案じたる御けしきもなくて

月輝如晴雪

梅花似照星

可憐金鏡轉

庭上玉芳馨

寒夜の卽事を五言の絶句につくらせたまひけると也
貞觀年中對策及第し段々任宮あり昌泰二年右大臣に
なりたまふ此時左大臣の左大將藤原朝臣時平又本院の
大臣とも延喜帝御位につき給ひし後は菅丞相共に上皇の詔を
うけて天子をたすけ萬機の政を攝したまふある時延
喜帝朱雀院へ上居行幸の時上皇延喜帝へ仰せごと
には菅丞相はとしもたけ才かしこし専もちゐ給ふべ

しとて菅丞相をめしてそのむねをのたまふ時平是を
聞て大にいかりて陰陽師をめされ王城の八方に人形
をうづみ冥衆をまつり菅丞相を咒咀し給ひけれども
天道わたくしなければ御身に災難來らずさらば讒言
をかまへて罪科に沈めんとおもひて時々菅丞相天下
の世務にわたくしあり民の愁をしらず非をもつて理
とせるよし申されければ帝さては世をみだし民を害
する逆臣にして忠臣の臣にあらずおぼしめされける
よりして配所の難にあひ給へり當社の御まつりは八
月二十日なり俗につたへて芝原祭といふまた相公親
筆の觀音經等を靈寶とせり寔此御神は風月の道を守
り殊に無實の罪をはらしたまふなればたつとみても
猶たつとむべし

眞清水

山號有飛河山かといふ阿闍梨延海の建立也御本尊は洛
陽清水寺の別院におはします千手觀音の靈像を安置
せると也則聖德太子
彫刻の尊也むかし此所に地藏菩薩毘沙門天の
堂閣左右にならびて天然の勝地ありしかるに花洛清
水寺の觀世音は此二尊を脇仕とし給ふがゆへに其靈

なる所を靈とし眞清水と號せりされば此尊の威徳を尋ぬるに三世如來大慈悲皆集一體觀世音とあれば諸の佛の慈悲を集て觀音一尊の功徳とし給へり寔に三十三身の月のひかりあまねく六道四生の闇を照し一十九種の御法の聲はすべて三途八難の眠をさましたまへり就中千手の誓には枯たる木にも花咲菓生るといへば況や心あらん人一心に御名を唱奉らば災難をはらひ壽福を得ん事疑あるべからず誰か此尊を念せざらんや此地景またあるべきとも思はれず前には淡路島山の夕げしき松の葉越を詠れば沖漕舟の遠望猶云にたらず

清水の手水鉢かとおもほゆる

花實庵 貞

富

おいしみかけの海つらの景

大江岸 おほそのきし

大江浦大江橋など、歌にもよめりしかれども所の人の説くだくしく侍ればいづこを證としがたし今の眞清水より御城の前あたりを總名とせるなるべし昔日齋宮はじめ伊勢へくだり給ふ時は逢坂を越させたまふ歸京のときはかならずさだまりて立田越を経

て大江の岸をとまりとすつねはあれて一代に一度づつ假殿をたつるを大江殿といふこゝにて御被などおりしとなり其所尋べし

後拾遺
渡邊や大江の岸にやとりして

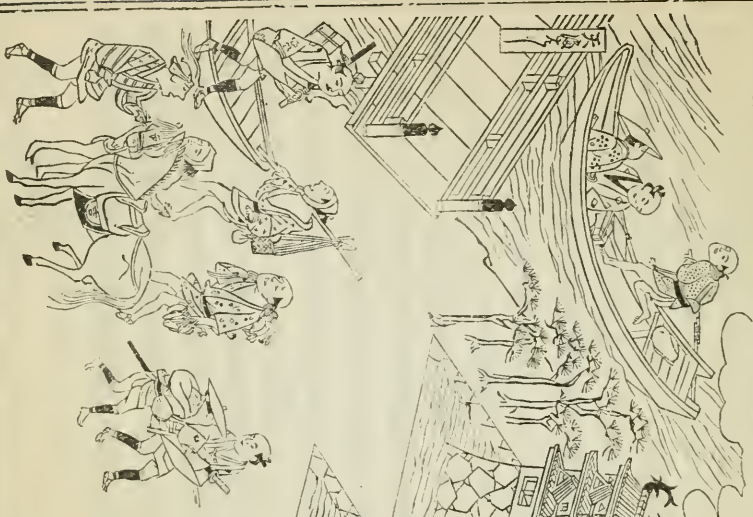
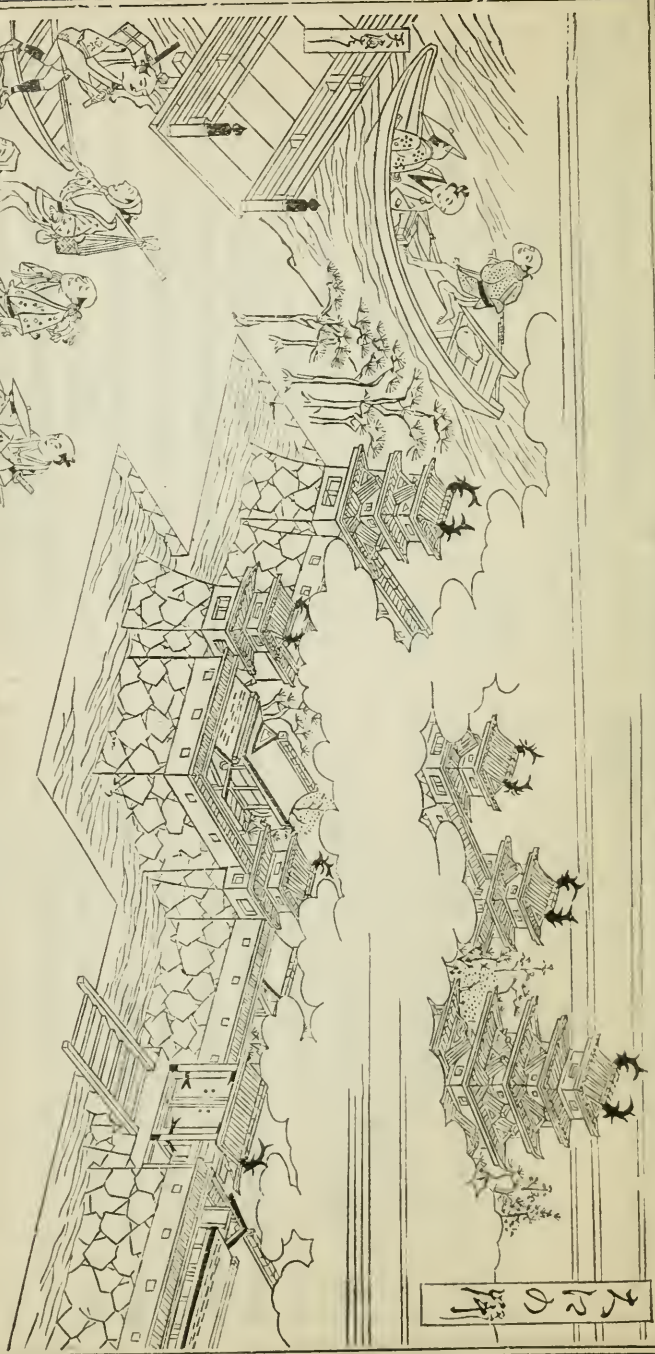
良暹法師

雲井にみゆる伊駒山かな

勝鬘院 しやうまんいん

御本尊愛染明王なり并寶塔大日如來なり此堂を勝鬘院と名づくることは聖德太子勝鬘經を製し給ふ其遺法によれるか抑推古天皇太子に勅して曰太子初て勝鬘經を講せしより此かた天下降安にして朕が身も平穩なり國に災害なし朕今遙に其經の義理をおもひ再三すれども遺言あり其文に對といへども猶其義にまよふ望らくは朕が前にをいて重て疏の文を講じ給へ太子辭せずして香を焼御前にして經を張講讀したまふ諸番の法師座に侍りて聞三日ありて竟りぬ天皇大に御感ありて信受し給ふとなりかゝるゆへある御經なれば今に其名を残しけるかくわしく太子傳に見えたり毎年水無月一日には常にかはりて參詣の老若男女所せきまで群集して夥しくぞ侍る

大にの陣



天王寺てんわうじ

當寺は人王三十三代用明天皇の皇子聖德太子の御創建也太子本朝に佛經を弘め給ふを守屋の大臣法敵となれりてたゝかひにおよび太子三度まで戦ひ給へども勝利なかりしゆへに太子多聞持國增長廣目の四天王の像を白膠木ねるてのきにてつくり御髪の中にさしはさみて誓て曰我此戰にうち勝なば四天王を造立し給はむとなりしかるに守屋を本意のごとく亡し佛法繁昌の國となれるにより玉造の岸の上に四天王寺を立件の像を安置し給へり其後推古天皇元年に難波の荒陵の東にうつし黃陵寺といへり又敬田寺ともいへり則青龍かくれけるにより黃陵院といふ池もあり太子みづから髪六筋をぬき佛舍利六粒を加て六趣に表し人間をすくひ給はむが爲塔の柱におさめ給へりとなり則寶塔第一露盤は鑄浮檀金一千兩をもつて鑄たれば末代にいたりて色變する事なしとかやおなじく天笠靈鷲山より天龍に銀を運せて地にしかれたるゆへ雨落くばまざるといへり又池水の蛙の鳴ざる事は此いけの底に十丈の大蛇をまつらしめ給ふ事七頭これあるゆ

へに息を立てなかざるとなり總じて寺内の大木金堂寶塔よりたかく生上らせもし天にのぼれども枝は下へさすとなり毎日天人あまくだり石上にて法會をのべ供養をなし給ふゆへ枝は上へさゝすくだるとなり石の鳥居は忍性といふ沙門永仁二年に是を立られしとかやされば此鳥居は極樂淨土の東門にあたるといへり西門に二王を立らるべきに南大門に立らるゝ事は太子末代にいたりて補陀洛山に通ひ給ふゆへに南大門にたてられけるとなり此二天金剛像王は印度より下給ひてみづから力士七像を造りたまへば日本に作者はなしと云々又此二王の上には小鳥もさらに飛ずとかや鳥居の額は小野道風となり

拾玉

この國の難波のうらの大寺の

慈 鎮

額のめいこそまことなりけれ

同

難波津に人のねかひをみつ鹽の

同

西をさしてそ契りをきける

同

西へとて迎ふる君をたのみみちは

同

難波の寺の御門なりけり

續後撰

今更に袂の玉と成ならん

前太政大臣

新勅撰

難波の寺の人忘れ貝

さはりなく入日を見ても思ふかな

安 藝

是こそ西のかとてなりけり

又六時堂の前の鐘わうじやう調の最中にて是を二月涅槃會より聖靈會までの中間を指南とす秘藏の事也とかや寔に當寺の舞臺のみ都に耻ずとはかゝる事にや抑俗人のおごりを尋ぬるに黃帝のとき伶輪といふ樂人あるにより今我朝に傳へて伶人といふとかや太子御忌日二月二十二日なり當日法會ありて舞樂を奏しけり其外年中行事しるすにいとまあらず

一當寺に三水四石とて七不思議とせり猶識者に尋べし彼萬代がいけの龜は甲に三玉を備へたりとうたふ池のほとりをすぎてたらりらうのはしなどいふところもあり

一龜井の水是は印度無熱地より龍宮城へ銀樋をかけまた龍宮より天王寺へかけたる所の靈水なりとかや
是又三水の随一と也

山家集

淺からぬ契の程そくまれぬる

西 行

龜井の水に影うつしつゝ

夫木

萬代に御法のなかれたえしとや

俊 成

龜井の水のきよくすむらん

庚申堂かうしんどう

青面金剛のことは世間流布の緣起に見えたれば其趣書つらねんも事舊りにたれどあらましをしるし侍る抑大寶年中天王寺に民部僧都住善といふありけり庚申のとし正月七日庚申の日のさるの時いづくとも二八ばかりの童子忽然と來りて云我は是帝釋天より御使に下りたり四日本にをいて寺多しといへども天王寺は佛法最初の靈場なれば彼地より諸佛ひろまるなりしかる間今民部僧都に庚申の秘密を傳授すべしと云々しかるによりて今諸國の庚申の本寺とあふぐもかゝる由緒あるによりてなりとかや寔に諸人の渴仰大形ならず信心をなす輩には其願成就せずといふことなしたつとむべし敬すべし

舍利寺しゃりじ

堂の御本尊聖德太子也此寺の來由異説さま／＼なればいづれをかもちひいづれをかすてんされば聖德太子天王寺御草創のとき伽藍造畢のあいだ御舍利を此

所にあづけをかせ給ふによりてなりとかやまことに
此説によらば舍利寺と命せられけるもかゝるゆへな
らんかされば舊跡の泯せんことをおしみ給ひ寛文年
中黄檗山わうはく隱元禪師又去しとしには木庵和尚も此寺に
住し給ひ絶たるをつぎ廢たるをおこしこゝろざしを
はげまし給ひて再興ありとなん

南無佛の御舍利を出す七つ鐘

和泉式部

むかしもさそな今も双調

蘆分船第一終

蘆分船第二

住吉
すゐよし

當社は四所也

第一天照太神

第二宇佐明神

第三底筒表筒中筒爲一座 第四神功皇后又三神

と神功皇后を四所共いへり

此御神の事延喜式神名帳に見えたれば今更いはむと
にはあらねど昔日伊弉諾の尊既に黃泉に赴給ひて伊
弉冊尊をみそなはし給ひて後此國に立歸りて吾黃泉
火食せりとの給ひつゝ觸穢をきよめ給はむがために
日向の小戸の橘の櫓が原にいたりて御祓たまひし
時に潮につれて顯はれたまへる御神三はしらましま
しけり潮の底より生出る神を底筒男命を名づけ潮の
中より生出る神を中筒男命と名づけ潮の上より生出
る神を表筒男命と名づく此三はしらの御神筑前の國
にしては志加の社と申侍り長門の國豐浦の郡にして

は則住吉の明神と申す今此所に跡をたれ給ふ事は神
功皇后の三韓を退治し給ふ時此三の神あらはれ給ひ
て神功皇后の荒御前の守護神となり御船を難なく三
韓の地にいたらしめ新羅高麗百濟を平らげたまひて
皇后無爲に還陣し給ふこの時にあたりて今の敷津と
いふ所に宮ををつくらせたまふと也又子細ありて和
歌の道をも守りたまふ也萬葉集第六に墨吉の荒人神
とよめるも神功皇后の御事也又卜部兼直が歌に
西の海櫓か原の鹽路より

あらはれ出し住吉の神

天安年中文德天皇當社へ行幸あり業平供奉つかふま
つりて

我見ても久しくなりぬ住吉の

岸の姫松幾世經ぬらん

御神現形し給ひて

むつまじと君はしら波瑞籬の

久しき代よりいはひ初めてき

光源氏都より當社へまうで給ふに明石のうへにあは
せたまひて

みをつくしこふるしるしにこゝまでも

めぐりあひぬるえにはふかしな

猶みをつくしの巻に見えたり抑みをつくしといふは
難波津にはじめて立けると袖中抄にありしかれども
其年代いつといふ事しらす能因が歌枕に水の淺き所
になつる木を云と也また蛙の歌のことを尋ぬるにい
にしへ紀良貞此社にまうで忘草をもとめんとするに
美女にあひて來會を契りてわかれけるに法の日また
このうらに行ければ

住吉の浦のみるめもわすれねは

かりにも人にまたとはるへき

其外古歌多し寔に松の隙より詠ながめやる海づらのけしき
淡島山の遠望いかでかいひ述んさて又年中の神事さ
まゝありといへども悉くはいはずいづれの時より
か傳へけん年ごと五月廿八日堺の遊女きたりて早苗
とる事あり是を御田植といへり又御祓は六月晦日也
是諸人のしれる事也長月十三夜神前にをいて市をな
す名づけて寶の市ともいへり

神慮やはらく國の田歌哉

玄 仲

名所附

住吉のあたりを見めぐれば其名ある所がちにしてふ
るき歌をたよりとして彼見ぬ世の人の跡をしたひ日
ぐらし尋ありきて硯をならし筆を染書出し侍るいよ
／＼後の君子の考を俟もの也

岸野

右大臣

夫木
夕されは錦と見ゆる住の江の

岸野の萩を洗ふ白波

忘水

雅 經

夫木
春の色や淺澤をのゝわすれ水

たえ／＼霞む住吉の松

那古海

顯 朝

夫木
ひろふてふ玉ひかるなり住吉の

なこの濱邊の秋の夜の月

名越岡

好 忠

名寄
住吉のなこしの岡の玉つくり

數ならぬ身は秋さかなしき

紛濱

定 家

千首
住吉やこすのとこ夏それなから

岸野の草の花も忘す

淺香浦

伊嗣

夫木 住吉の淺香の浦のいそまくら

鹽みちこすはこゝにあかさ

出見濱

家隆

秋の夜は月のひかりも住吉の

出見の濱の在明の空

浦初島

爲家

夫木 浪かけぬ松の梢も白妙に

ふりつむ雪の浦の初島

長居浦

丹後

千五百 君か世を長居の浦にゐる田鶴も

萬代までとこゑ聞ゆなり

佐比江

忠岑

後撰 年を経て濁りたにせぬ佐比江には

玉も歸りて今そすむへき

細江

宗良

千首 住吉の細江漕出る海士船の

蘆間あらそふ夜半の月影

淺澤小野

爲家

住吉のあさ澤水のたえくくに

岸のあら田は種蒔にけり

又住吉の鹽干とてとしごと彌生三日此浦へさかい大

坂の人はさら也洛陽よりもつどひ來れりされば當日

は曲水宴とて盃をば水にながす事こそあれ船にのり

てあそぶことはきこへすといふ人あれど其證なきに

しもあらず唐土にもあればこそ白居易が十二韻の詩

等も侍り又舍衛國の競伽川にて此日其水をあび河の

ほとりにして逍遙すれば諸罪を滅すともいへり

暮春風景初三日 流世光陰半百年

欲作閑遊無好伴 半江悵惆却廻船

萬葉十七大伴池主詩云

柳陌臨江縵絃服 桃源通海泛仙丹

雲疊酌桂三清湛 羽爵催人九曲流

から人の船をうかへてあそふといふ家 持

けふにわかせこはなかつらせな

津守

御本尊藥師如來也則住吉の御本地堂と也并辨財天一

社又磯の御前ともいふ 抑津守氏と申は敷津明神の社務の

家にて歌人の名高し往古後三條院すみよしへ行幸ありし時常みづから遠島の眺望といふ題を津守國冬に下し給りければ

朝夕に見れはこそあれ住よしの

浦より遠の淡路しま山

其外にも

拾玉

おもふこと津守の浦のもしは草

慈 鎮

いくらしけりぬ住吉の神

御集

行末は猶も津守の浦かせに

後鳥羽院

曇らぬ月の影の長閑さ

かたはらにせうさあんとて紫野一休和尚のすみ給ひし舊跡ありいろく靈寶もありとぞ

霞松原 あられまつばら 附角松原荒神宮

此荒神勸請何人といふ事を知らずしかれども當所守護の神とあふぎ奉れば邪惡魔障の難を滅除し擁護の地となりとかや今は十有餘町の人家軒をならべ繁榮す則歌によむ松原角の松原などといけ侍るも此所なりとぞ

建保

さよ更て霞松原すみよしの

知 家

浦ふく風に千鳥なくなり

吾妹にいなはは見せつなつき山

高市連墨人

角の松原いつかしめさむ

太刀造江

古記にいはくいにしへは善事爲口と稱すと云々

後拾遺

萬代を君かまほりといのりつゝ

前太政大臣

たちつくりえのしるしとを見よ

此うた奥義抄其外他書にも書出すといへども此太刀つくり江といふは玉つくりえといふ所の名もあるによりてたちつくり江と云所もあるかとの事にや是はたい太刀つくりえたるしるしとを見よとよまれたると顯昭の注し給へば今爰に引用む事いかしく侍れども名寄等にもあげたれば後の參考を俟もの也其外榎名津などいふ名所あり猶尋見たまふべし

黒 人

住吉のえなつにたちて見渡は

遠里小野 をりの

住吉より南の方の在所をいふなりむかし民家ありけるやらん春の里人衣うつなどゝつゞけたりそのかみ此所を山崎にて油をしぼり世にひろめけりといへり山崎の名は四方にきこえのこれども此里の事は人しらすされども其由緒于今のこりて住吉明神灯明の油は此里よりまいると也

夫木
待よひは遠里小野のあふらうり

あかつきかたの皮香のころ

其外古歌多し悉書載もいとまあらねば

萬葉

住吉の遠里小野のま萩もて

人 丸

する衣のさかり過行

とひた
飛田

火葬の煙絶やらず白骨は地よりもたかく涙の雨はしきりに古塚の草葉の露と消にし人々をかぞへ見ればたれありてのころべきわれらが生る間きのふはけふのむかしおもへばく蜉蝣の飛あがるに似たりよく幾の日をか期せん僅花一晨の榮おもへば一炊のほど也身はこれ金石のたぐひにあらずとし月とともうつされて色おとろへかたちかじけぬ命は鶴龜の

たぐひにあらず天府の壽算をのゝかぎりあり高きもいやしきも老死の二たれかのがるべき我もいついかなる日かつねなき風にさそはれつゝに消べき事もへばいよゝこゝろばそくまことにけふもはや命のうちにくれぬめり幾日かかくてすぎつらん入逢の鐘のつくぐとあはれにおぼえ侍るされば難波の中におほき人しなざる日はあるべからず墓所爰のみにあらねば送る數おほかる日はあれどをくらぬ日はなしされば棺を嚮もの手のいとま得る事なしとぞかくあだなる世とはしりながたれしも利欲の汚におほはれて本心の靈性をくらまし十纏八邪の妄想に牽れて泥黎耶の鐵門に鎖れつゝに無漏地の實際にかへる事を得ざる也つとめてじゆせよつゝしみておこたる事なかれ人々所具のほんしやうは唐虞の聖なるも匹夫の凡なるもさらに一にしてかはる事なしかれも人なりわれも人も三世のしよぶもとは人なりつとめておこなひすゝみて怠すは放光座蓮は踵をめぐらすべからざるべしされば佛書にも火葬水葬林葬土葬の四修ありむかしは我國にも土葬のみなりしを文武天皇の御時元興寺の道昭を火葬にしけるよりおこ

とかや

娑婆てこそ男女の差別あれ

夢窓國師

骨となりてはかはらさりけり

安倍野

其むかしは海邊にて有つるが家隆卿の歌にも岩の上に波こそ安倍の島つ鳥うき名にぬれて戀つゝぞふるとよめればなりいにしへより此所に阿部野の五子御座すいつの比誰人の勸請と云ことさだかならず然共熊野の二の王子と申侍べり

大木

阿部島や鶴のゐる岩に降雪の

後鳥羽院

浪にいくたひ消つもるらん

小町塚

小野小町が事きはめてたしかならずおとろへたるさまは玉造といふ文に見えたり其書にいはく予行路の次で歩道の間徑邊途のかたはらにひとりの女人あり容貌憔悴として身體疲瘦せりと云々予汝に問ていはくいづれの郷の人たれが家の子ぞ父母ありや子孫なきや女子に答ていはく吾はこれ倡家の子良室のむす

め也壯時は僛慢最甚衰日愁難猶ふかし云々今世俗にうたふ卒都婆小町は此所にてのことなるよし

極樂のうちならはこそあしからめ

卒都婆なにかはくるしかるへき

其しるして今に其かたばかりのこれり是によりて小町塚といひならはせり玉造の文の事高野大師の御作ならざるやうにいへり尤時代相違せりといへども大師御製作の目錄九十二番目にいれりとあれば疑心をなすべからず則卒都婆小町の謠も右の本をたよりとして高野山寶性院宥快法印の作なりとぞ

古塚に今も狐のあなめく

をのとはいはし阿部の海道

蘆分船第三

田^た簀^{みの、し}嶋^{しま}

此しまは天王寺のかたはらなりと顯昭はいへり又宗祇方角抄を見侍れば天王寺のにし乾のかたよりの海邊なり海道より南なりとあり又名所集には西成の郡と入れればいづれをか證とせんしかれども所の人に尋侍れば杖木橋^{はしも}のあたりを田簀嶋といふなりとまた佃村といふせつもあり後人考べし

なにはへまかりける時田簀嶋にて雨にあひてよめる

古今
雨によりたみのゝ島をけふゆけは 貫 之

建保
ふる雪にぬれてや寒き難波かた 兵衛内侍
なにはかくれぬ物にそ有ける

たみのゝ島の鶴の毛衣

新御靈^{にいごりやう}

此社の濫觴詳ならずされば神道の奥秘はたやすく人のしるべき態ならねば此等の御神の種姓あさくしきいひ出んも道にあらず且は神慮の御内證にも叶侍るまじきとおもふからさし置ぬ一説に鎌倉の權五郎景正ともいへり此景正は鳥海の彌三郎に弓手眼を射させ其矢をぬきける時も勇猛なりし事は人のきゝふれしこと也並十一面觀音堂ありまた神前にをいてとしごと正月十七日に的射とて弓を射侍るまたまつりは九月二十七日なり

當社南のかたに藥師堂あり此尊は弘法大師^{御作一并}日光月光十二神は^{運慶作也}靈應皆人の知處也猶新坊法印の緣起に見えたり

難波御坊^{なんばのごぼう} 東本願寺の末

開山親鸞聖人は藤氏太職冠後胤皇太后宮の大進有範の御子にてまします承安三年にむまれ給ひ御髪をおろし其後建仁二年御とし二十九歳の時法然上人にしたがひて法を聞給ふといへども猶おろかなる凡夫を濟度し給はむが爲みづから御一流をとり立させ給ひあまねく法をひろめ給ひ御とし九十齡にして弘長二

年十一月二十八日に遷化し給ふ人皇八十九代龜山院仁九十一代伏見院仁兩帝より勅願所の宣旨を蒙り給ふされば八世蓮如上人八十明應五年七月下旬はじめて大坂石山龜が池の邊に御堂を建立せられ三とせの間御止住有證如上人の御代まで御本寺たるのよし傳記に見えたり其時の御堂屋敷今の城の邊にあり又石山の御坊といひし時の手水の井戸今の大手口の邊にあり文祿年中に道修町一町目に御堂をうつされしが慶長のはじめまでは渡部の御坊といひしと也其後慶長年中開山より十二世教如大僧正今の上難波の地に御堂をうつされ建立の功なりしより此かた朝暮の勤行たゆることなく參詣の老若男女所せきまで群集して夥しく目を驚かす朝時の鐘に煩惱の夢をやぶり八の太鼓に無明の眼をさます法談聲たからかにしてもはら佛恩の深きことを演のされば他力眞宗は是末世相應の要法とは古聖人の御遺戒にこそ

自力にてならぬ菩提のたねなれば

彌陀にまかする身のうれしさよ

津村御坊 つむらのこばう 西本願寺末

開山聖人の御事東の御堂の下にくみえたり抑津村の御坊と申は慶長七年に開山より十二世准如大僧正の御建立也御本寺ふたつにならせ給ふ事は十一世顯如上人御子三人まします

第一 光壽教如上人 東本願寺祖

第二 佐超顯尊上人 興正寺祖

第三 光昭准如上人 西本願寺祖

しかるに顯如上人御とし五十歳にて文祿元年霜月二十四日に御遷化也其後慶長七年東西ふたつにわかれさせ給ふよし寺社物語に見えたりまことに兩本願寺は彌陀釋迦の二尊娑婆八千度の御來現にて次第相承の善知識とうまれさせ給ふにや佛法ますくさかにして門前に市をなし老若巷にあふる參詣の男女一文不知の輩まで行住座臥に佛の御名を唱て大悲弘誓の恩を報せざるはなかりきされば蓮如上體の御詠歌に

南無といふ其ふたもしに花咲て

あみた佛に身はなりにけり

座摩 ざま

當社むかしは八軒屋の邊にありしが中比淡路町一町目にうつし其後今の渡邊に勸請しけりとなり御神跡は底筒男中筒男表筒男の三座なりとぞ神功皇后三韓退治ありて神功皇后十年^庚御歸帆のときはじめて御鎮座ならせ石上に御休息し給ふ^{今に八軒屋の時に賤女來りて醬をたてまつりけるとぞ其式によりて今に六月二十二日御祭禮の神供に醬をたてまつりけるはかかるゆへなりとぞ彼賤女は是天朔女なり則富宮のうちにはふ小社は也むかしは醬料とて田園七百六十石を奉納せりとかやまた人皇四十八代稱德帝の御夢に三座の神告たまふて}

夜やさむみ衣やうすきかたそきの

ゆきあひのまより霜やをくらん

是神社の頽毀をなげき給ふ神詠なればとてむかしは二十年ごとに禁裏より住吉のやしろを御造營あり此時はかならず此社をもつゝりかへられけるとなり又六十二代村上天皇の御宇應和三年七月二十五日祈雨のために十一社へ奉幣をさゝげられし御時も當社其隨一なりとかやむかしは靈寶等ありといへど度々の兵火に焼失せりまたいづれの御世にかありけん高貴

德王座摩大明神と勅筆をなしくださる并貞和五年正月一日に尊氏公よりおさめ給ふ願書いまに神殿にあり又渡邊の氏族いづかたにありとても此宮の氏人なりと申傳へり由緒あることゝなり

ねり物のほろみそよりもひしほをは

なめてよろこふ神のおはらへ

稻荷 傳勞町

此所三社なり第一平野大明神仁德天皇也第二祇園牛頭天王第三稻荷大明神なりそのかみ上難波には平野大明神を尊崇して上の宮と號し下難波には祇園牛頭天王を勸請して下の宮と稱す靈驗あらたなること他に越たり七十一代後三條院延久三年正月當社へ行幸ありし時一人の老翁まかり出で道の案内を乞其名を問給へばわれは是稻荷大明神なりとて忽に其あとをうしなふ是によりて右三社の御神あひならべて御建立あり并安樂寺長樂寺をもつて別當に附せられ社司監物圖書にも装束等をくだし給はる此ゆへに人みな稻荷ある事をしりて平野ある事をしらずとなりされば

^{續古今神祇}難波津に冬籠せし花なれや

家 隆

平野の松にかゝるしら雪

藥師堂附蘆間池

御本尊瑞瑠光如來弘法大師の御作也此藥師むかしは此所に池ありしが其島の上に安座し給ふと申傳へりまことに靈驗あらたなるがゆへにいまに難波藥師とあがめ奉るまた此池を蘆間が池と云人あり宜なるかな于^レ今なにはの蘆とて此あたりにあるを見侍れば片葉に生牙して誠に世にたぐひあらざるものなりされば物の名も所によりてかはるといへど同じ難波のうちにてさへかゝるよしあしの違も侍るよと先哲のあとを去たひいにしへより難波江の歌をつけ侍らば蘆は見えずともよむべしといへるもかゝる名物たるゆへか

明玉

難波潟あしまの池の水の色も

伊勢

淺緑にそ春はみへける

其外夢の浮橋轟橋などいへる所などあれど正説たしかならざるがゆへに其所をさしていひ侍らず猶尋ね給ふべし

瓢箪町

彼まどひのひとつやめがたき老たるも若きも智あるも愚なるもかはる所なくさまよひたるありさま親のいさめ世のそしりをつゝむに心のいとまなき色の道いとおかし予過にし春の比夕月夜の道たどくしきに其姿を人に去られじと去のぶの浦の蜃のみるめも所せくらぶの山も守る人去げきに割なく通ひ來たりあふさきさの局格子のあたりに立やすらひかなたこなたと心をうからかし目をよろこばしめ遊女の品かたちのすぐれたるをうかいはんと其おもざしを見やれども其名を去らずあるひは名はきゝつたへしもあれど其人を去らざればいづれをかほめいづれをかそしるべき譽る人そしる人共に残らぬあだなるよに何ぞ此たはぶれをしてあそぶざらんやされば本のはしのやうにおもはるゝよといへる人さへ色好ざらん人はいとさうゝしといひ物のあはれはこれよりぞしるゝと詠せられし人もいと戀しうむかしおもひ出られ侍るゑかれば今の世の人々の風儀を見るに我のみならず貴賤僧俗ともに色好むほど學このむ人は

すくなくたま／＼道に志す人あればあらむづかしの
心學やあら氣づまりの佛學やくすんだ事などは聞た
くないと眼三寸見たし一寸先は闇の夜月の夜なにこ
ともたゞ夢の浮世にあることないことうそ八百の話
そくをばぬじさとなつたほんさまさへうでまくりして
八文字をふみおのが氣まゝにぬめりものゝなますを
おさへた瓢箪町といふありいかなるかは顔淵汝を
すやそも何人のかくは名付そめけんとははじめをき
かまほしくおもひまいらせ／＼候と千話文のはし
ぢかき出格子に立より難波女のかつぐ袖笠にぬれ心
ある涙の雨をふせがせ海士小船のこがるゝ思ひにみ
だれて餘所のみるめのまげきをまはゝからす沖のか
ぶろにことゝへばいざゑら浪の音だにせずもにすむ
蟲にあらねども我から我はさやはおもふなんとぬき
んでゝやりてがつき聲もきこえずうんともすんとも
いふ人のなければさてなにとかせん予思へらく此所
をして瓢箪町と云事は遊女共多あつまり髪をゆふつ
とに起ては身をたしなみ暮にはやみらみつちやの高
ひく見へぬじかりに白粉をぬり門立の比をはれにと
ゆふべことに顔をけつらへば夕顔をつくと云えん

によれるかいや／＼さてはあるまじ元來是は瓢あり
箪有陰陽ふたつの和合のみなかみ天の浮橋新町のは
しかゝる所に二はしらの神むまし乙女にあへりとい
ふより今の世までもたえせぬものは戀といふもの實
に戀はくせものゝたね小歌のたねをまかせておけろ
と引きみせんの三筋町からいによる物ならなくに
と別をまたひて吞盃をつけさしにする酒を入てはお
腰にふらりとさげて出たる瓢箪なれば旅の空まで身
をもはなれぬ連理の契の數々うれしさ百なり千なり
と云心ならんか本より傾城と云事はより／＼の國か
らわれらが國につたへし事今更云もくだ／＼しされ
ども世を亂し國をそこなはるゝがゆへに傾國共名付
たり寔嬌聲美色は易惑人とあればまゐて好もてあ
そぶべき道にあらずみづからいまして恐つゝしむ
べきは此まどひなり

くわんをんたう
觀音堂 白髮町大福院

御本尊十一面觀音佛工春
日作也開基は沙門圓慶といへるが
寛永年中の建立也抑此尊像は其むかし比叡山の別院
におはせしがある夜一覺と云沙門に告させ給ふは我

有縁の地西南の海邊にありかしこに往て廣く郡生を利せんと玄めさせ給ふにより此所にうつし奉らんと地景をうかふに砌には潮さし來りて浪南方無垢世界の莊嚴を移し前はあみだが池有て水西方淨土の功德池をたへひがしに三津の八幡西に住吉大明神いにしへより鎮座し給ひて擁護の梢盛也かゝる靈地に安座せしめんとすこしき假殿をかまへて安置し奉りしより此方諸人信心の輩は歸敬の首をかたづけ侍れば利生むなしからず予^レ今をいて誠心に念ずれば應驗なしといふことなし

三津寺 みつてら 八幡井製音堂

當社は應神天皇也此帝御在位の時難波に行幸あり此ほとりに寶輦をめぐらし給ふ所となりそもく此みかど神とあらはれ大菩薩とあがめ國々處々に跡をたれ給ふことは欽明天皇の御宇也玄かるに此時難波にいまだ八幡宮あることをきかず孝謙天皇の御宇天平勝寶元年此地に八幡宮を建立せらるゝと也其濫觴を尋るに聖武天皇宇佐より八幡を勸請し給ふ時最初御在世の舊蹟なるがゆへに難波の三津にうつらせ給ふ

此時にあたりて神告て曰三津寺は是行基菩薩の心住の所也我此所に鎮座あるべしとの神勅にまかせ寺を以て宮とすされば行基此所にをいて蘆の葉のそよぐをさゝ給ひて

新古今

蘆そよくしほせの浪のいつまでか

浮世の中にうかひわたらん

其後物かはり星うつりて幾の年序を經といへども今にいたりて靈驗あらたなり三津の浦濱松原泊なんどもつゝ侍るも皆此あたり也むかしは此邊の民ども鹽を焼魚をとりていとなみとす當社建立此かた丹青海をかゝやかし魚恐れて出す故に漁人魚をとる事あたはざるにより其光を遮らんが爲に海邊に筑山をつくる其にしを山西浦と號す予^レ今筑山のあと有又傍に觀音堂あり是又開基不分明三津寺といふも但所の名を以て寺號とすると見えたり

夫木

あふことはよをへたつなと玉垣の 光 俊

三津の湊に手向をそする

ゆく人の手向も見えず玉垣の 行 家

三津の湊の五月雨のころ

阿彌陀が池

三河の國の八橋は名にながれて今はなしこゝには又四橋といふありそれより三町ばかりにし商商家のうらに池あり是をあみだか池といふむかし佛在世の時舍衛國に四種のあしき病ありて萬民をなやませり時に月蓋長者目蓮尊者と心をあはせ龍宮城よりえんだんこんをとりにて御長一尺五寸の阿彌陀觀音勢至の三尊を鑄給ひ貴賤の病をすくひたまへり佛滅度の後百濟國にわたり給ひ一千餘歳の後齊明王より吾朝欽明天皇の御時日本にうつらせ給ひ攝津國難波のうらにとゝまらせ給ふ今此池の中也其時信濃國の住人本田善光夫婦都に上りけるに如來の御告ありて如來を信濃國にくだし奉り一寺を建立し今に善光寺と申けるはわが名によせしゆへなりとぞされば如來の御歌に

風雅集
まぢか

かゝてなけくとつけよみな人に

いつをいつとていそかさるへき

うろくすも洩さすくふ徴には

藤原宗益

あみたか池にうかふ鯉鮒

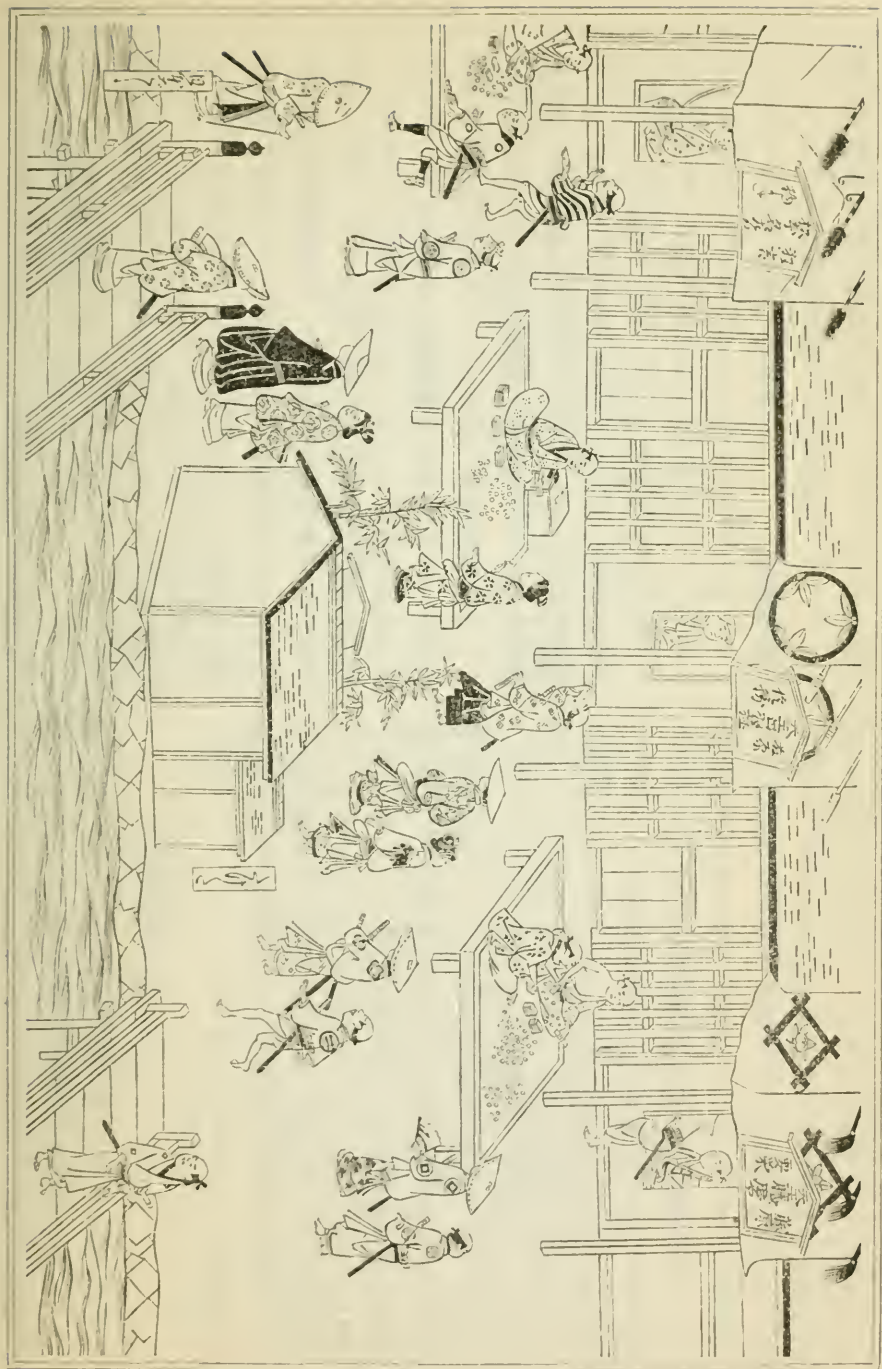
因に云天王寺のみなみに佛跡寺といふあり是は守屋

太子へ法敵となりし時此如來をふきつぶさんとせし所となんさるによりて于今たら堂ともいへり

道頓堀

たうとんほり

おさへ／＼よろこびあれや天下泰平にして國富民さかへ里の長も萬歳をうたふ歌舞妓若衆の小歌のころには道頓堀江の魚もおどり引三味線のかはの流さつさつたる琴の音には芝居の軒端けた梁の塵もうごきいづればしびりをきらす見物の貴賤目はづかしき四條五條は物の數かはもろこしまでも聞えわたりし日本橋のはしのうへ老若男女袖をつらねくびすをついて朝にはとうから／＼の太鼓の音を聞たか／＼の狂言づくしがはじまり申といふやいなやにむかし見し人爰にきたりてへたりと逢たりさてもそのうちひさしう見なんだゑて上りには何をかたるぞ是々説經そこには舞あり孔雀鸚鵡に種々の唐鳥かち錢はもどりしや元通くによし虎のいけどり竹田がからくり時計の車の砂道石みちめぐりありきてあなたへささりこなたへさらりとあそびたはぶれゑばしがほど千日寺に立より足を休めてそこらの人の爰かしこに集りをの



がさま／＼物がたりするをきゝ侍りしにむかし／＼
寛永のはじめつがた此里よりもたつみにあたつて久
寶寺の安井のなにがし平野道頓といひし坊主のおつ
とり鍬にて土をうごかしそめしゆへおのづから所の
名として道頓堀とぞいふなり芝居役者の事は去しこ
ろ洛陽のことをかける四條川原の所にあくまでいひ
述べれば其品をあげて爰にいほむことふりにたれ
ばさらば是より世の中にもてあそびぬるわざながら
よき道もありあしきもあり其中にある俗友のあつま
るうちにひとりのこさかしげなるがいひ出けるは先
後世をねがはんとおもはゞ小乗より大乘をこそ好む
べし三界の導師釋迦如來御說法まぢ／＼なれども未
顯眞實の妙法は神力をしめし述給ふ誠に正直捨方便
無上の道にて高祖日蓮は上行菩薩の再誕なればたふ
としといへり又傍なる人の云八萬諸聖教皆是阿彌陀
と云一向專念無量壽佛とともてけり超世の悲願普くみ
よの佛尊敬ありいにしへ今の天子をはじめ奉り公卿
公方のたつとませ給ふ萬民の御ちかひ有難しといへ
り今一人の云題目の宗すぐれたりといはむか念佛の
義殊勝といはんや其勝劣を知らずことをいはんとす

れば一方の氣に背き去かも謗法のとがもいかならん
況互に心のいかりや出くらん去かし我寺たうとしと
いへるがごとしそれ／＼の機に應じて有縁をみちび
かん爲にさま／＼の方便をしへ給ふとなりこなた
は他宗の奥議は去らねども八宗十宗をたとへていは
ば白川かも川かい川や大井川かつら川なに川か川と
名は替れかしおちあふ所は淀川ならずやたとへ廣く
細く淺くにごりてながるゝとも元來水の性は一味清
淨なりかくはいへども見る事聞事にまどひて佛性の
妙理は我から去らずとて一首の歌をうち誦しける

あたに見し一夜の夢の其まゝに

覺てはもとの浮世なりけり

かゝる物語を我も實じつときゝ居けるうちとかくせしま
に夕陽西に傾けばけふもはや命のうちに暮にけりあ
すもやきかん入逢の鐘にをの／＼目をさまし東西南
北のちまたをわかちをのがさま／＼かへり行寔に朝
にはむらがり集し人も漏刻の水の残りなくいつの間
にやらなくなりて簾疊などとりはらひ目の前にさび
しげになり行こそ世のためしもおもひ出られて哀な
ると彼法師の口すさびける事ふとおもひいづるより

われらの命の程けふのうちもいざ知らず市のかり屋
 のまでまばし獨のこらぬうきよの中終に消べき野路
 の露いつかは我も此送葬の場にきて煙ともならんこ
 とおもへば今一入心ぼそくぞ侍る惣じてなきがらお
 くる所爰のみにあらねども廣き大坂のうちなれば
 火葬の煙たえやらすまた其形其まゝ土に葬るもあり
 古墓いづれの代の人ぞ姓と名とをまらず化して土と
 なる西施が顔色今いづくにかあるといへり誠に夢の
 浮世のあだし身と思しれども驚かずうけがたき人界
 に有がたき御法をうくといへども跡よりは貪瞋痴の
 さまたげて六根の罪におぼれ輪廻の業にまとはりぬ
 らん

やけは灰うつめは土となる物を

夢窓國師

何か残りて苦をはうくへき

蘆分船第三終

蘆分船第四

玉造稻荷

此やしろは上御前中御前下御前田中大明神すべて五社也抑此御神は垂仁天皇の御宇攝津國難波の京のひがしに向て一の翁稻をになひ休み給ひしが忽一の星となり卵のかたにあがらせ給ふとなり此こと帝叡聞ありて御すがたを文字に述いなり大明神と勅筆を染下し給ると也其後人皇十六代應神天皇の御時中天竺より一の白狐飛來れり背に三寸の玉あり見る人奇異のおもひをなしけるところに此玉のうちより童子三體あらはれ給ひて我は此神の身體也四月初卯に神慮をすゝしめ祭事あるべし萬民國土安全に守るべしとて神殿に入給ふそれよりして初卯を祭禮とす扱かの玉を封じ込し所なればとて玉造と號しけると也

名寄 住吉の名越の岡の玉つくり

好 忠

數ならぬ身は秋そかなしき

さてまたこゝを栗山といふは聖德太子もり屋とたゝかはせ給ふ時此山にて供御をめしけるに栗の木をきりて御はしに奉る其時太子祈誓しての給はく戰にかつべきならば此はし木今夜の間に枝葉出べしさもなからんには其まゝあるべしとて御はしを土にさしをき給ふに一夜のうちに枝葉さかへしかばほどなく守屋を退治し給ふとなり是によりて栗山といひけるとなり

森明神

もりめうじん

當社は用明天皇とばかり申傳へ御鎮座の年曆たしかならずむかしは神寶舊記等もありといへども度々の回祿に焼失しけると也予過にし春の暮つがた此御神にまふでしに折しも花の咲匂ひ夕月の木陰にうつりけるをながめゝなどしあはれと見る人もがたと宮ゐることなりになるありきおもひやり侍りて

・ 咲花の木の間もりくる月影は

誰見よとてかひかりそふらん

國分寺

當寺は聖武天皇の御願也御本尊十一面觀音閣浮檀金の像也されば天皇日本國中一國に一寺を御建立ありし其隨一の御寺なるがゆへに國分寺と號せられけると也又天滿より艮にあたりて國分寺とてあり則其里をよんで國分寺村といふ予按に同寺兩所にわかつ事いかいふかし國分寺は天平九年に建立とあり又同十一年には毎國に國分尼寺を立給ふとあれば此等の事によらば當所は若國分尼寺にてもあらんか後君子の考を俟もの也

遍明院へんめういん

東高津の野中すこし人家をはなれ九折つらなりを攀のぼりて南向に難波寺遍明院といふあり御本尊は十一面觀音并不動毘沙門なり抑中尊の觀世音菩薩は御長六寸三分也其來由を尋ぬるに長谷寺の觀音と同木同作とかやされば此尊像は惡七兵衛景清年來持念せし守本尊にてわたらせ給ひ日向國宮崎にありしがゆへありて近江國三井寺智増院の寶佛たりしをいつの比にや此寺に安座せしめ給ふと也景清武勇のことは人のしれる所也

景清か守本尊を頼む身も

皆三界の籠破りなり

藤原貞因

又本堂よりうしろ北の方に仁德帝の宮有并天神八幡稱荷の三社有

大蓮寺

山號は如意珠王山院號は極樂院寺號をば大蓮寺といふ文祿年中應蓮社顯舉魯道泰純上人泉州堺より此地にきたり開基也むかし今の御津寺のあたりにありしが中比東照神君の命によりて西横堀川邊にうつしけるが元和年中今の高津郷に引けり其後魯道和尚は洛陽淨福寺に住持す第二世典譽上人代々今の住職にいたりて血脈相續して名法の僧歷々たり本堂の本尊阿彌陀佛多武峰沙門定惠の作也同繪像阿彌源信僧都御號也一七觀音堂中尊は千手觀音惠心の作也一藥師堂中尊石佛也是は泉州堺より夢中の告ありて當寺へ來らせ給ふ其よしあり

一鎮守祠天照太神辨財天天滿宮也

其外名作の本尊畫像等載するにいとまあらず中にも多田滿仲念し給ひし佛舍利傳來して今現に有

淨國寺

無衰山金立院淨國寺開山は寂蓮社圓譽上人

生緣山城菊池氏

文

祿三年の草創也されば後白川法皇と法然上人と一心

寺新別所にて日想觀を修し給ふ時石をして鐘鼓とな

しならさせ給ふ時に一人の童子來りて我は是西金山

といふもの也上人に鐘鼓をまいらせんとて則上人と

共に鑄給へる御かねなればとて于今兩作の鐘とも

いへり又子泰のかね大佛供養のかねなど云傳へし

事は寺の起文に見えたり玄かるに此鐘鼓いかなるゆ

へありてか此寺の靈寶となり今諸人に拜見せしむ寔

に疑地に渉る類にあらず殊に上人みづから筆を染さ

せ一紙の文をもつて靜尊にさづけ給はる其詞にいは

く

西金山渡海日域流布粵於天王寺日想觀成就之時

予希有哉倍與對三面愚老志深一丁之鐘鼓奉鑄寄

進者也寔此鐘直來打者忽三毒滅三惡道可通音聲

キクモノハ四惡趣ヲ遠離スベシ愚老一代之化益此

鐘可_レ有

南無阿彌陀佛

源空在判

授靜尊二畢

かくありといへどもいかなるゆへありてか一心寺を

出て今此寺に傳來せりかゝる濟生の御寶こそ眞實な

るべけれかなたにありしかこなたにありともなんぞ

かくべつのおもひを起し奉らん

一本堂の本尊無量壽如來

御長二尺三寸

慈覺大師の作なりし

を第六世三譽不樂丈六の阿彌陀を彫刻して右の本尊

をば内陣佛とす又寺内藥師堂あり是則

佛王春日作也

靈驗あ

らたなること他に越たり其外靈寶牧あくるにいとま

あらずされば法然上人

口にある南無阿彌陀佛の味ひを

自力の人はいくひしらぬ也

專修院

せんじゆゐん

御本尊地藏菩薩御長二尺八寸慈覺大師の作也此尊む

かしは相模國淘綾郡林村におはしましけるを徳治年

中洛陽閑室僧都荷負し來りて市原にありしがゆへあ

りて此寺の本尊に安置せしむ抑此地藏の靈應をかた

り奉るうちに其品多し中にも永仁年中鎌倉ちはらの

里に丞之助大夫とて有得なる人いましけりめしつか

へる下人男女ともに多し其中にすがた尋常にして心
 やさしき下女一人ありしがあるじによくつかへ後世
 をこゝろがけ慈悲あさからず爰に高安となんいふ處
 に耕人の晝食を毎日に持はこびしが地藏堂に立より
 是は主人の爲是は耕人の爲または身の爲とて晝食の
 初尾をとり地藏に供し奉るある時傍輩惡心を起し食
 すくなしとてあるじにさゝゆ助大夫がつま下女を近
 付此ことほりをいへど毎日歩をはこび初尾をそなへ
 侍りけるゆへ妻跡をしたひ地藏堂のやうすを見つけ
 いづれもわれにさゝゆる處たがふ所なしとて本より
 邪見放逸のものなれば下女が顔にあてんとて火箸を
 やき下女がかへるを待居たりほどなくかへるやがて
 焼がねをあてゝなやます人々是をみておどろきぬ玄
 かれども下女すこしもさはがずして臥居たりけり其
 時助大夫地藏堂の邊をみれば煙たつ急ぎまいりて堂
 のうちを見れば薩埵の右の御顔やけふすぼりぬ奇異
 のおもひをなし家にかへりて妻にかたりはんべりけ
 れば其時彼下女をめしよせ面をみるに焼がねのあと
 なし問ども覺すといふ不思議におもひていろ／＼と
 問ば下女心がけの通あきらかにかたる其時助大夫夫

婦がいはい汝は他を思ひ身をおもひ地藏薩埵を供養
 せしこと夢にもしらず世にすぐれたるおこなひをな
 し侍る事なげきてもかへらず自他の爲をおもふがゆ
 へに今薩埵の汝が身がはりに立たまふ既に佛意に叶
 たるものとして彼下女を見てたつとみ敬し則助大夫が
 娘となしかしづきけると也かゝるゆへある尊なれば
 世俗につたへて肪焼地藏とも申奉る是也

生玉 いくたま

此命は新田部直の遠祖とかや天孫瓊々杵の尊あまく
 だり給ひし時したがひつきし三十二神の中天の命と
 也神武天皇戊午年春二月難波の崎にいたり給ひし時
 まつり奉ると也又ある人のいへるは大己貴神天の羽
 車にのりて虚空を飛行自在にありきて妾をもとむ時
 に節渡の縣に下りてひそかに大陶祇の女活玉依姫に
 契りをこむ其行道を人知事なし其むすめはじめて孕
 しかば父母あやしみて誰人か來るとゝへば女こたへ
 て神人のごときは屋上より來て共にまくらを雙と云
 さらば證據をみんとて芋玉巻とて糸を玉のごとくに
 卷てほどけばくる／＼と來るやうにして針をもつて

神人の衣装につけて或はふりに附此糸を認て明るあし
た尋行に此糸鑰の孔より出て節渡川を経て吉野山に
入三諸山にとゞまる其まけるいと三輪かね残しゆへ
に三輪山といふ其神は則大三輪の神是也今此説によ
らば大己貴命活玉依姫と契たまひ男女一體のかたり
あれば三輪の神慮うつりますにや去じ明應年中本願
寺の僧侶此所に来りて寺院を創し神地を境内にまじ
へければ神不潔なるをにくみ給ひ彼僧にたゝりとが
め給ふによりて神殿をつくりかへんことをおもひ社
司藤原吉勝をして願辭を告つるに神殿をうつしかへ
けり今の旅店の邊其後織田信長公兵火に殿閣こどくく灰
燼となりわづかに神璽を別所にうつしけるを慶長年
中豊臣秀吉公城塚をつき給ふ折から今の神地にうつ
し給ふ時の奉行は片桐市正且元と申傳へりとしごと
祭禮は九月九日也門前のかたはらに淵々たる池水の
島さきに辨財天の一社鎮座ならせたまふ

守人も花に老せぬ宮木かな

宗 祇

高津かうつ

此やしろは仁德天皇と申傳てたしかならず予おもふ

に若此御神は比咩ひめこぞ語曾の神社にてやおはしますらん
しからば御神體は大己貴命の御子下照姬也さあらば
此御神と出雲御崎神とは本朝和歌の大祖と也又ある
説に垂仁天皇の御時都怒我阿羅斯等といふ人意富加
羅國にありてあめうしに田器ををほせて行に忽に見
えず其跡をしるしにたづねゆくに牛の足跡ひとつの
村にとゞまり時に一人の翁來りて云汝が求る牛は
此村の中に入れりしかるを郡公ども此牛を殺して食
せりさて牛のぬし來りて牛をもとめば其あたひにな
にゝても寶物をやらんといへりもし郡公ども牛のあ
たいになに物をかえんとおもふと問はゞ郡のうちに
まつる神を得んと答よとをしへり其祭神は白き石な
り其後翁をしへしごとくにこたへしかば郡公ども白
石を牛のぬしにあたへたり其石化して見めよきをと
めとなれり阿羅斯等大によろこびて是にちぎりをこ
めんとせしかば終にうせさりぬのちに其童女日本の
難波にいたりて比賣語曾の社神となり給へりとぞ右
の説いづれか是なることを知らず知者の參考に備ふ
るもの也いにしへは境内六町四方にて仁德帝の皇居
の地ともいひ傳へり繩の浦などいふ所あり尋ぬべ

し

大木
荒にける高津の宮をきてみれば

後鳥羽院

まかきの蟲やあるしなるらん

春の夜の月に昔やおもひ出る

覺正法師

高津の宮に匂ふ梅か枝

紅葉する高津の宮に風吹は

定家

錦をあらふ繩のうらなみ

本覺寺

眞如山本覺寺開墓は定證院日守大德也生縁は加州金澤の産武田信濃守末葉武田彈正入道義次の二男善壽丸といひしが少小なりし時より佛道修行おこたらず永祿五壬戌年當寺を草創也しかりしより此かた第二圓乘院日幸代々歷々相續せる名坊也されば本寺の開山日蓮上人生國は安房國小湊といふ所也氏は人王四十五代聖武天皇の末孫重忠といへる人の御子也母は清原氏の女となりある時光明赫奕たる日天子蓮花に座しながら胸の中に入給ふと夢見給ひてより妊娠ありて貞應元年二月十六日に生れたまひ御名を藥王丸とぞ申ける既に十二歳の時清澄山にのぼり學問せさ

せ給ふに一を聞ては十の理をさとり十八歳にして髪をおろしやがて沙門のすがたにならせみづから日蓮と御名を改め給ふそれよりしていよ／＼修行功なり妙法花の利益ふかく後五百歳こうせん流布の時にあたるをみそなはし一切衆生をすくひ給はむとの大願をおこしあまねく法をひろめて弘安五年十月十三日に御とし六十一齡にして遷化まします寔上行菩薩の再誕として今日のもとに跡を垂給ふとかや御一生の靈瑞あぐるにいとまあらず今此宗の繁榮あるもひとへに高祖の徳の厚にきせずんばいかでか四百年前の今の世の人なんぞ信心をなすべきされば當寺の靈寶あまた有中に日蓮聖人の御消息二幅花洛弘通開山日像聖人大まんだら一幅其外代々の聖教等箱にみてり又日蓮上人の御歌とて今世に吟弄し侍る中に

たち渡る身のうき雲もはれぬへし

たえぬみのりの驚の山風

峰の松谷のかしは木いかなれや

おなし風に音かはるらん

ふじのたな
藤棚 谷町

今はむかし此あたりに一子をもてるあり此子十二三歳
の折からいかなる宿世にやありけん此所に池あり
しが此池水におぼれむなしくなりけり父母朝になげ
き夕にかなしむこと孔子の鯉魚にわかれ白居易が子
を先だてゝ枕に残る藥をうらむことはりまたあるべ
きにあらず則彼子の塚をつき其しるしに一本の藤を
うへけると也其藤今は枝葉繁茂して藤の棚といへり
彼子の石塔など近曾^{さいそう}までもありけると也かの角田川
の柳のことなどおもひいでられいとあはれにぞ侍る
堂の本尊は長谷寺の觀世音を近きに安置しけると也
藤さけはおられぬ浪の花もなし

朝日宮

松や町北裏町

此宮は天照皇太神也予考奉るに此神明は後鳥羽院文
治元年二月十八日源義經と梶原景時と逆櫓の論あり
し時利運を祈らんが爲に攝州東成郡に一社を建立し
給ふとあれば若此等の御神にや尋ぬべしまた當社よ
り北ひがしのかたに一社あり日月の宮といへり是ま
た來歴たしかならざる事也

日の御影花にはへる朝かな

心 敬

神明

蠟燭町

此社は人王百十代後陽成院御宇に伊勢國に北黒田の
なにかしある夜不思議の夢みしが日月の御影竈に二
夜三日光明赫奕とひかりをはなち給ふとさめてのち
妻女にのりうつり給ひさまゝ奇異のことありて攝
州大坂に鎮座あるべしとの神勅ありしゆへ此むね吉
田家へつげゝれば其むかしかゝる事なきにしもあら
ず是は伊弉諾伊弉冊の二神也急ぎ大坂に勸請すべし
とてこの所の守護神となし奉る御神體は天照太神宮
八幡大菩薩春日大明神の三社也とぞ

籠岸井渡邊

ろうのきし

籠のきしのことしかとしれる人まれなりある人のい
へるは論の岸也是は後鳥羽院御宇文治元年二月十八
日義經と梶原景時と逆櫓の論をなせし所なるゆへか
くいふとなり是今の八軒屋といふ所にあり井渡邊と
いふ所さだかならずしかれども宗祇方角抄に天王寺
の北一里なり長柄は此所より北なり淀川の末なりと
侍れば是又今の八軒屋あたりをいふならし彼渡邊の

綱が山緒ありもやすらん未_レ考

壱川首

五月雨は日數つもれと渡邊の

大江の岸はひたらさりけり

隆

源

蘆分船第五

難波島なんはしま

難波についたる所也昔日難波の住人ひらきし所なれば此島の名とするにやされば難波といひ出せる因にあげていはく難波津に咲やこの花と王仁か讀つかけし名木のあり所大坂のうちにてはなし其根本をたづねけるに尼が崎の城下にありとなん後人尋給はゝ其ころあるべきことゝいさゝか詞をよせ侍るもの也いづゝはあれど此浦のけしき猶いふにたらず

難波人見やはとかめぬ浦の春

昌 琢

三軒屋

あめつちのひらけるはじめは洲堰のうかれたいよへるとたとへばなをあそぶ魚の水の上にうけるがごとしと也此所にしへは島崎にて人の家まだ定まらず纔に三軒の民屋をたてならべしゆへ誰が名づくと

もなくをのづからかくいひならはせると見えたりまた所の守護神は牛頭天王となり此御神は素盞鳴尊の童兒の時の御名也また武塔天神とも申たてまつる今の祇園是也まことに神慮擁護ますにや次第に人家滿々軒をならべ繁榮して旅泊の船の出入しげくいと賑やかなり又向にあたりて前垂島尻無川などゝいふ所もついたり西は蒼海はるかにして遠寺の鐘もつけゝれば遠浦の歸帆も見えわたり瀟湘ともいはまほしき風景いかでか筆力に及べき

屬もなく月さへ春の海邊かな

玄 仲

衢くじろ壤島并竹林寺

此寺は香西哲雲寛永元年の草創也本尊は阿彌陀如來惠心也しかるに哲雲は恭大樹の釣命によりて此土泥の地を開發し則衢壤島と名づく其比笈頓法師といへる念佛の修行者此島に來り一字の地を乞草庵を結構して朝懺暮悔の勤おこたらざりしゆへいよゝちからをそへ建立のころざしをはげまし哲雲居士の菩提所とし靈座を安置し哲雲山香西院と號し供花焼香をなせる僧侶相續せりされば哲雲は文武の道を守り和漢

の才も他に越侍りしと也ひとせ病にかゝりて東武へくだりし時林道春詩をもつて訪ひける其詞に

香西哲雲老人嬰_レ疾歿_ニ於東武之江府余聞_ニ其訃_一不_レ耐_ニ悲傷_一於_レ是代_ニ薤蒿_一以吊_ニ慰十如禪師_ニ云々

羅山子拜

疊鑠此翁尤拔_レ群

治_レ民督_レ役每辛勤

愁心深積士巖雪

變作_ニ關東日暮雲_一

又寺内に難波津のむかしをおもひやり其色香をとめんと一本の梅をうへをき其花さかりなりければ一枝を手折て鳥丸光廣卿へたてまつりけるとて敷島の道に名たかき君なれば

かさしに送る難波津の梅

御かへし

折人のなくはみやこに誰しらん

色をも香をも難波津の梅

茨住吉

いはらすみよし

當社は寛永元年に香西哲雲所の守護の爲にと住吉大明神を勧請しけると也俗につたへていはらすみよしといふ事惑説也本宮は當國西宮の邊にありとぞ此社

のかたはらに茨などおひしげるがゆへにいふと也祭は九月十五日也

物とかめし給ふ神にあるやらん

かゝりかましきいはら住吉

龍溪禪師庵

いはらすみよしより西北にあたりて龍溪禪師の草堂あり此禪師は去じとし西海浪をたへへ此あたり悉く大潮にひたりし時いかなる宿世にや潮に溺て遷化し給ふ時に辭世

龍溪禪師

三十年前恨未_レ消

幾回受_レ屈爛藤條

今晨怒氣向_レ人嘿喝

一喝却倒_ニ晉江八月潮_一

目_ニ龍溪法子臨終偈_一以次_ニ其韻_一老僧隱元

忽見_ニ墨痕疑盡消_一

不_レ孤生鐵鑄藤條

臨行一喝全_ニ賓主_一

涌起滔々四海潮

かゝる禪師はいかなる再來にや黄蘗山隱元禪師と心を一にして富田普門寺を奉り其後東武にくだり忝も鈞命によりて五ヶ庄を下し給はり黄蘗山を開基し給ふ其功あさからざる事也されば龍溪禪師勅命により

て大正統龍溪禪師と贈官をなしくたる希代の名徳なりしゆへ粗詞をよせ侍る也

ともつなは生死の岸にときすてゝ

解脱の風にふなよそひせよ

天神御旅所

本は京町といふにありしが近曾^{きつこ}恵比須島といふにうつしけりとしごと六月二十五日天満宮の祭禮には神輿二社を此所にふるなり其義式いふにおよばす所の人はさら也洛陽遠き縣の人も來りて群集し河道遙數千の船をうかべ灯のひかり西海をかゝやかし魚鱗もいかでをそれざらんや寔に夥しくぞ侍る

神こゝろとる手になひく櫛かな

野田

福島といふ所よりにしのかたにあたりて名にしおふたる野田といふ里ありさればよし野のさくらに野田の藤高尾の紅葉など、熊野のあま犬うつわらはべまでも唱歌しける名所寔見てもく見あかぬなるべしそのかみ慶長年中の比までは見物の貴群賤集して

此藤を愛ぬ人はなかりしと也されども時うつり事さりたのしびつき花やかなりし時の樓閣なども人すまぬ野らとなり所々に其かたばかりのこりてむかしの藤の古枝は枯稿せりしかりといへどもそのゆかりとて今も木高きあふちの梢ともにそこはかと咲かゝりたる花のかたはらに小堂をしつらひ其名を藤庵と號して恵心佛の阿彌陀如來を安置し念佛修行者のおこなひすましていまそかりけりまことにぼさち聖衆來迎を藤咲空の紫雲によそへ臨終正念ならん事をねがへるさまいとたのもしくぞ覺えしか

匂へ藤いくかといはん春もなし

宗 祇

傳法^{でんぽう}

此所はむかし欽明天皇我朝へ佛經をひろめ給ひし時御經どもはじめて著岸の所なるによりてかくいひけるとなりしかれどもまたある説に鳥羽上皇覺鑲上人を歸依し給ひ高野山に傳法院を建立あそばしける時用水を船積せし湊なればいふともいへりさるによりて紀伊國に又件の船のつきし湊あり于レ今其所をも傳法といへりいづれか是なるをしらず又さかさま川

などいふあり

野里川^{のさと}

麓に止觀の海をたへといへど是は四貫島をながめて野里川といふ所にいたりぬされば其昔島村の何がしといふ人此所にて合戦しはてける其幽靈とて于今蟹の甲に人貌すはれり名づけて島村蟹といへり

姫島

姫島といふ所豊後國と當國とにあり最初應神天皇の御時に新羅國より女神其夫をうとみのがれて吾朝つくし豊後の國に來れり其すみし處を姫島といへり又つくしは吾夫のきたる事あるべしとてそれより此所にすみさるによりて姫島といふ和銅四年河邊の宮人ひめじまの松原にてうつくしき姫のかばねを見てよめり

いもか名は千代になかさん姫島の

こ松かくれに苦おふるまで

續古今

見渡せは汐風あらし姫島や

中務卿

小松かくれにかゝるしら浪

姫島の小松かくれにゐる田鶴は 鎌倉

千年に經るとも年老すけり

蘆分船第六

曾根崎

此處の名たる事いかなるゆへとも知らずいにしへより天滿天神を氏神とあふぎ奉る此御神のことは皆人のしれることなれば又いはじにもあらず此卷のうちにも粗かきつけ侍れば同じ事いはむもつなげる犬のはしらをめぐるににたれば指置ぬされば當社の御神と北野の天神天滿宮此三社を世人かなへの三足にたとへて三鼎の宮ともいへり猶由緒あることにや尋ぬべし

陰涼し千世もと祈る神の松

玄 仲

堂島

此島はのかみ聖德太子守屋大臣を退治し給ひて後玉造の岸の上に伽藍を建立せんとおぼしけるに猶も守屋か憤やます其亡靈風波となり彼用木をたび／＼

吹ながし此處にとゞまりしにより俗につたへて堂島といふなり

とつとその昔も今もふる雨の

權大僧部日興

もりやは法のさまたけそかし

大融寺并神明

桂木山大融寺は嵯峨帝弘仁辛丑御幸ありし勅願所也御本尊は釋迦樂師千手觀音の三尊也則弘法大師を請し開眼供養をなし給ふと也并天照太神是は此寺より南東二町餘今は也辨財天女の二社を勸請し給ふ是又人法繁昌の鎮守とし給ふ所也其後源左大臣融公志願を凝し承和

乙丑山鐘經七堂を建立し給ふと也故融公の御諱を以寺號と命し大融寺と稱し給ふと也又後鳥羽上皇當寺へ承元丁卯鳳輦をめぐらし給ふと緣起に見へたり靈寶あまたある中に世尊說法の時の袈裟あり并嵯峨帝御隨心の御守本尊柏殼のうちに觀音勢至阿彌陀の三尊則弘法大師の御作也とかや又中將姫種字を御ぐしの髪にて縫給ふ四天王像一幅其外數種の珍器珍寶ありといへども一々あぐるにいとまゐらず當寺の觀音は大坂三十三所の第一番の札所なりま

などいふあり

野里川のさと

麓に止觀の海をたへといへど是は四貫島をながめて野里川といふ所にいたりぬされば其昔島村の何がしといふ人此所にて合戦しはてける其幽靈とて于今蟹の甲に人貌すはれり名づけて島村蟹といへり

姫島

姫島といふ所豊後國と當國とにあり最初應神天皇の御時に新羅國より女神其夫をうとみのがれて吾朝つくし豊後の國に來れり其すみし處を姫島といへり又つくしは吾夫のきたる事あるべしとてそれより此所にすみさるによりて姫島といふ和銅四年河邊の宮人ひめじまの松原にてうつくしき姫のかばねを見てよめり

いもか名は千代になかさん姫島の

こ松かくれに苦おふるまで

續古今

見渡せは汐風あらし姫島や

中務卿

小松かくれにかゝるしら浪

姫島の小松かくれにゐる田鶴は 鎌倉

千年に經るとも年老すけり

蘆分船第六

曾根崎

此處の名たる事いかなるゆへとも知らずいにしへより天滿天神を氏神とあふぎ奉る此御神のことは皆人のしれることなれば又いはじにもあらず此卷のうちにも粗かきつけ侍れば同じ事いはむもつなげる犬のはしらをめぐるににたれば指置ぬされば當社の御神と北野の天神天滿宮此三社を世人かなへの三足にたとへて三鼎の宮ともいへり猶由緒あることにや尋ぬべし

陰涼し千世もと祈る神の松

玄 仲

堂島

此島はのかみ聖德太子守屋大臣を退治し給ひて後玉造の岸の上に伽藍を建立せんとおぼしけるに猶も守屋か憤やます其亡靈風波となり彼用木をたび／＼

吹ながし此處にとゞまりしにより俗につたへて堂島といふなり

とつとその昔も今もふる雨の

權大僧都日興

もりやは法のさまたけそかし

大融寺并神明

桂木山大融寺は嵯峨帝弘仁辛丑御幸ありし勅願所也御本尊は釋迦樂師千手觀音の三尊也則弘法大師を請し開眼供養をなし給ふと也并天照太神是は此寺より南東二町餘今は也辨財天女の二社を勸請し給ふ是又人法繁昌の鎮守とし給ふ所也其後源左大臣融公志願を凝し承和

乙丑山鐘經七堂を建立し給ふと也故融公の御諱を以寺號と命し大融寺と稱し給ふと也又後鳥羽上皇常寺へ承元丁卯鳳輦をめぐらし給ふと緣起に見へたり靈寶あまたある中に世尊說法の時の袈裟あり并嵯峨帝御隨心の御守本尊柏殼のうちに觀音勢至阿彌陀の三尊則弘法大師の御作也とかや又中將姫種字を御ぐしの髪にて縫給ふ四天王像一幅其外數種の珍器珍寶ありといへども一々あぐるにいとまゐらず當寺の觀音は大坂三十三所の第一番の札所なりま

た此あたりを艦の尾といふ是は源義經と梶原景時と逆櫓の論をなせし時其櫓の木を伐とりしところなるゆへにかくいふとなり

北野天神

此御神は京北野の聖廟より四十年餘後の造營と也むかし此所に一夜に七本の松生出たり希代の事なればとて則大融寺の僧奏聞をとげ寛正四年の倫旨等ありと也又ある説に大融寺の境内に梅塚といふありむかし菅丞相府へ左遷の御時此所に御一宿ありて詠じさせ給ふ御歌としてさる人のかたり侍りつるは
世につれて難波入江もにこるなり

道あきらけき寺ぞ戀しき

かゝるゆへあるによりて此所に天神を勸請し玉城の北野をうつし其名とせるともいへりたづぬべし

女夫池めをとけ

此池のことしかとしたる證説たれしれる人もなししかれども所の人のいひ傳へ侍るは今もむかしある夫婦ひよくの契りをなせしが夫さある事ありて田舎わ

たらへをしける其時男のいはく年の三とせを侍べしやがて歸こん其過侍らばこゝろにまかすべしとまかんでにけりまことに月日の行事誰とゝむべき關しなければほどなく三とせになりけれども出越男もこす妻いよゝおもひにあくがれ臥ておもひ起ておもひおもひあまりて此池水に入むなしくなりけり聞人聲をのみ泪をおとさすといふことなし後男夢にもしらす我がすみかに立越來れば本すみし所とも見えす物かはりすさまじく草のみたかく生じけりあればてゝわがおもひし妻もなしあたりの人に問ければ件のことなるとかたりしまゝきくよりもはや胸うちさはぎすゝろになみだせきかねて終に此池頭にきたり足すりをしてなけども甲斐なし今はあるべきにあらずとてむなしくなりけると也いとあはれならずやさるによりて今の世までも俗につたへて女夫池といひけるとなり

水もらぬ契のすえはくひたけに

おもひしつみし女夫池かな

鶯塚

此所を鶯塚と名づけたる事むかし此邊に富人一子
を愛せり此子鶯を飼て置こと年久しくなりぬしかる
に此子例ならぬ身となり常なき風にさそはれ此世を
はやうしてはかなくなりぬ父母かなしみに絶入若を
先にたてつれなく残りけるうき世のほどをうらみあ
る時彼母鶯に向て物いひけるはなれは誰をよすがと
し今よりのちは此家にいるべきぞとあれば實鳥類と
はいへども此言葉をやさししりにけんこゑのかぎり
出して其儘死にけるとなり則其鶯を埋みし所なれば
とて于今鶯塚とぞいひけり

釋迦堂

此所は長柄の皇居の御時より毘沙門堂の墟なりしか
るを仙譽堯鑑上人洛陽峨嵋の尊像をうつし釋迦如來
を安置し堯鑑も寓居し則五臺山清涼寺と號し給へり
本堂の御本尊は阿彌陀定朝作也并聖德太子の作の地藏堂
ありされば此寺に六字の大名號あり是は河内國玉手
珂境上人の筆翰なり文字の大さ二間ほどづゝにして
則布二十端をもつて上下十五間餘有之定に世に類
あらざる希代の寶物なり

崇禪寺そうぜんじ

當寺の御本尊は十二面觀音聖德太子作なり開基德叟
和尚也大檀主は細川左馬頭持堅公普廣院殿の御菩提
の御爲に建立ありしとなり其遺跡とて于今公方義
政公の御袖判を所持し來れり寶物あまたありといへ
ども涅槃像一幅りやうはんの筆又此寺のうしろの松林のうちに
稻荷大明神のたゝせおはします也此所をして總社の
濱ともいへり

大願寺

孤雲山大願寺は推古天皇の御宇賜勅の練若にして御
本尊無量壽佛也則岩氏平生の持尊の古佛也
むかし攝津國難波の岸と同國垂水の里棹指の宮と其
際二里南海の入江にして數十の島あり懸橋處々數國
往還の通路たりといへども潮浪岸をうがち洪波江に
さかのぼりて島橋顛落すること幾度なり故に難波の
名あるともいへり今の大坂難波橋其隨一なりとかや
諸人通路の絶たる事をうれふ芻蕘あるひは云人柱を
入て築補あらば島橋成就せんと天まごとに人をして

いはしむるにや諸人の愁傷既に上聞に及しかど則諸官に詔ありて通路相成ん事を議せしめ給ふ諸官議定

ありて垂水の邊にいたりて關をすゑ人柱の任たる人を期す期する所をしらすむねあるをや垂水のさとに

岩氏といふ人あり關を越る時たはふれて云袴のまぢにつぎのあらんを人柱とせば島橋成就せんといへり

官是を見るに岩氏の著たる袴つぎあり則捕取して以て人柱となすに島路をのづから穰穰豐饒の地となれ

り今の中島といふ是也勅宣ありて人柱の入たる邊に練若を建立ありて岩氏の冥福をいのらしめ給ふ今の

大願寺是也又歌には橋下寺ともよめり

現六
長柄なる橋もと寺もつくるなり

おこさぬ家を何にたとへん

又此邊に淵あり則岩氏人柱に入たる池なりとかやむかしは龍灯あがりたるよし今の世にも見る人もありけるとなりされば岩氏の娘ありしが河内國禁野にゆくものいはざること久し父の單言して其愁にかゝれる事を傷むにや夫嗟なりとおもつて垂水のさと母のもとにおくりけるが夫猶わびしくやおもひけん手して女の顔に水そゝぎ露か玉かといひて心みたれど猶

物いはす唯うちわらひてたゞ紙に書付のこしたる歌

露か玉かなにかと人のとふものは

きえ歸りぬるわかなみたかな

又彼婦を垂水のさとへおくる時夫則弓をもつて義送するに雉鳥ちまたになく夫と是を射る輿中の愁婦聲うちあげて

ものいはし父はなからの橋はしら

なかつは雉鳥もいられさらまし

夫と嗟ならざる事をしりて終にひきかへる今に其地をよんで雉鳥繩手といふ此婦後には發心して山崎にすみけるとなり今の不言寺といふ是なりとぞ又北國に行けるともいへり其終る所をしらす又勅宣によりて古橋木を以て地藏菩薩の像を刻むで大願寺に安置せしめ給ふ供養の勅使四條大納言公任卿佛前に胡跪し又自詠して

なから江やもにうつもれし橋柱

また道かへて人わたす也

時に地藏菩薩に微笑の色有^レ是を難波の笑地藏ともいへり

三寶寺

當寺は大日といへる沙門のすみし處也しかるに此大日と申せしは惡七兵衛景清が伯父なりしがいかなる事ありけるやらん景清此大日を殺せしとなりそれよりして惡の字を世にいひそへけるとなり總じて景清にかざらず義平が伯父の義廣をうつにより惡源太とよばれるも是等の事に類せるかまた傍に景清がなみだの池などといふ所もあり高濱といふも此邊なり

講後拾遺

きてみれば千代も經ぬへし高濱の

太上天皇

松にむれる鶴の毛ころも

鶴塚

かすかた
澤上江といふ所にいたれば後白河法皇の御母の爲に

御建立ありける母恩寺といふ尼寺あり此所より北ひがしの野中に鶴塚といふあり是近衛院御在位の時に平の比はひ主上よなく御腦あり有驗の僧侶に仰て大法を修せらるゝといへども其しるし更になかりしを則公卿せんぎありて變化のものゝわざなるべしとて源平兩家の武士をえらばせ給ふ中にも兵庫守賴政

に仰付られ討とめし鶴をうつぼ舟にをしいれ淀川にながし給ふとなり其ぬえ此ところのうき洲に流とまりて朽ける所なりとて人鶴塚といへり

天満宮

當社は人王六十二代村上天皇御宇天曆年中に詔を以て當地に造營ありとかや御代ノ天子御宸翰の御名號等を奉納せり年中數箇度の神事これありといへども六月二十五日九月二十五日には神馬をひかせ大形ならぬ祭禮也又星が池などいふ所もありさればこの草紙をおもひ立し事は花實庵貞富といひし人いざなはれきさらぎ下の五日に此御神にまふでかなたこなたと拜みめぐり御自愛の梅の木陰にしばし休らひ居て難波の名たゝるみやしろいとたうとき古寺の事此こと彼こと山また山の物語などものし侍りしに有難事のみおほかりきしかはあれどしれる人まれにしてさだかならねば其ひとつふたつをもとめて物ははしにしるし後見ん人のためにとおもへど元より我は紀の海や若の浦邊に住こし身なればたづきもしらぬ道のあなひ所にいひをくいはれはなきかと難波の

あしのみちしるべをばひたふるにたのむの鴈のかへ
るさに花咲實る庵に入筆の海の手引にまかせふるき
都の靈佛靈社を拜みめぐり靈寶等を拜見して始終六
卷となし侍りぬまことに貞富はやさしくも敷島の道
に心をよせ滑稽はいにしへの守武宗鑑の古風を學び
歌は貞徳翁雄長老のあとをしたひて寛文のはじめつ
かたにざれうたの百詠をつらねしにも松江維舟法橋
より花實庵甘露の百首とえぼうしを著せられ世上に
流布して皆人の慰となれりとかやかく道に心ざしふ
かきにより予於駿府神道の古今傳受せしことをし
りしゐて懇望せり其心ざしのまことに感じて則總社
司農より傳受せし古今灌頂をさづけ和歌の五議三體
を相傳し侍る其よろこびのあまりにやゑびす歌に

おか玉の木を望み得て職人の

さしいたゝける箱傳受かな

かへし

おか玉の器量見つけて職人に

さしわたしける箱の寸法

東照權現宮

當御社は元和二年に松平下總守良忠創建し給ふ開山
は三江和尚也則神宮寺を九昌院といへり

萬代のはしめとけふを祈置て

今行末は神ぞしるらん

萬代を松にそ君を祝ひつる

ちとせの陰にすまんと思へは

難波名所記者一無軒道治之述作也治者是紀陽藤原氏之家に産して初は紀伊國君にまみえしが不幸にして南山にさすらへ寂寞たる學窓に積雪醫術に眼をさらし遊北京養壽院道作法印之敲門下興首を受傳て其名鳴滿山事久し然に或夜高野大明神より蒙神詠感得神矢通哀集と云題號を勅し給ひしより其功を終へ編集して十冊とす今世に傳はる書是也集成し時仁和寺總法務宮上覽ありて御感悅之餘治御前にめされいとも賢き仰ごとをうけたまはり撰集の志不淺被爲思召けるとの奉書を有がたふす則御室宮執奏によりて治みづから翰墨を染かけまくも辱も天子へ奉進獻又法皇女院兩御所へもさへげさせ給ると也是誠其人をして知べし今又此書は治難波之旅館之暇屢名所舊跡等を書集て號蘆分船其奥に一首之詠歌を書添て予か方に來せり

譽ぬるもそしれる人も諸共に

世に残るべき身にしあらねは

予見て宜哉難波津之名は世に聞ゆといへども終に不見件の書跡追と云物に粗雖書載之聊不足信用潜是を襲て是を箱にして置事經數日然に書堂

何家傳聞て予乞雖辭之頻學之故與々之所鏤梓也もとより治と予者逆雖隔處同其意誠非所貴古賢哉猶嘆德之餘染老筆後に加者也

于時延寶三乙卯夷既望日

洛葉東山桑門磐溪

右蘆分船者攝州難波地景古今名所記也予潛求之聊爲童蒙繪其所々令板行者也
延寶三年陽月吉辰

書林 山本氏理兵衛開板

蘆分船第六終

江戸名所記序

春の日のうらゝかなるにいざなはれてしばの戸ぼそ
を立出そこともわかすたどり行けるにとし此の友だ
ちこれも我とひとしき心にてあれたる宿をうかれ出
たるにゆき合たりたがひにめづらしき心ちして笠を
かたぶけて立ながらしばらく物がたりせしかども猶
こと葉はつきせずこれよりわかれてかへらんものこ
りおほし夫もの毎わざとならぬこそよけれとりつく
ろふはむづかしいざや俄に思ひたちて名所おほき江
戸まはりをめぐりてみん年月こゝにすみながらしら
ぬ人に尋ねられてそこは見ず爰はしらすとこたへん
もをこがましかるべしやといふそれこそいとよき事
なれされば物がたりのたねにもならんかしいでや日
も関るにとてうちつれだちてあゆむかしこなりける
茶やに立よりて酒少うちのみてしばしやすらひその
めぐるべき道すぢをさだむ

江戸名所記第一

淺井了意 撰

武藏國

さても此國を武藏と名づけし事はいか成故かあるらんといふにあるじのおきなこたへていはく古き人の物がたりにこの國のうちに祖父が嵩とてたかき山ありその山の有さま鎧武者の大にいかつて立たるかたち似たりされば人王十二代景行天皇の御宇に日本武尊東夷をしづめんとてこの國にくだり給ひかの嵩を見そなはしての給はく此山のいきをひによりて此國の人はこゝろのたけき事餘國にすぐれたるもことはりなり我今大將軍として東夷のともがら王命にそむくものを責したがへんがためにくだれりねがはくは此嵩の神わが軍をまもるべしとてみづから所持の武具を嵩のうへなる岩藏にこめて山神をまつり給ふ武具をこめし岩藏の國なれば文字に武藏と書た

りさてほどなくたいらかに國中おさまりければ今ははや武者武具をさしをくなりとのたまひしよりむさしの國とは名づけたりかの嵩は後に弘法大師のぼり給ひて妙見大ぼさつを勸請し給ひける故に妙見菩薩の御嵩と申也とかたり傳へ侍るといふ誠にめでたき物語かな今はこと更あめがした平かにおさまりて國にそむく輩なし牛を桃林の野にはなち馬を華山の陽にはなちて太平の世をしめし給ふ國の人がらも慍慍にもなし心だて正直にして物やはらかなる事は政道たゞしく上に聖賢の風あつて德澤の普く流はれる廣き御惠のおとなはるゝ故也といふて立出てゆく

武藏にも都の手ふり似さしつゝ、

いまは人からやさしかりけり

江戸御城

此御城はそのかみ後花園院の御世文安年中に鎌倉の山内に官領上杉右京亮憲忠とておはせしが威勢大にふるひて十箇國にをよびあまねくしたがへて受領せらる其家の子に太田道真といふもの長祿元年にはしめて江戸の城をつくり其子持資入道道灌おなじく相

つぎて居城せらるしかるに享徳三年甲戌十二月二十七日に鎌倉の公方西御門成氏公すなはち御所のうちにして官領憲忠を誅し給ひぬこれより關東大に亂て靜なる時なししかるに道灌は上杉修理大夫定正の長臣として扇谷に伺候せられしに山の内の官領上杉民部太輔顯定と定正すでに中あしく成度々いくさありけり文明十八年丙午太田の道灌むほんの事有て定正のために誅せられ江戸の城は定正の手にわたり子息五郎朝良ともよしにいたる二代のうち在城あり朝良卒して後に官領上杉修理大夫朝興この城にありしを大永年中に北條氏綱にせめおとされ北條家四代のうち相つゞき氏直のときにいたつて北條治部少輔遠山左衛門尉をもつて城代とせられしを天正十八年七月六日小田原没落して氏直めつばうせられしよりこのかた天下をだやかに四海太平にして當家に屬し江城すでに日にしたがひ月を追てとしを重ぬるにますゝはんじやうし諸國の大名小名なびきしたがふ事は吹風に草のえふすがごとく日本國の諸人いりあつまりて市をなせり城の大手は東にむかひあしたに出る日の光に映じて殿主のかげさちはこのうろこのひかり上は

雲まにかやき下は海ばらのうしほにうつろひて金花さくかとあやしまる西の丸は本丸の南にありて大手の門又みなみ向なる西の丸と本丸のあひだに紅葉山あり御城のめぐりは大名小名の屋形棟をならべ軒をきしりて立つたけ君をしゆごしたてまつらる出入諸侍たち

大身も小身も禮法みだりならず威儀たゞしく太刀かたなの下緒の右往左往とするもいとをだやかにみゆ

あまのはらふりさけみれば白たへの

たかくつくれる江戸の城かな

日本橋にっぽんはし

橋の長さ百餘間北みなみにわたされし橋の下には魚舟楨舟數百艘こぎつどひて日毎に市をたつる橋のうへよりみれば四方晴て景面白し北に淺草東えい山みゆ南にふじの山峨々とそびえ嶺は雲まにさし入て鹿の子まだらに降つむ雪までのこりなくみゆ西のかたは御城なり東には海づらちかく行かふ舟もさだかにみへわたれりされども橋のうへは貴賤上下のぼる人



くだる人ゆく人歸る人馬のる物人の行通ふ事あやの熊
野まいりのごとしあしたよりゆふべまで橋の兩わき
一面にふさがりをし合もみあひせき合てしばしも足
をためて立とまる事あたはずうか／＼とかまへたる
ものはふみたをされ蹴たをされあるひは帶をきられ
て刀わきざしをうしなひあるひは又きんちやくをき
られ又は手にもちたる物をもぎとられたま／＼見つ
けてそれといはんとするに人だまひの中に立まざれ
て跡を見うしなふすべて西國より東國のするまで諸
國の人の上下往來する日本橋なればまことにせきあ
ふもことはり也橋のしたなる市の聲橋のうへなる人
音さらに物のわけもきこえず只わや／＼とどよみわ
たるばかり也

あめかしたなひきわたりて君か世の

さかゆく江戸をしる日本橋

東叡山

爰は忍岡とて當國の名所也南光坊の慈眼大師と謠號有開基なり
都の丑寅のかたにあたりて比叡山あり桓武天皇の御
宇に傳教大師の草創し給ふところ王城の鬼門をまも

り天下國家安全のいのりをつとめらるこの東叡山は
またこれ江城の鬼門をまもり惡事さいなんを拂ふ鎮
護國家の靈場也天台四明の法燈をかゝげ佛乘三觀の
覺月をあふぐ東國の叡山なれば東叡山といふなり此
山にのぼりぬれば江戸中は残らずめのしたにみゆ忍
ぶの岡の事は今は上野にありと聞ゆ俊成卿の歌に
たかために忍ひの岡のしたわらひ

けふりはたえす見えわたるらん

猶よまれしは爰の事にやあるらん覺束なし又續古今
俊惠法師の歌に

なに事を忍ふの岡のをみなへし

おもひしほれて露けかるらん

とよみしは奥州の名所をよめりといへりいづれとさ
だめて知がたし

ひたるさを忍ふの岡のいはつゝし

色にいつも酒はのまはや

不忍池しのはずかいり

忍ぶの岡にうちつゝきてしのばすが池あり本はしの
ばすが池といひしを今は篠輪津が池と呼來れり堯惠

法師の路次記に忍ぶの岡は今はうへ野にありといふ忍ばすが池今はしのわづの池と號すといへり池の大さ五町四方もありなん池の中に島あり辯財天おはします水谷伊勢守建立せらる南のかたに茶やあり北にゆけば谷中に出る池水常にたゝえて蕩々として底ふかく風えう／＼と吹おくれば小波かさなり立て水面に皺をたゝみ月雲を分て出れば影水底にうつりて百鍊の鏡をみかく木にのぼる魚もなく波をはしる兎はなけれどもさながら竹生島のおもかげあり

水底のきよきを神のこゝろにて

なにをかくさん忍はすか池

牛天神うしんじん

東叡山黒門の際右の方にあり堯惠法師中興として上野の鎮守たりある人いはく北條氏康關東對治の後靈夢おはしけり菅丞相御手に一枝の梅花をもち大なる牛にのりて都の右近の馬場より御やうがう有けりと夢さめて此やしろを初めらる久しく大破に及びしを堯惠中興してその跡うしなはずといへり松梅はもとより神木也 花ひらけそめて梅は天下の春をしらし

め時雨に色かへぬ十かへりの松は忠節無二の徳をあらはし給ふされば老松紅梅藤みな此御神の末社たる事これまたふかき故ありとかや

人ことにまうてくるまの宮めぐり

牛天神やよたれたるらん

忍岡

稻荷

此社まで猶忍ぶの岡のうち也太田の道灌これをくはんじやうせらる本社は洞の内にありほらのうへにもまた社ありやしろの前はすなほち石のほりぬき也穴のまへ兩わきに白き狐有神木は榎木なりやしろの右のかたに糸櫻あり柳のえだに櫻の花をさかせたるがごとし春風にうちなびく有さま朱の玉垣にいろをうへて且ちる花や匂ふらん宜榎がうちふるしらにぎてを柵をへだてゝ見るがごとし石壇のしたに泉水あり峯は石にてたゞみたり西の方にむかへば忍はすか池はめのしたにみゆまたすてがたき絶景なり

護國院はこれ明神の靈夢によりて立られしところ松櫻竹のはやし萬木えだをさしり梢の花色をあらそふ鳥井の内に茶やあり

わがおもふねがひをみつゝの御社に

ゆふかけてさく糸櫻かな

いにしへ空海和尚入唐歸朝の後東寺の門前にして稻を荷ひて來り給ふその時はおきなの方がたにておはしましけるを大師これをいはひしづめまつり給ふ稻荷山これなり此明神を太田道灌勸請せられしかの本山は紅葉を名物として歌にもよみける事あり又あをかりしよりといふ本歌を思ひ出て

あをかりしいなりの山はさもあらはあれ

いまはあやかれしろききつねに

神田廣小路

藥師

當寺の本尊藥師如來は傳教大師御在生るとき七佛藥師の靈像をさざみ給ふ今其中の一體也しかるを本山第二の座主慈覺大師あまねく衆生利やくのためにこの本尊をもり奉りてくだらせ給ひひろく濟度の御結縁をほどこし給ふ爰に又江城の元祖太田道灌この靈像を歸敬し年久しく城内にあがめ給ひしが又故ありて神田にうつし奉りいよ／＼崇敬淺からずことさらに時の大御臺御願主となり給ひて御堂御再興あり玉

をつらねこがねをちりばめて奇麗なる事目をおどろかしけりそのうちに又故ありて廣小路にうつしたてまつるしかれば此如來星霜久しくもろ／＼の衆生にけちえんし給ひ所々に座をとめ現當二世の悉地は古往今來さらにいよ／＼さかん也しば／＼靈瑞奇特をしめし給ふ事はかたりつたへ聞つたへて諸人あまねくしる所なりされば東關群庶の福示なればとて當所より寺を東福寺と號すとかや

なむやくしちかひのあみはひろこうち

いをせんさいと人はいふらん

湯島天神

そも／＼當社は人王百四代後土御門院の御宇文明十年の夏のころ太田の道灌江戸の城を築て居住す北野の天神を信する心ざしふか／＼りければすなはち城中にくはんじやうせらるその年の秋あやしき夢想をかうぶりしにあくるあしたにある人菅丞相の自筆の御影を奉りぬ道灌この奇特をかんじ給ひて城の北のかたにやしろをたて梅の木あまた植たて社領をよせてあがめまつられしよりこのかたやうやくはんじやう

して宮居はたぐひすくなき絶景の勝地となれり湯島はこれ郷の名なりある人の發句に

行きやうを水になすな湯島の神の春

ちはやふるあら人神の身をわけて

きよきゆしまにあらはれにけり

神田明神 かんだのみやうじん

この社は將門の靈なりいにしへ桓武天皇六代の後胤陸奥の鎮守府前將軍從五位下平朝臣良將が次男相馬の小次郎將門といふ人あり朱雀院の御宇承平二年にあたつて總州相馬郡にありてつはものをあつめむほんをおこし伯父鎮守府の將軍良望後には常陸の大丞國香と改名すかれをうちほろぼし關八州をなびかしみづから相馬郡に宮古をたて平親王とあふがれ天下をうばひとらんとすやうやく東國をせめしたがへそのいきをひ大に成て駿河國までうつてのぼるこゝに天慶三年庚子に國香が子平貞盛大將軍の宣をかうぶり藤原の忠文朝臣依藤太秀郷副將軍としてはせむかふ秀郷はかりごとをもつて將軍を打けるところにその首とんで空にあがり雲に入しが此所におちといま

りしを都にのぼせて獄門の木にかけられしにその首更に死なずしてたゞりをなしこの首を見る人たちまちにみなわずらひけるゆへにさまぐ御きたうありしかどもしるしなしある人この首のほとりに來りてまさかとは米かみよりそきられける

たはら藤太かはかりことにて

とよみければ此首から／＼とわらひてそれより目をふさぎたゞりをなさゝりけりかくて此所にをくりくだし御たくせんの事によりて社をたていはひしづめ奉りければ靈驗あらたにおはしませり

ちはやふる神田の宮井年ふれど

いのるしるしは猶あらたなり

谷中 しみづのいな

清水稻荷

谷中通清水のいなりはむかし弘法大師御修行の時此所をとをり給ひしに大に喉かはき給ふ一人の姫あり水桶をいたゞき遠き所より水を汲てはこふ大師このうばに水をこひ給ふ姫いたはしくおもひ奉りて水をまいらせていはくこの所更に水なしわが年きはまりて遠きところの水をはこふ事いとくるしきよしをか

たり申けり又一人の子あり年ごろわづらひふせりて
うばがやしなひともしく侍べりと歎きければ大師あ
はれみ給ひ獨鉢をもつて地をほり給へばたちまちに
清水わき出たりしそのあぢはひ甘露のごとく夏はひ
やゝかに冬は溫也いかなる炎天にもかはくことなし
大師又みづからこの稻荷明神を勸請し給ひけりうば
が子此水をもつて身をあらふに病すみやかにいへた
りそれよりこのかた此水にてあらふものはよくもろ
くのやまひいへずといふことなしこの故に清水の
いなりと申す又人の家たちつゞきてすなはちこゝを
清水町と名づく神木は杉なり千載集僧都有慶の歌に
いなり山しるしの杉のとしふりて

みつのみやしろ神さひにけり

とよみしも時にとりてはおもひあはせらる

あらへたゝけかれににこる人こゝろ

しみつのいなり神のまにノゝ

きてみればいなりのしみづ底澄て

やどる月さへくまなかりける

谷中

法恩寺

後土御門院御宇文正年中に太田道灌この寺をこんり
うせらる開山は日住上人なり後に台徳院殿より寺
領御寄附の朱印を下さるいまは不受不施の門流をく
みて放逸にしてむなく信施をつるやすことをおそ
る本門究竟の大道をしめして三車方便の化用を貶む
まことに深故あるよしを聞つたへし大門の左のかた
に三十番神のやしるあり拜殿の前に魂屋あり鐘樓は
やねなし本堂の兩方に櫻二本あり花信の風の後の
花はじめてほころび出れば曼陀羅花の地よりわきあ
がりて木すゑにむらがりといまるかとあやしまるま
うで來るともがらはかへらんことをわすれてながめ
くらすわかき女房たちうるはしき小袖にいろゝの
衣裏さしてたもとをつらねて入來り他念もなく此花
をながめ居たるありさまは我此土安穩天人常充滿の
經文にかなへりとおぼえていとうきたつ春の日に
諸人こゝろをそらになす幸に此花本堂の兩方にあれ
ばをのづから御本尊にさゝげたてまつる心地してい
ふばかりなくみえければ

折とらはたふさにけかるたてなから

釋迦と多寶に花たてまつる

ともいふべしや

よみすいたす經はなむめう法恩寺

庭の櫻は陀羅二本かな

谷中

善光寺

當寺の本尊は秘佛にて開帳なし兩わきには善導法然の繪像かへり給ふ比丘尼寺なりしなのゝ國の善光寺の如來は佛在世の時に月蓋長者がつくりし所闇浮檀金の三尊とをく日本にわたり給ひしを欽明天皇の御宇に尾與連弓削守屋がわざとして難波堀江にしづめたてまつる信州水内郡に本田の善光と云もの官に驅れて都にのぼり國にかへらんとする折から堀江の岸をとをりて此本尊をひろひたてまつり國にかへり家をうつして寺となしわが名をもつて直に善光寺と名づけしとかや今の谷中の善光寺はいづれの時いかなることに立られしともさだかに聞えがたし門の内には西方に並木の櫻あり善光寺は尼寺なりければ善光寺てらすちかひのしるきかな

なむあまた佛の聲をたつねて

谷中

感應寺

長曜山感應寺は中興日長上人當代にいたるまで九代法花どくじゆの聲あひつゝきてたえず十羅刹三十番神も感應のまゆをやひらき給ふべき當寺に高祖日蓮大聖人みづからつくり給へる御影あり十月十三日はこの聖人の御忌なれば諸人まうであつまる事市のごとし御影は秘してつねには開帳これなしもし人立願の事ある時には草履一足をもちてまへり御影のまへにかけたてまつりていのるに所願じやうじゆする事たとへば鐘のしもとにしたがひて音をいだし谷のひいきにおうするがごとしよく諸のきどくおほければ感應寺と名づけしもゆへあり虎うそぶけば風生じ龍吟すれば雲おこるがごとしこれを感應といふまさに行者のこゝろざしまことある時はそのしるしむなしからずしかるをつねづゝは念することもなく信ずる事もなくてすぐに何事にてわが身のうへにむづかしき事のあるときにいたつてにはかにいのりをかくる人の心だてこそおろかなれ

情こはにいのるねかひをかなへすは

新堀村

感應といふ甲斐やかならん

七面明神

七面はもとこれ身延みつたがにあり峯七つの山也古しへ日蓮聖人此身延山にして法花經どくじゆありそのころ雅亮にして谷峰にひいき天人もあまくだり十羅刹女もやうがうし給ふらんと聞人感涙を流しけりかゝる所に一人の美女忽然として來り給ひ聖人にむかつてのたまはく我はこれ此山の神なり經王どくじゆの聲にひかれてあらはれ出たり此山の峰七つありをの／＼面をむかへて住す今よりのち守護神となりてこの法をまもるべしわが本體を見給へとて大蛇のすがたを現じてやがて御すがたをかくし給ふ聖人すなはちこれをあがめ身延山の守護神とし給へり爰に新堀村寶珠山延命院の住持日長上人萬治三年庚子正月十六日うたゝねの夢に七句にたけ給ひし老僧かうぞめの袈沙をかけ水精の數珠をつまぐり枕もとに來り給ひて汝かならず七面の明神を勸請せよしからば大にはんじやうして宗流ます／＼ひろまるべしとあらたに告をかうぶりと夢はそのまゝさめたり日長つらく案

するに我日ごろ妙見大ぼさつをくはんじやうすすべきや七面の明神をくはんじやうすべきやと二心ありてつゐに決せず日比を経る所に今この夢想をかうぶることの有がたさよとおもひやがて七面の明神を此地にくはんじやう申されし御縁日は九日と十九日と二十九日をとる神事は九月十九日なり七面は本地北斗の七星妙見もまたこれ星の名なり武曲星のかたはらにありてもろ／＼のつかさたり經には妙見大ぼさつととき給へりされば妙見は諸星の中の大王なればあらゆる星の北にむかふは妙見星をあがめ給ふところなり七面をあがむればめうけん大ぼさつはそのあたにこもりておはします也日蓮聖人大難の時にあたつて梅の梢に星くだりの奇特をあらはし給ふも七面の明神守護の故なりかゝる奇瑞あるをもつて今又此地にひかりをやはらげ跡をたれ給ふ

北にすむ星のひかりをやはらげて

人の世てらす七おもの神

江戸名所記 第一終

江戸名所記第二

駒込村

吉祥寺

諏訪山吉祥寺は太田の道灌遠山丹波守心ざしを合せてこんりうせらる開山は青岩周陽和尚也此寺そのかみは和田倉橋のうちにありしこの所に用水の井を掘けるに井の中より一つの金印をほりいだすその印に吉祥増上の四の文字ありこれによつて此所に一寺をこんりうして吉祥寺とがうす禪林はんじやうの靈地なりはるかにとし月を経てのち東照權現はじめて江城にうつりたまひしときに當時は第五代の住持用山玄照和尚なり城内きはめてせばかりけるゆへに吉祥寺を神田にうつして城をひろくなしたまふそのころ寺の替地すでに城を去事はるかに遠かりければ人倫通する事希にして寺のためいかにあるべきと上意ありしに玄照和尚こたへていはく今この江城の氣をみるに君の御代大にはん昌して市をなし月にしたがひ

日を追て家居たちひろまるべしこの故に後には此替地の寺もまた地を替られ侍べらんと申たまへば御感なのめならずすなはち當時に七十五石の寺領御寄附ありそれより代々の御朱印あり明暦三年にあたつて同安洞察和尚の住持たるとき寺を駒込村にうつされたり當寺に江城詩記あり文章うるはしくして金聲あるがごとくこれをよむ人はたちまちに頭痛のわづらひをいやすとかや

何事もよきさいはひの寺の名の

しるしをかねて土にしらせし

駒込村

富士社不并寝權現

このやしろは百年ばかりそのかみは本郷にありかの所にちいさき山あり山の上に大なる木ありその木のもとに六月朔日に大雪ふりつもる諸人此木の本に立よればかならずたゝりありこの故に人みなおそれて木の本に小社をつくり時ならぬ大雪のふりける故をもつて富士權現をくわんじやう申けりそれより年ごとの六月朔日には富士まいりとて貴賤上下參詣いたせしを寛永の初めつがたこのところを賀州小松の寺

西新井
總持寺

納言拜領ありて下屋敷となる今も猶そのやしろの跡残りて毎年六月一日に神事あり山のかたち富士山をかたどるその前に書院をたて富士書院と名付らる山上のやしろはいまも六月一日には老若群集すこの社の別當は眞光寺昌泉院よりおこなひつとめらるゝといふ

不寢權現はその來歴知りがたし少き社あり祇園の牛頭天王の御託宣に我は眠を好みて五月五日に目をさまし天にあふぎて息をはくその氣雲となり露となり雨となり霧となり人間の身にふれて果報にしたがひて毒ともなり藥ともなるとのたまへり一年のうち五月五日只一日御ねぶりをさましたまふ牛頭天王には引かへて常に不寢權現は諸神の中の番衆にてやおはすらん納豆麴にはさし合なるべしこの社は樗の木はやしのうちにあり太田道灌の植られし林なり世にせんだんの木ばやしといふ社もそのころよりありけん太田備中の太守あらたに社をつくられしとなり別當は同じく昌泉院よりおこなはる

これやこのちいさき富士のうつし山

ふしこふなりと世にはいふへく

そのかみ弘法大師この所にしておこなひたまふとき
關伽の水これなし大師すなはち地にむかつて加持し
給へばたちまちに水わき出たり新井と名付る事は此
故なり眞言宗の談林として所化おほくあつまるとい
ふ

つみとかのまよひの垢はのこりなく

あら井の寺の法そたうとき

淺草觀音

むかし武藏國豐島郡宮戸川は漁者のあつまるところ
これ今の淺草河なりしかるに此川のほとりに兄弟三
人のすなどりあり兄を檜熊と名づけ次を濱成弟を竹
成と名づく推古天皇の御宇三十六年つちのえ子三月
十八日の事なるに三人の兄弟綱をもち舟に棹さして
宮戸川の沖にこぎだして綱を海中におろしけるに
魚さらになしたちまちに觀音の形像あみにかゝりて
あがらせ給ふ兄弟三人大におどろき手をあはせて禮
拜す又綱をたづさへて七浦をめぐるにみな觀音の形

像あがらせたまふ爰にをひてます／＼おどろきあやしみてすなはち家にかへりてしたしきものどもをあつめて此よしをかたり形像をしめすにをの／＼きどくのおもひをなすかくて皆申すやう汝ら三人は只人にあらずかゝるふしぎをかうぶる事ためしあるべからずはやく宮をつくりて観音をき奉れといふそのあくる日十九日に兄弟三人かの形像にむかひ奉りて申ていはくきのふけがれたる網に靈像をかけ奉るその罪ふかし大慈大悲をもつて宥ゆるしたまへしかるに我ら常は魚をとりて世をわたるものなり魚をとらざれば身をすぐる手だてなし此故に今日又海におもむきて網をおろすべしねがはくは魚をとらせて給はれと念願して七浦に漕めぐり網をおろして引あぐるに魚はなほだおほくとり得たりこれを賣に万貫の錢をまうけたり人みなきどくのことにおもへりこれはかならず観音の御たすけなりとてつゐに小宮をあらためあらたに觀音堂をたてゝ安置し奉る兄弟三人はむなしくなりてのちその子孫又三の社をたてゝ兄弟三人を神といはひけりこれ今の三所の護法神なりはじめ小宮にをきたてまつりし時に觀音夜な／＼ひか

りをはなちたまひしを十人の草かりおがみつくて大にたつとみもろ友にちからをあはせて觀音堂をつくり奉りし今の十社權現これなりかの小宮をば一の權現と申す也

孝徳天皇大化元年に勝海上人この地にまうで奇特のつげおはしましけるよりこのかた本尊を直におがみ奉る人なし

朱雀院の御宇天慶五年に安房守平公雅此觀音にいのりて所願をまんぞくし國の守になり官位たかくのぼりしかばこのよろこびに觀音堂をさいこうしかたはらにまた佛堂をたて輪藏をつくり院坊をたてらるまた五重の塔をつくりたまふたまのいらが空にそばたち九輪たかく切利の雲をわきばさみ露盤あらたにささげて寶鐸風にひびきわたる又かさねて一軀の鳧鐘を鑄てたかく一樓にかけらる鯨音とをくひひきてはきく人無明のねぶりをさまし參詣禮拜のともがらは福壽海無量の利生をかうぶる事鏡に影のうつるがごとしそれよりのち或は地震或は兵火のためにたひだひ堂塔破壊すれどもさいこうまたたび／＼なり

源の頼朝卿は

三十六町の神田をよせられ其後足利の尊氏公又寺領をよせられけると也

淺草や川瀬のよとにひくあみも

淺草

みやうらうあん うはがふち

ひろきちかひにたくへてをみる

明王院附嫗淵

淺草寺のうち明王院の嫗が淵はいにしへこの所に人里まれにして旅人道に行暮やどをもとむるにくるしめり野中に柴のいほりありて年老たるうばわかきむすめと只二人すみけり旅人行暮て此いほりに立より宿をかれば嫗すなはち夜のうちにその旅人をころすかくて九百九十九人をころしけり然るに淺草の觀世音ぼさつこれをあはれみたまひ草薊に現じて笛をふきたまそのふえの音をきけば

日はくれて野にはふすとも宿からし

あさ草てらのひとつやのうち

旅人この笛の音を聞つけてあやしく思ひこの庵りに宿はかゝながら宵の寢所をかへてふしけるを夜ふけてあるじのうばひそかに宵のねやに忍び入てみるに旅人なしうば大におどろきあやしむ體にてわがふし

戸に立かへりしかば旅人は夜のうちにかの庵りをにげ出であしにまかせてのがれゆきいのちをたすかりぬこれひとへに觀音の御利生なり用明天皇の御宇三月十六日に淺草の觀音うつくしき兒と現じこの庵りに來り一夜の宿をかり給ふにむすめはなはだ愛まよひてみづから此兒のふしたる所に忍び來りて寢臥けり嫗ひそかに來りてかのちごをころすとおもひてわがむすめをころしけりそれより大に歎き悲しみてついに本體をあらはしそのたけ十丈ばかりの大龍のすがたとなり龍宮にかへりぬこれ沙羯羅龍王の化身として嫗とあらはれ觀音の御利生をあらはさんためにかゝる御はうべんをめぐらしたまひけりかのうばのりうぐうにかへりしところ今に淵となり嫗が淵と名づく白川院御製に

武藏には霞の關やひとつ屋の

石のまくらや野寺あるてふ

と詠じたまひけるもかの嫗がすみけるひとつやと淺草の觀音おはします野寺の事をよみたまひしと申つたへたり今は人の家居たちつゝき軒をならべてにぎやかなりのちに淺草の寺内院宇おほくたちて明王院

もはじまれり子どもの嗽入てわづらふ時は竹の筒に酒をいれて木のえだにかけうばが淵にいのれば咳嗽の病たちまちにいゆる也池のはたに洞ありその洞の兩方は小篠しげれり

風ふけはさゝ波たつやうはか淵

水のおもてに雛のよりつゝ

石濱村

掬泉寺附沙龜山

當寺はこれ學宗和尚の開基として正法眼藏の妙理をしめし實相有無の心印をひらく向上の一路には著相實有の草をはらひ言下の一喝には異學執解の塵を飛す公案の床のまへには一千一百の則をかさねて以心傳心をまもり座禪のふすまのもとには朝三暮四のたすけをまちて文字言句をはなれたり寺内に千葉介の石塔并に軍謀團ありまさに生前の古しへは八陣の備に應變をしり三軍の帥に勝負を決し敵をなびかし威をふるひしかども死後の今はわづかに一簣の土に五尺の身をうづみ一聚の墳のうへに一軀の塔婆に名を残したるばかり也

妙龜山は掬泉寺を去事遠からず爰をば淺茅が原と名

づく當國の名所なりといふされども歌枕名寄等にもみえず古老のものがたりに妙龜は梅若丸の母の法名なり此人はもとこれ美濃國野上の里の人なりある説に斑女が事なりといへり斑女は形見の扇によりて戀の狂人たり梅若の母といふ事さだかならずいにしへ奥州の人商人に野上の梅若丸かどはされて當國むさしの角田川までくだり旅のつかれにやもつてのほかにいたはり今は一あしもひかれずとて角田川のほとりにひれふしたるをなさけなくも商人はうちすてて奥にくだる梅若丸はいくほどなくむなしくなりけるが今をかぎりの時に我はみのゝ國野上の里の梅若といふものなり人あき人にかどはされて爰にくだりむなしくなる也故郷にたよりあらばといけて給はれとてびんのかみをのこしてついに命おはる此所の人あはれがりて塚につきこめ柳をしるしの木にうへて念佛申てとぶらふ所に梅若の母たづねくだりひたすら狂人となりて御まよひ侍べりしが此事を聞いてもだえこがれなくゝ念佛して跡をとぶらひ故郷にもかへらず掬泉寺に行てかみをそり妙龜尼と法名をつぎ三とせかほど淺草がはらの露になきしほれ念佛

してありけるが前なる池に出てわが影にやつれはて
てかはれる有様をうつしてみるとやおもはれけん水
のおもてをさしのぞまれしに猶狂亂の故にや戀しき
梅若丸のすがた池水にうつりてみゆあらいとおし和
御前故にこそ心も亂れて侍べりしぞやといふてその
まゝ池に飛入てむなしくなれりあたりちかき人々お
どろきあつまりつゝあみをおろして引あげたりけれ
どもはや事きればてたればちからなく塚につきこめ
その上に堂をたて妙龜堂と名づく内に妙龜の御影あ
り開帳して諸人におがましむそれよりしてかの池を
ば鏡の池と名づく也

あはれてふ淺茅かはらをきてみれば

月の鏡の池もすみけり

淺草

金龍山きんりゅうざん附眞土山まつちやま

むかしこの山より金龍を堀出しける故にすなはち金
龍山と名づくといへり聖天宮のやしろあり大なる松
山なり古しへは爰を眞土山といひしこれ武藏の國の
名所なり紀州にも同名ある也新勅撰辨基法師の歌に
眞土山まつちやまこれくれていほ崎の

角田川原に獨りかもねん

とよみしは當國のまつち山なり山のうへにのぼりぬ
れば東のかたに淺草川牛島新田みゆにしのかたは大
道なり聖天宮の前にて

まうてくる人をまつちの山かせに

まよひの雲ははらひはてけり

たれをかまつちの山の山姫は

衣かたしきひとりぬるらん

淺草

三十三間堂

これ京都の三十三間の堂形なりそもく此三十三間
のおこりは古しへ後鳥羽院ひとつの御願おはしまし
て鳳城の左賀茂川の東に三十三間の御堂をつくり一
千一體の觀音をすへたてまつり徳長壽院と名付ら
る崇徳院の御宇長承元年みづのえね三月十三日に勅
願のくやうをのべたまふ導師は天台座主東陽原忠
尋僧正なり上は一人三公卿相雲客下は洛中邊土の貴
賤上下まつりあつまりしに導師高座にのぼり三時
ばかりの説法あり智辨無窮にして言葉の花匂ひをは
どこしたまへば數萬の聽衆をのく歡喜の涙を流す

かくて祈願の句に衆病悉除身心安樂とたからかにとなへたまひしかばそのころ洛中白川にひいき齋宮の女御をはじめたてまつり此聲を聞しともがらすべて二萬三千人一同にやまひいへたり此故にかの寺を異名には平愈寺と申す也御布施には千斛千貫沙金千兩その外被物祿物庭のおもてはさながら山をなせるがごとしまことに大善功とくの寶刹なるに日外のころよりか此堂の後の軒を北にむかつて弓を射そめ矢の數おほきをもつて手がらとすこれ弓射る人の拳かしかたまり勢力つよく矢筋たゞしうして一方をもふせぐ大功ある事をしらしめんがためなるべしこれより諸國大名の城下にみなこの堂形をつくり弓をけいこせらるとかや今爰の堂形には本尊は千手觀音只一體なり堂のうしろにては弓を射る事これあり國もとの堂形にしてはまことに百手はもゝてながらとをり終日とをせば數千筋あだ矢もなきを京都の堂にて大かたとをりかぬるよし聞たりとそれに數のかざりとをして金の采牌をとり侍べりては龍門の三級にのぼりし鯉のごとくいさみよろこぶも理り也それ大悲の弓に智恵の矢をはげて四魔のいくさをやぶるはこれ觀音

の得ものなれば此堂にして弓射るも故ありとおぼゆ慈悲の弓に智恵の矢はけて觀音も

いるは三十三間の堂

東本願寺

そのかみ東照權現御在世の時一天四海をたなごゝろのうちにおさめたまひ京都本願寺の門跡光佐教如上人に御懇意の子細ありて本寺の開山聖人の御影を寄附ありて上洛せしめられけりそれより前に豊臣太閤の御時に本門跡教如上人を故もなく隱居させられ秀吉公の御はからひとして教如上人の御弟を本寺の門跡になされ教如はうしろの屋敷にをしこめられけるを東照權現めし出したまふさればうら屋敷におはせし故にうら門跡とはいひけりこれに對して西の順如上人をばおもて門跡といひつたへたり六條室町のすゑに御堂屋敷拜領有て新町をかざりて寺内となる此時より西ひがしの兩本願寺となれり猶其後神田の臺に末寺を立らるべきよし詔の事有て江戸の神田に寺地を拜領し一字をこんりうせらる今は大にはんじやうなれば京都の本寺より堂衆一兩人かはるゝ輪

番にさしぐだされて江戸中の門跡を勸化せしめらる寺内の原舎おなじく列座の出仕をつとむ明暦三年の回録より此所に寺地うつしあらためられ寺院をつくらせられたり

一向にたのむは彌陀の本願寺

すつる難行ひろひはしすな

淺草

報恩寺

そのかみ本願寺の開山親鸞聖人の御弟子に聖心坊とてありしが下總國飯沼に一字の某舎を立て聖人所立の淨土眞宗の法門ひろめられしにかの飯沼の天神此流義をたうとみみづから御かたちをあらはし聖心坊に對面あり紫の戸帳一重を袈裟の料にとてまいらせらる又正月十一日には毎年にかの天神より池の鯉二喉づゝ聖心坊にまいらせられしかば其例として今にいたるまでもその立所の門徒これを報恩寺にまいらするとかや鯉を持參のときに正月の鏡餅を三つ返禮のためにつかはさるすなはちその鏡を天神の御寶前にそなへおなじき廿五日の初連歌に鏡をひらきいはふとなり聖心坊は大中臣氏の人なり寺の什物には

親鸞聖人六十三歳の御壽像

同 聖人關東御廻國の時の笈

同 聖人御作直筆の教行證 六冊

おなじく聖もち給へる御團

ぶん切壹つ 袋ともに

から革のきんちやく 中には永樂の錢四文あり

茶ちやうす礎壹つ 臺は木也目なくして茶よくおるゝ餘所

にて引にはおりずといふ

聖心坊過去生の骨 これは聖心坊夢想の事有て奥

州の土つちなか中山より掘出す

弘法大師御直筆の三部經 但こぐちに大師直筆の

廿五のぼさつの繪あり

脇指一腰 此名を蛇返とがうすむかし伊勢の國鈴

鹿山のほとりにまづしくいやしき男あり常に身

のわびしき事を歎きて太神宮に福分をいのりた

てまつる御夢想に汝うづし獵師をして世をわたるべし

と御示現をかふぶりしかばそれより鈴鹿山を家

として獵をいたしあかしくらす程にあるとき三

子山にしてあやしき刀をひろひ得たり此刀を得

てよりはいさゝかも目にかゝるほどのけだもの

をとりのがすといふ事なしこれ太神宮の御利生也と思ひければ晝夜身をはなたずある時かの獺師は鹿をまちて大なる木の本にくだんの刀をよせかけて置たりしに此木たちまちに枯たりそれより刀の名を木枯と名づけてもちけり其比刑部卿平の忠盛朝臣は伊勢の守になりて下られしがこの事をほの聞てかの獺師をめしよせ栗眞^{くりまこと}庄の年貢三千石に替てとられければうしは家とみさかえていよく太神宮の御利生をたうとみ奉りけり忠盛は都にかへりてのちに六波羅の池殿の山庄にて晝寢して前後もしらずおはしけるに木がらしの太刀はまくら本に立られたりしにおそろしき大蛇池より出て忠盛をのまんと口をはりて游^{あそぶ}來るかの木枯颯とぬけ出てがはと倒るゝ音に忠盛おどろきおきあがりて見たまふに刀はぬけて鏝^{きつぎ}は大蛇にむかへたり蛇は劔におそれて池に歸り水底にしづみけり太刀のたをれたるは主をおどろかさなかため鞘よりぬけたるは主をまもりて大蛇をきらんがためなり大蛇おそれてかへりしかば木がらしの名をあらためて蛇返^{へんげし}と

名づけ侍べりし世々につたへて今此寺の什物となれりといふ又ある説にはこの刀は丁海が作也聖心坊もとより家につたはりてもたれたりしが北國をめぐりし時に猶此わきざしは身をはなたずある時舟にのりて佐渡島にわたりしが夜ふけて前後もしらず舟底にふしたりしを海中より大蛇出て舟にのりうつり聖心坊をのまんとせしに此刀颯とぬけて大蛇を追返しけり目覺て此よしをみつゝかぎりなく秘藏して蛇返しと名をつけつゝ家につたへて今にありとかや

此寺いにしへ下總の飯沼より櫻田に引こしけるをそれより八町堀にうつりいま淺草にうつされしは西のとしの回録以後の事也

もろくのさうきやうさんな聲をして

申すつとめや彌陀の報恩

淺草

日輪寺

當寺はこれ時宗なり本尊は安阿彌の作立像の彌陀如來也遊行一遍のながれをくみ念佛一行のをしへをつたへ成佛貞道の望みをかけて歡喜踊躍の色をあらは

しをどり念佛のひやうしをあはせて梟鐘のひびきに
信感をもよほす

門口はあきても時宗日輪寺

齒をくひしはる文字をろへかな

大雄山海禪寺

武州江府の海禪寺は人王 桓武天皇より六代の後胤
平親王將門總州相馬の郡にありて草創せられし所也
朱雀院の御宇天慶三年に勅命の事ありて俵藤太秀
郷がために將門誅せられたりこれによつて堂塔佛閣
ことごとく大破に及びながら狐のかくれ家となり
兎のすみかとなり年々の草のみ茂りてまうでくると
もがらも絶はてたり爰に妙心寺の派下覺印長老こゝ
に住しいくばくならずして地をうつして湯島のかた
はらにおもむかしむ東照大權現御在世の時此所を
めぐり見そなはしたまひ住僧の名はいかにと尋ねた
まふに覺印とこたへ侍べり權現のたまはく名は聞及
びたりまことに學道の善智識なりこの寺に住せらる
るとは夢にもしらざりしとて大に尊重ありけりこれ
よりその名たかくやゝその道遠くつたはりて寺院宗

流相續す明暦丁酉正月十八日の回録に堂舎ことごとく
く焼はろびけるをおなじき年の六月に將軍家の鈎命
によつて地を淺草にうつされかたのごとくの堂舎を
かまへたり

法の舟いま漕いたすかいせん寺

向上のいちろをす人もなし

淺草

藥師

藥王山醫王寺東光院は慈覺大師の御草創として顯密
二教ともにひろまり台家一百八箇寺の惣本寺なり本
尊は春日の御作として東方淨瑠璃世界の教主藥師醫
王の形像なりそのかみ太田の持資入道道灌この御本
尊をあがめ奉り江城の鬼門にたてゝ利生のまもりを
あふがれしに東照權現この城におはしましける御代
にも猶あがめたまふ古しへにこえたまへりその時
院主におほせて御殿中にして毎年の正五九月には大
般若を轉讀せしめて江城長久の御祈禱ありけりその
ときは今の常盤橋の北の地に有けるを江城月をかさ
ね日を追てにぎはひさかえたまふによつて寺を傳馬
町に引うつされたり寺院いらかをみがき樹木梢をあ

らそひけるを酉のとしの回録にこと／＼く焼ほろびてわづかに本尊の薬師と智證大師御作の不動尊ならびに雲慶のつくれる彌陀如來の尊像のみのこらせたまふこの時にあたつてまた寺地を淺草にうつされ自他宗の寺院おなじくうつされて新寺町と號することさらに當寺はかたじけなくも一品尊敬親王すなはち山門無動寺の松林坊賢海法印におほせて寺院を再興せしめたまふまことに十二願王の威力廣大にしてあまねく色々有界の衆生を利やくしたまふ顯には衆病こと／＼く除き隱にはあらゆる業煩惱の痼疾をいやしたまふすべて現世後世二世の悉地をまんぞくせしめたまふ事しかしながらこの本尊の大悲なりなむ薬師いやさせたまへ堪かたき

貧のやまひのはやる世の中

淺草
清水寺

江北山清水寺は人王五十三代淳和天皇の御宇天長年中にあたつて慈覺大師いまの江城の北のかたにをいてひとつの勝地を求めて天台法流の一院をこんりうしたまひすなはち御自作の一刀三禮の千手觀音を安

置して末世の衆生のため國家安全の御いのりをなしたまふこの故に名付て江北山寶聚院清水寺と號せらるそのかみは佛かくいらがをみがき坊舎軒をつらねまことに奇麗はんじやうのみぎり也けるを年さり年來り星霜かさなるまゝに天變地妖はなほだおほく漸やく人まれにして堂塔やぶれかたふき坊舎くちたをれたりそれよりこのかた寺號院號もとなへ失ふて世にしる人なしこゝに當代三世以前の師を慶圓法印と名つくこの人すでに出家してよりながく名利の思ひをのがれとこしなへにまことの心ざしをおこしあしたには五種の妙行をつとめて業としゆふべには觀諸法空のゆかに座しておこなひとすさらにおこたることなく又ものうきおもひをわすれたりある夜の夢に齡八旬ばかりの老翁忽然としてきたりたまひおもてに笑る色をあらはし慶圓にかたりてのたまはく我はこれ當寺しゆこのあるじなり汝しば／＼わが名をとなふねがはくは此寺をさいこうして我にあたへよとかたりたまふと見て夢はすなはちさめにけりまことにあらたなる御靈夢のつけ心肝に銘してこぼるゝ涙は雨のごとしされども心にのみこめて人にかたる事

なしこれ世の人かならずうたがひをおこしまことし
からぬ靈夢かなどあざけりそしらんことをおそるゝ
がゆへなりそのゝち文祿年中にいたりて比叡山にの
ぼり正覺院の探題豪盛僧正にまみえたてまつりむさ
うの事をかたり出しすなはちふたゝびいにしへの寺
號院號山號をたてゝ江北山寶聚院清水寺と號すそれ
よりこのかた大悲普門の月影は清淨信力の水にやど
り圓通自在の花房は渴仰歸依の梢に薰す千手千眼の
妙相はあまねく定業亦能傳の利やくをしめし三十三
身の應用はひとしく弘誓深如來の願德をあらはせり
日月いまだ大地におちす弘法いまだ龍宮にかくれず
闍提救世の御はうべんいかでかむしかるべきや
たゝたのため千手のちかひろければ

かれたる木にも花さくといふ

淺草

誓願寺

此寺そのかみは相模國小田原にあり見蓮社東譽上人
の開基なりそのころ上人夢想の事有て春貞といへる
僧武州の秩父より御長三尺の彌陀の形像をより來れ
りすなはち當寺の本尊とせらるゝこれ春日の御作な

りまことに殊勝の靈佛奇特の尊容也見ればますゝ
たうとくおがめばいよゝゝありがたし萬字のむねの
あひだには種智圓明の月のひかりをかいやかし千輻
のあなうらのしたには庄嚴端正の花の匂ひこまやか
なり法の雨とをく三界の涸渴をうるほし誓の網ひろ
く四生の沈溺をすくふしかるに京の誓願寺は奈良の
都に開基して平安城に引うつさるいま此ところの誓
願寺は小田原の縣に開基して武江城に引うつさる本
尊はおなじくこれ春日の御作なり一稱一念の信力に
依て十纏十使の罪惡をめつし三輩三心の行者をむか
へて九品蓮臺の往生をとげん事西都東關いかでかへ
だてあらんや東照權現御在生のととき小田原より本誓
願寺にうつされしを酉のとしの回録以後この地にう
つされたり火難すでに當寺に及びけるときに本尊に
奇特の事おはしましけるとかや

釋迦の鍵にすくるゝ彌陀の利劍とて

はかねをならす誓願寺かな

江戸名所記卷第二終

江戸名所記第三

神田

天澤寺

天澤山鱗祥禪院はそのかみ寛永二乙丑年征夷大將軍家光公の乳母稻葉氏春日の局心ざしをおこして武州江城の東北湯島の郷にこれを建立しはじめて報恩山天澤禪寺と號して前の妙心寺渭川の劉和尚をまねぎて當寺の開山とせらるこの師後に本寂定禪師と謚號あり寛永十一年甲戌大將軍家光公すなはち豊島の郡柏木村にをひて一百斛の田地を御寄附ありて齋料となし給ふこと更に仰せのむねありて天澤山鱗祥院とあらため給へりしかるに本願の主春日の局は寛永二十年みづのとのひつじ九月十四日に往生の素懷をとげらる家光公御歎き淺からずしてその忌日にあたるごとに無遮の大會をとりおこなひ諸僧をくやうし布施し給ふそのうへにまた駒込村にして二百斛の寺領をよせて佛寺ねんごろにいとなみ給ひけり萬治元年

九月六日唐僧隱元禪師攝州の普門寺より江府に來り給ふときに大將軍家綱公の仰によつて此寺に逗留し給ふ事七十餘日なり貴賤道俗まいりつどふておがむもの市のごとし殊勝明德の高僧見性悟道の名師なりければ山の手の僮奴どもは腸もちの達磨といひけるとかやかの春日の局の一周忌には禪尼の孫稻葉美濃太守尊靈追福のためにとて太唐印本の一切經を寄進して天澤山永代の法寶とせられたり

かれはてし佛の種を天澤の

みのりの雨にうるほしそする

淺草町

西福寺

そのかみ東照權現駿府の城におはしましける御時に心蓮社貞譽上人頗故を御歸依の僧として開基し給ふ寺なり本尊は安阿彌の作殊勝端嚴の彌陀如來なり後に江府にうつされていま此ところにおはします辨財天をもつて鎮守とせらるされは本尊はこれかたじけなくも六八の願主としてあまねく五々有界の衆生をみちびき四八の金容をみがきてはひとへに三々品位の行者をむかへ給ふ鎮守は又これ四王三十二將の隨

一として和光利生の德澤をほどこし辨財無窮の神力をもつてはせつぽう化導の大悲をあらはし給ふこのゆへに竹生の花の梢には匂ひを西都の風にほどこし榎島のしきの月の色は光りを東關の水にうかぶ今又あとを此地にたれてけちえん利生の素懷をあらはし給ふとかやまた一軀の洪鐘を一樓にかけらる蒲牢一たびほゆればすみやかに無明のねぶりをおどろかし鯨聲二たびひひけはたちまちにばんなうのゆめをさます然るにこの鐘樓はやねなし藤の林鐘の龍頭にしげりまとひて花さく折からは又一しほの興をもよほす

つき鐘のりう頭に藤の咲かゝり

はあをたるゝは風やひきけん

森田町

大六天

淺草森田町の大六天はその縁起しりがたし古老のいひつたへしは開基よりこのかた八百餘年に及ぶといへども年久しき事なり代々の兵亂に縁起をとりうしなひ侍べり神事は二月九日なりといへりをよそふるき社頭佛寺の縁起をとりうしなひたる事諸國にためしおほしいにしへ元明天皇の御宇和銅六年に六十餘

州の風土記を撰せられたりし全部六十六卷ありけるを世々の兵革火難にみな退轉して今わづかに十餘卷殘れりといふされば此故に來歴絶たる名所舊跡諸國におほしとかや舊記記録の類の絶る事はみな火難に過たるはなし大事の諸書器物などはよくまもるべき事也

大六天とは摩醯首羅王まがいしうわの尊像にや此天は欲界第六の他化自在天のあるじとして三日八臂の形を現じ九頭の大牛にのりて神通自在變化無方の威をあらはし三千世界に飛行し欲色二界の中間禪を修し大樂圓滿の果報をうけ三千界のあらゆる衆生をわがけんぞくなりと思へりこの故にふかく世間をまもり給ふ上々品の十善の戒力により一無遮の大功德にひかれてつるに菩薩地の果位にのぼるべきなりこの堂の南方には楞の木二本あり

天しやうよりふらさかりけるたけ自在

たいろくてんや茶の湯者の神

淺草

焰摩堂附十王

堂は實形づくり本尊は焰摩王左に地藏右に三津川の

老婆あり本堂のひだりのかたに不動堂あり焰摩王は人死して五七日の斷罪をつかさどり淨玻璃の鏡檀陀幢みこの王宮にあり俱生神司命司祿神おなじく爰にあつて衆生の罪の輕重をかながへらる地蔵はこれ焰摩王の本地也本地の大慈悲は柔和端嚴の相をしめし變化の大慈は忿怒強盛のかたちをあらはし本迹の方便さま／＼なる事はともかくにも衆生利やくの善巧也嬬は又死出の山のふもとと三途川のほとり衣領樹のもとに座して罪人の衣をはぎとり木の枝にかくるこれ焰羅王の妹なり尊衣婆と名づくるよし經にとかれたり衆生更に慙愧の心なく放逸にして一生を過し罪業にひかれて爰に來るこの故に一重の衣を剝とり慙愧の心なき事をあらはす又十王といふは初七日より第三年まで十三佛の變作として十大王のもとに亡者をうけとりて罪利のしな／＼を斷給ふと也しかるに此焰摩堂はいづれの時いか成人の草創せられしやらんと今の留守居に尋ねしかば耳なし山の風情きかぬかほしてとへどこたへぬくちなしのはなにかけて居られたりせめて愛摺もあるべき事ぞかし不通の田舎人かなと見る人きく人をこがましく思ひけりさ

だめてこれは縁起來歴もなく留守守も子細をしられぬにこそあるらめ又さらばしらすはしらすともこたへよかし知事はしれりとししらする事はしらすとずるは道なり知たる貌をしてとへどいはぬは痴者ならずやすべて神佛の事は縁起來歴あるをばあきらかにしらしめて人の信心をすゝむるこそ大乘修行の出家大悲濟度の菩薩の行なれ秘していはぬもことによるべし口傳相承は又これ人の信を生ずる方便なり焰摩堂の來歴を秘していはれざる事心得がたし心ある御かた／＼は寺院社頭の縁起をみせられ又はかたりきかせ又はうつして渡されしに此堂にかぎりていとはしたなくいはれたりこの堂の事人にかたらずとも事かけず物のともしきこともなしなど申されたり若し小知寺領のあるにはこりて世の人ひろくしられずともわが身の渡世にはこと關ずと思はれんはいとをこがまし寺院社頭はわが身過のためと思はんは大なるひが事なるべし現には國家安全のため當には衆生利やくのためなりそれに寺社の僧法師禰宜神主は佛神につかうまつりて勤行給仕をいたし又は學徒をつとめて法門をときては檀那にしめし神理をのべて

は願主に教へおなじく信をおこさしめてその感應利生を成就せしむ僧神主は田つくらす蠶やしなはず飢寒にをよぶべきものなり寺社の破損を修理すべきちからなきによりて此ために檀那は僧に布施し國主は寺社に領田をもよせらるゝ事也佛神の供物齋料布施物をいたづらにとりくらひてその職にをこたり放逸文盲にして菩提心もなくはいかばかり願主は信ありて僧神主をたのむとも祈禱も佛事も神佛には露ばかりもといくまじやといへばかたはらなる人のいはくさだめて來歴もしらず縁起もなきが定であらうといふた

この堂の留守居はゑんまわうへいな

しやうはりものゝ鏡なるへし

淺草

駒形堂

駒形堂は淺草寺の門口にあり馬頭觀音を安置せらる安房の大守平の公雅の立られし所なり梵音海潮のひびきを淺草川の波にあらはし定業能轉のちかひは駒形堂の軒にしめす大悲の利生あらたにして乾けるかはね重ねて突づき枯たる樹ふたゝび花さくまことに

しゆせうの事ならずや諸人こゝにして手氷をとり口すゝぎ身をきよめ心をいさぎよくなして淺草寺の本堂にまつる淺草川の舟つきにしてかの吉原にゆくものも猶こゝを舟つきとさだむ前に茶屋あり此川の鯉は名物にてその風味すべて淀鯉にまされり此川ばたにして賣とかや

むさしあふみさすかにかけて駒形の

本尊をとほゝ馬頭觀音

淺草

文珠院

この寺は高野山行人方の頭なり堂は東むき本尊は不動明王矜伽羅勢多迦の二童子は左右の脇士なり本尊は明王にして院號は文珠院といふ事明王の利劍はこれ文珠の智鉢なり種字に付て故ありこの智鉢はすなはちこれ般若究竟の實智理趣圓滿の妙道なれば不動文珠は別鉢一理の故に文珠院といへるも此義なるべしやといふ又かたはらなる人のいはくさもあれいか成故にや此寺には常に公事訴訟の絶ることなし五瓶の智水を墨にすり三部の秘經を紙として目安を曼陀羅のごとくにかき學寮方と胎金兩部にわかれて對決

をいたす事度々也勝負はしらず理非はわきまへがたし
 しさしもむづかしき事也とかたる傍なる人のいはく
 むかし如來の滅後に上座大衆の異議をたてせめしよ
 り拏珠彌國なしゅみこくのあらそひおこりそれよりこのかた末世
 にいたるにをよんで我執漸々にさかりになり僧伽和
 合の道にたがへり諸宗みなかくのごとしすべて高祖
 大師も守敏僧都とあらそひありし物をといへば又あ
 る人のいはくそれは佛法興隆のために外法成就のい
 ましめをあらはし給へり釋尊の九十五億の外道をと
 りひしぎ給ひしがごとしこれさらに我執にはあらず
 すべて我執自己のためならば百たび戦かふて百たび
 勝ともしかじ一たび忍ばんにはといへるは法句經の
 誠文なり戲論諍論の所にはもろ／＼のぼんなうおこ
 るととかれしは寶積經の教門なり佛法僧の三寶は德
 たかくしてめでたければ世の福田とほめられたるを
 させる事もなき所に是非人我の相をおこす事はまこ
 とに如來の遺誡にそむくにあらすやその比の落書に
 かちまけの理非をばしらす公事沙汰に

獅子のはかみをする文珠院

角田川すみだがは

此川は武藏と下總のさかひにありて下總の名所也近
 衛院藤原信尋卿の歌に

來てみれば武藏の國の江戸からは

北とひかしのすみた川かな

玉葉集後二條院大納言典侍の歌に

こととへとこたへぬ月のすみた川

都の友と見るかひもなし

又新拾遺集羈旅部御製の歌に

かきりなくとをくきにけり角田川

こととふ鳥の名をしたひつゝ

伊勢物語に業平のあづまにくだりし時に名にしおは

ばと詠せられし都鳥の歌は此川にての事なりされど

も宮古鳥の名はこの河のみにもかぎらず

故郷をこふるね覺のうし風に

聲なつかしき宮古鳥かな

と詠せしは相模とかやいへる女房の播磨にくだりて
 しかまといふ所にして都鳥の鳴を聞てよめりといへ
 り又俊賴朝臣つくしへまかりけるに和田の三崎とい

ふところにして都鳥のみえければよめる
名にしおはゝしらしなわたの都鳥

こゝろつくしのかたはとふとも

又安嘉門院四條あづまにくだりしに鳴海の渦を過る
に鹽干のほどなればさはりなくひがたをすぎてゆく
すみだ川のわたりにこそあれと聞しかど都鳥といふ
鳥のはしとあしとあかきはこのうらにもありけりと
よめる

ことゝはんはしとあしとはあかゝりき

わかこしかたのみやこ鳥かは

しかれば都鳥はすみだ川にもかぎらずいづかたにも
ある物とおぼへたりうつくしき鳥なれば網にてとり
つゝ籠にいて飼侍べるに蛤を餌にするとかや
此川の岸ちかく梅若丸の墓ありしるしの木は柳なり
三月十五日は縁日也不斷念佛の道場として諸人この
寺にまうでゝむかしの事を聞つたへみなあはれをも
よほし歌をよみ詩をつくり侍べり一興ある景地たり
御茶屋あり將軍家をりゝ御遊覧おはしますと也
このころ五智の如來を造立して寺の本堂にをかれ箔
の觀進ありさだめてすみやかに成就すべし五智の如

來堂を建立せられ侍べらば又一しほにたうとかるべ
しや梅花の墓所を見て

梅若ときくから口はすみだ川

つをひくほとによき子成けん

すみだ川あはれむかしの跡とへは

名に流れつゝいまも聞ゆる

西葛西

淨光寺藥師

西葛西木下川村青龍山淨光寺藥王院は慈覺大師の開
基なりそのかみ大師この所をめぐり給ふときひとつ
の青龍あつてすみけるを御らんじてこれまことに靈
地也とて一字の佛殿をはじめ給ふ本尊はこれ傳教大
師の御作藥師醫王の形像なり靈驗あらたにしてい
りをかくるともがら利生むなしからず古しへよりこ
のかた毎月八日ならびに元三の朝には本尊の御前に
龍燈あがる事時々これをおがむ人すくなからず本堂
は東むきなり堂の東北に鐘樓あり東のかたには山王
權現鎮座し給ふ東南の方には辨財天南のかたには白
鬚大明神おなじ所に稻荷明神おはしますをのゝ和
光の影をうつしおなじく結縁のめぐみをほどこし給

ふつゐに不改の古跡たるをもつて東照權現御在世のとき御朱印の田地を御寄附有けるより代々につたへて今に改られす

咲をむる桔梗の花はをのづから

藥師の瑠璃のつばみなりけり

葛西郡

東照院 若宮八幡

古しへ右大將賴朝卿文治五年己酉秋七月に奥州の秦衡を退治せんがためにはつかうし給ふ七月十八日にまづ伊豆の山の住侶専光坊の阿闍梨をめて奥州征伐のためにひそかに御立願の事ありその次の日十九日すなはち軍の御かど出あり先陣は畠山の次郎重忠なりその行粧は人歩八十人をもつて先にうたしむ其中に五十人には征矢をもたしめ三十人には鋤鎌をもたせらる次にのり替の馬三疋次に重忠次に從軍の騎馬五騎を打する長野の三郎重清大串の小次郎本田の二郎榛澤の六郎柏原の太郎これなりおよそ鎌倉出の御勢わづかに一千餘騎也しかるに近國他國の軍兵ども此よしを聞つたへて道をひらき地を平て相待つゝ催促に及ばずしてをの／＼はせくはゝる道の次に八

幡宮の神前をとをり給ひけり此道今の世までも人の往來たゆることなしさるほどに賴朝卿この神前にして馬よりをり禮拜してひそかに源家はんじやう武運長久の御祈誓ありもし今度のいくさに打ち勝ち本意をとげなば伽藍を建立して奉るべきよし御立願あり手づから榎の策をもつてさかさまに地にさしてわれ軍にかつならば此策に根を生じてさかゆべしこれ後のせうごなりとちかはせ給ふその策生つきてさかさまに枝をたれ葉をならべてしげりあひ今の世までものこれり又道のかたはらに篋あり朝露ふかくして諸軍勢の草すりをぬらしけり賴朝馬上にしてこれを見そなはしての給はく天地のあひだ萬物みなをの／＼靈あり若この竹むらに靈あらば今此長より上には生ふることもあるべからずとて鐙をもつて露をはらひてとおらせ給ひけりこれより猶今の世までも竹のはやし鐙の上をかざりとしてそれよりたかく生のほらすまことに右大將家の武徳たかうして神明に通じける物也つゐに奥州をおさめて還陣ありてのち奇嚴嚴淨の社頭をたてられしかども年代とをくへだゝりて破壊せしを中ごろ再興ありけるに時うつり世かはりて

瘴霧軒ををかし淫雨扉をあらひ春の草年々に生じ秋の蔦月々にしがり垣くづれ階くちて狐兔のすみかとなりけるを郡代前の伊祭の備前の太守この由緒を聞て甚觀喜しあらたに八幡宮を附興し給へり朱の玉籬重ねてひかりをあらはし錦の御帳かけまくも利生あらたなる神徳をほどこし給ふものなり

いのれたゝよはひをのふる鶴か岡に

こゝもかはらぬ若宮の神

東葛西

善導寺

小松川善導寺は本願寺の末流を汲て一向專念のをしへをあふぎ難行難修の雲は一念發起の風にはらひ自力疑心の垢は三信相應の水にあらふ二雙四重の春の花は即得往生の床のうへに匂ひ一十八對の秋の月は平生業成の窓のまへにはがらかなり攝取不捨の現益をたうとみ住不退轉の勝利にあづかるこの故に念相續の觀喜心にもよはされて佛恩報謝の稱名をつとめ眞實報土の悟入を待とかや當寺に中將姫のをり給へる彌陀の形像とて一幅あり總の地はこれ藕はすの絲也如來の御首は中將姫の黒髪にてをり給へりといひつた

へたり毎年四月十五日は中將姫の忌日なればかの形像をかけて諸人におがましむそのかみ盜人ありてこれをぬすみてにげんとするに門外に出やらす立すくみになりてとり返されたりまことに奇特の事也とかや

鶴山ひかりやまに中將姫のをりしといふ

あみだは蓮のいとゝたうとき

牛島

業平塚

そのかみ在原の業平朝臣は二條の後の事によりて東のかたにくだり給ひしとかや京やすみうかりけんあづまのかたにゆきてすみどころもとむとて友とする人ひとりふたりしてゆきけりと伊勢物語にかきたりある説に業平は東國に流され給ひしといへり京やすみうかりけんとかきたる筆勢は流されたるにはあらず四條大納言匡房卿の江次第の第十四卷にかゝれしは業平そのころは左中將にて二條の後を犯し奉らんばかりことに出家せられしがそののち髪をはやさんために陸奥國の八十島にいたりて小野の小町が體

秋風のふくにつけてもあなめく

といへる聲の聞へしかば草むらをわけ／＼て聲をもとめて入てみれば髑髏の目の穴より薄の生ぬきて風にもまるゝ音也ければ業平あはれがりて下の句をつけて

小野とはいはし薄おひけり

と詠せられしかのどくろはすなはち小野の小町の小町にて侍べりしといへり小町が事さだかに知がたし京の北山なる小野といふ山里にて死けりとて今も石塔あり小町は狂氣しけるよし陸奥國までも狂ひくんだりし事もや有らんしかるに業平すでに都にのぼらんとて舟にのり給ひしが此ほとりの浦にて舟損じて死給ひしを塚につきたりといへり伊勢物語に東にくだりしとはありてのぼられしとはかき侍らず又つゐにゆく歌はありていづかたにて死なれしといふ事もみえずさりながらかやうの事はしゐて吟味するに及ばすといへり三代實錄には元慶四年五月二十八日辛巳從四位上右近衛權中將兼美濃權守在原朝臣業平卒時年五十六としるせりしかるに牛島の古老の傳に此所にして舟損じて死なれしを塚につきこめたりその

在所の名も今に業平村といふ塚の形ちすなはち舟のことくにて殘れりと也

なきあとのしるしはこゝに在原や

塚のかたちも舟のなりひら

西葛西

本所太神宮


安徳天皇の御宇壽永年中に本所の郷人あまた夢にみるやう伊勢太神宮靈空をかけりて飛來り給ひ虚空のあひだには又大光明かゝやきひかりのうちにけだかく微妙なる御聲ありて我此土安隱天人常充滿といふ法花經壽量品の文をとなへわれはこれ伊勢の神明にておはしますと見て郷中の人がひにかたりあはするにすこしもたがはずまことにきとくの御事也とてやがて宮所をかまへ伊勢太神宮をくはんじやうし奉りけり神明なを佛法をたうとみ給ひ本地和光の内證をしめし給ふもの也それよりこのかた星霜うつり年月をかさぬといへども古にしむかしのあとたらず利生あらたにおはします事寧をさすがことくなり

あまてらす神のめくみのかはらねは

こゝも五十鈴の本所なりなり

牛島

太子堂

西葛西のうち牛島中の郷の太子堂はこれ慈覺大師關東修行の時にあたりて此堂をたて給へり又ある説に慈覺大師は生國は下野國都賀の人なれば入唐歸朝の後本國の大慈寺にまうで來り給ふそのをりふし此所に立より此堂をつくり太子の像を安置し給へりとかやこの像は太子みづから作給ふところ也文祿年中のことなるに此堂のほとりより夜な／＼ひかり物出たり諸人おそれまどひけり里人の中に心たけきものの光り物の出る所をよく／＼見といけ夜あけてのち其地を掘たりければひとつの石塔を掘いだす石のおもてきり、さくの彌陀の三尊の種子ありそのには  したにも文字ありとみへしがきえて知がたし文明二年庚廣とありさのみに久しき石塔にはあらずとおぼへ侍べりこれを掘出して立をきけるよりして光物二たび出ることなし石塔のひかり出ける事うたがひなし又天文のころ此郷炎上して火すでに太子堂にかゝりしに太子の木像は堂をとび出て草むらの中に立ておはしましけるを見つけ奉り

て又おさめいれまいらせ堂を立て安置し奉る今に及びて年久しく相續して諸人あゆみをはこび奉る誠に本佛朝法最初の開弘ひとへに此太子の御力なれば御恩徳の高き事山のごとくふかき事海のごとし心あらん輩出離生死をもとめん人いかでかおろそかに思ひたてまつらんされどもことの外にあれゆき侍べるこそ悲しけれ

あれはてゝなにとしやうとく太子堂

もりやくるらん雨のふる日は

深川

泉養寺 附神明

醫王山泉養寺はこれ天台宗として本尊は藥師如來なり本山の根本中堂は醫王善逝安置のところに大悲あまねくおほひては藥草藥樹の甘露をほどこし衆病悉除の利益をあらはし徳用とをくつたはりては不老不死の法味をひらき壽命長遠の果報をあたへ給ふよくもろ／＼のわざはひをはらひあらゆる功德を成就せしむ十二願王の威力まことに不可思議なりいはんや當寺はこれ玉泉の流れ清くしてとをく月氏の波を湛え台嶺の雲おさまりてあらたに日域の光りをかゝやか

し一乗どくじゆのゆかのうへには一心敬禮の聲すみ
六根しやうくの窓のまへには三諦圓融の觀あきら
かなり又寺を去事四町ばかりにして松の林の中に神
明の社あり爰も猶當寺の境内なり祭禮は九月十三日
也そのかみ慶長年中の秀順法印當寺の開山として寺
社を草創あり東照權現の御墨印あり駿府より爰に引
うつさる和光の月は深川の水にやどり利生の花は江
府の梢にあざやかなり神風や伊勢の國渡會の郡五十
鈴の川の川上に千木たかくあらはれ給ふかの廣前に
ひとしく社は萱ぶきにしてかつを木もまがらず人の
心の直ならんことをしめし給ふ

御裳溜の流れにやどる月影を

わけてすむなる深川の水

江戸名所記第四

廻向院まがうゐん

この寺の事は近きころの草創として物のあはれをとどめし也そのかみ明暦三年ひのとり正月十八日辰の廻ばかりの事なるに乾のかたより風吹いだししきりに大風となり塵ほこりを吹あげて中天にうづまきわたるありさま雲か煙かとあやしむ夜はすでにあけながらくらやみのごとしかくて未のこくにうつる時分本郷の四町目本妙寺より失火もえ出てくろけぶり天を掠め寺中一同にやけあがる折ふし魔風まふう十はうに吹まはし湯島をさしてもえ出たり旅飯屋町より堀をとびこして駿河臺にいたり大名屋形數百家を焼はらひ鎌倉がしに焼とをりそれより西風になりさや町へ焰とびうつり海邊にやけ出たり數萬の男女にげまどひ靈岩島へかけこもるにほどなく靈岩寺の本堂數箇所の坊に火かゝり一同にもえあがり車輪はどなる

焰風にはなされて雨のごとくとびちり大勢あつまり居たるうへにおちかゝりければ頭の髪にもえつき袂の内より焼いでまことに堪がたかりければ諸人あはてふためき火をのがれんとて海邊をさしてはしりゆき泥の中にかげこみけり寒さはさむし今朝よりして食はくはず水にひたりて立すくみ火をばのがれけれども勢力つきはてゝ大方凍死けり猶それまでもにげのぶる事のかなはぬものは焰五體にもえつきて焼死すおめきさけぶこゑ物のあはれをとめたり水火の兩難に死するもの九千六百餘人もその暮かた西風いよくはげしく吹てほのほは十町廿町をへだてたる所にとびつきもえつき大名屋形神社佛閣町人の家ども雲煙とやけあがる老若貴賤資財雜具をもちこびて西本願寺の門前にあつまる所に旋風おびたいしく吹まきて本堂寺家數箇所一同にやけあがる山のごとくつみあげたる道具に猛火もえつきければあつまり居たる諸人せめていのちをたすからんとて井のもとにとび入溝の中にゝげ入けるほどに下なるは水におぼれ中なるは友にをされうへなるは火にやかん爰にて死するもの四百五十餘人なり又淺草口の惣門をさ

してにげ出るともがらく千萬人とも數しらずかゝる所にいかなる天魔のわざにや舛形の惣門をひととちたりそれはおもひもよらず諸人跡より車長持革籠等を引かけもちかけ押來りぬ門の際なるものどもいかにもして門の關貫引はづしてひらかんとすれども家財雜具をいやがうへにつみかさねたればこれにつかへて開れず前はつかへてうしろよりは大勢せきかくるそのあひだに大名屋形卅五箇所寺院百廿箇寺一同にもえたちてあつまりせきあふ諸人の上に三方よりほのほを吹かくる數萬の男女たへかねて舛形の築地を堀の中へとび入り手あしを打をりかうべをくだき跡より飛人にふみころされ爰にて死するもの二萬三千餘人なりとかくするあひだにさしも重々にかまへたる見つけの櫓に火かゝりてくづれおつればにげをくれたるものども前後の火につゝまれてやけ死す馬工郎町横山町の四方にかさなりふして算をみだせるがごとしその夜の亥のこくに御倉の米に火かかり爰にあつまり居たる人七百餘人焼死すすべて牛島新田にいたるまでみなやけほろびて寅の刻ばかりに火事やうく静まりぬ

夜すでに明ければ正月十九日也四角八方におちゝりたるものこゑにたづねよばふ焼死たる人は頭髮みなもえて尼法師のごとしくろくすほりにこがれたをれてそれともさだかにみしりがたしやけ残りたる人は祝事してよろこぶ所に十九日巳のこくばかりに小石川新鷹師町より火出てしかも北風はげしく車輪ほどなる煙子くろけぶりの中にとびちり十町二十町の外にもえわたり傳通院をはじめて廿餘箇所一同にやけあがり本鷹師町より殿守二三の丸諸大名の屋形十五箇所常盤橋のうち二十箇所むねとの大名二十六箇所小名の屋かた十七箇所すべて南北七十二箇所數萬間前後十五町があひだ一同にもえあがりほのほは雲をこがし煙は雨のごとくやけくづるゝ音は百千のいかづちの鳴落つるが如し申のこくより北風西になをりていよくはげしく吹て紅葉山西の丸は辛じて残りたりやようすがしへ火うつり南北二十餘町一面に成て町屋に押出つゝ京橋中橋の町人どもこれはこれはいふほどこそありけれあはてふためき鍛冶町長崎町前後ひとつになりて男女老少にげ出つゝいやがうへにせきあひ車長持革籠その外資財雜具を辻小

路に山のごとくつみすてたりければ諸人更に心のま
まにとをり得ず諸大名家のはなれ馬とおとこ女打ま
じりもみ合こみあひける内に猛火さきくにもえわ
たりしかば京橋中ばしを初めて四方の橋ども一同に
やけ落たり前後の火にとりまかれたるものども今は
のがるべきかたなく北へみなみへあがきめぐりをし
あひけるうちにほのは五體にもえつきて打たをるれ
ば後なるものどもは將棋だをしになり其上にほのは
おちかゝりけぶりうすまきておめきさけんでやけ死
するものをよそ二萬六千餘人南北三町東西二町があ
ひだにかさなりふす猶みなみは新橋本挽町ひがしは
材木町より大名の倉屋敷にとびわたり十六箇所一同
に焼くづれ鐵炮津に吹つけて酉のこく計に海邊にし
てやけとまる所を戌のこくばかりに糝町五町目の在
家より別に失火もえ出で西風ますく吹しほり大名
屋形數十箇所をやきはらひそれより又北風になほり
しかば紅葉山西の丸は残りぬみなみのかた大名小路
二十餘箇所櫻田の町屋に出で愛宕の下大名小路八十
五箇所海邊の屋形十八箇所増上寺にいたるまでその
夜の丑のこくばかりに炎上す増上寺よりみなみへ十

一町芝口三町目濱手にてをのづから焼とまる本郷よ
りこれまで六十餘町四方十餘里廣野となるすべて町
中五百餘町大名小路五百餘町屋形五百餘家所小名の
宿所六百餘家御城殿守二三の丸櫓三十餘箇所江戸中
の橋六十箇所僅に淺草橋一石橋ばかりのこりぬ土藏
の數九千餘庫神社佛かく三百五十餘宇やけ死するも
の十萬二千百餘人也この死骸ども一類けんぞくもか
はりはてたるありさまなれば見しらす辻小路堀溝に
算をみだしてありけるを河原のものにおほせて武藏
と下總とのさかひなる牛島といふ所に舟にてとりは
こび六十間四方に堀うづみあたらしく塚をつき増上
寺より寺をたてられ諸宗山無縁寺廻向院と名づけ諸
寺の僧衆あつまり千部の經をどくじゆしそれより不
斷念佛の道場となれりまことに一業所感のものども
諸國よりあつまり來り同時にやけ死ておなじ穴にう
づまれ一所の土となりけるも過去世の因縁あるべし
や江戸中の男女老少あるひは子におくれあるひはお
やにはなれまたは妻にわかれ夫をさきだてつれなく
生残りありがひもなきいのちをながらへ物うき歎き
にしづみその日になればかの塚にまうで五輪卒都婆

をくやうし花をたて香をもり水をたむけ靈供をそなへ悲しみの涙をながすもの高きいやしき市のごとしある發句に

無縁寺の塚やみのりの花のえん

法界に手向る有縁無縁塚

不斷念佛をみな廻向院

三俣

こゝを三俣と名づくる事は淺草川新堀靈岩島この三方に相通じて水の派わかれながらゝ所なればかくいふなりまことに絶景のところなり北には淺草寺深川新田東えい山まのあたりにみゆ西のかたには江城愛宕山みゆたつみの方には伊豆の大島ひつじさるのかたには駿河の富士山ひがしのかたははるかに安房上總にうちつゝきてみえたり何よりおもしろきは八月十五夜の舟あそび也世の好事の人大名小名そのほか貴賤上下のともがら舟をかざり幕はしらかし三俣より鐵炮津をさしてをしいだすあるひは今夜一輪みたり清光いづれの所になからんとうたひ或は闇々としてかいきやうをはなれせん／＼として雲衢をいづ

と吟じ又は笛太鼓はやしたてゝ聲をはかりにとよのき又は三味線鼓弓引ならして歌うたひほそらかなるこゑを帆にあげて海づらにこごうかぶる常はいましめらるゝ事なれど今夜ばかりは三俣に花火を出し春宵一刻直千金の心地ありしだり柳糸櫻牡丹花しら菊なんどさま／＼也月と花とをならべてみる舟のうへの眺望まことにこゝろも言葉も及ばれず月の名どころは多き中に須まあかしはことさらその名たかけれども三俣の月にはよもまさらじといへり近比の發句に

三俣は月見の舟のいかりかな

といへり近代秀逸の名句也と人みないひあへりさりながら舟の碇は四俣なる物なれば三俣は舟のいかりといへる事いと口おし

三俣は月のともえや波の文

といはまほし

望月と花火と舟の三俣は

かなえの足のいつれまされる

永代島

八幡宮

武州豊島郡永代島の八幡宮はそのかみ寛永元年のころ長盛法印その年すでに七旬にあまれりある夜の夢に八正宮をおがみ奉る夢中に託宣してのたまはくわれ永代島に鎮座あるべしとかくのごとく數度の靈夢をかうぶるこれによつてみづから信をおこし一社の宮所をたて八幡宮をくはんじやうすおなじき八年にあたりてやうやく再興の本意をとげたり御神體は菅丞相の御作として中古は源三位入道賴政これをあがめ其後は千葉介の家にあがむ後に又大將軍源の尊氏公につたはりそれより鎌倉の公方基氏よりおなじく持氏公につたはりおなじく官領上杉家に崇敬ありて太田持資入道道灌ふかくうやまひあがめ奉らる本は下總の國におはしましけるを和光有縁の大悲によつて今この當社の御神體とならせ給へり伊勢大神宮春日大明神左右に相ならび給ふ八幡三所とあがめ奉る所なりおなじき寛永二十年みづのとのひつじ八月十五日はじめて祭禮をおこなひたてまつりて毎年の式とすそれよりこのかた神徳たかくあらはれ諸人渴仰のかうべをかたぶく島の内にぎはひて人の家居軒をならべたり慶安四年のころより法務貫首のおはせ

によつて宮寺となされ大榮山永代寺と號せらるおなじき五年の夏弘法大師御夢想おはしますその御告に

名にしおふひろめん法のわか家を

人のこゝろのうるほはすとも

これによつて高野山兩門主碩學そのほか東國一派の禪僧この永代島に集會せしめ一夏九旬のあひだ法談あり別に高祖大師の影堂を立て眞言三密の秘蹟を講ずそれよりこのかた神前に龍燈をあぐる事ありておがむ人すくなからずおなじき年の秋天下太平のために神前にして流鏑馬をはじむこれ鶴が岡の法式をうつす左右に假屋^{かや}棧敷をかまへてこれをみるすべて貴賤上下市をなせり萬治三年の夏御室の宮日光御社參の序下向の道に此島にまうで給ひ天下安全のため兩日のあひだ神前に御念誦をつとめ給ふ此折から兩院家の詠あり

永代のさかえ久しきこの島の

めくみたえせぬ神かきのうち

立ならふときは松も色そひて

おさまる御代は永代の寺

まことにこの島の地景は又たぐひすくなし東にはとをく安房上總の山をみやりみなみにはしな川池上もほどこかくひつじさるのかたには富士の嶽いぬのかたには江城北に筑波山ほのかにみえて興をもよすうしとらのかたは下總にうちついきするは海邊の磯ちかく鹽屋の煙立のぼり風になびくよそをひまでのこりなくみえわたるこの神徳をたうとみて參詣するともがらをのゝ利生をかうぶる事谷のひいきに應するがごとし永代島を題として諸人歌をよむその中にも

さしくれは波こゝもとに立鹽の

ひけは洲崎も永代の島

爰もまたおなし流れのいはし水

すむこゝろから永代のしま

永き代のうら吹風に霧はれて

八十島てらす月のかけかな

さればこの島すでに垂迹和光の神徳をあらはし衆生濟度のはうべんをめぐらし給ふ智者の前には本地をあきらかにし邪見の家には垂跡を現じ後世をしらざるともがらも猶いのりてあゆみをはこび因果にくら

き人もまた罰をおそれてあふぎたてまつる現生の望をこそ假のはうべんとかろしめ給ふとも出離生死をいのらんにはいかでか利生の本懷をあらはし給はざらむこゝをもつて外に三社の瑞籬をきよめ内に兩部の寶座をかまへたり八葉肉團のむねのあひだには三十七尊のひかりをかいやかし五輪成身の寶冠には八十種好の花をかざるまさに遍照舍那のさとりひらけて密嚴花藏の土にあそばしむべしと也永代島を題にとりてかくぞつぶやきける

石清水きよき流れの月かけを

わけてそてらす永代の島

兩宜町

淨瑠璃

兩宜町にはそのかみより淨瑠璃歌舞妓その外術品玉いろ／＼見物する事どもありて鼠戸をならべ太鼓をうつ貴賤老若くんじうしてこみあひをしあひけんぶつするほどに喧嘩買の奴僕ども異風をつくり馬鹿をつくして人の足をふみにじりて刀のそりをまはし鐺をあてゝはねめつけさかねだりに人をこみつけ臂をはり尻をふりて傍若無人のふるまひをいたす町人は

おそれて色をうしなひ女わらべは泣の涙をしてにげかへる事あり目付奉行人もあれど放逸無慚の痴者ながらもさして人をも切たをすか又は天下の法度をもをしやぶらばつよくいましめをくはへらるべきに又それほどの事にも及ばぬは人みな堪忍する故なるべしそのうへよき人はかやうの風をまなび給ふべき事にあらずその見る所只血氣の勇者といふべしわづかに一夫の勇なれば大將物がしらの所作にあらずやそも／＼淨瑠璃といふ事はいにしへ左馬頭みなもとの義朝の末子牛若丸は常葉腹には三男なり二條院の御宇平治元年に藤原の信賴むほんの時義朝これにくみして軍に打まけ平家すでにいきをひにのりければ義朝の子ともみな身のをき所をうしなふしかるに牛若は鞍馬の東光房の弟子となり舍那王と名づく十五歳の春のころ兄の賴朝義兵をおこすと聞て鞍馬を忍び出みづから九郎義經と名のり奥州にくだりしに矢矯の宿の長者が家に宿をととりて長者がむすめ淨瑠璃御前に忍びて契り給ひけりこの娘は樂師の申子なれば淨瑠璃と名付し也かぎりなき美人にてしかも情の色ふか／＼りければあはれなる事どもおほかりし此事を

こと葉にいひつゞけ節をつけてかたりしより淨瑠璃とは名付たり後に餘の事を作りてかたるをもまた淨瑠璃とはいひならはしけると也曲節おもしろく人形の操もめづらしく仕出し人のこゝろをなぐさましむ大薩摩小ざつま丹後掾など名のりて鼠戸をかまへ太鼓をうち日ごとにをのが營とす

氣つまりをなくさみにきく淨瑠璃は

これも樂師の御くすりかや

福宜町

歌舞妓

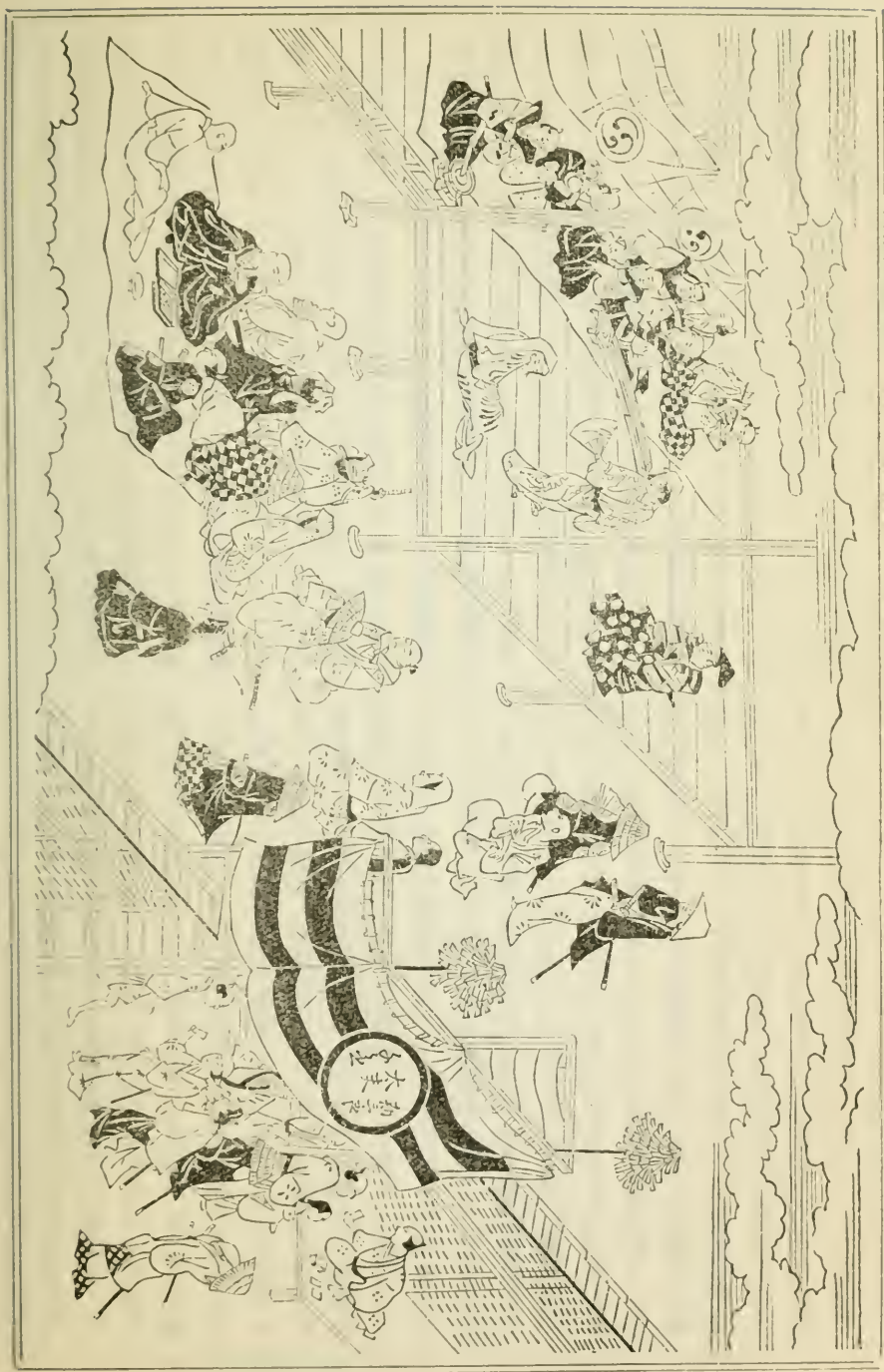
それ歌舞妓の根元は東海道名所記にしるし侍ればかさねていふも老言に似たり玄かれどもまたいはでぞたゝにやみなんもむねふくるゝ心ちしていと口おしさればそのかみは後鳥羽院の御時に通憲入道が磯の禪師といへる女にをしへてまはせけるよりおこりてあそびの女みな此風をつたへたり笛つゝみもなくて今やうをつくりうたひまひければ白拍子と名づけたり後には笛つゝみをもつて拍子をととりてまはせけり禪師がむすめ静といふしらびやうしは九郎義經の

妾なりしが義經没落の後吉野山にすてられしを鎌倉に引くだされ頼朝の御前に^にして今やうをうたはせ舞をまはせられしに工藤祐經はつゝみの上手とてめしうたせられける事あり歌をうたひて舞ける妓女なれば歌舞妓と名付たりいつのころよりか遊女どもの芝居をかまへて歌舞妓をいたしけるにたかきいやしき輕はづみのとびあがり共にこれに愛まどひて芝居棧敷にこみ合をし合て見物する猶飽たらず常買^{ひたが}に買て參會をとげ一跡を仕うしなひて名をながしあるひは喧嘩口論をいたして公事沙汰に及ぶこれ國家のさまたげ諸道のつゐえわざはひの根元なりとて女歌舞妓を禁制せらるそのうち若衆歌舞妓といふことをはじめうるはしき少年に歌うたはせ舞せけるに瓢金^{へんごん}の痴者ども猶又こゝろをまどはしたましむをうばゝれ有頂天になりてうかれつゝひたものに行通ふほどに身上のあつき人も時のまにうすらぐ事春の日にあたる沫雪のごとしいはんやもとより身上のうすきかたはほどなくたゞきあげて南部坂田をさして跡をかくしあるひは心もおこらぬ青道心をおこし墨の衣に身をやつして諸國を流浪する輩はなほだおほし都のかた

もかく侍べるにや此ころは野郎蟲といへる書の世におこなはれてとり／＼の評をしるせりまかも去年寛文元年都の四條河原には若衆歌舞妓女形は跡をけづられて法度になれりさればかの美少年どもその俗姓はいづれ／＼もことのほかにいやしきながら榻蓐^{たじろ}尊顯せられ鴟梟翔翔して止事なき人の御前にまかり出ては御座をけがしなめげなる事共いひちらしけるまに人をたをし人をあなどる曲ものかつうは物まぎれて上つがたをけがし奉るこれ又二の舞の靈賊なり只その形を見にくきやうにして人の戀をさませよとて若衆どもの額髪をおとさしめらる何とやらんひね媚て四十がらに柿簪をかゝせたるがごとく顔のかりぬらりとして耳を切たる猫のごとくかたはらいたきありさまなりそれ者どもはかなしみなげきあはれがりて血の涙をながしけるとかやされども初めこそあれ後々はさのみにも思はずや侍べるらん又もてなしからに額のうへに結頭巾^{くづり}見ぐるしからず仕立て舞臺にいだす拍子とり幕うちあげ階がゝりにねり出つゝ極樂世界の鳥とやらん迦陵頻のごとくなるこゑをあげて一曲をうたひ扇をひらきて一さし舞けるあ

りさまはむかし有渡濱にあまくだりしあまつ乙女の羽衣の袖をひるがへしけんもかくやとおもほゆ一手さきもみえぬとびあがりどもおほく金銀をつゐやしても絲瓜の皮とも思はずしば／＼參會をとげて浮世のおもひでとすこと更に諸寺の高僧貴僧その外諸檀林の所化衆をの／＼この少年にうかされまどひて行かよひ一座參會の望みをかけそのすがたを見るごとには三尊來迎のおもひをなしその本意をとぐる時は龍門の鯉の三級の瀧にのぼれる心ちして猶あきたらねば又はゆき／＼てつゐにはあげ錢にことをかき經論聖教をうり代なし佛具袈裟を質にをき寺院年來の什物までもぬすみいだしもちはこび千とせの契りの追従に若衆達にまいらせあぐるこれによつてうき名を流し徳を損ざし永く逐電の身となりはつることかなしけれ今の歌舞妓の若衆どもそれとさしてはいひがたけれどもあるひはかたちありさまうるはしうして在五中將の心ちしながら扇をとりて舞けるすがたは猪のしゝの水ををよぐやうなるもありあるひは聲こと葉つきはやさしけれども座讓あらげなく手あしふつゝかにしてあら鷹の鳥やを出たるがごとく牛

の子のあらたにはなづらをををされたるやうなるもあり又は目もとけうとくして竹の子の番をするごとくなるもあり又は口もと大にして唇あつく天水の瓶に似たるもありすべてをの／＼意地のきたなき事は飢たる狗のごとく物のほしさうなる事は食をまもる猫に似たり玄かれれば若道の事はもろこしにもさかりにあり本朝のいにしへよりこれある事なれど今の歌舞妓の若衆どもは名さへ女形とて總體みな傾城の風ありて人をたぶろかし物をとるを本とす玄かもそれながら心だての味をつくるといへどもくづれやすくしてたとへば功のいらぬ若狐がうつくしき女に妖たるがごとし時々尾がみえてをかしき事もあれどそれ者のともがらはなにはのよしあしも目に見えず一路みな打あげてのちに夢はやう／＼さめ侍べるぞかしかの若衆どもの髪うつくしくゆひうす假粧して小袖の衣紋じんじやうに著なしほそらかなる聲にて小歌うたひ階かゝりにねり出たるありさま芝居の輩は前なるは桃尻になり後なるはのびあがり棧敷にあるかた／＼は耳もとまで口をあき涎を流しあまりの堪がたさには聲うちあげてあれ／＼御やうかうの御す



がた天道馬ぢやとよばゝれば又かたはらよりはやれ
笑ひ顔かな鹽がこぼるゝちよいゝなど口々にわめ
きどよむも淺ましからぬかは此ごろは都の歌舞妓く
づれて浪人しける大坂庄左衛門小舞庄左衛門杵勘兵
衛又九郎などが千之丞を柱にしてくだりつゝ花をや
ると

おとこかと思れば歌舞妓の女かた

小たなりひらのおもかけそする

西本願寺

これも東照權現御在世の時より京都西の本願寺の末
寺を立られ宗流をくむ輩を勧らるそのかみ開山聖人
よりこのかた顯如上人といふまでは只一寺にて侍べ
りしを豊臣太閤秀吉公の御時に子細ありて東西二派
にわかれしより宗風に別なるをしへもなく作法に替
れる事はなげれども東西二箇の本寺となりて中のわ
ろき事水尅火のごとく我執をおこし東がたの門徒は
西がたをそしりて生ながら魔道にも落ゆくやうにお
もひ又西がたよりは東がたをにくみて命のうちに火
車にのるやうに思へりまことにおろかならずや東西

もろ共におなじく彌陀他力の本願をたのみ一向一心
のをしへにしたがひ一念發起の立地を凡夫往生の時
剋極促とおもひ一形地念の稱名を佛恩報謝の經營と
心得たらんにはなにの子細もあるまじきをしるてあ
らそひをたつる事これひとへに我慢偏執の所行なり
又末寺の坊主等わが心になはぬ事あれば本寺をう
らみて西より東へひがしより西へ歸山するとしてその
派を替る西へちろり東へちろりとする故にかのとも
がらをば明星房と異名にはいふとかやしかるに西本
願寺はもとは淺草御門のうちにありしを西のとしての
回録以後は鐵炮津にうつされ海をつき出して地形と
せりはじめは人の家居とをく立はなれていとゞさび
しかりけるを江府御はんじやうのしるしにはほどな
く人の家たちつゝきて今はこの寺まことに絶景の地
となれり本堂に海にむかひてみなみむきに立られた
れば打はれてうみづらを見わたすに東には安房上總
もみえ渡り伊豆の大島も目のまへにみゆひつじさる
のかたには名におふするがのふじのだけくまなくみ
えておもしろや大まはしの舟どもは順風に帆をあげ
てあやしきこゑぐうちあげて歌うたふも聞えてさ

すがにをかしかりけり釣するあまのいさり火は舟もろ共にやこがるらん岸うつ波は白たへに時ならぬ花の心ちし夜半の枕にひきては浪こゝもとにと詠じけんねざめを須まの關守のむかしもさこそとおもほゆる千鳥のこゑはおちこちに所さだめぬ波のうへなによりもこゝろすむは秋のゆふべの月影にあこがれ出る舟のうちにおもひくゝのあそびをなしこゝろごころに歌をうたひ名も望月の夜もすがら浪まくらかちまくらかたぶけてくむ杯の數をもしらぬ眺望ありまことにすてがたき美景也

かはらしなおなし流れの本願寺

歸命無理なるあらそひはいさ

増上寺

三緣山増上寺の開山は總州千葉介の末孫として源空上人七代の嫡裔西蓮社了譽聖同上人の高弟たり大蓮社西譽聖聰上人と號す西譽はもとこれ眞言の宗流を汲て秘密金剛の妙用をあふぎ遍照舍那の實際をもとめしかもまた兼ては淨土念佛の風義を學して三心即一の窓のまへには五念四修の月をもてあそび事理俱

頓のはやしの中には實報受用の花を詠じて武州江府の貝塚の臺光明寺に住せらるその地は今松平伊豫守殿の家となれりそのころをひ人王百一代後小松院の御宇なり時に至德二年きのとの丑の夏光明寺にして論議あり讚題は善導和尚の四帖の疏に長時起行果極菩提といへる釋文なり西譽上人能化として所化のともがら問者答者たがひに法門の扉をひらき疑難の關をくだかんとす爰に聖同和尚は托鉢の體にてかの講席法門の場に立てつらつらこれを見て莞爾と笑て立かへらる西譽上人此よしを見てみづから座を立て跡を追てたづね行給ふに淺草の邊にして追つめつゐにその笑をふくみて退ぞく事を問給ふに同公その故をこたへらるたがひに問答ありて淨土の奥義をのべ給ふに西譽上人ふかく法味をあちはひ豁然としてさきの惡念名利の鈍銳を折てたちまちに眞言宗をすてゝひとへに淨土宗に歸しすなはちわが寺光明寺をあらためて三緣山増上寺と號し聖同上人の弟子となりて一心金剛の血脈をうけ給ひけり第二代をば明蓮社同仰上人と號し第三世をば定蓮社聖觀音譽上人と號すこの和尚は大悲をもつてあまねく衆生を化せんとするに末代のしるしとし

て人みな放逸邪見いよくさかりになれりまことの心ざしをおこすものすくなし我これらのものごらのために見ごろしにせんとてみづから大願をおこし臨終の時にいたつて火葬のむかへを得て生ながらこれにのりて去給ふそのときの辭世の詩賦詠歌これあり佛在世の提婆は生ながら無間におちて衆生に見せしめ今の音譽は生ながら火車にのりて人民におそれしめ給ふともに權化のはうべんなるべしされば道號戒名をひとつに合すれば聖觀音の化身なる事何ぞうたがひをおこさんやそれよりこのかた年序はるかにをしうつりて第十二代の能化を貞蓮社源譽上人と號す増上寺中興の和尙なり東照權現江府御入部のみぎり師檀の契約おはしましけり東照權現台德院殿將軍家二代の戒師となり血脈相傳ありけると也上人遷化あり慶長十五年庚戌に普光觀智國師の號を賜はりぬ此時にあたつて念佛の法門行運たちまちにひらけ時機また相應じて一天四海この宗に歸依する事そのかみにこえたり猶今にをよんで能化は一代の法藏を胸にたくばへ所化は十二の教文をまなこにさらし學道をきはめ智德をみがき說法利生する事はなほだひろけ

れば當寺の院號を又は廣度院とも名づくとかや寺のうしろに御魂屋ありそのうしろは山なり前には所化寮つくりつゝけて山門たかくそびえたり門の外は京都江府の海道なり上下往來の諸人市のごとし東のかたは海上晴て舟の行通ふ事目のしたにみゆまことに絶景の眺望なりある人の發句に

庭にさく櫻や普賢増上寺

諸邪業繫さはらぬ彌陀の大願を

直にひろむる増上寺なか

江戸名所記第四終

江戸名所記第五

芝
瑠璃山遍照寺藥師

當寺はこれ空海大師草創の砌なりそのかみ勢州壹志の郡五十崎村はこれ藥師如來應現の靈地として空海和尚開基したまひ晝夜をわかつおこなひすましておはしける所に武州芝の山中に瑠璃の光明をはなつ事夜るとなく晝となくつねにかゝやきて絶るまなし日をかさね月をこえて諸民あまねくおがみつたゆかくのごとくしてつゐに遠近にかくれなし都鄙の尊卑かたりつたへて世に流布せしかば大師すなはちこの山に來りたまひ光りに付て山にのぼりその瑞光のおこる所を認尋ねて見たまへば山のいたいきにいたつてひとつの盤石ありてこの石よりひかりをはなつ大師この石にむかひてしばらく持念したまへば藥師如來忽然として御かたちを現じ給へり大師すなはちひとへの伽藍をこんりうしかの御やうがうの藥師は御

すがたを手づからきざみうつしたまひて安置しすなはち瑠璃山遍照寺と名づけさせたまひけりそれよりこのかた貴賤くびすをついてあゆみをはこび道俗たもとをつらねて來りおがむ靈驗あらたかにして感應さかん也かくて數百歳の後後深草院の御宇建長年中にあたつて俊英阿闍梨といふ人あり眞言秘密の床のうへには瑜伽三摩耶の觀行をつとめ六尺無得の窓の前に阿字本不生の悟入をもとむ才智世にたかく大悲時にほどこせりつら／＼心におもふやう世すでに澆漓にいたり人また懶慢に及ぶいまこのけはしき山坂をしのぎあゆみをはこぶにもものうくして參詣のもがらかならずをこたるべしそれ諸佛の大悲は利生をもつて本意としたまふ只おなじくはこの尊容を山のふもとにうつしたてまつり貴賤老少のためひろく結縁せしめ利益をかうぶらしめんにはしかじとて山上より五十餘町のふもとにあたつて七間四面に樓閣をたてかの御本尊并に十二神將をうつし奉る効驗いよ／＼あらたにしてもろ／＼の病患いのるにまかせて愈すといふことなし靈應ます／＼ねんごろにして諸願として申すにかなはずといふことなしこれによ

つて田村の長者は此尊にいのりてたちまちに愛子の
盲目をひらき攝州の貧女はこの像にまうでゝすみや
かに窮子の願望をとけたりかくのごとくの靈驗さら
にかぞふるにつきずそもゝいま現在の本尊はすな
はち弘法大師御作の尊容なりことさらまた薬師如來
と申すはもと菩薩の道を行じたふひしはじめには十
二の大願をおこしすでに正覺をとりたまひては東方
淨瑠璃世界のあるじとしてゝもろゝの衆生をみちび
きたまふしかれば醫王善逝の悲願平等にして一切衆
生のために光明をはなちてこれをてらせばよく惡業
ほんなうの闇をはらし饒益をたれてこれをすくへば
廣大慈悲の本誓むなしからずこの故に青色の寶壺を
ひらきて微妙の法藥をほどし給へば萬病すみやか
にいへ緣翠の松算をあたへて歸依の願念に隨がひた
まへば壽命ながくのふしかのみならず日光月光の二
菩薩は晝夜にをこたらず衆生のまよひをてらしたま
ひ十二神將はまた二六時中に守護をくはへて休むこ
となし八萬四千のけんぞくの夜叉は常にかつかうの
人をまもるたとひ三毒五欲強盛の羅刹鬼なりといふ
ともいづれかなそれとしりぞかざらんや經にとき終

つて會中十二神將各有七千夜叉衆護世四王琰摩天子
常体術護持念者とまたいはく我此名號一經其耳衆病
悉除身心安樂といへりまことに殊勝の利やくありた
れかこれをたつとまざらん

なむやくし瑠璃の光明遍照寺

いのらばいやせ貧のやまひを

窪町

烏森稻荷

烏が森は武州の名所とはいひつたへしかども歌枕名
寄などにもみえず古老の傳にいはくこの所にはいに
しへより狐のすみて人の家づくりをさまたぐると也
そのかみよりこのかた諸大名衆御屋敷拜領ありて屋
形を立らるれども狐あれて居住したまふ事かなはず
しばゝ祈禱をいたし屋札ををさるれどももちひず
猶今の世までも禿倉ぼくらひとつありて灯明をかゝぐすな
はち稻荷明神とあがめ奉るとかや狐の栖をなす所は
おほけれども地の主さだまれば栖を他所にうつしあ
るひはその所に住ながらもわざはひをなす事はなき
に祈禱をもおそれず屋札をも用ひつ人の家居をさま
たぐる事おぼつかなしさだめて稻荷明神の靈地たる

べしされども宮居のはんじやうせざるもまたおぼつかなし西の年回祿の時

血のみの薬のためか嘴太のはしご

からすか森もくろやきになる

芝金杉村

西應寺

田中山西應寺は鎮西一派の流義をつたへて念佛三昧の法門をひらくそのかみ人王第九十九代後光嚴院の御宇應安元年つちのえ申仲秋のころ明賢上人はじめ開基したまふところ本尊は恵心の御作西方彌陀の形像也鎮守は熊野三所權現なり其の三所のうち證誠殿はすなはちこれ本地は彌陀如來也寺の本尊もまたこれ彌陀也本地垂迹ともに一致にしてあまねく念佛の衆生をみちびきおはします物也しかるに開山明賢上人は應永五年つちのえ寅黃鐘十日に遷化せらる年八十六歳也其のち天正年中に東照權現この寺に入たまひて開基の由來その年代を聞しめし寺領御寄附まし／＼けり時の住持御朱印をいたゞきて朝三暮四のたすけゆたかにして學道のことゝしけりそれよりして代々の御朱印相違なく出さる住持第十六世存岡

和尚はまた當時法門の龍象學道の鱗鶴なりければ將軍家深くそうきやうありすなはち仰せのむねありて一夏九句のうち法幢をたて一百餘人の所化を引て宗風の實際をしめすすべて念佛三昧他力往生のことはり日々あらたにひろまりつゝ各々このをしへに歸す應安開基のそのかみより今寛文二年みづのえ寅にいたる春秋二百九十五年をへたり地境綿々としてあらため替ることなく坊舎幽々として恩澤に浴せり講堂の前後に園林あり老松數株えだをたれていく百歳をか經ぬらん武州相州のあひだ末寺あまたありといふしられけりふるき軒はの西應寺

松かえたれて年經けるにも

田町

八幡

このやしろいにしへは三田といふ所にありしを正保年中にうつして田町の八幡とがうすある人のいはく此宮は渡邊の綱を神にいはひけり綱を三田源五と名づけしはこの三田の里より出し故也といへり此事おぼつかなし綱は津の國の渡邊より出たるもの也此故に渡邊を姓とせり又ある人いはくわたなべの綱は三

田にくだりて後に身まかりしを神にいはひたりといへりかやうにさだかならぬ事のためしなきにもあらず宇治の離宮八幡も八幡にはあらず藤原忠文を神にいはひける社なりそれを後に八幡なりといひつたへたり今もかやうのためし成べし八月十五日神事ありもつとも奇麗也社のうしろは山也前は杉ばやしにて神さびたる殊勝の宮立なり

この神をわたなへのつなといふ事は

まことかうそかうさん八まん

芝

大佛

芝の大佛は寛永十二年きのとの亥のとし歸命山但唱木食の建立せらるゝ所也但唱は津の國多田の郷の人なりその母有馬の樂師にいのりてまうけたる子也年十五にして但善木食の弟子となり信濃の國檀特山にこもり百日のうちに念佛三昧を發得しむかひの峯に三尊の影向をおがむその徭すがたはなはだ大にして虚空界にみちたまへりその後山を出て又淺間の嶽にこもる事百日又紀州にいたり那智におちたまふ事百日そのほか西國南海あまねくめぐりもろゝの奇特

を見る事たびゝ也つゝに江府にくだりてこの大佛五體をつくるみな木像にしてやうやく宿の功を成就せり但唱は六十一歳にして奄然として還化せらる三字念佛のすゝめは但善但唱二代にして絶たり仁和寺のほとり鳴瀧の五體佛も此時におなじくつくりたて舟にのせて都にのぼせられたりとかや大佛の門前の石の二王もおなじ作なり但唱木食の弟子念幸は都のひがし白川のほとり田中といふ所にして地藏并に二十五のぼさつをつくりて安置し念佛をすゝめしがこれもいまに往生せし也さればこの芝の大佛は東國けちえんの尊像西方引接の靈佛たり黄金のはだえは七金山の朝日に映するがごとく烏瑟の髻は五須彌の蒼海より出るに似たり青蓮のまなじりあざやかに丹葉のくちびるうつくしく白毫のひかり千輻のあなうら萬德究竟のよそほひけだかく四智圓明の相こまやかなり又門前の仁王はこれ陰陽阿吽の相をあらはし守一無適の性をしめし強勢の威をふるひて外境にをかされずまことに佛法の實際に入べき初門を表し六境にうばゝるゝ心をしらしめこれをまもりてとゝむることををしゆるはうべんなり門の左には並木の櫻枝

をかはし花さく春の梢よりおちくる風にさそはれて
空にしられぬ雪ふりて又すてがたき所なり

たうとさは門からみゆる大佛

五體をなけておかみこそすれ

芝

焰魔堂

大佛の左のかたに焰魔堂あり前には茶屋あり門前は
東海道なりむかひは海つらはるかに見えわたり渚に
打よする浪の音砂をあらふありさま興あり地藏ぼさ
つの石像あり本地垂迹の別をしめし内證大悲のおな
じき事をあらはせり又入口の右のかたに石佛五體あ
りおなじく但唱木食の作也

ゑんま堂の軒はに來鳴ほとゝきす

めいと鳥のしるし也けり

芝

泉學寺

當寺はこれ門庵和尚の開基として洞家の末流たりそ
のかみは安座部あざぶの臺にありしを正保年中にこの所に
引うつさる五位四寶は體用をあらはし參得すればと
もに混ず物我ならべてわすれ人法ともに混ず虚玄の

大道本分の性理内外和融し上下平均なるさまに祖風
の宗致たりしかるにこの寺はまたかぎりなき絶景あ
りたかくつくれる山門は雲をさしはさみて虚空にそ
びえ四王切利の宮殿かとあやしみ天に梯してのぼる
かとおもほゆ門の内に道の兩方に並木の松あり雪飛
で枝につもれば著帛をのへて雲にまがひ風吹て梢を
わたれば緒琴のしらべ空にひやく東南のかたは海上
はるかに晴て帆かけ舟波をはしり萬天の雲に連をな
せば田面の雁のわたるに似たり釣する蟹のいさり火
は沖にちいさくうきしづむ浪まにすだく螢火かそれ
かあらぬか晴る夜の星かとのみぞみえまがふ嵐はげ
しきおりからは波こゝもとに立かゝる心地して獨り
まろねの夢をやぶる汐にひたす月かげはくもらぬ鏡
をあらふに似て海より出て海に入すべて眺望に興を
もよをすこゝは品川のいりくちにて門前の大道はの
ぼる人くだる人歩よりゆくもあり馬のり物にてとを
るもありたかきいやしき絶まなく櫛の子をひくがご
とし門前より打つゝきて牛町とて四町ありこれ牛車
をつかふところをよそ牛の數も一千疋に及べり古し
へは淀鳥羽に車借ありて都ならでは牛車はなかりし

を江戸は東の都にて牛の車をゆるされいか成土橋板橋のうへをも心のまゝにひくとかやこの故に車借のともがら牛をえらびてもとめやしなふ額ちいさくして角はうしろになびきて藪くゝりの上品たりまなこ黄にして尾はふさやかにゆくことはたいしくはやき事は飛がごとくかたちをだやかに精氣たはます力量すぐれたるに鞭をかけおもきをのせて遠きにはこぶ人の用をたすくる事その功まことにおほいなり寛永年中より初まれりこのころは地車といふ物をはじめて牛をかけず車に荷物をのせて人八人してこれをひく江戸中我もゝとこしらへてその車の名を代八と名づけて用ゆ牛にかはりて八人してひく故也馬にのせてはこぶ物をもおほくはこの代八にてひかすれば江戸中の馬借馬子等は地車をいやがりにくみて代八をひくものを人畜生とのゝしるとかや

牛ならて人にひかする地車を

代八葉とこれいふらん

品川

東海寺

當寺は澤庵和尚の開基なり師の生國は但馬國出石邑

の人なり出家して諱を宗彭と號すそのかみ事ありて玉室江月澤庵三僧ともに流罪せらるべきにさだまりしに江月和尙は別義のむねありてなだめられて江府にとゞまりたまひしに玉室は奥州の棚倉に流され澤庵は出羽の國上山に流されたまふそのとき獨り江の月とよめる歌ありけり年いくばくならずして赦免せられ二たび江府にかへり給ふ寛永十五年十一月のはじめつかた東海寺を立て引こもりたまひしに猶その風儀をしたふ好事のともがら門前に市をなしけるとかや

來てみれば三千世界のまへに

くまなかりける東海の寺

品川

水月觀音

武州荏原郡品川の鄉金花山水月觀音は弘法大師安置の本尊なり閻浮檀金聖觀音の立像也もとこれ龍宮世界よりあがらせたまふ大師入唐歸朝の後關東御廻國のついで品川の押領使某に附せられて家につたへてあがめ奉る品川左京亮といふ人まで代々相傳して持佛堂にすへ奉りて他念なくやまひ信せらる應永年

中に鎌倉の公方持氏公の時にいたりて上杉禪秀と合戦ありしとき品川の一門みな打死す此時かの本尊を草堂の内にかくしをきたり太田左金吾源持資入道道灌久しく此品川を知行してふかくかの事本尊を信じて大檀那たりしかもそのかみ此所西京中國商人舟の著岸する港なりしかば土民はなはだ富榮にして觀音堂をもきらびやかにつくりてあがめ奉りぬ長祿元年四月に太田道灌江戸の城にうつりて當寺すでに五十餘町をへだてたり文明十八年七月に太田道灌は相模國糟谷館にして上杉修理大夫定正にうたれ兩上杉不和になり關東大に亂れ品川の諸寺諸社みな破滅に及ぶこゝに小田原の北條家と兩上杉と數年のあひだ合戦あり上杉家ついに打まけて江戸品川みな小田原のために押領せらるそのうち小田原北條家と武田信玄とあらそひあり永祿十二年九月上旬に甲州の信玄すでに小田原へ押來り信州より碓井峠をこえて武藏の北方にかゝり江戸品川を追捕し江戸の芳林院品川の大圓寺この觀音堂を初めとして數箇所の神社佛閣を焼はらひ財寶共をうばひ住持の僧法師を生害す此時にあたりてこの觀音を武田方にとりて甲州にかへり

しかばその人たちまちに大熱狂亂して口ばしりていふやう我はこれ武州品川の觀音也いそぎもとの所へかへしをくれといふ諸人おどろきおそれてあたり近き里につかはすにその里人又物くるはしくなり口はしりて品川に歸らんといふしかれども武州甲州の國境に關ありてたやすく人の往來なしとかくするあひだに品川の乞食一人甲斐の國に來りしを頼みてかの本尊をかへしつかはすに乞食なれば關守もとがめすかくて品川に歸りたまへども堂は焼て只礎ばかり残りしに居奉りてやう／＼に藁屋をつくりて入まいらせけりその後久しく此近邊に非人おほくあつまりすみけるを寺社奉行に訴てみなはらひ除つゝ承應元年みづのえ辰五月中旬にあたりて寺地を拜領し時の住持法印權大僧都弘尊すなはち形のごとく觀音堂を修造せしめ海照山品川寺普門院とあらため名付しよりこのかた大悲あまねく衆生をみちびき普門示現の威力をあらはし歸依渴仰のともがら二世の願望をとぐる事鐘に槌のふるゝ時に聲たちところに出るがごとし利生あらたなる事猶名月の水底におちて影をやどすがごとく信敬をいだす行者のまへにはかならずそ

のしるしなしといふことなし此故にこの觀音を水月觀音とは名づけたり

品川や寺井の水にすむ月の

かけもくもらぬちかひしるしも

池上

本門寺

武州荏原郡千束郷池上村長榮山本門寺は高祖日蓮上人の開基也そのかみ上人安房の小湊より舟にめされ鎌倉へ通りたまひしに武州品川のうらにして舟よりあがり池上村にいらせたまふこの村に關東番匠の棟梁宇右衛門尉宗仲といふものあり上人かの宗仲が家にたちよりて一夜をあかさんとしたまふあるじかぎりなく上人をたうとみたてまつりてさま／＼にもてなし奉る上人この山の景を見たまひ心におもひたまふやう爰はわが遷化すべき地なるべしとそのうち身延山よりこの地にうつり宗仲が家に來らせたまひあまたの御弟子達をあつめてのたまはく我すでに衆生利やくの化縁つきて遷化すべき事今三七日のうちにありとて佛法弘通の遺言ねんごろにして弘安五年十月十三日に遷化あり宗仲も上人の弟子となり家を点

じて寺となせり今寺中十六坊の内大坊これなりこれ上人遷化の地也やうやくこの寺はんじやうして寺中のさかひもつともひろし祖師堂のうちに上人の御影ありこの御影は日蓮上人御さいせの時御弟子日法人すなはち日蓮上人の前にして一刀三禮してつくり立たる御影なり長榮山本門寺祖師堂といふ三の額は光悦これを書たり寺中十六坊のうち古跡四坊あり大坊はこれ上人遷化の地宗仲が家日澄上人の寺也照榮院は日朗の寺也覺藏坊は日像の寺也南坊は日昭の寺也次に寺の什物には

注法華經

これ日蓮上人の御自筆なりみづから注をつくりて經の中に書入たまへり残りの四卷は駿河の國の玉澤にあり

靈鷲山より渡りし紫色の石壺つ

御弟子檀那等のもとへ御遺物自筆の帳

身延山御弟子衆輪番持御自筆の帳

數珠 一連

上人の御消息 數多あり

肉附の齒 壹枚 これは上人御在世のあいだにぬ

けたる也

貞宗の太刀 一振

ある發句に

池上の花はめうほうれんけかな

池上にさくやはちすの花の經

よみさしてうちをく經は池上の

花の蓮の卷葉かとみゆ

江戸名所記第六

豊島郡

目黒不動

目黒はもとより此地の名也本尊の名にはあらざる也
むかし慈覺大師は下野國都賀郡の人なり俗姓は壬生
氏の後裔として延暦十三年に誕生し給ふ九歳にして
父にはなれ兄にしたがひてしばらく外典を學すとい
へども心ざし佛法をしたひてつゐにおなじ郡のうち
大慈寺の廣智菩薩を師としてつかへ奉り給ふに大同
三年のころ十五歳ある夜の夢に一人の沙門身の長六
尺計なるがそのすがたはなはだうるはしく世にたぐ
ひなくおぼえてふかくうやまひ禮拜せしかばかの沙
門わらひをふくみさま／＼物がたりし給ふそのかた
はらに人ありていはく汝この沙門を知たるやこれは
比叡山の大師なりといへりかくて夢さめてのちこの
よしを廣智ぼさつにかたる廣智大にきどくの事にお
もひ給ひてすなはち慈覺をつれて比えいざんにおも

むき給ふに此目黒をとをり日暮ければ一夜こゝにと
どまり給ふその夜の夢に忿怒強盛のかたちなるもの
右の手に劍をひつさげ左の手に索をもち枕に立て慈
救の明呪をとなへ枕のもとをあらゝかにふみおどろ
かし給ふとおぼえて夢さめたり廣智この音におどろ
きおなじく夢さめて慈覺は夢の有さまをつぶさにか
たり給ふこれまことにきどくの事也とておりふし靈
木の有けるをととりて夢中の御すがたをきざみつくり
給ひてこのところにてたてをきて比えい山にのぼり給
ひ傳教大師の弟子となし給へり承和五年六月に入唐
しあまねく諸方の名師にあふて顯密二教のふかきむ
ねをきはめおなじき十四年に歸朝ありそのうち關東
に下向のとき又このところに一夜をあかしてのたま
はくこの所には瀧水あるべしとて獨跼をもつてほり
給ふにやがて手に應じて瀧水みなぎりてわき出たり
今の御手洗の瀧水これなりこの水さらに炎天にもか
はらず又霖雨にもまさる事なしそのうち星霜はるか
にほどをへだて元和元年の春本堂のうしろの在家よ
り火出てほのはすでに御堂にもえつきけりこの所の
男女はしりあつまりて明王の尊體をとり出し奉らん

とするにしきりにくろけぶり立おほひ猛火はげしくもえあがりければいかにもすべきやうなくいまは明王もおなじく灰とならせ給ふらんと悲しみける所に明王の尊像瀧水の上にたち汗を流しておはしますこれを見たてまつる人をのゝかんるいをながしけりこのほか靈驗種々おはします諸人このゆへにちからをあはせてかたのごとくの本堂をつくりて安置し奉る又寛永元年のころ征夷大將軍家光公この所におひて御狩の時に御鷹それて雲ちはるかに翔り行けるを別當實榮におはせ付られ祈念せさせられしにたちまちに御鷹とび來りて寶前の松の梢にとまれり家光公これをよばせ給ひしに御聲に應じて御手にうつりまいらす御感淺からずやがて本堂御こんりうありおなじき十一年にかさねて御さいこうありけりそれよりこのかた理智圓明の威力廣大にして迦樓羅焰の徳用深妙なり本堂のうしろはたかくそばたち山のこしに堂あり堂にのぼる事平地より石のきざはしをつたふきざはしのもと左のかたに松あり勾松と名づくかの瀧水は今猶みなざりおちて絶る事なし人この水にうたれて諸病をいやす前に二王門あり門の前は

大道にして茶屋あり

いかなれはおなし佛の名をかへて

目黒目白は不同明王

入間郡赤坂

氷河大明神

むかし人王六十二代村上天皇の御宇天曆年中に近江の國甲賀の郡に蓮林僧正とて天台四明の法燈をかへげて一念三千の觀行をこらす上人あり東國修行のつゝゐでこの所に一夜をあかしけるその夜の夢にいつくともしらす老翁一人來りていはく我はこれ此土中にうづもれて久しく年をつもれるものなりいそぎ掘出して安置せしめば此の所の守護神となるべしその埋もれし所には奇瑞あるべしと見て夢想はさめにけり上人奇異のおもひをなしそのあたりをめぐるに一所の壇上に金色の光りありいそぎほりてみれば十一面觀音の形像おはしますやがてそのところに社をたてて安置せしめらる一木村の觀音と名づけて諸人まいりつどふきはめて利やくおほし蓮林遷化の後治暦二年ひのえ午にあたつて關八州のうち夏より秋にいたり大の日でりす萬民うれへをいたしけるに當所の土

民このやしろに雨をいのるにたちまちに洪雨ふりくだつて五こくゆたかにみのり民よろこびのまゆをひらきけりこれ雨をくだして川をなし萬民をたすけ給ふ故にすなはち神とあがめ氷川の明神と名付たてまつる神事は六月十五日也今に及びてなをこの神徳たかくおはしまして諸人の願望をかなへ給ふぞ有がたき

くみてしる氷川の宮の神ころ

めくみあらたに世をうるふとは

永間馬場

山王權現

江府の山王權現は叡山第二代の座主慈覺大師の開基也これすなはち日域守護の神として和光同塵の利やくあさからず内には圓宗の教法をまもり外には鎮國利民の徳をほどこし給ふことさらに當家の御産土神として武城の鎮守とあがめまつり給ふしかるに慈覺大師弘法弘通のために武藏國川越にいたりて今の星野山をひらきそめて圓頓の教法をひろめ給ふときかつうは佛法ながくつたへんかだめ且は和光の利やくをあまねく東國のあひだにほどこさんがためにとて

比えいざんの山王權現上の七社中の七社下の七社のうちをの／＼一社づゝを抜いて三所の靈神をかの地に勸請し給ひけりかくて星霜をかさね後花園院の御宇長祿三年に太田道灌すでに文武兩道の才智をもつて天下長久の勝地をかんがみこの江府の城を築おはりて文明年中にはじめて此山王三所の御神を星野山より城内に勸請し奉りて當城の産土神とあがめらるしかりしよりこのかた天下一統して四海をだやかなり抑當社三所權現と申すは第一に上七社のうち二の宮の權現本地藥師如來東方淨瑠璃世界の教主也十二願の總勅はひろく一切衆生の望みをかなへ衆病悉除の別意はあまねく參詣のともがらをすくひ給ふ第二には中七社のうち氣比の宮本地はすなはち聖觀音なり七難三毒の春の霞は十九せつほうの風にきえ三十身身の秋の月は二求雨願の空にかゝやく濁世末代の能化除災與樂の薩埵なり第三には下の七社のうち王子の宮本地はすなはち文珠大士なり三世覺母の智劍は三障四魔の軍をやぶり獨歩無爲の妙用は四德三昧の光りをほどこし給ふこゝをもつて國家豐饒のことぶき理世安民の唱は近くは東關八州のちまたにみち

遠くは五畿七道の末にいたれり後土御門院延徳年中に仰せのむねありて道俗結縁のため三所の御やしろを山の手の城の西にうつし給ひて再興修造ありその奇麗なる事善つくし美つくせり又承應三年回祿の後いまの溜池の築山無雙の勝地たるによりて上命をかうぶりてこのところとうつし奉る月日いくばくならずして造營の功をたてらる金殿玉樓天にかゝりき畫棟朱簾地に映せり神事は六月十四日なり江戸中の大神事として諸大名大かたは産土神にておはしませばをろかならずいづれももてはやし給ふまことに大造の神まつりなればとて隔年にとりおこなはる

ねり物にさはらはひやせ山王の

まつりはひえの山の手の宮

牛込

右衛門櫻

柏木の右衛門の督はいにしへ光源氏しなさだめのと
き月卿雲客を月日ほし雲霞よろづの本草にたとへられしにこの衛門のかみをば柏木によそへらるいつも
常盤なりけるすがたをたとへていへるなるべし女三
の宮に行通ひ給ひけるにはなだの帯をわすれて源氏

にみつけられ侍べり源氏これをほのめかし衛門のかみに酒をしゐて御心よからぬ御目づかひをし給ひしより衛門督ころのおにゝやいとゝしく心みだれた
りかくてすこしのうち武藏國に流されたりしがほどなくめしかへされしかどもかぎりなき心地やみにうちふしぬ女三の宮は柏木の子をはらみてうみ給ふ五十日のいはひのおりかの若君を源氏かきいだかせ給ひて女三の宮の御そばにたちより給ひて

たが世にかたねはまきしと人とはゝ

いかゝいはねの松はこたへん

とよみ給ひしかば宮はいふばかりなく御はづかしくてひれふし給へりしが衛門のかみうせしより物のけにならせ給ひぬさてほどなくうせ給へりかの若君をば後に薰大將と名づけしとかや衛門のかみあづまにくだりし時うゑられたる櫻也といひつたふ花は薬ながく匂ひ一二町餘所までも聞ゆといふさればすなはち此所を柏木村と名づくるなり

柏木のうへし櫻は匂ふ宮

薰の跡をしたふなるべし

堀兼井

牛込村のほりかねの井はこれ武藏の名所なり俊成卿の歌に

むさしにはほりかねの井もあるものを

うれしく水にちかつきにけり

とよめりむかし繼母の讒によりてその父わが子に井をほらせけるがいとけなかりければえほらで死けるゆへに堀かねの井と名づけて今にこれあり

ほりかねの井にはつるへもなかりけり

またのみかねの水といふへく

牛込

穴八幡宮

光松山の八幡宮は世に穴八幡と號したてまつるそのかみ征夷大將軍從一位左大臣源氏長者家光公は理世行徳のほまれ世にたかく國をめぐみ民をあはれみ給ふしかもよく朝家をうやまひ法を正しくおこなはせ給ふこの故に諸國の貴賤その恩澤に浴し奉る事上古の聖代にも耻たまはず爰に武州豊島郡牛込の郷戸塚の邑によしありげなる岡山ありその地に年ふりたる

松の木二本あり古老の傳にいはく古しへはこの所きはめてしげりたる山なりけるを世々の人皆伐つくして根をほり返し山は荒て岡となり僅に二木の松のみのこりて常葉かきはにさかえたりしかるを寛永十三年ひのえ子にあたつて御料の御弓大將松平新五左衛門尉直次に與力せし人々弓のけいこをいたしけるが源家の宗廟として弓矢の守護神なればとて八幡宮をくはんじやうしその前に的山をつかせて弓をもなぶべしといひあはするさいはひに此地を望み得てよろこぶ事かぎりなしその折ふし山鳩三つとび來りて松の枝にとゞまるこれまことに八幡大ぼさつ我らのまことある心ざしを神もなうじゆまし／＼八幡大ぼさつの御やうがうある事何のうたがひあるべきやと人々歡喜の涙を流し假に小社をつくり二木の松を神木とさだめ鳥ゐをたてゝあがめまつるそれより六年の後かのとの巳のとし威成院の良昌僧都をまねぎて社僧とし法味をそなへたてまつるこの僧もとは周防國の人口の八幡の氏人なりいとけなくして毛利家の侍榎本のなにがしにつかへしが榎本身まかりければこれを歎きて十九さいにして高野山にのぼり出家

して寶性院の法印春山の弟子となる一紀の行法學道をとげて三十一歳の時より諸國を行脚しけるにつちのえとらのとし十月のころ奥州にくだり金花山の求聞持堂に七十五日こもり次の年の春二月七日おなじ山の尾上に八幡宮のやしろありこゝに通夜し侍べりしにその夜の夢に髪からわに結る老翁まぐらがみに立てつげてのたまはく將軍家の御子かとの巳のとしの夏ころにはかならず御たん生あるべしとの給ふとおぼえて夢はさめにけりしかれどもふかく心の内にこめてさらに又人にかたらずそれより二年過て巳の年正月三日の夜武州にきたり曹司が谷の御樂園のあるじか家に宿しける夜の夢にさきの老翁また來りてつげていはく今年の夏將軍家の御子生れ給ふべきよしを兼ていひしらせしを汝うたがひ思ふならば明日この所へ將軍家御わたりあるべき也それをしるしとしてわがいふこと葉をうたがはず人にかたりきかせよとしめし給ふ夜あくるをいそしと此夢あるじにかたる案のごとくその日俄に御なりおはします僧都もあるじも大におどろき奇特の事に思へりされども世に披露すべき事にはあらずとて猶ふかくつゝ

みて打すごしぬその夏のころ中野の寶泉寺に立入て法印秀雄の會下にありけるをか八幡宮を草創しける人々の中に相知るかたありて宮守のためとてまねぎよせ秋七月に草庵を結ばんとて此山のふもとの地形を引ならして上の山一丈ばかり掘くづしたる山の底にちいさき穴あり諸人あやしみ見るに口はせばくておくはふかしをこのものども内に入てみれば九尺四方にたかさ七尺ふかさ一丈三尺ばかりの穴なり内に御長三寸ばかりのからかねの佛像石のうへに座しておはしますそのまへにちいさき瓶ひとつあり左右に人の骸骨おほく有けるを人々とりすてたりかの佛像に世の常ならざりければ良昌僧都加持し奉りて御厨子にうつしたてまつる道俗貴賤このよし聞つたへて群集をいたしておがみたてまつるものかぎりなし八月三日夢想にたがはず將軍家御若公御たんじやうましゝ上下萬歳をよばふ聲ちまたにみちたり良昌いよゝ有がたくおもひて神前にまいりみてぐらをさゝげ祝言を申てかくぞよみける

おひそふる千とせの松も千尋ある

かけとさかゆく御世はつきせし

この若公御たんじやうの奇瑞その數々おほし當社の縁起につまびらかなればしるすにおよばすおなじく八月九日社頭のめぐり一町四方に繩はりして地形を引ひらき本社をば神木の松のもとにうつし鳥ゐを石清水のうへに南むきにたて替つゝ八重垣ゆひまはしけるを賀州の太守黃門より數百の人歩をつかはし給ふ此ゆへに日數いくばくならでおなじ月の十四日に朝清めして遷宮とりおこなひけりこの日加州の太守より酒さかな餅など山のごとくにをくりてにぎはし給ふ次の日は放生會の式とりおこなふ別當社僧はあかつきかけて振鈴の聲空にひいき神子坐觀は朝まだきより神樂の音空に聞ゆ庭のおもてに竈を立て御湯をたてまつる松平新五左衛門尉その與力同心引ぐしめて的山の邊に幕をはり棧敷をかまへたり假初の宮ゐなれば八的百手等はことごとくしかるべしやとて只式正の小的をたつる神的は射法なれば小池のなにがしが子十二歳にしてつかまつりけるがまたそのありさま人の目をおどろかしけりその夜神前にして風流のをどり有けるに亥の刻ばかりに神木の松の梢より挑燈ほどなる光り物とび出て社のうしろに落侍べり諸

人おがみたてまつりて靈驗なうじゆの光りをあらはし給ふとますゝたうとみ奉りけりしかるにこの山の腰より清きしたゝりの水流れといまるさしもいさぎよき水也ければ掘ためられしにかぎりなくわき出侍べりまことに石清水の石におふきどくならずやかしよりこのところを阿彌陀堂山と名づけつたへしいか成故とも知人なし神木のひかり物出し事もそのかみはためしもなし今この八幡大ぼさつの神徳あらたなる所をあらはし給ふ和光のしるし成べし彌陀は又これ八幡の本地也山の名もいはれなきにしもあらずされども山の名をあらため神木のきどくによそへて光松山放生寺と號す神と君との道すぐにしておさまる御世のうごきなき名もいはし水の御神のひろきちかひぞありがたきしかれば御託宣にも人の國よりわが國他の人よりわが人とてあながちに本朝をめぐみ殊には氏人をあはれませ給ふ事まことに有がたき御ちかひなりある發句に

鳩の巢はあな八幡の茂りかな

かくぞつぶやける

二柱たつや鳥居をみるからに

あなたうとやとおかむ八幡

曹司谷

法明寺

威光山法明寺は開山日源聖人もとは天台の宗風をつたへて玉泉の法流をくみ止観鑽仰の床の上には三千一念の霜をこらし無相般若の窓の前には一乘實相の月をもてあそび學行たかく智徳ひろうして世にかくれなき名匠なりある時駿河の岩本といふ所にて日蓮聖人に行合て法問あり互に勝負にまかせて弟子となるべしと約束して問答ありけるに詞の鋒は刃をみかき辯舌に火花をちらし妙理の劍はしのぎをけづり難破の鐔をわりてつゐに日蓮聖人問答にかちたまへば日源は弟子となれりそれより天台の流義をはなれて日蓮宗になり寺を轉じて此經をひろめられたり本堂は三間四めん也これは飛驒の匠が作りし所日蓮聖人の御影は鎌倉の大佛師式部卿權僧都百日のあひだ精進齋しつくり立たる所也又ある人のかたられしはこの御影は楠正成の妻室の願主にてつくられたりともいふ

鬼子母神はこれ十羅刹の母として法花經守護の神な

りこれも名作の木像なりそのかみ傍の村にありしを日昭房といへる沙門天正六年此寺にうつして安置せらる諸願あやまたすかなへ給ふとて諸人參詣していのりをかく

東照權現御在世の御時に當寺に十石の佛餉を御寄附ありそれより代々の朱印を給はりけり大猷院殿折々當時に御成の事おはしましけるゆへに御茶屋をたてをかれしと也

ともし火にたとへし法のあきらけく

てらすや人のくらきやみちを

小石川

金剛寺

當寺はこれ太田の道灌のこんりうとして用山大和尚の開基たり此故に道灌の木像ありそのかみは寺院もおほく境内もひろくして僧録主座請客侍者沙彌喝食維那納所行者火番なんどもありて祈禱祝聖開浴淋汗のしきくのつとめをこたらしいはんや堂塔もさらびやかに塔頭もにぎはひけるを今はかすかなるすまゐにて人げもいと稀なり座禪公案のためにはたよりあしからず佛日祖風をあふぐにはつとめてよろし

本堂はかやぶきにして經行の道もなし門前は水道なり門のうち兩方に寺家の寮あり鐘はありながら鐘樓もなし只二柱に龍頭をかけたりそれだに一方は庭に生たる松の本一方は柱にて上に貫を渡してもたせたる鐘なり酉の年の回祿以後神社佛寺かたのごとくにつくりあらためあるひは地をかへ所をうつし侍べりしもさすがにわびしかりけるありさま達人は作麼生不達人は亦奈何まことに祖意はかりがたし

燒おちてもわれぬはさそな金剛寺の

名にあやかりし鐘のかたさは

關口村

目白不動

小石川關口村豐山新長谷寺目白の不動は本體はこれ弘法大師の御作荒澤鑽火の不動明王御長八寸の尊像なり當時の開山は秀山僧正なりそのかみ弘法大師湯殿山のうち荒澤川におこなひ給ふとき大日如來御すがたをあらはしたちまちに不動明王の御かたちと變じ給ひみづからもち給ふ利劍をふりて左の御手をはらひ給へば火焰さかりにもえ出たり大師すなはちこの御すがたをうつし給へりたぐひなき秘佛なりけれ

ばふかくおさめて開帳なし本體の御厨子の前に別に立給ふ明王これを目白の不動ともうす湯殿の行人鑽火を出す事は此明王よりはじまれりされば法界體性智の徳用は本有舍那の妙理をしめし阿字三摩耶の觀相には瑜伽上乘の究竟をあらはし護摩灌頂の壇のうへには災難を他方にはらひ祈念加持の床の前には福壽を自家に成すまことにきどくの本尊なれば人みなあがめ奉り貴賤あゆみをはこぶ

をしあひてまつりのつとふ寺なれば

めしろ不動と名つけそめけん

小石川

極樂之井

小石川吉水の極樂の井はそのかみ傳通院の開山了譽上人よし水の寺にをはせし時に龍女かたちをあらはして上人にまみえたてまつり佛法のふかきむねをもとめしかば上人すなはち彌陀の本願他力の實義即相無相事理俱頓の要法をねんごろにしめし給ふに龍女すなはち即悟無生の理にかなひ菩薩戒の血脈をうけその報恩としてこの名水を出して奉りけり此故に極樂の井と名づくむかしは靈山八年のみのりに十界十

如の秋の月は弘誓源妙の水にうかび一乗一實の春の花は平等大會の雨にはころびて八歲利根の龍女南方無垢の成道をとなへたりしは法花開會のちから也といへどもよのあたり末代いまのとき畜趣を出て西方に往生す十方衆生の誓約あやまち給はぬは本願ふしぎの功にあらずや

くみてしる極樂の井の水きよみ

彌陀のちかひの底のふかさを

江戸名所記第六終

江戸名所記第七

小石川 傳通院

無量山壽經寺傳通院は了譽上人の草創として明徳年中の開基なり本尊は恵心僧都の御作座像の彌陀なり六八青蓮のまなじりをめぐらしてはもつばら濁世の苦界を憐愍し四八金色のひかりをはなちてはあまねく念佛の衆生を攝取し給ふしかるに當寺はこれ淨土宗流の一派として所化學道の談林なり宗風をしたひ學業をもとむるともがらあるひは聚螢映雪の功作をつみてまなこを經論の面にさらしあるひは反鵲垂露の點畫をかさねて手を紙筆の上にひるがへし問答は富樓那の辨華句ひあざやかに解義は舍利子の智水浪いさぎよし王宮耆闍の兩會には定散二善の教門をひらくといへども給孤獨園の一座には名號六字の實義をしめすこの故に五重相傳の窓のまへにはしばらく五念修行の悉地をもとめ三心具足の床のうへにはま

さに三輩往生の素懷を期す
十念をおろす誓のなむあみに

衆生をすくふ小石川かな

澁谷 金王櫻

澁谷の金王丸は左馬頭源の義朝にめしつかはれし童なり大がうのつはものにてたび／＼手がらをあらはしけりゑかるに平治元年に大納言藤原の信賴にくみしてむほんをおこし待賢門のいくさにうちまけ東國におちられしが尾張の國野間の内海に御家人長田庄司忠宗がもとにおちきたり給ふを長田こゝろがはりして義朝をうち奉る金王丸くちおしく思ひはしりまはりて手むかふものども切ふせてそのうち都にのぼり義朝の妻常盤がもとにきたりこのありさまをかたりてのち出家して諸國を修行し義朝の跡をとぶらひ奉るかの修行のつゐで故郷なれば澁谷にかへりて此櫻をうへしとなりある説には頼朝の仰せによりて判官義經の打手になりて都にのぼり堀川の御所夜討の大將土佐坊正尊はこれそのかみの金王丸也といひつたへし櫻はことの外に陰ふるびたる古木なり花咲と

いへどもこゝかしこにありて數すくなく枝つきまばらなるが花の色は白し

澁谷なる柿の木ならはいかにせん

櫻なればそ見にもこんわう

金杉村

天神

小石川金杉村の天神はこれいにしへ鎌倉の右大將頼朝の卿の勸請し給ふ所なり社は五間に三間なり此神の土産沙たる人は家をつくるに五間に三間なるをば忌事なりとて作らずといへり本社は山の上にある山の下に鳥居あり神木は榎の木也

つりあけて高くつくれる宮ところ

おかむにしるき自在天神

白山町

白山權現

白山權現は加賀の國の靈神なりそのかみ越の大徳泰澄はじめて白山にのぼりて天女に逢給ふかの天女かたりてのたまはくわれはこれ天神の第七代いざなぎの尊なりいまは妙理大ぼさつと名づく本朝男女の根本の神也とてたちまちに十一面觀音のかたちを現じ

て頓て御すがたをかくし給ふ又ひとつの峰にして神に逢給ふ手には金の矢をもち肩には白銀の弓を横たへたり名づけて小白山大行事といふとて聖觀音のかたちを現じてやがておすがにを口口給ふ次に又一人のおきなに降給ふ我はこれ大己貴の尊と名づく西方淨土のあるじ也とて御すがたをかくし給ふこれによつて白山權現をあがめ給ふ佐羅の早松は本地不動明王なり金劍はまたこれ俱梨伽羅不動の變作なり又白山權現は神代のいにしへは菊理媛の尊と申侍べりきとなりいまこの地にくはんじやうせし事は元和元年の事也もとのやしろの地には名水の瀧あり日外のころにや右典厩公かの寺を替て御下屋敷とせられしに瀧水をつき山の前におとさしめらるゝに更に一滴の水もおつる事なくたえはてたり人みないはく權現の威光に依て瀧は落たりしを權現すみ給はぬゆへに瀧の水絶たりといふいとおろかなる事也しからば今の社の地に瀧あるべし今の地に瀧のなきはいかなる故ぞやをよそ水脈の地の中に通ずる事時にしたがひて替る事古來世の常にありさのみにあやしむにたらす

なにことのおはしますらんしら山の

しらぬながらも神をたうとき

橘樹郡榮興寺

醫王山榮興寺は仁王四十五代聖武天皇の御願として
行基ぼさつの開基し給ふ所なりしかるに聖武天皇の
御ささき橘の皇后ある説に藤原の宮子は天平十一年つちのとの
卯九月十二日とらの剋にあたつて俄に御惱にとりむ
すび給ふ帝をはじめたてまつり公卿臣下大におどろ
きうれへ給ひて諸寺諸社におほせつけてさま／＼御
きたうあり天皇みづから信心をおこして藥師如來に
いのり給ふ次の年かのえたつ二月十二日の夜半ばか
りに一人の僧ありて忽然として天皇の御前にきたり
ていはくわれこの皇后の御惱の事につきて奏聞申す
べきむねありこれより東のかた武藏國にひとつの靈
地ありその地を橘樹きだろの里と名づくかのところに靈石
あり石の中心に小さき池ありこの靈石はむかし釋尊
御在世のとき三國に飛行せしめ靈佛の座し給ひては
んじやうあるべき所にとゞまるべしとのたまひしに
かの石すなはち虚空をかけり日本に來り此地にとゞ

まれりそも／＼此石は釋尊御あしの下をさゝげたて
まつりし大蓮花のその一葉をふみといめて末世にの
こしおき給ふところまことにきどくの靈石として此
地また靈佛安座の勝利也こゝにひとつの伽藍をこん
りうし藥師如來の尊像を安置し行はゞ皇后の御やま
ひすみやかに平癒し給ひことにはまた王城繁榮し國
土豐饒になるべし此事をそうもんせんがためにきた
れりとして座を立給ふとみえしがかきけすやうにうせ
給ひけり天皇これはすなはち藥師如來にておはしま
すべしとて行基ぼさつに尋給ふ行基のたまはくこれ
まことに只人にあらすさだめて醫王善逝にておはし
まさん事なにのうたがひかあるべきいそぎ勅使をも
つてかの國につかはし靈地をもとめ伽藍をこんりう
し給へとありしかば天皇のたまはくしからば藥師の
尊像をば行基手づからつくりたてらるべしとてすな
はち勅使をむさしの國にくだし給ふ行基おなじく東
國にむかひ給ふ同じき四月八日橘樹の里に下著しか
の靈地に尋ねいたり給ふこの日にあたりて皇后の御
やまひたちまちに平癒し給ふことこそふしぎなれや
がてこの山中にわけ入て材木をいだし勅使は伽藍を

立らるれば行基は樂師をつくり給ふ此間に辰巳のかたより夜ごとに燈明をそなへ來るそのひかり大にかがやきて只日中のごとし勅使も行基もこれをあやしみ給ひその來るかたを尋うかゝひ侍べりしに此地をさる事五十餘町にしてひとつの池ありこの池の所をば小倉の里と名づく又ある夜は此地の靈石より灯明の出來る事もありけりまさにこれ龍燈をともしてくやうすといふ事うたがひなしこれらの奇特又おほし記録にのせて都にのぼせらる天皇も皇后もいよくよろこび給ふ事がぎりなく玉の冠をかたぶけてはるかに禮拜し給ふやがて橋樹の郡をもつてかの寺に寄附し給ふ時に天平十二年かのえ辰十一月上旬也すでに七堂の大伽藍こと故なくつくり立て次のとしかのとの巳二月に行基勅使ともに都に歸りのぼり給ふそれよりこのかた數百年の内にやうやく衰微に及びて堂塔かたぶき霧におかされ雨にさらされて破れくづれて退轉におよびたり

こゝに人王五十五代文徳天皇の御宇にあたりて惟喬惟仁とて二人の太子おはします惟喬の親王は紀の名虎がむすめ靜子の腹に誕生し給ふ仁義の道たゞしく

よろづにつけてくらからぬ才智ゆうなる御事也惟仁の親王は忠仁公の御むすめ明子の御はらにてこれもまたさいかくゆうなる御事なれば天皇いづれをわけていづれともすてがたくおぼしめしければ御くらゐの事をもいづかたにゆづりたてまつらんともしめしさだめ給はずつひに兄弟の皇子御くらゐあらそひになりけり慈覺大師はその時に天台座主にて惟仁の親王の御ためにさま／＼御修法ありけるに大師御夢想の事あり一人のあやしき人來りていはく王城よりひがし武藏の國橋樹の郡に樂師如來の靈地あり久しく退轉に及びねがはくばこれを再興すべし然らば王家安全に寶祚長久なるべしと也このおもむきを天皇へそうもんありしかば天皇大によろこび給ひて天安元年ひのとのうし八月中旬勅使をもつてかの地をたづねらるゝに勅使そのかみの事ねんごろに尋ね聞て記録にしるして奏聞せらる慈覺大師はそれより山に歸りたまひ樂師の尊像をかさねてつくり立給ふ次の年つちのえとら秋七月に七堂伽藍いにしへにたがはず造畢つりおなじき八月に大師みづから開眼くやうのためかの本尊を入歩に負せて東國にくだり給ふ

所に駿河の國青島の村に一夜をあかし給ひしにその夜御本尊行かたなくうせ給ふこのよし大師にかたりければ大師のたまはくこれくるしかるべからずさきだちてむさしの國に行いたり給ふべしと案のごとく威徳山の辰巳のかたにあたる大石のうへにさきだち行て立給ふこれによつてこの石を影向石と名づかくて開眼くやうおはりて大師のたまはく我この山の體をみるに靈石靈水四の谷四の峰ありこれ八葉胎藏の德をそなへたり末代までも二世の悉地をまんぞくすべき山なりとて勅使ともろともに歸洛ましゝ前代のきどくいまのふしぎこまゝそうもんありしかば天皇勅宣ありて二たび橘樹郡を寺領とせらるさればこの年の春三月に兄弟の太子御位あらそひの事勝負にかけてさだめらるゝ所に惟喬の親王まけたまひて小野といふ山里に引こもり御出家あり惟仁御くらゐにつき給ふ清和天皇これなりこれひとへに藥師如來の御示現御まもりの威徳あらたなるゆへなりとて此寺をそのかみは醫王山とがうせしを威徳山とあらためらる清和天皇御位につかせ給ひてのち近江國蒲生郡を御寄附ありて勅書をなしくだされけりすで

に當山は聖武天皇行基菩薩の開基なり再興は文德天皇清和天皇の御願として慈覺大師の造營たり三帝の勅願兩大師の修造として利生もつともいちじるきところなり寺内すべて百坊おのゝ替るゝ番衆六人晝夜に本堂の番をつとむ三箇寺九院つねに天下太平の御祈念をいたす事さらにをこたりなし

あなたふとあふけは高き威徳山

衆病悉除のちかひしるしも

日比谷神明

武州豐島郡飯倉日比谷邑の神明は本朝の宗廟天照太神の宮所なり人王六十六代一條院の御宇寛弘二年きのとの巳九月十六日にあたりて御神幣并に大牙たけ一枚この地に降くだり給ふ邑中の老少男女あつまりてこれいかさまにも神明のあまくだり給ふべきしるし成べしとあやしみたてまつる所にいづくともしらず年七さいばかりの女子その所にあゆみきたれりたちまちにまなこの色かはりをどりくるひけるがくちばしりていはく我はこれ神風や伊勢の内外兩宮の神なりこれより東國にあたりて軍の事ある故に常陸の國鹿

島の地に降臨しその軍兵を退治しほどなく歸座の道に及ぶわれこの所に跡をとめんとおぼしめす也この故に二種のしるしをあらはしてまづ汝等に示すはやく宮所をはじめておさめまつるべしいかにもたうとみうやまはゝ末の世までもこのところさかえにぎはひてめでたかるべしわれまたまもりの神となりて夜るのおどろき晝のさはぎ悪事災難をば他方にはらひあめがしたおさまり五こくゆたかならん相模の國のうちに藤原氏のもの齋藤氏のものあらんこれをまねぎて神職の長となして宮づかへせさせよとて神明あがらせ給へば少女も跡かたなくうせにけり村中このきどくによりてうちせきがたくまづ小宮をつくりて御神幣と大牙を宮におさめ奉り齋藤氏の人を尋ねしかば相州足柄の内に齋藤氏の人ありけるを神明の御たく宣にまかせてまねぎよせ家をつくりて神職をつかさどらしめたり靈驗まことにあらたにしていおりたてまつる事こゝろにかなはずといふことなしかくて數百餘歳をくりてのち後鳥羽院の御宇建久四年みづのとの丑のとし右大將みなもとの頼朝卿下野國奈須野にはつかうし給ふとき當地の宇多川にいた

つて頼朝卿の帶給へる御太刀みづからぬけて水底にしづみけり水練のものをめしてこれにおほせてさがしもとめさせらるゝに更になしこゝにかたはらに人ありて申すやうこの川上に神明の宮どころおはしますそのうしろのかたに瀬ありて水みなぎる水の底に物ありて光るこれさだめて尋ね給ふところの御劔なるべしと申す右大將きこしめしてかのおとこを案内者として神明に御參宮ありやがてうしろの瀬にして太刀をもとめ得給ひ直に神明の御寶殿におさめ給ふ宮居は神さびて何となくたうとくおぼしめして御尊敬淺からず一千三百餘貫の田をもつて神明に御寄附ありそれより社頭にぎはひつゝ次の年より神主社僧禰宜等の家々軒をならべて立つやけ神前の祈念をこたる事なく香花灯明たゆることなし貴賤老少あゆみをはこびいのりをかくるに谷のひゞきに應ずるがごとくその利生むなしからずそののち歳霜久しく重なりて人王一百二代後土御門院の御宇明應三年のころ伊勢の新九郎氏茂といふ人有小田原の城主大森實頼を退治して城をのりとりみづから北條新九郎と名のるそれよりいきほひおびたゝしくあまねく關東を打

したがへ後には髪をそりて早雲と號す此時にあたつて當宮の御領をけづりとつて禰宜神社社人等をのゝの飢にのぞみ宮居ことく大破に及びて霧に朽風にたをれ修理するたよりをうしなふて社僧宮司も方方にゆきちりて只その跡ばかりわづかに残り月を重ね年をつもりて諸國亂世の折から打つゝきておさまらざりしかばをのづから參詣する人もなししかる所に正親町院の御宇天正年中に東照權現關東御領知の時にあたりて絶たるをつぎすたれたるをおこし神社佛閣いにしへの故ある所には所領御寄附ましけり當宮も宮領御寄附ありていにしへには似すといへども形のごとくの再興をいとなみ兩神主その外の社人等安堵の眉をひらきやうやく神前にぎはひて燈明の光り和光の月になぞらへ利惣の花ぶさ匂ひをほどこし給ふ寛永十一年きのえ戌大將軍家光公御信敬をもつて當宮御再興まし古へにかはらず宮井奇麗の修造有けり諸人きそひ集りてまうで來る事市の如しこれによつて舊例にまかせ年ごとの九月十六日に神事祭禮おこなふかつうは天下安全の御祈禱をためかつうは武運長久の御ために臨時の神樂をおこなひ

四海太平五く成就萬民安穩の丹誠をいたすと也
あまてらすひかりはおなし飯倉の

内外の宮居神さひにけり

金輪寺

豊島郡王子村禪夷山金輪寺寺光院の社は若一王子の宮なりこれ熊野權現の別宮たり元龜元年に熊野を此所にくはんじやうあり中興東照權現ふかく御歸依ありて社領二百石を御寄附ありけりそれよりこのかた代々の御朱印あり寛永十一年きのえ戌將軍家光公御さいこうましけりこのとき儒官羅浮氏道春宮社の緣起をつくりて社頭におさめられたり當寺に萬病妙應の五香湯あり近國の人民これを信服するに諸病をいやす七月十三日に祭禮あり寺中の十二坊より躍子をいだして風流のおどりあり見物の貴賤はなはだおほし

稻荷大明神はこれおなじく王子の寺内なり若一王子のやしるよりは一町ばかりかたはらにあり當社は關東所々にくはんじやうしてあがめまつる稻荷明神の棟梁なり毎年十二月晦日の夜は關八州の狐どもこの

所にあつまり狐火をともしこの地下人等は燐火のと
ぼりやうに依て田島のよしあしをしるなり二月の初
午の日は諸人參詣していのり申すとかや

王子村の稻荷の狐鳴こゑは

こんくうんしさいはひわいと

愛宕山

そもく山城國愛宕山は地藏龍樹攝化の地として唐
の五臺山の風景に似たりこゝに慶俊法師はもとこれ
河内國の人なり俗姓は藤井氏の末孫なり出家して和
州の大安寺に住せしに人をあはれむ心ざしふかく貧
きものにはみづから衣をぬぎてあたへ飢たるものに
は食をわけてたすけらる天應元年に僧都になされた
りそれより世をいとひ名利をうらみて大安寺を忍び
出つゝ山城國愛宕山に引こもり勝軍地藏ぼさつを安
置して此山の第一世の開基たりそのかみ大寶年中の
事にや役の行者と越の大德泰澄とおなじくこの山に
のぼり給ひしときに日良善界太郎坊等の諸大天狗あ
つまりて大杉の木の梢にありはなはだ行法をさまた
げんとす役の行者泰澄これを降伏せらるこゝにおひ

てその杉を清瀧の明神とす太郎坊はこれ高雄の眞濟
僧正なりとかや然るに勝軍地藏は修羅鬪諍の瞋恚を
調伏して太平靜謐の守護をくはへ給ふ忍辱慈悲の尊
體なりその利やくあまねく衆生にかうぶらしめ給ふ
が故にとほく東關江府の地に勸請ありその徳いよい
よたかくして太平安全のまもりあやまち給はず此社
司もとは天台宗にて侍べりしが本山よりむつかしき
事共いひかけたりしかば宗旨をあらため今は眞言宗
となりながく本山の通路されたりとかや

愛宕山杉の木すゑに雪ふりて

さなから枝にかゝる木綿四手

吉原

爰は傾城町なり大道より八町ばかりの堤を行て北に
むかひて門あり只一方口にして三方は堀切なり門の
内に江戸町二町目すみ町新町京町あげや町うちむか
ひて六町ありをよそ傾城傾國の根元ならびに多少の
痴者傾城に心をまよはし名をうしなひ身をほろぼす
事京も田舎もみなおなじきありさまどもそのかみ東
海道の道中記を編ける時に粗しるしつけ侍べりけれ

ば今又かさねていはんは老言ならずやさりながら能事ならば強異見をも重ね／＼すべしその故は世の人生れながらにしてつひにひとつのあやまりなしといふ事あるべからずあやまりをあらたむる時はまさに聖賢の道にちかし若は書傳をよみあるひはよき人の異見を聞ても蛙のおもてに水をそ／＼ぐがごとく石に炙治をするがごとくに跡かたもなく打すて、身のあやまりをあらためずばこれ下愚の性なればいかにともすべきやうなしと云かるに世のわかきともがらこの道にまよひ出るところを案するに或は一座のたはぶれ一度二度はおのこたらんものはみるべき道なりと思ひあるひは人のほなしを聞て心のおごりいで又はあゝき友だちにいきらかされ又は人にいざなはれてきたなびれぬ體をつくろひまたあるひは分別だてするものかなと人にいはれんもむづかしなど、おもひて心を引たて、しゐてその座につらなれども初心なればなにの興もなくして疊の端の塵をむしり小袖の綿がみを捻て立かへりあまりの本意なさには是非とも今一度行ておもしろく興をもよほしてなどおもひたくみてたま／＼ゆくほどに次第にかのかたの知人も

いでき宿のかたもねんごろに遣手も言葉やさしく成まゝに我ははや粹になりたりとおもひ友をさぞひきそはれてゆくその中にかしこき人は智恵才覺をたのみ藝能ある人は藝能をたのみ自慢をいだし美男はおとこぶりをたのみあしき男は心だてをたしなみいかさま何にても傾城におもひつかれんとひそかに心にくくむほどにわれおぼへずしてかれに引こまるゝ也されば智恵才覺もぎいのうも美男も心の味だてもみなこれ傾城のためわが焼草となる也かれらさらに好色をことゝせんや男に飽満たる傾城の身としていかでか眞實に心をうつす事あらんや假にも我にまよひて心をうつすかとおもふはわがのかたにまよへる故なりそれにけいせい體と堪がたきねんごろぶりをみすればやがて心空になり有頂天にとびあがり瓢金の痴ものといよ／＼成はて一句のしなせこと葉を聞ては祖師の一則にも替がたくおもひ一紙の艶書を得ては三跡の名筆も及ばざる心ちして箱の底におさめ膚のまぼりにかけます／＼かれにおちいり後には身しうすらぐゆへに味のわるき札をいれられ意氣のよからぬかづきに逢て世のわらひぐさとなりゆく也

たかきもいやしきもとめるもまづしきも此道にたち入ほどのしれものは心そらになら柴の戀の重荷を背をひ身はへうきんに鳴瓢のうきにういた輕口をたゝきて物ごとしみゝとしたる事なくねてもおきても只その事のみにして花のあしたにはいなさんすかのこと葉をわすれかねてたもとを春雨の雫にぬらし月の夕べにはかいどりまへの立すがたをおもひやりて身を木がらしの風にふわつくすべてあらゆる遊興此事の外は露おもしろからず人と寄合てもそのたぐひならぬ友をいやがりその事ならぬ囃をきらひて知たるどち座をとりのき私語うちわらひ子細らしくつばやく世のあまり物人のきらへるすて者をあつめてこれを太鼓とさだめ別魂にしたしみさしもなきろくしやく風情が部屋を中宿として行かよひ常は實目にかまへて神妙なる人もこの座に染いりてはうそをつきせいもん立ちらし表裏輕薄をかざるまことに人間世の作法にはづれたり又古しへより戀する人は心やさしく物のあはれをもしりなさけもふかしといひつたへしかども傾城の道に戀するものはそもしらさ漸々にひすらてわる利根になりもてゆき日ごろは萬事し

とやかに人がら好とみゆるもわれおぼへずに佞人となる也そのあひだにはり合の口説にかゝりて悴我をおこしひかれぬ首尾に物をつるやしわが身過におこたるほどに身上は日を追てをとろふる事たまり水の炎天にかはくがごとく金銀は時にしたがひて耗事やすりにておろすに似たり借錢の淵に首だけつかり親をたをし主をたをし一跡をたゝきあげて桶ふせになるぞあはれなるされば傾城はとほく天ちくには龜茲國よりはじまりもうこしには三代の時よりこれあり日本にても久しき世よりこれあるものにていにしへは江口神崎などの津々浦々の泊りゝにありて旅人をなぐさめけり流れの女といへるは此事也そののちは諸國退治の軍兵の野山に陣をはり日を重ねて心の屈するともがら氣をいさましめんためにこれ有けり世の太平なるまゝに人の心をごりたはけて此道に味だてを初め物をとることの策をもつばらとす身に綾羅をまとひ沉檀を薫らかしおもてに白粉をほどこし唇に燕脂をぬり柳の髪たをやかにみどりの髪ゆるはしくあをきまなじりをめぐらし白き手をふげけだかき聲にてぬれたること葉をいだす時は天人もや

うがごとしぼさつもこゝにあらはれ出給ふかと立あしもおぼへぬ心ちすれどもその心ねをおもひやれば飢たる犬の尾をふりて食をもとむるがごとしかゝる所にそれ者のいはくつらく世の中の有さまをみるにノつねにわかき時なし老のすがたとなる事日かげのうつるよりもすみやかなり一生は夢のごとし誰あつて百年をたもちたる何のわざくれ一寸さきは聞なり白骨の樂をせしためしもなし今日の樂こそうれしけれと大磯の虎御前は十郎祐成をいさめし也そのうへまた此道をもてあそぶを叱りそしるはわが身のえせぬ故なりこれ利はつにてそしるにはあらず只法界客姫といふもの也家ごとに女房をむかへて妻とさだめをきたるもこれあげづめの傾城狂ひにあらずやそれに子をうみては造作をかけ程なく年よりては生ながら山の神といはれ老婆になれどもえはなれずして足まとひになるめんだうさよ只わが氣にすきたる傾城をほしきまゝによりどりにしてあたらしくはなしたるははるかにまさりたりまことに日々にあらたに日々にあらたにまた日々にあらたなりといへるはこの道の事也こもちくさきあたりは心がふるくなりて

年も一倍よるとおぼゆるにさのみに吉原通ひをしかり給ふなわが讀歌を聞給へとて
傾城に契りてかよふよし原を

あしやといふは難波人かも

といひければ口をとちて三ツ四ツうなづきてわらふばかり也

津の國のなにはしらねとよし原を

世にはあしやといひつたへけり

江戸名所記第七終

兵庫名所記序

予看_ニ達和於坊市_一之次有_下示_ニ兵庫名所記_一者_上閱_レ之雖_下匣表不_レ充_ニ於一州_一其畫中有_ニ山川江流_一也有_ニ曠野村落_一也而神祠梵宇廢宮荒墳森々亦既多哉將以區_ニ別乎方程_一探_ニ討乎故事_一若夫貴客之歌章騷人之詩賦及山翁漁父之談閭巷傳聞之語共收並貯已既而採_レ之不_レ得_レ不_レ廣則載_レ之亦不_レ能_レ不_レ冗也然裁制之工最得_ニ簡而潔_一予嘗遊_ニ於其地_一目_ニ擊厥_ニ二三_一焉今也按_ニ此冊_一索_レ之則不_レ賴_ニ縮_ニ地之術_一而瞭_ニ然乎几席之間_一美乎吾子之勤焉且夫家務煩猥之餘往來會晤之徒無_レ非_下潦_一倒杯洒_ニ沈_ニ惑楸枰_一浪度_レ日之事_上者而尙作_ニ此好事_一苟可_レ謂_下有_レ所_レ用_レ心而不_ニ徒消_レ日者_上哉矣

寶永庚寅端五日

艸澤醫生識印

凡例

- 一 初丁に大概の總圖をして最方角を引
- 一 上の卷は兵庫間近名所を先として長北の方西之宮まで五里の内且て又廣田より上神崎まで道しるべに荒増の古迹を同卷の末に追加
- 一 下の卷は兵庫より南西の分攝津播磨兩國の境川まで行程凡二里名所舊跡にて終る
- 一 名所の古歌諸集より出し載るときは其數多し一二首宛置_レ之
- 一 所々の年數を積り兩の卷後丁に集む亦諸方法も附たり
- 攝津 故老俗傳云_{アノノサクノ}天探女神天磐船_ニノリ此國_ニ攝_{ヒトイ}タル高津ノ號ヲ取テ攝津ノ國ト稱ス亦漢書云攝然トシテ天安云々字彙云攝ハ靜謐ナリ兩儀相共ニ要津ノ連續ニ取テ大上國トス上管十三郡所謂
- 一 住吉 一 百濟 一 東生 一 西成
- 一 島ノ下 一 豐島 一 川邊 一 武庫
- 一 島ノ上 一 八_タ部_{今矢田部ト} 三字_ニ作 一 能勢
- 一 兔原 一 有馬
- 此記の郡分は矢田部郡兔原郡の二郡なり又武庫川の邊の兩郡の内も加はる也 (方角大概圖略_レ之)

兵庫名所記卷之上

一福原都の事

抑攝津の國矢田郡福原の庄兵庫は應保年中に築島成就して後平相國清盛入道淨海の沙汰として此所に都を經營し既に事成て治承四庚子年六月二日人王八十一代安德天皇^{今年三歲}一院上皇攝政殿をはじめ奉り太政大臣以下月卿雲客平家には太政入道を初一門の人其外百官人民ことごとく山城の國平安城より此福原に移り給ふ池大納言賴盛の山庄皇居と成^{荒田村古跡あり}同九日新都事初有べきとして上卿には徳大寺の左大將實定土御門宰相中將通親奉行には前左せうべん行隆多くの官夫を召ぐして和田の松原西の野をてんじ九城の地に割給ふしかるに一條より五條迄は有て其下の地なし公卿まぢく僉議有しかども百敷の政事行れず依て又變改ありて同じき年の十一月二十一日舊都に還幸なし奉る太政入道は此地にしばらく住給ふ

福原新都地形の事源平盛衰記に云北は神明垂跡生田廣田西の宮各甍を並たり盡せぬ御代のしるしとて雀の松原御影の松千代にかはらぬ緑なり雲井に晒す布引の瀧の白玉岩間につらね後を願れば翠嶺の雲を狭む曉の嵐の漠々たるを吐前に望めば蒼海の天をひたせり夕陽の沈々たるを吞り湖水漫々として遠帆雲の浪に漕まざれ巨海茫々として眺望煙波に眼を遮り月の名を得たる須磨あかし淡路島山おもしろく螢火燃るあし屋の里の夏の暮いづれもとりに心すみたる所なり

一築島の來由

太政大臣平清盛公此兵庫の浦上下往來の船風波の難儀なからんが爲にとて應保元年二月上旬より始て島を築しめ給ふに同八月二日大風に波を動し潮さかのぼつて元の青海となれり重て同三年三月下旬阿波民部成良奉行として築けるに又南風おこつて忽白浪をたゝき又島を詢りうしなふたり既成就なりがたし故に時の博士阿部の泰氏を召て問給ふに天文地理の妙術を以てしばらく考へ申けるは此島通例にしてなりがたし人柱を入て築しめ給ひなば成就すべきと也是

に依て當國生田の小野に關をすへ往來の旅人をからめ捕へしに其難限なし爰に平相國の家童に松王兒童いまだ若年といへども諸人の難を哀み我一人此島に入其命に替らんと誓ひ馬に白鞍おき打乗海内にいりしとかや且て又數の石に一切經を書寫し彫附て海底に入し誠に龍神納受有けるにや其後つゝがなく此島成就して往來の船恐なく國家の寶末代の規模と成ける依て經の島とぞ名附たり又築島興立の事承安三癸巳年ともあり

一築島寺 今兵庫町家の内東海ばたにあり

淨土西山派經島山來迎寺と號す平清盛公草創なり應保元年七月十三日島供養あり往昔は七堂伽藍の道場なりしを建武の比破却するよし申傳

一 本堂阿彌陀ふしんの作

一 觀音堂和田岬海底よりあがり給ふ御佛なり

○靈寶

一 人柱の御影松王十七さいの木ぞうきよりり公御作

一 清盛鏡の御影五十四歳の時

一 縫の釋迦幡金綱變すしにてぬい給ふ

一 辯財天像弘法大師傳來

一 梅の實に伽藍彫刻の像

此外什物品々有

一經の島 築島總名也建武の比脇屋右衛門佐義

助陣所又尊氏はより西國へ落給ふ

一佐比江さへ 兵庫北濱はづれ西

年後撰を経てにこりたにせぬさひへには 忠 岑

玉も茹ゑていまそすむへき

一若狹守平經俊塚 右さびへのつゝき印の木

あり

壽永年中一の谷合戰落城の日那和の太郎に討れ給ふ

一湊川 兵庫北の出口門より一丁餘街道の川

千載 みなと川夜船漕出る追風に 道 因

夫木 鹿の聲さへ瀬戸渡るなり

湊かはうは波はやくかつきてて 爲 相

しほまで濁る五月雨の比

(繪略之)

一小宰相の同石塔 湊川の上鳥原村願成寺内

に有此つばねは越前の三位通盛の妻藤原刑部卿範賢の女也通盛一の谷にて討れ給ふを歎き壽永三年二月十四日船より身をなげ果給ふ所縁の者爰に夫婦の石

塔をたて今に古跡残れり

一湊山 川の水上なり

みなと山とはに吹しは風に 徳大寺左大臣

繪島の松は波やかゝらん

一雪見の御所 街道より山の手湊山すそに有

福原都のとき清盛公雪見の亭を造り給ふ舊跡なり

一鬪鷄野 一名は兎餓野

今夢野村と云兵庫より十丁計り西山の麓に一村あり

氷室を始て作れる所也當國島の上郡にひむろ村あり

此所氷室の根元といへども其證つまびらかならず夢

野のひむろは古記詳なり

つけの野に大山守のおさめたる 中務御子

氷室は今も絶せさりけり

古へのつけ野の御狩それよりや 同

氷室のおものたて初けん

日本紀曰、仁德天皇の御宇額田中彥皇子鬪鷄野に狩し給ふ時皇子山より望て野中を見給ふに窟あり御弟稻置大山王を召して問給ふに是は氷室也と皇子のいはく其おさむる事いかに又何にかもち稲置のいはく土を掘て丈餘に草をもつてそのうへにおほふて敦

茅荻をしきこほりを以て其上におきすでに夏月を経

て泮す其故にすなはち熱月にあたつて酒にひたし用

ゆとなり皇子其こほりを持來り給ひ御所に奉る天皇

よろこび給ひ是より以後季冬にあたつてかならず氷

を納め春分のはじめにいたりて氷をひらく是より氷

室と申ことはしまれり

山家集

夜を残すねさめにきくそ哀なり

夫木

合ては忌と侘らんうは玉の

夢野の鹿のもろこゑになく

又日本紀云、仁德天皇七月八田の皇女と高臺にまし

まして避暑給ふとき毎夜つけ野より鹿の音聞ゆその

聲さやかにしてあはれとおぼしめす月盡に及で鹿の

こゑきこへず天皇后に語せ給ふ何のゆへか今夜玄か

の聲きこへざると明旦て猪名の縣の佐伯部菟直を献

す天皇膳夫を召て問せ給ふ牡鹿なりと奏すいづくの

鹿ぞと兎餓野の鹿なりと申す天皇かならず其鳴し玄

かなりと思召て后にかたらせ給ひ朕この比ものおも

ひつゝ鹿の聲を聞て慰しにと大に御恨有て佐伯部を

安藝の國淳田へ流し給ふ

又物語に昔一人あり此つげ野にとまりぬ夜の明がたにきけばかたはらの藪の内に男鹿とおぼしきが牝鹿に云こよひ我背に霜のふるよと夢をこそ見つれといひければ女じかかといふゆう能々憤べしかり人などに逢て皮をはぎ鹽にまかれんと云て鹿はおきて行けり不思議に思ひ跡より忍びつけてみれば朝立する狩人此鹿を射ころし皮をはぎて鹽打などしけるとぞ是よりつげ野を夢野といふ

又淡路の國野島に通ふ鹿の事攝津風土記に有畧す
一 輦越 兵庫より北西夢野より南二丁坂口なり

播磨の國三木室山へ至る所也一の谷鐵拐が峰の半腹北より南にひらき出る所なり人たやすく超ことを得ず道せばまつて大鳥のはねをのすことかたし此ゆへにひよ鳥ごへの名あり辨慶力主義經乃資椎などいふ所あり壽永合戰能登守平教經陣所

一天王谷

兵庫より半里程北有馬溫泉にいたるかい道より谷口に午頭天王の宮あり所祭祇園の御神素盞鳥尊なり是よりありま湯の山へ六里ばかり山道也

一 安徳天皇假皇居

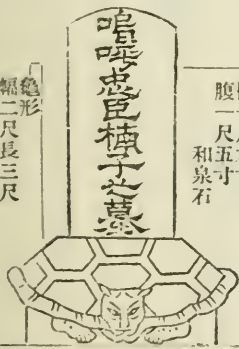
荒田村にあり街道の上兵庫より八丁計福原都遷りの時皇居なし奉る池の大納言平の頼盛卿の山庄の所也
一 差方塚 荒田村北東畑の中に塚印の木有治承四子年六月九日福原新都の時五條大納言國綱朝臣うけたまはつて此塚を築是より地形わり出し里内裏を造られりとなり

一 楠河内判官橘正成塔

兵庫より北街道の上手坂本村の前畠の中谷比迄は塚印梅松の二木ありしが元祿四辛未年水戸黃門光圀公墳をさいこう有て碑石を建給ふ

其圖

塔石高三尺八寸
横一尺六寸
腹一尺五寸
和泉石



龜形
幅二尺長三尺
其幅同面の臺
は石高六寸
各京白川石

此中殿
高二尺
幅五尺
四寸四
方
御影石

此どだい四
つ石を以て
すり合せ
高五尺
方一丈四面
當國
みかげ石

土臺の下の地をほりて石棺をうづむ其棺中に互一尺二寸の圓鏡をおさむ其銘

楠正成靈

源光圀造立

右表の銘

嗚呼忠臣楠子之墓

碑石裏の文に云

忠孝著乎天下日月麗乎天天地無日月則晦蒙
否塞人心廢忠孝則亂賊相尋乾坤反覆余聞楠公諱
正成者忠勇節烈國士無雙蒐其行事不可概見
大抵公之用兵審強弱之勢於幾先決成敗之機
於呼吸知人善任體士推誠是以謀無不中而戰
無不克誓心天地金石不渝不爲利回不爲
害怵故能興復王室還舊都諺云前門拒狼後門
進虎廟謨不藏元兇接躍構殺國儲傾移鍾虓
功垂成而震主策雖善而弗庸自古未有元帥

如前庸臣專斷而大將能立功於外者卒之以身
許國之死靡它觀其臨終訓子從容就義託孤寄
命言不及私自非精忠貫日能如是整而暇乎
父子兄弟世篤忠貞節孝萃於一門盛矣哉至
今王公大人以及里巷之士交口而誦說之不
衰其必有二大過人者惜乎載筆者無所考信不
能發揚其盛美大德耳

右故河攝泉三州守贈正三位近衛中將楠公實明微
士舜水朱之瑜字魯興之所撰勤代碑文以垂不
朽

右碑文十行跋文二行都合字數三百三十字也

同雨露の覆は瓦葺三間四方也

一菩提所 坂本村西はづれに寺あり

醫王山廣嚴寶勝禪寺と號す後だいご天皇御勅願開山
煥惠明極和尚草創本尊藥師如來堂を瑠璃殿と稱す正
成の影像ならびに一代記あり

正成戰死建武三年丙子五月念五日

開山明極寂同九月念七日

と當寺佛前左右連板に書す

楠正成同弟正季此寺の客殿において一家十六騎郎從

七十三人自害と云正成四十三歳

廣嚴寺北東に大悲山安養寺と申て貞享年中當郡御領主御廟前御菩提寺也

一宇治川

兵庫より八丁北街道の小川此水上通り宇治野村古き名也所中宮村と申所あり

一再度山大龍寺

兵庫より北にあたる茂みの高山也坂口右宇治野村也
是より山中二十丁計

本堂如意輪觀音 此外諸堂あり

抑當山は始摩尼山と申稱徳帝の御宇神護景雲二年亞相和氣清麻呂瑞夢によつて行基僧正一刀三禮の如意輪觀音自在の像を得給ひて開創し給ふ

又延暦年中に弘法大師此山に來り尊像に求法の事を誓ひ入唐し給ひ夫より願望正に満足し歸朝あつて大同年中ふたゝび登山ありしゆへ再度山と申其後大比丘善妙中興の開祖となり毎年三月十八日佛會ありて諸人群參す

觀應二年赤松判官信濃彦五郎兄弟籠城の所也多々部と太平記に有

一蛇谷 ヒヤタニ 同山内にあり

弘法大師入唐の時既に船を浮む障魔惡風を吹ふねをくつがへさんとす時に大龍出現して是を守り障化すすむ事を得ず終に唐に入歸朝の期に及て海上又しかり此浦において大龍飛て當國に去是則觀世大悲の冥助ありと登山し給ふ大龍又此谷に現すよつて此所を蛇谷と云

一神戸村

宇治川のつゞき往還の村太平記にこゑ部とあり西の口を走水次はしどを二ツちや屋東を神戸と申て三所相つゞく此所より諸國の回船ふなもちおほし和名類聚に神戸村と是あり

昔神功皇后三韓退治歸朝ありて是にいたり給ひて異敵の首を實見有し故頭村かづへと申と云傳へり

一花熊城跡

かうべ村の上の一村なり

此城の事永祿十丁卯年織田信長公のさたとして津の國矢田部郡花熊に城を築く荒木攝津守村重に仰付らるゝ家臣野口與一兵衛奉行として一ヶ年が内に出來ず追手はかい道の方又北の口とも二方也からめ手は西口也元龜年中荒木志摩守村正是を預り天正三年迄居城し志摩守子細有て藝州毛利家へ加り其跡を又與

一兵衛一ヶ年半居城す此間に大阪門跡籠城の事に付西國諸旦那より兵糧を運送するを信長公より野口に仰て是をとめらるゝ大きに取合あつて船軍にて野口は討れけり其跡へ紀州の一揆雜賀孫一根來の渡部藤左衛門此城へ籠る所を池田信輝入道勝入向ひ給ひて度々取合あり終に天正八庚辰年七月二日頃落城す今に城郭の古跡有

一河原兄弟塚

神戸村より三丁計東島の中に塚印松二本有源平壽永一の谷合戦に武藏の國の住人河原太郎高直同次郎盛直生田の杜追手に向ひ先陣して逆茂木をのり越平家の城内に入しに讃岐の國の住人眞鍋五郎助光が矢にあたつて兄弟共に討れけり義死の賞によつて源家治世に反しとき頼朝公より嚴重に菩提寺を建給ふ天正年中まで寺院ありしよし今は塚印計也

一生田森

神戸村より八丁計街道より上手也

詞花

君すまは問まし物を津の國の

僧都清胤

生田の杜の秋の初風

夫木

ききいおきし生田の杜の秋風も

俊成

萩のはよりやみにはしみけん

壽永源平合戦の時平家一の谷の城の追手として大將軍新中納言平知盛本三位平重衡此所北の山の麓より南海邊まで逆茂木を曳垣桶をかき相守る是より西南一の谷播磨の國鹽屋村まで凡四里が間を城内たりしかや

一同大明神

もりの内宮居有 神主後神氏

祭神一座

稚日女尊 攝社左右に四座

「天照太神御妹也と神祕」

日本紀稚日女尊坐于齋服殿而織之神之御衣也神功皇后紀云伐新羅之明年二月稚日女尊誨之云吾欲居活田長峽國以海上五十狹茅令祭之云々

御位貞觀九年十二月十六日從二位

毎年八月二十日祭禮あり福原の庄村民氏子なり

一飯梅

右社内にあり

一の谷合戦のとき梶原父子二度のかけの時嫡子源太景季梅花の枝をゑびらにさし歸り此所にさし置しと

申傳

玉葉

鳴捨ていつち生田の郭公

讀人不知

名残をとむる森の下影

一梶原井

内社内に有

右戦場のとき梶原平三景時此井の水を結びて武運を生田の神に祈るよつてなづく

一敦盛萩 内境内に萩有

太夫平敦盛此所の萩を愛し和歌を作られし俗語有又敦盛の遺子あつて都御影堂より父にあはんとて一の谷へ尋ね來り給ふ幻父に此所にて對面ありし去じ比までは古跡有し今は萩ばかり有

一城ケ口印の石

生田の森より三四丁計西北に一村あり梶原景時二度のかげ此所印の石有

一北野天神 同續き北野村に有

治承年中五條大納言國綱勸請と申此宮和田のみさきより龍燈あがるよし申傳ゆ

一生田川 森より東街道の川なり

北より南へ流れたる川にて布引の瀧のながれ也生田の池も此ほとりに有むかし水鳥を射しその謂れ大和ものがたりに見へたり求女塚の所にくわしくゑるす

千載

戀わじぬ千沼のますらをならなくに通 經

新續古今

津の國の生田の川の水上は

基隆

今こそみつれ布引の瀧

一生田山、同池、同海、同浦、同磯、證歌多し

夫木

衣笠内大臣

郭公生田の山の七めぐりめくり行ても又も鳴らん

同

康光

月やとる活田の池は蘆のはに霜吹かぬる秋の風かな

玉葉

辨乳母

おくれては生田の海のかひもなし沈むみくつと共に成なん

六帖

讀人不知

津國の生田の浦の幾度か

我いたつらに行かへるらん

夫木

爲家

波しらむ沖の早てやつよからし

生田の磯によするとも船

一布引瀧 生田川の水上なり

瀧二段にして流る間二十三丈餘海邊より見るもの布をさらし地にはへたるがごとし

千載

水の色のため白雲と見ゆるかな

六條右大臣

誰さらしけん布引の瀧

新古今

久かたの天津乙女の夏衣

有 家

雲井にさらす布引の瀧

夫木

布引の瀧の白糸夏くれは

定 家

絶すそ人の山路たつぬる

平家物語云、小松の内府此瀧へ詣で給ふ時備前の國

の住人難波六郎經俊重盛の命によつて瀧壺龍宮城を

見届たる事を書載する

瀧の麓に瀧昌寺と申寺あり布引山と號す俗にたきの

寺と稱す本尊ばとう観音ゑんの行者の作惡源太よし

ひらの影像有

一砂子山

兔原郡熊内村の上瀧のほとり

夫木

蘆の屋の砂子の山の水上を

後九條内大臣

のほりてみれば布引の瀧

一小野坂

同崎 生田川の東小坂有崎は川すそ

也

堀百

旅人の道さまたけにつむものは

師 輔

生田の小野の若菜なりけり

夫木

問ねとも誰ためとか津の國の

經 平

生田の小野にわか菜つむらん

又生田の若菜毎年正月に内裡へ献す今生田村のつゝ
き中尾村より奉之

一敏馬浦

脇濱村岩屋村との間濱邊を云淡路の

國にも同名有

三犬女とも見宿女とも書く

續千載

よそにたにみぬめの浦のあま人や

師 光

たゝいたつらに袖ぬらすらん

新續古今

頼めこし里のしるへも問かねて

定 家

みぬめのよそに歸る波かな

夫木

波かくるみぬめの崎の友千鳥

兼 宗

たつかとすればまたきなくなり

一生田里

夫木

稻葉ふく風もことにそ身に寒き

俊 成

生田のさとの秋の夕暮

夫木

秋風に問まし人の音つれも

爲 家

生田の里は冬枯にけり

一摩耶山

兔原村畑原村上野村の上

兵庫より良に當る麓まで凡二里坂の口上野村に焰魔

堂あり是より坂の間十八丁三ヶの休所あり七曲をす

ぎ仁王門にいたる内外の石の階七段都合二百十壇

本堂南向十一面觀音 夫人堂 多方塔

其外諸堂あり

抑當山は天武天皇の御治世天竺法道仙人の草創する所也本尊觀世音は御たけ三寸の靈像是則天竺佛會座において閻浮檀金を以て釋尊四十二の御時是を鑄さしめ給ふ十一面尊像也法道是を得て日本に持來して大悲有縁の靈場を尋ね當山に留れり仙人自又觀世音御長壹尺六寸なるを彫刻して彼金像を胸中に納め今本堂に安置し給ふ也并に摩耶夫人の像を別院に居是をもつて佛母摩耶山切利天上寺と號す額弘法筆

夫人堂 寺記に云梁の武帝のとき女人難産の愁に逢て死する者其數しれず帝是を悲しみ給ひ摩耶夫人の影像二軀一刀三禮して彫刻し給ふ一軀四寸八分梁の帝都に納め一軀六寸五分弘法大師入唐歸朝のときこれをを得て當山におさめ給ふ

往昔は大伽藍として子院僧坊三百宇に過たり四來の緇素くびすをつぎ誠に攝州第一の名刹たりし星霜千年に移り古儀漸廢れ今坊舍僅なり寺領あり

一本光院 一福正院 一王藏院
一蓮華院 一大乘院 一明王院

一普門院 一慈眼院

元弘年中摩耶の城に赤松入道圓心範城の所也山岨しく巖石峨々として今もなを古跡殘れり

一求女塚 又處女塚書 乙女塚

おとめ塚は女のつかうなひ乙女と云もとの塚は二人の男小竹田男千努男也

右塚三ツ有 一ツは生田川東味泥村にあり、一ツは遠目村に有、一ツは住吉川西御田村に有各十丁計をへだつ

萬葉 古への小竹田おのこの妻とひし 福麻呂

同 うなひ乙女の置築は是

同 蘆の屋のうなひ乙女のおきつきを 同

同 行人にみればねのみしなかる

同 塚の上の木枝なひけり聞かるとよ 同

ちぬの男にしよるへけらしも

此謂れ大和物語歌林良材集に委く見えたり

むかし津の國あしやの里に住女ありうなひ乙女と申しとふ男二人有けりひとりとは同國東原氏小竹田男今

一人は和泉の國千努氏ますらおとなん云けるその男

ども年の比顔かたち心ざままで同じやうなり女おも

ひわづらひぬ生田の川にひらばりを打そのよばふ二人の男をよびて女の親の云やう此川に浮て待る水鳥を射てあて給はんかたへ奉らんと云男どもいとよき事とているにひとりは鳥の頭のかたを射つ今ひとり尾のかたを射ける何と云べくもあらず女おもひきりて

住佐ぬ我身なけてん津の國の

生田の川は名のみなりけり

と讀て此川へ身をなげね二人の男もつゝきて同じ所へ身をなげ果おはんぬ親いみじく悲みて取あげはふむりぬ男のおや共も聞傳ひ來り此女の塚のかたはらに塚を作りうづむとき津の國の男の親の云やう同國をこそ同所に塚をせよ他の國の人は争か此所の土を犯べきやと妨けるに和泉の親やがていづみより船にて之をはこび終に埋めける此塚に木楊の小櫛をうめければ生つきけり今の世迄も土の色かはりて有けり

堀百

求女塚おまへにかゝる柴船の

俊 頼

北氣になれやよるかたもなし

建久年中小山田太郎高家求女塚におゐて討死又新田

義貞是より都へ落給ふ所なり

一船寺 八幡

大石村少上て杜あり正八まん宮を祀申當國波豆川村大舟寺をさして船寺とも云よし

名寄 船寺にのり浮ふなり夜もすから 俊 頼

一弓^つ弦^{はかり}羽嶽 遠目村の北

むかし神功皇后三かんを征し給ふ時まづ弓箭を試み給ふ此ゆへに此號あり今讓葉とも稱す源義經西國下向の期此浦にて難風に遇給ふ時に辨慶是をいのり泥る又あはちの國山嶽にゆづりはが嶽あり

一御影の森 雀松原

兎原住吉村より南西濱邊御影村の間濱邊小松原をすすめの松原と申森は松原のうち也北に御影山有

續古今 世にあらは又歸りこん津の國の 基 俊

御影の松よ面かはりすな

御影山所傳云、聖德太子母后三寶を敬ひつねに彌陀を念じ生身の尊容を拜し奉らん事を誓ひ難波の岸に登つて西方淨土を遙拜し給ふ誓願滿るにおよんで當山のいたゞき光明をはなち紫雲近里にたなびきて異

香四方にみちて彌陀尊容嚴然たりよつて御影山と稱す也

山越の彌陀は則此ろんゑんなりと云へり

御影山卯の花月よ露ながら
夫木 西園寺

てるや千くさのふるき神かき

一 兔原住吉 同社

ひやうごより三里かい道の村此所茶店數多あり社は村中川は村はづれ住吉川也

祭神四座所謂

住吉 ウハヅ、イサ 表筒男 中筒男 下筒男

天照太神

神主横田氏

田霧姫命 ミギリ

神功皇后

皇后三韓きてうの時住吉の荒魂玉體にかゝり給

ひ初て爰にいたり假に鎮座の所なり俗に元住よ

しの社といへり郡の號によつて兔原住吉と稱す

毎年六月廿九日大神事とす

礪石 スレ 神前にあり

かねての松 馬場の並木の内に有

五百崎 おどき 方角つまびらかならずといへども一説兔

原郡魚崎を云住吉川の末更に一村あり

應神天皇の御宇諸國におほせて五百艘の船を造らしめ給ふ武庫の湊 兵庫の湊を云 に入そのふね盡く爰に集へるを以て五百崎の號ありとかや

一灘田浦 夫木 大石村より蘆屋の間濱邊をいふ

綱手行なたの小舟や入ぬらん 園 信

難波の田鶴の浦わたりする

同 蘆の屋の灘のしほ風心あらは 光 明

磯山櫻浪にちらすな

一山路城跡 片町より西、道より山の方田の中に跡あり此所赤松信濃判官彦五郎則實龍城の所也

同湯、兔原郡住吉、野寄、岡本、横屋、魚崎、西

青木、田中、

此村々を山路の庄と云此邊海ちかく潮を汲て湯とす

詞花集歌の詞書に出たり

播磨守に侍りける時三月計に船よりのほり侍

りけるに津の國山路と云所に參議爲道朝臣潮

湯あみて侍ると聞てつかはしける

詞九 ながるすな都の花も咲ぬらん 平 忠 盛

我も何ゆへいそく出舟そ

一本庄稻荷社

森村に祭むかし此神幣深江村の海邊にながれといま
る森村の民宅にかへりかたる村民あやしみ群をなせ
り折節麥を茹ほして民おのゝ杵をたづさへながら
神をむかへ森村に社を建本庄の庄中氏神にあがめ祭
毎年四月卯の日神拜あり

躰松 おどり ふかえ村西はづれに有

昔此所にて森村の稻荷神事杵をたづさへおどりをも
よほし御神をいさましめける所と云

一葦屋里

かい道の北山ぎわの村也あしや川あり

續後撰

問かしの蘆やの里の晴る夜の

少將内侍

わかすむ方の月はいかにと

續拾

ほのゝと我すむ方は霧こめて

定家

蘆やのさとに秋風を吹

續古

いつもかく淋しき物か津の國の

家隆

あしやの里の秋の夕暮

業平朝臣假居古迹 此蘆屋の里行平卿領地たりし
故に業平卿も暫く遊歴の處なり

新古今

晴る夜の星か川邊の螢かも

業平

一藤榮屋敷

古迹村の中に昔あしやの里に及

び近郷七百餘町の領主藤ノ左衛門尉病の床に臥て一
子月若を伯父藤榮か猶子となして相續の事を遺言し
終に卒す藤榮咨にして遺跡悉く横領せり因て月若孤
獨の身と成れり最明寺入道時頼公諸國をめぐつて貧
狼はういつの族徒をいましむ是によつて月若是をう
つたへ藤榮を糾問して其よこしまをあらため所領を
返したまふといへり

猿丸太夫并公光舊栖此所也村の内外に古迹のこせ
り傳語不詳猿丸太夫の石塔は川より東に有

一鵄塚

なえ 蘆屋川東かい道下手に有

近衛院の時源三位頼政矢にて射落されし化鳥うつは船舟に
入て西海にながす此蘆屋の浦にながれよつて留る浦
人はを取て是に埋む

一湯元の薬師

同所三條村の間に有鹽通山と申當國有馬温泉の潮は
熊野權現の神力にて南海より此蘆屋の浦に引通ふと
云往昔は有馬温泉山の僧坊月次參籠して此尊像を拜

す後世伽藍破壊して今草堂となれりむかしの松残り
仍て湯元の松といふ

一 蘆屋洋 同浦 同湯 同沖

新古今

あしの屋の灘の鹽やき暇なみ

業 平

つけの小櫛もささすきにけり

夫木

螢とふ蘆屋のうらにあまのたく

後鳥羽院

ひとよもはれぬ五月雨の比

續古今

明渡るあし屋の浦のなみまこり

爲 家

ほのかに見ゆる紀路の遠山

新勅

遙なりあし屋の沖のうき手にも

俊 成

夢路はちかき都なりけり

續後拾

蘆屋かた月すむかたの浦風に

國 冬

海士のたく火の煙さへにし

一金津山

打出村に向北の岡山なり

阿保親王此岡山に於て金瓦一萬黃金一千枚を埋せ此
里飢餓におよぶ時はをほり取てやしなふべしと也よ
つて金津の號ありと俗傳に云三十一字を以て是を傳
ふ

朝日サス入日輝クコノ下ニ

と云々

金千枚瓦萬枚

一 打出宿

兵庫より四里餘かい道の少脇一村也この浦むかし神
功皇后三韓征罰し給ひて築紫にかへり給ひ皇子生す
是則第三の御子應神天皇號八幡大菩薩子^{かこさか}時第一の皇子^{あひま}磐坂第二
忍熊の皇子是を惡給ひ軍士を以て此濱に集て舟を待
皇后是を知給ひて南海に巡て歸洛し給ふと也皇子、
軍士討出るを以てうち出の濱の名ありといへり歌名
所打出の濱は近江なり

尊氏みやこおちの時左馬頭直義ぢん所

一 阿保親御廟

右打手村上手にあり平城天皇第二皇子三品彈正尹贈

(繪略之)

一品阿保親王、仁和三年御子在原行平朝臣須磨に配流
の時此廟を遷されたるよし打出村の内に則阿保山親
王寺と申寺あり
建武年中畠山阿波守國清、湯の山より山越に出る陣
所也

一 宿河原

西宮より壹丁餘西にありほろ／＼の薦僧あつまり九品の念佛をはじめし所也同名島下郡宿久の庄村又同郡郡山をさして宿泊原とす何も其證不詳

一御前沖

西宮の濱、蛭兒の海、とも云此ところは神功皇后三韓たいらげ給ふて御歸朝有築紫よりのぼらせ給ふ時津の國の海濱の北岸、廣田の郷に御舟著給ひとゝまらせ給ふ今廣田の社則是也故に其海邊を御前の沖おまへの濱と申也又異國御退治の兵具等を此地に埋めさせ給ふ去によつて此邊を武庫郡と號す神功皇后記にみえたり

千載

はる／＼とお前の沖を見渡せば

頼 實

雲井にまかふあまの釣舟

夫木

潔きよく光にまかふちりなれや

俊 成

おまへの濱につもる白ゆき

一西宮

攝州武庫郡なり兵庫より五里此所民家多し御宮は西のはし 鳥井東向

祭神一座

蛭子尊世に所謂西宮みびすの御事

相殿神二座

大己貴命左

事八十神右

日本紀云伊弉諾伊弉冊尊爲夫婦一生蛭兒

第三の御子天照太神の御弟已に三歳にならせ給ふ迄御脚立ざるにより天磐櫓樟船に乗せて順風放ち棄給ふ此所にながれよらせ給ひしを釣する夷拾ひ取奉りて養ひかしづきて後此西の宮に迹をたれ給ふを蛭兒の宮と崇め奉るなりされば二神のため、三男に當らせ給ふ故夷三郎と申とかや海を領する神と成給ふ父母はいかに哀とおもふらん

三とせに成ぬ足立すして

又源氏物語あかしの巻に

わたつ海にしなへうらふれ蛭の子の

足たゝざりし年はへにけり

攝社

名次社なうき

瀬津社

岡田社

須川御前

沖夷社

西の宮の外田園中に有

毎年正月九日神拜蛭子の尊廣田の社に臨幸容相かたちの異を惡み給ひて人輪倫カの見る所を出す忌籠の祭と云明旦諸家各戸を開て社參す世俗十日惠比須と云六月十五日八月廿二日神事有

拾玉

西の海に風心せよにしのみや

東にのみやゑひす三郎

慈 鎮

廣田歌合

思へたゝ神にもあらぬ夷たに 頼政

みるものなるを物の哀れは

又此所尊氏みやこ落の時新田義貞陣所
推古天皇九年三月聖德太子始て賣買の術を教蛭子
の神に誓て商賣鎮護の神とす今にゑびすを福神と
して諸商人あがめ奉る事此時よりはじまる

(追加)

一 廣田社

西の宮より北ひろた村南はづれ土手に道ありこれよ
り三丁山ぎは二十二社の内廣田八幡宮神功皇后の御
事

又五座の説所謂

一ノ殿は―住吉

二殿―八幡

三殿―廣田

四殿―南宮

五殿―八祖

毎年七月七日神拜あり此日神寶を出し諸人に拜しむ
又八月十八日後の神事氏子是を祭

當社をよめる歌

六條入道太政大臣

新續古今

今日迄はかくて暮しつ行末は

一 武庫山

めぐみひろたの神にまかせん
凡てむこ郡をさせり

夫木

播磨ちや漕出てみれば雲かゝる

公朝

むこ山さくら今盛なり

同

秋の夜の武庫の高ねに雪ふりて

殷富門院大輔

津守の浦によする白浪

六甲山

武庫の續きより有馬郡唐櫃村にいたつて

皆武庫六甲の山内なり當山は仲哀天皇先后大仲姫の
皇子かごさかわう忍熊王てんわう崩じ給ひて後神功
皇后を惡みて兵を發し三韓きてうを待皇后是を知た
まひて武内の宿禰をつかはし軍應をもつて眞阪王及
び五人の族臣を誅して山頭に埋其かぶと首六かしら
を以て六甲山と稱す

甲山 右山續き武庫六甲の半腹をはなれ其かたち

かぶとのごとし四方同面にして面向不背の山也或は
又行基僧正こや寺に居て毘陽の大池を造らしめ給ふ
其塊をもつて築たるによつて御池山とも云

一 鷲林寺

むこの山内にあり山號は六甲山と云

天長十年弘法大師開基本尊十一面觀音の像を安置す

是則大師彫刻の靈佛也天正年中信長公放火によつて伽藍に及寶物舊記悉く焼失して後今僅に茅宇を結び本尊を秘し村人これを守る

一感應寺 神尾村にあり山號摩尼山と云始は神

咒寺と云開山如意尼本尊によりりん觀音弘法大師の作浦島の笹を像の内に納む舊記畧之

一角松原 にしの宮町より二丁餘

萬葉 天乙女いさり焼火のおほくして

つの、松原おもほゆるかも

一津戸村 右ついきに一村あり

此所に多田滿仲の御子びちよ御前の身代に立し家臣藤原仲みつが一子幸壽丸の首を多田よりつとにして持きたり此池水にてあらひ爰に埋しより夙越と名付寺を松原山昌林寺恵心僧都の開基也幸壽丸石たうあり三月十日には池水の色かはると云或は津門と書

一鳴尾碕 海浦沖をよめる歌多し

千載 今日こそは都の方の山の端も 實 家

見えず鳴尾の沖に出けれ

一押照宮 小まつ村より少南

おしてゐるの尊を祭ると云へり 萬葉 櫻はな今盛なり難波の海

おしてゐる宮にきこしめする人

一小松崎 鳴尾續き小まつ村は街道より北難波

堀江三松とは 八松 留松 小松 此三箇所を云

新勅 難波かたうら風さむし汐みれば 勝明法師

小松か島に千鳥鳴なり

一武庫川 大河也

夫木 津の國に有といふなる武古の川 知 家

流れてなにもいはれきくな

玉葉 玉この浦とまりなるらし漁する 人 丸

海士の釣船波間よりみゆ

一琴浦明神 東新田村

さがの天皇第十二の御子融大臣從一位河原左大臣を祀ひ祭山

城の國六條河原院におゐて鹽竈の浦を摸し給ふとき 此所より潮を汲しめ給ふとかや

松かせに浪の調ふる琴浦は 仲 正

かもめのおそふ所なりけり

一猪名 蓬川とて往還にはしあり此川猪名川な

りと云

當國豊島郡池田川邊を云ともいへり海渡湊沖川山證

歌多し

一難波里 道より北に一村あり尼崎より八丁戊

の方

此所に梅あり 百濟國王仁の歌

古今

なにはつに咲や此はな冬こもり

今は春へにさくや此花

一堀江 同橋

あまが崎町しやうげのはしとてあり堀へのはしと云

當國西成郡木津村をさしてほりへと云ともいへり仁

德天皇の御宇に群臣に詔りしてのたまはく國のうち

廣くして田圃すくなし霖雨にあへば潮のぼりて巷里

道絶ぬ宮の北の郊原を堀南水を引て西海に入んとの

給ふて堤を築ほらせ給ふの跡を堀江と云傳

續後撰

おしてるや難波堀江に白玉の 定 家

夜のひかりはほたるなりけり

一大物の浦 尼崎の濱を云橋町家の中にあり

此所源の義經西國へ落たまはんと仕給ふのときなら

びに辨慶靜御せん旅しゆくの所又建武の比秦の武文
御息所を供奉し土佐の國畑へ下らんとありしとき此

所にて賊難にあひしと也

一浦の初島 同濱辰巳にあり

尋ぬとも逢みんものか春きては 定 家

深き霞の浦のはつしま

一長洲村 同濱 尼崎より八丁

拾遺

人しれす移る泪は津の國の

なかつと見えて袖を朽ぬる

一神崎 尼崎より廿丁天満より一里北にあたる

萬葉

神崎のあら磯も見えす浪たちぬ 讀人不知

いつこより行む能道もなし

所々年數の積り寶永七庚寅年まで

一福原みやこ移 五百三十一年

一花熊落城 百三十一年

一つき島 五百四十年餘

一摩耶山 千三十年に及

一つげの氷室初り 千三百三十年

一 阿保しんわう	八百五十年に及
一 楠正成うち死	三百七十五年
一 神功皇后	千五百年餘
一 楠石碑建	二十年に成
一 行基ぼさつ	九百七十年に及
一 たゝび山開き	九百四十年餘

兵庫名所記卷之上終

兵庫名所記卷之下

一 福嚴寺 ふくごんじ

兵庫西の町はづれ

巨龜山福嚴大聖禪寺と號す開山佛灯國師なり後醍醐天皇おきの國より御歸洛の時正慶二酉の年五月晦日當時に一宿皇居の所なり

常境内に自然居士暫居給ふて井をほらしむ水きよくして渴する事なし今久遠寺の坊内に有

一 福海寺

同所南ならびなり

大光山福海興國寺と申開山在庵圓有大和尚本尊釋迦運慶作大將軍源の尊氏公祝國安民のため創し給ふ延文の頃尊氏つくしより土洛のとき兵船此兵庫の浦に集るのとき當寺祈願所とかや則尊氏御自筆の額其後又御孫の義満公御筆の額おのゝ山號寺號なり往昔は二丁西にて伽藍なりしに嘉吉年中火災あつて殿宇坊舎悉やけほろび其後の地に移ると云
觀音堂十一面大悲尊むかし旅僧あつて笈をおひ來此

尊像ならびに多門天の梓を奉ず是弘法大師の化身なりと云

一一 一本松

右寺より二丁西かいとうの上手

建武の比足利左馬頭直義陣所

一 眞福寺

兵庫西南の町のはし

當寺は白拍子妓王妓女開基本尊觀世音ぼさつ則ざわうの守り佛小像なり一此寺より少南今石橋と云小川あり逆瀬川と云丹波の少將成經鬼界が島へ流罪のとき道ゆきにさかて川とあり

一 和田の笠松

右川の南ばたにあり古木はかれて後植の松なり歌に

枝末までかゝれる薦の紅葉して

季 經

秋風の吹くる峯のむらさめに

爲 家

さして宿かる和田のかさ松

一一 遍上人の御廟

同所

西月山眞光寺藤澤遊行元祖一遍上人の石塔寺内に有日の本廻國の砌正應二己丑年八月二十三日當地にて遷化し給ふ御年八十四又元祿八亥年五月十一日に四十四代一遍上人尊通御歳五十七當寺におひて遷化し

たまふ元祖上人石塔のならびに塔あり

當山往昔仁明天皇の御宇に惠夢法師入唐して宋王に謁す帝大悲の尊像を賜ふに歸朝の時におよんで船をうかぶ順風しづかにして和田みさきにいたる時船うごかず惠夢是すなはち大悲有縁の靈塚ありとてつひに當寺に安置すゑんぶだんごんの聖觀音御たけ八寸の尊像なり本堂の右にあり時宗元祖上人を中興の開祖とす當寺什物品々あり

菅家自畫の像

人丸畫像に定家の讃歌

紫雲の名號 元祖上人御筆、此外は畧レ之

一琵琶塚 眞光寺の前びわの形のつかなり

但馬守平の經正の塚壽永一の谷合戦城の四郎高家にうたれ給ふ又一説に此所に一たび青山の琵琶を埋し所と云

琴の音に引てくらへんひわ塚の

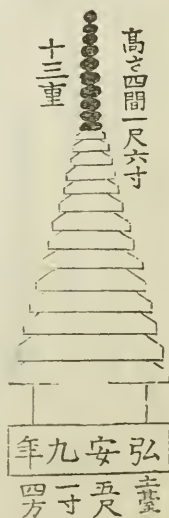
梢にひく松風のおと

一清盛石塔

びわづかの東むかいに塔あり平のきよもり入道淨海都六原にて養和元年うしの閏二月四日六十四さいに

て薨じ給ふ御遺骨を圓實法眼此福原に持來り爰におさむ其後百餘歳を過て北條七代最勝蘭寺平の貞時此石塔建給ふ弘安九年二月日と臺石に有

其圖



一八棟寺の迹

右同所則清盛公の菩提寺天正の頃退轉して今石すへの跡のみ残る清盛御在世承安二年に此寺を營み給ふ事元亨釋書にあり

一渚沙の入江 又須佐 同所下

萬葉 あちの住すさの入江の籠沼の 辨 明

藻鹽 見さこ居る渚沙の入江のさし汐に 寂 連

一萱の御所

かたしや人に忘らるゝ身そ

同所南東の方迹のこれり清盛公營の御所なり又樓の御所とも云此所に三間の板屋を造り後白河の法皇を押こめ奉る治承四年七月十四日豆州の流人文覺上人しのびてのぼり此所にて院宣申請頼朝平家を亡す事を進給ふ

一魚の御堂

同所大唐山皇后興福寺と中て大織冠こんりう皇珀女の菩提寺たりしが天正年中に破却異名をうをの御堂と云遺迹事長きゆへ今畧之

一藥仙寺

清盛塔より二丁南

醫王山と號す天平二庚午年開山真如坊天台流義

聖武天皇

皇行基僧正に勅言ありて開基し給ふ其後應安二己酉の年京都靈山國阿上人時宗に改宗せり

觀音あり吉備公傳來則和州長谷寺同體の尊佛なり又當寺に南愚自畫の施餓鬼の繪無比の寶物也

一千僧寺の跡

右寺の南今兵庫の三昧なり

萬年山と申行基僧正の開基一千人の僧をあつめ供養し給ふ所なり亦圓光大師さぬきの國へ御下向の節當院において彌陀經一千卷念佛一百萬べんを修し無縁の靈を吊ひ給ふ此事淨土正源名義集にあり

一灯笼堂

千僧の南和田の原の内

六はら入道此わだのみさきとうろう堂にて持經者千人集て萬灯會を行ひ給ふ此所今退轉いしすへの跡あり

山家集

きえぬへき法のひかりの灯を

西行

かゝくるわたのみさきなりけり

建武の頃尊氏つくしより上洛の節大館左馬助氏明陣所なり

一和田の崎

同海 同入江 同渡

兵庫南海中辰巳向ひ小さし出たる洲さきなり

玉葉

夕附日和田のみさきを漕船の入道前太政大臣

片帆に引や武庫の浦風

名寄

汐風は鳴尾の松におとつれて

覺性

和田の入江に残る月影

一大和田浦

和田のみさき浦惣名也

夫木

おほわたの浦はに今宵船とめて

具氏

清き濱邊に月をいさみん

萬葉

濱きよく浦なつかしき神代より

讀人不知

千船の泊る大和田のうら

一和田明神 兵庫南濱りやうしし町はづれ

此宮は萬治年中に洪水あつて當國むこの河邊おかしのみやより此所に流れあがらせ給ふ毎年五月二十三日祭祀有西國上下の渡船此社にひよりを祈り申に其驗顯然たり

一兵庫古城

天正年中池田信輝當國てしまの郡有岡在城のとき嫡男正九郎此城を守給ふ由舊郭今にあり

一本間遠矢

和田崎より三丁西小松原

建武年中尊氏つくしより上洛のとき本間孫四郎重氏此和田の渚より將軍の御船へ遠矢を射て名をあげし所なり

一内裏屋敷

わだの原兵ご町はづれより十丁計

西南也

福原新都安德帝御遷幸の内裏屋しき四丁四方築地の迹あり和田の惣名を今水の子とも云

一延喜山

和田の原にし

醍醐天皇行幸あつて詔してのたまはく此所王城の地勢ありとなりときに一ツの山生てかたち築地のごとし今なをよこ一丁長三丁計の平山あり延喜年なる

がゆへ山の名となれり

一眞野池

浦海里繼橋 兵庫より十丁餘にし東

尻池村の邊

萬葉

眞野の池の小菅を笠にぬはすして 人 丸

人の他名をたつへきものか

續古今

踏見ても物思ふ身と成にけり 相 模

萬葉

まのゝつき橋とたへのみして

わきも子か袖を頼みてまのゝ浦の 人 丸

小菅を笠にきすて來にけり

夫木

君かため眞野の里人うむれて 隆 信

とるわか苗や萬代の數

一句梅

ひがし尻池村にあり

菅家左遷のとき

和田のみさきに船をとめ順風を待た

まふ此むめの香を尋ね來愛し給ふ名木なり

一通盛塚



兵庫十丁計西街道の南池のはた印松四五本有一の谷合戦平家山の手大將越前三位みちもり行年三十歳にて木村源五と組討し給ふ
一源五塚 みち盛づかの北池ノ中に印柳あり

近江の國ノ住人木村源五重章みちもりと打死

一かるも川

右塚の西かいだうの小川橋あり

たいらの重衡

平家物がたり
落足ニ云

湊川かるも荊藻川をもうち渡り蓮

の池を左手に駒が林を左手になし板屋と須磨を打過
て西をさして落給ふとあり

一長田大明神

かるも川つづき右に鳥居あり此額道風の筆なり馬場

並木入長田村ノ内毎年八月十八日祭禮有

祭神一座

事代主尊

攝社二座

神主

大中臣

神寶に九穴貝あり

神功皇后伐ニ新羅一明年二月皇后之船廻ニ於海中一以不

能

進更還ニ務古也

水門

而ト於レ是事代主尊誨

之云祠ニ吾子御心長田國一則以ニ葉山媛妹長媛一令祭

村上天皇應和三年七月十五日於ニ當社ニ雨ノ祈あり

長田里

夫木

雨露もめくみあまねき時にあひて

兼

仲

長田の里に早苗取なり

一明泉寺

長田村奥天照山と申大日如來あり一の谷合戦の時越

中前司盛俊陣所又此邊平和章のつかあり

一蓮の池

かるも川つづき

此池は行基ぼさつ天平年中にほらせ給ふ農業早魃の
愁なからんがために蓮の一種を池中へなげ入八功德
水と稱しはすの池と號給ふ

一西代村

同ならび西に一村ありいにしへは此所さいだしゆく

と申又此ほとりに源のよしつね馬の足をひやし給ふ

七ツ井跡有

一盛俊塚

西代より西山ノ手日の峯にあり

平家侍大將ゑつちうの前司もりとし源氏方猪俣小平

六則綱と組合のりつな謀つて盛俊を討し

一禪昌寺

はすの池上山ノ内

帝釋神撫山と號開山月庵宗光大和尚 後光嚴院延文

年中御草創の寺なり本尊釋迦惠教彫刻當山は豊臣公

改變にあひ寺おとろへしに慶安年中上聞令旨を賜り

聖跡を復興し寺院あらたなり此上の山を神撫山と申

又鷹取山と號昔神功皇后三かん歸朝あつて是にいた

り石座あつていはほの上をなで給ふに忽ち高山とな

るによつて神撫山と云月庵和尚登山して暫くありと

いへども秋の霧深く冬の雪は春に消す居しのぎがた

く終ふもとの禪昌寺に入給ふ其後和尚六十四歳にて
康應元年巳三月廿三日迁化し給ふ正續大祖禪師と贈
號あり

一沙法寺 蓮の池より二十丁計山おく

眞言如意山と申伽藍の寺跡なり本堂毘沙門天也大佛又
是より十丁計なを山おくに車村と申所に矢拾地藏ほ
さつあり

一二一葉松 一名ちやせん松又源氏松とも云

駒が林村の中にあり高さ丈餘本二尋餘枝四方へはび
こりつか木多くあり

名寄

いにしへの駒が林の松みれば

康 頼

植し古葉もうすらさりけり

一淀繼橋 眞野の池より五丁南濱邊こまが林の
東

今葉

しからめや淀の繼はしよと共に

長 實母

難面人をこひわたるとは

草庵集

五月雨によとのつき橋たえしより

頓 阿

隙なく渡る眞野のうらふね

一忠度塚 こまが林一丁西

さつま守平の忠のり一谷落城の日岡部六彌太忠澄に

討れたまふ清もり公舎弟也行年四十歳又晩塚は是よ

り三里餘にし播州明石人丸堂のほとりに有

一盗人松 右の須野田村ありむかしは二本あり

し朽て今一本大木なり此松海岸にあつて白浪たちや

むひまなきがゆへの名なりとぞ又此まつ楠松とも云

ぬす人を白浪と申事後漢の張角と云ものむほんを

發し餘どう白波谷と云所にかくれて居て財寶をお

かし取けり時の人はを白波賊といへるよつてこれ

より盗人の異名をしらなみと云

一飛松 板宿村に有

菅承相つくしへ遠流のとき梅櫻松の三木を愛し給ふ

に草木情なしとは申せども梅はとんでつくしに到り

櫻は枯て松のみ残つれなさよと有しとき松此所まで

飛きたりしとかや終船を和田の岬より浮め給ふに又

松もかれ失ぬ俗舊跡をおしみ一木の松を植て名を今

にのこせり

一勝福寺 西代村より五丁にしかい道の上宮居

有聖靈權現の社これよりおく大手村の上に寺あり桂

尾山と申す一條ゐん御勅願所本尊聖くわんおん春日

の作開さん證樂上人眞言之靈寶あまたあり中にも牧

溪思恭吳道子三藏法師等の筆おのゝ佛繪也弘法大師所持の錫杖又兵庫つきじま供養の時幡十二ながれ并佛具品々あり昔は坊舎數多ありしが今僅也

寶光院
圓滿坊
遍照院
櫻本坊

東林坊

一月見の松

兵庫より一里半東須磨村ノ上山の中段ニ松十本餘あり行平中納言月見の舊跡也

因幡樂師 稻葉山 皆東須磨に有

一ひかる源氏古迹 にしすまのうち

仁明天皇の御子光源氏の君須磨明石の景色にまどひ爰に暫く春秋を送り給ふかい道より北にませがきと申所と云

一磯馴松 東須磨西すま兩村濱邊すべての松を云行平朝臣此浦に左迂給ひ三とせして歸洛し給ふ名

殘を慕ふて松のゑだ皆都の方へなびくと云

後拾遺
須磨の浦渚に立るそなれ松 俊 賴

下枝に浪のうたぬ日もなし

一行平配所の松 かい道より南濱へ東須磨下

中納言ありはらの行平仁和年中當浦に配流ありし

とき植おき給ひし木なりゆきひら松と云太き五ひろ餘あり

此はとりを松風村雨の舊跡とも云二人の海士の古跡は是より一里山奥に多井の畑と申所に姉妹の石塔あり則出生の地と云

わくらわに問ふ人あらは須磨の浦に 行 平

もしはたれつゝわふと答よ

一鏡の池 多井の畑村にあり

行ひら朝臣配流のうち假に戯れうき夕ぐれの徒然に松かせむらさめの女を尋ね通ひ給ふ行平都へのぼり給ひて後二人のおんなすがたかたちの哀なるもこひしきみやこの事など思ひわびてたがいに此水にうき俤を移したる池なればとて鏡の池と云

一綱敷天神 行ひら松の西

菅相公を祀ひ申社なり築紫に趣き給ふときに此浦に船を留む漁者船人鏡をまげて選座なさしめ暫當浦の景色を詠め給ふ時の人神像を寫し祭て綱卷天神と稱す

一腰掛松 須磨寺のばさきかい道ざわ今は植

次の木なり本三位平重衡須磨の濱遠淺にて庄の太

郎家長に生捕れて此松に休給ふ浦人濁酒を捧申ければ重ひら一しゆ

さゝほろや浪こゝもとを打過て

須磨てのむこそにこり酒なれ

一須磨寺

兵庫より一里半餘西かいどう上手上野山福祥寺と號す本尊聖觀音なり開山開鏡上人抑須磨寺と申はむかし天長の比和田の岬の海底に毎夜光明かくやくとして碧天を照す諸人これを恐る處に漁人あつて網をおろし魚をとる一ツの檀木觀音の靈像を得たり小宇に安置す其靈應あらたなりし此由朝廷に達す光孝天皇仁和二年に開鏡上人に勅して須磨の郷上野と申山に守移し此寺草創あつて天下安全の御勅願所とす其後久壽年中に源三位賴政諸堂寺社とも悉再興と云寺領御朱印あり

又其後權大納言豐臣秀賴卿再興

本堂の厨子づしは賴政寄附の遺りなり

樓門は金剛力士蓮慶湛慶父子相ともに彫刻なり

須磨寺靈寶は品々有之といへども畧す

青葉の笛弘法大師作 一高麗笛祐學僧正作

歌

ふかねとも音に聞へて笛竹の

よゝのむかしを思ひこそやれ

敦盛赤旗名號 法然上人筆

音壽丸世にこそすまで絶入て

彌陀の蓮にともに生るゝ

母衣絹名號 蓮生法師筆

法の水墨と硯てかきおくも

心行く足あみた佛力

敦もり幼少の時ノ手跡和歌二首 一同甲冑あり

よしやたゝ問れても又なくさまん

おのれ跡なき庭のしらゆき

縁なる松にちとせの色みえて

久しなれとや軒の山風

若木櫻制札 武藏坊辨慶筆

須磨寺櫻 此華は江南所無也一枝於三折盜之輩者

任三天永紅葉之例伐一枝者可剪一指

壽永三年二月日

今坊舎十二宇

一櫻壽院 一大聖院 一慈眼院 一東林院

一蓮生院 一不動院 一華嚴院 一正覺院

一梅本坊 一杉之坊 一安養坊 一東藏坊

漢竹境内にあり昔神功皇后新羅征伐の時肥前國松浦川にて鮎を釣給ふ釣竿を其所に捨てたまはず歸朝有て爰に埋む枝葉さかへ今なを根本はびこれり

一若木櫻 須磨寺の前に有

ひかる源氏の君すまに居給ふ時假やに植し木なりと源氏の巻にいへるうゑし若木のさくらほのかに咲そめて空のけしきうらゝかなりと有

櫻はなたか世の若木ふり捨て 定 家

すまの關やの跡埋むらん

千載 行暮て木の下影を宿とせは

花やこよひの主ならまし

一後の山 同上の山なり

月出る後の山は雲晴て 定 家

千首 須磨の庵にかへる浦風

とふ人のおもひよるしと柴の庵の 爲 尹

後の山に道つけてけり

須磨寺の風景

誠に須磨寺は一の谷古戦場のほとり福原の都跡より

は一里半餘坂陽城を去事十里餘後は北まぢかき鵜越の山つゝき峨々として峰高し前は南海紀の路淡路島和泉の浦より難波入口まんゝとして滄海眼前に遮り九紫萬里に渡る船東に望めば月見の松行平の配所西を願れば鐵拐が峰鐘かけ松明石の浦もほのかにみへし直下は昔よりかはらぬ色の春ごとに花をあらたに開く若木の櫻濱邊は松風村雨の古せき一本の松も千とせふる名景也

一須磨の關屋 須磨寺馬場崎在家西川はた左右

の高みなり

歌枕 ちらぬ間は過かてにする人やある 頼 政

花をはとむるすまのせき守

金葉 あわち鳥かよふ千鳥の鳴こゑに 兼 昌

幾世ねさめの須磨の關守

鵜越の道てつかいが峰の腰北より南へむかひ出る道なり北一の谷鐵拐がみね義經の鐘かけ松あり俗云鐵拐仙人氣を吐我が相を現じ仙境を出て暫此峰に遊歴すよつて號と云

一一の谷 濱須磨より六丁西

此谷の長さ四丁餘横二十間高さ十二間たに口より波打きわ迄凡一丁餘二の谷に到る間二丁四十間計

一安徳天皇御遷幸陣所

壽永三年平家一の谷籠城此所に皇居なし奉る内裏やしき陣屋廿三間四方土手の跡がんせき落は二の谷とのせり合又一の谷二の谷の間に諸勢陣屋の迹あり此所を須磨の上野と云

新千載

浪かけぬ須磨の上野の露たにも

淨海

なほ鹽たるゝ旅衣かな

二の谷長さ三丁餘よこ八間に高さ九間谷口より浪打まで四十間餘一の谷二の谷の間二丁四十間餘此間に坂落巖石落 嶮岨あり

三の谷長さ二丁餘横十九間高九間谷口より浪打きわまで五十間餘二の谷と三の谷との間貳丁

一敦盛塔 三の谷の間往還の少上て

大夫平敦盛壽永三年辰二月七日一の谷落城の日熊谷

次郎直實に討給ふ生歳十六歳空顔隣清大居士

此石塔あつ盛の靈再來して是を立給ふと云習せり

高さ一丈一尺臺石四尺四方五りんなり

又此塔の上の山に泉水と申井の跡あり

敦盛石塔

一休

昔斯地有ニ戰場名ニ

流血染殘^{ツルキ}爛木櫻

須磨浦風散ニ花夕ニ

恰如^ニ熊谷打ニ敦盛ニ

一鉢伏峰 三の谷の上をいゑり

昔神功神后夷敵を退治歸朝あつて此山頭にのぼり士卒を集め給ふ甲をぬぎて地に伏せ各軍功を語れり依て鉢伏の峰と云 冑の盃^{ハコ}を伏たるによれり

一須磨の浦

兵庫より一里半餘東、西、濱と今村

とへだつ此間にちもり川あり

千載

五月雨はたくもの煙うちしめり

俊成

鹽たれまさる須磨の浦人

拾遺

白浪もたてと衣にかさならす

人丸

明石も須磨もおのか浦々

須磨の海釣せし人もけふよりや

惠慧法師

千とせを松のえに渡るらん

こもりえ

隠江 須磨の邊を云

こり樵須磨の渡り

六帖

こもりえに隙なくうける浮草の

讀人不知

萬葉

きなくそ人はこひしかりける

こりすまのこもり江に生るうき鳶の

浮みに物を思ふころかな

一境川

兵庫より二里

攝州と播磨と兩國の境なり細川あり源氏平家の戦場の時は東生田の杜を追手とし西搦手は播州塩屋村邊を限つて平家城内とす境川より塩や村まで拾丁計西熊谷の直實平山季重一二のかけ先陣あらそひ此所也境川より西播州明石へ三里淡路の國へ海上三里程壽永三甲辰年(今年三月改元有て元暦元年に成)二月七日一の谷合戦平家討死の人々

一ゑちせんの三位通盛^{四十歳}木村源五ウツ

一さつまの守忠度^{四十一}おかへ六彌太討

一藏人大夫業盛^{十七}土屋ムネトヲ討

一びつ中の守師盛^{十四}本田次郎ウツ

一あわぢの守清房^{十六}

一おわりの守清貞

一むさしの守知章^{十六}

一たじまの守經正城の高家討

一わかさの守經俊なわの太郎討

一無官太夫敦盛^{グマガヘ}次郎討

侍大將には

一ゑつ中のせんし盛俊

一監物太郎頼方

此等を宗徒の士として凡二千餘人也と軍書等に有所々年數の積り寶永七庚寅年まで

一福嚴寺皇居三百七十九年

一藥仙寺九百八十年ニ及

一福海寺草創三百七十餘年ニ及

一禪昌寺草創三百五十年餘

一一遍上人四百二十二年ニ成

一須磨寺八百二十年ニ及

一同四十四世上人十六年ニ成

一大手福勝寺七百二十年ニ及

一清盛公薨五百三十年ニ成

一一の谷落城五百廿七年ニ成

一清盛公石塔建四百二十五年

一行平八百二十年ニ及

一菅丞相八百十年餘

矢田部郡丹生山田の庄舊跡二箇所 兵庫より北三里

山中

一梅雨井 原野村栗花落氏の宅にあり

水の湧出る間長四尺餘亘三尺深さ一尺つねに水なし
平沙のごとし梅雨に入て必水わき出る此水口をもつ
て入梅の日數を定む五月栗の花の落る比梅雨の時節
なるがゆへに三字に作り地主の姓とす始祖山田左衛
門尉眞勝は四十七代廢帝天皇の御宇朝廷につかへし
ときに横萩右大臣豐成の卿の息女中將姫白瀧姫を戀
佗てかくと云やりぬ白たき一しゆの和歌をおくる

雲たにもかゝらぬ峰の

白瀧をさのみな戀を山田男よ

とよみておよびなきなんと云て難面なまかりければなを
あこがれぬ是に返事申さば得さすべしと有ければさ
ねかつやがて

みな月の稻はのするのこかるゝに

山田におちよ白瀧の水

と書ておくりければ豐成の卿彼が心ざしの淺からぬ
ことを感じ終に帝にそうして白たきひめを眞勝が家
に送る帝よりさねかつに天國の御劔をくだし給ふ

長さ二尺其後白瀧一男を産で三とせの内身まかり給
ひぬ仲夏にあたり遺骸をやしきの東境にはうむり納
て叢祠となし辯財天に祀ひまつる此地に水わき出今
に至りて梅雨を知らしむ

一鷺尾舊跡 下村

家記桓武天皇の皇子葛原親王十四代安濃津三良貞衛
が孫桑名次郎清綱に始て鷺尾の姓を給ふきよつな次
男武久をわしのおの庄司と號し山田の庄に居住す源
の義經一の谷戰場にひよどりごへの難所を越給ふと
き武久案内者に應諾して生年十七になる一子を奉る
是を鷺尾太良三良經武とあり經春と云大將の諱を給ふよし
つね公に隨ひ一人當千の勇士なり

武久に兵具品々を賜ふ

一太刀 一振長二尺七寸
大原され守作

一陣まく一張

一よろい一領
一はた一流ひの丸

一武藏坊辨慶長刀同太刀 長四尺
三寸

一龜井六良太刀

一腕一膳わたり七寸武久
一腕じやうざわん也

右代々傳來す眞守の太刀は關白秀吉公へ献ず
兵庫十景の題 扶桑名勝詩集ニ出ル

籠梅早春 湊川清流 經島秋月

兵庫歸帆 福原舊郡 布引飛瀑

廣田神社 和田笠松 武庫暮雪

生田晴嵐

須浦十景の題 三

若木櫻花 上野夏艸 關屋間月

兵庫歸帆 後山歸樵 武庫晴雪

塩屋暮煙 須磨寺鐘 一谷古戰

磯馴松風

福原三十三番觀音札所

一番 兵庫樂仙寺 二 東尻池村法立寺

三 駒が林海泉寺 四 駒が林村慈眼菴

五 駒林が村松源菴 六 同 松月菴

七 野田村正福寺 八 東スマ村淨德寺

九 スマ寺福祥寺 十 大手勝福寺

十一 板宿村禪昌寺 十二 池田村妙樂寺

十三 長田村福壽菴 十四 夢ノ村長福寺

十五 鳥原願成寺 十六 石井村靈善寺

十七 平ノ村東福寺 十八 荒田村寶池院

十九 坂本村龍泉寺 二十 花熊村福德寺

廿一 兵庫極樂寺 廿二 兵庫七ノ宮 神宮寺

廿三 兵庫西光寺 廿四 同 惠林寺

廿五 同 法界寺 廿六 同 來迎寺

廿七 同 金光寺 廿八 同 福嚴寺

廿九 同 福海寺 三十 同 永福寺

卅一 同 能福寺 卅二 同 眞福寺

卅三番 同 眞光寺

兵庫より諸方江道法ひやうごちかき所はその方角の町家はつれよりのつもりなり

一くすの木だうへ六丁 一いくたへ 廿六丁

一布引瀧へ 一里餘 一いばら住吉茶屋多シ三里

一まやさんへ 二里半 一みかげへ 三里

一あしやへ 四里 一西のみやへ馬次五里

一たゝびさんへ 二里餘 一きよもりだうへ二丁

一わだのみさきへ五丁 一ながたへ 廿丁

一にしだいへ 一里 一すまでらへ 一里半

一一の谷さかい川へ二里 一ありまへ七里にちかし

一丹生山田へ村々よ同三里 一こやのへ 七里

一三田へ 七里 一かんざきへ 八里

一尼崎へ 七里 一京へ 十九里餘

一大坂へ 十里

一伊勢へ京廻り	五十二里	一江戸へ本海道	百四十二里
一あかしへ馬次	五里	一同三木へ	七里
一ひめぢへ	十四里		
舟ちの分			
一むろへ	廿里	一ともへ	五十里
一みやじまへ	九十里	一下の關へ	百三十五里
一小くらへ	百三十八里	一長さきへ	二百九里

夫福原の都跡兵庫は前後に名高き古迹あり左右に世知る名所多し爾といへども未案内とするの書もなし僕連年成む事を志の處近世國花萬葉集攝州群談の書等行れて當郡の事詳に有と雖もおのゝ大部にして閱するに惑ふ次第も又順ならず脱漏訛謬なきにしもあらねば愈止事を得ずして本意を遂むと小帙に綴り江都旅寓の中に於て梓に鏤道知邊に備ふ

寶永七庚寅八月良旦

植田下省子

兵庫津磯之町
菊屋新右衛門

開板

長崎縁起略記

年表舉要

亨祿元戊子四

同 三寅年豊後府内に黒船入津

天文元壬辰廿三

弘治元乙卯三

永祿元戊午十二

同 十卯八月當地に始て黒船入津長崎氏の時なり

元龜元庚午三

同 二未年より長崎町割始る

天正元癸酉十九

文祿元壬辰四

同 年御公料と成る同三年より渡海仕始

慶長元丙申十九

同 五子年より唐船當港に毎年入津同八年御奉行始

る

元和元乙卯九

寛永甲子二十

同 二丑年諏訪始同十三諸國に至る唐船長崎一所に

入津す

正保元甲申四

同 四亥年黒船二艘入津す

慶安元戊子四

承應元壬辰三

明暦元乙未三

萬治元戊戌三

同 三子年和蘭陀船大小十一艘入津

寛文元辛丑十二

同 三卯年長崎中焼る同六年唐船宿町番附極る

延寶元癸丑八

天和元辛酉三

貞享元甲子四

元祿元戊辰十六

同 二巳年唐人構の内に入る同五年新地の藏荷物入

る

寶永元甲申七

正德元辛卯五
享保元丙申二十
元文元丙辰五
寬保元辛酉三
延享元甲子四
寬延元戊辰三
寶曆元辛未十三
明和元甲申八

長崎縁起略記

夫長崎といふは古は深江浦といひしなり則ち肥前國
彼杵郡大村四十八箇村の一にして 本朝廣邑三十箇
所の一亦是五都の隨一なり

評に曰深江浦とは天文二十一年子三月甚左衛門諫
早の多羅山權現の寶前に掛る所の繪馬の銘書に深
江浦の住人長崎甚左衛門尉賴純とありこれ其證な
り然れば其頃迄は深江浦といひしなり今其氏に依
て所の名と成るものなり大村四十八箇村とは古來
彼杵郡に大御堂といふて弘法大師建立し給ふ阿彌
陀堂あり其堂建立の時一村より柱一本を出し其堂
の柱とする故四十八箇村に分つなり其四十八箇村
を惣て大村と云今長崎は其内の一也本朝廣邑とは
大和の奈良山城の伏見攝津の大坂和泉の堺近江の
大津尾張の名古屋美濃の岐阜伊勢の山田同安濃津
越前の敦賀同福井越後の高田甲斐の府中駿河の府

中陸奥の仙臺同會津出羽の弘前常陸の水戸紀伊の
和歌山阿波の徳島播磨の姫路備前の岡山安藝の廣
島長門の萩筑前の福岡同博多肥後の隈本薩摩の鹿
兒島肥前の佐賀長崎なり又是五都の隨一とは御當
代に至り京都大坂堺江戸長崎と五箇所を分られた
り今長崎は其一にして慶長八年卯四月征夷大將軍
家康公奉行所を置き給ふ其地理東西北の三方は山
にて南西は海なり又淺からず譬ひ如何なる大風浪
波の時も凌ぎ安き西海無雙の湊なり天竺外夷諸國
の船入津するなれば諸國の商人來り集り貨物の市
をなす西國第一の都と云つべしと云

昔し應永年中下總國佐倉より長崎小太郎爲直と云者
此所に落下りて代々住しより終に其氏に依て所の名
となる然るに其子甚左衛門に至りゆへありて此所を
退て大村に行今に彼地に其子孫現在せり

評に曰長崎小太郎は太平記に見えたる長崎勘解由
左衛門爲基が事也と云り不審最も小太郎は子孫
といへり今の甚左衛門は小太郎より八代目に當る
なり大村新八郎の姉甥にして大村の旗下といへど
も一族高家たり然るに甚左衛門子なし有馬修理大

夫の末子龍松と云を養子にしてあるが故に終に元龜元年大村に行しなり今彼地大村工匠助と云は其龍松の子孫なり甚左衛門大村にて出生したる子あり今長崎氏を名乗るものはなり長崎鑑といふ記に云く黒船商賣これなき以前太閤の御意を背き筑後久留米に浪人すといへり是誤れり當所黒船商賣これなき以前は太閤の御代にあらず元龜年中は義昭將軍の代也又天正十五年長崎氏削らるといふ事あり其比は太閤は島津を攻られんがため下向あり平均なされ暫く筑前博多に逗留ましゝて其節諸將に大小となく皆國割ありて與へらる國士小拾人迄も殘るものなし其時長崎甚左衛門知行召放さるゝと日見大村領其儘贈るといふ内に據るべし直旗のものとは思ふべからず長崎氏削らるゝ坏といふは一統別旗を立て謂なり深堀長崎は久しく大村の下なりしが天正五年の六月深堀純賢龍造寺隆信に降參せしより大村の下を手切したり其故今に佐賀領になる甚左衛門は知行を質として南蠻人の銀を借り元龜元年に軍器を製作して兼て隆信大村を攻られん時の其合戰に立べしと用意せしとなり終に大

村に行しより本知行所に歸らずして長崎は天正年中に彼吉利支丹奇觀の知行とはなりけり偕甚左衛門大村理專より今の時津にて小地を得て七十餘まで存命せしとなり然るに甚左衛門儀慶長二年の頃までは長崎に居たるやうに言ふものあり長崎田地既に奇觀知行とする事隠れなし甚左衛門我知行を何として奇觀の知行にはなりたるや又其領地他に奪れて何の謂に只是あるべきや是田地を質として銀を借り故ありて此を以て退て大村に行しなり島村修理大夫扱を入て大村理專と相談して借銀の替りに南蠻寺の知行とせられたり其比島原も大村も長崎も吉利支丹を敬ふ故に如是知行には極けり最甚左衛門居所時津程近ければ折々は當地にも來り見る事有べし惜哉甚左衛門以前より公領と成まて爰にながらへ居るものならば三千石を領し御當代に至て直の御奉公するならば當地に於て肩を双ぶる人々あるまじきに誠に本意なき事共なり

爰に長崎繁昌の始は永祿十年卯八月二十三日異國の商船に加里用陀といふ船來り當浦に始て入津す是より諸國の人來り集り交易す是に依て元龜二年末三月

島原大村等の者相謀りて森崎より一の堀の間に六町の町を立始て異國交易繁榮の地と成るなり

評に曰長崎は元龜元年黒船始めて來るといふ此説は古人の物語を傳へて推量して記すものなるべし此加里用陀船は元來豊後國府内に往し船なり八月十四日に入津したり其比秋月三河守種大友宗麟と不和なり依て戸次鑑連號道雪大將として甘木長谷川と合戦あり是等の騷動により交易成難し則大村理事は固より大友幕下の人なるが故に宗麟方より申越れて當浦に繋り好き港ゆゑ入津するものなり最大村口針尾の瀬戸狭き故に此大船入る事叶はずして同領なれば今長崎の浦に入ものなり則ち八月二十三日の夜今の神崎の前に繋りしとなり翌日今の出島の鼻に掛るなり此例を以て今黒船來る時は先づ小瀬戸神崎の邊に繋り後に内海に入るの例也此儀をよく知て何時も黒船來る時外海に繋らば古例を傳ふべし要船を知るべし諸黒船着岸の義享祿三年の夏豊後府内に始て來り鐵炮二挺獻上す又天文二十年に石火矢を獻上す皆大友宗麟の代なり今長崎に來る船は永祿二年より府内に來り商賣する事

七八年なり宗麟も此縁に依て吉利支丹宗になられたり然るに此船永祿十年豊後に來りしが彼より當浦に入津して諸國の者來り集り商賣に事寄せ諸人に貨物を與へ皆吉利支丹宗には成たるなり去ながら當浦繁昌の初は是を本として年々邪を改め正に歸し神道佛法益興榮し村里繁昌の勝地となる譬ば澁柿の熟柿となるが如し可謂レ轉レ惡生ニ善矣ト是に依て元龜二年末三月には此六丁の町立始るなり島原より有馬修理大夫義純專岩入道越されたり大村より理專名代として友永對馬といふ者來る當地の村長等高木後藤高島町内共に立合て森崎と一の堀の間に六丁の町を建始る森崎とは今の西役所なり昔長崎氏の者今春徳寺の上を取て岩を構へ彼南門の前より此所まで松の並木植續たり其地行出たる所に森有故に森崎と名付たり此所に蛭子の社あり今は諏訪の三社の内に森崎權現といふは是なり一の堀とは島原町後藤氏の堀なり二の堀は櫻町にあり今の札の辻なりといふ三の堀は今の高木の邊是を三の尾といふ是昔勝山友近といふ人の屋敷也是に依て今の名を勝山町といふ六町とは島原町有馬修

理大夫是を建つ大村町大村理專是を建つ平戸町日浦與左衛門是を建つ横瀬町外浦町二町は横瀬浦與五右衛門といふものは是を乙名とす文知町則ち文知といふ者其前より家居大にて有る故に町の名とす是町割の始なり其頃當地の頭には高木新七郎高木勘左衛門後藤惣太郎佐々木茂四郎高島四郎兵衛といふ以上外に町田市郎兵衛白倉如庵吉岡九兵衛馬場甚兵衛須川主水山本庄左衛門沼喜田小庵浦上與兵衛長江五左衛門深江辰之助笛田新兵衛と云者也然るに其頃天下一統せず諸國大亂して王職を奉せず將命に隨はず是に依て當地の者ども人々我意を働き南蠻の教に依て吉利支丹宗の爲に終に奇觀を建立し所々にあり是より當地古來の神社佛閣悉く廢亡す剩へ先主甚左衛門知行を奇觀の領として諸事の仕置まで邪觀より支配すといへり如是年を積で邪宗徘徊して正法これなき事三十餘年の間なり誠に痛むべき哉

評に曰永祿天正の頃諸國大亂して靜ならず關東には上杉佐竹里見北條なり陸奥には輩名伊達南部最上也北越に長尾朝倉也南海には三好一條長曾我部

也尾張には齋藤駿州には武田今川山陰山陽の兩道には尼子大内なり江州には佐々木淺井播州には三木別所鎮西には大友島津龍造寺也此の如く諸國の大名王命に奉せず將令に従はず況や當地は一部の邊地なれば人々我意を働き皆邪宗となる最吉利支丹と成る事は天正九年當所の者ども一人も残らず其宗に歸すといへり彼の南蠻人共持ち渡る所の金銀を與へて諸人の心を取り或は種々の奇特の幻術をなす怯弱懦夫の輩を化す是に依て自然と邪蘇の門徒と成る爰に天正九年十月當地古來の神宮寺といふ寺を吉利支丹とも謀計を以て焼と云へりそれより自然と焼亡すと有り終に當地の者共を一人も残らず耶蘇宗門に極めしといへり是より當地所々に在所の其神宮寺の枝院末坊次第に廢亡す皆なきが如し正法斷絶する事元龜二年より慶長七年まで凡三十二年なり抑此神宮寺といふは歳霜久しき寺にて當地第一の梵刹其枝院は深江浦在々所々八十餘箇所にありしとかや玉圓方といふ別當職にて益觀大僧都其比の住持たり今の諏訪社ある所是其跡なり益觀は吉利支丹の爲に憎まれ後には今の高野

平村の内清水の邊の小庵に老衰して果られけるとなり其墓所として萬治寛文の比までは石塔ありしと云今は其所廢捨所となる誠に世の有様と云は哀れなる事共也^{○中}

奇觀を建立して所々に在とは則ち吉利支丹寺を建て十一箇所なり

トフドノサント

今の春徳寺の所

ヘヤトノ

今の立山屋敷

大寺の三壽庵

船津村の今の本蓮寺の所也

錢屋

今の本古川町下の邊

大寺の末寺

今の光永寺の所

浦上村寺一箇寺

戸町村一箇寺

鳥の羽屋舗

今の上町の中程

權屋

十善寺村

船津村

今の本蓮寺の所

以上十一箇寺此等は皆吉利支丹寺なり伴天連共に居住所と云ふ慶長十九年寅七月に至て是を破却す

又當地公領と成る事は文祿元壬辰年豐臣大閣諸將に命じて朝鮮征伐の時^{○中}唐津名古屋に御在陣なり其時までは當地はいまだ何國にも從はず則所の頭人等南蠻の珍物を持て彼地に御禮のため參上す然りといへども此人々不禮なる事有るに依て秀吉公の御機嫌を損し御禮を遂す夫より逃去歸り申候然れども又大閣の御構なきに依て當地の輩御斷の爲に其人を求めらる爰に和奴唐といふもの器量萬人に勝れ辯舌最善し頭人等此人を撰み出し名古屋に使として此度は所にある珍物を持て名古屋に參し其身長崎の頭人と僞り終に珍物を獻上す則大閣御意に叶ひ御言葉懸られ東安と召さる又氏を村山を改給ふ彌長崎支配の事御赦免なされ御朱印を頂戴すと云へり又長崎奇觀の寺領とする事不可なりと有て寺澤志摩守廣高に御預なり文祿元年より慶長七年まで志摩守預り凡十一箇年此間吉利支丹を改めず最文祿三年の比より正法の人は出家ありといへども邪ま強して正道に従はず

評に曰長崎公領始め異說繁多なり天正七卯年三月其比信長公天下の主將たるに依て當地より御禮と

して獻上物等をして總代に須川主水を上洛せしむ然るに兵亂の時節なれば筑前道中石坂といふ所に其獻上物を奪ひ取られ剩へ主水も生捕られ殺害せらる下人共這々逃げ歸りけるとぞ又天正十五年關白秀吉公九州平均の時筑前博多に御逗留の節當所の人々參上して御禮を遂げ公領となり鍋島飛驒守に御領といふ事あり此時は當地奇觀の伴天連ども參上し却て御機嫌を背き夫より逃去り島原水の月山にかくれ籠りしとなり是則伴天連共所の田地を知行して己等を地頭と思ふ故なり夫より關白還御以後伴天連ども又當地に歸り前の如く奇觀を住持したり如何ぞ其時公領とならば箇様に緩かせなるべきや又飛驒守預りといふも暫時の事なり天正十六年御書出し御條目と言は文祿元年長崎内町の者共頂戴したる御條目なり今に御條目の寫正覺寺にこれあり年號は文祿元年十月十九日最も東安の御朱印頂戴も此年なり是公領の始めなり東安當地を支配する事文祿元年より元和元年まで凡二十四年なり又世上の説に天正十五年公領となさる故に筑前博多のものども多く來り居住して博多町を建た

りといへり天正十五年六月七日秀吉公博多の津に着岸はあり二十餘日逗留して石田治部少輔小西攝津守瀧口三郎兵衛長束大藏大輔山崎志摩守を總奉行として横路堅路の町割を營み離散したる者を招き集め本の如く家作して市店の業をなすべしとあり金銀を賜ひければ大きに悦び皆萬歳を唱へけるとなり秀吉公御發句に

博多町幾千代までやつるらん

たて並へたる門のにきはひ

如何ぞ此時他郡に移る事あらんや本博多の者共多く當地に逃げ來り居住するによりて博多町と名付く最も六町建て後内下町五島町本博多町とて當地の町方草創はじめの町どもなり山田仁左衛門といふ者は博多町の乙名なり後暹羅國に渡り六崑と云所を打從へて終に其國の主と成て再び歸朝せず今に其子孫ども其所の主となるといふ東安といふ本名は伊東小七郎と云者なり生國尾張名古屋の者元來武士の立身の爲藝州に至り彼地にて長崎異國の船ども數多來りにぎやかなる所と聞付て天正年中に此所に來りて今の金屋町邊に借宅して居しが

其利根才智萬人に勝れ辯舌者なるによりて當地の頭人等に用ひられ出入絶す且又南蠻菓子料理の上手なり調法人なるに依て朝夕の出頭人たり呼名を和奴唐といひしとかや此名は彼南蠻船の艦に作りし人形の顔女の如くにあり是をワントウニヨウと云ふに能く似たるに依りて名とするといへり然るに此度秀吉公唐津名古屋に下向ましますに付て當地の頭人先に不首尾なるに依て此人を以て御斷の爲に指遣す然るに和奴唐彼地に至りて大閤の御前にて其身長崎の邑長と偽り終に御朱印を頂戴したり最其時寺澤志摩守元來尾州にて其親とも兼て聞知られたりと有て蒲生飛驒守氏郷に取入其執成種種有に依て上聞に達し大閤御對面有しとなり和奴唐彼地に逗留の間に南蠻菓子又は珍敷料理共進上せしに依て御機嫌に入東安と召さる是に依て一種一樽を捧げ御禮を申上る大閤御覽じて汝は吾を名親とするかと迄仰られ重て村山といふ名字迄をも賜ひけるなり時に東安二十歳なり永祿九年丙寅の産なり寺澤志摩守に御預けとは其節志摩守廣高は御供也長崎は異國船年々來り諸事用心の其押へな

くしては叶ひ難とありて廣高に御預なさる是先年天正十五年公領とならば此時別に東安が支配も入べからず又飛驒守御預に極らば是又東安僞を以て長崎の頭人と成べき也幸ひ飛驒守は一國の内なれば程近し志摩守は東國の人なれば程近し是先年天正十五年秀吉公筑前博多に御逗留の内長崎伴天連どもが御禮に行し事あるを同じ理に覺え違へていふものなり寺澤志摩守廣高は父は藤左衛門廣正といふ是は尾州の住人にて信長公に仕へ數度軍功を盡すゆゑ後に從五位下越中守と受領し二萬石を領す信長公横死以後は秀吉公に仕へ病死す其子忠次郎廣高家督を繼ぎ父に劣らぬ忠を勵み樂田羽黒小牧の合戦等に武威を振ひし故に三萬石御加増其上從五位下志摩守と叙任しけり此節大閤朝鮮御征伐の時は彼地に渡り戦功を盡す此働は朝鮮軍記に見えたり今長崎預りの儀は文祿元年なり偕大閤薨去後は御當家に屬し景勝亂に會津に供奉し然るに上方にては石田亂を起すゆゑ家康公上洛なり志摩守も同く供奉し關ヶ原に向ひ無二の御味方忠戦す是に依て太平以後唐津天草を拜領して其上從四位下

侍従に昇り都合十二萬三千石を領す其後寛永十年西四月十一日卒去次男兵庫頭忠高家督相續す志摩守長崎預は文祿元年より慶長七年迄凡十一年の間預り代官佐野惣左衛門といふ者を指し越れたり今博多町に屋舗を建て當所の押へとして置れたり此惣左衛門後は茂木村の代官と成れり其後紀州に行て千石の知行を領すとなり吉利支丹を改めずとは志摩守預りの時は東安も内町方も外町の者も吉利支丹にて所々に其宗の奇觀臺を並て有り尤も文祿三年の頃より諸國より來り集るものうちに正法の人もありと雖も正法の寺といふものなし爰に小川口登といふ所に道知と云者あり是則正覺寺開基なり道知俗は有馬右京といふ法體して加藤清正に隨て朝鮮に渡り居る事三年終に清正に別れて長崎に來り今の船津町に森五左衛門といふ者の所に宿す其後今の出來鍛冶屋町思案橋の邊り是を川口といふ是有馬修理太夫の屋舗なり義純より道知是を得て是に住し専ら淨土の法門を勸化す文祿三年より慶長九年まで邪宗の爲に辛苦して潛に正法を勸むあらはに經文を讀誦する事叶はずといへり是又

邪正吟味なきを以てなり
茲に慶長八癸卯年家康公征夷大將軍に任じ給ひて四月に長崎奉行として小笠原一庵を差下さる今年より吉利支丹を嫌ひ給ふ事ありて同九年辰九月に佛法再興あり邪を改め正に歸せしとなり

評に曰家康公慶長五年子九月關ヶ原にて石田治部少輔と合戦あり終に討勝給ひ夫より天下の主たるに依て同八年征夷將軍に任じ依て本朝徧く將命に隨ひ違背ある事なし長崎の儀は吉利支丹發興の所と聞し召れ則四月に小笠原一庵と云て法體人を以て指下さるこれ長崎奉行之始めなり是に依て前の寺澤氏建置る、屋舗此時より奉行所といふ又は御政所といふ然るに一庵當地に下りて殘らず所々巡見して吉利支丹寺は有といへども佛場なきに依て正法眞實の寺を建立すべしとて其人を求めらる爰に道知とて川口といふ所に一人の僧あり則奉行所に召れ一寺建立すべしと有て今の正覺寺を草創し給ふこれ長崎にて佛法再興の始なり時に慶長九甲辰年九月なり道知茲に於て數年辛苦せし本懷を達したり誠に是長崎最初の寺と云べし又町使と云役

人始りて吉利支丹の者とも放逸せざる様に致し給ふ當地奉行たる人所々巡見といふ事も此時よりぞ始りたり同十一年の四月長谷川左兵衛奉行として下りて川口より正覺寺を船津村大寺といふ吉利支丹寺を賜りて是を移さる本此寺は田原森都といふ座頭住したり去年正覺寺道知と邪正を論じて過言を吐て却て己が言葉を怯れ當地を逐電して見えす此由緒を以て道知に賜ふ委細は別記にあり

慶長十九寅年七月廿二日山口駿河守上使として下向あり上意により長崎吉利支丹の魁首共を追放し並に其奇觀を破却せらる其頃當地の五人の僧ありけるを召れ彼奇觀を破り取り各所用に可_レ致_{言蒙}仰依て所所の奇觀を破却せしとなり奉行所長谷川左兵衛尉なり

評に曰六月二十一日山口駿河守重弘將命を承けて伏見を出で長崎に趣となり當地には七月二十二日の下著なり家康公は其頃駿河の府中に御座の時なり上意は公大坂秀頼卿と出入あり伏見に御逗留まし_レて仰出さるゝ趣也去年大久保相模守忠隣に仰付られ五畿内の所々西國までも吉利支丹宗御吟

味の處に相模守故ありて江州佐和山に改易せらる其故今年重弘長崎には下られたり吉利支丹魁首追放は先づ其奇觀を退かしめ後呂宋國に遣さる也奇觀破却是當地にある十一箇所の吉利支丹寺なり此内大寺といふは先年長覺寺に賜ふ所の寺なり此時はなし或書に當所十一箇所の吉利支丹寺焼却するは所以ある事也と其比當地内町外町大形建續たり其町中にある寺共なれば類焼を恐れ放火を遠慮なくんば有べからず然るを大名方請取て焼却するといふ事は本より此儀を知らざる人の言なり其比當地五人の僧とは正覺寺道知大音寺傳譽教了教西泰雲とて五人あり教了は大光寺開基俗名三浦彌助と云元和七年五月五日寺號を得たり教西は永光寺開基元和七年四月五日寺號を得たり俗名唐津久兵衛といふ泰雲は暗臺寺開基本平戸より來りて今上筑後町に小庵を結て居たり元和元年に寺となる此教了教西泰雲三人は寺にあらす當所總じて五人の僧なり上使山口駿河守奉行所長谷川左兵衛右五人の僧を力にして吉利支丹寺並其寺院も下されたり則檢使大工人等を遣され檢使には奥山七右衛門薩摩

十兵衛二人大工には川上新助西郷與左衛門其人夫大勢ありて邪觀破却す本尊多是赤銅なる故に地に埋む後踏繪となるものはなり其節御立合の大名には有馬左衛門大夫大村丹後守喜前なり重て奉行所に於て右五人の僧を召て仰らるは各此間邪宗者が妨難に逢ひ永々辛苦して是地にはあり佛法を觀化する事偏に天下に對し忠義の至也りと御褒美なり亦別して正覺寺には半弓二張鎗二筋拜領すこれ則ち家康公大坂陣所より下さるゝ處なり邪宗の殘黨これあり道知を第一遺恨に思ふ取ある故に如何なる妨難かあらんと兼て言上致せしによりて是の如く上意あるなり

又九月上旬鈞命によりて上使間宮權左衛門下向あり加州商山南之坊内藤飛驒守忠俊二人吉利支丹家の棟梁と成て以て正に歸せず今年當津より西洋國に追放し給ふなり

評に曰高山内藤眷屬耶蘇の徒慶長十九年三月七日上意により西洋國に追放なり然るに長崎には其秋九月に下著す是は彼の者共緩々仕舞の爲なり上より其事急には仰付られず仁の厚き所なり偕高山南

之坊とは右近太夫長房攝津國高槻郡の城主なり七萬石を領す此高山は信長公御取立の士にて數度軍功を顯す然るに信長公御父子明智が爲に御生害あり秀吉公と相共に山崎合戰の時先陣に進み武勇を振ひ君敵光秀を討滅し君恩を報ず是より秀吉公天下の主たる故に高山が忠節武勇を感じ給ひ攝州高槻城七萬石を賜ふ其上從四下侍從に任せらる高山猶忠を勵み尾州小牧樂田羽黑相洲小田原合戰朝鮮御征伐等に何れも軍忠を顯す是諸錄に委細成る故茲に略す大閤薨去以後當御代に屬して石田亂の時無二の御味方す家康公渠れが武勇を兼て感じ給ふ上に今度忠節を勵む故に本領相違なく下されたり然るに高山吉利支丹宗の棟梁と成て其名も南之坊と云ふ専ら邪法を弘むる事大久保石見守と組合謀逆するに依て上聞に達し其意味を詮議あるに申分立る頗る首尾宜しからず領知召上られ慶長十九寅三月七日上意仰出され西洋國に追放なり又此高山吉利支丹宗と成る故大閤の御時加賀大納言に預け玉ふ然るに南之坊武勇の外に連歌俳諧の道にも達したる故利家卿も折々會談せられ加州に於て二萬

石與へられ大納言卒去後の時も南之坊正直成る者に候得ば今の通り召置るべしと中納言利長に遺言あり然るに御當家に成て大久保石見守と密謀ある事露顯する故慶長十九寅三月七日上意あり九月には長崎より西洋國に追放有しなり南之坊妻娘乳母下人ともに五人なり内藤飛驒守忠俊是は志摩國戸羽の城主なり此先祖は大職官鎌足公の後胤なり本は内藤仁兵衛忠政といふ家康公天下御草創の時分より數度軍忠を盡す段々御取立に預り一萬七千二百石を領す天下平均以後從五位下飛驒守と受領す然るに南之坊と組合の吉利支丹宗となる故今度一同に西洋國に追放なり此二人は武勇高家なり然るに耶蘇忌僻の術に惑せられ我朝神國清淨の直實法多し夫を指置て信せざるは武門の勇士といひ難し耶蘇儀黷せと度々上意ありといへども然れども正に歸らず右の外諸國長崎奇觀の伴天連ども百餘人南蠻國に追放し給ふなり憐むべし是等の輩萬里の浪濤を渡りて生國日本を捨て異國の土にならん事を知らず偕も忠俊は呂宋國に至り久しからずして死し南之坊は長命にして歲月を送り後悔せし

となり其後日本より渡海の船の者共に逢て茶の會連歌など致して種々の物語に耶蘇の教不實の事を知ずして是まで迷ひ來りし事千萬後悔せしとなり此時の追放は皆呂宋國に遣はさるゝなり船は唐船一艘に乗せて人數百餘人なり今浦五島町の渡り戸田より船に乗るとあり今の大波戸其時は波戸場にあらず海たり去程に前の將軍大坂を攻られんがために茶臼山に御陣なり十一月廿四日上使間宮權左衛門は歸り登りて伴の高山内藤其徒黨の伴天連共船一艘に乗せて長崎より西洋國に流し申よし言上す翌日池田越前守を以て此度の長崎の仕様油斷なきむね神妙の至りに思召と御感に預りしとなり又長崎奉行長谷川左兵衛も其年十月に上りて大坂陣に立つ其軍忠には十二月二十五日堺政所仰付らる此時堺の夷島を築て湊とせらる後藤庄三郎同類として翌年四月左兵衛舍弟權六長崎奉行と成る是に依て長崎邪宗の奇觀斷絶して正法興隆の所となる

然と雖其殘黨ありて時々佛法に仇を爲し寺院に火を懸け其外種々の惡事を成す誠に是出家の人の辛苦せ

ずしては正法に成るべからず最も其頃正法を立る人は御當家に對しては忠勤といふべし是に依て御上意あり寺僧に御奉書を下され又は米錢を賜ふ是偏に當地の者共は魔の掌握に陷るべきを佛法の力を以て終に退治せり當地の諸人等豈是を信ぜざらんや

評に曰奇觀破却し伴天連共追放これありて後は殘黨所々に隠れ居て出家ある故我法衰弱するなりとて恨を含む然れども公儀を恐るゝ故上には正法に歸する様に見せて寺方に參詣すといへども其次でに水瓶に毒を入れ或は夜に入れば忍て火をさし又は出家町方に出れば陰より礫を以て是に打つ是に依て其頃の坊主は皆馬場狹といふ大なる笠を作り差て往還せしとなり此儀上聞に達し若佛法に障礙をなし出家を惡口するものあらば曲事たるべしと稠舖禁じ給ひ寺方談議の時は町使を指出して警固仰付らる

茲に元和元年村山東安一族門葉滅亡す大坂より大野修理亮下知に依て内通せし事有故なり或は云ふ元和二年に亡ぶと云事あり奉行所長谷川權六の時也
評に曰末次平藏東安が職を奪んため種々の難を言

懸け江戸に於て對決する所東安勝となる平藏已に罪に沈む所に大坂陣の節内通の事を言上して平藏勝となる秀頼卿大坂籠城夏陣の時なり大野修理亮下知に依て東安方より其子供又は浪人共並に石火矢玉藥等を大坂の城に遣せし事分明なり是に依て東安が密謀露顯して江戸にて死罪に行れ一族十三人は長崎常盤崎にて礫に掛らる是東安家來の料理人に三九郎と云ものゝ娘を殺害せし遺恨に依て末次氏の右の趣を言ひ聞せしを平藏之を言上せしに依てなり抑東安はこれ耶蘇の賊黨なり終に正法に歸らず文祿元年より長崎を支配して榮花身に餘り廿四年の間僞を以て當地の頭と成不義の富貴を保ち威勢に驕りけるが果して其身は言に及ばず一族門葉までも亡びぬる事の淺猿さよ其頃狐狸の所爲として東安存せる時の容貌にて町内の辻々に迷ひありきしを見たるもの多しと古老は物語に傳へしなり東安茂木村に屋舖構をして堀をほり城の如くある事又は渡唐の船を造り其子を渡せし事其子伴天連に成し事又其子を呂宋に追放なされしに沖に於て密に取返し隠し置し事は等は皆御當家に對し

不忠不義の者にあらずや是を知らざる者共今時ありて我は東安が末葉とて村山名字を名乗る東安當地の大役なれば眷族多し其中の者ならし言ふ事勿れ一族門葉十三人の内三歳の子まで殺されたり夫れ子孫あるは先祖有故なり若し子孫ならば何ぞ其追福をなさざる彼の耶蘇の追善何れの宗を用ひんや儒佛神老は是本朝に有所也終に東安が年回を追善したる者を聞ず不祀の鬼と成は能々憤むべき事なり東安滅亡は元和元年なり平藏が其遺跡を繼しも元和元年とあり是にて知べし

又茲に吉利支丹伴天連に森都といふ座頭あり元來大友家臣田原紹忍が一家にして利根才智の者なり然るに今年始て正法を信じ邪心を改むるに於て轉ぶといふ是當地轉ぶの始なり是に依て奉行權六江戸に於て言上あり彼の森都を召登せられ諸國吉利支丹の目明しに成さる是より日本國中の伴天連伊留滿等の棟梁ども隠れ居たるが残らず相知るとなり

評に曰田原紹忍と云者大友の一族なり然るに神道佛法を敬せず三綱五常を用ひず誠に耶蘇宗の惡黨なり唯金銀珠玉を取込吉利支丹に歸服して時々主

君宗麟にも彼の宗の尊き由を勸めて千變萬化辨舌を盡し終には邪宗に引入けるこそ薄情けれ是に依て宗麟も毎月吉利支丹講とて興行し數代尊敬せし海藏寺と云禪刹の住持眞叔和尚を疎み出し途中にて殺害に逢せ又永祿十年夏山森紹庵と云者に云付府内住吉の社を打破り火を放つ又元龜元年正月紹恩が沙汰として橋本五左衛門並に清田因幡守に二百餘の軍兵を相添萬壽寺を焼失す抑此萬壽寺といふは大友五代出羽守貞親徳治元年に建立して百餘人の僧を供養し一千餘貫の領を寄附して宗麟祖父代々の歸依寺にて佛法繁昌の禪刹なり終に耶蘇の爲に破却せらる又其比吉弘内藏助と云者あり宗麟是に下知して豐後の國中の佛像を集め薪にせよとなり在々所々に走り廻りて神像の尊容を日々五駄十駄宛取寄せ打割て是を薪とす又天正四丙子年四月四日灌佛日清田安房宇鎮忠上野權正鎮俊を大將として其勢四千三百餘騎にて彦山三千の寺院坊舎諸堂まで残らず責破り焼崩す是の如く大友家吉利支丹宗門也佛神を敬せず神社佛閣を沒倒せしより領内の貴賤老少歎きしかばこれ宗麟並紹忍を調伏

するなりとて宗麟以の外立腹して紹忍に沙汰して神道佛法に預る程の者一々誅伐すべしとまで申されたり惜むべきかな大友といふは鎌倉右大將頼朝の後胤にして源家の種たり紹忍亦他人に非ず時節因縁とは云ひながら九州の探題六箇國の主として邪宗となり其家終に滅亡せしことを哀れなれ然るに此森都といふ座頭は其紹忍が計策として實の亡目に非ず耶蘇宗を諸人に勸んがため官勾當となり京夷諸國を徘徊して大名高家多ば彼れが勧めにて其宗に歸服せしなり以前慶長十年三壽庵大寺にありし時道知が所に來り過言を吐て道知に呵られ逐電して見えざりしが今元和二年辰五月五日夜に入て正覺寺に來り道知と對論數刻を移し忽ちに和國神道佛法の正法を聞てあつと云聲家中に響しとかや則或作_レ蹺轉と云ふ是當地轉ぶの始なり是時森都言ふ我は本國豊後田原紹忍が一家則ち田原源藏といひし者なりとて懺悔して涙を流し合掌して本尊阿彌陀の影像を拜む今に其像は正覺寺にあり此上にては前非を改んがため天下の人の爲め一々白狀すべき事あり公儀にて申上べしと云に依て道知其夜

政所に往き此由一々言上す奉行權六聞し召され早速江戸に言上あり依て召上さるゝ天下の密事ども申上る段忠節なるものと有て吉利支丹宗の目明となされたりといへり緒正覺寺に御褒美の御奉書頂戴の儀は別記に委細にある故此には是を略す又此年當地の人々去年邪宗を改るといへども未だ轉ず今年改めて轉で何れも御奉書を頂戴あり是則台德院御代なり此時寺方門徒帳始るなり寺方も此節は十箇寺餘建立せり當地内町外町總人數二萬四千六百九十三人とあると古帳には見へたり京大坂堺其外諸國の者ども自由に來り集る時なれば其人數日夜に定らざるなり銀坐此年に下りて正覺寺境内今の新橋町の上すゝき原といふ所に宿居せり尤も正覺寺其の本屋舖は今淨安寺三寶寺のある所なり又當地諸國渡唐の船の儀は御吟味あり今より元和年中に多くは御奉書を下さる其外自由に渡唐せざる様に仰付らる此時よりぞ飛乗と云事ありて其渡唐の船底に隠れて沖中に出て船頭に斷りて渡唐するもの多し寛永十一年まで渡唐御免の間種々の物語ども多し是を略す阿蘭陀船と南蠻船と呂宋の番

島にて炮戦し南蠻船阿蘭陀船に逐れて肥後の佐志城の浦に逃込し時平戸松浦法印と言合せ扱を以て阿蘭陀船は平戸に入津せしめ南蠻阿蘭陀日本の内にて炮戦せざるやうに拵し事ども此等は長崎奉行權六の働なり此奉行は智仁勇の人にて當地の者共を憐愍し給ふ事赤子の如くして邪蘇穿鑿の事も急に行はれず亦南蠻船商賣の事も既に此節御停止あるべしと沙汰ありけるを諸人難義に及ぶべしとありて次第に年々餘の異國船を入れ賜ひ後年に御停止あるべき旨も此奉行所の御願とぞ申傳へ殊に當地の者共邪宗多しとありて台徳院大に憤怒遊され一々焼討して捨べしと御上意ありしを此人了簡して諸事の仕置御旨に叶ひしに依て長崎は權六に任すべしと御免なさるとあり當地の諸人は聞き悦びあへりけり誠に慈悲あり智勇兼備り其所の仕置等私曲なければ後年の今に至りて其人有が如くなり

偕又此節の御奉行所の時寛永二乙丑年諏訪社再興して當所の宗廟とし今の諏訪の町の上邊に建立し諸人始て神祇を拜禮す

評に曰諏訪社再興とは古來神宮寺と云舊跡あり是を本として建立す依て再興と云は今年までは寺門はありと雖もいまだ神社に非ず是に依て奉行權六此義を御意にかけ古來の跡を求めて今幸に唐津濱崎の諏訪神を勸請して此神宮寺と合體し今の諏訪町の上邊山下と云所に始て建立するなり是則寛永二乙丑年なり同四年今の松の森屋舗に是を移す重て又正保四年右の旨趣を以て願に依て今の諏訪松の森の地に移し慶安二年遷宮あり其頃は兩部の神道にて金受院と云社僧なり今の神主の先祖なり延寶天和の頃迄は今の地主毘沙門堂あり古へ神宮寺の本尊最も諏訪社の神體と云しなり然るに今は若宮の社として小き社これあるなり其古跡を本とする故に再興とは言し也翌年寅四月小野河内守奉行として下り給ひ専ら邪宗穿鑿あり其宗歸服の者あらば急度曲事たるべき旨在々所々に觸られ伴天連の訴人するもの銀百枚を下さる今の櫻町札の辻に是を建つ諸人に是を見せ給ふ又町々に町使二人三人宛出して吉利支丹を改めざるもの若し宗を改めざるものをば召捕て糺明し轉と言者をは其名字を留て帳面

に半形取られ轉ざるものは其家を追出し其所に置
す依て轉ばざるものは居所を失ひ山林に遁げ隠れ
て小屋掛して居所を焼拂ふ逃たる者も後には乞食
して流浪し彼しこ爰にたゝすみ行者多し是邪宗の
薰執深くして愚痴の心に迷ひし故なり其頃古河町
に我儘成者公儀の仰付にても吾は轉すとして十善村
に逃げ行き半年程小屋掛して居たり本の隣家の者
ども樽肴を持來り見舞として偕々貴様は器量もの
轉ばざる者は男者と褒めたるも笑止ければ是より同
六年竹中采女正奉行として下り給ふ此時稠舖邪宗
に薰執し隠し行する者は是を攻め轉すべしとて近隣
なれば島原の松倉豊後守重政越され今の江戸町の
内西濱町下に屋舖を構へ共に御相對吟味あり終に
は邪宗の者共を温泉に遣し背を割熱湯を入れて種
種責む是に依て轉といふ者あり又轉ばざる者は八
萬獄といふ温泉第一の熱湯にぞ入れられる又長
崎にては今の西坂にて穴つりして是を責らる是に
依て寛永六年七月十四日十五日には吉利支丹殘ら
ず轉で宗旨を改め皆釋門にぞ入にける既に三寶を
崇敬す當年轉といふも此時なり踏繪の始も此時な

り兎にも角にも和光乘跡利物遍増なれ或時は稠舖
是を呵責し或時は慈悲柔和に是を愛敬す誠にこれ
東照大權現の御威光と謂ふべし竹中采女正と云は
父は竹中源助重信と云者なり昔秀吉公に仕へて一
萬石を領す石田亂逆の時節御當家に屬し忠を盡す
故七石加増あり都合二萬石に成り豊後高田城を
領す其上從五位下伊豆守と受領し彌勳功を勵みて
病死す其子采女正に家督を繼長崎に奉行たりしが
私曲搖亂にして政を汚す此由一々上聞に達し忽ち
知行召上らる剩へ江戸に於て生害仰付らる時に歳
四十八天正十二申歲四月六日の産なり長崎奉行職
は寛永六年より同九年まで四年の間なり同十年奉
行所二人に成る是れ采女正私曲あるに依て二人に
ては又私曲あるべからすとの事なり則ち奉行所曾
我又左衛門尉今村傳四郎此二人今年一年の仕置な
り此二人の時迄は本博多町の政所なり今村傳四郎
屋舖より出火して西御政所其時は大坂會所にて有
けるに夫迄焼失す是に依て奉行所惡しとて大坂會
所と代地これあり今の西屋舖に東西二所奉行所と
なる右本博多町に奉行所有る事今年迄四十二年西

屋舖長屋門口一箇所にて内には玄關二所なり總て坪數千六百六十一坪の所なり

寛永十一甲戌年奉行所榊原飛驒守下向して九月諏訪社の神事祭禮始めて執行あり諸民古風に立歸り目出度かりし事ども也又其年渡唐する事停止し給ひ邪法相親み難はらざる様にし給ふ

評に曰諏訪此時は今の松の森に宮屋掛り再興あり終に祭禮有と云ふ事なし最建立始り九月九日神樂湯立までなり今年祭禮と云事執行はる或は其頃豊後より今の萬屋町に府内の住吉社神主筋の者流落し來り居るを召出して相談して始といへり其名をは宗成と云昔し神功皇后三韓退治の規式なりと云り諏訪住吉二社御幸なり又踊といふ事を始む今の丸山町寄合町其時は今博多町古町桶屋町三町の間なり此町の傾城共踊を始るなり高尾音羽二人能を仕たりとて此傾城町は文祿元年筑前博多より來り始るなり今の所には寛永十九年に移されたり其年渡唐する事停止なり渡唐の始は文祿三年に白山嘉左衛門と云者薩摩に往き京泊といふ湊にて唐船を造り跣趾國に渡る是九州の地より渡唐の始にて有

ける是より九州の地所々より渡唐する事あり元和年中に至りて渡唐船には御奉書を下され外には自由に渡る事なし偕奉書船といふは京にて茶屋四郎次郎の船角倉の船伏見屋の船堺には伊豫屋の船長崎には末次平藏船二艘船本彌七郎荒木船糸屋隨右衛門船なり是等の御奉書船多是安南國又は暹羅柬埔寨塞古城に往しなり御奉書是なき以前は咬啮吧方方自由に外夷の諸國を乗廻し船多し其物語共あれども是を略す然るに今年渡唐停止なり日本より兼て異國に渡り居る者其歸朝する事も停止なり然るに廣南の地より日本人歸朝するもの五人あり停止ゆゑ死罪に行はる一旦御制禁あるに依てなり寛永十二年當地に於て金鑄治兵衛と云者を尋ねらる是吉利支丹伴天連なり暫く同十二年晦日夜に入て是を捕ふ天草四郎同倫の妖術者と言へり本は小西行長が信臣なり去りながら南蠻船來朝する事はいまだ禁制せず町屋には南蠻徧布せり

茲に暫く寛永十三年に至りて初て出島を築き南蠻人を其内に入て町屋に居る事を止められたり又今年より諸國入津の異國船商賣長崎一所に定めらる

評に曰吉利支丹吟味に付て町屋にある處の南蠻人一所に置き和朝南蠻の種子共雜和せざる様にと是ありて出島を築き其内に籠置き又其南蠻種子を一々擇み出して彼等が本國に指遣さる總て其種子二百八十七人此時大村より警固の爲とて侍足輕ども八百餘人遣して此彼等往來の所に關て一人も逃れざる様に固めける偕長崎より平戸に遣さる又平戸にある阿蘭陀種子ども探り出して同船にて送り渡す哀れ成哉此者ども受け難き人身を得偶々本朝の王國に生れたれども其本性蠻賊の種子なる故悉く皆生國を捨て知らざる所に迷ひ行偕も咬啗吧といふ國は日域を去る事海上三千四百里赤通近く八氣の國にして彼國の冬といふは日本五六月の頃の如く暑き所なり此國の風俗食する時は手廻に喰ひ常に裸に居るなれば今行く者共が定めて黒坊とぞ成つらん此内呂宋亞瑪港に渡さるゝ者多し當地には其緣類多ければ皆歎き悲みけり此浦永祿十年より南蠻船入津して毎年絶す既に元和の頃此船停止あるべきを當地の者共急に商賣の振替難儀すべしと上より察し給ひて年々の今に至りて諸國入津の船

當地一所に集も商賣すべしとの事なり最も當地南蠻船の外に唐船來らざるにあらず文祿四年跣趾船來り始めて毎年入津して商賣す其外諸國外夷の船皆來りしなり然れども商賣利潤の勝手次第に津々浦浦に來るに依て定めなし然るに寛永十三年長崎一所に異國船商賣すべしとの御上意なり偕諸國入津の儀は薩摩の鹿兒島同坊の津同く京泊島原口の津大村の横瀬浦唐津筑前博多長門赤間關紀州和歌浦和泉堺伊勢安濃津南部上總等古より本朝津々浦々異國船來る事繁し記するに遑あらず是皆南蠻邪法相雜はらざる様にとある御吟味の上なり

寛永十四年丑十一月始め頃天草島原益田四郎を大將として吉利支丹共一揆す其頃長崎の騷動言べからず時の奉行所馬場三郎左衛門柳原飛驒守二人なり然るに明年寅二月下旬終に落城して彼地に於て死亡する者三萬七千餘なり則大將時貞が首並に其賊徒の首共當地に持來りて出島の前左の木に獄門に首を掛け南蠻人に見せしめ又其首を以て西坂に埋めて塚を築則今この首塚是なり

評に曰寛永十四丑年十一月中頃に長崎以の外騷動

すは何事ぞと聞に天草甚兵衛が倅子十六歳に成が此度吉利支丹を再興して則其大將として益田四郎大夫時貞と名乗る天草島原を攻隨へ不日に長崎に攻來ると騒動する事斜めならず當地より大村長江時津を指て逃行者あり又は山野に逃げ隠るゝ者多かりけり唯商賣を事とする者共なれば淺猿しかりける次第なり最なる哉霜月十五日談合島にて吉利支丹共評議しに其人數一萬二千を二手に分け茂木峠日見峠に置長崎に使者を立吉利支丹尊敬にあらざるに於ては押寄せ追討し軍陣に祭りなんと評議して既に打立んと用意せしと聞え又富岡の城既に攻落すとも聞えけり是當地の騒動は霜月十八九日の事なり偕天草吉利支丹初發の合戰に島原木戸にて寺澤兵庫頭城代三宅藤兵衛重利力戰して邪徒の爲に討死す從兵同く死する者五人吉浦兵右衛門山本市兵衛吉浦久作瀬戸吉藏十一月十四日の早旦なり重利は法名雲山道白居士其頃當地には奉行馬場三郎左衛門榊原飛驒守は江戸にあり是に依て町年寄後藤庄左衛門高木作右衛門高島四郎兵衛高木彦右衛門末次平藏所々に寄合是あり則ち大村に加勢

を乞ふ又當地諸役人其外浪人若者共皆其口々を固むべしとて茂木村口又は日見峠深堀口時津口に皆番所を立て相詰らる偕彼吉利支丹一揆の者共原の城に籠ると聞地下人皆安堵ぞしたりけり又奉行飛驒守に供したり其外當地の者何れも軍役を相勤め長崎役人の内附添討死加藤家浪人多し偕軍用の道具には長さ五間に口三尺の木石火矢同く鐵九重さ千拾斤十八匁三分五厘燐硝一放に千五百斤なり是の如くして其年も暮れ明れば寛永十五年正月元日合戰あり上使内膳正重昌討死也時に五十歳城より鐵炮にて打しとなり二月廿八日終には落城す打る者三萬七千餘人也大將時貞同く姉が首大矢野小左衛門が首有江監物が首此四人の首は出島の前にある左の木に梟首に懸られ南蠻人に是を見せらる其外吉利支丹從賊の首三千餘船に乗せ當地に持來て彼是共に西坂に埋め塚を築く今の首塚と云は是なり上使松平伊豆守信綱歸陣の節長崎に來りて所巡見し給ふ南蠻人を能く見玉ひ又野母日見の山に遠見番所を建べしとて是を始む是異船を早く見分べきの爲なり御宿は末次平藏屋舗なり其後歸府

の時は浦上通り平戸大村巡見是あり唐津名古屋をも巡見なり筑前に越て小倉に暫く御逗留なされ江戸に歸給ふ其年四十三歳なり寛文二寅三月十六日卒六十七歳なり慶長元申年産なり寅年後藤庄左衛門高木作右衛門二人江戸に登りて銀百枚拜領是は吉利支丹共一揆に付て長崎にありて諸事勞困致せしとありて也殊に其時は家光公に面拜し奉る其翌年高島四郎兵衛登りて右の由にて銀百枚頂戴す高木彦右衛門も又登て銀百枚頂戴す外に當所の町人濱田新藏銀百枚下さる石火矢打なり六永十左衛門銀五十枚島屋市左衛門銀三十枚藥師寺久左衛門銀三十枚其外手傳の者共に銀五十枚又は銀五百目下さる長崎四箇所の番日見峠茂木口戸町口時津口番の者百餘人丑十一月六日より寅二月四日まで相詰る是にも御扶持方あり偕又原の城落るまでは大村丹後守長崎を請取家老物頭守護するなり今年の秋南蠻船渡海停止なり是元和元年中に御停止あるべきを其時の奉行所長谷川權六言上して諸國に入津する唐船を年々當所に入津せしめ當地一所に定むべきの了簡御旨に叶ひし事割符を合せたり誠に

遠慮深き所なり寛永十六年には奉行馬場三郎左衛門大河内善兵衛なり神原飛驒守は原の城寅二月廿七日夜の合戦に軍令を破られしとありて六月に召登せられ江戸に於て閉門其上長崎奉行職を召上らる是に依て大河内善兵衛を指下さる此奉行の時重て南蠻の種子吟味あり則ち當地町中より指出す筑後町より阿蘭陀ヒセンテ年七十同女房年五十二伊幾里私女房年三十七同娘マン年十九同娘ハル年十五同孫萬吉三ツ以上六人卯九月十四日筑後町乙名久保十左衛門御奉行に是を書出し攝津町にも阿蘭陀メキス年七十同女房五十一阿蘭陀ウキロン年十九同女房十六子ケラル以上五人なり乙名田中庄左衛門外九月十四日書出す奉行所より平戸に申遣されて阿蘭陀より本國に歸らしむ其平戸に指遣はさる檢使には馬場三郎左衛門内より澁谷甚左衛門大河内善兵衛内より油井平左衛門此二人なり此節當地にも阿蘭陀人參り申さず然に阿蘭陀伊幾里私の種子と云事不審の事なり定めて先年搜し殘せし種子共ならん但平戸より當地に來るか寛永十七年迄は阿蘭陀船商賣は平戸一所に限るなり殊に阿蘭

陀南蠻人は中惡舖に依て同船すべからず伊幾里私
は知らざる事也是も商賣は平戸に限ると見えたり
當地に於て搜し出さるゝは南蠻種子と知るべし今
年は南蠻船來ると雖も追歸さる

爰に寛永十七年辰五月十七日呂宋船一艘來る其時奉
行所より羽書を飛して江戸に言上あり則ち上使加賀
爪民部少輔六月十四日申の刻に下著し翌日南蠻人を
船より上られ其儘入牢せしめ十六日の早旦に引出し
西坂にて六十一人は死罪に行はれ同日に崩の前にて
其船を焼き沈めらる殘十三人は再び日本に渡海せさ
る様に申含め唐船に乘せ歸帆せしめ給ふ

評に曰此船七十四人乗り來る寛永十五年に御停止
ある處に來る故焼沈らる所は崩の前なり此船積物
銀六十貫目餘金道具端物等品々あり其儘焼き沈め
て其後寛文三年卯十月町年寄常行司内外町の乙名
並御物目利に是を下され翌辰五月より九月迄に銀
高四十五貫目餘揚る爐柏町にて灰吹し銀坐にて兩
替す此時は奉行黒川與兵衛なり偕七十四人の内十
三人は唐船の古船一艘を二貫百目に調へ飯米等を
積て歸さるこれ日本の仕置を彼本國の者共に聞し

めんがためなり六十一人は西坂にて死罪に行れ塚
を築き南蠻と云ふ入籠といふは則ち出島なり南蠻
人停止以後明き屋敷にてあるを修復して是を入る
ゝなり誠に永祿の頃より七十餘年當浦に入津して
有しが爰に至りて通路斷絶す快き哉往年當地にて
其宗を發興して神宮寺並に其枝院迄滅亡せしが今
は却て其本に報ふ事車の輪の廻り來るが如く其身
を焼燼する事の淺猿さよ是に依て寛永十八巳年八
月黒田右衛門佐忠之上意を蒙り長崎港口西泊戸町
兩所に御番所を建て要害とせらる翌年鍋島信濃守
亦上意を蒙り是より毎年に代りて相守る此以前野
母目見山に遠見番所を建置るゝ事有りと雖海程遠
し今内海港口に於て要害なくては叶難とありて寛
永十八年に始めて小屋掛にて有けるが慶安五年辰
三月普請あり西泊方軒數十九軒總外廻り二百二十
一間四尺四寸坪數凡三千八百七十坪入札にて銀高
二十四貫五百七十目戸町の方軒數十九軒總外廻り
百九十間坪數二千八百四十坪銀高九貫七百五十目
なり奉行所馬場三郎左衛門栢植平右衛門二人の時
なり普請の時の奉行所黒川與兵衛甲斐喜右衛門の

時なり上使加賀爪民部少輔忠澄は知行高一萬三千石是御當家御譜代の人也始江戸の町奉行仰付らるる所に其裁許分明に沙汰するを御賞美これあり大目付になり夫より諸番頭を仰付られけるに諸役私曲なく勤仕せらるゝ段々御加恩賜り一萬九千五百石までに成て病死す寛永の今黒船來りし時上使として右の手段也

其後正保四亥年六月二十四日黒船二艘來る是は亞瑪港よりの使者船といへり依て九國の大名は云ふに及ばず四國西國の諸大名兼てより上意を相守り皆當地に來りて守護し王ふ其形粧頗る又前代未聞なり奉行所馬場三郎左衛門今の西屋鋪にあり

評に曰黒船來朝は先年燒き沈められて後八年に當るなり此船二艘繋り所は崩の前なり船の長さ二十六間横七間深さ凡八間一艘は長二十四間横六間深さ凡四間あり二艘共軍船と見えて石火矢所外より見分する處二十四挺致掛たり是に依て奉行所より使者並に通詞を以て日本の法なれば石火矢玉藥を相渡すべきの由申付らるゝ處に二艘の加比丹共申やう我等は本國より使に參りしに依て別して仔細

これなく以來渡し商賣御免有無の御返答承るまでの義に候とて石火矢玉藥相渡申事相叶はずと云て猶用心の體に見ゆるにより此儀江戸に言上あり是に依て諸國の大名當地に御越あり最自身出馬これなきは名代其勢を指越され討沈むべきの詮議區々なり此節阿蘭陀船來る今の黒船と稻佐割石の間に引込て召置る諸黒船二艘の使者申所一々江戸に言上ありて上意如何と相待けり其間に先づ諸國來着の諸大名何れも其陣所を取て稠鋪警固せらるべしとて海陸共に陣所を定めらる先づ女神男神の間二百二十三間の所に船橋を係ひて大綱を張り其船漏ざる様に仕掛たり上使松平隱岐守定行其勢六千三百餘人船九十三艘其時の上將として諸將の命令を司る船橋の東西二ヶ所に固む陣を備らる外海神崎小瀬戸神の島には細川肥後守光利其勢一萬三百餘人船數大小二百餘艘指越扣へたり此内棲樓船二艘あり神八十陰の尾深堀古賀倉の邊には鍋島信濃守勝茂其勢一萬千三百餘人船百七十餘艘にて構らる鍋島美作守其勢千二百餘人船八十艘木鉢浦に扣らる内海には立花左近將監忠茂勢三千八百七十人

船三十三艘此内九艘は關船にて上古川下古川に備を立る小笠原信濃守忠次其勢千六百餘人船六十六艘鍋蓋り山の下に備らる爰に黒田右衛門佐忠之其勢一萬七千二百餘人船二百餘艘にて其節の當番にて先懸の用意に燒草を積兩番所に備へらる大村丹後守其勢二千六百八人船三十艘小瀬戸の鼻に扣へらる島原高力攝津守長房其勢二千餘人船三十艘戸町の鼻に扣へらる唐津平戸五島の諸勢今の出島の鼻崎稻佐和久の浦西北海邊所々に扣へらる陸手所々大村勢は詰り詰りの七口を堅め近國の諸勢町内町外の非常を戒めらる長崎開關より以來是の如くの堅剛利兵の軍粧は始ておどろく計りなり是に依て南蠻人の心は空に揚り身は針の筵に座するがごとし前非を後悔するに依て別儀を以て御免なされ同八月四日無事に歸帆せらる誠に我朝仁義と謂べし

慶安元年の春上使井上筑後守下向ましゝて立山御役所を建らる御逗留ありて彌吉利支丹宗門穿鑿あり又新法を立る事制禁なり當地正法益盛にして神社佛閣覺を並て梵音幣帛斷へす諸人信厚の繁昌の地と成

にけり天下泰平武運長久矣

評に曰井上筑後守下向は秋七月なり態々春と云字を置て長崎繁昌を祈る然るに井上筑後守下向を正保四年黒船來る時下向としふ人あり其時の上使松平隠岐守殿なり井上筑後守は右黒船來る事先達て阿蘭陀人註進せざるに依て其穿鑿の爲に下向なり是に依て正保四年に來る阿蘭陀池加比丹歸帆せざる前に下向あり去年加比丹ヘンテレキコエタ今年入津の阿蘭陀テレギスノク二人出島にて其口書等を以て和解させ御吟味是あり此二人の加比丹頗る不首尾なり依て江戸御禮叶はず歸帆したり翌年阿蘭陀使者フレキシユス加比丹ホロンコス江戸御禮に登る最もモテレキスノク加比丹當所奉行所にも御禮遂げざるなりこれに依て井上筑後守下向は正保四年にあらず慶安元年なり筑後守御逗留の間當地寺社式法の事又新法建立の事堅く制禁あり亦諸人先祖書物あり是は大野勘兵衛當地に流落してあるを御吟味の爲なり借立し屋舖は同五辰年六月十三日馬場三郎左衛門重て_レ使として下向の時此屋舖に御入なり其後明曆三四年四月此御屋舖入札あ

り松前肥前守方に銀十三貫目に拂る残り五貫目分
は町方に買ふ其門は延命寺に是を買ふ今建てある
所の門なり代銀百三十八匁なり

夫れ長崎は古へ邪法盛なりし所を東照君慶長年中
奇觀を破却ありて年々西洋國の法を退け給ひしよ
り以來神社佛閣を逐て建立し夫より民家年々繁昌
して今三十二ヶ村八十町の邑里なり然りと雖も其
縁起年曆知る者少し是に依て予古者の傳により其
故きを尋て綴るものなり

正徳二辰年仲春日

長崎光壽山正覺寺禿法昭記

長崎縁起略記大尾

前橋風土記

奉風土記序

儒官臣古市剛貞享甲子仲夏朔伏蒙_ニ盛命_ニ恭編_ニ輯前橋風土記_ニ矣同月廿有二日始草稿同年秋九月念有九日終也_ニ以_ニ一百三十有五_ニ日之間而編輯已成謹謄寫成_レ卷奉臣剛誠惶誠恐稽首稽首上言伏恐引_レ古誤舉_レ事漏焉然處_レ記_ニ編中_ニ各有_ニ所_レ本所_レ倣而無_レ有_ニ以_ニ私意_ニ編上_ニ矣故舉_ニ凡例倣例字例_ニ而以成_レ編伏冀備_ニ于官書之日_ニ

貞享元年九月二十九日

儒官臣古市剛謹奉

自序

恭賜_ニ官暇_ニ歸_ニ休於上州前橋_ニ矣一日令_ニ侍史剛_ニ曰聞周官設_ニ掌建邦之六典_ニ以佐_レ王治_ニ邦國_ニ且有_ニ土訓誦訓之職_ニ掌_ニ道_ニ四方九州之事物_ニ後有_ニ地志_ニ者乃其遺法而復史官之所_レ采也昔本朝亦有_レ之今也既泯矣往歲

中將源正之編_ニ會津風土記_ニ而成矣聞_レ卷見_レ之則郡莊村閭巨細畢舉不_レ遊_ニ于其所_ニ而知_ニ方域山川古今事物_ニ也如_ニ座見_ニ其境_ニ矣予采邑亦溫_レ故考_レ新編輯焉剛卽越_レ月成_レ編予補修竊挾_ニ之蠹帷_ニ耳

貞享元年甲子秋

成休子識

凡例

凡此編撰輯之序隨_ニ大明一統志之例_ニ且考_ニ豐後及出雲之風土記_ニ而以編_レ焉
凡天地之廣衆人之所_レ因各隨_ニ其宜_ニ也於_レ是乎有_レ府有_レ縣有_レ郡有_レ村統_レ之者方域也故先舉_ニ其方域_ニ矣審分_ニ于其方域_ニ則爲_レ郡爲_レ村故次_レ之以_ニ郡村_ニ矣黎民之生也都本_ニ飲食_ニ於是因_レ陸而厠隨_レ水而田廬_ニ于山傍_ニ居_ニ于川頭_ニ故山川次_レ之焉凡民居異_ニ其方域_ニ散_ニ在各處_ニ奉_ニ貢於東西_ニ通_ニ信于南北_ニ故開_レ山而通_レ道望_レ水而舟楫故驛路渡港橋梁次_レ焉凡萬物生也自_ニ飲食_ニ至_ニ器寶_ニ都而雖_レ得_ニ人工_ニ而成_ニ其始無_レ不_レ本_ニ于山川_ニ故土產次_レ焉蓋人生追_レ遠報_レ始者大道之常理也天地山川之神昭穆考妣之靈村落設_レ社鄉里安_レ廟奉_ニ

穀先熟者祭以盡敬故神社次焉浮屠所尊之者非國朝神西域之鬼也故特遠之佛寺以次焉雖有古人之壘園陵墓存于鄉村田野之間者民猶以不毀傷之衆人共所見也不利國家而雖齊贅不忍去之陵墓古蹟以次焉往昔俊傑產于其地鳴當世者雖其人去其名與功猶存焉故舉人物以終此編耳矣

一凡記國中之事也先考理稅文書且傳令命於各郡之有司令之周探求於郡中雖小邑之幽事無不顯都而以編也

一凡橋城封侯之序望洋無可因者故考舊寺所藏之謚書與本主及舊記且北條記甲陽軍鑑等之書而正焉

一凡編中記郡村山川而有下不屬于前橋者所以尋川水之源而記支流也

一凡郡中引川水田漑田者都記曰溝渠

一凡土產者有古出而今不出者有古無而今有者以當世之者記焉然載延喜式者略記焉

一凡編中記道路遠近謂若干里者隨土地所計矣以三十六町爲一里

一凡記若干町者以六十間爲一町

一凡謂步者以六尺爲一步

一岩神者土人雖稱神是一魁石耳無有宮社之制矣故記山川之後不入于神社之條

一凡神社者出延喜式等書者無細大舉寫焉式雖古書不載小社至有故者盡勝記餘雖大社不記

一凡郡內神社佛閣蒙將軍尊印者都先舉記次傳來久或有故者載記餘省焉

一凡記山川古蹟寺社等先寫郡村名次記方位而曰在子何郡何村何方

一凡記寺院之原始及傳法之次序也或詳問主寺之僧或考所藏之舊記而以正焉

例

一凡編中寫稱府者非如駿府甲府之類者也府聚也衆人之所聚也公卿牧守稱府唐制大州曰府今例之矣

一凡編中所記古蹟取村邑所傳而記例司馬真神史記之例

一 凡寫_二城中樓閣及國中補社梵刹_一也各因_二三輔黃圖之例_一

一 凡至國中尋_二川水之源_一求_二枝流之終_一寫_二勸_一水經之例

一 凡記_二國中諸寺槃_一勸_二楊街伽藍記_一次因_二元亨釋書及拾芥抄之例_一

字例

一 凡村邑山川之名隨_二方俗所_レ用之字_一而寫也今不_レ改焉

一 凡村邑山川之名方民稱呼而無_二其文字_一者取_二伊呂波之字_一而寫_レ之又可_レ製_レ字者以_二私意_一製_レ之以_二伊呂波之字_一注_二其下_一

一 編中有_二郡村之名_一其字今與_レ古異者寫_二隨_下所_二今用_一者各注_二其下_一分_二古今_一如寫_二厩橋_一作_二前橋_一寫_二御靈_一作_二五料_一之類

一 凡編中有_二云字_一又有_レ寫_二曰字_一者證_レ書則寫_二云字_一據_二人語_一則寫_二曰字_一勸_二時珍本草綱目之例_一

一 凡編中曰_レ峠者隨_二俗用之字_一而不_レ改也

一 凡記曰_レ岸者稱_二水涯之高者_一也

一 凡記曰_レ崖者山傍高處也

一 凡寫_二谷字_一者兩山之間無_レ水也

一 凡寫_二澗字_一者山谷夾水也

一 凡寫_二潭字_一者流水深處也

一 凡寫_二淵字_一者水出不_レ流也

圖例

一 凡寫_二山川_一者各舉_二其大者_一也

一 凡圖_二中郡界_一以_二大畫_一分_レ之

一 群馬與_二勢田_一以_二廣瀨川_一爲_レ界如今爲_二大畫于廣瀨川之東_一而屬_二川於群馬_一矣是引_二古歌_一而證_レ焉歌見_二比利根川之條_一

風土記引用書目

風土記 日本記 倭名集 甲陽軍鑑 北條記 拾

遺集 千載集 新續古今集 山家集 玉吟集 新

勅撰 萬葉集 歌枕 延喜式 赤城神傳 夫木集

元亨釋書 三代實錄 東鑑

前橋風土記

古市剛撰

前橋方域

前橋古曰_二厩橋_一在_二于上野國群馬郡_一矣風土記云上野下野兩國之間挾_二一之廣原_一一曰_二佐野_一一曰_二笠懸野_一有_二流水_一而橫_二于野中_一一名曰_二渡瀬_一又曰_二佐野中川_一欲_二以_二此野_一屬_二于一方_一則兩國廣狹參差故以_二原中流水_一而爲_二封境_一分_二兩國_一名_二川西_一曰_二上野_一以東曰_二下野_一矣言以_二野分_一付于上下也故曰_二上付野下付野_一也日本紀作_二上毛野下毛野_一不_レ知_二省_一毛字_一何時_二上耳_一

處屬郡縣

群馬郡音軍麻又讀_二車_一府城處有_二屬縣_一都三十有七
 那波郡在_二府城東南_一屬縣都十有八
 勢田郡在_二府城東北_一屬縣都一百十有二

綠野郡在_二府城南_一屬縣都二十有一
 碓氷郡在_二府城西南_一屬縣都八
 多胡郡在_二府城南_一屬縣都一

群馬郡屬縣

德丸村	宮地村	阿內村	阿內宿村
礪島村	佐鳥村	橫手村	前代田村
紅雲村	天川村	六供村	市之坪村
後閑村	新堀村	房丸村	力丸村
公田村	朝倉村	天川原村	上新田村
中大類村	下大類村	上瀧村	齊田村
下瀧村	八幡原村	中齊田村	瀧村
板井村	島野村	箱田村	京目村
宇貫村	岩鼻村		
那波郡屬縣			
宮古村	藤川村	戸屋塚村	南玉村
上福島村	福島村	下新田村	川井村
飯島村	上之手村	角淵村	沼之上村
箱石村	茂木村	下之宮村	小泉村
西善養寺村	東善養寺村		
勢田郡屬縣			

河原濱村	堀越村	江木村	今井村	才川村	笥井村	萩久保村	片貝村	原之郷	箱田村	川端村	大鳥村	眞壁村	小神明村	峯村	下細井村	野中村	南室村	樽村	上泉村
下大屋村	泉澤村	宮關村	富田村	女屋村	小泉村	三ッ俣村	石井村	米野村	八崎村	沖之郷村	上野村	田口村	鳥取村	勝澤村	不動堂村	石關村	田島村	三原田村	小暮村
柏倉村	上大屋村	堀之下村	小屋原村	小島田村	長磯村	北代田村	漆久保村	引田村	日輪寺村	上小出村	岩神村	端氣村	新井村	五代村	磯村	棚下村	荒牧村	長井小川田村	猫子村
大室村	樋越村	茂木村	荒口村	増田村	中龜村	瀧久保村	幸塚村	横室村	青柳村	萩村	關根村	小坂子村	清王寺村	上細井村	龍藏寺村	下小出村	持柏木村	溝呂木村	勝保澤村

吉井村	多胡郡屬縣	町屋村	上里見村	確永郡屬縣	淨法寺村	鮎川村	本動當村	森新田村	岡之郷	上戸塚村	糸井村	根利村	中村	野村	關村	馬場村	一之關村	荒子村
		板鼻村	中里見村			篠塚村	根岸村	失島村	肥土村	下戸塚村	朽久保村	見立村	深澤村	山上村	月田村	室澤村	鼻毛石村	飯土井村
		八幡村	下里見村			中栗須村	川澤村	牛田村	下栗須村	立石村	川端氣村	宮田村	一日市村	田面村	前皆戸村	武井村	奥澤村	板橋村
		鼻高村	上大島村			藤岡村	東平井村	山名村	小林村	中村		森下村	女淵村	小林村	膳村	苗ヶ島村	大前田村	二之宮村

形勝

聳峯層巒卓々環西北激水怒浪浩浩抱城流東南荒
原田圃阡無際涯鄉村田野都砂地寒暑相共烈居民難
當每冬北風厲至夏疾雷駭人者數次竹及多桑宜
養蠶矣東抵勢田北亦極勢田南界綠野多胡西
止碓氷

風俗

村落農商各尙志勵勇兇強而好殺輕生矣然以強
不犯禁出入帶利刀信佛知文字言語重濁死則
多無石碑作一小石室而設裏小佛石像耳制大
行於民間遇塗于官吏不拘尊鄙下馬捨蓋跪
于車塵馬蹄之間官吏不逝則不敢去勵業勤農素
長織絹故地產綾絹花紋絹矣山間之小民_{根利山}重
君恩不顧己貧孜孜奉賦稅矣仕士尙儒重書或長
射或能御性素質朴無貴賤之品各以木綿爲服
然退讓談話不亂其序矣

府城封侯

不知何將以何時築焉下之城長昌寺主僧曰有固
山宗堅者築前橋城至子今設歷代城主之本主
矣見所記乎其本主第一延德元年固山宗賢其二道安
其三道賢其四賢忠其五前藝州大守芳林其六宗祀其七
平島院也自是以下酒井累代之本主也各訂其姓名則
固山宗賢者長野左衛門尉也道安者道賢之父長野道安
也_{見橋林寺所藏道賢實蹟附田之帖}道賢者長野彈正入道道賢也賢忠者長
尾入道賢忠也芳林者北條安藝守也宗祀者北條丹後守
也平島院者平岩七之助也又考壽延寺之記笠間明玄劍
築此城矣如令暫舉一二之說不知何是也又詳
按其封侯序天文之間長野道安主于城永祿元年長
野彈正入道居于于此長尾賢忠又守于此地同五年越
後長尾輝虎親殺賢忠令北條丹後守代之_{次年二月藥子越州}
同十年輝虎來居于此城北條氏康同氏政與信長攻
焉_{事見甲陽軍鑑壽延寺之記氏康作氏照爲天正七年之事}天正之間長尾景勝及武田
勝頼各前後居于是天正七年氏直令金井大道寺
村山佐渡守中川武藏守暫居于是上同十年信長令瀧
川左近一益居于此城矣_{見北條}同十八年神大君令
平岩七之助親吉領三萬石而居于此城_{後號主計頭經甲府而移名}
慶長六年以此城而賜酒井河內守重忠自

是以來子孫累世相續爲城主

府城

在群馬郡一名城稱前橋城一深塹高壘女牆曲隍遠而如島欲右而左樓門長橋點于此一櫓閣臺榭聳于彼一叢郭遠也凡七重每門以鐵而纏以瓦葺門樓一嚙吻各瓦製以酢醬一而代鬼面一每橋護朽都以銅而造矣後者利根之急水護城而流高涯計數仞非飛鳥一則不能到矣敵樓雉堞高低參差于蔚林之口一實一方之絕境也

天守 在內城一其製三層每層施博風于屋上

臺榭 設四裔或每郭門傍且可守地一

城門 散在四邊一每門裏面設守舍各一

譙樓 在內城之外第二郭之門傍其製二層

涼樓 在府城之內一天神山相傳山是葬靜之地也上

有石碑且天神之社一今移在十八鄉養行寺林中

登樓遠望一水澤白雲等諸峯一邇愛利根清流一夏忘

炎蒸之苦熱一冬對群嶺之密雪一是樓上之大觀也

寅賓館 在城下市廛之中一

關 設五料之水傍一

山川

赤城山 在勢田郡一數峯群聚之都稱赤城山一逐一記

下

荒山 在赤城山地藏嶽之南一

鍋割山 在赤城山荒山之西南一

地藏嶽 在赤城山大沼南一矣在山上茅屋一設于

屋裏一銅製地藏之像長貳尺餘放下一之銅釜爲座而

施像於其上也

鈴ヶ嶽 在赤城山大沼之西一

佐々倉山 在赤城山鈴ヶ嶽之南地藏嶽之西北一

前山 在赤城山小沼之南一

和久土也山 在赤城山大沼之北一

鷹山 在赤城山鈴ヶ嶽東地藏嶽西北一多磐石一躑躅

生石間一山上平也

永倉山 在赤城山大沼西和久土也山南一

烏帽石 在赤城山荒山之東北瀑布之上

大沼 在赤城山大黑檜之西地藏嶽之北一永倉山東南

諸山中一矣計東西十有四町南北六町神殿有東岸一

又有池中一小島一設裏手神殿一名小鳥島一東岸

名障子返也古名此沼曰石垣沼古人多詠歌者如今舉其一二矣

人丸

見拾遺集戀之一

オク山ノ石垣沼ノ水コモリニ

戀ヤワタランアフヨシヲナミ

俊成

見千載集卷五

オク山ノ石垣沼ノウキヌナハ

フカキ戀路ニ何ミタルラン

後鳥羽院

見新續古今集戀部

サテモ猶石垣沼ノアヤメ草

アヤメモ知ラヌ袖ノ玉水

小沼 在赤城山大沼東南隔一小山南北六町東西

四町餘

祖母坂 在地藏嶽之西

地獄谷 在永倉山之西

舟之鼻 在地嶽谷之西

五輪峠 在大黒檜之西

鳥居峠 在大黒檜下之南

南雲澤 在大沼之西

横野 在赤城山之麓古人多詠歌也

俊成

見新續古今集春下

紫ノ根ハフヨコ野ノツホスミレ

マンテニツマム色モムツマシ

西行

見山家集

葦咲横野ノツハナ生ヌレハ

オモヒニ人カヨフナリ

家隆

見玉吟上

ムラサキノ根ハフ横野ノ春駒ハ

草ノユカリニナヒクナリケリ

鷹巢山 在碓氷郡板鼻町

富士山 在勢田郡山上村

奥澤山 在勢田郡奥澤地

橘山 在勢田郡田口北山上多桃樹

城山 在橘山北巔平而如人可處

片石山 音家多古句在橘山南奇峯卓立而松樹叢生

其勝可愛南則斜聳麓藏于林中北則累石危峙數

十仍相傳昔此山遇于洪水破裂於北傍矣其半山

解石流而止比利根川之傍也故名片石山矣

十二山 在勢多郡横室村之北一魁石爲山多松

樹在山上十二天山名因之也

根利諸山 在勢田郡歷廣護卓于四邊矣四面之封疆且可名之諸山川澤舉土人所呼而追一記左無名之小山細澤除而不記焉

暗裏會 山名讀曰久良美乃津武之山大多木

戸屋山 在大倉澤南

銀山 在末人田坂之東北數峯相連

座句山 搦原山也氣乃會里緣魔乃土也以山巔爲界自峯巔以南都屬于根利

三箇會山 在戸屋山西以此爲西方之界

大水奈山 在根利村西北

小袈裟丸山 以此山巔以北相連諸峯爲東之封疆

安加津良山 在根利村之東群峯高低相連

礪砥澤 在座句澤南山谷之中多礪砥

高堀澤 在戸屋山之東澤水源在末久田坂之山谷

矣南流到于根利村土人得鷹雛於水源諸山樹林中

瀧倉澤 在高堀澤東南澤水源在東諸山中矣西流而合高堀川到于根利村

座句澤 在礪砥澤北而隔山澤水西流合片品川

以上根利山川

山崎山 在綠野郡根岸村西藤岡村南山上多木

小林山 在碓氷郡鼻高村

初山 在碓氷郡下里見村

天神山 在碓氷郡板鼻村山多松

本壯山 在碓氷郡上里見村

雙子山 在群馬郡天川村西

南雲山 在勢多郡府城之北路程五里餘山尤大而數峯相連于四面山巔廣原縱橫二里餘多鶉及雲雀等鳥覆盆夏枯等艸矣名曰百々ヶ原民居于其北

溪之中澗水流其前曰長井小川田村土俗呼南雲村其

山道曰松木坂其險危不可狀也

須久毛山 在勢田郡原ノ郷山上多松

利根川 源在越後之界富士山之西且與州信濃諸谿

之小水各合而爲流矣到森下村而合片品川流廻府城之後而深也不可計廣也數百步激湍頽波

形如瀑布遠望近視聲如疾雷水底砂石傍潭之色若對瑠璃之盤望硝石之瓶清冷可愛怒濤可

懼矣非土地之水手則不可浮舟船而狼渡也

中多魚鮭鰻等之魚水傍或高岸丈餘或磐石砂

石相接步之不得穩到樽村等水傍者砂石共白

矣生紫胡著青嵩木賊一夜則狐狼奔走古人多詠歌
今舉其一二

橘仲達

見新勅撰神祇部

笹分ケテ袖コソヤレメ利根川ノ

イシハフムトモイサカハラヨリ

不知讀人

見萬葉集

利根川ノ川瀬モ知ラス唯渡リ

ナミニニアフキスアヘル君カモ

片品川 其源有二矣其一出大江山之麓其一自津

婦良之沼流來也沼在于白根峯二十五淺嶽之麓

到于森下村合利根川而流

吾妻川 到勢田郡八崎村合利根流

鳥川 在綠野郡森新田北源出碓氷郡浦村山中矣

到于那波郡沼上村合利根而流

比利根川 土人呼曰廣瀬川其源與利根川同到

于勢田郡箱田村而分爲北利根川到新田郡平塚

村再合利根川流矣水色清英中多魚每歲仲

秋以來設魚梁於水傍得魚暫時巨萬古人有詠

歌

見歌枕

都ヨリタツネクルハマノサト人ハ

ヒトネ川ヲヤ渡ラサルラン

碓氷川 源在碓氷諸山之溪中流遇碓氷郡板鼻

村之南而到于高崎城之西合鳥川

龍ヶ鼻 在府城之西矣利根川之水涯也高岸數十仞

水流極而急舟船不能廻

岩神 在比利根川之水傍四魁石累積高三丈餘廣

三四十步紫赤色若到其下則危怖不可道肌汗四

肢不收累石縫間生諸木及藤蘿矣相傳古洪水漫

天片石山之北傍解流而止于此地石工欲摧之

而充造屋之用忽石中有聲如人號膿血流走石

工四肢麻木兩目眩暗而倒死故土人相尊而稱神矣

溫泉 在子三夜澤東北一里計名地曰湯澤

神流川 源在子甘樂郡濱平村諸山之溪中而諸水相

合而東流至子今里村屈北而流過綠野郡淨法寺

村之東到那波郡角淵村而合鳥川之流矣中多

年魚水傍數色之有石

加婦良川 在綠野郡山谷村中村兩村之間矣源有

二水而曰西牧川東牧川共甘樂郡二水之源諸山之澗水也到子甘樂

郡下仁田村相合爲一水又到甘樂郡星田村南

合_二高田川_一而到_二山谷村之南_一合_二年魚川_一過_二村中_一而到_二森新田之西北_一而合_二于鳥川_一又到_二那波郡角淵之南_一合_二于神流川之流_一

瀑

三夜澤瀑 在_二三夜澤神社之東北一里計諸山之中_一瀑從_二山上_一下高數十丈廣四五尺其道險難而不_レ能_二馬行_一

棚下瀑 在_二勢田郡棚下村_一矣山傍有_レ洞廣貳拾間餘飛泉直下_二于洞前_一洞中見_レ之則如_二密雪頻下水聲_一在_レ頭洞邊松杉凌_レ天而枝蓋_二四邊_一與_二危石_一相接矣洞裏設_二草堂_一放_二不動之像_一其道路從_二山腰_一而環深谷巖巖狹_二道於左右_一一步而謹_二二步_一而息嶮急如_レ廻_二螺子中_一不_レ可_二具狀_一

箱田飛泉 在_二勢多郡箱田村山中神社之前_一矣水源在_二山上數十步許_一泉涌_二沙中_一下有_二磐石_一屈_二曲于東南_一而相連百步許如_レ向_二箱之裏面_一泉流_二其上_一相分而下_二三四十條高者三四尺低者一二尺如_二亂絲_一如_二匹布_一堪_レ可_レ愛

堰

元齋堰 在_二于關根村_一矣分_二利根川水_一而溢_二廣瀨水_一過_二勢田群馬那波等之諸郡_一爲_二田水之用_一

桃木堰 在_二于眞壁村_一矣分_二利根川水_一而名_二細澤_一爲_二田水之便_一關根荒牧川端日輪寺北代田龍藏寺青柳下細井幸塚沖之郷上泉片貝三俣野中長磯筑井小笠原増田等之諸村各以_二此水_一爲_レ便

小出堰 在_二于小出村岩神北_一避_二川水_一而爲_二田防_一角淵堰 在_二于角淵村鳥川之傍_一積_レ石而爲_レ之長三町餘高五六尺避_二川水_一而爲_二田防_一小林堰 在_二于小林村神流川之水傍_一

堡 邑之小城也

八峯堡 在_二于大胡下大谷村八峯之山巔_一周圍一千二百間餘中多_二鯉魚_一

大室堡 在_二于大室村_一周圍七百間深津堡 在_二于勢田郡深津村_一

荒子堡 在_二于勢田郡荒子村_一飯土井堡 在_二于勢田郡飯土井村_一

江木堡 在_二于勢田郡江木村_一

上泉堡 在_二于勢田郡上泉村_一

小神明堡 在_二于勢田郡小神明村_一 各周圍略同_二于大

室堡_一

驛路

板鼻町 在_二于碓氷郡_一 矣中山道之驛也 鬻_二市於絹

綿_一

玉村 跨_二于群馬那波之二郡_一 到高崎驛_一 也

五料 在_二于那波郡沼之上村_一 駒形前橋米野溝呂木長

井小川田森下自_二五料_一 以下各到_二沼田_一 之驛路也

渡港

五料港 古作_二御靈_一 也港在_二于廣瀨川水傍_一 在_二御靈

神社_一 故名曰_二御靈港_一 神社如今猶存矣後因_二洪水_一

而移_二利根川_一 也以_二音相同_一 土俗妄作_二五料_一 矣

福島港 在_二于那波郡上福島村_一 水傍高岸々上設_二守

舍_一 下_レ坂到_レ港

眞正港 在_二于群馬郡城之南半里計_一 矣名_二川西_一 曰_二

古市_一 水傍高岸々上設_二一小守舍_一 下_レ坂到_レ港

大港 在_二于群馬郡橋城之北_一 矣浮_二大船_一 而渡設_二麻

繩一條船中_一 而舟過_二中流_一 則水手以_二麻繩_一 投_二于水

涯_一 水傍之人取_レ之引而舟到_レ涯也若不_レ然則水急而

不_レ到_二要處_一 或有_レ陷_二下流急湍之中_一 破_レ舟者多_上

坂

松木坂 在_二于南雲村_一 多_二岩石喬木_一 挾_レ道屈曲極緊

下則長刀拂_レ路上則磐石支_レ胸極險急之處也

輕濱坂 在_二于南雲村_一 南分_二山之巔_一 隨_二山腰_一 幽谷高

嶺挾_二道於左右_一

長井坂 在_二于南雲村南_一 寬急相交在_二上于古城_一 塹壘

存_二于如今_一

赤羽坂 在_二于江戸村_一 即箱田小邑也 道尤寬山傍木繁

奈良坂 在_二于堀越村北山中_一 昔義經到_二于北國_一 之時

休而喫飯所也

段之坂 在_二于天川原_一

鎌倉坂 在_二于上細井村_一 南半里計

關

五料關 在_二于五料港水傍_一 防_二兵器_一 若有_レ持_二兵器_一

來者則守者不_レ得_二標券_一不_レ許去

橋梁

上橋 在_二于天川村_一跨_二廣瀬川_一長六十餘丈

下橋 同_レ上

筋違橋 在_二于天川村端氣川中川町與_二天川新町_一界_上

長三十丈

大橋 在_二于下大嶋村廣瀬川_一其製長四十餘丈各自_二

五料_一至_二前橋_一路也

蛭川橋 在_二于蛭川_一長一丈餘

蛭川町橋 在_二于上新田村_一跨_二那波群馬之兩郡_一長拾

有八丈

大橋 在_二于上新田村西_一跨_二溝梁_一長三十丈

正念寺橋 在_二于下新田村南溝渠上_一長拾有餘丈

天神橋 同上、長同上

町屋橋 同上長三拾丈至_二角淵_一之道路也

太兵衛橋 在_二于飯嶋村南_一跨_二溝梁_一長貳拾四步

愛染橋 在_二于後閑村東_一跨_二溝渠_一長拾有貳步

稻荷橋 在_二于上茂木村_一長貳拾有四丈

出合橋 在_二于上茂木村東_一跨_二鯉澤川_一長三拾丈自_二

五料_一至_二玉村_一道路也

大塚橋 在_二于川井村北_一跨_二鯉澤川_一長拾有五丈自_二

五料_一至_二玉村_一之道路也

五郎助橋 在_二于川井村北鯉澤川_一長拾有五丈

出會橋 在_二于福島村南鯉澤川_一玉村之道路也長拾有

五丈

濱地橋 在_二于箱田村之東_一跨_二溝渠_一真正之道路也長

丈餘

境橋 同_レ上

將監橋 在_二于坂井村南_一跨_二溝渠上_一長拾有五丈

觀音前橋 同上長拾有貳丈

伊兵衛橋 在_二于坂井村南溝渠上_一長十有五丈

河原橋 在_二于宮關村_一跨_二赤城山湯澤流水_一伊勢崎道

路也長十有八丈

桐原橋 存_二于宮關村_一跨_二赤城山澤水_一長十有四丈桐

原道路也

大泉橋 在_二于富田村_一跨_二湯澤流水_一長十二丈

惠流橋 在_二于二宮村湯澤流水_一吾妻道路也長二十有

餘丈

川賊橋 在_二于二宮村湯澤流水_一長十有八丈

筆切橋 在_二于大室村湯澤流水_一長二十有餘丈

教橋 在_二于大室村湯澤流水_一長二十有餘丈

大橋 在_二于大室川湯澤流水_一赤城山道路也長貳拾有

餘丈

越橋 在_二于今井村湯澤流水_一吾妻郡之道路也貳拾有

餘丈

増田大橋 在_二于下増田村_一跨_二廣瀨川_一長六拾有餘

丈

清内橋 在_二于駒形町廣瀨川支流_一長四拾有八丈五料

道路也

上橋 在_二于小屋原村廣瀨川_一長四拾有五丈

五料道橋 在_二于小屋原村廣瀨川_一長四拾有八丈五料

道路也

牛橋 在_二于女屋村_一跨_二赤城山大河原之流水_一吾妻郡

之道路也長貳拾有餘丈相傳昔賴朝過_二此橋_一牛臥_二

于橋上_一因以名_レ橋

道玄橋 在_二于女屋村_一跨_二天河原流水_一長十有四丈

初越橋 在_二于上里見村烏川_一

冬橋 在_二于町屋村烏川_一至_レ冬設

冬橋 在_二于板鼻町碓氷川_一

長野道橋 在_二于大類村溝渠_一

山野道橋 在_二于同所_一

倉賀野道橋 在_二于八幡原村溝渠_一

道滿橋 在_二于下齊田村溝渠_一

山野道橋 同上凡貳箇所

高崎道橋 在_二于齊田村溝渠_一凡貳箇所

瀧村九橋 在_二于上瀧村溝渠_一凡九箇所

市肆

前橋 市每月六次方六七里農商聚爲_レ群城中士不_レ許

行_レ市

大胡 市每月六次

玉村 同上

山上町 同上

板鼻町 同上

上里見町 同上

吉井町 同上

藤岡動堂町 同

笛木町 市同上矣_{市醫_二於絹綿_一每年六七月之間諸國人聚爲_レ群}

土產

按所載延喜式貢絹帛年料諸藥牧及交易雜物等上有與今異者略舉焉焉主記上曰調緋帛五十

帛同黃帛八十緋布五十橡帛十三純三百縹布十五

黃布三十榛布三十緋革十五中男作物麻一百細町

席添紙紅花

典藥寮諸國進年料雜藥上野國拾五種青木香、黃

芩、黃蓍、細辛、芍藥、當歸、升麻、防風、銅牙、

乾地黄、胡麻、蜀椒、麥門冬、附子、猪蹄、

左馬寮曰信濃甲斐上野三國任牧監矣上野備其一一

馬健可也

民部下交易之雜器上野國絕商、布、細貫席、苧、席、

紫草、鹿革、履析牛皮、櫛子、

絹各縣共出以藤岡爲勝綿木綿夏布有數年魚出利

及廣瀨川或綾文者尤精鮮出利根川及片品川一鰻

魚出利根川一鰻每歲獻出利根者味最美鰻

雞鴉出百々雲雀出百々之原一鵲鵲梅首鷄每年雞

卵皂鵲出赤城鷺巢赤城雀鷄同鷹雞上駒出米野

川鶴出赤城山中熊膽出根利村各縣共出以淨法寺

荳子或半白半黑柿梨子栗子胡桃子榧子出箱

神社

赤城神社在三勢田郡赤城山大沼東涯延喜式云上

野國勢田郡一坐赤城神社三夜澤牌篇云正一位赤

城大明神矣按神傳云有高野邊之家成者守于

上野後人祭而稱赤城之神據正一位之牌篇正

之則大己貴大神乎一書云金橋宮天皇二十八代安

磐筒雄大神出現鎮座是赤城神社也又按古歌是異

域神乎暫舉數說耳鎌倉右大臣之歌見夫

カミツケノ須田ノ赤城ノカラ社

ヤマトニイカテ跡ヲタレケン

前橋八幡神社在三子府城東南坊中舊記云在原業平

苗裔業重朝臣之子孫奉社焉至永祿年中遇兵起

之禍元龜元年北條下總守同二年北條丹後守高廣

天正九年平岩七之助同年氏直各附後照之印於守

僧神宮寺呈神田慶安二年八月二十四日家光公

賜尊印於神宮寺附神領拾有五石天川原九石各藏

存于神宮寺矣天和年中城主忠明寄菜圃一旦

所藏神寶長刀

長三尺五寸
銘藤原清平

白鷹畫

狩野

猿玉

大如雞卵紫褐

色有環理滑澤不可名狀
各萬治元年城主忠清奉納

神號一幅

後陽成院宸筆城主忠明奉納文字大寸方壹尺

傍社諏訪明神

在本社之南

天神社

在本社之北

鐘樓

在神社之西南

三夜澤神社

在赤城山東南一名地曰三夜澤牌篇

云正一位赤城大明神疑是赤城之前殿乎神傳云家成

即赤城嫡子來于赤城山新製於神殿成而止于是

地三日夜故名地矣神田五十石

玉村八幡神社 在子那波郡玉村矣神記云賴朝始

設神殿于是地應永十八年滿家再興其廢永正四

年白井長尾左衛行家臣吉里對馬入道又造立神殿

及樓門而漸欲復其始此後兵禍頻起而人忙奔走

先弓矢之製怠神社之造於是敗壞矣慶長十

五年伊奈備前守承尊命周歷群國其序到于上

野開田於玉村且來八幡敗社裝風霜之漏廻

華表之倒至寬永十五年前橋城主忠清理其敗

壞且寬文七年再增舊制慶安二年八月家光公賜

尊印於別當神樂寺附田三十石為祭祠之用所

藏神寶神號一幅

新院真仁之宸筆真享元鐘銘曰華鯨吼處

平直村邑盛隆社祠繪興寺院
玲瓏佛音不絕神樂無窮

二宮神社 在子勢田郡地因神社而得名曰二宮

村矣神祝傳曰賴朝始立神社於此地北條氏直及

到於上野而毀破之齊空林如今所存之神殿

牧野右馬丞造立焉牌篇寫曰正一位也

箱田神社 在子勢田郡箱田村神祝自曰我是木曾之

臣也壽永二年自信濃國筑摩郡來而移岡田沙田

阿禮三神社于是山中矣同來者七人曰今井郡町

田小野萩原諸田串淵子孫今農夫于箱田村

近戶神社 在子勢田郡大胡古城之傍矣神祝相傳曰

牧野右馬丞守于大胡城常信赤城神社然恨道

路相隔而無緣盡敬於日々故設社于是矣以

近其戶邊名曰近戶神社

小高神社 在子勢田郡絲井村貞觀五年五月九日帝

授神從五位下

見三代實錄清和貞觀五年

佛寺

永源寺 在子綠野郡淨法寺村

一曰御嶽

是曹洞宗也其

始祖姓藤名正伊號一洲周防熊毛郡宇佐木鄉人也

母夢白玉飛入腋下既有娠及生白光照室

迨于其長到周防磐若寺為僧臨鑑無影人以

為不祥自笑曰通身無影不學而遊行到子洛陽

謁日峯和尚日峯以授碧岩集百則一曉得也如素所_レ知隨月江和尚于小山田大川寺一十有餘年蜜契心印親受信衣不_レ幾而國亂寺廢矣太田道真欲_レ擇地於相州一而令一州爲_レ主以_レ法兄一恭叟未_レ主寺而辭去長尾左衛門令嫡子景信創立梵刹令一州爲_レ主僧一州又令月江主一矣號一山於最大一凡參禪問道之徒莫_レ不_レ望風而臻一矣既而火_レ寺高閣長廓滅一_レ時一白井齋主再造邀一州一爲_レ主居三年沼田長忠請一州於玉泉法窟而居_レ之又侏田迎_レ于石井三銘寺一而爲_レ寺主一頭上發_レ瘡而終矣如今號大龍山一相傳此寺始在_レ御嶽一主僧相續九代而至_レ僧見尊_レ御嶽城主阿保吉兼移_レ寺于此地一以爲_レ號白井雙林寺分流而第一末寺也又寺中所_レ藏之舊書云文明十有二年始而建_レ寺于此地一家光公及家綱公賜_レ尊印一而附_レ齊地拾石一

慈眼寺 在_レ于群馬郡瀧村一名_レ山曰_レ花敷一號_レ多樂院_レ相宗釋良辨所_レ立也_{其辨性百濟近州志加里人傳見元亨釋書}後文和年中真言僧乘弘主_レ寺于_レ時將軍尊氏命_レ上杉一而陪_レ其舊製_レ於_レ是有_レ傍院十有二講堂一修法堂一安像堂一先師像堂一一而于_レ今存矣各郡寺院相屬而承_レ命

者都八拾實一方之道場也家光公賜_レ齋田三拾石之尊印一

善勝寺 在_レ于勢田郡端氣村一矣始有_レ聖慶法師者大治四年己酉年崇_レ持醫王善逝之像一放_レ置于此地一然未有_レ寺院之圍一但守堂之僧耳矣正嘉二年有_レ天台宗覺山者一主_レ堂于_レ時平時賴來而與_レ僧相語悅甚寄_レ附田一百畝一永亨三年有_レ僧圓祐者一再造_レ立寺院一號_レ山於德取一名_レ院乎慧雲一自_レ是寺主相續示_レ天台一經一百餘年一而至_レ天文年中一府城之主長野左衛門尉改_レ名善勝寺_{自祐名後越州景虎令}北條高廣主_レ橋城一永祿五年高廣改名_レ良場山一也家光公賜_レ齋田貳拾五石之尊印一櫻木二株在_レ于堂前一長數拾丈凌_レ天直上柯如_レ銅數圍迎_レ春開_レ花則如_レ白雲覆_レ天帶_レ風散_レ片則似_レ飛雪群_レ空折挾_レ銅瓶一弄_レ之則若_レ業絮一淡渴燕脂而聚_レ蕊爭_レ枝尤絕可_レ愛也

稱名寺 在_レ于碓氷郡板鼻町一矣其始不_レ審永亨年中自_レ天台僧明尊主_レ寺以來傳來不_レ絕矣慶安二年家光公賜_レ領地貳拾有七石三斗餘尊印一相傳佐野源左衛門之約而爲_レ葬地一所也有_レ堂前一株楓樹一高數拾丈枝蓋_レ四邊一幹傍可_レ納_レ涼葉下可_レ避_レ雨紹_レ之愛

之而有吟詠之句

折燒シ櫻アトアル紅葉カナ

藏ニ寺天台大所自筆畫像

淨土院 在ニ于綠野郡ニ矣初名ニ綠野寺ニ又名ニ淨法寺

村邑因寺得名曰ニ淨法寺村ニ延曆四年道忠禪師

之所立也弘仁六年釋最澄造ニ六塔婆ニ置ニ六千部

經王之一所而東州一方天台之法窟也事詳見ニ元亨

釋書ニ此寺疇昔定爲ニ祈ニ帝福ニ之精舍ニ故主寺之僧

必蒙ニ帝命入院然則堂塔樓閣各盡ニ精麗ニ諸佛尊

像都集ニ靈製千手觀像知其製作者在寺後佛手觀音像

賢迦葉阿難等之像各行基菩薩之所製安ニ釋迦堂ニ又有ニ文珠普

印者列仁王講之法會ニ于時賴舜能書帝命書ニ龍山雲之字ニ書得

長短肥瘦令度結構間架隨法帝賜ニ如意輪天文壬子歲遇ニ平

地藏像任ニ舜三於僧部ニ以爲ニ兩堂本章天文壬子歲遇ニ平

井城主上杉憲政之兵火ニ叢堂重閣滅ニ一時靈場忽

變ニ于荒原自是頽敗無復ニ其初唯有ニ礫磧存ニ

草根耳今幸拜ニ納 大神君及家光公家綱公之尊

印而領ニ三十石田矣帶ニ山臨ニ流幽院寂寥而地勢

冠ニ于比邑

長興寺 在ニ于勢田郡大胡郷ニ文祿三年曹洞鼓波之僧

天室所立也拜ニ受 大神君秀忠公家光公家綱公之

尊印而領ニ田五拾石

禪養寺 在ニ于那波郡山王村ニ矣爲ニ天台修法之精院

嘉應元年所立也元龜元年七月初七承詔而祈

皇帝萬福及天下安泰權中辨鳳詔于今藏ニ篋底ニ矣

拜ニ受家光公家綱公之尊印而領ニ田五拾四石

長傳寺 在ニ于碓氷郡板鼻町ニ始曰ニ長傳庵天文年中

所立也有ニ曹洞支流之僧爲影精春者一本爲ニ長源寺

主在子後來庵初號ニ八幡山鎮守八幡故號長傳寺矣至ニ永祿

九年安中景繁令ニ丹後守附ニ寺領ニ慶長十三年里見

讃岐守忠重寄ニ齋田貳拾石ニ慶安二年拜ニ受家光公

之尊印而領ニ貳拾六石九斗餘之田藏ニ寺景繁所寄

禁山之傍失今其山是也

祝昌寺 在ニ于綠野郡根岸村ニ矣大永年中橋林寺主僧

輪叟之所立也橋林寺第家光公附ニ貳拾有壹石之田

賜ニ尊印

西光寺 在ニ于群馬郡佐鳥村ニ矣弘仁年中法宗僧德一

之所立也寺中設ニ春日神社爲ニ鎮守祭禮因ニ南僧

興福寺例矣自ニ元弘元年至ニ應安年中四十年之

間天下干戈時而無止故南都絕道路而相宗之徒

於是乎絕矣天台沙門村雄自入院以來主寺之僧

各宗天台也家光公賜ニ領田四拾有五石之尊印

聞名寺 在_二于碓氷郡板鼻町_一正中元年遊行第四他阿上人_レ之所_レ立也拜_二受家光公尊印_一而領_二貳拾有貳石五斗餘之田_一

養林寺 在_二于勢田郡大胡郷_一矣文祿三年玄達社昌公之所_レ立也拜_二納大神君家光公家綱公之尊印_一領_二壹百石之田_一

極樂寺 在_二于群馬郡河内村_一矣不_レ審_二其始_一爲_二天台修法之精院_一家光公賜_二領田三拾有五石之尊印_一安_二寺阿彌陀佛像_一行基之所_二彫製_一也相傳賴朝所持之靈像也

光德寺 在_二于綠野郡藤岡村_一矣延德元年曹洞正統尾州正眼寺第六之主鷹林集和尚之所_レ立也本在_二于信州蘆田_一也蘆田左衛門大夫約而爲_二葬地_一右衛門大夫移_二居於藤岡寺_一亦隨_レ之來拜_二受家光公尊印_一領_二田拾五石_一

神樂寺 在_二于那波郡南玉村_一八幡神社之傍_一爲_レ司_二八幡神事_一之天台院

神宮寺 在_二于前橋八幡神社之傍_一矣元龜年中曰_二金蓮房_一天正年中號_二最勝院_一今稱_二神宮寺_一每主天台祝咒之僧爲_二八幡之社僧_一

善光寺 在_二于群馬郡新堀村_一矣相傳賴朝爲_二常盤所_一立也爲_二天台精院_一慶安年中拜_二受家光公尊印_一領_二三拾有三石之田_一

養行寺 在_二于郭外之東十八郷_一爲_二日蓮宗_一不知_二寺院之始_一也慶長六年隨_二酒井重忠_一自_二三州_一來在_二林中天神社_一自_二內城_一移_二于是_一

長昌寺 在_二于郭外之南_一爲_二枯笑傳派之禪院_一大洞大周長老之所_レ立也置_二前橋城主累代之本主_一次序_二封侯_一藏_二北條氏直瀧川左近羽柴孫四郎淺野彈正平岩七之助等_一之禁山章及寄_二齋田後照之印_一

橋林寺 在_二于郭外之東北_一文明九年天巽派玉岑和尚之所_レ立也屬寺散_二在于四方_一者貳拾有一天正年中號_二高竹院_一又本橋院同十三年改_二名橋林寺_一矣賢忠前橋城主_二長野彈正_一有_二前橋城主天文_一大胡伊賀守_二字廣勝上泉城_一永正三年_二赤尾對馬守_一字廣能始號_二左各送_一後照之標與_二數拾石之田_一秀吉公及氏直信長等賜禁_二亂妨于寺院_一之章印

秀吉公命羽柴孫四郎淺野彈正少弼各司_二之氏直_一各藏存_二于今_一矣_二之制猪俣左衛門預_一之信長之禁瀧川左近傳_二之_一

所藏之寶品十六羅漢畫像四幅周丹士筆十六羅漢像彩畫一幅明光筆畫觀音像一幅同上十六善神像一幅彩畫臨濟像光筆

春日神像一幅土達摩像一幅顏仙入一幅趙雪梅一幅雪觀

音像墨畫三十三銅鏡一枚禪筆後梵字六銅瓶箇

龍藏寺在子勢田郡村名因寺曰龍藏寺村無

知寺院始立之年月東州天台談論之寺有二八所是備于其一矣康曆二年有豪尊者主寺聚衆論

經意始稱東州談論之八寺

龍海院在子郭外之南半里矣清康公之所立也其

傳法源永平道元六業大元九業參州渥美郡大久保村長與寺三世模外維俊和尚之遺跡也享祿三年春正月一日公夢握是字於左掌中命近臣周求其占於

各處雖陰陽博士多聞強記之僧等遂不能曉得於此事者也于時模外和尚爲岡崎城之良

隅大澤山龍溪寺之輪住馳盛使告其旨長老嘆

曰聖夢告不可曰是字分之則日下人也今握在聖

手者藏天下於掌裏之占也如今聖代不然則祥

及後世子孫必保天下也不可疑矣公歡喜尤甚

自後愛模外深信禪法號道模大居士考龍溪寺年譜作道甫大

居一日公與模外微行到妙大寺村々有山半山

有清淵名龍海公指地曰佳境哉宜建梵刹謝

祥夢之占矣就終土木之功經營精舍號山於滿

珠名寺乎龍海以龍外和尚爲開山始祖也文

武之餘日或入寺門或請廣居參禪學道也於是

先君歸依之靈場淨土門大樹寺主發問而曰自先

君以來世々歸淨土如今公棄古舊信禪我豈堪

寺哉則捨守而走公尋得干大濱命歸山僧俯

承尊命再住矣即日時天文元年公命臣酒井與四郎曰

汝當代吾而爲龍海外護之齋主與四郎謹承盛

命就到龍海禪院而述公命模外欣然是龍海

齋主之始也自是而下爲酒井累代葬地之法窟至

今僧徒爲群選佛場中心空及第而歸者不知幾

多齋主酒井氏經歷三州西尾武州河越而來前

橋四遷封土此院亦隨之來貞享三年丙寅春城主

徒從忠明寄附洪鐘銘曰

野之上州前橋南阡大珠的礫龍海淵寺始是字山定

遊顛飛來至此運步得先對赤城岳臨利根川

分大源派唱模外禪爐鞴頻吹寶器新研擊偏中

正開正中偏脫幽宣厄驚長夜眠響共物應意與

金堅附阿難聽屬羅睺舉聲來耳畔耳往聲邊

鯨千潭底華三月天一鍾之德三機之緣臣思幾度君壽

永扇爾期_二好音_一不_レ止_二驢年_一

觀音堂 在_二勢田郡日輪寺村_一矣大同年中所_レ立也堂製尤精在_二前樓門_一門裏左右置_二王像_一

不動堂 在_二勢田郡宮田村_一矣登山上也一百步許其坂都石楷松杉凌_レ天枝覆_二四邊_一雖_二晴日_一朦朧而若_レ步_二月夜_一在_二上巖穴_一可_レ容_二數百人_一設_二堂於裏面_一放_二石像_一長丈餘不_レ照_二燭雖_二日中_一不_レ能_レ見_二像弘法之所_レ琢也

墳墓

茂木陵 在_二于那波郡茂木村_一矣相傳清和天皇陵也按帝崩葬_二栗田山_一置_二骨於水尾山_一今在_二是地_一也雖不_レ審亦疑後孝孫忠臣在_レ是地而設_レ廟祭乎然恨無_レ有_レ知_二其時日姓名_一矣在_二上一小社_一放前石像長三四尺腐_二亂于風霜_一形狀都不_レ可_レ辨焉

賴朝墓 在_二貳處_一矣一在_二河內村極樂寺寒林中_一也一在_二石井村珊瑚寺_一

景時墓 在_二于石井村珊瑚寺賴朝墓傍_一矣唯有_二一古碑守_一蒙茸無_レ見_二文字_一主僧自曰寺主累代相傳一賴朝之碑一梶原景時之碑也

靜墓 在_二于城中_一矣今天神山是也相傳葬_二磯禪司女義經之妾靜_一之所也按此地往古自_二京師_一到_二鎌倉_一之驛路也靜召_二鎌倉_一而欲_二歸洛_一過_二此地_一之序死_二于是_一葬_二乎他_一妾有_二名_一靜者_二乎不_レ知_二其可否_一也古有_二石碑_一且天神社如今移_二郭外養行寺林中_一矣天神之像用_二片板_一長尺計畫_二像於其上_一朽蠹而失_二其半_一相傳是出_二墓中_一之物也

新田塚 在_二大胡邊_一疑藏_二戰士之屍_一墓乎鄉人乎曰_二新田塚_一

古蹟

女溝 在_二天川原雙子山北_一又在_二岩神原_一舊自_二天川原_一至_二岩神原溝渠_一相續後爲_二農夫_一斷_二其中間_一矣相傳二位禪尼平政子欲_レ以_二笠懸野_一而爲_二田_一然憂無有田水之便故欲_レ引_二利根川水_一於笠懸野而溉_二田_一令_レ鑿_二此溝渠_一矣然不_レ能_二水到_二于其地_一其蹟猶存矣

培屋之潭 在_二利根川水傍_一赤城神紀云昔有_二高野邊家成者_一有_二女名大室之姬_一繼母要_レ之而令_二弟更科兼光_一沉_二于培屋之潭_一矣今稱赤城明神之別社

石窟 在栗須之原路傍形如小岡或似古塚數十散在于各處裏以魁石積而爲屋大者當納三四拾人小者可座五六人如今多取其石而充於民家之用故全者十而三四耳間有裏出兵器者矣鄉人各曰古天雨火民不堪其苦故作石室而安其裏矣是其遺跡也

古戰場 在岡之鄉武田勝賴與北條氏直相戰之處也藏戰死之屍古塚今存路傍

良盛故居 在板鼻町北二町計相傳伊勢二郎良盛之所居也

獨鈷井 在淨法寺村淨土院門前相傳弘法大師以獨鈷親所鑿也方六尺許其水清冷味甘美也雖天下旱魃所行此泉不減少

護摩爐 在淨法寺村淨土院佛閣後琢石作之方四尺許設壇於下放其上矣相傳釋最證修法之遺跡也

信綱山莊 在上泉村古城之傍田甫之中矣相傳上泉武藏守信綱之古居也當時精劍術者也後世以爲祖山上石室

在山上村古城之傍田甫之中矣廣方六尺計入也十步計而橫六七步長倍一二步積石爲之

不識何時何人設焉何用備也

板鼻別業 在板鼻之北二町計矣里見讀岐守之舊居也

大胡古城 在勢田郡大胡鄉天正十有八年牧野右馬丞忠成被封于此城居數歲而移居于越後長岡其後敗焉從後望之則絕壁萬頃喬木蓋天當一方

防也

藤岡壘 在綠野郡藤岡村矣蘆田右衛門尉之所居也

吉井壘 在多胡郡吉井村矣菅沼大膳亮之古城也

上泉壘 在勢田郡上泉村矣大胡伊賀守之古城也

板鼻壘 在碓氷郡板鼻町矣依田六郎之古城也

阿內壘 在阿內宿村矣相傳三輪右丹之所居也

漆久保壘 在勢田郡漆久保村矣長尾大膳之所居也

見立壘 在勢田郡見立村矣舊有見立權太郎者居此城後山本加兵衛者城于是矣

力丸壘 在群馬郡力丸村矣相傳力丸伊賀守之古城也

新堀壘 在群馬郡新堀村矣相傳和田左衛門尉之古

城也

女淵壘 在勢田郡女淵村西北隅 矣有沼田平八者

城于是

善壘 在勢田郡善村東北隅 矣有木戸玄齋者居

于是

苗ヶ島壘 在勢田郡苗ヶ島村 矣有桃井播磨守直

常者所城也 暫郭半敗矣

山上壘 在勢田郡山上村 矣昔時山上入道宗久者所

居也 後木戸大炊頭者城于是

樽壘 在勢田郡樽見立兩村之間 矣河田新四郎者之

古城也

眞壁壘 在勢田郡眞壁村 矣有神谷三河守者所

城也

八崎城 在勢田郡八崎村 矣長尾左衛門尉憲景法名

雲林院梁雄玄陳居所築也

大室壘 在勢田郡大室村 矣有和泉守者主于此

城 後牧野忠成所居之城也

峯壘 在勢田郡峯村 矣北條安藝守之家臣田中大武

之古城也

人物

一伊勢三郎江義盛者上州碓氷郡板鼻村人也其父勢州人也或曰從勢州來居于荒蒔郷或曰松井田村人也方平氏勃興源家側微之時源義經竊欲託藤秀平既出鞍馬越奥州於途歷板鼻投身于義盛之宅假宿主遇客謹焉所談互合其志遂爲君臣之禮也義經分字賜之稱伊勢義盛國朝分字賜臣乃始于是矣數年之後義經發奥州到鎌倉而事焉義盛適從也逮其受賴朝之教爲中追討使而于宇治于一谷于四國每兵馬所向射御之勞不爲不多矣專在阿波則歸降近藤親家於勝浦也在讃岐則誘虜田內教能於屋島矣其爲謀也或驅單騎而服百騎之酋或著淨衣而以甲士三千之豪還也方期時徵義盛豈能至于是乎入屯不安寢義經在高則義盛必居卑其警不虞之變可觀焉嗚呼雖義經功名冠世失陟岡之望得喪國之咎是故其從士多勞于海陸甚致艱難焉漸而義盛去勢州有首藤四郎者欲代之義盛辟讎於鈴鹿山中首藤四郎之兵促之

寡不_レ可_二以敵_二于衆_一遂自殺吁嗟命哉

一上泉武藏守信綱上野國勢田郡上泉村人也當時好_二劔術_一日夜盡_レ心後尤得_二於其精_一故公方召到_二于洛陽_一師尊賜_二宣從四位下_一矣柳生氏親_二受其術_一傳_二于今_一以爲_レ祖焉

釋

一釋行仙從_二靜道法師_一學_二密教_一旁修_二念佛三昧_一不_二必念_一號專凝_二相觀_一居_二上野之山上_一性不_二莊飾_一或請_二唱導_一會薪_二山中_一便腰_二鋤斧_一赴_二檀家_一人貴_二其樸素_一凡嘯物不_レ取又不_レ辭只隨_二處恣_一人受用_二弘安元年秋受_二微恙_一端坐如_二入定_一而化時慶雲柱庵前竹宛如_レ曝_二紫衣_一又奇樂異香充_二滿于天外_一闍毗後得_二舍利_一其炭色紫而香仙先年豫書_二臨終月日_一潛置_二篋底_一其徒滅後勘_二行李_一得_二其書_一相顧益戀_二遺德_一

見_二元亨釋書_一

前橋風土記終

前橋風土記附錄上

一 抑厩橋の御城は延徳年中長野左衛門尉宗貞築所也
其後長野道安是に居し其後は長御彈正道賢長尾道
忠北條安藝守同丹後守瀧川左近將監天正十八年平
岩七之介三萬石領す慶長六辛丑十月二十日酒井重
忠相續す天和寛永の比より追々普請是有外曲輪ま
て廣大に相成申候

一 天和三亥年前橋本町上中下三箇所にて代々市立候
様十月三日仰付られ候同十一月二十七日ねがひに
依て連雀町にて二七の市立候やう被_レ仰付候

一 元祿十二卯八月十五日申の下刻より子の下刻まで
大風辰巳の方より吹前橋領中潰家在町にて五千二
百七十六軒人八人馬三疋死御家中潰家三十八軒車
橋御門門ふき折戸ひら明候と言又松下次郎右衛門
長屋を吹潰申候

一 大屋むらの池は淵岡長十郎か分別にて仕立ける也
今三千石の田地を養ふ

一 天和三年辛亥年六月十日前橋の町へ被_レ仰渡候事
一 兩側雨落より九尺限に干物可_レ仕事

一 小路にて收納かたく無用之事

一 一日に一度づゝ家々の前掃除仕水打可_レ申事

一 貞享三寅年四月五料眞政大渡福岳戸屋五箇所へ書
付左之通

一 奉公人の外歩行涉代五文

一 人馬代九文

増分

一 歩行人代貳拾文

一 人馬代參拾文

一 船賃出し候儀難儀に相見候輩并に非人等は舟賃取
べからず并に旅人等船まちは是なき様漕通すべき事
右之條々相背に於ては船頭共曲事中付べきもの也

一 元祿二巳年四月眞政大渡と被_レ仰出候事

一 常水之節は一艘に人計四十人可_レ乗事 大渡

一 同四十五人乗可_レ申事 眞政

一 付馬有_レ之節一疋に付七人づゝ可_レ減事

一 水増之節は人計

一 十人程乗べき事 大渡

三十四五人可乗事 眞政

付馬有^レ之節は右のつもりを以人を減少すべき事
并に荷物多く是有節は其荷物に應じ減少すべき事
右之通相極船に乗候様可^レ仕候若大勢乗候は^レ相
改一切乗まじく候以上

一同年百姓へ被^ニ仰出^ニ候事

一神參り停止之事

但よん所なき儀はあるに於は未を并借金^レ不仕段
名主組頭加印可^レ仕候事

一見物之場へ參間敷候事

一身分かろき百姓田地を子供へ分候儀停止之事

一長の暇を取江戸其外何方へ罷越候共跡々親類請合
に立申間敷事

一社倉之事

社倉と申は毎年其村の氏神へ米穀にても代物にて
も總百姓少々宛納置夫を借あるひは飢饉あるひは
村中大物入是有節は夫をつかひ候様に仕候得ば村
の爲によく候會津杯にて専ら行れ候心掛べき事

一前橋連雀町木島助右衛門は前橋にて町人の始也と
申傳ふ町人は申に不^レ及御領分中の商致候者助右

衛門方へ斷り申さず候ては商成不^レ申助右衛門宅
に牛頭天王の御與有^レ之守護仕候是は市神の由也
前橋六月の祭禮を祇園と申は右天王の祭り故也十
月二十日正月二十日恵比壽講と申事有^レ之商人は
右木島宅へ百錢宛持參して料理を食する事定式也
一前橋の城中廣小路は平岩主計の頭殿在城之節出來
候曲輪也と申傳ふ

一長尾謙信在城の節は三の郭は城下にて沼田へ往來
の街道也謙信矢倉にて雪中の景色を見けるとき沼
田の迦葉山に通る禪僧の問答しけるに其才智に歸
依し城門の橋際に寺を建て其僧を留む依て橋林寺
といふ

一升屋清傳は高野の聖也三州已來御家へ御用の呉服
やなり慶長六丑年前橋御拜領の節本町に屋敷を被
下清傳か手代升屋清兵衛住居し御家中の御用を相
勤申候其後元祿年中迄は勤けるが斷絶す

一前橋邊に鉦打共茶釜坊とも誓願寺とも申者有^レ之
村にては下り人にて平忙町人いたし候なり然其平
人は縁組等も致さず下輩の者なり元祿の比迄は年
始に茶釜三本づゝ持參して御家老衆御役人衆へ通

り申候正徳の頃より上に成申候板鼻の聞名寺にて右之ものを出入之者と申候

一前橋にては淺間か嶽のけふりのなびき様と田町の樋の音にて天氣見しる事有

一田町の水車は寶永年中に出來にて御搗屋の代りに諸方へ渡る米を掲けるが享保の半より町人の持に成申候

一高濱の水車は御本丸の御庭へ水をとる爲に被仰付候享保の始に相止

一龍海院は慶長六年御入國之節は岩神村に寺を立被遊候正徳年中燒失して今の所へうつされ候源英寺隆興寺は龍海院の隠居寺なり大檀那を引導すれば輕き者を引導する事はならぬ故隠居する也

一上州那波郡五料の關所は往古より前橋城主の自分の關所にて往來の女は白倉茂兵衛手形證文にて通すが例也茂兵衛は江戸留主居を勤る故か一人に限るは不審也追て考ふべし元祿十丑年御願にて公儀の御關所に相成已後は箱根横川同然に相成申候
一寶永の始御領分中山方の百姓に被仰付候て狼の糞を尋けるに見知る者なし柏倉村の獵師老人有之右

之者を駕に乗て案内させたづねければ多く求得候由

一朝鮮人來朝之節は前橋よりは遠州濱松まで馬を出す例也天和三年寶永二年なども夫々罷越申候

一前橋は往古は厩橋と申平岩親吉どの在城の頃は刀根川細くして厩橋より利根川に橋を掛けて古市村の方へ往來有し故厩橋と申候其後に至り公儀へ御届け前橋と文字を改被遊候

一寛文年中前橋の御城の繪圖を小畑勘兵衛に見せられ被遊候所二の御門太鼓櫓の所を殊之外賞美致され候と云々

一前橋の八幡林と申は甚た廣き林也天和年中新田にあふせ付られ今の天川原の田畑也二子山より外山等其林の残り也連雀の八幡宮も元は右の林に有し也依て八幡林と申候

一雲亭堀と申は正幸寺の門の外馬出し堀なり先年龍海院の雲亭と申出家右の堀へ入水致せしより起る名也

一幸庵橋は往古江戸小路に長昌寺有門前に幸庵と申道心者居けるゆへの名也

一 江戸小路と申は江戸より大勢引越おふせ付られ候もの共へ御やしき被下候故の名也

一 觀民の茶屋は元來は赤松と申て御家中の遊所也けるに元祿の始に御茶屋出來候て易の觀の卦に觀ニ我生ニとは觀民也といふ語に依て觀民亭と御名付被遊赤松の大木の下に辨財天の社有稻荷の社御建立被遊享保七八年の比より春は開帳有之甚繁昌也別當は八崎村天德寺に被ニ仰付ニ候

一 柳町といふは元來廣瀬川の端に柳の木多く有所に侍町出來けるゆへ柳町と名ニ付之けるは天和年中の事也

一 御城中高濱郭と申は西北の角にて利根川の岸なり依之高濱と云

一 柏木御門は普請のはしめに柏の木の板にて橋を掛ける故に號慶長年中に出來申候

一 玉村領七千石は利根川より新堀をほりて新田出來也尤慶長のはじめ伊奈備前殿工夫の新田なり

一 元祿十丑年御筆之物御拜領被遊右之御祝儀として前橋廣小路におゐて四日の間御能被仰付役者共は江戸より御呼被成候舞臺の正面には御覽所出來左

右には棧敷還り初日は殿様并御家老以下給人拜見被仰付二日は殿様并中小性共總御家中拜見三日は御部屋方はじめ御家中妻子に拜見被ニ仰付ニ候四日目には御領分中の寺院方拜見被ニ仰付ニ候四日共には芝居には御領分中百姓共拜見是をゆるさる棧敷は初日より御家老御年寄共自分々々の幕を打候て其儘差置れ四日共に同じ事也江戸より役者を呼且御領分中寺社并百姓等拜見被ニ仰付ニ候は深き思召有之と云々

一 前橋御城門車橋の矢倉門大手の矢倉門は大昌院様御代に出來申候由其已前は冠木門也三の御門御橋擬寶珠は台德院様より隆興院様御代御拜領被遊候其外二の御門二箇所車橋大手坪呂岩共に六箇所に擬寶珠あり是は故なくして用ひ候事相ならず伊豫の宇和島は國主並の城主なれ共下馬札も擬寶珠も無之候

一 前橋御領中の制札に表には奉行と計有之裏に御名を書は江州彦根領と前橋領事也

前橋風土記附錄上終

前橋風土記附錄下

一沼田檢地と申は貞享元子年二月被仰付候なり是は

去々年眞田伊賀守殿沼田三萬八千石召上られ候御知行所也其節總奉行は高須隼人奉行は山田清左衛門目附は天野九左衛門勘定奉行は三浦喜左衛門青木彌惣右衛門代官は川崎善右衛門等也伊賀守どのの御代御領分中へ色々の保役を掛られ百姓殊の外いたみ候所へ檢地の御繩ゆるめ候に付百姓有がたく存奉候て隼人はじめ其節の役人の爲とて近年まで日待を般候由也右之役人の子孫相續繁榮するを見れば諸人の悦ふ事はのたしたきもの也

一元祿のはじめに上野國繪圖公儀より仰をかふむられ候依之熊谷平左衛門犬塚又内に被仰付候七八年にて出來候て差出し候由

一天和二戌年 公儀より御尋者に山田彌市郎と申者常陸國にて召捕られ候此事に付公儀よりも御扶持人諸職人刀差候事御法座に被仰付候此方様にても

諸職人刀さし候事無用に可仕旨被_レ仰出_レ候
一大橋角右衛門と申者先祖より利根川築場を一箇所被_レ下候て子孫ともに前橋にては掛ヶ來候

一貞享二丑年町奉行代官共へあふせ付られ候趣左之通り

一御領分百姓町人御家中侍分住來出合之節乗打或は笠かふり物かたく仕間敷候もし左やうなる無禮のもの有之候は、めし捕市にさらさせ其後に牢屋窄舍申付べき事

一延寶六年前橋の牢屋破れ候に付建替被仰付候此節大工共相願候は大工之作法にて牢屋立直し候節各人一人御免被成候捷にてのよし達て願ひ候に付泉澤村庄右衛門と申各人一人御免被遊候

一天和元酉年十一月沼田の城主眞田伊賀守様同彈正の忠樣先達て江戸兩國の御普請御手傳ひ被遊候所在所より材木出兼候に付御吟味之所兼々領分中へ課役を掛百姓共勞れ候段達 上聞に非道之仕置仕候義不届に付三萬八千石召上られ御預りにあふせ付られ候依之前橋より森下町玉村町五料の關所三ヶ所へ御者頭御足輕二十五人宛中目附下目附等も

差出申候同十二月十四日より十六日迄之間沼田城請取の御方安藤對馬守様細川豐前守様新庄主殿守様段々前橋御通り被_レ成候依_レ之鳥川へは船橋をか_レけ其道橋等御普請御馳走役人等罷出候よし翌四月沼田の城を破却被_ニ仰付_一候惣奉行安藤對馬守様手傳ひ細川豐前守様新庄主殿守様并に公儀より御目附御代官様方大勢也此せつ前橋領中通川通へ仰出され候左之通

一 今度沼田御城破却に付御領分の百姓共彼の地へ日用に罷出義かたく無用可_レ仕候事

一 眞田彈正忠様御家中より出候拂物調ひ候儀無用并に預り物仕間敷候事

一 同年五料より深谷迄の内八里之道法に付馬繼難_ニ成仕_一候間傍止堂にて馬繼候様御願に付羽金五拾兩被_レ下候

一 同年御領分中切支丹の制札立直申候寸法横貳尺堅一尺一寸五分厚さ九分なり右制札以前には表に御名を書申候所に今度は裏に脇によせ小さく御名を書表には奉行と計書候様に被_ニ仰付_一候

一 同年御城下十二ヶ所に御領分百姓町人下馬と申下

高札建候様に被_ニ仰出_一候
一 延寶八申の二月二十四日御者頭共願ひに付八幡林におゐて矢場二箇所出來候御足輕弓鐵炮共稽古仕候

一 前橋伯耆曲輪は何れの城主の比よりや志塚伯耆と申もの居候故に號_レく勅使川原勘左衛門屋敷の内に右伯耆之墓所有_レ之養行寺の天神は伯耆の守本尊也志塚が所持之長刀今に養行寺の寶物と也可_レ有_レ之志塚の子孫也とて志塚權左衛門と申町人元祿之比迄有_レ之也

一 寛文九酉年公儀より御尋に付左之通御吟味之上柴田左衛門へ持參仕候

上野國前橋の城より

江戸日本橋へ二十六里三十二丁

上州高崎へ二里二十一町二反

同碓氷御關所へ九里四丁

同沼田へ九里一丁五反

一 寛文十戌年御領分糸井村庄右衛門と申百姓眞田伊賀守様沼田御城下の市に罷越眞田様御家來藤田彌右衛門と申者に慮外仕候て切殺され申候依_レ之眞

田様より御領分之百姓侍分之者へ慮外仕候に付止事を得ず切捨申候由御届の趣有_レ之候依_レ之高須隼人若年の節なれ共答申遣しけるは左之通

御届之趣承知致し候此方領分之百姓其御方侍市と存せず罷越候段不調法至極に御座候と返事申遣候依_レ之沼田にても止事を得ず藤田彌右衛門に切腹申付られ候由

一延寶九酉年八月二十五日大渡の船破れ沈み乗合百姓町人十四人溺死仕候船頭も一人死し申候依_レ之無_レ別一條相濟申候

一貞享卯年被_二仰出_一候趣左之通

一御領分寺方庫裏姥と申若き女をさし置事法外之至りに候以來老女たり共差置候事急度無用に可_レ仕事

一御領分百姓之子供出家之弟子に仕候義無用の事若無_レ據義有_レ之弟子に仕候は其譯御役人共へ相斷り候様に可_二申渡_一事

一御領分之者他所へ奉公に出候儀已來堅く無用に可_レ仕候事

一寛文十戌年九月十六日升六萬ほど船便りにて前橋

へ到著依_レ之御代官共へ相渡惣百姓へ相渡候升料は百姓より遣し候様右は先達て公儀升の御改被_二仰出_一候に付諸國共改候由

一諸國御關所通り手形は御證文留主居年寄より出候由何れの御大名も御留主居衆へ御自身之斷なり御三家様と此方様計は御家の斷にて相濟候由是は大御留主居御勤被_レ遊候節御留主居年寄衆は御支配故御年寄の斷にて證文出し來候例なりと云々
一箱根横川荒井福島等は往來共に御留主居年寄衆之證文也入女は前橋年寄の御證文也五料は出女は御留主居年寄衆の御證文也入女は前橋年寄の御證文にて相濟申候上方より江戸へ通るには京都所司代の御證文也

一享保亥年公儀御用に付上州相滿が嶽より駿河の富士山は何れの方に當り候哉吟味可_レ仕旨被_二仰付_一候依_レ之普請大奉行御大工等を召連立て伊香保へ參り所のものに案内させ相滿が嶽へ登り曲尺を以積り江戸へ言上にて相濟申候

相滿嶽と申は古へ南部六郎滿行の子息相滿と申入天狗に成當山に住居す依て號平日は行ものも七日

の精をして上ると云

一小菅又八郎は上州赤城を領す貳千八百石の身上也
又八郎妻赤城へ參詣して小沼に入て形を失ふ又八
郎是をいかりて人夫を遣し小沼を切割んとする此
事達_ニ上聞_ニ御改易に仰付られ候右又八郎妻女の供
して赤城へ行ける下女松下左近方へ與そへに來る
といふ二代目の左近の後妻は小菅又八郎娘也

一上州津久田村利兵衛は高野邊左大將家成已來の家
柄にて赤城大明神の縁起を所持して四月八日と六
月十五日赤城へ登山して牛王堂より大堂迄の諸商
人の運上を取候事古代よりの例也寶永の比に壽延
寺と公事に及利兵衛負て赤城之縁起を壽延寺へ取
上られ赤城へかよふ事ならぬ様になり候よし

前橋風土記附錄下終

會津風土記序

唐虞之盛也伯禹功成而九州定矣本朝之開也陰陽神合而八州生矣彼九州區別爲三國郡縣鄉邑此八州分析爲三畿七道亦爲三六十六國每國有郡郡有鄉鄉有莊村其方域雖異所以本立而未分倭漢同揆也中華歷代之制有沿革故地理郡國黃圖方輿括地府縣等志記錄數百千卷然其間或鼎足峙立或南北割據則不能包舉宇內至明朝并四海稽古今而一統之志詳而備矣本朝自神武創業百王一姓歷運不改國郡之名自景行成務寢備至和銅馭寓畿內七道國郡風土之記資始其後歷朝有損益修飾及延長而大成於是六十六國之山川土產人物戶口可坐而知焉乃與漢唐之一統同美而上庶幾唐虞之盛下不讓明朝之志者乎爰迨中葉乾綱不振干戈頻起加以火災而風土記亦湮滅矣自此輶軒之使絕而方土之言不奏而不能再興也然猶幸有出雲一國全存又有豐後國殘簡且有一段一事之見於舊記之

中者則古之遺式雖可追尋奈無文獻之徵何豈不嘆息哉方今闔國混一車同軌同文則敎令編降則六十餘州之風土可立而致焉正四品左中將源君者貴介之顯族而武林之模楷也封奧州會津郡城而兼管耶麻大沼河沼三郡常惜風土記之絕而喜遇一統之化而試記會津管内之封城風俗城主郡村山川道路土產神社佛寺墳墓人物古蹟等爲一卷草薺既成申命家臣巡見管内詳問於鄉耆質之舊證擇其正者刪其疑著如其奇事恠行則姑任傳說不必除之使見者自悟也檢之定之頃間淨書漸畢一日招僕請作之序僕顧其爲書則四郡之廣縮於一策懸於雙眼也蓋不勞孟子之轍有成子長之遊之趣不亦幸乎竊聞滕國之仁政者天下可取法橫渠一鄉之試亦可施之天下則此管内之風土記於五畿七道豈不倣依之乎不準知之乎君之盛慮雖不可輒測焉僕微志無敢隱焉云爾

寬文辛亥仲冬中旬

弘文院學士

林 恕謹序

會津風土記序

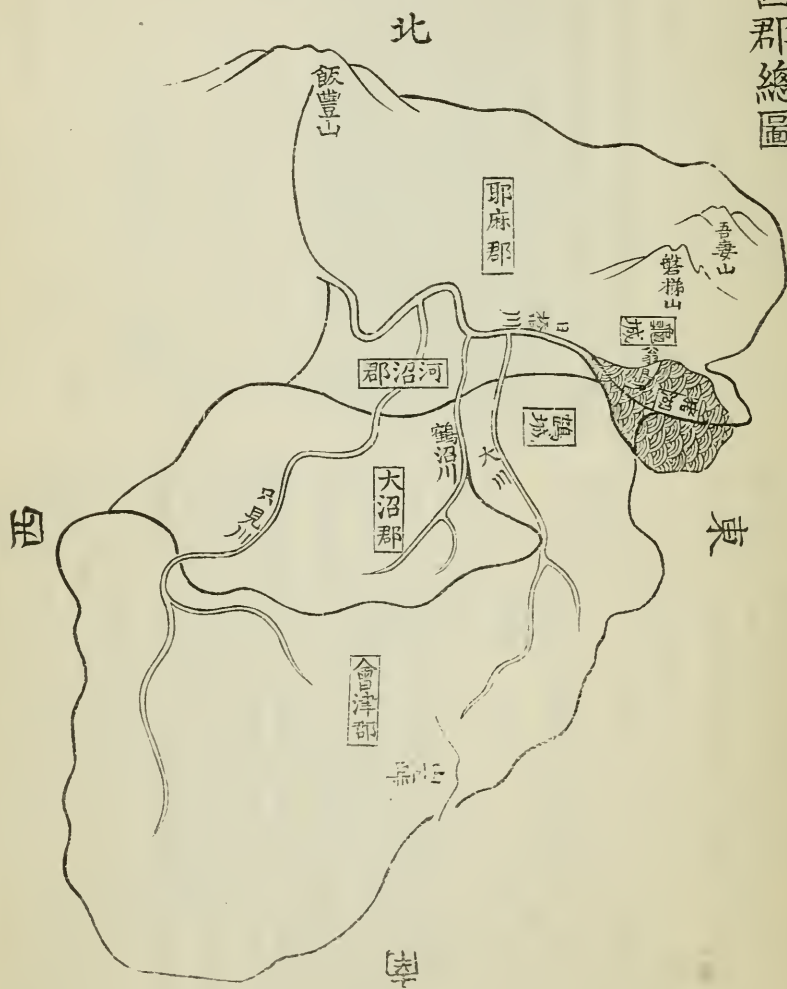
自_レ有_二天地_一則有_二我神國_一而伊弉諾尊伊弉冊尊繼_レ神建國中柱爲_二大八洲_一任_二諸子_一各有_二其境_一謂_二之浦安國_一以_二四海安靖_一也又謂_二細戈千足國_一以_二軍器具足_一也亦謂_二磯輪上秀眞國_一以_二秀出萬土_一也逮_二生_一天照太神_一授以_二天上之事_一太神以_二皇孫瓊々杵尊_一爲_二此國之主_一稱曰_二豐葦原中國_一豐葦原者葦芽發生之盛也中國者當_二天地之中_一日月照_二正直之頂_一也又呼曰_二千五百秋端穗國_一瑞穗是養人之物千五百秋則祝言_レ之也神武天皇都_二大倭國_一而以_二大倭_一蒙_二諸天下_一皇與翹望國形似_二蜻蛉_一則謂_二之秋津洲_一蜻蛉之倭名也垂仁天皇以來與_二西土_一通而後日本之號我固言_レ之他亦稱_レ之他亦稱_二扶桑國_一者其見_二日登_一扶桑樹_一也又稱_二君子國_一者其聞_二我神風_一也景行天皇立_二諸國之名_一成務天皇制_二國郡之疆_一元明天皇辨_二國郡鄉村之名_一上古之大八洲漸割爲_二三十三國_一復分爲_二六十六國_一而京畿七道定_二於中古_一未_二之有_一革者也畿內不

言_レ道者猶_二禹貢之冀州不_レ言_二疆界_一也六十六國各風土記始_二于_一元明天皇_一成_二于_一醍醐天皇_一夫王者在_二室中_一周知_二四方之地域邦國之要害_一則賴_二乎圖書之存_一焉此周禮大司徒之所_レ掌職方氏致_二其詳_一隸_二於司馬_一蓋秘而藏_レ之所_レ以防_二患也漢滅_レ秦蕭何先收_二其圖書_一高祖具知_二天下阨塞戶口多少_一則何之功也漢之地圖掌_二之司空_一浸以泄露當時淮南諸王謀反皆按_二地圖_一部_二署兵所_一從入_二王鳳所_一謂地形阨塞之書不_レ宜_レ在_二諸侯王_一正得_二周人之遠慮_一矣唐人設_二兵部屬四_一而職方居_二其一_一則能戒_二後車_一者也明人亦屬_二職方於兵部_一而一統之志之成漢唐以下所_レ未_レ有也然建_二邦之土地人民之數_一則未_レ備焉故丘濬議_レ之以請_二依_一周禮_一別爲_二一籍_一可_レ謂_二知佐_一王安_一優邦國_一之首務_二矣我風土記太政官掌_レ之王室衰焉官職廢焉或放散而不_レ收或亡失而不_レ補今流_二落人間_一者往々非_二其本書_一也可_レ歎而已矣會津中將源正之尋_二大八洲之起_一惜_二風土記之逸_一私記_二會津之風土_一令_二嘉潤_一色其文_一且爲_二中之序_一以俟_二國家修成之舉_一云

寛文六丙午八月六日

山崎嘉謹序

會津四郡總圖



會津風土記

保科正之撰

封域

會津泉州之域在二州之西南二會津耶麻大沼河沼總曰二會津四郡一按四郡本會津一郡而分爲二耶麻又割爲二大沼河沼一近失二會津郡二而加二稻河二誤也倭名集白河下今分爲二大沼河沼二郡九字當在二會津下二又倭歌或舊記耶麻大沼河沼之山川稱二會津一者泛言之耳萬葉集歌安比豆禍能久爾乎佐村抱美安波奈波破斯努比爾勢平等比毛牟須處左爾後撰集之歌幾美遠乃美志能布農左登邊山久毛乃遠安比豆農也麻乃波留計幾也奈曾法橋顯昭歌保久之加計志賀爾安比豆農也麻奈禮波伊流仁加比安留左部於南里計里或歌安比豆也麻下毛豆農由幾乃牟羅起惠爾會利能都奈底遠比幾會和比奴留六帖之歌古々路仁毛阿羅底和多里之安比豆賀半宇幾奈遠美豆爾字部之都留加南二心敏旬部山安布之左羅耳天曾米乃安比豆也麻又曰於布爾古其古與比也保志農安比豆我波二東交二信夫安達安積岩瀨二南接二上野下野二西連二越北續二出羽二自二良豆二坤一百九十六里餘自二乾豆二巽九十六里餘四分四郡而會津居其二強二焉二三分其三郡二而耶麻居其一二焉三分其二郡二而大沼居其二焉河沼居其一二焉會津在二南及東二大沼在

中河沼在北耶麻在其北二焉地勢巖峻蔚茂寒早暑晚大雪數尺簷氷如二椽風并起則行人往々咽絕迷仆自二仲冬至二仲春積雪凍澗絕二牛馬輿之往來垂二雪薦爲二戶壁之防二牽二雪車二雪車亦作二雪舟二通二乘載之用二寬文四年城有二焉村九百十其田二壹萬五千三百四十下上其畠二七百五十二町七段四畝餘畠字書無之和名集引二下上其畠中下戶續搜神記云江南畠種豆畠一曰陸田和名八太介下三萬一千八百二十四口十八萬八千六百七十一其十萬四千一百二男其八萬四千五百六十九女牛五百五十一馬一萬六千八百二十三延寶二年村六田二町三千三百二十畝餘畠一千二百町戶二千八百十七口一萬六千四百六十七其九千七百四十五男其六千七百二十二女牛一百五十九馬六百十六

風俗

風氣強勁俗尚二狡悍二習二字好二射學二禮容二長二劍工二善二洗削二

城 封侯附

會津城在二會津郡東北居平二至京師一千一百四十六里至二武江三百九十里此地彌二于四郡二四圍重二山中開曠平而田野開民人居故俗稱二居平二昔鎌倉之右大將封二三浦十郎左衛門尉義連

於此三浦亦稱佐原其先出平姓義連之子盛連有六子一曰經連一曰廣盛一曰盛義一曰光盛一曰盛時一曰時連光盛立爲之宗稱輩名是爲會津氏之祖光盛之子泰盛泰盛子盛宗盛宗子盛員盛員子直盛至德元年直盛新造使安部氏鎮之稱鶴城名市塵一曰黑川直盛子詮盛詮盛子盛政盛政子盛久盛久無子弟盛信立盛信子盛詮盛詮子盛高盛高子盛滋盛滋無子弟盛舜立盛舜子盛氏是爲中興是時仙道來屬焉盛氏子盛興早世盛氏養二階堂氏子爲嗣曰盛隆盛隆子龜王九天家臣等奉佐竹氏之子爲嗣曰義廣後改盛重幼家臣爭權而政事亂矣天正十七年夏伊達政宗依內應襲之盛重出奔佐竹政宗乃據乎此十八年秋七月關白豐臣秀吉公削之八月公入焉尋而以蒲生氏鄉封之氏鄉者倭藤太苗裔也文祿元年氏鄉起天守七重築外郭改市塵名若松因子載集若松在近州氏鄉近之蒲生郡人也氏鄉子曰秀行慶長三年春二月公遷封秀行於下野國宇都宮封上杉景勝于此秋八月公薨五年石田作亂景勝黨之將城子神指而事不成東照大神君誅石田六年秋七月神君削上杉地遷封諸出羽國米澤九月復封秀行於此秀行子忠鄉忠鄉無

嗣寬永四年夏五月大將軍秀忠公以加藤嘉明封之嘉明毀天守爲五重嘉明子曰明成二十年之夏明成蟄于石州焉秋大將軍家光公以正之封之猪苗代城在耶麻郡磐梯南麓弦峯呼龜城相傳磐梯明神使猪耕于此地故名猪苗代近失爲何郡或曰河沼郡誤也

郡村 田畠戶口牛馬附

會津郡 東交岩瀬郡一界二岐嶽小嶽山鄰下野國界小嶽山大峠山王峠巽隅並下野國界荒貝嶽枯木峠離方隣野之上下州下州界帝釋山長田代山赤安山一上州界赤安山小瀬峠坤隅界至佛山西界藤原峠並越後國界藤原峠枝析峠大鳥嶽淺草山一乾隅隣越後國界赤是山一北交大沼郡界疊子澤松坂峠船鼻山關山峠良隅屈曲而西接大沼郡界鶴沼川北連河沼郡界藤倉山良方續耶麻安積二郡吞苗湖東交安積郡界九峨山黑森峠布引山東西一百三十二里餘自東五輪峠至西淺草山南北一百二十四里自南小鋒峠近稱大其田三子三百八十沼郡誤也六町九畝餘中下其畠四子二百九十六町一反七畝餘其貢中中戶一萬一千三百四十四口六萬九千一百三十三其三萬七千九百八十二男其三萬一千一百五十一女

牛九馬五千一百八十一村二百八十四

門田莊

黒川郷

舊二十四村東西各十二村未詳
其處今市廛地其東村也

龍澤 所謂東十二村其一也山生松藁藁藁東山有龍直下可入丈
各一絲龍有石部舊宅庭中一古樹樹猶存樹不甚高枝葉
扶疎四數數步春花爛漫觀者如堵號曰石部櫻端
村二日中嶋曰北龍澤俗謂慶村曰端村亦作葉

以下一百二十三村郷米未詳

牛墓 有農夫標于山下忽紫雲霞而降中一夫人容貌美麗幽香襲
人徐來曰此靈地也爲我一祠則國家永安也言已不見矣農夫
往告石部家石塚三氏食曰奇哉昨夜所夢相符同遂勸力建祠夫
人即宗像之所化也始成偶有童女盛赤豆飯于器駄牛來飯役夫
食之不盡其牛南行數十步不知所處養宮有國神社
之因封于茲曰牛墓山曰飯盛

郷原 北柳原 下柳原 上居合 下居合 松窪

長原 新田 金堀 舊曰明澤有石金出
山篠多此之歸 中田 此餘湖有網罟之利端
帆八景一也 上馬渡 義家過于

難行上人扶馬渡之以爲村名又義
家立旗于此地因建祠號曰白旗明神

綱義家過于此時土人牽馬渡之因
爲村名手繩田而倭訓近因故傳訛

端村 經澤 有寺屋權現祠端村二
面端村 石田 曰大經澤

慶山 山生松藁藁 天寧 堀院內 寬文十二年引祖倉水於竹林
內山麓田給院內村民矣是受封田藉之外也祖倉水者舊院內之用水

而中移龍澤今爲充墓田以二萬餘之役夫淺河沼堤引龍澤復

引祖倉 湯本 有溫

有八幡社焉有蝦夷塚義
家擊蝦夷理其屍于此云

戸 酸漿産燈 二幣地端村二日中湯
鹽引端村 大豆田 香鹽端村

有金峰社元龜年
中墓名盛興再興

小田 北青木 南青木 御山 御俗
水於此

堤澤 河溪 大菓子 一渡

黒森 開川 小

上雨屋 普里民患霖弘法
祈于此雨晴

石村 面川 村端

中島 屋敷 花

井手 中野 德久 飯

上荒井 上荒井新田

北後庵 新在

柏原 西麻生

宮袋 宮袋新田 鷺林

中荒井 二日町 蟹川

本田 端村 十二所新田 有二十

下荒井 端村 平

荒田 礫宮 相傳繫揚明神作崇崇於此

中里 石原 田村山 館 出尻 臺 和

幕內 義連就封之時假居焉端村片

原町此分屬于柳原幕內二村

泉端村 三日上泉 曰

深川 西柳原 有神祠
端村片原町

鍛冶屋敷 小見 天滿 西城

高瀬 有川瀨高流急昔金寶吉六
瀨于此古六墓在河畔端村新田

神指^{カフサシ}端村二日横沼^{横沼} 荒久田^{荒久田}端村^{端村} 鶴沼^{鶴沼} 中前田^{中前田} 沼木^{沼木}端村二日^{端村二日}中沼^{中沼} 木流^{木流}

東森臺^{東森臺} 中森臺^{中森臺} 界澤^{界澤}端村^{端村} 上吉田^{上吉田} 下吉田^{下吉田} 藤室^{藤室}

上高野^{上高野} 下高野^{下高野} 中地^{中地} 平澤^{平澤}端村^{端村} 中^中明^明屋^屋 藤室^{藤室}

長江莊^{長江莊}民業射獵火耕斧斤民俗不用火葬人死則築臺建祠薦時食饌名集有伴伴多具倉精莖方大島屋代

湯原鄉^{湯原鄉} 桑原^{桑原} 沼尾^{沼尾}西小野嶽半腹有沼 小出^{小出}

蘆牧^{蘆牧} 船子^{船子}端村上 大澤^{大澤}端村二日^{端村二日}上 彌五島^{彌五島}端村

小野^{小野} 湯原^{湯原}溫泉出端 大澤^{大澤}村二日^{村二日}久景^{久景} 彌五島^{彌五島}端村

白岩^{白岩}有岩端 田代^{田代} 蘆原^{蘆原} 枝松^{枝松}

倉^倉 九九布^{九九布} 寺村^{寺村} 澤入^{澤入} 大窪^{大窪}

水門^{水門}端村半同 中妻^{中妻}端村二日^{端村二日}宮原^{宮原} 寺村^{寺村} 澤入^{澤入} 大窪^{大窪}

小松川^{小松川} 本九九布^{本九九布} 鹽生^{鹽生} 檜木原^{檜木原} 桃曾根^{桃曾根} 赤岩^{赤岩}

落合^{落合} 張平^{張平} 寺山^{寺山} 赤岡^{赤岡} 松川^{松川}端村二日^{端村二日}中 原^原端村

木令^{木令} 南倉澤^{南倉澤} 杉澤^{杉澤}端村 音金^{音金}端村二日^{端村二日}赤 高^高原^原二日^{二日}沖原^{沖原}

檜原鄉^{檜原鄉} 中倉^{中倉} 櫻山^{櫻山} 安張^{安張} 桑取火^{桑取火} 磯上^{磯上} 志源^{志源}

大內^{大內}端村 日影^{日影} 原^原 戶石^{戶石} 赤土^{赤土} 水拔^{水拔} 倉谷^{倉谷} 成^成

石井^{石井} 日影^{日影} 原^原 戶石^{戶石} 赤土^{赤土} 水拔^{水拔} 倉谷^{倉谷} 成^成

岡^岡 刈合^{刈合} 萩原^{萩原} 板倉^{板倉} 小池^{小池} 檜原^{檜原} 上添^{上添} 小山^{小山}

倉村^{倉村} 岩本^{岩本}南有^{南有}天 田島鄉^{田島鄉} 栗生澤^{栗生澤} 水無^{水無}前川夏秋欲流因名端村三日

長野^{長野}端村 田邊^{田邊} 栗生澤^{栗生澤} 水無^{水無}前川夏秋欲流因名端村三日

田島^{田島}每月爲^{每月爲}市六日端村四日宮本 丹藤^{丹藤} 新町^{新町}

高野^{高野}淺符 上鹽津^{上鹽津} 下鹽津^{下鹽津} 福米澤^{福米澤}舊日 金井澤^{金井澤}

大豆渡^{大豆渡} 黑澤新田^{黑澤新田} 針生^{針生}

關本鄉^{關本鄉} 中荒井^{中荒井}端村二日^{端村二日}油 河島^{河島} 關本^{關本} 藤生^{藤生}端村

長田^{長田}今^今生 絲澤^{絲澤}端村五日^{端村五日}馬場原^{馬場原}日^日今和泉^{今和泉}

三小^{三小}鹽^鹽日^日上町^{上町} 絲澤^{絲澤}端村五日^{端村五日}馬場原^{馬場原}日^日今和泉^{今和泉}

下小^{下小}鹽^鹽日^日上町^{上町} 絲澤^{絲澤}端村五日^{端村五日}馬場原^{馬場原}日^日今和泉^{今和泉}

瀑布^{瀑布}高可^{高可}二丈^{二丈} 立岩鄉^{立岩鄉}森戶西有^{森戶西有}立岩^{立岩}高

八總^{八總} 岩下^{岩下} 精舍^{精舍} 井桁^{井桁} 森戶^{森戶} 熨斗戶^{熨斗戶} 伊與戶^{伊與戶}

戶中^{戶中} 押戶^{押戶} 角生^{角生} 湯岐^{湯岐}出^出溫 湯入^{湯入} 水引^{水引} 具原^{具原}端村

吉高^{吉高} 福渡^{福渡} 前澤^{前澤} 鹽原^{鹽原} 穴原^{穴原} 田^田 瀬^瀬 介木生^{介木生}

小高林^{小高林} 木賊^{木賊}有^有熊野權現祠^{熊野權現祠} 河衣^{河衣}

以上俗謂三南山七鄉

伊南郷伊南郷 莊未審民 業射獵火耕

檜枝岐檜枝岐 端村 大桃 小立岩 大原 恥風 朴木ハナキ 落

合川合川 立岩 川合ニ此 濱野 宮澤 白澤 多石イハ石 古町月毎

爲市 小鹽 青柳 大橋 木伏 水根澤 大新田

山口端村三三 板橋 日臺 北原 中小屋 下小屋 宮床 鴉巢ツラノス

界村伊南伊北之 界端村 蛇宮 小野島 片貝 富山 和泉田端村 九澤

鹽岐端村八 梁取布澤 二間在家端村九 生有 若宮 八幡 祠外有二沼 名田 齋

沼入有取此田 齋則及 夜寢 而呼曰 返之不 返則不 止 疾患 瘧疾 者取之 祿而曰 疾愈則 倍以返 之則有 驗焉 大倉

上田 小林 布澤口 瀧原 布澤端村 吉尾 泥島 熊倉

熊倉新田 荒島 長濱 黑谷端村四 澤澤 曰 黑谷 新 田 曰 阿彌陀堂 曰 釜勝

上荒井下荒井端村 大舉 小川端村二 荒井 原 曰 肱折 黑澤 櫓戸

石伏端村 宮淵 田子倉 只見端村只 見新田 叶津端村入 叶津 叶津 蒲生端村 產銅

八木 寄岩 十島 鹽澤東有 川其 澹岩 穴 潮出 爲里民 煮之

○南山伊南伊北近失爲何郡 或曰 大沼郡 誤也 倭名 集會津郡 有長 江 南山 木賊村 熊野神社 及下 鹽澤村 驚神祠 歸口 銘書 長江莊 因屬 會 郡津

耶麻郡 南會津也 交河沼郡 界二日橋川 西鄰二越後

國界二檜木峠高森山乾隅並二越後出羽二州界二飯豐

山二北鄰二出羽國界二赤崩山檜原峠一長隅並二出羽國

界二中吾妻峯二交二信夫郡界二中吾妻峯土湯峠一東接二

安達郡一界二東嶽石筵峠揚枝峠一巽隅連二安達郡一界二高

森山陸坂二限二湖水二半東西七十一里餘二自東沼尻峠一南

北三十八里餘二自南鹽川一至北檜原峠按二倭名集一有耶麻郡二

日量共五而無二今之五莊二蓋津部津部量足日量亦錯

誤爾分二會津郡二間不空之則二會津分爲二耶麻之謂也 其田 六十町三

畝餘 下上其畝 三千三百四十 下其真中下 戶九千三百九口

五萬二千四百七十四其二萬九千六百四十四男其二萬三千

四百十女牛八十六馬五千三百三十四村二百七十四

更級莊更級神社在磨上原此莊歸未 密相傳苗湖暴洶鄉村多沒矣

戶口 金澤澤新田 蟹澤 三本木新田 布藤端村 實 性尻

一澤モトヲラ 舊曰本町一 大寺 舊曰新町端 村沼田新田 源橋端村長 磨

上新田端村三 廣達新田 曰 大曲新田 曰 藍原新田 湯達澤新田 五十間新田

產羅菊 行津端村袋 櫻川 西窪 三城瀉 舊曰內城 大次 味甚辣

爲今名三子相謀建八幡社于此端村砂川新田 新在家端村砂 曰經泰 次曰房季 次曰義泰 三子各城于此因

南眞行 東眞行 西眞行 大在家 島田 町田島

町堤崎 釜井 烏帽子小屋 蜂屋布 百目貫端村 二

松木橋^一曰仁藏新田^一 谷地 下堂觀^{イ道} 北高野^{ノリヤナ} 廻谷地^{アサノ} 相名目^{アサノ}

入江 牛沼新田 小平瀉^{舊曰小出瀉} 昔人自攝州平瀉^{モトチ} 今泉^{モトチ} 本町^{アラハチ} 新町^{アラハチ}

云 松橋 中目 西館 東谷地 今泉 本町 新町 長坂

北窪 見禰^{舊曰三本木} 澁谷^{河上} 三沼^{沼本} 二沼^{沼本} 二沼^{沼本}

新田^{三屋} 酸川^野 村^二 名^家 曰^{多茂澤}

木地小屋^{作器皿者居之產} 歲長壑軟肥味美

月輪莊^{郷未番相傳苗湖} 暴涌郷村多没矣

小田^{端村} 白木城^{端村} 萩窪^{萩多端村} 堀切^{端村} 三曰大水

志^{下館} 端村^{大水} 明戶^{白津} 有^{八幡社} 永保

介修^{東館} 曲淵^{新屋敷} 荒野^{有觀音寺} 此之^{都澤}

舊曰^澤 岸長^{夷田} 新田^{金曲} 此之^{雁八} 關腸^{在壺}

根^{白普賢} 帝都^{ツボラシ} 番皮察^{往來} 此之^{楊枝} 山渴^{端村}

端村^{河原崎} 新田^戶 曰^{餉澤} 新田^{山崎}

以上六十四村未審^{莊郷} 入倉^{天正年中伊達之亂} 上西連^{端村} 二曰町屋^{下西連}

端村^{中島} 落合^{日橋} 大谷^一 赤枝^{端村} 四曰^{末那板倉} 曰^{宮在}

馬場新田^{金川} 三橋^{深澤} 端村^{田中} 新田^{竹屋}

松崎新田^{上原} 新田^{南屋敷} 中屋敷^{常世} 金森

會津風土記 郡村

上窪^{端村} 窪中^{下窪} 別符^{新井田} 新井田^{谷地} 高木

下小出^{上利根川} 下利根川^{中目} 宮目

有^{諏訪社} 端村^{金澤} 端村^山 辻^{倭俗謂街} 雄國新田^{小沼}

端村^勝 吉澤^館 地^{新田} 高柳^澤 曰^{瀧澤} 熊倉^{端村} 四^{柳原}

谷地^{八町} 中^里 三城目^{布流} 端村^{堂島} 五町^上

勝^{舊曰} 原村^{嘗有} 二女^{名勝前} 欲^觀 松島^{病不} 能^{行人} 爲^之

模^寫 其^{景物} 勝^{女見} 之^悅 而^日 素^懷 足^焉 終^不 起^而 死^因 爲^村

名^其 模^畫 之^迹 今^尙 在^焉 端村^{松島} 新田

京出^中 二曰^{島中} 平林^{端村} 七曰^{原村} 曰^{新屋敷} 三曰^{長於}

稻田^{下臺} 小田村^{每月} 爲^{稻村} 上田^{端村} 三曰^下

西^村 大澤^{入田} 付^有 貴^船 祠^安 神像^焉 其^前 有^沼 歲^旱 浴^像

村^{大川} 入^{新田} 曰^{中田} 付^{每歲} 七月^{十四} 日^{十二} 月^二

平澤^曰 本^{小屋} 中田^付 每歲^{七月} 十四^日 十二^月 二^日

河柳^曰 大^田 曰^{西條} 曰^{赤坂} 曰^{下柴} 端村^四 曰^{小松} 曰^石

渡柳^曰 高^橋 曰^柴 曰^{茅場} 曰^{下柴} 端村^四 曰^{小松} 曰^石

楚々^{下吉} 漆^有 諏^訪 祠^{端村} 三曰^谷 關屋^樟 上河

前^{下河} 前^{端村} 二曰^{小松} 山^新 大鹽^{弘法} 大師^米 子^此 宿^老 題

爲^之 護^摩 七^日 岩^穴 湯^出 至^今 不^絕 焉^{每歲} 三^月 二十^一 日^祭 大師^子

湯^前 矣^老 婆^遺 址^有 梁^木 像^其 後^圍 有^護 摩^石 石^面 有^大 師^手 印^四 行

歌^佐 登^亦 字^羅 士^遠 幾^古 乃^也 未^茂 登^爾 伊^都 與^利 賀^多 惠^須 伊^末 底^志 保

久^端 村^大 窪^檜 原

岩崎莊

上岩崎 端村六 曰 原防 曰 柏原 曰 寺窪 下岩崎 端村三 曰 北
原 曰 長峰 曰 十方宮 曰 大澤入 中村 端村三 曰 坂根 曰 天井澤 端村三
中内 宮前 端村大 曰 中村 端村三 曰 中村 端村三 曰 西
村 曰 木戸 曰 宇津野 端村 栗生澤 熱鹽 端村間瀬
村 曰 大澤入 宇津野 端村 栗生澤 熱鹽 端村間瀬
水澤

以上九村未審又不_レ知_二此外屬村幾許_一
加納莊

百木郷

小荒井 每月爲市三 大荒井新田 村松新田 北原新田
高島 端村下 吉志田 端村新 上三宮 有_二加納_一 下三宮 端村荒
見頃 端村二 曰 新屋 岩澤 細屋 讓屋 端村 鷺田 下
谷地 根岸 端村二 曰 十間 五日 瑞村四 曰 大平 曰 上野
端村 針生 端村四 曰 日照屋敷 赤崎 金屋 黒川 端村中
日 中早 合草出 端村九 曰 子石澤 曰 宇津原 曰 坂場 野邊澤
端村二 曰 赤澤 百木田 端村五 曰 百木澤 曰 照田 岩尾 出
曰 右衛門屋敷 曰 宮前 曰 明月 曰 上窪 賢谷
藤澤 端村七 曰 上藤澤 曰 白子 曰 道澤 沼平 背戸尻 端村
曰 通渡 曰 澤口 曰 本木 曰 撫木

板澤 一戸 端村三 曰 高野原 曰 橋爪 曰 通渡 赤崎新田

新宮莊

鹽川 村西南潮出流入_二日橋川_一 上遠田 端村二 曰 下遠田 端村
數 第六天 端村三 源太屋敷 太田 一堰 上高額 端村
下高額 清次袋 塚原 太郎九 昔三浦太郎九盛次 高吉
菅井 澁井 柴城 端村三 曰 西村 荒分 長尾 綾
金田新田 宮在家 端村 松野 端村二 曰 六十 慶德 萬治年中村
東歩人驚愕村翁 掘出新田 端村里 能力 萬力 今_二一_一
枕于百步而止焉 沖 貝沼 端村二 曰 本 赤星 端村二 曰 赤
鏡召 新宮盛俊臨戰 著_二鏡于此_一 大木 田原 新宮 義家勳_二諸熊野權現於_一
原 曰 河 大澤 端村 深町 大木 田原 新宮 義家勳_二諸熊野權現於_一
小 山崎 眞木 以上三十五村郷未_レ審
小布瀬原 端村小 河吉新田 河隅 下村 寺内 端村二 曰
石田 船岡 木曾 廣野 楊川岸上 館原 三山新田
上林 端村 洲谷澤 端村 早稻谷 端村 堂山 船引 中反
宮古 三方 端村四 曰 榎窪 曰 長 大谷 小土山 端村二 曰 立
窪 曰 地割 曰 塔窪

吹屋^{端村} 黃榮^{ワウバウ} 西海枝^{端村} 萩原^{端村} 利田^{本日陰田在}
中山^{端村} 赤岩^{端村} 大蘆^{橋澤}

野尻郷

井谷^{有瀧有} 八重窪^{端村} 橋屋^{上崎} 戸中^{橋立} 柴崎^{瀧坂}

高目^{端村} 滑澤^{有瀧有} 樟山^原 新村^{平明} 漆窪^{端村}

奥川郷

大船澤^{端村} 小綱木^{眞箇澤} 中町^{新町} 道^タ

目下町^{吉田} 新田^{向原} 杉山^{有瀧有} 井岡^鹽

村出戸^{端村} 中澤^{端村} 山浦^{端村} 小山^{梨平} 宮

野小牧澤^{端村} 小屋^{極入}

大沼郡 東南西會津郡也西隣越後國一界馬尾瀧山

猩猩森一山乾隅並越後國一界鉢峠一北鄰越後國一界

高陽峯一交河沼郡界高陽峯蒲倉松坂里東西六十

九里^{自東鶴沼川南北四十六里餘} 其田^{二百}

九十九段^{中下其畠} 下上其貢中下戶五千四

百一十一口三萬四千三百三十其萬八千九百四十八男

其萬五千三百八十二女牛四百四十四馬二千六百四

十四村一百五十三

小谷^{端村} 馬越^{穗谷澤} 大石^{端村} 相

川^{本郷有陶人端村二日} 上小松^{八重松} 藤田^{領家}

關山^{端村} 上小松^{八重松} 藤田^{領家}

神爲之崇因復植^{田藏岡} 福光^{藤田}

館日^{西勝} 橋爪^{端村} 新堀^{下中川} 竹原^{有大沼}

富岡^{端村} 上中川^{屋敷} 高田^{伊佐須美大明神祠}

安田^{佐布川} 屋敷^{神堂} 境野^{端村} 米澤^{根岸中}

寺崎^{端村} 雀林^{法用寺} 檜目^{端村} 新屋敷^新

田^{沖中田} 阿久津^{立行事} 澤田^{蕎麥目} 小澤

屋敷新田^{端村} 和泉新田^{澤田} 入田澤^{逆瀬}

大石目^{梁田} 西原^{出戸} 田澤^{端村} 入田澤^{逆瀬}

川^{端村} 輕井澤^{有銀號今廢端村三日} 上

以上十九村未審莊郷一

尾岐郷莊未審

八木澤^{赤留} 松澤^{杉内} 上戸澤^{永井野} 上

杉原^{下杉原} 北村^{端村} 長岡館^{小川窪} 市野^{端村}

大黑澤^{日詢} 寺入^{端村} 無量^{端村} 池端^箕

谷日^{向小川} 尾岐窪^{東尾岐} 有^{神祠} 端村^{七口} 唯能^日

作^{岩淵} 尾岐窪^{東尾岐} 有^{神祠} 端村^{七口} 唯能^日

牧内 下谷地 中在家 中村 入谷地 藤江 冑

端村 仁王^{有稻荷祠使狐尾} 堀内^{爲二兩岐郷名因之} 松岸^{有手兒} 萩窪、

小山^{端村} 菅沼^{南北有} 蛇食^{ヘビクヒ} 大岩^{南山有岩高十餘丈横可九丈一}

金山郷莊未審

高森^{フイナ} 九九明 烏屋 中村 田代^{端村} 牧澤^{端村} 遲

越渡^{端村中} 澤中 漆峠 琵琶音 大成澤 芋小屋

冑中 黑澤 砂子原^{溫泉} 五疊敷 湯八木澤 大嶺、

瀧谷 檜原 西方^{端村} 大石田^{端村} 名入^{端村三} 高

飯岡^{清水} 河井 宮ノ下 桑原 大登 小野河原 大

谷^{鳥海} 淺岐 間方^{間方} 野尻郷莊未審

野尻郷莊未審

松山 野尾^{端村} 下中津川 小中田川 佐倉 大蘆、

原 喰丸^{端村} 小野川^{端村} 大岐

河口郷莊未審

早戸^{有溫泉} 木沼^{端村四} 上田^二 上大 三更 福澤入

新田 沼澤 多良布^{端村上} 大栗山 宮崎 板下 大

石^{端村下} 河口^{端村二} 栗牧 小栗山^{端村四} 其輪田^二 日

八町 中井^{端村上} 玉梨^{端村三} 西谷^{端村} 本

名^{端村二} 越河^{端村二} 上越 横田^{端村二} 上横 山

入^{端村七} 石塚^二 山中^二 鹿兒澤新田 大岐 大鹽^{端村二} 上

河沼郡 南會津郡及大沼郡也北耶麻郡也東交耶

麻郡界^三 日橋川^{西鄰} 越後國^一 界^九 才坂烏居峠^{東西}

四十五里餘^{自東日橋川} 南北^二 二十二里餘^{自南驪野村} 其

田^{三千四百四十一} 下^{上其島} 二百六十九^一 下^{上其貢中}

下戸五千七百六十口三萬二千七百三十四其^一 萬八千

百八男其一萬四千六百二女牛十二馬三千六百六十四

村一百九十九

河沼莊

八田野 强清水新田 稻荷原新田 生井新田 漆澤

新田 界新田^{端村古} 駒板新田 淺野^{端村牛} 中林新

田 北山新田 長谷地新田 原田新田 堤新田 南

高野 横堀新田 六町原^{端村古} 鹽庭 鹽庭新田

藤倉^{東有} 倉道^{端村} 槻橋^{端村} 原新屋敷新田 澤目

新田 冬木澤^{有八} 北高野新田 茶磨森新田 堂島

新田 鴨田新田 大和田 熊野堂^{有熊野權現祠} 京

手 郡山 高島 代田^{端村六} 岡谷地新田 方便^{應永}

年中

一夜無望而山涌出乃名「方便山」
端村二曰「舞臺村」一曰「上野」

濱崎古木新田 上田谷地 栗宮新田 笈川王領 田中

八日町 高橋 竹内 森臺 米丸 笠目 上垂川 下

垂川 中臺 北田 堂島 勝常 五町目 熊川 中

目 佐野 最冬木澤ヨリ三十五村寫 橋 端村 中島 原 新屋敷新

田 澤目新田 冬木澤

以上六十三村郷未レ審

蛇川

義連之子景遠其子景義號「蛇川」蓋領此也近蛇川竹稻川謂之郡誤也

塚原 細工名 上茅津 中茅津 下茅津 和泉河原

新田 上金澤 上金澤新田 下金澤 橋本 下金澤新田

中茅津新田 大江 端村 矢自 水島 日度 勝 方、

大村 大村新田 牛澤 端村 西 船窪 杉村 蛭川

中村新田 原 葉林 端村 東 福原新田 海老澤 古

坂下 坂下 舊曰「栗村」每 塔寺 有入 氣多宮 有氣多神祠 義

敷 船越 新館 中政所 端村 上 下政所 有白旗權現祠 義

則爲之崇 金上 村田 端村 二曰「新 履形 中目

十日町 京出 立川 砂越 曲沼 御池 端村 二曰「東

池 谷地 東河原田 青木 端村 舟場 東青津 西青津

上宇内

南宇内

北宇内

津尻

長井

有安部仲丸祠

河原田

宮月

堰澤

東羽賀

大原

田中

窪倉

窪

船渡

片門

慶安年中揚川西一日雲霧嘆

味地鳴條陷兩所大如溪谷同

藤

大牧

三曰「長窪」

本名

天屋

輕澤 今屬三

杉山

州走

西羽賀

夏井

河井

端村 大田 鹽坪 喰鹽池

原

漆窪

利田

端村 合瀬

以上八十三村郷未レ審

柳津郷

和泉

大澤

朝立

平井

八坂野

細越 柳

津

阿久津

黑瀧

小柳津

大野

大野新田 猪鼻

出倉

中野

小野川

持寄

麻生

端村 三曰「

野老澤

端村 二曰「上野老

澤」一曰「中野老澤」

小卷

椿揚川中有大

赤麕 苗中有

野澤郷

尾登

小島

端村 下

松尾

茅本

端村 森野 繩澤 端村

青坂

有瀧二級 上曰「不

程窪

泥浮山

長櫻

二栗

小杉山

端村 新田 黑澤

有蝦夷權現祠 俗祭義經云端村四曰「

山口

野澤本町

端村 大槻 野

出原

紙 牛尾

端村 雲

山

野澤

端村 大槻

澤原町

端村 三曰「四岐」

曰「中野

端村 大窪

安座

山座 被端村二曰「

牧 堀越端村二口岩井 芝草 芹沼 上野尻端村
 野尻 有端村亦廣七十丈有 德澤 白坂 端村五口河谷
 平曰熊澤 寶川 曰熊澤 寶川 曰熊澤 寶川 曰熊澤 寶川

山川 原石湖泉附

御山 峯三馬北曰石峯 持秀中有嚴屋 又側有石孔相通 南曰羽
 黑 其南曰樹山 相傳義家城于此 遺跡今在呼曰御館 斧斤不
 入故謂之樹山 警石峯火出類與二
 峯 齊因曰小山 今墟石散在山下
 釋行基建構現社于妙見峯
 有七石七木等之名勝
 山上移 西峯 矣東腰有 嚴洞 嚴下湖 曰岩崎 歲旱禱
 雨山色盡躍躍輝 林北麓有木葉石 以石紋一名之 一寶山
 義家使役夫各搬一寶土 石盛山 形如積石 似螺髻 舊產
 築山建八幡社 故名之
 川有 布引山 林木蒼鬱延亘五十里許 策杖歌美登世邊天遠里遠里
 金砂 美多流奴農比 幾遠計不太知所來底 伊部加底美幸此
 會津安積 船鼻山 形如覆舟 舟會津 朝日山 伊北山中晏後見日故
 二郡之界 名之自半阪 至三項山 水品山 有伊北鄉 赤安山 陸奥上野
 岩語 磯草木不生四時雪 界曰〇已上在會津郡二州之
 至佛山 四時有雪 陸奥上野二州之
 磐梯山 在會津東北十五里 爲此會津山嶺 頂上有三神祠 焉南臨
 猪湖 北連檜原 高三百六丈 廻麓九十里 南麓 嶺巖 嶺巖 嶺巖
 東半腰有三池 周各三十許步 南腰有護山權現祠 自翠微而赤巖不
 可攀 東北二巖 一雷嶽 一鳥帽子 嶺東南有孤峯一名赤城山 其下曰
 見福山 西北有小磐梯 其西腹熱湯湧硫黃出焉 飯豐山 在會津城西
 山谷竹皆偃宿雪壓之也 此之晴嵐八景之一也

陸奥羽越三州 高四百五十丈 山麓曰一戶 有鳥居 上行二日至五
 社 構現絕頂 曰大目嶽 無山 蓋緣矣 自一戶三十里至瀨尾澤渡
 北澤流三十餘廻 瀨尾澤三十里至長坂或鍾 鐵索或攀 藤蘿 至
 劍峯 自此十五里經七森嶽 至切合 與奥州 永井之路 三連合 于
 此 自此十五里歷 駒原 至山橋 此間山阻谷險 謂之無間嶽 嶺峻絕
 過於劍峯 自山橋十五里至五社構現 自此十五里經 龍岩 入奧
 院 矣 四時雪晴 六月出水 焉一歲唯八月人得見 而目見 春花也 耳聞
 夏禽也 紅葉之秋 白雪之冬 四時之風物 一時之壯觀 也 遊人歸來 以爲奇
 談 一 吾妻山 陸奥羽之三州 三峯相並 曰東吾妻 曰中吾妻 曰西吾妻
 月不能躋 西吾妻 有瀧 曰寒水 高可十丈 一 高森山 二州之界
 東吾妻 半腰有土湯 此之秋月八景之一也 五峯山 西峯有二 松二曰人掛松 俗謂天狗或獵衣或
 掛入其松 今枯唯松存焉 下有示現寺 〇已上在耶麻郡
 明神嶽 在大沼郡 伊佐須美明 小野嶽 本名足 二岐嶽 雙立
 神始現于此 遺跡今在 會津岩瀨二 七森嶽 有七峯 焉一 駒嶽 五峯綿延五十里
 郡之界 一 白峯 有場產 冬坂 直高五十丈 舊曰背矢
 大鳥嶽 陸奥越後 白峯 有場產 冬坂 直高五十丈 舊曰背矢
 今 龍澤坂 高七十八丈 見若松於一 最明坂 在耶麻郡 福永峠 俗謂日坂 頂爲峠
 名 陸奥下野二州界 神祠易地相對 立焉 鑿開白岩 小瀬峠 陸奥七
 石徑盤曲 懸崖參天 關干 雲景勝不 堪言 枝折峠 陸奥越後二州之界 六帖歌 折之天遊 加末之毛農
 草峠 陸奥越後 境澤峠 陸奥越後 鳥居峠 陸奥越後 東松
 峠 有三株松 如相狗 塔露 九層塔 溝中有虛空藏堂 下瀧流深
 東 〇俱有河沼郡

可二丈游魚鱗々焉若上通一路傍巖側身或
在危樓尖石或踐滑巖行數十步
材木巖中田一

在篠山如積材木相傳磐梯明神
鳥崎在清湖濱舊曰大
崎繪鳥石壁書其
側曰雨洗風磨不可
消墨猶存故名

根入石在城內背人掘之愈入愈深終不能窮其根而
止因名之依城名呼鶴石○已上在會津郡

燈明石在金澤澤石面平而可座數人
相傳於此供龍燈于磐梯明神
夫婦石在猪湖濱二
石別立故又

曰離大鼓石在戶口濱文郡
貓石在見稱山下
○已上耶麻郡

冑石在河沼郡東松峠
赤崎松林東西一里南北
八里喬松森々
駒方原相

義家建熊野新宮獻連錢筆毛馬後放此
原居久面飛去雲外有聲七日遠近聞之
龍泉原天正年中伊達
氏戰于此伊達敗北死者夥矣
小平湯松原東西一里餘園三里
蓋名封其屍爲塚十六今尚存

蓋此也有菅神社根揚松身木梅靈壩之名木也兼裁之母祈
千此而生栽焉風致似佳古兼裁之號因慈鎮住吉之詠云
磨上

原在磐梯南麓放鷹之地其後鶴雲雀天
正年中政宗軍于此○已上在耶麻郡

千笑原在河沼郡壽永年中越後城四郎長茂築二十八館于鯉川莊
藤村宇內封在遺址焉此原長茂與其妻龜前前遊獵之地也
當時栽千種芍藥至今滿原皆芍藥而呼千笑原芬芳遠聞故其南曰
香原東北曰發原形如袋有龜塚有御前清水有沼沼中有洲夫
妻偕于此曰舞臺沼原南在經緣相傳龜使極樂
寺僧侶寫經小石封之今原上之石時見文字
日橋川源

猪湖代湖西流界耶麻河沼二郡上越後原入于海衆川會焉派合
石高水深無從涉其間隨處而名焉川源曰戶口其西有日橋次堂
島有橋而爲二派南堂島北金川橋而合復爲二派南濱崎橋北鹽川
橋鹽川西至曲沼爲三派復合與山崎新湖會湖水浸三郡南
爲河沼北爲耶麻南流去四曲而過宮月村名曰揚川南轉北折爲
瀧過利田村西流至芹沼村而北折爲瀧坂瀧又西流經德澤村

會津風土記 山川

入越後州放
新瀧入于海
黑川俗呼曰湯川源出會津郡布引山經三帶地
鶴城之南及西北流過瀧澤村入河沼郡至沼上村入日橋
川此川舊有鶴城北今廓內車川是也應永廿六年秋遷于此
應

湖川源出鶴沼川俗呼曰大川源二出
湖而流至平澤與黑川合
鶴沼川俗呼曰大川源二出
津郡釜蓋麓至白岩村一出會津郡會王峠北流經絲澤村至荒町
東北流過長野村北轉至塔弗屈曲至白岩村二水合而北流至小
鹽村轉西北流至雨屋村北流經向羽屋村幕內村之西歷高久
入河沼郡至佐野村曰佐野川至立川村入日橋川有鮎魚甚
大甚美此川在昔自岩崎北流西流至本鄉西北經上流井至下
野西南轉至大島安田之間宮川與之合矣此會津大沼二郡之界也

宮川伊佐須美神御手洗川也源二出會津郡明王山北流爲瀧直下
數十丈折而東流又北轉至中在家一出大沼郡博士大峠東北
流至中在家一水合而北流過高田至安田與舊鶴沼川
合又北流過宮下一經和泉新田村入河沼郡與新湖合
只見

川源出會津郡小瀨沼北流過山間數十里東轉至田子倉村北折
過只見村歷寄岩村入大沼郡轉至本名村而屈曲而東流放
大川村東北流至河口村北屈至宮崎村東流至早戶村盤曲東北
流至西方村東折入河沼郡又東北流經柳津至片門村北轉過
河井宮月二村
檜枝岐川源出會津郡三川澤北流經檜枝岐村
間入日橋川
西流經黑谷村至
酸川源二出耶麻郡檜原峠南流過檜谷
村謂之檜原川一出耶麻郡東嶽熱沼西流南折又西流經本地小
屋南流歷酸川野村至澁谷村二水合過龜城東至小平湯入
猪湖是以熱湯未流
黑川堰在梁川源出黑川西北流八里而
水酸故爲川名
松之

門田堰在雨屋村引鶴沼川北流十一
民用
羽黑北麓引鶴沼川北流二十五里
餘而通宮川源出四百七十九町餘
田二百九十七町餘
○已上在會津郡

高久堰在里餘而通日橋川源
思鑿堰在

八百九十九

日橋堰起日橋至會津郡凡十八里餘而狐堰在金川村引日

橋而入天鹽川濠田一百四十町餘相傳昔堰日八方堰起赤崎川

橋川不感應永二年有狐米導水而成矣下岩村濠田九十一町餘水引分

入田附阪在入田附村周慶德阪在慶德村相川阪在

川米澤阪在澤村有鮎大村阪在河沼乾飯澤在御

以追義飯於此澤鴈打澤在瀧澤里人向東風以瀧澤在耶

暮日寺北上有巨石曰龍化石下泉涌出清寒可愛人入則昏不

青服殿不能暫立灑水于石上則其氣如虹歲旱禱雨有應思

又謂之伏見瀧以見手雨降瀧高可七尺風沫噴空白絲

瀧在瀧澤山可入丈飛瀧如雨降瀧高可七尺風沫噴空白絲

瀧在瀧澤山可入丈飛瀧如雨降瀧高可七尺風沫噴空白絲

田龍在河沼利田村是日橋下流也慶長十六年八月二十一日大震

而不不得險喝集于此南岸人係于繩而漁猪苗代湖下大同元年

北岸人傍巖而漁皆以繩承之有鑄鐵船此環湖數十步漫會津

耶麻安積之三里許會津園都免鳥鳥咬喋于此環湖數十步漫會津

三諸磐梯也也湖中有鳥名翁有山崎新湖浸耶麻河沼二慶

翁神社此之暮雪八景之一也沼平沼在東嶽方百二十

山其鳴如雷夜則田子沼在山湯村周五里有琵琶沼在鹽

周一里餘太平沼在五日村從三里餘橫可三百步慶長十六

有鮎沼在竹原村郡名因之古方沼在雀林山沼二日雄岡可二

沼有三大沼明神社隨水浮沈一曰雌縱百五十步橫六十步歲旱祈雨

于此二沼明曆元年築堤納十湖永堀三旱魃沼澤沼在沼澤

里深可二丈大沼郡難波池在沼澤郡藤倉村東義經欲授鬼之女

皆鶴竊其書赴奥州平泉女草義經至藤倉里人語曰過此已五

而封墓山路險迫不及女不堪悲投于水而死義經在大寺聞之歸

寺鬼一兵書今相傳云關伽井在那麻郡空也水在河沼郡

也手鑿將災潛清水在布藤村自源行中清水在見補村岩

御手圓清水在見百貫清水在吾妻山周二步深可二

冷水留冷氣凜々焉昔人見之曰不換百貫此清水爾來以名箱清水

之野哉言也水名不相稱可為笑柄已上在耶麻郡

在東嶽熱湯在東嶽西腹自石間二數出焉硫黃出味酸治諸蟲夏秋

至昭則雲霧驟起風暴湯本溫泉在會津郡溫泉涌處不一其味皆淡

此熱鹽溫泉在耶麻郡平地出其味咸能砂子原溫泉在

沼郡溫湯二湯一出石罅一出山下謂之上土田堰在耶麻郡

下湯其味鹹能治中風脚氣令肌膚滑澤寶元年為土

道路 關梁附

白河路在會津城東置驛三若松至赤井十四里赤井至原村八里原村四里餘至黑森峠此爲會津安積二郡之界自此二口又五十六里達于白川一本松路在會津城東北置驛六若日橋川此爲河沼耶麻二郡界大寺至猪苗代十六里至都澤八里餘此間有酸川郡澤至關脇一里餘關脇至楊枝五里楊枝至楊枝峠一里此爲耶麻安積二郡之界自此而東經四十九里達于二本松

福島路在會津城東北置驛五若松至大寺十一里大寺至猪苗代十六里猪苗代至酸川野村十里餘酸川野村至木地小屋三里餘木地小屋至上湯峠十八里餘此爲耶麻信夫二郡之界自此而經三十六里達于福島

米澤路在會津城東北置驛五若松至鹽川十六里餘此間川二渠川一鹽川有橋耶麻郡河沼界于前橋鹽川至熊倉九里餘此間有別府川至大鹽八里餘此間有城鹽川大鹽至檜原十三里餘此間峠一曰茅峠一曰蘭峠檜原至檜原峠九里餘此爲奧羽二州之界自此而北經三十一里達于

越後路在會津城西北置驛十一若松至高久八里此間有黑川高久至坂下七里餘此間川二曰鶴沼川一曰宮川俱二三月間雪消水漲此時渡船坂下至塔寺四里塔寺至船渡九里餘船渡至片門僅隔一渡片門至野澤十九里此門有東松峠野澤至白坂四里餘此間有車峠白坂至寶川二里餘寶川至鳥居峠一里餘此爲陸奥越後二州之界自此五十二里餘至赤谷口又經二十里餘達于新發田

下野路在會津城東南置驛八若松至關山十五里此間有鶴沼川二三月間雪消水漲此時渡船此爲會津大沼二郡之界關山至大內十六里餘此間有橋水峠大內至倉谷十里餘倉谷至檜原四里餘檜原至田島十三里餘田島至川島八里餘川島至絲澤六里餘絲澤至山王峠十三里餘頂有里此爲陸奥下野二州之界自此四十六里餘至高原峠又經百三十里達于小山

徑路會津郡長江莊村餘自此而東通若瀨郡羽取又長江莊雜根至五輪嵩五里自此而東通羽取此間馬不通徑俱合于此而又東距白河〇長江莊原村南至大峠二十一里餘峠此而南經下野國板室通大田原〇會津郡伊南鄉檜枝岐至小瀬峠二十四里此間馬不通此而南經上野國荒井通沼田會津郡伊北鄉田子倉至草堂峠十二里餘謂之六十里越此間馬不通自此而西經越後國吉平通長岡〇伊北鄉叶津至境澤峠十二里餘謂之八十里越此間馬不通自此而東經越後國吉平通長岡〇耶麻郡更級莊酸川野村至石鑓峠十五里餘此間馬不通自此而東經安積郡石鑓村通二本松〇更級莊木地小屋至沼尻峠十六里餘此間馬不通自此而東經安達郡深堀村通二本松

通自此而東經安積郡石鑓村通二本松〇更級莊木地小屋至沼尻峠十六里餘此間馬不通自此而東經安達郡深堀村通二本松

通自此而東經安達郡深堀村通二本松

通自此而東經安達郡深堀村通二本松

通自此而東經安達郡深堀村通二本松

通自此而東經安達郡深堀村通二本松

通自此而東經安達郡深堀村通二本松

通自此而東經安達郡深堀村通二本松

通自此而東經安達郡深堀村通二本松

土產

蠟 所在出絶類探漆實蒸 漆 所在出 紙 出原 細布 伊北郷後

因歌仁志幾々波多天奈賀羅古曾久知爾計總計不農保曾奴乃武念阿波

之登也 新拾遺集伏見帝御製與登々毛爾武念阿比賀太記和賀古比農

多具比毛志羅奴 永餅 法川 梨 舊松尾出今所 楓梓 所在 蠶

計不農保曾奴乃 永餅 法川 梨 舊松尾出今所 楓梓 所在 蠶

神社

東照大權現 在郭內寬永元年 稻荷社 在城內永德三年 熊

野權現社 在郭內久壽二年詔三浦介上總介狩那 諏訪神社

在郭內 聲名欲改新宮至河沼茨川時信州諏訪社人荷鈴而過謂

曰諏訪勝軍神也今日必利令之先陣此日新宮不戰而降永仁二年

八月勸請于此焉殿內有神刀一之入無得而見之 伊舍須彌

神社 在郭北大同二年建立焉崇神天皇元年此神自船乘船降時役鈴

落處曰鈴田其處乘船化為石今瀧澤山船石是也或云昔有龜出

焉其甲有八角名之至德元年直盛使安部氏鎮會津城稱名

社在郭北延喜式載之 八幡社 在武衡一建之置神像長二

尺二寸六分著甲冑持弓箭九月十九日祭禮流馬 羽黑神社

社創有二杉文祿年中氏鄉斬之兩矢出於根云 磐崎神

在城東天平年中 八幡社 在御山村義家東征之時

行基建八幡日祭 八幡社 在御山村義家東征之時

社在磐梯見福山延喜式載之神像男體長一尺六寸女體長一尺五寸

社八月二十五日祭禮有流馬有流馬有流馬有流馬有流馬有流馬

爲之崇其 稻荷神社 在城內 熊野權現社 在新宮村此與

族之崇其 稻荷神社 在城內 熊野權現社 在新宮村此與

之耶智謂之三所權現此本社神像女體二共一様長一尺七寸左男體

長二尺四分女體長一尺七寸三分有男體長一尺九寸二分女體長一尺

一寸七分義家東征時念祈于熊野相收于此應德二年勸請之納鞍

鐙矣其鞍上以金鐙義家二字 慶長年中秀行同源公創建之事社

人告其舊事 麓山權現 祠在關脇永保元年建每歲秋祭掃民之興

呈其鞍鐙云 祭者皆宿齋集于此巨靈燃薪異口同音唱曰月山麓羽黑權現并稻荷

大明神如此唱數十遍則神憑之或一人或二人或三人其所依人互起取二

幣狂躍而入爐中座火大灑身如前也自十五日至二十七日神

去則其人如醉而醒矣又改火灑身如前也自十五日至二十七日神

夜如此此二十八日登山祭神事畢謂之火祭又在磐梯山麓永保年

中自關脇勸請焉安神之石像祠後有石深青楊赤色謂之權現石

若宮八幡社 在三城瀨連之三子各城于此 天神社 在平

此村舊曰小出湯昔人自瀧澤之平瀧携天神畫像來別又造木像

納其長六寸七分冠帶偉然因神像之出處曰小平瀧文明年中兼

載之母祈子神生我長從宗祇學焉 飯豐神社 在山頂一王

途爲連宗匠爾後稱之兼我天神 飯豐神社 在山頂一王

王子四子五王子 伊佐須美大明神社 在高田村延喜式會

謂之五權現 伊佐須美大明神社 在高田村延喜式會

也今在大沼郡而式所載如此者當時未分爲大沼河沿二郡也明

神熱此神初現之地也 欽明御宇移于此古來神殿有伊非諾伊非冊

二尊立像一木刻一尊人身身長齊大耳兩頭相交以手相抱長四

寸八分三寸二十五日祭禮社額曰奧州二宮正一位伊佐須美大明神勅中

山大納言書之御正體銘曰、奥州二宮正一位伊在須美大明神大同四年
奏授正二位宣旨扁額今亦存焉社前有垂櫻古
樹高可一丈、枝葉六丈餘名曰薄黑香銀郁、
大沼明神社在

原村大八幡神社在塔寺村源賴義東征時感靈夢自石清
神木像神像長二尺一寸五分仁德像一尺七寸五分神功像長一尺四
寸五分其後義家修之以其所戴之兜鍪納之其時神主等欲供淨
水而求之不得則熱中更戒而後求之寒泉忽涌而人心亦清淨故名
心清水此水今在社西寒暑無有盈涸矣兜鍪之殘缺今尚遺焉嘗
慮人因幡前司以二男初王丸為神主南庭有二槻俱圓可三丈四
懸注連故曰御注連木又有櫻樹相傳將災則秋華應永三十四
年八月華時勝常寺童男詠歌曰於毛比幾也毛美知遠未知之佐久羅
農波奈左久阿幾爾爾比奴邊志登波是歲八月九日大水出人民多死矣又
置卷軸錄歲所見聞之事名年日記以其
卷軸重大又名長帳貞和六年已前失其記

佛寺
延壽寺在郭內慈
水餅覺大師建
東光寺在羽黑山天
金剛寺在郭外釋長有建天文年中醍醐
日會津山廻麓凡十里昔寬魅作崇故名病惱山當山巽隙在月輪更級
二莊大同元年二莊一夜陷沒今猶苗代湖是也以事田二年弘法大師奉
勅來為大師詠歌曰奴乃比幾登幾比天記多連半左羅之奈農部幾能和
賀奈仁都久登於毛邊乃加持於八田野稻荷森驅纏鬼魅于烏帽子
嶽改山號三磐梯大師手執三鉗杵祈曰願此杵先占靈區鄉于空
中其杵飛入雲中降懸紫藤杵藤共今尚存其處建寺置丈六樂師金

佛寺

延壽寺在郭內慈
水餅覺大師建
東光寺在羽黑山天
金剛寺在郭外釋長有建天文年中醍醐
日會津山廻麓凡十里昔寬魅作崇故名病惱山當山巽隙在月輪更級
二莊大同元年二莊一夜陷沒今猶苗代湖是也以事田二年弘法大師奉
勅來為大師詠歌曰奴乃比幾登幾比天記多連半左羅之奈農部幾能和
賀奈仁都久登於毛邊乃加持於八田野稻荷森驅纏鬼魅于烏帽子
嶽改山號三磐梯大師手執三鉗杵祈曰願此杵先占靈區鄉于空
中其杵飛入雲中降懸紫藤杵藤共今尚存其處建寺置丈六樂師金

像日光十二神將四天王等為密法興起之勝焉也時山神現形大師
以為靈祐稱靈祐明神乃為之樂曰明神無其舞而今有之又建戒
壇祈寶祚奉卷敬天王觀感以許多田云戒壇遺址尚存焉○有大
蛇大師加持達之時見其尾于此地故呼尾寺又稱其安基巨磐以
呼之寺廣袤四百里寺院遠峙在焉見惠日寺園○本堂北有磐
梯明神祠一頂上勸請之神像衣冠束帶其長二尺七寸七分弘法所
刻或曰德澄所刻二月十二日建假殿行祭禮普奉神像行之以
有崇于真像者後惟奉幣行之是日巡拜當山詣神十五日盛飾御供
船奉之祭日光月光之狀舞之十六日送神而還之是百穀豐年之
祈本堂乾乾有龍象權現祠下有澤曰龍澤大師嘗禱雨于此甘雨降
五穀登矣其加持石稱曰龍化石歲旱禱雨則有驗云○本堂北有閣
伽井大師之法水也井上有三鉢藤○大師行狀曰大師金像欲濟東國
到會津得勝地因建寺名惠日安丈六樂師日光月光十二神將
又立八角堂置金剛界曼荼羅九會諸尊為住侶三百餘人時在相
德澁者來服大師遂附寺德澁而歸京矣德澁大師遠戒不吝校
逸者也○百因緣集曰德澄法師者藤左府惠美第四男也本為西大寺
僧奉嵯峨天皇勅從弘法大師東遊焉到處建寺而常與二州殊多大
同元年建清水寺於會津石梯山今大寺是也附囑寺第子金耀時詠
歌曰惠平阿羅波和禮末多古武與以波々志乃也末農不毛登能幾與美
豆乃天羅今號惠日寺又曰德澁者修因和尚弟子勤學于大和國福野
山焉得天台而修行東州神明鏡曰德澄立清水寺于奥州置觀音
像以髻梯明神為靈祐詠歌曰來也或說與耀寺真直賦金耀云
與來和訓相似與登皆則辭言我後來也或說與耀寺真直賦金耀云
○元亨釋書曰德一學相宗于修圓尊依本宗作新疏難破傳教大師
相從稱之一闢常州筑波山寺門葉益茂而嫉沙門者修施食弊衣恬
然自怡終東日寺全身不壞○寺僧相傳德澄寂于筑波山時有奇異
告而金耀乃行欲奉全身歸德澄忌日筑波十一月八日行之此山九
途取之蓋皆來葬于此矣自來德澄忌日筑波十一月八日行之此山九
日行之按德澄德一得澄皆同人也○戒壇側有知藏尼遺址壽永年中
乘丹坊者當寺眾徒之巨魁也越後城四郡割蒲原郡與乘丹今小川莊
是也爾來小川莊屬會津云○古者奉卷敬時行路險遠故朝廷賜金
印印今尚在矣此之曉鐘八景之一也

會津風土記 佛寺
八葉寺保元年中空也上人建之

上人者延喜帝第三皇子生而甚醜不開右手塗藥于曠野與野鹿
長交壯歲薨于尾州國分寺自稱空也奉三彌陀像修一行于東州於
奧野之界見紫雲自北天感未曾有乃經險阻至奧州會津水澤澤
雲氣猶在樹上上入便建堂安置佛像又手斲井清泉忽出流蓮華
生因號如來山入葉寺上人以爲多牟勝地今得之故稱悉地成就
院其像見在場上人爲帝立石塔于堂北號曰祖陵利上人棄于山
野時有鹿育之故報謝之取其刻彌陀像擊磐念佛其角今
有之天祿三年九月十一日示寂葬祖陵山今與院是也餘見元亨釋
書

勝常寺在勝常村

大同年中建 興德寺在郭內大圓禪師創建而本朝
覺圓字鎮安西蜀人嗣法無弟子環溪弘安二年與佛光焉來萬年
橋龍吟閣圓通道場宗鏡堂福祿壽院洪安樓靈光寺龍華室通津
松耳聾泉是爲十鏡第八世審中和尙入寺之時相城諸山一疏曰興
州會津瑞雲山與院德禪迤大圓禪師草創之地也應永丁酉秋京師大丞相
遙鈞恬陸園諸天下十利閣左元師左武衛大將軍特驛前建長春中
和尚新旌開堂之儀於是乎相城諸山青華作短疏云天降非露
今固知美化之露山起瑞雲兮乃見變之盛顯是偉人也豈豈照
代之資乎共是新命與德審中和尙環溪的孫主翁直子渾然無道無
矣有德有言親親親諸南山聖也君子觀龍筋諸東海炳如文章與其
解巨艦印而安眼孰者匡瑞崇席以蒞衆靈光獨翳象萬象於宗鏡堂
前群生爭趨度門於通津橋時宣席佛祖 實相寺在郭外元德
建祥禪師諱宗已字復庵元應元年三十七歲入元登天目山嗣法中峯
而師永正二十二年下野古河上馬頭政氏持三關東十利世所謂殘夢者當
寺第二十二世桃林契悟禪師是也處住持三住於那須野雲岩寺焉天
文中來住于此矣初來問此有日無無者而與佐瀨氏共訪之
無無乃相見殘夢詠曰天之奈之登伊布伊部半里樓底美禮波安
禮波古曾阿連毛登乃須賀多天無返歌奈之奈之登伊布布古登半利
和賀須賀多安流古曾奈幾乃波之米奈利計禮殘夢餘曰曾我夜擊之登一
別以來也無點頭殘夢風韻演白字曰呼白又自稱秋風道人憤越家
請之則一日數寫矣又連日不無飢色歷年不易衣或有與衣
者則振舊衣風放新衣而著之自言與一休友善得其禪要亦時
某爲某事與平氏戰于某處語時如親見之者人謂之建日予忘

矣又人問其年則曰百五六十怪之則曰我忘矣往々有前知之事或
時庫中有錢盜將擊壁取之殘夢呼侍者曰與錢於破侍者行見果
而然乃言曰錢盜擊壁盜蓋去侍者告之殘夢叱曰何不與錢慈眼
大師及松雪者過殘夢好食松栢飯大僧又喫之與人語曰殘夢長生
不念事而服栢栢故也嘗會津有磨鏡者曰福仙人家信之則
不拘實笑語終日磨不好人間研磨年舊何拙如此耶則曰余無心
磨也殘夢見福仙曰彼義經持旗者福仙語曰我殘夢是常陸坊也牛
墓村舜臣塚自燒數月人甚異之殘夢行燒香唱偈其火乃滅矣一日引
導暴雨迅雷鬼乘來車來欲奪栢栢去而殘夢高聲曰許之鬼曰否則往
焉鬼忽去而天晴矣天正四年二月二十九日牌上親記日月井名書伽
路鬼隨在無間五逆間雷喝下轄驢死眼客開闢筆入栢栢而寂永年中
啓境見之則只空樹而已矣其後有商客見殘夢于越後州者亦保科
朝真遇殘夢三機松原問源平事殘夢曰今不有與我共見者無
微吾言義經醜男也辨慶美僧也然世所稱醜美相違此類猶多故語不
天寧寺成之孫蚤歲流矢傷腰爲蹠逐出家矣第二世南英入明見宣
宗英宗特賜大滿行果大禪師之號歸朝之後後依一著名庵信之招住
于此矣六世天附以毘首之達磨牧溪之寒山拾得三幅爲什物九世
仁庵時有僧侶千人天正十八年秀吉公至會津時住持持山獻其
畫公還之賜以銀若干寬永元年秀忠公遊忠鄉鄉僧三幅之畫
備手 金川寺在金川村八百比丘丘尼建之自刻彌陀像置焉前
台覽 津也麻布毛登農佐登農阿彌陀多字賀須美加久禮之
都流布知之古庵尼者世之所謂者則自子比丘尼也 示現寺在熱
相傳上海建之始名慈眼寺永和元年洞家源政慈眼爲示現翁
嘗以藥杖打破殺生石其杖今尙在焉昔誤側有樹自焚三日三夜而
倒墮井穿焉溫泉出焉慶長十六年秋 融通寺在郭外釋淨緣建淨
大地震井湯俱沒數歲後擊得溫泉 緣者長忍上人未弟也
有阿彌陀像聖德太子之所刻 願成寺在三宮村安貞年中釋實
其長三尺慶長九年賜勅額 東明寺在郭外建治三年一
山山有隆寬墓隆寬者淨宗及念義 祖也一流絕無而繞存此寺
朝累世廢之上人本 野寺藥師弘法大師以病憊山之冤苦人四
朝三當廢之一也

上人者延喜帝第三皇子生而甚醜不開右手塗藥于曠野與野鹿
長交壯歲薨于尾州國分寺自稱空也奉三彌陀像修一行于東州於
奧野之界見紫雲自北天感未曾有乃經險阻至奧州會津水澤澤
雲氣猶在樹上上入便建堂安置佛像又手斲井清泉忽出流蓮華
生因號如來山入葉寺上人以爲多牟勝地今得之故稱悉地成就
院其像見在場上人爲帝立石塔于堂北號曰祖陵利上人棄于山
野時有鹿育之故報謝之取其刻彌陀像擊磐念佛其角今
有之天祿三年九月十一日示寂葬祖陵山今與院是也餘見元亨釋
書

矣又人問其年則曰百五六十怪之則曰我忘矣往々有前知之事或
時庫中有錢盜將擊壁取之殘夢呼侍者曰與錢於破侍者行見果
而然乃言曰錢盜擊壁盜蓋去侍者告之殘夢叱曰何不與錢慈眼
大師及松雪者過殘夢好食松栢飯大僧又喫之與人語曰殘夢長生
不念事而服栢栢故也嘗會津有磨鏡者曰福仙人家信之則
不拘實笑語終日磨不好人間研磨年舊何拙如此耶則曰余無心
磨也殘夢見福仙曰彼義經持旗者福仙語曰我殘夢是常陸坊也牛
墓村舜臣塚自燒數月人甚異之殘夢行燒香唱偈其火乃滅矣一日引
導暴雨迅雷鬼乘來車來欲奪栢栢去而殘夢高聲曰許之鬼曰否則往
焉鬼忽去而天晴矣天正四年二月二十九日牌上親記日月井名書伽
路鬼隨在無間五逆間雷喝下轄驢死眼客開闢筆入栢栢而寂永年中
啓境見之則只空樹而已矣其後有商客見殘夢于越後州者亦保科
朝真遇殘夢三機松原問源平事殘夢曰今不有與我共見者無
微吾言義經醜男也辨慶美僧也然世所稱醜美相違此類猶多故語不
天寧寺成之孫蚤歲流矢傷腰爲蹠逐出家矣第二世南英入明見宣
宗英宗特賜大滿行果大禪師之號歸朝之後後依一著名庵信之招住
于此矣六世天附以毘首之達磨牧溪之寒山拾得三幅爲什物九世
仁庵時有僧侶千人天正十八年秀吉公至會津時住持持山獻其
畫公還之賜以銀若干寬永元年秀忠公遊忠鄉鄉僧三幅之畫
備手 金川寺在金川村八百比丘丘尼建之自刻彌陀像置焉前
台覽 津也麻布毛登農佐登農阿彌陀多字賀須美加久禮之
都流布知之古庵尼者世之所謂者則自子比丘尼也 示現寺在熱
相傳上海建之始名慈眼寺永和元年洞家源政慈眼爲示現翁
嘗以藥杖打破殺生石其杖今尙在焉昔誤側有樹自焚三日三夜而
倒墮井穿焉溫泉出焉慶長十六年秋 融通寺在郭外釋淨緣建淨
大地震井湯俱沒數歲後擊得溫泉 緣者長忍上人未弟也
有阿彌陀像聖德太子之所刻 願成寺在三宮村安貞年中釋實
其長三尺慶長九年賜勅額 東明寺在郭外建治三年一
山山有隆寬墓隆寬者淨宗及念義 祖也一流絕無而繞存此寺
朝累世廢之上人本 野寺藥師弘法大師以病憊山之冤苦人四
朝三當廢之一也

之中是其一也事見滿月上
人所著安積郡伏龍寺緣起

雨屋藥師堂弘法建寧形如鹿蹄也
像有巖屈中在梯而

構堂其前側有岩洞弘法護摩于此下有淵是
寬永年中有人取像赴豫州甚爲崇奉還之

年中直盛建之安義連隨身于手觀音像亦置正觀
音像慶長年中蒲生忠鄉母新刻于手像重置居此

在岩窟中會勝觀音堂昔勝前死于此中將某哀之爲之建觀
津五佛之一也造觀音像安置之納勝女所持小觀

音于新像大寺藥師堂會津五佛
周間云仁王寺藥師堂大同二年德

藥師像置十二神將焉有牛石
德一草創時引材之牛化爲石云調合寺藥師堂會津五佛

左下觀音堂鑿石建高觀音像焉觀札曰天長七年四月
逃來隱閣內念彼觀音力越人逐之收而斬其頸以歸郡司視之則

薩埵之頭也乃驚竊立堂安置焉自是以東彼郡呼之頸城左下稱無頭
觀音

法用寺觀音堂堂內有三十二身像德一再興時造之左右
物放光其聲露露見之則一香木也養老四年藤房前奉勅以露木

令佛工稽主勸稽文會造十一面觀世音像三焉願主聖武天皇開銀行
其菩薩供養菩提僧正其本木者安寺法用寺中木者置勝常寺藥

讚州戶戶未木者在和州長谷寺餘見元享釋書勝常寺藥
師堂會津五佛之一也此堂在居塔寺觀音堂依弘法之勸建

之堂內本尊于手觀音長二丈八尺左右二十八部衆皆長六尺七寸彌陀藥
師二像及弘法壽像悉皆弘法所刻也斗帳三十三幅畫本尊并二十八部

衆之像堂前有資頭盧尊者門有金剛力士共是運慶之本尊此堂
舊在惠隆寺惠隆在岐嶺呼高寺當時有三千坊遺趾尙存焉後

移于今地此地初曰小金塔因取塔寺二字以爲
村名山堂屢經修造然堂中大柱不朽而轉用云如法寺觀音

堂大同二年德一建之觀音行者基之作金剛
神者運慶作堂前有披二株共魁大絕倫柳津虛空藏堂弘仁

建或曰慈覺立之曰德一立之本朝三虛空藏之其一而謂之福滿
虛空藏弘法作也堂前有資頭盧尊者亦弘法所刻也人有願則告尊

會津風土記墳墓人物

者在其像應與不應驗于尊像之舉與不舉僧俗瞻仰靈驗像來

絡繹名區十五日伽藍神、奧院、菊先塔、明星山、月光寺、龍泉院、川中

神寶珠石、兩蛇石鳥帽于石、飯谷山、瑞光山、月光寺、龍泉院、川中

水石藏小出無有盈縮、昔明星山、水中、矣堂宇高梯聲、林中、左邊一

大塊岩而有石燈焉只見溪、前流而內川、自村內、過岩間、入只

見川、其合水之上有魚潭、使魚物躍焉人取之則必爲之寺橋跨、巨

川也慶長十六年七月薄生秀行欲流河中魚中其毒游泳自害也八月地大震山
崩河塞暴水襲陵溺死者甚多明年秀行逝人言使魚爲祟矣寶珠也兩蛇
也鳥帽也各以其形象一名之飯谷瑞光之山景月
光寺之曉風灑之流注于院後如在圖畫之中
年中甚俗呼曰三階堂

墳墓

平義連在二半在家
村園有碑

平盛氏墓

藤秀行墓在郭外
允殿館

源正經墓

平盛信墓在天
鄉村

平盛隆墓在二小
鄉村

源正賴墓在內山
院

源正純墓在內山
院

人物

釋孤峯姓平氏諱覺明會津人法燈
國師法嗣諡三光國師

石河冠者諱有光柳津之人
源賴親之孫爲石

河氏兼栽小平瀨人相傳文明年中有婦祈管神二夕夢異人
授一枝梅花于左秋乃有身矣十三月而生兄及長入

黑川自在院祝髮性嗜倭歌常講管神願究其道後至京師從宗
祇學祇希傳其秘欲讓其職朝廷嫌其鄙賤裁不知出自竊請盛

舜稱一名氏遂
爲連歌之宗匠
慈眼大師姓船木氏諱大海高田人永德年中從舜幸一難髮于龍興寺

古蹟

御館山壘在會城東南三里義家城之故稱御館 田島山壘在會城南六十里在會津郡 白

津八手山壘在會城南四十二里經連城之 新宮城在會津西北三十五里新宮六郎時連居焉

加納三宮壘在會城西北三十五里加納五郎盛時居○已上在耶麻郡 檜原掘山壘在會城北六十

里 向羽黑山壘在會城南八里大藤倉壘在會城北六里藤倉三郎盛義居焉

北田壘在會城西北十四里北田二郎廣盛居焉○俱在河沼郡 犬追物場在會城內三浦助上總介將獵狐

于那須野先習犬追物義連行其事於此子孫習之寺在會津郡 如藏尼遺趾在惠日寺尼者有姿色諸家欲通聘女不許也及將門伏誅遁走到奧州女元滿世情縛巷于寧日寺傍居焉見三元釋書

趾在小平瀨○俱在耶麻郡 兼栽遺

會津風土記跋

恭惟自軒轅氏度四方而後陶唐氏合和萬國有虞氏肇十有二州夏后氏平治九州逮于成周職方掌圖炎漢以降至明廷志地理者數百家記方輿者累千卷可見而知焉在昔本朝之盛每國有風土之記世移時替見存者幾希可勝而嘆哉會津城主通議大夫虎賁中郎將源公奉上撫民之暇惜舊記之及闕嘆蠻民之易惑頃年錄會津四郡志名曰會津風土記可謂繩前代之武而濟當世之美也書既成矣使弘文院學士林憲作之序事備于序中今不贅焉想夫生父母之國而不可不知其國之事也況其受封于會津則郡縣也事蹟不可不曲暢旁通焉公之著眼于此豈其翹哉公平生修學好古河間之聰明可追尋矣觀風戒俗漢家之藩輔可倂按矣民具瞻之衆依賴之方今一編之就列侯同心于此則六十餘州之記可計日而待焉嗚呼自積小以大行遠自邇之譬推而言之則公其先從嚮始者乎懿哉

大哉易曰省方觀民設教公其庶幾乎命走作之跋
走雖不類以高論之難辭遂書於下方云爾

寬文亥辛仲冬中

潛整字林憲謹識

端郡風土記

越後國蒲原郡小川莊自_レ良至_レ坤隣_二陸奥國_一東界_二鳥居峠高陽山_一巽隅界_二銚峠_一南界_二猩猩森山馬尾瀧山_一坤隅界_二赤柴山_一良隅界_二飯豐峯_一西北交_二新發田村上_一所領北_二內藏川爲_二村上界飯豐川爲_二新發田境_一石鳴澤川爲_二村上界飯豐川內藏川境川三水合所有_二大淵一名曰_二三淵_一東西六十里_{自東島居峠南至境右}南北七十四里_{自南至北}昔越後城四郎割_二蒲原郡_一與_二惠日寺乘丹坊_一今小川庄是也自_レ來_二屬會津_一寬文四年其田_{三百四十畝}下其畠_{一千九百八十八畝}下上其貢_{下上戶二十五口}一萬五千七百九其八千參百八十男其七千三百二十九女馬六百八十二村七十四_{延寶二年其田}_{三十五町七畝}畠_{十八町六畝}戶一百十六口二百三十七其一百三十八男其九十九女

八田 福取 田澤_{端村瀧澤新田} 燒山_{有山田瀧石出能止} 倉平
花立_{端村} 天滿 平堀_{端村} 鹿瀨_{端村} 中岩澤_{端村} 向鹿
田 日出谷_{端村} 夏渡_{端村} 實川_{端村} 小荒井_{端村} 菱潟_{端村}
船渡_{端村} 石_{端村} 德根_{端村} 麥生野_{端村} 馬取_{端村} 荒澤_{端村} 實

川_{有注山有} 新渡 野村 九島_{端村} 高清水 野中、
石畠 太田_{黃蠟多出最宜} 小山 芹田 小杉 高出 椽
堀 廣瀨_{端村} 鑰取新田 室谷 八田蟹 漆澤_{端村}
新田 小手茂 黑谷_{端村} 相高島 明谷澤 栗瀨 安
用 押手_{端村} 龍頭_{新田} 大尾_{端村} 倉高_{端村} 波田_{端村} 柴
倉 土井 東山_{端村} 屋敷_{中田} 小出 拂川_{端村}
雲前_{端村} 津川 每月爲_{市六日} 角島 京瀨_{端村} 柳清 西
村_{端村} 赤岩 大牧 小花地_{宜灰石出} 谷澤_{有山} 端村_三 黑岩_{端村}
曰_{大坊新田} 白崎 河口 吉津 岩谷 五十島 取
上 熊渡 長谷 石戸 石間_{端村} 佐取 小松 岡
澤 五十澤 細越 行地 新谷 古岐_{端村} 綱木
瀧谷_{此村左溪} 赤谷

山川

矢筈山_{二峰高} 駒嶽_{其形似駒四時雪} 御神樂嶽_{半腹以上皆巖}
如_{二矢筈} 諏訪峠_{嶺頭有} 鉢峠_{越後陸奥之界} 室谷川_{源出奥州會津}
巖頂 有池 諏訪峠_{嶺頭有} 鉢峠_{越後陸奥之界} 室谷川_{源出奥州會津}
里越_{東北流入越後州過駒嶽國倉雨山之間至室谷} 至_{室谷} 折_{至平堀}
凡百五十里自_{此亦東北流至} 大田_曰 西州_至 天滿川_{折至平堀}
西北流_曰 內川_入 楊川_入 沙瀧_{島村} 八澤_澤 或_{二十步} 或_{十五步} 都
謂_之 八 峠清水_{在二相去二步在諏訪峠駒嶽半腹俵俗謂歸曰}
澤沼_{謂之八}

長坂至此
救渴矣
長者清水有實川村朝日長者遺址是猿丸大夫之產所

道路

津川水路 津川經西村京瀨大牧小花地谷澤黑若吉津白崎河口岩谷五十島取上熊渡石戶釣濱石間佐取至小松自此而西

達子 徑路 小松西經草木通新瀨佐取西經馬下通新瀨谷新瀨通新瀨

通新瀨 間道 櫻堀行二十里此間馬不通自津川口番戌寮船自濁此而西經田高地通村松

赤谷口 番戌寮往來白五十島自此至新發田

谷澤口 白此至新瀨 津川渡

土產

黃蠟 所在出類 鱸 鮭 鱒 已上出楊川

神社

八幡宮 在西村神宮姓皆川氏其遠祖勸請于下總小泉莊延曆十二年又勸請于此神體石像長八寸八月十五日祭禮

佛寺

日光寺 在西山村延曆年中傳教大師東善寺在田澤村大同二年弘法大師建之寺南有聖德太子堂空也住持自刻太子像來之堂側有二檜樹弘法所栽云

玉泉寺 在津川寬永年中住持淳海僧部

長雲者臨終謂檀越曰肉身成佛我所願也我體必不壞滅後只入棺建塔置之勿用火土葬年七十八死時十三年九月九日也弟子如遺命於今全身不朽髮

發貫巾如形枯魚 平等寺 在谷村 新善光寺 在津治年中釋感誓建之本尊者建久六年定尊上人詣信州善光寺感靈夢而所鑄等身銅陀有也病者有驗祈為國家將殞則此像出汗云

岩谷藥師堂 餘五將軍渡楊川見靈光於瀧口上而得藥師像建堂于此有十二神將德一所刻云

墳墓

餘五將軍墓 在岩谷村

人物

猿丸大夫 實川小野人日光緣起曰有字中將妻朝日長者女生馬頭中納言馬頭委生子容貌甚醜因稱小野猿丸大夫善射好獵音日光權現與上野赤城明神相爭湖界託大夫夷之大夫大有功權現祝曰以汝為神主宜與我子中納言共居山麓護民人矣男體權現者中將也女體權現者朝日媛也太郎明神者中納言也

古蹟

古蹟

津川 狐尻 山墨 東嶽壁立孤不能過故曰狐尻揚川北流天滿川南流二川合流北有枯樟車相傳真任居之又曰赤谷笠管堀 治承六年城四 猿丸大夫遺址 在宗任居之 川小原鄉在朝日長者之遺址

下野國鹽屋郡

三依鄉

其田一町五段 下下其畠一百五十八町 下中其貢下下戶一百

貳十五口九百九十一其五百三十七男四百五十四女馬

一百七十九村六田七段 戶四十二口七十一其五十二

男其十九女

橫川 上三依南有古松高可八丈一丈餘枝條圍繞幹故

志毛郡計乃志保也乃左登能於也多起 中三依 芹澤 獨鈎澤

乃麻郡端村一日熊野堂日大連 舊日下三依 五十田 北村隔五十里

北有獨鈎水 川在兩處

山川

高原峠在五十里村東險苦 橫川源出三依鄉字賀嶽南流經

里村曲折而流數 不動瀧在橫川村高可三丈幅

十里絹川合流 可五丈若上有不動堂

道路

徑路五十里村行二里餘而南經四川村通今市

七里餘自此而南經鹽原湯本通字都宮 〇芹澤村

至發鼻峠七里餘自 〇尾頭峠 橫川口元在

神社

鹽屋明神社在依村中三

安積郡菱瀉莊依村四 東南交岩瀬郡東界諏訪

峠津郡誤也 巽隅界勢至峠南界餅箱山西及乾隅接會津

郡西界黑森峠乾隅吞苗湖北連耶麻郡限湖

水半弱此限湖內東二本松領界高石峯東西十八

里餘自東勢至峠 南北二十四里自南餅箱山 其田三百九十九

餘下下其畠二百六町 下上其貢中戶六百六口三千四百三

十七其一千九百十六男其一千五百二十一女馬五百六

村五田 畝六餘 畠十一町二

赤津端村六曰小枝町曰東岐濱坪番戌峰寮往來湖濱有 福

良西北山曰龜山東北山曰龜山因夜多村十九曰彌陀內曰栗

生曰福宜內曰大將地曰山崎曰寬口曰中澤曰伊羅澤

曰大窪曰折越曰餘江新田曰島曰境曰峰崎 三代唐澤

中地番戌寮 增馬 入新田

以上六村鄉未審亦未詳屬村幾計

山川

以警衛不便寬文元年徙置于此自此至小山

管瀧 在福良村高可三丈瀧上有神祠瀧下有管歲旱取管以零則靈驗其取管者世々川中桑野氏云

道路

徑路 中地至諏訪峠九里自此而東經追村經須加川中地行六里而東經新田村通二本松馬入行二十四里而經羽取通白川

佛寺

伏龍寺 在福良村寛永元年瀧月上人考弘法所自筆之書著當寺緣記曰昔龍蛇殞人弘法加持降伏之因建寺蛇入山呼

其尾所在 中地 阿彌陀堂 義家東征時建堂安像 福良觀音堂 弘仁三年

弘法刻千像立之見瀧月上人緣起

古蹟

福良鶴山壘 中地小倉山壘 岩瀨郡內勢至堂村有勢

像 其地東長沼領界二道谷坂南白河領界二鬼面峯二坤

隅白河領界二小瀧峯二西北交二安積郡二西界二勢至峠二北界二良隅白河領界二籬森麓二東西七里餘白東道谷西南

北其畠田三町三段 中下其責下上戸三十八口二百四十

六其一百三十七男其一百九女馬五十疇口八其貳男其

六女村

關

勢至堂口 山險要害處設番戍焉自是至白川

端郡風土記終

磐城風土記

封疆

磐城奥州之内在_二州之東南_一磐城磐前菊多檜葉謂_二之磐城四郡_一首_レ乾尾_レ巽右_レ坤左_レ艮首尾相達一百二十里_{徑直八十五里}左右相隔一百二十里_{徑直八十里}七分四郡_二而磐城居_二其一_一焉菊多居_二其一半_一焉十分其四郡半_二檜葉居_二其六_一焉磐前居_二其四_一焉四郡共東海邊而磐城在_二其中_一檜葉在_レ北磐前在_レ西南菊多在_二其南_一城有_レ一村二百四十三厥田一萬七百十四町六反五畝二十二步中上厥貢中上戸一萬五千五百十一口九萬三千六百二十七厥男五萬二千五百五厥女四萬千二百二十一馬一萬千二百十四牛二百七十二_{戶口牛馬皆土外舉_二庶人_一指_二于此_一寬文己酉有所考}

風俗

風氣剛強俗性朴直而有_レ信學_二字及射_一能達_二稼穡商賈之利_一焉平城在_二磐城郡南_一北至_二東南_一地平而有_レ山唯

隔_二三三三_一里西山深不_レ知_二幾重_一續_二大館舊城_一民居東西四里南北二里平城至_二京師_一一千六十日至_二東武_一三百二十里昔秀衡以_二其姊_一妻_二平次郎隆行_一而附_二與此地_一矣隆衡、隆守、義衡、照衡、照義、朝義、常朝、清胤、隆忠、親隆、常隆、由隆、重隆、親隆、常隆、貞隆、世々相續唯親隆外孫而得_二重隆之遜_一貞隆異姓而續_二常隆文家_一貞隆移_二羽州秋田郡_一後鳥井左京大夫忠政居_二于此_一忠政移_二羽州最上郡_一後內藤左馬助政長封_二于此_一政長卒而忠興續_二之內藤帶刀是也

城

(缺文)

郡村墾田戶口牛馬附

磐城郡東續_二檜葉郡_一四倉濱至_二太越濱_一海邊巽隅藤間海邊次接_二磐前郡_一界_二船岡山_一南續_二磐前郡_一界_二館岡小島山大館古城_一坤隅續_二磐前郡_一界_二大迫嶺經塚峠_一西續_二磐前郡_一界_二水石峠早坂嶺_一木戸石至_二上小川_一之川筋_二乾續_二磐前郡_一界_二高崎地獄磯多前_一限_二磯多瀧其川筋_一次接_二檜葉郡_一界_二紫標山蛇襲山_一北續_二檜葉郡_一

界天蓼山之澤黑森山之郡三森南澤良隅續檜葉郡

界造道鶴場賤山也四倉濱至水石峠東西二十五里

徑直十八里大館古城至天蓼山南北三十四里徑直二十里

村六十九厥土惟赤墳厥田二千三百七十六町八反九畝

七步上厥貢上下戶四千六百七十二口二萬七千二百二

十厥一萬五千二百七十四男厥一萬九千九百四十六女馬

三千四百五十五牛二十五

磐前郡東接磐城郡界經塚峠唐松山大城坊南嶺次

藤間高久沼内海邊巽隅豐間至小名濱限海邊次

接菊多郡界瀧尻川花立山古館南續菊多郡界

瀧倉傾城石三體明神坤隅續菊多郡界二石嶺境明

神入道瀧澤西接石川郡界夏湯皂角渡戶紫山峠乾

隅續石川郡界坂取山崩山次接田村郡界石佛

弓張木次接檜葉郡界長柴吉窪嶺北續檜葉郡

界曲窪至大瀧嶺次接磐城郡界大瀧川筋良隅

續磐城郡界鹽田西小川大川筋也藤間濱至柴山

峠東西六十三里徑直四里三體明神至栗木平南北二十

四里徑直十里村八十五厥土惟白疏厥田四千三百五町九

反五畝二十一步中上厥貢上下戶五千三百六十六口三

萬四百四十四厥一萬七千三十二男厥一萬三千四百二

十二女馬三千四百六十五牛三

菊多郡東接磐前郡界瀧尻川次下川中田皆海邊巽

隅關田九面又海邊次并常陸國多河郡界笠松山奈

古曾關龜石原嶺南鄰常陸國多河郡界夏山造澤蜂

巢嶺坤隅鄰常陸國多賀郡界黑磯山梨木塚松坂渡

嶺西鄰常陸國多賀郡界小金坊大金坊澤次接高

野郡界六間山山角欠石山乾隅續高野城界松ヶ

鼻弓張木次接石川郡界御歌舞山檜木澤小川次

界厥平御在處山大川筋北界坂倉嶺瀧本澤瀬戸尻

川之會良隅界下三石至檜木淵之川筋次界切坂山

大森山瀧倉山次接磐前郡界大荷田矢井田坂笠貝

嶺也下川至角欠石東西四十五里徑直三里蜂巢至板倉

嶺南北二十一里徑直四里

村五十五厥土惟白疏多砂厥田二千二百五十町二反二

十六步中上厥貢中下戶二千八百七十口二萬千六百七

十二厥一萬二千六十二男厥九千六百十女馬二千百九

十四牛五

檜葉郡東留岡濱至北迫海邊巽隅淺見川至江綱海

邊次接磐城郡界切通山嶺中野山南續磐城郡

界沓掛山貓鳴山戶渡後山疊小屋山坤隅接磐前郡

界二大瀧西山嶺二至二栗木平平松崎大澤嶺二次接二田村
郡二界二長柴峠鞭投田錫坂二西續二田村郡二界二矢大臣峠
早馬腰二乾隅續二田村郡二界二大瀧峠取上岩下峠塗窪
嶺二北續二田村郡二界二大鷹峠二次接二標葉郡二界二赤柴
嶺北石塚嶺二良隅續二檜葉郡二界二曲坂八幡飛礫石境川
太刀洗二次小良濱海邊井出濱至二早馬嶺二東西五十四
里_{徑直三}紫櫻至二大鷹峠_{とや}二南北三十六里_{徑直二}村三十三
四厥土惟黑赤壤厥田千七百八十一町五反九畝二十八
步中下厥貢中下戸二千六百三口一萬四千二百九十一
厥八千三百三十七男厥六千五百五十四女馬二千四百十牛
二百三十九

山川海石

石森富士山 在二平城北九里磐城郡二高五十七丈山南
有_二觀音堂_一俗呼曰_二磐城山_一倭歌家所_二傳言_一其此山
歟駿豫二州有_二此山之名_一其說不_レ一新續古今定家
歌 古末那須無伊和幾能也摩遠古比可禰天比登毛
古奴美農波末仁伽毛禰無
關伽井經塚峠 在二平城西北十五里二跨二磐城磐前二
郡二高百九十丈東山腹有_二藥師堂_一南山腹有_二古戰

場二是合戸往來古徑乾有_二水石_一旱水不_レ涸其峠自二
經塚頂二高四十六丈

湯之嶽 在二平城西二十里磐前郡二高七十八丈南山腹
有_二觀音堂_一山嶺石有_二三普德一認_一戒定惠三於此
故曰_二三箱石_一拾遺 阿可豆之天和加禮之比登能須
無左登波佐波古農美油留也未能安那多可
荷路夫嶽 在二平城西南六十五里菊多郡二高二百五十
丈

矢大臣山 在二平城西北五十五里跨二檜葉田村二郡二
高三百丈

大瀧根山 俗呼云_二霧島嶽_一在二平城西北九十里二跨二
檜葉田村二郡二四時峰頭穿_レ雲聳_二青空高三百七十
五丈山有_二石楠華_一若誤伐_レ枝則權現爲_レ祟

鬼ヶ城 在二平城西北五十里檜葉郡二高二百七十丈山
嶺上巉岩壁立四面三百六十許步其高十丈

神樂山 在二平城西北六十里檜葉郡二高二百五十五丈

三森山 在二平城北三十九里檜葉郡二高二百十丈

御社山 在二平城北五十四里檜葉郡二高二百二十丈昔

源賴義赴_二奥州_一時勸_二請八幡於此_一其舊地也中古羅
_レ災後遷_二宮北追村_一

磯多之瀧

在磐城郡上小川桶賣間道瀧上檜葉瀧下

磐前東磐城此在三郡境

逢瀨瀧

在磐城郡銅山雄上雌下雄雌俱高七丈五

尺

松風瀧

在磐城郡玉山村山中高六丈餘

合戶瀧

在磐前郡高一丈兩崖高十五丈林葉待霜

如渥丹映水面奇景不堪畫圖

大船瀧

在檜葉郡淺見川山中高四丈餘幅十二步

久之瀧

在檜葉郡大久村山中迴流而算之曰一瀧

二瀧三瀧又有魚留瀧鍋蓋左靱瀧都六

小埦瀧

在檜葉郡瀧南山岸有平地置明神社又

瀧下有小瀧自北山落高五丈餘

賢之沼

在磐前郡沼內村沼周九百步傍北崖有

鳥置辨財天社

廣野二沼

在相馬路檜葉郡北迫村南周可二百十

步北周可百二十步沼中有淵隨水浮沈隨風動

搖此沼尊榮生倭俗呼禰奴名和一

三箱湯

在水戶路磐前郡湯本村溫泉味淡鹹家以

寬引之能治諸瘡

雨降石

在檜葉郡桶賣村田中入若踞此石必雨降

或點水亦然

小川堰在磐城郡關場村夾大川巽長流經三十

八里至戶田村入于新田川既田千三百町

好間堰在磐前郡上好間村夾好間川東南轉二

十五里而至藤間村而止既田四百七十町

大瀧堤在磐城郡絹谷村堤後有瀧若水滿則瀧流

大瀧傍有觀音堂

野田堤在磐前郡長井村山中

金子堤小萱堤在瀧前下高久村

緒絕橋在磐前郡志摩村今無橋只有柱礎人若

經營此橋必死因以名後拾遺道雄歌

美知能久農於多江能波志也古連那羅無不美々不末

豆美古々路末登波寸

續後撰定家歌志羅多末能於多江農波志能那毛津

良久久太計天於津留曾天農那美多仁

野田玉川在磐前郡野田村新古今能因歌

油不左禮波志保可世古之天美知能久農野田能太末

加波知登利那久那梨

里屋橋在磐前郡藏持村小名濱路

富岡仙境在檜葉平岡原春三月冬十月間月初出時

眼下髣髴而有山川江海舟橋及兵馬步卒按戈戰之形影少間而止矣三日必兩間世所見也

鎌田川 源出田村郡湯澤田原并二流一經檜葉磐前磐城三郡入于海其間衆川會隨處名不同同川源曰檜葉郡山下谷村一東流至芋島二平萱一桶賣川三坂川志田名川會于此從穢多瀧南過磐前北過磐城郡境巽流至穢多新田穢多川合自此七曲南流西曰鹽田一東曰高崎一東流又南轉至小川大堰一西曰三島村一東曰堰場村一坤東流轉又坤流西曰西小川一東曰下小川一小玉川合之從木戶石一巽七曲經磐城郡至曲田船渡一南曰川中子一北曰下平窪一東流去三曲會好間川亦合而巽流至相馬路舟渡一此曰鎌田川一西曰平城一東曰鎌田村一自此巽流長轉東折南曰山崎村一北曰鹽野村一長橋川會于此自此七曲流南過荒田目一北過神谷村一至大越村一溶々流入于海一遠至堰場一石高水急難徒涉一

照島 在磐前郡小濱一遠崖九十許步島周二百四十許步高十二丈島有樹皆骨也

四倉濱 在磐城郡一小名綱取間至北二十四里有漁

舟出入無繫舟之間一漁舟八艘鹽竈一區

小名濱 在磐前郡一漁舟百艘及積殼百石許廻船十艘鹽竈八區濱左右二里半間至沖無磯濱一東綱取山至巳午間一山突出含海水一風靜波平漁舟易往來一五月至九月一釣鯉魚一漁舟競聚不知其數一多是從他國來當此時濱邊之富不堪言也

綱取繫舟間一百八十許步水深四尋五尋繫積殼三四百石許舟二十艘餘又不爲定焉辰巳午風惡南至常陸中湊一舟路百里同下總國至銚子二百二十里至北相馬請戶一百里至仙臺荒濱二百七十六里同至寒澤二百四十二里同至石卷二百六十六里中追濱 在磐前郡一從小名綱取間一北海路六里有繫舟間一繫積殼三四百石舟十艘許溯引巖北東南風難繫舟有漁舟五艘

長崎、江名、豐間、薄磯、沼之內濱殼在磐前郡一從小名綱取一北海路十二里有漁舟出入無繫之間一漁舟九艘鹽竈二區

九面濱 在菊多郡一從小名濱一南海路十七里繫舟間廣九十許步繫積殼三四百一舟七八艘不爲定焉北風時難繫舟漁舟五艘及積殼二百石許廻船五

艘潮至則舟易出入

下川小濱 岩間 佐糠濱 在三菊多郡二小名九面濱之

分域也有二漁舟出入一無二繫一舟間漁舟二十九艘廻船

六艘鹽竈十三區

江之綱、久之濱、山田波倉、元萱佛濱、小良ヶ濱、

在三檜葉郡二小名綱取至三小良ヶ濱一北七十六里有

漁舟出入一無二繫一舟間漁舟十六艘鹽竈四十區富岡

浦三之輪二館崎大野浦宿崎沖有三梢淺深磯一自レ陸六

七里冬日晴天靜則行二舟兩磯之間一三崎大谷崎之間

有二網取一鄰二猿子崎關田浦一有二九面一

道路關

水戸路 在三平城西南一置レ驛四平城至三上舟尾一十二

里自三平城一上弦至三舟尾一次下弦至三前湯本一次此間

有二長橋一長百間次有二小橋一是爲二磐城磐前一二郡界

上舟尾至二渡邊村一八里此間有二矢井日坂一是爲二磐

前菊多二二郡界一渡邊至三植田一十里植田至三關田一六

里此間有レ川曰二鮫川一舟渡關田至三奈古曾關切通一

二里餘切通長七十二步跨二常奧二州一奧居二其太半一

幅九尺漸々窄狹向レ上僅止二三尺六寸一高五丈一尺

昔源賴義赴三奥州一時義家至三此關一有二櫻花之詠一中

古櫻樹絕承應年中再栽三于此一自レ此南經三百里一達

于水戸城二千歲集義家歌一

不久可世遠奈古曾農世幾登於毛邊登毛美知毛世仁

知留也麻左久羅加那

新勅撰小野小町歌

美留目加留阿末能油幾々農美那登知仁那古曾能世

幾毛和連佐邊奈久仁

新勅撰西行歌

阿津末知農志能夫能左登仁也須良比天奈古曾能世

幾於古比曾和津良不

相馬路 在三平城東一置レ驛五平城至三四倉一十四里半

此間有二鎌田川一舟渡四倉至三久濱一七里餘此間有

大夫坂二甚嶮岨爲三馬疲人苦一承應年中始穿レ山通

岩窟二令三人馬達一往來二所謂四倉切通是長六十步幅

六步高九尺是爲二磐城檜葉二郡界一久濱至三廣野一十

五里半此間川有二三云久川折木川淺見川皆徒涉又

有二汀道一云二長澤一風波時不レ通二往來一別有二步行之

山路一廣野至三木戸山田一六里半木戸山田與二小埜

隔二五日一次此間有二岩澤一維石巖々木戸山田至三富

岡十二里半隔木戸川一徒涉石高水急也水深則難一
徒涉富岡至界川八里此間有富岡川一徒涉此經一
七十五里達于相馬城一

徑路

平城西至磐前郡合戸十四里餘合戸至上三坂二十
八里三坂至小平境六里自此經六十里通白
川城一

磐前郡上三坂至田村郡田野子境石佛四里自此經一
五十六里通三春城一

磐前郡合戸村至檜葉郡桶賣村二十八里桶賣村至
田村郡湯澤境鞭投田五里自此經十四里通新
町村一

檜葉郡富岡町至同郡下川二十七里至田村郡廣瀬
村境笠木二十二里自此經十四里至新町一

平城至磐前郡沼内大越通十五里餘南至同郡薄磯
濱一里薄磯至同郡豐岡濱一里半豐岡至同郡江
名濱五里江名至至同郡中迫一里半中迫至同
郡長崎一里半至同郡小名六里半
水戸路磐前郡上船尾至菊多郡泉十一里

水戸路菊多郡渡邊村至泉四里

水戸路菊多郡植田村至同郡窪田七里半

水戸路菊多郡開田町至大和坂通高野郡赤坂村境四
十五里自此經三十二里通棚倉城一

水戸路菊多郡渡邊村至同郡神遠野境瀨岑十二里自
此經七十八里通棚倉城一

問道

平城至磐城郡荒川通小名濱二十二里半

平城至磐城郡穢多通檜葉郡下桶賣四十五里至子
此通永井指鹽之徑路一

水戸路磐前郡上舟尾至同郡小名濱十三里

水戸路菊多郡植田村至同郡上山田境花輪前八里半

自此通神遠野町村檜葉郡下川至高田島通田村

郡常葉境二十五里至堀田常葉經三十六里通三
三春一

相馬路檜葉郡富岡町至杉内通標葉郡藤加不境十二
里出常葉路一

相馬路久濱出銅山至桶賣村菊多郡山玉村出瀨
戸一通常陸國神岡一

神
社

尼有再興建永九年自赤和布崎見物岳遷宮飯

野八幡宮 有光明院勅額一燒失慶長年中神領滅今知四百石一每年有放生會流矢鎬馬一城主一騎神主一騎出焉

御寶殿權現 在平城西三十三里大島村一平城天皇御

宇大同二年建立

稻荷神祠 在郭內一

佛寺

石森山觀音堂 在平城北九里岩城郡一大同元年德一

建焉秘佛千手住僧不能見

赤井嶽藥師 在平城西十五里一大同元年德一建焉

秘佛四邊有檜杉一圍一堂枝葉寸不出一山中一若出

爲之祟一其大樹名祖父杉祖母杉天狗杉一圍三丈二

尺至三丈七尺一

湯之嶽十一面觀音 在平城西二十里岩前郡一大同年

中德一建焉寬永年中夜三尺許之光氣飛行西近隣

如滿月光一鄉民皆見之怪翌日爲野火一燒今新佛

白水六角堂 在平城西南十里一德尼建焉本尊阿彌陀

行基所彫刻一而與平泉光堂佛一同作也德尼秀衡妹

常陸大掾國香孫平行隆妻也有五男子一猶葉太郎岩

城次郎岩前三郎標葉四郎行方五郎是也各屬一郡一

而後創之所得一白水名一者假一移仙臺平泉名一分

字白水云城名平字亦假借是國人所一傳言一也今按國

于繁盛住府中一生海東出羽守安忠安忠四世海東太郎忠衡及弟次

郎忠清忠衡嫡子始至奥州一領一常州多賀郡奥州郡多郡岩崎標葉郡

標葉郡行方郡六郡是平大館城主也成

衡妻佐藤基衡女秀衡妹德尼御前是也白水鐘題云應安元年

申小春海雲山東禪寺今按是鐘始

梅福山專稱寺 在平城東五里山崎村一應永二年後小

松院御時良就建焉善導而古今檀林地也世々寫瓶

相承而挑淨家法燈一講談無止時一遠近客僧幢々往

來至中興良就一賜勅額一今猶存

矢月山如來寺 在平城東六里矢目村一大江朝臣山名

聞法於良山一信之元亨年中竟創一當寺一而請一善導

一流之本寺一而古檀林之地也

大幅阿彌陀如來像 慧心筆

禪勝山 龍門寺 曹洞在平城東四里荒川村平常朝

創焉珠鷹住于此一

小川山長福寺 律在平城北九里小川村一元亨二年小

川入道源義綱創之鎌倉極樂寺了俊弟子慈雲來住

于此一

甚光山專日寺 古法相今密在平城北十四里玉山村一德一建之有大日藥師德一所彫或曰弘法所彫刻也又有地藏像弘法所彫也平將門娘來信焉被三人呼地藏尼云

延壽山藥王寺 密在平里北十里

草創年未詳第六代隆忠僧正元弘建武時人也岩城大守平朝義有故放流之隆忠使命資設龕室遺言曰無他我唯施一畝土塊二三子往還徒隨命安然結定印向朝義城郭入土壤死墓在神谷花園山俗呼曰鐵掛後花園院正長永享比朝義嫡孫平清胤家臣有白土氏無子祈八王山藥師母夢沙門頭戴金老手執金輪願託汝胎對曰妾腹垢穢云吾不厭垢穢唯欲極濟躍入口中有孕意意生兒握片手父鞠養開掌々中有隆忠字因奇爲字長戰清胤清胤敗北是爲岩城大守狩延壽山失寵鷹俄然來隆忠猶拜神社扉自開內有書隆忠冊問老農傳語來由隆忠於是始知我前身海雲山高藏寺 在平城三十五里植田村大同二年德一建至應永年中石川郡源持光并植田城主藤原隆廣再修覆焉有觀音德一於高藏井上大島小川四

倉奈古曾佛具山刻一木造七觀音像其一也又有仁王長一丈一尺大日藥師釋迦像皆運慶所彫也

青木山寶德院 在平城北三十里植田村

後花園院寶德年中創

知機山成德寺 在平城北三十里折木村

後醍醐院元德年中建十三世袋中住子此

墳墓

平次郎朝義墓 在荒川瀧門寺

平次郎常朝墓 同上

平次郎清胤墓 同上

平下總守隆忠墓 在白土藏福寺

平下總守親隆墓 在荒川龍門寺

平下總守常隆墓 同上

平民部大輔由隆墓 同上

平左京大夫重隆墓 同上

平左京大夫親隆墓 同上

平左京大夫常隆墓 同上

內藤左馬助政長墓 在善昌寺

人物

兼如 會津兼裁偶來居_ニ于岩城_ニ有_ニ一妾_ニ生_ニ一男子_ニ
長稱_ニ兼如_ニ一嗜_ニ倭歌_ニ鳴_レ世平城櫻町有_ニ櫻樹_ニ相傳
兼如園裏云

袋中 父佐藤修理亮生_ニ菊多郡西鄉村_ニ始_ニ一夏法幢
袋_ニ淨家之書籍多撰

古蹟

大館舊城 相傳岩城收策云其姓名不_レ可_レ考

白土舊城 同上

片寄舊城 同上

住吉舊城 岩城判官政氏居云亦不_レ詳

磐城風土記終

黒川本書入

春村案ズルニ此書ハ寛文九年頃内藤侯ノ命ニヨツ
テ儒官ノ人ノ編集セルナルベシ其故ハ風俗ノ部ニ
政長卒而忠興續_レ之内藤帶刀是也トアルト武家補
任ニ内藤左馬介藤原政長_{從四}位下寛永十一年十一月十
七日卒行年六十七歳内藤左京大夫藤原義據_{從四}位下前
帶刀先生忠興嫡寛永十三年十二月二十九日補任左
京亮寛文十年十二月三日父家督相續トアルヲ併セ
テ考フルニ寛永十一年ヨリハ後寛文十年ヨリハ前
ナル事シルクミユルヲ又戸口牛馬ノ條ニ寛文己酉
有_レ所_レ考トアルニテ寛文九年ヨリ先ニ書ケルモノ
ナラヌ事揭焉ナリ己酉ハ寛文九年ナリ

續々群書類從第八終

黒川 眞道

堀田 璋左 校

渡 邊 魁

明治三十九年八月二十日印刷

明治三十九年八月廿五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

國書刊行會代表者

市島謙吉

編輯兼
發行

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

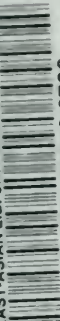
印刷者
本間季男

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷所
内外印刷株式會社分工場



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03043 6786